近代諸家集

二

例言

一、本卷は近代諸家集（一）として、本居宣長の自撰歌、加藤千蔭のうけらが花、栗田土滿の岡の屋歌集、村田春海の琴後集、本居太平の稻葉集、本居春庭の後鈴屋集を收めました。

一、本卷は野村宗朔が擔當しました。

一、宣長の自撰歌は、續歌學全書により、鈴屋集と對照校合しました。

一、うけらが花は文化五年の刊本により、橋本稻彦の難字氣良賀花を參考しました。琴後集は文化七年の刊本により、更に同十年の刊本をも參照しました。うけらが花、琴後集は共に文集を省きました。

一、岡の屋歌集は享和四年の刊本をもととしました。

一、稻葉集は文政七年、後鈴屋集は天保三年の刊本により、自撰歌と共に本居全集をも參考しました。

目次終

解題

自撰歌

本居家の遠祖は平高望である。その裔平賴盛の六世の孫平建郷にいたつて、本居縣判官となつた。これが本居家の始祖である。建郷から十數世を經て、姓を小津と改めた。宣長の父は小津三四右衞門定利、伊勢國松坂の人、江戸で木綿問屋を開いてゐた。母は村田孫兵衞豐商の女で勝子といふ。定利子を大和吉野の水分神社に祈つて、その驗があつて享保十五年(皇紀二三九〇)に宣長が生まれたといふ。この年は荻生徂徠の歿した二年後、宗武がはじめて田安家を起した年である。宣長は幼名小津富之助、その本居の姓に復したのは宣長二十三歳の時からである。通稱は彌四郎、のち健藏、春庵(後には舜庵と書く)、中衞等と改めた。名は榮貞(後榮貞と改む)、のち宣長と改めた。元文五年(皇紀二四〇〇)宣長十一歳の時に父を失つたが、この頃は小津家の家運大いに衰へ、遺産はわづかに四百兩、その利子で一家を支へなければならなかつたといふが、母勝子は賢婦人で、よく宣長を薫陶して偉大なる國學者たらしめたのである。寛延元年(皇紀二四〇八

八）十九歳の時山田の紙商今井氏の養子となつたが、寛延三年二十一歳の冬、離緣になつて松坂に歸つた。眞淵といひ、宣長といひ、國學の二大家が共に一度他家に養子した事は不思議な因緣といはなければならぬ。山田の地は神道の本源で、國學歌文に志す人々が多かつた。宣長の國學に志すにいたつた淵源は蓋しこゝにあるであらう。寶曆元年（皇紀二四一一）宣長二十二歳の時、異母兄定治が父の跡を繼いで江戸にゐたが、歿して子がなかつたので、宣長が家を繼いだ。これが荷田在滿の歿した年である。母勝子は宣長の性の到底商人たるに適しないのを知つて、學者として、彼の天分を發揮せしめようとしたが、純然たる學者の生計に苦しむのを考へて、生計の資を得るために醫者としようとした。

寶曆二年、二十三歳の時に、宣長は京に上つて、堀景山について儒學を學んだ。景山は契沖の弟子今井似閑の門生樋口宗武と親しかつた爲か、國文和歌の趣味をもつてゐて、契沖の著書を藏してをつたので、宣長ははじめて契沖の著書に接し、よみかつ寫しなどして、宣長の國學に入る機緣はいよ／＼熟した。滯京數年の間に既に一家の見識を成すにいたつた。寶曆三年二十五歳の時に武川幸順について小兒科の醫術を學んだ。宣長が醫術を幸順の門に學んだのは、幸順が景山の儒學の弟子であつたから、それらの關係からであつたのであらう。寶曆七年二十八歳の時に京

より松坂に歸つて醫術をもつて生業とした。宣長は幼時よりたゞ何くれとなく國書をよんでゐたが、京に上つて契沖の著書に接して啓發されたが、此の頃眞淵の冠辭考をみて、初めて眞淵の名を知り、次第に眞淵に傾倒するにいたつた。三十三歳の時に妻を娶つた。翌寶曆十三年三十四歳の時に、眞淵が伊勢、大和、山城を遊歷して松坂に宿つたのをきいて、宣長は大いに驚喜して旅宿に眞淵を訪うて、國學の二大偉人ははじめて相會したのである。時に眞淵は六十七歳、名聲嘖嘖たる一世の老大家であつた。その夜眞淵は、壯年の宣長に國學研究の方針を說いて、宣長を激勵した。後宣長は名簿を捧げて眞淵の門人となつたが、その教へをうけたのはすべて書狀によつたのであつて、宣長が眞淵に會つて親しく教へを受けたのは、この寶曆十三年五月二十五日の一夜一度に過ぎなかつた。眞淵の門に學ぶものは多かつたが、眞淵の學の骨髓を傳へたものは、この一夜の弟子宣長であつた。この寶曆十三年は宣長にとつては意義の多い年であつた。宣長の歌論の書「石上私淑言」の成つたのも此の頃である。紫文要領のなつたのは此の年六月である。なほ二月には長男健藏春庭が生まれてゐる。

翌明和元年(皇紀二四二四)三十五歳のころから、宣長畢生の大著古事記傳の稿を起した。此の年二男春村が生まれた。明和五年(皇紀二四二八)三十九歳の時に、母勝子歿し、國歌八論評及び

八論斥非評が成つた。翌六年には師眞淵は宣長の大成を希望して歿した。安永八年（皇紀二四三九）五十歳の時萬葉集玉の小琴を書いた。奇才平賀源内の歿した年である。天明二年（皇紀二四四二）五十三歳の時に四疊半の書齋を建てて、多くの小鈴を柱にかけて、その音を喜んだ。この書齋を鈴の屋とよんだのはそのためである。寛政八年（皇紀二四五六）六十七歳の時に、源氏物語玉の小櫛が出來、翌々寛政十年六十九歳の時、古事記傳が脱稿した。全編四十四卷三千三丁、明和元年起稿してから、こゝに脱稿するまで實に三十五年間の努力の結晶である。享和元年（皇紀二四六一）九月十八日より病にかゝつて、二十九日の曉に遂に逝いた。年七十二歳。かねて生前定めておいた山室山に葬つて、塚の上に櫻を植ゑた。櫻は彼の愛樹である。諡を秋津彦美豆櫻根大人といふ。小澤蘆庵が七十九歳で歿したのも、同じく此の年の事である。宣長の教へを受けた者五百人に近く、藤井高尙、本居大平、齋藤彦麿、石原正明、横井千秋、服部中庸、渡邊重名、黑澤翁滿、細井貞雄、植松有信等がある。歿後の門人に伴信友、平田篤胤がある。

宣長の本領は國學にある。古事記の研究はその半生の精力を傾倒したものであるが、その他の古書の註釋、文法音韻歌論の著など皆先人未發の說多く、往くところとして可ならざるはなき英才であつた。宣長のはじめて和歌に志したのは十九歳の頃であつたが、二十歳の時、山田の宗安

寺の法幢和尚に和歌の添削を請うたのが師についた最初である。爾來專ら此の道に心をよせた。法幢の歌は、いひかけなどを好んで詠む舊派の歌風であつた。後京に遊學するやうになつて、冷泉爲村の門人森河對島守章尹の門弟となり、後には有賀長川に教へをうけた。これらの人の影響は宣長の歌風に一貫して著しく現はれてゐる。眞淵の弟子となつても、宣長の歌は依然としてゐたので、丈夫ぶりを好む眞淵は、宣長の詠草に對して、「歌に非ず」とか、「今の世のはいかい言」であるとかいつて酷評を下してゐる。古典の研究に於ては、宣長はよく眞淵の眞精神を傳へて、眞淵の學統を繼いだが、和歌に於ては、眞淵の萬葉風の影響をうける事餘り多くなかつた。情熱の人眞淵は、時に冷靜なるべき學者的態度を失つて、稍議論の精細を缺く憾みがあつたが、綿密なる精力家宣長は、博覽宏識、引用典據の精細確實は寧ろ師眞淵よりも優れてゐる。飽くまでも冷靜沈著な學者的態度で古典に臨んだ宣長の風は、契沖のそれとよく似てゐる。これが歌人としては契沖宣長の眞淵に及ばざる原因であらう。

　宣長の歌論は「石上私淑言」に精細に論ぜられてゐる。宣長の歌論の立場は、在滿の如く技巧のみを重んじた論と、眞淵の如く心を重んじて技巧を排した論とを折衷調和した點にある。宣長は、歌はものの哀れにふれて自然に生じてくる。しかもかく感情の高潮した場合の表現は自然に

あやある言葉となる。これが歌だといふ。純眞な感情の發露を歌として表現する時には、俗談平話とはならないで、これに技巧が伴ふのは、決して自然の儘の感情を僞り誇張するのではなく、それが自然であり、かやうにあやある表現をしてこそ始めて感情が自然に現はれたのだといふ。この立場にある宣長が新古今の歌風を好んだのは、蓋し當然なことである。「石上私淑言」の初稿本ともいふべき「排蘆小船」に於て、彼は明らかに、

さて新古今は此の道の至極せる處にて此の上なし。上一人より下々まで此の道を弄び、大いに世に行はるゝ事延喜天暦の比にも猶まさりて、此の道大いに興隆する時なり。凡そ歌道の盛なる事この時にしくはなし。道のめでたき事も、古のはさるものにて、先は今の世にも叶ひ、末代まで變ずべからず、めでたくうるはしき事、此の集にすぎたるはなし。

と記して、新古今の歌風を理想的なものとしてゐる。「石上私淑言」の卷三に、

まづ意をむねとせよといはむは、げにと聞えて誰も一わたりさもありぬべき事と思ふべけれど、今一たび思ふになほ歌は詞をさきとすべきわざになん有りける。……又意はさしも深からねど詞のめでたきに引かれてあはれにすぐれたる歌つねに多かれど、詞わるくてよきはなき物なり。さればいづれとなき中にしひていはば猶詞をぞむねとはすべかりける。

といつて、技巧を重んじてゐるのは、宣長の歌論の立場としては極めて當然な事であつて、なほかつ藝術としての歌の神髓を得た論といはねばならぬ。歌論家としての宣長はその師眞淵よりは一歩を進めてゐる。が併し歌人としての宣長はどうであらうか。自撰歌によつて彼の作歌をみてみよう。

宣長の家集には、「自撰歌」と、「鈴屋集」とある。普通板本として早く世に流布してゐたのは鈴屋集であつて、これは春庭が寛政十年に撰んだものである。自撰歌の方は寫本として本居家に傳はつてゐたのを、續歌學全書ではじめて活版にしたものであつて、明和四年、宣長三十八歳の時から、寛政七年六十六歳までの歌を、自撰したので明和七年の花月百首の中の歌を最初におき、安永二年花五十首の内と、同年冬百首の内の歌これにつぎ、以下は明和四年から年代順に配列されてゐるが、天明二年以降は、古風、近風と二つに分けられてゐる。がしかし後は入り混つてゐるところもある。宣長の歌のすべてを知らうとするには鈴屋集を見なければならない。

雪ふらぬ春も櫻のさかりには木ごとに花のみよし野のやま　　花月百首

なみたてる松の梢に葉がくれてたれに忍ぶの岡の月影　　同

草枕むすばむかたもしら雪のふりつもりたる野路の夕ぐれ　　冬百首

又や見む一夜たびねのあけぼのに霞しきつの浦の松原　明和四
今はまた遠きちぎりをまつむしの別れになくか曉のこゑ　同
妻こふる聲もたかしの濱松のまつ夜更けぬと千鳥なくらし　明和五
いとふべき心はしらぬながめにもうき世をあきの夕暮の空　明和七
吹きみだる露のゆかりに月影もあだの大野のよはの秋かぜ　同
おもひやるこよひの月に袖ぬれて誰みやぎ野の秋萩の露　明和八

これらの歌はみな言掛けを用ゐてゐる。宣長はよく言掛けをもちゐてゐるが、これは法幢の感化であらう。

これやこの明日のいはひの鏡山としのこなたにむかふ白雪　明和五

これは鏡山歳暮といふ題である。明日は元日で鏡餅を供へる。その鏡餅の鏡を、山名の鏡山と言ひかけたので、前の例よりは複雑な修辭法である。

河竹のひとよ逢ひ見しなごりよりおきふしさらぬ人の面影　明和七
なよ竹のうき一ふしのうらみより長きよかけし中も絶えにき　同
賤のめがいそぐ手わざもあさのをの長き春日に心うむらし　明和八

年をへて我が水ぐきも若き世のかたみと見れば袖ぬらしけり　安永元

葛かづら風のたよりも絶えねたゞくる夜半ならでかるゝ冬野に　安永二

重ねても夜半のさ衣うらなくは猶たのまれぬ人のかねごと　安永三

流れての世に忍べとや白川のみづからかゝる影はうつせし　天明四—六近風

これらの歌は、單純に緣語ばかり用ゐたのと、緣語と言掛けと重ねてあるのとの區別はあるが、いづれも緣語を以つて飾つてある例である。

寐覺するすゞのしのやの東雲に露おくそでを月ぞとひける　花月百首

かせ山は雲はれやらでいづみ川いつ見しまゝの五月雨の空　明和四

山里はたゞ青葉のみしげりあふをりにあふちの花も珍らし　安永三

ねられずよ言の葉にのみ聞きなれてなれぬ枕の峯のまつ風　安永五

今は又たれをまつらむ松ばかり見しよのまゝのやどの夕暮　安永六

軒くらき春の雨夜のあまそゝぎあまたも落ちぬ音の寂しさ　安永八

これらは、同音を疊み重ねて調子を整へた例である。

右のやうな修辭は宣長の歌に多くみえてゐる。彼が實際作歌の上にもいかに技巧を重んじたか

といふ事の一斑は、これらの例によつて覗ひ知ることが出來よう。

博學である宣長はまた本歌取りも多くやつてゐる。

願はくは花のもとにて千世もへむ其のきさらぎの盛りながらに　安永八

吹きこゆる關のあらしもすごき夜に須磨の上野のさを鹿の聲　同

梅の花さきそめしより朝さらず來鳴く垣つのうぐひすの聲　安永九

立ちかへりいなばの山の峯の松ちぎりたがへず霞むはるかな　天明三

みなせ川なびく柳もほの〴〵と春風かすむやまもとの里　天明七―八

これらはその一例である。

うちよせてぬるゝ磯べの眞砂にも殘してかへる波の月影　花月百首

磯の砂が波にぬれて、それにも月が映じてゐるといふ纎細な趣を詠じた歌であつて、「眞砂にも殘してかへる」に技巧がある。

おきわたす田の面の露も深き夜の稻葉におもる秋の月かげ　花月百首

露の重さで垂れてゐる稻葉の露毎に月かげを宿してゐるといふ、前の歌のやうな纎細な趣をもつた歌である。「稻葉におもる」に技巧がある。かやうに纎細な趣をもつた技巧的な歌が宣長の特長

であらう。

流れゆく花はとまらで川水もあとは青葉のかげぞのこれる　花月百首

鐘の音も雲居にすみてをはつせの山風ふくる秋の夜の月　同

さそひくる雲よりさきに音たてて風にしぐるゝ里のむら竹　冬百首

玉しまや川上とほきうめが香もながれてにほふさとの春風　明和四

わすれずば雲のはたてをそれと見よわが物思ふ夕暮のそら　明和五

旅まくら夢のなごりの鷄のねも都に似たるあかつきの空　同

櫻さく外山はしらむ春の夜を尾上にのこすありあけの月　明和七

けぶりさへあまぎる空に埋もれて雪にくれゆく遠方の里　安永六

かくの如く優麗典雅な調は宣長の一貫した歌風である。優美ではあるが纖弱にすぎて生彩に乏しい嫌ひがある。眞淵の作に見る樣な氣概がみられない。これは二人の性格の差であるかもしれない。これが歌論家としては眞淵より優れてゐた宣長が、歌人としては眞淵に及ばない點である。

珍らしき高麗もろこしの花よりもあかぬ色香は櫻なりけり　花五十首

のどけさも此の日の本の光とはから人知らじはつ春の空　寛政四

さひづるやからくに人の僞りは似つきてすれば人まどひけり　寛政七
をりたむな直き神代のこゝろもて直き神代のみちは尋ねよ　同
なほりてむ外國ぶりのまがわざも遂に直びの神しらさば　同

これらの歌は彼の思想を見るべく、

春の日も早く暮れぬとかこつかなふみ見る道のいそがるゝ身に　寛政二

の如きは、宣長であるによつて始めて眞實味がある。

かく宣長は、中世風の歌風を以て本領としてはゐるが、古風の歌も詠じてゐる。

いざ子ども我もいましも眞幸くて萬代飮まなこの豐御酒を　天明二一六
大君のみかりたたすとふゆの野を雪ふみならす丈夫のとも　同
吾妹兒が待つらむ物を雨降りてぬれはひつとも行かずあらめや　同

これがその一例である。これは單に學問の方便として詠んだのに過ぎないのではあらうが、流石に學者の作だけあつて、よくその體を得てゐると思ふ。

さて宣長の歌を概觀するに、理想とするところは新古今ではあるが、ことに俊成定家の風を喜んだ宣長は、俊成定家で代表される新古今の優麗纖細の一面を傳へて、生彩氣力に乏しい缺點は

あり、清新ではないかもしれないが、併しながらまた捨て難い情趣をもつてゐて、歌人としての宣長は、歌學者としての宣長に及ばない事は十分認められるが、宣長は歌學者であつて歌人ではなかつたと、一概に貶しさる評には俄に左袒し難いやうに思はれる。

うけらが花

「うけらが花」は加藤千蔭の家集である。千蔭は枝直の三男で、享保二十年（皇紀二三九五）に生まれた。本居宣長が六歳であつた年である。二兄が夭折したので、父枝直の後を嗣いで、俗稱を又左衛門といつた。幼名は佐芳（すけよし）、字を徳與（とこよ）、俗稱を常太郎といひ、後要人（かなめ）と改めた。家號を芳宜園（はぎぞの）、後には朮園（うけらぞの）、又逸樂窩ともいつた。九歳の時から父枝直に見習つて歌をよみ初め、十歳の時眞淵の門に入つた。千蔭が幼にして俊敏であつた事は、「賀茂翁家集」の九月十三夜宴二枝直宅一歌序に、

此のあるじのうみの子（千蔭）今年十といふ齢にして、三十あまりの言の葉をぞつらぬなる。今宵にもいと疾くよみ出でられたり。これは呉竹のよに珍らかなる事なれば、から大和の言の葉にかけて、且は宿の橘の花さへ實さへある種を思ひ、且は霜雪にもいや常磐ならむ生ひさきを祝ひほめざるはなし。

と眞淵をして嘆賞せしめてゐるので察する事が出來よう。寛延年間十餘歳で町奉行組與力勤方見習に出仕し、寶暦十三年（皇紀二四二三）、父枝直が七十二歳で退職したので、千蔭が跡を相續して、父の名又左衞門を嗣いで吟味方助役になつた。時に千蔭二十九歳であつた。翌明和元年には吟味役に進んだ。師の眞淵は明和六年（皇紀二四二九）に七十三歳で歿した。千蔭が三十五歳のときである。天明三年四年（皇紀二四四三―四）のころは諸國大飢饉に苦しみ、幕府は田沼意次執政以來の奢侈のために、國庫空乏して救濟の道に窮した。田沼父子に對する怨嗟の聲は漸く盛んとなつた。天明四年三月意次の子、若年寄田沼意知が佐野政言に營中で斬られてから、さしもの田沼意次の勢力も衰運の兆を現はしてきた。天明五年（皇紀二四四五）、千蔭五十一歳の時に、父枝直は歿した。翌天明六年には將軍家治他界して、世子家齊嗣ぎ、田沼意次は不首尾となつて退職し、天明七年には松平定信新たに老中の首座となつて、田沼時代の弊政に大改革を試みて、田沼配下の諸役人を退け、殊に直接民政に關係のある町奉行の役人には痛撃を加へた。千蔭は形勢の非なるを察して、それに先だつて、天明八年五十四歳で病に託して職を退いて、養嗣子直蔭が相續してゐたが、猶在職中勤め方宜しからずといふので、祿二百石のうち五十石減俸の上百日の閉門を命ぜられた。これは寛政元年（皇紀二四四九）千蔭五十四歳の時である。この閉門によつて閉

を得た彼は、萬葉集畧解を著はした。これは當時大いに流行して、その評判は京にまで聞え、富小路貞直卿から所望されてこれを贈呈したり、文化元年には公儀からの内意によつて、將軍家齊に獻上したといふ事である。

千蔭は江戸育ちである。しかも彼の壯年時代の江戸は八代將軍吉宗の後をうけて、府庫充實してゐたので、自然と奢侈に流れ、田沼時代には驕奢の極に達した。元祿時代は驕奢は驕奢であつたけれど、野暮臭いところがあつた。明和安永の頃の奢侈は洗練し盡された奢侈であつた。通を極めたものであつた。その時代の空氣は千蔭をして純然たる風流なる都會人とした。彼は古歌古文を眞淵に學んだが、彼は眞淵の萬葉調から出て、優麗溫雅な所謂江戸派の歌風をもつて世に喧傳されたのは極めて自然な事だと思はれる、これは一つには父枝直からの感化もあらうが、一つには千蔭が都會人としての必然の要求であつたのであらうと思はれる。環境といふものは恐ろしい。都會人と田舍者との間には可成りに大きな開隔がある。眞淵は田舍者であり、千蔭は都會人である。田舍者の心の働き方は粗大であつて力強い。都會人のそれは細く鋭いが強壓力がない。萬葉の歌は作者の高潮された感情がいかにも力強く表現されてゐる。がその作者の心は戀とか死とか、又は廢墟に立つて古都をしのぶとか、壯大雄渾な自然に對するとかいふやうに、大きく力

強い事柄に對して感情が興奮して、始めて雄渾な萬葉の歌となつてゐる。鉢に植ゑた蘭の葉におく塵を嫌つて洗ひおとすといふやうな纖細鋭敏な神經は萬葉歌人にはみることが出來ない。卽ち萬葉の歌は野暮な歌だといひ得る。技巧的に洗練された都會人である千蔭がこの萬葉調に據らないで、江戸派調を詠じたのは極めて自然のことであり、またこれが華やかな當時の人士の嗜好に適して、歌人としての千蔭の名が同派の春海とともに喧傳されたといふ事も尤もな事である。

千蔭はまた能書家として春海と竝稱されてゐる。千蔭の書ははじめ瀧本松花堂の風から出て、更に佐理行成の風を慕ひ、大師流の筆傳をうけて一家をなした。世に千蔭流といつてゐる。假名はその最も長ずるところであるが、晉唐諸家に學んで草書にも巧みであつた。千蔭に歌を學ぶ者は上は權門貴族から下は花街の婦女にまで及び、俳優遊女等までも千蔭の書風を學んだといふ。かく歌人として書家として、風流人として名聲嘖々たりし千蔭は、文化五年(皇紀二四六八)七十四歳でこの幸運な生涯を終つたのである。

「うけらが花」は享和二年(皇紀二四六二)六十八歳の時に、自ら部立をして編したもので、四季、戀、雜、雜體、長歌と部立され、その他に文が二十餘編あるが、歌數の多いのは四季の歌である。集の名は享和元年富小路貞直から歌を乞はれた時によんだ、

武藏野や花數ならぬうけらさへ摘まるゝ世にもあひにけるかな

といふ歌によつて付けたのである。享和二年以後文化四年までの作は「うけらが花」二編に輯められてゐるし、十一歳から十三歳までの自筆の詠草「花鳥風月」があるといふ。

江戸派の歌風は些かも野性がなくて上品である。壯快味はないが優麗温雅であるのがその特徴である。而して江戸派の歌風は千蔭と春海によつて大成されて、歌壇の一大勢力となり、眞淵歿後の江戸の歌壇を支配したといつてもいい程であつた。

さくら河みぎはの冰とけそめてはるをよせくるなみの初花　春
春されば六田のよどのやなぎ原みどりに見ゆる風の色かな　同
五月雨に鵜河の水やはやからしよどみもあへぬ篝火のかげ　同
箱根ぢや關の夜あらしさえ〳〵て月影冰る伊豆のうみづら　夏

これらの歌は、想といひ調といひ、眞淵が極力排斥した新古今の歌風そのまゝである。「はるをよせくるなみの初花」、「みどりに見ゆる風の色」、「よどみもあへぬ篝火のかげ」、「月影こほる」、これらの句法は新古今時代の歌人の好んで用ゐた技巧である。眞淵の門からかやうに新古今の歌風そのまゝの歌をよむ歌人の出たことは、その端を千蔭の父枝直に發してゐるとしても、一見極め

て奇妙な感がしないではない。千蔭の歌論は、春海の歌論と殆んど趣が同じくしてゐて、春海の方が悉しい。春海は、「歌は心を述ぶるものなれば、人々同じやうにあるべき事にもあらねば、己がじゝの姿あらむものなり。只心のまことを失はざらむ事と、調ののどかならむとは、古の手振を忘るべからず。さては珍らかに新しき心をこそ詠ままほしけれ。さらずばいかでかわが歌ならむ。」と眞淵がいつたといひ、更に進んで、「必ず古にもなづまず、はた後の世にも落ちず、我とわが見たるふしを詠むこそまことの歌なれ。」といつてゐる。これで彼等の立場は明らかであらう。卽ち眞淵は歌は人の眞情を自然に歌ひ出したものだととなへて、しかしてこれを己の好む萬葉風に極限したのを、彼等はそれを廣義に解して、彼等の自由の天地に悠遊したのは自然の事であらう。彼等は眞淵の鋼屈な崇古説を脱して、反つて眞淵の説を活かしたものともいへよう。しからば千蔭の歌は皆新古今の摸倣ばかりであるかといふとさうではない。

かきこもる竹の垣ほも鶯のこゑとしるべにはるやこえこし　春

春のきるかすみの衣織りなせる高はたなれや青やぎのいと　同

これらは古今風の歌である。がかやうな風の歌は餘り多くは見られない。

春霞ま袖にわけてしめ野ゆきむらさき野ゆき子の日するかも　春

うら〳〵と富士のしば山霞む日にたごの浦舟ゆたに漕ぐみゆ　同

波をたて霞をぬきに織るはたのかとりの浦は春はしよしも　同

眞くず原葉びろになりぬ秋風の吹きうらがへす時近みかも　夏

武藏の海沖よりいでて秩父ねに渡らふ月のあかすもあるかな　秋

これらは萬葉調の歌であつて、眞淵の影響を認める事が出來る。千蔭の歌には以上述べたやうに色々の要素があるが、その本來の面目は次の歌のやうなものであらう。

春霞みふねの山を立ちこめてよし野の川にかぢのおとする　春

うぐひすの聲待ちかねて露ぬるむ片枝に匂ふうめのはつはな　同

夜をこめてみをひきのぼる舟の帆の霞にしらむとねの河面　同

墨田河みのきてくだす筏士にかすむあしたの雨をこそしれ　同

八重霞かすみながらにうちしめり野づらの庵に春雨ぞふる　同

すみだ河堤にたちて舟まてばみなかみ遠くなくほとゝぎす　夏

あじろ木におりゐる鷺のみの毛のみ一村しろき宇治の川霧　秋

白鷺のつばさの風にちるあしのふゞきも寒き冬のかはづら　冬

あづまやの軒のたるひにうつろへる光も寒きあか星のかけ　冬

これらの歌はいかにも洗練された溫雅優麗の極である。豪放雄渾の趣はないが、纖細な神經が流暢な調に盛りこまれていかにも都會人らしい歌である。眞淵の丈夫ぶりの歌は、何處やら野暮に思はれて同じ難かつたであらう當時の江戸人士が、この千蔭の洗練された詩趣に共鳴して、翕然として江戸派の傘下に集まつたのはまことに當然なことであらう。而してこれらの歌は新古今に似て新古今でもなく、古今に似て古今でもない。新古今の優麗の趣を、古今の流暢な調で、表現されたものだといふのが眞に近いであらうと思ふ。

秋風の立つや野末のはたすゝきほのみしよりも亂れ初めてき　戀

染め盡す峯の紅葉をいづる日のあからさまにし逢ふは逢ふかは　同

五月雨に水こす池の靡き藻の人にしられでよりも逢はなむ　同

千蔭は叙景歌人であつて抒情歌人ではなかつたやうである。近松に見るやうな濃厚な戀は江戸の文學には見られない。洒落を好み清楚を好む江戸つ兒は、戀に於ても洒落氣があり遊戲氣分が多分に見えて居る。八橋に嫌はれて百人斬をした佐野次郎左衞門は江戸前の男ではなかつた。千蔭が戀歌に秀逸のないのは、江戸前の風格のしからしめたせるかもしれない。而してその戀歌に

は右の例に見えるやうに多分に敍景的分子を含んでゐること、枝直の戀歌と同趣である。

岡屋歌集

「岡屋歌集」は栗田土滿の家集である。岡屋はその號であつて、遠江國城飼郡平尾村の廣幡八幡宮の祠官、從五位下壹岐守であつた。初め賀茂眞淵について古學を學んだが、眞淵の歿後、天明五年(皇紀二四四五)本居宣長の門に入つた。文化八年(皇紀二四七一)七月八日七十五歳で歿したから、その生まれたのは元文二年(皇紀二三九七)で、千蔭より二年後に生まれ、千蔭よりは三年後に歿してゐる。宣長の門人になつたのは土滿四十九歳で、宣長は五十六歳であつた。

岡屋歌集は文化元年に門弟等の編したもので、四季、戀、雜、哀傷、賀の順序になつてゐて長歌も混つてゐる。長歌は殊に雜部以下に多い。その歌風については、歌集の跋に栗田眞菅が、

師(土滿)のいはれけらく、おのれ縣居の翁の好まれし古風をまねびよまむとすれども、其のゝち鈴の屋の翁のよまるゝふりをまねびよむ人多かれば、おのづから其のふりまじりぬべくて、何れのふりともなく、

といつてゐるやうに古風と中世風とが交つてゐるが、眞菅の跋の冒頭に「師は古ぶりをよしとして詠まれけるを」といつてゐるやうに、土滿自身古風を好んだので、古風の歌が多いのは當然な

ことである。併しながらなほ細かに之れをみると、古風といふうちにも、萬葉以前の風と、純萬葉風とがあり、中世風といふうちにも、純中世風と、中世風の內容が萬葉調に盛られてゐるものとが區別され得ると思ふ。而して大多數を占めてゐるのは萬葉調である。

春ごとにつどひゑらぎて萬代にかくし遊ばむ酒ほぎ歌ほぎ

の如きは萬葉以前の風の歌の例である。

打ちきらしそれとも見えぬ雪の中に梅の花さけり春たつらしも

みづ〳〵しみづ野の若菜若がへり幾らの年を老いずもあるらむ

豐秋津みづほの國にみづ枝さし咲き榮えゆく花はこの花

曉に夜はなりぬらしかさゝぎの橋に霜降り月かたぶきぬ

三吉野の瀧のとこ岩とこなめに久しくあるらし苔おひにけり

これらは萬葉風の傑れた作である。

打ちきらし雲まも見えぬ五月雨に亂れてたぎつ音まさりけり

五月雨のをやめばつぎてたつ雲の底もとゞろに瀧の音聞ゆ

鶯のなくねたえにしくらゝ谷に雨ぐもゆすりいかづちなるも

これらは雄渾な萬葉調ではあるが、內容に於てやゝ複雜味をもつてゐる。

和田のはら霞こめたる夕なぎにかぢの音きこゆ漁すらしも

青柳にぬくやしら露玉のをのたまもゆらゝに春風ぞふく

吉野川水はこほりに音たえてたぎつかふちに千鳥なくなり

志賀の浦や汀のかたはつらゝゐて沖邊はるかに波のたつ見ゆ

朝まだき淸見が關をこえくればいる方なみに殘る月影

足びきの山の嵐のおとたえて夕ゐる雲にましらなくなり

これらの歌は調は萬葉調であるが、盛られてゐる情景は寧ろ新古今風の巧緻なものである。

遠近の山のみゆきも霞むなりけさより春になりにけらしも

わが宿の梅の花ちりぬあしびきの山さくら花さきつがむかも

これらは古今風の內容を、萬葉調に詠じたのである。

はなは雪ゆきは花ともまがへども鶯のねに似るものぞなき

梅が香をふきくる風のなかりせば春の夜すがら物は思はじ

歸らむと思へば袖にかをりけり花の心もをしむなるらむ

惜しめどもとまらぬ春のつれなさを見じとや花のとく散りぬらむ

けさ早く軒端にそよと音すなりうべ秋風ををぎといふらむ

これらは古今風の主觀的の歌である。

あしびきの片山かげのしの薄うらさびしかる秋の夕ぐれ

わたの原沖つ汐風さえ〴〵て有明の月に千鳥なくなり

これらは新古今を思はせるやうな詠である。

高潮せる感情を切迫の調で、如實に表現するのは萬葉歌のもつ長所である。土滿の戀歌が、屈折せる技巧のために力の弱くなつてゐる中世風の戀歌に比して、大いに熱情的であるのは、この爲であらう。

人待ちてささずば人やとがめむと槇のとぼそに立ちぞ煩ふ

遠近の山もひとつに霞こめて妹こひしらの春のゆふべや

百千鳥さへづる春の長き日を戀ひや渡らむ待ちやくらさむ

はろ〴〵に海山こえて來ぬれども戀の奴はおくれざりけり

の如きはその優秀なものであらう。

あはずして戀ふる心は片絲の結ぼほれつゝ絶えむとすらむ

の如きは古今風の理窟に墮した作である。

おふけなく神代の事を慕ふまにすぐる月日は又もくれけり

日の本の　やまとの國は　天照らす　神のみ國と　日の皇子の　しらさむ國と　八百萬　千萬神の　神代より　たすくる國と　いは木にし　ひもろぎたてて　神ながら　いつきましぬれ　岩木なす　かきは常磐に　ひもろぎの　立ち榮えつゝ　天地の　神のさきはふ　尊き御國

つがの木のいやつぎ〳〵に日の皇子の萬代までにしきます御國

これらの歌に彼の思想の一端をよく知る事が出來よう。而してその長歌は、右の例によつて知り得る如く、純然たる萬葉風である。

琴後集

琴後集は眞淵の弟子で、千蔭と同じ江戸派の歌人村田春海の家集である。春海は千蔭と同じく江戸ッ兒で、江戸小舟町の富豪干鰯問屋村田屋治兵衛が即ち歌人春海である。春海の生まれたの

は延享三年（皇紀二四〇六）であるから、千蔭よりは十一歳の年少である。春海字は土觀、號は錦織齋、遊名を漁長といつた通人であつた。父は村田忠興、後春道と改名、眞淵の弟子であり、千蔭の父枝直と共に眞淵の後援者であつた。春海の兄長藏忠何、後春郷と改名、眞淵の門に入つて秀才の譽があつたが、惜しいかな三十歳で夭折してゐる。

春海の家は姓は平、氏は村田、その先祖は千葉氏の支流で、上總から出たといふが、早くから江戸に出て有名な富商であつたと傳へられてゐる。春海の曾祖父忠之以來代々歌を詠んで風流人であつたらしいから、春海には歌人としての遺傳は多分にあつたのであらう。春海が眞淵の門人となつたのは十三歳の時、寶暦八年（皇紀二四一八）で、眞淵が死んだ明和六年（皇紀二四二九）は春海は二十四歳であつたから、眞淵に就いて學んだのは僅かに十二年間に過ぎなかつた。三年間居宅の縁の下に賊の住んでゐた事を知らなかつたといふ程に廣大な家に住んでゐた春海は、壯年時代には豪奢な生活をおくつて、所謂十八大通の一人であつたといふ。安永九年（皇紀二四四〇）の淨瑠璃棊太平記白石噺七段目の通人舞の唄に、

通人舞を見さいな、大通人の客撰共には、いつも郭へ通ふ紳、文の文魚も走り出で、男の喜十立ちぬいて、もの雄跡の鯉藤さい、よいきせきではないかいな。首尾を占ふ六川の、龜も八龜も文洲に、來之あれば幸先も、

よしやなりよし振も吉原、漁長十橋森紅牧十、渭州左達に秀民眉月照りさふ里の夕映、祇蘭秀でて菊もかんばし、阿能待美や江戸の幸、墨河安穩千局萬川、歌の蛸柯も勇ましや、幇開末社のかみも賑し、只今奏づる舞樂清く、袖をひたして面白や、大通舞を見さいな。

とあつて、大通人の名寄せである。このうちの漁長といふのが春海の遊名だといふ。この安永九年は春海二十五歳の時である。かやうに家業を放擲して遊蕩三昧に日を送つたので、さしもの家産を蕩盡して落魄し、淺草に移り、八丁堀に再轉して歌學の師を生業としてわびしい生活に入つた。元來が富豪の家に生まれてお坊つちやん育ちの、むかつぱらをたて易い春海は、人に惡まれ誹られる事があつたが、同門の先輩千蔭はよく落魄中の春海を庇護もし、戒飭もしてゐたのである。そのうちに門人も次第に多くなり、歌文に秀逸の聞えも世に高くなつたので、遂に松平定信の聽に入り、しば〳〵其の邸に招かれて殊遇をうけ、毎歳五人扶持を給せらるゝ事となり、長岡侯棚倉侯からも若干の扶持を贈られるやうになつたので、老後は相當安樂に暮してゆかれるやうになつた。

文化七年（皇紀二四七〇）、居室を新築して、父の代から持ちつたへてゐた東琴の名器を上段に据ゑ、そのしりへに書卷を積んだ厨子を置き、其の傍に起臥してゐるといふので、自ら琴後翁（ことじりのおきな）

と呼んだ。その歌文の集を琴後集といふのもその故である。翌文化八年（皇紀二四七一）二月十三日歿した、年六十六。栗田土満の歿した年と同じ年である。門人には清水濱臣、小山田與清、岸本由豆流、小林歌城など有名な人々があつた。

春海の歌學説に就いては、千蔭の項に說いたので此處には省く。清水濱臣は泊洦筆話に、春海について興味のある記述をしてゐる。

吾が師の常にいはれしは、契沖阿闍梨、縣居翁など、今の世の人の心よりは、四日兩日もありし人の様に思へど、更に今の人に異なるに非ず。彼も人我も人なり。みづから誇るにはあらねど、契沖阿闍梨、縣居翁、まのあたり本居氏などの如き、其の才氣をたくらべば、吾も此の三人に劣れりとは思はず。絕えて及ばぬ事は、三人の人達は、精神すくやかにして、若きより老の身に至るまで、學びの道に倦む事を知らず、勉めて勉めし人達なり、吾は幼きよりほしいまゝに生ひ立ちて、酒色に耽るのみにして、物につとむといふ事をなさず。一夜もまどろまず居れば、夙めては倦みつかれて、物の役に立たず。一日つとめては、二日物の役にたたぬ故に、何事も心に思ふばかりの事を、十が一つをもなし終へずして、徒らに老いくづほるゝに至れるなり。是れ身の怠りとはいひながら、誠は生まれだちのかよわく、病に犯さるゝこと常にして、物をつとむるに堪へぬが故なり。此の三人の人達は、常に文机のもとを離れぬ身なればこそ、人はさも思はね。學びの方にかどはなれたる

身ならば、馬追車借をわざとして、五月みな月照りはたゝき、霜月しはすのふり氷る頃に、はだし鶴脛にて、ひねもすに立ち走るとも、身のいたづき知らぬばかりのすこやかさにこそあるべけれ。されば、學びの道にも何の業にも身のすくやかならぬは、よろづにくち惜しきものぞかしといはれき。

博識卓見の春海が、大著述を殘し得なかつた理由は、此の文によく説明し盡されてゐる。「契沖阿闍梨、縣居翁、まのあたり本居氏などの如き、其の才氣をたくらべば、吾も此の三人に劣れりとは思はず。」といふのは、蓋し眞實の事であつて、必ずしも春海の自惚れ、負け嫌ひの江戸ッ兒の氣焰とばかりに見過す事は出來ないであらう。否寧ろ春海自身は、才氣の點に於ては、三人よりおのれ優れりとの自負があつたであらうが、體力に於て到底彼等に及ばざるを知つて嗟嘆した春海の心中には大いに同情すべきであらう。かやうな事は世に多くの例がある。潑剌たる才氣を抱含しながら移り氣で持久力に乏しい都會人が、學者として後世に殘す功績に於ては、鈍重ではあるが、執著と持久力に富む田舍者にどうしても一籌を輸せねばならぬであらう。契沖といひ、眞淵といひ、將又宣長といひ、田舍生まれの頑健な體力の所有者であつたであらう事は想像され得る。が併しながら、感覺の鋭敏纖細に於ては田舍人は到底都會人には及ぶ事は出來ない。學者としては體力の差によつて宣長等に壓倒されて了つた春海も、歌人としては春海が彼等三人を凌

駕して居るのは、この故であらう。

琴後集七卷は、一から四までを歌の部、五から七までを文の部としてゐる。いま本大系にはその歌の部だけを收錄してゐる。歌は四季、戀、雜、題畫歌、百二十首、五十首、長歌と部立されて、雜の内には物名、折句、旋頭歌が數首含まれてゐる。別に琴後集別集といふものもあつて、これにも畫題の部が立ててある。

さて琴後集の歌風をみるに、「うけらが花」の歌風と似てゐるのは當然ではあるが、うけらが花にはうちには萬葉風の作も交つてゐたが、琴後集は悉く絢爛な才氣のかつた江戸派風の作ばかりである。

見るが中にはかなく消ゆる沫雪はもゆる春野にふればなりけり　春

青柳のうちたれ髮をけづるにはしたゆくみづや鏡なるらむ　同

陽炎のもゆるを絲といふめるは春のくる野にたてばなりけり　百二十首

の如きは餘りに理窟に墮した例である。

すみ渡る月のみ舟におくれじと聲をほにあげて鴈はきにけり　秋

きならしし露わけ衣ぬぎかへてけふより霜の白がさねせむ　冬

の如きも、理智的の技巧を弄し過ぎた嫌ひがある。かやうな作も集中に多数交つてはゐるこ

玉河にしづく白玉見えずともとらではやまじしづく白玉　戀

かやうな萬葉風の作は、集中僅かに散見するに過ぎない。

雪ながらあくる朝戸にさく花の面かげ見せて春は來にけり　春

岸かげや折られぬ花のにほひをも波によせくる春の河みづ　同

たち花の花ちる宿に一夜ねむしのぶむかしの夢や結ぶと　夏

棹させば夏をわするゝ夕川にこほりをくだく波のつきかげ　同

雪を櫻の面かげと見、水に映ずる花を折られぬ花といひ、橘の香に昔をしのぶ夢を結ぶかとおもひ、波に碎ける月影をこほりをくだくと見るなど、艶麗な敍景ではあるが、稍技巧に過ぎ、才氣に走りすぎた感がある。かやうな作も多く見えてゐる。

筑波ねの高ねのみゆき霞みつゝすみだ河原に春たちにけり　春

たちならぶ高ねの檜原かげくれて霞にのこる夕づく日かな　同

かげうつす波もにほひて青柳のいとよりけぶる川づらの里　同

春さめはふるとも見えず柳原あるかなきかにかげ霞みつゝ　同

上つ瀬は花をへだてて入る月のなごり霞める春のかはづら　春
おちたぎつ早瀬の波にこたへつゝ梢にむせぶ蟬のもろ聲　同
かつら人鵜川たつとや波の上にみだれてみゆる瀬々の篝火　夏
かくながら月や宿さむ夕立のなごりとゞむる玉ざゝのつゆ　同

春雨に煙る柳の竝木の靜的の美、漆のやうに暗い空と水とに映じて火の子を散らす鵜船の篝火の動的の美、これらは美しい四條派の畫のやうな趣である。滔々たる激湍の水聲、蓊々たる樹梢の蟬聲や、夕立過ぎての玉笹の露の上に宿さんずる月影の纖細にいたつては畫く能はざる趣であつて、歌に於てはじめて描かれうるところである。

御手洗の岩うつ浪も音かへつたゞすのもりの秋のはつかぜ　秋
高圓の野邊のうき霧とだえして尾花につゞく松のむらだち　同
かりすてし山田に殘るもくづ火の煙さびしき秋のゆふぐれ　同
山里は秋のなごりぞあはれなる落葉まじりに尾花ちるころ　同
雲すぐるみねは夕日のかげみえて麓のさとに時雨ふるなり　冬
日影うときかたへは霜となりにけり夕風さゆる岡のつゆ原　同

とまり舟苫のしづくの音たえて夜半の時雨ぞ雪になりゆく　同

たちのぼる谷の浮雲みねこえて檜原がおくにむら雨ぞふる　雜

心あてに見し白雲はふもとにて思はぬ空にはるゝ富士の嶺　同

なづなさく花のにほひにくれかねて霞にのこる春の山畑　同

むら雨の名殘すゞしき高殿に千里をかけてゆふかぜぞふく　題畫

雪ふれば千里も近しおばしまのもとより續く富士のしば山　同

あさま山神のいぶきの霧はれて雲居にたてる夕けぶりかな　同

春の海やこちふきたゆる夕なぎに霞む名殘ぞ雨になりゆく　百二十首

富士の歌の如き、稍巧みすぎた感がないでもないが、しかしながらいづれも優麗典雅な敍景歌の逸品であつて、春海の本領は十分にこれらの歌によつて覗ひ知る事が出來よう。

敍景の歌にかくまで巧妙な手腕をもつてゐた春海も戀の歌は餘り巧みではなかつた。

音にのみきくの濱べに拾ふてふかひなく人をこひや渡らむ　戀

神垣にかくる小鈴のしめくちてならぬ戀にも年をふるかな　同

といふやうに技巧に過ぎて生彩のない作が多い。

つらからぬ詞ぞつらき中々に思ひこりよといひもはなたで　戀の如きは、その中の可なるものであらう。

長歌については、當時の歌壇を騷がした詠王昭君歌を示しておかう。

雪まじり　霰みだれて　終夜（よもすがら）　北ふく風の　あらましき　夜牀の上に　つく〲と　枕そばだて　きし方を　思ひいづれば　人の世は　夢なりけりな　賤たまき　賤しきわれも　宮姫と　かずまへられて　をすの中に　いつかれしよは　綾錦　袖に重ねて　白玉を　鬘にしつつ　ます鏡　みる面影の　かぐはしき　花のゑまひを　我ながら　我と頼みて　大王の　恵みの露し　あまねくば　われじとこそは　思ひつゝ　ありけるものを　さがなきや　筆にまかする　うつし繪の　あらぬすさみの　僞りを　正しもあへぬ　うぎふしは　せむすべをなみ　いひしらぬ　國の境に　はる〲と　出でたつ道に　おきそはる　袂の露の　きえかへり　ひきとゞめたる　駒の上に　暫しかきなす　四つの緒の　たえぬ恨みを　はるけなむ世こそしられね　惜しからぬ　命と思へど　塵の身の　ちりもうせなで　春たてど　花もにほはず　秋きても　紅葉も見えぬ　荒山の　岩かき籠る　伏庵に　我にもあらで　徒らに年は重ねつ　思ひきや　言も通はぬ　國人を　つまとむつびて　手弱女の　纏ひもなれぬ

皮ごろも　袖さしかへて　もろねせむとは

反歌

春の日のひかりもうとき古塚にくさのみどりやいかに殘せる

この長歌は五七調ではあるが、「ひきとゞめたる、駒の上に、しばしかきなす、四つの緒の」の邊は七五調になつてゐる。而して全體の調も反歌も、萬葉の長歌に比して著しく流麗であつて、題材といひ、敍述のしかたといひ、漢詩風の味のあるのは、漢詩に堪能であつた春海としては自然の事かもしれない。長歌は多くは萬葉の摸倣を事としてゐるのに、一歩進んでかく清新な作を示した春海を稱讚しなければなるまい。其の他の彼の萬葉風の長歌に於ても、その反歌は萬葉調でない事が多い。

稻葉集

「稻葉集」は本居大平の家集である。大平はもと宣長の弟子であつたが、後に宣長の養子になつたのである。それは宣長の實子春庭が眼疾のために明を失したからであつた。

大平は伊勢國松坂の人、寶曆六年（皇紀二四一六）に生まれた。春海よりは十歳年少である。父

は稻掛棟隆、大平幼名を常松といふ。明和五年(皇紀二四二八)十三歳の時に、宣長の門に入つて茂穂といふ。二十七歳の頃文字を重穂と改め、更に大平と改めた。通稱を十藏後に十太、二十七歳の時に十介と改め、四十二歳の時には通稱をも大平と改めた。四十三歳の時に、新室を設けて藤垣内と名づけた。四十四歳の時、即ち寛政十一年(皇紀二四五九)二月、本居宣長の養子となつた。春庭が失明したのは寛政七年、春庭三十三歳の時である。享和元年(皇紀二四六一)大平、四十六歳の時に、宣長歿し、翌二年その家督をついで紀州侯に仕へ、以來通名を本居三四右衞門といふ。天保四年(皇紀二四九三)九月十一日、年七十八歳で歿した。著はす所、玉鉾百首解、八十浦の玉、名草の濱果、己未紀行、有馬日記、神樂歌新釋、稻葉集、藤垣内答問錄、倭心三百首、近世三十六人撰などがある。四男があつたが皆夭折したので、門人濱田内遠を嗣とした。門弟千餘人に及ぶ。

稻葉集は文政七年(皇紀二四八四)六十九歳の時に上板されてゐるが、その成つたのは文化十四年(皇紀二四七七)六十二歳の時であつた。稻葉といふ名は、舊姓の稻掛からきてゐる。この集特に題詠と記して、上卷は四季、下卷は戀、雜と部立され、雜のうちに物の名の歌、源氏物語卷の名の歌などがある。大平は宣長と同じく古風、近風ともに詠じて、稻葉集はその近風の家集であ

る。古風の作は別に本居家に傳はる藤垣内集といふものにある。

大平が村田春海に答へた書中に、

大平數ならねど、此のまことの古風に心よせ侍りて、ひとへに此のさまにこそと思ひよらぬにしもあらねど。吾が師の翁(宣長)の、古風は古風と物しながら、又後の世の樣なるをも、常に廣く物せらるゝも、深く考へわたされたる上にて、あるやうあるべしと、猶心ぎたなく從ひて過すになむ。

といつてゐるところを見れば、稻葉集の歌は大平自身の好むところでないといふことにもなり、大平が歌に對しては確固たる信念のなかつたといふ事も出來よう。大平が撰した、近世三十六人撰をみれば、大凡彼の好んだ歌を覗ひ知る事が出來るであらう。その中に、

あふぎ見てから國人も天てらす神の御かげはしるらむものを　　平　宣　長

たがへこし世のひがごとをいせ人ぞ直くたゞしくときさとしける　　田中道麿

といふやうな歌を入れてゐるし、稻葉集をみると、

めに見えぬ梅の匂ひをふく風のいかにしりてかさそひそめけむ　　春

めにも見えず音にもたてぬ春風をありとしらする庭の梅が香　　同

のどかなる風のゆききは青柳のいとによりてぞしるべかりける　　同

といふやうな古今集時代に見るやうな妙に理窟張つた歌が多いところをみると、大平といふ人はかやうな理智的な説明的な風を好んだ人だと思はれる。さうであるとすれば、春海が「再贈稻掛大平書」のうちに、「御答へのをちく味ひ見侍るに、君の御心と我が思ふ所とは、氷とおき火とあひなれ難きが如くに侍れば、」といつてゐる。これは眞淵の「古ぶり」の歌に對する見解の相異についての言ではあるが、たゞちに移して二人の歌境にあてはめることが出來よう。

けふぞ又いづれの山をたづねむとわけぬにまよふ花ざかりかな　春

たが里をまづはとはむの心さへひと方ならぬ花ざかりかな　同

二首とも殆んど同趣向で、昔から云ひふるされた思想であり、且理詰めの歌である。

影見えてしづく落ちそふ池水はそこにも梅の香やにほふらむ　春

風ふけば水なき空にたつた山ちりかふ峯の花のしら波　同

共に美しい景を敍した作ではあるが、前者は下句の水底に梅が香にほふに理窟があり、後者は落花を波との見立ては使ひ古された技巧である。

かはづさへわれ鶯に劣らじとちりしく池の花に鳴くなり　春

過ぎにける春のとなりの垣ねにはまた雪かともまがふ卯の花　夏

かはづの歌の思想もさして面白くなく、卯の花を雪とみるのもふるめかしい比喩である。

夕づゝのそれかと見えてくるゝよりかゆきかくゆきとぶ螢かな　夏

わたつみのこれやかざしの玉ならむ雪もてみがく淡路島山　冬

螢の光を夕づゝとみ、雪の淡路島を海のかざしとみたてたのもわざとらしい巧みである。

おりてきばすゞしからまし清瀧や絲にかけそふ月のころもは　夏

すが〳〵しい景を詠じた作ではあるが、理智的要素が多分に入つてゐる。かやうに理智的であること、技巧的であること、古風な比喩を用ゐること等の事が彼の歌には多い。

春深みあまの苫屋に刈りてほすめもはる〴〵と霞むうなばら　春

の如きも、めもはる〴〵に理智的な技巧があつて讀者の胸底をうつ力が弱い。

ふりはへてわかなつみにとゆく野べの袂ゆたかにみゆる春かな　春

青柳の絲のみどりもあたらしく朱雀の大路春めきにけり　同

朝日山いでしやいつとたどるまでへだても遠くかすむ夕ぐれ　同

雲遠くゆふたつをちの山風にすゞしくきほふ軒の松がえ　夏

秋さむく眞萩ちる野の夕風につゆ分けぬれてをじかなくなり　秋

雨はれてよそなる空をゆく雲もあらしの末にみゆる月かげ　秋
宿遠み猪名のさゝ原わけゆけば衣手さむくさやぐ夕霜　冬

これらが集中にある純客觀風の叙景歌である。

眞葛原おなじうらみを打ちかへしこなたかなたにさわぐ秋風　戀
かすめてもいつかは人にしらせまし春野の草のもゆるおもひを　同

戀歌はかやうに技巧的であること一般の風のやうである。歌人としての大平は千蔭春海にはいはずもがな、宣長よりも劣つてゐるといはねばなるまいと思ふ。

後鈴屋集

後鈴屋集は本居春庭の家集である。春庭は宣長の長男であつて、寶暦十三年(皇紀二四二三)二月三日母方の里で生まれた。この時宣長は三十四歳であつた。童名は宣長の舊名を襲つて健藏といふ。後健亭と改めた。寛政三年(皇紀二四五一)春庭二十九歳の頃に眼を疾んだので、宣長に伴はれて療治のために尾張馬島に赴いた。春庭は元來生まれながら虚弱であつたが、常に父の側にあつて學を修め、父宣長のために圖書を謄寫するのを任とした。その細字は肉眼では見わけられ

ない程であつた。これ眼を病む原因であらうと云はれてゐる。寛政七年の頃遂に失明したので、針術稽古のために上京した。時に年三十三歳であつた。同九年からは針醫を業とした。しかしながら春庭は益々學にはげみ、しかも強記絶倫であつて、一たび記憶した事は終生忘れなかつたといふ程であつたので、詞の八衢、詞の通路の如き、偉大な語學書を著はしたのは、まことに驚くべき事である。紀州家に於ては春庭失明のため御奉公叶ひ難いので、大平に本居家の跡目仰せつけられて、春庭は大平方厄介といふ名義になつた。後大平が和歌山移住の後も、春庭は眼病を申したてて松坂に留まり、「後鈴屋社」を組織して門弟を教へてゐたが、文政十一年（皇紀二四八八）十一月七日六十六歳で歿した。門弟四百十六人。

後鈴屋集は前編後篇とに別れて各三卷づゝ、四季、戀、雜とに分類されてゐる。

音になきておのが涙を青柳の絲に玉ぬく春のうぐひす　前篇　春

うづもれぬにほひをうしと梅が枝にふりこそまされ庭の白雪　同　同

年ふりしこれやかしらの色ならむおいその杜につもる白雪　同　冬

水のおもに枝うちたるゝ青柳や池のかゞみのちりはらふらむ　後篇　春

これらの歌は理智的の傾向の多い歌であるが、かやうな歌はさほど多くはない。多いのは次の

やうな歌である。

日のもとのけさのひかりや天地のうら／＼かすむよもの初春　前篇　春
春くれば空もひとつに淺みどりわか草つゞくむさし野の原　同　同
春さむみうつる日影のかた枝のみ木づたひてなく今朝の鶯　同　同
みなせ川ふもとも遠くふく風もたえ／＼見えてなびく絲柳　同　同
よせかへるみるめはなみの音ばかり霞にのこるうらの夕なぎ　後篇　春
よしの川岩波たかくなく聲はうちもまぎれぬ山ほとゝぎす　前篇　夏
夕風のみだれぬばかりふき過ぎて白玉ゆらぐはちす葉の露　同　同
あつき日のなごりも消えて夕露に光さしさふ月のすゞしさ　後篇　夏
行末は雲もひとつに花すゝきなみたちつゞくむさし野の原　前篇　秋
さびしさはそことも見えず立ちこめてたゞ秋ぎりの夕暮の空　同　同
山の端ははれゆく空の夕日かげさすや岡邊は猶しぐれつゝ　同　冬
よにふるを歎くねざめはかきくれて老の涙もうちしぐれつゝ　後篇　冬
春の野の草のはつかに見てしよりまづ見えそむる我が思ひかな　前篇　戀

しりそめてなか／＼人のまことをも僞りかとぞ疑はれける　前篇　戀

つれもなき人を思ひの涙とてわが心にもまかせざりけり　同　同

音羽川おとはなみだもせく神に見ゆらむものをたぎつ心は　後篇　戀

かやうに叙景の歌も、戀の歌も、すらりとして嫌味のない歌風である。理智的に技巧を加へた歌の多い稻葉集とは正反對である。これらの歌を以てみれば、春庭は語學者として偉大であつたばかりでなく、歌人としての春庭は、太平よりは可成りにすぐれてゐるのは勿論、父宣長も歌才に於ては春庭には及ばないやうである。

解題　終

自撰歌

本居宣長

自撰歌

平　宣長

明和七年花月百首の中に、待花

待ちわびて咲かぬ日頃を恨むかないつとは花の契らざりしを

同　山花盛

雪ふらぬ春も櫻のさかりには木ごとに花のみよし野のやま

同　翫花

たちなるゝ庭の木陰に宿ながらうき世わするゝ花ざかりかな

同　花插頭

一枝をおほふばかりの袖しあればかざせる花は風に任せじ

同　折花

人ならばうしと見ましを櫻花あかぬこゝろにた折りつるかな

同　旅宿花

何となくやどりしかげも闇の夜の明けて驚く花の下ぶし

○待ちわびて　待ちあぐみて。
○いつとは　いつ花咲くと。
○雪ふらぬ春　もう雪の降らなくなつた春。古今集「雪降れば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし」によつた。
○たちなるゝ　馴れ親しんでゐる
○宿ながら　わが家でありながら
○袖しあれば云々　袖があるから頭にさした花は風の散らすまゝには散らすまい。
○人ならば云々　見るだけで物足りない心から花を折つたのを花が人ならば我を厭はしいと見るだらう。

同　谷花

光なき谷にも風はよそならで咲きてとく散る山ざくらかな

同　杜花

咲きまじる花のあたりの梢までうつり香深き衣手の杜

同　行路落花

ゆくさきの花もいかにと急がれてちる木のもとに我もとまらず

同　河上落花

流れゆく花はとまらで川水もあとは青葉のかげぞ殘れる

同　落花多

ちるこそは盛りなりけれ山櫻そらふくかぜも花になりつゝ

同　野分後月

よもすがらあれし野分の雲間にも月はしをれぬ有明の庭

同　岡　月

なみたてる松の梢に葉がくれてたれに忍ぶの岡の月影

同　野亭月

寐覺するすゞのしのやの東雲に露おくそでを月ぞとひける

○光なき云々　日の光のあたらぬ谷でも風の吹くのは餘所事でなく一樣に吹くから。古今集「光なき谷には春もよそなれば咲きてとくちる物思ひもなし」による。
○花のあたりの梢　花のそばの森の木の梢までも。
○衣手の杜　夫木抄に山城とある袖のうつり香の意をかけた。
○ゆくさき云々　途中の花が今散つてゐる、行く先の花も如何にだらうと。
○ちるこそは云々　空吹く風が一面に花になつて梢も空も悉く花であるから散るのが却つて花盛りである。續拾遺「今はとて散るこそ花の盛りなれ梢も庭も同じ匂ひに」
○月はしをれぬ　野分の荒れたあとに草木はしをれてゐるが月はしをれないで有明月として庭にある
○なみたてる　並び立つてゐる。
○忍ぶの岡　夫木抄に陸奥、武藏とある。隱れ忍ぶ意をかけた。
○すゞのしのや　しの竹で葺いた家。

同　瀧月

尋ねてもよるこそは見め木の間より月も落ちくるたきの白絲

同　磯月

うちよせてぬるゝ磯べの眞砂にも殘してかへる波の月影

同　田月

おきわたす田の面の露も深き夜の稻葉におもる秋の月かげ

同　社頭月

分きて又てる月よみの宮ばしらあきのもなかに廻りあふ夜は

同　蕭寺月

鐘の音も雲居にすみてをはつせの山風ふくる秋の夜の月

同　山居月

面影にすてしうき世も戀しくて月にこゝろはすまぬ山さと

安永二年花五十首の內

鶯の聲聞きそむるあしたよりまたるゝ物は櫻なりけり

珍らしき高麗もろこしの花よりもあかぬ色香は櫻なりけり

世のうきはのがれし宿も花さけば又山風の厭はるゝかな

○尋ねても云々　尋ねよつても夜こそ見るべきであらう。瀧水に映つて月も木の間から落ちくる。

○殘して　眞砂に月影を殘して。

○かへる　打ちよせてかへる。

○おきわたす　此方から彼方へ遠くに亙つて露おく。

○稻葉におもる　稻の葉に月影が重くなる、稻葉の露が重くなるので。

○分きて云々　秋の眞中はとりわけて月も照る月讀宮の社頭。月讀宮は伊勢度會郡北中村に鎭座。

○雲居　雲の居る所、大空。

○をはつせ　初瀨。をは接頭語。

○ふくる　夜の更くるに山風吹くを言ひ掛けた。

○面影に云々　捨てしうき世が月見ると面影に見えて今更に戀しくて月見ても心は澄みわたらぬ。

○聲聞きそむる　初めて鶯の初音を聞いたその朝から。

○世のうき　世間の厭はしいことは遁れたわが家でも花咲けば山風が厭はしく思はれる。

あかず見る心のおくは果てもなし吉野の花を分け盡しても

さかぬまの思ひねに見し習ひにはこれもゆめかとたどる初花

さく里はあまたあれども山櫻なほうとまれぬ花のいろかな

奥ふかく尋ねいらずば吉野山花やこゝろを淺しと思はむ

なれて猶いかに別れのうからまし咲きてとくちる櫻ならずば

かぎりある花の日數を思ふには散らねどつらき入相のかね

つらかりし嵐を今はかたみにて靑葉にさわぐ花のおもかげ

雲と見し花はあとなき有明の月にのこれる峯の春風

同年冬百首の中に、里時雨

さそひくる雲よりさきに音たてて風にしぐるゝ里のむら竹

同　行路時雨

くれやすき冬の日とてや旅人に道いそがする時雨なるらむ

同　時雨驚夢

水こゆる物とはなしに時雨して渡りもやらぬ夢のうき橋

同　旅時雨

旅衣やがてそで干す夕日影さすがにはやく霽るゝしぐれは

○吉野の花云々　吉野山をふみ分け入つて花を見盡しても。
○さかぬま云々　花の咲かぬ間は餘り思ひながら寢て、花を夢に見たくせで、現の花も夢か知らぬと思はれた。
○さく里云々　花咲く里は多いが如何に多くても疎々しくはできない花の色よ。古今「時鳥ながなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから」のぬを打消にかへて花の色につゞけた。
○なれて猶云々　櫻が早く散らないならば花に馴れて猶更に散る花の別れがつらいだらう。古今集「光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思ひもなし」
○散らねど云々　入相の鐘にはまだ花が散るまでにはならぬが。新古今「山里の春の夕ぐれ來て見れば入相の鐘に花ぞ散りける」
○つらかりし嵐　咲いた花に對して無情であつた嵐。
○夢のうき橋　夢に見る浮橋。浮橋は筏や船で架け渡した橋。
○夕日影云々　日影さすにさすがを言ひ掛けた。

同　杜寒草

たのみける千枝も枯れぬる冬の霜いかにしのだの森の下草

同　遠千鳥

鳴く聲も浪にまぎれてはるぐ〜と行く方しらぬ浦千鳥かな

同　野徑雪

ふりつもる枯野の道の萩が枝をわけゆく袖は雪の花すり

同　山家雪

道もなくつもる雪にはとはれむと思ふ心もたゆる山里

同　歳暮鐘

けふのみか年もくれぬと聞く音はまして悲しき入相のかね

同　歳暮夢

さめて今思へばくれし一年もともに一夜の手まくらの夢

同　忍戀

我ながらうしや思ふにまけもせで今日までしのぶ心つよさは

同　山家水

明暮にくむとはすれど谷水に猶すみはてぬわがこゝろかな

○いかに云々　森の下草はいかにしたらうか。いかに霜枯れたどらう。信太森は和泉國。

○ふりつもる　雪の降り積る。

○雪の花すり　萩の枯枝に雪が積つて袖は萩の花摺でなく雪の花摺になつた。花摺は萩の花で衣に色を摺り出すこと。

○とはれむと云々　人に訪はれよう尋ね來てほしいと思ふ心も雪のために絕えとまる。

○けふのみか云々　今日の日が暮れるばかりでない今年の年も暮れた。

○さめて今思へば　一夜の夢がさめて考へれば現と思つた一年もまた夢のやうである。

○我ながら云々　戀しさを忍ぶ心の强いのには我ながら厭はしく思はれる。古今「思ふには忍ぶることぞまけにける色には出でじと思ひしものを」又伊勢物語の歌による。

同春旅

八重霞いづこの空をふるさとと眺めもやらむはるの夕暮

同夏旅

五月雨に思ふばかりもゆきやらでいとゞ日數もふる旅路かな

同秋旅

旅ごろも都の秋のわびしさは數にもあらぬそでの夕つゆ

同冬旅

草枕むすばむかたもしら雪のふりつもりたる野路の夕ぐれ

早春　明和四年丁亥

治まれる世はのどかなる初春の空を心のやまともろ人

梅遠薫

玉しまや川上とほきうめが香もながれてにほふさとの春風

霞中月

あかず見て入りぬる玉か佐保姫のかすみの袖に有明の月

名所春曙

又や見む一夜たびねのあけぼのに霞しきつの浦の松原

○いとゞ日數云々　いよ／＼日數も經る旅なるよ。ふるに五月雨の降るを言ひ掛く。

○數にもあらぬ　取り立てていふ價値もない。物の數でもない。旅衣の袖の露はしげく悲しい。

○草枕　旅、むすぶの枕詞。轉じて旅の意。草枕結ぶは旅の宿りをする意。

○しら雪　しらずを言ひ掛く。

○空を心　春の大空のやうな廣いうらゝかな清い心。

○玉しまや　肥前松浦郡、萬葉「玉島のこの川上に家はあれど君をやさしみあらはさずありき」

○あかず見て　見ても見あくことなく見て。

○佐保姫　春の神。

○又や見む　又と見られようか、容易には見られない。

○霞しきつ　霞敷きつに地名の敷津をかけた。敷津は攝津住吉出見濱の西。

暮秋霜

おく霜にしられぬ秋の日かずさへ残りすくなき庭の浅茅生

野遊

思ふどちあそぶ春野の夕霞たつこと知らで今日も暮しつ

惜更衣

ぬぎかへてうつる月日を思ふにも衣は花のなごりのみかは

葵

神山やあふひのかづらとる袖にまづかけそむるけさの朝露

別

旅衣さきだつものは涙にて心もゆかぬけさの別れ路

夜郭公

まつ程はかこちけるかな郭公聞くにつけてもいとゞねぬ夜を

船中雪

島山はつもるも見えずかきくれて友船しろき雪のうなばら

五月雨

かせ山は雲はれやらでいづみ川いつ見しまゝの五月雨の空

○おく霜に云々　庭の浅茅生もだんだん残り少なになり秋の日数も残り少なになつたことが霜を見ても知られる。
○思ふどち　思ひ合ふ親しいどうし。
○たつこと知らで　立ち去ることも忘れて。
○花のなごりのみかは　花見に著た花の名残ばかりでない。
○神山　賀茂の社のある山。
○あふひのかづら　賀茂祭の時蔓草に二葉葵をつけたものを頭などに挿すのでいふ。
○かけそむる　葵の蔓を掛けるに袖に露をかけるを言ひ掛く。
○まつ程　郭公を待つ間は來鳴かぬのを歎き恨んだが、さて聞けばいよ〳〵寝られぬ。
○かきくれて　暗くなつて。
○友船　つれだつて行く舩。
○かせ山　鹿背山。山城相樂郡木津村。
○いづみ川　鹿背山の麓。いつ見しの序詞。

竹裏螢

風かよふさ枝にすがるかげ見えて螢もなびく庭のくれたけ

晩夏涼

明方の露のひかりも秋ちかき月にすゞしき庭の淺茅生

相互疑戀

ちぎりてもかたみに知らぬ下紐の下の心はいつか解くべき

薄

旅人のうちはらひゆく袂さへまねくにまがふ露の小すゝき

荻

ふかぬ間も宿るか風の面影にうは葉かたよる露のをぎ原

秋雨

袖ぬらすこの夕ぐれの心をば空にもしるや秋のむら雨

曉蟲

今はまた遠きちぎりをまつむしの別れになくか曉のこゑ

秋夕

淺茅生やつゆのあはれは色たえて蟲のねになく夕ぐれの空

○螢もなびく　呉竹が風に靡くと共に螢も風になびく。

○かたみに　互に。

○下紐　下袴や下裳の紐。下の心といふ序。互に對者の心の底を知り合はぬ心がいつ打解けられるだらう。戀されるゝ解けるといふ下紐の解けるのはいつであらう。

○まねくにまがふ　薄の穗が人を招いてゐるのにまぎれる。

○ふかぬ間云々　風が吹いてをれば露は散り落ちるだらう、吹かない間も露が宿るのか。

○風の面影云々　風の吹いた面影をのこして荻の上の方の葉が片方に寄つてゐる。

○遠きちぎりをまつ蟲　松蟲に待つを言ひ掛く。

○蟲のねになく　蟲が音に出でて鳴く。

寄薦戀

いつまでか澤邊の眞薦かりにだにあはぬこひぢに袖ぬらすらむ

河月

玉しまやくもりなき夜は水の面に河の名うかぶ秋の月影

名所鹿

明けぬとておのがいるさの山の端に月をも誘ふさを鹿の聲

秋祝

吹く風もをさまれる世の限りなき數にとらばや武藏野のつゆ

初冬

冬來れば霜にかはりておく露はかぎり有りけるむさし野の原

落葉

吹きまよふ四方の嵐の山もとは松よりもちる峯のもみぢ葉

羇中風

ふしわびぬ旅寢の枕吹く風にかりしくさゝのさやの中山

朝霜

ふる里のたよりも知らでいたづらに風の音のみきくの濱松

〇澤邊の眞薦　眞薦は刈るものでかりにだにの序詞とした。假初にさへ逢ふことのできぬ戀路にいつまで泣いて袖ぬらすことだらう。こひぢは戀路に泥を掛けた。

〇玉しま　肥前松浦郡。

〇河の名云々　玉島川の名の玉が水面に浮ぶ。月影が玉と浮ぶ。

〇明けぬとて　夜が明けたと。

〇いるさの山　但馬國出石郡入佐山。入る方の意を言ひ掛けた。

〇數にとらばや　武藏野に限りなく多く置いた露を太平の世の數とりにしよう。太平の世を數へあげる標としよう。

〇霜にかはりて　露は霜とかはつて。

〇松よりも云々　常綠樹の松からも紅葉が散つて來る。

〇ふしわびぬ　寢られないで惱んだ。

〇かりしく　笹の葉を刈つて假寢の牀に敷く。

〇さやの中山　遠江日坂菊川間の坂道。

〇きくの濱　豐前小倉大里間の海濱。

日影さすくずの枯葉にかつとけて露にぞかゝる野べの朝霜

夢

過ぎ來つるむかしの夢はかひもなし行末見せよ夜はの手枕

夕雪

庭の雪にとひこし人のつれもなく跡さへつけて歸る夕暮

曙鶯　明和五年戊亥

物の色はまだほのかなるあけぼのに聲さだかなる庭の鶯

故鄕春雨

ふるさとは袖にもかけていにしへを忍ぶののきの春雨の露

名所花

尋ねてもよし野の奥ははてもなし日かずや花の限りならまし

夕落花

ちるを見て歸る山路は中々にのこるぞ惜しき花のゆふ風

初夜逢戀

あふ事ははつかの月の出でぬ間を賴むばかりの中もはかなし

名所郭公

○過ぎ來つる云々　過去のことを夢に見ても何のかひもない將來のことを夢に見せよ。

○とひこし人　たづね音づれて來た人。

○つれもなく　氣强く情なく。

○跡さへつけて　雪に足跡をつけて。

○聲さだかなる　聲もはつきりした。

○ふるさと　故鄕に春雨の降るを言ひ掛けた。

○袖にもかけて　春雨の露を袖にかけにて心にがけていつもの意を言ひ掛けた。

○のこるぞ惜しき　花の散り殘るのが却つて惜しい。

○はつか　二十日に僅かを言ひ掛く。日が暮れて二十日月が出ない僅かの間を賴みとして逢ふ戀中も賴みない心細いものである。

名にしおはば五月すぐとも時わかず鳴けやときはの山郭公

橘

さだかなる昔の夢はさめし夜の闇のうつゝに匂ふたち花

若菜

雪間なき方やたづねむ皆人のつみてのこさぬ野べの若菜は

名所納涼

夕しほのみつのはま松まちこひし風もたちそふ波の涼しさ

庭荻

聞き馴れてうき秋風の音ながらふかぬも寂しにはの荻原

惜人名戀

逢ひ見てはまづ人の名を思ふかなたつにとがなき我が身ならねば

泉

すゞしさは風はたえ間も音たてていつともわかぬ松の下水

江螢

住の江の岸におふてふ草葉にももゆる螢の戀や忘れぬ

名所擣衣

○名にしおはば云々　ときはといふ名に負ふならば五月過ぎても時期の區別なく鳴けよ山郭公。常磐は洛外太秦村常磐谷。嵯峨に近く郭公の名所。

○さだかなる云々　ありありと明らかな過去の夢がさめた現の闇がりの中に昔の人の袖の香のする花橘が匂ふ。

○雪間なき云々　雪の消えた所は人皆若菜を摘んで殘りないから雪の消えた所のない方をさがさう。

○みつのはま　御津又は三津の地名諸所にある。萬葉集「いざこども早くやまとへ大伴の御津の濱松待ちこひぬらむ」は難波津のうちである。この萬葉の歌を本歌として夕潮の滿つるにかけた。

○たつに云々　かの人にうき名が立つては、名の立つことには自分に罪があるから。

○住の江の云々　古今集「道しらば摘みにも行かむ住のえの岸におふてふ戀わすれ草」

○戀や忘れぬ　もゆる戀は忘れず

生駒山あらしふきそふ秋篠の里は夜寒のころもうつなり

名所千鳥

袖の浦や唐土ぶねも寄らなくにみなとにさわぐむら千鳥かな

恨不言戀

いはずとも見ゆらむ物を山吹の花色ごろもうらみありとは

千鳥

妻こふる聲もたかしの濱松のまつ夜更けぬと千鳥なくらし

山路雪

つもりてはなかく人の跡見えて雪に迷はぬ冬の山路

早梅

まつ春を雪ちる風に吹きまぜて匂ひほのめく梅のはつ花

思出舊女戀

立ちかへりもゆる冬野の思ひ草かれし尾花のもとのこゝろに

寄木戀

あふことはいはほに松のおひもせで戀は歎きの種とこそなれ

山霞

○生駒山　大和生駒郡。河内の國境。
○秋篠　大和生駒郡。新古今「秋しぬの外山の里やしぐるらむ生駒の岳に雲のかゝれる」
○袖の浦　羽前西田川郡。酒田港最上川の河口の海港。
○寄らなくに　寄らぬに。
○いはずとも　言葉に出して言はなくても。
○うらみ　恨みに裏をかけて衣の緣語。
○たかしの濱　和泉國泉北郡高石村の海岸。聲の高しに掛けた。
○つもりて云々　雪が降り積れば却つて人の足跡が見えるので。
○立ちかへりもゆる　再び芽が萠え出る。
○思ひ草　色々の草の異名に使はれるがこゝでは薄の異名。思ひのひがもゆるの緣語。
○かれし　枯るに離れ疎くなる意のかるを言ひ掛けた。

つもりても雪には見えし山の端をさながら埋む春がすみかな

折梅花

朝まだきたをる袂に露おちて匂ひにぬるゝ梅の木のもと

寄雲戀

わすれずば雲のはたてをそれと見よわが物思ふ夕暮のそら

寄蟲戀

きぬ〴〵に又此の暮をまつ蟲も鳴く音ともなふしのゝめの庭

夕露

夕暮は風よりさきと本あらの小萩のつゆに月をこそまて

夏戀

はしゐしてすゞむ習ひの夏の夜は月ともいはで君をこそまて

寄雲戀

まつ人は山の端出づる月ならでくもるにさはる夕暮のそら

水郷春望

世をうみの海士も難波のうら〳〵と霞む春日は心なぐらむ

花如雪

○つもりても　如何に雪が積つても隠れなく見えた山の端をすつかり春霞が埋め隠した。

○雲のはたて　雲の際涯。

○きぬ〴〵　後朝。男女相會ひて別れる翌朝。

○まつ蟲　待つと松蟲と言ひ掛けた。

○しのゝめ　明方。

○本あらの小萩　本の茂つて末がまばらな小萩。古今「宮城野のもとあらの小萩露をおもみ風を待つごと君をこそ待て」

○月ともいはで　月があるにも拘らず。新古今「ほしもあへぬ衣の闇にくらされて月ともいはず迷ひぬるかな」

○世をうみの云々　うみは海に憂をかけ、難波の浦に春日のうららをかけ、心なぐの心なぐさむ意に海波の平らになぐ意をかけた。

ちりつもる庭にもいとふ嵐かなふくあと見ゆる花のしら雪

朝更衣

ぬぎかへて花の匂ひもなつごろもありとや袖にかよふあさ風

寄花戀

頼みける花さへあだにちりぬるか稀なる人をまつとせしまに

旅泊

關守のしらぬうきねの夢路だにしばしはゆるせ須磨の浦風

寄埋木戀

いとはじな逢瀬によらば名取川よし埋木のあらはれぬとも

水邊螢

紀の川にもゆる螢やいもせ山へだつる中の思ひなるらむ

晚夏

川風に近きみそぎのおもかげもかねて涼しき波のしらゆふ

寄藻戀

いとゞしくみだれぞまさる思ひ川なびく川藻のかはる契りに

旅宿鷄

○いとふ嵐云々 散り積つた花に嵐の吹いた跡が見えて嵐の吹くのも厭はしい。

○ぬぎかへて云々 春著てゐた衣を夏衣に著かへたその夏衣に夏も花の匂ひがあるといふのか。

○頼みける云々 逢ふまでは散るまいと頼みに思つた花も徒らに散つたよ。

○稀なる人 たまさかに逢ふ人。

○關守の云々 落ちついて寢られぬ旅寢の夢、その關守の知らぬ夢路にだけでもまあ關を通してくれよ。

○いとはじな 名が露はれても厭ふまいよ、逢へさへすれば。逢瀬は逢ふ機會の意に川の瀬をかけた

○名取川 陸前。うき名を取るにかけた。名取川の水土に埋れた木が顯はれるにたとへた。古今「名取川瀬々の埋木あらはればいかにせむとか逢ひ見そめけむ」

○紀の川云々 紀伊伊都郡の妹山と背山を中を隔てて紀の川が流れてゐる、螢が身を焦してゐるのも妹背の隔たる思ひであらう。もゆると思ひのひと縁語。妹背山は大和吉野にもあつて吉野川を隔てて相對してゐる。

○近きみそぎ 夏も終り方で近づいて來た六月晦日の名越の禊。

○波のしらゆふ 白波が禊に用ゐる白いゆふのやうである。

○いとゞしく云々 川藻が水に靡いてかはるやうに契りがかはるのでいよ／＼思ひ亂れる。

旅まくら夢のなごりの鶏の音も都に似たるあかつきの空

朝萩

なごりあれやかりねの野べの萩の露おき行く袖も匂ふ旅人

竹内元之妻なくなりけるにつかはしける八月

初鴈のたよりまたても言傳はなき人こふるねにやなくらむ

年内立春

たつ春のはやせの氷とけにけり日數はのこる冬のやま川

寄筵戀

まつ程の月日重ねてあやむしろをになりぬれど人は問ひこず

夢談故人

とひかはす言葉の末もなき人をみしやしばしの手枕のゆめ

松雪

ふればかつ拂ふとすれど吹く風もつもるに弱る松の白雪

鏡山歳暮

これやこの明日のいはひの鏡山としのこなたにむかふ白雪

雪朝聞法

〇夢のなごりの鶏の音　鶏の聲で夢がさめたその聲。

〇なごり云々　袖が萩の色香に匂ふので萩に寢た名殘あることよ。起き行くに露置きをかけた。

〇竹内元之　伊勢松坂の人。鈴門。

〇初鴈の云々　鴈は人の音信を傳へるが、折角初鴈の音信を待ちつけても死んで言傳のない人を戀しさうに鳴いて來る事だらう。

〇たつ春云々　氷の解ける立春に早くもなつた。それで舊年の日數はまだ殘つてゐる。

〇あやむしろ云々　綾織りの筵がそこなはれて緒ばかりになつたけれど。重ねては筵の緣語。萬葉「獨りぬるとこも朽ちめやも綾席緒になるまでに君をし待たむ」

〇これやこの　これはあの鏡山であるよ。鏡山は近江。明日の祝は元朝の祝をいふ。元朝の歳暮から元朝の祝に鏡餅を飾るのでいふ。

此の暮にきゆともよしや法の道聞きてまよはぬ今朝の白ゆき

萬民祝

民やすく世をわたらひの五十鈴川そのみなかみの深き恵みに

春の始に　明和七年庚寅

からやまと春の言葉のはつ花もとり〴〵にほふ梅の下かぜ

早春梅

梅が枝の花の下ひも解けそめて雪のしづくも匂ふ春風

忍戀

戀ひ死なむ名こそ惜しけれ身にかへて此の世の程は忍びはつとも

盛花

さきつゞくさくらの中に花ならぬ松めづらしきみ吉野の山

柳露

分けゆけばこぼれぬ露も枝ながら袂にかゝる青柳のかげ

雨中花

山ざくら露吹きちらすあらしかな花はさかりの春雨のそら

山家暮春

○此の暮云々　今朝佛法を聞いて今晩死んでもまゝよ。

○世をわたらひ　世を渡るに伊勢度會を掛けた。五十鈴川は御裳濯川宇治内宮の南を流る。

○解けそめて　花の下紐の解けて花の咲きそめるに雪の解けるを掛けた。

○身にかへて云々　此の世に生きて居る限りは一身を犠牲にして忍びおほせるにしても。

○花ならぬ松云々　吉野山の滿山櫻の中に花でない松が珍らしく面白い。

○枝ながら云々　露が柳の枝についたまゝで袂にかゝる。

花ちりて人目絶えにし山里に行く春さへやとまらざるらむ

里卯花

たをりゆく里のかきねは卯の花のゆきにも人の跡つけてけり

船中郭公

時鳥いそ山もとに聞きすてておのれ過ぎゆくあけのそほ舟

五月雨晴

玉ざゝのよの間にはれてめづらしく朝日まちとる梅雨の露

杜五月雨

物思ふたが衣手の杜の露はらひもあへぬ五月雨の頃

久戀

人心あだなるものの年をへてなどつれなさの變らざるらむ

庭荻

聞きなれてうき秋風もふかぬまはいとゞ寂しき庭の荻原

寄竹戀

河竹のひとよ逢ひ見しなごりよりおきふしさらぬ人の面影

なよ竹のうき一ふしのうらみより長きよかけし中も絶えにき

○人目絶えにし云々　花咲いてゐる間は人も來たが、花散つて人の往來も絕えてしまつた山里では、暮れゆく春までも留らないのだらう。

○卯の花のゆき　卯の花の白いのを雪にたとへた。

○いそ山もと　礒邊にある山の麓

○あけのそほ舟　赭舟、昔塗料に用ゐた赭ぬりの舟即ち赤く塗つた舟。あけのは赤ので重ねて云つた。萬葉「旅にして物こひしきに山下のあけのそほ舟沖に漕ぐ見ゆ」

○玉ざゝ　篠の美稱。よの間、篠の節にかけて夜の間。

○朝日まちとる　朝日の出るのを待ちうける露。

○衣手の杜　夫木抄に山城とある。

○人心云々　人の心がはかなく變り易いものであるのに如何してその無情なことが變らないだらう。

○河竹の　よ(節と節との間)といふ緣語、竹のよに一夜をかけた。

○おきふし云々　臥しても起きてもかの人の面影が去らぬ。臥しに節をいひかけて河竹の緣語。

○なよ竹の　ふしの枕詞。うき一ふしはつらいひとつのこと。

○長きよ云々　長き世に互つて契つた中。世となよ竹の緣語よ(節)を言掛けた。

夕蟲

秋の野はくれゆく花の下葉よりなくも千ぐさの蟲のこゑ／＼

寄衣戀

いかにねむくるゝ夜毎にかへしても夢もまどほの麻のさ衣

待郭公

有明の月まち出でてつれなさのいとゞ知らるゝ山ほとゝぎす

若菜

雪のみぞ分くる袖にもふりつみて若菜まれなる春日野の原

月前筏

筏組むまさ木の綱も早瀬川はやく流るゝ月やとゞめぬ

橋霜

柴人にしばしおくれて朝霜はやゝとけ渡る峯のかけ橋

遠山雪

東路や雲居に見ゆるひとむらを何ぞと問へば不士の白ゆき

春曙

櫻さく外山はしらむ春の夜を尾上にのこすありあけの月

○いかにねむ　戀しき人を夢にでも見たいが、どう寢たらばよいか。

○夜毎に云々　毎晩麻の衣をかへして寢ても夢も間遠である。古今「いとせめてこひしき時はうばたまの夜の衣をかへしてぞぬる」新古今「山賤の麻のさ衣筬をあらみあはで月日やすぎふけるぬ庵」によつて麻の衣の目の荒いのを間遠とかけた。

○有明の云々　郭公の鳴くのを待つて待ち明かして有明月が出るやうになつたのでいよ／＼郭公の同情のないのが思ひ知られた。

○春日野　奈良東大寺の南。

○筏組む　筏を組み合はせるまさきのかづらの綱でも、瀬の早い川を浮んで流れる月を留めないだらう。後撰集「照る月をまさきの綱によりかけてあかず別るゝ人をつながむ」

○柴人云々　早曉に出かける柴刈る人に後れて、峯の棧橋の霜が解ける。

○外山　奥山に對して端の山。

○春の夜を云々　峯の上にはまだ夜が明けないで有明月が夜を殘す

秋夕

いとふべき心はしらぬながめにもうき世をあきの夕暮の空

月

ながむれば空に心のうつるかな曇らぬ月や鏡なるらむ

雨後月

ふる雨は跡なくはれて庭はたゞつきの光にぬるゝ淺茅生

擣衣

淺茅生やたが秋風を身にしめてひとり夜寒の衣うつらむ

關路雪

あしがらや空は晴れ行く山風につもる雪ちる竹の下道

野月

吹きみだる露のゆかりに月影もあだの大野のよはの秋かぜ

逢不會戀

秋風も猶やたのまむ眞葛原ありしにかへる契りなりせば

遠國別

とまる身も心づくしのいきの松まつほどへなむ今日の別れ路

○いとふべき云々　憂き世だからこそ世を厭ひ離れるべき心持は知らないながら。
○うき世をあき　憂き世を飽きに秋の夕暮と掛けた。
○空に心の　大空に自分の心が映つて見えるよ。
○淺茅生　淺くまばらに茅の生えてゐる所。
○たが秋風を　秋風をしみ〴〵と身にしめて夜寒の衣擣つのは誰であらうか。
○あしがら　相模足柄郡足柄關。
○竹の下　足柄峠を駿河に下ること一里の驛。駿東郡足柄村。
○あだの大野　大和宇智郡阿陀。萬葉「眞葛原なびく秋風吹くごとに阿陀の大ぬの萩が花散る」露が吹き亂れるので露に靡く月影も何のかひなく照らしてゐるとあだ野に徒をかけた。
○秋風も　心變りに喩へる秋風もなほ賴みに思はう、葛の葉が秋風に飜るそのかへるといふ昔にかへる契りならば。
○いきの松　筑前早良郡姪濱の西の松原。心盡くしに筑紫をかけ、松から待つほどと續けた。

初戀

思ひ入る戀のさが野の露ごともわがまだ知らぬ袖のあやしさ

旅泊月

見し月もそれかあらぬか浦山の面かげかはる波のよる〳〵

かぢ枕みやこ戀ひずば猶いかに明石の月やさやけからまし

年の始によめる　明和八年辛卯

音羽川こほりながれて立ちかへる春の心も見ゆる瀧つせ

雨中鶯

鶯の聲なぬらしそ春雨にきつゝなくなる梅のはな笠

戀心

鳥の音に袖のわかれをゆるしても心はゆかぬあふ坂のせき

待花

山櫻心のまつの木の間より面影にほふ春のやまの端

花交松

花かとよ松の梢はそのまゝにたちもかくさぬ峯の白雲

寄枕雜

○思ひ入る　深く思ひこむ。

○戀のさが野　戀路のならはしといふさがから嵯峨野とつゞけた。

○見し月云々　浦山の姿が色々かはるにつけて、昔て眺めた月影も毎夜かはつてその月であるか或は別の月であるか。波のよる〳〵は波の寄る〳〵に夜々をかけた。

○かぢ枕　船中に寢ること。船旅。

○みやこ戀ひずは　都戀しく思ふので涙に曇つてさへ明石の月は美しいに、都戀ひずは如何に淸く爽かであらう。

○鶯の聲云々　梅の花笠よ春雨の降る中へ鶯が來て鳴く聲を濡らすなよ。きつゝに來つゝと笠を著つつをかけた。古今集「青柳を片絲によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」

○心のまつの木の間　櫻咲くのを人の心が待つと、松の木の間から櫻の面影が色に映えて見える。

○花かと云々　花と松と交つてゐる松の梢は立ち隱さぬ峯の白雲はそれでは花かとうなづかれたよ。

慕ひても誰にとはまし曉の枕も知らぬ夢のゆくへを

遲日

賤のめがいそぐ手わざもあさのをの長き春日に心うむらし

早苗

かりはてぬかたへは麥の秋風にいつしかそよぐ小田の若苗

夕花

見すてては歸らぬ庭の木のもとも暮れ行く色を花の別れぢ

瀧下山吹

落ちたぎつ中にもよどむかげ見えてふちせともなき岸の山吹

瀧下藤

岩が根の松よりすゑにさしいでて瀧のいとにもかゝる藤波

山吹

よし野川さくらのかげも山吹にうつりにけりな春の日數は

暮春藤

夏にしもかゝらむよりは藤の花はひまつはれて春を止めよ

早秋

○慕ひても云々　曉に見た夢のゆくへは枕も知らぬ、夢の跡を見たく思つても誰に問はうか問ふ人もない。
○あさのを　麻絲。長きの序。
○うむ　倦むに績むをかけて麻のその緣語とした。
○麥の秋風　麥の刈入れ時の風。麥の收穫は初夏で稻の苗代の時節である。
○暮れ行く色云々　日が暮れるのを限りとして花に別れる。
○落ちたぎつ云々　瀧が落ちてわきかへる中にも滯り湛へる樣が見えて。
○藤波　藤の花の靡き動くのを波にたとへていふ。
○よし野川云々　吉野川に櫻の影が映つてゐたが、春の日數が移りゆくと共に櫻の影は山吹とかはつた。
○夏にしも云々　藤の花が夏にかけて咲くよりは春に纒はりついて暮れゆく春を留めよ。かゝらむは藤蔓が懸つて花咲くからいふ。

身にしみて秋はきにけりうたゝねにまたれしまゝの袖の朝風

蓮

散るもをし吹くも涼しき夕風に思ひ亂るゝはちす葉のつゆ

夏　月

久かたの月の桂もなつは又しげりそへばや影の涼しき

初五月雨

昨日けふまだ川水はまさねども雲ふかくなるさみだれの空

遠思秋萩

おもひやることよひの月に袖ぬれて誰みやぎ野の秋萩の露

月前鹿

妻とへば月もすむ野のはぎの露あだなる色に鹿ぞ鳴くなる

戀　涙

年ふればなみだの色もかはりけり人の契りをうらみけるまに

社頭紅葉

をさまれど秋は立田の神垣にもみぢのためも風やいのらむ

寄橋戀

○うたゝね云々　夏の暑い時の假寢に涼風が待たれた、その朝風が涼しく吹いて身にしみて秋が來た

○散るも云々　夕風が吹いて蓮葉の露の散るのも惜しいし夕風の吹くのも涼しい。

○久かたの　月の枕詞。月の中に桂の木があると傳へいふ。○しげりそへばや　茂り加はるからであらうか月影が涼しい。古今集「久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればや照りまさるらむ」

○月に袖ぬれ　月を眺めて遠くを思ふと涙ぐましく袖がぬれる。○みやぎ野　陸前萩の名所。宮城野に見をかけて誰が宮城野の遠くに居てこの月を見るだらうか。

○をさまれど　風は靜まつてゐるが、なほ紅葉の散らぬやう風を立田の神に祈らう。龍田神社は大和生駒郡。風神を祀る。紅葉の名所。

うつゝには絶えて久しきあふこともかけてまたるゝ夢の浮橋

遠村夕立

遠方やさとのけぶりはかきくれて雲立ちのぼる夕だちの空

初雁

あきの露なれしとこ世の別れより干さでやきぬる衣かりがね

戀夢

きえねたゞ見し面影もうつり香もあとなき夢の手枕の露

旅曉

やどりしてわれも一夜の松がねをわかるゝ峯の横雲のそら

霧

あれはてし野べのあはれは立ちこめてたゞ夕霧の深草の里

戀命

かはらじと頼む契りもいかならむたれも命はあす知らぬよに

冬月

軒の松あらしはたゆむ梢よりひかりも寒き冬の夜のつき

曉梅　安永元年壬辰

○うつゝ云々　現では逢ふことも久しく絶えてゐるその逢ふことを○かけて　心にかけて。橋の縁語。

○あきの露云々　雁が吾等の知らぬ遠い世界に馴れてゐた、そこを別れて來る時に涙の露に濡れた衣を乾さないで來たのか、此處は露が多い。

○きえね云々　手枕に露と結んだ夢に徒らに見ただけの面影も移り香もはかなく消えて涙の露だけ殘つてるが露よ消えてしまへ。

○やどりして云々　松の根に一夜の宿りをして曉に立ち別れると曉の横雲も峯に別れゆく。新古今「春の夜の夢の浮橋とだえして峯にわかるゝ横雲の空」

○夕霧云々　夕方の霧が深く立ちこめてゐる深草の里。深草は山城紀伊郡深草。

○あらしはたゆむ梢　松を吹いてゐた嵐はゆるみ絶えかゝつた梢から。

夢かとよ寐ざめの袖の春風もほのかにすぎしまどの梅が香

旅

おきふしは露よりしげくふる里の心にかゝる草枕かな

落花

春と見しはなの梢も風たちて又みよし野はゆきのふるさと

旅宿梅

枕にも袖にも一夜はなの香をかりねの野べの梅の下風

袖にふけみやこの夢も花の香にかへてひと夜は梅の下かぜ

寄山戀

あけぬればとまらぬ山の名ぞつらきこしは嬉しき夜半の契りも

殘花

夏山にほのかにのころ春風のにほひあやしき雲の一むら

未聞郭公

有明のつきにもなかで日數のみ空にすぎゆく山ほとゝぎす

待郭公

足びきの山より出づる聲まつと人にもいひて待つほとゝぎす

○おきふし云々　旅の生活、草に露が降るよりもひどく故郷が心にかかる。おき、しげくふる、かゝる、草等は露の緣語。草枕は旅の枕詞、轉じて旅の意。
○みよし野は云々　吉野は花の雪が降る里である。故里をいひ掛けた。

○みやこの夢　旅寢して都を夢に見てゐるが、其の夢を一夜は花の香にかへて袖に吹けよ梅の下風よ。

○とまらぬ山の名　夜半の契りをしても夜が明ければ山の名の越してゆくといふのがつらい。同じ名でもこし(來た)といふのは嬉しいが。
○夏山に云々　夏山にかすかに春風の色香が不思議にも殘つて一むらの白雲と櫻が咲き殘つてゐる。
○有明の云々　有明月の空にも郭公は鳴かないで待つかひもなく徒らに日數はかり過ぎゆく。
○足びきの　山の枕詞。

朝時雨

さしいづる朝日の山は空晴れて宇治の河べをゆく時雨かな

河夕立

夕立の雲にきほひて涼しさのますげかたよるそがの川風

松下納涼

ゆふ風になるをの松の下すゞみ涼しきそでに浪もかけつゝ

野納涼

夏の日もゆふべ涼しくかげろふの小野のあきつに秋や通へる

月前露

山の端はまだ遠き夜もいくたびか嵐に惜しむ露の月かげ

九月十三夜

長月のこよひの月もあるものをたぐひなかばと思ひけるかな

待夜深戀

末の松まつ夜のつきも影ふけぬかたしく袖をこゆる涙に

里時雨

ふゆの夜は伏見の夢もさだめなし絕えず時雨のすがはらの里

〇朝日の山　山城宇治郡。菟道稚郎子の御墓がある。朝日のさし出る朝に朝日山の邊は晴れて宇治川の邊を時雨が降つてゆく。
〇雲にきほひて　涼しさが雲に競うて增す。
〇ますげ　眞菅に增すをかけた。菅が風に吹き靡かされて片寄る。宗我川は一名久米川、大和眞菅村を流れる。萬葉「眞菅よし宗我の川原に鳴く千鳥まなし我がせこわがこふらくは」
〇なるを　攝津武庫郡鳴尾。
〇ゆふべ涼しくかげろふ　夕方涼しく日がかげになつて。
〇小野のあきつ　野に飛んでゐる蜻蛉。かげろふ(蜻蛉の古名)と緣語。
〇長月云々　九月十三夜の今夜のかかるよい月もあるのに、此の月を見ない前には八月中秋をたぐひないよい月と思つてゐたことよ。
〇末の松　待つといふ爲の序。
〇かたしく袖　片方の袖を敷いてさびしく獨り寢る。古今「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪も越えなむ」によつて末の松山といひ、こゆる涙に越ゆる浪をかけた。
〇伏見　臥して見るに地名大和添下郡伏見をかけた。時雨がするに地名菅原をかけた。大和國伏見に菅原寺がある。古今「いざここに我が世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし」

懷舊

年をへて我が水ぐきも若き世のかたみと見ればば袖ぬらしけり

忘戀

跡もなく人はわするゝ草の名を思ひたがへてなに忍ぶらむ

寄夢戀

逢坂をいそぐ夢路にわれながらねられぬ戀や夜半のせき守

春月　安永二年癸巳

空の海や霞のみをを行く船のほのかに見ゆる春の夜の月

梅香入閨

風絶えて月もおぼろの閨の戸にそれかとばかり匂ふ梅が香

水郷柳

みなせ川ふくとしもなき春風もありてゆくせになびく青柳

歸鴈契秋

又來むとたのむの秋の夕ぎりもおもかげ遠く霞むかりがね

春曙

月影も見しはるの夜の夢ばかり霞にのこるあけぼのの空

○年をへて云々　若い時書いた筆跡を年經て今見れば、水莖は筆又は筆跡。ぬらすは水莖の水の緣語。

○逢坂　山城山科から近江大津に通ずる坂。關があつた。戀路の逢ふにかけた。夜半のせき守は夢路をせくにかけた。

○空の海云々　空や霞が海のやうになつてゐる中を漕いでゆく舟のやうに春の片われ月が見える。萬葉「天の海に雲の波立ち月の舟星の林にこぎかくる見ゆ」

○みなせ川　水の無い川、水があらはれて見えぬ川。但し題に水郷とあり下句ゆくせとあるから攝津國山崎近くの水無瀨といふ所をいふ。古今集「みなせ川ありて行く水なくはこそ云々」を取つて春風もありてと云つた。

○又來む云々　歸鴈が秋に再び來るぞ頼みにさせる田の面の秋の夕霧の樣子を彿にして春霞が遠くたなびく中へ霞んで鴈が歸つてゆく

○月影云々　春夜に見た夢ほどかすかに月影が霞の中に殘つて夜が明けた。

山花遲

花の雲はやたちかはれ白雪はきえていくかのみよし野の山

河春月

名取川月の桂もあらはれず春はかすみの底のうもれ木

躑躅

つれなしと見えつる松の下つゝじ下の思ひもいろに出でけり

思高人戀

いかにせむ磯邊の松の枝たかみおよばぬ波の思ひかけても

寄花戀

うき中をよそへて見ればちる花に涙ももろき庭のはるかぜ

夕立

程ちかきのきの玉水すゞしさは袖におちくる夕立の空

雨中歸戀

ふる雨にぬれぬ小笠をとるかひもなみだわりなき別れ路の袖

山家秋夕

山風ののきの松ふくさびしさは我が身ひとつの秋のゆふぐれ

○花の雲云々　吉野山の白雪は消えて幾日かになる花の白雲は早くこれに立ちかはれよ。風雅集「ちくま川春ゆく水は澄みにけり消えていくかの峯の白雪」
○名取川　陸前。うもれ木は水土の中に埋もれた木。又陸前地名の產物埋木。

○つれなしと　無情冷淡だと。

○枝たかみ　枝が高いので。
○波の云々　波が思ひかけてもとゞかぬのを如何にせむ。

○うき中云々　二人のはかないつらい戀中を物にたとへて見れば。

○のきの玉水　軒端の雨垂。
○ふる雨云々　笠をとるかひもなく降る雨に濡れた。笠をとるかひもなく涙がわきまへもなくむやみに流れるよぎなき別れ。
○我が身ひとつの秋　山風が軒端の松を吹く寂しさは世間の人と違つて自分ひとりの秋である。古今「月見ればちゞに物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど」

寄源氏物語戀

思ひやれかへりし浪に袖ぬれてひとり明石のよはの寐覺を

水鳥驚筏

杣川やくだすいかだの水馴棹みなれても猶さわぐ水鳥

寄寒草戀

葛かづら風のたよりも絶えねたゞくる夜半ならでかるゝ冬野に

學者惜年

あつめても光はそはでまどの雪かひなくつもる年の暮かな

夜梅　安永三年甲午

花の色も鳥もかすみもくれしよの闇に春ある軒の梅が香

寄風戀

契りおきてこぬ人さそふしるべにもやらばや庭の梅の下風

舊巣鶯

春きてもなれしふる巣をふるさじと立ちかへりなく谷の鶯

故鄕若草

茂りなばいとゞやつれむ故鄕もしばし春めく庭の若草

○思ひやれ云々　光源氏が明石の配所で明石上に契つたが、召還され琴を形見に殘して京に歸つた。別れの悲歎は甚しかつた。かへりし浪は歸洛した源氏。明石に夜を明かすを掛けた。源氏明石卷「獨寢は君も知らぬやつれ〴〵と思ひ明石の浦さびしさを」

○杣川　杣山から伐り出した材木を流す川。

○水馴棹云々　水に馴れ渉る棹を見馴れても。

○絶えね　絕えよ。

○くる夜半云々　來る夜でなくて離れ去る冬野に。來(くる)に繰るをかけ、離(かる)に枯るをかけて共に葛かづらの緣語。鈴屋集「くる夜はなくてかるゝ冬野に」とあり。

○しるべ云々　誘ふ案内としても梅の下風をやらう。

○ふるさじ云々　疎み隔てまいとて。忘れまいと。

○茂りなば云々　故鄕も當分は若草で春めくが、この若草が茂つたらばいよ〳〵ひどく見苦しくなるだらう。古今「君しのぶ草にやつるゝ故鄕はまつ蟲の音ぞ悲しかりける」

曉歸雁

秋までと思へばつらしあかつきの空だのめせぬかりの別れも

澤雲雀

立つ空もかすむ野澤のうもれ水聲はうもれぬ夕雲雀かな

河上落花

ちりてだにしばしとまらぬ山川の流れぞ花のうきせなりける

待郭公

かくばかりまつ夜になかば時鳥いかにかひある初音ならまし

池螢

うき草にすがる螢もさそはれて風にたゞよふ庭の池水

山家楝

山里はたゞ青葉のみしげりあふをりにあふちの花も珍らし

杣五月雨

おしなべて淺瀬もみをの杣川や宮木よどまぬさみだれの頃

名所關

もる人も絶えてなき世にふはの關とゞまる物は名のみなりけり

○空だのめ　あてにならぬ事を頼みに思はせること。鴈が春北へ歸る秋は確かに來ること確實な期待のかりの別れでも秋までと思ふと待遠しくつらい。
○立つ空云々　雲雀の立ち上る空
○うもれ水　物のかげに隱れた水
○うきせ　憂き折。苦しい時。浮瀨をかけた。
○かくばかり云々　これ程甚しく待つてゐる夜に時鳥が鳴くならば如何に鳴くかひのある初音であるだらう。
○さそはれて　螢が浮草と共に風に誘はれて。
○青葉云々　青葉ばかり茂る折に逢ふ樗の花も他の花のない時とて珍らしい。あふちに逢ふをかけた。
○おしなべて云々　杣川の淺瀬も澪も一樣に舟の往來する水路となつて宮木が滯らずよく運ばれゆく杣川は杣木を流し運ぶ川。宮木は宮殿造營の用材。
○もる人　關を守る人。關守も全く居なくなつた今の世には不破の關は名ばかり殘る。留まるは關の緣語。不破の關址は美濃關原村字松尾。

夜橘

たちばなの陰さへ見えて軒端もる月のにほひも深き夜の空

蚊遣火

吹きいるゝ軒のけぶりのいぶせさに風もやつるゝ賤が蚊遣火

馬上戀

のる駒のつまづく橋もなく〳〵ぞまたれぬ宿は尋ねわびぬる

駒迎

ひくこまのかげも木の間に見えそめて月におくれぬ相坂の山

故郷橘

にほひかは見るにつけても故郷はむかし戀しき軒のたち花

疑戀

重ねても夜半のさ衣うらなくは猶たのまれぬ人のかねごと

旅泊夢

まれに見しみやこの夢も中々になごりうきねのあけ方の空

いかにせむ頼む夢路も浪風にみやこへだつる浦のうきねを

忍戀

○いぶせさ　煙のくすぶつて厭はしいことに賤が軒のきたなく厭はしいのをかけた。

○風もやつるゝ　風がほそり衰へることに賤の姿の見苦しくなるをかけた。

○駒迎　毎年八月十五日諸國の牧場から貢する馬を左馬寮の使が逢坂關まで出迎へること。

○月におくれぬ　八月十五夜の月に遲れず逢坂山で迎へあふ。

○にほひかは　花橘の匂ひばかりであらうか匂ひばかりでない。花橘を見るにつけても故鄕の軒の橘に古戀しく思はれる。古今「さ月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」

○重ねても云々　如何に重ね〳〵云ふもあてにならぬかの人の約束よ。重ね、さ衣、裏と緣語。うらなくは心の奧底なく打解けての意うらに占の意をかけた。

○中々に云々　却つて夢の名殘がつらく悲しい。

○うきね　船中に寢泊ること、心落ちつかず眠りづらいのを言ひ掛けた。

たをりても見せばやいかで忍ぶ山心のおくにそめし紅葉を

悔戀

今もなほ袖こそぬるれ悔みてもかへらぬ水の淺きちぎりに

名所泊

しき島のやまとにもあらぬ心地していとゞ憂寝のから泊かな

禁中雪

來む春も近きまもりのさくら花おもかげ見せて積る白雪

山家雪

とはるべき道絶えはてし白雪にこむ春をのみまつのしたいほ

雪中鶯　安永四年乙未

うぐひすは梅の花笠ぬひおきて雪のふる日もきつゝ鳴くなり

雪中會友

圓居してにはの梢も言の葉もはなをあらそふ今日の白ゆき

初戀

戀すればかかるものともまだ知らで涙あやしむ夜半の衣手

忍戀

○たをりても云々　いかで手折りても見せばや。忍ぶ山は岩代、福島市の北。

○しき島の　やまとの枕詞。
○憂寝　浮寝の言ひ掛け。
○から泊　筑前絲島郡韓泊。萬葉「から泊能許の浦浪たたぬ日はあれども家に戀ひぬ日はなし」
○來む春云々　春の來るのも近づいてきた左近の櫻に花の俤を見せて白雪が積つた。左近櫻はその培養が左近衛府の受持であつた。近きまもりは近衛。
○春をのみ云々　春の來るのをばかり待つ松の下の庵。

○梅の花笠　鶯につれて梅の花を笠にたとへていふ。古今「青柳を片絲によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」

○圓居　まとゐ。集まり會ふこと。
○梢も云々　梢には雪の花、圓居の人々は歌に詞藻の花を競ふ。

○かかるもの云々　戀すればかく物思ひ惱ましいものとも知らないので夜半に涙を不思議に思つた。

忍ぶれど袖の上にも人目にもかゝりやすきは涙なりけり

納涼忘夏

秋かとよ風まつ陰のうたゝねもさめて驚く袖のすゞしさ

翫花

いかにせむ花にうかるゝこのごろの心のはてよ嵐ふきたば

月前花

花の色は高嶺のかすみ深き夜の月にもしるき山櫻かな

古寺花

をはつせや花よりひゞく山風の鐘のにほひもしらむ夜の空

山花

みよし野やこれもうき世の色ながらえもいとはれぬ山櫻かな

戀月

こひ死なむ月もこの世の思出に一夜は見せよ涙くもらで

旅

いるかたのみやこの山の面影もつきに戀しきあづま路の空

故郷春

○忍ぶれど云々　戀を隱さうとするけれど、涙が人の目につきやすい。涙が袖にかゝると人目にかゝると掛けた。
○秋かと云々　風を待つ松陰にうたゝ寢したのがさめて袖涼しいので、秋かしらぬとあやしみ驚かれた。
○心のはて云々　嵐が吹いて花が散つてしまへば此の頃の心持も終りになる。
○花の色云々　花の色は月光にもはつきりとして見える山櫻。霞深きと深き夜と言ひ掛け。
○をはつせ　大和磯城郡初瀨。長谷寺がある。をは接頭語。鐘のにほひは鐘の音の餘韻と鐘の音を吹き送る山風に含む花の香。
○これも　山櫻も。うき世は厭ひ離れるが山櫻はうき世の色ながら厭ひ離れることができない。
○こひ死なむ　戀ひ焦れて我は死ぬだらう。死んで後此の世の思出さしてせめて一夜は月よ涙に曇らず清い月光を見せてくれよ。
○いるかた云々　東路に旅して月の入る西の都の山の面影も戀しい

志賀の浦や今もたはるゝはな園のこてふよ夢かありし都は

花

春の日の長きを花の心にて散ることしらぬ櫻ともがな

祈戀

あはれとも思はば神もしるべせよいさめぬ道にまよふ此の身を

田家水

松陰に水の音さへ寂しさのいつともわかぬ小山田のいほ

船納涼

風そよぐ堀江のをぶね行きかへりおなじ蘆邊に涼む夏の夜

夏の夜はあけのそほ船山もとの涼しさあかで漕ぎめぐるまに

野夕立

夕だちにぬれし袂のかわくまで猶もいく野の道ぞはるけき

時雨

いにしへをふるき軒端の忍ぶ夜はもらぬ袂も打ちしぐれつゝ

公有障戀

よひ〳〵にわがまつ人よ月ならば雲の上には障りあらじを

○志賀の浦云々　天智天皇近江滋賀大津の宮に都された時花園があつた。夫木「鳰の海の霞吹きゆく春風に道もいくへの志賀の花園」○今も云々　今も花園に戯れてゐる胡蝶よ、昔の大津の宮の都は夢であつたか。

○櫻ともがな　散ることを知らぬ櫻とあれよと希望する。

○いさめぬ道　神のいさめぬ道即ち戀の道。伊勢物語「こひしくは來ても見よかし千早振神のいさむる道ならなくに」

○水の音云々　水の音までが寂しい、その寂しさは水の音と共に何時といふ區別もない絶間がない。

○堀江　掘り開いた川。特に難波江の堀江。

○夏の夜云々　涼しさに飽かないで漕ぎめぐるまに夜が明けた。あけは赤に明を言ひ掛け、そほ船は朱で赤く塗つた舟。

○いく野　生野に行く野をかけた生野は丹波國天田郡生野。

○いにしへを云々　昔を思ふと涙に袖がぬれる。古を忍ぶと軒端の忍草をかけた。もらぬは軒端に雨が漏らぬの意。

○雲の上云々　月ならば雲の上に障りはあるまい。雲の上即ち禁中の公用に障りがあるとはいかに。

山家荻

松の音はなれしいほりの軒端にもをぎの葉かなし秋の夕風

おひしげる山下荻を軒端にてねられむものか夜半の秋風

述懷淚

なげくにもあまる淚のふることに文見る程も袖はぬれけり

江月

あたひなき玉江の夜はのけしきかな秋の半ばの月をやどして

池月

いとゞしく劍の池の草葉にはあきの霜かと見ゆる月かげ

久戀

いくたびか年なみこゆる濱びさし久しく成りぬ袖はかわかで

海舟

いる船の蘆のさはりもなには潟波のうへまで道ひろき世は

故鄕露

ひまもなく軒のしのぶの露おちて曇らぬ雨のふる里の空

月前蟲

○松の音云々　松風の音は聞き馴れてゐるわが家でも、夕の秋風に吹かれる荻の葉の音は悲しい。
○山下荻云々　山下の荻の風音を軒端に聞いては寢られない。

○ふること　淚が降るに古ことをかけた。

○あたひなき　價に積ることの出來ない貴い。玉にかけて夜半のけしきのすぐれたのをいふ。玉江は越前。新古今「夏刈の蘆のかりねも哀れなり玉江の月の明方の空」
○劍の池　應神天皇の時に作られた池。大和。萬葉「みはかしをつるぎの池の蓮葉に」
○年なみこゆる　一年々々と年を經る。なみは竝に波をかけ越ゆる濱の緣語。
○濱びさし　海濱にある家の廂。伊勢物語「浪間より見ゆる小島の濱廂久しくなりぬ君に逢ひ見で」
○さはりもなには潟　障りも無しと難波潟とを言ひ掛けた。蘆と難波潟と緣語。
○ふる里の空　雨の降ると故鄕と言ひ掛け。

○雪と見る云々　月影の雪のやうな野を行けば雪の中の足跡のやうに野一面に鳴く蟲の音にも跡がつくだらう。
○潮くまぬ云々　潮くまぬ蜑と天つみ空と掛けた。潮汲む蜑は袖がしをれる雁がねも翼しをれるとつづけた。

○松と月云々　松と月は時雨の様子もなくそ知らぬ顔付で。

○なまめきし云々　女郎花が若々しく花やかに美しかつた秋は昔と過ぎ去つて今は頭に白髪の霜を戴く老嫗となつた野邊は寂しい。
○みるめ　海藻の一種海松に見る目をかけた。
○ひるま　汐の干る間に晝間をかけた。波の寄るに夜をかけた。
○神あそび　神樂。
○圓居して　集まり會つて。
○とるや　神樂の時採物を持つたいふ。採物は榊幣杖など。御室は神の社殿。橘守部は御森と云つた。ときはかきはは常磐堅磐で永久不變。かくし遊ばむのしは强め辭。古今集「神垣のみむろの山の榊葉は神のみまへに茂りあひにけり」

雪と見る野べの月影分けゆかば蟲の音にさへ跡やつきなむ

海邊雁

潮くまぬあまつみ空の雁がねもつばさしをるゝ浦の夕霧

遠郷時雨

をち方の里のながめやしぐるらむ障らぬ月のよその村雲

曉時雨

山の端に松と月とはつれなくて時雨すぎ行く有明の空

寒草帶霜

なまめきし秋はむかしの女郎花霜をいたゞく野べの寂しさ

霜おもき冬の枯野のあさかぜにいづる日影を招くをすゝき

毎晝逢戀

いつとてもみるめは汐のひるまにて假にも波のよるはたのめず

夜霰

音はして軒端のあられちる玉の光も見えずくらき夜のそら

屏風の繪に神あそびする所

圓居してとるや御室(みむろ)の榊葉のときはかきはにかくし遊ばむ

関路鶯　安永五年丙申

うぐひすの聲もかすみをもる春はゆく人とまる逢坂のせき

曙梅

にほひくる梅のありかも見えそめて春風しらむ曙のそら

野霞

雪消えて青むと見えし野べの色を又しもうづむ春がすみかな

山家松

軒の松むかしの友といふばかりわが山ずみの年も經にけり

初花

さくら花かつ咲きそめてこゝかしこかすみ色づくみ吉野の山

須賀直見がいときなき子をなくなしたるによみてやりける

風わたる柳を見てもみどりごの露と消えにし春やかなしき

石見國濱田松平周防守殿の臣岡田氏の母の八十賀に松を題にてよみて遣はしし

岩におふる松を例に契りおかば千世の春にもあはざらめやは

湖春月

○ゆく人とまる　逢坂の關ではゆく人がとまる、鶯の聲が霞をもれ出る春には人が足を停める。とまるは關の縁語。

○須賀直見　伊勢松坂の人。本居宣長の門人。安永五年殁。

○みどりご　嬰兒。みどりは柳の縁語。

○岡田氏　鈴屋門人錄によれば石見松平周防守の家老岡田賴母。本居宣長の門人。

○岩に云々　岩上に生えてゐる松を手本として母の齡を契りおいたならば千世の春に逢はないことがあるものか。

すはの海や氷はとけてはるの夜は霞の上をわたる月かげ

立春風

のどけさは袖にしられてから衣きのふにかはる春のはつ風

待郭公

つれなきも初音ののちは時鳥まつにたのみのありあけの空

朝花

もろともに誘ひやせむと散る露もこゝろにかゝる花の朝風

出づる日のひかりに匂ふ遠山のかすみや花のさかりなるらむ

夜梅

春のよのかすめる月に風たえて香さへおぼろの庭の梅が枝

五月雨

夏草のつゆのはれまもなくてのみ日数ふる野の五月雨の空

名所郭公

片岡の杜のしづくをなみだにて鳴く音もしげきほとゝぎすかな

菖蒲露

しづが屋におはぬ雫の匂ひかな葺けるあやめの露おつる頃

○すはの海　諏訪湖。
○氷はとけて云々　冬の間は湖の鏡と張りつめた氷に月影が映つてゐたが、春になつて氷が解けて霞の上を月影がわたる。
○袖にしられて　春風が袖を吹くので長閑さも知られて。
○から衣　著るの枕詞。きのふのきにかけた。

○もろともに　花も露も一緒に風が誘つて散らしはしないかと。
○出づる日の云々　朝日の光に色うるはしく映える山の霞は花の盛りであらう。
○夏草の云々　毎日夏草に雨の露がはれる間がなくて日数経る野。経るに五月雨の降るをかけた。
○片岡の杜　山城賀茂片岡の森。郭公の名所。新古今「過ぎにけり信太の森の郭公絶えぬ雫を袖に残して」
○しづが屋云々　賤しいみすぼらしい家にふさはしからぬ軒端の雫のよい香よ。
○葺けるあやめ　五月の節供に軒端に葺き差した菖蒲。

軒にふくあやめも見えぬ五月闇そでにあやしく匂ふ露かな

軒橘

昔たれとばかりだにも後忍べわが袖ふるゝ軒のたちばな

來不留戀

夕しほのさすがに絶えず立ちよれどとまるよはなき浦のあだ波

旅宿夢

いつしかと故郷人やまつがねの枕の夢もことかたは見ず

螢

夕やみに忍ぶの露もあらはれて軒端すゞしく飛ぶほたるかな

寄原戀

かわくまも涙の露のをざゝ原一夜分け見し袖の名残に

逢ひ見ては人のうきにもまくず原心づよくはえしもうらみず

子をなくなして盆する人のもとへ七月十五日に

なか〱に心のやみのいかならむなき玉まつる夜半の燈火

夕萩

やどりとて夕になれば秋風のいとゞ吹きよるにはの萩原

○あやめも見えぬ　何ともわけの分らぬ。
○昔たれ云々　軒の橘よ、後になつてから昔誰が袖觸れたとだけでも今我が袖を觸れたことを思ひ出せよ。古今「さ月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」同「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」
○夕しほの云々　夕汐の高くなつてくるのを、さすがと云つてさすがと言ひ掛けた。絶えず立ち寄つては來るが留る夜はない、あだ波は徒らに立つ波、移り易い誠意のないのに喩へた。
○いつしか云々　何時歸るだらうと旅先の自分を故郷の人が待つてゐるだらう、旅寢の夢も故郷より外の處は夢見ない。
○忍ぶの露　軒端にある葱といふ草の露も螢の光であらはれて。夕闇の中に忍んでゐた螢があらはれた意をかけた。
○乾くまも涙　涙になしをかけた
○逢ひ見て云々　つれない人を恨みながらもその人に逢ひ見ると、その無情なつらさに負けて、心強くも恨むこともようできない。眞葛と裏見（恨）と縁語。
○盆する　孟蘭盆の佛事をする。
○心のやみ　子を思つて悲しみ迷ふこと。

山家橋

いほ見えて渡す朽木のひとつ橋かゝる谷にも人はすみけり

八月十五夜中里常道家の會に

なかばとて空行く影もまとかたや波路さやけき秋の夜の月

故郷月

ふるさとは月の影さへやつれけり見る人からのあきの涙に

湊月

みなと入りの蘆わけ小舟たどらじな雲もさはらぬ月の光に

九月十三夜横瀧といふ山寺へ月見にまかりて

のぼりきて見る山寺も月の名も高きこよひの影のさやけさ

其の夜は其の山寺にとまりける鹿の音をもきかばやと思ひてまつに夜ふくるまで更になかざりければ

谷の水まつのあらしに今ひとつきかでさびしきさを鹿の聲

鹿のねをまつは軒端に聲たててさそひがほなる夜半の秋風

夜いたく更けてしばしかりねするに目もあはねば

ねられずよ言の葉にのみ聞きなれてなれぬ枕の峯のまつ風

○いほ　庵。かゝるはかくの如き意に橋の架るをかけた。

○なかばとて　八月仲秋とて。まさかたは伊勢國多氣郡的方の浦に空行く月影のまどか(圓きこと)をかけた。

○月の影云々　見る人のせゐで涙のために月の影までが痩せ衰へた

○みなと入り　舟が港に入ること

○蘆わけ小舟　蘆の生ひ茂つた中をわけゆく小舟。

○たどらじな　路に迷つて尋ねあるくことはあるまい。

○谷の水云々　谷の水の音松風の音いづれも聞えるが今一つ聞かないので物足りなく寂しいのは鹿の聲である。

○軒端に聲たてて　鹿の聲が聞えぬので秋風が軒端に音して鹿の聲を誘ふやうに見える。

名所擣衣

戸もさゝでうちこそあかせ照る月の光をたのむ里のきぬたは

萩上露

結びおきてはなの色香をかりそめの契りもふかき秋萩のつゆ

さきしより色にうつりておく露もあだの大野のあき萩の花

立春水

春立ちてむかふ硯の水はあれど淺き心はとゞこほりつゝ

閨時雨

閨のとのすきまの風に雲よりもともしびさわぐさよ時雨かな

瀧落葉

石(いは)ばしる瀧のこなたに吹きこして家づとゆるす風のもみぢ葉

冬旅

いとゞしく寒き霜夜はふる郷の夢も枯野の草まくらかな

寄霜戀

露分けし昔はゆめかその人もかれし淺茅のにはの夕霜

須賀直見身まかりて十一月八日遍昭寺にてとぶらひの會しけるに題を探

○戸もさゝで　戸も鎖さないで。

○うちこそあかせ　砧を打つて夜を明かす。

○たのむ　光を賴むに田の面の里をかけた。田面は名所として夫木抄に武藏國とす。伊勢物語「み吉野の田面の鴈もひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる」によつて地名となつた。み吉野は武藏入間郡川越。

○色にうつりて　露が萩の花の色に映つて露もわからず徒らとなつた。徒(あだ)に阿陀をかけた。阿陀は大和宇智郡。

○淺き心　淺き、とゞこほりは水の緣語。

○石ばしる　たきの枕詞。

○吹きこして　紅葉を瀧をこしてこなたへ吹きよこす。

○いとゞしく寒き　いよ〳〵ひどく寒い。

○夢も枯野　枯野にかゝる(離、遠ざかり絕える意)をかけた。

○露分けし昔　茂る草葉の露をふみわけた昔の戀は夢であらうか。

○人もかれし　その人も離れ絕えまばらに生えた茅も枯れた。

○須賀直見　伊勢松坂の人、鈴屋門人。安永五年歿。

りて寄獸懐舊

かきおきし跡はふするのとことはに心みだるゝ形見なりけり

寄弓戀

あづさ弓いかにいひても恨みても心強さはせむかたぞなき

まこともたゞにはいかでしらま弓引きても見ばや人の心を

逢ひ見ればうらみもよわる梓弓嬉しき方にこゝろひかれて

寄鴛戀

涎の池のつがひを見ても朝戸出に別れををしのうらやまれつゝ

松上雪

いつはとはわかぬ緑もうづもれて下に春をやまつの白ゆき

歳暮述懐

老木にも雪の花さく年のくれ我はよはひのつもりのみして

山家鶯

やま里の軒のつらゝは春も見ず涙やいかにうぐひすの聲

惜歳暮

暮れゆくをとしといふ名も今日こそは惜しきにつけて思ひ知りぬれ

○かきおきし跡　筆跡。
○ふするのとことは　伏猪の牀にとことは(常住不變、永久)をかけた。
○あづさ弓　いの枕詞。いかにとつゞけた。
○心強さ　いかに云ひ寄り恨んでもかの戀人の無情な心の頑固なのは仕方がない。
○まことゝも云々　わが戀を眞實からの戀だとはひと通りでは彼の人は如何して知るだらう。白檀弓は引くの枕詞。
○逢ひ見れば云々　逢つて見れば嬉しいのに心引かれて今までつれなさを恨んだ心も弱く挫ける。梓弓は引くの枕詞。心引かれにかゝる。
○つがひ　鴛鴦の雌雄の番ひ。
○朝戸出云々　朝の外出に別れて出るが名殘惜しいにつけて鴛鴦が羨まれながら出かける。鴛鴦に惜しを言ひ掛けた。
○いつは云々　いつはと云つて取りわけ區別しないで常に緑である松の緑も白雪に埋まつて白雪の下に春を待つてゐるだらう。
○我は云々　我は花咲くこともなく齡が積るばかりである。
○涙やいかに云々　古今集「雪のうちに春は來にけり鶯の氷れる涙いまやとくらむ」
○暮れゆく云々　今日限りで暮れてゆく日を年と名づけてゐるのが今日こそしみ〴〵わかつた。

早春雲　安永六年丁酉

吹きすてて風はをさまる初春の空にのこれる雲ものどけし

梅の花盛りに長谷川常雄のもとより「蓬生のあれたる宿も心あらばとへかし梅の花の盛りを」といひおこせけるかへし

咲く梅のをり過さずば中々に花のたよりといひやなされむ

色も香もしらぬ我が身をかこつかな心あらばと思ふにつけても

雪中鶯

鶯もいづれを梅と分きかねて木毎の雪の花になくなり

木殘雪

春寒みこほりもとけぬ谷風にのこれるゆきや木々のはつ花

月前梅

梢ふくかぜの絶間かかすむ夜の月よりうすき庭の梅が香

春月

霞さへ何へだつらむ見るほどもなきだにあるを春の夜の月

海邊霞

こぎいでて明石のとより見渡せばやまと島根もかすむ春かな

○長谷川常雄　伊勢松坂の人、鈴屋門人。初中里氏。通稱武右衛門。
○蓬生　蓬の生ひ茂つて荒れた所
○色も香も　古今集「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」
○鶯も云々　どれが梅だと區別もできないで。古今集「雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし」
○春寒み　春になつてもまだ餘寒で寒いによつて。
○梢ふく云々　梅の梢を吹き來る風の絶間であらうか、朧月よりも淡い梅が香がほのかに匂ひ來るのは。
○霞さへ云々　春の月が細くて見るかげもないだけでさへも幽なのに、まだ其の上に霞までが、何だといつて隔てるのだらうか。
○こぎいでて云々　萬葉「あまさかる鄙の長路ゆこひくれば明石の戸より倭島見ゆ」を新古今に「長路を漕ぎくれば」となほしたものによつた。
○明石のと　明石の瀬門。

古宅見花

霞かは花の色香にかくされて春はあれたる宿としもなし

初戀

いかにせむ思ひそめても初紅葉よにはづかしのもりの梢を

餘寒氷

立つ波をさそひがほなる柳にもこほりつれなき春の川みづ

水邊柳

枝ながら露もみだれて浮き沈むたましま川の青柳のかげ

河春月

こと問はむ春とてつきの都鳥川の名しらぬかげやいかにと

梅薫枕

通ひきてわがねざめをや待ちつらむ枕に殘る夜半の梅が香

山春曙

有明の月はかすみてくら橋の山の端しらむ春のあけぼの

月前花

ふくもうし吹かねば月のかすむ夜を思ひわづらふ花の春風

○霞か　住居、すみかを霞にかけた。花の色や香に住居は隱されこ古い荒れた家といふこともない。みな花の家になつてゐる。

○はづかしのもり　羽束師の森は山城乙訓郡羽束郷。

○立つ波云々　波を誘ひさうな樣子に風に靡いてゐる柳に對して春の川水はそ知らぬふりで冷淡に氷りついてゐる。

○枝ながら　柳の枝と一しよに露の玉も亂れて浮いたり沈んだりしてゐる玉島川。玉島川は松浦川ともいひ肥前松浦郡。玉は露の緣語。

○こと問はむ云々　都鳥よ一寸尋ねたい、月の隅田川の花の陰はどうであらうか。春だから月が川の名のすむ澄みわたることを知らず朧に霞むといふので月が川の名知らぬ陰と云つた。伊勢物語「名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」

○月はかすみてくら橋の山　倉橋山の山端に有明月は霞んで暗くなつてゐる山の端。倉橋山は丹後與謝郡。

○ふくもうし云々　春風が吹けば花が散るから風の吹くのも厭はしい、吹かなければ月が霞む。

歸鴈

かへる鴈なれしとこよも忘れなむ一春とまれ花のみやこに

春がすみいそぎな立ちそ歸る鴈こし路はいまだ雪も消えじを

雨後花

しをれける花の春雨ふき晴れてもとのさかりになす嵐かな

行路見花

明日よりはかかる櫻の木のもとはよきてぞゆかむ春日くれけり

山田羽根氏某の父は二月の頃旅にて身まかりにけるよし聞きてよみてつかはしける

鴈のゆく雲路を見ても故里に人はかへらぬ春やかなしき

惜更衣

ぬぎかふるならひ恨めし心から春をへだつる今日の衣よ

尋郭公

郭公山彦ならば尋ねわびよぶに答ふる聲はせましを

寐覺郭公

寐覺めずば聞かましものか時鳥おいもうれしき夜半の一こゑ

○なれし云々　お前の住み馴れた遠い〳〵國も忘れてくれよ。
○いそぎな立ちそ　急いで霞よ立つた。歸る鴈が昨年來た越路には雪も消えまいよ。古今「春霞立つを見捨てゆく鴈は花なき里にすみやならへる」
○春雨ふき晴れて　嵐が春雨を吹いて晴らして更に空に吹き散らして花の盛りとする。
○明日より云々　この櫻を眺めて春日が暮れた、明日からはこんな櫻の下は上けて行かう。
○山田云々　伊勢山田の羽根某。
○鴈のゆく云々　大空を鴈の翔りゆく路。春になれば鴈が去年來たもとの所へ歸りゆくのを見るにつけても。
○郭公云々　時鳥を聞かうと尋ね歩いて、尋ねあぐんで時鳥を呼んだが山彦ならば答へる聲がするだらうに、ちつともその聲が聞えぬ。
○寐覺めずば云々　寐覺したかつたらば時鳥の聲は聞かれようものか決して聞かれない。その時鳥を夜半に一聲聞いたのも老いの寐覺のおかげだ。

祈難逢戀

はつせ川祈るめぐみはかけもせでうき波にのみぬるゝ袖かな

籬山吹

こえられぬ山とや見らむ山吹の花のまがきに春のとまれる

野遊

道すがら草の若葉になづさひてさもこゝろゆく春の野べかな

月前郭公

同じくは今一こゑもいらぬまに鳴けや月夜の山ほとゝぎす

曉盧橘

猶いかにむかししのべと橘の老の寐覺ににほひきぬらむ

雨後苗代

雨晴れて民の心もゆく水のあまる田毎にさ苗とるなり

翫花

いづくにもまちける程か雨はれてけふは田毎にさ苗とるなり

瀧下螢

ちることをなれもわすれよ山櫻われは家路も思はぬものを

○はつせ川云々　かくまでに心をこめて初瀬の御佛に戀を祈つたがその祈つた佛の惠みは袖にかけもしないでつらい悲しい涙で袖が濡れる。
○山吹の云々　山吹の花の咲いてゐる籬に春色が停まつてゐる。春がこの花の籬を越えて行かれぬ山と思つてゐるであらうか。
○なづさひて　馴れまつはつて。
○同じくは云々　月前に郭公が鳴いたゞ、月が沒しないうちに同じやうにもう一聲鳴いてくれよ。
○猶いかに云々　花橘の香に昔の人の袖の香を忍ぶといふに、なほいかに昔忍べといふので橘が匂つて來るのであらうか。盧橘はくろたちばな、その果實は金柑。
○心もゆく水　心ゆくをゆく水と言ひかけた。
○なれ　汝。山櫻に對していふ。
○われは家路云々　われは家へ歸ることを忘れてゐるものを。

涙なき思ひもいづれたかけむと瀧にくらべて飛ぶほたるかな

遠夕立

峯過ぐるくもにかげろふ夕立のよそめ涼しき山本のさと

野外旅宿

草枕あらしのひまも野べの露たのみはかなき故郷の夢

七夕絲

星合の空にたむけのいとせめて引きもとゞめよ明日の別れを

浦初秋

秋來ぬとめにはみぬめの浦風も今朝よりかはる波の音かな

社頭花

立田山かぜまもるてふ神垣に咲ける櫻の花はたのもし

夜荻

さよ更けてきけば夕のさびしさは數にもあらぬ荻の上風

海上曉月

こぎいでて波のまくらに有明の月も一夜のわかれ路のそら

霧中鴈

○涙なき思ひ云々　螢が涙もなく物思ひの火に焦れてゐるその思ひと瀧と何れが高いだらうと。

○峯過ぐる云々　峯を通り過ぎる雲のために麓の里が陰になつて、夕立が遠くよそに降つてゐるのを見るも涼しい麓の里。

○草枕　旅寢。

○あらしのひま　嵐の吹きやんだ僅かのひま。

○星合　七夕の夜牽牛織女の二星が天の川で相會すること。

○空にたむけのいと　七夕に織女星に物を供へて女子が手藝の熟達を祈るに五色の絲を手向ける。願ひの絲をいとせめてと言ひ掛けた。

○明日の別れ　七夕の夜が明日になれば二星が別れる別れを引きとゞめよ。ひきは絲の縁語。

○秋來ぬと云々　古今集「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」によつた。みぬめの浦は攝津武庫郡都賀濱都賀野の邊。

○立田山云々　龍田神社は大和伊駒郡立野にあつて風神を祭る。

○さよ更けて云々　深夜の荻の上吹く風の寂しさに比べれば宵の寂しさは物の數でもない。

○波のまくら　船の中に旅寢すること。

みよし野の川の面におつる鷹がねもよるかたたどる秋の夕霧

花鏡

盛りなる花のかげ見る水かゞみ日数ばかりはうつらずもがな

ちりかゝるはてこそうけれ川水に日数もうつるはなの鏡は

浦月

海士の子がみぬめは浦の名のみして月におきゐる波のよる〳〵

聞蟲聲増戀

せめて猶まつてふ蟲も弱るよに我が鳴きまさるねをやかさまし

絶戀

うきながら忘れもやらぬ面影や絶えにしなかの形見なるらむ

里擣衣

深草や鶉の聲もうき夜半をいかにきけとか衣うつらむ

月前虫

蟲のねかいづれに落つるあはれとも涙わかれぬ秋の夜の月

庭月

見るまゝに庭の淺茅のよはの露そでにもかゝる月のかげかな

○花鏡　水に花の影が映るのを鏡によそへていふ。

○日數はかり云々　日數だけは花の鏡に映らずにありたい。いつまでも花の鏡がながめたい。

○みぬめは浦の名のみして　見ぬこいふのは敏馬こいふ浦の名ばかりであつて。

○せめて猶　切になほさらに戀人を待つに、待つこいふ語の松蟲の鳴く聲も弱るが、自分の待つて泣きまさる聲を松蟲に貸さうか。

○うきながら云々　絶えたのでつらい思ひではありながら忘れられぬかの戀人の面影は絶えたあこのせめての形見であらう。

○深草や云々　千載集「夕されば野邊の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里」深草の里に鶉の鳴く聲も身にしみて悲しくつらいのに、衣擣つ砧の音のするのは如何に聞けこいふのか。

○蟲のね云々　蟲の音の哀れさか月の光の哀れかいづれのために落ちる涙か區別がつかぬ。

嶺紅葉

白雲のたえまいろこきたつた山みねの梢やもみぢしぬらむ

庭山吹

とへかしな櫻の花の雪消えてまたも春なる庭の山ぶき

浦千鳥

妹が島飽かぬわかれになく千鳥月や形見の浦のあけぼの

稀戀

いつまでぞ嵐に殘るもみぢ葉のまれになり行く中のちぎりよ

古人の名どもを題にて小野小町

今もなほながめせしまの面影は露けき花に見ゆることちして

紫式部

言の葉にそめずばいかでむらさきの深き心の色はみるべき

ことの葉はたぐひなき名の立田姫いかに染めける錦なるらむ

被制主君戀

神よりも君のいさむる通ひ路よ齋垣なりせば越えもせましを

池水鳥

○白雲の云々　龍田山の峯の梢はすべて紅葉しただらう、山にかゝる白雲の絶間々々に色濃き紅葉が見える。

○櫻の花の雪消えて　花が雪の如くに地に散つたのが無くなつて。

○またも春なる　雪が消えて花が咲いて春になつたやうに落花の雪が消えて山吹の花が咲いて再び春になつてゐる庭。

○妹が島云々　萬葉集「刈藻舟沖こぎ來らし妹が島形見の浦にたつかけぞ見ゆ」妹が島形見の浦は紀伊海草郡。

○いつまで云々　嵐に吹かれ吹かれて散つて殘るもみぢ葉の稀なやうに逢ふことも稀になつてゆく中のはかない契りはいつまでであるか。

○ながめせしまの　古今集小野小町「花の色はうつりにけりな徒らにわが身世にふるながめせしまに」

○言の葉に云々　源氏物語にその深き心を寫し出さなかつたならば

○神よりも云々　伊勢物語「戀しくは來ても見よかし千早振神のいさむる道ならなくに」

○齋垣なりせば云々　伊勢物語「千早振神のい垣も越えぬべし大宮人の見まくほしさに」

池水にをしやわぶらむおく霜をはらふ羽風も同じさむさに

落葉

時雨には散りての後もふるたびに濡れて色そふ庭のもみぢ葉

遠村雪

けぶりさへあまぎる空に埋もれて雪にくれゆく遠方の里

關路雪

ふりつもる雪の光にはかられて關路のとりや夜半に鳴くらむ

絶戀

いける世に早く絶えなむ契りともしらで命を思ひけるかな

待郭公

一聲もきくとはなしに郭公まつにねぬ夜の數ぞつもれる

市歳暮

ちりぢりに夕ぐれかへる市人のわかれぞ今日はとしの別れ路

たれも皆今日は暮れ行く年の數身にかひそへてかへる市人

見家思出戀

今は又たれをまつらむ松ばかり見しよのまゝのやどの夕暮

○時雨には云々　紅葉が散り落ちて後も時雨の降る毎にぬれて色が增す。梢にある時に時雨で紅葉が色ましたやうに。

○あまぎる空　かすみ曇る空。

○雪の光にはかられて　雪の光に欺かれて。雪の光にだまされて。夜明けと思ひちがへて。

○いける世に云々　生きて居る此の世のうちにかく果敢なく絶えてしまふ戀の契りとも知らないで、命をかけてと思つたことよ。

○まつにねぬ夜云々　寢ないで郭公を待つた夜が幾夜も數重なつた

○としの別れ路　年のくれ。

○今は又云々　戀路の絕えはてた今となつては又誰を待つてゐるであらう、我を待つてゐた人の家には松だけが、その當時の通りで人の心のかはり果てた家に日が暮れてゐる。

早春水　安永七年戊戌

春風のたよりにおのれ聲たてゝうぐひすさそふ谷川のみづ

野鶯

春くればあをむ雪間の初草に初音おくれぬ野べのうぐひす

河邊霞

きぶね川瀬々にくだけてちる波も春はかすみの袖の白玉

落花如雪

花かとよ降りくる風も寒からではるの山路につもるしら雪

寄月戀

こぬものと今はかごとの月をのみくるゝ夜毎にまつもはかなし

野郭公

時鳥忍ぶにあまるはつねかもまだきにきなく小野のしの原

鳴きすてゝ紫野ゆきしめ野ゆきところ定めぬほとゝぎすかな

五月山すそ野の草をわけゆけば空にもしげく鳴くほとゝぎす

水郷春月

春がすみはれせぬ月に河かぜをこよひはまつや宇治の橋姫

○春風の云々　春風が春の音信をしたのにつれて谷川も自分の聲を立てて鶯に鳴いて出よと誘つてゐる。

○春くれば云々　春の來ると雪の間々の初草が青く芽ばえる、それに後れないで野に鶯が初音を鳴く

○きぶね川　山城愛宕郡鞍馬村字貴船邊の溪流合して鞍馬川となるものをいふか。

○降りくる風云々　風に吹かれて花が白雪と降り來るその風も寒くなく。

○こぬもの云々　今となつては月さへ見れば、戀人の來ぬのをそれにかこつけていふ月ばかりを待ちつけて、待つ人の來ぬのも賴みないことよ。

○忍ぶにあまる云々　餘り時節に早いので時鳥が聲を隱さうとしてゐるが隱しきれないで初音に鳴くことよ。

○鳴きすてて云々　萬葉集「茜さす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖ふる」によつた。紫野は紫といふ草の生えてゐる野、標野は天子の御獵のために占めおかれた禁野。

○五月山　佐伯山ともいふ。攝津池田町附近秦野山の西。山の名に郭公の時節の五月をかけた。

○まつや宇治の橋姫　古今集「さ筵に衣かた敷き今宵もやわれを待つらむ宇治の橋姫」によつた。

○いこま山　大和河内の境伊駒山
○秋篠　大和伊駒郡。伊駒山の東。
○里の名忍ぶ云々　秋篠といふ里の名の秋を思ひ出させる春の月。
○春ふかみ　春が深いので。春霞なので。
○夕風に云々　古今集「さ月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」によつた。
○わが戀云々　山深く隠れてゐる岩に生えた松は知られずに年を經た、わが戀は岩根松の如く人に云はずにこそ居るが、忍ぶ戀は年經た。岩根松いはねばと語を疊み重ねた。
○神路山　伊勢度會郡宮内の神苑に臨みて茂つた山。
○八十かへり云々　本朝文粹「一松花之色十廻」によつて松の花が八十回も花咲くまでと祝つた。
○中里常國　伊勢松坂の人、鈴門。
○おもひにこもる　喪に籠る。

渡郭公

なきすてて今一聲はいづみ川とほきわたりの山ほとゝぎす

名所春月

いこま山かすみはれせで秋篠や里の名忍ぶ春の夜の月

里山吹

春ふかみまぢかき里の山吹を霞も八重にたちへだてつゝ

盧橘薫風

夕風にわれながらわが袖の香も懐かしきまでかをる立花

忍戀

わが戀はみ山隠れの岩根松いはねばこそあれ年もへにけり

中里昌運八十賀

神路山百枝のまつのもゝとせを君八十かへり花のさくまで

中里常國父のおもひにこもりゐけるに三月の末つかたよみて遣はしける

かの父の早く櫻を庭にうゑて春毎にめでけることを思ひて

うゑおきし木陰やいかに大方も花のなごりのたゞならぬ頃

首夏

はる霞あけし一夜をへだてにてはれ行く空に夏は來にけり

夏草露

しげりては朝夕露のすゞしさにかりも拂はぬにはの夏草

朝早苗

くれかけて植ゑし昨日のはつ苗にけさは露見る小田の涼しさ

朝まだき山田のさなへ日は長し露のひるまを待ちてとらなむ

夏野

なつかしみ一夜ねし野の面影もつゆなつ草の疎ましきまで

江五月雨

なにはがたみぎはの蘆の末葉までなみにいり江の五月雨の頃

琴

寐覺してあはれなる音にきく人も涙かきやる夜半の玉琴

橋螢

とびわたる螢の影のあかぬ夜もあくるわびしきくめの岩橋

水邊螢

もえつゝもおのが影みる涼しさに螢も水のうへやゆくらむ

○はる霞云々　霞が立つてゐた春に今朝明けた昨夜を境にして霞もはれて夏になつた。

○かりも拂はぬ　夏草を刈りはらふこともしない。

○くれかけて　晝から夕暮にかけて。昨日夕暮までかゝつて田植した早苗に今朝露がおいてゐる田の涼しいことよ。

○日は長し　長しは苗の緣語。

○露のひるま　露の乾る間に晝間をいひかけた。

○なつかしみ云々　萬葉集「春の野に菫つみにと來しわれぞ野をなつかしみ一夜ねにける」によつた。

○なみにいり江　波に入るを入江といひかけた。五月雨に入江の水も增して蘆の末葉まで波に入つた。

○寐覺して云々　寐覺して琴の音を聞く人もその音の哀れなのに涙をかきやる。かきやるは琴をかき鳴らす意。

○螢の影のあかぬ夜　螢の影が面白いので見あかぬ夜。

○あくるわびしき　拾遺集「岩橋の夜の契りも絕えぬべし明くるわびしき葛城の神」によつた。

蚊遣火

さし出づる月にけぶりもうき物を蚊をのみ厭ふしつがしわざよ

宿ごとのけぶり立ちあふ蚊遣火に一むら曇るさとのゆふ暮

夏筵

夜をかさね軒端涼しきうたゝねに此の頃うとき牀のさむしろ

初秋夜

限りあれば同じ暑さに暮るゝ夜も月はさすがに初秋の空

秋の來て涼しき風も三日月のまだはつかなるよひ〳〵の空

深夜荻

ふくる夜の庭の秋風音たかし月はかたぶく軒の下をぎ

鏡

萬世にくにの光はます鏡かけてさづけし神の御すゑと

枕露

秋とてやおかぬ枕もぬるゝまで露のあはれのふかき夜の空

契戀

いつはりにならひても又契るかな誠もたえてなき世ならねば

○さし出づる云々　山の端を出る月を眺めるに煙が立つのも厭はしいのに蚊を嫌ふはかりに蚊遣をする賤の人のすることは興のさめたことである。

○宿ごと　家ごと。

○夜をかさね　幾夜も續いて。連夜。

○さむしろ　さむしろは筵又は狹い筵。此の頃云々は端近くうたゝ寢をして寢牀の衾に遠ざかつてゐる意。

○限りあれば云々　夏の日數は限りがある事だから、もう初秋になつて、夜になれば流石に月影が涼しい。同じ暑さ云々は夏と同じ暑さのうちに日が暮れるのをいふ。

○はつかなる　三日月のかすかなやうに涼しい風もまたかすかな。

○月はかたぶく云々　夜ふけて月は傾いて軒の傾いた下の荻の葉に秋風が音高く吹いてゐる。

○ます鏡　眞澄鏡、澄んだ明鏡。光の增すに言ひ掛け。

○かけて　心にかけて。鏡を柵にかけるから鏡の緣語。

○いつはり云々　度々いつはられて偽りに馴れはしたが又戀を契ることよ、全く誠のない世でもないから。

野萩

きてかへる物にもがなやふるさとに此の宮城野のはぎの錦を

山路霧

もろ共にたちいづる山の朝ぎりにのぼりおくるゝ秋の旅人

八月十五夜くもりて月見えざりければ

晴れがたき今夜は雲のひまをのみ月のいるまで待ちや明かさむ

月前露

萩はらや月影きよみとぶかりの涙の露の数も見えけり

寄藻戀

おきつ藻のおきてもねても苦しきになどみがくれて物思ふらむ

庭萩

咲きしより鳴かむ尾上の鹿の音もきくこゝちするにはの秋萩

月催涙

よそならぬ露とや月もかこつらむ見るから濡れし袖の宿りを

心から濡らしけるかな月見ずば秋とて袖のかからましやは

月見ればわが身ひとつのあはれにもちゞの涙の袖におちつゝ

○きてかへる云々　この萩の錦を衣に著て歸りたいものである。

○もろ共云々　朝霧の立つと共に出で立つた旅人。霧は早くも山路を高く昇つたに旅人は登りおくれる。

○月影云々　月影が淸いので露の一つ一つまで見えるよ。古今集「なきわたる雁の涙やおちつらむ物思ふ宿の萩の上の露」

○おきつ藻云々　起きても寢ても思ひ亂れて苦しいにどうして沖つ藻の水隱れるやうに身隱れて思ひなやむことであらう。

○よそならぬ云々　月を眺めるとすゞ涙の露で袖が濡れたが、その袖の露に宿つた月もその涙の露を他人ならぬ深い關係があることとかこつけるだらう。

○心から云々　月を見たので自分の心と袖が涙に濡れたよ。月を見なければ秋だといつても袖がこんなに濡れるものであらうか濡れはせぬ。

○月見れば云々　古今集「月見ればちゞに物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど」

我が袖よたゞ大かたのあはれにはかくやは濡れし秋の夜の月

紅葉盛

そめ〳〵し色も千入の限りとやけさは昨日のまゝのもみぢ葉

故郷擣衣

ふるさとと宿はあれぬる蓬生に待つ人あれやころもうつ聲

ふるさとは近き吉野の山かぜに一夜も衣うたぬ夜はなし

野月

夕霧も晴れてゐな野の小篠原さはらぬ夜半の月のさやけさ

聞擣衣

月清みなきゆく鳫にうちつれてきぬたの聲もたかき夜の空

稲掛茂穂が世のいとなみしげくて歌の會などにまじらふ事もさはりがちなる事と歎きて「拾はずて袖にぞ玉は亂れける海士のまてかた暇なき身は」とよみておこせけるかへし

さもこそはあまりて袖にみだるらめひろふ言葉の玉の數々

身を歎く袖の涙のやがて又それも言葉のたまはなしけり

恨戀

○たゞ大かた云々　たゞひと通りの哀れと位ではかうまでに袖は濡れはしない。
○そめ〳〵し云々　幾度も〳〵染めた色も一日々々と色濃くなつた、が、それもはや幾度も染めた限りといふのであらうか昨日のまゝになつた。
○ふるさとと云々　家は古く嘗て居たことのある處となつて荒れてしまつた蓬生の宿。
○ふるさとは云々　古今集「み吉野の山の秋風さよ更けて故さと寒く衣うつなり」
○ゐな野　攝津國河邊郡猪名野。
○月清み　月が清いので。
○稲掛茂穂　後名を大平と改め本居氏を嗣ぐ。
○拾はずて　歌を作らぬ遺憾を、海士が貝を拾はないで袖に涙の露の玉が亂れたに喩へた。
○海士のまてかた　暇なしとつゞける。海人がまてがひを採るに干潟に潮の來ぬ間にと忙がしくするので暇なしにつゞける。
○さもこそ云々　どんなにか玉の數々が袖にあまつて亂れるであらう。
○身を歎く　歌よむ暇ないのを歎くその涙の玉が卽ちまた玉のやうよい歌になる。

秋風のふくにつけても思ふには是れもまくずの恨みかねつゝ

殘菊

秋をおきて色こそまされ菊のみは移ろひ行くを限りともなく

草もかれ木の葉もちりし庭の面に心ながさの白菊のはな

いづくとも秋のゆくへはしら菊の殘る形見も色かはりつゝ

落葉風

もみぢ葉もいまは眞砂の初入(はつしほ)とちらしそめぬるにはの木枯

野蟲

萩の露かはる涙のいろかとも思ふまでなく野邊の蟲かな

秋の夜は月の影かは鳴く蟲も露を宿りの宮城野のはら

遠千鳥

浦遠くつきも千鳥のなくこゑも浪間にほそきしのゝめの空

寄時雨戀

時雨かはなみだ年ふるこのあきは木の葉もうすき袖の色かな

むら雲はあとなき空をながめても物思ふ袖は猶ぞしぐるゝ

閨寒み時雨ふる夜は木の葉にもあらぬ思ひのふかくなりつゝ

○まくず　葛の葉の翻つて裏が見える所から恨みにかけていふ。

○秋をおきて　秋であるのをさしおいて。秋であるに拘らず。

○移ろひ行く　花の色あせて凋みゆく。

○心ながさの白菊　草も木の葉もなくなつたのに白菊ばかりはいつまでも氣長に咲いてゐる。

○秋のゆくへ云々　秋が過ぎ去つて行つた方は何處とも知らぬ。白菊に知らぬを言ひ掛けた。

○眞砂の初入　地上の眞砂を初入と染めるに紅葉を木枯がちらりと散らしはじめた。初入は草木の葉の色づきはじめること。

○萩の露云々　萩の花におく露の紅なのは鳴く蟲の血の涙の色かと思ふほど、はげしく蟲がなく。

○月の影かは　露に宿るのは月の影ばかりではない、蟲も露を宿りとしてゐる。

○むら雲云々　時雨を降らせた村雲は跡もなく消えた空をながめても思ひ悶えてゐると、袖は涙の時雨にぬれる。

○閨寒み　閨が寒いので。

燈

書よむとさ夜ふくるまでかゝげてもさとる心のともし火の影

庭蟲

色見えぬよるの千ぐさと庭もせになくさま〴〵の蟲の聲かな

初霜のおきゐてきけば蟲のねもよな〳〵かるゝ庭の淺茅生

しをりを作りて書ける歌

分け見ばやしをりも花のよしの山なほ奥深く匂ふこずゑを

積雪

ふりそめていまだ日數も積らぬに積ればつもる雪の深さよ

よの程はふる音もせでつもりける庭に驚くゆきの朝戸出

絶戀

玉のをよ頼みし中は絶えけるを何にかゝりてものおもふらむ

寄夢戀

かへしてもうつゝながらのうき夢を何思ひねのよはのさ衣

嶺初鴈

とびこえて今やきぬらむ初鴈の聲しのゝめのみねの秋ぎり

○かゝげても 燈をかゝげても、あかりをつけても。

○ともし火 悟る心の乏しを燈火にかけた。

○庭もせに 庭も狹いまでに一面に多く。

○初霜の云々 初霜のおくこの頃夜起きゐて。

○しをりも花の云々 花の吉野山に奥深く分け入るに木の枝を折つて路のめじるしとする栞、その同じ名の書物に挿む目標の栞で尚奥深く書物に分け入らう。

○ふりそめて云々 雪が降り初めてから幾日も日數は重ならぬに雪は積りも積つて深いことよ。

○ゆきの朝戸出 雪の朝の外出。

○玉のをよ云々 これを命よと頼みにした戀中は絶えてかゝりあひもなくなつたのに、何に引きかゝつて斯うも煩悶することだらう。

○かへしても云々 衣を裏返して著て寢ると戀人の夢を見るといふが、さうして裏返して見た處で、さて見る夢は現の通りのつらい悲しい夢であるのに。

惜歳暮

時のまも惜しき日影の移りきて今日は年さへ暮れむとすらむ

としの暮によめる

驚きてをしむ心のはかなさよけふ俄なるとしの暮かは

年の始めによめる　安永八年己亥

春きぬと浦ふく風はおとたえてかすみたちそふ大淀のまつ

鈴鹿川八十瀬のこほりうちとけて春に成りぬる波の音かな

霞知春

明くるよりけさは霞にしらま弓はるきにけりな高まとの山

妻の母なる人の七十賀に、寄岩祝

千世の坂八千度こえて岩が根のかどもたひらに蹈みならすまで

子日松

いく千本幾千代春の子の日してひくともつきじ野べの小松は

雪中鶯

あともなき雪のうちにもこゑたてて春をうづまぬにはの鶯

山殘雪

○時のま　暫くの間も。

○けふ俄なる云々　今日になつて突然に年が暮れるといふわけではないのに、今更のやうに驚いて年の暮を惜しむのもかひないことである。

○大淀　伊勢多氣郡。伊勢海に臨む。業平松といふ老樹があつた、中頃枯れて植ゑついだ。新古今「大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみも返る波かな」

○鈴鹿川　近江伊賀伊勢三國境から出て東流伊勢海に注ぐ。萬葉集「鈴鹿川八十瀬渡りて誰故か夜越にこえむ妻もあらなくに」

○霞にしらま弓　春になつたのを霞によつて知られる。知られるから白檀弓とつゞけた。弓を張るに春をかけ、高まとを的にきかして弓に響かした。高圓山は大和春日山の南。

○いく千本云々　幾千代の春毎の子の日に幾千本づゝ野外で小松を引いて千代を祝つても。

よし野山空こそかすめ雪はまだ春のきにける跡だにもなし

山家月

山深みつきもうきよの月よりはすみまさりける柴のいほかな

旅宿

あはれなるうつの山邊のたびねかな枕にかゝるつたの下露

初戀

きのふ今日ぬるゝ二葉の思ひ草ならはぬ露のところせきまで

白馬節會

たなびける霞のみかは青馬もけふは雲居にはるを見せけり

岡鹿

思ふには忍ぶの岡にたつ鹿もまくるか夜半の妻戀のこゑ

吹きおくるをじかの聲ぞたゆむなる妻や今來の岡のまつかぜ

秋深み岡邊のわさ田ほにいでて妻とふ夜半のさを鹿のこゑ

花の歌あまたよみける中に

植ゑて見る若木のさくらならふな老の春まで花咲かぬ身に

花にくれ花にぞあかすよるも猶ひる見し色の夢に見えつゝ

○よし野山　空は霞がたなびいて春らしいが、山には雪が積つてゐて春の來た足跡もない。

○うつの山　駿河宇津谷と岡部との間。伊勢物語から蔦の細道といふを傳へてゐる。

○白馬節會　古正月七日青馬を天覽あつて後宴を賜はつた儀式。
○雲居　雲の居る所。大空。宮城を喩へていふ。
○思ふには云々　思ふまいと抑へ忍ぶ力も、戀しさに思ひ惱む力に負けたのか。忍ぶの岡は今の東京上野の丘。妻戀は本郷湯島。
○をじかの聲云々　妻戀ふ鹿の聲もさだえて遠のいたそれは妻鹿が今來たのであらう。今來の岡に松風の音が聞える。今來岡は山城宇治郡。萬葉集「いもらがり今來の嶺に茂り立つ妻の待つの木は古人見けむ」
○わさ田　早稲の田。
○ほにいでて　稲の穂のぬき出るを外に表はれ出て人目につく意にかけた。

程もなし花ちるまでは吉野山捨てぬ憂世もすててこそ見め

咲きしより花に成りぬる心とて四方の山邊に散らぬ日ぞなき

願はくは花のもとにて千世もへむ其のきさらぎの盛りながらに

ちるべくは風ふかぬよも山櫻あくまで花を見る春ぞなき

春雨夜靜

軒くらき春の雨夜のあまそゝぎあまたも落ちぬ音の寂しさ

春曙

野も山も春なる頃と花鳥のいろねに明くるしのゝめの空

梅が香も色見えそめてほの〲と花より匂ふあけぼのの空

月影にまがひし雲も山の端にあやめわかるゝ花のあけぼの

海邊鹿

山ちかき波のうきねは鹿の音もまくらにかゝる秋のうら風

吹きこゆる關のあらしもすごき夜に須磨の上野のさを鹿の聲

落花

をしみえぬ心に花のたねまきて又の春まつ春のやま風

花

○程もなし　花散るまでは幾らの時もないその間は世を捨てて花を眺めよう。
○咲きしより　花が咲いてからは心が花とあだに浮れて、四方の山邊に心の散らぬ日はない。散らぬは花の緣語。
○願はくは云々　花の下で千世も經むことを願ふ。續古今集「願はくは花のもとにて春死なむその二月の望月の頃」
○あまそゝぎ　雨だれ。雨夜、雨そゝぎ、あまたとあまの音を疊み重ねた。
○春なる頃と　春である頃とて。○花鳥のいろね　花の色鳥の音。
○梅が香も云々　梅の香もその容子に表はれ初めてほの〲と花から先づ色映えてうるはしい曙となる。
○月影云々　月の光の下で雲が山の端と見まぎれてゐた、その雲もはつきり山と區別がついて夜が明けた。
○波のうきねは　波の上船の中で寢てゐると。
○吹きこゆる云々　續古今集「旅人は袂涼しくなりにけり關吹き越ゆる須磨の浦風」

吉野山かばかり花のさくや姫神代にいかに種をまきけむ

ふじのねも及ばじ花の春風にしらゆきにほふみよし野の山

寄鳥戀

うしつらしまだきに鳴きてあふ夜半の人の心をくだかけの聲

忍戀

たが爲にいつまでとてか忍ぶらむはかなやかくて戀ひ死なむ身を

花色映月

てりもせぬ春の月夜の山ざくら花のおぼろぞしく物もなき

橋藤

見渡せば橋よりうへの松がえに藤もかゝれるはゐの山川

關落花

吹きこゆる嵐の花の手向をば神もいさめよ逢坂のせき

寄山吹戀

山吹のはなの色には出でぬともいはじや人に物思ふとは

いはぬ色をたぐひと見ても山吹はこぼるゝ露を忍びやはする

をりてだに見せばや人に山吹のつゆもかくとはいはぬ思ひを

○吉野山云々　吉野山にか程多く花が咲くは神代に木花咲耶姫がどんなに種をまいておいたことであらう。

○うしつらし云々　逢つて戀を語らふ夜半に早くも鳴いて人の心を碎き痛ましめる鷄の聲は厭はしく苦しい思ひがする。くだかけは野鷄で鷄を惡み罵つていふ語、心を碎かしむるに言ひ掛けた。

○はかなやかく云々　かひなく脆きことよ、斯くて此の儘に戀ひ死なんとする身であるのに。

○てりもせぬ　新古今集「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」

○嵐の花の手向云々　嵐が花を散らして關の明神に手向けるのは神も制止し給へよ。逢坂關のある逢坂山は一名手向山。往昔旅人が山頂でぬさを散らして道祖神に手向けた。千載集「もみぢ葉を關守る神に手向けおきて逢坂山を過ぐる木枯」

○をりて云々　かくばかり戀ひ焦れゐるとは露ほどもいはぬこの思ひを見せたい、露を帶びた山吹の枝を折りて。

野外雉

若草の野邊にむつれて鳴くきじのねよげに見ゆる妻やとふらむ

杜開花

おくれぬもおそ櫻かと見ゆるかな森の青葉にまじる一もと

曲水宴

とり〳〵にうかむ言葉も水ぐきのながれよどまぬ今日の杯

祈戀

思ひ寐か祈るしるしか初瀬山はつかに見えし夢のちぎりは

關霧

逢坂やへだては山のよそめにてゆき來とゞめぬせきの秋霧

新樹妨月

春の夜はかすみながらも見し月にひたすらさはる夏木立かな

寄源氏物語戀

及びなき梢の色を思ふかなおなじ落葉を見るにつけても

待郭公

時鳥ひともさこそと思ひやれなが五月まつ心づくしに

○むつれて　親しみ馴れて。
○ねよげに　雉の鳴く音のよいに寢好げとかけた。根よげと若草の緣。伊勢物語「うら若みねよげに見ゆる若草を人の結はむことをしぞ思ふ」
○うかむ言葉　心に思ひ浮べる歌うかむは流れに杯を浮べるをかけた。
○水ぐきの云々　筆がすら〳〵と運んで澁滯しない。曲水の杯の流れが滯らぬ。
○思ひ寐か云々　餘りに思つて寢たからであらうか、それとも初瀬に祈つた驗があつたからであらうか。
○はつか　かすか。
○逢坂や云々　逢坂山を霧が隔てゝゐるのは山を餘所から見たのであつて、逢坂關に立ち籠める秋霧は往來をとゞめぬ。
○春の夜は云々　春の夜は霞みながらも月影は見えたが、茂つた夏木立ですつかり月が見えなくなつた。
○及びなき云々　源氏物語の柏木が朱雀院の二の宮落葉官を得たがそれにつけても光源氏のものである。妹の三の宮に及びなき戀をしたのをいふ。若菜卷下參照。
○時鳥云々　時鳥よ人も如何に汝を待つてゐるかと思ひやれよ、汝が五月になるのを待つて氣をもむにつけても。

待ちわびてふすかとすれど郭公なかぬに明くるしのゝめの空

なきぬべき雲間の月もむらさめの空頼めなるほとゝぎすかな

河夏月

水もなき空に見るだに涼しきをまして川瀬のなつの夜の月

徑夏草

さすが猶道は見えけり茂りても往來もしげき野邊の夏草

澤月

行く月に障らぬほどは浮雲のかげさへ清き野邊のさは水

よもすがら影見る月に浮草のくまだにもなき廣澤の池

納涼

たきつせのあたりすゞしき夕暮に風も落ちくる山まつの陰

初秋風

まちし夜のうたゝねながらしのゝめの袖に吹きくる秋の初風

秋田露

刈り殘す山田のいな葉明日しらぬ宿とや露も心おくらむ

露底蟲

○待ちわびて　古今集「夏の夜のふすかとすれば郭公鳴く一聲に明くるしのゝめ」

○水もなき云々　水もない大空にあるのを見るだけさへ涼しいに。

○行く月云々　東から西へ空ゆく月に障らぬくらゐなら雲があつても却つて雲の影までも清い。

○廣澤の池　山城葛野郡嵯峨。夫木和歌抄「風吹けばみさび浮草かたよりて月になりゆく廣澤の池」

○風も落ちくる　風も吹き落ちてくる。風が急に高い所から吹きおろす。

○まちし夜云々　秋を待つて夜うたゝ寢をしたまゝ夜が明けて、明方初秋の風が袖に吹きくる。

○明日しらぬ宿云々　露が宿るのも今夜かぎりで、明日はどうなるかわからぬと心づかひすることであらう。おくは露の緣語。

ひまもなき露の下葉にすゞ蟲の鳴く聲ぬれぬにはの淺茅生

萩上露

玉にこそえも貫かざらめあだなりと思ひけつべき萩の露かは

ふきわたす萩より萩にみだれつゝ風も色なる宮城野の露

殘月

朝日影さしもさやかに見し月もあるかなきかに殘る山の端

遠擣衣

遠方の音もしばしは聞ゆなり近ききぬたのうちたゆむまに

八月二十日頃月のさやかなるを見て

あはれとは見ずや五十の秋の月やどかす袖の露の深さを

月前鴈

あくがれし鴈のとこよの秋やいかに都の月もあはれなるよを

都月

山里は雲霧ふかし秋の夜のつきも都ぞすみまさりける

千里までよるはひかりの外ならで都も月のみやこなりけり

月前蟲

○玉にこそ云々　萩の露は玉と貫くことこそは出來ないかも知れぬが、はかない徒らなものだと思ひ消してしまふことはできない。

○風も色なる　萩から萩に吹く風は矢張り萩の色になつてゐる。

○さしもさやかに　あれ程まではつきりと。さしもは朝日影がさしての意をかけた。

○遠方の音　遠方の砧の音。

○あくがれし云々　心落ちつかず思ひ焦れて鴈が行つてゐた遠い遠い國の秋は如何であるか。

○千里まで云々　千里も遠い所まで悉く月の光に照らされて都も月の都である。月の都は月に照らされた都で、月の中の宮殿のやうに美はしい都。

ながめつゝ蟲のねきけば秋の夜は耳にもすめる月の影かな

谷　菊

ひかりなき谷ともいはじ菊の花あまつ星かとまがふ盛りは

深山鹿

程遠しすそ野の萩の妻どひも尾上へだつるさを鹿の聲

山深み嵐のつてもみね越えてすそ野によわるさを鹿のこゑ

暮秋紅葉

いかにせむさきだつ秋を惜しむまに紅葉もそゝや夜半の木枯

をしみえぬ秋こそあらめもみぢ葉の梢も風に何さわぐらむ

野草欲枯

おく霜に秋のかぎりは見えそめて冬枯近きむさし野の原

河落葉

これも又あらしの後のうきせかな紅葉とゞめぬ山川の水

いつしかと流れて色にいづみ川はゝその杜の下のもみぢも

紅葉ちるあらしを瀨々の時雨にてふくに染めます山川の水

落ちてだにとまらぬ秋か風よりもいとゞ早瀨の河のもみぢは

〇ながめつゝ云々　澄みわたる月影を眺めて蟲の音を聞くと蟲の音が澄んで月影は耳にも澄む。

〇萩の妻ごひ　鹿は萩の野に睦れ啼くので萩を妻として聞ひ寄ること詠みならはしてゐる。

〇尾上　山の峯。

〇さを鹿　牡鹿。

〇嵐のつて　嵐のたより。嵐によってことづてすること。

〇さきだつ秋　紅葉の散るに先だって暮れゆく秋。

〇そゝや　紅葉の風に輕く吹き散る音がそよさしてゐることよ。

〇をしみえぬ云々　暮れゆく秋の別れを惜しむこともできない、秋こそは忙しく暮れて行くこともあらうが、紅葉までが何のために風に騷ぎ散ることであらうか。

〇うきせ　心苦しい折、山川の浮瀨とかけた。

〇いづみ川、柞の森　山城國相樂郡。いづみ川に紅葉の色に出づを言ひ掛けた。拾遺愚草「泉河ゆき來の舟は漕ぎ過ぎて柞の森に秋ややすらふ」

〇ふくに染めます　嵐の吹くにつれていよ〳〵濃く山川の水が紅葉の色に染まる。

○谷風に云々　古今集「谷風にとくる氷のひまごとにうちいづる波や春の初花」
○うもれ水　草叢などの陰に隱れて見えぬ水。
○菊の雫　菊に置く露の雫。飲めば長壽を保つと傳ふ。

○山風に云々　山風で峯の梢を櫨と常綠樹と吹きわけて櫨紅葉が錦のきれと美しい。錦を裁つに立枝をかけ、錦を裁つた端と言ひ掛けた。

○うつの山　駿河國宇津谷と岡部との間の峠。伊勢物語「駿河なる宇都の山邊のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり」都に通ふ宇都山の道は雪にと絕えたから都の夢は見る由もない。

枝にこそ散るとていとへもみぢ葉の川瀬の秋は嵐なりけり

谷菊

秋もまたふく谷風にうち出づるなみかとまがふ岸のしら菊

うもれ水影こそ見えね露おちて匂ひはうつる谷の白菊

にごるとも菊の雫は千代かけてあくまでくまむ谷の下水

曉千鳥

鳴く聲もあくる浦わの月影もなみまに消えてゆく千鳥かな

曉時雨

明方は月にしぐるゝ一むらの雲のゆくへも眺められつゝ

櫨紅葉

山風にみねのこずゑをふき分けて錦たち枝のはじのもみぢ葉

もみぢ葉はおほかる中によそめにも分きて立枝のはじの一本

羇中雪

いかに見む都の夢ようつの山ゆきにうつゝの道もたえにき

おもひやれ都の山もゆきふらば戀しさつもる旅の心を

小津正啓入道乘齋身まかりけるとぶらひの會しける時、雪中懷舊

つもりける跡を形見の言の葉になき人しのぶ庭のしら雪

あととひてあらましかばと思ふにはあはれも深き宿の白雪

初雪もまづふみ分けて見し人のなきあと寂し敷島の道

年高くつもれば千世と見し枝もたへぬ老木のまつの雪をれ

夕鷹狩

末暮れて明日のとだちも殘る野に狩場ながらの假寢をやせむ

山家水

谷の庵はおちくる瀧を軒端にて運ぶ水さへやすくてぞすむ

とはばやなすみつきがたき山の奥にいかにしてかと水の心を

海邊霞 安永九年庚子

音にきく波もかくれて田子の浦や春は霞ぞたたぬ日もなき

河柳

うちいづる浪の花より吉野川はやく春くる青柳のいと

朝鶯 古

梅の花さきそめしより朝さらずき鳴く垣つのうぐひすの聲

梅風

〇あはれも深き云々　白雪の深く積つたこの家を故人が訪ね來たのだつたら如何に嬉しからうと思ふにつけても哀れが深い。

〇千世と見し枝云々　千世まで榮えてゐると思はれた枝ももう老木のことで雪に堪へられず雪折となつた。

〇末暮れて　遠いかなたに日暮れて。

〇とだち　鷹狩をするに鳥の集まるやうに作り設けた草むらなど。

〇瀧を軒端にて云々　瀧がすぐ軒端近くあつて水を汲み運ぶまでもやすく心も安く住む。すむは水の澄むに言ひ掛け。

〇とはばや云々　人は山の奥に住みつき難いに水は如何して澄むかと水の心を問ひたい。

〇音にきく云々　音に聞く田子の浦には音の聞える波も立たずして霞の立たぬ日はない。音、立たぬいづれも波の縁語。

〇浪の花　浪うつ白いしぶきを花に見立てていふ。

〇朝さらず云々　朝隔たることなく。毎朝。萬葉集「かせの山木立をしげみ朝さらず來鳴きとよもす鶯の聲」

〇垣つ　垣根のうち。

梅が香もしらぬ吾が身のかこたれてうつるにぬるゝ袖の春風

寄月戀

物思へば涙のひまもながきよに秋の月見ぬ秋ぞかなしき

曉鷄

告げそめてなほ天のとの明くるまを長なき鳥のこゑやいく聲

九月盡曉

行く秋を聲の內ともさを鹿のしらでなくなるしのゝめの空

河上春月

春の夜も名にたつ音は清瀧やかすみあやなきなみの月影

野霞

なか〳〵に春日の野邊は日にそへてみどりも薄く霞む若草

寄雲戀

物思へば空にうきたるはかなさも身にしら雲の眺められつゝ

暮秋雲

風きほふ雲のゆくへも行く秋のあはれを見する夕ぐれの空

故鄕花

○告げそめて云々　曉を告げ初めてなほ日の出るまで長い間を鷄がいく聲も鳴く。天のとは天。長なき鳥は鷄。明くるまの長いにかけた。

○名にたつ音云々　音に聞えて名高い清瀧川の音は淸く澄んで波の上に映る月影ははつきりしない。淸瀧川は山城嵯峨を流れ大井川に注ぐ。

○日にそへて云々　日にまして。一日々々と若草の綠も色增して霞も立ちこめる。

○空にうきたる云々　白雲が空にはかなく浮いてゐる如く、わが身のはかなく浮いてゐることも身に知られて。しら雲に知られてをかけた。

○雲のゆくへ云々　雲が風に吹かれて風に競ひゆくのも暮れてゆく秋の哀れさを示してゐる。

たとへける櫻の花の色ばかり奈良の都も今さかりなり

曉落葉

をりしもあれ月もいまはの明方にもみぢ葉さそふ峯の木枯

木枯に枝をわかるゝもみぢ葉もほの〴〵見ゆる横雲のそら

雲雀

淺みどりかすみの色に一入ののどけさ添へて鳴くひばりかな

待花

山里の人のたよりも初花をまつに待たるゝきさらぎの頃

春風よ心にまかす花ならばさかぬ櫻もはやさそはなむ

落花

おもふからちる面影もさきだちて入相の鐘に花ぞ待たるゝ

たづねても殘らぬ枝にとぶ蝶の夢か昨日の花のさかりは

寄風戀

ひとりぬる枕にきけば秋ならぬ夜半もかなしきかぜの音かな

峯松

契りてもいつまでとてか峯のまつ誰も千歳の友ならぬ世に

○櫻の花云々　都を花の咲くに喩へたその都は荒廢して、その喩へた櫻の花の色だけはさびれた奈良の都に今盛りである。萬葉集「青によし奈良の都はさく花のにほふが如く今さかりなり」

○月もいまはの明方　月はもう今は限りといふ明方。

○枝をわかるゝ　枝からわかれて散り落ちる。

○淺みどり　淡い緑色。

○山里の云々　初花を待つにつけても山里の人の音信が待たれる。

○春風よ云々　春風の思ふ儘になる櫻ならばまだ花咲かぬ櫻を誘つてくれよ。

○おもふから云々　心にかけて思ふによつてか、入相の鐘に花の散る樣子も咲くに先だつて考へられて花の咲くのが待たれる。新古今集「山里の春の夕暮きて見れば入相の鐘に花ぞ散りける」

○殘らぬ枝　花の散り殘つてゐない枝。

○契りても云々　萬千とせ待てかはらじと契つてもいつまでと待つことができようか。

朝更衣

花染のをしき別れのつゆだにもかたみとゞめぬ袖の朝風

岡寒草

白露の玉まくず葉もうら枯れて夕霜さむき水莖の岡

里卯花

この里の卯の花月夜夜よしとは告げぬかきねも人ぞとひくる

冬寒月

さよ深み影も軒端にかたぶきてつらゝにすがる月の寒けさ

夜郭公

たづねてもまだ聞かざりし郭公ねざめ折よき夜はの一聲

夕立

吹く風もにはかにすゞし夕立の雲にまよひて秋やきぬらむ

水邊螢

水ひろみ空に螢のとぶ影のうつろふ數もおほさはの池

夏河

涼しさに里のわらはのたはぶれも川邊離れぬ水無月のころ

〇花染　露草の花で染めた衣。

〇白露の玉まくず葉　玉なす白露を置いた葛の葉。

〇うら枯れて　末の葉が枯れて。

〇水莖の　岡の枕詞。

〇卯の花月夜　卯の花の白く咲いたのを月に見立てていふ。

〇夜よし云々　月夜がよいと告げてやらぬ卯の花垣根にも人が訪ひ來る。古今集「月夜よし夜よしと人に告げやらばこてふに似たり待たずしもあらず」

〇影も軒端に云々　月影も軒端に傾いて軒端に垂れた氷柱に月がすがりついて寒い。

〇ねざめ折よき　丁度寐覺した時に郭公が鳴いて折よくもその聲を聞くことができた。

〇水ひろみ　池水が廣いので。

〇うつろふ數云々　池水に映る螢の影の數も多い大澤の池。大澤の池は山城葛野郡大覺寺の東。

寄煙戀

いかにせむ思ひけたるゝ身のうさにいとゞ立ちそふ戀の煙を

夕立雲

夕立のなごりを見せてくれ深く月にたゞよふ雲のすゞしさ

誓戀

千歳までこの言の葉もかはらじとかけてぞちかふ神垣の松

樹陰夏月

松陰や梢をわたる涼しさは風のたえまもなつの夜の月

樹陰納涼

さす枝の行合のまより木のもとになつも霜おく月の涼しさ

對泉忘夏

柳かげ絲よりかけし春よりもくる人しげき夕すゞみかな

山月明

柴人もしばし暑さを忘れつゝむすぶ山路のまつの下水

關月

山の端は雲もかゝらで松ばかりさはる木の間の月のさやけさ

○思ひけたるゝ　思ひ消さるゝ。思ひすてられる意。思ひのひを火にかけて消つ、煙の緣語とした。

○かけてぞ云々　この言葉は神垣の内の松の如く變るまいと神にかけて誓ふ。

○梢をわたる　月が松の梢から梢へとゆく。

○さす枝云々　幹から生え出てゐると枝と枝がゆきあつてゐる隙から木のもとへ月が白く照らして夏に霜が降つたやうで涼しい。

○絲よりかけし春　青柳の絲を綾つた春。古今集「青柳の絲よりかくる春しもぞ亂れて花の綻びにける」

○柴人　柴刈る人。

○むすぶ　掬ぶ。手ですくひ汲む。

○松ばかり云々　松だけ月の光にさはる木の間の月の清く澄んでゐることよ。

波の上にかたぶく影をすまの關とめても見ばや秋の夜の月

逢坂や杉むらつゞく關の戸は月の光ももりあかすかな

八月十五夜はくもりたりけるに九月十三夜の月のいとさやかなりければ

さやかなる影はこよひの爲とてや半ばの月の惜しみおきけむ

風前落葉

ふくほどはたゞ一むらにさそはれてたゆむ嵐にちる紅葉かな

よそに見し峯の梢もこがらしにけふぞ麓の里のもみぢ葉

さそひきて散らぬ外山の木のもとも紅葉ふきしく峯の木枯

ふく色はさそひそめたるもみぢ葉にやがて千入の峯の木枯

寄杣戀

うしつらし丹生の杣川このくれもさはるとつぐる言通ふ瀨は

泊千鳥

浪まくらこと問ひすてゝしのゝめの別れはかなき友千鳥かな

川口西谷九月の頃みまかりけるに

今年とは知らで今年もながめけむ長き別れのなが月の陰

寄關戀

○かたぶく影云々　月影が波の上で西に沒しさうに傾いた月影を暫く引きとめて見たい。とめては關の縁語。須磨は攝津武庫郡。
○杉むら　杉の木が叢り生えてる所。
○もりあかす　夜通し月の光が杉叢の樹の間を洩れる。洩るに守るをかけて關の縁語。
○こよひの爲　九月十三夜の月をさやかならしめるため。
○半ばの月　仲秋の月。
○ふくほどは云々　嵐の吹く間は一團となつて紅葉に吹き誘はれ、嵐が吹きゆるむとちら／＼散る。
○よそに見し云々　關係のない遠い所と思つて居た峯の梢も今は木枯に吹かれて麓の里に散る。
○外山　奧山に對して端の山。
○丹生の杣川　丹生川といふ杣川。杣川は杣木を流し運ぶ河。丹生川は大和吉野山に發し吉野川に注ぐ。
○このくれ云々は木の榑。木材をいふ。さはる云々は、木材を流し下すに障りの多いのを、此の暮にかけて今夜も差障りがあつて逢へぬと告げる言葉の通ふ杣川の瀨がつらい。
○きくら云々　港に旅寢してゐるに別れの千鳥が慕れて訪ひ來て夜明けご歸るのが頼みなく心細い。
○今年とは云々　今年死ぬとは知らないで長月の月影を眺めたことであらう、その月影にも永久の別れとなつた。今年を重ね、なが長き長月と同音を疊んで調をなした。

其のまゝにへだて果てける關の名を又逢坂と何たのみけむ

旅行

旅寢して涙はれせぬ今宵もやみやこの月はさやの中山

寄江戀

みをつくしいつまで思ひしづむらむほのみしま江の淺き契に

徒らに年をふる江のうき中はみをつくしてもかひやなからむ

小野氏のむすこの始めて具足をきられけるいはひ

とりよろひ君の御楯ともの〻ふのかため置く身は萬代までに

寄橋戀

さりともとせたの長橋長らへて頼みぞ渡るおふみてふ名を

寄渡戀

心にはひとも思ひやいづみ川あはぬ月日の遠きわたりを

行きかへり淀の川舟よと共に同じうき瀬をこひわたるかな

いかにせむ思ひ絶えむもしかすがの渡りそめたる中の憂き瀬を

久戀

末の松まつにあまたの月日へておひ見ぬさきにこゆる年波

○其のまゝに云々　遂にそれきりで、二人の仲を關が隔ててしまつたが、その關の名が再び逢ふ坂といふので又逢へるかと頼みに思つたのは何の頼みがひもなかつた。

○旅寢して云々　遠江佐夜中山に旅寢して涙に曇つてゐる今夜も恐らく都では月影はさやかであらうの意。

○みをつくし　澪標に身を盡しをかけた。沈む、淺きは澪標の緣語。

○ほのみしま江　ほのかに見しと三島江をかけた。三島江は攝津淀河の西岸。

○年をふる江　年を經るに古江をかけた。古江は古い江。

○うき中　かれ〴〵になつた戀の悲しいつらい中。浮きにかけてみをつくしの緣語。

○とりよろひ　具はり調ふ意であるが、甲冑を身につけて。

○君の御楯　君の爲に楯となつて敵を防ぐ人。

○あふみ云々　近江に逢ふ身をかけた。

○思ひや云々　思ひ出づるであらうか。いづみ川をかけた。いづみ川は山城。

○しかすがの渡　三河國飽海川の渡津。流石(しかすが)をいひかけた。

○末の松　古今集「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなむ」

杉雪

三輪の山うづむ梢も神さびてしるしまがはぬ杉のしらゆき

かけまくはいとも〳〵かしこけれど今日　天皇御うひかうぶりせさせ給ふよしかねて承り侍りければ正月朔日によめる　天明元年辛丑

初春の初もとゆひに萬代を今日よりこめてかすむ長閑けさ

曉立春

ふる年の夢のうき橋春かけてさむる枕の鳥のはつこゑ

梅薫袖

おも影はよるも立枝の梅のはな夕風ふれし袖のにほひに

うめの花ふくとしもなき春風にいつさそひこし袖の匂ひぞ

花の歌

見渡せば花より外の色もなし櫻に埋むみよし野のやま

春朝

軒ちかき聲もにほひもあくるよりあさ戸いそがす花鳥の春

柳露

契りあらばやなぎにおのが玉のをも長くとむすべはるの朝露

○三輪の山　古今集「わが庵は三輪の山もと戀しくはとぶらひ來ませ杉立てる門」うづむ梢は三輪山を埋むやうに茂り立つてゐる杉の梢。

○かけまくは云々　言葉にかけて申さむは甚しく恐れ多いが。

○うひかうぶり　元服して初めて冠を著ること。時の天皇は光格天皇。

○初もとゆひ　公卿元服の時髮を結んだ紫の紐をいひ元服をいふ。

○夢のうき橋　夢をいふ。もと大和吉野の夢の渡りで吉野川に架けた浮橋。春かけては春に亙つてで橋を架ける意を言ひ掛けた。

○立枝　高く生え生つてゐる枝。面影に立つを言ひ掛け。

○櫻に埋む云々　吉野の山が櫻で埋めてしまふ。

關路歸鴈

逢坂やけふせきこえて行く空もかすみへだつる春の鴈がね

忍久戀

くるしさも誰にうらみむ忍ぶ山下這ふくずのながき月日は

涙川さも年波のこゆるまでせくも苦しや袖のしがらみ

殿村道應七十同妻六十賀に、春祝

立ちそひていく千代も見よいもせ川春若がへるなみの初花

小島菜六十賀に、寄松祝

ちぎりおく陰もときはの岩根松いはねどしるし千世の齢は

梅薫風

春風をひたすら花にうきものと梅が香知らでかこちけるかな

梅の花又たが袖ににほふらむ垣根越えゆくにはの春風

岡山正興二月のころ江戸へくだるに

過すなよかすみ隔たる花の香も匂へば匂ふ風のたよりを

欲言出戀

山川のいはまの波のうち出でていはばや下にむせぶこゝろを

○忍ぶ山　岩代信夫山。新古今集「人知れず苦しきものは忍ぶ山下はふ葛のうらみなりけり」

○涙川　夫木抄に伊勢さしてゐるが、涙を川に喩へたに過ぎない。

○年波　年齢を涙川の縁で波にかけていふ。越ゆるは波の縁語。せく、柵いづれも川の縁語。

○いもせ川　古今集の「流れても妹背の山の中に落つる吉野の川」とあるによつて吉野川をいふが、こゝでは夫婦の中を川に喩へて波を縁語とした。若がへるのかへるは波の寄せてかへる意をかけた。

○ちぎりおく　千代の齢を松に契りおく。

○岩根松　岩根に生えた松。言はねどと同音を疊んで序とした。

○ひたすら云々　一途に花のために厭はしいものと思ひ嫌つたが、春風が梅が香を持つてくることを知らなかつた。

○梅の花云々　古今集「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」

○山川の　新勅撰集「山川の岩まの水のうす氷われのみ下にむせぶ頃かな」

夕花

かへらばや高嶺のさくらあかねども麓の花もくれ果てぬまに

朝花

朝日影待ちとるかたの梢より外山のさくら色ぞ添ひゆく

名立戀

いかにして世にはなき名の立田川渡りもそめぬ中の憂き瀬を

薄暮雲

大かたは暮れてそなたの一むらに入日の色をのこすうき雲

寄萱戀

あはれともいはぬ心のあさは野に亂るゝ萱のつがねをもなし

新樹

櫻こそなほ見やらるれその色とわかぬ若葉も花のなごりに

祈戀

神垣や祈るしるしもなき人に心よるべのみづからぞうき

遠村煙

里遠みたどる末野のゆふ暮にしるべうれしく立つけぶりかな

○待ちとる　待ちうける。

○いかにして云々　事實もないのにいかにして世間に名が立つだらう。立田川に名の立つをかけた。○憂き瀬　苦しい時。瀬は立田川の縁語。

○そなたの一むら　そちらの方のうす雲の一むれ。

○あはれとも云々　古今集「あはれてふことだになくは何をかは戀の亂れのつかね緒にせむ」によつて、あはれとも云はぬ心の亂れるのを束ねる緒もないの意。あさは野に亂るゝ萱のはつかねをの序。萬葉集「紅のあさはの野らにかる萱のつかの間も吾を忘らすな」

○里遠み云々　里が遠いので道を尋ね迷つて行く野の端に方に道案内のやうに煙が立つてゐるのが嬉しい。

寄檜戀

いのりてもつらさ變らぬ初瀨山檜原の色はいふかひもなし

行路卯花

人通ふみちのべ近み卯の花のゆきにも折りし跡はありけり
過ぎがてに人やをりけむ卯の花のゆきに跡ある里の通ひ路

深夜螢

さよふけて見らくのおほき螢かな月は入りぬるいその草葉に

寄草戀

さよ深くたゝずむ軒に袖ぬれて人め忍ぶの露ぞわりなき
かれぬるか草葉にあらぬ我が中もうき秋風のふくとせしまに

不逢戀

年へてもかくあふ事の片絲を何にくるしく思ひよりけむ

樵夫

世をわたるみちとて谷の丸木橋ゆふやみかけてかへる柴人

故鄕盧橘

さらでだにむかし戀しき故鄕をいかにせよとて匂ふたち花

○いのりても云々　初瀨の佛に戀を祈つてもその人のつれない冷淡は少しもかはらぬ、初瀨山の檜原色は變りないやうに。
○みちのべ近み　卯の花の咲いてゐるのが路傍近くあるので。
○卯の花のゆき云々　卯の花の白いのを雪と見たてていふ。往き來にも卯の花を折つた跡が見える、雪に人の足跡のあるやうに。
○過ぎがてに　通り過ぎ難くて。
○見らく　見るの延言。見ること。
○人め忍ぶ　人に見られぬやう隱れ忍ぶ意に、草の名の軒忍をかけた。
○かれぬるか　戀なかが疎くなり絕えてしまつたかの意に草葉の枯れるをかけた。
○秋風　秋を厭きにかけて中の疎くなるをいふ。
○あふ事の片絲　逢ふ事の難いに片絲(より合はさぬ絲)をかけた。
○思ひよりけむ　思ひ寄る片絲を縒るとかけた。
○ゆふやみ云々　夕暮の闇になるまでに。かけては橋の緣語。柴人は柴刈る人。
○さらでだに　橘が匂ふなどなくてさへ。
○むかし戀しき　古今集「さ月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」の歌から花橘に昔馴染の人の戀しさが多く詠まれてゐる

江夏月

すみのえや松の下ふく浦風に月影よするなみの涼しさ

春山

春深きかすみにきえて咲く花のおもかげばかりにほふ遠山

瀧

いたづらに瀧のしら絲よりかけて亂るゝ玉をぬきも止めず

寄弓戀

あづさ弓本のちぎりは忘るなよ又心ひくかたはありとも

竹風夜涼

呉竹を荻よりさきの宿りにてよる〳〵すゞし軒の下風

夕待戀

くれ待ちて人まつ程になる空はくもるぞつらき雨もこそふれ

古寺鐘

をはつせや山はくれぬる夕霧におくれてひゞく入相のかね

閑庭荻

宿がらかをぎふく庭の夕風はいづくの秋もかくやさびしき

○瀧のしら絲　瀧を白絲を垂れかけたさまに見立てていふ。よりかけては絲に縒をかけて。
○ぬきも止めず　瀧のしぶきの玉泡の玉を絲に貫きとめない。
○あづさ弓　もとの枕詞。
○心ひく　ひくは弓の緣語。
○呉竹を云々　風が荻より先に呉竹を宿りとして呉竹に吹いて來て
○よる〳〵　風の吹きよるを夜々とかけた。
○くれ待ちて云々　夕暮になるを待つて戀人の來るのを待つ頃になると。
○をはつせ　をは接頭。初瀬は大和磯城郡。長谷寺がある。
○宿がらか云々　荻吹く風のかやうに寂しいのはこの家のせゐでもあらうか何處でもかう寂しいのか

逢増戀

あひ見ての後の思ひを思ふにはつらさや人の情なりけむ

羇中嶺

故郷のはるけさいかにけさ越えし峯だに雪のをちかたの空

荒木田經雅神主一年の内に八禰宜より六禰宜まで進まれける由聞きてよみてつかはす

一とせに二坂のぼる神路山なほ峯までのみちもなづまじ

深山秋月

山のおくは松のあらしも瀧の音も光となりて月ぞすみける

八月十五日の夜雨ふりけるがやみぬれど猶月見えざりければ

をやみてもなごり晴れせぬ雨雲にかぜをさへまつ望月のそら

草花露

さま〴〵の色香うつりておく露も花の盛りぞさかりなりける

八月十六日の夜月のおもしろきに思ひかけず鹿島元長にあさかの山寺にゆきあひて物語などしける又の日ふみつくりておこせけるかへし

こゝながらつゆくもりなき言の葉に又もみ山の月の面かげ

○あひ見て云々　戀人に逢つて後別れる時のつらさを思ふと無情にも逢つてくれなかつたのが却つてその人の情であつたらうか。

○故郷云々　つい今朝越えたばかりの峯でさへ雲はる〴〵の彼方になつたにつけて故郷は如何に遠くなつたことか。

○一とせ云々　一年に二級も昇進して、神路山の神官として最上位まで滞ることはあるまい。神路山は伊勢宇治内宮神苑附近。

○松のあらし云々　松吹く風も瀧の音も月の光に照らされて松風も瀧の音も月と共に澄みわたる。

○をやみて云々　雨が暫くやんでも雨の名殘の晴れぬ雲があるので雲を吹き拂ふ風までも待つ。

○さま〴〵云々　露に草花の色々の色香がうつるので露の盛りと草の花の盛りと一しよである。

○あさかの山寺　伊勢一志郡阿坂郷示淺香などゝ書く。淨眼寺か。

月前松

陰高みさはる物から見る月のけしきをそふる庭の松がえ

さし出でし月ははなれて高砂のみねに寂しき松の一本

後朝戀

別れてもさながらとまる移香にけさは又寢の牀もおき憂し

月前紅葉

さし出づる影に千入のいろ見えて夜のもみぢは月ぞ染めける

曉時雨

はれそむる峯よりしらむ曉もしぐるゝ方はふかき夜の空

關路雪

相坂やせきの岩かど埋もれて雪ふみならす冬のたび人

舊戀

よも知らじ年をふる野の忘れ水わすれもやらで袖ぬらすとは

村田光庸妻のおもひにこもりゐけるによみて遣はす

思ふぞよ嵐も霜もさむき夜になき人こふる袖はいかにと

雪のふりける日同じ人のもとへ

○陰高み　松陰が高いので月影に障りはするものの松が枝が月の趣を添へる。

○別れても云々　別れても會つてゐた時そのまゝに殘つてゐる殘香　○又寢云々　一度起きてまた寢た牀を起きるのもつらい。

○千入のいろ　幾度も染めた色。

○よも知らじ云々　昔の戀も忘られて年を經たが自分には敢て忘れることも出來ないでひそかに泣いてゐるとはかの人はまさか知るまい。ふる野は大和山邊郡。年を經るをかけた。忘れ水はきれ〴〵に流れて人に知られぬ流水。

○おもひにこもる　喪にこもる。

ともに見し人は此の世になき跡を今日の雪にもさぞ忍ぶらむ

年内梅花

まづ咲きておのが匂ひを梅の花くる春さそふしるべにややる

海邊雪

はまゆふも埋もれはてて白雪の百重に積るみくまの浦

花

山櫻ちらずば千代もながらへむ老をわするゝ春のこのもと

述懐

世の中にかなはぬまでのあらましも頼み短き老の身ぞうき

關路鶯 天明二年壬寅

うちとくる關のしみづに鶯もはつねおくれぬ逢坂の山

簷梅

朝戸出のそでこそ匂へ軒端よりはるや立枝の梅のはつ花

野霞

春の日はゐな野をゆけど有馬山ありとも見えず立つ霞かな

岡上若菜

○なき跡　死に去つた遺蹟。跡は雪の縁語。

○まづ咲き云々　梅の花が春に先だつて咲いて香を送つたのは春を誘ひ出す道案内としてか。

○はまゆふ云々　熊野の濱に生えてゐるといふ濱木綿も雪に埋まつてしまつて。濱木綿の白い花が重なり咲くのでかさなる意の序とする。萬葉集「み熊野の浦の濱木綿もゝへなす心はもへどたゞに逢はぬかも」

○かなはぬまでのあらまし　豫期した事が此の世で成し遂げられぬほどの前途の短い頼みない老の身が悲しい。

○うちとくる云々　今まで氷に閉されてゐた關の清水が春になつて解けて。

○朝戸出　朝戸外に出ること。

○軒端云々　軒端から春が立つかに高く枝の立つ梅の樹に初花が咲いた。

○ゐな野　豬名野。攝津河邊郡。

○有馬山　攝津有馬郡。萬葉集「しなが鳥ゐな野をゆけば有馬山夕霧立ちぬ宿はなくして」新千載集「津の國の武庫の奥なる有馬山ありとも見えず雲のたな引く」

春くれば若菜つむとて里の子がならしの岡は雪ものこらず

寄霞戀

あら玉の春たちそむる朝霞ほのかに見てし人ぞこひしき

あづさ弓春のかすみの日にそへて深くなりゆくわが思ひかな

河上柳

露しげし淀の川舟さすさをの雫もかゝる岸のあをやぎ

夜梅

かたしくもたが移香の袖ならで春の夜あかず匂ふ梅が枝

梅香留袖

立ちよりてたゞ一枝を折りしよりなごりいくかの袖の梅が香

羇中雨

いづ方とながめもやらむ雲とぢて雨さへ今日はふる郷の空

夜花

よるもなほ夢路にだにも見し今日の花染衣かへしてぞぬる

中々に月もなき夜はさくら花さだかにぞ見る思ひねの夢

山の端に花かあらぬか霞ともくもとも見えずはるの夜の月

○ならしの岡　大和生駒郡。里の子の行きなれた岡の意をかけた。
○あら玉の　春の枕詞。
○春たちそむる　春の立つに霞の立つをかけた。
○あづさ弓　春の枕詞。
○日にそへて云々　一日々々と日に増して霞の深くなる、わが思ひが深くなる。
○さすさを　舟に棹さす棹の雫。
○かたしく云々　衣の片袖を下に敷いて獨寢した袖で誰の袖の移香でもない。
○なごりいくか　袖に名殘が幾日も殘つてゐる。
○いづ方と云々　故郷は何れの方かと眺めやらうぞ旅路は雲に鎖されて雨までが降る。ふるさとに雨の降るを言ひ掛けた。
○よるも云々　夜でも夢にまで見た花を夢にまた〳〵見たいと衣を裏返しにして寢る。古今集「いとせめて戀しき時はうば玉の夜の衣をかへしてぞきる」花染衣は露草の花で染めた衣、こゝでは今日の花とつゞけたに過ぎない。
○中々に云々　月のない闇夜は夢に見た方が却つて花がはつきり見える。
○花かあらぬか　花であるか或はさうでないか。

馬上見花

駒とめて春の川べにさく花の影も見がてら水やかはまし

杣花

咲き匂ふ花にこゝろやひかるらむ宮木いそがぬみをのそま人

水邊落花

吉野川見しや花ともわかぬまに高嶺の雲も瀬々のうたかた

河の瀬にならひそめてや吉野山はる咲く花の早くちるらむ

寄暮春戀

こぬ人の花見がてらの頼みだに絶えてかなしき春のくれかな

四月の初めみちのおくの會津の人小野田直生が訪らひ來けるかへるに

遠くとも心あひづの山ならばふみだに通へあづま路の空

寄瞿麥戀

きぬ〴〵におきてわかれし牀夏の名もむつまじき花の朝露

山家水

曙郭公

世の中のうきこと聞かぬすまひかなたゞ山水の音ばかりして

○影も云々　花の影も見ながら馬に水を飲まさうか。

○宮木　宮殿造營に使ふ材木。

○みをのそま人　舟や筏の通ふ深い水路を杣木の筏を急いでも濟がぬ杣人。

○見しや云々　見て花であるかと見わけのつかぬ霎時の間に。

○うたかた　水の上に浮く泡沫。

○河の瀬云々　河瀬の流れの早いのにならつてであらうか。

○花見がてら云々　花見をかねて來るだらうといふ心頼みさへも。

○心あひづ　心のあふに地名の會津を言ひ掛けた。

○牀夏の名云々　起きて別れた牀その牀夏といふ名が花の姿といつも變らぬといふ意味で親しく懐かしい、その花に朝露がかゝる。

夏旅

忍びねを夜半にはなかで時鳥などあけぼのの空はまちけむ

もらしけりさ月まつまも時鳥しのぶかぎりや有明の空

故郷のたよりならねど旅ごろも夏は袂に風ぞまたるゝ

寄水鷄戀

うき中は閨の戸たゝく水鷄にも驚かぬまで月日へにけり

旅宿夢

うつゝにはいつかといとゞ草枕なごりかなしき故郷のゆめ

杜夏草

こがくれて涼しき陰とかる人もほかより茂き森の夏草

泉邊納涼

日くるれば泉のもとを立ちさりて忘れし夏のかへる物うさ

寄蟬戀

なくせみも明日は我が身の外ならじ秋かぜ近き中のちぎりは

海述懷

ありふればみちくる潮のいやましにからき此の世をうみ渡るかな

○忍びね　時鳥の初音。

○もらしけり云々　時鳥を聞かうと待つて、夜おそく出る月が出ても鳴かず、待ちあぐんで堪へられなくなりかゝつた最後に忍び音を漏らした。その時は最早夜が明けて月も有明となつてゐた。さ月待つは古今集「五月待つ山時鳥うちはぶき」の詠によつた。

○うき中云々　もとは水鷄の鳴く音もその人かと驚いたが、今や捨てられた悲しい戀では水鷄にも驚かぬほど遠々しくなつた。

○いつかと　何時故郷に歸ることかと。

○こがくれて　木陰に隱れて。

○茂き　茂る人の多い。夏草のしげきをかけた。

○日くるれば云々　夕方まで泉邊に涼んで夏を忘れてゐたが、日が暮れてそこを立ち去つて。

○明日は我が身云々　明日はわが身も蟬のやうに泣き暮すべきであらう。

○秋かぜ　秋を厭きに通はせて男女の愛情のさめるにいふ。

○ありふれば　生存して世に長らへ經てゆけば。

○いやまし　いよ／＼益々。

○からき　鹽の鹹いに世のつらい意の辛きをかけた。

○うみ渡る　つかれ弱りつゞける世を渡り倦む。此の世を住みあく伊勢物語「難波津を今日こそみつの浦ごとにこれや此の世をうみ渡る舟」

寄霧戀

心さへあやめも知らずまどふかな立ちわかれゆく朝霧の空

寄菊戀

うつろへば袖こそぬるれきくの露千年をかけしなかの契りも

野霧

隔ててもあくる光は花すゝきほの〴〵見ゆる野邊の朝霧

花の歌

たぐひなき花とはかねて聞きしかどさらに驚くみよし野の山

よし野山あくる日毎に咲きそひて昨日の花もよもの白雲

見渡せばたゞしら雲ぞにほふなる櫻やいづらみよし野の山

うせぬとも飽かぬ心をとゞめ置きてなき世の春も花をこそ見め

月の歌

明石がた浦風絶えて波だにもよるとは見えぬ秋の月かげ

落葉隨風

風早みかげのみ見えて立田川そらに流るゝ木々のもみぢ葉

くれてこそ秋は見えけれもみぢ葉も風のたよりの常磐木のかげ

○あやめも知らず　わけもわからず。

○うつろへば　花の色衰へ萎むに戀仲のかはる意をかけた。

○あくる光　夜が明ける朝の光。花薄が朝霧の間にかすかに夜明けの光に見える。

○さらに驚く　今更に驚く。

○あくる日毎　毎日々々夜の明ける毎に。

○しら雲ぞにほふ　滿山の櫻が咲いて花と思はれず、白雲だ艶麗に照りはえてゐるやうだ。それにしては櫻は何處に咲いてゐるのか。

○うせぬとも　身は死んでも、櫻を見厭かぬ執著心を此の世に殘しおいて。

○よるとは　波の寄るに夜とはをかけた。金葉集「有明の月も明石の浦風に波はかりこそよると見えしか」

○風早み　風が早いので紅葉が吹き飛ばされて空を流れるやうな影が立田川の水に映つてゐる。

○くれてこそ　秋が暮れて紅葉が散るやうになつて却つて秋が目につく。

落葉

もみぢ葉はちるを限りと見しかども庭の眞砂の秋もありけり

寄霜戀

草葉かは拂ひて出でしその人もかれぬる庭の霜のさびしさ

歳暮述懷

今年はと思ひし去年のあらましも又いたづらに暮れにけるかな

惜歳暮

うせぬとも千々のこがねは又も得む惜しきは年の暮にぞ有りける

立春　朝天明三年癸卯

春きぬともろこし人もあふぐらし照る日の本のけさの光を

霞隔遠樹

立ちかへりいなばの山の峯の松ちぎりたがへず霞むはるかな

羇中山

又こえていつか都にかへる山ゆくすゑ遠きこしの旅路は

堀木勝齢母の八十賀に對鶴契齢

おのが經む千世の齢は契りおく人にゆづるの聲ぞきこゆる

○もみぢ葉云々　紅葉は散れば眺めも終りだと思つたが、庭の眞砂の間に散り敷いたのに秋の眺めがある。

○草葉かは云々　寂しいのは霜枯の草葉ばかりであらうか草葉ばかりではない。霜を拂つて出て行つた人ゝ疎々しく遠ざかつたあとも寂しい。

○あらまし　豫定したこと。

○うせぬとも　千萬の黄金は失せてしまつても。

○春きぬと　春が來たよと云つて

○立ちかへり云々　行けば必ず立ちかへつて來るといふ稲羽山の松の契りをたがへず年が立ちかへつて春になつて。古今集「立ちわかれいなばの山の峯におふる松とし聞かば今歸りこむ」

○又こえて云々　再びこの歸山を越えていつ都に歸るだらう。歸山は越前南條郡。

○おのが云々　千年も生きるといふ鶴が自分の長らへ經べき千年の齢を契りおく人に讓つて鳴くのが聞える。

○雪氣にさえて　雪の降りさうなやうに寒くなつて。
○おきつ波云々　沖の波が入日の色に赤く焦れて夕方の霞が立ちこめてゐる。
○春ふかき云々　春も酣になつた春の深い心も見えて深い風情が見えて。
○おちたぎつ瀬　水が流れ落ちて涌きかへるやうな瀨。
○有明に　月が殘つて夜の明けかかつた空。
○鴈のわかれ路　鴈が春北へ歸るに人に別れゆくこと。
○あやにく云々　折惡しくも日が暮れるさいよ／＼ひどく霞も立つて。
○高き屋云々　高い家では高い梢の花でも近く見える、枝を折つてきて見るより近く見える。
○殘るかた枝云々　今日一方が吹き散らされて殘つた一方の枝の花も明日まではあるまい。嵐にあらしをかけた。

餘寒月

うすぐもり雪氣にさえて霞にはあらぬおぼろの春の夜の月

水郷春望

おきつ波いろにこがれて夕霞なにはの春はいり日なりけり

河春月

春ふかき心も見えて音羽川おちたぎつ瀬にかすむ月影

曉歸鴈

かへる鴈鳴きてすぎぬる手枕にのこるも遠きあかつきの鐘

朧にも月は殘れる有明にかすみはてたる鴈のわかれ路

暮山花

あやにくにいとゞ霞も立ちそひて夕山ざくら色ぞくれゆく

藤崎氏の家の樓にのぼりて軒近き櫻の花のさかりなるを見て

高き屋は高き梢もたをりきて見るよりちかく見るさくらかな

夕落花

ちる花に明日の頼みもなく／＼ぞ暮るればかへる春の山風

おのづから殘るかた枝も明日まではあらし吹きそふ花の夕暮

忍久戀

いたづらにいつまでとてか忍ぶらむ思ひそめては年もへにしを

羇中關

たび衣ひもかさなれば白川のはるかに聞きし關も越えけり

閑庭落花

花は根に宿は有りつる寂しさにかへる夕のにはの春風

明日よりはまれの人めの跡だにもあらしの庭のはなの白雪

中里つね國此の春山田なる西山氏の子になりて罷りける今は政樹といふが許へ四月のはじめつかたよみてやる

つてにても山田の原のほとゝぎすきかばや聞きし君が言の葉

山新樹

あかざりし花の名殘とみよし野の山は青葉も懐かしきかな

雨後郭公

月になく初音やこよひ五月雨のはるゝ雲間の山ほとゝぎす

後朝戀

くれなばといひし言葉にかゝらずば思ひきえなむ別れ路の露

○いたづらに　何のかひもなく空しく。
○年もへにしを　年も經たのに。
○ひもかさなれば　日も重なる。紐かさなるは衣の緣語。
○花は根に云々　花は散つて土の下にかへり家は花咲く前のもとの寂しさに返る。
○明日より云々　花が咲いてゐればたまに來た人もあつたが、今日花が散つて明日からは珍らしい人の跡もあるまい。嵐が吹いて白雪と花の散つた庭は。
○中里つね國云々　伊勢松坂の人中里常國、伊勢山田の西山氏の養子になつて行つて西山主計政樹と改名してゐた人の許へ遣はした歌
○つてにて云々　人傳にでも聞きたいものだ、山田の原の郭公を聞いたあなたの歌を聞きたいものだ人傳にでも。
○花の名殘と　花の名殘だと思ふと。
○くれなば云々　昨日暮れたら逢はうと言つた言葉によつて斯やうに終夜語らつて今朝の別れとなつた、若しあの言葉があつたのにかやうに會ふことがなかつたら思ひ死に死んだでもあらう。

羇中浦

たびねして心もはれず都のみ思ひあかしの浦の朝ぎり

渡郭公

いづみ川いづこの空ぞ鳴く聲も遠きわたりの山ほとゝぎす

くるしさも忘れてぞきく時鳥佐野のわたりのむら雨のそら

水邊螢

夏の夜はうつる螢の影もよし宿りてや見む飛鳥井の水

顯戀

戀衣つゝむとすれどあらはれてうきなには江の玉がしはかな

羇中衣

都にはいつか歸らむいたづらに衣のすそはうら風ぞふく

雨後夏月

くるゝ夜のおのが名殘の涼しさを月にゆづりて晴るゝ夕立

水上螢

久方の中におふてふ川の瀬もやみの光は螢なりけり

夏月如秋

○思ひあかし　思つて夜を明かした。明石の浦をかけた。

○いづみ川　一名山背河。今は木津川といふ。

○遠きわたり　遠い渡し場。遠いあたりの意をかけた。

○くるしさ云々　萬葉集「くるしくも降りくる雨かみわが崎佐野のわたりに家もあらなくに」佐野は紀伊國牟婁郡。

○夏の夜云々　飛鳥井は夫木抄山城とす。「たえ〴〵に影をば見せて飛鳥井のみま草隠れ飛ぶ螢かな」

○うきなには江　うき名を難波江にかけた。玉がしはは柏の美稱。千載集「難波江のうき藻に埋るゝ玉がしは顯はれてだに人を戀ひばや」

○うら風　浦吹く風。裏にかけて衣の緣語。

○おのが名殘　夕立の名殘。

○久方　枕詞から轉じて天、空などをいふ。こゝは月。久方の中云云は月中に生えるといふ桂の川。古今集に「久方の中におひたる里」に桂の里をいひ、新古今に「久方の中なる川」に桂川をさしてゐる。

水のおもにてる涼しさはみな月の光も秋のもなかなりけり

松風晩涼

夏衣うすき袖にはゆふ風のあまり涼しきまつの下かげ

厭戀

何にかく厭はれぬべき身の程も思ひはからで思ひそめけむ

羇中眺望

ふじのねは雲の絶間に見えそめていくかになりぬ東路の空

新秋曉露

夏だにもひるまは稀の淺茅生に秋來ぬる夜の東雲のつゆ

草花映月

影やどる野もせの露のいろ〳〵に月も千くさの花ざかりかな

恨戀

夢にだに見えこぬ人はさよ衣かへす〴〵ぞうらみられける

社頭月

秋の月こと浦よりもすみの江は神の御かげや空にそふらむ

八月十五夜月いとさやかなりければ

○みな月云々　水無月の月の光も十五夜で涼しさも中秋のやうである。

○何にかく云々　どうしてかほどまで思ひそめたことであらう。

○ふじのね云々　東國の旅路で毎日富士山を雲間に眺め歩くが、その見えはじめてからもう幾日になるか。

○ひるま云々　露の干る間は稀な

○影やどる　月影は露にやどる。

○野もせの露　野も狹いばかり一面におく露。

○さよ衣云々　さよ衣は夜著。古今集「いとせめて戀しきときはうば玉の夜の衣をかへしてぞぬる」によつてかへす〴〵の序とした。うらみられを裏に通はして衣の緣とした。

○こと浦云々　他の浦よりも月が澄む住の江の浦。

年毎に名のみはあれどたぐひなき今夜の月は今年こそ見れ

片思

關守のうちぬるひまはある宵も心かよはぬ中はかひなし

遠村竹

おひつゞく青葉のひまに賤が屋の軒端も見ゆる竹の一むら

遠山霧

とほ山の殘るながめもあやにくにまだき暮れゆく秋の夕霧

被忘戀

忘られてうきも心のから衣なれずばかかる歎きせましや

月前戀

面影を思ひつゞけてながむれば見しよに似たる夜半の月かな

山家煙

隱れても峯のいほりは中々に夕のけぶりめにや立つらむ

雪中眺望

ふりつもる朝けを見ればうなばらに雪を渡せる天のはし立

旅宿戀

○名のみ　八月十五夜といふ名ばかりは。

○關守の云々　古今集「人知れぬわが通ひ路の關守はよひ〳〵ごとにうちもねななむ」によつた。

○まだき暮れゆく　はやくも暮れてゆく。

○忘られて云々　忘れられてつらいのも甘い戀に心が馴れたからで戀に馴れなかつたらかうした歎きはしなかづたらうに。

○見しよに似たる　戀人に逢つた夜と同じやうな月である。

○朝けを　一本「明けに」夜明に。

草枕つゆの契りを結びても假寢の夢はいふかひもなし

閑居歳暮

花紅葉つひに年さへとゞまらで又われひとりのこる山ずみ

古　風　天明二年壬寅より同六年丙午まで

三月二日これかれともなひて度會郡なる前山の櫻花見にまかりけるに荒木田久老など山田の人々もこれかれまじれる皆歌よみけるに

あらたまの年のやとせをこひ／＼て前山櫻けふ見つるかも

けふこずば櫻の花もみな人のこと葉の色も見でややみなむ

思ふどち來よりつどへる今日の此の櫻のめでをいつか忘れむ

こむ年も又も來て見むさくら花まへ山川のいしはふむとも

其の日荒木田久堅も此の山の花見に來べきよしかねていひけるよし聞きてまちけれど見えざりければ後によみてやりける

まへ山のみねの櫻のたか／＼に君をぞまちし春の日ぐらし

八月十五夜月はえければ

今もかもおして照るべき月影の何ごとあれぞ闇に見ゆらむ

○草枕　旅の枕詞、轉じて旅。
○つゆの云々　旅寢の草の枕に露のやうなはかない契りを結んでも
○前山　伊勢宇治と山田との間古市の附近。
○荒木田久老　伊勢外宮の祠官度會正身の子。荒木田久世の嗣となり内宮の祠官となる。文化元年歿。
○あらたまの　年の枕詞。伊勢物語「あら玉の年のみとせを待ちわびてたゞ今宵こそ新枕すれ」
○みな人の云々　こゝに集った人人のすぐれた歌も櫻の花も見ないで終つた事だつたらう。
○思ふどち　互に思ひ合つた親しい友達。
○櫻のめで　櫻を愛ずること。書紀「花くはし櫻のめでことめでは早くはめでずわがめづるこら」
○たか／＼に　足をつま立てて待ち望む様子にいふ。
○春の日ぐらし　春の永い日を日の暮れるまで。
○今もかも　今も。かは疑ひ、もは感歎を表はす。
○おして照る　おしなべて照る。

田中道麿六十賀に

うつせみのよの長人はちとせ經て君こそあらめ世のながびとは

花の歌

近からば吉野の山のさくら花昨日も今日も行きて見ましを

いかならむ吉野の山もこのごろやさくらの花の盛りなるらむ

さくら花のさかりに去年の春まへ山の花見にまかりつることを思ひ出でて

此の春もゆきて見てしが前山の花はかはらず咲くらむものを

田中道麿かしらおろしぬと聞きてよみてやる

たくひれの君が眞白髪わゝけてもあるこそよけれあたら眞白髪

月の歌

今はよ寢なむともへばあし引の山のこのまよ月いでくもよ

栗田ひぢまろが遠江國よりとぶらひ來つる歸りなむとするに

遠つあふみ遠き月日は隔つなよあふてふ名をし頼みて待たむ

諸共に夜ふくるまで月を見て

いる月は明日も暮れなば出でなめど君と見む夜をいつとか待たむ

○うつせみの　世の枕詞。
○長人　長命な人。

○見てしが　見たいものである。

○たくひれの　白の枕詞。こゝは眞白髪にかけた。
○わゝけても　ほつれ亂れても。
○あたら　惜しむべきこと。
○今はよ云々　今こそはよ、寢ようと思ふと山の木の間から月が出て來るよ、寢られぬよ。あし引のは山の枕詞。
○栗田ひぢまろ　栗田土満。
○遠つあふみ　遠つ淡海で遠江國をいふ。あふてふ名は遠つあふみのあふを逢ふにかけていふ。
○明日も云々　明日も日が暮れたならば月は出るであらうけれど。

信濃國の淺間の嶽いみじく燒けける音の物に響きなどして此の國までも
恐ろしく聞えければ
八しま國響きとよもすかぐ土の神のあらびは畏きろかも
大神宮の御山の杉の木もて作らせたりとて荒木田經雅神主の許よりおく
られたる文臺のうらによみて書きつけける
こひのめばよるとふ杉の此の板に言だまちはふ神もよらさね
春のはじめの酒ほがひの歌
初春の今日の豐御酒ゑら〳〵にかくしのみてな萬代までに
いざ子ども我もいましも眞幸くて萬代飲まなこの豐御酒を
尾張國人新井有尾が父の六十賀に
人の子の千世にも祈る人の親は千代にいまさね心たらひに
尾張國人大舘高門は田中道麿につきて此の頃物習ふ人なり歌こひければ
よみて與ふ
あり通ひゆきてくまさね田中のやをぢが道びく年魚市の水を
雨中待花
けふ〳〵とまつ我が宿の櫻花この春の雨にさかずも有るかも

○八しま國云々　日本國中鳴り響きわたる。
○かぐ土の神　火の神。
○畏きろかも　恐ろしいかな。
○文臺　短册などを載せる机。
○こひのめば　請ひ祈ること。
○よるとふ杉の板　神が板にのりうつるといふ板。杉の板を敲いて神を招きよせるのをいふ。
○言だまちはふ神云々　言靈の幸はふ神。言語の靈妙で不思議な作用の幸福を與へ給ふ神が寄りついて戴きたい。
○酒ほがひ　酒を勸めつ祝ふこと
○豐御酒　豐は物の十分滿ち足ることを稱美していふ。
○ゑら〳〵　滿足し悅ぶさま。
○かくしのみてな　萬代の後までこの樣にして飲まうよ。
○いまし　汝。
○のまな　飲まうよ。
○人の子云々　伊勢物語「老いぬればさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人の子のため」によった。心たらひには思ふ存分滿足する程の意。
○あり通ひ云々　馴れ通って行つて汲みなさいよ。
○田中のや　やは歎辭。
○年魚市　あゆち。尾張國熱田邊。田中道麿は名古屋に住んでゐたのでいふ。

富士の山かきたる繪に

此の神よいかにふ神ぞ青雲のたなびく空にゆきのつもれる

ある人のすゝめける對花忍昔

み吉野の山の櫻を來て見ればたぎの都のいにしへ思ほゆ

鶺鴒の繪に

天地のはじめの時にかふろぎにとつぎ教へし鳥ぞこのとり

櫻

立ちいでてふりさけ見ればあし引の山は櫻の花ざかりなり

紅葉

さにづらふ色なつかしも朝づく日かゞよふ山の峯のもみぢ葉

神無月しぐれ降りくる山おろしにあたら紅葉のちりか過ぎなむ

松の木の間に櫻花咲きたるかたに

立ちまじる櫻の花のさかりには松の葉の色も常ゆけに見ゆ

紅葉したる木のもとに鹿たてるかたに

さにづらふ紅葉ともしみ秋山の木の本さらずさをしかなくも

年の始めによめる

○青雲のたなびく空　青空を雲に見たてていふ。

○たぎの都　大和國國栖村宮瀧の吉野川に沿うて古昔離宮があつたのをいふ。

○天地云々　天地開闢の時に皇祖天神に男女の交はりを教へた鳥はこの鶺鴒といふ鳥である。

○ふりさけ見れば　遠く見わたすと。あし引のは山の枕詞。

○さにづらふ　色の枕詞。

○なつかしも　もは歎辭。

○朝づく日　朝日。かゞよふは輝く。

○あたら云々　惜しいことよ紅葉が散つてしまふか。

○立ちまじる　松の樹の間に立ちまじつてゐる櫻。

○常ゆけに見ゆ　常よりは格別すぐれて見える。

○鹿たてるかた　鹿の立つてゐる繪。

○さにづらふ　紅葉の枕詞。

○紅葉ともしみ　紅葉が少ないので。

初春と來いりとひくる諸人の豐のほぎごと聞きのよろしも

早春冰

立ちかへる春の日影に岩とことこりし川の冰(ひ)も解けて流るも

大穴牟遲命の御かたとて書きたるに人の歌こひければ

大汝(おほなむち)わは見しらねど其の神のみかたと聞けばあやにかしこし

市見俊德過ぎにし父の七年のわざすと聞きてとぶらふ歌

とほぞきし親のわかれを年よみて歎かす君が心いとほし

竹間鶯

ぬばたまのよるも聞くがに鶯はかきつの竹に宿りてをなけ

水邊梅

梅の花やどの垣つの池水にかげさへ見えてさきにけるかも

川の瀬は冰もいまだ解けなくに汀の梅の花さきにけり

戀

汐みてば磯べのたづの立田山たちてもゐてもきみをしぞ思ふ

故郷花

鶉なくふりにし里の櫻花見る人なしに散りかすぎなむ

○初春と云々　新年と云つて多くの人が家に來て入つて訪ねて來る人々のめでたい年の祝詞を聞くのが滿足されてよい。
○立ちかへる云々　年が立ちかへつて春になつて。
○岩とこ云々　冰が磐の如く凝り堅まつてゐた川の冰も解けて。
○御かた　御肖像。
○大汝云々　大穴牟遲命を我は知らないが、其の大穴牟遲神の御姿と聞くといかにも恐れ多い。
○とほぞきし　遠ざかり離れた。
○歎かす君　歎く君。
○ぬばたまの　夜の枕詞。
○よるも聞くがに　夜も鶯の鳴く音を聞かうがために。
○かきつ　垣根の內。

○解けなくに　解けぬに。

○汐みては云々　汐が滿ちて來ると立ち飛ぶ。上の句はたちてといふための序詞。たちてもゐてもは立つても坐つても。
○鶉なく　古く荒れた里の枕詞。萬葉集「鶉なくふりにし里の秋萩を思ふ人どちあひ見つるかも」

早苗

小山田に長き日ぐらし袖ぬれてさ苗とる子は立ちつかるらむ

待戀

ぬば玉の夜はふけぬれど我がせこが駒のあ音の聞えこぬかも

霞たつ春野の岡のわか松のわがまつ君はこよひこじとや

水邊夏月

浪の音の清き川瀨のつき見れば涼しくもあるか夏の夜の空

松下納涼

涼しくも吹くなる風かとほつひと松の木陰は秋來ぬらしも

不逢戀

浪間より雲居に見ゆる粟島のあはずてのみやこひ渡りなむ

六月大祓

はらひすと百の官ぞつどふなるすさかの御門ところせきまで

湖月

さゞなみの山の秋風身にしみてつきかげさむき志賀の浦浪

駒むかへ

○小山田　山の田。
○長き日ぐらし　長い日を終日。
○我がせこ云々　わが親しい夫の乘つて來る駒の足音が聞えて來ないことよ。
○霞たつ云々　上の句はわが待つといふための序。
○こよひこじとや　今夜は來ないといふのか、さても待遠いことよ。
○涼しくもあるか　涼しくもあるかな。
○とほつひと　待つの枕詞。轉じて松にかけた。
○浪間より云々　浪の間から雲のゐる大空に見える粟島。上の句はあはずの序詞。逢はないでばかりゐて戀ひつゞける事だらうか。
○すさかの御門　朱雀御門。大内裏の南門。朱雀門の邊に場所も窮屈なほど大勢の文武官が集まつてゐるよ。
○さゞなみの　志賀の枕詞。さゞなみの山は志賀山。

さす竹の大宮人し駒なべてこまむかへにと逢坂のぼる

田中道麿が年頃すみける家のあとに尾張國名古屋の靈岳院の内に立つべき石ぶみにゑりつくべき歌かのともがらのこへるによみてつかはす

聞きて來て見む人しぬべはりの木の田中のをぢがいへ所これ

はしけやしみぬの國人榛の木のをぢが形見のはりの木あせを

道麿は美濃國たきの郡榛木村の人にてやがてはりの木のをぢとなむみづからなのりけるさてなむ跡のしるしにも榛木を植ゑける

野行幸

大君のみかりたたすとふゆの野を雪ふみならす丈夫のとも

野寒草

枯れし野の尾花がむれの霜見れば秋の夕の白露おもほゆ

年の始めによめる

物ごとに神世おもほゆあらたまの年の始めのてぶりほぎごと

正月朔日日はえけるに

世の中のまがはことわりしまらくは天つ日すらもはえける見れば

江上霞

○さす竹の　大宮人の枕詞。
○大宮人し　しは强めいふ辭。
○駒なべて云々　駒ならべ騎つて駒迎へに行くとて逢坂の山を登りゆく。駒迎は八月十五日諸國から貢として奉る駒牽の馬を馬寮の使が近江國逢坂に出迎へたのをいふ
○石ぶみ　石碑。
○聞きて云々　傳へに聞いて實際にこゝへ來て見る人は昔の人を思ひ偲べよ。
○はりの木　田中道麿は美濃國榛木村の人で榛木翁と號した。
○はしけやし云々　親愛に思ふよみぬは美濃。あせは吾兄、男子を親愛していふ。をは感歎辭。
○みかりたたす　御狩に立ち出られるといふので。たたすは立つの延音。
○尾花がむれ　薄の草が叢生えてゐるのをいふ。おもほゆは思はれる、思ひ出される意。
○年の始めのてぶりほぎごと　新年の風俗習慣や新年の祝言にあらゆる物事に神代の事が想像される
○日はえける　日蝕があつた。蝕は比古婆衣によると日月の光が翳るのを忌んで反對に映(はえ)と云つたのである。
○まが云々　世の中の禍や凶事のあるも道理である、天の日でさへも暫くは蝕(むしばむ)といふことがある。

み島江の玉江のまこも角ぐみて天つみ空はかすみたな引く

戀

吾妹兒が待つらむ物を雨降りてぬれはひづとも行かずあらめや

春の歌

妹なねもいでて聞かさねそともなる竹のはやしに鳴く鶯を

草はむと綱ひきすればちる物をはなの若木になど馬つなぐ

庭梅

もろ共に折りてかざさむ我がやどの梅見に來ませ今さかりなり

誓戀

さかさまに明日香の川は流るともけしき心はわはもたじとよ

春興

春山の花の木陰ををとめどもかゆきかくゆき少女さびすも

月

月清み秋の長夜のさよ中とふけ行くしらに見つゝをるかも

月前鹿

さをしかの妻とふ山の月見れば鳴く音かなしきよはの秋風

○み島江の玉江　攝津。
○まこも云々　眞菰の芽が角のやうに出はじめて。
○吾妹兒が云々　わが親愛する妻が待つてゐるだらうよ。雨が降つてぬれても行かないで居られようか。ひづは濡れる意。ぬれは云々濡れることは濡れても。
○妹なね　なねは親愛していふ辭
○聞かさね　聞きなさいよ。
○そともなる　外面なる。戸外の。
○草はむ云々　馬が草を食ふからと綱を引けば花は散るのに。
○さかさまに云々　淵瀬のかはるといふ飛鳥川が逆に流れることがあつても怪じい心、けしからぬ心は吾は持たない。飛鳥川に明日の意をかけた。
○かゆきかくゆき　彼方に行き又こなたにゆく。
○少女さびすも　少女らしきそぶりをするよ。
○月清み　月が清いので。
○ふけ行くしらに　夜の更けゆくのも知らずに。

池蓮

みはかしをつるぎの池の花蓮さきの盛りは今日にしあるらし

増戀

我妹子にわがこふらくは新玉の月に日にけにいやしきまさる

湖月

わぎもこに逢坂山のせき越えてあふみの海の月を見るかも

隱戀

玉だれのをすのたれすに隱ろひて逢はじとすれや妹が見えこぬ

擣衣

秋深み夜寒になればしきたへの衣うつ音をちこち聞ゆ

かはる戀

月草の花にありけるわがもこが心知らずてたのみけるかも

山里の時雨

柞ちる佐保の山べに家をればしぐれの雨もふらぬ日ぞなき

草霜

たへのほにやどの庭草霜ふりて寒きゆふべは妹をしぞ思ふ

○みはかしを　劒の枕詞。
○つるぎの池　應神紀に劒池を作られた由が見える。舒明紀皇極紀に一莖二花の瑞蓮が此の池で咲いた由が見える。
○さきの盛り　花の咲いた眞盛り
○わがこふらくは　我が戀ふるのは。
○新玉の　年の枕詞。轉じて月日にかける。
○月に日にけに云々　月のたつと共に日の經ると共にいよ〳〵ひどくなりまさる。けには日を經ることにいふ。
○逢坂山云々　關を様々の戀路の妨げにたとへた。あふみは近江と逢ふことをかけた。
○玉だれの　緒又は小簾の枕詞。玉垂は玉簾の略だともいふ。
○をすのたれす　小簾の垂簾。
○隱ろひて　隱れて。
○秋深み　秋も深くなつたので。
○しきたへの　衣の枕詞。
○月草の　月草はつゆくさ、摺衣にした。染り易く萎み易いので移る滑ゆなどの枕詞。
○わがもこ云々　吾妹子の心を知らないで。
○佐保の山　奈良の郊外。
○家をれば云々　家を作つて住んで居ること、柞の散る音が時雨のやうである。
○たへのほに　白い色の表はれ出るさま。栲は白布、ほは色の映え現はれるにいふ。

杜雪

うち渡す木ぬれことごと雪ふりて眞白に見ゆる神なびの杜

寄螢戀

水くらき池の蘆邊に螢とび耀かしもよたゞに逢ふ夜は

螢にや玉梓かきてつけてまし妹がり行かば取りも見るがに

いと古き萎紅葉

秋山の梢たかけど引きよぢてにつかふもみぢいざ折らなわは

紅葉

袖かけてしづ枝の紅葉よしゑやし散らばちるとも手折りて行かむ

から錦立田の山のもみぢ葉を折らでやよそに見つゝ越えなむ

櫻花

花ぐはしわぎへの櫻人はも見に來ぬかもよあたら櫻を

春日は山のまきらひ心ぐしさくら花見にいざ行かなあれは

山守のありけるしらに櫻花ふさ手をり來てころばえにけり

み吉野の山の櫻はこちごちのこぬれしみゝに咲きにけるかも

此の夜らのあらしの風に足引の山の櫻は散りか過ぎなむ

○うち渡す　見渡す。
○木ぬれことごと　木末悉く。
○神なびの杜　大和生駒郡。
○耀かしもよ　照りきらめいてはづかしいことよ、もよは歎辭。
○玉梓云々　手紙を書いて螢につけようか、螢が飛んで戀しい女の許に行つたら取つても見ようために。
○梢たかけど云々　紅葉した梢が高くあるけれど、引き取つて縋りついて、丹色に染つた紅葉をいざ折らうわれは。につかふは丹つくの延。
○しづ枝　下枝。
○よしゑやし　よしや。たとひ。
○立田の山　大和生駒郡。裁つにかけて衣の緣語。
○花ぐはし　花が美しい。
○わぎへ　我が家。
○見に來ぬかもよ　かもよは歎辭
○山のまきらひ云々　山の際が打ち曇り蔽はれて、心晴れず。
○山守云々　山守の居たのも知らず櫻の花を澤山に(ふさ)手折つて來てごなりつけられた。ころはゆは罵り叱られる意。
○こちごち　あちこち。をちこち。
○こぬれしみゝ　梢もしげく。
○夜ら　夜。

おのづから人ぞとひくる山里も春はさくらの花見がてらに

東歌のふり

家の妹に見せむともひて雲のゐるねろの櫻を手折りてきぬよ

まよ引の横山べろの櫻ばな咲きの盛りはにぬぐもなすよ

かみつけぬ伊香保の沼のみかものすたしや別れむかなしけを置きて

足がりのみ坂こえかねなせのこや杉の木の間よ袖ふらす見ゆ

近風　天明四年甲辰より同六年丙午まで

梅

立ちならぶゆかりの庭の春風に花さかぬ木も匂ふうめが香

花

いづれをか分きて花とはながめましなべて櫻のみよし野の山

春雨

さびしさに思ひしをれてながむれば木草はめぐむ宿の春雨

蓮

風こえてちるぞ涼しき蓮葉になにかは露を玉とのみ見む

○見せむともひて　見せむと思ひて。
○ねろ　嶺。古代東國方言。
○手折りてきぬよ　手折って來たよ。
○まよ引の　横の枕詞。横山べろは横はる山のほとり。
○にぬぐもなすも　布を引きのべたやうな雲の如くにあるよ。
○かみつけぬ　上野國。
○みかも　鴨。
○たしや別れむ云々　立ち別れようとするのが悲しい。
○足がりのみ坂　足柄の御坂。足柄峠の古名。
○なせのこや　汝兄(せ)之子や。せはすべて男を尊み親しみていふ稱。こも親しみいふ辭。
○木の間よ　木の間から。
○袖ふらす　袖振るの延音。
○立ちならぶ云々　花咲かぬ木が花咲く木と立ちならぶ。
○いづれ云々　どれを花としてとりわけてこれが花だと眺められようか、山一面櫻の咲き滿ちた吉野山は。
○めぐむ　芽を出す。
○風こえて云々　蓮葉の露を玉と見るばかりではない、蓮葉から露のちるのが涼しい。古今集「蓮葉の濁りにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく」

納涼

陰高きかた山松の下すゞみ涼しさあかぬ夏のゆふかぜ

蟲

霜おかぬ鈴むしの音も秋ふけてかれ〴〵になる庭の淺茅生

菊

庭の菊ちぐさの後の一くさにまたいろ〳〵の花ぞさきける

紅葉

影見えて梢ながらの紅葉にも紅ふかきたつ田川かな

時雨

風早みよその空よりさそひ來てくもの晴間もふるしぐれかな

雪

ふるまゝに木毎の花は昨日にて今日はくもかとうづむ白雪

初戀

昨日今日思ひつくばのみなの川淵とはなさで逢ふ由もがな

忍戀

きえねたゞしのぶの山のこがくれに袖のみぬらす下草の露

○かた山松　片側の山に生えてゐる松。

○かれ〴〵　蟲の音の嗄れ〴〵に疎々しく離れ遠ざかる意をかけた

○ちぐさの後の一くさ　庭の色々の草の花が散つた後に菊といふ一草に黄白色々の花が咲く。

○梢ながらの紅葉　梢にあるまゝの紅葉。

○紅ふかき云々　紅の花深きの深きは川の緣語。

○風早み　風が早いので。

○昨日今日云々　つい今日此の頃戀の物思ひそめたが戀の積つて淵とならぬうちに早くも戀が叶つて逢ふやうになりたいものだ。後撰集「筑波嶺のみねより落つるみなの川戀ぞ積りて淵となりぬる」

○きえね云々　岩代信夫山の下草の露、木陰にかくれて人の袖ばかりぬらす露は消えてしまへよ。戀を忍び隱して淚に袖ぬれるをかけた。

年の始めに

浪の上に出づる朝日も伊勢の海やうら〳〵かすむ初春のそら

春の來てふりゆくわれも百千鳥聞けば心はあらたまりぬる

關路早春

關の戸のあくる空より春來ぬと杉むら霞むあふさかの山

遠村霞

にほひだにふきも及ばずはる〴〵とかすむ梅津の里の春風

風にほふ梅津の里のしるべだに絶えてつれなくかすむはるかな

野外殘雪

ふみ分けし御狩のあともさながらに殘る交野のこぞの白雪

むらたの光庸とぞの師走の二十日あまりの頃うせにけるむ月の二十日ごろかの家にとぶらひまかりてよめる

宿とへど行きけむかたも白雪の消えにし跡はいふかひもなし

山家嵐

たへがたき峯の嵐もなれぬればなれて月日のすぎのいほかな

山霞

○うら〳〵霞む。伊勢の海の沿岸浦々が霞む。うらゝかの意をかけた。

○ふりゆく云々　春が來て古くなつて老いゆくわれも、いろ〳〵の鳥の囀るのを聞くと心は新しくなる。古今集「百千鳥囀る春はものごとにあらたまれども我ぞふりゆく」

○關の戸云々　新年と明けた空から春が來たと關のある逢坂山の杉の茎り生えてゐるあたりが霞む。年の明くるを關の戸にかけた。

○にほひだに云々　春風が梅の香さへ吹き及ばぬ程遠く霞む。梅津は山城葛野郡。

○しるべ云々　梅津へゆく道の案内さへも絶えて無情にも霞み隔てる。

○あともさながら云々　御狩のあともそつくり其の儘殘る。交野は河内北河内郡。古の遊獵地。

○行きけむかたも白雪云々　白雪に知らずを掛けた。雪の消えにし跡に死を言ひかけた。

○月日のすぎ　月日の過ぎるを杉の庵とかけた。

青柳のかづらき山のあさみどり霞もなびく峯の春かぜ

鈴鹿山ふりさけ見れば日にそへて深くなりゆく春がすみかな

色ふかき峯の檜原もはつせ山はつかに見えてかすむ春かな

梅風

花の香に霞もにほふ夕かなわたるか風のうめの立枝を

萩

夕風のふかぬ末葉もなびくなりおもるか露の秋はぎの花

梅薫夜風

月に見てまつ宿いづく春風のこてふに似たる夜半の梅が香

水邊古柳

影見るも今いく春と朽ち残るあはれもふかき川やなぎかな

寄若菜戀

戀すれば野邊の若菜もよそにみてあはぬ歎きをつむ春日かな

羇中雨

日も暮れし山路のあめに旅衣ほすべき宿もなく／＼ぞゆく

寄雲戀

○青柳云々　青柳を鬘にしてゐる葛城山に草木の芽はえて淺緑になつて。なびくは鬘の縁語。葛城山は大和南葛城郡。

○鈴鹿山云々　鈴鹿山を遠く見渡すと一日々々と春深くなり霞も深くなる。ふりさけは遙かに見放つ意。ふりは鈴の縁語。鈴鹿山は伊勢鈴鹿郡。

○峯の檜原云々　初瀬山の峯の檜の生ひ茂つてゐる所もかすかに見えて霞む。はつせ山ははつかといふための序。大和磯城郡。

○わたるか云々　風が梅の枝を吹きわたるのか。

○おもるか云々　露が重くなつたのか。

○月に見て云々　月影に照る梅を見て月夜がよいと人を待つ家は何處であらう、春風が我に來いといふやうに梅が香を送つて來る。古今集「月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たずしもあらず」

○歎きをつむ　若菜摘むに歎きを積むをかけた。

○宿もなく／＼　宿も無くに泣くをかけた。

待つ人のさはるも知らで月にのみ誰恨むらむよひの雨雲

中々に絶えもはてなでうき雲の空にうきたる物おもふかな

　庭に櫻を植ゑていかでとくさかなむと思ふ年うるふ正月の有りていとゞ待遠におぼえければ

くはゝるも中々つらし櫻ばなまださかぬまの春の日かずは

見花

うき物と何思ひけむ櫻ばな見れば心のとまるこの世を

山ざくら花見る時は我がやどにあだし木草はうゑじとぞ思ふ

世にあれば今年の春のはなも見つうれしき物は命なりけり

野花留人

立ち出でゝ山わけ衣ながき日を今日はすそ野の花にくらしつ

曉庭落花

花さそふあけがた寒きまきの戸に雪吹きいるゝ庭のはる風

橋邊山吹

枝たれて岸より岸に山ぶきの花もかゝれる谷川のはし

寄花戀

○待つ人云々　かの人を待つてゐるにその來ないのはさしさはる事があつてであるのを知らないで、月のために雲を怨む。さはるは月に雲の障るをかけた。
○中々に　なまなかにこの戀が斷然絶え果てもしないで。

○くはゝるも　年が閏で春になるに日數が加はるのも。

○うき物云々　櫻花を見るとこの世に心が引かれとまるのに、どうして此の世を憂きものと思つただらうか。
○あだし木草　他の木や草。

○山わけ衣　山路をわけゆく時の衣。裾野の裾は衣の縁語。

○まきの戸　槇の戸。
○雪吹きいるゝ　落花を雪に見立てていふ。
○岸より岸に　こちらの岸から向ふの岸に。

此の春は花をも知らで過すかな人のうつろふなげきのみして

卯花隱路

ひまもなく里の卯の花咲きにけりとはむ垣根も道見えぬまで

盧橘驚夢

しばし見る夢路なやます袖の香も同じむかしの軒の橘

杜五月雨

かた岡のもりの梢のひまなきに雫もしげき五月雨の頃

明方の空を烏のなきてわたる絵に

鳴く聲はあけゆく空におのれなほ夜の色なる朝がらすかな

寄郭公戀

しのゝめの鳴く一聲にかこたれてうききぬ〴〵の時鳥かな

樹陰蟬

すゞしさは蟬の羽袖になく蟬の聲もおちくる森の下かぜ

夕納涼

片岡のもりの木陰の夕すゞみすゞしくなりぬ賀茂の川かぜ

行路夕立

○人のうつろふ云々　人の心が變ることを歎いてばかり居て。

○袖の香云々　古今集「さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」

○かた岡のもり　新古今集「郭公聲待つほどは片岡の森のしづくに立ちやぬれまし」片岡の森は山城賀茂にある。

○鳴く聲は云々　鳥の鳴く聲は夜明けの空を告げてゐるのに鳥自身の色はまだ夜の色で黒い。

○しのゝめの云々　夜明けに郭公が鳴くその一聲で短夜ももはや明けたかと歎かれて朝の別れの後朝がつらい。

○蟬の聲も落ちくる　蟬の聲も涼しい風に急に吹きおろされて來る

旅人のみのふく風もすゞしげにふりゆく野路の夕立の雨

寄螢戀

音にたてぬ思ひもかくと包みても見せばや人にもゆる螢を

山家橋

あけくれにひとり見渡す一つ橋われも友なき谷かげの庵

野亭夕萩

咲きつゞく萩をまがきにゆふ露のながめえならぬ野べの假庵

寄露戀

しげしとは誰がひがごとぞ物思ふわが袖しらで宮城野の露

山家水

山かげはすまぬ思ひもすむばかりさもいさぎよき水のおとかな

覺性院の庭にたゞ一本紅葉の色こきを見てあるじの戒言法師の天台宗の心を

一木てる紅葉を見ても二つなき法にこゝろは深くそむらむ

橋月

すみ渡る月のひかりも中絶えてうき雲かゝる久米のいははし

○音にたてぬ云々　聲に出して云ひ表はさぬ心の惱みもこの通りださもえたつて光る螢を包んでかの人に見せたい。

○まがきにゆふ露　籬に萩を結ふに夕をかけた。

○えならぬ　言ふにいはれぬ。

○しげしとは云々　宮城野の露がしげく多いとは誰の云つたまちがひであるか、物思ひ煩ふわが袖の涙の露がしげくあるのも知らないで。

○一木てる　一本だけ赤く美しく紅葉してゐる。

○二つなき法　天台宗の一乘圓頓の妙義をいふ。法(のり)を乘にかけて二つなき法に一乘の法をいふ法華經「唯有一乘法、無二亦無三」

○中絶えて云々　新古今集「葛城や久米路にわたす岩橋の絶えにしなかとおりやはてなむ」

殿村道應みまかりけるいまはのきはによみける歌を見て
染めおけることゝろも深き言の葉に露と消えにしなごりをぞ思ふ

年の始めに詠める
さしいづる此の日の本の光より高麗もろこしも春を知るらむ

水邊梅
玉島や梅さくころは中空を匂ひながるゝ春のかはかぜ
とけにけり氷ながるゝ川のべにおくれぬ梅のはなの下ひも

殿村の道應冬みまかりにける又の年の正月詠雪無常
さきだちし跡忍ぶまに春の來てはかなき雪も袖ぬらしけり

初戀
ともすればおつる涙も戀衣なれぬたもとは包みかねつゝ

柳露
ちりもせでさながらなびく青柳は露のよそめもこのめ春雨

二月二十日のほど宙外法師の山崎にかへるに
いかにせむ別れは鴈のゆくへだに眺められぬる心細さを

初花

○染めおける云々　和歌の道に深く心を染めて熱心であつたその意味の深い和歌に。言の葉は和歌。葉、露。消ゆは縁語。
○玉島　肥前松浦郡玉島。玉島川一名松浦川が流れてゐる。
○中空　空の中程。
○とけにけり　氷の解けるに下紐のとけるをかけた。
○ちりもせでさながら　露が散り落ちもしないで青柳の枝についたまゝで。
○なびく青柳　風に靡く青柳。
○このめ春雨　木の芽が生え出る春雨。木の芽の出るを張るといふに春雨をかけた。
○別れは云々　鴈が春になつて北に別れ歸りゆく行く方までも名殘惜しく眺められる心細さを何とせう。

ちることもまづやとかつは歎くかな疾きがうれしき初櫻花

故鄕落花

散りぬれば春の昨日の花園もおなじ昔の志賀のふる鄕

祈戀

いのりてもまつにはきかで初瀨山おなじ檜原のゆふ暮の鐘

野菫

春の野にすみれは花の名のみして摘みつゝかへる都人かな

雨後郭公

村雨の雲間をすぎしほとゝぎす今一聲は月すめる空

五月雨のふりぬる聲も珍らしく晴るゝ雲間の山ほとゝぎす

松下納涼

秋さへや忍びて夜は通ふらむ吹く風すゞし松の下みち

別戀

おきゆくもこれや限りのそでの露ひるまもたへぬ命なりせば

霧中鹿

かくれても鳴く音あやなしさを鹿の妻とふ山のみねの夕霧

○ちることゝ云々　早く咲くのだ嬉しいが散るのも先であらうかと一方では歎かれる。

○散りぬれば云々　花が散つてしまへば春は最早昨日と過ぎ去つた花園。新古今集「あすよりは志賀の花園まれにだに誰かはとはむ春の古さと」

○春の野云々　春の野に住むといふがそれは菫といふ花の名ばかりで都の人は野に住み留まりはしないで菫を摘んで歸る。萬葉集「春の野に菫摘みにと來しわれぞ野をなつかしみ一夜ねにける」

○村雨の云々　村雨の雲間を郭公が鳴いたが雲が通り過ぎて月がすみ渡つた空にまた一聲鳴いた。

○ふりぬる聲　聞きなれた聲。五月雨の降るに聲の舊るをかけた。

○秋さへ云々　松の下道吹く夜風が涼しい夜は秋が人知れず通つて來るのであらう。

○ひるま云々　朝露の乾る間も堪へ續けられぬ命であらうならば。

○かくれても云々　鹿の姿は隱れてその鳴く音はあやなくも隱れず聞える。

逢不遇戀

立ちかへりつらき月日を隔てても見し面影は身をも放れず

重陽宴

千世ふべしかざしの花のつゆおちてのむ杯も菊の下水

風前落葉

いたづらにあたら錦をたつた彦いかにあらぶるみねの嵐ぞ

檜垣嫗がみづから作れるかたとて近き年肥後國なる岩戸山といふ所より掘り得たるをうつせる形とてかけるに人の言こひければまこといつはりは知らねど

流れての世に忍べとや白川のみづからかゝる影はうつせし

古寺雪

飛鳥寺いく世か年のつもりても跡はのこれる雪のふる里

山のおくにおこなふ道や絶えざらむかねの音する雪のふる寺

恨戀

うき人よ衣のすそにかぜ吹かばわが心をもさぞとだにしれ

孫の生まれたる七夜に垣ある所に唐兒どもたはぶれたる形を染めたるう

○立ちかへり云々　相見てから心苦しい月日を隔てても、曾て見た面影は立ちかへつて身を放れない

○千世ふべし云々　菊の花を揷頭にしてその花の露が杯に落ちて飲む酒も菊水の酒で千世まで生きることであらう。重陽の日に酒菊を飲んで千代を壽ぐ。

○いたづらに云々　何のかひもなく空しく紅葉の錦を裁つて惜しいたつた彦は大和立田神社の攝社に祀る龍田比古龍田比賣の神で風神錦を裁つに言ひ掛け。

○檜垣嫗　筑紫白川に居た。家集がある。後撰集大和物語參照。

○みづから云々　自作の肖像。

○流れて云々　後代に昔檜垣嫗が居たことを思へといふので自らかゝる姿を寫したかの意。白川は嫗の居た所。自らを水にかけて白川の緣とし、流れて、白川、水、影、映す、みな緣語。

○飛鳥寺　法興寺又は元興寺といふ。大和高市郡にその廢址がある。

○年のつもり云々　積る、跡、ふるは雪の緣語。

○おこなふ　佛道の修行する。

○うき人　つれない人。

○衣のすそ云々　新古今集「さらでだに恨みむと思ふ吾妹子が衣のすそに秋風ぞ吹く」

ぶぎぬを贈るとて

垣の内に千年をしめてから衣うらやすげにも遊ぶなるかな

關路雪

岩かどもうづめる雪に相坂やなか〱やすき關の通ひぢ

絕戀

見せましをたえぬる中はいふかひも涙かわかぬ袖のうへかな

人の一週忌に月

めぐりこし月にとはばやこぞのけふ雲隱れぬる人の行方を

夜半の月すぎにし人はかげも見ず涙あやなき袖の上かな

ともに見し昔ながらにその人のなきが寂しき月のかげかな

湖月

見る人も打出の濱の夕浪にひかりおくれぬ秋の夜の月

朝鶯

さし出づる朝日もにほふ梅がえに春をあらそふうぐひすの聲

初春

初草もまだ見ぬゆきに朝がすみ春のけしきをかすが野の原

○うらやすげに　心安さうに。

○見せまし云々　涙にぬれた袖を見せもしたいが、もはや絕えた中はいふがひもない。

○雲隱る　みまかる。

○涙あやなき袖　涙がわけもわからずむやみに流れる袖。

○ともに云々　一しよに月を眺めた當時のそのまゝの月で。

○打出の濱　近江大津附近琵琶湖畔。

○ひかりおくれぬ　見る人が打出に出るのにおくれず光る月。

○朝日もにほふ　朝日も色美しく輝き映える意に梅の花の匂ふをかけた。

江上霞

津の國の難波ほり江は玉よりもはる日うらゝに霞しく頃

岡若草

雪消えぬほどこそあらめ春の色をえやはしのぶの岡の若草

遠尋花

たづね入る花のそらめにはかられて分けしや幾重峯の白雲

さきぬべき花の梢も風さえておもかげ遠きはるの山ぶみ

花にとやふるさと人は見やるらむまだ白雲にまよふ高嶺を

名立戀

あはでのみ思ひ侘びしにくらぶれば立つ名のうさは物の數かは

有賀長伯五十年の遠忌に孫なる長收すゝめける懷舊

草の名よかけじとすれど軒ふりて袖のよそにはおちぬ下露

尋花

さくら花たづねて深く入る山のかひありげなる雲のいろかな

咲きにけり山わけごろも春風も袖にほのめくをちの花の香

翟麥露

○津の國云々　難波堀江は今の大阪の地で仁德天皇の時開鑿された
○玉よりも云々　玉を敷き列ねるよりも春の日うらゝかに霞を敷きのべる。
○春の色云々　雪の消えない間こそは若草も春色を忍び隱しもしたらうが、もう雪も消えては岡の若草は春の色をよう忍び隱し得られぬ。
○花のそらめ云々　白雲を花かと見違へて、その見違へにだまされて。夫木和歌抄「尋ねくる高間山の花盛り雲と見つるはそらめなりけり」
○山ぶみ　山を踏み分けゆく事。
○あはで云々　逢はないで煩悶したのに比べれば戀が叶つてうき名の立つつらさは何でもない。
○草の名云々　軒端の忍草よ。故人を偲ぶことよ。涙の露を袖にかけまいとするけれど矢張り袖より外には落ちないで袖がぬれる。
○入る山のかひ云々　山に入つたかひのある、探しがひのある。かひに山の峽をかけた。
○山わけごろも　山路を分け入る時に著る衣。

いかならむねよげに見ゆる牀なつの花におきゐる露の心よ

高山時雨

紅葉かは富士の高嶺のむら時雨はれゆくあとはゆきの白妙

立春眺望

ふる年は一夜隔たるながめとて昨日の雪もかすむ山の端

秋の歌

山々のもみぢそめなす立田姫さぞないとまもなが月のころ

社頭雪

雪ごとは消えての後やしらゆふにさながらまがふもりの榊葉

寄螢戀

秋風の吹き來るかたにとぶ螢うき身にしむと人に告げこせ

忍ぶれば星のかげだにいとふ夜をさもあやにくに飛ぶ螢かな

柳のあたりに燕をかきたる繪に

うちなびく柳が枝の春風におのれ亂れてとぶつばめかな

年の暮に

行く年はとてもかくてもはてしあれば宮も藁屋も同じけふかな

○ねよげに云々　常夏の根の好さうに見える。寢よげにと云ひ掛け。常夏に寢よげの牀をかけた。

○紅葉かは云々　時雨が晴れたあとは高嶺の木々は時雨に紅葉する筈だが、紅葉どころか白妙の雪である。

○立田姫云々　秋の女神の立田姫が山々の紅葉を染めるのに忙しくさぞや暇もないことだらう長月の頃は。暇もないを長月とかけた。

○雪ごと云々　榊に白く見えて白木綿と見ちがへられるのを雪だとは消えて後に知られるだらう。白ゆふは榊に下げる白いかぢの木の学

○うき身に云々　悲しみ惱んでゐる身に秋風がしみて感ぜられる人に告げてくれよ。

○忍ぶれば云々　人に隱れ忍んでゐるので星の光さへ厭ふのにあれ程まで生憎に螢が光つて飛ぶよ。

○行く年云々　過ぎゆく年は何でもかでも果てがあるから。新古今集「世の中はとてもかくても同じこと宮も藁屋も果てしなければ」

年のくれ流れよる瀬はよそならで老の數つむみをの杣川

古風　天明七年丁未同八年戊申

初春霞

さゞなみの逢坂山のあさがすみ關うちこえて春きぬらしも

水邊若菜

かすみたつ春野の澤に袖ひぢて若菜つむ子が家とはましを

むかつをに霞きらへり川上の汀の若菜もえぬらむかも

春風に野澤のこほりうちとけて若菜つむべく成りにけるかも

野鶯

春の野はかすみ立ちけるあしたよりをりはへて鳴く鶯の聲

庭梅

さきぬとも知らねや庭の梅の花契りし人の今日も見にこぬ

春戀

門に出でて妹まつらむに菅の根の長きはる日は早もくれなむ

里山吹

○みをの杣川　材木を伐り流す三尾川。近江高島郡三尾鄕に三尾山があり三尾川が流れてゐる。拾遺集「高島や三尾の中山杣たてゝつくり重ねよ千代のなみくら」

○さゞなみの　坂の枕詞。

○袖ひぢて　袖をぬらして。

○家とはましを　家を尋ねたい。萬葉集「この岳に菜つます子家きかな」

○むかつを　向つ岡。

○霞きらへり　霞にかすんでゐる

○をりはへて鳴く　長くつゞけて頻りに鳴く。

○菅の根の　長きの枕詞。

○早もくれなむ　早く暮れてほしい。

山吹の花さくころはともしかもゆきくと見らむ井手の里人

紅　葉

いにしへに有りけむ人は秋山をもみぢ葉見ればうべもめでけり

名立戀

吾妹子しいかに思へか劒太刀名のみを立ててさね逢はざらむ

折　花

山づとに見せむと思ひて櫻ばな道のながてをたをり持ちきぬ

ぬすまひて一枝をりつ山守のあからめもせぬ山のさくらを

栗田土滿が遠江國にかへるに

卯月たち里の垣根に咲く花の名にこそ思へ君が別れを

同じ時鈴木書緒が同じ遠江國にかへるに

千とせにと我をことほぐ鈴の屋の此の松の木を忘らすな君

五月のころ倉石爲光が越後國にかへるに

こしへゆく君しともしも遠つ人鴈とし思はば秋またましを

山家落花

み山べに家ゐしをれば櫻花ちるまで人の見にもこぬかも

○山吹の云々　山吹の花咲く頃は珍らしく面白いことよ。行くにも歸るにも見ることだらう井手の里人は。井手の里は山城綴喜郡。

○いにしへに　萬葉集額田女王の春秋の哀れみ判別した長歌による

○吾妹子し　しは強め辭。

○いかに思へか　いかに思へばか何と思ふからだらうか。

○劒太刀　名の枕詞。

○さね　實に、まことに。

○山づと　山里からのみやげ。

○ながて　長い道のり。

○ぬすまひて　盜みての延。隱れて密かに。

○あからめ　わきめ。目を離すこと。

○垣根に咲く花の名　卯の花の卯を憂にかけて君と別れるのを憂しと思ふの意。

○忘らすな　忘るなの延。

○君しともしも　君が越路へ歸るのが物足らずさびしい。

○遠つ人云々　遠く北へ歸つた君が鴈ならば又來る秋を待たうものを。

むかひゐて見る山里の櫻花ちりて明日ゆはさぶしけむかも

繪に山里めきたる家に藤の花咲きたるところ

藤なみの花しちりなば山里に明日こむ人はしるしあらめや

かくばかり色こきものを藤浪のなみに思へや人の見にこぬ

白子の村田橋彦 田鶴が屋 久しく音せぬによみてやる

たく衾白子の濱のたづがねを久しく聞かでたづ〳〵しかも

七里政要が松の屋の歌

草陰の安濃の城のべのまつのやは榮えぞゆかむ松の常磐に

近風 天明七年丁未同八年戊申

初春霞

出づる日も立つやかすみの初しほに匂ひそめたる春のいろかな

村田崇善翁八十賀に、寄鶴祝

千世はへむ猶萬代は君こそとよはひ羨むあしたづの聲

鹿島元長に鉗狂人をかしたるかへすとてふみ作りておこせたるとぢめの

[illegible]句に應鶯元有日東春といへるにつきてかへし

○ちりて明日ゆは 花が散つてその明日からは寂しからう。
○藤なみ 咲き靡く藤の花。
○なみに思へや ひと通り、常なみに思ふからであうか。思へやは思へはにや。
○白子の村 伊勢國河藝郡。
○たく衾 しらの枕詞。
○たづ〳〵し たど〳〵し。おぼつかなく氣がゝりである。
○七里政要 通稱佐紀。津の藩士。鈴の屋門人。
○草陰の あの枕詞。
○安濃の城 伊勢國津城。
○立つやかすみの 立つ霞の。
○初しほ 染物をするに初めて染汁に入れること。
○匂ひそめたる 色映え麗はしくなりそめた。
○あしたづ 鶴。葦のある水邊に居るのでいふ。
○鉗狂人 本居宣長著。藤井貞幹の衝口發を論駁したもの。

もろこしのよし野の山はとひも見じ櫻を花の日の本のはる

春戀

身にぞしむ春や昔のゆふ風に面影かすむそでの梅が香

別戀

いかにせむ形見と見れば朝風に露さへ袖のわかれ路のそら

寄月戀

契りおきし月やあらぬとかこちても面影とほき有明の空

野鶯

一夜寢て明日もきかばや旅人に宿かすが野のうぐひすの聲

聲しげみ芝生の若菜しば〳〵につむ手おこたる野邊の鶯

若草の色ともいはじ霞ともいはじ春野はうぐひすの聲

故郷落花

志賀の浦や跡をだに見む雪もなし散りていくかの花の故郷

庭梅

うめの花咲くや垣根のゆかりとて匂はぬ草もにほふ春風

春戀

○春や昔云々　古今集「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」

○月やあらぬ　この月はもとの月ではないか、かはりないもとの月である。すべて元の儘であるのに身の上は變つて戀しき人には離れてその俤も遠くなつた。

○宿かすが野　宿貸すに春日野をかけた。

○聲しげみ　鶯の聲がしげく頻りに聞えるので。

○故郷　ふるく都のあつた舊跡。志賀の浦滋賀大津宮のあとは天智弘文二帝の遺蹟であるのでふるさといふ。

かきくらす戀はくるしや青柳のいと長閑なる春日ともなく

咲く花の色にならはで春の日の長きを人の契りともがな

きえねたゞ花のたよりを頼みこし春もいまはのにはの白雪

夕梅

梅さける山は入日の色よりも香こそとにほふ夕霞かな

苗代

たのみあれや今より水もゆたかにて年榮ゆべき小田の苗代

海邊歸鴈

住の江やふるさといそぐ春の鴈岸によるてふ貝もひろはで

夕花

草枕いづれの陰とさだめまし宿はあまたの花のゆふぐれ

心せよくるゝも知らで見る花に散るよりつらき入相のかね

旅橋

かへり來ていつか渡らむ東路や行末ながき瀨田のながはし

花似雲

花やいつさきぬと見しも今日はたゞ雲の盛りのみよし野の山

○かきくらす　心もくらむ。

○いと長閑なる　いとのどかに青柳の絲とかけた。

○咲く花の色　春咲く花の色のうつろひ易くはかなきには倣はないで。

○きえね　春になつたらと頼みにした春に降つた庭の白雪は消えてしまへよ。

○入日の色よりも　入日の色が霞に映えてにほふよりも梅の香が夕霞に匂ふ。

○たのみあれや　頼みありあてになることよ。田の實卽ち田に熟した米をかけた。

○年　稻のみのること。

○岸によるてふ　萬葉集「暇あらば拾ひにゆかむ住の江の岸によるてふ戀忘貝」

○草枕云々　旅寢の草の枕をどの花のかげにと選び定めようか。

○花やいつ云々　昨日までは花がいつ咲いたのかと見たが今日はもう花とは見えず白雲の盛りと思はれる。

名に高き花のさかりか吉野やま雲にはあらぬみねのしら雲

里山吹

みよし野の里は櫻の雪消えて垣ねに來ぬる山吹のはる

寄枕戀

やよいかにかたしく牀の菅枕君が來ぬ夜はなれもさびしや

あはれとも枕ばかりは知りぬらむ浮くばかりなる夜半の寐覺を

菅枕なれも知らずや夢にだに見えしはいかにねし夜なりけむ

閑居水

しづかにと世をのがれすむ谷陰にさもこゝろなき水の音かな

野徑月

見る人や我よりさきにわけつらむ露淺茅生の小野の月かげ

宿からでゐな野はゆかむ有馬山夕霧はるゝ秋の夜のつき

秋の夜の月にうかれて行末や入るをかぎりのむさし野の原

野邊の露わけずばしらじ心なき袖にもかゝる月のあはれは

しづかにもやどりけるかなあくがれて人はいく野の露の月影

名立戀

○雲にはあらぬ　雲ではない花の白雲。

○櫻の雪云々　垣根に櫻が雪と散つてゐたのも消えて垣根に山吹の花咲く春が來た。

○やよいかに　やよは呼びかけ。いかには問ふための呼びかけの語　菅枕に對して。

○かたしく　片袖を敷いて獨寢をする。

○浮くはかり云々　枕が涙に浮ぶほどな。古今六帖「獨寢の牀にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり」拾遺集「涙川水まされはや敷妙の枕の浮きてとまらざるらむ」

○菅枕　菅で作つた枕。

○なれも云々　汝も寂しいか。菅枕に對していふ。

○我より云々　我より先に露しげき淺茅生を踏みわけたたらう月影を見る人が。

○宿からで　猪名野には宿を借らないで行かう。猪名野有馬山は攝津。

○入るをかぎりの　月の入る所がはてとなつてゐる武藏野。

○しづかにも云々　人は心も空に月に憧れて行くのに生野の月は心靜かにも生野の露に宿つてゐるよ

涙だにあまるたもとは戀衣たちと立つ名をいかでつゝまむ

霧中鴈

聲はして山たち隱す夕ぎりにおもかけ落つるかりの一つら

來る鴈のそれかあらぬか峯こえてまだ朝霧の中ぞらの聲

聲すなり八重山こえてこし鴈を一重はきりの猶へだてても

・上野介藤原重名が豐前國にかへるに

みるめこそたゆとも風の便りには言の葉よせよ和歌のうら浪

歎くなよ神路の山は深くともふみし通はばわれしるべせむ

年の始めに詠める

あらたまる今朝の光もふりまさる身ははづかしき初春の空

一夜明けて鳥の聲より霞より春めくものは心なりけり

遠山霞

名に高きゆきも霞のそこはかとしらねやいづこ越のとほ山

かすみより外には雪も松もなしきえぬやいづこ春の遠やま

竹鶯

うぐひすの春こそ來ぬれ雪をれの音はきのふの窗のくれ竹

○たちと立つ名　甚しく立つ浮名立つを裁つに通はせて袂、衣の縁つゝむは袂の縁語。

○聲はして云々　山を隔て隱してゐる夕霧の中に鴈の聲はかり聞えて姿は見えないで想像される鴈の面影が空からおりてくる。

○來る鴈云々　峯こえて來る鴈の聲であらうか或は又さうでないだらうか、どちらつかずの落ちつかぬ中天の聲。

○八重山　幾重にも重なつた山。

○みるめ云々　相見ることは絕えもするだらうが。海松をかけた。うら浪と緣語。

○ふみし通はば　文通はばをかけた。しは强辭。

○そこはかとしらね　はつきりと知られぬ。しらねは白山。

○雪をれの音云々　窗の吳竹の雪に折れる音はなくなつて、吳竹に鶯が鳴く春が來た。

ひまもなきみどりの竹の葉がくれになく音もしげき春の鶯

春くればねぐらにしめてくれ竹のよそにうつらぬ庭の鶯

曉梅

見し夢もあかぬ寐覺の春風にわするばかりの袖のうめが香

初春

きえやらぬ山路の雪も昨日けふ淺くはなりぬ春やきぬらむ

片思

はかなしや思はぬ人をおもひ川水に數かく袖はかわかで

いかにせむ身さへながるゝ涙河人は袖だにひぢぬうきせを

行路柳

染めかけてみやこの大路花はまださかぬ錦をいそぐあをやぎ

水鄕春望

みなせ川なびく柳もほのぼのと春風かすむやまもとの里

おもかげも春や昔のみなせ川山もとほき夕がすみかな

正月晦日京の殘りすくなく燒けぬる由を聞きてよめる

吹くからに花の都はもゆる火のよもに散りぬるはるの山風

○ねぐらにしめて　塒として居所にして。

○見し夢云々　春風に匂ふ梅が香の快さよ、寐覺して見あかぬ夢も忘れる位の梅が香の快さ。

○水に數かく　古今集「ゆく水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」思川は筑前。

○涙河　涙の流れるのを川にたとへていふ。

○人は云々　わが思ふかの人は袖も濡らさぬこのつらい場合を何とせうぞ。うきせは憂き折の義で河の緣で浮き瀨とかけた。

○みなせ川　攝津上島郡。惟喬親王閑居の所。新古今集「見わたせば山もと霞む水無瀨川夕は秋となに思ひけむ」山もとは山の麓。

○春や昔　惟喬親王に仕へた在原業平の歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして」(古今集、伊勢物語)によつた。

○吹くからに　吹くによつて。

○ねをや鳴くらむ　都人は聲を立てて泣いてゐるだらう。新撰六帖「雉子鳴く春の焼野のかぎ蕨外山をかけてもえわたるかな」
○煙かと云々　煙かと見るに都人をかけた。
○胸こがす　心を悩まし痛ます。焦すは煙の緣語。
○玉だれ　玉簾。
○若草の　妻の枕詞。
○もゆる　草の萌ゆるに火の燃ゆるをかけた。春の日の日に火をかけて都の火災に惑ふ意をいふ。
○わけのこす末野　野を踏みやけこす遠く彼方を行き殘した野のはてに霞が立つて。たちかへりは立ちかへつて再びの意に霞の立つをかけた。
○木のめ云々　木の芽であるか區別のつかぬ。
○めぐみ云々　芽の生え出る芽ぐみに春雨の惠みをかけた。
○もりの下　森に春雨の洩りをかけた。
○ふるさと云々　春は故さとこと誰か見るであらう。誰も荒れた昔の都と見ない吉野の山。

たち迷ひねをや鳴くらむ都人きゞすも同じ春のやけ野に
都にはきくもゆゝしき折しらで野べの蕨のもえやしぬらむ
此の春はかすみを見ても煙かとみやこの人は胸こがすらむ

雲の上人の心をくみて

梅が香を思ひかけける玉だれに煙ふきまく春の夜あらし
若草のもゆる妻戸をたちいでてうき春の日にまどふみや人
ひたすらにうき春の日と歎くなよ今さきぬべき花の都を

野遊

わけのこす末野の霞たちかへり明日もきて見むはるの夕暮

寄花戀

はかなしや今日まではなほ雪とだにのこる頼みの花の便りも

若草

木のめかはわかぬめぐみの春雨のもりの下にも青む若くさ

故郷花

ふるさとと春はたれかはみよし野の山を軒端のはなの曙

旅宿花

○旅寢の云々　旅寢のつらさははれる木の下。春に晴るゝをかけた。

○神路山　伊勢內宮の神苑に沿うた一帶の山。

○散るま云々　散る間だけでも見ようと思ふに月も入つて花を眺められぬのが何ともしかたがない。

○ながめても云々　青葉は風に散らぬから眺めて居ても心を盡し氣をもむこともない夏木立。

○思ひきや云々　深い淵の契りが早くも淺い瀨のつらい場合と變らうと思ひもよらなかつた。古今集「世の中は何か常なる明日香川きのふの淵ぞけふは瀨になる」

○よしもがな　てだてがありたい

○袖師の浦　出雲國八束郡馬潟の海岸。涼しさを袖に包むとつゞけた。新勅撰集「よる浪の涼しくもあるかしきたへの袖師の浦の秋の初風」

○をふの浦梨云々　古今集「をふの浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならずも寢てかたらはむ」なりもならずも云々は滿つ潮になるにしてもならぬにしても浪は寄せ來る。

月影におぼろながらも花見れば旅寢のうさは春の木の本

たびねせし陰も一夜の夢とのみ立ちわかれゆく花のあけぼの

神路山洞櫻の歌

きても見よ杉にさくらの花咲きて神代もきかぬ神垣の春

夜思落花

いかにせむ散るまをだにと思ふ夜の月も入りぬる庭の櫻を

庭新樹

ながめても心つくしもなつ木だち散らぬ青葉のにはの夕風

杜郭公

月影はよそなる杜の木隱れに鳴く音さはらぬほとゝぎすかな

寄川戀

思ひきや深き契りもつらきせに早く明日香のかはるべしとは

夏月涼

すゞしさをつゝみて歸るよしもがな袖師の浦の夏の夜の月

浦五月雨

五月雨はをふの浦梨みつ潮になりもならずも浪ぞよりくる

新戀

戀ひ死なむ後の世をだに初瀬川しづむなせめて祈るしるしは

草花露

さきまじる花に亂れてちる露も色の千種の野邊の夕かぜ

首夏朝

めづらしく今朝は霞もはる〴〵と見るめさはらぬ夏山の色

夏衣春はきのふの花の香もなごりたづぬる袖のあさ風

池夏月

すむ影もふけ行くまゝに涼しさはますだの池の夏の夜の月

月なみはまだ夏ながら秋ぞともいはれの池にすめる涼しさ

短夜をうきぬの池の浮草にいとゞ見るまもなつの夜の月

立待月

あかす見し花は暮れぬる秋の野に猶たちまちの月もいでけり

曉蟲

むしのねの絶え〴〵になる淺茅生に月はかずそふしのゝめの露

月前旅

○初瀬川　大和磯城郡。はつせに恥づをかけた。
○せめて云々　切に長谷の御佛に祈る效驗は沈むな、誓つたしるしあれかし。
○色の千種　露の色のさま〴〵、千種に千草をかけた。
○霞もはる〴〵と　霞も霽れて遙遙と。
○春はきのふ　春はもはや昨日の過去となつて。はるは張にかけて衣、袖の緣語。
○すむ影　澄む月影。
○ますだの池　涼しさの增すを益田池にかけた。益田池は弘仁十四年勅旨によつて大和國久米の南に造られた池。後廢せられた。
○秋ぞと云々　月並は夏でありながら磐余の池に月影が澄んでゐる涼しさは秋だとも言はれる。磐余の池を言はれに言ひ掛けた。磐余の池は大和磯城郡埴安池。廢せられた。
○うきぬの池　浮き寢にかけた。浮沼の池は石見。
○たちまちの月　陰曆十七日の夜の月。
○月はかずそふ　夜明けの露の多くなると共に露にうつる月の數も多くなる。

たび衣つゆのひるまは別れてもともなふ夜半の袖のつき影

松爲友

いつとなき友は寐覺のまくらにもひる見る庭の松風の音

都雪

きても見よ春のにしきの色よりも木毎の雪の花のみやこを

白雪のあはれも深しふることの跡さへ世々につもる都は

めづらしく都の野邊もつもりてはみ山の松の雪ぞふりぬる

古風　寛政元年己酉

大舘高門勾玉を多くつどへもたるに歌こひければ

いやさはにぬく玉ぬしの年のをも玉のいほつの五百世たるまで

甲斐國酒折宮によみて奉る

語りつぐ御歌と共に萬代につぎて榮えむさかをりの宮

書緒方朗去年も今年もとぶらひ來つるが遠江國にかへるに

こぞ今年しきて訪ひこし我がせこはしきてとひこね來む年々も

櫻花

○いつとなき友　何時といふ區別なく常に親しくしてゐる友。
○きても云々　古今集「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」「雪降れば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし」
○ふること　故事。白雪の降るに言ひ掛けた。

○いやさはに　いよ／＼澤山に。
○ぬく玉ぬし　玉を貫き通してゐる玉の持主。
○玉のいほつの　玉の數多きその數多くの世の滿ちたるまで年數多く長らへる。
○酒折宮　址は甲斐國西山梨郡酒折村。今酒折天神がある。
○語りつぐ云々　日本武尊が甲斐酒折宮で「新治筑波を過ぎて幾夜か寢つる」と歌ひ給ひ庭燎の火燒の翁が「かゝなべて夜には九夜日には十日を」と和し奉つた。
○しきて　度重なりて。幾度も。
○とひこね　訪ね來れよ。

な散りそね風はふ・とも櫻花ありて明日こむ人も見るがに

旅

足引の山松がねに旅寢してあらし吹くよは妹をしぞ思ふ

草枕たびと思へどなみのとのとよむ濱びはいねがてぬかも

瀧花

おちたぎつ瀧のいはねの櫻花ちりてみだるゝ玉かとぞ見る

三月のころ尾張國に物すとて阿濃の松原を見わたして

うら／＼と霞む春日に振りさけて見のよろしもよあぬの松原

江島の里に村田並樹が萩の屋にやどりて人々あまた來つどひたるに旋頭歌

萩が屋の今夜の圓居たぬしも花咲ける萩の遊びの時にはあらねど

これは其の屋の柱に萬葉集の萩の遊びせむといへる歌を書きて掛けたりければなむかくよめる

桑名より船にのりてさや川をのぼるほど多度山のいたく霞みて見えければ

朝風の寒きたど山しかすがにかすみきらへり春ふかみかも

○な散りそね　散るなよ。
○ありて云々　其の儘に散らずにあつて明日にも來る人の見るために散るなよ。
○足引の　山の枕詞。
○なみのと　浪の音。
○とよむ　鳴りひゞく。
○濱び　濱邊。
○いねがてぬ　寐ねかぬる。ぬは添へた辭。
○おちたぎつ　水が落ちてわきかへる。
○振りさけて云々　遠く振りむいて見るながめのよいことよ。阿濃の松原は伊勢阿濃郡。
○圓居たぬしも　人々の集まりの樂しいことよ。
○萩の遊び　萬葉集「白露を取らば消ぬべしいざこども露にきほひて萩の遊びせむ」
○桑名　伊勢桑名郡。
○さや川　佐屋川。木曾川の支流尾張佐屋村を經て再び本流に合す
○多度山　伊勢桑名郡戸津。
○しかすがに云々　寒くはあるがさすが春だけあつて霞が立ち隔てゝゐる、春も闌であるよ。

みはかしの佐夜の川尻こぎためば桑名も見えず國遠ぞきぬ

花似雲

常ゆけにしら雲かゝるみよし野の御船の山は花盛りかも

すゞみ

飛鳥風たもとすゞしも川のべを行きたむ岡の松のしたみち

四日市里西村茂貞が家に先祖の功をほめて豐臣關白殿の給ひし杯を傳へもたるに歌こひければ

つぎ／＼につぎて傳へよさかづきも親の功の名も八千代まで

若き女のかめにさしたる水葱の花を見てたてる繪に人の歌こひければ

苗なりしこなぎが花も咲きにけり我がせの君はいつか來まさむ

人の賀に寄鶴祝

まさきくて君は有りこそたづがなき雲居行く音のいや遠長に

近風　寛政元年己酉

山月

山のおくにたゞ我こそと思ひしを猶すみまさる秋の夜の月

○みはかしの　御佩刀の。貴人の佩刀をいふ。佐夜を鞘に響かせて枕詞のやうにした。
○こぎためば　漕ぎ廻ると。
○遠ぞきぬ　遠ざかつた。
○常ゆけに　常と異なつて格別に
○御船の山　大和吉野郡菜摘の東南。
○飛鳥風　飛鳥の地を吹く風。飛鳥は大和高市郡。
○行きたむ　行きめぐる。
○傳へもたる　傳へ持ちたる。
○水葱　なぎ。鴨舌草(こなぎ)。
○こなぎが花云々　夫木抄「をしなべて茂る草葉にわかざりし沼のこなぎも花にさきつゝ」
○まさきくて云々　君は眞幸く無事幸福にあれよ。こそは希望をあらはす。
○たづがなき云々　鶴が鳴いて大空を行く聲がいよ／＼遠く長へなやうに君は永久幸くあれよ。
○たゞ我こそ云々　唯我こそひとり住むと思つたに月が愈澄んでゐる。

名所山吹

おく露をふく朝風に川の名の玉ぬきみだる岸のやまぶき

散りすぎしさくら忘れぬ世の人に見せばや井手の山吹の花

宇治川やうつるかげさへ名にたちてさく山吹のせゞの岩浪

述懐

いたづらに年ぞ六十に成りにけるなすべき業は未だならずて

思ひいづる三十の春も三十年の霞へだたる花のおもかげ

山家落花

春はなほうき世のさがとさく花をさそふ嵐のやま陰のいほ

瀧花

咲きかゝる花のちるかと見る人も心をくだく瀧の白玉

白絲もつねより長き春日かな瀧のうへなる花につゞきて

花似雲

いくへともしら雲深き吉野山おくある花も咲きやしぬらむ

名兒屋里小澤某が家に五六日とゞまりてかへりなむとする日あるじによみて與ふ

○川の名云々　玉川といふ川の名の玉を緒に通したのを散らし亂るやうに、山吹の枝に露の玉を通したのを朝風に吹き散らす。山吹の名所の玉川は山城。新古今集「駒とめてなほ水かはむ山吹の花の露そふ井手の玉川」

○さくら忘れぬ云々　散つた後に心殘りがして忘れられぬ人に井手の山吹を見せたい。

○宇治川云々　宇治川に山吹が映つてその名も名高い山吹の瀨。萬葉集「秋風の山吹の瀨のとよむなべ天雲かける鴈にあへるかも」

○うき世の云々　憂世のならはしとして。

○白絲　瀧を白絲に見立てていふ。瀧が白く懸つてゐる上に白く花が咲きつゞいて他の時より瀧が長く見える。

○いくへともしら雲　幾重とも知らぬを白雲に言ひ掛けた。

たつとてはかりのやどりも旅衣日ごろ馴れぬる別れをぞおもふ

同じ里よりかへる時木田村の大舘高門が家に一夜やどりて立ちいづる時に雨もふらなむしひて今日はとゞめてましをと主人のいふに

ふりなばと止むる君がなさけにぞ雨よりまして袖は濡れける

郭公未遍

里わかぬ月見てかこつほとゝぎす聞きつる人も有明の頃

月前草花

よるは又光を花にこきまぜて月みやぎ野に秋萩のつゆ

田家月

影清み田のもの末にいほ見えてともし火くらき秋の夜の月

月前蟲

秋の夜は蟲の音をさへかけそへていく度月に袖しぼるらむ

夕落葉

ちるをだに見てまし物をあやにくに暮るゝ小倉の山のもみぢ葉

ゆめかとよ歸る山路にふみわけて忍ぶ梢のけさのもみぢ葉

嵐山落葉

○たつとては　出發するとて。立つに裁つをかけて衣の緣とした。

○雨もふらなむ云々　雨が降つてくれればよい、無理にもけふはお留め申さうものをといふ。

○里わかぬ云々　村里の區別をしないで平等に照らす月を見ると、郭公は村によつて鳴くと見えて、聞いた人もあるに自分はまだ聞かぬので郭公の不公平が歎かれる。

○光を花に云々　秋萩の露に映つた月の光を花とかきまぜて。新勅撰集「白露と秋の花とをこきまぜてわくことかたき我が心かな」

○みやぎ野　宮城野は陸前。

○影清み云々　月影が淸く曇りないので田の面の彼方に假廬が月の光に見えて。

○ちるをだに云々　紅葉を眺めてあきたらず、紅葉の散るのでも見たいと思ふのに、生憎日が暮れて紅葉散るのも見えぬ。小倉にを暗をかけた。小倉山は山城葛野郡。

○ゆめかとよ　夢かと思ふよ。

誘はれてかつ散るまゝに山の名も色になりゆく峯のもみぢ葉

夜擣衣

聲高みさぞなよそにもねぬ夜とは知らでや獨り衣うつらむ

貝海松かきたる繪に人の歌こひければ

なみならぬ筆の跡にもよるかひの見るめえならぬ磯の寫し繪

村田橋彦母の九十賀に寄竹祝その人やしは子までもたりときけば

竹の子の子の子の子まで生ひそひて千尋の陰は千世に榮えむ

北國秀穗石塚龍まろ山下正彦物ならひに來つるを遠江國にかへるに

別れては又あふみてふ國の名も遠しときけばいつと頼まむ

九月十三夜宵の程は曇りて雨も降りぬべかりけるにふけては名殘なく晴れて月いとさやかなりければ

思ひきや憂かりしよひの雲はれて照る月影のかゝるべしとは

同じ夜當座橋月

白玉かをだえの橋の秋風にみだれてしづくなみの月影

おもかげにたつや長柄の橋柱くちても月のすみわたる夜は

東路やひく駒ならぬ望月もながき夜わたる瀬田の長橋

○誘はれて　嵐に紅葉が誘はれて
○山の名も色になりゆく　吹く嵐そのものが紅葉の紅色になりゆく
○聲高み云々　衣うつ音が高いので、餘所ではか程までその音の悲しさに夜寢られないとは知らないのであらう。
○海松　みるめ。
○なみならぬ　一と通りでないすぐれた。
○筆の跡に云々　筆で描いたものによるかひがあつて、見た所も何とも云へぬ優れた繪。
○やしは子　やしやご、玄孫。
○又あふみてふ國　遠江はとほつあふみ(淡海の義)。あふみを逢ふに言ひ掛けた。
○照る月影云々　雲がはれて照る月影のかやうにならうとは思ひもよらなかつた。
○をだえの橋　陸前志田郡古川町後拾遺集「みちのくの緒絶の橋やこれならむ踏みみ踏まずみ心惑はす」一緒が絕えると白玉が亂れると緣語。
○しづく云々　涙に透きうつつて月影が見える。
○長柄の橋　攝津西成郡。新古今集「年ふれば朽ちこそまされ橋柱昔長柄の名だにかはらで」
○東路　逢坂の關以東の國々。
○ひく駒云々　往年諸國から貢進した駒の信濃國望月の牧から牽いて來た駒でない、望月即ち十五夜の月。
○瀬田の長橋　琵琶湖の勢多川となる所、近江瀬田村。

たどへけるその面影のこひしきに月や昔のまゝの繼橋

落葉霜

くち殘る形見のあきのおち葉だに又いつまでのにはの朝霜

戀心

見せばやな千入の紅葉手折りきて心のいろは知るやいかにと

老後述懷

ふりはてし身をば思はでかひもなき心ばかりは昔なりけり

若き人々遍昭寺にて半夜百首よむ由ききて其の夜よみて遣はしける

わかからば和歌の浦路の百重波立ちおくれるて音にきかめや

三千年になるてふもゝの數々の三時の間にはいかでならまし

曉時雨

雲もなしまくらの時雨それも又さめぬる夢か有明のつき

行路落葉

家づとに手折りてかへる一枝もかひなき山の風のもみぢ葉

被忘戀

忘草おひける物を住のえのきしもやせむとまつもはかなし

○たどへける云々　眞間の手兒名が譬へた月は昔のまゝの月。萬葉集九詠勝鹿眞間娘の長歌に望月のたれる面わに花のごと云々とあるをいふ。

○まゝの繼橋　下總東葛飾郡眞間の繼橋は柱を立てて板をつぎ渡した橋。

○千入の紅葉　幾度となく染汁に浸した色濃い紅葉。

○ふりはてし　古くなり果てた。

○わかからば　自分が若くあるならば。

○百重波　幾重にもかさなり立つ波。立つの序。百重に百首歌をかけた。

○音にきかめや　波の音を聞くだけであらうか。

○三千年云々　拾遺集「みちとせになるてふ桃の今年より花さく春に逢ふぞうれしき」

○家づと　家へのみやげ。

○忘草云々　忘られてしまつてるるに、來もするだらうかと待つのも頼みない。岸に來しをかけた。古今集「道しらはつみにもゆかむ住の江の岸におふてふ戀忘れ草」

逢不遇戀

人々野冬月、雪中眺望、逢戀を題にて歌よみて合はせたる劣りまさりをことわりけるついでに此の三つの題を一つによめる

見し夢よたれに問はましうつゝとも定めもやらぬ中の契りは

忘れめや野邊の月雪妹とわがこよひふし見の里のながめを

山路雪

立ちよりて袖うち拂ふ松かげも梢あやふきゆきの山みち

おくれては跡ある雪の中々に山路まよはでかへるしばびと

行きなやむ山路もしらでけふの雪故鄕人はいかに見るらむ

かへり見る里の煙もうらやましのぼりもやらぬ雪の山路に

年の暮に

なさばやと思ひし事の數々もたゞあらましに年ぞくれぬる

古　風　寛政二年庚戌

春の始めに詠める

久方のあめにありてふ香久山も春たつ今日や霞みそむらむ

○うつゝとも云々　夢とも現とも定められぬ。
○忘れめや　忘れようか忘れられぬ。
○立ちよりて　松陰に立ち寄つて
○おくれては云々　人に立ちおくれて歸ると知つて前の人の足跡が雪にあるのを迷はずに歸る。しばびとは柴刈る人。
○行きなやむ云々　自分が今此の雪の山路を行くに難儀してゐるのも知らない故、世人はこの雪を何と見てゐるだらうか、嘸よい景色と眺めてゐるだらう。
○のぼりもやらぬ　山路を登りもしないでふりかへつて見る。のぼるは煙の縁語。
○たゞあらましに　たゞ豫定だけで實行しないで。
○久方の　あめの枕詞。
○香久山云々　萬葉集「久方の天のかぐ山此の夕霞たなびく春立つらしも」

野蜻蛉野。

けふもかも櫻ちるらむみ吉野のあきつの野邊を行きて見てしが

鷹の繪に人の歌こひければ

木隱れにゐる鳥あれかも遠方を見くるへかしてねらはりをらく

落　花

櫻花あさけの風にちりにけり今日も日ぐらし見てましものを

櫻　花

あら玉の春立つ日よりいつしかと待ちしさくらの花咲きにけり

四月のころ江戸の安田躬弦がはじめてとぶらひ來たるに

珍らしく來鳴く初音の時鳥つぎて日にけに聞くよしもがも

百重山こえて來てなく時鳥思ひかけきや今日の初聲

題　な　し

さくら花見つゝしゆけば霞たつ長き春日の暮れにけるかも

まちをれば月は出でにけり足引の山松のうれゆ月は出でにけり

草枕たびのけ長み家の妹がぬひて著せつるきぬあかづきぬ

大神宮にまゐでける時宮川にて

○あきつの野邊　大和國吉野郡吉野蜻蛉野。

○木隱れに云々　木陰に隱れてゐる鳥が居るのであらうかよ、この鷹は遠方を目をくる〳〵まはして見て狙つてゐる。

○あさけの風　夜明けの朝風。

○日ぐらし云々　終日見て居ようと思つたに。

○あら玉の　春の枕詞。

○つぎて日にけに云々　引きつゞいて毎日々々を經て聞きたいものだ。

○百重山　幾重にも重なる山。

○思ひかけきや云々　今日初聲を聞かうとは思ひもよらなかつた。

○見つゝしゆけば　見つゝゆけば

○足引の　山の枕詞。

○山松のうれゆ　山松の梢から。

○草枕　旅の枕詞。

○け長み　日を經ることが長いので。

○宮川　伊勢度會郡を流る。度會川。神宮の傍を流れるので宮川、齋の宮川ともいふ。萬葉集「度會の大川のべの若くぬ樹わが久にあれは妹戀ひむかも」

わたらひの大川水をむすび上げて心も清くおもほゆるかも

京に上る時鈴鹿をかごといふ物にのりてこゆ

足引の岩根こゞしき鈴鹿路をかちより行かばゆきがてむかも

同じ時近江の石部の驛にやどりてつとめて道にてよめる霜月の十五日なり

朝たちて比良の高嶺の雪みればきぞの夜牀はうべさえにけり

同じ時大津にて

ふりにける跡とも見えずさゞ波の大津の里は賑ひにけり

京より歸るさに坂下まで物せむとする日いまだ鈴鹿山もこえぬにかにが坂とかいふあたりにてはや日も入りにければ

横さらふ蟹が坂路を夕こえてすゞかの山はくれか果てなむ

坂下にて

こえて來て鈴鹿の坂の下うれしわぎへの里の近づく思へば

京にて雙林寺といふ所に京人國々の人々など數多つどひて歌よみけるに寄日祝といふ題をとりて

天地とかぎりあらめや大君の御世は日毎にめぐる日のごと

○むすび上げて　掬びあげて。
○おもほゆるかも　思はれるかな
○こゞしき　險阻な。けはしい。
○かちより　徒歩で。
○ゆきがてむ　行き難からう。
○つとめて　宿つた翌朝早く。
○きぞ　昨日。
○うべ云々　牀の冷えきつたのも尤もであつた。
○ふりにける跡云々　大津の里は昔志賀の都と云つたが廢都となつた跡にも思はれぬ程賑つてゐる。さゞ波のは大津の枕詞。
○坂下　伊勢鈴鹿郡坂下。
○横さらふ　横に這ひ步く。
○くれか果てなむ　暮れ果てなむか。
○わぎへの里　わが家のある村里
○雙林寺　京都東山靈山長樂寺の西南。もと天台宗。後遊行派の本山。
○天地と　天地と共に。

あえませと君をぞ祈るとことはに御影變らず出づる日見れば

近調　寛政二年庚戌

春の始めに詠める

朝がすみさきだつ花の面影も今日はつ春のみよし野のやま

早春水

さけばかつ散りかゝれども谷水の鏡くもらぬ波のはつ花

世にいはゆる高砂の翁嫗の帚もちて朝日のさし出でたるをのぞみてたてる繪に人の歌こひければ

かきはきて朝日をまつの木のもとにちりも曇らぬ影ぞさしくる

早春河

谷かぜにこほり流れて鳴瀧(なるたき)や西のかは瀬もはるは來にけり

晩霞

夕煙しるべも春はとひわびぬ紛ふかすみの深草の里

風絶えてかすまぬ音もかすみけりはつ瀬のおくの入相のかね

關霞

○あえませと云々　永久影かはらず出づる月にあやかり給へと君を祈る。

○高砂の翁嫗　能樂高砂のシテとツレの老人夫婦。

○かきはきて　松の木の上を掃いて。朝日を待つに松をかけ、掃くの縁で塵といつて塵ほども曇らぬ朝日の影とかけた。

○鳴瀧　山城宇多河の上流般若寺南の急湍。名寄「明方に夜はなりにけり鳴瀧や西の河瀬に落つる月かげ」

○夕煙云々　夕煙が案内しても霞と煙とまぎれて春は深草の里を訪ひわづらふ。

○かすまぬ音云々　近える鐘の音も風が絶えたので初瀬山の霞の中にかすんで聞える。

關の戸は明けても春はすまの浦や見るめゆるさぬ朝霞かな

東路やのどかなる世は關もたゞ名をのみとめてたつ霞かな

不言出戀

瀧川やこほりにむせぶ岩浪のえも打ちいでぬわがおもひかな

正月の頃大平が妻の思ひにこもりゐけるによみてやる

名殘いかにあさけの庭の若草を見し面影のはるの夜のゆめ

二葉草のこるこのよのかなしさは消えにし露も思ひおきけむ

三つになりにけるうまごのもがさをやみて二月五日の曉にうせにければ

かれぬるか二葉の小松千代までと見しははかなき春の夜の夢

孫のなくなりて悲しく思ふころ菊家来耦が子をなくなしたる心を思ひやりてよみてやる

いかならむ我も孫枝の悲しきにましてこずゑのかれし歎きは

寄夢無常

はかなしと見るもはかなや夜半の夢現の夢も長からぬ世は

春述懷

春の日も早く暮れぬとかこつかなふみ見る道のいそがるゝ身は

○見るめ云々 朝霞が見ることを許さぬ。見るめに海松(みるめ)をかけて浦の縁語とした。
○のどかなる世 太平の世。
○名をのみとめて 關といふ名はかり留め殘して。とめるは關の縁語。

○思ひにこもる 喪に籠る。

○あさけ 夜明け。
○若草 妻をいふ。若草のは枕詞。
○二葉草 菫の異名。但しこゝでは草の芽ばえの意、前年生まれた大平の二女を譬へていふ。
○消えにし露 死んだ大平の妻。享和元年六月歿。
○もがさ 天然痘。

○孫枝 枝からわかれ出た枝。孫に譬へた。

○はかなしと云々 夜半に見る夢の消えやすくはかなしと見るのもかひのないことだ。夢のやうな現も長く續かぬ世には。
○かこつかな 歎かれることよ。

落花

いかにせむ吉野の奥も散る花のうき世のがれぬ春の山風

吉野山花のうき世を何處にかのがれて散らぬ色は見るべき

山櫻さかりと見れば行く水に數かきそむる花の一ひら

暮春

散りはてし花のゆかりの春をさへさそひも行くかあとの山風

疑戀　近世風

嬉しきも憂き身におはぬかね言と聞けばいらへもやすらはれつゝ

杜若

これも又山とや見らむかきつばた匂へる色に春のとまれる

寄風戀

絶えぬるをその夕風も思はじと思へどよそのまつに吹く聲

菅原神の御像に

都にて君が歸るをまつ梅も心づくしの年ぞへにけむ

山居月

月も出でぬ心よわさのさそはれてすみ果つまじき峯の庵かな

○うき世のがれぬ云々　吉野の奥の花も風に散るといふつらいこの世を遁れられぬ。

○行く水に云々　古今集「ゆく水に數かくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり」

○春をさへ云々　山風が花を吹いてすつかり散つた、その花のゆかりである春といふものまでも、花散つたあとに山風が誘つてつれてゆくよ。

○嬉しきも云々　嬉しい言葉も自分の悲しい身に相應しない約束の言葉かとも聞かれるので返答するのもためらはれる。

○匂へる色　艶やかに映えた色。

○都にて云々　都に殘つてゐて君の歸るのを待つてゐる梅も心を惱まし痛めて數年を經たゞらう。心づくしに筑紫をかけた。拾遺集「こち吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」

○すみ果つ　住み果つを澄みにかけて月の縁語。

河落葉

神代にも聞きしためしの立田川岩根にかゝる瀬々のもみぢ葉

山家

いとひても物のさびしき夕暮はうき世戀しき山のおくかな

ある時はありのすさびの世のうさも又忍ばるゝ山のおくかな

變戀

秋かけしなごりの袖の色も見よ木の葉ふりしくにはのあさ霜

人の十三年忌に寄夢懷舊といふことを題にて歌すゝめけるに

年ふれば面影とほし夢にのみ見るを見しよのわすれ形見も

かきくらす闇のうつゝに年をへて又も見ぬよの夢ぞ戀しき

忍びても又も見ぬよやふけぬらむ現の夢の昔がたりに

寄埋火戀　近世風

思ふことかきみくづしみ埋火の火ばしを筆の閨の手すさび

櫻花の梢に朝日のかたかきたる繪に

いは戸出でし朝日に匂ふ山ざくらさもおもしろき花ざかりかな

增戀

○神代にも云々　古今集「千早振神代も聞かず立田川から紅に水くゝるとは」水くゝるは、聞かねごと、瀬々の紅葉は神代から有名であるとの意。

○いとひても　うき世を厭ひ離れても。

○ある時は云々　源氏物語所引「ある時はありのすさびに憎かりきなくてぞ人はこひしかりける」

○秋かけし云々　新古今集「頼めおきし淺茅が露に秋かけて木の葉ふりしく宿の通ひ路」

○夢にのみ云々　夢にばかり見るのを昔逢つた時の忘れ形見とする。その形見の面影さへも遠く隔たつたことよ。

○忍びても云々　昔を追想しても再び相見ることの出來ない世となつた、現であつて夢のやうな昔語りをして夜がふけたやうだ。見ぬ世から夜更けにかけた。

○かきみくづしみ　書いたりくづしたりして。

淵とのみまさる思ひの飛鳥川うれしきせにはいつか變らむ

七里政要七月の始めかしらおろしけるよし聞きてよみてやる

白雪のふるまでと見し黑髪を桐の一葉になどたぐへけむ

薄露

吹きよればこぼれてなびく秋風にぬきあへぬ露の玉のを薄

木國の三浦某道に心ざしあるよしにて歌よみておこせけるかへし

遠くとも伊勢のはまをぎをり〳〵は猶音づれよわかの浦風

野外露

袖かこつ人にとはばやことわりの秋のさが野の露は見きやと

栽萩

うつし植ゑてうつさぬ露も朝夕は野邊のまゝなるやどの秋萩

松遐年友

ながらへて千年の後も高砂のまつのむかしの知る人や君

高砂の松も昔の友とては千とせの後もきみをこそ見め

雪中鶯

雪はなほふるすながらにうちとけて鳴く音はるなる谷の鶯

○淵とのみ云々　古今集「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀨になる」に據つて、戀に物思ひの深くなるがうれしき瀨にかはるのは何時のことかとの意。瀨は折幾會の意を川の瀨にかけた。

○白雪のふるまで　頭髮の白くなるまでの意を譬へた。

○吹きよれば云々　秋風が薄に吹きよると、薄が靡いて秋風に露の玉を貫き得ないで玉がこぼれ落ちる。をは接頭語でまた玉のを薄のをに掛けた。（緒にかけた。）

○木國　紀伊國。

○遠くとも云々　今わが居る伊勢國は遠くとも、折々は紀伊の和歌の浦から音づれをしてくれよ。伊勢の濱荻は折りさいふ爲の序詞。

○袖かこつ人　袖が露にぬれるといふので不滿に思ふ人に。

○ことわり云々　秋のならひでぬれるのも當然である、嵯峨野の露を見たか。秋のさがを地名嵯峨にかけた。

○うつし植ゑ云々　萩は移し植ゑたが露は移さない。

○高砂の松云々　古今集「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」

○ふるす　古巣に雪の降るをかけた。

○うちとけて　雪の解けるに鶯の聲の解けて流暢になる意をかけた。

○鳴く音はる　鶯の鳴聲が張り上げるに雪の晴れるをかけた。

ふりつみてまだ春寒み鳴く聲も雪間も稀の野邊のうぐひす

秋夕思

わが袖にかゝれとてしも夕風は吹かじを庭のをぎの上露

こゝろさへふけばしをるゝ夕風を木草の秋とおもひけるかな

船中月

最上川のぼればくだる水底のつきの空こぐ夜半のいな舟

野徑月

よるゆけば袖にもあかで萩の露西にうつろふ野路のつき影

月夜よしひるまはゆかじ露分けて袖にさへ見る野べの通ひ路

あかなくに須磨の上野の夜半の月あけずば過ぎじ關はなくとも

うかれてもはてはある夜の月影に分けも盡さぬ武藏野の原

春月曉靜

鶯も梅ももよほす槇の戸に月はいそがぬ有明のかけ

戀の歌　鯉

うき草のしげれる池の底深くみがくれてすむこひもするかな

服部中庸が家の庭にいと大きなるかへでの木のあるを見て

○夕風は吹かじを　夕風は吹かないだらうに。

○最上川云々　古今集「最上川のぼれば下る稲舟のいなにはあらずこの月ばかり」

○ひるま　月夜に對して晝間をいひ露の干る間をかけた。

○袖にさへ見る　袖にかゝつた露に月が映るので袖の上にまでも月影を見る。

○あかなくに　あかぬに。いくら見ても見あきもせぬので。

○あけずば　夜が明けなければ。關の戸に緣語。

○はてはある夜　夜は明ければ果てになる。

○鶯も云々　鶯も梅も夜明けを告げて戸を開けよといそがせるに。

○みがくれ　水中に隱れる意に身を物陰に隱す意をかけた。

○こひ　鯉と戀との言ひ掛け。

うらやましかゝる楓のかげしめて若葉の彌生もみぢ葉の秋

林崎文庫遷宮祝賀會當座社頭杉

いすゞ川あらたにうつる神垣にとしふる杉の影はかはらず

物いはば神路の山の神杉にすぎし神代のことごとはまし

九月の頃大神宮に詣でける時齋宮村にて

來て見ればいつきの宮の跡ふりて秋かぜさむき野邊の小薄

九月十三夜

池みづの玉藻の中のみがくれもしるくぞ見ゆる長月のかげ

今年八月十五夜も九月十三夜も共に月さやかなりければ

玉くしげ二夜ながらにあくるまでちりもくもらぬは月なが月

寄月戀

とひなれて涙わすれぬ月影も袖のわかれはありあけの空

大神宮文殿月次會十月紅葉殘枝　本歌

きて見れば秋のかたみの木のもとと我もえたたぬ唐にしきかな

同十一月山館見雪

空晴れてふくやまかぜに今も又ふるや軒端の松のしらゆき

○若葉の云々　春三月若葉が出る時や秋紅葉するながめのあるのが羨ましい。
○林崎文庫　伊勢國宇治にある。創立年月は不詳だが珍籍奇書を藏む。
○いすゞ川　五十鈴川、御裳濯川。
○あらたにうつる　新築の宮に遷り給ふを、川に杉の影の映るにかけた。
○齋宮村　伊勢多氣郡齋宮村。神宮奉仕の齋王の御在所。
○いつきの宮　齋宮。
○中のみがくれ　玉藻の中で水に隱れてゐる月影。中の三日即ち十三日をかけた。
○長月のかげ　長月(九月)十三夜の月影。
○玉くしげ　ふたの枕詞。
○袖のわかれ　互に纏ひ交した袖と袖を解き離して別れること。
○文殿　書物を藏めおく所。
○かたみの木云々　形見の木の陰だと思ふと立ち去られぬ。立たぬに裁たぬをかけて唐錦に續けた。

同十二月春既卜鄰

うづもれて春はとなりの梅が枝も匂ひちりくる雪の中垣

船中時雨

山もとのあけのそほ船これも又今一しほとしぐれきにけり

遠近落葉

冬くればさそふむかひの風の名に小倉の山も散るもみぢかな

道観居士の二百回忌にみちのくの南部の九戸といふ所にてうせ給ひぬる事を思ひて

陸奥のはてと思ふも遥けきに年さへこゝら隔てきにけり

夕時雨

木枯にもみぢも雲もしぐれきて峯の入日のかげも残さず

夕月夜さし入るかげも柴の戸にしば〳〵くもる村時雨かな

海邊雪

ふりつみておもるしづえの白雪に白浪つゞく住の江のまつ

霜月頃新造内裏にうつろはせ給ふ行幸見奉りに京にのぼるに出で立ちける日日ぐらし空のはれぬことを人々いひあへるに

〇うづもれて　雪の中に梅が埋もれて。
〇春はとなり云々　春の近づいたここに鄰家の梅さつゞけた。
〇山もとのあけのそほ船　萬葉集「旅にして物戀しきに山下のあけのそほ船沖に漕ぐ見ゆ」山の下の赤く塗つた船。萬葉の山下をやましたのと訓んであけの枕詞とも解く。
〇今一しほ　一入は染汁に浸すこと で、赤く塗つた舟を紅葉にするやうに今一入に色濃くするとて時雨が降る。
〇むかひの風　山城乙訓郡向日山向日神社がある。拾遺愚草「夕づく日向日の山のうす紅葉まだき久しき秋の色かな」
〇道観居士・宣長の先祖本居左兵衛平武秀。天正十九年、九戸に戦死、年三十九。宣長諸家の昔物語参照。
〇こゝら　多く。
〇夕月夜云々　柴の戸に夕月がさし入る影。
〇ふりつみ云々　雪が降り積つて重くなる下枝。
〇新造内裏云々　寛政二年十一月二十日新造内裏に遷幸。

曇るとてかこつもあやなふりはへてみゆき見に行く冬の旅路を

京にて十一月二十三日雙林寺に京の人々國々の人々あまたつどひて歌よみけるに寄日祝といふ題をとりて

とことはによを天てらす日の本の國のさかえぞ限り知られぬ

或人の許に契沖法師の短冊を傳へもたるを見てめづらしく覺えたればよめる其の短冊は落葉浮水といふ題にて「いづくよりあまの流せるつり船ぞはつせの川にうかぶ木の葉は」とあり

朽ちせずてこの言の葉もいづくより流れ來つらむ水ぐきのあと

西川行久が木國にかへるに

立ちわかれ若の浦浪かへるとも又きの國の名をしたのまむ

水仙といふ花をかきたる繪に

梅よりも猶さきだちて山人と名におふ花や花のこのかみ

秋海棠といふ花をかきたるに

色も名も唐くれなゐの花のつゆかけそめて見む倭ことの葉

杉の木のもとに庭鳥のつがひ又雛をかきたるに

おのが子も末直かれと庭鳥のにはのをしへかすぎのこのもと

○かこつもあやな　歎きいふのもわけのわからぬことだ。
○ふりはへて　わざ〳〵。ことさら曇るの緣語。
○雙林寺　洛東靈山長樂寺の西南高臺寺の北。
○ここはに云々　永久に天下をしろしめし給ふ日の日本の國。天照らすは天に照りわたり給ふ意で天下を統治め給ふ意をかねた。
○契沖法師　大阪圓珠庵の僧。萬葉集代匠記をはじめ著書甚だ多く卓見は後代國學に益する所多い。
○この言の葉　この歌。
○水ぐきのあと　筆跡。
○木國　きのくに。紀伊。
○若の浦浪云々　立ち別れて紀伊に歸つても來(き)の國といふ名を賴みに思つて又來るのを待たう。浦浪はかへるの序。
○山人　仙人。
○花のこのかみ　花の兄。さきがけて咲いて最もよい花の意。
○かけそめて云々　色も唐(支那)紅名も支那めいた名の花に日本の言葉の歌をよみかけて見よう。かけそめるは言葉をかけるに露をかけるを言ひ掛けた。
○末直かれ　杉の木の先がま直なやうに將來直しくあれと敎へるかの木の下に居る。
○杉にはのをしへ　家庭の敎訓。

年の暮に

いつとてもいたづらにてふ言の葉を世の人まねの年の暮かな

内は去年の冬うつらせおはしまして始めたる春なれば思ひやり奉りて睦月朔日の日　寛政三年辛亥同四年壬子

霞さへけさはあらたにたちかへる大内山のはつ春のそら

三日立春

いづみ川とし浪早きみかの原おくれて今日ぞ春はたちける

試筆

おき出でて見そむる春のはつしほと朝日にかすむ遠やまの松

立春

逢坂も關のとささぬ御代とてや夜のまに越えて春は來にける

二見浦に朝日の出でたるに富士の山の見えたる繪に

赤根さす日かげと富士の白雪と二見の浦のあさあけの空

晩霞

みなせ川山本かすむおもかげのむかしもとほき春のけふの暮

疎戀

〇内は去年のと云々　天皇陛下は昨年寛政二年十一月新造の內裏に御遷りになつて今年始めての新年であるから。

〇いづみ川、みかの原　山城相樂郡。

〇とし浪云々　年波を川の緣で浪にかけた。

〇みかの原　甕の原に三日をかけた。新年より三日遲れて立春になつた。

〇はつしほ　春になつて草木の葉の初めて色づきそめること。

〇關のとささぬ云々　關の戶を鎖さぬ太平の御代といふのであるか一夜のうちに關を越えて春が來た。

〇赤根さす　日の枕詞。

〇二見の浦　日影と富士と二つ見るに地名をかけた。

〇みなせ川　攝津三島郡。新古今集「見渡せば山もと霞む水無瀨川夕は秋となに思ひけむ」

あはぬまのふみも通はず言づてもなつ野の道の絶え〴〵にして

あふ事のま遠なればや海人衣たび重ねてもなるゝよのなき

　人の七十賀に、寄竹祝

まことには君ぞ逢ひ見む呉竹のよのことぶきの千代の春にも

　人の七十賀に　古風

うつそみのよの長人と長らへて千歳いほ歳ありこそわがせ

　源氏物語夕顔巻のこゝろをかきたる繪に

夕顔の露かけそめし言の葉ぞつひにあふぎのつまと成りぬる

　梅映水

飛鳥井はうつろふ花の影もよし色も香もよきうめの盛りに

　遲日

峯こえて思へば長きはる日かな麓の花のけさのおも影

　竹口翁八十あまりにてみまかりたるに

八十年は花にぬるまの蝶のゆめながしと見しも春のやま風

　戀夢

はかなしや此の世に頼む通ひぢはおやのいさめぬ夢のうき橋

○ふみも云々　手紙も通はず言傳もない夏野。夏野になしたかけた。

○呉竹の　よの枕詞。

○うつそみ　現身。世、人の枕詞。

○長人　長命の人。

○ありこそわがせ　こそは願ふ詞せは男を親しんでいふ詞。

○夕顔　源氏物語夕顔卷參照。

○つひにあふぎ　「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」といひかけた歌が遂に源氏と逢ふ機會となつたの意。扇に逢ふをかけ手掛りたよりの意のつまに扇のつまをかけた。

○飛鳥井　大和とも山城ともいふ催馬樂「飛鳥井に宿りはすべし蔭もよし云々」

○うつろふ　うつる。映る。

○ぬるま　寝る間。

○おやのいさめぬ　親が戒め禁めない。

○夢のうき橋　大和吉野の夢のわたといふ所に架けた浮橋から轉じてはかない夢の中の通ひ路。

西行法師が「しばしとてこそ」とよみし跡とて陸奥に今も柳のあるを繪に書きたるに人の歌こひければ

立ちよりしあとさへ名さへとゞまりて千世に朽せぬ青柳の陰

寄紅葉戀

紅葉とて立田のこずゑ見るひとに我が袖見せむ秋ふかきころ

羇中郭公

さらずともみやこの夢もみじか夜を鳴けやかりねの山時鳥

鶯　古風

朝さらずきなけかきつの梅が枝に聞きのよろしき鶯のこゑ

寄落葉戀

くちのこるかたみの袖の色も見よこの葉ふりしく庭の朝霜

若菜　古風

ふぐしもちみかたま持ちて春の野に若菜つむ子が家とはましを

古風

眞玉手にみかたまかけて春の野を若菜つみつゝ行くはたが子ぞ

里卯花

○西行法師云々　新古今集「道のべに清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ」

○立田のこずゑ　立田山の梢の紅葉。

○我が袖　物思ふ血の涙に染めたわが衣の袖。

○朝さらずきなけ　毎朝來て鳴け

○かきつ　垣内。垣根のうち。

○聞きのよろしき　聞くことが好ましくよい。

○くちのこる　朽ちて殘る。

○ふぐしもち云々　萬葉集「籠もよみ籠もちふぐしもよみふぐし持ち此の岡に菜摘ます兒家のらへ名のらさね」云々によつた。ふぐしは掘串の義、木竹で作つた土を掘る具。みかたまは目を堅く細かに編んだ竹籠。みは美稱。

○眞玉手　手。眞も玉も美稱。

○たが子ぞ　誰であるか。子は親愛していふ語。

消えて後散れるさくらに見し雪を又みよし野のさとの卯の花

大館の高門が母の年ごろ大般若經とかいふ佛ぶみをうつせる六百巻といふ巻今はのこりすくなく出で來つるよし聞きてよみておくる

巻々の數をよはひにながらへて猶かきつくせ千々の御法も

花

かくばかり心にしむもさきの世のちぎりゆかしき花の色かな

人の七十賀に

庭の松長らへて見よとかへりの花の十かへり咲かむ春まで

山川より鮎のくだるかたかきたるに人の歌こひければ

これやこの過ぐる月日の早瀬川年の魚とはうべもいひけり

遊女の繪に

なほざりに引手ばかりは大幣のつひのよるせよ誰を頼まむ

扇に書ける歌

夏ごろもうすきは人の心ぞと秋にあふぎや思ひしるらむ

鶴と龜との繪に

かくれすむ淵のかめさへ萬代にまれなる御代と出でにけるかな

○さくらに見し雪　雪が消えてから櫻の花を雪と見た、その雪を又見たのは卯の花を雪と見たのだの意。又三吉野に又見るをかけた。
○大般若經　大般若波羅密多經の畧。六百巻。釋迦四處十六會の説法を記した經典、唐の玄弉三藏の譯。
○巻々の數　大般若經の巻數六百
○さきの世云々　前世に花と如何なる契りを結んでゐたか知りたく思はれる。
○とかへりの花　本朝文粹「德是北辰、椿葉之影再改、尊猶南面松花之色十廻、豈唯天意乎。」とかへりは十回。
○これやこの　これはあの瀬の早い川の鮎であるよ。
○過ぐる月日云々　月日の過ぎるのが早いに早い瀬の川をかけ、年に疾し(はやい)をかけた。年魚と書いてあゆとよむ。
○なほざりに　本氣でなく。
○引手云々　古今集「大幣の引手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」「大幣と名にこそ立てれ流れても遂によるせはありてふものを」
○うすきは人の心　輕薄なのは人情。
○秋にあふぎ　秋に厭きをかけて扇に逢ふをかけ、秋に扇が捨てられる意を含めた。

あし原に翼もやすきあさりして雲居思はぬつるのかしこさ

鶴の巣に雛の數多ゐたる繪に

呼びかはし數も數多の鶴の子のちよ〳〵と鳴くちよや幾ちよ

なみ木の松の木の間に富士の山の見えたる繪に

松の葉のいつともわかぬ木の間より雪も常磐の富士を見るかな

平治のみだれに源義朝妻常磐が雪のふるに三人のいときなき子どもをゐてさすらひ行くかたかきたる繪に人の歌こひければ

ふる雪のかゝる憂き身の歎きにもこずゑ花さく春をこそまて

海邊雪

春の日をまちや戀ふらむふり積る雪にたわめる三津の濱松

關霞

淸見がた關はかすみのへだてても猶もるものは浪のおとかな

山家梅

山里の梅の名だてのさびしさを都につてよのきの春風

色香知る人とや人のおもふらむ梅咲く山にいほしめし身は

山ずみもみやこ忘れぬつま木かなをりそへて見る袖の梅が香

○いつこもわかぬ　松の葉がいつと云つて區別をしないで常綠である松の樹の間から。

○雪も常磐　雪も永久に變らぬ。松のときはにかけた。

○三人のいときなき子　平治物語「八つになる今若惡禪師をば前に立て六歳の乙若(圓濟)をば手を引き牛若(義經)は二つになれば懷に抱きつゝたそがれ時に宿を出で足に任せてたどりゆく」

○ふる雪のかゝる　かゝるかくの如き憂き身に雪のふりかゝるをかけた。

○三津の濱　攝津の難波津の三津

○淸見がた　駿河國淸水港。

○猶もるもの　霞の中を洩れるものに關の緣語守るをかけた。

○梅の名立てのさびしさ　梅が名に立つのもさびしく稀なことを。

○色香知る云々　古今集「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞしる」梅咲く山里に庵を占めて居る私のことを梅の色も香も心も知る人だと他人が思ふであらう。

○つま木　都を忘れないつま(たより)を、爪木(薪にする折枝)にかけた。つま(褄)は袖と緣語。

故鄕梅

故鄕は夢のむかしの春風にのこるやうつゝ夜半のうめが香

遠尋花

こえてなほ風も幾重の花の香にうかれきぬらむ春の山ぶみ

海邊夏

夕すゞみ袖にまつらの浦風もまだ秋とほしもろこしの空

遠夕立

鈴鹿路や山田が原は夕立のふるかと見れば杉のむら立

鹿背山に夕立すれどいづみ川とほきわたりは水もにごらず

鏡山風こそきほへ夕立のうつるは遠き唐崎の松

月前旅

あけてこそ宿りはとらめ夜もすがら月見つゝ行く秋の旅人

故鄕を思へば幾重こえ過ぎて見る夜の月もをばすての山

古

雲もゐず秋の月夜は照らせれどやまとは見えず國遠みかも

野月

○袖にまつら　袖に涼風の吹くを待つに松浦とかけた。松浦は肥前。
○鈴鹿路　鈴鹿に通ずる路。
○山田が原　山田の廣々した所。
○ふるかと云々　夕立の降るを振るにかけて鈴の緣語。すぎのむら立は杉に夕立の過ぎゆくをかけた。
○鹿背山　山城相樂郡。泉河に臨む。
○鏡山、唐崎の松　近江。
○うつる　夕立が次々と移りゆくのを鏡に松が映るをかけた。
○をばすての山　信濃更級郡姥捨山。月の名所。
○秋の月夜云々　秋の月は照らしてゐるけれど。萬葉集「去年見てし秋の月夜は照らせれど逢ひ見し妹はいや年さかる」
○やまと云々　萬葉集「吾妹子をいざ見の山を高みかもやまとの見えぬ國遠みかも」

すむ影もあだの大野の花の露いろなる月に秋かぜぞふく

戒言法師秋の頃みまかりける十月二十九日の夜友達つどひてとぶらひの歌よみけるに雪の題をとりて

とひきても待ちつる人のなき跡と見ればかなしき庭の白雪

見し人は苔のしたとも白雪のしらず顔にもつもる庵かな

あととへば雪うちはらふたもとにも猶ちりまがふ秋の露かな

年の始めに

のどけさも此の日の本の光とはから人知らじはつ春の空

古

立ち出でてさほの川邊を見渡せばやなぎのこのめ春めきにけり

梅宮に梅の木を植うとてよみて添へて奉れる

よそめにもその神垣と見ゆるまでうゑばや梅を千もと八千本

春ごとの手向と植うる梅のみや咲かむ色香を神のまに〳〵

遠山霞

心あてのかすみばかりに昨日見し富士のねたどる東路の空

いにしへぶり

○あだの大野　大和宇知郡阿太。影の徒(あだ)にかけた。
○いろなる月　姿艶なる月。
○しらず顔　苔の下に埋もれてゐるのも知らぬふりで。
○ちりまがふ　袂から落ち散つて雪と露とまぎれる。袂から散り落ちる露と涙をたとへた。
○さほの川邊　佐保川は大和添上郡。
○このめ　木の芽。
○梅宮　山城葛野郡西梅津。
○神のまに〳〵　神の御心のまゝに、梅の色香を手向と受納ありたい。古今集「この度はぬさも取りあへず手向山もみぢの錦神のまに〳〵」

梅咲きて春と思ふにけさ見ればにはも眞白に沫雪ふれり

山見れば猶雪ふかしさくら花咲かむ春べをいつとかまたむ

大和國の三山のかたかけるに今一つ山のあるに　古

四つ山と人見らむかも三山の山のあらそひ見にこし山を

曉梅

しのゝめにあたら枕の梅が香をおきや別れむねやの春風

帆足惟香杉原彜が物學びに來ゐておのが著はせる書ども多く寫し取りて肥後國に歸るに　古

別るとも別ると思ふなうつし行く書に心はうつしやる我を

古

青山にいる日を見ても明日よりは筑紫の空し思ほえむかも

立ちかへり又こむほどもしらぬひの國の名つらし今日の別れに

稻掛大平が安濃の津の松の屋の松叟がかくれがをとぶらひて歸りきて松の黒木の柱などいと假初なるいほりのさまを語りけるを聞きて松叟許によみておくりける

世を捨てて名さへいほりの柱さへ千年をまつの身は安き君

○沫雪　泡のやうに消え易い雪。萬葉集「吾が背子をいまか〳〵といで見れば沫雪降れり庭もほどろに」

○春べを云々　花咲く春が何時來ることかと思つて待たうぞ、待遠いことだ。

○大和國の三山　畝傍山、耳無山、香具山。

○四つ山云々　四つの山と人が見るだらうぞよ。

○山のあらそひ云々　萬葉集「香具山は畝火ををしと耳梨と相爭ひき云々」の長歌、並にその反歌「香具山と耳梨山とあひしとき立ちて見にこし印南國はら」

○おきや別れむ　梅が香をあとに置いて別れるを閨から起きて別れるにかけた。

○別るとも云々　たとひ身は互に別れても別れたとは思ふな、今汝が書寫してゆく書物に我が心を移してやるから。

○青山　草木の青々と茂つた山に

○思ほえむかも　思ひやられるだらうよ。

○しらぬひ　不知火。筑紫の枕詞又筑紫の一名ともいふ。又來む程は知らずと言ひ掛けた。

○稻掛大平　宣長の養子。

○安濃の津　今の伊勢の津市。

○名さへ云々　松の屋の松叟といふ名までも松で、庵の柱までも松。

埋火

長きよはひまより先に埋火のまづしらみゆく閨の寒けさ

埋火を題にて人々と歌よみける時に今の世のこたちといふ物をよめと或人の言ひければ　古

むし衾なごやが下の埋火にあしさしのべてぬらくしよしも

岩崎菜正月に清水寺の瀧のもとにてかしらおろして名も泰水とつきたるによみて送る

うき世出でて見し初春の水鏡心もさぞないさぎよきかげ

月　古

月清み見つゝあかせばぬば玉の秋の長夜は言にしありけり

秋の野の花の中に鶉をかきたる繪に

きても見よ牀はにしきの花のつゆ涙も色にうづら鳴く野を

旅宿花

やどかりて一夜の月のおぼろげに見しははかなの花の契りや

旅宿夢

見もはてぬ都のゆめよ中々になに面影のさやの中やま

○ひまより先に　夜が明けて戸のすきまが白むより先に。
○むし衾云々　萬葉集「むし衾なごやが下に臥したれど妹とし寝ねば肌し寒しも」むし衾は暖かな夜具。なごやは和やかなこと。
○ぬらく云々　寝るのは氣持がよいことだよ。
○清水寺の瀧　洛東清水寺の音羽の瀧。
○かしらおろし　出家剃髪して。
○心もさぞな云々　心もどんなにかさつぱりしただらう、水鏡の影も清らかで。
○月清み云々　月影が清く澄みわたつてゐるので終夜眺めても長いと思はれぬ、秋の長夜といふのは言葉にいふだけの事だ。ぬば玉のは夜の枕詞。
○牀　鶉の牀。鶉の臥し處。
○おぼろげに　いゝ加減に、一とさ通りに。月に朧にかけた。
○中々に云々　なまなかに夢を見なければよいに却つて夢に見た俤が偲ばれて殘念である。佐夜の中山を障(さや)るにかけた。

夜戀

又もねぬやみのうつゝの面かげに見し夢したふさ夜の手枕

老後見月

おいぞ憂きうかりける世の秋とても涙のひまは有りし月夜を

杜郭公

鳴きすてて涙のこして郭公いづちいくたの杜のした露

矢背の賤のめが馬に薪をおほせて川べをひき行くさまかきたる繪に

賀茂川をわたれば早くせにかはるつま木は淺き契りなりけり

水風晩涼

すゞしさはみぎはの松に聲かはすせみの小川のなみの夕風

關花

あふ坂やさかり過ぎ行く櫻花とゞめやはせぬ春のせきもり

雪ふみて出でし日數もつもりきてまた咲く花のしらかはの關

いにしへぶり

から國のしこのしこ道よの中の人ぞまどへるその言よきに

天てるや神のさづけし眞白玉ひかり見ねばや人のしらなく

○やみのうつゝ云々　寐覺して暗闇の中に現に人の面影を偲ぶにつけても今見た夢がなつかしい。
○いづちいくたの杜　何地へ行くを生田の森とかけた。生田の森は攝津武庫郡。拾遺集「いづ方に鳴きてゆくらむ郭公淀のわたりのまだ夜深きに」
○矢背の賤のめ　洛外八瀨の大原女。
○賀茂川云々　賀茂川を渡つて京の町に入ると早くも薪は錢にかはる。せにかはるは薪が錢にかはるを川の淵瀨のかはるにかけた。爪木は薪で、契りはその緣語。淺きは川瀨の緣語。
○せみの小川　山城愛宕郡。下賀茂の東、賀茂川に入る細流。聲かはす蟬といひかけ。
○さかり過ぎ行く　花盛りが過ぎ行く。春の花盛りが通り過ぎゆくのを關守は留めはしないだらうか留めてゐるのに盛りは過ぎゆくよ。
○雪ふみて云々　雪の降る中に故鄕を出たが日數積つて白河の關へ來ると雪かと思はれる白い花が咲いてゐる。つもりては雪の緣語。
○から國の云々　外國の醜惡なる人の醜惡なる道。
○天てるや　日の枕詞。轉じて日。天てるや神は日の御神。
○ひかり見ねば云々　光を拜み見ないからであらうか眞白玉を人が知らぬ。

さかといふ大なそ人のをそ言にをそ言そへて人まどはすも

尾張の熱田なる白鳥御陵にまうでて　古

敷しまのやまと戀しみ白鳥のかけりいましし跡どころこれ

同國名古屋にて日頃宿りける家のあるじ植松有信によみて與ふ時は彌生の二十日あまり

花ならぬ人のなさけの色深みはるよりをしき春のわかれ路

石原將聽年ごろのから書まなびの心を捨てて古學におもむきておのが弟子に成りたるおのが名古屋より國に歸る馬のはなむけに漢ふみ作りて送りける答へ　古

手にまける白玉しらに人國のおそや世の人いしをほりすも

古

包めりしいし皆うててはしきやし白玉ひりふ君がかしこさ

井手玉川に山吹の花咲きたるに俊成三位の馬に乘りて渡らるゝかたかきたる繪に

山吹のつゆの言葉のはなの香もながれてにほふ井手の玉川

小浦朝通よこ瀧山に紅葉見にものしつとて歸さに立ちよりて色こき枝に

○さか云々　稱運といふ大虚言家の虚言に又更に虚言を加へて人を迷はす。

○敷しまの　やまとの枕詞。戀しみは戀しさに。

○白鳥云々　倭建命薨じて八尋白智鳥となつて飛ばれた。其の地に陵を作り白鳥の御陵といふ。

○馬のはなむけ　餞。

○手にまける云々　手に卷いてゐる結構な貴い白玉を知らないで外の石を欲する世人の愚らしく鈍いことよ。

○包めりし云々　包んであつた石を皆棄てて愛すべき白玉を拾ふ君

○井手玉川云々　山城綴喜郡。六玉川の一。新古今集「駒とめてなほ水かはむ山吹の花の露そふ井手の玉河」三位藤原俊成の歌の意の繪。

○色こき枝　色濃い紅葉の枝。

「一入は君が言葉の露かけて染めてながめよ山のもみぢ葉」といふ歌よみてつけて得させたるかへし

たをりこしめぐみの露の色深み今さらそめむ言の葉ぞなき

寄時雨述懐

色淺きわが言の葉よいくたびか窗のしぐれに筆はそめても

時雨

さそひきて風の末野を行く人の袖にしぐるゝよその村くも

旅時雨

旅ごろもたび重なればひぢ笠の袖もしとゞのむら時雨かな

むらしぐれ岩根木の本さだめなき山路のたびのあまやどりかな

柿本神の御かたに人の歌こひければ

世にぞてる神とも神とかきのもと仰げばいとゞ高き言の葉

寒草霜

野邊の霜うらみ忘れぬ冬草になにかなく〳〵の花のおもかげ

等思兩人

二方に思ひうかるゝ玉くしげ分けがたき身を歎くよる〳〵

○一入云々　この紅葉の枝に歌をよんで一しほ染めて詠めよ。一入は染料に一度浸して染めること。

○色深み云々　色が深く濃いので今またその上に染めるべき加へるべき歌もない。

○わが言の葉よ　わが歌の淺薄なことよ。

○ひぢ笠　肘を頭にあげて雨を凌ぐこと。

○しとゞ　濡れる樣。びつしより。

○岩根木の本云々　岩根でも木の下でも場所を選ばず雨宿りする。

○柿本神の御かた　歌神柿本人丸の御肖像。

○世にぞ云々　天下に輝きわたる神と垣の下から仰ぐこと。

○野邊の霜云々　草を枯らす野邊の霜に對しては怨みを忘れられないがどうした事か、冬草に霜置いて却つて花の俤があつて霜を怨むこともできない。

○玉くしげ　筥に緣ある語の枕詞こゝでは分くにかけた。

○よる〳〵　毎夜。よな〳〵。

湖冬月

月影のうつるみるめも浪とほくよる〳〵氷るにほの海つら

冬夜時鳥　雜題

卯の花と見つゝねし夜の夢なれや雪のまがひの山ほとゝぎす

百人一首の歌をもて富士の山とかきたるに

珍らしな五つはたちの言の葉を重ねあげたる富士の高嶺は

きの國の或人の六十賀にその國の名高き所々を題にて歌すゝめけるに若

浦

老の浪よるとも見えず萬代をまつにのどけきわかのうら風

三浦雪溪が又の春は必ず來むといひて師走の朔日ごろ紀の國にかへるに

又こえてきの關守はとゞむとも名に立つ弓の春な過しそ

須磨浦と明石浦と春秋の景色を書きたる繪に藤光保が歌請ひけるに詠みてかける須磨には海士の磯屋の軒に櫻花咲きたり汐くむ男あり明石に磯邊には紅葉したる木どもたてり網引きする船も有り

櫻さく磯のしほ屋の軒ちかみ花の影くむすまのうら人

霧はれて朝引くあみのめもあやに梢あかしの浦のもみぢ葉

○月影の云々　月影が映るのを見る目も遠く浪が沖まで遙かに氷る琵琶湖の水面。新古今集「志賀の浦や遠ざかりゆく浪間より氷りて出づる有明の月」

○五つはたちの言葉　百首の歌。

○まつに云々　萬代を待つて前途長へに若く、松には長閑に和歌の浦の浦風が吹く。若の浦に年若いのをかけた。
○きの關守　紀の國の關守。越えて來をかけた。
○弓の春　弓張るを春にかけた。

○櫻さく　磯邊に櫻の咲いてゐる所へ鹽屋の軒が近いので、汐汲む桶には花の影が映つてゐる。
○めもあや云々　眼も驚くばかり美しく梢が紅く紅葉してゐる明石の浦。赤しと明石と言ひ掛け。

早春霞

よをこめてけさは春たつ杉むらや霞おくれぬあふ坂のやま

かけて待つ花のにしきの下衣はるたちそむる朝がすみかな

あかはだの山にかすみのうす衣かくれもはてぬ初春のそら

君が世にあふうれしさは來る春もよもの霞の色にいでけり

旅泊雪

おもしろき雪のみるめをかりそめの磯のうきねも日數積りぬ

岡山正興新宅會寄雪祝

千世をへて千度つもらむ跡つくる圓居も今日を初雪のには

うゑて見るあるじの千世を松高く今日よりつもる庭の白雪

庭梅

玉だれに色もすきまの梅の花香はさながらの庭のはる風

谷鶯

初花の浪もまだしき谷の戸をまづうち出づるうぐひすのこゑ

夜郭公

ほとゝぎすあけぬ夜の間といそぐらむ鳴く一聲も忍音の空

〇よをこめて　朝すべきここを前の夜からかけてするにいふ。

〇かけて待つ　春かけて待つ。冬から春に亙つて花咲くのを待つてゐた。

〇はるたちそむる　春立つに霞の立ちそむるをかけた。立つは裁つに通はして錦や衣の緣語。

〇あかはだ　赤膚。す裸。

〇雪のみるめ云々　雪の見る目。雪の眺め。みるめ（海松、海藻の名）を刈るに假初とかけた。

〇千度云々　幾度も重ねるべき先例を作る會合も今日が初めである に初雪が降る。積る、跡は雪の緣語。

〇玉だれ云々　玉簾に梅の花の色が透き通つて來る。梅の香は庭のその儘に春風に匂つて來る。

〇初花の云々　初花が浪たつやうに咲くのにもまだ早い谷の口を出る鶯の聲。うち出づるは聲に出す意と谷を出るとにかけた。

定めつや世人はいかに時鳥ゆめかうつゝか夜半の一こゑ

ほとゝぎす又さだかなる夢にだに見ぬよの闇をかこつ一聲

一聲はまだよひながらしのゝめの雲のいづこのやま時鳥

野月

影やどる花野の夜半の露見れば月も千種のいろはありけり

女郎花多かる野邊にやどる夜も月のあだ名は露ぞたてける

武藏野や月の桂の一もとにみながらひかる秋くさの露

いろ／＼に宿る野もせの露みれば花こそ月のひかりなりけれ

かくれなむあしたの原よ面影はかねてさびしき秋の夜の月

草露映月

露はらふ草葉のかぜを山の端と月かけをしむ武藏野の原

紫の月は何ぞのゆかりとて草葉もあはれ武藏野の露

花さかぬくさ葉に秋をかすが野や月影きよき夜半のしら露

九月十三夜

長月の水の月なみさやけさは秋のもなかに立ちやかへれる

寄雪祝

○定めつや　夢か現かわからず覺束なく聞えたが世の人は夢現いづれと決したか。

○一聲は云々　古今集「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲の何處に月宿るらむ」「夏の夜の臥すかとすれば時鳥なく一聲に明くるしのゝめ」

○女郎花云々　古今集「女郎花多かる野邊に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ」

○月の桂云々　月の中の桂が一本光つてゐるので武藏野の秋草は悉く光る。古今集「紫の一本故に武藏野の草はみながらあはれとぞ見る」

○野もせの　野も狹いまでにしげくおいてゐる露。

○かくれなむ云々　月が葦田の原に隱れてしまふ明朝の月の面影は前夜から思ひやられてさびしい。葦田の原は大和北葛城郡。あした(明朝)をかけた。

○紫云々　紫草を照らしてゐる月は何の緣があるといつてか武藏野一面の草葉の露を照らしてゐる。

○長月の云々　拾遺集「水の面に照る月なみを數ふれば今宵ぞ秋のもなかなりける」秋のもなか云々は長月が八月十五夜に立ち歸つたのであらうかの意。

吹く風も枝をならさぬ君が代は八千世もつもれ松のしら雪

山のおく野の末までもしら雪の深きめぐみにもれぬ御代かな

年の暮に

ふりまさる老の頭の雪のみや年つもる身のしるしなるらむ

寛政四年十二月二十日のほどに古事記中卷の傳かきをへぬる事を喜びてよめる

白雪のふる事ぶみのしるべして年つもりぬる跡は見えけり

年の始めに詠める　古　寛政五年癸丑

天の原いさの眞名井も若水を今やくむらむあけぼのの空

野外霞

みやこ人若菜つみにと出づる野にさきだつものは朝がすみかな

野徑霞

旅人のいく野の末のいくへとも限りしられず霞む春かな

山家鶯

初聲に春は來にけり山里も鶯鳴かぬかぎりこそあれ

空はなほ雪げながらの山ざともきけば心のはるのうぐひす

○枝をならさぬ　王充論衡「太平之世、五日一風、十日一雨、風不鳴枝、雨不破塊。」

○ふる事ぶみ　古事記。

○いく野　丹波天田郡生野。旅人の行く野とかけ幾重と重ねた。

○鶯鳴かぬ云々　古今集「春きぬと人はいへども鶯の鳴かぬ限りはあらじとぞ思ふ」を轉用した。鶯の鳴かない間こそは春は來ないが、もはや初聲を鳴いて春は來た。

○空は云々　空は雪模様があるが鶯の聲を聞けば心が晴れて春めく心の晴るは雪の縁語。

寄木戀

くちねたゞ頼むよるべも流れ木の長らへてなど物思ふらむ

いかにせむ心のおくの花をだにうきみ山木は人もたづねず

あらはせる書どもをむ月の末つかた殿のおまへに奉るとてそへて奉れる

峯の松高きめぐみの陰とめて今日ふみのぼる道ぞかしこき

松の屋翁五十賀に、寄松祝

千代遠く今年十かへり手を折りて松にさく花まつのやの君

櫻 古

あくまでに見まくのほしき櫻花五百日八百日かも散りこすなゆめ

熊野の錦の浦の歌かしこの人のこへるに

赤根さす朝日に匂ふ沖つ浪うらはにしきの名にぞたちける

曲水宴

流れくる色にきほひて言の葉も心にうかぶ花のさかづき

池五月雨

晴れやらぬ池の心のいぶせさも濁るに見ゆる五月雨のころ

更衣

○くちね 流れ木は朽ちてしまへ
○よるべも流れ木 よるべもないをかけた。
○うきみ山木 憂き身を深山木とかけた。
○蔭とめて 松陰を尋ね求めて。
○ふみのぼる 今日書(ふみ)を奉る峯の道を踏み登るにかけた。
○十かへり 本朝文粹「德是北辰椿葉之影再改、尊獨南面、松花之色十廻。」
○手を折りて 指折り數へて。
○見まくのほしき 見むことのほしき。
○散りこすなゆめ 決して散るなこすは希望の意の助詞こその轉。
○錦の浦 紀伊牟婁郡丹敷浦。
○赤根さす 日の枕詞。
○うらはにしき云々 浦の名が錦といふので名高い。裏に通はして錦の緣語。
○流れくる 曲水に杯が浮んで流れて來る。
○言の葉云々 歌が心にうかんで(思ひついて)くるに杯の浮ぶをかけた。
○池の心云々 池の晴れ〳〵しないうつたうしさ。池の心は池を擬人してその心をいひ又池もいふ。

花にそむ心の色もおのづからかはるとなしに蟬の羽衣

新樹

尋ねきてのこれる花はなつ木立木々の緑もかひはありけり

うつりけり木々の若葉の色見れば花に染めてし春のこゝろも

夏木立しげれる陰のをぐら山いつか紅葉のてらむとすらむ

菊の花の枝に短冊を結びつけたる縮に

これも又花のひかりと朝露にむすび添へたるきくの言の葉

樹陰納涼

かた枝さす入日はあれど夕陰になるかた涼しをふの浦梨

寄花述懐

長らへて我が身にはよし咲かずとも猶いく春も花をこそ見め

まよひさとりといふ事をこと〴〵しく人のいふに

さとるべき事もなき世をさとらむと思ふ心ぞまよひなりける

題戀

うちとけて浪のよる〳〵磯松のねし我が中はあらはれにけり

荻風

○花にそむ心　花にしみこんだ心

○尋ねきて云々　花を尋ね來ても殘りの花はなく皆夏木立となつたが、木々の綠を見ると矢張り尋ね來たかひがあつた。

○をぐら山　小倉山山城葛野郡。木かげのを闇をかけた。

○花のひかりと　この短冊の歌も花の光榮として。

○かた枝さす　一方の枝が生え出て、日かけさす夕日はあるけれど。

○をふの浦梨　古今集「をふの浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならずも寢て語らはむ」麻生（をふ）の浦は所在不明。萬葉古義に越中射水郡とす。

○我が身には云々　自分の身にはたとひ花々しい身の上になることはなくても。

○浪のよる〳〵　浪の寄るに夜々をかけた。

○磯松のねし　松の根に打解けて寢しをかけた。

をぎはらや一本ならばよきよともいはましものを秋の夕風

秋くれば涙もかゝる夕風を荻の葉しらでそでに待ちけり

月前草花

よるは又ひかりをそれと散らす野に月も千種のはなの一種

三のたゝへ歌 古

四方やもに國は多けど敷しまのやまと島根ぞ八十のおや國

古

國ごとに君はあれども高ひかる吾が日の御子ぞやものおほ君

古

國々に道はしあれど天てらす日の大かみの道ぞまさみち

桃の花を

かくながら色もかはらで桃の花百世も千世も見る由もがな

業平朝臣のかたかきたる古き繪に

神代にもきかぬ言葉の色なれや唐くれなゐに水くゝるとは

柳絲隨風

川風のふくかた絲に淺みどりよられてなびく岸の青やぎ

○一本ならば　荻が一本くらゐならば荻吹く風の避けよさとも云はうに、原一面の澤山な荻で風も寂しい。

○涙もかゝる　荻吹く風の寂しさに涙も袖にかゝるこのやうな夕風であるのに、今まで荻の葉に氣もつかず袖に吹きくる風を待つたことよ。

○四方やも　四方八方。諸方。

○敷しまの　やまとの枕詞。

○高ひかる　日の枕詞。

○やも　あらゆる方面。やおも。

○道はし　しは强め辭。

○まさみち　正道。正しい道。

○神代にも云々　古今集業平の歌「千早ぶる神代も聞かず立田川からくれなゐに水くゝるとは」

○ふくかた絲　風吹く方（かた）を片絲にかけた。片絲は縒り合はさぬ絲。古今集「淺綠絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」

花ならで吹きよるもよき春かぜは何か柳のいとひしもせむ

春風のよるにまかせて爭はぬ柳の絲はくるしげもなし

谷鶯

花の香のしるべも待たで谷風にまづ打ち出づるうぐひすのこゑ

鶯の打ちとくる音はよそならで谷の氷も春やしるらむ

のどかなる光はうとき谷の戸もさすが春知るうぐひすの聲

江螢

影みがく玉江のこもをおのがとてしめてやすだく夜半の螢も

とぶ螢あはずば何をちる玉のをのの深江にもゆる思ひぞ

何事を思ひ入江のほたるとて底にもかげのもえて見ゆらむ

久戀

今は又たれ住の江の岸の松ねぬよ久しくなりにけるかな

子の日して世をいはふにもわが中の逢ふ事まつを例にはひけ

七夕船

彦星の船出ぞおそき天の川わたらぬさきにかぢやかくせし

天の川きしうつ浪のおと高しわがまつ船も今やよるらむ

○吹きよる　風吹き寄る。柳の絲を縒るにかけた。
○柳のいとひ　春風をどうして柳が厭ひもするものか。厭ひを柳の絲にかけた。
○しるべも待たで　先案内も待たないで。
○鶯の打ちとくる音　鶯の鳴く音のよくとけて流暢になつた音。解くるは氷の縁語。
○のどかなる光云々　春の長閑な光は人氣も疎き谷の口にも光さして、さすがに春が來たのを鶯が知つて鳴く。
○玉江の云々　萬葉集「三島江の玉江のこもをしめしよりおのがとぞ思ふ未だ刈らねど」こもは眞菰。
○おのが云々　自己のものと占め所有してゐるのであらうか、眞菰に螢が集まつてゐる。
○底にも　入江の水の底にも螢の影が燃えて見える。
○たれ住の江　誰が通ひ住んでゐるか自分は通ひ寢ぬことも久しくなつた。住むは男が女の所へ通ひねることをいふ。ねぬ夜を根に通はして松の縁語とした。
○子の日　正月子の日に野に出て小松を引いて千代を祝ふこと。
○彥星　牽牛星。織女星の夫。

夕霧にこぎくる梶の音はして見えぬ間ひきしあまの川ふね

立ちいでて天の河原の夕なみに君がみ船のよるをこそまて

故郷月

故郷は月のかげさへやつれけり涙くもらぬ夜半しなければ

月前眺望

わたつみのかざしの玉かあはぢ島浪にかげさす秋の夜の月

あかなくにふけ行く月の清見がた影だにとめよ浪の關守

月きよみ中に生ひたる名も高き里のこずゑぞわきてめにたつ

朝雪

明けぬれど朝日もしばしうづもれて影まつ峯の雪の寒けさ

朝まだき見わたす山の白雪にあとつけそめて飛ぶからすかな

年の暮に詠める

ふりゆくも惜しからぬ身を人まねに今年くれぬと何歎くらむ

急がるゝ花の爲には惜しむにもくるゝや年の情なるらむ

くれゆくに今日驚きて一夜あけば又や忘れむとしといふ名を

徒らに暮せる年はつもれども猶數ならぬ身をいかにせむ

○わたつみ　海神。
○かざしの玉か　秋の月の影は海神が髪にさした頭の飾りの玉であるか。
○あかなくに云々　まだ月を眺め飽きもせぬに早くも夜が更けてゆくことよ。清見潟は駿河清水港。
○月きよみ　月が清く澄んでゐるので。
○中に生ひたる云々　月中に生えてゐる桂。名高い桂の里。山城葛野郡。
○ふりゆくも　老いてゆくのも。
○何歎くらむ　何のために歎くことであらうぞ。
○急がるゝ云々　年の暮れるのを惜しむにも拘らず年が暮れてゆくは、早く見たいと急がれる花のためには却つて思ひやりがあるのだ。
○としといふ名　年といふ名に疾し(はやい意)をかけた。
○數ならぬ身　取るにたらぬ身。積るけれども數にもならぬとかけた

年の始めに　寛政六年甲寅

初春やかしらの雪も消えぬべし朝日にむかふ今朝のこゝろは

古風古

百八十の國のおや國もとつ國すめら御國はたふときろかも

冬野薄

もゝくさの色はかれ野の花すゝきほのかに殘る秋の面影

水郷霞

立ちこめて春は難波の何となく霞むぞ浦のながめなりける

谷鶯

ふるす出でし今朝の初音の春だにもよそにうつるなたにの鶯

尋花

こゝろあての花は山路の春風にとへど匂はぬ峯のしら雲

播磨國林田宮

はふりらがいはふ白木綿千世かけて榮行く木々の林田の宮

手斧はじめといふ事のうた人のこひければ

眞木柱つくるたくみが今日ぞまづ手斧の音をたて始めつる

○百八十の國　多くの國々。
○たふときろかも　貴きかな。ろは助辭。
○もゝくさ　松の異名にもいふがこゝは百草、いろ／＼の草。千草。
○ほのか　花薄の穗を言ひ掛けた
○こゝろあて　あて推量。
○林田宮　播磨國揖保郡林田村祝田神社か。
○はふり　神社に居て神に奉仕する神官。
○いはふ　神を祀るに齋み愼む。
○白木綿　神を祭るとき榊などに垂れかけるゆふ。かけての序。
○手斧はじめ　大工の仕事はじめ
○眞木柱　檜木の柱。
○たくみ　大工。

澤螢

とぶ螢なれも野澤のみづからは燃えてもうつる影や涼しき

開萩

夕ぐれに庭の萩ふく音きけばなべて草木のかぜは秋かは

大かたの木草のかぜは秋としもなみだことなる萩の音かな

八月十五夜にはいつも歌の會して皆よむを今年はさる事せでさう〳〵しきに月は殊にさやかなれば

望月のかけぬ圓居のかけぬるぞ今宵の影におもふくまなる

羇中花

みちいそぐ旅とてちらぬ花みてもしづ心なき春のこのもと

みやこかはけさ見し花の面影も立ちそふ跡のみねの白くも

旅衣日もまだくれぬ木の本にやどらまほしき花の色かな

旅衣みやこわするゝこのもとも立ちよれば又花のわかれぢ

神祇

あふぎ見てこまもろこしも天照らす神の御影はしるらむ物を

わたの原島の八十島四方のくにひかりあまねく天てらす神

○たれも　汝も。
○野澤のみづから　野澤の水を自らとかけつゞけた。
○なべて草木云々　大かたの草木を吹く風は最早秋ではない、冬枯である。
○秋としも云々　秋といふことではない。寂しさに涙が殊の外に催される、萩の風音を聞くと。
○皆よむ　人皆歌を詠んだのに。
○さう〳〵しき　寂しい。
○望月云々　十五夜の月が缺けないで圓滿な今宵、毎年缺かした事のない歌の會が今年缺けたのは今宵の圓い月に陰翳のさした氣がする。
○しづ心なき　靜かな落著いた心のない。あわたゞしい。
○旅衣日も　紐と衣と緣語。
○立ちよれば　木の下に立ち寄つて故郷を忘れるが此處を去る時には又故郷出發の時のやうに花に別れが惜しまれる。
○わたの原　海。
○島の八十島　多くの島々。

とことはに世を天照らす日の本の國のひかりは四方に曇らず

關路夕

名のるとも猶やとがめむ朝倉の關ゆく人はたそがれのそら

いそぐともゆくさきくれむ清見潟いる日とゞめよ浪の關守

新樹

散りすぎて忘るとまではなつ山の色にもうつる花心かな

花ならぬ山の青葉も一枝はをりしるなつの家づとにせむ

み吉野や青根が峯もいづれとかわか葉にたどる夏木立かな

夏もなほ木々の若葉をみ吉野の山に分け來る花はなくとも

時雨せぬなつの緑も日にそへて色はまさきのかづらきの山

曉擣衣

あくるまで里のきぬたも絶え〴〵に猶うちまじるかねの音かな

後朝戀　古

見おくるとかな戸にたちし吾妹子が朝けの姿いつか忘れむ

古

妹が家のかきつの柳かへり見てわは行きがてぬけさの別れ路

○とことはに　永久に。常磐に。

○名のるとも云々　新古今集「朝倉や木の丸殿にわがをれば名のりをしつゝゆくは誰が子ぞ」朝倉の關は筑前朝倉郡。

○たそがれ　誰そ彼。黄昏。

○散りすぎて云々　花が散り過ぎて花を忘れるといふまでではないが夏山の青い色に心が移る。

○をりしる　青葉の一枝を折る。青葉の夏の時節を知る。

○青根ヶ峯　大和吉野山の東嶺。

○わか葉にたどる　若葉の茂つてゐる中をどれが青根が峯かとたづね求める。

○日にそへて云々　一日々々と緑の色はまさるまさきのかづら（扶芳藤）から葛城山につゞけた。

○かな戸　金物で深山打つて堅くした門の戸。門をかどといふはその署。

○吾妹子　妻を親しみていふ。

○朝けの姿　朝明け。

○かきつ　垣内。垣根のうち。

○わは行きがてぬ　吾は行き難くあつた。

羇中花

山ざくらやつれし旅の衣手ににほふか花のみやこおぼえて

早春水　寛政七年乙卯

春の來て霞む朝日のかげもよし冰とけ行く飛鳥井の水

物名　短册箱

山高み雲かと見えてをちかたにさくはこゝろにかゝる櫻か

人の賀に

松をおきて人も千年はふるものと君ぞいはれむ長きためしに

荒木田末偶六十賀に、伴松榮久

いかで〳〵われもあえなむ松にあえて千年榮えむ君が契りに

水郷春望

朝夕の里のけぶりも春はたゞひとつかすみのうぢの川つら

折りたる紅葉の枝をかきたる繪に

一えだにあまたの木々の面影もたつ田の紅葉見る心地して

旅宿梅

ふるさとの花のおもかげさそひきて旅寢なやます梅の下風

○花のみやこおぼえて　花の都も思ひ出されて。

○かげもよし云々　催馬楽「飛鳥井に宿りはすべし陰もよしみもひも寒し御秣もよし」を朝日の影に轉用した。飛鳥井は大和とも山城ともいふ。

○山高み　山が高いので。

○をちかた云々　遠方に咲くは。たにさくはこ(短册箱)をよみこんだ。

○松をおきて人も　松を除いて人も。松の外に人も。

○われもあえなむ　吾も君にあやかりたい、松に肖つて千年榮える君に。

○面影もたつ田　面影にたつて見えるを紅葉の名所の龍田にかけた

春霞

たちこめて花鶯の長閑けさもおのが色香のはるがすみかな

堀田泰輝父七十賀春松

ながらへよ子の日の千世の例にも小松とともに君をひくまで

雪中鶯

雪の内は花こそ見えね梅がえに鳴く音埋まぬ春のうぐひす

思ひあへぬ初音は雪の中々にのどけさまさる春のうぐひす

ぬひおきて梅の花笠ふる雪にきつゝ鳴くなる鶯の聲

遠歸雁

あさ霞月もいまはの山の端をこえて消えゆく春のかりがね

海歸雁

住よしと名にたつ春の海べにもかへる雲居の雁はとまらず

住のえや菊の花さく秋とだに契りもおかでかへる雁がね

聲はして影もみぬめの浦遠くかすむ雲居をかへるかりかな

帆にあげて行く聲とほし春の雁船は汐まつ浦のあけぼの

月前花

○たちこめて　春霞が立ちこめて

○花こそ見えね云々　花は雪に埋まつて見えないが鶯の聲は雪に埋まらぬ。

○雪の中々に　雪の中であるので却つて長閑けさがまさる。

○ぬひおきて云々　古今集「青柳を片絲によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」

○月もいまはの山の端　月も今は限りと入る山の端。

○住よし云々　住みよい所だと名高い住吉の海邊であるにそれでも歸る雁は留らない。

○影もみぬめの浦　雁の姿も見ぬ目。敏馬(みぬめ)の浦は攝津武庫郡。

○帆にあげて　高く聞く聲を張りあげる。古今集「秋風に聲を帆にあげてくる舟は天の戸わたる雁にぞありける」

花はまだ散らぬ梢にかけ落ちてまづ惜しまるゝ春の夜の月

ならべてはおぼろ月夜にしく物もまた有明のやまざくらかな

影うつる色もおぼろの山ざくら花に風まつはるの夜のつき

あひにあひて咲きも残らず散りもせで花も今夜や望月の影

あかず見る月のいるさの山ざくら散らぬも惜しき花のいろかな

新　戀

き舟川祈るしるしもなみにさへいとゞ袂はぬらしそへつゝ

題　な　し　古

天てるや神の御國の人草は人ならはぬや神ならふべし

古

さひづるやからくに人の僞りは似つきてすれば人まどひけり

古

をりたむな直き神代のこゝろもて直き神代のみちは尋ねよ

古

なほりてむ外國（とつくに）ぶりのまがわざも遂に直びの神しらさば

大御神宮にまうづとて宮川を渡りて　古

○おぼろ月夜に云々　新古今集「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」

○あひにあひて云々　よくもぴつたり合つて、花も月も盛りの極點が合つたものだ。

○月のいるさ　月の入る方。

○き舟川　山城愛宕郡、貴船神社がある。

○祈るしるしもなみ　涙を祈るしるしも無しにかけた。

○人草　靑人草。人民。

○さひづるや・さへづる（囀）唐國人の言葉の鳥の囀るに似たので枕詞のやうに冠らせたのである。

○似つきてすれば　似つかはしくあるので。萬葉集「僞りも似つきてぞするうつくしくまこと吾妹子吾にこひめや」

○をりたむな　道な折れ廻るな。

○まがわざ　災禍邪惡。

○直びの神云々　正しく直す神が治め給うたなら邪惡も直る。

○おもほゆ　思はれる。
○渡會の大河　五十鈴川一名御裳濯川、俗に大河といふ。
○いはふ名　祝ふ名卽ち福壽といふ名。
○あら玉の　年の枕詞。
○枝にさしそひて　日影が松枝に光さして。
○千代の秋云々　菊の露に宿かりて光る月も、千秋に菊を契るだらう。
○いざ子ども　さあ諸人よ。

神の代のこゝろおもほゆ渡會(わたらひ)の大河みづの清き瀬見れば

福壽草といふ物の繪に　古

人みなのいはふ名おひてあら玉の年の始めに咲くやこのはな

小松の枝に朝日の出でたるかたかける繪に

出づる日も小松が枝にさしそひて影をならぶる千代の初春

行路郭公

聞きすてて過ぎこし跡の時鳥かひもなつ野に又やなくらむ

松澤喜尙父の遠忌に、夏懷舊

夜半にとぶ螢を見ても影見えぬたまの行方や思ひやるらむ

月前菊

花にあかで千代の秋をや菊の露宿かる月もちぎりおくらむ

敎への歌　古

いざ子ども廣くゆきよき道をおきて行きあしき道にな惑はひそね

猿の木實を持ちたる繪に

うまけれど食はぬぞくふにまさるべきこのみてくへば腹ふくれけり

寄衣戀　古

くれなゐの八しほの衣下にきて深き心をしらめやわぎも

うつり香もあはぬ夜ごろを重ねきてうす花染のさよ衣かな

かり衣秋の花野のゆきずりは亂れそめてもいふかひぞなき

をしへ歌　古

から國の人ならはめや神國の人はまなほにかみならふべし

九月十三夜の月の春のごとおぼろなりければ

あくまでも見てあかさばやしく物もなき春の夜を長月のかげ

關路鹿

音羽山鹿の音聞ゆあふさかの關のこなたに妻やこふらむ

さを鹿のこひて鳴く音もそらねとて妻やゆるさぬ逢坂の關

草まくらしかのねもそふ秋風に秋もふけぬとしら川のせき

鷄の繪に

はねも尾もさながらいける庭鳥の鳴く音かけろとかこち顔なる

菊の繪に

露ながら山路の菊をうつしゑは千世の秋をやかけて見るらむ

うつしゑは秋なき時も絶えざらむ根こそはなけれ花は散らめや

○八しほの衣　幾入も色濃く染めた紅の衣を著てわが深い心を知るだらうかわが愛する女よ。深きは八しほの紅の色深きにかけた。

○あはぬ夜ごろ云々　逢はずに幾夜も重なつて來て。夜を重ね來てをさ夜衣を重ね著てにかけた。

○かり衣　狩の時著る衣。また亂るに冠らす枕詞。古今六帖「狩衣心のうちにほさなくになどか亂れて物思ひする」

○花野のゆきずり　花野を歩いて衣に花の色や匂ひがすりつく事。

○まなほ　眞直。まつすぐに。

○しく物も云々　新古今集「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」春の短夜の朧月を夜の長い九月の月影に見て見明かさう。

○音羽山　山城宇治郡。逢坂山の南。古今集「音羽山おとに聞きつつ逢坂の關のこなたに年をふるかな」關のこなたに妻こふさ關にせかれて妻こふ意を含めた。

○そらねとて　僞りの鳴く音だとて言つて妻鹿が牡鹿をゆるさぬのだらうか。そらねは後拾遺集「夜をこめて鷄のそらねははかるとも世に逢坂の關はゆるさじ」によつた。

○さながら云々　まるで生きてゐるやうな鷄。かけろは鷄の鳴く聲。

○秋なき時　秋がなくなつた場合でも繪の菊は絶えないだらう。

美濃のながら川に鵜ぶねの繪に

うかひ船今は外にはながら川むかしを見するかゞり火の影

西王母といふ物の繪に人の歌こひければよみてかける此のもの金母とも
いふとあれば

今ぞ見る名のみこがねのはゝき木のありとはよそに聞きし姿を

紫式部のふづくゑによりて書見たるかたに

から人に若紫のあや衣見せばや染めし深きこゝろを

池菖蒲　古

あやめ草池のうきひぢこしなづみふさに刈り來ぬかづらけ吾妹

古

あやめ草池におり立ち袖ひぢてい刈り持ち來て軒ふく今日は

社頭月

ともに出でしあはきが原のそのかみのゆかり尋ねて住のえの月

玉みがく月のひかりも神さびて神代おぼゆる杜のさかき葉

八月十五夜雨ふりて月見えざりければ

しばしこそふきも拂へとまつ風も絶えてつれなき雨雲の空

○今は外に云々　今は他所では無い長良川に限る。

○こがねの云々　金母をこがねの母と訓んで帚木につゞけた。帚木は新古今集「その原や伏屋に生ふる帚木のありとは見えてあはぬ君かな」

○若紫の云々　源氏物語のあやあるうるはしきを衣にたとへ、紫、衣、染、深(色の)など緣語によつてあやなした歌。

○池のうきひぢ　池の泥の中へ腰まで踏みこんで難儀して澤山に菖蒲を刈つて來たわが愛する妻よ鬘にして頭につけよ。

○袖ひぢて云々　袖を濡らして刈つて持つて來て軒端に挿して今日の節供を祝ふ。

○あはきが原云々　續古今集「西の海やあをきが原の汐ぢより現はれ出でし住吉の神」伊邪那岐命が筑紫の檍が原で禊して住吉の神をお生みになつた。あはぎが原、又あをきが原。

○神さびて　神々しくあつて。

菊の花に蝶のゐたるかたかける繪に

菊にねていつか千年をわれはとや驚くてふの露のまの夢

よに三夕といふ歌のさまをひとつに合はせてかきたる繪に

あつめてはいとゞあはれもまさりけり浦山澤の秋の夕ぐれ

安藝國人末田芳麿許より其の國の嚴島の圖のいと委しくかけるを贈りけるを見てよみて返事に遣はす

めの前に見る心地していつき島いつきぬらむとたどる寫し繪

自撰歌 終

○菊にねて云々　菊の花に寢て露の間の果敢ない夢に千年間の事を見てさめていつの間に自分は千年經たかと驚く。

○三夕　新古今集「寂しさはその色としもなかりけり槇たつ山の秋の夕暮」(寂蓮)「心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮」(西行)見渡せは花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮(定家)

○いつきぬらむ云々　齋き淨め祭つたであらうと想像される寫生畫

うけらが花

加藤千蔭

〇わが大御國ぶり　わが大日本の國風。
〇常世物　田道間守が常世國から橘を取つて來たといふので橘の異名。千蔭の氏の橘に冠らせた。
〇縣居の翁　賀茂眞淵。
〇すなほ云々　素朴淳雅。
〇おほやけのいとま云々　町奉行大岡忠相の下に與力であつた。
〇ちゝのみの　父の枕詞。
〇いさゝめ　かりそめ。
〇つかへをしぞき　退職して。寛政元年五十五歲の時。
〇ひたぶるに　ひたすら。專心。
〇こたみ　このたび。
〇書きつめて　書き集めて。
〇其の父翁　千蔭の父枝直。
〇子むまご　子孫。
〇うからやから　親族。
〇あかちてむ　頒たう。
〇名づき　名附。名符。入門の時師におくる姓名年月日など書いたもの。
〇おふけなき　身に相應しない。

かけまくも畏きいにしへより、わが大御國ぶりのまたく傳はれるは、歌にのみなむ有りける。しかはあれどくだれる世となりては、いにしへのしらべを失ひもてゆけるを、常世物橘の大人は、いと若かりしころより、縣居の翁のをしへをうけて、歌の心を得られたれば、おのづから上つ代のすなほにしてあつくみやびなる姿をなむ詠み出で給ひぬる。年頃おほやけのいとまなかりつれど、歌はちゝのみの父の好めるわざなれば、いさゝめにも忘れじとて、いとまある時はよみ出でられき。此の十とせ餘りさきにつかへをしぞきしより、かかる大御世に逢ひてこの大御惠みにあけるを、誰かは歡び樂まざるべきとて、ひたぶるに歌の道にのみ遊びて、春の花のあした秋の月の夜、折にふれ時につけつゝ、よみ出でられたるが、濱の眞砂の數多く積りにけり。こたみ大人、其の父翁の歌に文に書きつめて、子むまごに傳へ、うからやからにもあかちてむとて、板にゑらるゝにつけて、われと同じく大人に名づき送れる人々、大人の歌をも文をも共にゑりなむ事をこふに、後の世に殘さむ事はいとしもおふけなきわざなりとて許され

ざるを、今は多摩河の水の流れをくむ人、武藏野の千草の露よりもしげくなりたれば、堀兼の井の深くもとめ出でて、おのがじゝうつしとりなむ煩はしければとて、われも人もしひてこひつるに、稻舟のいなみあへず、歌に文に自らえり出でられつるをかくなせるなり。そもそも此の集の名は、先つ年みやこのやんごとなきわたりより、大人のよみおかれたる歌をまゐらせよと有りしに、えりてまゐらせられつる時、花數ならぬうけらさへつまるゝ世にあひぬるよしをよみ出でられしより、みづから宇氣良我波奈と名をおほせられたるなりけり。そのわきいさゝか卷のはしにしるしつ。

享和のはじめのとし長月

日向守巨勢朝臣利和

○多摩河云々　千蔭の門人となつてその歌風を學ぶ人。
○堀兼の井　武藏入間郡堀兼村。深しの序とした。
○稻舟の　いなの枕詞。
○えり出で　えらび出した。
○みやこの云々　光格天皇の皇弟妙法院宮眞仁法親王（閑院宮典仁親王の御子）から歌を奉れと仰せられたのをいふ。

おのが歌をしも自ら選びて世に殘せるためし、いにしへ無きにしもあらねど、そもきはことなるあたりにこそさる事はあらめ、わがともがらのまねばむはおふけなきわざなれば思ひもかけざりしを、おのれ已に年高くなりにたれば、みづからよくえらびおきてよなど、やんごとなきかた〴〵よりねもごろにそゝのかし宣ふを、いなみなむも中々にて、えらび出でむ心とはなりぬ。若かりしほどのは年經ぬることなればうせにけるを、縣居の大人のつばらにふんで加へたまへる歌に文に、いさゝかものの底より見いだしぬ。はた身さかりなりしほどはおほやけの暇なくて、書きつむることもせでたゞ一ひらの紙にかいつけたるなむ、こゝらみちのく紙の袋に入れおきぬる。一とせある人其の歌ども書き集めむとこふまゝに、かの袋のままにて物しつれば、その人も仕ふるみちにいとなくて、いさゝかの暇のほどにうつしかいつめて、おのれが書けるをばかしこにとゞめつ。後に見れば寫し落したる多かりけり。おのれつかへをしぞきてよりこなた、みづからさうしに書きとめたれば、これかれをあはせては數おほかるを、こたみ

○きはことなる　身分の格別なる

○いなみなむ云々　お斷り申すも却つて恐れ多くて。

○つばらに　こまかに。
○ふんで云々　筆を加へて添削なさつたものが歌にも文にも見付かつた。
○おほやけ云々　公務に忙しくて暇がなかつた。
○こゝら　數多く。
○みちのく紙　檀紙。

○いとなくて　暇がなくて。
○いさゝかの暇　僅かのひまな時に。

○こたみ　此のたび。

○あげつらふ　善惡を評論する。
○おそり　恐れ。
○やさしみ　恥かしく思ふ。
○かしこく　畏れ多く。
○人わらへ　人に笑はれること。物笑ひ。

父翁の集をうつしをへての後、かくはえらびいでつるなり。されどおのが歌のよしあしを見ること、人のうたをあげつらふ如くならざれば、ひが歌や多からむと且はおそり且はやさしみおもふものから、たゞかしこくふとしすゝめしたまふにしたがへるなりけり。かへす〴〵も人わらへにやあらむかし。

亭和の二とせといふ年のみな月

橘の千蔭しるす

うけらが花巻一

橘　千蔭

春歌

年の内に春立ちければ

あら玉のとしにふたゝび二荒山立ちかさねたる春霞かな

年のはじめに

小笹原一よのほどにくる春や嬉しきふしの始めなるらむ

世は春になりにけらしも窗の内にむかふ硯の氷とけゆく

百鳥の春にけふしもあふものをきのふは老を何なげきけむ

年毎にかきもつくさぬ言の葉を硯の海のさちといはまし

霞立つ野のへの若菜つみつゝも驚きかむ春は來にけり

あづま路にまづくる春の日の影を雪に待ちとる富士の芝山

かしこきや我が浦安を出づる日に春知りそめよあだし國人

○あら玉の　年の枕詞。
○二荒山　日光の山。
○一よ　一夜。節(よ)に通じて笹の縁語。
○ふし　嬉しきかど。笹の縁語。
○百鳥の春　多くの鳥が囀る春。
○かきもつくさぬ　書き盡されぬ程數多い。
○言の葉　歌。
○海のさち　海の獲もの。さちは幸の義。
○野のへ　野の上。野のほとり。
○待ちとる　待ちうける。
○富士の芝山　芝山の麓の小木の茂つた山々。
○浦安　日本國の古名。

む月ついたち鶯の鳴きければ

かきこもる竹の垣穂もうぐひすの聲をしるべに春やこえこし

つかへを退きけるまたの年のはじめに

天の原出づる日影ののどけさも去年にまされる春べなりけり

む月のついたちに去年のしはす妙法院一品の宮より賜はりける御硯には
じめてむかひて

雲ゐより春の日かげもうつるなる硯の海にあさりするかも

立春天

天の原春立つらしも朝がすみ浦安の名に立ちみちにけり

元日宴

萬代の旗手なびかし大庭にけふより春の初風ぞふく

春風來海上

あけわたる春の潮路の時つ風東路にこそ先づかよひけれ

鎌倉の君の家にて初春祝道といふ事を

あたらしき春の光も浦安の國ぶりしるき道ぞこの道

早春山

○垣穗　垣。垣の高く立つてゐる所についていふ。
○聲を云々　聲を道案内として春が竹垣を越えて來たださう。
○つかへ云々　官を辭し職を退いた翌年。
○妙法院一品の宮　閑院宮典仁親王の御子、光格天皇の皇弟眞仁親王。
○雲ゐ　雲のある所、大空。宮城にたとへた。
○硯の海云々　歌など作るを海に漁るに譬へた。
○浦安　心やすらかこと。日本の古名浦安の國をかけた。
○萬代の旗手　御即位式に立てる萬歲の字を表はした旗。萬歲旛。旗手は旗の靡き飜る所。
○大庭　紫宸殿の南正面の庭。
○時つ風　時節に相應して吹く風太平の御代の風。潮滿つ時の風の意で潮路のからつゞけた。
○光も浦安　光もうらゝかの意を浦安へかけた。
○國ぶりしるき　國風が明らかに知られる。

春立つやたなびき初むる霞さへまだうす機の衣笠の山

都初春

うちひさす都大路のたてぬきに霞の衣たち初めにけり

氷解

春の日の光のどけみ御心を廣田の池や氷とくらむ

春到氷釋

櫻河汀の氷とけそめて春を寄せくる浪の初花

春風解氷

薄氷松吹く風にうちとけて千世の影見る春の池水

風光日々新

嶺のかすみ野べの小草の若緑きのふにけふぞ深さまされる

雪消春水來

筑波嶺のみ雪消ゆらしみなの川みなわさかまきけさぞ流るゝ

春到管絃中

鶯の囀りといふしらべより世は春べにもなりにけるかな

む月ついたち子日なりければ

○うす機　うすい織物、絽紗の類。霞の薄いにかけた。
○うちひさす　都の枕詞。
○たてぬき　縦横。經緯（たていと横絲）で衣の縁。
○たち初め　たち（裁）は衣の緣語
○のどけみ　のどけくあるので。
○御心を　廣田の枕詞。

○櫻河　常陸筑波川の一名。

○筑波嶺　常陸の筑波山。
○みなの川　筑波山にある川。香川景樹は百首異見に水の無い川の義としてゐる。後撰集「筑波嶺の峯より落つるみなの川戀ぞ積りて淵となりぬる」
○みなわ　水の泡。泡沫。
○鶯の云々　雅樂に春鶯囀といふ曲がある。

む月たつけふの初子の小松原霞こそ先づたなびきにけれ

長枝が家の子日にまかりて

鶯の初音にはやくとひ馴れて春知りそむるやどぞ此のやど

子日女出でたり例けさうする男きあひて消息すといふを題にて

初春のはつねの小松はやくよりわがしめゆひし心知りきや

む月十一日節分子日なりければ

淺緑小松ひく野に一夜ねて都に春をいざといはまし

戸澤家の大刀自君より子日に小松にそへて「枝高き陰にならひていく春もみさをかはらず立ちや馴れまし」といひおこせ給ふ返しに

御園生のけふの小松にひかれつゝ君が八千代を我もかぞへむ

正月十五日雪ふりけるに春海みつるなど訪ひ來て歌よむに子日に引き植ゑし松に雪つもれりといふ事を

姫小松むつましみせよ生ひそめし野末の雪を誰かはらはむ

霞中子日

春がすみ眞袖にわけて標野(しめの)行き紫野ゆき子の日するかも

山子日

○む月たつ　月改まつて正月になる。
○初子　正月の初の子の日に野に出て小松を引いて千代を祝ふ。
○たなびき　霞のたなびくに小松を引くをかけた。
○初音　初子の日と鶯の初音をかけた。
○しめゆふ　標繩を引きわたす。めじるしを結ぶ。女を小松に譬へ早くから我がものとして他人を禁ずる標をしておいたのをいふ。
○節分　立春立夏立秋立冬の時、特に立春をいふ。
○都に春を云々　都へ春を誘はう。いざゆかんと言はう。
○大刀自　刀自は婦人主婦の尊稱
○枝高き云々　枝の高い松の大木の陰にならつて。
○春海　村田春海。
○みつる　賀茂季鷹門人安田躬弦
○むつましみせよ　睦しくせよ。
○眞袖　兩袖。
○標野云々　標野は天皇の御獵し給ふために標して人の入るを禁ぜられた野。紫野は紫草の生えた野。萬葉集「茜さす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖振る」

君が代の千世の古道ふりはへて引くや子の日の嵯峨の山松

屛風に正月子日する家

うなゐ子が引くや園生の姫小松ともにはるけきよはひとぞ見る

山居子日を

吾が山の古巣を出づる鶯もけふを初音とおどろかしけり

山里にすむ人子日す

吾が門の小松ひきけり尋ねこし都の人にいざといはれて

子日松

みゆきせし北野の春の姫小松ひくも畏きためしなりけり

腹赤御贄（はらかのみにへ）

大ぎみの千世の例とまごゝろを筑紫の海人が釣れるみにへか

藥兒の綺に

ことしより おひ先こもる藥兒（こすりこ）にあえなむ春ぞ限りしられぬ

姫路の侍従殿の家にて、霞を

高砂の尾上に春の立ちそめて霞の衣松がさねせり

初春霞

○千世の古道　山城葛野郡。後撰集「嵯峨の山みゆき絶えにし芹川の千世の古道跡はありけり」

○ふりはへて　わざ〳〵。古道舊りと掛けた。

○嵯峨　子の日のならひに松引くさが（ならはし）を地名にかけた。

○うなゐ子　幼い童。うなゐ髮の兒童。

○ともに　うなゐ子の前途も姫小松の行末も共に。

○ひくも畏き云々　例を引くに小松を引くをかけた。宇多天皇寛平八年正月六日北野雲林院に行幸あつた。

○腹赤御贄　古昔筑紫から獻じた腹赤（鱒の古名）。元日に供御に奉つたもの。

○まごゝろを筑紫　筑紫を盡しにかけた。

○みにへか　かは感歎詞。

○藥兒　古昔宮中で元日供御の屠蘇を先づ嘗め試みる童女。

○あえなむ　あやかる。

○姫路の侍従殿　播磨姫路の藩主酒井雅樂頭。

○高砂の尾上　播磨。

○松がさね　襲ねの色目、表萌葱裏紫。立ち、衣、襲ねは縁語。

との曇り碓日のみ坂霞ゐてあづまの國ぞはやく春なる

すみだ河きしのうすらひ解けそめて水上かすむ春は來にけり

霞知春

島山は雪げながらに八汐路の霞ぞはやく立ちわたりける

霞添山色

富士のねも麓につゞく葦山もなべて綠にかすむ春かな

霞藏遠山

少女子が黒髪山の山眉をうたてもかくす春のかすみか

霞隔遠樹

遠方の堤の柳春さればおのがけぶりにうち霞むらむ

嶺上霞

足柄や嶺にたなびくかすみだに立ちも及ばぬ富士の芝山

海邊霞

あまの子が磯菜摘むなる眞袖より八十島かけて霞こめけり

水馴棹なれても春はたどるらむおのがうら〳〵霞こめつゝ

いかばかりわけ迷ふらむ名にたてる春のかすみの浦曲（うらわ）こぐ舟

○との曇り　雲がたなびいて曇つて。
○碓日のみ坂。碓氷峠。曇つて薄日と言ひ掛け。
○うすらひ　薄氷。
○雪げながら　雪模様でありながら。
○八汐路　多くの潮のさしひく路即ち海上。
○なべて　おしなべて。一體に。
○少女子が　黒髪といふために枕詞めかして冠らした。
○黒髪山　日光の男體山をいふ。
○山眉　遠山の眉のやうなさま。
○うたても　厭ふべくも。嫌はしくも。
○春されば　春になると。
○立ちも及ばぬ　接頭語の立ちに霞の立つをかけた。
○磯菜　食用にする磯に生えた草
○眞袖　兩袖。
○水馴棹云々　水に浸り馴れた棹で舟を漕ぎなれて居ても、春になると馴れた舟路も霞でわからずなつて、辿りながら漕いでゆくだらう。
○名にたてる　名高い。
○春のかすみの云々　霞がたつてゐる常陸の霞が浦の浦わ。

松上霞

いつの世の子の日の小松年ふりて春は霞にたなびかるらむ

富士の山かすめり帆かけたる舟行くかた

うら／＼と富士のしば山霞む日に田子の浦舟ゆたにこぐ見ゆ

芳野山に霞立てり川に舟あり

春霞御船の山をたちこめて吉野の川に梶の音する

南枝暖待鶯

うぐひすの聲待ちかねて露ぬるむ片枝ににほふ梅のはつ花

鶯の初音聞きつやと人の問ひければ

人とはぬ竹の中みちなか／＼に先づうぐひすの初音聞きけり

鶯告春

なべて世に春を知れとや鶯のこと先だつる今朝の初聲

鶯聲和琴

うぐひすも聲あはせけり小簾のうちの春を喜ぶ琴のしらべに

霞裏聞鶯

春がすみ五百重（いほへ）がおくのたかむらに千世をこめたる鶯のこゑ

○舟行くかた　舟が進みゆく緒。
○富士のしば山　富士山の麓に雜木の茂つてゐるにいふ。
○ゆたに　ゆるやかに。靜かに。
○御船の山　大和吉野郡菜摘の南
○片枝　一方の枝。
○なか／＼に　人が訪ね來ぬので却つて。
○こと先だつる　先にいひ出す。萬葉集「春されは先づ鳴く鳥の鶯のこと先だちし君をし待たむ」
○小簾　すだれ。
○たかむら　竹の林。
○千世　よ（節）は竹の縁語。

雪中鶯聲

花とちる園生の春の白雪ににほひを添ふるうぐひすの聲

春情有鶯

鶯の聲を聞きて女の家に男來りたる所

青柳を絲によるてふうぐひすの音にのみ春は心ひかれつ

吾妹子が垣ほに馴るゝうぐひすの聲にのみやは心ひかれし

田ゐに若菜つむ

筑波嶺の雪消にぬるゝをとめ子が裾わの田ゐの若菜つまばや

多春採若菜

武藏野にあまたの春をつめる身は若菜ぞ殊に思ふどちなる

早春雪

葛飾や千代（ちしろ）の早稻田春立ちて豐年しるくふれる雪かな

一とせの月と花との面かげを春たつそらの雪に見るかな

春のはじめ雪はれたるあした

松の葉の夜のまの雪のとけ初むる雫ににほふ朝日子のかげ

雪消山色靜

○青柳を云々　古今集「青柳を片絲によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」

○吾妹子　女を親愛していふ。

○聲にのみ云々　鶯の聲ばかりに心が引かれたであらうか鶯の聲ばかりでない。

○田ゐ　田。田の面。

○裾わ　山の麓の邊。萬葉集「筑波ねの裾わの田ゐに秋田刈る妹がりやらむ紅葉た折らな」

○あまたの春云々　多くの春を積むと多年春毎に若菜を摘むと言ひ掛けた。

○思ふどち　思ひ合つた親しいどうし。

○葛飾　下總國葛飾郡。

○千代　代は古昔田租の稻の束積を數へ又田地の面積を計るに用ゐた語。三百六十歩一段を五十代とした。千代は幾代の廣い田。

○豐年しるく　豐年であるのも明かに。

○雫ににほふ朝日子　雫によつてうるはしく映え輝く朝日。

ふる年のみ雪消えつゝ東人の春知りそむるをつくばの山

二月雪落衣といふ心を

春もいま中空にちる白雪をはらへば袖に殘る梅が香

殘　雪

甲斐がねや霞ふきとく春風にのこれる雪ぞさやに見えける

春はまだ淺野の雪のむら消えにあさるきゞすの跡は見えけり

山に雪殘れり

初瀬女がつくる木綿花(ゆふはな)ちるばかり檜原がもとに殘る雪かな

白妙に殘るみ雪を春の日の光にみがく玉の横山

いさゝめに梢の花のちるばかり外山のかひに殘る雪かな

殘雪半藏梅

雪は猶むすぼほれたる片枝より紐解く梅のめづらしきかな

二月餘寒

などてかく花おそげにも見えぬらむ春ひと月はさても過ぎしを

杉田といふ所へまかりて

磯山の梅のさかりをとめくればたゞ白雲のかをるなりけり

○ふる年　舊年。ふるは雪の緣語。
○をつくばの山　筑波山。
○二月雪云々　和漢朗詠集「析梅花而挿頭、二月之雪落衣」二月の雪は梅の花の散るをいふ。
○春もいま云々　春と云ふもまだ中途はんぱな時で中天から散り降つた袖に雪(二月雪即ち落梅)を拂ふと。中空に冬と春とのどちらつかずの意と半天の意とをかけた。
○甲斐がね　甲州の山。
○さやに　はつきりと。古今集「甲斐がねをさやにも見しかけゝれなく横ほり伏せる佐夜の中山」
○淺野　草の疎らに生えた野。春まだ淺い意をかけた。
○あさる云々　餌を捜し求める雉子。風雅集「春もまだあさるきゞすの跡見えでむら〳〵殘る野邊の白雪」
○初瀬女云々　萬葉集「初瀬女のつくる木綿花み吉野の瀧の水沫にさきにけらずや」
○玉の横山　多摩の横山。武藏南多摩郡、多摩川の南にある丘。
○いさゝめに　假初に。僅かに。
○外山のかひ　端山の峽。
○むすぼほれたる　結ぼれた。
○さても　その通りで過ぎもしたのに。
○杉田　武藏久良岐郡。梅の名所。
○とめくれば　たづねてゆくと。

葛飾の里の梅見にまかりて

里毎に梅は咲けどもこの里の梅こそ春のひかりなりけれ

毎春玩梅

年のはにめづらしきかなおもふどち梅をかざさぬ春しなければ

朝梅

朝日かげさすや軒端の梅咲きて垂冰（たるひ）の雫先づかをるなり

月照梅花

梅が香はあやなき闇もあるものを月の影そふ夜半ぞ殊なる

梅の花かをるあたりを過ぎがてに空行く月も影とゞむらむ

月の夜梅かをれり

かすむ夜の月見よとてや枕つく妻屋の軒の梅かをるらむ

女簾のもとに立ちて梅を見る

訪はるやと小簾の薫りにはかられて咲き初めし梅の花をこそ見れ

水のほとりに梅花見えたる所

うち出づるみ谷の浪にあらそひてにほふや梅の春の初花

春風先發苑中梅

○年のはに　年ごとに。

○垂冰　つらゝ。

○梅が香は云々　古今集「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るゝ」あやなき闇はわけのわからぬむやみな闇。

○過ぎがてに　通り過ぎ難くて。

○枕つく　妻屋の枕詞。

○妻屋　夫婦の寝屋。

○訪はるやと云々　簾のもとの梅が香を人の香かと思つて、訪はれたかと出て見れば梅の花である。

心おそき花の木ごとに梅が香の春をつたふる園の朝風

梅花風静

春風は吹きにけらしなうすはたの霞の袖をもるゝ梅が香

梅が枝をおほふ霞の袖だにも迷はぬほどの風ぞかをれる

梅遠薫

梅かをる霞のおくをとめゆけば猶木のもとは遥けかりけり

梅薫袖

古さとの古木の梅の花の香をま袖にしめて翁さびせむ

梅香留袖

紅の梅のはつ花さきしより香さへふかくぞ袖にしみける

社頭梅

名もしるく先づこそかをれ春されば咲くや梅津の神の御社

南より先づ咲きそめて日かずふる北野の梅ぞさかりひさしき

葛飾の郷の香取の大神いはひまつれる社にまうでけるに梅あまた咲きたり

春風のかをるまに〳〵とめくれば梅の香取の宮居なりけり

○心おそき花の木　氣のきかぬのろい花の木。氣の早い梅に對して櫻などの遲れて咲く花の木。

○吹きにけらしな　吹いて來たらしいよ。

○うすはた　薄い織物。紗絽など。

○霞の袖　霞の片端。霞を薄機の袖に譬へた。

○とめゆけば　尋ね求めてゆくと。

○ま袖にしめて　兩袖にしみこませて。

○翁さびせむ　年よつて翁らしくならう。

○名もしるく　梅津神社といふ名も明らかになるやうに何處よりも先に咲きかをる。

○春されば　春になると。

○梅津の神の御社　梅津神社は山城葛野郡西梅津村。梅の宮といふ。

○南より云々　和漢朗詠集「誰言春色從東到、露暖南枝花始開。」

○日かず云々　南から咲きそめて日數經て漸次北の枝に咲いてゆく北野の梅。北野は京都市の北。天神の社がある。

○葛飾の郷云々　今香取神宮は下總國香取郡にあるが往時は下總の南部を汎く葛飾郡と云つた。

○とめくれば　尋ね求めて來ると。

○梅の香取　神宮の名を梅の香とかけた。

山家梅

咲きしより霞こめつゝ梅が香をよそにもらさぬ春の山里

山家皆梅花

都にて霞と見しは山ざとをつゝめる梅のにほひなりけり

梅紅白

梅の花あさしとや見む白妙も濃染もなべてあはれと思はば

紙繪に紅梅のもとにかたみに蕨折り入れたる所

早蕨のもえいづる野べの梅の花こがるばかり咲きにけるかな

梅に雀の飛ぶかたかける繪に

梅が香をつばさにしむる心もて羽風を花になどやいとはぬ

梅交松芳

梅が香を松の葉毎にとゞめてば千世もかをらむ軒の春風

梅の花ちれり

鶯も春のながめをいかにせむ笠に縫ふてふ花し散れれば

梅花飛琴上

たをやめのゆの手もあやに薫るめり琴柱に梅の散りかゝりつゝ

○梅の花云々　白梅も紅梅もとりどりによいので區別なく一様にかはゆく思つたならば我が梅に對する心を淺い心だと梅の花が思ふだらう。こぞめは濃染で濃い紅の色。
○かたみ　筐。目の細かい竹籠。
○もえいづる　萌え出る。燃える意とこがるばかりと縁語。
○つばさに云々　翼に梅香がしみこませる心。
○羽風云々　羽風が荒くするので梅の花が散るが、翼に梅香をしめる心持で居ながらどうして羽風を嫌はず荒くするのだらう。
○とゞめては　留めてしまつたならば。
○千世も云々　松の葉の千代なので梅が香も千代まで薫るだらう。
○ゆの手　弓手。琴彈くとき手左で絃を押すのをいふ。手もあやには手の變化さま〲なのを色や模様のいろ〲なのに譬へた。

屏風に水のほとりに柳有る所

春毎の水のかゞみに影うつす柳の眉は老いせざりけり

柳を

春のきる霞のころも織りなせる高機なれや青柳のいと

柳辨春色

日にそひてうらゝなるべき春の色を門の柳の姿にぞ知る

家にて青柳風靜といふ事を

吾が門の青柳の絲くる人を招くばかりの風は吹くらむ

柳多かる所

春されば六田(むつた)の淀の柳原みどりに見ゆる風の色かな

柳おほかる家に人來る

玉すだれかゝげし軒と見えつるは白露ぬける柳なりけり

女柳の枝をひかへて立てり

青柳の絲繰りためていにしへの倭機帶を織るよしもがな

水邊春草

ぬるみゆく水のけぶりは隅田河つゝみの草の萌ゆるなりけり

○柳の眉　柳葉眉。美人の眉に譬へた。後撰集「春の日の影そふ池の鏡には柳の眉ぞまづは見えける」

○春のきる云々　古今集「春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ亂るべらなる」

○くる人　絲を繰るを來るにかけた。拾遺集「花見にはむれてゆけども青柳の絲のもとにはくる人もなし」

○春されば　春になると。

○六田の淀　大和吉野村の北の吉野川の渡津。六田の渡しともいふ。水邊柳が多い。

○白露ぬける　白露を緒に貫き通した。

○ひかへて　引いて。

○倭機帶　倭文織の帶。倭文織は古代の織物の名。

○萌ゆる　草の萌ゆるを燃ゆるに通はしてけぶりの縁とした。

行路春草

くれなゐの裾引く道に色はえて萌ゆるみどりの春の若草

三吉野の郷の穂積恭がもとより武藏野の若草摘みておこせければ

武藏野やおなじめぐみの露の身はもゆる小草もむつましきかな

樵路早蕨

薪樵るこのもかのもの初蕨折々たゆる山たづの音

霞隔月

かすむ夜の月にはまほに向はれて秋見しよりもむつましきかな

山春月

眞木立てる荒山中もかすむ夜の月にぞ春の色は見えける

江春月

眞間の江や玉藻刈りけむ面かげもほのかにうかぶ春の夜の月

春の夜はたま江の水の名にも似ずみがかぬ月の影ぞうかべる

那波尙興が深川の家にて人々と題をわかちて江春月を

春なれや浪の音さへのどかにて月影かすむなはのつぶら江

故鄕春月

○くれなゐの裾引く道　紅の衣の裾を曳き垂れる。萬葉集「紅の裾引く道を中におきて云々」
○三吉野　武藏入間郡三芳野。
○おこせければ　よこしたので。
○このもかのも　こなたかなた。
○折々　初蕨を折るにかけた。
○山たづ　山人の手斧。
○まほに向はれて　眞正面に向ふことができるので。
○眞木立てる荒山中　杉檜などの生えてゐる荒れた山中。
○春の色　春のけしき。
○眞間の江云々　萬葉集「葛飾の眞間の入江に打靡く玉藻刈りけむ手兒名し思ほゆ」眞間の江は下總東葛飾郡眞間川の邊沼澤連なつた一帶の地。
○面かげもほのかに云々　眞間の手兒名が玉藻刈つた愛らしい面影もかすかに思ひ出される。うかぶは江の緣語。
○みがかぬ月の影　玉江といふ名に似ず春霞に曇つて玲瓏と玉を琢いたやうにない月影が玉江に浮ぶ。
○春なれや　春なるかな。
○なはのつぶら江　奈波の圓江は大阪船場の西、津村、西横堀の古名。風俗歌奈末不利「なはの圓江春なれは霞みて見ゆる奈波の圓江」

ふるさとの板井の水にうつろふもおぼつかなしや春の夜の月

浦春曙

いつはあれど春のあけぼの見し人や浦み霞の名にはたてけむ

水郷春曙

下にごる刀根(とね)の川とのあけぼのは霞める空のうつるなりけり

夜をこめて水脈(みを)ひきのぼる舟の帆の霞にしらむ刀根の河面

閑中春曙

おのづから夜の間の花の露落ちて芝生に薫る春のあけぼの

名所春曙

ほのぼのと明けゆく空も紫ににほふや春の武蔵野の原

霞中春雨

隅田河蓑きてくだす筏士に霞むあしたの雨をこそ知れ

山家春雨

蕨をる便りにとひし里人のおとづれもなき春雨の頃

軒端より雲もかすみも立ちそひて小雨そぼふる春の山里

山里の軒のかすみのひまもれて落つる雫に雨を知るかな

○ふるさとの云々　千載集「故郷の板井の清水みくさゐて月さへ澄まずなりにけるかな」

○板井　板で圍つた井。

○うつろふ　うつる。

○いつはあれど　何時といふ區別なくいつもよい景色ではあるが。

○浦を霞云々　霞が浦といふ名をつけて霞で浦を名高くしたのだらう。

○川と　水の落ち會ふ所。

○夜をこめて　夜からかけて。晝することを前の夜からかけてするにいふ。

○水脈　船の通る深い水路。航路。

○紫云々　色の紫に映えるを草の紫に通はして武蔵野の縁語とす。

○蓑きて云々　霞の中に春雨が降るとも見えないが筏士が蓑きてゐるので朝雨の降つてゐるのがわかる。

○落つる雫云々　春雨は降つてゐるとは見えないが雫が落ちるので降つてゐるとわかる。

幽栖春雨

世にふるも人にしられぬ住所にはよきたぐひなる春の雨かな

草庵春雨

葦葺やかすむ軒端の苫の露まなくもおつる春雨の頃

庵春雨

八重霞かすみながらにうちしめり野づらの庵に春雨ぞ降る

霞中歸鴈

かぢの音にかよへる聲はさだかにて霞の澪（みを）に消ゆるかりがね

月前歸鴈

行く鴈の影だにしばし見るべきをうたてもかすむ夜半の月かな

月の夜鴈歸る

ゆく鴈よ苗代水に影かすむ月をあはれとみよし野の鄉

くらき空に鴈歸る

かすむ夜の月も入りにしまくらがのこがのわたりをかへる鴈がね

道行く人の歸る鴈のわたるを見たる所

花見にと袖ふりはへて行くものをあふさきるさに歸る鴈かな

○世にふる　世を過し經る。古くなるこ雨の降るをかけた。
○よきたぐひ　好いなかま。同類。
○葦葺　葦で屋根を葺いた家。
○まなくも　間斷なくも。
○八重霞　いく重にも重なり立ちこめた霞。
○野づら　野のおもて。
○かぢの音にかよへる聲　楫の音に似てゐる鴈の聲。
○さだかにて　はつきりさして。
○霞の澪　霞の中の舟の通ふ水路鴈を船にたこへて空の霞の海を漕ぎゆくに擬した。
○うたても　つれなくも。
○苗代水に影かすむ　苗代の水にうつる月影もかすむ。
○みよし野　三吉野こ見よこ言ひ掛け。
○まくらがのこが　まは美稱。くらがは久良我で下總國古河（こが）の渡の地名。まくらがに眞暗をかけた。萬葉集「麻久良我のこがの渡りのからかぢの音高しもよ寢なへこ故に」
○袖ふりはへて　ふりはへてはわざわざ。袖振るをかけた。古今集「春日野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人の行くらむ」
○あふさきるさ　行き來。

牧春駒

さえかへり猶ふる雪に牧の尾駮にみゆる春の若駒

雲雀落

うちむれて菫摘むなるをとめ子が袖に落ちくる夕ひばりかな

根芹つむ野ざはの水にかけ見えてひばり落ち来る春の夕ぐれ

林喚子鳥

花ちらふ片山ばやし今更にかひなき音をもよぶこどりかな

屏風に二月初午稲荷詣するかた

いろ〳〵の袖こそ見ゆれねぎごともいなりの山の杉の木の間に

思ふ事成らざらめやももろ人の今日うちたゝく三つの神垣

櫻をよめる

山櫻いつの世にしも咲きそめて人の心を花になすらむ

世の人の心を春になすものは野山ににほふ櫻なりけり

櫻花心に深くしめおかば一年ながらのどけからまし

人の家に植ゑたりける櫻の花咲きはじめけるを見てよめる

この春をなが世の春の始めにて千とせもにほへ初ざくら花

〇さえかへり　春になつて再び寒くなる。
〇尾駮　尾駮の牧は陸奥北部。雪が降つて馬の尾が白黒ぶちに見えるをかけた。
〇花ちらふ　花散る。
〇片山ばやし　片よつた山にある林。
〇かひなき音云々　鳴いても聞く人もない鳴きがひもない音を呼ぶ喚子鳥。喚子鳥は郭公（くわくこう）の異名といふが不詳。人を呼ぶ鳴く鳥の義に過ぎないだらう。
〇ねぎごと　祈り願ふこと。
〇いなり　祈願もさま〴〵異なりを稲荷にかけた。
〇成らざらめやも　成らざらんや必ず成功する。
〇三つの神垣　山城稲荷山の頂を三箇峯（みつがみね）といふ。
〇しめおかば　心にしみこませて置くならば。
〇なが世云々　初櫻よ汝の一生の春の始めとして。

女簾のもとにゐたるに男ものいふ櫻の花咲けり

さくら色の衣のにほひもさく花も面影にのみあすやたたまし

道行く人櫻のもとにとまれる

花の香は麻も錦もへだてねばいざ立ちよりて袖にしめてむ

櫻をもてあそぶ

唐國におひぬ櫻の陰にして羣れつゝうたふ大和言の葉

櫻のもとに人々あそぶ

櫻花めづるあまりに散るをさへさかづきにまつをりも有りけり

なべて世に春てふ時のなくばこそ契りかれせめ花の木のもと

末つひに散るてふことも今日ばかり忘れてけりな花の木のもと

旅人さくらを折る

足柄の八重雲分くる旅ならで高嶺の花にたぶさ觸れめや

櫻の木のもとにて弓射る所

陸奥の安達の眞弓あだに散るしづ枝の花をよきて引かなむ

山櫻

蛙なくしづくの田ゐに庵して筑波高嶺の花を見るかな

〇面影に云々　明日は面影にばかり立つて目の前に幻がちらつくことだらう。

〇麻も錦も云々　貧しい人の麻の衣や富める人の錦の衣といふ別け隔てをしないから。

〇おひぬ櫻　生えない櫻。

〇春てふ時云々　春といふ時節がないものならば花の木と契りが絶えもしようが、春のないといふ事は決してないから契りは決して絶えない。

〇足柄の云々　足柄山の高嶺の幾重にも重なつた雲を踏みわける旅でなくては高嶺の花に手を觸れようか觸れられぬ。たぶさは手首。

〇陸奥の安達の眞弓　岩代安達郡もと安積郡安達郷で貢した弓。萬葉集に「あだたらまゆみ」

〇あだに　かひもなく徒らに。

〇しづ枝　下枝。

〇よきて　よけて。

〇しづくの田ゐ　常陸新治郡志筑村(字、又師付)の田舍。萬葉集「筑波嶺に上りて見れば尾花散る師付の田井に」しづくは筑波嶺から見おろすと麓の村が下附(しづく)やうに見える意とかいふ。

磯邊櫻

わたつみの神の少女が花かづらかけて散らすな磯による浪

瀧上櫻

瀧の上の御船の山に宮人の昔かざしし花咲きにけり

雨はれて後櫻を見る

初櫻露ににほへりきのふまで雨づゝみして咲かずや有りけむ

隅田川の堤の櫻さかりなる頃石濱のかたより見をりて

陽炎の夕日ににほふ花の香をかごはむ春の河風もがな

彌生なかば人々と共に角田川に花見にまかりてそこの川邊なる虞林禪尼がもとにて歌よむに舟中見花といふことを

さす棹のしづくも香ににほふらむ堤の花の影うつるころ

紀迪が吉野へ行きつとてさくらの花をつゝみておこせければ

思ひきやよし野の山の櫻花分けぬ袂に散らむものとは

季鷹縣主の家にて櫻を人におくり侍るとてといふ題に扇へ櫻の花すきこませて歌は其の扇にかけり櫻がさねの紙もて扇をつゝみて表に風のやどりと書いつけたり

○わたつみの神の少女　海神の姫君。○かけて　いさゝかも。花鬘を掛ける意を言ひ掛けた。○瀧の上云々　大和吉野川の宮瀧のほとりの御船山。古昔行宮があつた。遊行幸があつて萬葉集にもその歌がある。○雨づゝみ　雨のために家に籠つてゐること。○石濱　淺草寺の北、待乳山今戸橋あたり一帶の地。○陽炎の　光隱れて陰になる意からほのめくの枕詞。更に夕日に冠らせた。○かごはむ　歎き訴はうとする。○分けぬ袂　吉野山を踏み分けて行かぬ自分の袂の上に吉野の山櫻が散りかゝらうとは思ひも寄らなかつた。○季鷹　山本季鷹。上賀茂の神宮。千蔭に歌を學ぶ。○櫻がさね　表白、裏赤花又は葡萄染。○風のやどり　古今集「花散らす風の宿りは誰か知る我に敎へよゆきて恨みむ」

吹く風を恨みははてじ吹けばこそとめて折りつれ山櫻花

櫻の散るを見て

をしと思ひあはれと見つゝ二しへに心さへちる花のかげかな

石井のもとに立ちて櫻の散るを見て

眞間の井に立ちならしけむをとめ子が面影見せてちる櫻かな

八重櫻の繪に

八重櫻花にふれけむ古衣きならの人の袖やこふらし

春櫻と松とのもとに到る所

松風のこゝろをとめきてとこしへに散るべくもあらぬ花を見るかな

人の家に櫻柳あり

小簾の外ににほひ出でたる袖ぐちを柳櫻に見する宿かな

花

世の人のあかぬ心を空に知りて花さく時や日永かるらむ

咲くを待ち散るを惜しむと大方の春の心は花にぞありける

妙法院宮のおほせにて月次の御題をたまはりて花をよみ侍る

あだなりと誰かいひけむ千よろづの世々にふりせぬ山櫻花

○恨みははてじ　恨んでばかりゐるわけではない。
○とめて　尋ね求めて。
○をしと思ひ云々　花散るを惜しいと思ひ又一方では面白いと眺めて二重に心まで散る。ふたしへのしは助辭。
○石井　石で圍つた井。
○眞間　下總葛飾郡眞間。萬葉集「葛飾の眞間の井見れば立ち馴らし水汲ましけむ手兒名し思ほゆ」
○きならの人　奈良の人。古衣を著馴らすとつゞけた。萬葉集「戀衣きならの里」「韓衣きならの里」
○小簾の云々　小簾の外に色つやうるはしく出た袖口が柳がさね櫻襲と思はれるやうに柳櫻が盛りである。柳襲は表白、裏青、櫻は表白、裏赤花。
○散るを惜しむと　散るのを惜しむとて。
○妙法院宮　閑院宮典仁親王の御子、光格天皇の皇弟眞仁法親王。
○あだなり云々　櫻の花を散りやすいはかない物だと誰が云つただらう、千萬年にも古くならぬ若々しい花である。

望山待花

咲きぬとやむかふ外山の春霞立ちて見ゐて見見ぬ時もなし

野山に花の木掘れり

花を植う

櫻花都へいざといふ人を野山の末に待ちやわびけむ

稻荷の社に奉るとて初花を

今年ふりむつましみせよ櫻花わが世を經なむ春のかぎりは

ねぎごともみつのやしろの神垣に先づ咲き初むる花をこそ見れ

山初花

神路山木綿かけたりと見るばかりや〻咲きそめし峯の初花

山花始開

漕ぎ出でし唐艪の浪の花かともみ船の山は咲きそめにけり

雨ふる日花を尋ぬといふ事を

いたづらに歸らむものか春雨の花の雫を袖にかけずば

春の雨にぬれつ〻花を尋ね見む七日し降らばうつろひぬべし

家の花見る所

○立ちて見ゐて見　立つても見、坐つても見て。

○都へ云々　都へ櫻を誘ひゆく人を待遠しく思つて居たことだらう

○ねぎごと云々　新願も滿つるみつがみね(三箇峯)の三所の社(稻荷神社)。

○神路山　伊勢宇治内宮の神苑から南方にある山。

○木綿かけ云々　榊に木綿垂手を掛けたやうに少しだけ白く花が咲きそめた。木綿はかぢの木の樹皮から取つた苧のやうなもの、榊などに取りかける。

○唐艪　唐風の艪。

○み船の山　大和吉野三船山。唐艪の緣語。

○いたづらに云々　花を尋ねあてないでかひなく空しく歸るものか決して空しく歸らない。

○七日し降らば　萬葉集「春雨に衣はいたく通らめや七日し降らば七夜こじとや」しは强辭。

○うつろひぬべし　色がはり散るだらう。

白雲にまがふばかりの花はあれど馴れし一木をあはれとぞ見る

河づらの宿に花を見る

こゝもとに波うち寄せよ櫻花うつろふ影を手にむすびてむ

馬をとゞめて花を見るかた

折らでしも幾たび花をかざすらむ木のもとごとに駒をとゞめて

仕へをしぞきたる又の年こゝかしこの花見にまかりて

中々にいとなかりけりこの春は花より花を水うまやにて

隅田河の花見にまかりけるに盛りなりければ

春はたゞ都鳥にも身をかへて散るとも花の浪にかづかむ

山里へ花見にまかりて

山里に我が世は經なむ世の春のならひにもれて花し散らずば

彌生七日因幡國知り給へる君の竹芝のなり所へまかりて花を見侍りて

代々を經し松のみどりに枝かはす花も常磐の色ぞ見えける

咲く花の梢によする百船のほのかにかをる春の浦風

閏二月末つかた隅田川のほとりへ花見にまかりけるに疾く咲けるはやゝ

散りはじめければ

○白雲云々　白雲と見ちがへるほどの花は他にあるが。

○うつろふ影云々　櫻の色形が水に映る影を手にすくひ上げよう。

○折らでしも　花を折らなくても

○仕へを云々　職を退いた翌年。

○中々　退職して却って。

○いとなかりけり　いとまがないことだよ。

○花より花云々　花から他所の花と見あるいて花を次々と街道の宿のやうにして歩く。水驛は街道の宿、馬に水かふのでいふ。

○都鳥　隅田川の都鳥のこと伊勢物語に出づ。

○かづかむ　水を潜らう。

○ならひにもれて　世の春の例にはづれて花が散らなかつたら。

○國知り給へる君　國の領主である君。

○竹芝　江戸の芝の古名。

○なり所　別莊。別邸。

○梢によする百船　梢の上から見渡す芝浦に多くの船が寄せ來る。

○ほのか　百船の帆を言ひ掛け。

春風にちらふ櫻を河ぞひの小田の蛙も鳴きてとゞめよ

こゝは荒川の下つ瀬なれば

吹く風のあら河の瀬に雪とちり浪とよせくる山櫻かな

孝標(たかすゑ)の女のあすだ川といひけむも此の川なり

東路のあすだ川邊の櫻花明日さへとはむ散りなみだれそ

この川の西は長非の莊石濱となむいふそこにいこひて

鄕(さと)の名のながゐしぬべし石濱や川よりをちのさくら散る頃

暮れなむとすれどなほ石濱より遙かに花を見居りて

葛飾(かつしか)の花にゆふべを殘しつゝ豐島(としま)の方に日は入りにけり

雄風(をかぜ)が香取に住みける時歌よみて見せけるついでに隅田河の花をば見きやといひおこせける返しごとに

隅田河春さりくれば咲く花の香取あがたの人をこそ思へ

羇中見花

足柄や峯の岩ねにやすらひて八重山遠き花を見るかな

靜見花

かくながら千世も經ぬべし見る人の散らぬ心に花しならはば

○ちらふ　散るの延。

○あら河　風の荒いに河の名を掛けた。

○孝標の女　菅原孝標の女。更科日記の作者。

○あすだ川　更科日記「武藏と相摸との中にゐてあすだ川といふ」これは誤りであすだ川はすだ川即ち隅田川である。

○散りなみだれそ　散り亂るな。

○石濱　淺草寺の北橋場の邊一帶

○ながゐしぬべし　長く居るべしの意に地名をかけた。

○川よりをちの　川から遠くの處までの櫻。

○雄風　淸原雄風。豐後の人。森氏。醫。江戸に住む。後下總に移る。奇行あり。千蔭春海と親交があつた。

○春さりくれば　春になると。

○香取あがた　香取のさと。あがたは田舍。

○八重山　幾重にも重なつた山。

○かくながら　このまゝで。

○見る人の云々　人は心散らさず花を見てゐるその心に花が倣つて散ることがないならば。

夜花をおもふ

ことならばわれ百鳥に身をかへて花に塒を占めましものを

翫花

世の中に花見てくらす春ばかり思ふ事なき時はありけり

馴花

いつしかと待ちしほどより立ちなれて櫻がもとに幾日經にけむ

月前折花

今日もまた狩りつくしつゝ朧夜の月にぞ手折る花の一枝

月入花灘暗

嵐山花よりおくに月は入りて戸無瀬の水に香のみのこれり

風靜花芳

花におく露だにちらぬ春風に心とかをる山ざくらかな

姫路侍從殿の家にて柿本の大人の影供（えいぐ）に風靜花芳といふことを

春風もしづけかる世に薫るなる高角山（たかつぬやま）の山櫻花

仙臺中將殿の家にて風靜花盛といふ事を

風ふかぬ花のさかりにあひにける今日をいくよの思出にせむ

○ことならば　できることならば
○百鳥　多くの鳥。
○世の中に云々　世に處してはいつも心配や悲しみが絶えぬが花見て暮す春だけは物思ひのない時であるわい。
○いつしかと云々　いつ花咲くことかと待つた頃から。
○狩りつくし　櫻狩をしつくして櫻を尋ね遊び盡して。
○戸無瀬　嵐山の麓、大堰川の瀧瀬となつた所。慶長年中疏鑿した。
○露だにちらぬ春風　露さへも散り落ちない靜かな春風に、花が自分の心から。
○影供　神佛故人の像に物を供へ祭ること。
○高角山　石見にあつて柿本人麿終焉の地といふ。高津村に柿本神社がある。萬葉集「石見のや高角山の木のまより我が振る袖を妹見つらむか」

風靜花香

ふく風は小簾もうごかぬ春の日に思ひかけずも花の香ぞする

霞中花

宮姫の面がくしせし面影に瀧のみやこの花ぞかすめる

さく花をへだてもはてず中々ににほひを添ふるうす霞かな

雨中花

高嶺よりあわ立つ雲は花なればそほ降る雨ぞ香に匂ひける

彌生六日雨いみじう降りたるに花もちりがたになりぬと聞きて舟にてすみだ河へまかりてよめる

隅田河堤のさくら人ならば笠きせましを蓑かさましを

花下忘歸

斧の柄もくたすべきかな一年にあふご稀なる花のさかりは

花下送日

今日幾日花より花の草まくら結ぶも蝶のゆめばかりなる

花映日

かげろふの夕日にさらすみよしの瀧つ河内の花櫻かな

○宮姫云々　宮仕への少女が恥ぢらうて顏を隱した面影。
○瀧のみやこ　大和吉野川の岸宮瀧に古昔離宮があつた。みやこは宮處の義。
○へだても云々　すつかり隔てもしまはず却つて。
○斧の柄云々　斧の柄も腐らす。いつまでも長い間を暫くと思つて經過すべきよの意。晋の王質が山中に入つて圍棊を見てゐるうちに斧の柯が朽ち家に歸ると數世の後となつてゐたといふ故事。（述異記）
○あふご　逢ふ期。
○花より花云々　花から花と花を逐うて旅寢して。旅寢する意の草枕を結ぶを夢を結ぶにかけた。
○かげろふの　枕詞。
○瀧つ河内　水の涌きかへつて激しく流れる河のゆき廻つた所。萬葉集「山川も因りて仕ふる神ながらたぎつ河内に船出せすかも」

夕　花

百鳥のねぐらもとむる羽風にも散らまく惜しき山櫻かな

阿波の西尾安道の旅ゐのつぼの中に櫻をうゑて人々つどひけるに、春夕花を

心ありて花も夕を殘すらむたたまく惜しき春のまとゐに

花の頃山里をとふ

咲くとしも告げぬものから心あてに分け入る雲は花にぞ有りける

花添山景色

ふた神のかざしの櫻咲き初めて山さびいますをつくばの山

都　花

うら〳〵と大路かすめる春の日は櫻かざさぬ人しもぞなき

宮人のかざしの爲と咲きにほふ都の春の花ぞことなる

くれはとり綾に錦になれてこそ咲けるかひあれ山櫻花

ふりはへて行くも櫻の衣なれば大路は花の隈だにもなし

彌生ばかり安道が阿波國へ歸らむとするに旅のやどりにてこれかれあつまりて歌よむに、關路花を

○散らまく惜しき　散らむことの惜しき。
○旅ゐのつぼ　旅住居即ち寓居の坪庭。
○たたまく惜しき　席を立つて歸らうことの惜しき。古今集「思ふどち圓居せる夜は唐錦たたまく惜しきものにぞありける」
○告げぬものから　告げないけれども。
○心あてに　あて推量で。
○ふた神　筑波の男體女體の二神
○山さびいます　山が物ふりて神神しくいらせられる。
○櫻かざさぬ　新古今集「百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざして今日もくらしつ」
○宮人　宮仕への人。
○くれはとり　綾の枕詞。
○ふりはへて　櫻がさねの衣の袖を振り合つて連れだつて行く。
○大路は花云々　大路は櫻花と人の衣の花とで花でない所はない。
○これかれ　誰かれ。

關こえて歸らむ人を待ち顏に咲くや箱根の山ざくら花

樵路花

柴人のこるやくろ木に折りそへし花にみ山の春を見るかな

瀧邊花

咲く花の雲の五百重を分けて落つる瀧の水沫も香に匂ふらし

田家花

五百代や千代の田づらかへす〲見れども花に飽く時ぞなき

女の家に櫻咲きたり男きたりて物いふ

こよひだに一夜は寢なむ移香を咲くや軒ばの花におほせて

鄰花

中垣のすきまもれ來る花の香に散るさへもはた待たれぬるかな

名所花

花ざくら霞の袖ぞおほふなる誰がきぬ〲の朝妻の山

花有喜色

くれ竹の世を隔てたるませの内にうきふし知らぬ花の色かな

花慰老

○柴人　柴刈る人。樵夫。
○こる　木を伐る。
○くろ木　皮を削らぬ丸太の木。
○五百代や千代の田　幾しろもある廣い田の面。代は田地の面積をいふ單位。
○かへす〲、繰りかへし〱。耜きかへす意で田の縁語。
○移香云々　女の移香を軒端に咲いてゐる花の香にかこつけて。
○中垣　隣の隔ての垣。
○花ざくら云々　後朝に袖で顏を覆うて別れを惜しむが、朝妻山の花を霞が覆うてゐるのは誰の後朝か。朝妻山は近江磨針峠の西。
○くれ竹の　世の枕詞。
○ませ　ませ垣。籬。
○うきふし　憂きかど。ふしは竹の縁語。

櫻花にほふ春べにあまたたびあへるを老のおもひ出にして

咲く花にうかるゝのみぞうなゐ子の昔の春の心なりける

咲き匂ふ花見る時は賤しきもよきもさかりの心ちこそすれ

志賀山越

宮人のにほひ殘れる志賀の山花に越えゆく袖ぞやさしき

落　花

うしと思ふ心よいかに山櫻散るこそ花のさかりなりけれ

月前落花

春風の霞吹きとく折々は散りかふ花に月ぞくもれる

後のきさらぎ花の散りたるを見てといふ事を

やよしばし散らずて殘れ櫻花はな鎭めする月もこなくに

山ざとびたる家に花の散るを見ていひ入るゝ

散らぬ閒を都に告げぬうらみさへつもるや花の雪の山ざと

花ちりて後古寺に遊ぶ

春深み櫻は雪とふりにけるゆふべの寺をよそに過ぎめや

屛風の繪に花のちる所に鴈とぶ

○咲く花云々　もはや老いて幼時の夢はないが、花に浮れる心だけは幼童の昔の心持である。
○賤しきも云々　古今集「古の倭文の苧環賤しきもよきも盛りはありしものなり」
○宮人云々　花の志賀山を越えゆく人の袖には古志賀に帝都のあつた時の宮仕人のにほひが殘つて優しく思はれる。
○うしと思ふ　散るを憂しと思ふ
○散りかふ花　彼方此方入りまぎつて散る花のために月が曇る。
○後のきさらぎ　閏二月。
○はな鎭め　花鎭祭。古昔三月花の散る頃疫病を鎭める爲神祇官で行つた祭。
○こなくに　來ないのに。
○雪とふり云々　花が散つて雪となつて降つた古寺の夕暮をよそ事として見過されようか、過されぬ。降りに古りをかけた。

古郷へ別るゝ鴈の聲聞きて梢の花も根にかへるらむ

萎花蝶飛去

とぶ蝶の羽風にとがはおはじとやうつろふ花を返り見もせぬ

散りてのち花をおもふ

見し花のなごりわすれぬ曙にうたてあやしき袖のうつりが

春の野に遊ぶ

白妙の袖ふりはへてかげろふのもゆる芝生に菫摘むたり

人々春の野に遊ぶ所

春の野に翁さびせむ若菜摘むこゝのの子らも我によるべく

をとこ女野にいでて菫つむ

いくとせの春か摘みけむ同じ世にすみれの草の名のみたのみて

縫子の家の贈答の會に春の野よりかへりて人のもとへ

君がため交野の櫻折りてけり淀の河風ふかば吹かなむ

閑中日長

菅の根の長してふ日も世の外の宿とひてこそ思ひしらるれ

株の翁に

○古郷へ別るゝ鴈　故郷へ歸らうとして人に別れゆく鴈。
○根にかへる　花の散るをいふ。
○羽風云々　羽風で花を散らした罪は負ふまいといふのか。
○見し花云々　見た名殘忘れられぬに情なくも袖にはいやに移香まで殘つて花の名殘が惜しい。
○白妙の　袖の枕詞。
○袖ふりはへて　袖振り連れて。古今集「春日野の若菜摘みにや白妙の袖振りはへて人の行くらむ」
○翁さび　年よりらしくある。
○若菜摘む云々　若菜摘んでゐる九人の少女らも自分により來るために自分は年よりじみよう。萬葉集十六卷の竹取翁が九人の少女に逢つて贈答した歌によつた。
○同じ世にすみれ　同じ世に住む住むに菫をかけた。
○縫子　菱田縫子。荷田蒼生子の門人。寛政頃の人。
○交野　河内國北河內郡。桓武天皇行幸鷹狩し給ひ禁野となつた。
○菅の根の　長しの枕詞。
○長してふ日　長しといふ日。日が長いといふも此の世を離れた閑適の家を訪ねて始めて思ひ知られる。

今も猶ゆきて見てしが桃の花咲くやみ谷の水のみなかみ

桃の花咲きたるを人折れり

三千歳に咲くてふ花と聞くからに折りてをゆかむ老人のため

つばくらめ

としのはにむれつゝ問ふやつばくらめ都の家のみつばよつばに

桃の花を女どもの折る所

人言のしげかる世にも物いはぬ花とし聞けばなつかしきかな

田舎の家に田かへす蛙なく

垣津田をあらすき返すかたへよりせき入る水になく蛙かな

苗　代

千町田の苗代水にひく注連の長くも秋をたのみかけけり

雨中苗代

をつくばの山かきくもり葛飾や苗代小田に小雨ふりきぬ

雨後苗代

けさ見れば夜のまの雨にひく注連のしづくの田ゐの名さへしるしも

河苗代

○ゆきて見てしが　行つて見たい。
○桃の花云々　晉の陶潛の桃花源記に作られた武陵桃源の故事。
○三千歳云々　列仙傳「此桃非ニ世間所レ有三千年一實耳」拾遺集「みちとせになるてふ桃の今年より花咲く春にあふぞ嬉しき」
○折りてを　をは感歎の辭。
○としのはに　年毎に。
○みつばよつば　三つ開四つ開。宏壯な家の三棟四棟と立ち竝んだのをいふ。
○人言云々　人の言葉が多くのうるさい世の中であるに。
○物いはぬ　史記李將軍傳「桃李不レ言下自成レ蹊」
○垣津田　圍ひの中にある田。
○千町田　廣々した田。
○苗代水云々　苗代に注連繩を引きわたしてある。その繩の長い前途の秋の收穫に賴みをかけた。
○たのみ　田に熟した米。賴みに言ひ掛け。
○をつくばの山　をは接頭語。
○しづくの田ゐ　常陸新治郡志筑村の田舍。筑波嶺から瞰下すと麓の村が下附(しづく)やうに見える意と。(前出)注連繩に雨の雫の滴るので志筑の名も明らかと云つた

○くもで　蜘蛛手。八方に別れたこと。
○あら田　新しい田。又荒れた田。
○夕露にしなふ　夕方の露の重さに籬の山吹が撓んで花咲く。
○かゞみにて　鏡として。
○立ちよそひたる　容姿を裝ひ飾つてゐる。
○神南備の岸　大和生駒郡神南山奈良志岡附近龍田川を神南川といふ。神南山は一名三諸山といふ。
○高機　織機の一種。
○うま人　高貴の人。
○みけし　御衣。衣の敬語。
○うつろふ　影が映る。
○ゆはた　しぼり染。
○心をまつはして　心を藤に纏はして。藤の緣語。
○弟橘媛　日本武尊の妃。相摸海に身を投げられた。俗說では江戸の東郊小村井(今吾嬬村といふ)。吾嬬權現として祀ること。

ゆく河の水をくもでにせきわけて苗代いそぐ時は來にけり

あら田うつ所

心してあらすきかへせ筑波嶺の雫の田ゐに櫻ちるころ

山吹露ふかし

行く春もやどりとるべく夕露にしなふまがきの山吹の花

石井のもとに山吹咲けり

底澄める石井の水をかゞみにて立ちよそひたる山吹の花

名所山吹

神南備の岸の山ぶき咲きにけり御室の嵐ふかずもあらなむ

松上藤

藤さくや松の梢を高機に誰うま人のみけし織るらむ

池上藤

藤の花うつろふからに紫のゆはたに見ゆる池のさゞなみ

人船に乘りて藤の花見たる所

咲きにほふ藤に心をまつはしておなじ汀を行きめぐりつゝ

弟橘媛の御靈齋へりといへる吾妻の森にまうでけるに御社のかたへに藤

のいみじうさかりなりければ
藤波の名さへかしこし走水荒かりし代のむかししのべば

彌生ばかり人をとふ
住む人は待ちも待たずも呼子鳥聞きすてがたき夕まぐれかな

山家暮春
花も皆ちりての後ぞしづけさをもとめし山のかひはありける

春を惜しむ
春よなど夏かけて咲く藤なみの心ながさにならはざるらむ

留春不駐
木がくれに殘れる花は有るものをおひも思はぬ春ぞつれなき

惜春不留
待ててふにいつかは春のとまりにしと思へど猶も惜しまるゝかな

殘春
花ゆゑに待ちこし春のいかなれば散りての後に惜しまれぬらむ

三月盡
今日のみに暮れざらめやはあづさ弓春よしばしと鳥は鳴くとも

○藤波　藤の花。その風に靡くをいふ。相模の海の波が荒かつた意を含めてかしこしと云つた。
○走水　相模三浦郡走水。東京灣の口。浦賀水道に當る。
○待ちも待たずも　吾を待つてゐるにしても待つてゐないにしても
○呼子鳥　郭公（くわくこう）の異名ともいふ。人を呼びて鳴く鳥と見るべきであらう。
○花も云々　閑寂を求めて山に入つたが、花咲けば人が來て騷がしく折角山に入つたかひもなかつたかひに峽をかけた。
○夏かけて云々　春から夏にかけて咲く藤の花の氣長いのに何故に倣はないであわたゞしく過ぎゆくのか。
○待ててふ云々　春に向つて暫く待てよと云ふにも何時春が留まり待つたこともないとは思ふが、それでもなほ惜しまれて、待てよ春よと云ひたくなる。
○花ゆゑ云々　花咲くので春を待つて待遠しく思つたに、花散つて後には期待する花もないのに、どうして春が惜しまれるのだらうか
○今日のみ云々　今日に限つて暮れないことがあるものか。
○あづさ弓　春の枕詞。

彌生つくる日

春の日の今日としなれば菅の根の長かりしとは思はざりけり

石濱にて彌生のつごもりに

花をしも見るより外になすこともなくて暮せし春ぞ樂しき

春星

今日の日ものどけさしるくしのゝめの霞ににほふあかぼしのかげ

春雲

山の端もさくらのきぬの色見えて薄紅ににほふ横雲

春木

吹くとなき朝の風にうちなびく柳ぞ春の姿なりける

泉響添春風

早蕨のもゆる山路の春風につたふたるみの音ぞ添ひゆく

春富士の山を見て

大かたの霞は立ちもおよばねど春の光ににほふ富士のね

山家春興

いはつゝじ山ぶきにほふ眞清水(ましみづ)に春せきとむる柴の庵かな

○菅の根の　長しの枕詞。

○石濱　淺草寺の北、橋場附近。

○のどけさしるく　長閑であることも明らかにわかるやうに。

○あかぼし　曉の星。

○吹くとなき　吹くといふこともない程の朝風。

○早蕨　さは接頭語。

○もゆる　萌え出る。

○たるみ　垂水。瀧をいふ。萬葉集「石走る垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりにけるかな」

○いはつゝじ云々　岩躑躅や山吹が色映えてゐる清水を堰きとめて春を留めてゐる。

春の山ぶみ

花見むと分け入る山の路もせにふりすてがたき初蕨かな

嵐山の麓の春の景色書ける繪に

嵐山花より明くる春の色を杉の庵に寢ても見てしが

江上春興多

湊江の岸の柳もいとゆふも心ひかるゝ綱手なりけり

春色浮水

霞たつ青香久山(あをかぐやま)の山まゆのみどりをうつす埴安(はにやす)の池

松有春色

うつろはぬのどけさ添ひて松が枝の花に先だつ春の色かな

衣はるさめ

野べは皆若草ずりになりにけり衣はるさめ日數へぬれば

心靜酌春酒

のどけさは汲みてこそ知れ酒の名も聖の御世の春にあひつゝ

春旅泊

梅咲くや室の泊のかぢまくら古鄕人の袖の香ぞする

○路もせに　路も狹いほどに。

○見てしが　見たいものだ。

○湊江　港につゞいた入江。

○いとゆふ　絲遊。陽炎。柳の絲とつゞけて言ひかけた。

○青香久山　木の青く茂つた香具山。香具山は大和磯城郡。

○まゆのみどり　翠黛。

○埴安の池　大和磯城郡香久山村字南浦にその址がある。

○衣はるさめ　衣を洗つて張るに春雨をかけた。古今集「わがせこが衣はるさめ降るごとに野邊の綠ぞ色まさりける」

○若草ずり　若草で絹や布に模樣を摺りつけること。野の若草の萠え出たのをいふ。

○酒の名云々　魏畧「以二白酒一爲二賢者一清酒爲二聖人一」萬葉集「酒の名を聖とおほせし古の大き聖の言の宜しさ」聖天子の御世とかけた。

○室の泊　播磨揖保郡室津。

○かぢまくら　船の中に寢る事。

春神祇

九重の神のつかさの花しづめ世のうき事もちりて往ぬめり

春日山神の心もなびくらむ大宮人の藤のかざしに

但馬國出石しりたまへる君の大刀自君のもとにて春祝言を

一しほの色そふ松の春風も千代をしらぶる琴ひきの濱

家々翫春

里つゞきさへづりかはす百千鳥なれさへ御世の春やたのしき

萬物感陽和

大路行く車のおとも百鳥の聲のにほひも春めきにけり

春風春水一時來

いなむしろ川ぞひ柳うちなびき冰ながれて春は來にけり

春水滿四澤

春の日に冰とけゆく澤水のけぶりや四方にかすみ初むらむ

知直が妻を迎へし頃人々つどひて歌よむに春江花月夜といふを題にて

幾千々の春をふる江の水の面に月と花との影は老いせじ

志賀浦春

○九重の神のつかさ　宮中の神祇省。神祇官。
○花しづめ　鎭花祭。古昔三月花散る頃疫癘を鎭める爲、神祇官で行ふ祭。
○なびく　藤の縁語。
○出石云々　但馬國出石の藩主仙石氏。しり給ふは領治し給ふ。
○琴ひきの濱　丹後國。
○百千鳥　さまざまの鳥。
○なれさへ　汝までも。
○春風春水一時來　白居易の詩「柳無二氣力一枝先動、池有二波紋一冰盡開、今日不レ知誰計會、春風春水一時來。」
○いなむしろ　川の枕詞。書紀「いなむしろ川ぞひ柳水ゆけばなびきおきたちその根はうせず」
○春水滿四澤　陶淵明四時詩「春水滿二四澤一、夏雲多二奇峯一、秋月揚二明輝一、冬嶺秀二孤松一。」
○春江花月夜　唐詩選張若虛の詩の題。
○春をふる江　春を經るとふ古江とをかけた。

唐崎や霞にこもる松の色ををり〳〵見する志賀の浦風

志賀花園　春

大宮をこゝとし聞けば花園にあやなき袖をふれむものかは

浮島　春

かすみ立つ春の汐路を見ぬ人や浮島の名はおほせたりけむ

香取浦　春

浪をたて霞をぬきに織る機のかとりの浦の春はしよしも

○唐崎　近江滋賀郡。湖岸に一松がある。近江八景の一。
○志賀花園　天智天皇の滋賀大津の宮に都し給ひし時の花園。
○あやなき袖云々　むやみに袖を觸れるものだらうか觸れられぬ。
○浮島　駿河國駿東郡。足高山の麓須戸沼附近の原。
○浪をたて云々　浪を經（たていと）にし霞を緯（よこいと）にして織る。
○かとり　縑。固織の義。地を細かに固く織つた絹。地名の香取をかけた。
○春はしよしも　春はよし。しは强辭。もは感歎助詞。

うけらが花巻二

夏歌

竹亭夏來

惜しみこし春もいつしかくれ竹の陰には夏の好ましきかな

ころもがへ

白がさね著るてふ今日ぞ花の雪きえずもあれな麻の袂に

朝更衣

雪と見し昨日の花の色にだによそへて今朝や白がさねせむ

孟夏句

刺竹（さすたけ）の大宮人の今日こそは雲ゐの風を手にならすらめ

大神祭の使

神御衣（かむみそ）につけし績麻（うみそ）のうちはへて今もたえせぬ今日のみてぐら

おそ櫻を

うち棄れてとはるゝ春を過しつゝひとりしづけき遲櫻かな

○くれ竹　淡竹の異名。春の暮れを云ひ掛けた。
○ころもがへ　陰暦四月一日衣を著かへること。
○色にだによそへて　春過ぎては花は無くなる、せめて花の色にでもなぞらへて白い襲を著よう。
○孟夏句　まうかのしゆん。四月一日禁中に行はれた公事。夏の季の改まる始めに臣下宴を賜ひ政を聽こしめす儀式。
○刺竹の　大宮の枕詞。
○雲ゐ　雲の居る所。大空。轉じて禁中。
○大神祭　おほみわのまつり。大和磯城郡大神大物主神社(三輪社)の祭。四月上の卯の日の祭に先だつて丑の日に勅使がたつ。
○神御衣　神に獻る衣。
○績麻　績んだ麻絲。木綿(ゆふ)にかへて四手とする。
○うちはへて　引きわたして。
○みてぐら　神に奉る物。幣物。

山餘花

夏山の茂みが奥のしづけさに心のちらぬ花もありけり

ほとゝぎす尋ぬる山のおそ櫻思ひのほかに春ぞ殘れる

松陰餘花

松かげや下枝にかけし木綿ばかり花こそのこれ神祭る頃

木がくれに花こそ殘れありて世のはてもうからぬ松にならひて

餘花何在

夏山のしげに花や殘るらむそこはかとなく風のかをれる

鳥思殘花枝

花は猶のこれる枝に夏來ても古巣おもはぬ百千鳥かな

雨中新樹

村雨にぬるゝみづ枝のあはれさも昨日の花におとりやはする

深山新樹

都人きても折らねば若葉さへみ山ざくらのおのがまゝなる

幾代々の宮木にもれてみ山木の老木ながらに若葉さすらむ

林新樹

○木綿ばかり　枝にかけた木綿四手ほど。
○ありて世のはて　古今集「殘りなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中はてのうければ」
○そこはかとなく　何處ともなく
○みづ枝　みづ〳〵しき若枝。
○あはれさ　感嘆される興趣。
○宮木　宮殿を造營するに用ゐられる材木。
○若葉さす　若葉が生える。

若葉さす片山林露ちりぬ花にいとひし風のなごりに

卯月はじめ利根河のほとり妙意尼がいほりへまかりて歌よみけるに夏木立を

風わたる利根の河邊の若くぬぎ若葉さすなる陰ぞすゞしき

卯月はじめつかた隅田河の西にあからさまにうつろひて

昨日かも河よりをちに見し花のなごり忘れぬ夏木立かな

首夏藤

こと花の春を過してあらそはぬこずゑの藤のこゝろ高さよ

宮人のふたあゐのきぬにかよへばぞ夏來て藤は盛りなりける

雨中卯花

世の中をあなうの花の咲くころは空さへことにながめがちなり

卯の花多かる家

白妙に卯の花咲けりみ越路の雪にうもるゝ宿と見るまで

山家卯花

ふみわけて訪ひ來し雪の面影に卯の花咲ける小野の山里

卯の花は咲きにけらしな稀にとふ都の人の袖と見るまで

○片山林　片かはの山にある林。
○花にいとひし　花のために風を厭つた。

○あからさまに　かりそめに。

○昨日かも云々　昨日であつたよ河から遙かに向ふの遠くに見た花

○宮人　宮仕人。
○ふたあゐ　紅と藍とで染めた色
○かよへば　似かよふので。
○世の中云々　世の中をあゝ憂く厭はしいものと嘆息しながめる。うの花に憂をかけた。
○ながめ　物思ひにつく〴〵見つめる意の眺に長雨をかけた。
○み越路　みは接頭語。
○ふみわけて　伊勢物語「忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは」小野は山城愛宕郡小野郷。在原業平が訪ねた惟喬親王の山荘があつた。
○咲きにけらしな　咲いたらしいよ。

卯の花鄰をへだつ

人心あなうの花の咲きしよりかいまみさへもまかせざりけり

卯の花さけり月あかし

秋をおきて月のあはれは卯の花の咲き散る庭の更くる夜のかげ

卯の花垣に月を見るといふ事を

月をさへ花かとぞ見るうつぎ垣まがへし夜半の心ならひに

卯の花咲きたる宿に訪ふ人あり

卯の花のやゝ散りそむる頃しもや跡いとふらむ雪ならずとも

卯の花さける家に郭公を待つ

ことさらに卯木垣(うつぎがき)して誰をしも待つとか思ふ山ほとゝぎす

佃島といふ所に咲きたる卯の花を人におくるとて

沖つ鳥鷗つくだの島ひゞきうちよする浪と見ゆる卯の花

灌佛

ひんがしにながれて久しあれ出でし佛にそゝぐ今日の眞清水

葵露

あふひ草今日しもかざすもろ人の神の惠みの露かゝるらむ

○かいまみ云々　透間からのぞいて見ることさへも思ふ儘にならぬ人の心のあゝ厭はしいものよ。

○秋をおきて　秋を除いては。

○うつぎ垣云々　卯木垣に映る月までも卯の花かと見違へた。

○ことさらに　わざ〳〵。

○誰をしも云々　誰を待つと思ふか時鳥よ、誰をも待たない、汝を待つ。古今集「なく聲をえやは忍はぬ時鳥咲く卯の花のかげに隠れて」

○佃島　武藏國田川河口、靈岸島の東。

○沖つ鳥　沖に居る鳥。古事記「沖つ鳥鷗ごく島に我がいねし妹は忘らじ世のこと〴〵に」

○鷗つくだ　鷗が著く島と島の名とをかけた。

○灌佛　四月八日釋迦誕生日にその像に甘茶をそゝぐ法會。

○ひんがし云々　佛敎が東方の國日本に傳はって久し。

○あれ出でし　生まれ出でし。

○あふひ　四月中の酉の日賀茂祭に二葉葵をかざし軒柱車などにかける。

簾葵

神山の朝露ながらかけわたす小簾のあふひの色ぞすゞしき

毎年懸葵

神山のふた葉のあふひいくとせの今日をかけつゝ根ざしそめけむ

ぬひ子が家の贈答の會に祭の日人のもとへ

諸かづらこゝろにかけてわすれめや絲毛の車引きわかるとも

神まつるところ

玉がしは若葉さしけり皇神(すめがみ)にひもろぎまつる時し來ぬれば

露結ぶすゞの若葉をたてながら八十玉串と神にまつらむ

郭公

隅田河堤にたちて船まてば水上遠く鳴くほとゝぎす

人の賀の屏風に四月ほとゝぎす

今よりのいくよの夏をかさぬとも聲はふりせじ山ほとゝぎす

遠尋郭公鳥

ほとゝぎすたづぬる山のかひなくば都の人にいかゞ語らむ

待郭公鳥

○神山　山城愛宕郡上賀茂社の東に聳え賀茂山ともいふ。

○あふひ　葵に逢ふ日を言ひ掛け

○ぬひ子　菱田縫子。

○祭の日　賀茂の祭の日。

○諸かづら　賀茂の祭の時桂に葵をつけて簾に懸けるのをいふ。

○絲毛の車　絲で箱を飾つた車。諸葛をかけた絲毛の車をつゞけて引きの序とし、別れても心にかけて忘れぬの意。

○玉がしは　槲の美稱。

○皇神　神の尊稱。

○ひもろぎ　神籬(ひもろぎ)に供へる物。まつるは奉る、獻ずる。

○すゞの若葉　篠竹の若葉。

○たてながら　立てたまゝで。

○八十玉串　多くの玉串として玉串は榊にゆふをつけて神前に供へるもの。

○山のかひなくは　山に入つて郭公を尋ねたかひがないならば。かひに山の峽をかけた。

卯の花に月こそ殘れほとゝぎすこの曙を過すべしやは

對月待郭公

夏の夜や霞へだてぬ月にだに物思はするほとゝぎすかな

人傳子規

ほとゝぎす寐ざめにたどる夢よりも人傳のみぞいやはかななる

年々郭公

年のはに待ちえし人はふりぬれど古りせでなのる郭公かな

月前郭公

夕月のなかばかくるゝ山の端を鳴きて過ぎ行く郭公かな

千え子がりいきて月あかき夜ほとゝぎすを聞くといふことを

月影もこゝを瀨にすむ宿なればほとゝぎすさへ過ぎがてに鳴く

郭公月を待つにまされり

ほとゝぎす今も鳴かなむ月影のいさよふ程はかぎり有りけり

雲開子規

曙の嶺立ちわかれ行く雲に聲は殘れるやまほとゝぎす

雨中郭公

○卯の花云々　もはや夜が明けて殘月となつた、時鳥よこの曙を過してはならぬ、早く來て鳴け。

○夢より云々　時鳥を聞いたと人はいふが。それは寐覺に夢の跡追ふよりも一層不確で當てにならぬ

○年のはに　年毎に。

○古りせで　古くならないで。人は老いたが時鳥は老いる事なく。

○千え子がり　千え子の許。

○こゝを瀨に云々。こゝをその場所として澄む住みかであるから、時鳥までも過ぎにくさうに鳴く。新古今集「聞かずともこゝをせにせむ時鳥山田の原の杉の村立」古今集「夜や暗き道や惑へる時鳥我が宿をしも過ぎがてに鳴く」

○今も鳴かなむ　今すぐにも鳴いてくれよ。

○いさよふ程　月がためらつて出ないでゐる間。

橘の花ちる暮のむら雨にをりあはれなるほとゝぎすかな

雨後郭公

雨すぎてあやめ露ちる軒端より鳴く音もかをる郭公かな

曉子規

夕月のはしゐながらにほとゝぎすかはたれ時の聲を聞くかな

遠霍公鳥

ほとゝぎすさだかなる音を夕暮の雲居のよそに誰か聞くらむ

子規未遍

さのみやは恨みはつべき子規聞きつる人のかずぞすくなき

神の社にほとゝぎす鳴く

朝倉の聲すみ渡る神垣にほとゝぎすさへなのりてぞ行く

驛路にてほとゝぎすを聞く

子規なくひとこゑに旅路行くいくその人の袖ぬらすらむ

海の邊にてほとゝぎすを聞く

ふる里へ言傳はせよ妹が島さして過ぎゆく山ほとゝぎす

山寺にこもりて時鳥を聞く

○をりあはれなる　折につけて殊に感じの深い。時鳥は橘の花咲く頃鳴くので配して詠んだ歌が多い

○あやめ云々　軒端に葺きさした菖蒲から雨後の雫が散り落ちる。

○夕月の云々　夕月の時刻に端居したその儘であるのに夏の夜の早くも更けて時鳥を待つてもう明方になつて時鳥を聞いた。かはたれ時は薄暗い明方。

○さだか云々　此處では明らかに聽かれなかつたが遠い何處かの空にはつきりと誰が聽くだらう。

○さのみやは云々　自分が聽かないからと云つてさうむやみに恨んではかりも居るべきでない。

○朝倉の云々　神樂を奏する聲。神樂歌「朝倉や木の丸殿にわが居れば名のりをしつゝゆくは誰が子ぞ」

○いくその人　幾多の人。

○妹が島　紀伊海草郡。

都べにことづてやらむ比叡の山ふもとの雲に鳴くほとゝぎす

古寺にこもりてほとゝぎすを聞く

初瀬山みのりの文にこゑそへて夜たゞとなふる郭公かな

故郷郭公

子規しのび音もらせ宮人の袖のゆかりの藤原のさと

ふる衣きならの郷のほとゝぎす聞きならしけむ人や戀しき

山里にほとゝぎす聞く

花散りて茂みにこもる奥山の里をもかれず訪ふほとゝぎす

今しばしかたらひなれよ郭公都にいざと人はいふとも

世の中にすみ侘びぬとはなけれどもほとゝぎす聞くたよりとを知れ

山家霍公鳥

吾が山にふりいでて鳴け郭公こひしき人の數ならずとも

ほとゝぎす鳴きぞとよむる都人わが山彦にまひはしてきけ

閑中郭公

あふち散り時鳥鳴く夕暮は心よわくも戸ぼそあけけり

船中子規

○初瀬山　大和磯城郡初瀬村。眞言宗長谷寺がある。
○みのりの文　經文を讀誦する聲に時鳥が聲添へて。
○夜たゞ　宵から曉まで引きつゞいて。夜通し。
○しのび音　時鳥のかすかに鳴く音に昔忍ぶ意をかけた。
○藤原のさと　古、持統文武兩帝の都のあつた大和高市郡藤原。
○きならの鄕　奈良の里。ふる衣著馴らすとつゞけ下の聞きならしに對せしめた。
○かれず　疎くなることなく。
○いざと云々　都へ人がいざと誘つても。
○世の中云々　世の中に住み苦しんで山里に入つたわけではないが時鳥を聞く便宜のためだと知れよ。たよりとをのをは強め辭。
○ふりいでて　聲を高く振りあげて。
○鳴きぞ云々　響くばかり鳴く。
○山彦云々　山の神にまひをはして聞け。まひは幣で禮として奉る物、幣物。
○あふち　楝の花。せんだんの花。

○綱手にて　綱手として。引綱として。
○水脈　船の通る深い水路。
○人の家云々　人家があつて空に時鳥をかいた繪。
○東屋のまやの蔀を　明方の序。まやは四阿(あづまや)。東屋を重ねいふ。
○あやな　あやなきことよ。あやなしはかひのない益ない意。
○飽くよあらめや　聞き飽く時があらうか決して飽く代はない。
○ならしの岡　大和生駒郡龍田村の南。馴らしをかけた。
○枕よりあとより　頭からも足もとからも。前からも後からも。古今集「枕よりあとより戀のせめくればせむ方なみぞ牀なかにをる」
○車の跡とめて　雪と散つてゐる卯の花に車の跡を留めておいて。
○をちかへり　繰りかへして。
○夜たゞ　夜から曉まで、夜通し。
○たちとまるがに　立ち留るやうに。立ち留るために。

ほとゝぎす鳴く一聲を綱手にて水脈引きのぼる利根の川船

人の家雲居にほとゝぎすあり

東屋のまやの蔀を明けがたの雲路過ぎ行くほとゝぎすかな

寐覺にほとゝぎすを聞きて

一聲によその寐ざめの袖をさへ思ふもあやな山ほとゝぎす

名所郭公

ほとゝぎす飽くよあらめやあまた年ならしの岡に鳴きふるせども

淀のわたりに舟ありほとゝぎす鳴く

淀河や下す夜船の枕よりあとより名のるほとゝぎすかな

隅田河のほとりの庵にて雨ふる日ほとゝぎすを聞きて

遠かたやあしたの雨にうちけぶる梢すぎ行く山ほとゝぎす

ほとゝぎす鳴く山道に女車ゆく

卯の花の雪に車の跡とめてまたもとはまし山ほとゝぎす

をちかへり鳴けや車のあふひ草かかる山路を訪ふは誰がため

人の月まちて歸らむといひけるほどにほとゝぎす聲しば〳〵聞ゆ

ほとゝぎす夜たゞかたらへ月待ちてかへらむ人もたちとまるがに

卯月初めつかた隅田河のわたりなる庵に日頃こもりけるを濱田の君聞き給ひて過ぎし年おのれが「水上遠く鳴くほとゝぎす」とよめりし歌をおぼし出でつとて「けふいくか隅田河原をたもとほり水上とほき聲きくらしも」とよみて給へりければ返しに

ほとゝぎす水上遠き聲よりも君がみ言ぞうらめづらなる

卯月ばかり山ぶみして

郭公鳴く一聲にさそはれて卯の花山を分けくらしけり

田植うる所

千町田におりたつ田子の諸聲も植ゑつくせばや遠ざかり行く

川ぞひ小田に早苗とる

昨日かも花をせきいれし河ぞひや早苗とる子が袖かをるらむ

急早苗

ほとゝぎす鳥羽田の早苗いそぐらむ數こそまされしづが菅笠

朝じめりかわかぬ袖に夕月のかげをやどして植うる若苗

牡丹をよめる

見し春の千々の色香を一もとに取りあつめたる深見草かな

○水上遠く　上の句は「隅田川堤に立ちて船待てば」(前出)
○たもとほり　徘徊して。
○うらめづらなる　心珍らしく感ぜられる。
○卯月ばかり　陰暦四月の頃。
○山ぶみ　山路を踏みゆくこと。
○郭公鳴く一聲　續古今集「聞きてしもなほぞ待たるゝ時鳥鳴く一聲にあかぬ心は」
○千町田　廣い田。
○花をせきいれし　散る花の流れる水を堰き入れた河沿ひの苗代田
○ほとゝぎす　時鳥の飛ぶをかけて鳥羽の枕詞。萬葉集「霍公鳥飛幡の浦にしく浪の屢々君を見むよしもがな」但し鳥羽は京都の南郊。
○朝じめり　朝の霧や小雨などで物のしめつてゐること。
○若苗　さなへ。
○見し春云々　春見た數多くの春の色香を一木に取り集めた色香も深い深見草。深見草は牡丹。

菖蒲露

花の香は立ちかへてける袖の上にあやめぞかをる軒の朝露

淀のわたりに菰刈る

いさゝめにすだく螢の宿ばかり淀野の眞菰かり殘してよ

菖蒲とる所またかざせるもあり

あるはかざしあるは引きつゝ世の中のうきに生ふてふ根ざしともなし

五月五日菖蒲にさして人に

千代までといはひて引けるながき根をけふ葺きそへよ三つば四つばに

五月五日藥玉てうじてやんごとなきわたりへまゐらすとて

東屋のまきの柱に千代かけていはひまつれる藥玉ぞこれ

五月五日駒くらべする處

若駒をあやめの草に引きそへて今日中の重の眞手番(まてつがひ)する

騎射

かうぶりにかくるあやめも馬弓も古きためしを引くにぞありける

藥獵する所

露ふかきうけらが花に入りみだれくすりがりする武藏野の原

○いさゝめに　かりそめに。
○すだく云々　集まる螢の家だけは。
○淀野　山城久世郡淀の近傍。
○あるはかざし云々　或者は菖蒲を頭に挿し又ある者は菖蒲を根から引いてゐて。
○三つは四つは　三つ間四つ間。宏壯な家の三棟四棟と建ちならんださま。
○藥玉　種々の香や藥を玉にし袋に入れて造花と絲で飾り蓬や菖蒲などを添へたもの、邪氣を避けるとして簾柱などに下げた。古昔五月五日群臣に賜はつた。
○てうじ　調じ。こしらへる。
○東屋のまきの柱に　かけてといふための序。藥玉の柱に掛ける意をかけた。
○駒くらべ　競馬。公事根源「五月三日は左近の荒手結(ツガヒ)、四日は右近の荒手結、五日は左近の眞手結、六日は右近の眞手結。」
○中の重　近衛の誤り。中衛は奈良朝の親衛の職で、のち近衛となつた。
○眞手番　二人相番ひて騎射の勝負を競ふこと。荒手結の對。
○かうぶり　冠。
○引く　例を引くを菖蒲を引くにかけた。
○藥獵　陰暦四五月頃野外に出て藥草などを採集した行事。
○うけらが花　蒼朮。萬葉集「こひしけば袖も振らむを武藏野のうけらが花の色に出づなゆめ」

盧橘薫風

上つ代に常世の風をつたへ來て今國もせにかをるたちばな

風靜盧橘芳

たちばなを玉に貫きたる絲にだにしられぬ風も香ににほひけり

雨中橘盧

ほとゝぎすかさ宿りせよ夕暮の雨うちそゝぐ庭のたち花

家にて橘を

我が園に常世のたねをおほしつゝいにしへしのぶ友をこそ待て

閑庭橘

たちばなの花散るころは吾が宿の苔路に人の跡も見えけり

庭の橘を折りて人のもとへ

ふりはへて訪はれむ袖を待ちがほに咲くや伏屋の軒のたちばな

橘をうゑて

移しうゑし花たちばなに巻向(まきむく)の珠城(たまき)の宮の昔とはばや

あぢさゐ

宮人の夏のよそひの二藍にかよふも涼しあぢさゐの花

○常世　垂仁紀に田道間守が命をかけて常世國に行つて非時香菓(橘)を求めたといふ。常世國は絶遠の神仙の國。盧橘は夏蜜柑の類だと。
○玉に貫き　玉として絲で貫く。
○かさ宿り　軒下木陰などに雨やどりすること。
○橘を　橘を植ゑて。
○おほし　生やす。生長させる。
○いにしへ云々　古今集「さ月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」
○苔路　苔の生えた路。
○ふりはへて　袖振り連れて。わざわざの意をかけた。
○伏屋　地に伏したやうな小さな低い家。
○巻向の珠城の宮　垂仁天皇の皇居。(前の常世の註參照。)
○二藍　紅と藍との間の色。
○かよふ　似通ふ。

節雨初入梅

卯の花をくたすながらにいぶせさそはる五月雨の空

山家五月雨

さびしさに馴れずば堪へじ山たづの音だにきかぬ五月雨の頃

名所五月雨

水まさる檜の隈河の五月雨にかりにも月の影をだに見ず

梅雨留客

我が宿に雨つゝみせよ五月雨のふりにしことも語りつくさむ

五月雨降るころ人のもとへ

久かたの雨つゝみして來ぬ人をいつとか待たむ五月雨の空

五月雨晴

さみだれもかぎりあればや楝(あふち)散る閭邊の庵に夕日さしける

さみだれにぬれつゝ植ゑし小山田の畦こす水に月ぞうつろふ

五月二十日出石の君の青山の館へまかりけるに此のころの雨はれて月さし出でたり

さみだれの雲もいつしか杉が枝をはつかにのぼる月もめづらし

○卯の花云々　くたすは腐らす意。五月頃降る雨を卯の花くたしといふ。千載集「いさゝしく賤の庵のいぶせきに卯の花くたしさみだれぞ降る」いぶせさは鬱陶しさ。

○さびしさ云々　寂しさに馴れなければこの寂しいには堪へられまい。

○山たづ　杣人の手斧。

○檜の隈河　大和高市郡檜隈郷にある小川。

○影をだに見ず　古今集「さゝのくま檜隈川に駒とめて暫し水かへ影をだに見む」

○雨つゝみ　雨のため籠り居ること。

○ふりにしこと　古い昔のことに五月雨の降るをかけた。

○久方の　雨の枕詞。

○月ぞうつろふ　月が映る。

○杉が枝　杉に過ぎをかけた。

○はつかに　僅かに。かすかに。

月あかき夜水鷄の鳴くを聞きて

槇の戸もさゝで人待つ月の夜に何を水鷄のたゝくなるらむ

夏の夜月あかし

大空を霞も霧もへだてねば夏こそ月は見るべかりけれ

瑞枝さす葉びろ熊橿露ちりて月おもしろき夜半にもあるかな

雨後夏月

宵の雨にぬるゝ瑞枝をもれ出づる月の花こそなまめきにけれ

玉がしは夕立過ぐる鏡葉をみがきそへたる夏の夜の月

江上夏月

徒人もわたるばかりに月かげの夏さへこほる諏訪の湖面(うみづら)

さゞなみの比良の大わた淀めども淀みもやらぬ短夜の月

水上夏月

夏の夜やうつろふ月の桂河影ながらこそせき入れにけれ

水無瀨河流るゝ水のうたかたにやどるもはかな夏の夜の月

名所夏月

伊勢しまや浦の名に負ふ大淀にしばしはよどめ夏の夜の月

○さゝで　戸を閉ぢないで。
○何を水鷄云々　水鷄が何だといつて戸を叩く音して鳴くのか。
○瑞枝さす　瑞々しい若枝が生える。
○鏡葉　柏の葉の面の滑かなのをいふ。日本紀竟宴歌「玉柏をか玉の木の鏡葉に神のひもろぎ供へつるかな」
○諏訪の湖　信濃。
○さゞなみの　比良の枕詞。
○比良の大わた　琵琶湖。近江滋賀郡比良山麓に比良村があつた。
○淀めども　水が滯り湛へて淀むなるけれど。
○淀みもやらぬ　滯ることもなくすら／＼として短夜も更け月も進みゆく。
○うつろふ云々　月の中にある桂が桂川の水に映つた影も一しよに堰き入れた。桂川は山城。
○水無瀨河　攝津にあり。淀河に注ぐ。
○うたかた　水の泡。
○伊勢しまや　伊勢國をいふ。海に面してゐるので島といふ。
○大淀　大淀の浦は伊勢多氣郡。

竹亭夏月

夏の夜の月の霜にも挑むらむまだうらわかき窗のなよ竹

くれ竹のよながき陰は夏の夜ものどかに見ゆる月の色かな

縫子の家の贈答の會に六月ばかり月あかき夜人のもとへ

短夜の月を清水にせきとめてささぬ板戸のまつと知らずや

夏の月あかき夜女の家に男きたれり

訪はれむとおもはぬ閨の夏の月まほにむかひしことぞくやしき

泉に月の影うつりたるを女ども見るほどに大路を笛吹きて行く人あり

影とむる月にもならへ笛の音を聞きしらずとやよそに過ぐらむ

水無月十日あまり八日曉より雨風はげしかりしを夕さりつかた晴れわたりて月はなやかにさし出でたり人々とひ來て歌よむに

秋近みまだ音たてぬ荻の葉の露にやどれる月ぞしづけき

五月ばかり隅田河のほとりにやどりて

夕暗にともす螢の影きえて月になりゆく川瀬すゞしも

雨後瞿麥

なでしこの露こそことにあはれなれ心ありける宵の雨かな

○月の霜　月が白く輝いて霜のやうに見えるのをいふ。
○くれ竹　淡竹。くれ竹のは、よの枕詞をかけた。よ(節)に夜長きとかけた。
○縫子　菱田縫子。
○月あかき夜　月のあかるい夜。
○ささぬ　閉さぬ。
○板戸のまつ　戸の松に待つをかけた。

○まほに　眞正面に。

○影とむる云々　月が影を泉に留めるに倣つて暫く留まれよ。お吹きなされる笛の音を聞き知らぬ者と侮つて他所へ行き過ぎられるか。
○水無月云々　陰暦六月十八日。
○夕さりつかた　夕方。
○秋近み　秋近いので。

○ともす螢　螢の光るのを燈をつけるに譬へていふ。
○なでしこ云々　撫子は愛撫する子にたとへ父母の慈愛撫育を雨露の惠みにたとへる。

夏の草

路夏草

夏の野もさゆりなでしこ咲くころは秋の錦にたちまさりけり

野草秋近

行くさきも道はありけり夏草のしげみが奥に見ゆる菅笠

眞葛原葉びろになりぬ秋風の吹きうらがへす時近みかも

鵜舟多

鵜かひ舟所せきまでうかぶ夜は闇としもなき白河の水

鵜河篝

五月雨に鵜河の水や早からし淀みもあへぬかゞり火のかげ

鵜舟のかゞりを見て

かつら人鵜河立つらし五月闇つらゝに浮ける篝火のかげ

名所鵜河

名にしおふ月の桂の川瀬にも闇を時なる鵜飼ぶねかな

玉河へまかりて鵜つかふわざを見て

たらし姫若鮎(わかゆ)つらしし玉島の名にかよひたる里ぞこの里

○さゆり　さは接頭語。百合。

○夏草の云々　夏草の茂つた所の彼方に旅人の菅笠が見える。

○吹きうらがへす　秋風が葛の廣葉を吹いて裏を翻す時の近づいてゐることかな。

○鵜かひ舟　鵜飼の舟。鵜飼は鵜を飼ひ馴らして魚を捕らせること。○所せきまで　場所も狹い位一ぱいに。

○鵜河　鵜飼をする川。○早からし　早くあるらしい。

○つらゝ　列なりつゞくさま。

○闇を時なる　闇を最もよい時とする。

○玉河　武藏の多摩川。○たらし姫　息長帶比賣（神功皇后）が肥前松浦郡玉島で鮎を釣つて新羅征伐の事を占はれた故事。○つらしし　釣り給ひし。

照射欲明

消えがたの樹の火串にあらそひて雲間をいづる明星のかげ

雨中螢

東屋の雨のしづくもかず見えて軒のしのぶに飛ぶ螢かな

澤螢

人ごゝろあさ澤水のうき草に思ひみだれて飛ぶ螢かな

草の螢を

草むらの螢よいかにさく花の秋をばまたずならひそめけむ

水草しげれる所に螢多かり

吾が門の板井なくみそ夜もすがら水草にすだく螢すゞしも

賤が家に夕顏さけり

かはほりの飛びかふ軒は暮れそめて猶くれやらぬ夕顏の花

蚊遣火たく處

遠かたやしげみが奥のかやり火に賤が家居のかずも見えけり

里のかやり火

行く水にゆふべの月はすみながら蚊遣にくもる河づらの里

○照射　ともし。夏の夜獵師が火串に松明をともし、鹿が近づき來るを射殺すこと。
○火串　照射の松明を挿む木、轉じてともしをもいふ。

○あさ澤水云々　澤水の浮草に亂れて飛ぶ螢を人心の淺いのが憂くあるに思ひ亂るゝをかけた。

○板井　板で圍つた井。古今集「わが門の板井の清水里遠み人し汲まねば水草生ひにけり」

○かはほり　蝙蝠。

氷室

夏の日も大御光にけたるらむ去年のみ雪もけふを待ちけり

氷さへ消えせで今日をまつが崎千年かはらぬみつぎなりけり

遠夕立

足柄に入日の影はさしながら海上(うながみ)かけてゆふだちぞする

遠山に夕立ふれり

さがみ路は夕立すらし久かたのあふりの嶺に雪ぞおほへる

蟬

松が根の岩間にむせぶ眞淸水に梢の蟬のこゑぞあらそふ

蟬聲夏深

夏もはやこずゑの蟬のこゑにちる夕露すゞし杉のしたみち

鄰のいづみ

中垣をしのびにもるゝ眞淸水によその秋をも袖にかすめつ

松下納涼

こずゑよりかゝるひかげの露おちて袂すゞしき松の下風

水風夜涼

○氷室　古昔氷を夏まで貯藏した室。六月一日禁中で氷室の節會があつた。
○けたるらむ　消されるだらう。
○消えせで　消えないで今日を待つ松が崎。
○まつが崎　山城愛宕郡松崎。氷室があつた。堀河百首「夏の日も涼しかりける松が崎これや氷室のわたりなるらむ」
○海上　海のほとり。海邊。
○久かたの　雨の枕詞。
○あふりの嶺　雨降山。相模中郡大山をいふ。
○岩間にむせぶ　岩の間に咽につかへてむせかへるやうに湧き出る
○眞淸水　淸水。眞は美稱。

冰魚(ひを)のよる河瀨の風や夏の夜のいさよふ浪になほ殘るらむ

水風如秋

水の音松のひゞきは秋ながら夏をことわる蟬の聲かな

水檻風涼

西河やせき入れし水のおばしまにしば／＼秋の風ぞかよへる

風來水樹閒

水きよき岸の桂の追風にゆふ露かをる袖ぞすゞしき

池波にしづえをあらふ青柳のおきふす風ぞ袖にすゞしき

樹陰鄰秋

夏と秋はたゞ葦垣の一重にて瑞枝すゞしき庭の面かな

澗路苔清涼

とめくれば心さへこそすゞしけれ水草きよき谷の細道

納涼

いはばしるたるみの水に影うつす月をもむすぶ夜半ぞすゞしき

姫路侍從殿の河邊のなり所にて納涼をよめる

夏そ引く海上がたの夕風もま袖にかよふやどりなりけり

○いさよふ　たゆたふ。漂る。
○夏をことわる　夏だといふ理由を明らかにしてゐる、蟬の聲。
○水檻　水に臨んだ殿舍の欄干。和漢朗詠集「竹亭陰合偏宜レ夏、水檻風涼不レ待レ秋。」
○西河　大井川（桂川）をいふ。
○おばしま　欄干。
○追風　うしろから吹き來る風。
○しづえ　下枝。
○おきふす　青柳が風に吹かれて起きたり伏したりする。
○瑞枝　瑞々しい若枝。
○とめくれば　尋ね求めてゆくと
○心さへこそ　身はいふまでなく心までも涼しい。
○いはばしる　たるみの枕詞。岩の上を瀧の走り落ちる意。
○たるみ　垂水。瀧。
○月をもむすぶ　水を掬ぶと共に月をも手で掬ひ上げる。
○なり所　別莊。
○夏そ引く　うなの枕詞。
○海上がた　海邊の方。
○ま袖　兩袖。

○すゞしも　涼し。もは感歎詞。
○こよろぎの磯　相模國小餘綾磯
○まだきより　早くから。
○西河　大井川（桂川）。
○宿てふ宿　家といふ家は何處にも涼しさうに秋が通ひ來たか。
○池ひろみ　池が廣いので。
○やちたびむすぶ　幾度も水を手で掬うて落ちる雫。
○うま人　貴人。
○玉だれ　玉で飾つた簾。又簾の美稱。
○波にたぐひて　波と一しよになつて。
○夕汐云々　夕の汐が滿ちて河にのぼつて來る。

水無月の二日人々と共に舟にてすゞみするに納涼といふ題を

隅田河河瀬すゞしも風にちる棹のしづくぞ袖にかけつゝ

名所納涼

こよろぎの磯の浪わけまだきより秋きにけらし風のすゞしき

家々納涼

闇もなほ螢飛びかふ宵の間は伊豫簾かゝげぬ宿しもぞなき

西河やおなじながれをせき入れし宿てふ宿に秋やかよへる

越の姫君の月次の題水邊納涼

池ひろみやちたびむすぶ雫にもにごらぬ水の色ぞすゞしき

うま人涼みする

玉だれの小簾かゝげてよ高殿に富士の高嶺の風かよふまで

河づらの家に涼みする

秋さへも波にたぐひて寄せくらむ夕汐のぼる河づらの宿

雨はるゝゆふべ高どのに涼みする人あり

高殿に月をこそ待て雨過ぐるこずゑの露を袖にかけつゝ

あし間にすゞみする舟あり

夕しほになかばかくるゝ蘆の葉の露ちるかたに小舟寄せてよ

夏のゆふべ隅田河へ舟をうかべて

わたつみの沖よりかよふ夕風に隅田河原のまこもなみよる

つくばねの瑞枝吹きこす夕風にこぎゆく船の棹のつゆ散る

六月十日あまりすゞみせむとて隅田河に船をうかべて綾瀬へさかのぼればがふか咲きたり

ほの見ゆるうすくれなゐのひとむらは綾瀬の岸のねむの花かも

旅人木のかげにすゞむかた

岩が根のかしこかりしも忘られつ足柄山の松の下風

野亭秋近

都人千ぐさ見にくる秋近み露より先にむすぶ庵かな

秋一夜をへだてたりといふこゝろを

昨日しも垣根に生ひしくれ竹の一よを秋のへだてなりけり

生ひしげる庭の夏草かくてしも明日こむ秋の露を待たまし

六月祓したり

眞心のにごりはあらじ隅田河川瀬の菅そさきはらひてば

○わたつみ　海。
○まこもなみよる　夕風に吹かれて眞菰が風に靡きよる。
○つくばね云々　筑波山の瑞々しい若枝を吹き越して來た夕風。
○綾瀬　綾瀬川は隅田川の一支源千住と隅田村との間で隅田川に注ぐ。
○がふか　合歡。ねむの木。
○ひとむら　色の濃淡のむらに綾の一疋(ひとむら)をかけた。むらは布帛類の巻いたものを數へる助數詞。
○すゞむかた　涼む處。
○かしこかりし　恐ろしく危かつた。
○一よ　一よは竹の節と節との間に一夜をかけた。
○六月祓　みなづきはらへ。六月晦日河邊に五十串を立て形代を川に流し年中の罪穢をはらふ神事。
○菅そ　菅麻。菅を割いたもの。祓の時身の穢れをはらふ。

杜夏祓

さきはらふ天つ菅そに露ちりて心もきよき杜の下風

おのづから眞菅とる手に風すぎて露うちそゝぐ衣手の森

河邊夏祓

憂き事も嬉しき瀨にやかはるらむ飛鳥の河にみそぎしつれば

諸人はけふぞ都の西河に秋まちがてらみそぎしにける

くる秋をまつの下陰風淸みみそぎすゞしき滋賀の唐崎

隅田河へはらへにまかりて

眞心を隅田河原の中つ瀨に神世のまゝのみそぎしてけり

憂き事のなき世ながらも淸き瀨にみそぎしつれば凉しかりけり

家々夏祓

はらへせぬ家しなければ罪といふ罪は殘らじ天の益人

男女はらへす

大麻（おほぬさ）のつひのよる瀨をたのみにていくとし浪にみそぎしつらむ

河のほとりに神樂する

あきつばの袂に麻（ぬさ）の露ちりて河瀨すゞしき神あそびかな

○さきはらふ　菅麻を割いて罪穢を祓ふ。
○衣手の森　夫木抄に山城といふ。
○嬉しき瀨　嬉しい機會と變る。飛鳥川の瀨にかけた。古今集「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞけふは瀨になる」
○都の西河　京都の西を流れる大井川（桂川）。
○秋まちがてら　秋を待ちながら
○まつの下陰　松に待つをかけた
○みそぎ　禊。河原に出て水で身を淸め罪穢を淨める神事。
○滋賀の唐崎　近江滋賀郡。琵琶湖にに臨んで一松がある。八景の一。
○隅田河　心の澄むをかけた。
○はらへせぬ云々　どの家も六月祓をせぬ家はないから罪といふ罪は悉く消えて殘らないだらう。祝詞六月祓「天の下四方には罪といふ罪はあらじと」
○天の益人　人民。神の惠みで生者が死者より多く日々に增す義。
○大麻　祓に用ひる玉串につけた幣帛。麻又は木綿（ゆふ）をつける。
○よる瀨　古今集「大幣と名にこそ立てれ流れてもつひのよる瀨はありてふものを」麻を川へ流しても果てには流れ寄る瀨へをりをかけた）がある のを積みにして。
○あきつは　蜻蛉羽。羅衣にたとへる。
○神あそび　神樂。

琴の音に浪のおとそへて菰枕高瀬の淀とうたふすゞしさ

夏　日

きのふけふ照る日かしこし早苗とる田づらの水沫(みなわ)ぬるみ行くまで

夏　雲

ひとすぢのけぶりと見しも時の間に千里をわたる夕立の雲

夏来てはしつが狭衣ほさぬ日も雲こそかゝれ天の香久山

會津山夏

紐ときて旅寝やせまし吾妹子(わぎもこ)にあひづの山の夏陰もよし

那須野夏獵

草深き那須の篠原しのびつゝ聲だにたてぬ男鹿狩るはや

夏　旅

大木曾や麓をすぐる夕立のなごりすゞしき峯のかけはし

逢坂の山路こえゆく夏の日は關の清水ぞ人をとゞむる

夏野を旅人ゆく

見馴れこし笠をかたみのしるべにて言問ひかはす野路の旅人

夏　鐘

○菰枕云々　神樂歌小前張、薦枕「薦枕高瀬の淀にや誰が贄人ぞ鴫突き○のぼる網ゑろしさでさしのぼる」
○照る日かしこし　日の照るのがありがたく畏れ多い。
○夏来ては　萬葉集一「春過ぎて夏來たるらし白妙の衣ほしたり天の香具山」
○狭衣　衣。さは接頭語。
○あひづの山　岩代國會津を吾妹子に會ふにかけた。
○那須野　下野國那須郡。
○篠原　地名にかけて忍びの序とした。
○かけはし　崖にかけ渡した橋。木曾の棧道をいふ。
○關の清水　逢坂山にある。
○かたみの　互の。
○言問ひかはす　互に話しあふ。

夏の夜は端居ながらに遠方の鐘に驚くあかつきの雲

夏眺望

八汐路は夕立すゞし島山の雲行くかたにさわぐ舟人

○端居ながら　宵のうちに端居したのがそのまゝで早くも曉の鐘が鳴る。

○八汐路　多くの海路。海上。

うけらが花巻三

秋歌

文月七日秋立ちければ

時しもあれ今日立ち初むる秋をさへかけて渡せし鵲の橋

野亭秋來

我が庵のまがきの萩をみかり人きぬにするべき秋は來にけり

荒れたる宿に秋きたる

秋なれや葎(むぐら)にとぢし半蔀(はじとみ)を今朝打ちたゝく風ぞあやしき

はじめの秋

秋も猶きのふのまゝのあきつばの袖におぼゆる今朝の初風

新秋露

白露の玉しき滿てて來る秋をあしたの原に誰か待ち得し

置き初むるみぎりの露に心せよ伴のみやつこ春ならずとも

朝戸出の茅生(ちふ)の白露いちじろく秋の色こそ見えわたりけれ

○文月　陰暦七月。
○鵲の橋　七夕に牽牛星織女星が相會ふ時鵲が翼をならべて天の川に橋を架けて渡すといふ傳說。
○みかり人　御狩人。
○きぬにする　萩の花を摺衣に摺る。
○半蔀　格子の裏に板を打つた風雨除けの横戸の小さなもの。
○あきつばの袖　蜻蛉の羽の袖。うす物の衣の袖。
○玉しき滿てて　玉を一面に敷きつめて。
○あしたの原　夫木抄に大和とす大和北葛城郡葦田か。朝の意をかけた。
○みぎり　砌。軒下の石を敷いた處。
○伴のみやつこ云々　拾遺集「とのもりの伴の宮つこ心あらば此の春ばかり朝ぎよめすな」
○朝戸出　朝戸外に出ること。
○茅生　茅の生えてゐるところ。
○いちじろく　はつきりと。

山里初秋

山里のあはれいかにと問ふ人に見せばや今朝の淺茅生の露

七夕月

たなばたの心を汲みて天の河月もこよひや晴れわたるらむ

野外七夕

野べ見れば紐ときにけり文月の七の夕のなゝくさの花

海邊七夕

たなばたのかざしやちらふ夕浪に白玉よするほし合の濱

代牛女言志

天地と絶えぬ契りをおもふには年にひと夜の恨みだになし

織女契久

天なるや安の川水あせばこそ逢ふてふ星のちぎり絶えせめ

七夕別

牽く牛のおそき歩みをかごとにてかへり見がちに君は往ぬらむ

羇中七夕

やつるとも今宵かさまし秋萩の初花ずりの旅の狹衣

○たなはた　七夕に天の河で會ふといふ織女星。
○文月の七の夕　七月七日の夕。
○なゝくさの花　秋の七草の花。紐とくは花の咲きそめるをいふ。
○かざし云々　挿頭の玉が散つたのか。ちらふは散るの延言。
○ほし合　七夕の夜二星相會ふこと。星合の濱は星合の天の川の岸。
○牛女　牽牛星織女星。
○天地と絶えぬ契り　天地と共に永久絶えない契り。思ふにはは思ふにつけては。
○天なるや安の川　神代紀「八十萬神會於天安川邊」」但しこゝは天の川をいふ。
○水あせばこそ　水が涸れて淺くなることがあれば契りが絶えもしようが、水はあせず契りは絶えない。
○おそき歩み云々　牛の歩みの遲いのをかこつけにして。
○やつるとも　旅で見苦しくなつてゐても。

烏鵲成橋

かさゝぎのつばさ重ねて安の河やすらに渡せ其のともしづま

七月七日たらひにかげ見る所

影見るもうれしかりけり今宵しも逢ふてふ星の心たらひに

禰倉の君の家にて七日の夜萩薄にいろ〳〵の絲かけたるところ

皆人のこゝろ〳〵のねぎごとを千ぐさにかけし絲にこそ見れ

七日の夜の曉によめる

たなばたのおもひきゆらむほど見えて影しらみ行く庭の燎火

二星期秋

こよひより夜長かるらむ神の代に秋と契りし天人のため

七夕催興

天の河とわたる舟の梶の葉に書きもつくさぬ千々の言の葉

山家七夕

あやにしきあかぬ事なきたなばたに麻衣かさむ木曾の山住

星河落簷

天の河櫂のしづくも高どのの軒端にちると見ゆる夜半かな

○やすらに　安らかに。
○ともしづま　乏し妻。織女の逢ふことの乏しく珍らしい愛らしい妻。
○たらひにかげ見る　盥に星影をうつして見る。
○心たらひに　心の満ち足るに盥をかけた。
○いろ〳〵の絲　七夕に織女星に手向ける五色の絲。
○ねぎごと　祈り願ふこと。
○秋と契りし云々　秋七月七日と契りおいた天上の人卽ち牽牛織女のために秋の夜が長いのだらう。
○とわたる　瀬戸をわたる。
○梶の葉　七夕に梶の葉に歌などを書いて星祭りをした。一二句は渡にかけて梶と云ふための序。後拾遺集「天の河とわたる舟の梶の葉におもふことをも書きつくるかな」
○麻衣　木曾の名產。
○天の河櫂のしづく　古今集「わが上に露ぞおくなる天の河と渡る舟の櫂の雫か」

七夕濱

此のゆふべ天の河原にかよはなむ待つらむ妹を早見濱風

七夕薄

たなばたのひれふる宵の初風になびきそめたる野べの小薄

七夕馬

天の川淺瀨ふむらむ彥星に月毛の駒を今宵かさまし

七夕蛛

いかならむ身のねぎ事ぞ今宵しも小篠にかくる蛛の絲すぢ

七夕櫛

いかばかり神さびにけむたなばたの待ちこしほどの玉の小櫛は

七夕雲

たなばたのひれふる宵は中空に立ちまふ雲もながめられけり

七夕橋

雲鳥のあやに戀しみ機もののふみ木を橋にわたしそめけむ

七夕衣

人なみに今宵かさまし嬉しさをつゝむばかりの袖ならずとも

○早見濱風　早見の濱を吹く風。速水又速見と豐後にも近江にもある。萬葉集「吾妹子を早見濱風倭なるわをまつ椿吹かざるなゆめ」

○ひれ　領巾。古昔婦人が襟に纒ひかけた布帛。

○淺瀨ふむらむ　淺瀨をふんで天の川を渉つてゆくらしい。

○彥星　牽牛星。

○いかならむ云々　七夕に願ひの絲をかけるが小篠に蜘蛛の絲をかけたのは如何なる祈願か。

○神さび　神々しくなつたことか

○雲鳥　雲の中に飛んでゐる鳥。鵲の橋についていふ。

○あやに　わけもなく妙に。

○機もの　布帛を織る道具。

○ふみ木　織機の一部足に踏んで通絲を上下する仕掛の木。萬葉集「機ものの踏木もてゆきて天の川打橋わたすきみが來むため」

七夕後朝

たなばたの思ひみだるゝ玉かづら今朝しも庭の露とおくらむ

二星適逢

機もののふみ木の橋を一とせにひと夜とはなどかけてちぎりし

文月七日家々の集どもの題をひろひいでてよめる歌七つ

七日女郎花を植ゑよとて人のおこせたれば

あふ星を例にはしてこよひより千秋にほはむ女郎花かな

七日けふの空のけしきいかゞ見るといひければ

けふといへば其の數ならぬかざせ男もいかゞは暮を待たざらめかも

たなばたまつりしたる所に籬のもとに男立てり

神代より契りたがへぬ彦星にたぐへむものか今宵とふとも

七日の夜琴ひく女あり

たなばたのあふ夜の庭の琴の音を雲居にさそふ松風もがな

七日の夕男あまた居て天の河を見たり

久かたの天つ契りをうつせみのこゝろ〳〵になぞへてぞ見る

七日女ども空を見る

○二星適逢　和漢朗詠集「二星適逢未敍別緒依々之五夜將明云々。」本朝文粹に出づ。

○一とせ云々　七夕の二星がどうして一年一度と契つたのだらう。

○家々の集　個人々々の和歌集。

○けふといへば　今日七夕といふから。

○其の數ならぬ云々　物の數にもあらぬ取るに足らぬ案山子の如き男。

○久かたの　天の枕詞。

○うつせみ　現身。この世の人。

○なぞへて　なぞらへて。くらべて。

夕月もくまなきよひの天の河思ふあたりにいかゞ見ゆらむ

七日夜の曉を惜しむ

天人のま袖もりてや世の中の曉露は置き初めぬらむ

七夕秋の七草をよめる

たなばたの紐とくよひやさゝらがた錦に似たる萩も咲くらむ

天の河川邊に立ちてまねくらむ領巾(ひれ)かと見ゆるはつ尾花かな

彦星のあかぬ別れにまつはりて引きてとゞめよ庭の葛花

たなばたの五百(いほ)つ集(つど)ひの白玉の散りか亂るゝなでしこの露

天の河あかで別れし移香をしばしとゞむる藤ばかまかな

たなばたの心を汲みて此の朝け露重げなる女郎花かな

たなばたのおもなさ見えて霧深き籬ににほふ朝貌の花

閏月七夕

いたづらに逢ふ夜の名のみ重なりて重ねぬ袖や猶しをるらむ

盂蘭盆

いにしへの飛鳥の寺のすみの山世々の御法の例なりけり

萩を栽ゑて

○ま袖もりてや　天人の兩袖の上においた涙の露が袖から濡れてこの世の曉の露とおいたか。

○紐とく　二星相會して下紐解く意を萩の蕾の開くにかけた。

○さゝらがた　細かな模樣。允恭紀「さゝらがた錦の紐をときさけてあまたは寢ずに只一夜のみ」

○領巾　古昔婦人の頸飾とした布帛。人を招く時などに振つた。

○彦星云々　牽牛星の一夜の物足らぬ思ひして別れてゆくに葛の蔓が纏つて引き留めよ。

○たなばた云々　織女が身の飾りに幾百となくつけた白玉が散り亂れるか。

○藤ばかま　袴に移香の殘るを草の名にかけた。

○朝け　朝明け。夜明け。

○おもなさ　恥かしさうな樣子。きまりの惡さ。

○いたづらに云々　何のかひもなく名ばかり七月七日の逢ふ夜といふだけ重なつて。

○飛鳥の寺　齊明紀「作₂須彌山像於飛鳥寺西₁、且設₂盂蘭盆會₁。」すみの山は須彌山。

風のおとを聞かむ便りにうゑし荻思ひのほかに人招きけり

荻驚夢

夢にのみ昔にかへる夜な〳〵のおはれ知らずや荻の上風

幽栖荻風

中々におとなふもののさびしきは伏屋の軒の荻の上風

穗に出でたる荻にさして人に

我のみやあはれと聞かむ秋更けてとはれぬ宿の荻の葉風を

栽萩

今よりは我が宿をとへ秋萩の花つまかれし野べのさを鹿

月前萩

露分くる野路のさを鹿心せよ月をやどせる萩が花つま

萩の露おもし

朝ごとの露のよすがと植ゑし萩折るともよしや拂はでを見む

萩漸盛

たなばたの五百機たつる頃しもや萩の錦も織りはじむらむ

閑庭萩

○中々に云々　訪ね來るものがあれば寂しくない筈なのに、なまなか訪ねて來られて歸つて寂しいのは萩の上風である。

○我のみや　我ひとり聞いてあはれと感じて居られようか。

○秋萩の云々　萩と鹿と親しきものとして萩を鹿の妻に見立てて花妻といふ。かれしは疎遠になり離れたのを萩の枯れるにかけた。花妻がかれた故今からは我が家に栽ゑた萩を訪へよ。

○さを鹿心せよ　牡鹿よ氣をつけよ花妻は月を宿してゐるよ。

○露のよすが云々　露置くより所にしようと思つて植ゑた。

○折るとも云々　萩を折つてもままよ露は拂はないで見よう。をは感嘆辭。

おのが野と思ひなすらむ住む人もあるかなきかの庭の秋萩

崎萩

こ萩さく野じまが崎の朝風に夜半に結びし露ぞこぼるゝ

高圓野萩

高圓の野べの秋萩宮人の袖著衣(そでつけごろも)ふれていくよぞ

忠賢がせざいの萩をうつし植ゑたりけるに雨風いみじうはげしかりしつとめて忠賢がもとより「おもひやりて夢もむすばぬ」などいひおこせけるに思ひのほかに花の散らざりければ返事に

夜嵐に思ひおこせし心こそ風におほへる袖となりけめ

七月家にて秋の花ども植ゑたる所を

おのづから秋の野守となりぬめり千草の花を庭におほして

野の花さかりにひらけて人々集まり見る又かりとるも有り

きぬにすりつとに折りつゝ秋の野は人の心もちぐさなりけり

花野を過ぐとてと云ふことを

秋の野は千ぐさの花の唐錦おりたちて行く人ぞ多かる

草花交色

○野じまが崎　淡路津名郡。
○高圓云々　大和添上郡。萬葉集「宮人の袖つけ衣秋萩ににほひよろしき高圓の山」
○せざい　前栽。
○つとめて　翌朝。
○思ひおこせし心　心配してよこした心。
○おほして　培養して。
○きぬにすり云々　秋草を摺衣にすり家づとに折りなど、人の心もさまぐ\である。色々様々の意に千草をかけた。
○おりたちて行く　車からおりて歩いてゆく。織り裁つは錦の縁語。

咲きと咲く花野を見れば世の人の染めなす色はかぎりありけり

野花留客

眞葛原花さく秋は野べごとに人の心のひかれぬるかな

秋の曉花見る所

別れこし妹が心やたぐへけむ這ひまつはるゝ野路の葛花

嵯峨野にせざい掘る

明日よりは嵯峨野の風をとはに聞き露をも見むと千草ほるなり

きちかう

七くさにもれし恨みやはれやらぬ霧の籬のきちかうの花

はかなしと誰かいひけむ夕陰に咲きまさりたる花のあさがほ

鴨頭草

おく露の色こそことにさやかなれ秋を時なる月草の花

大和國のたねのつき草をえて植ゑおきけるが花咲きたれば

青によし奈良の都の宮人の衣に摺りけむつきくさの花

小鷹狩

栗栖野（くるすの）やあしたの風も隼の手ばなれにちる秋萩の花

○咲きと咲く　咲くを意味を強めていふ。盛んに咲く。
○眞葛原　京都東山大谷から祇園までの間にある。但しこゝは葛の茂つてゐる原の義。
○ひかれぬる　蔓を引く意から葛の縁語。
○たぐへけむ　一しよになつたのであらうか。
○せざい掘る　前栽に植ゑる草を掘りとる。
○風をとはに云々　永久に嵯峨野の風を聞き嵯峨野の露を見ようと
○きちかう　桔梗。
○はかなしとの歌　題を脱落した
○鴨頭草　つきくさ。つゆくさ。
○秋を時なる　秋をおのが盛りの時としてゐる月草の花。
○青によし　奈良の枕詞。
○小鷹狩　秋季小鳥を狩る鷹狩。
○栗栖野　山城宇治郡。
○あしたの風云々　朝風も疾いに隼をかけた。隼が鷹匠の手を放れる羽風に萩の花が散る。

新秋風

小笹原けさ置きそはる白露にあらそひ立てる秋の初風

家にて初秋朝露を

來る秋の爲とてやどはあらさねど所得顔の今朝の露かな

人のもとにて、庭上露

あだものと誰かいひけむ庭ひろみ露も千年の數にとるべく

故郷露

住みすてし宿をもとひて見るべきは淺茅が露の秋にざりける

相思夕上松臺立　蛬思蟬聲滿耳秋

來ぬ人をまつのうてなの夕ぐれにうたても鳴くか蟲のこゑ〲

蟲聲幽

野分せし籬がもとの八千草と共に枯れ行く蟲のこゑかな

秋更けて草枕ゆふ驛路にふり行くものはすゞむしの聲

蟲聲非一

時しもあれ妻まつ蟲もはたおりも星のあふてふ秋にこそ鳴け

松蟲

○立てる秋　立秋。

○あだもの　あだなるもの。消えやすきはかなきもの。

○庭ひろみ　庭が廣いので。

○秋にざりける　秋にぞありける

○相思夕上云々　和漢朗詠集に出づ。白樂天の詩の句、轉結に「惆悵東亭風。月好、主人今夜在鄜州。」

○まつのうてな　うてなは高臺。

來ぬ人を待つに松の臺とかけた。

○うたても　情なくつらくも。

○鳴くか　かは感嘆。

○枯れ行く　草の枯れるに聲の嗄れるをかけた。

○草枕ゆふ　草枕を結ぶ。旅寢する。

○ふり行く　舊りゆくに驛鈴を振りゆく意をかけた。

○妻まつ蟲　妻待つを松蟲とかけた。はたおりは螽斯の異名。織女星にかけた。

夕ぐれの風にきほへる松蟲は誰が爪琴の音にかよふらむ

きり〴〵す

おく露も霜になり行く淺茅生をかれなでも鳴くきり〴〵すかな

鈴蟲

ふりいでて鳴く蟲の音やおのが名のすゞろに秋のあはれそふらむ

こほろぎ

秋されば刈萱まじる淺茅生におのれ亂れてこほろぎの鳴く

秋風入簾

わび人のをすのやつれのひまとめて露吹きいるゝ荻の上風

越の姫君の海べの御館の月次の題海邊秋風を

八汐路の秋吹く風を百舟の眞帆に見せたる海づらのやど

故郷秋風

鶉なくふりにし鄕の飛鳥風尾花が袖や吹きかへすらむ

秋の夜月いとあかきに鹿のこゑを聞く

萩原やうつろふ露の月をさへしがらみふせて男鹿鳴くらむ

山陰に雨ふる鹿たてるかた

〇きほへる　競つてゐる。
〇おく露云々　露も霜とかはりゆく淺茅生を疎くし離れることもなく。
〇すゞろに　何となく。おのが名の鈴とかけた。
〇秋されば　秋になると。
〇わび人　わび住居の人。わびしい境遇の人。
〇をす　簾。
〇やつれのひまとめて　破れたすき間を求めて。
〇八汐路　多くの汐路即ち廣い海上。
〇眞帆に見せたる　眞正面に見せた。眞帆は風を正面に受けるやう帆を張ること。
〇飛鳥風　飛鳥の故さとを吹く風萬葉集「たわやめの袖吹きかへす飛鳥風都を遠みいたづらに吹く」
〇うつろふ露の月　露に映つた月影。
〇しがらみふせて　からみつけ踏みふせて。古今集「秋萩をしがらみふせて鳴く鹿の目には見えずて音のさやけさ」

雨過ぐる山の雫に立ちぬれて妻や待つらむ小男鹿の聲

露深き野づらに鹿なく

妻こふるおのがなげきの夕霧を分け迷ふらむ野路の小男鹿

外山鹿

秋篠や外山の雨の笠やどり鹿のなく音に袖ぬらしけり

夜泊鹿

高砂の鹿の音聞きて明石潟うきねの牀に涙おとしつ

をとこ旅のやどりに鹿の鳴くを聞く

おなじ野に妻こふ鹿のたぐひかは千里の外に旅寢する身は

いとゞしく都こひしも小男鹿の入野の草の枕ゆふ夜は

鹿交草花

秋の野に住めるかひよと鹿ぞ鳴く花の錦に立ちまじりつゝ

棚倉の君の家にて山里に住む女鹿の聲を聞く

塵つもるまくらの山の鹿の聲あはれ都に聞く人もがな

秋眺望

鴈がねのつばさの風に霧はれてたえ〴〵見ゆる嶺のもみぢば

○なげきの夕霧　長息の霧で、溜息が霧の如く愁嘆の甚しい意。萬葉集「沖つ風いたく吹きせば吾妹子が歎きの霧にあかましものを」

○秋篠　大和生駒郡。新古今集「秋篠の外山の里やしぐるらむ生駒の岳に雲のかゝれる」

○笠やどり　軒下木陰の雨宿り。

○高砂、明石潟　播磨。

○うきねの牀　船中に泊ること。

○おなじ野云々　家を離れ妻をおいて千里も遙々旅寢する身の思ひは同じ野に居て妻戀ふ鹿とは比べられぬ。

○入野　山城乙訓郡。萬葉集「さを鹿の入野の薄初尾花いつしか妹が手枕をせむ」

○住めるかひ云々　住んでゐるかひだと鹿が啼く。かひよは鹿の啼聲をかけた。古今集「秋の野に妻なき鹿の年をへてなぞわが戀のかひよとぞなく」

○塵つもるまくらの山　枕に塵の積るは打解けて寢られぬ意、枕の山は枕邊に近い山に獨寢の寢られぬをかけた。

九月末つかた感應寺にて秋眺望

見渡せば雲居はるかに鴈鳴きて千町のをしね色付きにけり

水郷秋望

網代木におりゐる鷺のみの毛のみ一むら白き宇治の川ぎり

水邊秋夕

夕風にきよる渚のさゝら波水にも秋のこゑはありけり

稲妻のいそがしきを見て

露の間に露を見ながらもらさじとしづ心なくかよふ稲妻

秋雨

桐の葉のつもるがうへにうちそゝぐあしたの雨ぞ秋の聲なる

新秋雨涼

桐の葉のかつ散りかゝるおばしまに村雨そゝぐ夕すゞしも

月をよめる

照る月はあやしきものかかなしとも面白しとも人に見えつゝ

妙法院宮の月次の御題月を

ながめきて老となりにし恨みさへ忘るゝ秋の夜半の月かな

○感應寺　下谷谷中。
○雲居　雲の居る所、大空。
○千町のをしね　廣い田の稲。
○網代木　宇治川で氷魚を捕るための網代に立てる木。
○みの毛　鷺の頸に蓑のやうに垂れた白毛。
○きよる渚云々　渚へ寄せて來る漣。
○露の間　暫くの間。
○しづ心なく　心あわたゞしく。
○桐の葉のつもる　桐の葉が散り落ちてつもる。
○かつ散る　片一方から散り初める。
○おばしま　欄干。
○あやしきものか　奇怪なものであるかな。
○人に見えつゝ　人に悲しとも見られつ面白しとも見られつ。
○老となりにし　古今集「大方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの」

初秋月

夕月のひかりほのめく西山や秋の越えこし方に有るらむ

弓はりの影をし見れば月にのみ心ひかれむ秋は來にけり

閑居見月

誰か知る拂はぬ苔の夕霧にうつろふ月を夜たゞ見るとは

緇素見月

花ずりの袖につらなるつゞりさへあはれ隔てぬ露の月かげ

野宿見月

秋の野にをばなさかふき一夜ねて千ぐさににほふ月をこそ見れ

閑山見月

立ちまよふ雲は端山にをさまりてみ山の月に隈だにもなし

女ども月を見る

照る月はふたつなきものを見る人の思ふ思ひや千ぐさなるらむ

家に女月を見る

端居して夜な〳〵月に馴れて見むきぬともよしや露のぬれぎぬ

七月十四日の夜月いとあかかりければ

○弓はりの影　弓張月の影を見れば。
○心ひかれむ　引くは弓の緣語。
○夜たゞ　夜だう。よもすがら。
○緇素　僧侶と俗人。
○つゞり　綴りて仕立てた衣服卽ち僧衣。
○あはれ隔てぬ　物の哀れといふ事では僧俗の差別をしない。
○きぬとも云々　まゝよ月に馴れたといふ事で濡衣を著ても、なき罪を負はされてもかまはぬ馴れて月を眺めよう。

昨日しもあひ見し星の光さへけたるゝ夜半の月の影かな

同じ月十七日石濱にて人々と共に月を見て

木の間よりほのめくと見し月影をやがてよせくる秋の河水

七月月いとあかきに池にうつろへる影を見をりて

水清みひれふる魚にさわがれてやどりさだめぬ月のかげかな

釣どのに人々あつまりて月見る所

月すめば澄みまさりけりまとゐする人の心も池のこゝろも

照る月をくもらぬ池の底に見て天つみ空に遊ぶ夜半かな

舟をうかべて月を見る

夜と共に棹さすかたへながれつゝ止むればよどむ水の月かげ

越の姫君の十五夜の隅川づらの月を見てといふ事を

わたつみのうしほと共にさしのぼる月にぞむかふ河づらの宿

終夜翫月

武藏の海沖よりいでて秋父嶺にわたらふ月のあかずも有るかな

杯も千たびめぐるや出づるよりかたぶくまでの月をうかべて

毎秋馴月

○けたるゝ　消さるゝ。
○石濱　淺草區淺草寺北方石濱邊一帶。隅田川に臨む。
○やがてよせくる　間もなく月影が隅田川水に映つて來る。
○釣どの　池に臨んで構へた屋。
○まとゐする　集まり會ふ。
○池のこゝろ　池の中心、又池をもいふ。
○池の底に見て　池に映つた月影を見て月の世界の大空に遊ぶ。
○わたつみ　海。
○うしほと共に　潮が滿ちて川にさしのぼると共に月も海上からのぼる。
○わたらふ月　わたる月。
○月をうかべて　杯に月影をうつし浮べて。

秋をあまた馴れて向へば憂きふしも嬉しきふしも月ぞしるらむ

貴賤憐月

絲竹も砧の音もおのがじゝ月にいをねぬすさみなるらむ

武藏野に尾花あり月出でたる所

武藏野の尾花が露に影見えて月もほに出づる秋の夜半かな

月を見すてて人のかへらむといひければ

君まちて月をやどせる蓬生の露ばかりだにあはれとは見よ

停午月

立つ杉の影さへもなし中空によどめるほどの月のさかりは

入後慕月

すむ月の入りにし後も山松の梢に殘る影をしぞおもふ

有明月

朝顏のやゝ咲き出でし露の上にしばしはやどる有明の月

朝鳥の羽風にはるゝ薄ぎりの絶えまに見ゆる有明の月

長月ばかり有明の月を見て

馴れ來つる秋のあはれも長月の有明の月ぞとぢめなりける

○秋をあまた云々　幾秋も月に馴れて向ふので。
○絲竹　管絃。音樂。
○おのがじゝ　めい〳〵。各自。
○いをねぬ云々　富貴の人は月に管絃を弄して夜も寢ず貧賤の人は月下に衣を擣つて夜寢ずいづれも寢ぬすさびである。
○月もほに出づる　秀（ほ）に出づるは高く現はれ出る。尾花が穗に出で現はれる。
○露ばかりだに　せめて露だけでも。僅かだけでもの意をかけた。
○停午　亭午。日の午に至る時。亭は至る値る義。留る意で停を亭に通用したのか。
○中空　大空。半天。
○朝鳥　朝塒から飛びたつ鳥。
○長月　陰暦九月。
○馴れ來つる云々　秋の夜毎に月を眺め馴れて來たのに九月となつて秋も終るがその九月も有明月が出るやうになれば下旬で、もう秋の哀れも終りである。

○雲だにも　せめて雲だけでも。
○心あらなむ　心あれよ。同情せよ。
○望の夜の月　十五夜の月。
○八重立ちこむる　幾重にも立ちこめてゐる。
○霧の海云々　萬葉集「天の海に雲の波立ち月の舟星の林に漕ぎかくる見ゆ」
○玉くしげ　明くの枕詞。
○まそ鏡　眞澄鏡。まことによく澄みわたつた鏡。

○月の桂かぢ　月を舟にたとへて月の桂の楫。
○みと　水門。湊。
○名におふ夜　八月十五夜。
○くる秋　來る秋と蔦葛を繰るとをかけた。
○とめて宿れる　尋ね求めて宿つてゐる月。
○筏の牀云々　筏の上に夜泊して
○見てしが　見たいものだ。

曉月厭雲

雲だにも心あらなむ山のはに入りがた近き望の夜の月

曇る夜の月

大空を八重立ちこむる霧の海に月の御舟の行くへ知らずも

八月十五夜

玉くしげ明くるまで見むまそ鏡みがける秋の望月の影

八月十五夜空いとはれ渡りたるに人々とひ來て共によめる十五首

なべて世の人の心もすむ月も空にみちぬる夜半にも有るかな
夕しほに浮べる月の桂かぢ大江のみとに今ぞよすなる
我が園のこ萩の上の露すらも名におふ夜半の月をまちけむ
露ふかき軒ばにはへるつたかづらくる秋ごとに月ぞやどれる
かずならぬ庭の苔路の露をさへとめて宿れる夜半の月かな
さだめなき秋のみ空の雲さへも今宵は月に心ありけり
今宵しも筏の牀に浮寢してすみだ河原の月を見てしが
玉すだれかゝぐる宿も何かせむ軒端のつたの露の月かげ
さはるべき山のはもなき武藏野は月見るための所なりけり

ことわりの夜半なりながらかくばかり限なき月の影は見ざりき

あすも見む月とは思へどおなじくは今宵ながらに明けずもあらなむ

いつはあれど秋のなかばの中空に隈なくすめる月を見るかな

あはれ知る今宵の月のかげのみぞ八重葎をもへだてざりける

訪へかしと思へば人のとひ來つゝ同じ心を月に見るかな

名に負へるこよひの月の隈なさに千たびあふとも飽くよあらめや

八月十五夜越の姫君の月宴の題十五夜翫月

小牖まけば月の桂の追風もまほにかをると思ふ夜半かな

やんごとなきわたりに月の宴有るに洲濱に水をゑがきて鏡を月のかげと

おもはせて鏡のひもを藻にむすびて水の上へ金泥もて歌をかけり

君見よと最中の秋の月かげもこゝをせにすむ庭の池水

八月十五夜人々とひ來て宴せしに蟲をよめる

此の夜らの月と君とを蓬生に待ちよろこべる蟲の聲かな

十五夜人々とひ來たりけるに夜一よ曇りたりければ

今宵しも訪はれしのみを光にて月はつれなき蓬生の宿

さもあらばあれ影見せずとも隈もなく語りあかさむ秋の望の夜

○ことわり云々　八月十五夜で望月の隈なきは當然の夜ではありながら。
○今宵ながら　今夜の此のまゝで
○いつはあれど　いつも月はよいけれど。
○秋のなかば　仲秋。
○八重葎云々　八重葎の茂つた賤が家も差別をしないで平等に照らしてゐる。新勅撰集「訪ふ人もなき宿なれど來る春は八重葎にもさはらざりけり」
○月の桂の追風　月の桂の舟に追風が吹いて眞帆に帆をあげる。月の桂を吹く風も眞秀(まほ)に十月調つてかをる。
○洲濱　洲と濱との出入した形を摸してその上に木石花鳥などを形ぢり造つた。
○金泥　金粉を膠にまぜた繪の具
○最中の秋　仲秋。
○こゝをせに　こゝを最上の時節機會として。
○夜ら　夜。らは意味なき接尾語
○光にて　月の光はないが訪はれたのを光(光榮)として。
○月はつれなき　月は無情な。曇つて冷淡な。
○さもあらばあれ　月は曇つて此の上は何とも仕方ないまゝよ。
○隈もなく　心隔てる所なく。月隈は影即ち曇りがあつても心は隔て隱れる所なく。

○いつはあれど　いつもよいけれど。
○紐とく　蕾が綻び咲く。
○はつかに　かすかに。僅かに。
○かげろひて　光がちらついて。
○月影の隈なき云々　月光の曇りなき夜も名が暗いとひゞく小倉山では牡鹿が妻を覓めかねて鳴くのだらう。小倉山は山城嵯峨。
○塵ばかり　塵ほども。少しも。
○布留の瀧つ瀬　大和の布留川の瀧のやうな早い瀬。
○奈良の古郷　ふるさとは古跡。
○おくれゐて　伴はずあとに殘つてゐること。家に留まつてゐて。

八月十五夜前栽うゑたる所

いつはあれど今宵の月をやどさむと植ゑしちぐさは紐ときにけり

松の絶間よりはつかに月の影のかげろひて見えけるを

いつのまに月は梢をのぼりけむ松の葉ごしに光ほのめく

秋の月に山に鹿なく

月影の隈なき夜半も小倉山つまぎかねて男鹿鳴くらむ

夜の雲をさまりて月行くことおそし

塵ばかり雲の浪なき大空の月のみ舟はこぐとしもなし

月瀧をてらす

御幸せし布留の瀧つ瀬ふりぬれど月のみ影は今もやどれり

秋の月面白きに池有る家

大空に光みちぬる月をしもわがものに見る池の面かな

あれたる宿の月

古をしのぶの露に影とめて月のみすめる奈良の古郷

旅の宿りに月を見る

おくれゐて戀ふる袖にもやどるらむ草の枕の秋の月影

しづかに月を見る

とこしへにとざせる門の杉が枝に思ひあがれる月を見るかな

月の山の端に入らむとするを

三日の夜のほのかに見えし影ばかり山のはつかに殘る月はも

山里にひぐらしの聲を聞きて

杣人の斧のひゞきは絕えてしも猶ひぐらしの聲ぞのこれる

女の家に男いたりて籬の尾花のもとに立てり

人はいさしら露むすぶ絲薄ほに出でて我をまねくとぞ見し

山里に侍りし夜鹿の鳴くを

秋深み山田のひたに馴れてしも枕に近きさを鹿の聲

八月十六日夜人々つどひて歌よみけるに有明の月あかきに鴫たてりといふ心を

いねがてに鴫ぞはねかく有明の月影淸き猪名のふし原

二十日月

杉立てる山のはつかの月かげのさしのぼるほどぞ靜けかりける

月前苔

○とこしへ云々　世を退いて永久に絕つて開かない門。
○思ひあがる　高くとまつてゐる
○山のはつかに　はつかはほのかかすか。山の端にかけた。
○杣人　杣木を伐る人。
○絕えてしも　絕えてしまつてもしは强め辭。
○いさしら露云々　いさ知らずを白露むすぶとかけた。結ぶは絲の緣語。
○ほに出でて　外にあらはれ出でて。薄の穗にかけた。
○秋深み　秋がふけてゐるので。
○ひた　引板。鳥をおどし逐ふ鳴子。ひたに馴れ云々は引板の音は聞き馴れてはゐるが枕近く牡鹿の聲を聞いて哀れを感じる。
○いねがてに　寐ねがたくて。
○鴫ぞはねかく　曉に鴫が羽蝨をとるに嘴で羽根をしごく。
○猪名のふし原　猪名の柴原。猪名野は攝津河邊郡。
○山のはつか　山の端に二十日とはつか(僅かほのか)をかけた。

○秋のさがとて　秋のならひとして。

○さを鹿の　牡鹿が、家の籬に來なれる山家の月を今見てゐるやうにして見ようとて世を遁れて來た

○小簾　をは接頭語。
○空だきもの　香爐を隱しておいて室に香をたきしめる薫物。
○待ちとる　待ちつける。
○武藏野の廣き惠み　江戸の幕府の廣大な惠みをたとへた。

古鄕のかやが軒ばの苔の露あはれいくよの月やどるらむ

狂雲妒佳月

詠めつゝ月をねたしと見る人の心や浮ける雲となりけむ

雲開月

行く雲も秋のさがとて早ければしば〳〵見する月のかげかな

山家月

さを鹿の籬になるゝ宿の月かく見むとてぞ世をばのがれし

月の夜山里を訪ふ

山里の月にとひきて大かたの秋のあはれのかぎりをぞ見し

山里にて月の夜都をおもふ

あはれしる都の友のこひしきはを鹿鳴くなる月の秋の夜

山月入簾

小簾の中の空だきものや山の端の月を待ちとる限には有るらむ

野月

秋の月あくまで見つゝ武藏野の廣き惠みをあふぐ民草

野月露深

武藏野や露分け行かむかたもなし草は皆がら月になりつゝ

秋の月面白き池有り家有る所

こゝな瀬に月も澄むらむ島好むあるじがらなる池のこゝろに

池月久明

年ふれどくもらぬ池の鏡には月の面わも老いせざりけり

月照河水

武藏嶺に雲をさまりてさゞれ石も月にみがける玉川の水

山川に月のうつるを見て

いく千々の玉か散るらむ秋の夜の清瀧川の浪にてる月

江上月

都鳥うきねの數もあらはなる難波堀江の秋の夜の月

浦月

繼橋の百夜つぎても見てしがな眞間の浦わの浪にてる月

古寺月

なべて世の秋はものかは初瀬山檜原がおくにすめる月かげ

信濃國なる立澄法師とまとゐしける夜古寺月といふ題を得てよめる

○草は皆がら　草に置いた露に月影が映つて草は悉く月になつて。古今集「紫の一本故に武藏野の草は皆がら哀れとぞ見る」
○こゝな瀬に　此處をその場所として。
○島　泉水築山などある庭。
○あるじがら　主人の人柄に相當した。
○面わ　かほ。
○武藏嶺　武藏國秩父の山々。
○さゞれ石　細石。
○月にみがける　細石が月光に照らされて玉と輝いてゐる玉川の水石磨く玉と緣語。萬葉集「卯の花の露に光をさしそへて月にみがける玉川の里」
○いく千々　幾多の玉が散るのだらうか。
○清瀧川　山城葛野郡嵯峨。
○うきね　浮寢。水鳥が水の上に寢てゐること。
○難波堀江　仁德天皇の時開鑿して難波江に通じられた運河。
○繼橋　下總東葛飾郡眞間川に架けた。繼橋は川中に柱をたて板を長く繼いで渡した橋。
○眞間の浦わ　眞間の入江。
○なべて世の云々　大方の世の秋は比べものになるものか。
○初瀬山　大和磯城郡。

○瓦の松　白氏文集驪宮高に「牆有レ衣兮、瓦有レ松。」
○曉をまつの戸　曉を待つと松の板戸とかけた。
○ささで　戸を閉めないで。
○をしね　稻。
○田ぶせ　田の中の假廬。
○古里の月云々　千載集「古さとの板井の清水みくさゐて月さへすまずなりにけるかな」
○おぼろの清水　山城愛宕郡大原村江文の東にあつた。後拾遺集「程へてや月も浮はむ大原や朧の清水すむ名ばかりに」
○名のみして　朧といふのは名ばかりで月は朧でなく澄みわたる。澄むは清水の緣語。
○古鄕の云々　續千載集「尾花葺く假庵寒き秋風に宇治の都は衣うつなり」かりほは假庵。

秋更けて夜な〳〵すめる月影や瓦の松の雪となるらむ

古寺殘月

曉をまつの戸ささで誰か見る高野の奧の有明の月

樵夫歸月

秋深み夕露おもる椎柴に月かけそへてくだる山人

田家見月

をしねかる田ぶせの秋の月の夜に都の人を留めてしがな

故鄕月

古里の月にとひきて水草ゐし板井の淸水さし汲まれけり

名所月

大原やおぼろの淸水名のみして秋は月こそ澄みわたりけれ

月下遠鐘

澄む月にあはれをそへて心ある遠山寺の鐘のこゑかな

月前旅行

古鄕の人に見せばや尾花葺く宇治のかりほの秋の夜の月

月前神祇

男山神のみゆきの事はてて嶺さし出づる月ぞしづけき

月前遠情

象潟（きさかた）や秋すむ水の月影を蜑の磯屋に誰か見るらむ

月前眺望

月を先づ待ちとる國に住みなれてかたぶくかたの都をぞ思ふ

白鷺のつばさと見しは月夜よみ安房の遠山かけて漕ぐ舟

玉川や千村五百村手作（たづく）りをさらしそふると見ゆる月かな

月前祝言

八束穗の瑞穗の上に千五百秋（ちいほあき）國のほ見せて照れる月かも

九月十三夜家にて人々と共に歌よむに、月前祝君

筑波山千秋くもらぬ月をしも君がみ陰にたぐふべらなり

九月十三夜曇りければ

天雲もかくさふべしや照る月をめでそめませし昔おもへば

十三夜人々つどひて歌よむに海のほとりなる人の家に月の入るを見たる

といふ事を

難波潟蘆火たく屋にやどらずば波間にしづむ月を見ましや

○男山　山城綴喜郡。石淸水八幡宮がある。

○象潟　羽後由利郡。松島に劣らぬ絶勝であつたが、文化元年地震で海底隆起し昔日の俤を失つた。

○月を云々　月を先に待ち著ける東國に住み馴れ月の傾く西の都を思ふ。

○月夜よみ　月がよいので。

○玉川　武藏調布の玉川。拾遺集「玉川にさらすたつくりさら〳〵に昔の人の戀しきやなぞ」

○千村五百村　村はあて字。疋。布帛の卷いたのを數へる語。

○手作り　調布。手織りの布。

○八束穗の瑞穗　幾束もある長い瑞々しい穗。

○千五百秋　千秋萬歲。

○國のほ　國の秀でたこと。

○たぐふべらなり　比べるべきである。

○かくさふ　隱すの延。

○照る月云々　中右記「保延元年九月十三夜、今宵雲淸月明、是寛平法皇明月無雙之由被二仰出一、仍我朝以二九月十三夜一爲二明月之夜一。」

○蘆火たく屋云々　新古今集「難波人蘆火たく屋に宿かりてすゞろに袖の汐たるゝかな」月を見ましやは月を見ようか見られはせぬ。

九月十七日忠賢の家の會に上野の岡より月の出づるを見て

織りかくる秋の錦をたち待ちの月かげにほふ岡の邊のやど

暮秋月

霜の上に影はとゞめよ秋の月馴れにし露のなごり思はば

駒むかへ

唐錦立野の駒は東路の千里の秋の花やわけてし

駒むかへを見る女車あり

うき名のみ立野の駒も逢坂の關路こえぬと聞けばむつまし

初鴈を聞きて

聲きけば先づぞうれしき三吉野の田の面の鴈のよりもよらずも

道行く人初かりを聞く

あがた見に朝立ちゆけば遠つ人初かりがねも空に鳴くなり

月前鴈來

雲霧を翅の風にうち拂ひ月見よとてや鴈わたるらむ

紙縒に帆かけたる舟あり鴈わたる所

海原やおき行く舟の遠近に聲をほにあげて鴈渡る見ゆ

○たち待ちの月　十七日の月。たちは裁で錦の緣語。

○駒むかへ　古八月十五日に諸國の牧から貢進する馬を馬寮の使が逢坂關に出迎ふこと。

○唐錦　たちの枕詞。

○立野　武藏國都筑郡立野鄉。武藏五牧の一。

○うき名のみ云々　よからぬ甲斐ない評判はかり立つたが、人を留める關を越えて逢坂と聞くとなつかしい。駒引の貢進の馬も立野から來て逢坂を越えた。

○三吉野　武藏國入間郡。

○田の面の鴈云々　伊勢物語「わが方によると鳴くなる三吉野の田の面の鴈をいつか忘れむ」よりも云々わが方によるにしても寄らぬにしてもまづ聲がうれしい。

○あがた見　田舍を見にゆくこと

○遠つ人　鴈の枕詞。

○聲をほにあげて　聲を高く張りあげて。秀にを帆にとかけた。古今集「秋風に聲をほにあげて來る舟は天のと渡る鴈にぞありける」

薄暮初鴈

夕附日入閒のかたのいほしろの穂のへにおつる初かりの聲

妹がり行く道にて鴈を聞くといふを題にて

ふりはへて行くなるわれを遠つ人かりにのみとな妹に告げそよ

馬上聞鴈

秋の野に尾花葦毛の駒とめて空行く鴈のこゑを聞くかな

雄風が葛飾の里の家をとひて古今集の句題をよめる鴈ぞ鳴くなる

秋風はうべ寒からし葛飾や千町のをしねかりぞ鳴くなる

水郷鴈

雲路行く天つ鴈がね澄む月の桂の里に中やどりせよ

月前鳴

露深き猪名のふし原たつ鳴の羽風に月の影ぞこぼるゝ

河霧

百くまや千くまの河と霧こめぬ舟わたせをと呼ぶ聲はして

湖上曉霧

松風もかぎりあればや霧こめて有明くらき滋賀の辛崎

○夕附日　夕方になる日影。

○いほしろ　五百代。廣い田。代は田地の廣さを度るにいふ語。

○穂のへ　穂のうへ。穂のほとり

○妹がり　愛する妻の許。

○ふりはへて　わざ〳〵。

○遠つ人　鴈の枕詞。

○かりに云々　假ゆくとばかり告げるな。鴈に鴈をかけた。

○尾花葦毛　馬の毛色の名。尾花をかけた。

○雄風　清原雄風。千蔭の門人。

○鴈ぞ鳴くなる　古今集「春霞かすみていにし鴈がねは今ぞ鳴くなる秋霧の上に」

○うべ寒からし　なる程寒いだらう尤もなことだ。

○千町　幾町歩もある廣い田。

○をしね　稻。

○かりぞ　鴈を稻を刈るにかけた

○桂の里　山城葛野郡。

○猪名のふし原　猪名の柴原。攝津河邊郡。

○百くま云々　多くの入りこんだ處を經て、信濃千曲川に來ると舟渡せよといふ聲がして河は霧たちこめてゐる。

○有明云々　有明月だ霧に暗い。

○辛崎　近江滋賀郡。琵琶湖畔。

月前擣衣

筑波嶺のすそわの田ゐに月澄みてにひ桑繭の衣うつなり

千よろづの砧の聲ぞきこゆなる都の空の秋の夜の月

月夜聞砧

物思ふすさみと聞けば月清みたゆむ砧もあはれなりけり

擣衣驚夢

わび人の砧の音のかよへばやさむる枕の露けかるらむ

夢のわた百舟人や寐ざむらむ吉野の里に衣うつころ

南北擣衣

ひんがしに流るゝ水のかなたこなた衣うつなり玉河の里

名所擣衣

千たびうつ砧の音ぞきこゆなる身にしむ風の秋篠の鄕

更けぬるか月は外山に入間路の里の砧の聲たゆみ行く

夕菊

村菊の露分けごろも日も入りぬ今日や山路に千年經にけむ

たそがれの妹が垣根の菊の花われを待つらむ袖かとぞ見る

○すそわ　麓のあたり。
○田ゐ　田のおも。
○にひ桑繭　新しく取つた繭。
○物思ふすさみ　煩悶してゐる心の向くまゝに砧を打つのだと思つて聞くと、月の清さに砧がとぎれるのも哀れに感じらる。
○わび人云々　思ひ惱んで慰める方もない人が打つ砧の音が自分の夢に通じたからであらうか。
○夢のわた　夢の海。
○ひんがしに云々　東に流れる玉川の南と北の兩岸。千載集「松風の音だに秋は寂しきに衣打つなり玉川のさと」
○秋篠　大和生駒郡。身にしむ風の秋とかけた。
○更けぬるか　月は夜と共にもう更けたか。
○入間路　武藏。外山に月の入るをかけた。
○村菊　村はあて字。叢り生えた菊。村菊の露を踏み分けて。
○日も入りぬ　日もに紐をかけて露分衣の緣とした。
○山路に千年云々　古今集「ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年をわれは經にけむ」

月照菊花

淵となる行末かけて秋の月やどり馴れなむ菊の上の露

秋の夜月あかし籬のもとに菊さけり

隈もなき月にけたるゝ夕づゝの光を殘すませの白菊

菊の花咲きたる所に夜泊りて人々見る

そのかみの山路の種ときくからに一夜の宿も千代や經なまし

旅宿翫菊

古鄕のおとづれをだにきくの花名もなつかしみ折りてけるかな

伴菊延齡

あし引の山路の菊や仙人の千世のさかゆくしをりなるらむ

ぬひ子が贈答の會に菊を折りて人のもとへと云ふ事を

君とわが語らむこともつもりては淵となるべき菊の上の露

川づらに菊咲けりもみぢ多かり

きくの露つもれるよどにかげうつす木々のもみぢも常磐ならなむ

田のつらに柞もみぢせり

秋更けて色こきいねの中にしも立てる柞のうすくも有るかな

○淵となる　菊の露が流れて淵となる、行末いつまでも秋の月が菊の露に宿りなれるであらう。拾遺集「わが宿の菊の白露けふごとにいく世積りて淵となるらむ」
○隈もなき云々　曇りなき月の光に消される宵の明星。
○ませ　ませ垣。籬。
○山路の云々　古今集「ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年をわれは經にけり」
○きくの花　聞くに菊をかけた。
○名もなつかしみ　色も香も故鄕の事を聞くといふ名までもなつかしいので折つた。
○あし引の　山の枕詞。
○山路の菊　前出古今集ぬれてほすの歌參照。
○千世のさかゆく　千秋榮えゆくに山路の坂を行くをかけた。
○しをり　山路をゆくに路案內として枝などを折つておくこと。
○ぬひ子　菱田ぬひ子。
○淵となるべき　前出、拾遺集「わが宿の」の歌參照。
○よど　淀。よどみ。淵。
○もみぢも云々　もみぢも永久その色も姿もかへないでありたい。

月照紅葉

月の船さすにまかせて夜さへもこがると見ゆるもみぢ葉の色

遠紅葉

今朝見れば都の外の露霜の深さしらるゝ峯のもみぢ葉

紅葉留客

心さへ色にそみぬる木のもとを誰かへる手と名づけそめけむ

山皆紅葉

此のごろはもみぢぬ山もなければや紅にほふ四方の朝霧

古今集句題いはがきもみぢ

龍田彦風な吹かせそかぎろひの岩がきもみぢ今盛りなり

締に宇津の山の紅葉を人々分けてのぼる所

蔦楓下照る秋は陰しげき宇津の山路も誰かたどらむ

田舍の家にもみぢ染めたるに田刈りたる所

をしねかる田づらのいほのうすもみぢ色付く秋になりにけるかな

水郷紅葉

桂人散るをやいかにいそぐらむ嵐の山の嶺のもみぢ葉

○月の船さす　月を船にたとへて空の海を棹さすに月の光のさすをかけた。

○こがる　焦るに漕がるをかけた

○今朝見れば　峯の紅葉を。

○心さへ云々　心までが紅葉の色にしみこんだ樹蔭をすてて誰が歸られるものか。かへる手は楓（もみぢ）に歸るをかけた。

○もみぢぬ山云々　紅葉しない山もないからであらうか。

○岩がきもみぢ　岩が垣の樣に疊まり續つてゐる所にあるもみぢ。古今集「奥山のいはがきもみぢ散りぬべし照る日の光見る時なくて」

○宇津の山　駿河國宇津谷と岡部との間の峠。

○下照る　地まで赤く照り輝く。

○蔭しげき云々　伊勢物語に蔦楓が茂つて道がくらいと云つた宇津の山も紅葉が照つて誰が路を迷つて尋ね歩くものか。

○をしね　稻。

○桂人　山城桂の村人。嵐山の麓を流れる大井川が桂村に入つて桂川となる。嵐山の紅葉の散るを桂人がいかに急ぐことだらうの意。

網代にもみぢよせたり

水上のもみぢ葉よせてあじろ木に猶もいさよふ秋の色かな

河にもみぢ流るゝを見る

さゝらがた錦の帯と見るばかり細谷川にもみぢ流れぬ

川づらのもみぢを見て

百舟のかよふ川べのもみぢ葉はこがるばかりに染めてけるかな

川をへだててもみぢの散るを見る

木がらしの吹くや川との渡守ちるもみぢ葉もこゝらつまなむ

田子の浦もみぢ有り富士見ゆるかた

田子の浦や秋はもみぢぞこがれけるふじの煙の立たずなる世も

明石の浦もみぢ有り帆かけたる舟行くかた

明石潟浦こぐ舟のほにいでてにほふ紅葉はあかずも有るかも

もみぢやゝ散りがたなり

花よりもつれなかりけりもみぢ葉は袖にしむべき香さへとめねば

紅葉殘梢

暮れぬとて何をしみけむ秋の色は梢にのこる神無月かな

○あじろ木云々　萬葉集「ものゝふの八十氏河の網代木にいさよふ波のゆくへ知らずも」

○さゝらがた　細かい模様。

○こがるばかり　焦るばかりに赤く染めた。舟の漕がるをかけた。

○川と　川門。川の流れの落ち合ふ所。

○こゝら　あまた。

○田子の浦　駿河國庵原郡。

○こがれ　焦るは煙の縁語、浦漕ぐをかけた。

○ふじの煙云々　古今集序に「今は富士の山も煙たたずなり」

○明石　播磨國明石郡。

○ほにいでて　著しく表はれ出て秀(ほ)に帆をかけた。

○つれなかり　冷淡である。

○香さへとめねば　香までも留め殘さぬから紅葉は無情だ。

○暮れぬとて云々　九月も終つて秋が暮れたと云つて何の爲に惜しんだことだらう。惜しむ筈はない

○神無月　陰暦十月。それから冬である。秋色はなほ梢に殘る。

越中國柿本の社に楓あまた植ゑてそれに歌そへて奉るとて人のすゝめければ

古の手ぶりに猶やかへる手もいや照りそはむ神のまに〳〵

人の山ぶみしたりとてかへでのもみぢおこせたりければ

秋霧を分けけむ山の深さをも染めしもみぢの色に見るかな

鐘聲送秋

今日のみに秋をとぢむる山寺のしゞまの鐘の夕ぐれの聲

うら枯るゝ野寺の鐘の入相のひと聲毎に秋ぞ暮れゆく

山寺秋暮

しぐれつゝ秋も過ぐめる山寺にうつぶし色の袖ぞさむけき

羇旅暮秋

古郷を別れし袖に置きそめし朝の露ぞ霜となりける

暮秋雲

足柄や關のむら山秋更けて時雨もよほす峯の浮雲

庭を秋の野につくりて

うつし植ゑて千草の花ぞ咲きにける大堰嵯峨野はとはずともよし

○古の手ぶり云々　人丸の古代の歌風に再び復つていよ〳〵照り輝くだらう。かへる手はもみぢ。
○山ぶみ　山路をふみ歩くこと。

○秋をとぢむる　秋を終りとする
○しゞまの鐘　人を制して靜かにさせるため鳴らす鐘。秋の終りとして山寺の夕暮の鐘が鳴つてあたりはしじま(沈默)となるの意。
○うら枯る　草木の末葉が枯れる心さびしい。
○うつぶし色　薄墨色。喪服の色。

○うつし植ゑ　千草を移し植ゑて
○大堰嵯峨野　山城葛野郡。

野色混秋光

おきわたす露も千草に匂ひつゝいづらを花とわきぞかねつる

人々秋の野に遊ぶ

秋の野はにほふ絲はぎ葛の花誰も心のひかれてぞ來る

山路秋行

小男鹿の妻こふ山を秋ゆけば袖に先づしる初しぐれかな

八月の末田ばたといへる所の西行庵へ人々と共に行きて秋山寺に遊ぶといふ事を

たきものの煙にかへて立つ霧のはれぬ山邊に今日はくらしつ

秋　雜

時わかぬ峯の岩ほもはふ蔦のもみづる色に秋は見えけり

八月十四日景雄が扇合しける時紫菀のかさねのきぬしてはりたる扇に紅の紐をぬきてみなむすびして垂れたるを出してそれにそへける歌

露深み紫菀(しをに)咲く野の秋の月うつろふ影もうす色にして

のこる日かずもはや二日三日となりぬるを玉づさかけてくる聲だにせず楓はなほ染めがてなるはこゝろおそき秋にもありけるかなされど柿の葉

○いづら　いづれ。
○わきぞかねつる　區別がつきかねる。
○たきもの　薫物。様々の香を合はせて作つた煉香。
○霧のはれぬ山邊　霧が晴れない山邊。霧不斷の香をたくといふ趣。
○時わかぬ　時節の區別なく常住不斷の。
○もみづる色　紅葉する色。
○紫　のかさね　表は薄色、裏は青。但し表紫裏蘇芳、表蘇芳裏萌葱などの異說もある。
○ぬきて　貫きて。
○みなむすび　緒の結び方の名でその結びめが蜷(みな)に似たもの
○露深み　露が深いために。
○うつろふ影　うつる月の影。
○うす色　うす紫。紫菀の花の色。
○のこる日かず　九月も終り方になり、冬も近づいて秋さして殘る日數。
○玉づさかけて來る　雁の來るのをいふ。古今集「秋風に初雁がねぞ聞ゆなる誰が玉づさをかけて來つらむ」
○こゝろおそき秋　心鈍き秋。心ののろい秋。氣のきかぬ秋。

のいやしげなるものからうら山吹の袖おぼゆるまで染めなしたるが文机のもとに散りくるにおどろきて見いだせば晴れにたる空いつしかかたへくもりてしぐれさと降りきぬうらがれたる荻の葉もしづ心なく萩の下葉の色附きたるがほろ／＼と池水に散りてながるゝもをかしこゝらあせ行く芝生にわれもかうのはかなげなるりんだうの我はがほなるすべて哀れふかしすいがいのもとより軒のつまではひかゝれるつたはやゝ下ぞめしてさすがにをり知りがほなり

初しぐれあはれ知れとか秋の色に人の心をそめて行くらむ

　こは長月二十七日心地そこなひてたれこめけるをりのことになむ

長月つごもり田舍わたらひして

雁鳴きて紅葉いろこき里をしもなど今日のみと秋はてぬらむ

○いやしげなるものから　下品ではあるが。
○うら山吹　表は黄、裏は山吹。異説いろ／＼ある。
○かたへ云々　空の一部分曇つて時雨がさつと降つて來た。
○うらがれたる、末葉の枯れた。
○しづ心なく　落著いた心もなくあわたゞしく。
○あせ行く　淺くまばらになる。
○われもかう　地楡。草の名。
○りんだう　龍膽。草の名。
○すいがい　透垣。
○心地そこなひ　病氣になつて。
○たれこめ　家に閉ぢ籠り。
○田舍わたらひ　田舍に行つて住むこと。
○など云々　如何して今日ばかりだと秋が暮れてゆくのか。

○そとも　外面。又背面（ソトモ）で後方。
○いちしば原　いちじろくの序。いちひ(櫟)の柴(小木)の生えた原一説芝草の繁茂した原。
○いちじろく　目に立つて。明らかに知られるやうに。
○龍田彦　大和龍田神社に祀つてある風神。
○うらさび　心がはやり進んで。
○うたて　つらくひどい。
○いとなき　ひまなき。
○あきつ羽　蜻蛉羽。薄い織物。
○あせぬ紅葉　色がさめかはることのない紅葉。
○おく霜云々　霜が寒いので柴を焚く。
○焚く柴の　しば／＼の序。

うけらが花巻四

冬歌

初冬嵐

そともなるいちしば原のいちじろく冬來にけりと吹く嵐かな

秋くれてはやくも冬は龍田彦うらさびませる今朝の嵐か

秋暮れて殘る木の葉も有るものをうたてはげしき峯の嵐か

山家初冬

山里の雲の行きかひいとなきは都も今朝やしぐれそむらむ

十月更衣

あきつ羽の袖ぬぎかへて今日よりや朽葉の色の衣かさねむ

冬のはじめ山里をとふ

散りてだにあせぬ紅葉の霜の上をふみわけて來し跡なとがめそ

冬立ちておく霜寒み焚く柴のしば／＼とはむ山陰の宿

初冬時雨

○東海寺　武藏北品川。臨濟宗。
○縣居の大人　賀茂眞淵。
○おくつき　墓。
○み山の里　御墓のある里。
○しるべにて　道案内として。
○夕づく日　ゆふ日。
○あけたたば　明けはなれたなら
○大木曾　奥十山。信濃國木曾の山々。
○山人　杣人など山に居る人。
○こきまぜ　打ちまぜ。
○山分衣　山路を踏みわけ行く時に著る衣。
○ゆく手　行くさきの道。
○笠やどり　雨やどり。

昨日しも月にうかりし浮雲の行くへや今朝の時雨なるらむ

十月二十九日東海寺の少林院なる縣居の大人のおくつきのもとに人々つどひて時雨をよめる

秋くれしみ山の里ぞあはれなる落葉がうへに時雨降りつゝ
神無月しぐれの雲をしるべにて落葉の山を分けも迷はじ

時雨晴陰

木の葉散る山路こゆれば時雨れ行くあとよりにほふ夕づく日かな

曉の時雨

あけたたば色そはるべきもみぢ葉にねざめ嬉しき村時雨かな

山路時雨

大木曾はけふも時雨や降りぬらむ麻ぎぬぬれてくだる山人
村時雨紅葉こきまぜ降るころは山分衣ほさで歸らむ

行路時雨

しぐるゝや道のゆく手の笠やどり立ち寄るほどももみぢ散りつゝ

海邊時雨

磯山の松の嵐に聞きなれて今日も時雨に袖ぬらしけり

山家時雨

我が岡の落葉まじりの村時雨さとの梢を今やそむらむ

田家時雨

五百代(いほしろ)の田づらのひつぢうちなびき伏屋の軒に時雨降りきぬ

十月十一日春海道別などとひけるにしぐれ降る夜とふ人ありといふ事を

うれしくも降りくる夜半の時雨かな笠やどりとは思ふものから

残紅葉を見る

神無月春おぼえたる長閑けさに残る紅葉を花かとぞ見る

雨岡の家にて神無月ばかりもみぢを見てといふ事を

神無月み山のもみぢ散り過ぎては山の里にさかりなりけり

神無月の八日の日安濃津の君の染井の荘へまかりて紅葉を見てよめる

世の秋の色をやこゝにとゞめけむ千入染井の里のもみぢ葉

御園生は春おぼえけり飛ぶ蝶のおもかげ見せて木の葉散りつゝ

神無月ばかり山里にやどりて

散り残る木々のもみぢをたづね來てしぐれの雲とあひやどりせり

初冬落葉

○五百代　廣い田。代は田地の廣さを度るにいふ語。
○ひつぢ　穭。刈つた株から生える稻。
○伏屋　低く地に伏したやうな小家。なびき伏すと掛けた。
○春海　村田春海。
○笠やどり云々　一時の雨やどりとは思ふものの。思ふけれど。
○神無月　陰暦十月。
○春おぼえたる　春も聯想されるやうなのどかさ。陰暦十月は、小春といふ。
○み山　奥深い山。奥山。
○は山　端山。
○安濃津の君　伊勢の安濃津卽ち(今の津市)の城主藤堂氏。
○千入染井の里　染井は江戸の西北郊巣鴨藤堂家の別邸があつた。千入に染める意をかけた。
○春おぼえけり　春も思ひ出された。
○あひやどり　同宿。

冬立つといひしばかりに染め盡すは山しげ山散りそめにけり

月の夜木の葉のちるを見て

おく霜にうつろふ月の影ながら散るもみぢ葉は夜さへぞてる

月あかき夜木の葉ちる

天つ空鏡と見ゆる月影にちりかゝるものは木の葉なりけり

關路落葉

關こゆるにひさきもりが廨ぎぬに散るはゝそばの名さへなつかし

紅葉のいたく散りたる山をこえたる所

奥山の梢の秋やいかなりしやさかつもれる色を見るにも

瀧落葉

いかばかり紅葉ちればかくれなゐるに漲りおつる峯の瀧つ瀬

河上落葉

朝日山峯のもみぢ葉散りぬめりしがらみかけよ宇治の河長（かはをさ）

落葉浮水

飛鳥風きのふもけふも吹きにけり七瀨によどむ木々のもみぢ葉

山ざとびたる所に木の葉ちる

○冬立つと云々　冬になつたと云つただけでまだ幾程も經ぬに。
○は山しげ山　は山は麓の山又生え山の義といふ、葉山にかけて草木の茂つた山のしげ山につゞけた
○おく霜云々　紅葉の上に置いた霜に月が映つて映つた月影も一しよに散る紅葉は晝は勿論夜までも照り輝く。
○ちりかゝる　鏡に塵がかゝるに木の葉の散りかゝるをかけた。
○にひさきもり　新防人。王朝時代九州の警備に徵集されてゆく兵士。三年交替で新たに召集されたもの。
○はゝそはの　柞の木の葉の。母の枕詞。
○やさか　八尺。彌十量（やそはかり）の轉で長い意。今自分の越えてゆく端山の紅葉の長く深く積つた色を見るにつけても、奥山の梢の紅葉はどんなであらう。
○紅葉ちればか　紅葉が散るによつて斯程までになるのか。
○朝日山　山城宇治。
○しがらみ　柵。流れを堰きとめる杭。
○河長　舟人。船頭。
○飛鳥風　大和飛鳥の舊都を吹く風。
○七瀨　多くの瀨。瀨々。

夕月のかげさやかなるまきの戸に木の葉の吹雪音の寒けき

閑庭落葉

むら時雨ふるごとしのぶすさみには槇の落葉もかきぞはらはぬ

庭もせに散るもみぢ葉やせきぬらむ筧の水の音だにもなし

十月ばかり物へまかりて

時雨ふり木の葉みだるゝみ山路は涙さへこそもろく散りけれ

殘菊

うつろふをいとふならひの露霜もゆるし色なるませの白菊

殘菊映水

大澤やひともとの名はしら菊のうつろひのこる色にこそ知れ

霜

百くさの名殘もとめぬ枯野さへふみわけがたき霜の初花

朝霜

有明の消えにし影を松の葉にしばし殘せる霜の色かな

金地院に遊びて霜夜聞鐘といふ事を

置きそはる瓦の松の夜の霜を更け行くかねの聲に知るかな

○まきの戸　杉檜類の戸。まは美稱。

○ふるごと云々　舊事を追懷する心の向ふたよりとして槇の落葉も掃はずにおく。時雨降るを舊事とかけた。古今集「神無月時雨降りおける楢の葉の名におふ宮の古事ぞこれ」

○庭もせ　庭も狹い程一面に。

○もみぢ葉云々　紅葉の落葉が筧の水をせきとめたのだらう。

○物へまかりて　ある處へ行つて

○うつろふ云々　花の色があせ變るのを厭ふ習ひとして露霜を嫌ふけれど、その露霜を許してゐるやうに籬に白菊が咲いてゐる。ゆるし色は何人も著用して差支ない服の色。淡い色。

○大澤や云々　古今集「一もとと思ひし花を大澤の池の底にも誰かうゑけむ」大澤の池は山城葛野郡上嵯峨。

○金地院　江戸芝山内。

○置きそはる　霜がいよ〳〵多く置き加はる。

○瓦の松　白氏文集驪宮高「牆有レ衣兮、瓦有レ松。」

杉路霜

三輪山の杉の下道おく霜にひもろぎまつる跡は見えけり

閑庭霜

別れにし昨日の秋の白露やはらはぬ庭の霜となりけむ

春海の家の會に卷頭閑庭霜を

日をさふる松の下庵朝ごとの霜の花さへさかり久しも

人跡板橋霜

朝な〳〵おく霜白き棚橋に誰が別れ路のあとを見すらむ

人のなり所にて六帖の題をさぐりて霜月を

冬だにも人め枯れせぬ園なれやあしたの霜も花をなしつゝ

木枯

この頃はいをねざりけり木枯に木の實おちくる山かげの庵

初冬木枯

立ちこめし昨日のくれの霧はれて嶺あらはなる木枯の風

寒松風

岩かどに立つやひと木の松にのみ殘る嵐の音もすさまじ

○三輪山　大和磯城郡三諸山をいふ。三輪神社がある。
○ひもろぎ　神籬。神祭の時清淨の地に常綠樹を植ゑめぐらして神座とした處。

○日をさふる　日を遮る。

○人跡板橋霜　溫庭筠の商山早行の詩「晨起動征鐸、客行悲故鄕、鷄聲茅店月、人跡板橋霜、槲葉落山路、枳花明驛墻、因思杜陵夢、鳧鴈滿廻塘。」
○棚橋　棚のやうに架け渡した橋
○なり所　別莊。
○六帖の題　古今和歌六帖の歌の題。
○人め枯れせぬ園　人の往來が疎くなることのない園。遠ざかり離れる意を草木の枯るにかけた。
○いをねざり　睡らない。

嵐吹寒草

霜寒み音だにたてぬ荻の葉をしをりにしをり吹く嵐かな

寒草帯霜

朝なさなおく霜白き翁草いたくも年の老いにけるかな

蘆花似雲

白鷺のつばさの風に散るあしの吹雪もさむき冬の河づら

冰

河上冰

筑波嶺の二をの嵐さえ〳〵て鳥羽のあふみは冰ゐにけり

ながるめる紅葉をしばしとめむとて河とや早く冰ゐにけむ

冰留水聲

鴛鴦鴨のつばさにかくる浪の音も此のごろ絶えてこほる池水

冬月

風さむみ夕霜こほる楢の葉の落葉が上をてらす月かげ

大空は嶺の嵐にさえ〳〵て軒の垂冰に月ぞうつろふ

曉寒月

○しをりにしをり　ひどくしをれさして。しなひたわめて。

○朝なさな　毎朝。

○霜白き翁草　霜置いて白髪となつた翁草。

○散るあしの吹雪　蘆の枯れた花が吹雪と散るのも寒い。

○筑波嶺の二を　筑波山の雙つの峯。男體女體の峯。

○鳥羽のあふみ　鳥羽の淡海（湖）常陸眞壁郡鳥羽村附近にその址があるといふ。

○冰ゐにけり　冰が張つてゐる。

○河と　川の渡し場。

○軒の垂冰　軒端にさがるつらゝ

昨日こそ寐ざめとひしか音たてぬ荻の枯葉の霜の月影

大御門ひらく鼓の音すみてみ橋の霜に月ぞうつろふ

霜夜月

小男鹿のしがらみふせし萩原や古枝の霜を照らす月影

寒山月

聲たてぬ嶺の男鹿の跡見ゆる霜に更け行く冬の夜の月

海冬月

箱根路や關の夜嵐さえ〳〵て月影こほる伊豆の海づら

寒流帶月

冬の夜もこほらぬみをの一筋をよすがにやどる月ぞ寒けき

家にて十一月閑庭冬月を

枯れわたる庭の芝生の霜の上に更け行く月を見む友もがな

冬の夜月あかきに賀茂にまうでてといふを題にて

山藍にすれる袂の霜さえて月影こほる賀茂のみたらし

霜ふり月九日金地院に遊びてかへらむとしける時庭のもみぢ散りて月いとあかし

○昨日こそ云々　昨日は荻の葉が風に音をたてて寐覺を訪ね來た、今日は最早枯れて音も立てない。

○大御門云々　城の門を開く合圖に打つ太鼓。

○しがらみふせし　からみつけて臥した。拾遺集「さを鹿のしがらみふする秋萩は下葉や上になりかへるらむ」

○男鹿の跡　男鹿の足跡。

○寒流帶月　和漢朗詠集「寒流帶月澄如鏡、夕吹和霜利似刀」白樂天。

○みを　水脈。船の往來する深き水路。

○よすがに　たよりとして。

○月あかきに　月が明らかである時に。

○山藍にすれる袂　山藍で模樣を摺つた衣の袂。

○みたらし　神拜の時みそぎをし手水をつかふ所。轉じて神社の近くで御手洗をする川。

○霜ふり月　陰曆十一月。

もみぢ葉のちる木のもとに弓張の月のかげさへ引きぞとゞむる

神無月に閏ありければ

更に猶神無月とし聞くなれどわかれし秋は遠くもあるかな

椎柴

木枯にたへぬ木の葉をよそに見て殘るもさびし嶺の椎柴

山里に椎ひろふ

今朝見れば我がゐる山の木枯に落ち椎ひろふ里のあげまき

尋千鳥

浦づたひとめつゝ行けど大淀の松よりつらき友ちどりかな

夜千鳥

伊豆手舟今やよすらむ小夜更けて入江のかたに千鳥しばなく

泊千鳥

百舟のはつるとまりの友千鳥立居いとなき聲ぞ聞ゆる

旅のとまりに千鳥を聞く

難波津を漕ぎ出でし日の友千鳥幾夜ねざめをとひ馴れにけむ

水鳥

○わかれし秋　陰暦十月即ち神無月が終つて秋に別れたのをいふ。
○木枯に云々　木枯の吹き荒ぶに堪へられないで散る木の葉。
○椎柴　椎の木の叢生せる林。椎の木は常綠樹だから散る木の葉をよそに見てといつた。
○落ち椎　落ちた椎の實。
○あげまき　小兒の髮の結ひ方の名。轉じて幼童。
○浦づたひ云々　浦から浦へと傳つて千鳥を尋ね求めつゝ行く。
○大淀云々　新古今集「大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる波かな」大淀は伊勢多氣郡。つらきはつれない冷淡な。
○伊豆手舟　十挺艪の舟、十人漕ぐ舟。一說伊豆國から造り出す舟。
○しばなく　しきりに鳴く。
○はつるとまり　舟が行きついて碇泊する港。
○いとなき　暇なき。いそがしい。休むまのない。
○漕ぎ出でし云々　漕ぎ出てからの友となつた友千鳥。友千鳥は群れゐる千鳥。

山河ははやく冰やとぢぬらむ里わの水に鴨ぞ羣れゐる

網代

大君のみけに供ふる冰魚(ひを)なれば網代守るおぢが業ぞかしこき

網代寒

網代人ころも手寒し川上の田上山(たなかみやま)にあらし吹くころ

落葉留網代

もみぢ葉のよるなる時は里の名を身にはしらじな網代守る人

網代にもみぢ寄りたるかた

橋姫のこがるゝ袖の色なれや瀬々の網代に寄するもみぢ葉

賀茂臨時祭

さゆる夜に大ひれうたふ宮人の袖吹きかへす賀茂の河風

霜さやぐ御階の竹のませのもとよにおもしろき神遊びかな

千はやぶる賀茂の御手洗音そへて東遊の聲のさやけさ

昨日かも葵かざしし宮人の山藍の袖に霜ぞおきける

霰

刈り残すおくての稲葉打ちなびき田の面遙かに霰ふる見ゆ

○里わ　里のほとり。
○大君のみけ　主上の御食事の料
○網代守るおぢ　網代の番をしてゐる老翁。網代は竹木を編み簀をあて宇治川で冰魚を捕るもの。
○かしこき　神聖で勿體ない。
○網代人　網代もる人。
○ころも手　袖。
○田上山　近江。
○里の名云々　網代の名所宇治といふ名即ち憂といふことを身には知るまい。
○橋姫　山城宇治橋を守る女神。袖中抄に橋姫とは姫大明神とて宇治の橋下におはする神云々。古今集「さ筵に衣かた敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」
○賀茂臨時祭　十一月下の酉の日
○大ひれ　東遊の於保比禮「おほさおれやをひれの山はよりてこそよりてこそ山はよらなれやとほめはれこ」
○ませ　ませ垣。籬。
○神遊び　神樂。
○千はやぶる　神又は社の枕詞。賀茂の社にかけた。
○東遊　東國の風俗歌に合はせて舞ふ舞の名。
○宮人　神に仕ふる人。

雪いさゝか降れり

いさゝめにはだれ降りけり春鳥の羽風にちらふ花と見るまで

朝に初雪を見る

今朝見ればねぐらを出づるむら鳥のつばさまだらに初雪ぞふる

朝戸あけて見れば嬉しも橘の下照る庭にみ雪ふりけり

十二月十五日初雪降りけるに鶯の來たりければ

春かけてかれずかたらへ初雪に跡つけそむる庭の鶯

嶺初雪

箱根路や雲の絶間に見渡せば初雪ふれり峯の岩角

越の姫君の會に、橋上初雪を

初み雪まだあさむつの橋の上に今朝しも誰か跡つけぬべき

雪のあした

片山のまきの葉しのぎ降る雪に翅にかけて立つ鴉かな

雪似白雲

箱根山所もさらぬ白雲はこの頃つもる雪にざりける

遠山見雪

○いさゝめに　假初に。僅かばかり。
○はだれ　まだらに降る雪。はだれ雪。
○ちらふ　散るの延。
○むら鳥　群る鳥。
○橘の下照る庭　橘の實が色づいて庭に照り映るをいふ。萬葉集「橘の下照る庭に殿たてて酒みづきいますわが大君かも」
○かれず　絕えないで。疎くならないで。
○まだあさむつの橋　まだ朝六つ（夜明け）に越前國足羽郡淺水（あさうづ）の橋をかけた。朝六、麻生津。
○片山　片かはの山。
○まき　まは美稱。杉檜などを總稱してまきといふ。
○所もさらぬ白雲　同じ所にゐて去らぬ白雲。古今集「風吹けど處もさらぬ白雲は世をへて落つる水にぞありける」
○雪にざりける　雪にぞありけるの約。

見渡せば降りつむ雪を有明の月にみがける多摩の横山

雪滿羣山

出づる日の光にむかふ武藏嶺やをみねことごと雪ぞさやけき

關路に雪ちれり

見渡せば須磨のうしろの山風に雪うち散れる關のあらがき

關路朝雪

朝ぼらけ關路こえ行く東人の荷前（のざき）の箱に雪ぞつもれる

樵路雪

山がつの春のまうけの爪木には降る雪さへも花と見えけり

雪道をうづむ

あはれしる人やわけけむやさか積むゆふべの雪に跡もありけり

古渡雪

まくらがの古河のわたりを朝わたり河瀨にふれる雪を見るかな

孤島雪

伊豆の海にひとむら消えぬうたかたやみ雪つもれる浦の初島

禁中雪

○多摩の横山　武藏多摩川の南に東西に亙る丘陵。みがける注さかけた。
○雪滿羣山　和漢朗詠集「曉入梁王之苑、雪滿羣山、夜登庾公之樓、月明千里。」
○武藏嶺や云々　武藏嶺は武藏國秩父の諸山。をみねは小峯。をは接頭語。ことごとは悉く。萬葉集「武藏嶺のをみねみかくし忘れ行く君が名かけてあをねしなくなる」
○荷前　諸國からの貢物の初物を運びて伊勢神宮其の他諸社陵墓に幣物として獻られること。
○山がつ　山賤。樵夫。
○春のまうけの爪木　春の用意の薪。爪木は薪木にする折枝。
○やさか　八尺。長さの長いことやさか積むは高く積る意。
○ゆうべの雪　昨夜の雪。
○まくらがの古河　下總國古河。まは接頭語。久良我は古河の渡の地名。わたりは渡津。
○うたかた　水沫。暫くの間。

かさゝぎの御橋の雪にあとつけて雲居にのぼる心地こそすれ

禁庭雪

もゝしきや御階の櫻春またで咲くかと見ゆる今朝の雪かな

神社雪

鹿島潟神のみむろにうちよせてかへらぬ浪は雪にざりける

武藏なる冰川の森に雪つもり八重垣こもる神の御社

古寺雪

さゞ波や比良山風のはやければ横河の寺にみ雪散るなり

遠村雪

今朝見れば里はありけり遠かたの雪に折れふす篁の奥

里雪

生駒山嶺の木枯音絶えて雪しづかなる秋篠の郷

市雪

朝ぼらけ何に換へましひんがしの市の植木につもる白雪

山家雪

吾が岡にみ雪降りけり玉だれの小簾かゝぐらむ都方人

○かさゝぎの御橋　七夕に鵲が天の河に架ける橋に擬して禁中の御階。
○雲居　大空。禁中。
○もゝしき　皇居。禁中。
○春またで　春になるのを待たないで。
○みむろ　御室。神を安置し奉る室の義で神社をいふ。
○冰川　武藏北足立郡大宮町の北に冰川神社がある。
○八重垣　幾重にも作った垣。
○さゞ波や　近江及琵琶湖附近の地名に冠らする枕詞。さゞ波のより轉じて近江の比良山に枕詞とした。
○横河　比叡山延暦寺三塔の一。近江滋賀郡横川谷の堂塔。
○篁　竹の林。竹藪。
○生駒山、秋篠　大和生駒郡。
○玉だれの小簾　玉で飾った簾。雪に簾かゝぐといふは清少納言の故事。

山里に住む人雪の降れるを見る

花見むと入りにしものを降りつもる雪も世に似ぬみ吉野の奥

雪のふる日山里をとふ

いざとはむ今日降る雪に吉野山入りにし人も待たずやはある

待つらむと來しかひありや信樂(しがらき)の外山の雪に戸ぼそあけたり

山里の雪のあしたまらうど門に有る處

立つ松のこずゑの雪をしをりにて跡つけそめし三輪の山本

田家雪

東路の荷前(のさき)も過ぎて年深き田ぶせの雪ぞしづけかりける

ぬひ子が家にて、閑居雪を

立ちよれば猶柴の戸はさしながらかごとがましき松の雪かな

名所雪

見し花の面影さらぬ吉野山かをるばかりの雪の曙

滋賀の山越に雪の降りたりければ

小車のあとだにもなし白雪のふるき宮路の志賀の山ごえ

車中雪

○入りにし人云々　吉野に入つた人も吾を待たないものか必ず待つてゐるだらう。義經記「吉野山峯の白雪ふみわけて入りにし人のあとぞ戀しき」

○信樂　近江甲賀郡信樂。

○しをりにて　栞として。

○三輪の山本　三輪山の麓。大和磯城郡三輪村の東。古今集「わが庵は三輪の山もと戀しくはとぶらひ來ませ杉立てる門」

○荷前　諸國の貢物の初物を選んで伊勢神宮はじめ諸社陵墓に幣物として獻られること。

○田ぶせ　田の中のふせ屋。

○ぬひ子　菱田縫子。

○柴の戸はさしながら　柴の戸は鎖しておきながら。

○かごとがましき　門を開けぬのを雪にかこつけたらしく松に雪が積つてゐる。

○ふるき宮路　白雪の降るに古き宮をかけた。古き宮路は天智天皇の都された古き都滋賀の宮へ通ふ路。

○志賀の山ごえ　滋賀里から志賀山を越えて山城白川村に出る所謂山中越。

たそがれのしのび車のすき影もおもなきばかりつもる雪かな

花とちる大路の雪を小車の小簾かゝげつゝ見る人や誰

うち日さす宮路の雪にあぢまさの車静けきあさぼらけかな

馬上雪

花ならば跡も香にやにほはまし雪ふみわくる甲斐の黒駒

雪を見てしづかに行くに馬のおそきにまかせたり

花とめで月と見つゝぞあくがれぬいそがぬ駒のゆきのまに〳〵

雪降りたるに人々舟にのりて行く

隅田河夕こぎ渡り筑波嶺の端山につゞく雪を見るかな

月雪の夜舟に乗りて人のもとを訪ふ

明けぬとてこぎはかへらじ月雪にまさりて思ふ友を訪ふ夜は

雪中遠情

橋立や聞きわたりこしおもかげも心にかゝる今日の雪かな

雪の中に遠かたをおもふ

秩父山甲斐が嶺かけて降る雪を隅田河べに誰か見るらむ

雪明兆望

○しのび車　人に知られぬやうに隠れて乗つてゆく車。
○おもなき　恥かしい。

○うち日さす　宮の枕詞。
○あぢまさの車　檳榔毛の車。

○香にや云々　香に匂つたでもあらう。
○甲斐の黒駒　昔、甲斐國から良い馬を産したのでいふ。
○花と云々　雪を花と賞玩し月と眺めつゝ心奪はれて我を忘れた。
○ゆきのまに〳〵　駒の行くまゝに。行きに雪をかけた。
○筑波嶺の端山　筑波山の麓の山

○明けぬとて云々　夜が明けたからと云つて漕ぎ歸らない。

○橋立　丹後與謝郡宮津の西。
○聞きわたり云々　永い間評判に聞いて今まで續けて來た。
○心にかゝる　かゝるは橋の緣語

隅田河くだすいかだをよすがにてみ雪ながるゝあさぼらけかな

雪朝遠望

眞柴たく煙のみこそ埋もれね河よりをちの雪のあけぼの

雪の山をつくりて

春かけてあらそひ殘れ吾が園に雪もてつくるうねび耳なし

竹に雪の降りかゝれる所

たかむらやねぐらの鳥の立つかたにこぼるゝ雪も面白きかな

雪の木に降りかゝりけるを

白妙にみ雪ふりけりをちかたの野守が門の葉びろ熊樫

見渡せばこと木より先づ枝たれて雪重げなる庭のゆづるは

ぬひ子が家の贈答會に竹に雪のかゝれるを折りて人に

君訪はばまがきの竹のよと共に雪とつもれる言つくさまし

人の家に女簾垂のもとに立ちいでて雪の木に降りかゝれるを見る

冬ごもり人待つ閨の空だきを梢の雪の花にかさまし

杣山に雪ふれり柴人かへるかた

折りそへし高ねの花と見るばかりしづが爪木につもる雪かな

○よすがにて　よりどころとして

○眞柴　柴。眞は美稱。
○をち　彼方。遠い所。

○春かけて　冬から春に亘つて。
○あらそひ殘れ　萬葉集「香具山は畝傍ををしと耳梨と相諍ひき云云」
○たかむら　篁。竹の林。

○野守　野の番人。

○こと木より　他の樹よりは。
○ゆづるは　交讓木。ゆづりは。

○よと共に　竹の節に夜をかけた夜を盡すと共に積る言を語り盡さう。

○空だき　香爐を隱し置いて室に香をたきしめること。

○爪木　薪木にする折枝。

雪高う降りたるに蓑きたる人ひとり柴橋渡らむとする所

雪深み今日來む人をあはれとて河よりをちに誰か待つらむ

雪のあした入江に釣する人あり

花とのみ入江の松に散る雪は思はぬ今日の幸にぞ有りける

火桶のもとに人々ゐて雪のいと高く降れるを見る

白雪はやさか降りけり埋火のおきゐてつもる物語せむ

頭白き翁ある所に雪降る

はやくより頭にふれる白雪を梢にのみと思ひけるかな

しはす十六日雪ふりける日くめ子が故郷を思ひ出でて「なにはがたあしのまろやのいかならむ八重に降りつむ今日のしら雪」とよみしといひおこせければ

難波潟蘆屋の雪も君見ずてふるかひなしと世をやわぶらむ

雪中待春

厭くよなき人の心の花と散る雪にも花の春をまちつゝ

晴雪落長松

軒よりたるひのしづく落ちそめてやがてこぼるゝ松の雪かな

○柴橋　小さな雜木で架けた橋。

○雪深み云々　雪が深いから今日この雪にも拘らず來る人を特別心深く感じて河の彼方に誰が待つてゐるだらう。

○花とのみ　花が散るとしか思はれない雪。

○幸　獲物。花のやうな雪げしきは釣する人の獲物である

○やさか　八尺。長さの長いことを雪の深いに云つた。

○つもる　雪の緣語。

○あしのまろや　蘆で葺いたかりそめの小屋。

○世をやわぶらむ　雪が折角降つてもあなたが見て下さらないので降つたかひもない事だと世をつまらなく思つてゐるだらう。

○たるひ　垂氷。つらゝ。

野行幸

雪ふればあけもみどりもおしなべてむら濃に見ゆるみ野の狩人

大野にみかりするかた

大空に紅葉ふきまく鷹すゑて狩るや交野(かたの)のみ野の朝風

鷹狩

衣手にきのふは摺りし小萩原朝立ちならしとがりするかな

はなちやる手なれの鷹にさき立ちて心空なるますらをの友

雪のあした鷹狩したる所

宇陀の野やとだちもわかずはだれ降るあしたの雪にきそふ狩人

女の家に狩する男來れり

玉かづらかからざりせばまれにだに逢ひもかた野のみ野のかり人

連日鷹狩

かり衣冬立ちしより宇陀の野の時雨に雪にぬれぬ日もなし

炭竈雪

炭竈や雪の下折れ中々に煙となりてあらはれにけり

冬ごもりしたる家

○あけ　赤。
○おしなべて　一樣に。
○むら濃　同じ染色の所々濃い所淡い所あるもの。
○み野　みは美稱。特に天子の御狩し給ふ禁野。
○交野　河内國北河内郡。古の遊獵地。
○きのふは摺りし　昨日は衣に萩の花摺をした小萩の原で、今朝は立ち馴れて鳥狩をする。
○宇陀の野　大和宇陀郡。
○とだち　狩場で鳥の飛びたつこと。
○はだれ降る　まだらに降る。
○玉かづら　掛くの枕詞。
○かからざりせば　かくなかつたならば。狩などなかつたならば。
○逢ひもかた野　逢ひ難き。交野を掛けた。
○かり衣　狩の衣。冬立ちしは裁つにかけて衣の縁。
○雪の下折れ　雪が積つて枝などが折れること。

人訪はばやどの埋火かきおこし思ひおこして昔かたらむ

爐火似春

小野山やまだきかすめる炭竈のなごりのどけき閨の埋火

山家如春

冬ごもり焚くや眞柴の夕煙かすむ軒端に梅も咲きつゝ

神樂

榊葉にうち散る雪も皇神のみそなはすがに御火白くたけ

奥山の榊が枝を雪ながら手草にとりて神あそびせり

汲みてしも神ぞ知るらむ大原やせがゐの水の清き心を

禁中神樂

宮人の豊の遊びは更けにけりとるや手草に霜のおくまで

佛名

一年の罪もこよひにつくし綿かづきつれつゝかへる法の師

佛名おこなふ家

降り積る雪を分けこし山伏の春おほゆらむ柏梨（かへなし）の酒

木々も皆綿かづけけりみほとけの名を唱ふなる庭の白雪

○小野山　山城愛宕郡小野郷の山
○まだきかすめる　春にならぬに早くもかすんでゐる。炭燒く竈の煙にかすむのをいふ。
○みそなはすがに　御覧になるために。
○御火　御燎。
○白くたけ　著く(しるく)たけ。はつきりとあかるく焚けよ。
○雪ながら　雪のついたまゝ。
○手草　歌舞の時に手に執り持つもの。
○神あそび　神樂。
○せがゐ　山城乙訓郡大原野に清和井の清水がある。神樂歌杓「大原や清和井の清水杓もて鳥は鳴くとも遊びてを汲め遊びて行かむ」
○豊の遊び　宮中の御饗宴の遊樂
○佛名　佛名會。陰暦十二月十九日から三日間禁中で佛名經を讀み罪障懺悔する佛事。
○つくし綿　筑紫綿。盡すをかけた。佛名會に僧に綿をかづけ物とする。
○かづきつれ　かづけ綿を頭にのせて連れ立つて歸る。
○柏梨の酒　佛名會終つて攝津國柏梨の莊から獻じた酒を賜はる。

佛名のあした別るゝ空に

北山の室の戸ぼそをあけたたば霞やいとゞよそに隔てむ

年内早梅

世の外の宿にも梅の花のみぞよそのいそぎに誘はれにける

歳暮近

年月もいつしか春にゆづるはを折りもてはこぶ遠の里人

年のくれに

年なみの淀まねばこそ立ちかへる春をもあまた待ちなれにけれ

春を待ち年を惜しむも一年(ひととせ)の心ずさみのとぢめなりけり

來るを待ち行くを惜しみて昔より思ひさだめぬ年の暮かな

海邊歳暮

年浪は立ちかへるとも來む春をはやうち寄せよ沖つ汐風

ま帆かけて風にまかする浦舟のたゞ過ぎにのみ過ぐる月日か

都歳暮

海山の千々の貢もおのづからつどふ都の年の暮かな

家々歳暮

○北山　山城葛野郡衣笠村。
○あけたたば　夜が明けてしまつたら。戸ぼそを開けるにかけた。

○ゆづるは　春に讓るをかけた。交讓木。新年の飾りにと遠い里人が都に運ぶ。

○年なみ　年次を浪にかけて水の淀むとつゞけた。

○來るを云々　來る年を待ち行く年を惜しみ。

○年浪　年次は立ちかへる。立ちかへるは浪の縁語。うち寄せるも浪の縁語。
○ま帆かけて　帆を風の正面に向けてかけて。

家ごとに春待つ色の梅柳きぬもてはこぶ時は來にけり

閑中歳暮

とく過ぐる大かたの世の年月にいはほの中はならはずもがな

こと更におくりむかへぬ宿にしも行きかふものは年にざりける

歳暮松

舟岡やふりし子の日の老木さへみ雪の下に春を待つらむ

豐年のしるしの雪をつみそへて遠山松をはこぶ頃かな

年くれて竹ある家

くれ竹のしげみが奥に鶯と共に春待つやどりなりけり

年の暮に山より爪木こりて出でたる所

雪ふかきみ山にこれる爪木まで明日や都に春を知るらむ

年の暮に友をとふ

月にとはれ雪にとひつゝ年くれぬ明日は子の日にいざといはまし

年のはて雪

白雪は八尺積むとも行く年の跡だに見えば追ひしかましを

年の暮に人のもとへ

○梅柳云々　春の用意に梅がさね柳襲の衣を持ち運ぶ時になつた。

○いはほの中　岩山の中。古今集「いかならむいはほの中に住まばかは世の憂き事は聞えこざらむ」

○年にざりける　年にぞありける

○舟岡　山城愛宕郡紫野の西にある丘陵。

○子の日　古正月子の日に野外に出て小松を引いて千代を祝つた行事。

○豐年　五穀のよく實る年。

○これる　伐り採つた。

○月に云々　月が明らかだと云つて訪はれ雪が面白く降つたと云つて此方から訪ひつゝ互に訪ひつ訪はれつして一年經て年も暮れた。

○八尺　長さの長いこと。八尺積むは高く積る。

○追ひしかましを　追ひ及はうものを、年は果てて跡も見えない何とも致方がない。

行く年を同じ心に惜しまなむむかしの花の春ならずとも

年の暮に女のもとへ衣調じてやるとて

花鳥の春にあひ見む嬉しさをつゝむばかりにたてる衣なり

しづけき所にうつろひし年の暮に

世の中のいそぎにもるゝ人とはば柴の戸あけむ年のとぢめに

つかへをしぞきしよりかく世の外にありふるもいくらばかりの年月にか
おくりむかふるわざもなければたゞ

かへるとも行くとも年を思はねば心はとはに老いせざるらむ

身をおのがものとなしつるよりかかる大御代にあひてしづかにこゝらの
年をふるたのしさをおもへば暮れ行くきはみとてさらによはひのつもる
をわびしとしも思ひたらずされど人まねに歌よまずやはとてかくなむ

花もみぢあくまでめでし年月をたゞに過ぎぬと思ひけるかな

きさらぎに閏ありける年の暮に

としとのみ思ひけるかな花ちれる河瀬に春のよどもありしを

歳暮祝

うき事も知らでふる世に何をかもなやらふ聲の四方にきこゆる

○惜しまなむ　惜しまうよ。
○嬉しさを云々　嬉しさを袖に包み慎むといふだけに裁ち縫つた衣である。
○世の中云々　世俗の年末いそがしさに漏れて閑靜な我を人が訪ひ來たらば柴の戸を開けて迎へよう年のとぢめは年の終り。戸の緣語。
○つかへをしぞき　退職。
○かへるとも云々　年がかへつて新年になるとも思はず、年が暮れてゆくとも思はないから身は老いても心は永久に老いない。
○おのがもの云々　辭職して閑散な身となつて。
○こゝらの年　多くの年。
○わびしとしも云々　つらいいやな事だとも思つてゐない。
○きさらぎ　陰暦二月。
○としとのみ云々　年月の過ぎるのを疾いとばかり思つたが春も滯り淀んで閏があつたのに。
○なやらふ聲　追儺、鬼やらふ聲十二月晦日の夜鬼に扮裝した者を追ひ遣る年中行事。

山家冬深

吾が門の眞榊折りてくだるなり今ぞ都に里神樂する

春漸近

たかむらにつばさならはす鶯も春待ちがほに見ゆるころかな

ぬひ子が贈答の會に五節の夜人のもとへ

をとめ子がけふ髮あげのからを櫛さして誰をか思ふとは知る

追儺

宮人のけふ引く桃のたつか弓花さく春にいるにぞありける

ぬひ子が家の贈答會に節分の夜方たがへに來たる人に

めぐりあふ今宵一夜をかぎりにて明日やわが身もふるされぬべき

家にて歌よみけるに家々除夜を

來る春をほどにつけつゝ待つ夜かな玉しかましと思ふばかりに

冬星

東屋の軒の垂冰にうつろへる光も寒きあかぼしの影

冬夜山

箱根山夜半に越え行くはゆまぢの鈴の音さゆる木枯の風

○眞榊　眞は美稱。
○くだる　山を下る。
○里神樂　諸神社に行はれる神樂　內侍所の御神樂に對していふ。
○たかむらに云々　竹藪の中で飛ぶことを習ふ。
○からを櫛　唐櫛。美しい櫛。をは接頭語。
○さして　誰をさして。櫛をさしてにかけた。
○追儺　十二月晦日の夜の鬼やらひの年中行事。今節分にする。
○桃のたつか弓　手に執れる桃の弓。追儺の式に殿上人が鬼を桃の弓葦の矢で射て追ふ。
○春にいる　春に入る、弓を射るをかけた。
○方たがへ　外出する時にその方角が天一神の居る所に當ると他所に宿して方角をかへてゆくこと。
○ふるされぬべき　明日はもう老人として疎み隔てられるだらう。
○ほどにつけ　身分に應じて。
○玉しかまし　玉を道に敷いて春の來るのを迎へようと思ふ。
○あかぼし　明星。
○はゆまぢ　驛馬の通る路。驛路。

東人の荷前やいそぐ夜をこめて駒引きすぐる足柄の山

冬野やく所

小男鹿の花妻かれし思ひもや野路の煙に立ちそはるらむ

冬海

見渡せば霰降りけりわたつみのかざしにさせる玉も散るがに

冬田

おしなべてひつぢ生ひつゝ冬淺き田の面は今もみどりなりけり

松子のもとにて冬の田を

しづけさに心をよせば小山田の秋くれてこそとふべかりけれ

この庵はにひほりの田の面にむかひたればなり

田づらにひつぢ生ひたり

ほに出ねば刈る人をなみ中々に小田のひつぢぞうらやすげなる

屏風の繪に冬武藏野に旅人立てり

いづこにかゆかりもとめむ紫の根はふ大野も枯れわたるころ

刀禰川冬

伊香保風いかに吹けばか刀禰川の瀨にすむ鳥の聲の寒けき

○荷前　諸國の貢調の初物を伊勢神宮其の他諸社陵墓に幣物として奉られること。荷前やいそぐは荷前の使が急ぐのであらうかの意。
○夜をこめて　前の夜からかけて
○小男鹿の花妻　萩をいふ。
○かれし　遠ざかり離れた。萩の枯れるに掛けた。
○思ひもや云々　思ひも煙に立ち添はることだらう。思ひのひに火をかけこ煙の縁語とした。
○わたつみ　海神。
○ひつぢ　稻を刈つたあとに出る芽。
○にひほり　新堀。武藏北豐島郡。今は日暮里といふ。
○ほに出ねば　穗に出ない、高くあらはれ出ないから。
○刈る人をなみ云々　刈る人がないので却つて穭(ひつぢ)が心やすさうである。
○ゆかり求めむ　何處に緣を求めて旅の宿りをしようか。古今集「紫の一本ゆゑに武藏野の草は皆がら哀れとぞ見る」によつて紫のゆかりといふ。
○伊香保風　伊香保を吹く風。伊香保は上野群馬郡。

冬木

夜もすがら嵐吹きしく椎がもと落つる木の實の音ぞひまなき

花の春もみぢの秋も白橿の知らで幾冬みどりなるらむ

冬禽

霜寒き萩の古枝にうち羽ぶき春待ちがほの野路の鶯

冬獸

雪に訪ふ庵まぢかくなりぬとは門守る犬の跡にこそ知れ

大比叡や檜原の吹雪寒ければ横川のほらにましら鳴くなり

冬玉

主しらぬかざしの玉と思ふまで散るや霰もあはれとぞ見る

冬莚

橋姫の袂やいとゞさむしろに吹きかよふらむ宇治の河風

冬眺望

隅田河岸のむらあし枯れふして甲斐が嶺遠き雪を見るかな

人のもとにて、冬祝

武藏の海沖つ洲先に住む千鳥羣れつゝ千代をよぶや誰がため

○吹きしく　頻りに吹く。
○椎がもと　椎の木の下。
○うち羽ぶき　羽ばたきして。
○大比叡　比叡山の四明嶽の東北に聳えた大嶽。
○横川　比叡山三塔の一。近江横川谷。
○ほら　洞穴。
○ましら　猿。
○橋姫　山城宇治橋を守る女神。袖中抄「橋姫とは姫大明神とて宇治の橋下におはする神」古今集「さ莚に衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」
○さむしろ　袂や寒きを狹莚とかけた。
○むらあし　叢蘆。むらがり生えた蘆。
○甲斐が嶺　甲斐國の山々。
○洲先　砂が堆積して水面にあらはれて崎となつて出てゐる所。

うけらが花巻五

戀歌

初戀

露しぐれ染むるもみぢの初しほやこがれはつべき初めなるらむ

忍戀

岩がねのこゞしき山をふみ初めて苦しかるべきわが行くへかな

互忍戀

とことはに絶えじとぞ思ふ水無瀬河した行く水の人しれずして

見戀

もらさじの心くらべも月日經ばいづれか先に色に出でまし

聲をきく戀

秋風の立つや野末のはたすゝきほの見しよりもみだれ初めてき

夕ひばり聲のみ聞きて戀ふるともうはの空にや思ひなすらむ

白地戀

○露しぐれ云々　露が染め時雨が染める紅葉の最初の一染めが赤く焦れるやうになる初めであらう。焦るに戀ひ慕ひ惱む意をかけた。
○岩がね云々　岩の根の嶮しい山を履み初めた。
○こことはに　永久。
○水無瀬川　砂の下を流れて水が表に見えぬ川。萬葉集「戀にもぞ人は死にする水無瀬川下ゆ吾瘦す月に日にけに」
○心くらべ　意氣張づく。根競べ。
○はたすゝき　薄の穗が旗のやうに靡いてゐるのをいふ。又ほの枕詞。
○ほの見し　ちらと見た。薄の縁で穗に掛けた。
○うはの空云々　あてにならぬ事と思ふだらう。
○白地　かりそめ。

染めつくす峯の紅葉をいづる日のあからさまにし逢ふは逢ふかは

通書戀

なか〳〵に淺しと人に見ゆやとて思ふ心はつくさゞりけり

忍通書戀

陸奥のしのぶの浦の濱千鳥あとなとゞめそ寄する白浪

見書戀

我が中は木曾のかけ路にあらなくにふみ見るさへもかしこかりけり

返書戀

とにかくに人の心のあら小田はかへす文にて思ひ知られつ

別無書戀

沖つ浪立ちわかれても濱千鳥跡だに見えば何かなげかむ

祈戀

今はたゞ思はじと思ふ心にもなりねと神に祈るばかりぞ

祈經年戀

葉がへせぬ柏の社に年へてもつれなかれとは祈りやはせし

祈不逢戀

○あからさま云々　日の赤いにかけた。つい一寸かりそめに逢つたのは逢つたと云へるものか。

○なか〳〵に　心のあるたけを盡して書いては却つて淺い心だと戀人に見られるかと。

○しのぶの浦　岩代信夫郡安達郡邊で阿武隈川の淀んで浦をなした所があつたらしい。所在不明。○濱千鳥　跡といふ爲の序詞。鳥の跡は文字。

○かけ路云々　棧道でもないのに踏んで見るまでも恐ろしい。踏み見るを文見るにかけた。

○人の心のあら小田　かの人の心がないことはこちらの送つた文を返したによつても知られる。かへすは荒田を鋤きかへすにかたけ。

○濱千鳥云々　濱千鳥が立ち別れても鳥の跡卽ち文字筆跡だけでも見られるなら何を歎かうに。

○心にもなりねと云々　心になれよと神に祈るだけである。

○柏の社　京都千本五辻の邊を柏野といふ柏野社は今不明、貫之集に見ゆ。葉がへせぬかへは常綠で落葉しない襟とつゞけた。

稀にだに逢ふ夜なきかな木綿襷かけても神にさやは祈りし

馴不逢戀

逢ひがたきしらべよいかに爪琴の馴るゝばかりを息の緒にして

遇不逢戀

露けさは同じあしたのきぬ〴〵を我のみかくぞくたしはてぬる

船中馴戀

河舟のうきたる中も水馴棹見なれて後やこがるべらなる

疑戀

思ふてふ人の心のあらましを見はてむ世まで在りへてしがな

互疑戀

白雪の花とあざむくならはしに花をも雪と思ひけつらむ

疑眞僞戀

花は散り雲は消えなむ後までもそれかあらぬと猶や辿らむ

或ときはあらじと思ひさのみはと辿るや遂のほだしなるらむ

來不留戀

人ごゝろうきたる雲や吾が山にかゝると見るもとまらざるらむ

○木綿襷　かけての枕詞。かけても は決して、ちつとも。

○さやは云々　左樣には逢ふ夜ないやうにとは少しでも祈つたらうか。

○爪琴　琴をいふ。琴彈き馴れるを妻に馴れるにかけた。

○息の緒　玉の緒。命。

○くたし云々　朽ちさしてしまつた。

○水馴棹　水馴れた舟の棹。見馴れの序。

○こがるべらなる　焦るべきであらう。焦る、漕がるに掛けた。

○あらまし　心あて。豫期。

○白雪云々　白雪が花のやうに人に見せるから花が咲いたのも之れは雪だらうと思ひ消す事だらう。

○それかあらぬと　散つて後消えて後までも花であらうか雲であらうか、それとも花や雲でないだらうかと。

○或とき云々　或時は左樣は眞實でもあるまいと思ひ又さうむやみに僞りでもあるまいと尋ね迷ひ行くのが最後に心の絆となるであらう。

逢約戀

たのめずてあふよあらなむ契りしにたがふを常のならひなりせば

待戀

かひなさに思ひやまずて山寺の幾夜の鐘をかぞへ來ぬらむ

待空明戀

しのゝめの明けずばいつを限りとかたのめしまゝに待ちわたるべき

逢戀

今宵しもあふくま河の埋木の朽ちせぬかひはありとこそ知れ

さゞなみの志賀の大わたよどめりし恨みもなしや今宵あふみは

うつゝとは思はざりけり夢にのみあひ見しほどの心ならひに

契戀

昨日まであふにかへつる命もて行末とほくなどちぎるらむ

飛鳥川あすの淵瀬もしらなくにながれての世を猶たのむかな

山松の千とせまでこそかたからめ葉がへぬ色を猶やちぎらむ

契逢戀

契りしにたがはぬ夜半はなか〳〵にかたみにいはむ言の葉もなし

○たのめずて云々　賴みに思はさないで、逢ふといふことをあてにさせないで逢ふ時がありたい。
○かひなさに　待つてもかひがないからといふので斷念することもなくて幾夜を待ち明かした。
○しのゝめの　明くの枕詞。又、東雲、明方をいふ。
○たのめしまゝ　あてにさせたまゝ。
○あふくま河　逢ふ隈川。逢ふをかけた。新古今集「君が代にあふ隈川のうもれ木も氷の下に春を待ちけり」
○さゞなみ云々　萬葉集「さゞ波の志賀の大わた淀むとも昔の人にまたも逢はめやも」あふみ近江に逢ふ身をかけた。
○心ならひ　心なれ。思ひなれたくせ。
○あふにかへつる　命にかへても逢はうとした。古今集「命やは何ぞは露のあだものを逢ふにしかへば惜しからなくに」
○飛鳥川云々　古今集「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀨になる」流れての世は末の世流れては川の緣語。
○契りし云々　約束の通り逢つた夜は却つて互に言ふ言葉もない。

互契逢戀

待つらむと思ふもしるき空だきをかたみにしめし夜を忘れめや

契來世戀

目に見えぬ來む世をかくる愚かさも知られぬばかり思ひなりにき

稀逢戀

隈もなく月澄む夜半の星なれや稀なる中に思ひ消ゆらむ

夢逢戀

逢ふと見し夢のたゞぢをとありけむかく有りけむと思ふはかなさ

夢中逢戀

逢ふと見て夢路にかわく袖の露さめてぞ更に置きまさりける

ことならばかたみにかへむよしもがな逢ふてふ夢と逢はぬうつゝと

寤中逢戀

あふくまの名を頼みこしかひ有りて心の奥も今宵こそ見れ

誓戀

妹と背の中に流るゝ河水の絶えむ世にこそ君とかれなめ

欲別戀

○思ふもしるき　思つてゐることもはつきりわかる空炷を互にしみこませた夜が忘れられようか。

○來む世云々　未來の世で逢へると期待することが愚かだとも分別のつかぬやうになつた。

○夢のたゞぢ云々　夢の徑路、夢に歩いた道をどうだつたかうだつたと思ひかへすのが賴みない。

○ことならば　どうせ斯うなるならば。かくとならば。どうせ夢はかりで現に逢へぬならば、夢と現と互にとりかへたい。

○あふくま　逢隈川(阿武隈川)の逢ふといふ名を賴みにして來たかひがあつて。

○妹と背の云々　妹山と背山との中に流れてゐる吉野川の川水が絶える時こそは君と離れるだらうが決して君と離れる時はない。妹山背山と紀伊にあつて其の間を紀の川が流れてゐる。

別れ路の野路の小篠も分けなくにまだきに濡るゝ袖ぞあやしき

人のもとより曉に歸りてといふを題にて

有明の月に問はばや殘れるもかばかり袖は露けかるやと

後朝戀

稀にあひてあかず別れしあしたより露をあはれと思ひ知りぬる

逢ひ見ても殘れることの多かりき物いひかはせ袖のうつり香

とゞめおきし心もおのが心にてなげくや何の心なるらむ

名立戀

憂しとてもいかゞはすべき共に名の立たば絶えむと契りやはせし

おのが名は霞と共に立ちみちて思ひはるけむよしのなきかな

すまずなりにける女の人に名立ちければつかはしけるといふ心を

昔わが入りにし山と思ふよりうきたる雲もよそにだに見ず

無き名立ちける人にといふこゝろを

白雪を花ぞと人のいふめればいざこゝろみに手折りてぞ見む

歎無名戀

立たむ名は千名の五百名もなげかめや逢ふてふ事のまさしかりせば

○分けなくに云々　分けぬに早くも。別れて未だ野路をいく程も歩まぬに早くも露に袖の濡れるのは不思議である。

○殘れるも　歸つた自分はかく露けくあるが、殘つた人も袖がこんなにぬれたか。

○あかず別れし　十分とも思はず別れた朝。

○逢ひ見ても云々　折角逢つても歸つて見れば語り殘した事が多かつた。

○名の立たば云々　名が立つたならば絶えようと契りはしなかつた

○思ひはるけむ云々　思ひ晴らすべきたよりもない。名ばかり立つて滿足されようもない。

○すまずなりにける　妻として通ふことも絶えた。

○千名の五百名　名のはげしく立つをいふ。萬葉集「吾が名はも千名の五百名に立ちぬとも君が名立たば惜しみこそなけ」

○まさしかりせば　まことであるならば。

忍涙戀

音なしに落つる涙の瀧つせもながれて人に汲みや知られむ

顯戀

末かけて忍びはてむのあらましも馴るゝにつけて弱りもやせし

馴戀

つらかりし昔を更にいひ出でて馴れてもかこつふしはありけり

依忍増戀

年經とも忍びはてむの心にはあふさきるさの袖の色かな

憑戀

僞りのなき世とおもひ定めつゝひとつ心にわれはたのまむ

逐日増戀

日にそひておもひ入江のみをつくしみがくるゝまで成りやはてなむ

冬來増戀

神無月しぐれに染みし袖を見よ昨日の露の秋は物かは

切戀

死ぬばかり思ひしまめや立たむ名をいとひし程の心なりせば

○音なし云々　聲も忍び音に泣く涙。

○末かけて云々　將來いつまでも忍びおほせようとした豫定も。

○かこつふし　歎きいふかど。

○あふさきるさ　一方によければ一方にわるい。

○日にそひて云々　一日々々と増して戀しく思ひこんで遂には死ぬであらう。身を盡しに澪標をかけみがくるは水隱るに身の隱れ死ぬ意をかけた。

○秋は物かは　血の涙に染みた袖は露に濡れた袖と比べ物でない。

○死ぬばかり云々　浮名を厭つた位の心なら現在のやうに死ぬ程思ひこむことはあるまい。

朝厭戀

いとはるゝ身を知れとしも朝ごとの鏡の神や影に見すらむ

顯變戀

谷陰の一木のさくら何しかも風にしられて移ろひぬらむ

俄變戀

末の松待つらむとのみたのみつゝよがれせしまに浪越えぬとか

臨期變約戀

今宵しもあはむといひていなみ妻辛荷の崎のからき悔いしつ

かならずといひしに違ふつらさよりおぼつかなさは頼みありけり

風聲催戀

爪琴の下樋にかよふ風の音を聞く我さへに音に立てつべし

隔戀

隔てある人の心のうき雲や絶えぬなみだの雨となるらむ

每夜他行戀

つれなさもさすがに思ひ捨てやらでよその夜がれを待ちわたりつゝ

難忘戀

○鏡の神　肥前松浦郡鏡村松浦宮一名鏡の宮といふ。源氏物語玉葛「君にしも心違はば松浦なる鏡の神をかけて誓はむ」

○何しかも　どうしてか何故か。しは強め辭。もは感歎の助詞。

○移ろひ　花の色のさめるに人の心のかはるをかけた。

○末の松　末の松山は陸前宮城郡にある。古今集「君をおきてあだし心をわが待たば末の松山浪も越えなむ」によつて變らぬ契りにいふ。待つてるだらうと頼みにして夜の通ひが絶えた一寸の間に松山に浪が越えた。

○いなみ妻辛荷の崎　いなみは播磨の印南、つは助辭、まは岩の署語、一説につまは其のあたりをいふかと。辛荷の崎は室の港の南西にある韓荷島の崎。からきの序。萬葉集「淡路の野島も過ぎいなみづま辛荷の島」

○下樋　琴の甲と裏板との間の空虚な所。

わすれむとしひて思はじ忘られぬ思ひのみこそかたみなりけれ

怨戀

思へども思はぬ人はにくからで思はれぬ身の恨めしきかな

欲絶戀

ともすればわりなく人を恨むるや絶えはてぬべきかごとならまし

琴の緒の絶えなむとてか松風のおとづれさへも遠ざかるらむ

絶戀

今更に思へばあやしかりそめに絶えしやいつのすさびなりけむ

互恨絶戀

難波なるうらみうらまれたく繩の絶えむとまでは思ひかけきや

月前戀

我が袖にやどりなれぬる月のみぞ絶えぬ思ひを空に知るらむ

逢はぬ夜は思ふあたりの袖の露とふらむ月の影もむつまじ

經月戀

逢はで夜にふるの早稲田の若苗を刈るまでとやはかけて契りし

經年戀

○思へども云々　此方は戀ひ思へども思つてくれない人は憎くなくて、思はれぬ自分の身が恨めしい。

○ともすれば云々　どうかするとむやみに人を恨むがそれは仲が絶えてしまふべき口實でもあるだらう。

○今更に云々　今になつて考へて見るとどうも不思議だ。假初に一寸仲絶えたのはいつの氣まぐれであつたたらう、今は斷然絕えた。

○うらみ　浦廻(うらみ)に恨をかけた。

○たく繩云々　栲布(たぐぬの)を綯つた繩。たく繩のは長きの枕詞。繩の絕えるに長く絕える意をかけた。

○とふらむ月　露を訪ふ月。

○ふるの早稲田　布留は大和山邊郡。世に經るをかけた。萬葉集「石の上ふるの早稲田の穗に出です心のうちに戀ふる此のごろ」

○刈るまで　若苗が花咲き實つて刈り入れるまでと長い數月に亙つてとは契りはしなかつた。

二もとのすぎし契りをたのみつゝながれても世に布留川の水

をり〳〵は忘れむとのみ思ひつゝ忘れずながら年ぞ經にける

舊戀

人とはばふる川のべに年經つるすぎにしことと言ひてやみなむ

故郷戀

住みはててかへりみもせぬ人をなどしのぶの草よひとり露けき

羇中戀

わくらばに戀しき人を水驛（みうまや）かたみに今朝はさしぐまれつゝ

旅泊戀

室の海浪にうきねの枕にも心のとまるふしはありけり

老後初戀

今はたゞ駒もすさめず成りぬれど猶初草の萠えざらめやは

春戀

春されば身をうぐひすの音になれてこぞめの梅の色に出でる

初草のしたに萠えつゝ戀ふる間に春の霞と名は立ちにけり

夏戀

○二もと云々　古今集「初瀬川布留川の邊に二本ある杉年を經て又もあひ見む二もとある杉」二もとの杉に契つた過ぎし契りを頼みにして世に經る。布留川に經るをかけた。
○布留川　初瀬川を布留邊でいふ
○すぎ　杉に過ぎをかけた。人が尋ねたらば年經た昔の事だと言つてしまはう。
○などしのぶ　何故に思ふのか自分獨りで戀しく涙が露つぽい。
○わくらばに云々　たまさかにひよつと戀しい人を見た。水驛は水路の宿場、見つをかけた。
○さしぐまれつゝ　涙ぐまれて。
○室の海　播磨揖保郡室津の海。
○うきね　舟の中に寢ること。室の港に旅寢して浮川竹の遊女にも心の留るかどはある。
○駒もすさめず　古今集「大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」駒の進むまゝに樂しみ味はふこともなくなつたが
○春されば　春になると。
○身をうぐひす　身を憂にかけた
○こぞめ　濃染の梅が外に色に顯はれた。
○春の霞と　春の霞と共に名も立つた。

憂き人の秋にあはずて我もしかともしに消ゆる命ともがな

大かたの思ひなりせば蚊遣火のいぶせき門に車よせめや

相見てもあやめの枕根ながさにならはぬ夏の夜をかこつかな

遠方の埴生の小屋にたく蚊火のかひなくてのみこがるとを知れ

七夕戀

今宵しも手向くる絲のうちはへて長き契りをむすびてしがな

秋顯戀

瀧つ瀬にちるや紅葉の唐錦あらはれてこそ戀ひまさりけれ

冬戀

かつ亂れかつ碎けつゝ物思ふ身のたぐひなる玉霰かな

わび人の袖の白露秋くれて霜となりても消えかへりつゝ

冰ゐしいつぬき河のいつとかもとけてぬる夜を待ちわたるべき

冬契といふ事を

東人の荷前(のさき)の荷の緒むかしより結びしまゝのちぎりともがな

雪中戀人

待ちわびて袖うち拂ふ面影もゆき見まほしき妹が門かな

○憂き人云々　戀人がつれなくも自分を厭く(秋を掛く)のに逢はず、その様に(しか)嫉はれぬ前に死にたい。

○大かた云々　啻大抵の戀ならば蚊遣火のいぶる侘しい家に車を寄せはしない。

○あやめの枕　古宮中行事に五月四日菖蒲を束ねた枕を奉り、翌日之れを菖蒲湯に入れて入浴せられたといふ。夫木抄「牀の上に菖蒲の枕かたしきて根をうせねばや夜はの短き」あやめ(文目)ゝ眞暗さかけた。

○根ながさ　菖蒲の根の長いに寢ないのをかけた。

○夏の夜　夏の夜の短いのを長いと歎くのはいつぞないこさだ。

○埴生の小屋　貧賤な小家。

○蚊火　蚊遣火。

○手向くる絲　七夕に織女星に手向ける五色の絲。うちはへては引きのばして。

○身のたぐひ　身と同類である。

○わび人　慰めやうもない思ひなやんでゐる人。

○冰ゐし　冰が張つてゐた。

○いつぬき河　美濃伊都貫川。いつ(何時)の序。

○とけてぬる　打解けて寢る。冰解けるにかけた。

○ゆき見まほし　雪に往き見をかけた。行つて見たい。

雪の日人を戀ふる

かくとしも人は知らじな白雪にかよふ心のあとし見えねば

遠戀

いとせめて忘れずとのみ告げやらむ便りからすな心あひの風

名所戀

新治(にひばり)の鳥羽のあふみのとはにのみ戀しき人にあひ見てしがな

非心離戀

逢はで世に在りはてめやも心さへかれぬと人の思はずもかな

艶女遇他人戀

しめゆひし庭の橘吾ならぬ袖にかをれとおほしやはせし

竝面戀

人目多み言問ひかはすよしぞなき物見車の立ちならべども

戀雲

箱根山峯にあはだつ浮雲のうきたる戀ぞよるべ知られぬ

戀のこゝろを

僞りと思ひはてなばまことをもまことと知らで過ぎぬべらなり

○かくとしも、あとし　しは强め辭。
○いとせめて　いと迫りて。ひどく心に迫つて忘れられぬと。
○からすな　絕えさすな。
○心あひの風　わが心にあふ風。あひの風は東風。
○新治云々　新治はもと國名。鳥羽のあふみ(淡海)は常陸筑波山麓にあつた沼澤。
○とはに　永久に。
○在りはてめやも　あり果てむや。
○心さへ云々　身は離れても心まで離れたと戀人も思はないでくれよ。
○しめゆふ　標繩を張りわたした、卽ち他人にゆるさぬ。
○おほしやはせし　他人の袖に薫れといつて橘を生ひ立たしめない。
○あはだつ浮雲の　重なりおこる雲。うきたるの序。

○待つからに云々　待つてゐる以上は必ず月は訪ひ來るのに。
○眞木の戸云々　戸もしめないで寝てゐるであらう。眞木とは杉檜などをいふ。
○かけし　約束をした。
○玉の緒　いのち。
○心もはるゝ　滿足して氣がせいせいする。
○あかで隱るゝ月　十分と思ふ程眺めないのに隱れる月。その同じことを人の身に移して、あかで別れるやうにはどうしてしたか。
○おき別れ　朝起きて別れ歸り行く者もあとに留る者も。[illegible]「おき別れ涙くもらぬ月ならば袖に名殘の月は見てまし」
○夜がれぬ云々　夜の通ひ路がとだえないで月が夜毎に訪ひ來るのも恨めしい。
○月におほせて　月が曇らせるのだと罪を月に負はせて。

寄月待戀

待つからにかならず月はとふものを頼みがたきは人の心か

寄月契戀

眞木の戸もさゝでや寝らむ月の夜とかけし契りを忘れざりせば

寄月逢戀

玉の緒のながらへてこそ月影も心もはるゝ夜半も有りけれ

寄月別戀

惜しめどもあかで隱るゝ月かげを人の上にはなどうつしけむ

入る月に人の別れをたぐへなばかならず明日の夜をしたのまむ

おき別れ行くもとまるもあはれとて月や袂に影をわくらむ

寄月恨戀

今はたゞ忘られはてし身を秋の袖に夜がれぬ月も恨めし

憂き人のつらさに曇るをり〳〵を月におほせて恨みつるかな

寄風戀

あはれとも思はぬ風の心ゆゑ終に消えなむ露の玉の緒

寄水戀

山のべのみ井の眞清水ふりぬれどすみわたり來し妹は忘れず

寄田逢戀

秋の田のかりそめぶしも日を重ねこひぢにたちしかひとこそ見れ

寄江戀

つれもなき人に心をつくま江や刈らぬ三稜草（みくり）に袖ぞぬれける

寄河戀

いかなれば河と見ながらこがれつゝ渡らぬ袖に浪はかくらむ

寄禁中戀

いつまでか人の心は荒海のかた戀のみに世をわたるらむ

もゝしきや近き衞（まもり）の名のりにもかひなく更くる夜を歎きつゝ

寄花逢戀

袖ふるゝ一夜の花のうつり香を吾が身散りなむ後も忘れじ

折りえても猶こそあかね櫻花雲と見しよの憂さは思はで

寄草戀

戀ふれども引く人ぞなき谷陰にねはふ眞葛や吾が身なるらむ

寄椿戀

○ふりぬれど云々　年經たけれど今まで自分が通ひつゞけた妻。すみは澄みに住み（妻として通ふ）をかけた。
○かりそめぶし　假初に臥すことゝ刈り初めをかけた。
○こひぢ　泥（こひぢ）に戀路をかけた。秋まで永い夏を泥の中に立つたかひがあつた。
○つれもなき人　つれない人。思ひやりのない人。
○つくま江　近江坂田郡筑摩村の湖畔。心を盡すをかけた。後拾遺集「近江にかありといふなるみくりくる人苦しめの筑摩江の沼」
○荒海のかた　荒海の繪。淸涼殿の東北の廂にある衝立障子にかいた繪。片戀とつゞけた。
○もゝしき　內裏。宮城。
○近き衞　近衞府卽ち古皇居に近く伺候して警衞した武人の役所。戀人を近く見（まもる）てゐるといふ名のかひもなくとかけた。
○吾が身云々　自分が死んでも忘れない。
○引く　眞葛の緣語。
○ねはふ　根がはえ廣がる。

逢ふ事は片山椿せめて猶葉がへぬ色をたのみわたらむ

寄埋木戀

ながれてはあふくま河を命にていく年浪に埋れきぬらむ

寄獸戀

思ふ事やまとことひのくび木には堪へぬばかりにつもるとをしれ

寄猪戀

奥山の岩ほの中に住みぬとも妹と臥猪の名をやたのまむ

寄猿稀戀

たまさかに人をみ山のかひなさに戀をましらの音をのみぞ啼く

寄蟲戀

秋の夜は尾花がもとの機織女あやに戀しき音をこそは泣け

寄玉戀

古にありてふ玉のみすまるの見ずば心にかゝらましやは

寄衣戀

あきつばの名さへゆゝしも少女子がすゞしのきぬの薄きのみかは

逢ふ事を遠山摺の狩衣うらめづらしき妹にも有るかな

○片山椿　片側の山に生えた椿。逢ふことの難きにかけた。

○せめて　切に。

○あふくま河　阿武隈川（逢隈川）に逢ふをかけた。

○埋れきぬ　埋れ來に埋木をかけた。

○やまとことひ　大和の特牛（ことひうし）強健な牡牛。

○くび木　牛の頸にかける車の横木。

○つもる云々　思ふ事が積ると知れよ。をは感歎詞。

○臥猪　臥した猪。妹と臥すをかけた。

○人をみ山　深山に見をかけた。

○戀をましら　戀を増しに猿をかけた。

○機織女　蟋蟀の古名。

○あやに　わけもなく妙に。機織の綾にかけた。

○玉のみすまる　玉を絲ですべ貫いた頸掛の飾り。かゝるはその緣語。

○あきつは　蜻蛉の羽のやうに薄い衣。衣があきつは　で厭ひあきるといふ名も忌はしく嫌ふべきかな。

○すゞし云々　生絹の衣が薄いばかりだらうか、その心も薄情である。

○遠山摺　遠山の模樣を摺り染めた。逢ふ事の遠のいたにかけた。

○うらめづらしき　心に珍らしさいはれる。うらは衣の緣語。

つれなさを猶まつはしのうへのきぬ深くも人を思ひ初めつゝ

寄蓑戀

春雨の晴れにし後はかけてだに思はれぬ身の果てぞ悲しき

寄鼎戀

かゝりせば鼎の足のみつはさす世までと人に契りおかじを

寄鐘戀

鐘つきてとぢめむとしも契らぬをなど憂き人のいらへだにせぬ

物思ふこゝろひとりごとにといふを題にて

物思ふもおのが心の外ならずいざ思はじと思ひなりなむ

かくとだに人にはえこそ岩代の野中の松のむすぼほれつゝ

いかでと思へども色に出でがたき女にといふを題にて

いはずして年へぬる身を哀れとはあらざらむ世に思ひ出でてよ

女にいきて物いはむといひければ來ても何事をかといひけるにといふを題にて

老いぬとてすさめぬころの鶯も音にし立てなば聞かずやはある

よしさらばいらへせずとも荻の葉におとなふ風をあはれとは聞け

○まつはしのうへのきぬ　縫腋袍　兩腋を縫ひつけ裾に襴をつけた袍。まつはし(纏)に心に思ひ纏ふ意をかけた。

○かけて云々　聊かも心にかけても思はれぬ身。身のに蓑をかけた。

○かゝりせば　斯うなるのであつたならば。

○みつはさす　甚しく年老いたること。鼎の足の三つにかけた。

○とぢめむと　事を終らうと。戀を終りにせうとは契らなかつた。

○えこそ岩代云々　人にはえこそ言はねをかけた。岩代は紀伊日高郡。萬葉集「岩代の野中に立てる結松」結ぼほれは結松に心のむすぼれるのをかけた。

○あらざらむ世　自分が死んだ後に。

○來ても云々　御出でになつても何事を仰言いますかと。

○老いぬとて云々　もう老鶯になつたからと云つて賞美しない頃の鶯。

○いらへ云々　返答はしてくれなくてもせめて哀れと聞いてくれ。

○ふすべて　悄氣してすねて。
○待つらむ云々　待つてゐるだらうと思つて來たかひもない。
○松浦河云々　肥前松浦河の多くの瀨に淀もあつて滯るに喩ふのが滯つたとてすねるべきでない。萬葉集「松浦河七瀨の淀は淀むとも我は淀まず君をし待たむ」
○枕は言に云々　枕は枕言で常に言ひならはしてゐる言葉。常に言ひなれてゐる知つてゐるといふ言葉はふと口から出ても私は決していはぬ。
○かごとになして　口實にして。浮名の立つをかこつけて。
○ふみかよはねば　橋を踏み通はねは文も通はないからとかけた。
○昔ながら　昔のまゝの心を長柄の橋柱にかけた。
○袴縄　袴布の縄。長の枕詞。繰るの序として苦しにつゞけた。
○蜑の子　新古今集「白波の寄する渚に身を盡す蜑の子なれは宿も定めず」

久しく來ずとてふすべて出でぬ人にといふを題にて
待つらむと來しかひぞなき松浦河七瀨のよどもあれば有る世に
　吾を知りがほにないひそと有りければといふを題にて
知るといふ枕は言に出でぬとも吾やはいはむ人の名だてに
　我を知りがほに人にいふなといひ侍りける女にといふを題にて
月日へばおのづからにも立たむ名をかごとになして絶えむとかする
　忘れぬなめりと見えし人にといふを
橋柱ふみかよはねば今はたゞ昔ながらのこゝろとは見ず
　あり所しらせぬ女にといふを
袴縄のくるしかれとやあさりする蜑の子とのみいらへしつらむ
　簾ごしに物がたりし侍るとてといふを
かりそめにかけし伊豫簾を一重山隔ててすゝめる思ひなりけり
　月のもとに女琴ひく男來りて懸想すといふ事を其の女に代りて
一方にやどり定めてさす月の影ならばこそ引きもとゞめめ
　しのびたる男雨の降る夜まで來てぬれたるよし歸りていひおこせければ
　といふを題にて

心しる雨にも有るか人とはばぬれ衣きつと君こたへてよ

思ふ人を今は見じなどいひてといふを題にて

うつろふを見てこそ鹿の音にはなけ霧立ちこめよ萩が花妻

うき戀をしかまの市に立たむよりいなみじとまで思ひなりにき

人づてにいひやるといふ事を

たゞひとめ梢のもみぢ見るばかり霧吹き分けよ峯の秋風

思ひあまりしのぶに堪へぬ一ことを百言にしもなして傳へよ

今は待たじと思ふにとはれたるといふを

今はとてまきの板戸をさしながら心よわさや人に見えけむ

懸想し侍りける人の家の前をわたるとていひ入れけるといふを題にて

物いはぬ花はしばしとゞめねば鳴きつゝ雁の過ぐるなりけり

懸想し侍りける女の更に返事し侍らざりければといふを

最上河流れてを見む稲舟のいなとも人のいはぬたのみに

女のもとより文はなくて忘草の花おこせたるにといふを

今日よりは吾が下紐につけつゝも忘れやするといざこゝろみむ

文かよはしていと久しくなりぬれどつれなき人にといふを

○雨にも有るか　雨にもあるかな

○うつろふ　萩の花が色衰へるを見て、花妻が心他に移るを見て鹿が聲を立てて啼く。

○しかま　播磨飾磨郡飾磨町。うき戀をする意にかけた。

○いなみじ　否見じ。播磨加古郡印南(いなみ)にかけた。

○まき　眞木、杉檜など。眞は美稱。

○さしながら　かの人を待つまいと決心して戸を閉めはしたものの訪はれたのは、決心の心弱いのを彼の人に見すかされたのか。

○前をわたる　前を通り過ぎる。

○最上河云々　否と拒絕しないのを還みにして冒險的に進んで見よう。稲舟のはいなの序。古今集「最上川のぼれば下る稲舟の否にはあらず此の月ばかり」

○下紐に云々　下裳の紐を解いて契つたのを忘れられるかと下裳の紐に忘草をつけてさあ試みよう。

蘆根はふうきにもこりずいくそ度鴫の羽がきかきつくしけむ

文やりけるにつれなかりければといふを

山彦のこたへぬ山に分け入りてなげきこるとも人知るらめや

日に一度は文おこせむといひける人のとはざりければといふを題にて

いづこにかねぐらしめけむ霜の上に今日のみ鳥の跡をしも見ず

文ちらすと聞きて文かへさむと女のいひけるにと云ふを

白雲のかさなる山の岩根ふみかへすがへすもなげきこれとか

歌によりてまさる戀

人心花になりけることの葉もかつ見るからに思ひこそ添へ

はじめは思はで後に思ふ戀のこゝろを

今更につらしと人の思ひけむ昔にかへるこゝろともがな

つらかりしおのが心のはやながらあらましかばと思ふわりなさ

門さして入れざる戀といふ事を

清見潟浪の關守ゆるさねばうらみてのみや立ちかへらまし

雨降るとてとはぬ人の降らぬにも見えねばといふを

いそのかみふるとて人のとはざりし恨みをそふる月の夜半かな

○蘆根はふ　したの枕詞。こゝはうきに冠らした。

○鴫の羽がき　鴫が羽蝨を取るために嘴で羽をしごくこと。その頻繁なので數の多いことにいひ、羽がきから書きこつゞけた。

○なげき　歎きに木をかけた。こるは樵る、木を伐る。

○鳥の跡　文字。筆跡。

○岩根ふみ　岩根を踏んで。文を返すにかけた。

○人心云々　人の心を種として美しく花と咲いた和歌。

○見るからに　見るによつて。

○つらしと云々、昔の我をつれない人だつたと今更にかの人は思つてゐるだらう、一層のこと何とも思はずに居た昔の心に歸りたい。

○はやながら云々　つれなく冷淡であつた昔の儘であつた方がよいと思ふのおもせつない。

○うらみて　恨みに浦見をかけて淸見潟の緣語。立ちかへるは浪の緣語。淸見潟は駿河國庵原郡淸水港の古名。

○いそのかみ　ふるの枕詞。

今宵と契りて人の來ざりければといふを

たのめつゝ來ぬ夜をいかでたへぬべき待つにならへる身ならざりせば

五月雨ふるころ人を戀ふ

五月雨に水こす池のなびき藻の人に知られでよりも逢はなむ

しはすばかり人のもとへ

み雪さへ年さへ深く成りぬるをいつまであさき人の心ぞ

あひ見ての後

玉ゆらにあひ見て後ぞ小篠原朝おく露の消えかへりぬる

僞りてありかを敎ふる戀

ほとゝぎすたづねぞわぶる山彦のあらぬ谷にこたへせしより

かたこひ

あはれとも誰かは聞かむ吾が戀は片山きゞす音にたてつとも

うらむ

水草ゐる板井の清水ふるされて涙のみこそさしぐまれけれ

うらみず

つれもなき人の心をかにかくに恨みしほどはたのみ有りしを

○たのめつゝ　賴みに思はして期待させておきながら。
○待つに云々　何時も待たされてゐるから堪へられるが若し待たされるのに馴れてゐないならどうして今夜が堪へられようか。
○なびき藻　水になびく藻。
○人に知られで　人に知られないでより逢ひたいものだ。
○み雪さへ云々　雪までも深くなり年までもふけて十二月になつたのにいつまでかの人は深く思つてくれないだらうか。
○玉ゆら　暫時。かすかに一寸。萬葉集「玉ゆら昨日の夕見しものを今日の朝に戀ふべきものか」
○山彦云々　山の神が眞似て答へた反響が全くちがつた谷で答へたので。
○片山きゞす云々　片側の山に居る雉子が聲を立てて鳴いても。
○水草ゐる云々　水草が生えてゐる板で圍つた井。古今集「わが門の板井の清水里遠み人し汲まねば水草生ひにけり」
○ふるされ　古くなつて。疎み隔てられての意をかけた。
○かにかく云々　とやかくと怨んでゐた間はまだ有望であつたが。

やちまたにとふや夕けのしるしなみ恨みじとこそ思ひなりぬれ

ないがしろ

紅のあらそめ衣あさらかに思ひそめつゝなど著なれけむ

しらぬ人

わたつ海の千尋の底は知らねども見まくぞほしきしづく白玉

いひはじむ

やさしとていはでやみなば石ばしるたぎつ心をいかゞせくべき

あした

かへりてぞ袖はひぢぬる別れにはしのぶあまりにもらさざりしを

あひおもふ

いはねどもこふとはしるや問はねども思はれぬとはしるきものゆゑ

夢のうちもかたみに思ひたゆまねば逢ふと見る夜や逢ふと見るらむ

問はるゝも問ふもあやなきすさびかなかたみに思ふ深さ淺さを

いはでおもふ

言にいでていはねの松の二葉より下に戀ひつゝ神さびにけり

ねぬなはのくるしくも有るか埼玉の小崎の池のいひも出でねば

○やちまた　多く分れてゐる道の辻。
○とふや云々　夕方辻に立つて辻占を問うたがその占のかひもないのでこれから占を見まい、恨みまいと思ふやうになつた。
○あらそめ衣　淺紅に染めた衣。萬葉集「紅の淺ら染衣あさらかにあひ見し人に戀ふる頃かも」
○あさらかに　淺く。うすく。
○見まくぞ云々　水の中に透きとほつて見える底の白玉が見たい。
○やさしとて　恥かしいといつて
○石ばしる　瀧の枕詞。
○たぎつ心云々　涌きかつへて流れるやうないらだつ心をどうして遮りとゞめることができよう。
○袖はひぢぬる　袖は涙に濡れた
○もらさざりし　涙を。
○思はれぬとは　思はれてゐるのだとは明らかなものだから。
○逢ふと見る云々　相逢ふと此方で夢に見てゐる夜は先方でも同様に相逢ふ夢を見てゐるだらう。
○あやなき云々　互に思ひの淺深を問ふのも問はれるのもかひのない心のすさびだ。
○いはね　岩根に言に出ていはずをかけた。
○ねぬなはの　くるの枕詞。
○埼玉の小崎の池　武藏埼玉郡。

いはじたゞ引作細江のいなといはば身をつくしてしかひやなからむ

いはずして人に心をつくし見むおのづからにもそれと知るまで

ひと夜へだてたる

馴れぬれば一夜ばかりのよがれにも明け行くほどを待ちわびにけり

ふた夜へだてたる

難波なる蘆の一よは堪へにしを二夜ながらや逢はじとはする

望にあひて結びしひもを居待月待ちえてとかむ夜半ぞ此の夜半

三夜へだてたる

逢はずしてけふ三日月の眉引くを妹が面わに見むよしもがな

近くてあはず

さゞなみや近つあふみは名のみにてみるめも刈らぬ浦の蜑人

人を待たず

岩代や昔結びし契りさへ忘れぬる身はまつとしもなし

人づて

あふみの海みるめなければあつらへて打出の濱のうち出でなまし

思ひいづ

○引佐細江　遠江濱名湖の一支灣いなの序とした。
○身をつくして　澪標に身を盡しこをかけた。萬葉集「遠つあふみ引佐細江の澪標あれをたのめてあさましものを」
○馴れぬれば　毎夜通ひ馴れてしまふこ、一夜だけの通ひのとだえでも。
○難波なる蘆の　一よの序。蘆の節(よ)に夜をかけた。
○望　陰曆十五夜の月。
○結びしひも　古男女相逢つて別れに下裳の再會まで解かじと結んだ紐。
○居待月　陰曆十八日の夜の月。
○逢はず云々　逢はないで今日は三日になる。三日月形の眉引きをかの女の歌に見たい。眉引きは眉毛をぬいて跡へ眉墨で眉を作ること。
○近つあふみ　近つ淡海で近江。近く逢ふ身をかけた。
○みるめ　海松に見る目をかけた
○岩代や云々　紀伊日高郡岩代の結び松。

忘られず思ふが中に思ひ出づる心や何のこゝろなるらむ

人もかく思ひはいづや思ひ出でてながむる空に面影ぞたつ

かくれ妻

逢はぬ間は木の葉にうづむ谷水のしのびにむせぶこもり妻かも

になきおもひ

かばかりはかどはむ風のつてもがな及ばぬ峯の花の白雲

年へて逢へる

見し世にはあらずなれども語らへば心ぞもとの心なりける

いたづらに絶えやはてなむ昔より思ひよわらぬ心ならずば

後撰集の「木の葉ちる山の下水埋もれてながれもやらぬ物をこそ思へ」といふ歌の返しの心を

おぼろげの水のながれやいさゝめに散る木の葉にもよどむなるらむ

同じくあだに見え侍りける男に「こりずまの浦の白浪立ち出でて見るほどもなく歸るばかりぞ」とある歌の返しのこゝろを

須磨の浦の松の嵐のはやければよどみもやらでかへる波かな

同じく「今はてふ心つくばの山見れば梢よりこそ色かはりけれ」といふ

〇人も云々　わが戀ひ思ふかの人もわが思ふ如く思ひ出すだらうか

〇かくれ妻こもり妻　しのび妻、人に隱して持つた妻。

〇かばかり云々　我が思ふこれほど歎を誘ふべき風の方便がありたい。後撰集「山風の花の香かどふ麓には春の霞ぞほだしなりけり」

〇見し世云々　昔互に逢つた時とは全く異なつてはゐるが話しあふと心だけは昔の儘の心でゐる。

〇いたづらに云々　むざ〳〵と仲らひが絶え果てはしない。

〇後撰集云々　木の葉散るの歌は後拾遺集戀一に出てゐる。

〇いさゝめに云々　僅かばかり散つた木の葉にも流れが停滞するだらう。

〇こりずま云々　後撰集に見る程はよる程、ばかりぞはばかりかとある。

〇今はてふ　後撰集戀二。

歌の返しの心を

筑波嶺のしづくてふ名は涙にてかはるは袖の色にざりける

後拾遺集の「しのびつゝやみなむよりはおもふ事ありけるとだに人に知らせむ」といふ歌のかへしの心を

山の井のやまむよりはと聞くからに淺き心を汲みてこそ知れ

○しづく　常陸新治郡志筑。とも書く。
○色にざりける　色にぞありける
○しのびつゝ　後拾遺集戀一。

○山の井の　やまむの序。忍びてやむよりはと位に云はれて見れば心の淺いことがわかる。萬葉集「安積山影さへ見ゆる山の井の淺き心をわがもはなくに」

うけらが花巻六

雑歌

嶺上雲深

立ちのぼる雲より奥に音するは箱根の海の岸の白波

朝雲出馬鞍

旅人の朝行く駒のひづめより雲たちのぼる足柄の山

田家煙

筑波嶺の茂き惠みはしるきかなすそわの田ゐに立つ煙にも

民戸煙

おしてるや難波高津の昔より絶ゆる世もなき民のけぶりか

山家煙

折々は柴といふものの煙だにあはれとは見よ都かた人

海邊煙圖

葦荻のしげみに立てる煙にぞ蜑の苫屋の數は見えける

○根箱の海　箱根山上の蘆湖。

○筑波嶺の云々　古今集序「廣きおほん惠みの蔭筑波山の麓よりも茂くおはしまして」

○しるき　はつきりしてゐる。

○すそわ　麓のあたり。

○おしてるや　難波の枕詞。

○難波高津の昔　難波高津宮に宮居し給うた仁德天皇の時代。

○民のけぶり　新古今集に仁德天皇の御製として「たかき屋に登りて見れば煙たつ民の竈は賑ひにけり」

○都かた人　都人。

○しげみに云々　繁った中に立ちのぼる煙。

夕陽映島

夕づく日浪ににほひて紅のゆはたに見ゆる笠縫の島

閑曉

鳥が音はふもとの雲にひゞきつゝ軒端に落つる有明の月

山伏の曉おきの聲さへも雲のよそなる谷陰のいほ

幽夕

大柄行く人のおとなひ絶えはてて軒端にかへる家鳩のこゑ

山

足柄の神の御坂を越えてしも猶富士のねは雲居なりけり

山家

山里のおのづからなる花に馴れ紅葉にあきて吾が世へなまし

山家積年

うつほ木に年へし世さへおもほえて嶺のましらぞなれてとひける

我が山の峯の落椎生ひ出でて陰たのむべくなりにけるかな

山畑

をちかたの畑やく煙打ちかすみ春おもほゆる深山べの里

○夕づく日　夕日。
○浪ににほひて云々　波に輝き色はえて紅の絞り染と見える。
○笠縫の島　攝津東成郡深江のあたり廣い沼地にあつた島。

○山伏　世を遁れて山住すること
○曉おき　曉に早起すること。

○おとなひ　音すること。

○足柄の神の御坂　足柄峠。足柄明神の社があるのでいふ。

○おのづからなる　人工の加はらぬ自然のまゝの。

○うつほ木　うつろになつた木。
○おもほえて　思はれて。想像されて。
○ましら　猿。
○落椎　落ちた椎の實。
○陰たのむ云々　源氏物語椎本「立ち寄らむ陰とたのみし椎が本空しき牀になりにけるかな」

曉關路

家に在りて聞きしに似たるとりの音に幾曉の關路越ゆらむ

道

靫かくる八十伴の雄の行きならしつかへならさむ大路なるかも

瀧のほとりに人來て見る

水上は雲ゐる山の峯にて岩が根ゆする瀧つ白波

み吉野の瀧の白絲くり返し猶しのばるゝとつ宮どころ

音にのみ聞きわたりにし山姫のさらせる布をきて見つるかな

井

藤原のみ井の眞清水尋ねても昔を汲みて知るよしもがな

名所湖

雲のゐる嶺の峯の幾代經て箱根の海はたゝへたるらむ

海路

昨日まで雲居に見えし山の端も浪路にきゆる舟の道かな

海のほとりに風吹き浪立つ

風をいたみ沖つ島山かつかくれかつあらはれて浪立てる見ゆ

○靫かくる　矢を入れて背に負ふ器の靫を背にかけてゐる。
○八十伴の雄　多くの部屬の長。靫かくる八十伴の雄は多くの武士
○岩が根ゆする　下流は瀧となつて岩の根を震ひ動かす。
○瀧の白絲云々　絲の縁で繰り返しといふ。繰り返し昔のとつ宮即ち離宮のあつた所が忍ばれる。大和吉野郡國栖村大字宮瀧で吉野川が急瀨となつてゐる所往古離宮があつた。
○山姫の云々　山を司る女神が晒してゐる布、瀧をいふ。來て見るに着て見るをかけた。續後撰集「山姫の瀧の白絲くりためて織るてふ布は夏衣かも」
○藤原のみ井　藤原宮は大和高市郡。持統文武兩朝の都。萬葉集卷一に藤原宮御井の歌がある。
○雲のゐる嶺　富士山をいふ。
○雲居　雲のゐる所、大空。
○風をいたみ　風がはげしいので

荒磯に浪のよるを見て

わたつみはあやしきものか荒磯に花と雪とをとはに見せつゝ

干潟に貝拾ふ

あやはとり舟漕ぎよせし住のえの錦貝をや我はひろはむ

嵐山

花に恨み紅葉にいとふ名はおへど猶なつかしき嵐山かな

贈答の會にしがの山越にて人にあひてといふことを

思ふ事なるとやいはむ瓜生坂こえて戀しき人におひけり

入間

梓弓末ふりおこしさつ人の入間わたりに男鹿鳴くなり

ふるき東歌にならひて武藏國の歌を

武藏なる都筑の原の八十つゞき仕へまつらむますらをの伴

東なる國榮えけり橘樹(たちばな)の鄕のたちばないや常葉(ときは)にて

妙意尼が小松川の宿りにて刀禰歸帆といふ事をよませける

夕汐も今やさすらむ百舟のほのかに歸る刀禰の川づら

ふるさと

○わたつみ　海。
○あやしきものか　奇怪なものなるかな。
○あやはとり　古漢國から渡來した機織。錦の緣語。
○舟漕ぎ云々　雄畧紀に呉國から獻つた漢織呉織の舟が住吉津に碇泊したことが見える。
○花に恨み云々　花に嵐紅葉に嵐と恨み厭ふ名はもつてるが。
○しがの山越　山城愛宕郡白川村から近江滋賀郡志賀村に出る山越
○瓜生坂　山城愛宕郡白川村の東北。瓜がなるをかけた。
○入間　武藏入間郡。さつ人の入ると言ひ掛けた。さつ人は獵人。
○都筑　武藏國都筑郡。八十つゞきの序。八十つゞきは數多つぎつぎ引續いて。
○橘樹　武藏國橘樹郡。
○いや常葉にて　萬葉集「橘花は實さへ花さへ其の葉さへ枝に霜ふれどいやとこ葉の樹」
○ほのか　百舟の帆とかけた。
○ふるさと　古跡。古昔都のあつた跡。

かざし折る人もあらじをさゞなみや志賀の古郷花さきにけり

咲く花のさかえし代より千年へてにほひ残れる奈良の古郷

いにしへの藤原が上里ふりて三井の眞清水汲む人もなし

妙法院一品の宮の宮所の二十四景の題賜はりて歌奉れとおほせ事有りければよみて奉りける

十二景

陀峯彩霞

おしなべて世を照らしますみ佛の名に負ふ峯や先づかすむらむ

平林春花

立ちつゞくしげみの櫻咲きしより花ならぬ木も花の香ぞする

青田亂蛙

春深み緑にかすむ苗代の小田のをちこち蛙なくなり

西山夏雲

愛宕山雲のあわたつそなたより村雨そゝぐ夕すゞしも

喬松啼鵑

木高かる御園の松をしをりにてかれずも問ふか山ほとゝぎす

茅檐明月

○かざし折る　挿頭に折る。折りかざす。
○志賀の古郷　天智天皇の都のあつた近江滋賀大津宮の址。
○咲く花の云々　萬葉集「青によし寧樂の都は咲く花の匂ふが如く今さかりなり」
○藤原が上　上はほとりの意。古昔持統文武の朝の都であつた藤原の宮のほとり。藤原の御井は前出。
○妙法院一品の宮　閑院宮典仁親王の御子、光格天皇の皇弟眞仁法親王。
○陀峯　阿彌陀が峯。京都東山。
○世を照らしますみ佛　阿彌陀佛
○西山　東山に對して洛西一帶。
○愛宕山　山城葛野郡の北隅。
○雲のあわたつ　雲がかさなり起る。
○喬松　高い松。
○松をしをり云々　松を路のしるべとして絕えず。
○茅檐　茅葺の軒。

いにしへの手ぶりおぼゆる茅が軒神代ながらの月や澄むらむ

曲塢秋草

御園生に小田の畦道うつしては千種の花も所えて咲く

虹橋丹楓

染めわたす岸のもみぢの散る頃はみ池のみ橋虹をなしける

曉園積雪

見渡せば御園の雪に明けそめて四方の村山眞白なりけり

翠池浮鴨

水清きみ池に馴るゝあし鴨はうきこと知らで世を渡るらむ

蕭寺清鐘

なべて世の現の夢もさますらむ夕の寺の鐘のひゞきに

竹窗夜雨

宵の雨の篠の葉つたふ雫をもよむばかりなる窗のうちかな

自適庵六勝

菜花經鳥雉

春されば咲くやすゞなの陰さらずすゞろに音をも鳴くきゞすかな

稗苗田流螢

○いにしへの手ぶり云々　古の風俗も聯想される。
○神代ながらの　神代のまゝの。
○曲塢　入り曲つたどて。
○畦道うつして　畦道を摸して。

○村山　山々。

○あし鴨　葦の生えた所に居るので鴨をいふ。
○うきこと　憂き事。浮きをかけた。
○現の夢　眠らないで覺めて居ながら夢見てゐるやうな人世の迷ひ

○よむばかりなる　數へるほどの。

○春されば　春になると。
○陰さらず　かげを離れず。

○早稲苗　さなへ。○ほに出でぬほど　高く生えてない頃。○ま垣　竹や柴をあらく編んだ垣。○すだく　集まる。

○入りて　月が入りて後。○枯生　草の枯れた地。

○なげきこる　歎きに木をかけ木を樵るにいふ。

○瀹茶亭　瀹は煮る意。

○栂の尾の源　茶。栄西禪師入宋して茶の種子を將來し明恵上人が栂の尾に之れを植ゑて茶が全國に弘まつた。

○竹のふし待の月　ふし待の月は陰暦十九日の月、轉じて二十日以後の月にもいふ。竹の節にかけた。

早稲苗のほに出でぬほどの夕露やあはれ螢の命なるらむ

露萩籬吟蟲

秋萩の花のしづくのしげければま垣にすだく蟲のこゑ〳〵

枯草原晨霜

入りて猶草の枯生に影のこる月かとばかり見ゆる朝霜

風松溪樵歌

なげきこる業とはいはじ松風の聲にきそひてうたふ柴人

瀹茶亭閑話

栂の尾の源きよき眞清水のあかぬまとゐは樂しかりけり

生白樓六詠　花林朧月

咲きつゞく花のにほひにつゝまれて影さへかをる春の夜の月

竹岡涼月

風わたる岡邊の竹のふし待の月さし出づるほどぞ涼しき

孤松皎月

ひとつ松あはれとてこそ幾千秋月もさやけき影とゞむらめ

雪峯寒月

打ちむかふ高嶺の雪をよもすがらみがきそへたる有明の月

樹抄佛閣

千年へし松の緑に大寺の瓦の苔のいろぞあらそふ

鳳闕瑞雲

久かたの天の御陰のみあらかにたなびく雲も世に似ざりけり

同じ宮の積翠園十景の内君子樹といへる事をよめとおほせごとありて短冊を賜へりければ 此の君子樹といへるは御園のうちのいほりにて賞君子之花爭君子之藝名樹以君子云〻書ける御額ありとぞ

よき人のこゝろ高さにたぐへ見む梢の花も月の光も

鎌倉鶴が岡莊嚴院の奥の猿踊峯の上に昇仙臺とてあづまや有り伊豆相摸の海山目の前に見えわたる其の屋の額に歌よみて書きてよと莊嚴院僧都の請ふによりてよめる

東路の遠つ海山こゝもとに八十綱はへて引きやよせけむ

高野山なる鳳存阿闍梨が其の山にをさむるとて歌こひければ

水莖の跡の名さへも高野山入りにし人ぞしのばれにける

富士の山かける繪に

大かたの山てふ山の君としもあふぐみ山や富士の柴山

○久かたの　天の枕詞。
○天の御陰　天皇の宮殿。天日も覆うて陰をなす義。
○みあらか　御殿。
○君子樹　靈樹の名。樹はたかどの。
○こゝもと　此處。手近の處。
○八十綱　極めて長い綱。
○はへて　引きのばして。
○水莖云々　水莖は筆、筆跡をいふ。水莖の跡の名云々は書道の名譽も高い高野山に入つた弘法大師
○富士の柴山　富士山をいふ、麓は柴即ち小さな雜木が茂つてゐるのでいふ。

富士のねの霞のきぬの五百機を誰か織るらむ白絲の瀧

屏風の繪に越の白山のかたかけるを

白山を越路のをちに問はでしもとはに消えせぬ雪を見るかな

住吉の繪に

千とせ經し岸の松原二葉より見そなはしけむ住の江の神

宇治河に柴流すかたかける繪に歌書きてよと雪岡大德にこはれて

宇治川を下すま柴のしばらくも淀瀨なきをば見ずや世の人

蘆多かる方に釣人あるかた

絲たれていを待つほどは津の國のなにはのことも思はざるらむ

竹に山鳩かけるかた

色かへて千ひろの竹にふしなれて同じみどりの山ばとの聲

岩ねに小松生ひたり龜あそぶ所

岩がねに根ざす小松の生先は萬代ふべき龜ぞ知るらむ

京の小澤蘆庵がもとへ千里を隔て侍れどこゝらの年月のあたり語らひかはし侍る心地せらるゝまゝにうちつけなるものから立ちかへる春のほ

北。芝川の水が瀧となつてゐる。
○五百機　多くのはた。
○越路のをち云々　遠い越路まで訪ねないでも永久に消えない雪の山を永久に消えない繪に見られる
○千とせ經し云々　古今集「われ見ても久しくなりぬ住のえの岸の姫松いくよ經ぬらむ」住の江は攝津住吉郡住吉神社がある。
○宇治川を云々　宇治川の流れに下す柴が流れて暫くも淀むことがない、急流で水の淀んでゐるやうな瀨のないことを見ないか。萬葉集「宇治川は淀瀨なからし網代人舟呼ばふ聲をちこち聞ゆ」
○いを待つほど　魚のかゝるのを待つ間。
○なにはのこと　難波に何かのことを掛けた。
○ふしなれて　竹の節に鳩の鳴聲の節の馴れるをかけた。
○同じみどり　竹の色と同じ山鳩の緑色。
○こゝらの年月　多くの年月。
○うちつけなるものから　ぶしつけながら。卒爾ではあるが。
○春のほぎごと　新年の祝辭。

ぎごときこえ侍る

君もあれも百世をへつゝ花鳥にあくやあかずやいざ試みむ

ものみなはとか

妙法院宮のおほせにてよめる繪の歌のうち七首

暈がきの梅を

見ればかつかをるばかりにおもほえて散る恨みなき梅の花かも

竹のもとに鶴たてり

くれ竹の千よにわがよをとりそへて君にゆづるの聲ものどけし

巣父の牛牽けるかた

上つ瀬をいざとめゆかむ世の塵に濁れる水はかわまくもうし

松かさといふものかけるに

おのづから落ちし木の實のおひのぼり雲かゝる世をまつぞ久しき

竹深留客處といふ詩の心を

くれ竹の夕陰もよしすなほなる代のふることも語りあかさむ

もみぢ散りたる所鹿の跡見ゆ

妻ごひに立ちならしけむ小男鹿の跡見るさへもあはれなりけり

○あれも　吾も。
○ものみなは　萬葉集「物皆は新しきよしたゞ人はふりぬるのみぞよろしかるべき」
○かをるばかり云々　薫るくらゐに思はれてそれでゐて繪であるから散る恨みがない梅の花であるよ。
○くれ竹の　よの枕詞。
○わがよ　鶴がわが世を添へて。
○君にゆづる　君に讓るに鶴をかけた。
○巣父　高士傳「許由耕二于潁水之陽一、堯召爲二九州長一、由不レ欲レ聞レ之、洗二耳於潁水濱一、時巣父牽レ犢欲レ飲レ之、見二由洗レ耳曰、汙二吾犢口一、牽二犢上流一飲レ之。」
○上つ瀬云々　いざ上流を求め行かう、俗塵に濁つた水は牛に飲ませるのもいやだ。
○木の實云々　松かさが生えて、高く成長して雲が懸るほどになる世。
○すなほなる代　質朴率直な昔の代。代に節（よ）をかけ呉竹の緣語。
○妻ごひ云々　妻を戀うて通ひなれて來た牡鹿の足跡。

宮の書かせ給へる富士の繪に

神代より高く貴き此の山をうつす御筆のすさびにぞ見る

萬葉集にあなる憶良大夫が松浦の玉島川の鮎つるをとめに言問ひけるさまかける繪に

松浦なる玉島川に住むあゆののぼりける世のみやび果ほの

喜撰法師の繪に

曉の雲にあへりし有明の月の行くへを猶しのぶかな

道風朝臣のかたに

かしこきや南の殿に七かへりふみでの跡をとめし人はも

空穗の俊蔭が孔雀にのりて川渡るところに

花園のたへなる琴のしらべには天つ少女も心ひかれつ

もろこしの莊周が眠れるかたかきたる繪に

咲く花の香をなつかしみねるまさへ野べの胡蝶に身をやかへけむ

梅園院にて長瀨眞幸が肥後へかへるうまのはなむけすとて古今集別の歌の句をおの〳〵さぐりてこひしきものをといふを

あひ見ねばこひしきものを濱千鳥跡にのみやはしのびあへまし

○神代より云々　宮の御描きになつた御筆の御戯銘によつて神代からの富士の靈山を見る。萬葉集「天地の分れし時ゆ神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺を」
○憶良大夫云々　萬葉集卷五に山上憶良が肥前松浦の玉島川に遊び鮎釣る少女と贈答した歌及び序、同行者と贈答した歌、後人の之れに和した歌が出てゐる。
○のぼりける世　上代。年魚の川上にのぼるをかけた。
○喜撰法師　喜撰法師(喜仙、窺仙とも)
○曉の雲云々　古今集序「宇治山の僧喜撰は、言葉かすかにしてはじめ終りたしかならず、いはば秋の月を見るに曉の雲にあへるが如し。」
○南の殿　紫宸殿。七かへりは七回、道風が山城守となつて近江介兼任を奏請した文中に「然而紫宸殿之皐居、七回書賢聖之障子」とある。
○ふみで　ふんで。筆。
○空穗　宇津保物語。
○香をなつかしみ　香がなつかしいので。
○ねるま　眠る間。莊子齊物篇「莊周夢爲胡蝶」
○長瀨眞幸　肥後の藩士、鈴門。
○うまのはなむけ　餞別。
○こひしきものを　古今集「惜しむから戀しきものを白雲のたちなむ後は何心地せむ」

二月ばかり京へ行く人をおくる

嵐山たかねのさくら折りかざしかへれわがせこ花散らぬまに

越の君のくすし安田征盛さ月はじめ伊香保の出湯へ行くを送るとて

現身（うつそみ）の人を助くる人をこそ伊香保の山の神も守らめ

日をさふる繁みが奥の伊香保風涼しかるべき旅寝をぞ思ふ

上毛や伊香保のみ湯のわく子なす若がへりつゝ歸りませ君

越後のやすしが古郷へ歸るをおくる

神のますいや彦の山いや千度行き返りてもあはむ君から

中津の君豐國へ旅立ち給ふ時によみてまゐらす

豐國の企玖の濱松吹く風も君待ちつけて千代呼ばふらし

梅の宮の神司橘經亮が京へ歸るを送る

明日よりは千里のよそにかぐはしき名をのみきかむ梅の宮人

そのかみは常世の種といふめれば下枝をだにもうるはしみせよ

黑川盛隆がみちのく南部へ歸るを送る

君がよも吾がよも共に常磐にてあひ見む時をまつが浦島

やよひばかり實明が豐後國へかへるを送るとて春海の家につどひて人々

○二月ばかり　二月頃。
○わがせこ　吾が親愛する男。
○くすし　醫師。
○現身の　人の枕詞。
○伊香保の山の神　上野羣馬郡伊香保山。伊は伊香保神領で伊香保神社がある。
○日をさふる　日を遮る。
○上毛　上野國。上つ毛野。
○わく子なす　幼子の如くに。湯の沸くにかけた。
○いや彦の山　越後西蒲原郡彌彦山。彌彦村の伊夜比古神社の奥院がある。
○企玖の濱　豐前小倉の海濱。
○呼ばふ　呼ぶの延。
○梅の宮　山城葛野郡西梅津にある。宮人は神に奉仕する神官。
○千里のよそ　千里の外。
○常世の種　橘經亮の氏の橘花は垂仁天皇の朝田道間守が命をうけて常世の國から將來したこといふによっていふ。
○うるはしみせよ　親愛せよ。
○まつが浦島　陸前宮城郡蒲田濱の西南松が濱の古名。時を待つにかけた。

歌よみける時

別れては野山の霞へだつとも言だにつてよ速水濱風

同じ時に後撰集の句題たつ日をよそに

鴈がねも共にかへるか君が今朝おもひ立つ日をよそに見すして

やよひばかり南禪寺の僧亘海が京へ歸るを送る

都べは春の錦と聞くからにたち歸るをばいかでとゞめむ

七月二十八日濱臣が熱海へゆあみに行くを送る

いかばかり心ゆくらむ伊豆の海や浪にうつろふ月の夜頃は

いつはあれど伊豆の磯間に出づる湯のわきてをかしき旅寢ならまし

伊豆の海や沖にむかへる走湯のはや歸りませつゝみなくして

きさらぎばかり京の小野勝義が歸るに遠山摺の形すりたる紙を贈るとて

都路は遠山ずりの旅衣かさねてをゆけ近えかへるころ

物へまかりける人に扇やるとて

別れ路に身をこそわけね心あひの風を千里にたぐへてぞやる

西尾安道の古郷阿波國へ歸るに筆船にそへてつかはす

古郷は神の御面と聞くからに鳴戸の沖もうしろ安しや

○言だにつてよ　せめて言傳だけでもせよ。
○速水　豐後速見郡。
○たつ日云々　後撰集「唐衣たつ日をよそにきく人はかへすばかりのほども戀しき」
○聞くからに　聞く故に。
○たち歸る　裁ちにかけて錦の縁語。
○心ゆく　氣が晴れる。滿足する。
○いつはあれど　何時も／＼面白いけれど。いつはと伊豆と出づるとの三重に疊んだ。
○わきて　とりわけて。湯の湧くにかけた。
○走湯　伊豆熱海の北二十餘町伊豆山溫泉をいふ。
○つゝみなく　恙なく。
○小野勝義　小澤蘆庵門人。
○遠山摺　遠山の模樣を藍又は靑草で摺り出したもの。
○かさねてをゆけ　をは感歎詞。
○物へまかりける人　何處かへ行く人。
○身をこそ云々　身こそは分けてやらないけれども、心に合ふ扇の風を千里までもつけてやる。
○心あひの風　心のまゝの風、即ち扇の風。
○たぐへ　伴はして。
○神の御面　古事記の二神國生の條に四國を「此の島は身一つにして面四つあり面每に名あり。」と見ゆ。
○鳴戸　阿波と淡路との間の海峽

鶴のかたにぬさいるゝものをして
天とぶやつるの郡に行く人はよを長ちはの神もまもらむ

ちえ子が子の律師の都へ登りたるころちえ子がもとにて卯月ばかり都へ行きたる人を思ひてといふを題にて
君がいにし都をわれも忍び音の山ほとゝぎすつばさかさなむ

贈答會に田舍へ行く女にさうぞくやるとてといふを題にて
夢にだにおくれじものをから衣旅寢の牀にうちかへしてよ

羇中懷都
しばしだに都のかたを思はずばかはる野山の心ゆかまし

殘月越關
逢坂や清水にうつる有明の月を見すてて過ぐるたび人

芝
數ならぬ庭の芝生のうへにだに春と秋との色は見えけり

武藏野の紫草を得て人にやるとて
武藏野の千ぐさの秋のあはれさをこの一もとにこめてけるかな

濱ゆふ

○鶴の云々　幣袋を鶴の形にしてぬさは神に奉る幣物。旅行の時は紙絹など小さく切つたのを幣袋に入れて携へ行つた。
○天とぶや　かりの枕詞こゝはつるに冠らした。
○つるの郡　甲斐國都留郡。
○長ちはの神　伊邪那岐命の御子道路の神。
○さうぞく　裝束。
○うちかへしてよ　衣を裏がへして著て寢れば思ふ人を夢に見るといふ。夢にさへも後れずついて行く私を夢みるためにこの衣を裏返して著なさいよ。
○清水　逢坂の關の清水。
○この一もと　古今集「紫の一本ゆゑに武藏野の草は皆がらあはれとぞ見る」

限りなき南の海の五百重浪幾重よすらむ浦の濱ゆふ

岩苔

川上のゆつ岩村の苔むしろむかしを今もしきしのぶかな

苔爲石衣

位山峯のいはほの苔ごろも緑ながらに年へしやなぞ

松にかゝれる苔を見る

山松の幾代をへてか神わざにかくる日陰のかづら生ひけむ

竹

鶯のねぐらながらの聲をしも聞くべかりける宿の竹むら

窗前竹

すなほなる心の友か上つ代の書巻きかへす窗のくれ竹

砌下栽竹

嬉しさの一ふしごとに今よりは色そはるべき園のくれ竹

松

あはれてふ御言を松にとゞめしや異木にまさるためしなるらむ

岡松

○限りなき南の海　遠い南海道。濱木綿は紀伊熊野に生える草であるからいふ。
○幾重よすらむ　濱木綿は木綿幣の如く白く幾重に重なり咲くので重なる意にかけていふ。
○ゆつ岩村　多くの岩石が聚り立つ所。萬葉集「河上のゆつ岩村に草むさず常にもがもな常處女にて」
○しきしのぶ　頻りに慕ひ思ふ。
○位山　飛騨國。位階にたとへる
○緑ながら　緑のまゝで。苔の緑に六位の袍の色にたとへて六位のまゝ位の昇らずに年經た。
○神わざに云々　祭典神事（かみわざ）の時に懸ける日陰蔓が生えたの日陰蔓の生えたのは神のしわざか。
○砌下　みぎりのもと。軒下の石など敷いた處のもと。
○一ふし　ひとかど、一事。竹の節をかけた。
○あはれてふ云々　古事記に倭建命の「尾張にたゞに向へる尾津の崎なる一つ松あせを云々」の御歌によつていふ。

秋更けてしぐれ降るなる舟岡も松はこがるゝ色なかりけり

社頭松

神のます北野の森の一夜松一夜に春の色やそふらむ

松年久

辛崎の一木の松に貴人（あてびと）の舟待ちつけし昔とはばや

松歴年

松島や松のむらだち岩がねにねざしそめしは神の御世かも

嶺松年久

さゞれ石のむかしよりこそ契りけめ嶺のいはほに立てる松が枝

松契多年

契り置きてふた葉よりしも天雲の梢にかゝる代をや待つらむ

いのち長き人の前に松竹有る家といふことを

住む人の千世のどちとやいつの世に松と竹とをおほし立てけむ

昔うゑし松と竹との陰見れば我が世も高くなりにけらしも

桐

聲知らむたがつま琴となりなましみ山の奥の桐の一もと

○舟岡　洛外紫野の西の丘陵。
○こがるゝ云々　松は紅葉して焦れる色はない。遭がるにかけて舟の縁語。
○北野　京都北野。北野天神社がある。
○一夜松　北野縁起に北野天神の詫宣によつて一夜に松数千本生えたと見える。
○辛崎の云々　萬葉集「さゞ波の志賀の辛崎さきくあれど大宮人の舟まちかねつ」「八隅知し我が大君の大御舟待ちか戀ひなむ志賀の辛崎」
○むらだち　叢り生立つてゐること。
○さゞれ石云々　古今集「我が君は千世に八千世にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで」
○千世のどち　千年のつれどうし土佐日記「見渡せば松のうれごとに住むたづは千代のどちとぞ思ふべらなる」

水郷鳥

おしてるや堀江の水に住む鳥のなには都の跡ぞのこれる

高島のあと河浪のおともせで寄するは鷺のあさるなりけり

暮林鳥宿

河上の一むら林暮れがてに見ゆるは鷺のねぐらなりけり

鶴立洲

君が代にいく世へぬらむうな上や沖つ洲崎に立てるあし鶴

浦鶴鳴月

眞なご路を月にみがける玉の浦やはなれ小島にたづ鳴きわたる

名所鶴

よる浪に八千年馴れてあしわかのうら安げにも見ゆるたづかな

雨中鷺

かきくらし雨もふる江の夕ぐれにみの毛ぬれつゝ鷺たてる見ゆ

曉更鷄

またるべき物とも知らず庭つ鳥かけてうらみし昔をぞ思ふ

鷄

○おしてるや　なにはの枕詞。
○堀江　攝津難波江の堀江。
○なには　鳥の名には都鳥といふに難波をかけた。萬葉集「船ぎほふ堀江の川の水上に來居つゝ鳴くは都鳥かも」
○高島のあど河　近江高島郡安曇川。萬葉集「高島のあど河波は騷げども吾は家思ふ宿りかなしも」
○暮れがてに見ゆる　暮れさうになく見える。
○うな上　海べ。海のほとり。
○眞なご路　眞砂のある所。
○玉の浦　紀伊東牟婁郡。萬葉集「荒磯よりもまして忍ぶか玉の浦はなれ小島の夢にし見ゆる」
○あしわかのうら　夫木抄紀伊とす。葦の若いのに和歌の浦をかけたものか。源氏物語若紫「あしわかの浦にみるめは難くともこは立ちながら返る波かは」うら安げとかけた。
○かきくらし　暗くなつて。
○ふる江　夫木抄武藏國とす。雨の降るをかけた。
○みの毛　鷺の頸に垂れた長い毛。蓑は雨の緣語。
○庭つ鳥　鷄。かけの枕詞。
○かけてうらみし　伊勢物語「夜が明けば狐にはめなむくだかけのまだきに鳴きてせなをやりつる」

沖つ浪千たびくだくる岩角におりゐる鷲の聲もすさまじ

鵜

風荒く夕浪よするはなれそにあなうとおのが名にやわぶらむ

鴛鴦鳥を籠に入れておこせけるに

中々に八重垣こもる心地にてならべる鴛ぞ羨まれける

猪

千よろづの仇にむかひて走り猪のかへり見せぬを心ともがな

龍

かくるれば硯の水を住みかにて雲居をわたる龍ぞあやしき

藥

いく藥富士の煙にたぐへずは其の代の人に今もあはましを

言の葉

葦かびのもえし神代の古ごとも言の葉にこそ世に傳へけれ

ふみ

かくぞとも人はしらゝの濱千鳥跡見るごとに袖ぞぬれける

大木曾や木曾のかけはしふみ見ずばかしこかる世の事を知らめや

○はなれそ　離磯。離れて海上に遠くつき出た磯。
○あなうと　あな憂に鵜をかけた
○中々に　籠にこめられて却つて
○八重垣こもる　幾重にも作つた垣のうちに夫婦睦ましく籠る。
○かくるれば　龍が小さな水の中に隱れれば硯の水を住みかとして
○いく藥　生くる藥。不死の藥。
○富士の煙　竹取物語に不老不死の藥を富士山の頂で燃した物語。富士に不死をかけた。
○葦かび　葦の芽。
○神代云々　古事記「國稚く浮脂の如くして海月なす漂へる時に葦芽のごと萌えあがる云々」
○しらゝの濱　紀伊國牟婁郡白良濱。人は知らずとかけた。
○跡見る　鳥の跡は筆跡。
○大木曾　信濃西筑摩郡木曾川沿の山谷を木曾といふに添へた語。
○ふみ見　踏みに文をかけた。
○かしこかる世　恐ろしい世。木曾の桟道の危險なのをかけた。

ふみ見ればたのしかりけり石の上ふりにし世々の友をあまたに

鏡

たをやめの櫛笥の鏡心さへうつらばいかに優しからまし

弓

ふりにけるてぶりうたはむ梓弓本の御世にも引きかへしつゝ

冠

淨見原ひじりの御代のみことのりいたゞきまつるかうぶりぞこれ

布

神わざの麻ぬの衣神の世のてぶりおぼゆるよそひなりけり

南部の盛隆がみちのくの鹿角郷といへる所より出せる紫にて染めたる布をおこせて「武藏野の若紫にめなれては色もあはれもふかからずこそに」といひおこせければ

むらさきのねもごろ君がおもひこそ心の色の深さをぞ知る

名取川の埋木もてつくれる櫛に歌書きてよと乞はれて

宮人のよゝの詞に名とり河名はあらはれし底のうもれ木

琴をかりて返すとてと云ふを題にて

○石の上　ふるの枕詞。
○櫛笥　婦人の化粧具を入れる箱
○ふりにけるてぶり　古風の歌。
○梓弓　もとの枕詞。
○引きかへし　引くは弓の緣語。
○淨見原ひじりの御代　天武天皇の御代勅して朝官の服色冠を改め制定し給うたのをいふ。
○神わざ　神を祭ること。
○神の世のてぶり　神代の風俗。
○鹿角郷　羽後國鹿角郡。
○ねもごろ　眞心から深切。紫草の根とつゞけた。
○名取川　陸前國。
○宮人云々　代々大宮人が歌によんで有名になつた名取川。古今集「名取川瀨々の埋木あらはればいかにせむとか逢ひ見そめけむ」

玉琴よひきはなるとも明日よりは下樋にかよふ風となりなむ

倭琴

大八洲國の名におへる琴にこそ神代のまゝの音は殘りけれ

いかり

大船をとむるいかりの綱手繩心強くも見ゆる君かな

はかり

おふけなく心にかけてしのぶかなはかり知られぬ千代のふるごと

笭箵

紫の根はふよこ野の初若菜かたみにつむもゆかりならずや

人のもとむるによりて硯のふたに

おのづから靜けきものの世々をへて盡きぬ例を見る石ぞこれ

やんごとなきわたりのよろこびごとに文車まゐらするにそふる歌

めぐりくる千代の春秋言の葉を猶積みそへむ文車(ふぐるま)ぞこれ

阿武隈河の埋木して文臺作りてそれに歌書きてよと杉田氏がこへるに

言の葉の花咲き出でつかかる代にあふくま河の底のうもれ木

人の乞ふまゝに書きてあたへけるものをいとよくよそひなしてそれが箱

○ひきはなる　引きは琴の縁語。
○下樋　琴の甲と裏板との間の樋のやうなうつろの部分。
○倭琴　やまとごと。わごん。東琴。古代から固有の樂器。六絃。
○いかりの綱手繩　碇の引綱。碇に怒りをかけて。
○おふけなく　身分に相應せず。
○かけて　秤(はかり)の縁語。
○笭箵　かご。
○紫の根はふよこ野の　紫草の根が廣がる橫野。橫野は河內國澁川郡。
○かたみ　筐。かご。互に摘むのを言ひ掛けた。
○見る石　硯の字。
○文車　ふぐるま。書籍をのせて家の中を運ぶ小車。
○めぐりくる　春秋がめぐり來るめぐるは車の縁語。
○文臺　ぶんだい。短册書籍などのせる机。
○あふくま河　逢ふ意をかけた。

のふたに歌書きてよといへりければ

上つ瀬をとめつゝ見れど水ぐきの底ひをえやは汲みてしるべき

閑居

里人のとふもかならずいとはねど葎ぞ門をとぢはてにける

一すぢのかけひの水とわれのみぞ此の山陰にすみはてぬべき

眺望

葛飾の國府より見れば一むらの布ひきはへし刀禰河の水

あはと見る安房の海吹く汐風にうかぶ木の葉やあまのつり舟

伊勢じまや汐干のなごり見渡せばたふしの崎に玉藻刈るなり

橋立や松風遠く音づれて與謝のあま人袖かへる見ゆ

湖水眺望

布施の海や小舟よせけむ宮人の面かげうかぶ垂姫の崎

述懷

いたづらに身は老いぬともかくばかりうき事もなき世をばうらみじ

しづけかる時にあひつゝ花にあき月にあくがれ我が世つくさむ

水沫なすはかなきが世に多かるをうれしくも身は老いにけるかな

○とめつゝ見れど　尋ね求めて見るけれど。
○水ぐき　筆。筆跡。水茎の底ひ　筆跡の心の底。
○かならずいとはねど　必ずしも厭ひはせぬが。
○すみはてぬべき　最後まで住み果てるだらう。水の澄むをかけた。
○葛飾の國府　下總東葛飾郡にある下總の國府の址。今の市川町國府臺がその址といふ。
○一むら　むらは布帛の巻いたのを數へる語。
○あはと見る　淡しと見る。薄くかすかに見える安房。
○伊勢じま　古志摩國を伊勢島と云つた。
○たふしの崎　志摩答志島の東端手節崎、萬葉集「釧つく手節の崎に今もかも大宮人の玉藻刈るらむ」
○橋立、與謝　丹後與謝郡。
○布施の海　越中射水郡。
○小舟よせけむ宮人　萬葉集巻十七に大伴家持がこの海に遊んだ歌が載つてゐる。
○水沫なす云々　水の泡の如くはかなく死んだ人が多いのに。

名をさへに草の原にはくたさじのあらまし事もおふけなの身や

花やうき月やわびしき月花のあらむ限りは世をばかこたじ

天の下しづけかる世にあへる身はさらにみ山の奥ももとめじ

寄月述懐

月をのみなど惜しむらむいたづらにわがよ更け行く身をば思はで

寄花述懐

谷陰の老木のさくら風だにも知らで中々のどけかりけり

むかしをこふ

いたづらに過ぐる月日はをしからで昔の遠くなるがわびしき

敷妙のふりし枕にとありけむかくありけむといふがはかなさ

人の三年の忌に、春懷舊

天がけるたまの行くへをしたひわびあがる雲雀のねをや鳴くらむ

牧村乃自が越前國にてみまかりて三年に成りけるに、春懷舊を

鴈がねのこしぢへ歸る聲きけばことづてやりし人ぞ戀しき

人の一めぐりに、夏懷舊

見し人は面影もなしめぐり來てけふにあふちの花は咲けども

○くたさじ云々　名を朽ちはてさすまいといふ豫期も身に相應しない、だいそれた豫期だ。
○花やうき云々　花は憂いものだらうか、決してさうでない。月は侘しいものだらうか、決してさうでない。
○天の下云々　天下太平の世。
○月をのみ　月ばかりをどうして惜しむのであらう。
○わがよ　夜と世とをかけた。
○風だにも云々　風さへも知らないで、散る心配もなく。
○昔の遠くなる　生活の過ぎ去つた事がだん〳〵古い事と隔たつてゆくのがつらい。
○敷妙の　枕の枕詞。
○とありけむ云々　あのやうだつたかうだつたと枕に話すのが情ないことだ。
○天がけるたま　大空をかけまはる靈魂。
○こしぢ　越路、北陸道。來し路。
○あふち　楝。逢ふをかけた。

高辻少納言殿の百年の忌に、夏懷舊といふ事を

今も猶花たちばなや思ふらむ昔ふれにし君がみ袖を

人の二十三年の忌に、秋懷舊

昔おもふ眞袖の露にいくめぐり秋のなかばの月はとふらむ

季鷹縣主の遠つ祖山本永久縣主代々賀茂の大神のみやつこなるが百年の忌に、秋の懷舊といふ事を

百年のむかしおぼえて神山のやまもとてらす月ぞくまなき

人のめのみまかりて七年に成りぬるに、寄藤懷舊といふ事を

今も猶花こそにほへ藤浪の色にかよひし人はなき世に

父君のおもひにこもり侍りけるにこぞの此のごろなむ荷田御風がみまかりぬる事をおもひて御風が叔母なるたみ子へよみておくりける

こぞをしのび今年の秋をなげきつゝぬるゝが上にぬるゝ袖かな

人の一めぐりに、寄風懷舊

桐の葉の一葉散りにし夕より秋てふ秋の風ぞ身にしむ

寄時雨懷舊

村しぐれいくたび袖にかよふらむ定めなき世を思ふ頃

○今も猶云々　古今集「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」
○眞袖　兩袖。山家集「白妙の衣重ぬる月かげのさゆる眞袖にかゝる白露」
○季鷹　賀茂季鷹。
○賀茂の大神のみやつこ　京都賀茂神社の神官。
○むかしおぼえて　昔も思ひやられて。
○やまもと　麓。
○人のめ　人の妻。
○おもひにこもり　喪に籠り。
○荷田御風　在滿の子。
○人の一めぐり　人の一周忌。

八月なかば諸鳥がみまかりければ

ひとりのみ鳴きやわたらむ秋霧に友まどはせる天つ鴈がね

同じ人の三年の忌に、寄書懷舊

ふみ見ても袖ぞぬれけるふりし世に心をよせし友をしのべば

人の子のみまかりけるに、秋無常を

立ちまよふ峯の浮雲野べの露さだめなき世の秋を知れとか

錦なす花野はあせて花と見し露も消え行く秋のくれかな

岩倉入道殿のみむすめ勝子進の君のみたちにありてみまかられしに、寄露無常といふ事を

限りなき名は空しくて武藏野の露やあだなるたぐひなるらむ

知直が母のみまかりける頃、春無常といふ事を

來む秋と契りもおかで別れ行く鴈はこの世のならひなるらむ

人の七年の忌に、秋無常

夕ぐれの雲のはたてをながむればかりは七たび音づれにけり

東下野守常緣ぬしの三百年の忌に寄道釋教といふ事を人のよませけるに

言のはの薫りを道のしをりにて御法の花を今や見るらむ

○諸鳥　鵜瀬諸鳥。縣居門人。
○秋霧云々　後撰集「聲たてて鳴きぞしぬべき秋霧に友惑はせる鹿にはあらねど」
○ふりし世云々　古代の學問に心を寄せた友。
○さだめなき世　老少不定の無常な世。
○みたち　御館。
○限りなき名云々　武藏野は廣々として限りも果てもないといはれてゐる、その永久無限といふ名は實が伴はず。
○雲のはたて　雲が旗のやうにたなびいてゐるのをいふ。
○東常緣　美濃國郡上の城主。歌人。文明三年古今傳授を宗祇から受けた。
○道のしをりにて　道案内として
○御法の花　法華をかけた。

たみ子が十三回に花のもとに昔をしのぶといふ事を縫子がよませけるに

春ごとにしのぶもあやな朽ちぬ名はあだなる花のたぐひならめや

去にし年花散りしよりさくら木のもとの心を知る人ぞなき

仙臺中納言政宗卿百五十年の忌に盧橘懷昔といふ事をよませられける

いにしへをとふもかしこし其の香さへ世々に殘れる軒のたちばな

知春尼が身まかりしに菊にそへて手向けける

思ひきや折白菊の末の露かけても君に手向せむとは

知春尼が一めぐりにこぞの秋を忍びてといふ事を

さめなばと思ひしこぞの夢よりもうつゝの秋ぞ更に露けき

荷田御風が七年の忌に月に對ひて昔を思ふといふ心を

月見れば涙ぐましも天がけり去にけむ秋はこゝらへぬるを

父君うせ給ひて十あまり三年に成りぬる八月の十三日人々をつどへて月の前に昔をしのぶといふ題にて歌よみて手向け奉るによめる

面影をあふぎてしのび古ごとをふしては思ふ袖の月かな

荷田在滿が五十年の忌に月催舊情といふ事を

秋の夜の月を見つゝも其の名のみさやかに殘る人をしぞ思ふ

○縫子　荷田蒼生子の門人菱田縫子。
○しのぶもあやな　むしやうに思ひ出されてわけがわからぬ。
○とふもかしこし　仙臺の藩公がその先祖政宗卿の古を弔はれるのも尊く畏れ多い。
○かけても　聊かも君に手向しようとは思ひもよらなかつた。露をかける意と言ひ掛けた。
○さめたば云々　尼の死を夢と思つてこの夢が覺めたらよいと思つたその時の露けさよりも。
○荷田御風　冬滿ともいふ。在滿の子。
○天がけり去ぬ　人が死ぬるをいふ。魂が大空を翔りゆく意。
○父君　千蔭の父枝直。
○荷田在滿　春滿の甥でその嗣となつて家學をついだ。

父君の十七年の忌に八月十三日人々をつどへて月似古といふ事を

昔おもふ袖にとひくる秋の夜の月はそのよの月にぞ有りける

同じ時眺望を

漕ぐ舟の雲居に消ゆる沖見れば見し世もかくとあはれなりけり

同じ時おくつきに詣でて

在りし世の恵みの露を思ふには朽ちてもあかぬ袖の上かな

人の七年の忌に、暮天鴈を

ゆふぐれの霧のまよひにいにし人歸らぬ空に鴈は來にけり

中村一鄰が遠つ祖の百五十年の忌に、山雪を

ちゝのみの秩父の山の嶺の雪かくて幾とせ積みか添ふらむ

人の遠つ親の百年の忌に、池水久澄

百年の今日よりをちの千々の世もかくてすむべき庭の池水

姉君桂芳尼睦月二十四日みまかり給ひてけぶりとなしつるからををさめ奉るとて

かたみともせめて思はむ煙だに消えにしからを見るぞ悲しき

靜子は もとみへ子といへるなり いわけなかりしより難波津も何もをしへものしつるに

○そのよの月　その夜に世をかけた。
○雲居に消ゆる　水天相接する沖の雲のある大空に隱れる。
○見し世　十七年前に自分が遭つた當時。
○朽ちてもあかぬ　涙に濡れて遂に朽ちてもまた滿足できない。
○霧のまよひ云々　霧のまぎれに逝つた人。
○ちゝのみの　父の枕詞。
○をちの千々の世　永遠の後の世
○けぶりとなしつるから　荼毘の煙とした遺骨。
○いわけなかりし　幼かりし時。
○難波津云々　習字の初歩も何もかもの意。昔は「難波津にさくや此の花冬ごもり今を春べと咲くや此の花」といふ歌を習字の初めに敎はつたのでいふ。

歌も文もいとよう作り出でてことに常の心おきて人にまさりておのれを父としたしみつるがやよひ十日ばかりに病みて十二日といふ曉にむなしくなりぬるよし靜子がつかへまつる植村の君の北の方より告げおこせたまひあはれなるうたなど見せたまへりければなみだせきあへずなむ

おのが身の老い行くことをなげきてし人ぞ中々はかなかりける

ちゝのみの父としたはれわが子ぞと思ひし事の今はくやしき

身こそ先づもとの雫と思ひしか葉末の露の何のこるらむ

あはれわがあらざらむ世に歎くべき人を歎かむものとやは見し

なく子なす慕ひし人のいかなればわがなき跡をとはむともせぬ

縫子が夫の十七年の忌によみておくる

あまた年もとの雫を歎き來ぬ誰も葉末の露の身にして

縫子がにはかにみまかりぬと聞きて

うつゝある物とはかねてたのまねど夢の中なる夢ぞはかなき

むこ三村親雄がはつ子五月二十日あまり一日あつしく病みてみまかりける七日にあたれる日に手向けける

忘れては猶ありとのみ思はれてなきをなげかぬ時も有りけり

○告げおこせたまひ　告げてよこされて。
○おのが身　千蔭自身をいふ。
○なげきてし人　靜子。
○ちゝのみの　父の枕詞。
○もとの雫　新古今集「末の露もとの雫や世の中のおくれ先だつためしなるらむ」
○わがあらざらむ云々　自分の死後に歎いてくれるべき人を自分が悼まうとは思はなかつた。
○なく子なす　泣く子のやうに我を慕つた人が。
○うつゝある物云々　この世を現在あるものとして頼みにはしないがその夢の世に夢見るのがはかない。
○はつ子　初めて生まれたる子。
○二十日あまり一日　二十一日。
○あつしく病み　重い病氣で。

六月ばかりみまかりける人になでしこを手向くるとて

かくばかり消えなむとてやなでしこの露をあはれと思ひおきけむ

嘯月がにはかに病みて六月の十七日にみまかりければ

語らひし昨日やうつゝ今日や夢おもひさだめぬ世にも有るかな

七月ばかり白寛のよめのみまかりけるに槿（あさがほ）に付けて

立ちならぶ松にはあえで何に此の夕かけ待たぬ花にならひし

人の子の七月四日の日にはかに病みてみまかりければ

はかなさを思ひ知ればや秋立ちて露置きそめぬ草の葉もなき

八月の末土佐國しらせる君かの國にしてみまかり給ひつるに御いらつこの御かたへよみてまゐらせける

海原や雲居のをちに影消えて二度すまぬ月をしぞ思ふ

香取のみくにが妻長月の末みまかりけると聞きてみくにがもとへよみて遣はしける

今よりのしぐれよ霜よいかばかりつまなき牀にさえまさるらむ

本居宣長長月のなかばより病みて二十日あまり九日になむみまかりぬると聞きてかたみに年高くなりぬるものから今更のやうに驚かれて

○松にはあえで　松には似ないで

○夕かけ待たぬ云々　夕方の月影も待たないでしぼむ朝顏の花にならつたものか。

○御いらつこ　若君。いらつこは男子を親愛していふ語。

○雲居のをち　大空の遠く彼方。

○本居宣長云々　本居宣長は享和元年九月二十九日歿す、年七十二。此の時千蔭六十七歲。

伊勢の海や二見の浦の二つなき玉にたぐへし人をしぞ思ふ

わくらばに同じ世にしも立ちへつゝあひも見ざりし事のくやしさ

古ごとの道明らめしいさをこそ萬代までのかたみなりけれ

宣長もおのれも遠つ祖は伊勢國北畠の家より出でてかつ學びの事も縣居の大人に共にことゝひたりしを思へば大方ならず思ひなげかれて

枯れやらで殘るさ枝ぞたづきなき同じ根ざしをかつ思ふにも

十一月ばかり倉持宗壽がみまかりて七日によみて其の家へおくりける

百世とも思ひし松の雪消えにししづくにぬるゝ人ぞおほかる

從純が父にはかに病みてしはすの七日にみまかりければ從純がもとへ

老人のためにをしみし年浪を今はかひなく袖にかくらむ

片山誠之がみまかりければ

いかなればかた山椿八千世もと思ひし人のはかなかるらむ

はやく相知れりける人の身まかりけるころ世のはかなきをおもひて

誰も世は日影待つまの夜の霜殘ると見るも消えずやはある

同じ瀬によらざらめやは流るゝも淀むも水のうたかたぞかし

牧村刀自がおのれへつとにとてかねてこしの國紙をおこせおきたりとて

○伊勢の海や二見の浦の　二つの序詞。本居宣長が伊勢の人であるをかけた。
○たぐへし　比べた。
○わくらばに云々　偶然に同時代に生きてゐながら。
○縣居の大人　賀茂眞淵。

○たづきなき　たよりない。

○年浪を云々　年次に涙をかけて袖に涙をかけて涙に袖濡れる意。
○かた山椿　片側の山に生えた椿に片山の名をかけた。椿は莊子に「上古有二大椿者一以二八千歳一爲レ春以二八千歳一爲レ秋。」によつて文字が同じ所から椿を壽命の長いものにしたので八千代といふ。
○消えずやはある　消えないであるものが皆消えてしまふ。
○水のうたかた　水の泡。
○つと　土産。
○こしの國紙　越前奉書紙。

かの刀自がみまかりてのち同じ御館なる人よりおこせければ其の紙に書いつく

かへる山歸らぬ旅の手向草かきつめよとは思はざりけむ

みつるの弟清照の三十あまりにてみまかりて荼毘のところにて「世の外のけぶりとなりて目に見えぬ花のうてなに立ちやのぼれる」とよみしとみつるがいひおこせければ

立ちのぼる煙の末は跡なくておもひをのみや世にとゞむらむ

其の母刀自が「三十あまり過ぎこし年をはかなくも軒端に消ゆる霜と見すらむ」とよみしがあはれなれば

老いにける松を千代もと思ひ置きて朝の霜と消えし人はも

圓位大德の忌日に雨岡の家につどひて

さくら咲く青根が嶺の苔むしろかぐはしき名をしき忍ぶかな

雪岡大德の師京南禪寺に住めるがこぞの霜月身まかりぬと聞きて二月ばかり雪岡のもとへよみて遣はす

世の中に心とゞめぬ法の師もおもひおきけむ君がゆく末

豐國岡の君一めぐりの御忌日に壽量品の惠光照無量の心を

○かへる山　越前南條郡鉢伏山の山越えを歸山といふ。
○歸らぬ旅　死。
○かきつめよ　書き集めよ。
○みつる　安田躬弦。賀茂季鷹の門人。
○花のうてなに云々　極樂の蓮花の臺にのぼつただらうか。
○おもひ　思ひ。火を言ひ掛けて煙の緣語。
○圓位大德　西行法師。
○青根が嶺　大和吉野山の東嶺。その苔清水といふが西行法師の庵した所である。
○壽量品　法華經二十八品中の第十六如來壽量品。

○雲隠れぬ　雲に覆はれて見えなくなつたに死ぬ意をかけた。

○人のめ　人の妻。

○袖やいかなる　袖は如何にあるか。

○軒のつまなし　軒の端(つま)と妻無しをかけて妻梨の端々しい枝が生えると云つた。妻梨は妻なしにかけて梨をいふと萬葉古義にあるが、國文學の植物考には山梨をいふと。

○印南野　播磨國加古郡から明石郡に亘る野。姫路藩の領内である。

○飾磨河　播磨姫路城の西北を過ぎ、飾磨の西で海に入る船場川。

○みなわ　水の泡。

とこしへに空行く月はくまなきを雲隠れぬと思ひけるかな

姉君こその正月末うせ給ひつるがはや一めぐりになりければ

春がすみ立つを見つゝも去年の今日消えし煙のしのばるゝかな

貞樹がみまかりし父の年の五月在りし世を思ひいでて

たちばなに昔しのびし人もはた今年は人にしのばれにけり

人のめのう月ばかりみまかりけるが三年になりけるう月になむつかはしける

立ちぬるゝ袖やいかなるあづまやの軒のつまなし瑞枝さすころ

人の父の七めぐりに

手向する涙の露も置きそふや過ぎこし秋も七くさの花

姫路の侍從殿うせ給ひしは七年さきの七月十日になむ有りける其の日にあたりて其の御妹戸澤家の大刀自君へ御手向の料にとてたきものを結び机にのせて歌そへてまゐらせける

いつしかも過ぎにし秋は七くさの花の香のみぞ世に殘りける

七とせの今日よりしもや印南野（いなみの）の千草の露は置きまさりけむ

世の中はしかぞ常なき飾磨（しかま）河みなわにやどる秋の夜の月

母君うせ給ひて十三年になりけるやよひ十七日に

春ごとにかへらぬ春をしのびつゝ十まり三つの春はすぎけり

たらちねの母のかたみと思ひこしおのが身さへも老いにけるかな

明阿彌陀佛の十三年の忌にその男萩原氏へよみておくりける

おくるゝもしばしばかりと思ひしにこゝらの年をふりにけるかな

いはひ

筑波嶺のしづくの田ゐをかへす〴〵しげき御蔭をあふぐ諸人

祝言

大御世はしづけかりけり丈夫が手にまく鞆の音も絶えつゝ

社頭祝

葉がへせぬ柏の社に幣まつり常磐に君が代を祈るかな

安濃津知り給へる君の染井の莊の八幡の大神に八月十五日十五首の歌奉らるゝにおのれも社頭祝といふ事をよめとありければ

君が代は千代も絶えめや岩清水いはひまつれる神のまに〳〵

寄日祝

天の原よさしまつれる日の御神照らさむかぎり國は動かじ

○十まり三つ　十三。十あまり三つ。
○たらちねの　母の枕詞。
○こゝらの年　數多の年。
○ふりにける　古くなつた。
○筑波嶺の云々　田ゐをまでは鋤きかへす意につゞけて返すの序詞しづくは常陸新治郡志筑村、筑波山の麓。
○しげき御蔭　古今集序「廣きおほん惠みの蔭筑波山の麓よりも茂く」
○鞆　古昔武士が左臂につけて弓弦が觸れて鳴るもの。萬葉集「ますらをの鞆の音すなりもののふのおほまへつ君楯立つらしも」
○葉がへせぬ　葉のかはらぬ落葉しない。柏(かへ)の形容。かへは榧(かや)の異名。
○柏の社　柏野社。京都。
○幣まつり　幣をたてまつつて。
○安濃津　伊勢の津市。藤堂侯の治。
○染井の莊　江戸郊外駒込。藤堂侯の別邸があつた。
○岩清水いはひまつれる　山城綴喜郡岩清水の八幡を祀り奉つた。
○よさしまつれる云々　御孫の尊にこの國土を寄せ任し奉られた日の御神が照らし給はむ限りは。

寄都祝

古の野中古道よろづ代に榮えむとてぞあらたまりける

寄杉祝

すなほなるてぶりを見せて神代より立ち榮えたる布留の杉村

寄龜祝

松が枝の影さへうつる池水のみどりの龜に代をくらべなむ

寄道祝

小車のかよふ大路の末とほくいや平らけき御代にもあるかな

人の時うしなへりしが四月のはじめにつかさすゝみけるをほぎて

春霞はれ行く峯に松が枝の千年の色はあらはれにけり

人の五十の賀に

白檀弓いそべに立てる岩かげに寄るなる浪や人の代のかず

比叡の大僧都崇純の六十の賀に

千代も猶ときはなるべし大比叡や横川の杉と君がよはひは

伊勢の國人七十の賀に

伊勢の海や寄する白玉ひろふともよむともつきぬ人のよはひか

○すなほなるてぶり　古代の素朴なる風俗。
○布留　大和國山邊郡山邊村布留
○杉村　杉叢。杉のむらがり生えた所。
○いや平らけき　いよ〳〵平らかな。大路の遠く平坦なのによせて御代の永久太平を祝ふ意。
○時うしなふ　不遇に陷る。逆境に陷る。
○つかさすゝむ、官が昇る。
○白檀弓　いの枕詞。
○いそ　磯。五十をかけた。
○よむ　數をかぞへる。

○おふけなく云々　身に不相應に思はれたものの。
○あえなむ　あやからうと。
○ほぎ歌たうびぬる　祝の歌を賜はつた。
○よごと　壽詞。祝ふ詞。
○言靈云々　靈妙な國語の助け給うて幸福を與へられたことは明白である。
○大井川　桂河の上流嵐山の邊でいふ。
○檜破子　檜物の折の辨當箱。
○桃の花云々　桃の花の下に水の流れてゐる繪をかいて。
○水上とめて　桃花源の仙境を求めて。陶淵明の桃花源記による。
○雲かゝる世　舊い松となつて樹に雲のかゝる世。

今年むそぢになりにければほぎ事せむと五百子直蔭らのいふにかく數にもあらぬ身に賀などいはむもおふけなくおぼゆるものから昔より人の子のすめるわざにておのれもはた父君を九十のよはひまでいさゝか祝ひまゐらせつるなればそれにしもあえなむとていふまゝにものし作ればしたしき友がきよりやんごとなきわたりまで春の祝といふを題にてほぎ歌たうびぬるはまことに生けるかひありていと嬉しくなむさてよみける

ながらへていざ試みむ花鳥の色にも香にもあく世ありやと

皆人のいはふよごとに言靈(ことたま)のたすけまさなむことはしるしも

都に住める雪岡大德の師の七十の賀に霞をよめる

春さればかすみ流るゝ大井川君こそくまめ千々といふ世も

岩村の君の御母君の七十の賀に檜破子を洲濱のさまにして桃の花のもとに水流るゝかた作りてそれに添へける

桃咲くや水上とめて住む人の千代のよはひも君にとてこそ

人の八十の賀に、春祝

子の日する野べの小松の千年へて雲かゝる世も君こそは見め

越前の高野納が父の八十の賀に、春祝を

八汐路の浪路かすめる氣比の海のいや遙かなる君がよはひか

人の七十賀に、夏祝

年毎にぬくやさ月の玉の緒に長きよはひをかけて契らむ

人の八十の賀に、秋祝を

八束穗の足穗の稻城（いなき）今年より猶や千歲を積まむとぞ思ふ

人の七十賀、秋祝言

五百しろの秋の足穗のいなかづらかけて千年もたのもしきかな

人の六十賀の屏風に、十月池に冰あるかた

この宿の池の冰のひもかゞみ千年をかねてむすびそむらむ

幸子が母の六十の賀に、竹に雪の降りたるといふ事を

吳竹の千ひろのうへに降る雪の高きよはひをつまむ君かな

人の六十の賀に、寄松祝を

雲かゝるをのへの松の梢より高きよはひを經なむ君かも

子の日する野邊の小松のうれごとに日かげのかづら千代かけて見む

豐後の人の六十の賀、寄松祝を

八千代まで神ぞ守らむねぎかはる木綿山松の常磐かきはに

○八汐路　多くの潮の路。
○氣比の海　越前敦賀の海。

○ぬく　貫く。

○八束穗の足穗　幾束もある長い穗の實の熟して垂れ下つた穗。
○稻城　刈つた稻を乾すため竹木を立てたもの。

○五百しろ　幾百と多くの代。代は古、田の租稻の束積を數へた語。
○いなかづら　稻の穗を組んで鬘としたもの。

○ひもかゞみ　冰面鏡。冰の面の鏡のやうなのをいふ。紐鏡にかける。紐鏡は裏面に紐のついた鏡。
○むすび　冰を結ぶに紐鏡の紐を結ぶをかけた。
○千ひろ云々　千尋もある高い上に。

○うれごとに　梢毎に。
○ねぎかくる　祈願をかける。かくるは木綿につゞけた。
○木綿山　豐後國速見郡由布嶽。
○常磐かきは　常磐堅磐。永久不變なこと。

人の六十賀に、松有歡聲

とことはに千代をとなふる聲すなりこや仙人の軒の松風

人の七十賀に、松有歡聲

かぎりなきよはひをもたる松が枝は風の音にも千代ぞこもれる

松代の君の六十賀に、檜松有嘉色といふ事を

千世までのよはひに富める色なれやみつばよつばの軒の松が枝

刈屋の致仕の君の七十の賀に飛鳥井家の出題とて松によせて老をいはふといふ事を

春ごとに色そふ松と君が代はいく千年をか老といはまし

又同じ時に、寄竹祝を

千尋ある竹の林の陰しめて限りなき世をへなむ君かも

白寛の七十の賀に松の作り枝に杯を松がさねの紙して包みて日かげと思はせてみどりの絲もてゆひつけて絲のはしを枝にうちかけたり其の包める紙に書いつけける歌

松が枝の日陰のかづら繰りかへしいく春汲まむ今日のさかづき

人の八十の賀に、椿壽八千春を

○こや仙人云々　これは不老不死の仙人の家の松風であらうか。

○よはひをもたる　齢を持つた。

○みつばよつば　壯麗な家の三棟四棟と建ち續いたさま。

○致仕の君　官を辭して隱居した君。

○いく千年云々　幾千年を老と云はうか

○松がさね　表は萌葱又は青、裏は紫のかさね。

○日かげ云々　日陰蔓と思つて見るやうに綠の絲で杯を結びつけた端を作り枝にかけた。

○椿壽八千春　莊子「上古有二大椿者一、以二八千歳一爲レ春、以二八千歳一爲レ秋。」

うき事も白玉椿八千代まで榮えむ宿の末ぞはるけき

鶴契萬年

仙人の住むやよもぎが島山を負ふてふ龜に世をくらべなむ

人の親の七十の賀に、寄竹祝といふことを

榮えよやみぎりの竹のふして思ひおきては千代と祝ふ子の爲

伊勢の荒木田久老神主が五十の賀に竹不改色といふ事を

色かへぬ竹のみやこに千代かけて千ひろの陰をしめむ君かも

日向守利和君の御母刀自の四十賀、寄鶴祝を

今年より君がへむ世の行末はむれゐるたづや空に知るらむ

甲斐守景衞君の七十の賀に、鶴千年友といふ事を

名にし負ふ都留の郡に住む鶴も君に馴れつゝ千代を經なまし

人の七十の賀に心靜延壽といふ事を

大かたの春秋知らぬ松のとに忘れて經なむ千代や幾千代

伊勢の國人の七十賀に其の國の地の名をわけてよみけるに、忘井を

春秋も忘れてへなむ忘井の清きみもひの千代もあかずて

人の八十の賀に壽の字書きたる杯を五葉の枝につけて

○うき事云々　うき事も知らずことおけた。
○よもぎが島　仙人が住むといふ蓬萊島。
○みぎりの竹　砌の竹。軒下の石など敷いたきはにある竹。
○ふして　竹の節に臥してをかけた。
○荒木田久老　外宮の祠官度會正身の子、荒木田久世の嗣となつて内宮禰宜となつた。文化元年歿、年五十九。
○竹のみやこ　多氣宮、多氣郡。伊勢で齋宮のおはす所。
○都留の郡　甲斐國。
○大かた云々　世間一般の春秋を知らず常に樂である松の戸の家。新古今集「山深み春とも知らぬ松の戸に絶え〴〵かゝる雪の玉水」松の戸は松で作つた戸又は松樹の邊の家の戸もいふ。
○みもひ　水。
○五葉　五葉松。

動きなき南の山の影うけて千代も汲まなむけふの杯

季鷹縣主の許にて神代紀の竟宴しける時に、木花開耶姫を得て

村あしの一よのからにうけひてしまことはほにぞあらはれにける

將軍

弓張の光し空に清ければ鳥のねぐらのあらそひもなし

法師

松の聲谷の清水の音聞きて横川の洞に年ぞへにける

僧侶歸暮

眞柴とり眞清水汲みて歸るらむ横川の暮の鐘のひゞきに

谷樵夫

幾年かなげきこるらむ朝夕に影見る谷のみづはぐむまで

岸頭傀儡

白浪のよるべなぎさに浮寢して新手枕をまかぬ夜もなし

朗詠の題を分ちて妓女を

あやにしき立ち舞ふ袖の追風になびくを妹が心ともがな

老人

○南の山　詩經小雅天保篇「如二月之恆一如二日之升一如二南山之壽一不レ騫不レ崩。」南山之壽は長壽祝ふ辭。
○神代紀の竟宴　日本書紀神代卷の講義が終つて宴を開いてその中の題で歌をよむこと。
○村あし　むらがり生えた蘆。一よ(節)といふ爲の序。
○一よのからに　日本書紀神代卷「豈能一夜之間使人有身者（ヒトヨノカラニハラマセンヤ）」瓊々杵尊が木花開耶姫一夜の契りで妊まれたのを疑はれ姫は殿に火をつけ之れを證せられた。
○うけひてし　誓つた。
○ほにあらはる　外に現はれ出るほは蘆の穗と火を言ひ掛けた。
○横川　比叡山三塔の一。
○なげきこる　歎きに木をかけた
○みづはぐむ　ひざく年老ゆ。谷の水をかけた。
○傀儡　くゞつ。人形まはしをする遊女。
○白浪の云々　白浪の寄する寄るべもない渚に浮寢して毎夜に新しい手枕を枕させぬ夜はない。夜毎に新しい客に接する。
○あやにしき　裁つにかけて立ち舞ふの序さした。上の句はなびくの序詞。

今はたゞむかふもやさし年をへて面がはりせぬ月と花とに

伊　勢

五十鈴川高がや葺けるみあらかに神代の手ぶりいちじるきかも

鹿島神宮

大君のみ笠の山もありといへど鹿島が崎のもとつみやしろ

下總國にまかりける時海上郡荒野村白幡宮によみて奉るは味耜高彦根(あぢすきたかひこねの)命(みこと)をいはひ奉れるなり

東路の國やすかれと海上にしづまりませる白はたの宮

本居宣長が古事記の竟宴に、事代主神を得て

葦原の國さかりつゝ萬代に神の御尾さきつかへまつらす

神あそびの歌になぞらふ

さか木葉に散るや霰をうちはらひ神の御前に立てる人長

さつをらがひくや槻弓本末の歌遊びする面白の夜や

小忌衣大みの衣袖たれて神の御前にとよのあそびする

神　祇

御劍をいはひそめてし昔より代々を守ります布留のみ社

○やさし　恥かしい。
○面がはり　顔つきのかはること。
○高がや　しの薄をいふだらうと。
○みあらか　御殿。神殿。
○神代の云々　神代の風が明らかに見える。
○大君の　みかさの枕詞。
○み笠の山　鹿島神宮のまはりの山。山中に御笠の社がある。大神の冠り給うた兜を納むと傳ふ。
○もとつみやしろ　本社。
○味耜高彦根命　大國主命の子。
○古事記の竟宴　古事記の講義終つて宴を開いて各古事記中から題をきめて詩歌を作ること。
○事代主神　大國主神の子。
○葦原の國云々　葦原の中つ國を領有された大國主命及び其の子事代主命は葦原の國を離れ天孫に歸順した。神の御尾さきは天孫に歸順する神々の先鋒となり殿將となつて仕へ奉るの意。古事記。
○神あそび　神樂歌。
○人長　神樂の舞人の長。
○さつをら云々　獵夫等が引く檀の丸木の弓。本末の序詞。
○本末　神樂の時歌ひ手が本(一)末(二)に分れて本歌末歌を奏する。
○小忌衣　大嘗會などの時の裝束の上に著る單の服。
○大み　小忌衣を著ないもの。
○とよのあそび　豐の神樂。豐はゆたかに大いなる意、美稱。
○御劍云々　大和布留の石上神社は神武天皇御東征の靈刀を奉祀したのでいふ。

いはふなる神の御名さへかぐはしき春の梅津に幣まつらばや

家に歌よみける時神祇を

武藏なる磐井の森の國つ神常磐堅磐に世を守るらむ

曉神祇

千早振神代おぼえてあかつきの長鳴鳥に明くる御戸かな

四海淸

筑紫の海蝦夷の千島の沖かけて浪たたぬ世は濁るともなし

披書逢昔

かしこきや奈良の都の宮人と語らふものはふみにざりける

行路待人

椿市（つばいち）の路の行く手の歌垣にばひあひがたき人もあはなむ

幸逢太平代

大御代はのどけかりけり春霞二荒の山に立ちそめしより

關山月といへるから歌の題を

あげまきがかへる山路の笛の音も月もすみわたる足柄の關

かざし

○いはふ云々　山城葛野郡梅津の梅の宮は嵯峨天皇の皇后橘嘉智子が其の先祖を祭られたといふので、神の御名橘の香はしきと云つた。
○磐井　武藏荏原郡鈴森に磐井神社がある。
○千早振　神の枕詞。
○神代おぼえて　神代も思はれて
○長鳴鳥　鷄。
○かしこきや　すぐれたことよ。
○ふみにざりける　書にぞありける。
○椿市　大和磯城郡。
○歌垣　男女集まつて歌をうたひかはす遊び。
○ばひあひがたき　互に爭ひ奪ふことも出來ぬ。
○二荒の山　下野國日光山。のどかな春霞が日光山に立つは德川幕府の德化と頌した。
○あげまき　總角（あげまき）に髮を結うた幼童。

神さぶる三輪の檜原に立ちまじりかざし折りけむ昔とはばや

しづく

妹まつと人や見るらむかりそめにやすらふほどの山のしづくも

高

香久山の峯のさかきの上つ枝にかけし鏡とてれる月かも

近

昨日まではるかにこそは思ひしか袖さしかへてぬる夜有りけり

山の井に影をうつせば久かたの雲居の月を手にむすびけり

緑

位山嶺の若葉のみどりさへあけにうつろふ秋をこそ待て

あもりづく青香久山の眞さか木は神代よりこそ緑なりけれ

人々五色の歌よみけるに黑を

わたの原夕浪黑く立ちくめり熊野の沖に鯨寄るころ

妙法院の宮の月次の御題に、心といふ事を

雪をしのぎ風にまかせておのがじゝ松も柳も心ありけり

同じく思といふ事を

○三輪の云々　萬葉集「古にありけむ人も吾がごとか三輪の檜原にかざし折りけむ」
○妹まつ云々　萬葉集「足引の山のしづくに妹待つと吾れ立ちぬれぬ山のしづくに」
○香久山　大和磯城郡。
○さかきの上つ枝　榊の上の方の枝。
○袖さしかへてぬる夜　袖をさしかはして寢る夜。
○山の井云々　山の井に月が影を映すので。
○久かたの　雲の枕詞。
○位山　飛騨國。
○みどり　緑の袍は六位の著用。
○あけ　赤。緋の袍は五位の人が著用する。あけにうつろふは赤に移る。
○あもりづく　香久山の枕詞。
○立ちくめり　浪が立つて來るやうだ。
○おのがじゝ　松も柳も各自にそれぞれ。

思はじと思へどものを思ふこそ心の外の心なりけれ

同じ宮より關といふ文字書きて鷄をゑがけるに歌書きてよとおほせごと有りければ

古の長鳴鳥や今も世に關の戸あくるはじめなるらし

同じみちの人に乞はれて畫がきの芭蕉をよめる

忘れてはあしたの雨の音を聞き夕の風に招くとぞ見る

君恩如雨露

武藏野のおどろがもとの小草すら惠みの露にもれずぞ有りける

六月ばかり雨岡がもとにて樂所の人々調樂しけるに淸風入管絃といふことを

いと竹の聲や雲居にひゞくらむまだきかよへる天の河風

林下幽閑氣味深

人とはばいかゞこたへむ奥山のしげみがもとに住める心を

草堂深鎖白雲閑

世の常のひえを外山に住む庵はたゞ白雲にとざされにけり

とこしへにとざせる門をたどらずて夕はかへる軒の白雲

○古の長鳴鳥云々　古支那函谷關では長鳴鳥卽ち鷄の聲で關の戸をあけた。鷄は今の世も夜明けの戸あけるはじめだ。

○忘れては　繪であるのを忘れて實際の雨風に動く芭蕉と思ひちがへる。

○おどろがもとの小草　草や雜木が生え亂れてゐる下の小草。賤しい民をたとへていふ。

○いと竹の聲　管絃の聲。音樂。
○まだき云々　早くも天の河の川風に響が通つてゐるから大空に音樂が響くことであらう。
○林下幽閑云々　和漢朗詠集「人間榮耀因緣淺、林下幽閑氣味深。」老來生計といふ題で白樂天の作。全詩は白氏文集卷三十三に出づ。

長恨歌の句をさぐりてよみけるに養在深閨人未識といふにこゝろを

しるらめや賤がかふこのまゆごもり恐き御衣に織りあへむとは

在天願作比翼鳥といふ事を

夜と共にかはす眞袖をそのまゝに翼となして天がけりなむ

雪月花時最憶君

入るを恨み消ゆるを惜しみうつろふを歎くや同じ心なるらむ

自寛の觀音の入佛供養するにまかりておの／＼普門品の心をよめるに衆怨悉退散の心を

やぶしわかぬ春の光に雪消えて草はこと／″＼萌えいでにけり

神代の事も

かしこきや神代の事もますらをが手わざにすなる天の檀弓

門さしてあけざりける所にて

松の嵐たゝく水鶏の音にのみはかられにける宿にしあるらし

松に露のかゝれるをおとさず折りて

かりそめにまつと告げこす言の葉も露ちらさじと思ふばかりぞ

春に心よせたる人のもとに

○長恨歌　白樂天の七言長篇の古詩。
○賤がかふこ云々　賤しい者が飼ふ蠶が繭の中にこもつてゐるやうに楊家の少女まだ深窗にこもつてゐる。
○恐き御衣　畏れ多い天子の御衣にこの繭から織りえようとは誰が知るだらうか。
○在天願云々　長恨歌の句。
○眞袖　兩袖。
○雪月花時云々　白樂天の寄二殷協律一詩の句。
○入るを云々　月の入るを恨み雪の消えるを惜しみ花の萎みかはるを歎くことは君も昔も同じ心だらう。
○觀音の入佛供養　觀世音菩薩の像を迎へ入れるために行ふ法會供養。
○普門品　妙法蓮華經の第二十五品觀世音菩薩普門品。
○やぶしわかぬ云々　古今集「日の光やぶしわかねばいその上ふりにし里に花も咲きけり」
○門さして　門を鎖して。
○松の嵐云々　松風や水鶏にはかりだまされた家らしい。
○言の葉も云々　葉も露もちつとも散らし落すまい。露に決して少しもの意をかけた。

花にのみ心をよせば唐錦こゝろも立田の神や恨みむ

同じ題にて長枝「さやかなる月の夜頃のあはれさも知らでや人の春をめづらむ」といへる返し

秋にのみよるとは知らでかすむ夜の月と花とに君をまたれし

世のはかなき事をいひて法師にやなりなましと思へど思ひすてぬ事といひてといふを題にて

朝顔に置くしら露やはかなさを思へどかれぬたぐひなるらむ

鎌倉の君の贈答會にかしら白き女にといふ題にて雨岡「昔誰が初子にしめしはてならむ白雲かゝる松の老木は」とある返し

われながら梢の雲ぞむつまじき昔ふれけむ袖のなごりに

帚木の巻の心をよめる

くまもなく語りつくせし宵の雨のふりぬる事を誰かつたへし

夕霧の巻の讀經の聲かすかにといふ心を

風あらき山のまほらに籠りゐて讀むらむ法の文のこゑする

源氏物語の竟宴しけるに夢の浮橋を得て

谷陰にむかしおぼえて飛ぶ螢おもひ消ゆともよそにしられじ

○唐錦　たつの枕詞。秋の紅葉を譬へて言ひ掛けた。
○立田の神　大和生駒郡龍田の神は秋を掌る。

○秋に云々　君が秋にばかり心を寄せてゐるとは知らないで。
○かすむ夜の月　春の朧月。
○世のはかなき　世がはかなく無常であると云つて。

○誰が初子云々　昔誰が正月子の日に引いてわが物とした小松の果てであらうかこの白髮の老松は。
○帚木の巻　源氏物語の。
○くまも云々　雨夜の品定めに心に殘す所なく語り盡した宵。
○ふりぬる　古くなつた。降るをかけた。
○夕霧の巻云々　源氏物語夕霧巻九月十餘日夕霧の戀してゐる女二宮と母御息所が小野の山莊に居られるのを夕霧が訪うた時のこと。
○山のまほら　山に圍まれこもつた處。
○夢の浮橋　源氏物語最終の巻。
○谷陰云々　浮舟君が小野の谷陰に隱れてゐるがすべて俗事を斷念してゐるとは他には知られないで薫君は思ひを寄せてゐる。

富小路三位貞直卿おのれが著はせる萬葉集畧解を得まほしとのたまへるよしを季鷹縣主より聞けるまゝに參らせければよろこばせ給ひて御消息のはしに「かげあふぐ心のはてもなきぞとはくまなくみえむ武藏野の月」と書きて賜へりければ御返しに

武藏野のを草が上も雲居よりもらさぬ月の影あふぐかな

妙法院一品の宮より長月ばかり刑部卿法印寛常をみ使にてさきに歌奉れるをめでさせ給ひてろく賜はりける時寛常の「音にのみ遠くもきくの香をとめてえならぬ花の色をこそ見れ」とよみて出しければ返しに

見るめなきあら野の菊に宮人の袖ふれむとは思ひかけきや

京の小澤蘆庵に物學べる小野勝義おほやけごとにむ月のはじめこゝにまゐりけるにことつけて蘆庵がもとより「立ちよらばたちもよらせよ橘のかげふむ人は道まどひせじ」といひおこせければ返しに

たぐひなき言葉の花の香をしめて立ちよる人の袖もなつかし

躬弦のもとより年のくれに消息のはしに「年のはに五百枝さしそふ橘のもとに道ふみいゆき通はむ」といひおこせける返し

かぐはしき數ならずともあし引の山橘のやまずとはなむ

○かげあふぐ　萬葉の書のかげを仰ぎ見るのに畧解によつて心殘りもなく明らかになる。
○武藏野の月　千蔭が江戸に居たのでいふ。
○を草云々　草の上の賤しいまでも照らす隔なく雲居から照らす月の光を仰ぐ。
○妙法院一品の宮　閑院宮典仁親王の御子眞仁法親王。光格天皇の皇弟。
○ろく　祿。賞として賜はる物。
○きくの香　聞くを菊にかけた。
○香をとめて　香を尋ね求めて。
○見るめなき　見るものもない。
○橘のかげ云々　千蔭が橘氏である故千蔭を訪ふ人の意。萬葉集に「橘の蔭ふむ道の八衢に物をぞ思ふ妹にあはずて」
○言葉の花云々　蘆庵の老實なき歌の香を袖にしみこませて、師の敎へをよく受けて。
○躬弦　安田躬弦。賀茂季鷹門。
○年のは云々　毎年多くの枝が生え加はる橘の下に行き通はう。
○あし引の　山の枕詞。

京の蒿蹊が消息にしはす四日夜難波の四天王寺へ雷おちて諸堂皆やけぬとて「天の火にもえてなごりも難波寺龜井の水の有るにかは」とよみたりとて書いつけおこせける返事にいひやりける

時の間の煙となれば萬代の龜井の名さへたのまれもせず

何事もかぎり有る世を思ふにぞ龜井の水のさしぐまれける

保田正永が故有りて年頃近江の膳所にこもり居けるが五十に成りぬる年の暮に消息すとて

わがせこを千代もともなへ近江の海八十の湊のたづの村鳥

かゞみ山とぎし心をさゞなみの國つ御神も守らざらめや

さち子はわが父君に物まなびて女ながらかどある人なるが年老いてかしらおろしければよみておくる

はかりなき世をもへななむ茜さす日の入る國の神のまに〳〵

貞直卿より季鷹縣主へ消息におのれがよみ歌のうち二首殊にめでたまへるよしにてみづから書きてまゐらせよとありければ書きてまゐらすとて

武藏野や花かずならぬうけらさへつまるゝ世にも逢ひにけるかな

伊豆國熊坂の村菊池武教といへるがむすめ袖子はいわけなかりしよりふ

○蒿蹊　伴資芳。
○なごりも難波寺　難波になしをかけた。
○龜井　昔天王寺にあつたといふ井の名。
○さしぐまれ　涙を催される。汲むをかけて水の緣語。
○わがせこ　わが親愛する男。保田正永をさす。
○千代もともなへ　千代まで伴へよと鶴に向つていふ。
○八十の湊云々　多くの湊に羣り居る鶴よ。
○かゞみ山　近江。
○さゞなみの國つ御神　近江國を守護し給ふ神。
○かど　才氣。才能。
○かしらおろしければ　剃髪出家したから。
○はかりなき云々　無量の長壽を經なさいよ。
○茜さす　日の枕詞。
○日の入る云々　西の國の佛の教へのまゝに無量壽を生き給へ。
○花かずならぬ　花のうちに數へられぬつまらぬ。
○うけら　朮。蒼朮。をけら。萬葉集「こひしけは袖もふらむを武藏野のうけらが花の色にいづなゆめ」
○いわけなかりし　幼かりし。

み見歌よむことを好みて十四になりける年はじめてよみ歌あまたおこせて筆くはへてよとこふまゝにいさゝか引きなほしてなむやりつるそのはしに書いつけける

色も香も日にけにそはむ花ぞとはふゝめりしよりしるくも有るかな

鎌倉の長温がうからやからの書けるものをあつめて慕親帖と名づけて家につたへむとす其の中にはおのれがかぞいろはの書き給へるゆきかひなどもまじれりおのれにも歌よみてよと乞ふまゝによめる

鎌倉や磯間の千鳥千代かけてとゞめむ跡の數にいらばや

母がたのおほぢ新井秀元ぬしはもと鶴見氏にして遠つ祖より傳へたりし甲冑をおのれひめおきたりしがこたびむこなる三村親雄にあたふるとてよめる

天とぶや鶴見の家の丈夫がかわらは堅し千年傳へよ

古き形の倭琴の柱袋を大和錦して縫はせて根こじたる小松につけて人のもとへやるとて

玉琴に千代もかよはむ春風を松にちぎりて今日ぞひきつる

伊勢の宣長がもとへ驛路の鈴の形にすゞりがめを鑄させておくるとて

○日にけに　日に〳〵。
○ふゝめりし云々　花がつぼんである時からはつきりわかる。
○うからやから　一族。
○かぞいろに　父母。
○ゆきかひ　往復した文書。
○千世かけて云々　後代まで殘すべき筆跡の中に加はらう。鳥の跡は筆跡の意。
○おほぢ　祖父。
○ひめおき　祕藏しておいた。
○天とぶや　かりの枕詞。こゝは鶴にかけた。
○かわら　よろひの古名。
○倭琴　東琴。六絃。古代からの樂器。
○柱袋　琴の柱（ぢ）を入れる袋。
○根こじたる　根ぐるみ引きぬいた。
○すゞりがめ　硯瓶。硯の水入れ。

はゆまぢのすゞろにこふる君があたり音づれをだに絶えじとてこそ

忠賢がまだ老にもいたらざれどよし有りて杖ゆるされける時宮城野の萩の五尺ばかりなるにつけて

君が代は行末とほき宮城野のもとあらの萩を杖にこそきれ

人のもとに炭やるとて

枕づく妻屋さゆらむ夜半だにもおもひおこせと思ふばかりぞ

細倉の君狩り獲給へる猿の皮をたびければかしこまり申すとて

このごろの寒さましらの皮ごろも取りかさねつゝ春を待たまし

細倉の君の家にて柿本大人の影供せられけるに水樹多佳趣といふ事を

榮ゆべき千々の言葉の玉がしは影もくもらぬ宿の池水

ちひさき子のもとに貝を人のおこせ侍りしにといふ題にて

みめぐみに飽等（あくら）の濱の蜑の子もおほしたつめるかひはありなむ

近江の岡村有義千々の松原を住みかとせりければ

一木だに千代はもたるを千々の松しめつる君はかぎりあらめやも

雨岡の家にて庭を松原に作りてといふ事を

陰しげき庭はさながら末の松風にも浪のこゑはありけり

○はゆまぢ　驛馬の通ふ路。鈴にかけすゞろの序とした。
○すゞろ　そゞろ。
○音づれ　音は鈴の緣語。
○杖ゆるさる　宮中又は將軍大名の殿中で出仕の時に杖を用ゐるのをゆるされる。
○君が代云々　あなたの生涯の前途は遠い。
○もとあら　本の方が粗くまばらな。古今集「宮城野のもとあらの小萩露を重み風を待つごと君をこそ待て」
○枕づく　妻の枕詞。
○妻屋　夫婦の寢室。
○おもひおこせ　思ひ起せに火起せを掛けた。
○かしこまり申す　御禮を申す。
○ましら　猿。增すをかけた。
○影供　肖像に物を供へ祭る。
○飽等の濱　紀伊海草郡。
○もたるを　持ちたるを。
○末の松　陸前宮城郡多賀城村末松山。

藤原重忠といへる人のゆくりなく訪ひきて「聞くに今千とせの陰も住吉の松にひとしき名こそ高けれ」といひ入れけるに

おのづから名やふりにけむいたづらに年をつもりの浦のあま人

海上の信太正慶がもとにて

海上や磯山松の陰しめて千とせ榮えむやどにもあるかな

香取の菊國がもとにやどりて

刀禰河に來よる白浪しば〳〵も聞はまくほしきやどりなりけり

出石の君のなり所にて人々歌よみし時花多春友を

入佐山にほふ櫻を千々の春老いせぬ友と君見まさらむ

刀禰川をわたりて眞間にいたりて所々見ありきて

繼橋のいひつぎにけるあはれさを汲みても知るや眞間の井の水

文月二十日隅田川の庵へ夕さりつかた行きてよめる

隅田河岸のはり原暮れそめてねぐらの鷺ぞ猶眞白なる

雜體

物名

○ゆくりなく　思ひがけずふさ。
○千とせの陰　千蔭の名をよみこんだ。
○つもりの浦　攝津國津守の浦に年を積りさかけた。
○しば〳〵云々　白浪が度しげく寄せるその度繁くたづねたい。萬葉集「君が家の池の白浪磯に寄せしば〳〵見ともあかむ君かも」
○出石の君云々　但馬出石郡出石侯の別莊。
○入佐山　但馬。
○老いせぬ友云々　君が櫻を不老の友として御覽になるだらう。
○刀禰川をわたりて　利根川の一支流江戸川を渡つたのである。
○眞間　下總東葛飾郡。
○繼橋　眞間川に架けた繼橋。橋柱を立て板を長く繼いで渡した橋。萬葉集「足の音せず行かむ駒もが葛飾の眞間の繼橋やまず通はむ」
つぎにかけて序さした。
○夕さりつかた　夕方。
○はり原　榛の木の生えた原。
○物名　物の名を他の意に取つて歌によみこむ歌の技巧。

かには櫻

花の枝に何その人か袖ふれてよに懐かしきかにはさくらむ

さうび

鶯のあさうひごゑを鳴きつるは昨日と思ふに春ぞくれ行く

たちばな

東路の國むけませし草薙のたちはなのみもかしこかりけり

きちかう

おもしろき妹がかきちかうき秋も忘るゝばかり千草咲きつゝ

かりをみな

やちぐさの花のさかりも過ぎぬるをみなれかねてもなく蟲の聲

ひともとぎく

誰かこよひともときくらむ古郷の軒ばを過ぐる山ほとゝぎす

もちひ

不知火の筑紫の國のみこともちひの入るかたのまもりなりけり

諸成がかつみを物の名にして秋の心をよめといひければ

白雪はいくかつみけむと思ふまで野にも山にもすめる月かな

○かには櫻　しらかんば(樺木)の異名。
○何その人　いかなる人。
○かにはさくらむ　香には咲くらむ。
○さうび　薔薇。
○あさうひごゑ　朝初聲。さうびを含めた。
○國むけませし　國を平定し給ひし。
○かきちかう　垣近う。
○誰か云々　誰か今宵友と聞くらむ。
○不知火の　筑紫の枕詞。
○みこともち　古勅命を受けて地方に出て其の地を治めた官人。
○かつみ　菰(まこも)の異名。
○いくかつみけむ　幾日積みけむ

ぶどう

わびぬれば物や思ふとうちつけにとふ人さへもむつまじきかな

うづみび

衣うつみひとりのみか聞く人もいを寢ぬ秋の月の夜な／＼

ひをけ

み雪降る外山のかひをけさ見れば春にしられぬ花ぞ散りける

あられ　さゝ

浮世にはあられざりけり今よりはいざさと遠き山路求めむ

ころも　はかま

おひみれどこゝろもとけず此の頃はよそにぬればかまどはなるらむ

もみぢしてころもへなくに散りしけばはかまく惜しき庭の面かな

ひむがし

友をこひむかしを忍びさま／＼に思ふおもひもふかき山里

しもつけ

咲くとしもつげなば行きてみはやさむ昔が垣ねの秋草の花

折句

○わびぬれば　思ひなやんで慰めやうもなく寂しく思つてゐると。
○物や思ふ云々　思ひ煩つてゐますかと、だしぬけに問うてくれる人までも親しい氣がする。
○衣うつ云々　衣うつ身ひとり。砧擣つ人だけ寢ないのではない聞く人までも寢ない。
○外山のかひ云々　外山の峽を今朝見れば。
○あられざりけり　居られない。
○いざさと遠き　里遠き山路をいざ求めむ。
○よそに云々　餘所に寢るから間遠なのであらうか。
○ころもへなくに　頃も。幾程も經ぬに。
○はかまく惜しき　掃かむことも惜しい。さくはむの延。
○ひむがし　東。
○咲くとし云々　花が咲いたとも告げたならば。
○折句　五假名の語の假名を一つづゝ短歌の五句の首においてよむ歌。

空也寺の僧空阿が書ける鉢たゝきの繪にはちたゝきといふ事を句のかしらにすゑて秋無常の心を

はては皆ちぐさの露のたまなれやたれかは終にきえのこるべき

旋頭歌

相聞

忘れむと思へばいとゞ忘られぬ君試みに忘れじとのみ思ひわたらむ

沖つ鳥鷗の住む磯にきよる白浪かつくだけかつみだれつゝ物思ふわれ

契沖阿闍梨が百年の忌に春の懷舊といふ事を人のよませければ

春霞八重立ちこめし八十の隈路を人皆のたどらぬばかりしをりさし君

片山誠之が去年の霜月二十日あまりみまかりけるに其の子其のしるしの石ぶみを春海にこひおのれに歌をこひければよめる

片山に立つ杉が枝をさしのぼる月曇りなく思ひあがりてありし人はも

躬弦が伊勢國へ赴く馬のはなむけによめる

伊勢の海や淸き渚によする白玉眞玉なす言の葉さへにかきつめよ君

○空也寺　京都四條坊門堀川の東空也念佛宗の本山。空也堂光勝寺。
○はちたゝき　瓢簞を叩いて念佛を唱へ歩いた僧。
○沖つ鳥　沖に居る鳥。鷗の形容。
○八十の隈路　多くの入り込み奥まり隱れた所ある路。
○たどらぬばかり　路に迷つて尋ね歩くこともない程明らかに。
○しるしの石ぶみ　墓標。
○思ひあがりてありし人　心氣高くあつた人。
○躬弦　賀茂季鷹の門人安田躬弦
○馬のはなむけ　餞別。
○眞玉なす言の葉　玉の如き和歌
○かきつめよ　かき集めよ。

うけらが花巻七

長歌

子日の遊をよめる歌竝短歌

青丹よし　奈良の都の　大宮に　百のつかさを　召しつどへ　集(つど)へ給ひて　豊明(とよのあかり)　きこしめしつゝ　初春の　初子の今日の　玉はゝき　とる手もゆらに　賜へりし　昔思ほし　玉敷の　たひらの宮の　そともなる　北野の野べに　みゆきまし　小松が原に　大御輿　とゞめ給ひて　君も臣も　酒みづきして　遊ばしし　古き例は　かけまくも　ゆゝしきかもよ　今の世に　今日としいへば　うち日さす　都の外の　天ざかる　ひな人すらに　白妙の　袖ふりはへて　かしこきや　君が御代々々は　八十つゞき　都筑が原に　八百萬　よろづ世かけて　君をほぎ　吾が身を祝(いは)ひ　ものゝふの　八十氏人も　はく太刀の　組の緒しでて　遊ぶなる　今日の子の日は　世々にたえせじ

反歌

むさし野のつゞきが原にうちむれて小松引くなるけふの樂しさ

○青丹よし　奈良の枕詞。
○豊明　宮中で羣臣に賜はる酒宴
○初春の云々　萬葉集「初春の子の日の今日の玉帚手にとるからにゆらぐ玉の緒」
○玉敷の　玉を敷いた如く美しい
○たひらの宮云々　平安城の背面
○酒みづき云々　酒に醉ひひたつて遊び給ひし古い先例。
○かけまく云々　言葉にかけて申すも畏れ多い。
○うち日さす　都の枕詞。
○天ざかる　鄙の枕詞。
○白妙の袖ふりはへて　古今集「春日野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ」
○八十つゞき　數多くつゞいて。
○都筑が原　武藏都筑郡。
○君をほぎ　君を祝ひことぶき。
○ものゝふの　八十氏の枕詞。
○はく太刀云々　佩く太刀につけた組紐の緒を垂れて。

櫻をよめる歌

あら玉の　年の一とせ　百千々の　花は咲けども　花ぐはし　櫻の花は　あづさ弓　春の光の　浦安の　大御國にし　神代より　根ざしそめてぞ　おのづから　わが國ぶりの　ゆほびかに　のどけきさまを　木だちにも　花の色にも　あらはして　きさらぎやよひ　うらゝなる　時を待ちえて　天雲の　あわだつごとく　白雪の　つもれるごとく　國もせに　をゝりにをゝり　白たへに　咲きみだれける　しかれこそ　遠き御代々々　わきがみの　むろ山櫻　大みきに　浮べりしより　宮の名に　櫻をおほせ　宮姫を　さくらのめでと　たゝへつゝ　うたひたまへれ　おしなべて　大御くぬちに　あれいづる　たかき賤しき　此の花を　めでざらめやも　あはれ此の花

葉月半ば病に臥したりけるころ庭の萩盛りなければよめる歌并短歌

秋風の　立ちにし日より　遠方の　野べの八千草　咲きみだれ　蟲の音きそひ　五百しろや　千しろの田のも　ほにいでて　鴈わたるらし　面白き　時のさかりを　おしてるや　難波の海の　あしのけに　なびきこいふし　飛ぶ鳥の　つばさしあらねば　いたづらに　せむすべをなみ　こもりゐて　なけかひくらし　牀のへに　いぬるあひだに　さにづらふ　少女のともが　白玉

○あら玉の　年の枕詞。
○花ぐはし　花美しい。
○あづさ弓　春の枕詞。
○浦安の大御國　日本の大御國。
○ゆほびかに云々　豐かに蹟々として平和なさまを。
○あわだつ　雲が重なり起る。
○國もせに　國も狹い位一ぱいに
○をゝりにをゝり　たわむ程茂りに茂つて。
○しかれこそ　さうあればこそ。
○大みき云々　書紀に履仲天皇が皇妃と磐余市磯池に舟を浮べ遊宴し給うた時櫻の花が御盞に散り落ちたことが見える。皇居は磐余稚櫻宮と申す。
○さくらのめで云々　日本書紀允恭天皇御製に「花ぐはし櫻のめでこと愛では早くはめでずわが愛づるこら」
○大御くぬち　大御國内。
○あれいづる　生まれ出る。
○五百しろや云々　廣い〳〵田の面。しろは田地の廣さをはかる單位。
○おしてるや　難波の枕詞。
○あしのけ　脚氣。難波の海の蘆とつゞけた。
○なびきこいふし　横はりころげ臥し。
○なげかひくらし　歎き暮し。
○さにづらふ　をとめの枕詞。

○ゆらゝに　ゆら〳〵と。
○敷たへの　枕の枕詞。
○しかな歎きそ　そんなに歎きなさるな。
○かたへさらずて　側を去らないで。
○しるしなき云々　かひのないつまらぬ心配をなさるなと。
○いめ　夢。
○ませ　ませ垣。籬。
○ひめみこ云々　寶暦十二年七月桃園天皇崩御、櫻町天皇の皇女(桃園の皇姉)智子内親王(後櫻町)踐祚。
○高ひかる　日の枕詞。
○天傳ふ　ひの枕詞。
○すめ神云々　皇祖の神々の神の御心に議り給うた結果に隨つて。
○天つ日嗣云々　神慮のまゝ天皇として國を統治し給うた。
○遠のみかど　藩府をさす。
○みことほぎ云々　御祝賀奏し申したく。
○遠つ神おやゆ　遠い先祖以來。
○天雲の　ゆく、わかるの枕詞。こゝはたたすにかけた。
○いたたしませば　立ち給へば。御出發になると。
○こゞしき道　險しい道。
○百たらず　八十の枕詞。
○手向ぐさ　神に手向ける物。
○玉しきの云々　玉を敷いたやうな美しい平安の都。

の　玉かづらかけ　紫の　綾ごろもきて　高麗錦　ひもをゆひたり　手にまける　玉もゆらゝに　敷たへの　わが枕べに　つどひ來て　しかな歎きそ　うら若き　昔よりしも　むつみせし　事忘れめや　今よりは　かたへさらずて　朝よひに　われなぐさめむ　しるしなき　物なもひそと　をとめらが　かたらひをると　見しいめの　さめつゝ見れば　にしきあやに　つゝめる子らは　ませのうちの　露にあらそふ　秋萩の花

反歌

しるしなき物はおもはじ秋はぎの花の錦に立ちまじりては

横瀬侍從貞隆主ひめみこ踐祚の御ほぎごと申したてまつらせたまふみ使として都へのぼりたまふを送りまゐらするうた竝短歌

高ひかる　吾が日のみこは　天傳ふ　ひめみこながら　すめ神の　かん御心に　かんはかり　はかり給ひし　あとのまに　天つ日嗣と　神ながら　敷きましにけり　東なる　遠のみかどゆ　みことほぎ　まをしまさまく　思ほして　遠つ神おやゆ　すめろぎを　まもり給ひし　其の氏と　選ませたまひ　天雲の　いたたしませば　いはねふみ　こゞしき道の　百たらず　八十くまごとに　手向ぐさ　幣とりむけて　玉しきの　たひらの都　たひらかに　い

たり給はむ　いはまくも　かしこきかもよ　百しきの　大みあらかに　とよのあかり　きこしたまひて　大君の　よしとのたまふ　大みこと　いたゞき持ちて　青駒の　あがきを早み　明日のごと　歸りきまさむ　事のよろしさ

反歌

木曾の山八十くまごとに玉ぼこの八衢彦の神や守らむ

鎌倉の郷鈴木富長が六十になりけるをまた子長温がいはひごとしける時鶴宿松樹といふを題にてよめる歌竝短歌

八束穗の　たりほの稻の　みしねかる　鎌倉の里に　五百しろや　千しろ垣つ田　かげともに　しゞゆひなして　ときは木の　しゞにおひたる　たか山を　そともにおひて　眞木ばしら　立ちさかえたる　家をさが　うからはらから　しげ樹なす　來よりつどひて　百傳ふ　六十よりしも　千世までとほぎきとよもし　うたげする　けふのむしろに　山松の　梢にすめる　あしたづも　庭におりたち　家をさに　おのがよはひの　萬世を　ゆづるとこそは　聲よばふめれ

反歌

鎌倉やをのへにこだる松が枝のたづこそ君が千代の友なれ

○いはまくも　言はむも。
○百しきの　大宮の枕詞。
○大みあらか　大御殿。
○とよのあかり　宮中で賜はる饗宴。
○青駒の云々　白馬の前脚で地をかき進むことの早さに。
○八十くま　多くの入り込んだ處
○玉ぼこの　道の枕詞。衢に冠らした。
○八衢彦　道路を守る神。
○まな子　愛する子。
○八束穗云々　幾束もある長いよく熟して垂れた穗のみしね(稻)。
○五百しろ云々　廣々した垣のほとりの田のかげとも(南面)。
○しゞにおひたる　繁り生えた。
○そとも　背面。北側。
○家をさ　家長。
○しげ樹なす　茂つた樹のやうに
○百傳ふ　五十の枕詞。
○ほぎきとよもし　祝ひさわぐ。
○うたげ　宴會。
○あしたづ　葦田鶴。鶴をいふ。
○をのへ云々　峯の上に生え延びて枝を垂れる松。

豊後國岡知りたまへる君の六十の賀に六くさのたき物を橘のうち枝につけてまゐらする歌竝短歌

巻向の　珠城の宮に　常世べゆ　八さをもてこし　時じくの　かぐのこのみの　其の種は　大御くぬちの　國もせに　かをりみちけり　青によし　奈良の都に　とよのあかり　きこしめしつゝ　かぐはしき　大みこともて　めでたまひ　たゝへましつる　とこ世もの　花たち花に　よそへつゝ　いやとこしへに　百世ませ　千世ませ君と　いはふ今日かも

反歌

君と共にときはなるべし五百枝さし千枝さしおほふ殿のたち花

萬葉集畧解書きをへけるころ人々と共に題を分ちて陸奥國より金を出せる詔書を賀する歌に追ひなぞらふる心をよめる歌竝みじか歌

かけまくも　あやにかしこし　千はやぶる　神の大御世の　みはかしの　十つかのつるぎ　八さかにの　みづのまが玉　それをしも　國つ寶の　始めにて　天つ日嗣と　しらしくる　神のみよ〳〵　み寶は　たらひませども　あれ出づる　人のこと〴〵　たぬしけく　やすかれとしも　おもほせる　大御心を　神ろぎの　うづなひませか　穴門なる　豐浦の宮に　天のした　まう

○うち枝　金銀造りの造花の枝、臘葉にのせた小袖のおさへにする
○巻向の珠城の宮　垂仁天皇の皇居。
○常世べゆ　常世卽ち外國から。
○時じくのかぐのこのみ　非時香菓。橘の實。四時いつも香しい菓・實の義。
○大みこと云々　元正天皇御製「橘の殿の橘やつ代にもあれは忘れじこの橘を」(萬葉集)
○とこ世もの　常世の國から持て來たもの。橘の異名。
○百世云々　百世千世と幾久しくおはしませ。
○五百枝云々　數知れぬ多くの枝が生えて御殿を覆ふ。
○陸奥國云々　萬葉集卷十七。
○みはかし　御佩刀。劒の枕詞。
○みづの　瑞々しい美しい。
○天つ日嗣云々　天皇として治め來られた。
○あれ出づる　生まれ出る。
○人の云々　人は悉く樂しく安く
○神ろぎ云々　皇祖の神がうけ入れ給ふか。
○穴門なる云々　長門の豐浦宮(仲哀天皇の皇居)に天下を治め給うた氣息長足姬尊(神功皇后)。

し給ひし　たらしひめ　神の尊の　むけませる　三つの韓國　そがなかに　内つみやけと　仕へ来る　百濟のこきし　とりが鳴く　あづまの國の　みちのくの　小田なる山ゆ　くがねをし　ほりてまつれり　昔より　皇御國に　あらはれぬ　み寶さへに　備はりし　ことをかしこみ　神ながら　天にます　神　國にます　神に告げまし　もろ〳〵を　恵み給ひき　しかれこそ　たふとみねがふ　み寶も　ましたらひつゝ　大たから　いやたぬしけく　みをす國　いや安らなれ　萬世までに

反　歌

大君のみたまのふゆに咲き出づる金の花は千代にあせめや

妙法院一品宮のおほせにて山居閑居などの歌書きて奉れとて色紙十ひら賜はれるをこたみ一條右大臣殿の御ともにてまみれる賀茂保考縣主のもとよりおほせごと傳へければ書きてたてまつれりける時にそへてたてまつれるうた並みじかうた

ゆく水の　隅田河原の　下つ瀬に　住むなる鳥の　み空ゆく　つばさなければ　おのが名の　都こひつゝ　あら玉の　年をあまたに　過しきぬ　いでや昔へ　鳥が啼く　あづまのはての　鄙にして　其の國ぶりを　うたへりし

○むけませる　征服し給うた。
○内つみやけ　内官家。上古三韓に置かれた總督府。
○こきし　鞬吉支。三韓の王。
○とりが鳴く　あづまの枕詞。
○小田　陸前小田郡(遠田郡)。
○くがね　黄金。
○ましたらひ　増して足り。
○大たから　大御寶。人民。天皇が御寶として人民を愛撫し給ふ義
○いやたぬしけく　彌楽しく。
○みをす國　天皇の統治し給ふ國
○みたまのふゆ云々　天皇の御稜威御恩恵として咲き出す花。
○千代に云々　永久に色がさめ衰へることはあらうか決してない。
○十ひら　十枚。
○こたみ　此のたび。
○おのが名　隅田川の都鳥。
○あら玉の　年の枕詞。
○鳥が啼く　東の枕詞。
○國ぶり　國風。國々の地方歌。

ためしあればと　武藏野の　あら野のすゑに　かりつめし　言の葉草の　いかなれば　天つ雲居の　あなたまで　きこえあげけむ　しづたまき　賤しき身をも　すてまさぬ　おほせかしこみ　逃水の　にげかくるべき　よしなくて　堀兼の井の　深くしも　思ひめぐらし　ふづくゑに　よるとはすれど　おのが身の　老のさがさへ　くははれば　わなゝかれぬる　みづぐきの　おぼつかなさも　こづみよる　汀になれて　玉かづく　淵だにしらぬ　すさびをば　いかゞはせまし　しかはあれど　かかる御世にし　ながらへて　此の一ふしに　あひにける　わが身のさちを　何にたぐへむ

反歌

かかる瀨もあれば有る世に隅田川ながらふる身を何かこちけむ

大和國添上郡櫟本村治道のもり柹本寺といふに柹本の大人のみ墓ありて歌塚となむとなふる其の寺の僧舜叟御社の修理せむとてこゝに來りけるに幣代につけてたてまつれる歌竝短歌

千はやぶる　神の御代より　言だまの　たすくる國と　いひつげる　神の御國は　うつせみの　世の人毎に　いひ出づる　一言すらも　言靈（ことだま）の　みたまそはりて　くすはしき　み國にしあれば　うき時も　嬉しき時も　眞心に

○かりつめし　刈り集めた。
○しづたまき　賤しの枕詞。
○逃水　川水が地に浸みこんで流れの末が消えるもの。一說草原が遠くから川に見えるもの。武藏野にあつたといふ。
○堀兼の井　武藏國入間郡。
○ふづくゑ　文机。
○老のさが云々　老人のならひも加はつて。老の習ひとして手がふるへた筆跡のたしかならぬも。
○こづみよる汀　木くづが流れよる汀。
○玉かづく淵　玉を戴く淵。
○かかる瀨　かかる機會。
○世に隅田　世に住みをかけた。
○千はやぶる　神の枕詞。
○言だま云々　國語の靈妙なる活力によつて幸福を與へる國。
○うつせみの　世の枕詞。
○くすはしき　靈妙不思議な。

思ふまに／＼　歌ふなる　言の葉にこそ　久かたの　天をとよもし　あらがねの　つちをうごかせ　そこもへば　あやにかしこき　言の葉の　道にも有るかも　國はしも　さはにあれども　里はしも　あまたあれども　すめろぎの　遠き御代々々　うち日さす　大宮所　しめさして　定めたまへる　しき島の　大和の國の　くぬちなる　治道（はるみち）のもりに　むかしより　いはひまつれる　言の葉の　大き聖は　飛鳥の　清見の原の　大御代ゆ　藤原の宮に　其の御名を　あらはしまして　八千年の　今のをづゝに　國もせに　たゝへまつれり　かくしつゝ　いや遠長に　天地の　よりあひのきはみ　此の道を　さきはひまさむ　治道の　大きひじりの　神ぞたふとき

反歌

誰しかもあふがざるべき治道の神のはりたる道ぞこの道

良峯貞樹がこふまゝによめるふづくゑの銘のうた

くしきかも　いましとわれは　たまあへば　あひぬるものと　晝はも　日のこと／＼　窗のちに　たゞ向ひをり　夜はも　夜のこと／＼　ともし火のもとによそりゐ　むつまじみ　おもふ心を　かたみに　言葉とはねど　おのづから　いましは知るや　われはしも　いましを知れり　しづけくて　事な

○久かたの　天の枕詞。
○天をとよもし　天を動かし。
○あらがねの　つちの枕詞。
○そこもへば　それを思ふと。
○さはにあれど　多くあるけれど
○うち日さす　宮の枕詞。
○しき島の　大和の枕詞。
○くぬち　國のうち。
○いはひまつれる　祀つてある。
○言の葉の大き聖　大歌聖。
○飛鳥の清見の原の大御代ゆ　天武天皇の御代より。
○藤原の宮　文武天皇の朝。
○今のをづゝ　今のうつゝ。今現に。
○天地のよりあひ云々　天地のより合ふはてまで。
○はりたる道　新たに地を拓いた道。人丸が新たに開いた歌道をいふ。
○くしきかも　奇なるかな。
○いまし　汝。文机に對して言つた。
○たまあへば　心が合へば合つたものだと。
○日のこと／＼　終日。
○よそりゐ　寄り居。

きからに　常磐なす　すみすりのように　いましは　ひとしきものぞ　いまよりは　われによりてな　われもはた　わが世のかぎり　なれによりなも

棚倉知りたまへる小笠原の君一とせ勿來關の櫻木のなれる石を賜ひけるが今年またかの櫻の花を扇におして歌そへてたまへりけるにつけていささかおもひをのぶるうた並短歌

鳥がなく　あづまの國の　ちはやぶる　人をなごせと　大王の　みことかしこみ　御軍を　あともひ立てて　みちのくに　い行きいたりて　春秋を　あまたへにつゝ　其のあたを　むけ平らげて　かぐはしく　たけき其の名を　語りつぐ　ますらたけをの　眞玉なす　言の葉をしも　殘してし　なこその關の　櫻木の　朽ちし木の根は　常磐なす　いはほとなりて　關の名の　今ものこれる　高山の　嶺のたむけに　あら金の　土に埋れて　ありとこそ　人はいひつれ　今も猶　老木の櫻　をちこちに　立ち榮えつゝ　梓弓　春べになれば　たへのほに　咲きにほへりと　音のみに　聞きわたりつゝ　忍へども　道をた遠み　たれもみな　せむすべなきを　白河や　棚倉の城を　知りませる　君きこしつゝ　み心に　ふりにし事を　深くしも　しのばすあまり　棚倉と　なこそは同じ　みちのくの　くぬちながらも　岩がねの　かし

○すみすり　硯。
○なれによりなも　汝(文机)によらう。
○棚倉云々　岩代國東白川郡棚倉藩主小笠原侯。
○櫻木のなれる石　櫻木の化石。

○鳥がなく　東の枕詞。
○ちはやぶる　人の枕詞。勢ひ強く勇猛な義。萬葉集「ちはやぶる人をやはせとまつろはぬ國を治めと」
○なごせと　和げよと。
○あともひ　率ゐ。
○むけ平らげ　服從させ平定して
○眞玉なす云々　玉の如き歌を殘した勿來關。源義家の「吹く風をなこその關と思へども道もせに散る山櫻かな」(千載集)
○たむけ　越える山路の頂上。峠。
○あら金の　つちの枕詞。
○梓弓　春の枕詞。
○たへのほに　白色の現はれ出るさま。花が白く色に現はれるやう。
○道をた遠み　道が遠いので。
○知りませる　領し治めたまふ。
○しのばすあまり　忍びなさる。思ひ起される餘り。
○岩がね云々　岩石の恐ろしい山

こき眞山　八十隈の　道べなれるを　いそしくも　求め給ひき　そが上に　其の花をしも　見まほしみ　世の人すらも　見まくほり　思はむものと　事はかり　はかりたまひて　花をさへ　こゝら得つゝも　大江戸に　のぼり給ひて　人皆に　しめし給ひぬ　其の國の　來る春毎に　匂へるは　色にも香にも　武士の　ますらたけをの　和魂の　みやび心を　今の世に　あらはさむとか　さくら木の　このねのなれる　いはほこそ　たけくをゝしき　荒魂の　千歳の後に　朽ちせざる　しるしなるらめ　しかはあれど　ふりし世しのぶ　この君の　めぐみしなくば　其の岩も　うもれかはてむ　其の花も　まさめにたれか　見つゝはやさむ

反　歌

ものゝふの其の名と共に千々の春にほひ殘れる山ざくらはも

肥後國熊本の長瀨眞幸やよひばかり古郷へ歸るを送る歌一首竝短歌二首

天地の　はじめの時ゆ　ちはやぶる　神の御面と　たゝへこし　肥の國はしも　神がらか　國さかゆとふ　國がらか　人ぞさはなる　そが中に　はしき吾がせは　かしこきや　皇御國の　上つ代の　書まなびすと　其の君の　きこし給ひて　いやひろに　ましたらはせと　よさし給へれ　葦

〇いそしくも　心から勤めて。
〇見まくほり云々　見たく思ふ。
〇こゝら　澤山。
〇和魂　柔和な心。
〇このねのなれるいはほ　木の根から出來た石。埋木をいふ。
〇荒魂　勇武な心。
〇まさめ　正眼。まのあたり。
〇天地のはじめ云々　天地開闢の時から。
〇神の御面　二神國土生成の時、筑紫島は身一つで面四つあつて面毎に名があると古事記に見えた。
〇さかゆとふ　榮ゆといふ。
〇はしき　愛らしい。
〇其の君のきこし　熊本侯がお聞きになつて。
〇いやひろ　いよ〳〵廣く。
〇ましたらはせ　增し足らしめよ。
〇よさし給ふ　寄託し給ふ。
〇葦北云々　肥後葦北郡野坂。

北の　野坂のうらゆ　押照や　難波のみ津に　たゞ渡い　天傳ふ日の　たてぬきに　い行きめぐらひ　まつぶさに　とひ明らめて　天の下　つどひまつれる　大江戸に　まゐり來まして　玉鉾の　道行きぶりに　思はずも　わがふせ庵の　まけ庵を　とひませしより　たまあへば　あひぬるものと　朝よひに　馴れにしものを　今更に　歸りいなむと　聞きしなべ　心ぞいたきしかはあれど　古郷にしも　家人の　いはひべすゑて　あめつちの　神にこひのみ　またすらむ　事をし思へば　とゞむべき　旅ならなくに　つゝみなく　歸りいまさね　阿蘇山に　うしはき坐す　大神も　まもらひたまひ　不知火の　筑紫のくにの　國もせに　香ぐはしき名を　立てむ君はも

反歌

わかるとも何かなげかむ君が名は千里のをちにかをらざらめや

○

吾はもよ　入江のす鳥　君はもよ　雲居ゆくたつ　春がすみ　翅にわけて　足引の　高ねの花に　うちはぶき　行きこむ日すら　おくれゐて　うちなげをらむ　千里ゆく　つばさにしあれば　あすのごと　天つ雲路を　飛びかけり　またも來まさね　待ちつゝをらむ

○押照や　難波の枕詞。
○天傳ふ　日の枕詞。
○日のたてぬき　東西南北。
○い行き云々　行きめぐり。
○玉鉾の　道の枕詞。
○道行きぶり　途中で行きあふこと。
○まけ庵　曲庵。粗末な庵。
○聞きしなべ　聞いたと同時に。聞くと共に。
○いはひべ　齋瓮。古代酒を入れた陶器の壺。
○こひのみ　祈願して。
○またすらむ　待つて居られるだらう。
○つゝみなく　恙なく。
○うしはき　土地を領して。
○不知火の　筑紫の枕詞。

○千里のをち　千里の遠い所。

○す鳥　洲に居る鳥。
○雲居ゆくたづ　大空をゆく鶴。
○うちはぶき　羽打ち振つて。
○あすのごと　明日の如くすぐに

反　歌

高く飛ぶつばさしあらばさくら咲くあら山中もおひしかましを

下總國海上郡へまかりし時飯沼の丘にのぼりて浪を見てよめる歌竝反歌

夏そひく　海上がたの　飯沼の　岡に登りて　見渡せば　常陸の國と　下つふさの　中に流るゝ　刀禰川は　河遠じろみ　みをはやみ　千里のをちゆ落ちたぎち　ながれ來につゝ　ひんがしの　み空の極み　たゝへたる　大海原の　潮ざゐに　いゆきむかひて　あらそへば　沖波高し　その波は　雪かもふれる　さ綿かも　つかねてあると　見るがうちに　千ひろ百ひろ、白たへの　布はへしごと　ひろごりて　より來るさまは　あま雲に　乘りて空ゆく　わたつみの　龍とふ神か　其の海の　ありそのさきに　島なして　立てる岩ほに　さく浪は　千々にくだけて　天にとび　あられとみだれ　其の岩を　越えゆく浪は　眞白なる　駒か走ると　おもふまで　見のあやしく　その音の　聞きのかしこく　天地の　そくへの波を　ひとかたに　つどへてよする　これの波崎

反　歌

久かたのみ空につゞく潮路より寄せくる浪をけふ見つるかも

○あら山　けはしい人遠い山。
○おひしかましを　追ひ及はうものを。
○飯沼　下總海上郡銚子。
○夏そひく　うなの枕詞。
○遠じろみ　遠く白く見えるので
○みをはやみ　水脈が速いので。
○落ちたぎち　瀧のやうにわきかへつて流れ。
○潮ざゐに云々　潮さす時に浪立つてゐるのに向つて衝突する。
○布はへしごと　布を延べた如く
○わたつみの　海の。
○ありそ云々　荒磯の埼に島の如くに。
○さく浪　高く立つ浪。
○駒か走ると　駒が走るかと。
○見のあやし云々　見て奇妙で音を聞いて恐ろしく。
○そくへ　そきへ。遠く離れた方。
○波崎　常陸鹿島郡波崎（はさき）をなみさきとよんだ。

○靫かくる伴のを　靫をかけて武を以て仕へる武人の所屬の長。
○い行きわたれと　行きわたれよと。渡航してゆけと。
○うづの御手　尊嚴な御手。
○みはかし　御佩刀。
○そびら　背。
○ますらわが　ますらをなる我。
○到らむ極み　到る處は何處のはてまでも。
○行くさくさ　行く時も來る時も。
○さきだてる　さきは波立つ意。
○浪穗のうへ　浪のうへ。穗は高く立つものにいふ。
○うづ汐　渦卷く潮。
○かしこき　恐ろしい。
○ひたつち云々　平地を行く如く。
○またせ　待つておいでなさい。
○おほろか　疎大雑に。一通りに。
○みたま　御魂。
○朝開きせし　朝早く漕ぎ出した。
○霰ふり　かしまの枕詞。
○たゞ向ふ　眞直に向つてゐる。
○夏そ引く　うなかみの枕詞。

この渡崎は、儀渉の剛にむかへたる常陸の崎なり、今ははさきさきとなふれど、もとなみさきといひしならむ、そのをりの日記にくはしくいへり。

もろこしへつかはさるゝみ使人の別れをしみてよめるになぞらへてよめる歌並みじかうた

靫かくる　伴のをひろき　家の子と　えらびたまひて　から國に　い行きわたれと　大君の　うづの御手もて　たまはせる　大御しるしの　みはかしを　そびらに負ひて　いでたてる　たびにしあれば　ますらわが　いたゞきも　たる　大御言　到らむ極み　行くさくさ　事しもあらめや　さきだてる　浪穗のうへも　岩橋を　い渡る如く　うづ汐の　かしこき海も　ひたつちを　いゆくなしつゝ　明日のごと　歸りまゐこむ　またせわがせこ

反　歌

おほろかに思はむものか大君のみたま賜へるわれにやはあらぬ

下總國海上がたの宗錦が四月ばかりみまかりけると聞きてよめるうた並

短歌

東路の　利根の川原の　曙に　朝開きせし　舟こそは　跡もとゞめね　霰ふり　鹿島の埼の　夕暮に　よせてはかへる　浪こそは　行方しられね　昔より　かしまの埼に　たゞ向ふ　とねの河べの　夏そ引く　海上潟に　家居し

て　住めるわがせは　石の上　ふりにし書を　朝よひの　友となしつゝ　よみ出づる　吾が國ぶりも　落ちたぎつ　下れる世々の　言の葉に　心をそめず　天ざかる　鄙にはあれど　白雲の　思ひあがりて　たまあへば　あひぬるものと　山河を　へなりてあれど　玉章の　便りからさず　あまた年　在り經しものを　あづさ弓　春しきたらば　とね川を　みを引きのぼり　吾が宿を　とぶらひ來むと　かねてより　契りしものを　其の河の　水かもかれし　こぐ舟の　かぢかもたえし　春まけて　言かよはねば　朝がすみ　おぼつかなくも　片待ちて　有りしあひだに　卯の花の　咲く月立ちて　ほとゝぎす　鳴くなる時に　みなわなす　君は消えぬと　風のとの　とほとに聞けど　現とは　おもひ定めず　ぬば玉の　夢にかあらむと　こゝら夜を　かさぬとすれど　さめざらなくに

反　歌

とね河の水のうたかたかつ消えてかつあらはれぬ人のかなしさ

土佐國しらせる君のうせ給ひて三年になり給ひぬるに月の前に過ぎにし秋をしのぶ心をよめるうた竝みじか歌

照る月は　あやしきものか　月見れば　あやにかなしも　秋はしも　いかな

○石の上　ふるの枕詞。
○吾が國ぶり　國風即ち和歌。
○天ざかる　鄙の枕詞。
○白雲の　立つの枕詞。あがるにかけた。
○たまあへば　心があへば。
○へなりて　隔たりて。
○玉章の　使の枕詞。便りに冠らした。
○からさず　絕やさず。
○あづさ弓　春の枕詞。
○みを引きのぼり　舟の航路をのぼつて。
○水かも云々　水も涸れたか舟の楫もなくなつたか。
○春まけて　春に向つて。
○朝がすみ　ほのかの枕詞。
○片待ち　片心に待ちて。
○みなわなす　水の泡の如く。
○風のと云々　風の音の遠いたよりに聞いたけれど。
○ぬば玉の　夢の枕詞。
○うたかた　泡沫。
○あやにかなしも　わけもなく嗚呼悲しい。

○うたてある秋　物悲しい秋。
○雲居のをち　遙かに離れた遠方
○玉かづら　掛くの枕詞。
○久かたの　天の枕詞。
○天路しらせり　天を領し治められた。死なれた。
○すめれども　澄んでゐるけれど
○花數云々　物の數にも入らぬ賤しい身と花に譬へて言うた。
○しなひうらぶれ　萎れ悲しみ。

○影かくしてし　影を隱した。

○七月　享和元年。

○ちはやぶる　神の枕詞。
○吾が國ぶり　國風。和歌。
○うつせみ　世の枕詞。
○長道磐の神　伊邪那岐神日向の小門の檍原で禊し給うた時生れまされた神。一説八衢比賣神と申すと。
○さき道　狹い道。
○かにかくに　とやかくと。
○風の音云々　風の音の如く遠い便りに聞いて。
○思ふ物から　思ふけれど。
○こゞしきみ山　險しい山。

る時ぞ　秋といへは　わきてさびしも　常にだに　うたてある秋を　をとと
しの　秋のなかばの　中空の　雲居のをちに　玉かづら　おもひかけずも
てる月の　み影と共に　久かたの　天路しらせり　しかしあれは　こぞもこ
としも　秋立ちて　月はさやかに　すめれども　歸り來まさぬ　君ゆゑに
限りしられぬ　秋の野の　ちくさの花の　花數に　あらぬ小草の　うへすら
も　露置きそひて　よとともに　しなひうらぶれ　なげきするかも

反　歌

月をのみながめられけり中空に影かくしてし秋をしのびて

京の小澤蘆庵春よりやみて七月十日あまり一日によはひ七十あまり九つにてみまかりぬるよし雪岡大德よりいひおこせければよみける歌並みじかうた

ちはやぶる　神の御世より　傳へこし　吾が國ぶりは　うつせみの　世の人
ごとに　誰も皆　歌ひ出づれど　長道磐（ながちは）の　神の守らす　すなほなる　大路
はゆかず　八十くまの　さき道をしも　かにかくに　たどり〳〵て　大かた
は　ありふる中に　天雲に　思ひあがりて　眞心を　立てつる人と　風の音
の　遠音に聞きて　相見まく　思ふ物から　岩がねの　こゞしきみ山　落ち

たぎつ　かしこき海を　三つ栗の　中にへだてて　老の身の　せむすべをなみ　下にのみ　しのべる心　おのづから　かよひやしつる　はゆまぢの　驛のをすゞ　ふりはへて　言傳てしより　まそ鏡　向ひゐつゝも　かたみに言はとはねど　其の人の　面影をしも　見るばかり　思ひなりにて　玉あへば　あひぬるものと　睦まじみ　思へるわがせ　初秋の　露とけぬると　玉づさの　使りに聞きて　現とも　いめともわかず　麻ぎぬの　そでしをりつつ　たゞ泣きに　なき歎かれつ　しかれども　年をあまたに　わがせこが　ひろひ集めし　玉の聲　世にひゞきつゝ　五百千々の　年は經ぬとも　かぐはしき　名は國もせに　殘らざらめや

反歌三つ

限りある世をばなげかじ埋もれぬ名こそ千とせのかたみなりけれ

世々かけて朽ちぬ其の名もわが爲はしばしばかりのかたみならずや

君をおきて聲しる人はなき物を言問はざりし事ぞくやしき

縣居大人みうせましてて三十まり三とせになりたまひける神無月の晦日に竹芝のおくつきのもとにつどひてふるきをおもひてよめる歌竝短歌

四方山の　護りにすとふ　梓弓　末の中頃　いそのかみ　ふりにし世々の

○三つ栗の　中の枕詞。
○はゆまぢ　驛路。驛馬の通る路。
○驛のをすゞ　ふりの序。
○ふりはへて　わざ〳〵。鈴振りとつゞけた。
○まそ鏡　澄明な鏡。向ひの序。
○かたみ云々　互に語りあはねど
○玉あへば　氣心があへば。
○露とけぬる　露と消えた。
○玉づさの　使の枕詞。轉じてふみの。
○國もせに　國も狹いほど國中に
○世々かけて　代々に亙って永久
○聲しる人云々　知音。鍾子期伯牙の故事を含めた。
○縣居大人　賀茂眞淵。
○竹芝のおくつき　品川東海寺の眞淵の墓。
○四方山云々　天下の守りにするといふ梓弓。末の序詞。神樂歌「よも山の守りにたのむ梓弓云々」
○末の中頃　末の世の中頃。
○いそのかみ　ふるの枕詞。
○世々のてぶり　代々の國風。

てぶりをば　忘れいにつゝ　もとつ世に　引きもかへさず　あまた年　經に
けることを　ますらをの　弓末ふりおこし　いそしくも　思ひおこして　菅
の根の　ねもころ〳〵に　さどはせる　世の人皆を　我が大人の　導きたま
ひ　弓弦なす　たゞ一筋に　すなほなる　すめらみ國の　古ごとを　傳へた
まへれ　あら玉の　年もへなくに　古の　學びの道に　村ぎもの　心をよす
る　人さはに　成りにけるかも　かくしつゝ　五百千々の世に　天傳ふ　日
のたて日のぬき　限も落ちず　行きたらはして　いにしへに　立ちかへる世
を　松が根の　遠く久しく　竹芝の　磯山寺の　おくつきを　あふがざらめ
や　あづさ弓　もとつ世しのぶ　ますらをのとも

反歌

今よりの千とせの後に世の人のしきしのぶべきおくつきどころ

紀伊の殿の姫君越の君の江戸の御館におはしてみうせたまひける又の年
御法のわざせさせたまふ時によみて奉りける歌並短歌

言にいでて　いはばかしこし　磐代の　濱松が枝の　八千年も　あくらの濱
の　あくよなみ　和歌の浦わの　わかえつゝ　萬代ませと　世の人の　いは
ふ心は　しらかみの　磯によるてふ　かひなくて　千さといをちの　武藏野

○いそしく　心から勤めて。
○菅の根の　ねもごろの枕詞。
○ねもころ〳〵　ねもごろ。懇。
○さどはせる世の人　迷へる世人
○弓弦なす　弓の弦の如く。
○あら玉の　年の枕詞。
○年もへなくに　年も經ぬのに。
○村ぎもの　心の枕詞。
○天傳ふ　日の枕詞。
○日のたて日のぬき　東西南北。
○限も落ちず　殘る隈々もなく。
○松が根の　遠くの枕詞。世を待つに言ひ掛け。
○あづさ弓　もとの枕詞。
○しきしのぶ　頻りに慕ひ思ふ。
○御法のわざ　御法事。
○磐代　紀伊日高郡岩代。
萬葉集「磐代の濱松が枝を引き結びまさきくあればまた還り見む」松枝を結ぶのは千年變らじと神に祈る風があつたらしい。
○あくらの濱　紀伊海草郡飽等。
○あくよなみ　飽き足る時なく。
○和歌の浦　紀伊海草郡。
○わかえつゝ　若くなりつゝ。
○しらかみの磯　紀伊有田郡白上知らずの意をかけた。

の野のべにつめる　白雪の　けぬるが如く　秋父山　嶺にてらせる　夕月の　隠るゝなして　隅田川　流るゝ水と　とこしへに　歸りまさねば　荒妙の　きぬきる人は　藤白の　み坂の名さへ　うらめしく　名草の山の　なぐさめむ　よしもあらじを　年月は　紀の關守も　とゞめあへず　こぞの今日にし　めぐりくる　み法のことを　聞けばかなしも

反歌

むさしねや雪げの雲にかくろひて二たびてらぬ月の影はも

下總のくに香取の永澤躬國が幼子の七月の末つかたみまかりつとてみくにが母刀自をはじめ家こぞりてなげきあへりと聞きてよみてつかはしける歌竝短歌

時しもあれ　まだ初秋の　しめし野に　おほしたててし　なでしこの　花だに咲かで　何しかも　根さへかれけむ　およびをり　かきかぞふれば　七くさの　數こそたらね　よそにして　聞くだに物は　かなしきを　しめ野守る人　秋風の　立ちてもゐても　忘らえず　しのびやすらむ　秋霧の　思ひまどひて　朝よひに　なげきやすらむ　しかはあれど　もみづる秋の　はゝそ原　露おきそへて　うつろはむ　事をゆゝしみ　心して　いたくな泣きそ

○けぬるが如く　消えた如く。
○隠るゝなして　隠れるやうに。
○荒妙の　衣の枕詞。
○きぬきる人云々　衣きる人は藤衣即ち喪服を著る。
○藤白坂　紀伊海草郡藤白。
○名草の山　紀伊海草郡紀三井寺の上。なぐさめの序とした。

○雪げの雲　雪模様の雲。
○雲にかくろひて　雲に隠れて、死をたとへていふ。

○おほしたててし　養ひ育てた。
○なでしこ　瞿麥。愛撫する子を譬ふ。
○何しかも　しは强め辭。
○およびをり　指折り數へること。萬葉集「秋のぬに咲きたる花をおよび折りかき數ふれば七種の花」
○しめ野守る人　貴人が占有して人を禁じた野の番人。こゝは幼児の野守のやうにその躬國をいふ。
○秋風の　立ちての序。
○忘らえず　忘れられず。
○もみづる秋　紅葉する秋。
○はゝそ原　柞の原。母を言ひ掛けた。
○ゆゝしみ　忌々しくある故。

しめ野もる人

反歌

はかなさを何にたとへむ白露はけぬと見るまに置くなるものを

村田春郷がみまかりて二十とせあまり七年になりける長月ばかりよみて手向けける歌並みじかうた

梓弓　春のさとわの　いほしろを　あらすき返し　かへしつゝ　おもひ出つれば　若苗の　若かりし時　縣居の　田づらのいほに　もろともに　あそばへをりし　友垣は　多かる中に　眞玉なす　清き眞心　呉竹の　直かるみさを　世の人に　似ざりし上に　古の　書見歌よみ　庭まりの　おもひあがれる　其のわざの　世にたぐひなく　妙にしも　ありける吾がせ　春べには　上野の岡の　さくら花　ひとしくかざし　秋たてば　すみだ河原に　すむ月を　ともにめでつゝ　うるはしみ　ありしあひだに　うつし身の　世を長月の　名にも似ず　秋の木の葉に　先だちて　散り過ぎしより　年毎の　花のあしたも　月の夜も　共に見し世を　しのび來て　別れし時は　昨日かも　をとゝひかもと　思ひつゝ　有りつるものを　其の秋ゆ　二十年あまり　七とせの　秋をへにきと　聞くはまことか

○けぬと見る　消えたと見る。
○白露云々　白露は消え幼兒は亡くなつたと見るまに人々の袖に白露が置くのであるのに。
○村田春郷　春道の子。春海の兄。
○梓弓　春の枕詞。
○さとわ云々　里のあたりの五百代と廣々した田をあらく鋤きかへし。
○あそはへをりし　遊びをりし。
○呉竹の　呉竹の眞直なやうに。
○庭まりの　庭でする蹴鞠の上るやうに高く。
○うるはしみ　親愛して。
○うつし身の　世の枕詞。
○其の秋ゆ　その秋から。

反歌

老いにける身をも忘れてなき人に遠ざかる世をおどろかれつゝ

荷田在滿みまかりてみそぢあまりみとせになりにける葉月ばかり秋ふるきを思ふといふことを題にて在滿が妹たみ子が乞ふまゝによめる歌竝短歌

玉敷の　たひらの都　神のます　稲荷の山に　おひ出でて　遠のみかどの　あづまぢに　移しうゑてし　二本の　杉の梢は　久方の　雲懸るまで　おひのぼり　陰をしみゝに　ものゝふの　八十氏人も　此の杉の　二本の陰に　立ちつどひ　きそひよれるを　いかなれや　一本の杉は　過ぎにける　なかばの秋の　つゆ霜に　あへず枯れぬる　しかはあれど　殘る一本の　陰をしも　いやなつかしみ　もろ人の　來よりつどひて　かたりつぎ　いひつぎゆかむ　ありし世の事

反歌

名は世々の秋をふるとも朽ちせじをなぞや置くらむ袖の上の露

土佐國知りたまへる君の十あまり三年の忌に御むすめ君の御法のわざしたまふとて秋懷舊といふことを御みづからもよみ人々にもよませられし

○荷田在滿みまかり　寛保元年没す。
○玉敷云々　玉を敷いたやうな美しい平安の都。
○稲荷の山　山城紀伊郡。稲荷神社がある。荷田氏はその祠官。
○遠のみかど　京師から遠く隔つた所にある官府即ち江戸の幕府
○二本の杉　在滿とその妹たみ子と二人江戸に住んでゐた。
○しみゝ　繁く。
○ものゝふの　八十氏の枕詞。
○一本の杉　在滿をたとへた。
○つゆ霜にあへず　露霜に堪へず
○なぞや　何故か。

時によみてまゐらせける歌竝みじかうた

土佐の海　おましの浦の　敷浪の　いやしき〳〵に　千々の秋　いや榮えつつ　鳥がなく　あづま大城に　八千たびも　行きかひまして　とこしへに　いますむものと　大舟の　思ひたのみて　誰も皆　在りこしものを　いかさまに　おもほしめせか　久かたの　あめ行く月の　天雲に　かくろふ如く　岩がくれ　かくれいまして　をとめ子が　櫛笥にのする　鏡河　二たびとだに　在りし世の　み影見えねば　現とも　夢ともわかず　をちこちに　うれへさまよひ　人皆の　ありしあひだに　十といひて　三年に成りぬ　かくしあれば　過ぎにし君が　わたつみの　手にまきもたる　眞玉なす　いつきましつる　みめづ子の　めづ子の君は　ちゝのみの　父のみことを　今も猶いませる如く　まめにしも　つかへましつゝ　昔より　父のみことの　み心にたふとみませし　敷島の　我が國ぶりの　歌よみし　手向け給へる　言の葉を　天がけりつゝ　見そなはし　うれしびまさむ　事のかしこさ

反歌

土佐の海やおましの浦波に秋は月のみ影とゞむらむ

享和元年の春陸奥國牡鹿郡石の卷蛇田の村より靈蛇田道公墳とゐりたる

○敷浪　頻りに寄せくる浪。
○いやしき〳〵に　いよ〳〵頻りに。
○鳥がなく　東の枕詞。
○あづま大城　江戸城。
○大舟の　たのむの枕詞。
○在りこし　つゞいて來た。
○いかさま云々　如何樣に思召したか。
○久かたの　天の枕詞。
○かくろふ　隱る。
○岩がくれ　貴人のみまかるをいふ。
○櫛笥　櫛など化粧具を入れる箱櫛笥にのするは鏡の序詞。
○鏡河　土佐國。高知の北を流れる川。
○十といひて三年　十三年。
○わたつみ云々　海神が手に纏ひ持つた玉のやうに大切にされた。
○みめづ子　御愛子。
○ちゝのみの　父の枕詞。
○まめにしも　忠實にも。
○歌よみし　作歌して。
○天がけり　魂が天を飛び廻つて
○うれしび　嬉しく思つて。
○田道公　仁徳天皇の朝の將軍田道。公はその姓(かばね)。命をうけ蝦夷を征して死んだ。その塚から大蛇となつて賊を殺したといふ

石ぶみを掘り出せりとてかの國人其のいしぶみをうつしてもて來たりけるを見て聊かおもひをのぶる歌竝短歌

押照や　難波高津に　宮柱　太知りまして　天の下　しらしめしける　すめろぎの　聖の御代に　天雲の　向伏すきはみ　谷ぐゝの　さ渡る限り　まつろはぬ　かたしもあらぬを　ひんがしの　えみしのともが　おふけなく　叛きまつると　すめろぎの　きかしたまひて　竹葉瀨が　いろとの田道は　たくぶすま　新羅の仇を　鎭めてし　いさをしあれば　えみしらを　言あげもせず　はき淸め　むけ平らげて　あすの如　歸らむものと　すめろぎの　よざしのまにま　出でたてる　ますら健男が　いかなれや　蝦夷が仇に　たへずして　伊寺の水門の　水泡なす　消えてうせけむ　從へる　臣の子供は　其の妻せむすべの　たつきをしらに　其の主の　手纏を解きて　持ち歸り　其の妻の子に　故よしを　かくと告ぐれば　たゞ泣きに　泣き歎きつゝ　わがせこが　たまきをとりて　かきむだき　命死にきと　聞く人は　袖しをりけり　えみしらは　勝のすさびに　又更に　襲ひ來りて　うれたきや　田道をうづめし　墓をさへ　ほりうがてれば　その墓ゆ　をろちあれいでて　吐き出づる　いぶきの風に　立ち向ふ　えみしことゞく　冬の野の　草葉のもころ

○石ぶみ　石碑。
○押照や　難波の枕詞。
○難波高津云々　仁德天皇。
○宮柱云々　皇居の宮柱を太く嚴めしく知ろしめして天下を統治し給ひし聖天子の御代。
○天雲云々　天雲が遠く向ひにひれ伏したやうに見える果てまで。
○谷ぐゝ　蝦蟇。
○まつろはぬ　服從せぬ。
○ひんがし云々　東夷。
○おふけなく　身に不相應にも。
○きかしたまひ　聞召して。
○いろと　弟。
○たくぶすま　しらの枕詞。
○言あげもせず　彼是いふこともなく。
○むけ平らげ　討ち平らげ。
○あすの如　時を移さず直に。
○よざし　命令。
○伊寺の水門　陸前石卷の東に接した濱。
○水泡なす　水泡の如く。
○せむすべ云々　すべき方法も知らなくて。
○手纏　手に纏ふ玉飾の裝身具。
○わがせこ　妻子の愛する夫父。
○かきむだき　かき抱き。
○勝のすさび　勝つた勢ひに乘じて。
○うれたきや　厭ふべく歎くべきかな。
○墓ゆ　墓から。
○をろち　大蛇。
○いぶき　息を吐くこと。
○もころ　如く。

忽ちに　こやしうせけり　其の御世ゆ　千五百に近き　年を經て　あづまの
國の　陸奥の　牡鹿の郡　石の巻　竹の林を　賤男らが　あらすきかへす
時にしも　現はれ出でし　石ぶみは　み靈のをろち　用道君と　ゑりたるあ
との　いちじろく　石のみなとに　鎭めつゝ　いはへる事も　明らかに　今
ぞしりぬる　いはまくも　かしこきかもよ　大江戸の　遠のみかどに　まつ
りごと　まうし給ひて　八十國の　大みたからを　撫で給ふ　惠みの餘り
今も猶　千島の奥の　山のくき　荒磯のくまに　わくらばに　人とあれ出で
て　人の道　しれらぬえみし　千々萬　ありとふ事を　きこしめし　憐みた
まひ　そこばくの　臣の健雄を　その島に　渡したまひて　日の本の　神を
たふとみ　大君を　かしこむみのり　ねもごろに　をしへたまひて　國ひら
き　開きたまへば　潮なわの　とゞまる限り　まつろへる　時にあひつゝ
おむかしみ　現はれにけむ　をろちづか　今のをつゝの　牡鹿なる　石の巻
こそ　古の　伊寺の水門と　誰も皆　明らめにけれ　くしきかも　たふとき
ろかも　これのいしぶみ

反歌

ときはなす石のみなとの石ぶみは動きなき世のためしなるらし

○こやしうせけり　仆れ失せた。
○いちじろく　はつきりと。
○いはへる事　祀つてあること。
○いはまく云々　言ふも恐れ多い
○遠のみかど　地方の官府。幕府。
○大みたから　人民。
○山のくき　山の洞穴のある處。
○荒磯のくま　荒磯の隅々。
○わくらはに　たま〳〵。偶然。
○あれ出で　生まれ出で。
○しれらぬえ　よう知つて居ない
○ありとふ事　あるといふこと。
○臣の健雄　勇猛な臣。
○潮なわ　潮の泡。
○おむかしみ　喜ばしく思ひ。
○をつゝ　うつゝ。現在の。
○くしきかも　奇しきかな。
○たふときろかも　尊きかな。

うけらが花 歌部終

岡屋歌集

栗田土満

岡屋歌集序

縣居の大人は江戸に物し給ひけれど、其の本つ國は遠江國にて、代々敷智の郡の岡部の里にいつきまつれる、賀茂大神につかへまつれる宮人になむありける。其の大人に物ならへるをしへ子はさはなるが、中に此の岡の屋の栗田翁なむ、其の同じくぬちの城飼の郡の平尾の里の廣幡の八幡大神の神主にして、かの教へのまに〳〵、神代の古事をも古ぶりの歌をもまめやかに習ひ學ばれけるは、いとしもふさはしきわざになむ有りける。抑歌は人の心のしわざにして、人の心は人々ことなるものにしあれば、同じく古習ひ同じく其の手振うつすなるも、猶その心々によりて、おのがじゝのたてたる趣も習ひえたるさまも樣々になむありける。かくて此の岡の屋の歌卷を見れば、梓弓春の始めみ空の霞のたちはじめ、野山の木草の若がへるを見て、天地と共に榮えゆく君がみ代を祝ひ、御食國としるはの海邊に立ちいでて、澳べにたてる駒形の巖を見わたし、時來ぬと早苗とるを見ては、天なるや狹田長田に始

〇敷智郡岡部　遠江濱名郡淺場村附近、濱松の南郊一帶、中世岡部郷と稱して、賀茂社領であつた。
〇くぬち　くにうちの約。國のうち。
〇城飼　きかふ。城東郡と改め更に小笠郡となつた。
〇かの教へ　縣居賀茂眞淵大人の教へ。
〇手振うつす　歌の風體や調を模する。
〇梓弓　春の枕詞。
〇御食國　をすくに。天皇の統治し給ふ國。
〇しるはの海邊　志留波まさき江藻原郡白羽。御前埼村の西。御食國と知るに言ひ掛けた。
〇天なるや　天神のまします所にある。
〇狹田長田　狹い田廣い田。一說田を稱美していふこと。天照大神の御田で天神が萬民に耕植を敎へ給うた御田。

めたまひし神代をしぬび、眞菅おふるいなさ細江に秋霧ふかくたちわたる頃ほひ、四方の御民は妹もせも、早稲田かりあげおしね刈りほし、いそはく里毎のにぎはひをたぬしく思ひ、稲柄に初霜ふりおき、冬になりゆくまゝに、さやの中山山風さえて、阿波々の山にふりつむ雪を見渡し、佐夜の中山目にはさやかに見えつゝも、阿波々山あはれぬ戀の心をよみ、あるは濱名の岡本の里の機屋には、三河國の赤引の絲もて神御衣おりて、伊勢の大宮に年毎にたゆることなく奉るよしをたゝへ、或はうからはらから睦まじき學びの友だちなども世になくなりぬるを悲しび、或は七十八十とたらひぬる人の齢をことほぎ、みやび雄つどふ岡の屋のうたげには、鉾杉が枝のかはらぬ行末を願ひなど、皆古の古言に心をよせてよみ出でられたる心ざしの、實くいそしくおほゆるまゝに、

　千代を經て古ならふ古言の此のうた卷も千代にくちせじ

言靈のちはひますなる國なれば、今はたほぎごと違はず、千代に彌千代に傳はりなむと、かくいふは本居大平

○いなさ細江　引佐細江。遠江濱名湖の一支灣、引佐峠の下。
○妹もせも　男も女も。親しみていふ。
○おしね　おくて。晩稲。
○いそはく　いそしむ。勤む。
○稲柄　稲の莖。
○さやの中山　遠江小笠郡日坂から榛原郡菊川に至る坂道。
○阿波々の山　粟嶽又阿波山。無間山ともいふ。遠江小笠郡倉眞村の東北。
○岡本の里の機屋　濱名村岡本。もと神戸(かんべ)と云ひ、神服部が世に住んで、神衣を織つたといふ。
○赤引の絲　あかびこのいと。三河國寶飯郡蒲郡町、赤日子神社のある赤孫郷で貢した絲。神衣に織つて神宮に奉納した。
○うからはらから　親族兄弟。
○ことほぎ　祝賀し。
○うたげ　宴會。
○鉾杉　鉾の長さ位の若木の杉。一説鉾の如く立つてゐる杉。
○いそしく　忠實勤勉。
○言靈のちはひます　言だまのさちはひます。わが國語の靈妙不思議の力によつて幸の生じてくる。

○遠つあふみ　遠江。近江の琵琶湖によつて近つ淡海といふに對して、濱名湖あるによつての名。
○名づき　名簿。師として入門する時、門弟から、官位姓名生年月日など認めて師におくる。
○こたみ　此のたび。
○板にゑりて　板に彫つて。出版して。
○思ひあがり給ふ　心けだかくなり給ふ。
○ふみや　學問する所。

岡のや家集の序

遠つあふみの國城飼の郡平尾の村にいはひまつれる八幡の大神に、世々つかへまつる栗田の翁は、吾が縣居の大人に名づきおくりて、文に歌にまめに學び得て、今なむ、翁に敎へうくる人々さはになむなれりける。こたみ其の人々、翁のあまたとし詠みおかれつる歌を板にゑりて、後の世にくちざらしめむことをこひて、かく一卷となせりけるなりけり。翁の歌はもはら大人の年たかくなり給ひて、いよゝ思ひあがり給ひし頃のさまをまねびつくれり。岡の屋は翁のふみやの名なれば、敎へうくる人々、此の集の名となせりとなむ。千蔭おなじ學びの友垣なればとて、其の書のはしに、いさゝか其のことわりかきてよと乞はるゝまゝにかくなむ。享和の四年やよひのなかば、大江戸の橘の千蔭しるす。

岡の屋歌集

長歌短歌

從五位下　藤原朝臣土滿詠

春の始の歌

梓弓　春さりくれば　み空には　霞たなびき　くぬちには　草木もえいでて
年のはに　若がへりつゝ　君が代は　かくぞ榮えむ　天地のごと

反歌

葦かびのもえいでそめて神代より幾度年のをちかへるらむ

春たちける日詠める

遠近の山のみゆきも霞むなりけさより春になりにけらしも
打ちきらしそれとも見えぬ雪の中に梅の花さけり春たつらしも

梅を

去年の冬さきそめてける梅の花春くる色はまたぞえならぬ

○梓弓　春の枕詞。
○春さりくれば　春になること。
○くぬち　國のうち。くにうちの約。
○年のはに　毎年。
○葦かびの云々　古事記の「國稚く浮脂の如くしてくらげなす漂へる時に葦芽のごと萌え騰る物」とあるによつて、天地開闢の神代からの意。葦かびは葦の芽。
○をちかへる　元にかへる。
○打ちきらし　きりふさがつて見えなくなつて。
○それとも見えぬ　それが梅の花とはつきりわからぬ。
○またぞえならぬ　去年の冬にもまして更に言ふにいはれずよい。

春の水といふことを

月よみのもてるをち水をちかへり春きにけりと氷とけけり

ふる年に春たちける年の睦月の朔日に梅の花を見て

けふはまた色香殊にぞおもほゆる花の心もあらたまるらむ

初春眺望といふことを

見渡せば田づらの氷うちとけてとほの山もと霞みそめけり

正月ばかり不二の山を見てよめる

なまよみの　甲斐の高嶺　み薦かる　しなぬの山は　白雪の　ふりてつもれり　しなが鳥　阿波々の山　佐夜の山　霞棚びき　羣山を　麓になして　天の原　高く尊き　富士のねを　ふりさけ見つゝ　迎ふ春かも

反歌

東路やはるくる空を見わたせば不二のたかねに霞たなびく

睦月ばかり來らむといひおこせける人の來ざりければよみて遣はしける

誰にかは見せむと思ひし梅の花君待ちがてに散らまくもをし

初春の山といふことを

いづくより春は來ぬると見渡せば山の端ごとに霞たなびく

〇月よみの云々　萬葉集「天橋も長くもが高山も高くもが月よみの持てるをち水い取りきて君にまつりをち得しむもの」による。月よみは月夜見尊の略で月の異稱。をち水は飲めば元にかへつて若くなるといふ水。一二の句はをちかへりの序。をち返りは元に返つて。
〇ふる年に云々　まだ新年にならぬうちに立春の節になつた。
〇おもほゆる　思はれる。
〇田づら　田のおもて。田園。
〇とほの山もと　遠くの山の麓。
〇なまよみの　かひの枕詞。
〇甲斐の高嶺　甲斐國の高い山々。
〇み薦かる　冠辭考にはみすゞかる。信濃の枕詞。萬葉古義では三薦刈をみこもかると訓ましてある。
〇しなぬ　信濃國。
〇しなが鳥　あはの枕詞。
〇阿波々の山　遠江小笠郡阿波山又無間山ともいふ。
〇佐夜の山　遠江日坂から菊坂までの間の坂道。
〇羣山　むらやま。重疊せる山。
〇ふりさけ見つゝ　振り向いて遠くを見ながら。
〇誰にかは云々　古今集「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」による。
〇君待ちがてに　君を待ちかねて
〇散らまくもをし　散らむも惜し

初春宴

春ごとにつどひゑらぎて萬代にかくし遊ばむ酒ほぎ歌ほぎ

海邊立春といふことを

淡路島あぢまさの島も霞みけりおのころ島に春やたつらむ

正月朔の日富士の山を見て詠める歌

日の本の不二の高ねに霞み初めてやそから國も春やたつらむ

けさよりぞ待たるゝ花の色見えて朝日に匂ふ不二のしら雪

不二のねをふりさけ見つゝ仰ぐかな高く尊き御代のけしきを

若菜

春されば消えも消えずも白雪のふりにし里に若菜つみてむ

安波々山霞む春べになりにけり今ぞしるはの磯菜つむらむ

山里の雪間の若菜もえそめてはつかに春の色を見すらむ

名所の若菜といふことを

みづ〳〵しみづ野の若菜若がへり幾らの年を老いずもあるらむ

月夜に梅の花さきたる所にて

春の夜の月の影そふ梅が枝は薫るものからわかれざりけり

○つどひゑらぎ　集つて笑ひ榮えて樂しみ。
○かくし遊ばむ　かやうに遊ばうよ。しは語調を調へ強める助詞。
○酒ほぎ歌ほぎ　酒をすゝめて祝ひ、歌を歌つてことぶき祝つて。
○淡路島云々　古事記仁德天皇御製の「(上略)わが國見れば淡島おのころ島檳榔の小島も見ゆ云々」による。あぢまさの島は檳榔の島で瀬戸内海にあつたのであらう。
○おのころ島　自凝島。伊邪那岐伊邪那美二柱の神の沼矛の末から滴垂れ積つて成つた島。
○やそから國　多くの外國。
○ふりさけ見　目を放ちて遠く見渡す。
○春されば　春になると。
○消えも消えずも　白雪が或は消えても或は消えなくても。
○ふりにし里　白雪の降るに里の古るを言ひ掛けた。古く居た土地又は故郷。
○はつかに　僅かに。
○みづ〳〵し　鮮かにつや〳〵してゐるさま、みづ野の序。
○幾らの年　幾年も多くの年。
○薫るものから　薫るけれども。
○わかれざり　判別することが出來ない。

子日

初春のはつねのけふののどけさに大宮びとの野邊の遊びする

海上夕霞といふことを

和田のはら霞こめたる夕なぎにかぢの音きこゆ漁すらしも

朝霞

明けたてばきゞし鳴くなる足びきの山の木ぬれに霞たなびく

春海

見わたせば霞たなびきむなかたや沖つ宮べも春きたるらし

鶯のうた

春くれど谷の戸のみに音づれて里にまたるゝうぐひすの聲

けさよりぞ花もまたるゝ鶯の聲きくまではあらじと思ひて

色も香も霞こめたる春の日になく鶯の聲ぞさやけき

社に參りける時鶯のなきけるを聞きて

瑞垣のさかきが枝に朝日さしうぐひす來なく春ののどけさ

雪中鶯

花は雪ゆきは花ともまがへども鶯のねに似るものぞなき

○初春の云々　正月になつて初めての子の日。新古今集賀「初春の初子の今日の玉箒云々」

○和田のはら　海原。

○かぢ　楫。櫂又は艣。

○漁すらしも　いさりすらしも。すなどりをするやうであるよ。

○明けたてば　夜が明けはなれると。

○きゞし　雉子。

○足びきの　山の枕詞。

○木ぬれ　このうれ、こずゑ。

○むなかたや沖つ宮べ　宗像の奥津宮のあたり。筑前宗像郡の海の沖島にあつて、中津宮邊津宮合はせて官幣大社宗像神社。

○谷の戸　谷の入口。

○里にまたるゝ　里では鶯の聲が人に待たれてゐる。

○鶯の聲きくまではあらじと　鶯の聲を聞くまでは花の咲くこともあるまいと思つて氣にも留めなかつたが、今朝鶯を聞いてから格別花の咲くのが待たれる。

○瑞垣　みづがき。神社の垣。

○さかき　榊。常緑樹の總稱。

○花は雪　白梅の花と雪と互に見まぎれるけれど。

雨中鶯

春雨のつぎてしふればわが園にはねもほしあへず鶯のなく

夕鶯といふことを

さく花にきなく鶯よひ〳〵はいづれの枝を宿りとはする

菅の根のながき春日をあかずとやくれゆく野邊に鶯のなく

すみれを

わがせこが衣摺らむとしめ野ゆき紫野ゆきすみれつみけり

鶯を

ちりなむと花にはうさも添ふものをたゞのどけきは鶯の聲

春の歌

鶯のけさなくなべに玉だれのをちの山邊に霞たなびく

梅の花それとも見えず薫るなり春の夜ふかき月のひかりに

春の野に若菜つまむと思ふどちたち出づる袖に雪ぞふりける

わが宿の梅の花ちりぬあしびきの山さくら花さきつがむかも

殘雪

草も木も下もえ渡る春の野につれなく雪のきえむともせず

○つぎてしふれば　引き續いて降るから。
○よひ〳〵　夜な〳〵。毎夜。
○菅の根の　長きの枕詞。
○あかずとや　この春の日長の終日鳴いてそれでもまだ鳴きあかずといふのであらうか。
○わがせこ　夫を親しんでいふ語。
○衣摺らむと　衣を染草で摺つて模様をつけようと。
○しめ野云々　貴人が占めて人の濫りに入るを禁ぜられた野と紫草の生える野。萬葉集「茜さす紫野ゆきしめ野ゆき野守は見ずや君が袖ふる」
○ちりなむと　花には散るだらうかといふ心配があるが、その様な心苦しさもなく平氣で居られるのは鶯の聲。
○けさなくなべに　今朝鶯が鳴くと共に。鳴くにつれて。
○玉だれの　緒の枕詞から、をちの序とした。をちは遠方。
○それとも見えず　それが梅の花とも見分けがつかず、香ばかりが梅の花と著しく薫つてゐる。
○若菜　春の芹薺など食料にする新しく萌え出た野菜。
○思ふどち　互に思ひ合つた親しいどうし。
○さきつがむ　間の斷れることなく咲き繼ぐだらう。
○下もえ渡る　遠くへ行きわたつて下から芽ざす。
○つれなく　前にかはらず平氣で

梅

うら/\と霞む朝けに梅が香をさそふばかりの春風ぞふく

梅の花さき匂ふなり玉だれのをすのすげきの隙もとめつゝ

梅が香のはつかに薫るあしたより花に心を思ひそめつも

梅が香をふきくる風のなかりせば春の夜すがら物は思はじ

梅の宮に梅の木植うるとてよみてそへて奉れる

うゑはやす若木の梅は瑞垣にみづえ榮えてにほへとぞ思ふ

中の春

櫻花さきも咲かずもきざしなく野邊は緑になりにけらずや

柳

青柳にぬくや白露玉のをのたまもゆらゝに春風ぞふく

六田川かはそひ柳うちなびきかげそふ水もみどりなりけり

雨中柳といふことを

春雨のけふそめかくる青柳のしづくや野邊の色となるらむ

垣の柳

春風はふきも吹かずも誰がために垣つの柳うちなびくらむ

○朝け　朝明に。
○玉だれのをす　玉垂のは緒の枕詞。を簾にかけて玉を垂れた美しい意。をすはすだれ。
○すげき　透きの延。
○はつかに　僅かに。
○うゑはやす　植ゑて見ばえのあるやうにする。
○瑞垣　神社の玉垣。みづえにかけてある。みづえは瑞枝。みづ/\しき若枝。
○さきも咲かず云々　咲いたにしても咲かないにしても、野邊には雉子が鳴いて若草が緑になつたではないか。
○ぬくや白露　青柳の絲で白露の玉を貫くよ。玉のをは玉を貫く緒。
○ゆらゝ　ゆら/\。搖れ動くさま。
○春雨の云々　春雨が青柳を染めかけて滴る雫が落ちて緑の野邊さなるであらう。
○春風は云々　春風が吹いても吹かなくても柳はいつもなびいてゐるが、一體誰の爲に靡いてゐるのだらう。垣つは垣根の内。

春雨を

さかぬ間はめぐみし花を春雨のいかで移ろふ色になすらむ

梓弓音はしのびて春さめのいかで緑の色にいづらむ

歸鴈

天の原かすみこめたる夕月夜たづ〳〵しくや鴈のゆくらむ

歸鴈幽といふことを

ゆく鴈の聲もかそけくなりぬなり常世の雲のあたりなるらむ

二月ばかり阿波々山に上りて詠める

しなが鳥　安波々の山は　千早ぶる　神のます山　朝日のたゞさす山　夕日の日てる山　朝よひに　見さくる山　よそのみに　見つゝあらねば　梓弓心ふりおこし　つぬさはふ　岩根さぐみて　草ねとり　息づきのぼり　峯にたち　國見をすれば　高山と　思ひし山も　おしなべて　峯も平らに　見渡せば　大海の原　いむかふす　空も一つに　白雲の　行方もしらず　山のべをかへり見すれば　谷深み　雪か積れる　山高み　花か匂へる　こち〴〵に　思ひ渡せど　さやの山　さやにも見えず　心なく　春の霞の　隱さふべしや

○さかぬ間は云々　花の咲かなかつた間は春雨があはれみ潤して咲かした花を、咲いた後にはその春雨がどうして色をあせさせ萎ませるのだらう。

○梓弓　春の枕詞。下の春雨にかけ、一方で弓の音と響かした。春雨の音は隱れ忍んでゐて、それが如何して草木の緑の色に現はれ出るのであらうか。

○たづ〳〵し　たど〳〵し。

○かそけく　幽に。

○常世の雲　とこよの國の空、遠い遠いかけ隔たつた想像の國。

○しなが鳥　あはの枕詞。

○千早ぶる　神の枕詞。

○神のます山　神の居給ふ山。

○たゞさす　日光が眞直にさす。

○日てる　日光が照り輝く。

○よそのみ云々　よそ〳〵しく冷淡に見て居ないから。

○つぬさはふ　いはの枕詞。

○さぐみて　さぐゝみて。踏みわけて。

○いむかふす　遠く向の方に低く伏した樣に見える。

○谷深み云々　谷が深いので雪が積つてゐるか、山が高いので花が色うるはしく咲いてゐるか。

○こち〴〵　あちこち。そちこち。

○隱さふ　隱す。

安波々山といふはさやの中山の西北の方にあたりていと高き山なり峯に堂あり阿波が嶽の觀音といふそこに小さき社あり今はあらぬ名によべど是れや古の阿波々神社ならむといふなり

待花

あしびきの山の木末にながめして櫻かた待つ時にはなりぬ

櫻の歌

春雨のはれゆく野邊に出でて見れば若木の櫻さきそめてけり

櫻花さきのさかりを散りぬべき物ともしらで見る山もがな

足引の遠山もとにゐる雲は風にしられぬ花にぞありける

菅の根の長き春日にあくがれて暮るれば花の陰にねにけり

豐秋津みづほの國にみづ枝さし咲き榮えゆく花はこのはな

二月ばかり物へまかりける道にて

何となき賤が家居も花さけば心ありげに見ゆる春かな

名所花といふことを

ふく風にちらしなはてそ立田彥名におふ山の花にやはあらぬ

水邊の花を

○あらぬ名　全くちがつた名稱。

○ながめ　眺めること、長雨の言ひ掛け。

○かた待つ　心に掛つて待つ。

○さきのさかりを　今を盛りと咲いてゐるのを。

○足引の　山の枕詞。

○遠山もと　遠くに見える山の麓。

○菅の根の　長きの枕詞。

○あくがれて　魂も身に落ちつかず浮き立つて出て。

○豐秋津みづほの國　日本國の美稱。

○みづ枝さし　みづ〳〵しい若枝が生え出して。

○ちらしなはてそ　散らしてしまふなよ、立田彥よ。立田彥は風の神で大和生駒郡立野の龍田神社に祀る。

水清みしづく花のかげ匂ふなり池のそこにも春をしれつゝ

旅　花

旅にして心なぐやと花見ればふる里人のこひせらるはた

無常の花といふことを

花はみなうつろひにけり空蟬の常なき世をも人に知れつゝ

雨中の花を

心あれや花もしをるゝ色見えてこの春雨にぬるゝがほなる

櫻さきたる木のもとに人のたてるかたを

筑波山端山繁山とめくれば風にしられぬ花もありけり

花下送日といふことを

雪とのみちる花見てぞ木の本に積る日かずも驚かれぬる

花下言志

をしめどもうつろふ花の木の本は又見む春を契るばかりぞ

居所花

思へども春は野山にあくがるゝ心をやどの花やうらみむ

遠村花といふことを

○しづく　水の底に沈んだものが透き映つて見える。水が清くあるので、水に映つた櫻のかげが水底に色美しく映える、池の底にも春が知られて。しれつゝは知られつつ。

○旅にして　旅に出て心が穩かに靜まるかと思つて出掛けて花を見ると、之れはまた花を見るによつて故里の人が戀しくなるよ。

○うつろふ　色衰へて散る。

○空蟬の　世の枕詞。

○人に知れつゝ　人に知られつゝ

○心あれや　花も人と同じく物に感じ動く心があるよ。

○ぬるゝがほなる　人が涙に袖濡れるやうに花も春雨の涙に濡れた樣子が見える。古今集（上畧）宿る月さへぬるゝがほなる」

○筑波山端山繁山　筑波の草木の茂つた山々。端山は麓の山、葉山をかけ、繁山は草山に草木の繁つた山をかけた。

○とめくれば云々　尋ねて行くと求めてゆくと、風に知られず散り殘つた花もあるよ。

○雪とのみちる花　落花が雪が降ることより外には思はれず散る花。

○積る　雪の緣語。

○思へども云々　自分は我が家の花を愛し思つては居るが、それでなほ野山に心浮き立つのを、我が家の花は怨みに思ふだらう。

○我が里の云々　自分は遠い餘所の櫻を詠めたく思つてゐるが、餘所では又我が里の花を戀しく思つてゐるだらう。春の花の時節には互に餘所の花で氣をもむことよ。
○花の心も云々　自分も花に別れて歸るのが惜しい、花の心でもわが歸るのが惜しい事だらう。

○たゞに見えじと　隔てるものなくて直接むき出しには見られまいとして。霞かは霞なるかなの意。

○人したづねば　人が尋ねたならば。しは語調を強める辭。
○さきちる鄰　花が咲いて散る家の鄰の家。
○雨のうちに云々　咲き殘つた枝の花も降雨の間に咲き加はつて。
○心なく云々　人が惜しんでゐる心持に對して思ひやりもなく花の散ることかな。
○岩根の松に云々　岩根に生えて常綠にかはりない松にあやかろうともせずはかなくも散りゆく花であることよ。
○世の中をいとふ云々　俗世間を厭ひ隱れ入つた山べも却つて山の花ある故春には花の咲くにつけ散るにつけ色々心をいためる。

花留客

我が里の花をばよそにこひすらむ春はかたみに物を思ふよ

歸らむと思へば袖にかをりけり花の心もをしむなるらむ

花滿山

咲き匂ふ山にはみちて花の香のあまりや空にあくがれぬらむ

霞中花

色も香もたゞに見えじとさく花の心ふかげに見ゆる霞か

鄰家花

わがやどを人したづねば春ごとに櫻さきちる鄰とぞいはむ

雨後花

雨のうちに殘りし枝もさきそひてはるれば花の盛りなりけり

惜花

心なく花のちるかな人皆の惜しむらむとも知らずやあるらむ

はかなくも散りゆく花か軒近き岩根の松にあえむともせず

山家花

世の中をいとふ山べもなかなかに花ゆゑ春はものをこそ思へ

よそにのみすぎしみ山の白雲を今は軒端のさくらとぞ見る

落花

おのづからうつろふ花の心とも知らでや風を怨みそめけむ

いかにせば春さく花のちらざらむ風にまひする由もあらぬかも

夜思落花といふことを

ちりはてむ花にしあらずばぬば玉の夜さへ物は思はざらまし

あしびきの嵐の音に寐覺してちるらむ山の花をしぞおもふ

社頭落花といふことを

千早振神の社のしめ縄もこえて散りゆく花をいかにせむ

しるはのみ崎といふ所の汐干見に物しける時そこの海なる駒形岩といふを見て詠める其のみ崎の所に祭れる神社を駒形明神となむいふ

掛けまくも　綾に畏き　高光る　日のみこ　八隅しし　我が大君の　をす國
としるはの海の　沖べに　たてる岩がね　汐干の　なをりを見れば　白波
の　四方にめぐりて　島の如　いやなみ立てり　山のごと　霞棚びく　山の
ごと　霞棚びき　島のごど　いやなみたてど　足引の　山にもあらず　かも
づく　島にもあらず　此處をしも　うしはく神の　神ながら　御名におはせ

○よそにのみ云々　これまでは關係のないよそごとして心も留めずに來た山の白雲卽ち櫻の花。
○おのづから云々　花は時がくれば自然に散る。それが花の心であるとも知らないで、いちづに風が吹いて散らすのだと思つて風を怨んだこと。
○まひする云々　風に物を贈りまひなひして花を散らさぬ様にする方法もないか。
○ぬば玉の云々　夜の枕詞。
○夜さへ云々　花が散らぬものならば、花の見える晝は勿論、その上に見えない夜までも心を痛めることはなからうに。
○あしびきの　山の枕詞。下に山の花とあるによつて、山の意に轉じて嵐の音とつゞけた。
○しるはのみ崎　志留波。遠江國濱名郡白羽村の西。
○掛けまくも　言葉にかけて言はんも。
○綾に畏き　嗚呼まことに畏れ多い。
○高光る　日の枕詞。
○日のみこ　天皇の御異稱。
○八隅しし　大君の枕詞。
○をす國　天皇の治め給ふ國。
○なをり　波折。波の折り返すこと。
○島の如いやなみ立てり　島の如くにいよ〳〵數重なつて並び立つてゐる。
○かもづく島　かみづく島。神めく島。
○うしはく　土地を領する。
○神ながら　神慮のまゝ。神代いまゝ。

る　駒形の　沖つ岩がね　見れば畏し

名所春といふことを

みけむかふ淡路のしまに霞たちにけり鹿兒のさき漕ぎづる舟のゆくへしらずも

雲雀を

聲のみを聞きてぞ思ふなく雲雀あやなの野邊のはるの霞や

うら若き春野の草に牀しめていかで雲雀の空になくらむ

雉子

山たづのむかひの岡のさぬつ鳥きゞし妻こふ聲とよむなり

をりはへてきゞしなくなり岡のべの霞の中に妻やこもれる

雁かへる有明の空はくまなくて霞める野邊にきゞしなくなり

春駒

うら／＼と霞むよどのの放れ駒なが心のみあれて見ゆらむ

苗代

蛙なく苗代小田に小柴さしみ年いはひて種まき初むる

遠近の苗代の小田にまかすなりこやみくまりの神ながらならし

○みけむかふ　淡路の枕詞。
○漕ぎづる　漕ぎいづる。
○あやなの云々　譯のわからぬむちやな春霞よ。
○山たづの　向ひの枕詞。
○さぬつ鳥　さ野つ鳥、野に棲む鳥。
○きゞし　雉子。
○とよむ　鳴り響く。
○をりはへて　打つゞいて。
○雁かへる云々　空は有明の月影の陰りないのに北へ歸る雁が鳴きわたり野は霞こめて雉子がなく。
○よどの　山城久世郡淀の野か。
○小柴　小さな雜木。
○み年いはひて　穀物の豐熟を神に祈り祭つて。
○まかす　水を引く。
○こやみくまり云々　苗代に水を引くのはこれはみくまりの神の神慮のまゝであらうか。みくまりの神は水配の神で山より流れ出る水の分岐する處におはす神。

備中國人土岐武雄が父の六十賀しける時屏風の歌こひけるに苗代に水まかするかた

いく春か苗代小田にまかすらむ細谷川のたえずもあるかな

蛙

櫻ちる片山きしの夕霞おほつかなくも鳴くかはづかな

春鳥

春鳥のよその梢にあくがれて古巣の花はしらずやあるらむ

春獣

荒熊のあらき心もしはせ山しばしは花にあはれ知らなむ

山吹

大井川瀬々のしがらみ匂ふまで八重山吹のはな咲きにけり

藤

春夏にかゝる藤浪いづかたに花の心のなびくなるらむ

枯山を青山になしてゆく春のゆくてににほふ藤なみのはな

やよひばかりに鴈のなくを聞きて

ちるを見てかつな急ぎそ故郷は花も常世の國にやはあらぬ

○片山きし　片山のほとり。片山はかた側の山。

○荒熊の云々　しはせ山は歌枕で駿河國だといふが其の山不明。萬葉「荒熊の住むてふ山の師齒迫山せめて問ふともなが名のらすな」しはせ山しばしと調子を調へた。

○瀬々のしがらみ　彼方此方多くの瀬の柵。しがらみは流れを堰きとめる爲に杙を打つて竹や木を結ひつけたもの。

○春夏に云々　春から夏にかけて咲いてゐる藤の花。藤浪は藤靡で藤の花の咲き靡いてゐるのをいふかゝるは浪の縁語。

○枯山を云々　春が冬枯の山を茂つた青山にして行く、その春の過ぎ去つて行く彼方に春暮れて藤が花咲く。

○ちるを見て云々　花の散るのを見てかた〴〵さう急いで故郷へ歸るなよ、おまへの故郷だとて、やはり花と遠く隔たつた常世の國ではないか。

同じ晦がたに

惜しめどもとまらぬ春のつれなさを見じとや花のとく散りぬらむ

花ちらす雨よ風よと歎くまに春もとまらず暮れていぬめり

同じつごもりの日に

春の日のいつはあれども今はとてくれゆくけふの夕暮の空

今はとて霞こめたる夕ぐれにいづちむきてか春のゆくらむ

やよひのつごもりの日延香がもとにて人々春を惜しむ歌よみける時庭に松の木多くうゑたりけるを見て

庭にたつ常磐の松はくれてゆく春を今日とも知らずやあるらむ

首夏

時鳥いつかきかむとまだきより思ふぞ夏のはじめなりける

卯花

ひさかたの桂の里の卯の花はやみもわかずや咲きわたるらむ

新樹を

きのふ見し山の霞のあさ緑こずゑにふかき色とこそなれ

殘花を

○惜しめども云々　人はかやうに春の過ぎ去るを惜しむけれども春は冷淡にも行つてしまふ。その春の無情さを見まいといふのであらう暮春をも待たずに花の散るよ。

○いつはあれども　春の日はいつでも物の哀れはあるが、特に心にしみ〴〵感じるのは、もうこれ限りと春が暮れてゆく今日の夕暮である。

○今はとて云々　空は霞が立ちこめ日は暮れて方角もわからぬに、別れを告げて行く春はどちらを向いて行く事だらう。

○常磐の松云々　春が過ぎれば花は散るので花は暮春がわかるが、常綠の松は今日は春の終りであるとも知らないだらう。

○まだきより　はやくから。

○ひさかたの　あめの枕詞から天に關係ある日、月、空、雲などに用ゐる。更に月の桂といふ桂にかけた。桂の里は山城。

○やみも云々　月の桂の里の卯の花は、闇にも明らかに白く咲いて闇夜も區別せずに咲きつゞけるだらう。

○きのふ云々　昨日は山に春霞がかゝつて淺綠に見えたが今日はもう霞もなく初夏の綠が濃くなつた

○はぶり　鳥のはたゝき。
○さやけきに　鮮かなので。清新なので。
○夏をも時と云々　晩春に咲く藤が、夏も我が咲くべき時節だと。
○橘の云々　橘の樹の下に木かげを踏み歩く人が多いので。
○袖の云々　袖に花橘が薫る。古今集「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」。
○天なるや　天なる。高天原の。
○さな田長田　狹い田廣い田。一說田の美稱。天照大神の萬民に稻種を與へ給うた御田。
○みとしろ　御戶代。神の御領の田。神田。
○みたや　御田屋。神の御領の田を見張りするための番小屋。
○みしめはへ　神聖な場所としての注連繩を張りわたし。
○ゆ種蒔きおふし　神聖にして齋み淨めた稻を植ゑそだて。
○さくなだり　水の山から落ちるさま。
○ゐぐひ　堰杙。堰に打ちとめる杙。
○白妙の　衣、袴、帶、襷の枕詞。
○眞菅よし　蘇我、菅の枕詞。
○なづさひ　なついて。
○劒太刀　身の枕詞。
○たなしらず　知らず。
○たなひぢ　手肱、單に肱をいふ。
○水泡かきたれ　水沫を滴らし。

きのふまでのこりし花も時鳥はぶりの風にけさか散るらむ

杜若

杜若さきたる影のさやけきに今より水はすゞしかりけり

藤の花を見て

たちかへり春の名殘ぞおもほゆる夏をも時とさける藤なみ

橘

橘のもとにかげふむ人しげみ袖のあまたに薫るころかな

螢を

軒近く來たる螢か五月雨のあやめにつたふ露の光か

早苗を詠める歌

天なるや　さな田長田に　神ながら　始め給ひし　みとしろの　清きみたやに　小柴さし　み年いはひて　みしめはへ　ゆ種蒔きおふし　足曳の　山の峽より　さくなだり　瀧つ川瀨に　ゐぐひ打ち　水せきかけて　男らも　少女がともも　白妙の　襷取りかけ　眞菅よし　菅笠を　笠取りよそひ　きそひなづさひ　劒太刀　身もたなしらず　たなひぢに　水泡かきたれ　時きぬと　さ苗とるなり　里もとゞろに

時來ぬと里までのを田にさ苗とる男をみなのこゑとよむなり

夏の曉方に

夏の夜のまだきやあくるいなをかもなほ有明のつきの光か

霍公鳥の歌

よひ〳〵にまてどつれなき時鳥いかに忍べる初音なるらむ
夏くれば先づぞ待たるゝ時鳥いつばかりこそ去年は聞きしか
時鳥なほ聲しのぶほどなれやしげき木末の下にのみなく
いかばかり羽根しほるらむ五月雨の八重雲がくりなく時鳥
時鳥なれも時とやみ民らがいそぐ早苗にあらそひ鳴くも
たち花にやどるとならば時鳥ときじくになく聲もきかなむ
足引のやま時鳥いまぞなく世をうの花の匂ふあたりに
時鳥ながなくなべに袖ひぢてさとの少女ら田におりたつも
玉にぬくものならなくに時鳥かけてぞ忍ぶそのひとこゑを

山家郭公といふことを

み山べを鳴きてぞいづる時鳥思ひ入りぬる人もあるもの

時鳥聲遍といふことを

○八重雲がくり　幾重にも重なった雲に隱れて。
○なれも時とや　お前も今自分の時節だといふので鳴くのか。
○たち花に云々　古今集「今朝來鳴きいまだ旅なる時鳥花橘に宿はからなむ」
○ときじくに　時節はづれでも絶えず。
○ながなくなべに　お前が鳴くにつれて同時に。
○袖ひぢて　袖をぬらして。
○玉にぬく云々　時鳥の聲は玉として緒に貫き通すものでないが。ならなくにはならぬに。
○かけてぞ云々　心にかけていつも一聲を聞きたく懐かしく思ふ。かけては、心にかけてと、玉を首にかけると言ひ掛けてある。
○思ひ入りぬる云々　世を厭うて思ひこんで山に入つた人もあるのに、時鳥は山から出て來る事よ。

初こゑは誰にしのびし霍公鳥いまは來なかぬ里もなきもの

社頭時鳥

戀しくば來ても聞けとや時鳥三輪のかみ杉やどしめてなく

羇中郭公といふことを

足引の山こえ野ゆき時鳥なれもや旅をうしとなくらむ

關路時鳥

あづま路に誰をとふとか時鳥關こゆるぎのいそぐなるらむ

五月雨を

打ちきらし雲まも見えぬ五月雨に亂れてたぎつ音まさりけり

駿河なる富士の高ねも甲斐がねもみえて程ふる五月雨のころ

五月雨のをやめばつぎてたつ雲の底もとゞろに瀧の音聞ゆ

初瀬川浦はなけれどいさりする船もよりこむ五月雨のころ

照射

筑波山は山繁山ふみさくみ照射するますらをのとも

夏の歌

山近く　家ゐしをれば　あしたには　見渡す山　夕には　見さくる山　あし

○三輪　大和磯城郡三輪の大神大物主神社。かみ杉は神木の杉。
○足引の云々　我は野山を越えて旅がつらい、時鳥も野山を越える旅がつらいと鳴くのだらう。
○關こゆるぎ云々　誰をたづねるといふので足柄箱根の關を越えて急ぐのだらう。こゆるぎの急ぐに相模の小餘綾の磯を言ひ掛けた。
○打ちきらし　遮り曇らして。
○たぎつ音　さかまきあがる川の水音。
○甲斐がね　甲斐國の山。
○五月雨のをやめは　五月雨の降つてゐる間は聞えぬが、少しの間とぎれて降りやむと。
○とゞろに　轟くばかりに。
○ふみさくみ　強く踏んで行つて
○照射　ともしがり。獵師が夏夜篝をたき又は松明をともして、鹿が近づくのを射殺す狩。
○見さくる　遠く見放つ。

た見て　ゆふべに見れば　あしたより　いやたちさかえ　ゆふべ見て　あしたに見れば　ゆふべより　しゞに成りゆく　夏山の　茂き木の間に　時鳥來なきとよもす　其の青山に

夏遠望といふことを

ふりさけて見れば涼しもみな月の其の夜ふるとふ不二の白雪

鵜川

ぬば玉の闇をしぬぎてかゞりさし鵜飼がともは夕川のぼる

上つ瀬は瀬早しとかも中つ瀬に鵜やつかづけて鮎子とらす子

鳴神を

鶯のなくねたえにしくら谷に雨ぐもゆすりいかづちなるも

雲がくれ目には見えねど天がけりうつゝにとよむ神の畏さ

夏獸

うら若き夏の萩原ゆく鹿はおのが妻とも知らずやあるらむ

蓮を

少女らがすがたの池にさきにほふ蓮の花の散らまくをしも

すが〳〵し菅田の池におひそめて濁りにしまぬ花はちすかな

○いやたちさかえ　いよ〳〵茂りさかえて。
○しゞに成る　草木生ひ茂る。
○とよもす　鳴り響かす。
○涼しも　もは感歎の助詞。
○みな月の云々　萬葉「富士のねにふり置く雪はみな月のもちに消ぬればその夜ふりけり」
○ぬば玉の　闇の枕詞。
○しぬぎて　凌ぎて、押しわけ進んで。
○かゞりさし　篝火をともして。
○鵜飼がとも云々　萬葉「鳥つ鳥鵜飼がともはゆく川の淸き瀬ごとに篝さし云々」
○上つ瀬は云々　上流の瀬は早いといふのだらうか中流の瀬に、鵜を數多く、水くゞらして鮎子を捕る人。萬葉「年のはに鮎し走らばさきだ河鵜やちかづけて河瀬たづねむ」
○くら谷　谷。一説、暗い谷。萬葉「鶯のなくくら谷に打ちはめて」
○天がけり　天を飛び翔って。
○うら若き云々　夏鹿も萩もうら若いさまの詠。萬葉「わが丘に棹鹿來鳴くさきはぎの花妻どひに來なく棹鹿」から萩を鹿の妻といふ。
○少女らが　堀川百首「をとめ子がすがたの池の蓮葉は心よげにも花咲きにけり」菅田池は大和伊駒郡。姿の言ひ掛け。
○散らまく　散らむの延。

常夏

唐衣ひもゆふ暮の露を重みうらぶれ立てり大和なでしこ

とこ夏ににほふ撫子いく度かはぐゝむ露のおきかはるらむ

ひぐらし

をりはへて鳴くや蜩ゆふづく日かげろふ山のこのも彼の面に

妹が髪夕日かぎろふ高圓の尾上とよもしひぐらし鳴くも

蚊遣

難波潟汐干のこづみかきつめて浦のとま屋に蚊遣たくなり

藻鹽やく浦とはなしに夏くればけぶり絶えせぬ里の蚊遣火

賀茂祭

千早振わけいかづちの神代より葵のかづら絶えずもあるかな

水鷄を

夏の夜は天の戸早くあけぬめり叩く水雞やおどろかすらむ

江螢

綱引する難波堀江のみだれ蘆の思ひみだれて飛ぶ螢かな

水無月ばかり久しく雨ふらざりける折に雲のたつを見て

○唐衣　紐の枕詞。下の大和に對す。
○ひもゆふ暮　夕日も暮に唐衣の總結ふを言ひ掛け。
○うらぶれ　わびしく思ひ惱んで
○とこ夏　長へに。永久にかはらず。
○はぐゝむ露　花の撫子卽ち愛撫する子を養ひ育てる露。
○をりはへて　打ちつゞいて。
○ゆふづく日云々　夕方の太陽が陰くなる山。
○妹が髪　あぐの枕詞。但しこゝは結ふにかけて、夕日にかけた。
○高圓の尾上　高圓山の山の上。高圓山は大和春日山の南。
○汐干のこづみ　汐干の時に干潟に殘つた木のくづ。
○かきつめて　かき集めて。
○藻鹽やく　續後撰集「藻鹽の浦とはなしに君こふる煙も絶えずなりにけるかな」
○千早振　神の枕詞。
○わけいかづちの神　玉依姫石川瀨見小川で丹塗の矢を得て生み給うた神。賀茂神社に祀る。
○葵のかづら　賀茂の祭に葵とかづらを頭などの飾りにするもの。
○天の戸　天の岩戸。
○綱引　綱を引いて魚をすなどる
○難波堀江　仁德天皇の時高津宮の北郊を開鑿して難波江を通ぜられた堀江。

久方の天のたな雲風はやみきそひこ降りこ天のたな雲

夏野

夏の野の繁き草葉の下ごとに花のいろ／＼ふゝみたるらむ

晩夏蟬聲といふことを

蟬の聲きけば涼しもおのが羽の一重ばかりや秋はちかけむ

納涼

思ふどちむすべば涼し山の井のあかぬ心は影に見ゆらむ

夏夢といふことを

短夜のあかぬ名殘のうたゝねに見えぬ夢こそいやはかななれ

山井

山のべのみ井の眞清水清けれど昔の人の影ぞ見えこぬ

六月のつごもりの日に

御祓する川瀨の淀はありながら早くもくれて夏はいぬめり

立秋

我が袖に露ぞおきけるしろたへの袂のくだり秋はたつらむ

阿波々山たゞに向へるさやの山木の葉さやげる秋たつらしも

○たな雲　たなびく雲。
○風はやみ　風がはやいので。
○きそひこ降りこ　競ひ來れ、降り來れよ。
○ふゝみたるらむ　中に包まれて外に顯はれないであらう。
○思ふどち　思ひ合つた親しいどうし。夫木抄「知る知らぬ一つ木蔭に立ちよりて契りをむすぶ山の井の水」
○むすべば　掬べば。手にすくひ汲む。
○あかぬ名殘　短夜で寢ても寢足らず思ふ眠りの名殘惜しさに、うたゝねをして夢も見えぬのはいよいよはかない。
○御祓　六月晦日河原に出て罪穢をはらひ淨めること。
○くれて云々　夏は暮れて去る。
○我が袖に云々　後撰集「わが袖に露ぞおくなる天の川雲の柵波やこすらむ」白妙のは袂の枕詞。
○袂のくだり　袂の上から下まで萬葉集「風のとの遠きわぎもがきせし衣袂のくだり迷ひきにけり」。
○たゞに向ふ　眞正面に向ふ。
○さやげる　さわめく。

けさはまた物思ふ秋の始めとも知られぬほどの風のすゞしさ

秋風のつばさにそよと音づれてとこ世の鴈も思ひたつらむ

文月始めつかたこれかれ作ひて川邊にすゞみける時

おちたぎち岩こす波の白玉をぬき見むものと袂ぬらしつ

川のべのしぬのむら竹うちさやぎ涼しくもあるか秋の初風

彦星の秋まちわたる舟なれやこの川の瀬に見ゆる月影

七夕

秋といへどうつる習ひの言の葉にかけぬはほしの契りなりけり

天の川年のわたりはさもなくてたえぬ契りにあえむとぞ思ふ

秋風のふきにし日より天の川たちゐる雲のしづ心なし

月影の入りぬる空にながめして天つ星合のちぎりをぞ思ふ

ひこ星の天つ契りもしりがほにゆふべは荻のそよといふらむ

尾羽張の神のみことも天の川今宵ばかりはせかずもあらなむ

この夕あき風すゞし天の川いまか彦ほしふね漕ぎづらし

八日のあしたに

彦星のかへる袂にふきそめてあきくる風の身にはしむらむ

○おちたぎち云々　川の水が落ちてさかまいて。
○ぬき見む　波の白玉を緒に貫き通して見ようさ。
○しぬのむら竹　篠竹の叢り生えてゐるもの。
○彦星　七夕の織女星の夫といふ星。
○秋まちわたる　七月七日の秋を待ちつゞけてゐる。この下界の川瀬にも月の光が映つて舟の影に見えるのは天の川を彦星がわたる舟であるよ。
○秋といへど云々　言葉にかけた約束は秋になれば變つて契りが空しくなるのは普通であるが、言葉にかけぬ契りは七夕の星の契りである。新古今集「言の葉のうつりし秋も過ぎぬればわが身時雨とふる涙かな」
○年のわたり　一年一度天の川を渡ること。萬葉「玉葛絶えぬものからさぬらくは年のわたりにたゞ一夜のみ」一年一度といふ事は似なくて契りの絶えない事はさやかりたい。
○しづ心　落ちついた心。
○荻のそよ　荻に風にそよそよと音する。そよは其れよで、星の契りはそれそれと知つたやうにいふ。
○せかずもあらなむ　天の川を塞きとめないでありたい。星合を妨げずにあれ。
○いまか彦ほし　今丁度彦星が天の川を渡らうとして舟を漕ぎ出したらしい。

昨日までうれしかりけむ棚機は秋を悲しとけさぞ知るらむ

たなばたの別れしのちの心より秋はかなしと人のいふらむ

同じ曉の心を

千早振　神のみ代より　若草の　妻まき兼ねて　荒玉の　年の一年　思へども　言もかよはず　夏草の　しなへうらぶれ　秋風の　吹きたちぬれば　古に　妹がおりけむ　栲機（たくはた）の　うづ機みぞを　とりよそひ　いゆき語らひ　ま玉手の　玉手さしまき　百夜しも　つぎねと思ふを　玉くしげ　あけてしゆけば　せむすべの　たづきも知らに　久方の　天の川霧　立ち出でて　渡らふ川の　河の瀬の　絶えぬ契りは　天長く　ありつゝも見むと　思へども　猶歎かれぬ　あふ夜ともしみ

天の川いほきりがくり出でてゆかば妹があたりは見えずかもあらむ

三日月

見ずもあらず見もせぬ程の三日月に秋の哀れを思ひそめつも

海邊霧といふことを

難波江や入江の蘆のほの〴〵とあけゆく空に霧たちわたる

行路霧

○若草の　妻の枕詞。
○荒玉の　年の枕詞。
○夏草の　しなへの枕詞。
○栲機　栲布を織る機。
○うづ機みぞ　うづは珍らしく貴いものを賞美していふ。うづ機で織つた御衣。
○いゆき語らひ　行き語らひ。
○ま玉手　手を稱美していふ。
○さしまき　枕にして。
○百夜しもつぎね　百夜も續けよ。
○玉くしげ　明くの枕詞。
○たづきも知らに　よるべ、手段も知らず。せんすべのめあてもつかず。
○渡らふ川　渡る川。
○河の瀬の云々　瀬は流れ絶えない。契りも絶えないで天と共に悠久にあつて、互に相逢はうと思ふが。
○歎かれぬ云々　逢ふ夜の乏しく少ないので、なほ歎息されてゐるよ。ともしみは乏しさに、少ないので。
○いほきりがくり云々　多い霧にかくれた所を立ち出て行つたら。
○見ずも云々　見えないでもなく又見えるでもない位のかすかな三日月。

いづくにか宿りはすべき霧こめてやにはも見えぬかづぬのあたり

蟲

秋の野のくさの袂におく露は音になく蟲のなみだなるらむ

夕蟲を

夕月夜ほのかに蟲のなくこゑをあきの哀れのはじめとぞ聞く

露を

秋の野におくや白露緒をよわみたえて亂るゝ玉と見るまで

荻

春夏はいかにしのびて荻の葉の秋風ふけばまづそよぐらむ

けさ早く軒端にそよと音すなりうべ秋風をそぎといふらむ

草花

朝戸出の衣手さむみ野邊見れば尾花くずはな花さきにけり

女郎花

ほの〴〵とあけゆく野邊の女郎花たが名殘にか露けかるらむ

茅子

秋はぎに袂すらむとわけゆけば下葉のつゆに裳の裾ぬれぬ

○やにはも見えぬ　人聲も見えない。やにはは家庭で家のある所。
○かづぬ　葛野。山城葛野郡。

○音になく　聲を立てて泣く。

○秋の野に云々　秋の野に白露をおくよ。その白露の玉を貫き通した緒がよわいので切れて、白露が亂れ散る玉と見える程野に白露をおいたことよ。
○そよと音す　荻の葉がそよ〳〵と秋風に鳴る。
○秋風をそぎと　荻の葉が秋風に鳴る、なる程秋風を招くといふからだらう。そぐは招く意。
○朝戸出　朝の外出。
○衣手さむみ　袖寒いので。
○野邊の女郎花　野邊に咲いてゐる女郎花。
○たが名殘云々　女郎花は今朝は誰の爲に昨夜の名殘を惜しんで涙の露がかく多い事だらう。
○茅子　萩。
○袂すらむ云々　萩で摺つて袂に模樣をつけようと、野の萩原をわけて行くと。

植松有信が庭に植ゑたりける萩の花さきたりける折にこれかれ歌よみけると聞きてすぎ／＼によみて送りける歌ども多かるをおのれにも詠みてよとあるに此の人古學をたふとみていそしく物しける事を思ひて詠める

いにしへを忘れぬ宿と秋萩のふる枝さかえて花ぞさきける

薄を

あしびきの片山かげのしの薄うらさびしかる秋の夕ぐれ

夕ぐれを誰とへとかも花すゝき寂しき野邊にたちて招くらむ

秋野

秋の野の花はさかりに匂ふまもはや下葉よりうつろひにけり

月前蟲といふことを

秋の夜のふけゆくなべに蟲の音も月と共にぞ澄み渡りける

秋山を

山も海も同じ綠と思ひしをもみづる秋ぞことにはありける

葉月ばかり秋葉山にて

秋葉山は山しげ山霧こめてゆくてにまよふ旅人やたれ

月のあかかりける夜

○植松有信　尾張の人。本居宣長の門人。文化十年歿、年六十。
○すぎ／＼　次々。
○いそしく云々　勤めてゐた。
○ふる枝　古い枝。古學にたとふ。
○あしびき　山の枕詞。
○しの薄　篠薄、穗のない薄。
○うらさびし　心さびしい。
○誰とへと云々　誰をたづねて來いといつて花薄が招くのであらう。薄の花が手招きするやうな形をいふ。
○ふけゆくなべに　夜の更けゆくにつれて。更けゆくと共に。
○蟲の音云々　月の光の澄みわたると共に蟲の音も澄み渡つた。
○同じ綠と云々　春から夏は海も山も綠色と思つたが、今紅葉する晩秋は海の青さと格別異なつてゐる。
○秋葉山　遠江國天龍川の東岸。山上に秋葉神社がある。
○は山しげ山　端山即ち麓の山繁山即ち奧山。葉の山草木の茂つた山を言ひ掛けた。
○月のあかかりける夜　月のあかるい夜。

ながめして物思ふまに白たへの袖につゆおき月かたぶきぬ

秋の歌

この夕荻の葉そよぎふく風や秋のみにしむ始めなるらむ

み山べは紅葉すらしも走出（はしりで）のかど田の早稲田色づきにけり

うちわたす遠山もとは霧こめて門田の面にをしねかる見ゆ

鹿

あさもよし紀の川霧や隔つらむ鹿ぞなくなる妹とせの山

秋さればをじか妻こふ阿波々山あはでやぬらむ長き此の夜を

筑波山このもかのもに鹿ぞなく神のいさむる妻ならなくに

遠方のしげき葉山のいほぎりややほ霧がくりさを鹿なくも

黄葉

我が宿のはぎの下葉のしたもみぢしたにぞ秋の色は見えける

露霜にあらそひかねてもみぢ葉の今はと深き色を見すらむ

夕さればを鹿妻とふ秋しのや外山の紅葉ちらまくもをし

水邊紅葉

山川の岸のもみぢ葉かげ清み水のこゝろもあかく見えけり

○ながめして　つく〴〵と見つめて。○白たへの　袖の枕詞。○紅葉すらしも　紅葉してゐるらしい。もは感歎の詞。○走出　はしりで。家の門近い處。○かど田　門の邊にある田。○うちわたす　遠く見渡す。○をしね　晩稲。おくて。○あさもよし　きの枕詞。○紀の川霧云々　妹山と脊山を吉野川の川霧が隔ててゐるだらう南方の山に鹿が啼いて呼びあつてゐる。紀の川は吉野川の下流。○秋されば　秋になると。○阿波々山　遠江小笠郡（前出）あはでといふの序に言ひ掛けた語。鹿が互に相あふ事もなくて寢るだらう。○このも．かのも　こなたかなた。○神のいさむる云々　神が禁止される妻ではないのに、どうして妻戀ふ鹿があちらこちらに啼くのだらう。伊勢物語「戀しくは來ても見よかし千早振神のいさむる道ならなくに」○いほぎり云々　いほやほは測り知られず多きにいふ。測り知れぬ深い霧に隠れて、牡鹿が啼くことよ。○下葉のしたもみぢ云々　萩の下の方の葉がもみぢして上にあらはでない下には秋色が見えた。○露霜云々　露霜が青い葉を侵してゐるのに葉は爭ひかねて、もう今はと濃い秋色を見せてゐる。○秋しのや外山　大和國生駒郡秋篠。歌に外山の里といふ。

秋黄葉といふ事を

もみぢ葉はいろの限りを神無月しぐれふるとも何をそめなむ

月

橘の小戸のみそぎの神代よりすが〳〵しくもすめる月かな

海の原汐の八百あひにいる月のかげ吹きかへせ伊吹戸の神

大空のみどりはいつも變らぬを月の光ぞ秋はかなしき

鴈

天の海に楫の音すなり夕はふる風のまに〳〵鴈きぬらしも

久方の天の八重雲かきわけて秋津しまべに鴈はきにけり

長月ばかり蟲生といふ所に湯あみむとて一人二人いざなひゆきてかの山里に七日八日宿りける程鹿のね聞えざりけるをよべ此のむかひの山にて鳴きつと人のいふを聞きて

山里はつねになくてふ鹿のねを人傳にやはきかむと思ひし

秋の歌

足曳の山べに秋は物ぞ思ふいでいる月のあふさきるさに

ときはなる松のみどりを中々に秋はことなる色とこそ見れ

○橘の云々　伊邪那岐命筑紫日向の橘の小門の阿波岐原で禊をなさつたのをいふ。
○汐の八百あひ　海の多くの潮道が一所に集まりあふ所。
○伊吹戸の神　氣吹戸即ち人間の罪穢を祓ひ給ふ所にいます神。氣吹戸主神。
○楫　かぢ。櫂又は艣。
○はふる　風や浪などが物に煽り觸れる。
○久方の　天の枕詞。
○八重雲　幾重にも重なつた雲。
○蟲生　むしふ。信濃飯山の東北四里。蟲生の南にある野澤溫泉。
○よべ　昨夜。
○人傳にやは云々　鹿の鳴く音を親らこそ聞かうと思つた。人傳で鹿の音を聞かうとは思はなかつた
○足曳の　山の枕詞。
○あふさきるさ　あちこち。何につけかにつけ。

幽栖秋來といふことを

なべて世の秋くることもしらなくに苔の袂のけさは露けき

萩花藏水といふことを

秋萩のさきのをゝりに山川の水のみどりも見えずなりゆく

秋夕傷心

いつとても秋の習ひはかなしきを夕べはわきて涙ぐましも

杜の露といふことを

なきさはのもりの木の葉におきそめて秋くる露の袖ぬらすらむ

朝顔

朝顔のあしたばかりに比ぶれば露は久しきものにぞありける

秋霜

秋もやゝうつろふ花に色見えて草のはつかに霜ぞおきける

擣衣

足びきの山ごしの風の音よりも衣うつ聲ぞ身にはしみける

衣うつこなたかなたのあはれまでとり重ねてぞ秋はかなしき

名所擣衣といふことを

○幽栖　世の中から隠れた靜かなすまひ。
○なべて世の　この幽栖には世間普通の寂しい秋が來ることも知らぬのに。
○萩花藏水　萩の花水をかくす。
○さきのをゝり　花が咲きたわむ茂く盛んに花咲いたさま。萬葉「萩の花咲きのをゝりを見よとかも月夜の清きこひまさらくに」
○いつとても云々　朝も晝も夕も秋は物悲しいが上の常であるが。
○夕べはわきて　夕暮はとりわけ
○なきさはのもり　萬葉「哭澤之神社(なきさはのもり)にみわすゑ云々」古事記「哭時於御涙所成神坐香山之畝尾木本名泣澤女神。」
○朝顔云々　朝顔の花が晝を待たず朝だけで忽ちに萎むのに比べること。
○秋もやゝ云々　秋もやうやう深くなつて來た樣子が、次第に衰へゆく草に見えて來て草の上には僅かばかり霜がおいた。古今集「春日野の雪間をわけておひ出くる草のはつかに見えし君はも」
○足びきの　山の枕詞。
○山ごしの風　山を隔てた向ひから吹き來る風。
○とり重ね　哀れを重ねるにかけた衣の縁語。

海邊擣衣

蘆の屋のなだの汐やき暇あれやよるもすがらに衣うつなり

須磨の蜑のしほやき衣うちすさむ聲も閒遠にきこえくるかも

九月ばかり山路をすぐとて

薄く濃くこのも彼の面に色見えてもみぢあらそふ秋の山かな

秋旅

春霞たつをまつまの鴈すらもうしとぞ旅のそらに鳴くなる

秋の雜といふ題を

鴈はなき紅葉は色にあらはれて秋のこゝろを見する頃かも

秋の木といふことを

柏木の葉守の神のうらさびて荒れゆく枝に月ぞもりくる

八月十五夜いとよく晴れたり長月十三夜またくまなく晴れたり

長月も葉月も月のくもらねば秋はみながらさやけかりけり

秋野夕

霧たちて暮れゆく野邊のさびしきに草の袂も露ぞおきける

秋の水鄉といふことを

○蘆の屋云々　蘆のやの灘は攝津武庫郡。蘆屋の灘の女は鹽燒きなどの閑暇があることよ。新古今集「蘆のやの灘の汐やきいとまなみつげの小櫛もさゝず來にけり」

○須磨の云々　新古今「なれゆくは浮世なればや須磨の蜑の鹽燒衣閒遠なるらむ」

○薄く濃く　或は薄く或は濃く。

○もみぢあらそふ　競ひあつてもみぢする。

○春霞云々　春霞が立つたら北に歸らうと待つてゐるその閒。古今「春霞立つを見すてゝゆく鴈は花なき里にすみやならへる」

○柏木の云々　枕草子「柏木いとをかし葉守の神のますらむもいとかしこし。」葉守の神は樹の神。

○うらさびて　心さびしくなつて

眞菅おふるいなさ細江のみをつくし秋霧のみぞ深く見えける

秋の歌

すめろぎの　しきます國の　天の下　國内(くぬち)こと〴〵　益良夫の　弓弭(ゆはず)の貢
たな末の　女の貢　萬つき　まつる司と　秋されば　四方のみ民は　妹も脊
も　妻も子供も　勤(いそ)しくも　田づらに立ちて　おくつとし　刈りあげ刈りほ
し　取り束ね　馬にもおふせ　になひ持ち　道もさりあへず　かにかくに
身もたな知らず　大君に　仕へまつろふ　大寶はも
時はしもいつはあれどもをしねかる秋こそ里は賑ひにけれ

秋田を

植ゑしより秋田かるまで幾度か稲葉の露に袖ぬらすらむ

鴫

刈りはててひたも音せぬ夕暮に田づらの鴫の飛びたちなくも

暮秋蟲といふことを

秋深み霜やおくらむ笹の葉のさやぐが下にこほろぎ鳴くも

長月つごもりがた秋葉山に詣でてかへさに天龍川を舟より下る時よめる

遠近のもみぢは散りぬ楫の音のつばら〳〵に秋もくるらむ

○いなさ細江　引佐細江。濱江湖名湖の一支湖。
○益良夫云々　男子の奉る貢物。弓矢で獲た鳥獸を奉るのでいふ。
○たな末云々　女子が手先で作つた布帛などのみつぎもの。
○萬つき云々　よろづのみつぎ。稲は萬の貢物を奉る中の重要なものだからいふ。萬葉「よろづ調まつるつかさ」
○おくつとし　稲。
○道もさりあへず　道も避けられず。稲運ぶ人馬の往來はげしく。
○かにかく　とやかくあれこれ。
○身もたな知らず　自分の身を知らず。萬葉「騷ぐみ民も家忘れ身もたな知らず」
○仕へまつろふ　仕へまつる。
○大寶　天皇が御寶として愛撫し給ふもの、國民。
○をしね　おくて。晩稲。
○ひた　引板。鳴子。
○秋深み　秋が深いので。
○さやぐ　さや〳〵と鳴る。
○秋葉山　遠江山香郷。天龍川の東岸。山上に秋葉神社がある。
○遠近の　遠近何處も〳〵紅葉は散つた。もう秋も暮れて冬になるだらう。楫の音云々は、萬葉の「朝びらき入江漕ぐなるかぢの音のつばらつばらに吾が家しおもほゆ」の語句を取つたまでで、萬葉のはつばら〳〵は切にこまやかに故郷を懷ふ意。

初冬

小山田の昨日かりてし稻がらに霜ふりおきて冬はきにけり

時雨

高嶺には月かげさえて時雨ふる麓の雲に風ぞしくめる

旅宿時雨といふことを

草枕旅のやどりに木の葉ちりしぐれふるまで日をもへぬかな

嵐を

あしびきの遠山嵐さえぬらし更けゆく月のかげにしるしも

千鳥

わたの原沖つ汐風さえ〴〵て有明の月に千鳥なくなり

吉野川水はこほりに音たえてたぎつかふちに千鳥なくなり

いづかたに寄るともなしに終夜浦洲の千鳥うらぶれ鳴くも

蘆の枯葉

水鳥の青羽の色はかはらぬをみぎはの蘆は霜がれにけり

氷

志賀の浦や汀のかたはつらゝゐて沖邊はるかに波のたつ見ゆ

○稻がら　稻の莖。

○風ぞしくめる　風が吹きしきるやうだ。古今集「知りにけむ聞きても厭へ世の中は浪の騒ぎに風ぞしくめる」

○草枕　旅の枕詞。

○あしびきの　山の枕詞。

○さえぬらし云々　嵐が寒く吹くやうだ。月影にそれさはつきりわかる。しるしは著し、明白だの意。

○わたの原　海。

○たぎつかふち　わき上りさかまき流れる川の廻つてゐる處。萬葉「山川もよりて仕ふる神ながらたぎつかふちに船出せすかも」

○浦洲の千鳥　浦のあたりに住む千鳥。

○うらぶれ鳴くも　心さびしく悲しみ鳴くことよ。

○志賀の浦云々　つらゝゐては氷が張つての意。新古今「志賀の浦や遠ざかりゆく波間より氷りて出づる有明の月」

水鳥

そこひなき水の緑にすみなれて鴨の青羽の色もかはらず

さ夜ふけて蘆の葉さやぐ水鳥の羽ぶりの風に浪やたつらむ

寒月

鵲のわたせる橋の霜のいろと共にさえゆく冬の夜の月

水上落葉

もみぢ葉は梢のものと思ひしをさながら水の秋とこそみれ

夜落葉といふことを

山風のさそひ殘せしもみぢ葉の霜におちくる音のさやけさ

霜

冬くれば門田の水もかれはてて稻がらしろく霜ぞおきける

橋霜といふことを

葛城や久米の岩橋よゝをへて幾代か霜をおきわたすらむ

曉霜

夜を寒みおき出でて見れば有明の影にきほひて霜ぞおきける

寒草を

○そこひなき　はての無い。極めて深い。
○さ夜ふけて云々　夜ふけて波間の蘆の葉がざわ〳〵音がする。水鳥が羽ばたきする風で浪が立つて蘆の葉が鳴るのだらう。
○鵲の云々　新古今「鵲のわたせる橋におく霜の白きを見れば夜ぞふけにける」七夕に牽牛織女の二星天河に會ふ時烏鵲が翼でわたすといふ支那の傳說から、禁中を天上に喩へて御階を鵲の橋といふといふ一說である。
○稻がらしろく　稻がらは稻の莖であるが、此の歌では刈り取つたあとのをいふ。しろくは著くで、きはだつて、はつきりと。稻莖とはつきりわかるやうに霜が降つた
○葛城云々　大和南葛城郡。役小角葛城山から金峯山の間に山神を役して架したと傳說のある石橋。
○おきわたす　わたすは橋の緣語
○夜を寒み　夜が寒いので。
○有明の影にきほひて　有明の月影の白きに競ひて。

中々にかれもはてなで秋の色のはつ〳〵のこる霜の下くさ

山家冬朝といふことを

人まちし木々の紅葉はちりはてて朝けの庭に霜ぞおきける

網代

遠近に白波さわぐこれやこの世をうぢ川の瀬々のあじろ木

冬雲といふことを

炭がまにたてる煙か空さゆる雪げの雲か山にたなびく

爐火

夜を寒みおき出でて見れば埋火のうへさへ霜の色となりぬる

冬の天象といふことを

風早みくもりみ晴れみしぐれゆく雲のはたてに入日さすなり

炭竈

眞柴かる小野の炭がますむ人もまれなる山に煙たつみゆ

かくてだにわれすみ竈の煙ぞと憂世を空にあはれともみよ

山里は猶しぐるらむとばかりに煙たなびく小野のすみがま

寒蘆

○かれもはてなで　枯れ果ててしまふこともなく。
○人まちし　眺めよと人の來るを待つてゐた。
○朝け　朝明け。
○これやこの云々　これはあの宇治川の網代木といふものであらうか。このはかのの意、此の世現世を言ひ掛け、世を憂さ宇治川と言ひ掛け、あじろ木は宇治川で冬季氷魚を捕るために竹木を編み列ねた末に簀をつけた網代に立てる杙
○炭がま　木を燒いて炭をつくる竈。
○雪げの雲　雪を催すらしい雲、雪模樣の雲。
○埋火　灰の中に埋めた炭火。
○霜の色　炭火の燃えきつて白い灰になつたのをいふ。
○風早み云々　風が早いので。
○くもりみ晴れみ　或は曇り或は晴れ。
○雲のはたて　雲のはて。雲の際涯。
○眞柴　眞は美稱。柴は小さな雜木。
○かくてだに云々　かやうに侘しくしてさへ自分が世に住んで竈に立てる煙だと、炭竈を言ひ掛け。空には煙の縁語。

浪花江の入江の蘆の枯れはてて寐にくる鷺のかくれがもなし

初雪を

道たえむものとも知らず白雪のけさ降りそむる三吉野の里

雪

常に見し野山は雪にうづもれて知らぬ里にぞすむ心地する

これかれ雪の歌よみける時

冬くれど雪をともしみ甲斐がねや不二の高嶺のとこ珍らしき

我が里は山を離れて海につきたる所なれば雪のふる事いと稀なり

故郷の雪といふことを

さらぬだにとふべき人もしら雪のいとゞふる里跡やたえなむ

海邊雪

不二のねは雲居かくろひ清見潟きよき渚につもる白雪

夕雪

夕されば佐夜の中山風さえて阿波々が嶽に降れるしら雪

雪中眺望

とぶ鳥の跡なきかげも厭ふかな雪にくまなきあけぼのの空

○これかれ　誰もかれも。
○雪をともしみ　ともしは乏し。雪が珍らしく飽きたらぬので。冬になつてもこの土地では雪が珍らしく面白いので富士山は永久いつ見ても愛すべきさまである。ここはいつも變らぬ意の接頭語。甲斐がねは甲斐國の山。
○さらぬだに云々　さうでなくてさへ。雪が降らなくてさへ訪ひ來る人だあるかも知られぬ故里へは雪がいよ〳〵降るので益々人の跡も絕えるであらう。故里に雪の降る里と言ひ掛け。
○雲居かくろひ　雲にかくれて。
○清見潟　駿河庵原郡興津の南。
○夕されば　夕暮になると。
○佐夜の中山　遠江小笠郡。日坂から榛原郡菊川に至る山道。
○阿波々が嶽　遠江國小笠郡。
○雪にくまなき　一面の雪ですみずみまで雪の行屆かぬ所なき。

川冬月

山川にうきて流るゝもみぢ葉はちりても月の隈とこそなれ

神無月つごもりばかり秋葉山に上りけるに風いとさむし

秋葉山ゆふゐる雲をわけゆけば木の葉まじりに時雨ふりけり

霰

鷲のすむあら山風の吹くなべにすゞのしのやに霰ふるなり

寒閨聞霰といふことを

夜もすがらひまもる風の音さえて枕とよもし降る霰かな

社頭冬月

天なるやまなゐの水も冰るらむ五十鈴の宮に月さえわたる

早梅

梅の花冬さく色もかはらねばのちこむ春のかひやなからむ

年内立春

春くれどまだ一年もくれぬまは水の心もとけじとぞ思ふ

年の内にまづさく梅の花見てや春の心もいそぎたつらむ

限りある日かずも待たで春くれば靜ごゝろなく年のくるらむ

○ちりても月の隈　山川に月影が映つてゐるのに紅葉が散つて浮いてゐて映つた月影の曇りとなる。
○秋葉山　遠江國天龍川の東岸。
○ゆふゐる雲　夕方居る雲。
○あら山風　人氣遠い寂しい山から吹いて來る風。
○吹くなべに　吹くにつれて。吹くやさきに。
○すゞのしのや　しの竹で葺いた家。
○ひまもる　透間をもれて來る。
○枕とよもし　枕を鳴り響かして。
○天なるや　天にある。
○まなゐ　眞淳名井の約。井をいふ。眞は接頭語、淳は水を湛へた所。
○五十鈴の宮　折劔五十鈴宮。宇治山田市にある内宮。
○冬さく云々　梅が春にならぬうちに咲いても春の花の色と變りがないから。
○のちこむ春　梅におくれて來る春は來たかひもなく來ばえのせぬことだらう。
○限りある云々　一年といふ限りのある日數を待たないで舊年の内に春が來たので。
○靜ごゝろなく云々　心落着かずそは／＼とあわたゞしく。古今集「久方の光のどけき春の日に靜心なく花のちるらむ」

歳暮述懐

おふけなく神代の事を慕ふまにすぐる月日は又もくれけり

しはすの晦日の日不二の山を見て

夏冬もかはらぬ富士の白雪は年積るとも知らずやあるらむ

よしさらば頭の雪もふじのねの高く久しくいや積らなむ

同じつごもりの日

ゆく年は去年も今年も變らぬを暮るゝ惜しさぞいや増りぬる

今日のみと暮れぬる夜半の大空に何處をはかと年のゆくらむ

初戀といふことを

思ふより通ふ心のいかなればそれとも人にしられざるらむ

忍待戀

人待ちてさゝずば人やとがめむと槇のとぼそに立ちぞ煩ふ

待戀

くや／＼といもねぬものを中々にさし出づる月のさやの中山

はかなくも來むと頼めし言の葉にかゝる袂の露ぞふけゆく

忍戀

○おふけなく　身に不相應にも。
○よしさらば　だん／＼年を取るまゝよ、それならばそれにしておけ。
○頭の雪　白髪。雪といふによつてつもると云つた。いやつもるはいよ／＼つもる。
○今日のみ　今年も今日一日きりと。
○何處をはかと　何處をめあてと。
○思ふより云々　戀しく思ふ故に心が先に通ずるのに、その心が如何して其の人に知られないのであらう。
○人待ちて云々　來べき戀人を待つて戸を鎖さずにおくならば他人が咎めるだらうと。
○槇のとぼそ　槇はあて字。まは美稱。杉檜などの戸をいふ。
○くや／＼と云々　戀人が來るだらうか／＼と、寢もしないのに却つて、さ夜の中山に出る月だ鮮かに輝くことよ。
○はかなく云々　きつときますと云つて私を信頼させた彼の言葉よ、はかなくもは信頼させたかひもなく。

人しれず苔むすまでに年はへぬゆつ岩むらのいはばゆゝしみ
ぬば玉の月夜は常にくもらなむ忍びてかよふ世の人のため

不逢戀といふことを

あはずして戀ふる心は片絲の結ぼほれつゝ絶えむとすらむ

逢不逢戀

二柱はじめ給ひしあふ事をいかなる神のさふるなるらむ

逢戀

中々に一夜ばかりのうつゝをばはかなき夢に思ひなしてむ
わが心鏡の山の曇らずばあふみの海になみ立ためやも
風早みよそにのみこそ思ひしかねにつく雲のよりもこそあへ

別戀

あふ事ははかなき夢の心地してさむる別れの惜しくもあるかな
いかにして君をとゞめむさぬつ鳥きゞしとよもし此の夜はあけぬ

春戀

春されば物おぼほしきながめして涙ほしあへぬ袖の上かな
遠近の山もひとつに霞こめて妹こひしらの春のゆふべや

○ゆつ岩むら　極めて多くの岩の羣。苔むして年經た岩むらと云つていはばの序とした。言つたらば一通りでないの意。
○ぬば玉の　月又は夜の枕詞。

○二柱云々　男女の契りは伊邪那岐伊邪那美二柱の御神の始め給うた逢ふことであるのに如何なる神が遮られることであらうか。

○鏡の山　近江にある。くもるの緣語。ふみの海は琵琶湖、逢ふの言ひ掛け。
○よりもこそあへ　雲が寄り合ふにかけて美しき女に會ふことをいふ。よりあふは萬葉古義に草のより合ひ靡く如く容儀しなやかにうるはしきをいふと。
○さぬつ鳥　野に棲む鳥。
○きゞし云々　雉子が鳴いて響きわたらして。
○春されば云々　春になると物思はしい心惱ましい悶え詠めして。ながめに春の長雨を言掛けてほしあへぬの緣語とした。
○妹こひしらの　妹こひしの。らは意味のない接尾語。

菅の根のながき春日を春雨のはるゝ時なくこひつゝぞふる
春されば苗代小田にひくしめのうちはへてのみ戀ひ渡るかな
百千鳥さへづる春の長き日を戀ひや渡らむ待ちやくらさむ

夏　戀

我が戀は袖のみぬれて植うる田のみになる秋をいつとか待たむ

秋　戀

秋霧のかくさふ山のもみぢ葉の下にのみこそ思ひそめしか
秋されば移らふ山のもみぢ葉に人の心のならはざらなむ

人　づ　ま

筑波山尾上のかゞひはやせなむ人妻ころにこともとふべく

恨

思はぬも思ふも人の世の中とかつ知りながら恨めしきかな

寄雨戀といふことを

もみぢ葉をそむる時雨の雨故はほしあへぬ袖も色に出ぬべし

戀　の　歌

現には頼むとなしにぬば玉のあふと見む夜の夢をしぞ思ふ

○菅の根の　長きの枕詞。
○こひつゝぞふる　春日を經るに春雨の降るを言ひ掛け。
○春されば云々　上句はうちはへての序。ひくしめは引きわたすしめ繩。うちはへては長々と引き延はして。
○戀ひや云々　戀ひつゞけて暮さうか待ちつゞけて暮さうか。
○秋霧の云々　秋霧が隠す山の紅葉。上句は下にといふための序。
○秋されば云々　秋になると、色が褪せかはる紅葉にならつて人の心は移りかはることのないやうに。
○尾上の云々　山の上の嬥歌を早くしたいものだ。かゞひは歌垣で男女集まつて歌を歌ひかはす遊び。
○妻ころ云々　人妻子等。他人の妻に言ひかけるのに嬥歌をしたい。
○思はぬも　戀し愛する愛せぬも様々で儘にならぬ人世と知り乍らも戀の遂げられぬが恨めしい。
○ほしあへぬ云々　涙の雨にぬれて干すことも出來ない袖も色に顯はれて紅葉する。悲しい戀の思ひが顔色や様子にあらはれる。
○現には云々　夢でなくては逢はれぬ、現では逢ふべき希望もなくて。

逆書戀といふことを

藻鹽草かきはやれどもわたつみの深き心はあにつきめやも

寄花戀

さきぬやと思へば風にちる花のまだきうつろふ人の心か

寄月戀

おそはやも出でくる月の君ならばふけゆく空も歎かざらまし
ぬば玉のよるの月夜のなかりせばこぬ人さへは待たずぞあらまし

寄獸

枝高き木末をつたふむさゝびのあやふき戀も我はするかも

厭曉といふことを

わくらばにあふ夜の袖もかわかぬに曉にさへなりにけるかな

寄木戀

八綱はへ引くや船木の路せばみよるとはなしに言の茂しも

寄草

いかならむ利鎌もちてか刈りそけむ我が戀草のうたて茂きを

思不言戀といふことを

○藻鹽草　鹽を造るに用ゐる藻。搔き集めるから書くの序とした。
○かきは云々　文は書き迸ったが
○わたつみ　海。深きの序。藻鹽の緣語。つきめやもは豈盡きむや
○さきぬやと　咲いたかと。
○まだき云々　花が早くも色褪せ萎み衰ふ。人の心の變り移る言ひ掛け。
○おそはやも　遲いにしても早いにしても。

○むさゝび　鼯鼠。深山の林に棲んで樹の上を飛ぶ獸。枝高きの上句あやふきの序。

○わくらばに　たまさかに。
○八綱はへ　多くの綱を引きわたして船を造る材木を引くよ。その引く路が狹いのでとかく材木が路傍に片寄る。上の句はよるとはの序。戀人に近づきよるといふ事もなくて言葉多く物いふばかりであるよ。
○利鎌　銳い鎌。
○刈りそけむ　刈りのけよう。
○うたて茂き　うたてくも戀草が茂つてゐるのを。

言に出でばゆゝしかしこしいかでかく思ふてふ事人にしらせむ

深更歸といふことを

妹が名も我が名もをしと思へこそ夜深く露のおきてしもくれ

後朝切といふことを

あふことに命をかふる物ならば今朝かく物は思はざらまし

非心離

君にそふ心は常にはなれねど思ふ事ならぬ身をいかにせむ

寄名所戀

安波々山あはぬあやしも佐夜の山さやかに目には見ゆるものから

契久戀といふことを

契りおきし言の葉今はほだしにて露の命のきえぞわづらふ

久戀

心こそ色もかはらぬものならめ久しきよより思ひそめしを

梓弓ひけ田の子らも大みこと待つとせしまに老いにけるはや

逋書戀

かくしつゝ終にあはずば濱千鳥跡はかなくもなりやしなまし

○ゆゝしかしこし　大へんなことである。恐ろしい。

○いかで云々　斯様に戀しく思つてゐるといふ事をかの人に如何して知らせようか。知らせたい。

○妹が名云々　愛する女のも我のも浮名の立つが惜しいと思へばこそ、人目を忍んで夜深く起きても歸り來るのである。起きてに置きてを言ひ掛けて露と縁語にした。しは强め辭。

○安波々山云々　安波々山は遠江小笠郡。あはぬといふの序。佐夜の山も同郡。さやかといふの序。目にはさやかに見えてゐながら逢はぬのは奇怪であるよ。

○ほだし云々　今となつては却つてその言葉が自分の行動を束縛するものとなつて死ぬに死なれぬ。

○梓弓　引くの枕詞。ひけ田は和名抄にある大和城上郡辟田鄕で今の初瀨村の中。古事記の雄畧天皇が引田部の赤猪子に嫁がす詔を待てと仰せられ、赤猪子詔を待つて八十年を經たといふ說話を詠じたもの。

○濱千鳥　跡といふための序。鳥の跡は文字をいふ。

聞戀を

音のみをほのかに聞きて驛路のすゞろに人の戀しきやなぞ

契不逢戀といふことを

こひ〳〵て世をや盡さむ逢ひ見むと契りし事を思出にして

寄川

天地のいかなる川にみそがばか茂き我が戀やむときのあらむ

羇中戀

はろ〴〵に海山こえて來ぬれども戀の奴(つぶね)はおくれざりけり

不及戀といふことを

あふ事はかけても思はずあぢきなく憂き身の程を歎く頃かな

後朝

夢のごと思ひし程の名殘にや今朝の現はうつゝともなし

忘戀

憂き事をしのび〳〵て果て〳〵は忘らるゝ身となりにけるかな

顯戀を

水底にかくれてあさる鳰どりも顯はれてこそ音をばなくなれ

○音のみを云々　驛路の鈴にすゞろと言ひ掛け。すゞろは何といふわけもなく。聲を仄かに聞いて何となしに戀しいのは何故であるか。

○こひ〳〵云々　今はもはや逢ふことも出來ぬから、逢はうと契つたことを死後の思出にして戀ひながら死なう。

○みそがばか　如何なる川で禊をしたならばこの茂き戀がやむ時があらうか。

○はろ〴〵　遙々。

○戀の奴　戀といふ下部は此の遠い旅路に後れず供して來た。

○かけても　いさゝかも。

○夢のごと云々　昨夜の契りは餘り短くはかなくて夢の如くに思つた、その名殘でもあらうか今朝別れる現は現とも思はれず夢のやうだ。

○あさる　餌をさがし求める。

○鳰どり　鳥の名、かいつぶり。

歳暮戀といふことを

彦星に戀はまさりぬあら玉の年にもあはで暮れぬと思へば

不堪待

こひ〳〵て此の日くれなば夕月の出でてやゆかむ待つにはまたじ

寄鳥

つれもなき人やきゞしのひたつかひ歸りことだに聞かぬ思へば

馴戀

つゝめども鳥のほろ羽のほろ〳〵とこぼるゝ物は涙なりけり

寄山

夢のあひによる〳〵なれてはかなくも暮るゝ待たるゝ心何なり

祈戀

つれもなき人に心をつくば山うべもなげきの數はしげけむ

寄枕

すべもなき戀にもあるかも思ひきや祈る神さへつらからむとは

遠戀

夢のあひははかなくさめて片さりし枕ばかりぞ牀に殘れる

○彦星に云々　我が戀はあの一年一度織女星にあふといふ牽牛星よりまさつて切である。彦星は牽牛星をいふ。
○こひ〳〵て　今日一日戀ひ思つて待つて堪へられなかつた。日が暮れたら夕月が出るだらう、夕月と共に出て行かう、もう待たないでおかう。
○つれもなき人　無情なる人。
○きゞしのひたつかひ　雉子の頓使。往つたきり歸らぬ使。歸るの序。古事記天若日子の說話参照。
○鳥のほろ羽　ほろ〳〵の序。鷹の左右の翼。ほろ〳〵は涙のこぼれ落ちるさま。
○夢のあひ云々　夜毎に夢で戀人に逢ふことに馴れて賴みなくも日の暮れて夢見るのが待たれる心持は一たいどうした事か。
○心をつくば山　筑波山に盡すを言ひ掛く。
○うべも云々　歎きの多いのは尤もなことであるよ。筑波山の木の茂きに託し、歎きのきに樹を言ひ掛けて茂きの緣語とした。
○すべもなき　せんかたもない。
○思ひきや云々　戀人は無情である其の上に戀を祈つた神までが私にかうも冷酷であらうとは思ひも寄らなかつた。
○夢のあひ　夢に戀人と逢ふこと
○片さりし　片方へ離れ去つた。

和田の原風にまかせてゆく舟のはるかに人をこひ渡るかな

見戀といふことを

朝宵に見るとはすれど甲斐がねのねもみぬ戀はかひなかりけり

寄琴

七里にひゞき通へる琴のねのさやかに人を見るよしもがな

寄煙戀

宵々にわがまつ島よやくしほの煙はよそになびかざらなむ

寄枕戀

出雲のやすがてふ里にまきそめて妹とわがぬるこのすが枕

積りぬる枕のちりも拂ふべく思ふかたより風もふかなむ

寄黄葉

神無月しぐるゝ山のもみぢ葉の色ふかくこそ思ひそめしか

思不言戀といふことを

かくながら戀ひつゝかあらむ中々にいひ出でば人のうきめもぞ見る

鏡によす

榊葉ににぎたへしでて八咫鏡かけてぞしのぶ君がおもかげ

○和田の原云々　和田の原は海原上の句は遙かの序。こひ渡るの渡るは舟の緣語。

○甲斐がね　甲州の山。ねも見ぬの序で、下のかひなかりに對す。

○七里に云々　上句さやかの序。琴の音のはつきりしてゐるやうにはつきりと。古事記に仁德天皇の時枯野といふ船のこはれたのを燒いて燒け殘つた木を琴に作られた。その音七里に響いたとあるによつた。

○まぎそめて　初めて婚して。すが枕を枕としそめて。すが枕は菅の枕。

○かくながら　現在のまゝで、言ひ出さないで戀ひつゝ居ようか。

○にぎたへしでて　和妙を垂れ下げて。和妙は織りの細かな栲。荒妙の對。

○八咫鏡　八つ稜の出た鏡、大きな鏡。

○かけて　榊に鏡をかけて心にかけていつもの意を言ひ掛け。

山

神代より爭ひたてる耳なしやうねびの山のいづれ高けむ

曉

曉に夜はなりぬらむかさゝぎの橋に霜降り月かたぶきぬ

述懐

世の中をうけくつらけくたもとほり思へば袖の乾くまでなき

かくばかりうき身の程も忘られて思ふ事ならぬ世を恨むかな

しはすばかり人のもとに行きたりけるに主人のいもうとのまだ幼きが詠める歌とて見せけるを見て詠みける

末遠き色香をぞおもふあら玉の年のこなたの梅のはつ花

吉備の人土岐武雄がやよひばかり來て物など語らひて伊豆國へいでたつとて又秋は必ず駿河國にて出で合ひて語らはむとかたみにいひて別るゝ時に「久方の月にたぐへてまち待たむ秋の契りを忘るなよ君」と詠みて出したりけるかへし

久かたの天つ空なる彦星も秋のちぎりのかはりやはする

荅

○神代より云々　萬葉「かぐ山は畝火ををしと耳梨と相諍ひき神代よりかくなるらし云々」

○曉に夜は云々　夜はもはや曉になつたたらう。

○うけくつらけく　憂くつらく。○たもとほり思へば　思ひめぐらせば。たもとほりは徘徊する。めぐる義。たは接頭語。

○しはすばかり　十二月ころ。

○末遠き云々　前途の永い梅の色香が想像される。幼き少女の詠歌でその前途が想はれる。○あら玉の　年の枕詞。年のこなたは年改まらぬ十二月の事だからいふ。

○かたみにいひて　互に言つて。○久方の　月の枕詞。天の枕詞。

○彦星云々　七夕の夜天の河で織女星に逢ふと契つた牽牛星も秋七夕の契りは決してかはらぬ。

三吉野の瀧のとこ岩とこなめに久しくあるらし苔おひにけり

川

玉島の川の瀬光りな釣らすと裳ひきたたしし神代し思ほゆ

吾妹子にあふみの海のはて／＼は流れてうぢの川といふなり

　武雄が伊豆國にすみける時二月ばかり國へゆくとて立ちよりて秋はかならず歸りこむといひければ詠める

鴈がねと共にたちゆく君なれば秋とは空にたのめおくらむ

　駿河國なる草薙の社にまゐりける時

かぎろひの　ほなかにたちて　みこのみことの　いにしへに　たけびましつる　おほ野らぞこれ

　荒木田久形のもとより「わくらばに君がことの葉けふ見ればなどとほからむ遠つあふみ路」とありしかへし

言だにも通はざりせば君さかり遠つあふみにありがてましも

　正彦が家の紅葉の霜月ばかり猶盛りなるを見て

色かへぬ松の常磐に木がくれて嵐もしらぬ庭のもみぢ葉

霜月ばかり秋葉山にまらでむとて一人二人伴ひてゆく高き山の峯をつた

○とこなめに　とこしへに。とこしなへの義。河底が水苔などで常に滑らかなをかけていふ。萬葉「見れどあかぬ吉野の川のとこなめの絶ゆることなく又かへり見む」

○玉島の云々　古事記に見えた、神功皇后が筑紫末羅縣の玉島の里で河邊で御食事に河中の石に坐して御裳の絲を拔き取つて飯粒を以て鮎を御釣りになつた事を詠じたもの。

○な釣らすと　魚を御釣りになるとて。

○裳ひきたたし　裳を引きあげられた。人皇の御代ながら古いから神代といふ。

○あふみの海　近江の海、琵琶湖。あふみに逢ふを言ひ掛け。うぢに憂を言ひ掛け。

○鴈がね云々　春二月鴈が北に歸りゆくと共に　君は故郷へ歸行く。

○たのめおく　信頼させておく。

○草薙の社　駿河久能山の北麓。日本武尊草薙劒の靈瑞によつて火を免れ給ひし古蹟。

○かぎろひの　燃ゆ、ほのかの枕詞。こゝは火中にかけた。

○ほなか　火の中。

○みこのみこと　景行天皇の皇子日本武尊。

○たけびましつる云々　猛く叫び給うた大野であるぞこれは。

○わくらばに　たまに。

○などとほからむ　遠江といふければ決して遠くはない。

○君さかり云々　君を離れて遠い遠江に居られなかつたらう。

ひて行くに天龍川はるかに見渡さる

久かたの　天のたつがは　ふりさけ見れば　もゝちたる　豐田小國に　けぶりたちたつ

千ぐさの里といふを過ぐ

いといたく霜はなふりそ百草や千草の里のあれまくもをし

人の許に相良海布をおくるとて

大方にあさる磯こそあさからめ沖つ浪あひに袖ぬらしつゝ

殘月越關といふことを

朝まだき清見が關をこえくればいる方なみに殘る月影

嶺林猿叫といふことを

足びきの山の嵐のおとたえて夕ゐる雲にましらなくなり

寄木無常といふことを

信濃路にありといふなる帚木のあるかなきかの世にこそ有りけれ

武雄が國へ歸る時こたびゆきては又逢ふことはかたくやなどいひて是れかれ別れ惜しみける折に

君がゆく吉備の中山ありき山ありつゝ又もあはむとぞ思ふ

○天のたつがは　天龍川。
○もゝちたる　多く足りた。
○豐田小國　濱江天龍川の左右を豐田郡もと磐田郡。和名抄には止與太、國府と見えた。
○霜はなふりそ　霜降るなよ。
○あれまくもをし　荒れむも惜し
○大方に云々　竝大抵に搜し求めるなら心も磯も淺からう、この相良海布(さがらめ)は沖の浪の間に袖ぬらして苦心して取つた。あさからめにさがらめを言ひ掛け。
○いる方なみに　月の入る方もないために。涙をいひかけ。
○足びきの　山の枕詞。
○夕ゐる　夕方居る。
○ましら　猿。
○帚木　新古今「その原や伏屋に生ふる帚木のありとは見えて逢はぬ君かな」信濃國薗原にあつて遠くからは有るやうに見えて近づけばないといふ木。
○こたび　此のたび。
○又逢ふことはかたくや　又逢ふことは難くやあらんなど。
○吉備の中山云々　備中宮内村吉備中山」山上吉備津彦神社あつて、境内に有木山があるありき山はありつゝの序。

しるはのみ崎といふ所にて

しるはの海沖つ波あひに若布(わかめ)かる棚なし小船岩かげゆくも

同じ所の汐干見むとて是れかれ來つどひて一日二日物して人々今は歸りなむといふ時詠める

みけむかふしるはの磯による浪はよりのみよりて歸らざるなむ

吉備人近藤春彦が五月ばかりとひきて「夏草のしみたるみくさ結び來つ君にあはむと草むすび來つ」とありしに　闕

夏くさのしげれる道のあととめて古しぬぶ君ぞむかしき

まきのたつ荒山中にうみをなして水ももらさぬ足がらのせき

かたみ

言だまのたすくる國の古言ごとほき神代のかたみなりける

五月ばかり甲斐國人上野とし香が都へ上るとて立ちよりて二三日語らひて別れけるを八月ばかり歸りきて今は國に歸らむといひける時

ゆき歸るかりの別れも惜しかりつ今より君をいつとかまたむ

旅宿夢といふことを

○しるはのみ崎　遠江榛原郡白羽

○波あひ　波間。

○棚なし小船　船棚のない小舟。

○みけむかふ　みなぶち、淡路、きのへ、あぢふの枕詞。こゝは御食のしるしとつゞけた。

○よりのみよりて　波が岸へ寄るばかりで。

○しみたるみくさ　深く茂った草

○みくさ結ぶ　萬葉「妹が門行き過ぎかねて草結ぶ風吹き解くな又かへり見む」路傍の草を結んで事の成否を占ふ古代の風俗。

○道のあとゝめて　道を辿り求めて。我が古代の風習を學び究めて。

○むかし　賞愛すべくある。うむがし。向はまほし。

○まきのたつ　まきの生ひ立つ山　まきは眞木で杉檜など。又槇はかうやまきの異稱。

○うみをなして　績麻なして、績み麻(を)の如く長く續いて。海を言ひ掛け。

○水ももらさぬ　少しの隙間もなく嚴重な。海の縁語。

○言だまの云々　日本の國が言語に靈妙不可思議な力があってそれによって幸福のある國。萬葉「敷島の大和の國は言靈の助くる國ぞ」

夢のうちに通ふ家路は遠からでさめし名殘のかぎりなきかな
井
伊吹山神のいぶきの霧はれてゐさめの水の影ぞさやけき
山家鳥といふことを
すさまじく聞ゆるものは柴の戸の明方ちかきふくろふの聲
敷智の都なる大和大明神の神寶の玉をよめる
かけまくも　ゆゝしかしこし　天なるや　天の岩戸に　常闇と　籠りましぬ
る　日の神を　をぎまつると　八百萬　千萬神の　神(かむ)はかり　謀り給ひて
香久山の　五百枝ま榊　さねこじに　いこじもちきて　上つ枝に　とりかけ
まし　八坂瓊の　いほつみすまる　みすまるの　其の曲玉は　久方の　天
つ寶の　み寶と　いつき給へり　尊しや　遠つあふみの　沖つ浪　あらゐの
海の　へつ波そに　鎭まりいます　大神の　寶といつく　瑞玉(みづたま)の　玉のいろ
いろ　白玉の　玉のかずかず　あやしかも　くすはしきかも　翅なす　飛び
いでませば　諸人の　手にもとらえて　まそ鏡　みめでかしこみ　玉櫛
笥に藏めて　かにかくに　いはひておけど　其のはこに　とゞまりまさず
いつのまか　飛びいでまして　歸りまし　元つ社に　神(かむ)ながら　つどひいま

○伊吹山　近江坂田郡。いぶきの霧の序詞。いぶきは息を吹くこと。神が息を吹いて霧となつた。霧が晴れて醒めるとつゞけた。
○ゐさめ　居醒清水。近江坂田郡醒井。日本武尊が伊吹山から玉倉の清水にお出でになつて御心地やゝさめられたので居醒の清水と云つた。
○敷智　遠江國敷智郡濱松をさして濱名湖に傍す。敷智の都は濱松。
○をぎまつる　招き奉る。
○神はかり　多くの神々が事を議し給ふこと。
○さねこじ　根のついたまゝ掘りとること。さは接頭語。
○いこじもちきて　根ついたまで掘りとつて持ち來て。いは接頭語。
○八坂瓊　長い緒に貫きつゞけた多くの玉。
○いほつみすまる　多くの玉を緒にすべ貫いたもの。
○いつき　忌み深めてあがめ祀る。
○あらゐの海　濱名湖。その海に通ずる口に新居町がある。
○へつ波そ　邊つ波磯。海べたに波の寄せる磯。
○翅なす　飛び通ふの枕詞。
○とらえで　取ることもできないで。
○まそ鏡　澄みわたつた圓鏡。見るの枕詞とした。
○玉櫛笥　箱の枕詞。
○いはひおく　斎み愼みて祀る。
○神ながら　神慮のまゝに。
○つどひいませれ　集まつて御出でになる。

○そこをしも　その事を。
○あやにくすしみ　嗚呼まことに不思議だと云つて。
○および　指。
○色は云々　色は白いやら青いやら花田色やら、濃いの淡いの。
○絲をぬく　絲を貫き通す。
○岡本村　遠江濱名村岡本。
○天なるや　日の枕詞。棚機姫は天に居るよりその形容とした。
○棚機つめ　機を織る女。
○足玉手玉　手足の飾りにつけた玉。
○ゆらに　ゆらめき搖くさま。
○今の現に　天なるに對してこの現在の世で。
○玉くしげ　箱のみ、みふたの枕詞から三河にかけた。
○赤引の絲　三河寶飯郡町赤日子社のある赤孫鄕で貢とした絲。
○霰ふり　とほつの枕詞。
○黒木　皮を削らぬ丸太。
○齋屋　齋み潔めた家。齋服殿。
○旗薄　旗の靡くやうな穗に出た薄。
○冬さりくれば　冬になると。
○ぬば玉の　夜の枕詞。
○茜さす　日の枕詞。
○いむ機　齋み潔めた神衣を織るはた。

せれ　そこをしも　あやにくすしみ　世の人の　とびかみとしも　いつくみ
寶

中の郷といふ所の神社に神寶といひて齋く玉あり大きなるはおよびの大きさして大かた末のかた細く本は太くて曲れる玉なり其の曲れる所に絲をぬくべき程の小さき穴あり色は白き青き花田濃き薄きくさ〴〵なるが數あまたあり又その數あやしく多くもなり少なくもなることありそは其玉のおのづから飛び出でもし飛び歸りもすといふなり又此の社にみそぎ遷宮といふ事ありそは彼の玉の集ひたるを海原にもち出でて海潮にそゝぎ淸めて神殿に藏むるをいふとぞ

同じ郡の岡本村といふより年毎に伊勢の大宮に神御衣(かむみそ)を奉るといふ機屋を見て詠める

天なるや　棚機つめの　足玉も　手玉もゆらに　神ながら　織りそめましし
神御衣(かむみそ)を　今の現に　大神に　つかふまつると　玉くしげ　三河の國の　赤(あか)
引(ひこ)の　絲くりはへて　霰ふり　遠つあふみの　濱名の　岡本の里に　黒木も
て　齋屋をたてゝ　旗薄　尾花刈りふき　み雪ふる　冬さりくれば　ぬば玉
の夜には七夜　茜さす　日には七日を　忌みこもり　いむ機たてゝ　棚機の

○かゝみの影　鏡に映つたわが姿
○ことがみ　琴の上。琴のほとり
○かきくらす　暗くなる。
○すく　宿。
○あさかは　朝川を渡る。
○見るがうち云々　この菊を見てゐるうちに昔しの間に千代を經たかと思ふにつけても。
○青木すがねがり　青木菅根の許に。
○いにしへ慕ふ道　古學。
○村田橋彥　伊勢の人。宣長の門人。

神をいはひて　年毎に　織るとふ機屋　みればかしこし

寄鏡述懷といふことを

身に積る老の齡をわすれてはかゞみの影ぞうたがはれける

あれたる家に女の琴ひきたるかたを見て

つれ〴〵と搔きなす琴のことがみに誰が俤かきつゝみゆらむ

は月末つ方江戶へ下りける時雨のいたくふりける日道にて

かきくらす雲居遙かにおもひやる空のいづこぞ不二の神やま

小田原のすくをとく立ちて酒匂といふを渡りてゆくに風いと寒し

酒匂川あさかは渡り見かへれば不二の高ねに雪ぞふりける

江戶にありて長月ばかり菊の花を見て

見るがうちに千代やへぬらむと思ふにも故鄕いかに白菊の花

青木すがねがり始めてとぶらひける時

武藏野の秋野の草はしげくともいにしへ慕ふ道はまどはず

枯れたる木に烏のゐたるかたをよめる

木の葉みな嵐の風にちりはてて殘るからすの一つ寂しも

伊勢國にゆきける時村田橋彥がたづがやといふを訪らひけるに歌よめと

いひければ詠める

千代ふとふ此のたづが屋に尋ねきてふりにける世の事もとはまし

同じ時松坂にものして歸りなむとする時稻掛大平が許におくりける

遠つあふみ　遠くはあれど　村肝の　心通へば　玉章の　文も通ひて　思ふこと　よきもあしきも　隱さはぬ　あかき心は　わくらばに　來てあひ見れば　春の日の　藤のうら葉の　うらとけて　問ひみ語りみ　かにかくに　思ひまつはり　草枕　旅の心も　君により　わすえて思へば　朝鳥の　たちいでむ空も　おもほえぬかも

草枕たびのこゝろもわすらえて家にかへらむ事をしぞ思ふ

卯月ばかりに來りける人の垣に卯の花のさきたるを見て「言の葉の主人をぞ思ふ月雪のよそめにかゝる宿の卯の花」と詠みけるかへし

月花のひかりもしらぬ卯の花はよそめにそれと見ゆばかりなり

伊勢の國より歸る時尾張國名古屋をたちける日さきのたびに田中道麿が熱田まで送り來りしことを思ひいでてよめる

春風の　なご屋の道を　すく／＼と　我たちくれば　古の　ことぞ思ほゆ　古に　我をおくると　田中の　道麿のをぢが　久方の　雨もつゝまず　玉鉾

○千代ふとふ　千代經るといふ。鶴は千年といふのでいふ。
○ふりにける世　古くなつた上代
○稻掛大平　稻葉集解題參照。
○遠つあふみ・伊勢（松坂）とわが遠江とは遠くはあるが。
○村肝の　心の枕詞。
○玉章の・ふみの枕詞。
○隱さはぬ　隱さぬ。
○あかき心　まごゝろ。
○わくらばに　たまさかに。
○春の日　うら葉のまでうらとけての序。うらとけては心解けて。
○問ひみ云々　問うたり語つたり
○かにかくに　何やかと。
○草枕　旅の枕詞。
○わすえて　忘れて。
○朝鳥の　立つの枕詞。
○言の葉の主人　歌を詠む主人。
○月雪云々　卯の花の白いが月雪のやうで月雪花の風流のほども他人の目につく。
○田中道麿　美濃の人、名古屋住。鈴のや門人。
○春風の　名古屋の序詞とした。なごしは穩かな意。
○すく／＼　ずん／＼。
○思ほゆ　思はれる。
○久方の　雨の枕詞。
○雨もつゝまず　雨に用心して家にこもることなく。雨にかまはず。
○玉鉾の　道の枕詞。

の　道にいでたち　たゞか杖　つきもつかずも　石の上　ふるき昔の　古事
を　慕ふ心は　君も我も　おやじ心と　ほころひて　語らふときに　夏の日
の　あつ田に到り　はふ蔦の　別れを惜しみ　あゆち潟　後もあはむと　よ
る波の　かへり見しつゝ　別れにし　いにしへ思へば　今更に　旅の衣は
とほりてぬれぬ

池の宮の祭を見てよめる

霰ふり　遠つあふみ　朝もよし　きかふ小國の　花ぐはし　櫻の池は　大名
持　少名彦名の　神代より　かくやくすしき　神ながら　しかにあるらし
男の池と　名にこそたてれ　女の池と　名にこそおへれ　紅葉する　秋さり
くれば　此の池を　うしはく神を　年毎に　齋きまつると　大みけを　仕へ
まつると　渚なる　み草刈りそけ　里人の　身もたなしらず　そこひなき
水にかづきて　木の葉なす　沖に浮き出でて　沖つ鳥　むなみる如く　みけ
つ物　底に沈むと　青波の　八重浪わけて　夕づゝの　かゆきかくゆき　鳰
鳥の　なづさふ見れば　あやに畏し

古ゆうしはく神のうらさびて男池の水はあせにけらしも

此の池宮といふは遠江國城飼郡佐倉村といふにありてそこにいと大き

○たづか杖　手に持つ杖。
○石の上　ふるの枕詞。
○おやじ　同じ。
○ほころひて　誇って。
○夏の日の　あつの枕詞。
○はふ蔦の　別事の枕詞。
○あゆち潟　尾張熱田港の入江。あはむといふための序。
○朝もよし　きの枕詞。
○きかふ小國　遠江城飼(きかふ)郡。今の城東郡。
○花ぐはし　櫻の枕詞。
○神ながら云々　神代からそのまま其の通りであるらしい。
○名にこそたてれ　有名である。
○うしはく　土地を領する。
○大みけ　神に供へる食物。
○み草刈りそけ　草を刈り除いて身もたなしらず　身も知らず。身も忘れて。
○そこひなき　極みなき。限りなき。
○水にかづき　水中にもぐつて。
○木の葉なす　木の葉のやうに。
○沖つ鳥　沖に居る鳥。水鳥をいふ。
○むなみる　水鳥が首を曲げて胸を見る姿。
○みけつ物　神饌の物。
○夕づゝの　かゆきかくゆきの枕詞。
○鳰鳥の　なづさふの枕詞。
○古ゆ　古から。

なる池二つあり男池女池といふ年毎に秋の彼岸の中日といふ日に此の神社の祭ありて彼の池へ供物をさむる事ありそは斗ばかり入る程の曲櫃に中らすぐる程むし飯をかたくつめ入れて其の上に幣といふものを三本さしたててたより所に居ゑ置きて午の時ばかり一つづゝ池に浮めて池の眞中にもち出でて水底へおしいれ沈めてをさむるなりさて二三日の程に櫃ばかりすぎ／＼に浮びいづ猶おくれて出づるもありとぞ其の數定まれるは多からねどくわんとかいひて所々よりをさむる事ありて十二十三十年毎に多くも少なくもあり昔は男池にをさめたるをおのづから水あせて今は女池にをさむとぞ

大海に御祓すとて

思ほえぬ罪はありとも荒汐の汐の八百合にさすらへなまし

橘の經亮の許にて

いにしへをとめゆく道の橘は花さへ實さへかぐはしみ思ふ

嶺の松といふことを

白雲のたえまに見ゆる峯の松みどりは空の色とこそみれ

岡の屋といふを造りける時始めて人々つどひて酒のみ歌よみける時よめ

○中らすぐる程　半分過ぎる程。
○たより所　便宜の所。適宜の所。
○櫃ばかり　中のむし飯は無くなつて櫃だけ。
○水あせて　水涸れて。
○御祓す　河海に出て水で身を淨めて罪穢を除く神事をする。
○思ほえぬ　思ひ得られぬ。
○汐の八百合　潮が諸方から來あふ所。
○橘の經亮　橋本經亮。洛西梅の宮の神官。兼非藏人。高橋圖南の門人。有職故實家。文化二年歿。
○とめゆく　尋ね求めゆく。究める。
○橘は云々　萬葉「橘は實さへ花さへ其の葉さへ枝に霜降れどいや常磐の樹」によつた。

る

此の岡に　生ひたてる　鉾杉の木　しがうれに　苔むすまでに　しが枝の
榮えむ如く　しが葉の　色かへぬごと　萬代に　かはる事なく　けふの
如　來入り集ひて　けふのごと　ゑらぎ遊ばな　風流士(みやびを)のとも

寛政二年十一月二十二日新宮へみ移ろひます大御幸を見奉りて詠み侍る

かけまくも　綾にかしこし　天の原　八重雲わきて　神ながら　あもりまし
ける　日のみこの　神のみことの　新宮の　いでましをしも　うづらなす
いはひもとほり　をろがみまつる

つら／＼に思へばたふと空蟬の生ける驗あるけふにもあるかも

伊勢國能保野といふ所の倭建命の御陵といふにまゐりける時よめる

倭建　みこのみことや　鳥がなく　東の國の　まつろはぬ　人をことむけ
千早振　神をしづめて　神すゝみ　進みのまにま　近江なる　伊吹の山を
うしはきて　荒ぶる神を　むなし手に　いとらさむと　神たけび　たけびま
ししを　うつせみの　神にたへねば　うち日さす　都の外の　荒野らに　神
さりましぬ　こゝに來て　思ふもかしこ　高ひかる　日のみこ　いそしき
神のみこと

○しがうれ　その梢。
○けふの如　今日の如く。
○ゑらぎ遊ばな　咲み笑ひ樂しみ遊ばう。
○寛政二年　天明八年皇居炎上、將軍家齊老中松平定信をして大内裏を造營せしめ、寛政二年竣工。
○かけまく云々　言葉に掛けて申すも嗚呼畏れ多い。
○神ながら　神でましますまゝに神慮のまゝに。
○あもります　天降り給ふ。
○日のみこの神のみこと　天皇。
○新宮のいでまし　里内裏から御造營の新内裏への行幸。
○うづらなす　鶉の如くに背を圓く頭を地に伏してゐるさま。
○をろがみ　拜み。
○空蟬　現身。生存してゐる身。
○驗ある　かひある。
○倭建みこのみこと　皇子倭建命
○鳥がなく　東の枕詞。
○ことむけ　征服し。
○千早振　神の枕詞。
○まにま　まに／＼。まゝに。
○うしはきて　征服して領さする
○むなし手　空手。
○いとらさむ　取らむ。
○うち日さす　都の枕詞。
○神さりましぬ　薨じ給うた。
○高ひかる　日の枕詞。
○いそしき　忠實に勤め給うた。

羇中友といふことを

君とわれかくても終に別れむと思ふも旅のうきにやはあらぬ

琴

玉ちはふ神もよるとふ琴の緒の長き代たえぬ音のさやけさ

久しく雨ふらざりける頃村々にて神々にこひのみけるをたちまち雨のふりければ

み民らがなげきこひのむ天つ水畏しかみはうけにけらしも

岡部大人の忌日によめる

てる日にし　雲かゝるごと　鏡にし　塵つもるごと　うつそみの　世の人みなは　瑞垣の　久しき時ゆ　からごとに　あひ口あへて　明らけき　神のみ國の　古事を　忘らえはてて　秋霧の　まどへるはしに　大直日　神の直日と　樫の實の　ひとり悟りて　益良夫の　手にとりもてる　梓弓　心ふりおこし　石の上　ふるき神代の　古道の　あら草木の根　かり拂ひ　いそしみまして　道の口　いはひ始めし　我が大人の　みかげ尊し　月に日にけに

釋教

後の世を思ひいるてふ山川のこゝろ清くも見えわたるかな

○玉ちはふ　人の靈に幸福を與へ助ける。
○よるとふ　よるといふ。
○こひのむ　請ひ祈る。
○岡部　賀茂眞淵。大人は師の敬稱。
○てる日にし　しは强め辭。
○雲かゝるごと　雲かゝる如く。
○うつそみの　世の枕詞。
○瑞垣の　久しの枕詞。
○時ゆ　時から。
○からごと　支那のこと。
○あひ口あふ　互に人の心に合ふやうに物いひ口をきく。
○大直日神直日　神事競つて齋み愼んだのを常にかへすこと。古學を興すことをさす。
○樫の實の　ひとりの枕詞。
○梓弓云々　梓弓の矢を射る如く奮ひ立つ心を起して。
○石の上　ふるの枕詞。
○あら草云々　眞淵が在來の國學の誤まつた研究を排したのをいふ。
○道の口云々　國學研究の新しい道程に出で立ちはじめた。
○思ひいるてふ云々　後生を思つて入るといふ山の山川の流れの底が清く、佛門に入る人の心も清く。

山がはの水の心し清からばそこなる玉のひかりをも見む

洲鶴といふことを

思ふことなぎさに千代をよばふらむ浦洲の鶴のうら安の國

日

天の原一日ひと夜ををちかへり豐さかのぼる日の大みかげ

瀧　を

それながら落ちてたぎつと見ゆるかなみくまり山にたてる白雲

不盡の山をよめる

打ちよする　駿河の國と　霞ふり　遠つあふみと　國はしも　ことにあれども　むら山は　へなりてあれど　羣山の　上にぬけ出でて　天そゝり　高く見えたる　不二のねは　くすしき山か　み冬つき　春さりくれば　天の原　霞たちこめ　時鳥　きなく五月の　夏の日も　消ゆる時なく　白雪の　ふりて積れり　もみぢ葉の　秋に至れば　麓べは　霧たちわたり　白雲の　八重雲の上に　此の山を　ふりさけ見れば　古に　いひける如く　天地の　おひさることも　遠からず見ゆ

暮村煙といふ題を

○なぎさ　渚に思ふことなきを言掛けた。
○うら安の國　鶴の心安らかさといふに日本國の一名浦安の國を言ひ掛け。
○をちかへり　元にかへつて。夜からまた元の晝にかへつて。
○豐さかのぼる　朝日のうるはしく昇ることをいふ。
○それながら云々　その儘で落ち逆卷き上ること。
○みくまり山　山から流れ出る水の分岐する山。分水嶺。
○打ちよする　駿河の枕詞。
○霞ふり　遠江の枕詞。
○むら山　羣山。
○へなりて　隔たつて。
○天そゝり　天に聳えて。
○くすしき山か　靈妙なる山かな
○み冬つき　冬が終つて。

不二のねは夕ゐる雲にかくろひて麓の里にけぶりたつなり

扇の繪に竹あり

吳竹のそよともいはで涼しきかこや秋風のふしどなるらむ

松積年といふことを

松の葉の霜に雪にもかはらぬはいく年深き緑なるらむ

ある人の庭に松の木を多くうゑて是れに歌よめとあるによめる

墨の江の清き渚にあさりして年ふるたづはこゝにすまなむ

紫式部の歌に

紫のこの一もとの言の葉の千々のにほひぞ世にすぐれたる

三面の大黑といふものをかきたる繪に

二面（ふたおも）はあしけ人なりこれは又たからな倉にみつおものかみ

里竹

世々をへて誰かすむらむ菅原や伏見の里の竹のむらだち

神祇

心あらばたづねてもとへ三輪の山すぎにし神の世々の古事

萬代につきの光もすみの江やあら人神の宮居さだめて

○夕ゐる雲　夕方居る雲。
○かくろひて　隠れて。
○吳竹云々　淡竹がそよと音もしないでゐてまあ涼しいことよ。そよはそよ〳〵といふ音にそれよいふ意を言ひ掛け。
○こや云々　これは秋風の臥牀であらうか。
○霜に雪にも　霜にも雪にも。
○あさりして云々　餌を求めて年經た鶴。
○紫の云々　古今集「紫の一本ゆゑに武藏野の草はみながら哀れとぞ見る」によつた。
○二面云々　裏表兩面の人は惡い人である。然るにこれはまた寶を倉に滿つるといふ三面の神である。
○世々　竹の節（よ）を言ひ掛け。
○菅原や伏見の里　大和國添下郡伏見。今菅原寺がある所。古今集の「いざこゝにわが世はへなむ菅原や伏見の里の荒れまくも惜し」によつた。
○たづねて云々　尋ねこひもせよ古今集の「我が庵は三輪の山もと戀しくはとぶらひ來ませ杉たてる門」の意を取つて、過ぎにしに杉を言ひ掛け、三輪の縁語神の世とつゞけた。
○あら人神云々　天皇が皇居をお定めになつて。住の江の津大伴の津を含めて難波津と云つた。仁德天皇の都を定め給ひしをいふか。月の光澄むを住に言ひ掛け。

社

すめらぎのみ代榮えむと瑞垣の御代にさだめし神のみづ垣

羇中夢といふことを

足曳の山ごしの風におどろけば見つる家路は夢にざりける

石見國なる小篠美野とし頃ふみにのみかたみにしたしくいひかはしてまだあはざりけるをこたび江戸へ下ると聞きて掛川の驛にて始めて出であひてうちとけて語らひける時

いつしかと逢ひ見むことをまちしまに早く心は君になれけむ

堀口勝延の庭に池をほらせて島山の形ををかしく造りて所々にからめきたる名をつけられたるを二月ばかり人々つどひて其の所々につきたる名を題にて歌よめる唐めきたる名は觀魚石　躑躅岡　紫藤橋　尋芳徑　垂柳塘　臨海阜　脩竹林　鳴鳩園

菅の根の　長き春日を　君が家に　遊びて見れば　朝日の　たゞさす岡に
つゝじ花　紅にほひ　見渡しの　堤の上に　生ひたてる　春の柳は　淺みど
り　綠うちなびき　こちごちに　いはひ渡れる　藤橋の　かげも長閑に　さ
く花の　香をかぐはしみ　島山を　いゆきかへらひ　垣つなる　竹の林に

○瑞垣の御代　磯城瑞籬宮に宮居し給ひし崇神天皇の朝に神鏡神璽を倭笠縫に奉安されて萬世榮え給ふ宗廟と定められたこと。萬葉「すめろぎの御代榮えむとあづまなる陸奥山に黃金花さく」
○足曳の　山の枕詞。
○おどろけば云々　夢がめざめると、我が家へ行く路と見たのは夢であつたわい。ざりはぞありの約。
○かたみに　互に。
○掛川　遠江小笠原郡掛川驛。
○からめきたる　支那風の。
○菅の根の　長しの枕詞。
○たゞさす　直に光がさす。
○こちごち　そちこち。彼方此方。
○いはひ渡る　藤の枝が蔓になつて這ひかゝつて渡してある橋。
○香をかぐはしみ　花の香のかぐはしさに。
○いゆきかへらひ　往き歸り。
○垣つ　垣根の内。

ふく風の　音もさやかに　鳴く鵯の　聲をともしみ　山のべに　上りて見れば　わたの原　雲居遙かに　沖つ邊は　霞たちこめ　へつべには　白浪きよる　白浪の　たちかへり來て　朝されば　いもが手にとる　鏡なす　池の汀の　大石に　おりゐて見れば　水清み　浮める魚は　もみぢ葉の　ちりうくが如　しづみゆく　はたの光は　底深く　しづける玉の　白玉の　かゞよふがごと　あやに〳〵　見れどもあかず　此の石の　ときはかきはに　此の水の　たゆる事なく　思ふどち　かくし遊ばむ　いや年のはに

水たまる池の氷のうちとけて遊べるけふのあやにたぬしさ

扇の地紙に賀茂の葵をすきいれたるに書ける歌

幾千代もたち榮えゆく君が代にあふひの蔓あふぎかざさむ

不二の山を夢に見たるさまを詠める歌

天の戸のあけゆくまゝに不二のねの霞み初めたる空ののどけさ

旅宿夢

宵々の夢にはたえず通ふともしらでや家に人のまつらむ

女の月見たるかたを

月夜よし夜よしと空にながむれば故郷人のこひせらるはた

○さやかに　爽やかに。はつきり
○聲をともしみ　聲が珍しいので
○雲居遙かに　遙かに海と天と接し。
○へつべ　岸に近いあたり。
○白浪の　立ち返るの枕詞。
○朝されば　朝になると。
○鏡なす池　鏡の如き池。
○水清み　水が清いので。
○はたの光　魚の鰭の光。
○しづける玉　水中に沈んだ玉がすき通つて上に見えるその白玉。
○かゞよふ　赫く。かゞやく。
○あやに〳〵　嗚呼々々。
○ときはかきはに　常磐堅磐。永久不變に。
○思ふどち　親しい同士。
○かくし遊ばむ　かやう遊はう。
○いや年のはに　いよ〳〵年毎に
○あふひ　葵に逢ふ日を言ひ掛け
○天の戸云々　天の戸が明け夜が明ける。
○月夜よし云々　古今集「月夜よし夜よしと人に告げやらばこてふに似たり待たずしもあらず」

近き頃伊勢國松坂にてつくり出でたる杉つかの筆をほむるうた

すめろぎの　遠つ神世に　唐國の　文字ちふものの　わたりきて　物らことごと　記しおく　事のよろしも　言の葉を　しるす宮人　宮城野の　萩束の筆　名ぐはしき　和歌の浦まに　おひたてる　蘆束の筆　筆はしも　さはにあれども　大神の　みひけゆなりて　神奈備の　神より板に　つくるとふ　清く尊き　杉つかの筆

伊勢の大宮ををがみ奉る時よみ侍る

掛けまくも　綾に畏き　すめろぎの　神の大御祖　天照らす　神のみ玉の　大八洲　國は多けど　神風の　伊勢の國はし　鞆の音　きこえぬ國　しき浪の　常世の浪の　とこしへに　きよする國と　久方の　天つ御國ゆ　神ながら　みしめ給ひて　天降り　降りいまして　さく鈴の　いすゞの川の　川のべに　したつ岩根に　宮柱　ふとしきまして　天地　月日と共に　しきませる　大宮所　尊きや　大前近く　うじもの　うなねつきぬき　畏みも　膝をりふせて　をろがみまつる

鈴の屋翁のもとに松坂に侍りける時やよひのつごもりがたに

家さかり幾日へにしと數ふれば春はくれにもなりにけるかな

○すめろぎ云々　應神天皇の古き昔をいふ。
○こと〴〵　悉くみな。
○宮城野　陸前宮城野。萩の名所
○萩束　萩の筆軸の筆。
○名ぐはしき　名の美しい。
○さはにあれど　多くあるが。
○みひけゆ　御髭から。
○神より板　古代敬いて神を招請するといふ杉の板。
○鞆の音云々　鞆は弓を射るとき左臂に結びつける具で弦が觸れて音がする。鞆の聞えぬ國は平和な國。
○しき浪　しきりに寄せ來る波。
○天つ御國ゆ　天つ御國より。
○さく鈴の　五十鈴の枕詞。
○ふとしき　柱を太く莊嚴に立ていかめしく其の宮をしろしめす。
○しきませる　しろしめす。領治し給ふ。
○うじもの　鵜の如く。
○うなねつき　鵜が首を水に入れる如く人が地に額づき敬ふ。
○家さかり　家を離れて。

同じ時今は歸りなむとする時にそこなる友だちに別れをしみてよめる

伊勢の海の　深くさやけき　其の浦に　唐國ぶりの　まがごとを　みそぎ捨てむと　しきなみの　常世の浪の　よりくに　我がくる時に　其の濱に　かゞよふ玉　遠近ゆ　きよする玉　其の玉に　交らひをれば　其の玉の　光をよみ　其の海の　渚を淸み　千歳も　かくしもあらむと　思へども　思ふことならぬ　草枕　旅にしあれば　歸るべき　時にはなりぬ　そこをしもあやに思ひて　水鳥の　たたくをしき　けふにもあるかも

又も來て淸き渚にみそぎつゝあかき神代のみちをたづねむ

唐國人の三人四人集ひて酒のみたるかたを見てよめる

少名彥神の始めしみきぞとも知らでゑらぎて酒みつぎすも

酒の名を聖とおふせてほこらひて聖がほするさかし人の友

柿本の神の御かたに

言の葉の神と聞ゆるいにしへの神ならふべし後ならはめや

鈴の屋翁の古事記傳の竟宴に志那都比古神を

雲霧をしなどの風の拂へこそ月日の影もさやけかりけれ

安藝の人橋本稻比古が「雲居には隔てすめども君とわれ見し夜かはらぬ

○さやけき　淸き。
○唐國ぶり云々　支那風の忌まはしい穢れを身を洗ひ淨めようと。
○しきなみ　頻りに來る浪。
○常世の浪　外國の波。
○かゞよふ　輝く。
○遠近ゆ　遠近から。
○渚を淸み　渚が淸いので。
○千歳も云々　千年も永久にかくあらむと。
○草枕　旅の枕詞。
○そこをしも云々　その事を嗚呼と殘り惜しく感じて。
○水鳥の　立つの枕詞。
○たたく云々　立たむことが惜しい。
○あかき　僞りなき眞心の。
○少名彥神云々　少名彥神は酒を始めて作られた神。古事記「此の御酒はわが御酒ならずくしの神常世にいます石立たす少名御神の神壽ぎ壽ぎくろほし豐壽ぎ壽ぎもとほし獻り來し御酒ぞあさずをせさせ」
○ゑらぎて　笑ひ戲れて。
○酒の名云々　魏書「以二白酒一爲二賢者一以二清酒一爲二聖人一」萬葉「酒の名を聖とおほせし古の大き聖の言のよろしも」
○言の葉の神　歌神。
○しなどの風　風。風神の級長戸邊命といふ。

山の端の月」とよみておこせるかへし

君と見し雲居の月にながめして廻りあふべき時をこそまて

近江の國人小原君雄が「たまちはふ神の宮人千代もいまさねさきからば又もあひ見む神の宮人」とよみておくりけるかへし

朝よひに　身をこそいのれ　遠つあふみぢ　とほけども　又もあふみの　君を見むため

松年久といふことを

久かたの天のかよひぢ中たえし神代ひさしき橋だてのまつ

周智郡秋葉山に今年八月九月の程開帳といふ事ありて國々所々よりあまた人の詣づるをまして國内の人は老いたる若きをいはず足たつ限り皆詣でけり九月ばかり詣でてよめる

遠つあふみ　秋葉の山は　眞木たつ　ま山しげ山　打ちなびく　春さりくれば　櫻花　をゝりにをゝり　山邊には　霞たなびき　名におへる　秋にしなれば　尾上には　もみぢ葉にほひ　麓には　川霧たちぬ　此の山を　うしはきいます　大神の　みいつの盛り　もみぢ葉の　匂へるが如　さく花の　かをるが如く　諸人を　惠み給ひ　かぐつちの　神のあらびの　まが事を　鎭

○たまちはふ　人の靈に幸福を與へ助ける。
○いまさね　いませよ。
○さきからば　無事幸福であらば
○遠つあふみぢ　遠江路。遠江國を云ひ、次のとほけども（遠けれども）の序詞とした。
○あふみ　近江に逢ふを言ひ掛く
○久かたの　天の枕詞。
○眞木たつ山　檜杉などの生え立つ山。
○ま山しげ山　まは美稱。しげ山は樹の茂つた山。
○打ちなびく　春の枕詞。
○をゝりにをゝり　撓むばかり茂りに茂る。
○名におへる　秋葉山といふ名。
○尾上　山の峯。
○もみぢ葉にほひ　紅葉がうるはしく色に染る。
○うしはきいます　領し治め給ふ
○みいつ　稜威なる威光。
○かぐつち云々　火の神の荒ぶる災難。火災。遠江秋葉神社は秋葉山三尺坊權現と稱して鎭火の靈驗ありといはれた名祠。

め給へれ　そこをしも　綾に尊み　内日さす　都も鄙も　天の下　天のます人　ます〳〵に　仰ぎ尊み　大前を　拜みまつると　足びきの　岩根きねたち　ふみならし　たぎち流るゝ　山川の　八十瀬渡りて　ぬば玉の　よる晝といはず　まゐでくる　神のみいつは　榊葉の　常磐かきはに　萬世に　榮えいまさむ　秋は山まやま

人目なき山里とこそ思ひしか神のみたまに賑ひにけり

水郷蘆

浪花江の入江の蘆ぞさやぐなる下葉をかけて汐やみつらむ

釣

わたのはら沖つ汐ざゐさわ〳〵に鯛つる蜑や海のさちひこ

暮漁舟

近江の海夕なみ千鳥なくなべに釣する蜑の漕ぎかへる見ゆ

岡部大人の東にて身まかり給ふと聞きける時

湊べに　舟はよるとふ　ありそべに　みるはよるとふ　いかさまに　思ひよりてか　ちゝのみの　父にもあらぬを　父のごと　惠まひ給ひ　柞葉の　母ならなくに　母のごと　したひなつかひ　萬代に　かくしもがもと　思ひし

○そこをしも　その事を。
○内日さす　都の枕詞。
○天のます人　人民。
○足びきの　山の枕詞。轉じて岩にかけた。
○きねたち　木を伐つた根株。
○たぎち流る　逆卷き流る。
○八十瀬　多くの瀬。
○ぬば玉の　夜の枕詞。
○さやぐ　さや〳〵と音がする。
○わたのはら　海。
○汐ざゐ　汐のさして來る時波のさわぎ立つをいふ。
○さわ〳〵　ざわ〳〵音がして。
○海のさちひこ　海の獲物を多く漁り得る人。
○近江の海云々　萬葉「淡海の海夕浪千鳥ながなけば心もしぬに古思ほゆ」によつた。
○なくなべに　鳴くと共に。
○岡部大人　賀茂眞淵。
○よるとふ　寄るといふ。
○ありそべ　荒磯邊。
○みる　海松。海藻の一種。
○ちゝのみの　父の枕詞。
○柞葉の　母の枕詞。
○萬代云々　永久にかくあれと。

○空蟬の　世の枕詞。
○村肝の　心の枕詞。
○へなり　隔たり。
○なぐるさの　遠ざかるの枕詞。
○遠そきをる　遠ざかりをる。
○さねかづら　蔓莖で纏ひつく植物でめぐりあふ故、あはむの序。
○荒玉の　月の枕詞。
○來へゆく　來て經過してゆく。
○もみぢ葉の　もみぢの黄からきみと言ひ掛けて續けた。
○玉鉾の　道の枕詞。
○およづれ　怪しき言。僞りごと
○まがこと　禍言。不吉な言葉。
○梓弓　音の枕詞。
○玉章の　使の枕詞。
○せむすべ云々　如何にすべきかたよりも手段も知らず。
○ぬえ鳥の　泣くの枕詞。
○うまごりの　あやの枕詞。
○鳥がなく　東の枕詞。
○おも父　母と父。
○歸り來なめど　歸り來るだらうが。
○空蟬の云々　この身の生まれたまゝに。
○時ゆ　時より。
○うらもなく　隔なく。
○ひきの云々　率る行くまゝに。
○刈萱の　束、穗の枕詞。轉じてしはにかけた。
○おほゝしく　疎々しく。

を　思ふかひなく　空蟬の　世の事繁み　村肝の　心にもあらず　足引の
山をもへなり　みなぎらふ　河さへへなり　なぐるさの　遠そきをれど　さ
ねかづら　後もあはむと　大船の　思ひ頼みて　荒玉の　月もへゆけば　あ
ら玉の　年も來へゆく　神無月　時雨と共に　もみぢ葉の　君はすぎぬと
玉鉾の　道ゆく人の　およづれを　我にやつぐる　まがことを　我や聞きつ
る　梓弓　おとも聞えず　玉章の　使もこねば　せむすべの　たづきもしら
に　ぬえ鳥の　うらなきしつゝ　うまごりの　あやに悲しみ　よるはも　夜
のあくるきはみ　晝はも　日のくるゝまで　鳥がなく　東の空を　くまもお
ちず　見つゝぞしぬぶ　おも父のごと

友だちのしはすばかり身まかりける時

年月は歸り來なめども　もみぢ葉の過ぎにし人をいつとか待たむ

駿河國なるいもうとの身まかりける時

空蟬の　あれのまに／＼　いもせと　あれつくまゝに　綠子の　はふ子の時
ゆ　うらもなく　思ひまつはり　ちゝのみの　父にも仕へ　柞葉の　母にも
仕へ　睦ましみ　ありける物を　空蟬の　世のことわりと　村鳥の　ひきの
まに／＼　國さかり　遠そきをれば　刈萱の　しばも相見ず　おほゝしく

思ひし時に　はしきやし　妹のみことは、何すとか　あしたにおきて　夕には　けぬる露なす　はかなくも　すぎてやいぬる　父母をおきて

　しはすばかり父の身まかりける時

歎きつゝ牀のべさらずさもらへどめし給はねばせむすべもなし

萬代におはしまさむと大船のおもひ頼みしことぞくやしき

　あくる年の春猶こもりゐて

妹が髪たがねばながき春の日を袖のみひぢて眺めくらしつ

ともすればおつる涙ぞせきあへぬ手弱女の如たわらはのごと

現とも夢とも更に思ほえで別れはのちぞ悲しかりける

　忌日に

更にまたおつる涙ぞせきあへぬ同じ月日はかへらざらなむ

　をちの十月ばかり身まかりける時

神無月風に亂るゝもみぢ葉のとゞめもあへずちる涙かな

　人の娘の歌よみならはむとせしが程なくうせにけるを其の後彼の家にゆきける時よめる

見し宿は昔ながらにかはらぬをありけむ人のなきぞ悲しき

○はしきやし　愛らしいとほし。
○けぬる露なす　消えぬる露の如く。
○さもらへど　さむらへど。
○大船の　頼みの枕詞。
○こもりゐて　忌に服しゐて。
○妹が髪たがねば　女の髪をかき上げれば。長きの序とした。
○ともすれば　ついどうかすると
○たわらは　嬰兒。
○思ほえで　思はれないで。
○別れはのちぞ悲し　別れは其の時よりも別れて後になつて更に悲し。
○かへらざらなむ　返つて來ないでありたい。

其の後人の夢に見えて詠みける歌とて書きつけて人の見せければ

かつ見れどはかなき夢の言の葉やあはれ現にかくて見むもの

齋藤信幸翁の身まかられし時

遠つあふみ　名にあふ岩田の　岩ほなす　常にまさむと　大船の　頼みし君は　入日なす　隱れいますと　玉づさの　使のいへば　夢にかも　現にかもと　はろ〲に　道の長手を　鳰鳥（にほどり）の　いきづきゆきて　今までに　君がましけむ　家見れど　家にもまさず　影だにも　見え給はねば　せむすべの　たづきもしらに　神牀に　いゆきいたりて　み影しぬびつ

いはた江にしばなく千鳥しば〲に汝も過ぎにし君や戀しき

伊勢人須賀直見がみまかりけると聞きてはやく鈴の屋翁のもとにてあひ見しことをおもひいでて

伊勢の海みるめしなくば中々にはかなき世をも恨みざらまし

加藤美樹のみまかりける事を程へて後に聞きてよめる

吳竹のよになき人をはかなくも又見むものと思ひけるかな

兒のうせたりける時よめる

綠兒の　はしき我が子は　花の如　散りか過ぎぬる　もみぢ葉の　すぎてや

○夢の言の葉や　夢のうちでの歌なるよ。
○あはれ云々　あゝ夢でなく現に歌をかやうに見るべき筈であつたに、今はもはや死んで夢にしか見られない。
○岩田　遠江磐田郡。
○岩ほなす常に　巖の如く永久。
○大船の　頼むの枕詞。
○入日なす　西に沒する日の如く
○玉づさの　使の枕詞。
○はろ〲に　遙々と。
○長手　長い道。
○鳰鳥の　息づきの枕詞。
○いきづき　長き息をついで、嘆息して。
○せむすべ云々　如何にすべきかの手立ても知らず。
○神牀　神を齋き祭る處。
○いゆき　ゆき。
○しぬびつ　偲びつ。
○しばなく　頻りに鳴く。
○しば〲に　頻りに。
○須賀直見　伊勢松坂の人。鈴屋門の高弟。安永五年歿。
○みるめ　海布に見る目を言ひ掛け。
○加藤美樹　江戸の人、縣居門人。縣居の四天王の一人。安永六年歿。
○吳竹の　よの枕詞。
○はしき　愛らしい。
○散りか過ぎぬる　散り過ぎたか

いぬる　あしたには　思ひまどひて　牀のべを　かきさぐれども　はかなくて　手にもさはらず　夕には　歸りやくると　門にいでて　我たちまつに　なく鳥の　聲も聞えず　ふく風の　音だに聞かず　まそ鏡　面影にのみ　もとな見えつゝ

いつはとは時はわかねど墨染のゆふべはわきて心ぐるしも

其の年の秋

おく露のけぬまもまたぬ朝顏も咲きての後にちるとふものを

秋の夜の長くもものを思ふかな短き人の世をなげくとて

栗田眞菅がめのおもひにこもりゐたる時よみておくりける

うらぶれて物な思ひそ世の中のかかるならひは君もしるもの

高岡定基がめのわづらふ事も聞かざりけるを身まかりぬと聞きて詠みて遣はしける

現とも思ひぞかぬる今ははや世になき人と聞くは誠か

やよひばかり人の身まかりけるを聞きて

常世べにゆくてふ鴈もちる花も又かへりくる時もあるもの

岡部大人の忌日に人々歌よみける時よめる

○まそ鏡　影の枕詞。
○もとな　わけもなく。むざ／＼。
○見えつゝ　面影にのみ見えつゝ
○時はわかねど　何時と云つて時の區別はないが。
○墨染の　喪服の色に夕の暗いのをかけた。
○けぬま　消えぬ間。
○朝顏云々　朝しの暫間を咲く朝顏も咲いてから散るといふのに、わが緑兒に咲きもしないで散ることよ。
○めのおもひにこもる　妻の喪にこもる。
○うらぶれて　心に悲しみ思ふ。
○現とも云々　現とも思はれぬ夢のやうである。
○常世べ　遠い／＼想像の國のあたり。

春山の　さきの盛りも　雨ふれば　移ろふもの　秋山の　につかふ色も　風ふけば　ちりゆくもの　木の花の　ちりのあまひに　うつろひし君　もみぢ葉の　ちりゆくがごと　すぎにし君　荒玉の　年はきふれど　荒玉の　月は來ふれど　ありし世に　いそしみましし　尊きや　みたまのふゆは　遠つあふみ　いや遠ながに　玉の緒の　たゆる世あらめや　常磐なす　つくる世あらめや　其のくしみたま

友だちの身まかりける時

昨日までありしながらに見し人もけふは昔の友とこそなれ

母のおもひにこもりて侍りける時

をしめどもさらぬ別れの悲しきは涙さへこそとまらざりけれ

はてのわざすとて

藤衣ぬぐてふ今日の果てはあれどおつる涙の限りなきかな

又の年の春

花見れば心ぞいたきなか〳〵にもの思ふ春は咲かずぞあらまし

美濃國人田中道麿の名古屋にありて身まかりぬと聞きてよめる

蘆原の　瑞穂の國に　人さはに　みちてはあれど　村肝の　おやじ心に　古

〇さきの盛り　花盛り。
〇につかふ　丹つく。赤く色づく
〇ちりのあまひに　花の散るのがもろく散り易き如くにもろく。
〇うつろひし君　移りし君。死せし君。
〇荒玉の　年、月の枕詞。
〇きふれど　來經れど。
〇いや遠ながに　いよ〳〵永遠に。
〇玉の緒の　絕ゆの枕詞。
〇常磐なす　不變の磐の如く。
〇くしみたま　靈妙なる御魂。
〇母のおもひにこもりて　母の喪にこもりて。
〇さらぬ別れ　死別をいふ。古今「老いぬればさらぬ別れもありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな」による。
〇はてのわざ　人の死後四十九日又は一周忌の法事。
〇藤衣　葛布で仕立てた喪服。
〇なか〳〵に　却つて。
〇咲かずぞあらまし　花が咲かないでありたい。
〇田中道麿　美濃の人。鈴屋門人天明四年歿。
〇人さはに　人多く。
〇村肝の　心の枕詞。
〇おやじ心　同じ心。

をしぬぶる友と　音のみに　聞きてありえねば　神風の　伊勢の國　玉垂の　尾張の國　こち〲の　道にいでたち　ゆく鳥の　ゆくさもくさも　春風の　名古屋に至り　はしきやし　君がりゆきて　古事を　語らふ時に　忽ちに　心はとけて　せうとなす　思ひまつはり　千年にも　あり通はむと　思ひつゝ　ありけるものを　語らはむ　ことも盡きねば　とひさけむ　事をもおきて　いかさまに　思ひましてか　しゝくしろ　よみにはいます　あたらしき　我せの君はや　田中のをぢはや

七月母の忌日に

秋毎に同じ月日のめぐりきて幾たび人の袖ぬらすらむ

したしきやからの身まかりて又の年一めぐりのわざしける時

現ともおもひわかずて一年のすぎぬるけふぞ君はこひしき

荒木田倚賢神主の身まかりけると聞きてよめる

世の中は　かくぞ常なき　うつし身は　しかぞはかなき　いせの海に　生ふてふみるの　またみるの　君を又みる　事もあらぬかも

かからむと兼てしりせば逢ひし時いはまくほしき事もありしを

其の後かの主の形見とて一冊を送られけるに常に書どもかたみに送りか

○神風の　伊勢の枕詞。
○玉垂の　緒の枕詞。尾張にかけた。
○こち〲　彼方此方。
○ゆくさもくさも　往く途も歸り途も。
○せうとなす　兄の如くに。
○とひさけむ　問ひごとをせむ。
○しゝくしろ　よし、よみの枕詞。
○よみ　人の死後魂のゆく所。よみぢ。
○あたらしき　惜しき。
○我せの君はや　わが兄君よ。
○やから　一族。
○一めぐりのわざ　一周忌の法事又は祭祀。
○おもひわかずて　判別も出來ないで。
○かくぞ常なき　此の通り無常である。
○うつし身　現身。世に生存する身。
○みる　海藻の海松に見るを言ひ掛け。
○いはまくほしき　言ひたくある

はしなどせしことを思ひいでて

更に又思へばかなしかくしこそ君がたよりを常に待ちしか

京に上りける時三條なる加藤美樹の墓どころに詣でて

空蟬の世人とこしきものならば草の原をばたづねざらまし

良萓が母の卯月ばかりとみに病おこりて身まかりける時

世の中の人のうづきといふめるはかかる別れのあればなるらむ

長月許り女子のうせたりけるを十月許り枯野といふ事を人々よみける時

あかざりし秋野の花の面影は霜にもかれぬ物にぞありける

十月ばかり親しきしぞくの身まかりける時

もみぢつゝ散るはことわり空蟬の人の命に霜もおかなくに

駿河國のしぞくのめの身まかりぬと聞きてゆきとぶらひける時

宇都の山現ともなくこしかども夢にもあらずさめぬ思へば

とありしをかくありしをとあぢきなく思ひ出づるぞ涙なりける

水無月ばかり友だち集ひて歌よむとて佐倉の豊麿がり行きて歸る時に豊麿が弟の信弘となりの里まで送りきて別れけるを其の年の十一月ばかり身まかりぬと聞きて又の年の五月ばかり又かしこにまかりける時去年別

○かくしこそ　かくこそ。
○加藤美樹の墓所　京都三條三寶寺にある。
○空蟬の　世の枕詞。
○とこしきもの　常しきもの。常住不變永久なもの。
○うづき　卯月に憂き言ひ掛け。
○かかる別れ　かやうな死別といふものがあるからであらう。
○霜にもかれぬ　枯れに離れを言ひ掛けた。
○しぞく　親族。
○もみぢつゝ云々　紅葉しては次々と散るのは道理ある事である。
○空蟬の　人の枕詞。
○宇都の山　駿河有度郡と志太郡との境。うつゝの序。現ともなく夢の心持で。
○さめぬ思へば　覺めないのを思へば夢でもない、やはり現である。
○とありし云々　かやうであつたのにあの様であつたのにとかひなくも思ひ出てるのだ。
○豊麿がり　豊麿の許へ。

れし所を過ぐとて

思ひいでて思へば悲し其の月の其の日ばかりに見しやかぎりと

其の後又人々集ひて歌よみける時信弘が共によみし事など思ひいでて詠める

思ふどちたえぬ圓居の歌おもひ思ひいづるを思ひいづや君

駿河國森直樹が中ち子三穗麿をさなき時より心かしこく學びの道にも心ざし深かりけるを病してつひに身まかりぬと聞きてよめる

風ふきて　散りにし花も　春くれば　又も咲くもの　山のはに　入りぬる月も　日くるれば　出でくるものを　うつしみは　すべなきものか　もみぢ葉の　すぎてしゆけば　ゆく水の　かへらぬ悲し　春毎に　咲くなる花も　ふゝみて散ると　いはなくに　夜毎に　いでくる月も　中空に　いるといはなくに　花ならば　ふゝめる時に　咲かずして　ちりゆくが如　月ならば　いでくるはしに　中空に　雲がくるごと　色も香も　光も見むと　人皆の　まちつゝあるを　いかさまに　思ひおきてか　しゝくしろ　よみにはすぎぬ　みほまろのこや　あはれもりのこ

山川はへなりてあれど朝宵にこゝろ通ひておもひしものを

○見しやかぎりと　あの時に逢つたのが最後であつたかと思へば。
○圓居　まどゐ。
○歌おもひ　歌を考へ作ること。
○中ち子　なかつこ。仲子。
○うつしみは　現身。世にある身。
○すべなきものか　せんかたないものなるかな。
○ふゝみて散る云々　花が蕾みてゐるまゝに散るといはぬに。
○中空　天の中ほど。中途はんぱで。
○雲がくる　雲に隱れる。
○しゝくしろ　よみの枕詞。
○よみにはすぎぬ　黄泉へ行きすぎた。
○へなりて　隔たりて。

大庭延香が父に始めてあひて其の後ほどもなく身まかりぬと聞きて

大方の世のはかなさに聞かましをあひ見し事ぞ涙なりける

早くうせにし女子のことを

思ひいでてこふる昔は昔にて涙は今のなみだなりけり

七月母の忌日に

秋されば風を身にしむと思ふままにまたも袂に露ぞおきける

駿河國青島好嫁はよしありて早くより親しかりしを久しく音づれもえせで覺束なくのみすごしける程に身まかりぬと聞きて

好嫁がいもうとの身まかりぬと聞きて其の母のもとに遣はしける

うきことを何か聞きけむ中々に覺束なくてあらましものを

現とも思はぬ人のはかなさをまことも夢になすよしもがな

はかなくて消えゆく末の露よりももとの雫を思ひこそやれ

眞菅が子を失ひける時よみて遣はしける

うつし身のはかなき事はしりながら遲れ先だつ世を恨むらむ

わび人の袖の上には水無月のてる日の影もうとくみるらむ

堀口勝芳去年の春とひきて後江戸へ下りけるを今年のやよひばかり家に

○秋されば　秋になること。
○音づれもえせで　音づれもようしられないで。
○覺束なく　心もとなく氣にかゝって。
○うきこと云々　音信も聞かなければ氣がゝりであるだけなのに、どうしてその死といふ憂い悲しい音信を聞いた事であらう、却って聞かないで心もとなくて居た方がよかった。
○現とも云々　人の果敢ないことを現とも思はぬその果敢ないことを夢として了ひたいものだ。
○末の露云々　新古今「末の露もとの雫や世の中のおくれ先だつためしなるらむ」によった。
○うつし身　世にある人の身。
○わび人　慰む方なく悲しみ傷む人。

歸りて程もなく病して身まかりぬと聞きて

別れては又あふ事もなき人を千代にとのみも思ひけるかな

稻掛大平の父棟隆は早く鈴の屋翁の許に參りそめし時よりあひ見て其の後をり〳〵參る毎に同じさまに物してをとゝしか參りける時しも猶昔のごと見けるに其の始めを思へば二十年にも多くあまりぬるをいつも同じさまにて老いぬとしも見ざりしを今年身まかりぬと聞きて詠める

伊勢の海の　清き渚に　生ひたちて　色かへぬ松は　白浪の　より〳〵見るに　荒玉の　年へて見ても　古に　變らずあれば　又も來て　かくし見てむと　大船の　思ひ賴みて　おほに見し　ことの悔しさ　空蟬の　世にあるものは　色かへぬ　常磐の松も　賴まれぬかも

又も來てかく見むものと朝霧のおほに思ひてわかれにし君

江戸に下りける時縣居翁の墓どころにまゐりて

古に　我が通ひこし　縣居は　こゝといへども　古に　見しごともあらず　見し人の　聲も聞えず　玉鉾の　道やまどへる　秋霧の　たちや隱せる　玉鉾の　道もまどはず　秋霧の　たちも隱さず　縣居の　大人のみことは　うつし身の　ことさりまして　いはとこに　かくりましぬれ　そこをしも　あ

○千代にと云々　永久にまたも逢はうとばかり。
○稻掛大平　本居宣長の養子。本卷稻葉集解題參照。
○棟隆　鈴屋門人。寛政十二年歿。
○白浪の　よるの枕詞。
○より〳〵　たび〳〵。
○荒玉の　年の枕詞。
○かくし見てむ　その通りに見ようと。
○大船の　賴むの枕詞。
○おほに見し　大概に見た。
○空蟬の　世の枕詞。
○朝霧の　おほの枕詞。
○縣居翁　賀茂眞淵。墓は東京市外品川東海寺にある。
○玉鉾の　道の枕詞。
○秋霧の云々　秋の霧が立つて隱したのであらうか。
○いはとこ　墓所。
○かくりましぬれ　隱れ給うた。
○そこをしも　その事を。

やに悲しみ　武藏ぬの　荒草木の根　ふみさくみ　なづさひゆきて　かしこみも　み墓をがみて　古しぬびつ

祝

すめ神のちはひますなる君が代は限りもあらじ天つちのごと

春祝といふことを

君が代の時はあれども櫻さく長きはる日ぞきみが代のとき

駿河の國人ちはるが七十の祝しける歌たかきあたりに聞えまゐりけるに歌たまはせけるをなむ喜び侍るめり歌よめと人のいとせちにいへれどしれる人にしもあらねば只其のはたる人にいひかけける駿河舞の言葉をふと思ひいでて

有渡濱に遊ぶ千鳥の千代よばふ聲は高くもきこえけるかな

相模の國人飯田うつはりが庭に植ゑたりける松の木の榮ゆるを祝ひて歌よみてよといふに詠みて遣はしける

春ごとにさかゆく松の若みどりつひに千年の色となりなむ

伊藤遠條が母の八十の賀に

行末もとほつあふみの長濱はあかぬ齡の名にこそありけれ

○武藏ぬ　武藏野。
○ふみさくみ　踏みわけて。
○なづさひゆきて　なつき行きて
○かしこみも　畏れ愼みて。
○ちはひます　幸はひ給ふ。幸を與へ給ふ。
○天つちのごと　天地の如く無窮である。
○時はあれども　いつもめでたいよい時ではあるけれど。
○いとせちに　甚だ切にしきりに。
○はたる人　その求めせまつた人
○駿河舞　駿河國安倍郡有渡濱に天人が天降つて舞つたさまをうつした舞。
○千代よばふ　千代よぶ。
○さかゆく　ますます榮えゆく。
○とほつあふみ　遠つ淡海。濱名湖から遠江といふ國名になつた。濱名長濱は長くつゞいた濱邊。

鈴屋翁の六十の賀に

國さかり遠つあふみのをちにても君を八千代にいませとぞほぐ

人皆のいほぎもとほすあがうしの千年の陰にきつゝあえむも

國ほぎの歌

天てらす　ひるめの命　天をば　しろしめすなべ　蘆原の　瑞穗の國は　吾(あ)が皇子(みこ)の　しらさむ國と　言よさし　よさし給ひて　八咫鏡　み手にとりもち　ながみこや　天つ日嗣は　天地と　常磐かきはに　たひらけく　榮えまさむと　言ほぎ　ほぎもとほし　神ながら　定め給ひて　此のてらす　月日と共に　高御座　さかゆく國ぞ　大和島根は

かけまくも綾に畏きすめらぎの神のみ民とあるがたぬしさ

又

日の本の　やまとの國は　天照らす　神のみ國と　日の皇子の　しらさむ國と　八百萬　千萬神の　神代より　たすくる國と　いは木にも　ひもろぎたてて　神ながら　いつきましぬれ　岩木なす　かきは常磐に　ひもろぎの立ち榮えつゝ　天地の　神のさきはふ　尊き御國

つがの木のいやつぎ〳〵に日の皇子の萬代までにしきます御國

○國さかり　國が遠く離れて。
○をち　遠方。
○八千代に云々　八千代まで長らへていませと祝ふ。
○いほぎもとほす　祝ひまはす。
○あがうし　わが大人。わが師の君。
○きつゝ　かげに來て。
○あえむも　肖からうよ。
○天てらすひるめの命　天照大日孁貴命。天照大神。
○しろしめすなべ　統治し給ふと共に。
○しらさむ國　治め給はむ國。
○言よさし　いひつけ。
○ながみこや　汝皇孫よ。天祖の御言葉である。
○常磐かきは　常磐堅磐。
○言ほぎ云々　祝つて祝ひまはし
○神ながら　神慮のまゝに。
○かけまくも云々　言葉に言ふもあゝ畏れ多い。
○日の皇子　天皇。
○たすくる國　神々の助け給ふ國
○ひもろぎ　神籬。神を祭るに常綠樹を植ゑめぐらした清淨な神座
○つがの木の　つぎ〳〵の枕詞。
○しきます　領し治め給ふ。

又

天なるや　豐岡ひめの　もちこせる　ゆには稻穗も　吾が皇子　いきこしめせと　神ながら　よさし給ひて　瑞々し　瑞穗の國は　千秋の　なが五百秋に　たなつ物　たりほ榮えて　さかゆく國ぞ

幾千代か長田の稻の榮ゆべきわが大きみのきこしめすなべ

石塚龍麿が母の六十の賀に

人の子の千代にもがもと祝ふなる親の齡は神ぞまもらむ

尾張國の木田てふ里の大館高門が母の七十の賀に、寄鶴祝

さ苗とるきたの田づらにたつ鶴は幾代たり穗の秋をしるらむ

袴田勝文が六十の賀に

松杉の色もかはらぬ安波々山きみが千年にあはむとすらむ

荒木田末偶神主の六十の賀に伴松榮久といふことを

松の葉に色そふ春をいく千度へつゝか君がともに榮えむ

ある人の五十の賀に、寄松祝

みよし野の山松風は仙人の千とせを歌ふ調べなるらむ

む月に人々集ひて歌よみける時

〇天なるや豐岡ひめ　天にいます豐宇氣神。
〇ゆには　齋み淨める場所。
〇いきこしめせ　いは接頭語。
〇神ながら云々　神慮のまゝに任じ給うて。
〇瑞々し　鮮かに美しく肥えた。
〇千秋のなが五百秋　永遠。
〇たなつ物　田より生ずる物、米から穀物の總稱。
〇たりは　實がみのつて垂れた穗。
〇長田　長い田。又田の美稱。
〇石塚龍麿　遠江細田村の人。鈴屋門人。文政六年歿。
〇人の子の云々　子が親の齡を千代にも續けよと祝ひ祈る齡は。
〇大館高門　尾張の人。鈴屋門人天保十年歿。
〇たり穗の秋　實の熟して穗が垂れ下る秋。
〇安波々山　遠江小笠郡。下のあはむと言ふ序。
〇仙人　不老不死の人。

思ふどち集ふつどひも春ごとに若がへりつゝ千代も遊ばむ

婚禮を祝ひてよめる歌

萬世にかかれとてこそ久かたのあまのみ柱めぐりそめけめ

寄花祝

君が代は春くるごとに若がへる花の色香の限りしらずも

飯田眞直がおばの八十の賀しける時其の里なる官帳の神社を思ひいでてよめる

君が祝ふ千代は長けむ御子の神御祖(みおや)の神のみたまちはひて

荒木田久老神主の五十の賀に竹色不改といふ事を

よゝをへて霜はおけども呉竹の枝さへ葉さへ色もかはらず

おのれが六十の齢をことぶくとて友だち集ひて歌よみ酒のみける時よめる

天てらす　神のみ國に　すめらぎの　神のみ民と　わくらばに　あれにしことを　うまごりの　あやに嬉しみ　家のなり　つとむるいとま　言靈の　さきはふ國の　神代より　傳へし道の　古道の　あとを尋ねて　おふけなく　とめゆくはしに　いつのまか　積れる年の　六十にも　おいてしあるを　う

○思ふどち　親しい同士。
○久かたの　天の枕詞。
○あまのみ柱云々　伊邪那岐神伊邪那美神が淤能碁呂島に天降りまして天之御柱を立て、二神柱を左右から廻つてあひ給ひしことをさす。
○おば　祖母。
○みたまちはひて　御靈が幸福を與へ給ひて。
○荒木田久老　伊勢外宮の祠官度會正身の子。荒木田久世の嗣となり久老と改む。縣居門の巨擘。文化元年歿。
○よゝ　代々に節々をかけて竹の縁語とした。
○わくらばにあれにし　偶然にも生まれあつた。
○うまごりの　あやの枕詞。
○あやに嬉しみ　嗚呼と深く感じて嬉しと思ひ。
○家のなり　家の生業。
○言靈云々　言語の靈妙不思議な作用によつて幸福の生ずる國。日本の一名。
○おふけなく　身に不相應にも。
○とめゆく　尋ね求めゆく。きはめゆく。
○おいてしある　老いてある。
○うれたく　憂く歎かはしく。

れたくも　思へる時に　みやびをの　おやじ心に　古を　したふ友垣　我が
よはひ　千代にありこそと　いはひべを　牀べにすゑて　鶴龜の　齢になぞ
へ　松竹の　色によそへて　いはひつゝ　うたひとよもし　のみつゝも　い
ほぎもとほす　其の歌の　言のよろしも　其の酒の　香のよろしも　そこ故
に　老も忘れつ　はふ蔦の　また若がへり　古を　共に仰ぎて　萬代に　か
くし遊ばむ　八千代にし　かくしのまむよ　みやびをの友

言靈のちはひますなる國なれば千代にと諾ふことは違はじ

○おやじ心　同じ心。
○友垣　友達。
○いはひべ　齋瓮。神に供へる御酒を入れる陶器の壺。
○なぞへ　なぞらへ。擬して。
○よそへ　寄せくらべて。たぐへ。
○うたひとよもし　歌ひ響かし。
○いほぎもとほす　祝ひめぐらす
○そこ故　そのために。
○はふ蔦の　分るの枕詞。若がへりに冠らした。
○かくし遊ばむ　かく遊ばむ。
○ちはひます　幸はひ給ふなる。

師は古ぶりをよしとして詠まれけるを、教子のとも皆其のふりをまねばむとして、師のよまれし歌どもを見きくまに〳〵、書き寫してもたらむとするに、聞きたがへ見誤りもあらむ事を思ひて、いかで今まで詠まれし歌どもを板にゑりてむといふ。師のいはれけらく、おのれ懸居の翁の好まれし古風をまねびよまむとすれども、其ののち鈴の屋の翁のよまるゝふりをまねびよむ人多かれば、おのづから其のふりまじりぬべくて、何れのふりともなく、只おのが心のまゝなる歌なれば、ひたぶるにまねび習ふべきふりにもあらじ。且はお思へる事もあれば、いかでさはあるべきとぞいはれける。しかはあれども、あながちにまをしこひて、こたびかく物する故は、只おのれがともの寫し誤らざらむ爲のみぞ。教子栗田の眞菅いふ。

岡の屋歌集　終

○教子のとも　教へを受けた門人のなかま。
○其のふり　師土滿の歌の古風。
○もたらむ　持ちたらむ。
○板にゑり　板に彫って。
○ひたぶるに　只管に。一向に。
○いかでさは云々　決して板に彫って印刷などすることあるべからず。
○まをしこひて　申し請ひて。
○かく物する　かく出板するのは

琴後集

村田春海

○絶句　漢詩の體の名、五言七言の別がある。
○歌行　漢詩の一體。
○六義　詩經の風雅頌賦比興の六つの區別。
○藤式部源氏傳　紫式部の源氏物語。
○左氏　魯の左丘明、著、春秋傳。
○莊周　周の莊周、著、莊子。
○司馬遷　漢の司馬遷、著、史記。
○如干卷　若干卷。
○升降前却　上下進退。
○步驟　步むと走ると。
○抑揚開闔　上下開閉。
○操縱起伏　提へたり放したり起したり伏せたり。
○整齊而錯落　正しくそろつて而も入りまじる。
○勃窣而婉曲　ゆるやかに角だたない。
○截然有界　はつきりとくぎりがある。
○綿然相屬　だら〳〵とつゞく。

琴後集序

和歌詩也。短歌絶句之類也。長歌歌行之類也。六義既備。抑揚頓挫。亦如レ詩然。余獨讀二藤式部源氏傳一。知下左氏莊周司馬遷之文。可中以二和言一爲上レ之。源氏傳以上。何其無レ聞也。源氏傳以後。何其無二繼レ之者一也。和文既有二左氏莊周司馬遷之文一。安得レ無二唐宋八家之文一哉。求二之於古一而不レ得。求二之於今一。而得二之於平春海先生一。先生有二琴後集如干卷一。其歌則不二復論一。余獨論二其文一曰。記二十一首。序十八首。題跋十二首。書牘二十三首。雜文三首。墓碑二首。祭文一首。外集三十八首。編文具二此諸體一。非二唐宋八家別集之制一乎。升降前却。不レ失二分寸一。文其步驟也。抑揚開闔。操縱起伏。文其變化也。整齊而錯落。勃窣而婉曲。文其辭氣也。前提後襯。回抱接初。留緒待後。奇峯突起。橫雲斷レ山。文其形勢也。截然有レ界。段落之文也。綿然相屬。過接之文也。承レ上起レ下。轉換之文也。作文具二此數法一。非二唐宋八家之筆一乎。先生非二獨其於レ文爾一。其於レ論レ道亦云。我邦之所レ道。周公孔子之道。舍二周公孔子之

道一。而別取二道於我太古一。吾未二之聞一也。故和字非二我字一。假二漢字一充二我音一也。衣服冠冕。皆隋唐制度也。百官有司。皆學二唐制一稍變レ之也。律令格式。皆摹二倣唐制一也。博士立二明經文章天文陰陽律算音諸科一。不レ立二和學歌學博士一。所謂和歌博士者。出レ自二江匡房戲稱一。和學歌學之名。考二之古一未二之有一也。和學也者。儒者之通二本朝典故一言辭也已。歌學也者。儒者而作レ歌也已。舍二周公孔子之道一。而別建レ道者。吾未二之聞一也。天竺有二釋氏之道一。後漢傳レ之。而盛二於隋唐一。唐之詩人。有レ儒有レ僧。李白杜甫韓愈儒也。王維白居易內佛外儒也。其詩非二風雅之音一。則釋氏之偈也。宮人工女。亦沿二一家風一者也。吾儕雖二庸陋一亦儒也。儒而歌者也。本朝制度文物。已皆奉二周公孔子遺法一。而其信レ佛者亦多。故本朝之俗。少而儒。老而佛。自二中古一以來盡然。由レ是觀レ之。非レ儒則佛。舍二此二道一而別建レ道。吾未二之聞一也。今之和學者。恥二我邦別無レ道。牽強傅會。妄引二我古史一。欺レ己。吾安得レ不レ辨レ之哉。質賢下先生之持論有レ超二於世所謂和學者流一。宜乎。先生之文。卓異儁傑。有二唐宋八家之風一矣。

○律令格式　古昔の法制。律は刑罰の法律、令は一般の法令、式は官吏の事務規程、格は此等の臨時の改定又は執行命令。

○博士　古昔の官職。大學寮に屬するものに紀傳(後に文章)明經明法算音の博士があり、教授考科を掌る、陰陽寮に屬するものに陰陽天文漏刻の博士があつて天文暦數及びその教授を掌る。

○江匡房　大江匡房。成衡の子。文章生から及第し、後三條天皇東宮の時侍講しその卽位の後累進し三朝の帝師となり、太宰權帥兼大藏卿に進み天永二年薨、年七十一。

○釋氏之道　佛敎。

○偈　け。伽陀。四句から成る韻文の經文。

○牽强傅會　こじつけ。

○卓異儁傑　甚しくすぐれてゐること。

○百二十世天皇　光格天皇。

日本百二十世天皇文化七年秋九月

陸奥葛質序

ことじりぶみのはしことば

世に歌よむ人多し。あるは短歌にたくみに、あるは長歌にかしこく、あるはふみ書くわざにすぐる。世に古學びする人おほし。あるは御世々の書をあきらめ、あるは四つのおきてぶみにくはしく、あるはあがれる世の古ごとぶみに心をふかめ、あるは後の世の物語ぶみを枕ごととす。その人々にとへば、かれにくはしきはこれにおろかに、こゝにおもひいりたるはかしこに心あさし。しかのみならず、大和冊子のうへにはくちさききらきたるも、もろこしぶみにむかへば、爪くはるゝたぐひおほし。まことそれもことわり、たれやし人かは皆がらかね備へたるあらむ。我が家の佛たふとぶとにはなけれど、うまく此の道々にゆきとほりて、よろづたゞ〳〵しからぬは、ひとり我が師にしごりのやの翁のみなむおはしける。翁、こゝのことはすべて縣居の大人にとひきかれたるよしは、誰もよく知れることなればいはじ。もろこしまなびは、はじめ服部仲英ぬしに名簿(みやうぶ)おくられしを、仲英ぬし身まかられて

○四つのおきてぶみ　律令格式。
○あがれる世云々　上古のふるい事を書いた書物、記紀などをいふ。
○枕ごととす　常に言ひなれてゐる口癖にしてゐる。
○大和冊子　國書。日本の書物。
○くちさききらきたる　辯舌に才氣を現はしてしやべつてゐる。
○爪くはるゝ云々　もぢ〳〵恥ぢ臆されるやうな人が多い。
○たれやし人　誰人。
○皆がら　悉くそつくり。
○我が家の佛云々　自分の方のものは何でもすぐれてゐると思ふ。
○うまく　よく。
○たゞ〳〵しからぬ　確としてたしかな。
○こゝのこと　我が國のこと。
○名簿おくる　門人となる。名簿は師の門に入り弟子となる時に師に呈する姓名年月日など書いたもの。

○からうた　漢詩。
○世にもとむる心　世俗の榮達利得を求める心。
○ともすれば　かくすれば、どうかするとかくに。
○たててものす　取りたてて特別にそれをする。
○たかきもみじかきも　貴きも賤しきも。
○しるしらぬ　知つてゐる人も知らぬ人も。
○芳宜園のをぢ　加藤千蔭。

は、鵜殿士寧ぬしにしたがひ、中比都にのぼりて、皆川伯恭ぬしに問ひきかれし事おほく、又後には佐々木學儒、安達文仲などいへる、世にすぐれたる博士たちに、あしたゆふべ睦びともなはれしかば、からうたにも其の名聞えて、なま／＼の博士口あかすまじくなむおはしける。翁世にもとむる心なくして、やんごとなき御前わたりに召さるゝ事好まれず、たゞ花にあくがれ、月にうかるゝほかには、朝夕文机のもと去らずおはして、筆とるわざにのみあかしくらされしかど、ともすれば物まなびする人のためにさまたげられ、かくすれば病の牀におきふしして、思ふことといはで止まれたる事すくなからず、かきさして事終へられざりしもの、數あまたなりき。歌をのみたててものせられしとにはあらねど、おのづから此の歌にて世に知られ、人にもちゐられつゝ、やう／＼天の下、たかきもみじかきも、老いたるも若きも、しるしらぬ、歌よむ人とだにいへば、千蔭春海と口にいはざる者なきやうにはなりおはしにけり。その歌のすがた、芳宜園（はぎその）のをぢはいきほひ雄々しく、詞はなやぎたるを好まれ、翁はさびたるさまのこまやかにしめやかなるふしを心

とせられにけり。文詞は趣をもろこしにかり、言葉をこゝにうつし、ふるごとをもとめず、さと言をはぶきて、新しく一つのさまを思ひかまへられて、わきてめでたくなむものせられける。世の人翁をたゞに歌よみとのみ思はむも、翁をしらぬなるべく、又たゞに上つ代の學びするたぐひとのみおもはむも、翁をしらぬなるべく、またたゞに唐學びのはかせなみにのみ思はむも、翁をしらぬなるべし。おきな若くしてなりはひの道にうとく、つひに家をはふらかして、百千の寶をうしなひ、はてはことたらぬがちに年月を送られしかど、老いてのち言の葉にとみ、まなびにとまれたり。いでや百千の寶は、たゞしばしいけるがほどの富なり、言の葉と學びとは、とこしへに亡きあとまでの富なり。翁たからにまづしくおはせしかど、言の葉とまなびとに富まれたり。誠に天の下のたからの王とは、翁をこそいふべけれ。たれかはうらやまざらむ、誰かはしたはざらむ。今此の言の葉のふみ、世に普くひろごりて、あひだおかず學びのふみども板にゑられゆかば、わが翁を天の下の寶の王なりといふことの、僞りならぬこと知られぬべし。そも此の集の名におふ

○言葉をこゝにうつし　言葉を日本に譯し。
○思ひかまへ　考へ工夫して。
○上つ代の學びするたぐひ　古學者の人々。
○唐學び云々　漢學者の一類。
○なりはひ　生業。
○家をはふらかし　家をうちすて
○百千の寶　多くの財貨。
○此の言の葉のふみ　此の歌文集卽ち琴後集をいふ。

○琴がみ　古事記にといふは日本書紀にの誤か。武烈紀「琴頭に来居る影媛珠ならば吾が欲る珠のあはび白珠。」神功紀「以二千繒高繒一置二琴頭尾一。」

せられたる琴じりの詞は、古事記に琴がみといふことばのあるより思ひよられたるなりとぞ。

清水濱臣

自序

昔父の世にいますがりし時は、遊びの道に深う心よせ給へりしまゝに、吹きもの彈きものなにくれの器ども家にあまたつたへたるを、としごろたびたびの火にあひて、いまはおほく失せもてゆきて、たゞあづま一つなむ、これをのみ昔しのぶるくさはひには思ひたる。今年草の庵をあらためつくりて、小さきふせやを、己がつねに住みならさむ所とさだむるにつけて、おもひけるは、かのあづまこそおのが家の寶なれ、いかでこれに所得させて、そのかたはらにこそおきふしすべけれ、われ琴ひく事はならはねど、絃なきをまさぐりて思ひをやりしためしもあればとて、これをわが語らひ人にて、さてことがみに、硯一つ、火とり一つ、琴じりに、づし一よろひをすゑて、年頃の言の葉どもを入れたり。此の頃おのが心しりの人々詣で來ていひけらく、年頃ものし給へる言の葉どもはいかにしたまふぞ、かきあつめ給はましかば、われら筆たすけまゐらせむといふ。そはうれしき事なり、さるはつたなき言

○遊びの道　管絃の道。音樂。
○吹きもの彈きもの　笙笛琴三絃
○あづま琴　倭琴。六絃あつて古代からの樂器である。
○昔しのぶるくさはひ　昔を思ひ出す種。
○所得させ　適當な場所に置いて
○絃なき云々　絃のない琴を弄んで慰め滿足した陶靖節傳「淵明不レ解二音律一。而蓄二無絃琴一張一。」
○語らひ人　話相手。
○ことがみ　琴の頭の方。
○火とり　香爐の類。
○づし　厨子。扉や棚のある書畫調度を載せる臺。
○一よろひ　一具。一そろひ。
○ものし給へる言の葉　お作りになつた歌文。

の葉を、人なみに世にのこし侍らむ事は、恥かしきわざには侍れど、あまた年思ひをよせ、心をこめしものを、いたづらになしはて侍らむはほいなし、ともかくもしかるべからむやうにとりなし給はむこそうれしけれと、答へければ、人々かのづしより取う出て、書きあつめもてゆく。さて名をばいかにといふ。すなはち琴後とこそいふべけれとて、そのまきのはしつかたにぞ、書きつけさせたる。

文化の七とせかみな月ついたちの日

琴じりの翁

○いたづらに云々　むだにしてしまふのは残念である。

○ともかくも云々　どうともかうとも適當なやうに。

○そのまきのはし　その琴後といふ名を卷頭に書きつけさせた。

琴後集巻一

平春海

春歌

年内立春

おほかたの花待つ人にいそがれて年のうちより春や來ぬらむ

いそぎたつ春ぞうれしき老いぬとてよそには聞かぬ心ならひに

元日

む月たつ今日より梅をかざしつゝ今年も春は花にくらさむ

珍らしと春を待ちとる心こそ年はふれどもかはらざりけれ

春たつや今日ははなにもなして見む朽木に似たる老のこゝろも

朝日子のひかりまちとる若水にくまばや千世のはるの心を

元日雪の降りければ

雪ながらあくる朝戸にさく花の面影みせて春は來にけり

○年内立春　陰暦十二月中に立春の節が來たこと。
○年のうち　新年にならぬうち。
○老いぬとて云々　立春になつて老いるのださいつても春の來たことをよそごとは聞かぬやうに馴れてゐるので。
○珍らし云々　嬉しくめでたく思つて新年を迎へる心持だけは年取つても若い時とかはりがない。
○はなにも云々　老の心を花やかにして。
○朝日子　あさひ。
○雪ながらあくる　雪の降つたまゝで夜があけ年が明けて新年になる。朝戸をあけると雪が花のやうに見える。

元日雪の降りけるに人のまで來ければ

庭の雪の跡もめづらし今朝は先づ春とともにし訪はると思へば

禁中立春

衞士のたくひかり霞みてほの〴〵とあくる御門に春たちにけり

春のはじめに

つくばねの高嶺のみゆき霞みつゝ隅田河原に春たちにけり

百司馬も車もつどふなり君がみかどに春たつらしも

貴賤迎春

綾のきぬ布の袂もあらためて春來にけりと見ゆる今朝かな

心地そこなひて久しうわづらひけるに春立ちてよりおこたりざまに覺えければ

霜雪にあへじと思ひし老の身のまたしも花の春に逢ひにけり

くち木ぞとなに思ひけむさく花にまた伴はむ春にあふ身を

早春海

淡路しまあはとも見えず朝がすみしきつの浦にはる立ちしより

氷解

○まで來　詣來。まうで來。

○衞士　宮城の警衞をし夜は火を焚いて宮門を守る衞士府の兵士。
○たくひかり　焚く火の光。
○あくる御門　夜の明けると御門をあけるとかけた。
○つくばね　筑波山。

○百司　百官。

○綾のきぬ布の袂　高貴と卑賤。
○あらためて　著かへて新たにして。
○おこたりざま　病氣がなほりぎみに。

○霜雪に云々　霜や雪に耐へられないで冬を待たず死ぬだらうと思つた老の身。
○なに思ひけむ　どうして朽木だと思つたらうか。
○淡路しま云々　淡路島が霞に隠れて淡くうすくも見えない。
○しきつの浦　攝津國住吉の敷津朝霞が布くとかけた。

こほりゐし掛樋のつらゝうちとけてしづくの田ゐに春たちにけり

泉響滴春風

逢坂や岩間の清水おとすなり氷ふきとく春の山風

風光日々新

難波江やこほり流るゝ朝ごとにつのぐむ蘆の數ぞそひゆく

江上春興多

よる浪もにほふ入江の梅柳いづれのかげに舟はつながむ

春色浮水

ほの〴〵と霞む河とのあさ風に春たちかへる浪のはつ花

毎山有春色

うら〳〵と出づる日影にさそはれて霞にほはぬ山の端もなし

春日

うちかすむ千里の波を光にて朝日にほへる春の河づら

春日望山

をつくばの高嶺は雪にあらはれて霞にまがふは山しげ山

大ひえやをひえの山の朝がすみたちかさねたる春のいろかな

○しづく　常陸新治郡志筑。師付雫などゝ書く。掛樋の縁語。
○田ゐ　田。田の面。

○つのぐむ　角のやうに芽が出はじめる。後拾遺集「難波潟浦吹く風に浪たてはつのぐむ蘆の見えみ見えずみ」

○河と　河の流れが一つに落ち合ふところ。

○をつくば　をは接頭語。筑波山。
○雪にあらはれ　雪ではつきりと山の姿が見えて。
○は山しげ山　麓の山々草木の茂つた山々。麓の茂つた山々は霞に紛れてはつきりしない。
○大ひえ　大比叡。比叡山の絶頂一名大嶽。
○をひえ　小比叡。比叡山の西谷の横川嶺の南。一名波母山。

かひがねの高嶺のみ雪かつ消えて下つ羣山かすみたな引く

春生人意中

白河少將殿に歌めしける時陽春布德といふ事を

春といへば人の心ぞたゞならぬ世は花鳥のあはれのみかは

泉暖草色春

雪も消えわかなも萌えて武藏野のはるの光ぞかぎり知られぬ

家々翫春

冰ゐし岩垣しみづ音たてて雪間の小菅はるめきにけり

都人はるはいとなし花鳥のすさみに誰もとひとはれつゝ

春風夜芳

梅が香を風さそふ夜はなか〳〵にあやなき闇もよしぞありける

子日

子の日する今日のためしと引く松にひかれて千世の春やかさねむ

子の日すと引くや小松の摺衣袖のみどりぞ千世のいろなる

船岡やまつとみゆきの跡をこそ千世の子の日のためしには引け

長枝が家の子日に

○かひがね　甲斐國の山。

○白河少將　奧州白河の城主松平定信。

○岩垣しみづ　岩石が垣のやうに圍んだ所から湧き出る淸水。

○いとなし　いとまなし。いそがはし。

○花鳥のすさみ云々　花や鳥に心が引かれゆくまゝに誰もかれも訪ひつ訪はれつして心いそがしい。

○あやなき闇　古今集「春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えね香やは隱るゝ」

○よしぞありける　闇は却つて梅が香を誘ふよるべがある。

○摺衣　染草で模様を摺り出した衣。

○船岡　山城愛宕郡紫野の西。

○まつと云々　松を千世の例に引き又昔子の日に紫野に行幸のあつた先例を千世のためしに引く。子の日に紫野に行幸のあつたのは宇多天皇や圓融天皇の御時など例が多い。

松も引き我もひかれて千世やへむ初子をいはふ宿に來ぬれば

かくしつゝ千世にならさむ宿なれば子の日の松も睦まじきかな

忘れめやいはふ初子の玉はゝき塵だにすゑぬ宿のまとゐは

引くたびにめづらしきかな宿の松あまたの春になれて訪へども

かくしつゝ松のおもはむ年までもあり經てこゝに子の日をばせむ

百首歌の中に、正朔子日

うれしさを引き重ねよと春の立つけふに子の日やめぐり來ぬらむ

梅がやに子日しにまかりて

梅さかばつぎても訪はむ初春の松にひかるゝ今日ばかりかは

賭弓

ためしとて鷲と鷹との獵矢とり今日たちならす百敷の庭

此の殿のかへりあるじやしるからむ射手のつかさの袖つどふなり

霞

みわたせば端山茂山おしなべて霞をもるゝ色なかりけり

富士のねの雪さへ春の色みえて霞みそめたる朝ぼらけかな

初春霞

○初子の玉はゝき　初子の日に蠶室を掃くため帚草で作つた帚。萬葉集「初春の初子の今日の玉帚手に執るからにゆらぐ玉の緒」
○塵だに云々　帚を縁語として塵と云つた。まとゐ(團欒)が疎くなれば塵がたまる、團欒を親密にして塵をさへ置かすまい。古今集「塵をだにすゑじと思ふ」
○松のおもはむ年　松が随分久しい年だと思ふべき永の年までも。
○正朔子日　正月朔日子の日に當つた。
○つぎて　引續いてまたも。
○今日ばかりかは　今日だけでない又梅に引かれて續いて訪はう。
○賭弓　古正月十八日宮中で近衞兵衞の舍人射技を天覽ある公事。
○鷲と鷹云々　鷲の羽鷹の羽ではいだ獵に用ゐる矢を持つて。
○かへりあるじ　賭弓の後勝方の大將がその私第で部下を招いて催す饗宴。
○しるからむ　はつきりそれとわかるだらう。
○端山茂山　麓の山々木の茂つた山々。

春いまだあさまの山のうすがすみ煙にまがふ色としもなし

山霞

春がすみ八重たつ時は三笠山さしてそこともわかたざりけり

霞添山色

うら／＼と霞みそめたるあしたより日影にほはぬ山の端もなし

暮山霞

立ちならぶ高嶺の檜原かげくれて霞にのこる夕づく日かな

嶺上霞

みよしのの雪のふるさと春くれば青根がだけぞ先づ霞みける

遙峯帶晩霞

夕日さす神のみさかはあらはれて霞にへだつあしがらの關

夕鴉歸る翅はかつ消えて霞にのこる遠方の山

浦霞

住の江のうらの松風こゑたえてかすみにこもる沖つ白浪

江霞

なにはえや波の上なる澪標はるは霞の底にこそみれ

○あさまの山　淺間山に淺しをかけた。

○さして　これぞと指して。笠の緣語。

○日影にほはぬ山の端　日影がさしてうるはしい色に染らぬ山。

○夕づく日　ゆふ日。

○雪のふるさと　雪の降ると古里とかけた。古里は舊跡。

○青根がだけ　吉野山の東嶺。

○神のみさか　足柄の御坂。足柄峠の頂。神は萬葉古義に山でも海でも殊に險しく行きなやむ所をいふと。

○あしがらの關　足柄關は古く廢されて址明らかでない。峠の絕頂をやゝ下つて明神といふ處が址だともいふ。

○かつ消えて　だん／＼と消えてほつ／＼見えなくなつて。

○澪標　水の通る水脈を示す標の杭。

行路霞

紅綠（あけみどり）行きかふ袖もほの〴〵とかすむ宮路の春ぞのどけき

檜原霞

檜原より先づうづもれて三輪山をしかもかくせる夕霞かな

湖上霞

布勢の海や春深からし垂姫のかすみの袖もおもがくしせり

春煙

入日さす遠山もとの里みえてかすみを漏るゝ夕煙かな

鶯

花おそき片山里のうぐひすやわれはがほにも春を告ぐらむ

うぐひすの聲いちはやき山ざとを春うとしとは誰かいひけむ

いさゝめにいさゝむら竹植ゑしより鳴く鶯の聲ぞかれせぬ

早春鶯

鶯も年のさかえを今日よりともゝよろこびの初音をぞ鳴く

南枝暖待鶯

うめ柳はるにいり江の南にははつ鶯の音も待たれけり

○宮路　宮殿に通ふ路。

○三輪山云々　三輪山は大和磯城郡三輪村の東。古今集「三輪山をしかもかくすか春霞人に知られぬ花やさくらむ」

○布勢の海　越中氷見郡十二町潟をいふ。垂姫はその湖にあつた崎。

○おもがくし　恥かしさうに顔をかくす。垂姫を擬人した。

○片山里　片田舎の山里。

○山ざとを春うとし云々　春が疎遠で親しまぬと誰が言うただらうか。新古今集「山里は人こさせじと思はねど問はるゝことぞ疎くなりゆく」

○いさゝめに　かりそめに。僅か。

○いさゝむら竹　小さな叢つた竹

○かれせぬ　絶えない。枯れに竹の縁語。

○いり江　入江に春に入るをかけ入江の南で江南地方をいひ、更に枝（え）の南で南枝をかけた。

鶯の初音をききつやと人のとひければ

かくて世の春をよそなる宿なれば鶯の音もうとくぞありける

春鶯呼客

うぐひすの聲にひかれて花もなき宿とは知れど人ぞとひける

司得たる人のもとへ鶯有歡聲といふ事を

鶯の初音ぞ千代をよばふなるたかきに遷る春を待ちえて

竹裏鶯

春來ぬと今日告げそむる鶯のこゑも奥あるそののくれ竹

うめに鶯なく

ほの〴〵と明くる夜つぐるうぐひすの聲にしらめる園の梅が枝

窗鶯

なれてこそ友とも聞かめくれ竹に臥處（ふしど）さだめよまどの鶯

閑居鶯

世の人は春のすさみやおほからむ我とかたらへ軒のうぐひす

里鶯

かきこもる竹田のさとをとひしかば初鶯の音をぞ聞きつる

○ききつや　聞いたか。

○花もなき宿　花も咲かず何の見ばえもない家。

○司得たる人　官途に就いた人。

○たかきに遷る　詩經小雅伐木篇「出レ自二幽谷一遷二于喬木一。」

○春のすさみ云々　世間一般の人は春にいろ〳〵心慰むことも多いだらう。何の樂しみもない我と語らへよ鶯よ。

○かきこもる云々　竹の中にかきこもつて人に知られず隱れをる竹田の里。

〇聲のにほひ　聲の艶麗な色調。
〇ゆふくれ竹　夕暮と呉竹とかけた。
〇竹のおくしめて　竹の林の物靜かな奥の方をねがものにして。新古今集「いかにせむ賤が園生の奥の竹云々」
〇うれしさも云々　袂に入りきらぬ袂にあまる位若菜を摘んでその嬉しさも袂につゝみかねる。

〇雪のふかぜり　雪の深いと深芹とをかけた。深芹は根の深い芹。
〇心あてに　これがさうだらうと當推量で。

〇見るがうちに　見てゐるうちにすぐさま。
〇もゆる　火の燃えるに草の萌えるとかけた。

うぐひすの聲のにほひにさそはれて花なき里もはるや知るらむ

雨後鶯

雨はるゝゆふくれ竹のおくしめてしめやかに鳴く鶯のこゑ

若菜

摘めばかつ千世のためしのうれしさも袂にあまる若菜なりけり

多春摘若菜

今日ごとに祝ふわかなの若返りあまたの春を摘むぞうれしき

雪中求若菜

かき分けて見れども雪のふかぜりは心あてにぞ摘むべかりける

人にわかなやるとて

初春の今日のわかなをはじめにて嬉しきことの數をつまなむ

女どもわかな摘むを見て

たをやめの手ごとに摘むといふめれば若菜をさへにねたしとぞ見る

春雪

見るがうちにはかなく消ゆる沫雪はもゆるはる野にふればなりけり

殘雪

忘れては花かとぞおもふ山の端に春も日を經てのこるしら雪

雪消山色靜

雪きえて花まつ程の山の端はかすみばかりぞ春のいろなる

梅

高瀨さすしづが袖さへかをるなりはるの梅津の花のさかりは

なつかしき花のゑまひをみし夢の面影うかぶ梅の下かげ

春風はうれしかりけり木のもとに梅が香ならぬ袖やたれなる

色に香におごれる花のこゝろよりみやびたりとは人につげけむ

梅花風靜

吹く風はあるかなきかの梢よりおのれとかをる梅の初花

露ながらかをれる梅のはつ花にこゝろおかれぬ朝風ぞ吹く

鄰梅

中垣のこなたもにほふ梅の花われさへ春はあるじがほなる

一もとの梅をかたみに友としてならぶる軒の睦まじきかな

里梅

うめが香に夢のなごりやとゞむらむねざめの里の春の曙

○高瀨さす　高瀨舟に棹さす。高瀨舟は底淺く平な小舟。
○梅津　山城葛野郡梅津。桂川を梅津では梅津川といふ。
○ゑまひ　ゑみ。笑。
○色に香に　色にも香にも得意になり誇つてゐる花。
○みやびたり　萬葉集「梅の花夢に語らくみやびたる花とあれ思ふ酒にうかべこそ」
○こゝろおかれぬ　花を散らす心配のない。
○かたみに　鄰どうし互に。
○ねざめの里　信濃西筑摩郡。

梅の花ざかりに山里をとふ

山里はうめ咲く宿のあまたあれば主さだめずとふべかりけり

梅近衣香

舟よする衣手いたくかをるなり咲くや梅津のはるの川風

夕　梅

おのづから花の光にくれかねて梅のはやしは夕闇もなし

月前梅

梅の花かをるやそれとみし夢のおもかげたどる春の夜の月

影もにほひ花も光をそへてけり月と梅とやおもふどちなる

月夜に梅の花ををりてと人のいひければ折るとてといふ事を

さく梅の花の光やとめてまし梢の月はよしかすむとも

月の夜梅かをれり

月夜よし梅が香清しいざさらばこの下かげに枕からまし

かつしかの梅見にまかりて

おのづから千本のうめを垣根にてかをれる雪にこもる宿かな

梅浮水

○衣手　袖。
○咲くや梅津　咲く梅と地名をかけた。洛外梅津村で桂川を梅津川といふ。
○影も云々　月影も花の如く匂ひ梅の花も月の如くに照り輝く、月と梅とは互に仲のいい間柄であらう。
○花の光やとめてまし　花の光は留めたいものだ。
○月夜よし　月影がよい。
○この下かけ　木の下陰。
○かつしか　武蔵南葛飾郡亀戸附近、江戸郊外に梅園があつて梅屋敷といつた。

花の香は波にながれてゆく水に影をとゞむる岸の梅が枝

皆川翁源應擧などともなひてふしみの梅谷のうめ見にまかりて

散る梅になか〳〵春もおもほえず雪のなかゆく心ちのみして

紅梅

たきもののかをりおほゆる梅の花うべも夕日に色こがれけり

雨のうちの紅梅

一枝はゆるしの色に咲くめれば折りてかざさむこのやどの梅

梅紅白

春雨にひもとく梅のくれなゐはふり出でてこそ色まさりけれ

たをやめがかさぬる袖と見るばかり色わく梅のなつかしきかな

紅梅白梅にほひことならずといふことを

にほひ香はへだてぬ梅のいかなれば色のみ花のけぢめ見すらむ

落梅浮水

水上のさとやいづこぞたづね見むうめが香おくる春のかは波

柳

吹くとなき風にまかする青柳はかすみながらにかたよりにけり

○皆川云々　皆川淇園圓山應擧。

○なか〳〵　却つて春とも思はれない。

○たきもの　色々の香を配合した煉香。

○かをりおぼゆる　薫に似通つた

○うべも云々　なるほど夕日に焦れてゐるから薫物のかをりがする

○一枝は　一枝は許す（折ることを）ゆるしの色とかけた。

○ゆるしの色　禁止されない服色何人も著用して差支ない服色。紅や紫の淡いもの。

○色わく　紅白と色を分けて咲く

○にほひ香云々　にほひに區別がない梅。

○けぢめ　差別。

○かすみながらに　霞んだまゝで

○かたより　片一方へ寄るに青柳の絲を片縒るにかけた。片縒るは片方から縒をかける。

〇たちそめ　霞の立つと衣を裁つと言ひ掛けた。

〇春くる　春の來るに絲を繰るをかけた。

〇藻刈人　藻を刈る人。

〇その舟ちゞめ　その舟をとゞめよ。催馬樂「櫻人その舟ちゞめ島つ田を十町作れる見て歸り來む」

〇うちたれ髮　結ひ上げない垂れた髮。けづるは梳る。玉葉集「佐保姫のうちたれ髮の玉柳たゞ春風のけづるなりけり」

〇水引の絲　麻を水に浸して皮を剝いで造つた麻絲。

〇はなだの絲　縹色の絲、はなだ色の絲。

〇けぶる　煙のやうにかすむ。

よりかけし柳の絲ぞみどりなる霞の衣たちそめてより

柳辨春色

宵の雨のなごりかすめる柳原ほのかに見する春の色かな

柳絲綠新

うちたるゝ柳の絲のあさみどり春くるごとに珍らしきかな

垂柳藏水

青柳はいとたれにけり藻刈人その舟ちゞめ春の河づら

垂柳臨水

青柳のうちたれ髮をけづるには下行く水や鏡なるらむ

柳池の水を拂ふ

水引の絲かと見しは波あらふ岸のやなぎの下枝なりけり

水邊柳

青柳の下枝なみこす河づらははなだの絲を洗ふとぞ見る

水郷柳

かげうつす波もにほひて青柳のいとよりけぶる河づらの里

河邊柳

ゆく川の底の玉藻と見るばかりきしねの柳影ぞうつろふ

雨中柳

春雨は降るとも見えず柳原あるかなきかにかげ霞みつゝ

柳露

あさみどり露や染むると見るばかり濡れて色そふ青柳の絲

柳の雪のかゝれるを

とけやすき雪にはありともあわにだに結びも止めよ青柳のいと

柳似煙

春風のかすみ吹きとく河づらにはれぬけぶりや柳なるらむ

草のいと青やかなるを

春雨は七日ふりけりおしなべてにひ草がちに野べの見ゆるは

磯春草

打ちよする浪もみどりの色そへて春をしるはの磯の若草

蕨

袖つれて遊ぶはる野の手すさみにをりあはれなる初わらびかな

百首歌の中、岡邊早蕨

○きしね　岸根。岸の水に近い所をいひ又ひろく岸をいふ。
○うつろふ　影かうつる。

○露や染むると　露が青物の絲を染めたかと思ふほど。

○あわにだに云々　沫雪としてでも解けないで留まれよ。沫緒(あわを)といふ絲の結び方にして青柳の絲を結びとゞめよとかけた。

○春雨は七日云々　萬葉集「春雨に衣はいたくとほらめや七日しふらば七夜來じとや」

○春をしるはの磯　春を知るを地名(遠江御前埼志留波の磯)にかけた。

○をりあはれなる　折からおもしろい。蕨を折るにかけた。

絶えやらぬゆききの岡のはつわらび萌えあへぬ間に人もこそ摘め

初午いなりまうで

稲荷山杉のもとつ葉をりかざしゆふこえ行くは都人かも

稲荷山みねの神杉かみさびついくよの人か折りかざしけむ

かざしをる今日のしるしといつの世の稲荷の杉は生し初めけむ

思ふことみつのやしろのいみしめ縄たれもひかれつ神の心に

峯とほくのぼりも行くかいなり坂幣とる袖も霞むばかりに

いなり山杉生の木立ほのぼのと霞にこもるみつのともし火

春日祭

藤浪の花のしなひのながき世にためしかはらぬ神まつりかな

舞人の立ち舞ふそでも霞むなり三笠の山の山かげにして

春神祇

二月やけふ新年(としごひ)の祭とて千々の社にぬさたてまつる

岩清水臨時祭

みな人にかざしの花ぞたまふなるうてなの竹の昔おぼえて

雲の上かさね土器(かはらけ)たちかさね榮えむ御代は汲みてこそしれ

○ゆききの岡　大和高市郡市法（イテキ）岡の一名。絶えやらぬ雪をかけた。
○萌えあへぬ間に　まだすつかり芽が生え切らない間に。
○稲荷山　山城紀伊郡深草村。頂を三箇峯。今西麓の稲荷神社は昔頂上にあつた。山内三座。參詣の人杉葉を折りかざして歸る。しるし杉である。
○もとつ葉　本の方の葉。
○ゆふこえ　夕方越えてゆく。
○思ふこと云々　稲荷社は三箇峯の上三社になつてゐるので思ふ願ひが滿つにかけていふ。
○杉生　杉の生えてゐる所。
○春日祭　奈良春日神社の祭。二月上の申の日。
○藤浪　藤の花。春日の神は藤原氏の氏神。
○新年の祭　神祇官國司廳で毎年二月四日豐年を祈る祭。
○千々の社　多くの神社。
○岩清水臨時祭　山城綴喜郡岩清水八幡の臨時祭。二月中の午の日
○うてなの竹　井桁のやうな箱に竹を植ゑたもの。清涼殿の東庭にある吳竹臺の竹。岩清水臨時祭前試樂の時舞人がその竹を折つて冠にさす。
○かさね土器　岩清水臨時祭の時諸員に御土器を二重五重に重ねて御酒を賜はる。

春月

霜と見ば花にこゝろの置かれなむ霞むもうれし春の夜の月

霞中月

霞む夜の月にも老をたどるかな我のみ晴れぬながめなりやと

江上春月

住の江や細江の波のかすむ夜は有るかなきかに月ぞ宿れる

浦春月

すくも焚く煙もたてず霞む夜の月やあはれとみつの浦人

故鄕春月

故鄕のしがの花ぞのあれにけり月や昔の春をしるらむ

幽栖春月

幾歲の春をふるやの板廂かすむとすれど月ぞもれくる

春月幽

さし下す船は波路に跡たえて水上かすむ春の夜の月

月入花灘暗

上つ瀨は花にへだてて入る月のなどか霞める春の川づら

○霜と見ば　月の光を霜と見たら
○花にこゝろ云々　花に對して月光の霜が心配になるだらう。
○住の江や細江　住の江の細江は攝津住吉神社の西にあつて打出濱に通じてゐる。
○すくも　蘆芽の枯れたもの、藻屑。
○みつの浦　見るを地名に言ひ掛けた。みつは攝津近江伊勢など同名の地がある。
○故鄕の云々　天智天皇の昔都があつて古蹟となつた滋賀都の花園の址。新古今集「あすよりは志賀の花園稀にだに誰かは訪はむ春の故鄕」
○春をふるや　經ると古る屋とかけた。

暁更春月

明けゆくや霞にしらむ山みえてほの〴〵残る春の夜の月

春曙

しらみゆく尾上の櫻いろ見えてかた山くらき春のあけぼの

水郷春曙

青柳の下かげかすむ六田川月もよどめる春のあけぼの

閑中春曙

散りつもる花にやまだきしらむらむ拂はぬ庭の春の曙

暮山春望

花の色は霞のうちになほ見えて松よりくるゝ春の山もと

春秋のあはれをあらそふ心を

秋の水に月を待ちとる夜半はあれど花よりしらむ曙のそら

夕春雨

春雨に梢あやなくなりにけりさらでも霞む夕ぐれの山

庵春雨

春雨も音しのぶなり山かげにかくて世をふる心しりきや

○六田川　大和吉野村の北、吉野川の渡津を六田の渡又は六田の淀といふ。柳が多い。萬葉集「かはず鳴く六田の川の川楊の」同「芳野川六田の淀をけふ見つるかも」

○まだき　はやくも。

○山もと　山の麓。

○月を待ちとる　月の出るのを待ちつける。

○夜半はあれど　夜は趣はあるけれどそれより更に興味あるのは。

○あやなく　わけがわからなく。

○さらでも　春雨が降らなくてさへも。

○音しのぶ　静かに降って音をかくしてゐる。

○かくて云々　かやうに隠れて世を過してゐるわが心を春雨が了解したのか。ふるは雨の縁語。

○訪はれまほしき　訪問されたい

○ひくまの　引馬野。遠江濱松近郊。心を引くにかけた。

○こゝを越路云々　此處を雪の北國だと思つて。鴈は春に北へ歸る。越路に來し路をかけた。
○月な見捨てそ　月を見捨てるなよ。
○花にはうとき　花とは疎遠だ。花と仲がわるい。
○花にうき心　花に對して薄情な心を持つてゐるのを。
○見えじ　見られまい。

○寢よげなる　寢好ささうな。草の根の好ささうとかけた。
○明けぬとて　夜が明けたと云つて。
○きゞす　雉子。

幽栖春雨

おとしのぶ春の雨こそ哀れなれ我が身世にふるたぐひと思へば

百首歌の中閑中春雨

をり〳〵は訪はれまほしき宿なるを音だにたてよ軒の春雨

春野

こゝにのみ枕からまし春はたゞ心ひくまの野べのわか草
そことなく野べにくらしつ花をとひ鳥をあはれむ心々に

歸鴈

山櫻雪とも見えよゆく鴈のこゝを越路と立ちとまるべく
霞む夜の月な見捨てそかへる鴈花にはうときならひなりとも

霞中歸鴈

花にうき心を人に見えじとや霞がくれに鴈の行くらむ

百首歌の中、澤邊春駒

寢よげなる野澤の草になれてなど駒の心のあれまさるらむ

雉

明けぬとて啼くやきゞすの聲のうちにほの〴〵しらむ春の山畑

○雲雀落　雲雀が空から急に地上におりるのをいふ。
○菫の牀　菫の咲いてゐる寢所。
○そこはかとなく　何處となく。はつきりしないで。
○聲のみ　形は見えないで。
○喚子鳥　鳥の名。筒鳥の異名ともいひ又くわくこうの異名ともいふ
○手飼　手づから飼つてある。
○綱手繩　引き綱。

雲雀

空遠くあがりも行くか夕ひばり野澤の水にかげの霞める

雲雀落

春の野の菫の牀におち来つゝ聲もにほへる夕雲雀かな

大空はそこはかとなく霞む野に聲のみおつる夕ひばりかな

喚子鳥の鳴くを

はるかなる深山の杣の斧の音にこたへても鳴くよぶこどりかな

百首歌の中に、谷中喚子鳥

山彦のこたふる聲にしられけり深谷のそこに鳴くよぶこどり

春蟲

うら／＼と霞む春野はとぶ蝶のつばさにのみや風の見ゆらむ

打ちとけむものとも見えず春かけて古枝にのこる雪のみの蟲

春獸

狩人の手飼の犬の綱手繩ながき春日をくらす野べかな

春園獸

山賤のそのふの花の雪の上に聲なき鹿の跡も見えけり

春日

忘れては今朝を昨日とたどるこそ日長き春のならひなりけれ

春日遲

朝鳥の花になれゆく春の日はねぐらにかへる程ぞ遙けき

遲日

あくまでも花の木かげになれよとや春の日影の暮れがてにす

雨岡の家にて閑中日長といふことを

鶯のかたらふ聲もあくばかり靜けき街に聞きやならへる

心靜酌春酒

日ながさを思ひなぐさむ老の坏(つき)にいく度花を泛べては見し

みかの日

よるべをば波に任せて散る花の香ごめにめぐる春の杯

桃

かくしつゝ源遠くさく花のもゝ世もこゝに住み習へとや

賤の男の畑うづ袖もにほふまでくぬぎのもとに桃の花さく

ものいはぬ花とし知れど木の本を心ありげに人ぞとひける

○たどる　思ひ迷ふ。

○朝鳥　朝早く塒を飛びたつ鳥。

○暮れがてに　暮れ難さうに。暮れさうになく。

○老の坏　老人の酒酌む杯。
○花を泛べ　萬葉集「酒杯に梅の花浮けて思ふどち飲みての後は散りぬともよし」
○みかの日　三月三日。曲水宴をする。流水に臨み杯を流して酒を酌み詩を作る公事。
○香ごめ　香も一しよに。
○源遠く　陶淵明の桃花源記による故事を含めた。
○もゝ世　百世。桃をかけた。
○ものいはぬ花　史記李將軍傳「桃李不レ言下自成レ蹊。」

○たをやめ云々　白樂天の長恨歌に楊貴妃の姿を「梨花一枝春帶雨。」
○咲き咲かぬ　咲いたか咲かない
○春もおくある　春も最後までまだ長い時日がある。
○年にまさる　年々増る。
○あだなる名　花の散り易く賴りないといふ評判。薄情だといふ評判の意をかけた。
○咲き散るを云々　咲くを慕ひ散るを慕ふ。
○深く思ひ入るには　深く思ひこむに比べては。山の奥に分け入るをかけた。
○心かゝらぬ云々　春はわが心のかゝらぬ山はなかつた。
○山分衣　山路をわけ行くに着る衣。
○咲けばかつ散る　咲けば咲くあとから散る。
○花や何なり　花は一體どうしたことか。

梨

たをやめの姿を今もしのべとや雨に匂へる山梨のはな

花

咲き咲かぬほどをあはれと思ふかな春もおくある花の日數に

散るを惜しむ心ぞ年にまさりける老を忘るゝ花ぞと思へば

あくまでも花見るたびに嬉しきは世に營みのなき身なりけり

春ごとのちぎりかはらず咲く花にあだなる名をば立てずもあらなむ

なべて世の人の心もはなにのみ染むるや春のさかりなるらむ

咲き散るをしたふ櫻の花ゆゑに夢とすぐさぬ春はなかりき

はなにのみ暮さぬ春はなけれどもいづれの年かあくまでは見し

みよしのの奥も淺しと見はてまし花ゆゑ深く思ひ入るには

咲く花を雲と見しよりわが心かゝらぬ山も春はなかりき

とはばやとおもふ山路や殘らまし花の日數のかぎりある世に

けふいく日山分衣きならして花にやつるゝ袖ぞうれしき

待つ程の憂さは日數をかさね來て咲けばかつ散る花や何なり

待花

春の日の遲してふ名は我がごとく花まつ人やいひはじめけむ

望山待花

いつかまた咲くらむ花のかからばと思ひなぐさむ峯のしら雲

閑中待花

いつしかと待つに心をなぐさめて花さかぬ間の春ぞのどけき

閑居待花

春ごとの花より外は世の中に待つこともなきすみかなりけり

花盛

櫻ばなさかりとなれば散るうさも待ちしつらさも何か思はむ

人心空になればや櫻ばな咲きのさかりは雲と見ゆらむ

處々花盛

さくら咲く大井の里に一夜ねて明日はをぐらの花も分け見む

よしの山の花のさかりを見てかへり來て人のかたるを聞きて

花はみな雲とぞかたる一言におもかげうかぶみよしのの山

花のさかりに山里をとふ

かくしつゝ花し散らずば我もまた山里人となりぬべきかな

○かからば　かくあらば。現に見る白雲の如くあらば。雲のかゝるを言ひ掛けた。

○散るうさ云々　散る時のつらさも待つてゐた時の心苦しさも。

○空に　うはのそら。我を忘れて無中になる。雲の緣語。

○大井の里　里の名ではない。山城葛野に大堰を作つたので桂川のその附近を大井川といふ。其の邊の里をいふ。

○をぐら　山城葛野郡嵯峨村の西小倉山。西南の麓に大井川流る。

○おもかげうかぶ　樣子が目に見えるやうだ。

○かくしつゝ　此の通りで。

見花

はな見ればあかで暮れゆく春の日をおそしと誰かいひはじめけむ

靜見花

露をだに散らさぬ花のかげなれば誰かは風に心おくべき

見花延齡

のどかなる春の心にひかれなば花ゆゑ千代も經ぬべかりけり

見花戀友

見せばやと人をぞしのぶ山櫻あかぬ心のへだてなければ

小金井の花見にまかりて

春風に香をとめ來れば水上のうきたつ雲は花にぞ有りける

水をへだてて花を見る

きしかげや折られぬ花のにほひをも波によせ來る春の河水

瀧河やあさ瀨しら波たどるとも岩もと櫻をりて歸らむ

河づらの宿に花を見る

前川に船漕ぐ袖もかをるなり渚のやどに櫻さくころ

舟中見花

○あかで　見飽きもしないで。

○風に心おく　風のことを氣にかける。

○小金井　武藏北多摩郡小金井。玉川上水道の岸二里、櫻の名所。

○とめ來れば　尋ね求めてゆくと

○あさ瀨云々　淺瀨は何處か知らずと。白波の中をさがしまはっても。

○あくがれて　心引かれて思ひ焦れて。
○行きくれて　歩いてゐるうちに日が暮れて。
○明日さへ　此の上に明日また。
○道行きぶりのすさみ　道を行く途中でふと逢つた慰み。
○あすか風　大和高市郡飛鳥を吹く風。飛鳥は推古天皇から持統天皇までの都があつたので故郷に今日も云つた。明日の意をかけて今日に對した。
○さそはむ　風が花を誘つて散らすのをいふ。
○うき世のさが　世間の慣はしい習慣。
○さもあらばあれ　まゝよどうにでもなれ。
○人もかくこそ　かくこそあらまほしけれ。

こゝろひく渚の花にあくがれて下しもはてぬ春の河舟

花下忘歸

行きくれてやどりはしめつよしの山おくある花は明日さへも見む
山ざとにあるじを誰とさだめねど花のかげこそ長居せらるれ

花下暮日

暮るゝまで花にそはむと思ひきや道行きぶりのすさみなりしを

花下送日

故郷に今日もくらしつあすか風さそはむまでは花にやどらむ

花下言志

日數なき花もうらみじあまたたび春にあへるを思出にして
思ふこと花見るたびに忘られきうき世のさがよさもあらばあれ

花如舊

あはれよの人もかくこそ老木だに花は匂ひのかはらざりけり

風靜花芳

をりをりに霞をもれてかをらずば吹くとも知らじ花のした風

花添山氣色

朝ごとにかすみ色そふ初瀬山檜原のおくも花になる頃

毎年愛花

春ごとに咲きまさればや櫻花あかぬこゝろの年に添ふらむ

花忘老

花にそむ心は年にかはらねば春は老をもおもはざりけり

花自有情

ひたすらに憂きを見せじと散ればかつ遲れて匂ふ花も有りけり

千蔭の石濱のやどりにて歌よみける時、花錦を

隅田河つゝみの花のから錦春はきて見ぬ人やなからむ

花未飽

咲く花を思ふばかりはいつか見む心のゆかぬ里はなけれど

奥までも分けずはやまじ山口の花に一夜のまくらかるとも

折花

山櫻かた枝まばらになりぬるは我より先に誰か手折りし

はなを折りて

折る花を人なとがめそ老をだに隱すばかりの心すさみは

○初瀬山　大和磯城郡初瀬。
○檜原　檜の生え茂つてゐる原。
○年に添ふ　一年々々に增す。
○花にそむ　心の底まで花にしみこむ。
○散れば云々　散るのもあれば又そのあとから一方では。
○石濱　今の東京淺草寺の北今戸橋場一帶の地。
○きて見ぬ　來てに著てをかけた
○思ふばかり云々　心に思ふだけは何時見る事だらう。思ふ存分に花を見るのはいつだらう。
○分けずはやまじ　踏み分け入らないまゝではおかぬ。
○山口　山の上り口。
○かた枝　片一方の枝。
○折る花云々　古今集「鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるやと」

馴花

日を經てもうす紅のはなよなど人の心を深くそむらむ

散るわかれ有りと知りつゝ咲く花に馴れしや何の心なるらむ

千蔭がもとによしの山の櫻の若木をうつしうゑたるを見て

よしの山名高き花の種なれば雲と見るまでおほしたてなむ

惜花

あだに散るうさをばかねて知りながら今年もいたく花に馴れにき

依花待友

おもふ友來むとは花にたのめども待たで散りなばいかにしてまし

花ゆゑに人を待つといふことを

柴の戸の花な忘れそ都人われにはうとき心なりとも

年經て花のもとにてあへり

なつかしき花の色香をわすれめや春よ昔の春ならずとも

花留客

櫻ばなあだにうつろふ心もて道ゆく人をなどとゞむらむ

花のもとに歸らむことを忘る

○など　どうして。
○深くそむ　深く心にしみて感じさせる。
○おほしたつ　そだて上げる。培養したてる。
○あだに散る云々　花がはかなく空しく散るといふつらさ。
○花に馴る　花の薄情に我を捨て(あだに)散ると對した。
○たのめども　頼みをかける。
○春よ昔云々　古今集「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」
○あだにうつろふ　はかなく脆く色の衰へしぼむ意に薄情にも心かはりゆく意をかけた。

故鄕の人やは待たむ花みつゝ春は旅寢に馴れし身なれば

古寺花

朽ちのこる閼伽井の水を鏡にて花はいくよの影かうつせし

霞中花

たちかくす霞の袖もさく花もほころびそめて匂ふ春かぜ

雨後花

春雨のなごりに匂ふ花もよし降るを涙と誰かいひけむ

嶺花

待つ程の雲にまどひしひがめをも思ひさだむる嶺の初花

志賀花園花

ことの葉の色香も世々にそへ來てぞ今もにほへるしがの花園

名所花

かぐ山や高嶺のさくら咲く時は底さへにほふ埴安の池

あけぼのや霞がくれの岩門もはなより開く逢坂のせき

みよしのの瀧の都の跡とへば昔忘れず花咲きにけり

水邊櫻

○人やは云々　人が待つて居るだらうか待つては居ない。

○閼伽井　佛に供へる水を汲む井

○降るを涙　古今集「春雨の降るは涙か櫻花散るを惜しまぬ人しなければ」

○雲に云々　雲を花かと思ひちがつた見あやまり。

○志賀花園　天智天皇の舊都志賀大津の宮にあつた花園。

○ことの葉　代々に志賀の花園を詠んだ和歌。

○かぐ山　大和磯城郡。

○埴安の池　香具山の麓。

○岩門　堅固な門。

○瀧の都　大和吉野郡宮瀧。古昔離宮があつたので瀧の都といふ。

櫻さく春の河とをみわたせば雲の中ゆく水の白浪

關花

吹く風にあらさぬ不破の山ざくら春は關守る神やますらむ

春情寄花

花にのみ心ひかれて春はたゞ身を鶯にかへぬばかりぞ

寄花祝言

思ふどちかくしも花をかざしつゝ千年の春ぞ待つべかりける

寄花夢

暮れてゆく春を現と何かみむ夢ばかりなる花のちぎりに

露の間の夢さへ花にあくがれつ胡蝶に身をもかへしばかりに

花衣におつといふことを

櫻狩わが袖ながら散る花をはらはで今日の山づとにせむ

落花

のどけさを思ひつゞくる春の日になど咲く花の一さかりなる

をしめども人には花のつれなくて風の心になどまかすらむ

風さそふ瀬々の岩波音たてて瀧のみやこにさくら花ちる

○河と　川の流れの落ち合ふ處。

○あらさぬ云々　不破の關は荒れてゐるが風に櫻が散つて荒すことがない。不破關は美濃不破郡關原村。

○身を鶯　鶯に變をかけた。

○かくしも　此の通りにも。

○夢ばかりなる　夢のやうにはかなく短い。夢と現と對照。

○胡蝶云々　莊子「莊周夢爲二胡蝶一栩々然胡蝶也。自喩適レ志與。不レ知レ周也。俄然覺則蘧々然周也。不レ知下周之夢爲二胡蝶一與。胡蝶之夢爲レ周與上」

○山づと　山から家へのみやげ。

○つれなく云々　人に對して薄情で風の心に從ふ。

○岩波　岩に激する波。

葛城のみねのうき雲ひま見えて豐浦の寺に櫻はなちる

花のちるを見て

雪と降る花はたぐひもなきものを散らばをしとはなど思ひけむ

山櫻ちりゆく方をしたひ來て我さへ風にまかせつるかな

月前落花

月なくばいとゞあだにや見はてまし霞がくれにちる櫻ばな

雨後落花

春雨のなごりおぼえてちる露にもろさ爭ふ山ざくらかな

海邊落花

風こゆるいそ山ざくら散りにけり雪をのせ來る須磨の浦舟

名所落花

比良の嶺の花を嵐の吹くからに波の下ゆく志賀の浦舟

古宮落花

花は雪とふり行く宮の庭ざくらいづれの春か朝ぎよめせし

閑庭落花

うき世をばそむきし宿にちる花の誰にならひて靜心なき

○葛城のみね　大和南葛城郡。其の最高峯を高天山といふ。新古今集「よそにのみ見てややみなむ葛城や高天の山の峯の白雲」
○豐浦の寺　本名は建興寺、又小墾田寺といふ。大和高市郡飛鳥村字豐浦にその址がある。

○なごりおぼえて　名殘も思ひ出されて。名殘に似通つて。

○雪をのせ來る　落花の雪を舟にのせて來る。

○比良の嶺　近江比良山。
○吹くからに　吹くによつて。
○波の下　散る花の白い波の下。
○ふり行く　古くなつてゆく。雪と降るをかけた。
○朝ぎよめ　朝の掃除。拾遺集「殿もりの伴の御奴心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな」によつた。
○靜心なき　落著いた心がない、あわたゞしいのであらうか。

後のきさらぎ花のちるを

やよひだに待たでうつろふ花みれば加はる春もかひなかりけり

八重ざくら

一さかりありて散りぬる花の後に春をとゞめし八重櫻かな

ちりて後花をしたふ

馴るゝ間もあらで散りにし花ながら慕ふ心ははてなかりけり

すみれ

いざさらば春の野守に宿からむ共にすみれの花になれつゝ

菫つみに出でたつとて

紫のゆかりおほゆるすみれ草たゞわれのみは摘まじとぞ思ふ

閑居菫

あれにけるまがきも春は結ひそへむ菫摘みにと來む人のため

古砌菫菜

朽ちのこるみはしの苔も色はえてよをふる宮にすみれ咲くなり

菜の花を

花見てもつまほしきを初春の雪間にのみとなに思ひけむ

○後のきさらぎ　閏二月。
○加はる春　閏二月で二月の外にまた二月があるのをいふ。
○馴るゝ云々　馴れる間もなく親しみも淺くて散つた櫻ではあるが
○野守　野の番人。
○宿からむ　萬葉集「春の野に菫つみにと來しわれぞ野をなつかしみ一夜ねにける
○共にすみれ　すみれに住みをかけた。
○古砌　古くなつた軒下の敷石。
○みはし　御階。
○よをふる宮　世を經た古い宮。
○雪間に云々　初春の雪の間にばかり若菜を摘むものとはどうして思ひこんだことだらう。なには何に菜をかけた。

園の菜の花を

此の園の春に胡蝶やあくがれむ朝な夕なの花にほふ頃

かげろふ

川よどの水もながると見えつるは立つ陽炎のうつるなりけり

長閑にもひもとく花にまつはれて絲かと見ゆる野べのかげろふ

蛙

雨そゝぐ小田の水口水ましてところえがほに鳴くかはづかな

汝(なれ)もまた春をや惜しむ散りまがふ山吹の瀬に蛙なくなり

苗代

苗代の水口祭しめはへて秋のたのみやかけて祈らむ

燕來

つばくらめ門田に今ぞ聲すなる種おろすべき時や來ぬらむ

つゝじ

咲きにほふ磯山本のしらつゝじしらずよ波にまがふものとは

水邊躑躅

池水にうつろふ時は白つゝじとはにより來る波かとぞ見る

○朝な夕なの花　毎朝毎夕菜の花にかけた。

○川よど　川水の淀んだ所。

○春をや惜しむ　春の逝き過ぎるのを惜しむか。

○散りまがふ　散りまぎれる。紛ミして亂れ散る。

○山吹の瀬　山城宇治。

○水口祭　始めて苗代を作り苗代水を引いてその水を引き入れる口に幣などを立てて米の成熟を祈る祭。

○たのみ　田の實卽ち米。賴み卽ち米の成熟の期待。

○種おろす　種を蒔く。特に稲の籾を水に漬し乾かしたもの八十八夜頃に苗代に蒔く。

○とはに　永久に。いつもかはりなく。

百首歌の中、巖上躑躅

あらましき巖にはなど咲きつらむ妹が赤裳ににつゝじの花

所々山吹

妹背山中ゆく河に影みえてにほひかはせる岸の山ぶき

雨ふる日八重山吹を人のもとへつかはすとて

春雨は七日ふれども山吹のやへさく色はあせずぞ有りける

池杜若

花のいろに波もにほひて池水を村濃になせるかきつばたかな

藤

老いにける松にかゝりていつまでか若紫の藤浪のはな

浦藤

世の常のいろとやは見むむらさきの名高の浦に匂ふ藤浪

藤懸松

咲きそめて手にさへかゝる藤浪に松は木高きかげとしも見ず

暮春藤

日をかさね咲きそふ藤の紫ははる深くしも染むるなりけり

○あらましき　荒々しい。
○につゝじ　丹躑躅。赤い裳に似るをかけた。

○妹背山　大和吉野郡國栖村宮瀧附近吉野川を挾んだ二つの丘陵。
○にほひかはせる　互に色艶美しく咲きあつてゐる。

○村濃　同じ染色で所々むらに濃く淡くしたもの。

○若紫　淡い紫色。老松に對して若紫と對照した。

○名高の浦　紀伊海草郡名高浦。つゞいて藤白の浦がある。紫川がある故紫の名高の浦と云ふ。萬葉集「紫の名高の浦のまなご地に袖のみふれていねずかなりなむ」
○手にさへかゝる　手にまでもとゞきかゝる。

○はる深く　春の深く闌なのに色の濃く深いのをかけた。

○大君の名云々　牡丹の異名を百花の王といふ。北山集「御喜驕人稱二第一一。王レ今喚作二百花王一。」皮日休の詩に「落二盡殘紅一始吐レ芳、佳名喚二作百花王一。」
○志賀の山越え　近江滋賀村から志賀山を越えて山城白川村に通ずる五十町餘。
○雪とのみ　雪としか思はれぬやうに。
○花のふる道　雪と降るに古い道をかけた。
○昔おぼゆる　昔のさまも思ひ出される。
○心あふみ　心合ふに近江をかけた。
○心あひの風　心の合ふにあひの風(東風)をかけた。
○はねならはせし　羽をならした
○浦傳ひして　春が須磨明石と浦から浦へ傳ひ行つたか。
○何いたづらに　どうして浦浪はかりかひなく返るだらう。

濱田君の庭に牡丹をおほくうゑ給へるに歌よめとありければ

大君の名をしもおへる花みればうべも世に似ぬ色香なりけり

志賀山越

ふみそめし人の心を春ごとの花に忘れぬ志賀の山越え

夕かけて猶こえはてぬ志賀の山たれも心や花にひかれし

雪とのみ花のふる道ふみ分けて昔おぼゆる志賀の山越え

正臣が家の贈答會に志賀山越といふことを助丁が「ちぎらねど心あふみのしがの山ちる花をさへともにこそみれ」とよめる返しに

あかでちる花のなごりも心あひの風のとがとは何おもはまし

春のはて

春もとく暮れざらましを大かたに散るをし花のいそがざりせば

鶯も老をやなげく此の園にはねならはせし折も有りしを

浦暮春

花ははや須磨も明石も散りにけり浦傳ひして春やくれゆく

なごりなく春はくれゆく浦浪の何いたづらに立ちかへるらむ

湊暮春

泡とちる波間のはなは色もなし比良の湊の春のくれがた

山家暮春

日ながさも訪はれぬまゝに知られけり花より後のはるの山ざと

暮春雨

ちる花を夜の間の雨にくたしなば春のかたみも明日やたどらむ

暮春花

あだなりと何かおもはむ暮れて行く春に爭ふ花もありけり

よそへては春の日數ををしむかな殘り少なき花をみるにも

暮春鶯

ちり殘る花にや老をわするらむなほ鶯はものうげもなし

惜春

ゆく春は夢とのみこそたどらるれいつかは花をあくまでは見し

惜春不駐

山河や春はよどせもなきものをかひなくかけし花の白浪

〇比良の湊　近江滋賀郡比良。萬葉集「わが舟は比良のみなとに漕ぎはてむ沖へなさかり小夜深にいさ」

〇訪はれぬまゝに　花が散ってからは訪ふ人も無いので。

〇くたしなば　腐らしてしまふと

〇たどらむ　尋ね迷つて歩くことだらう。

〇あだなりと　櫻の花を散り易いはかないものだとは。

〇春に爭ふ　春にはり合つて咲く

〇よそへては　春の日數の殘り少ないのと花の殘り少ないのとを比べて。

〇よどせ　淀瀬。淀みと瀬。こゝでは淀んだ瀬をいふ。春は云々は春は淀むことなく早くも月日が經過するのに。

琴後集巻二

夏歌

首夏

みし春のなごりわするゝ夏衣花のかとりは名のみなりけり

首夏朝

木の下に散りのこる花やかきつめむ昨日の春のわすれがたみに

なつ山やきのふの花の雲きえて若葉ににほふ朝日影かな

山家首夏

山里は古巣にかへる鳥が音にあはれをそへて夏は來にけり

山里のはらはぬ庭は夏ながら苔路にまじる花も有りけり

更衣

くやしくも深くぞ花になれ衣そでのわかれのあるを忘れて

櫻いろの袖ぬぎかへて卯の花にかさぬる衣もめづらしきかな

きならせし春の衣をぬぎかへて又しも花に別れぬるかな

○花のかとり　花の香を衣に取る縑(かとり)をかけた。縑は地を細かに堅く織つた絹で、その衣は夏の初めに著る。
○かきつめむ　かき集めむ。

○なれ衣　著なれた衣。花に馴れ親しむ意をかけた。
○そでのわかれ　男女互に纏ひかはした袖を解いて別れること、ここは夏衣と脱ぎかへ花と袖をわかつ意に男女の別れをかけた。
○卯の花にかさぬる　襲の色目で卯の花は表白、裏靑。四月に著る。こゝでは櫻と卯の花と對照した。

貴賤更衣

ぬぎかふる袖もやさしな麻衣しらがさねせし人もある世に

殘鶯

散りのこる花にたぐへてをしむかな若葉がくれの鶯の聲

遲櫻

折りとらばにほひをうつせ遲櫻はなのかとりの袖うすくとも

山餘花

手向山はるの越えゆく跡とへばいまもさくらの幣とこそちれ

谷餘花

世をいとふたにの庵のおそ櫻ときにきそはぬ心をや知る

卯月ばかり山ぶみして

なつ山や若葉にうづむかげとへば花のしをりの跡も殘らず

殘りの花を惜しむ

あかぬ間にわかれし春のかたみぞと思ふ花さへ散らむとやする

林新樹

三輪山や花より後のかげもよし繁きがもとに若葉さす頃

〇やさしな　恥かしきかな。
〇しらがさね　襲の色目。表裏共に白いもの。四月十月更衣の時に着る。
〇花にたぐへて　花と一しよにして。
〇手向山　山越えの坂路の頂上、峠。其處で神に手向をするのでいふ。
〇はるの越えゆく　峠を春が越えてゆく。
〇さくら云々　櫻が散つて神に手向の幣となつてゐる。
〇ときにきそはぬ　時世と競争しない。時にとおそ櫻に對して疾きにときをかけた。
〇三輪山　大和磯城郡。
〇繁きがもと　樹の茂つた麓。この歌萬葉集「綜麻形乃林始乃」を千蔭の畧解に「みわ山のしげきがもとの」と訓んだのによるか。
〇若葉さす　若葉が生える。

雨中新樹

雨そゝぐかた山かげの夏木立いまひとしほの緑をぞみる

新樹妨月

夏陰や花に手折りし梢のみたま／＼月の影もらしけり

わか楓を

色はゆる青葉のもとの若楓しもに匂へる秋はものかは

夏陰ににほふ楓のくれなゐは花の錦のなごりとぞみる

夏山里にまかりて

瑞枝さし淸水ながるゝ山里を花にのみなど訪ひならしけむ

卯花

咲きしよりつもる日數のほど見えて卯のはな垣は雪になり行く

卯花蔽水

うの花のかげ行く川ぞかすかなる雪の下水もれしばかりに

山家卯花

山賤のかきほはまたも訪ひてみむ卯の花くたす雨ふらぬまに

卯花似雪

○かた山かげ　一方の側によつた山のかげ。

○花に手折りし　花が咲いてゐるので手折つたあとの梢はまばらで

○しもに匂へる　霜によつて紅葉してゐる。

○秋はものかは　秋は物の數でもない。

○瑞枝さし　瑞々しい若枝が芽はえて。

○花にのみ云々　どうして花の時にばかり訪ひ馴れたのであらう。

○つもる　雪の緣語。

○雪になり行く　卯の花が白く咲いたのを雪に喩へた。

○かきほ　垣。垣根に對して高くなつてゐる上にいふ。

○卯の花くたす雨　卯の花を腐らす雨、四五月頃の雨。

うつぎ咲くかた山里のあけぼのは雪にしらめる心ちこそすれ

卯花がきに月をみる

卯の花をさながらかこふまがきには月の光もへだてざりけり

神まつり

夏たてば森のまさかき茂るなりゆふとる袖もかをるばかりに

大みわのまつりの使

神さぶる杉のした道幾歳か大宮人のたちならしけむ

みわの山杉の下みちふみ分けてぬさとりゆくは使ざねかも

神まつるあすはうの日とみわの山みてぐら使けふよりぞ立つ

灌佛

御佛のあらはれそめし法の水ながれて世々の人もくみけり

もろ人のけふのためしの舟づゝみつどふや法の湊なるらむ

葵

小車にあふひのかづらかけてけり神まつるけふにめぐり來ぬれば

毎年懸葵

年ごとにかけていく代かたのまゝまし今日のみあれにあふひてふ名は

○さながら　そのまゝで。
○まさかき　眞榊。眞は美稱。
○ゆふ　木綿。祭の時榊にかけ垂れる構(かぢ)の樹皮の糸。
○大みわ　大和磯城郡三輪の社大神大物主神社。祭日は陰暦四月上の卯の日。丑の日に勅使が參向する。
○神さぶる　古びて神々しい。
○ぬさとりゆく　神に奉る幣物を取り持ってゆく。
○使ざね　正使。使者の中の主要な人。
○みてぐら使　幣使。神に幣帛を奉る使者。
○灌佛　陰暦四月八日釋迦誕生日にその佛像に甘茶を灌ぐ法會。
○法の水云々　後世まで佛法の流布しつゞく意。
○舟づゝみ　布施の金錢を紙に包んだもの。
○法の湊　舟の集まる湊とつゞけた。法は乘りにかけて舟の緣。
○あふひのかづら　加茂葵の葉を車に懸けるのをいふ。
○みあれ　陰暦四月中の申の日の賀茂祭。轉じて賀茂神社をいふ。
○あふひ　葵に逢ふ日をかけた。

卯月ばかり香取へ行きけるにかまがやの野にて鹿のむれゆくをみて

眞萩原まだうらわかしゆく鹿の胸分くばかりいつかなりなむ

郭公

待ちあかす心くらべにまけにけり有明の月になくほとゝぎす

さやかにも名乘るか月の玉すだれかゝぐる軒の山ほとゝぎす

しのび音はなか〳〵つらし郭公した待つほどの心いられに

きくたびにねぬ夜ぞおほき時鳥いま一聲とまちならひつゝ

なれゆけば厭くをならひの人の世に猶めづらしき郭公かな

郭公うひだちしつと山人の語るをきけばいやまたれつゝ

めづらしとおもふこゝろに時鳥はつ音を夢となほたどるかな

ほとゝぎすたゞ一聲に見し春のはなのなごりも忘られにけり

橘の花ちるさとのほとゝぎす鳴く音もかをる心ちこそすれ

待郭公

時鳥かくていく夜のむらさめを空だのめにはなして過ぐべき

人傳に聞きそめにけり郭公まちよわるとも又やたのまむ

初聞郭公

○香取　下總香取郡。香取神宮がある。
○かまがやの野　下總香取郡鎌が谷。
○眞萩原云々　原の萩はまだ若々しい。
○胸分く　鹿が胸で萩を押し分ける。萬葉集「ますらをの呼びたてしかは棹鹿の胸わけゆかむ秋の萩原」
○心くらべ　根くらべ。
○した待つほど　心待ちに待つ間
○心いられに　氣かいら〳〵するので。じれったさで。

○うひたち　初めていでたつこと
○いやまたれ　いよ〳〵待たれる。
○はつ音云々　初音を夢と思ってなほ迷ひ求める。
○たゞ一聲に　郭公のたつた一聲を聞いたたけで。

○空だのめ　かひのない頼み。あてにさせて實行しない約束。
○まちよわる云々　待ちあぐんで根氣まけしてもよい、人傳に聞いたのを賴みにしてまた當てにしよう。

ほとゝぎす聞きつとかたる人もなし初音やわれに先づもらしけむ

はじめてほとゝぎすを聞きて

郭公さやかになのる一聲を聞きそめてこそいや待たれけれ

月に思ひ雨にまつよの數を經てはつ音うれしきほとゝぎすかな

郭公を聞きて

かくしつゝをち返り來て我がために昔語らへもとほとゝぎす

郭公一聲

いく度のかたらひぐさにいひ出でむたゞ一聲の山郭公

郭公幽

聞きつとも思ひさだめずほとゝぎす今一聲はしのばずもがな

山里にほとゝぎす聞きにまかりて

一こゑは都にもきくほとゝぎす山路のかひにをちかへりなけ

海のほとりにて時鳥をきく

ほとゝぎすいせじまかけの一聲はひろへる玉の心ちこそすれ

おもふことある頃郭公を聞きて

郭公夜たゞなく音にならへとや物思ふ宿を過ぎがてにする

○月に思ひ　月を見るにつけて時鳥を思ひ。
○をち返り來て　初めにかへつて來て。
○もとほとゝぎす　昔から來てゐた時鳥。
○かたらひぐさ　話の種。
○しのばずもがな　忍び音でなくはつきりと鳴いてくれよ。
○山路のかひ　山の峽(かひ)で鳴け。山路へ來た詮(かひ)があつての意をかけた。
○をちかへりなけ　くり返して鳴けよ。拾遺集「ほとゝぎすをちかへり鳴けうなゐこが打垂髪の五月雨のころ」
○夜たゞ　夜通し。終夜。
○物思ふ宿　わが思ひ惱んでゐる家。
○過ぎがてにする　通り過ぎにくさうにするのか。

郭公遍

ほとゝぎすうとかる里はさらずともこの橘を宿とさだめよ

雨方聞郭公

峯に尾に中のやしろをへだてつゝなくやいなりの山時鳥

雲間郭公

村雨のなごりあしとくゆく雲に聲もおくれぬほとゝぎすかな

月おそきゆふべの雲のたえまより先づ聲もらす郭公かな

閑中郭公

友もなき宿とのみやはいひはてむ山ほとゝぎす月になく夜は

樵路子規

ほとゝぎすとばの山柴とりならしなれてや賤が聞きふるすらむ

曉に時鳥をきく

郭公をりしりがほに鳴きぬめりものおもふ宿の曉のそら

曙郭公

玉くしげ箱根の山のあけぼのにふた聲なのる郭公かな

深夜子規

○うとかる里云々　どの里も時鳥に親しくして疎く嫌ふ里はないにしても。
○橘を宿云々　古今集「けさ来鳴きいまだ旅なる時鳥花橘に宿はからなむ」
○峯に云々　稲荷社は山城紀伊郡深草村稲荷山の頂三箇峯に三社になつてゐる。
○あしとく　足はやに。
○友もなき云々　友のない家とばかり云つてしまふわけにはゆかぬ
○とばの山　大和生駒郡飛羽山。
○山柴とりならし　山の柴を刈りなれて。なれての序詞。
○玉くしげ　箱の枕詞。
○あけぼのにふた聲　明け、蓋は箱の縁語。

ほとゝぎす夜ぶかき雲の絶間よりおちゆく月をしたひてぞ鳴く

夢後郭公

おもほえず聞くぞうれしき時鳥をりあはれなる老のねざめに

郭公入夜琴

待ちよわり引きたゆむ夜のつま琴になく音そへよと訪ふ郭公

よひ〳〵のかたらひ人となりにけり琴の音さそふ山ほとゝぎす

早苗

たに河の水せきいるゝ麓田は雨も待ちあへず早苗とりけり

採早苗

早苗草はこぶたもとや朽ちぬらむしづくの田居の五月雨の頃

つるの郡の早苗を

早苗とるつるの郡のさと人は千世のはつ穂の秋や待つらむ

なぎ

垣つ田のさなへと共にうゑこなぎ花に咲きなば又もとひ來む

刈菖蒲

菖蒲葺くけふのためしを過さじと賤はよどのにおり立ちにけり

○夜ぶかき　夜が更けてゐるに雲の深いをかけた。拾遺集「いづ方に鳴きてゆくらむ時鳥淀の渡りはまだ夜ぶかきに」
○おちゆく月　一本「おぼめく月」
○おもほえず　覺えず。思はずふと。
○待ちよわり　待ちわびて堪へられなくなつて。
○つま琴　琴。
○かたらひ人　話相手。
○しづく　常陸新治郡志筑村。雫の滴る田の意にかけた。
○つるの郡　甲斐國都留郡。鶴を言ひ掛けて千世と緣語。
○なぎ　水葱。鴨舌草。こなぎともいふ。
○垣つ田　圍ひの内にある田。
○さなへ　早苗。さは接頭語。
○うゑこなぎ　植小水葱。植ゑてあるこなぎ。
○菖蒲葺く　五月五日節供に菖蒲を軒端にさす。
○よどの　山城久世郡淀野。

君が代のながらの濱のあやめ草命つぐてふためしにぞ引く

雨中菖蒲

五月雨にぬるとも引かむあやめ草あやなくけふを過さましやは

節後菖蒲

こもり江におふるあやめの根をふかみ千世のためとや引き殘しけむ

夏夜

夏の夜はむすぶあやめの枕だにねながき名をばかるかひもなし

たちばな

そことなくかをるもうれし橘のはなちる里のあけぐれの空

橘のはなちる頃は木のもとの苔路の露も香ににほひけり

盧橘薫風

おもほえずすだれうごかす夕風に袖の香たどる軒のたち花

風揚盧橘芳

たちばなのにほふ軒端は吹きたゆむ風のひまさへたゞならぬかな

橘薫袖

もゝしきや花たちばなのおひ風に右のつかさの袖かをるなり

○ながらの濱　長柄は攝津。君が代の長さつゞけた。

○あやなく　わけがわからず、むやみに。

○こもり江　蘆など茂つて隱れて見えぬ入江。

○根をふかみ　根が深いので。

○あやめの枕　五月五日菖蒲を枕の下に敷くのをいふ。一說菖蒲を五六寸に切つて兩端を紙縒りで結んで蓬をさす枕。

○ねながき　根に寢をかけた。

○かる　刈ると借るをかけた。

○あけぐれ　明闇。夜が明けかゝつてまだ闇いのをいふ。

○袖の香たどる　袖がよい香に匂ふのでその香を尋ね求めると軒端の橘である。

○もゝしき　內裏。皇居。

○おひ風　香を傳へ來る風。

○右のつかさ　右近衞の官人。紫宸殿の前に左近の櫻に對して右近の橘がある。玉葉集「忘れずよ右のつかさの袖ふれし花橘や今かをるらむ」

夜橘

橘のはなちる宿に一夜ねむしのぶ昔の夢やむすぶと

曉更廬橘

たちばなにかたしく袖ぞかをるなるいつも寐覺のかからましかば

廬橘子低

橘のはなの露そふ葉がくれに實さへかをれる雨の夕ぐれ

夏船

橘の小島が崎のおひ風に棹さす袖も香にぞにほへる

あふち

村雨のなごりの露もにほひつゝ散るやあふちの花の下かげ

藥獵

いめたつる夏野の若葉ふみしだききそひがりする丈夫のとも

霖

さみだれに爪木の道も絶えにけり谷の岩ばし水こえしより

閑中五月雨

訪はれぬにならひし宿は五月雨のあままありとて誰をまつべき

○しのぶ昔　古今集の「さ月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」から橘は昔を忍ぶ物とした。新古今集「橘の匂ふあたりのうたゝ寢は夢も昔の袖の香ぞする」

○かたしく　片袖を敷いて獨寢をする。

○かからましかば　この通りであつたらばどんなに良からうに。

○廬橘子低　蜜柑の實がたれさがつてゐる。

○實さへ　實までが。萬葉集「橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいや常葉の樹」

○橘の小島が崎　山城宇治の宇治橋の西。

○おひ風　追風。行く方へ吹く風。

○あふち　樗。楝(せんだん)の木。

○藥獵　古、四五月頃山野に出て藥草を採集するこど。又藥用の鹿の若角などを取るこど。

○いめ　射手のむれ。

○きそひがり　藥草などを競ひとるこど。

○爪木の道　薪をとりにゆく道。

○訪はれぬに云々　人から訪問されないことになれた家。

○あまま　雨の晴れ間。

旅泊五月雨

五月雨に日數ふる江のむやひ舟棹さへなみのしたに朽ちにき

さみだれの雨につなでも朽ちはててみを引きわぶるよどの川船

五月雨はれ間なき頃友だちの詣でこぬをうらみて

つれ〴〵を何にすさめむ五月雨のふりはへてとふ人しなければ

五月雨晴

さみだれに板井の水はましにけりこよひや月のかげをやどさむ

五月ばかり梅がやにまかりて

花さかむ春をぞちぎる五月雨のあめの名におふうめの下かげ

水鷄

あやめ草おふる野澤のみごもりに聲あらはれて鳴くくひなかな

水鷄何方

柴の戸は明けながらねし夏の夜にたゝく水鷄やいづこなるらむ

曉水鷄

まきの戸をたゝけばやがて明くる夜の水鷄は人をはからざりけり

夏月

○ふる江　古江に日數經るをかけた。
○むやひ舟　繋ぎ合はした舟。
○つなで　舟の引き綱。
○みを　水脈。舟の通ふ水路。
○何にすさめむ　何によつて慰めようか。
○ふりはへて　わざ〳〵。五月雨の降るをかけた。
○板井　板で圍つた井。
○梅がや　相模鎌倉化粧坂の下梅が谷。
○あめの名におふうめ　五月雨を梅雨といふ。
○みごもり　水の中に入つて隱れてゐること。
○たゝく水鷄　水鷄の鳴く聲は戸を叩く音に似てゐるのでいふ。
○まきの戸　檜や杉の木の戸。
○やがて　間もなく。
○明くる　夜の明くる。戸をあける意をかけた。
○人をはかる　人をだます。

暑さをも忘るゝつまとなりにけり軒にまちとる夏の夜の月

山の端は霞もきりもへだてねど若葉にくもる夏の夜の月

短夜月

さらぬだに明けやすき夜を月影の待たれて出づる事なくもがな

水上夏月

ゆく水によどむ間もなき夏の夜の月は冰といかで見ゆらむ

山家夏月

涼しさのいづこはあれど山里はしみづに月のかげやどる頃

竹亭夏月

くれゆけば月と風とをやどしつゝ夏をわするゝ窗のむら竹

夏月涼

棹させば夏をわするゝ夕河に冰を碎く波の月かげ

夏の夜月あかし

心さへはれゆく夜のすゞしさは風こそ月の光なりけれ

なでしこ

賤のをが草にやつるゝまがきにもあはれは添へつなでしこの花

○忘るゝつま　忘れるてがゝり。

○さらぬだに明けやすき　只さへ夏の夜は明け易い。月待つといふ事がなくてさへ明け易い。

○よどむ間もなき　流れる水の面に淀む間もなく早く傾く月。

○いづこはあれど　何處と取りたてる事なく何處も彼處もすべて涼しくよいが就中。

○月と風云々　竹に月影が映じ風が吹いて竹の葉が鳴つて。

○冰を碎く　波に映る月影をいふ冰を碎くと言て夏を忘れるに對した。

○あはれは添へつ　興趣を加へた

なでしこの花咲きそめたり

かつ〳〵も咲きそしめより常夏ににほはむ花は朝にけにみむ

なでしこの花さかりなるを見て

常夏のたゞ一時に春秋のはなの匂ひをあつめてぞ咲く

愛瞿麥

宵の雨のなごりいかにと露にさへ心おかるゝ常夏のはな

なでしこのさけるを人の許へやるとて

ちらぬ間を見つゝすさめよ常夏のとこめづらしき花ならずとも

夏草

なつ草に野中の水はうづもれぬもとの心をたどるばかりに

秋ちかきのぢの草むら露さへもむすぶばかりに早なりにけり

草花先秋

いつしかと秋のちぐさの花かずもなかばみえ行く夏の野邊かな

千古のもとより末利花一もとおこせたるをよろこびて

めづらしなたゞ一本のまりの花あまりなるまで香こそにほへれ

蓼

○かつ〳〵　ぼつ〳〵片はしから

○常夏　なでしこをいふ。いつもかはらずの意をかけた。

○朝にけに　毎朝々々。

○露にさへ心おかるゝ　露さへも氣にかゝる。

○見つゝすさめよ　見つゝ慰み弄べよ。

○とこめづらしき云々　永久に愛らしい花でないにしても。

○もとの心云々　古今集「いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞ汲む」

○末利花　茉莉であらう。

からきにもなるればなれて過す世にたではむ蟲を何かとがめむ

百合

なつの野に誰をやさしとしのぶらむ葉がくれに咲く姫ゆりの花

鵜河

かつら人鵜河たつとや波のうへにみだれて見ゆる瀬々の篝火

折こそあれ月のかつらの里人もやみをぞたのむ鵜河たつとて

峯照射

かた分けて鹿のたちどや尋ぬらむみねにほぐしの影そはり行く

所々照射

明けやすき夜をやあらそふ五月山ほぐしの光ところせきまで

夏蟲

おろかなる身にはたぐへむ夏蟲のむすぶ冰もしらぬならひは

螢

風さそふしののを笹にちる露のなごりおぼえてとぶ螢かな

澤螢

なつ蟲のかげはあまたになりゆくや淺澤水のそこ見ゆるまで

○たではむ蟲　俚諺「蓼くふ蟲もすき〴〵」文選「僕（中略）習二蓼蟲之忘一レ辛。」

○やさしと云々　恥かしいといふので隱れる。

○かつら人　山城國桂の里人。

○鵜河たつ　鵜に魚を捕らせる人を立たせて鵜飼をする。

○照射　獵人が夏夜火串に松明をともして鹿が之れに近よるのを射殺すこと。

○かた分けて　方々に分けて。

○たちど　立つ處。をる處。

○ほぐし　照射の松明を夾む木。

○ところせきまで　場所も狹いほど一ぱいに。

○夏蟲云々　夏だけで一生を終る蟲は冬の冰を知らず。井の中の蛙と同じ意。莊子「夏蟲不レ可三以語二於冰一。」

瀧邊螢

落ちたぎつ流るゝ水のしら玉に光をそへて飛ぶほたるかな

くさむらのほたる

風さそふ夏野の草のたもとよりつゝみもあへずとぶ螢かな

螢似露

とぶほたるはかなき露と見えながら何故消えぬ思ひなるらむ

深夜螢

うきことをますだの池にとぶ螢よたゞおもひにこがれもぞする

晩夏螢

みそぎ河しのにをりはへほす袖の露とみだれてとぶ螢かな

ある曹司のまへをわたりけるに「よるは螢の」などいひ出しければといへることを

玉だれの光へだつる夏むしは誰ゆゑ身よりあまる思ひぞ

大ゐ河の夏

とぶほたる瀧つ岩間をながれ來てとなせの波に影ぞくだくる

蚊遣火

○落ちたぎつ　高い所から落ちてわき上つて流れる。
○つゝみもあへず　包みきれなく
○何故消えぬ思ひ　どうしてこの物思ひが消えないのか。思ひのひに螢の火をかけた。
○ますだの池　大和高市郡久米の南にあつた池。憂き事を増すにかけた。
○よたゞ　夜ぢう。終夜。
○みそぎ河　神事の時河原に出て罪穢を淨める式をする川。
○しのにをりはへ　六月祓の時贖物として出した衣を篠に打掛け麻の葉で水を灌ぎ淸めるので、篠は掛けひろげる意。しげく頻りに長く衣を干しつゞける意をかけた。新古今集「河社しのにをりはへ干す衣いかにほせばか七日ひざらむ」
○よるは螢　古今集「明けたてば蟬のをりはへ鳴き暮し夜は螢のもえこそわたれ」
○玉だれ　玉で飾った簾。
○となせ　戸無瀨。古歌では嵐山の邊大井川の瀨の一をいふ。

いぶせさをよその見るめも苦しとや絶え〳〵たつる賤が蚊遣火

明けゆけどまたもをりたく蚊遣火に猶夜をのこす賤がさゝぶき

かやり火を見て

をり〳〵に蚊遣のけぶりたきけつや賤も心を月によすらむ

蚊遣火に賤はふせやのいぶせさをおもひくらべて夜やあかすらむ

蓮

はちす葉の上とのみやはあだに見む露こそ人の世のたぐひなれ

池上蓮

池水のこゝろ清さもあらはれつ濁りにしまぬ花のさかりは

池の蓮をよめる

影うつす池の鏡のきよければ葉がくれにさく花もみえけり

氷室

大君の御代ながら坂の氷室もりいくとせ夏をよそに住むらむ

千世かけて消えぬためしと氷室守松が崎には住みならしけむ

夕立

二子山みねに北行く雲見えてゆふだちすなり蘆の海づら

○いぶせさ　蚊遣火の煙つてうるさいのを賤が家のむさくるしく厭はしい意にかけた。
○よその云々　他から見てゐても見ぐるしいと思つたのか。
○さゝぶき　笹の葉で屋根を葺いた家。
○たきけつ　焚いたり消したりするのは。
○おもひくらべて　蚊遣の煙つたのと家の煙つたむさくるしさとを思ひくらべて。
○あだに見む云々　徒らに見過してしまふべきであらうか、露のはかないのは人生である。
○濁りにしまぬ　古今集「蓮葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉と欺く」
○氷室　古昔冬の氷を夏まで貯へおいたむろ。
○なが坂　山城愛宕郡。丹波國に通ずる所。君が代の長にかけた。氷室のあつた所。堀川百首「君が經む御代長坂の氷室には埋む氷のとけぬなりけり」
○夏をよそに　夏を知らずに。
○松が崎　山城愛宕郡下鴨の北。氷室があつた。堀河百首「夏の日も涼しかりける松が崎これや氷室のわたりなるらむ」

夕立晴

かくながら月や宿さむ夕だちのなごりとゞむる玉ざゝの露

蟬

吹きおろす松のあらしにたぐひ來て秋おもほゆる蟬のもろ聲

瀧邊蟬

落ちたぎつ早瀬の波にこたへつゝ梢にむせぶせみのもろ聲

たき川の岩こす波にさそはれて峯より落つる蟬のもろ聲

あふぎ

うちもおかずとるや扇のこむらさき誰がゆかりとて袖にならせる

秋はとくあふぎの風にかよひけり袂に月のかげをやどして

閨扇風

なつかしき香にこそ風もにほふなれ誰にこがれし閨の扇ぞ

泉

袖ひぢてむすぶいさらゐさら〳〵に夏とはえこそ思はざりけれ

泉のまへのすゞみ

すゞみすと山井の水をいくむすび結べどもなほあかぬ今日かな

○かくながら　このまゝで。
○玉ざゝ　篠の美稱。玉は露の緣語。
○たぐひ來て　一しよに來て。
○おもほゆる　思ひ出される。
○もろ聲　諸共に出す聲。
○むせぶ　波の緣語。
○落つる　蟬の聲が高い所から急に下へ響き來るをいふ。峯より落つる瀧にかけた。
○こむらさき　濃紫。
○ゆかり　緣故のあるもの。紫をゆかりの色といふ。
○こがれし　誰に戀ひ慕つたに扇に香をたきしめたの意をかけた。
○いさらゐ　水の少ない井。さらさらの序。
○さら〳〵に　少しも。
○いくむすび　幾たびも手に掬ひとる。

但有泉聲洗我心

おく山の岩垣しみづ聲なくばこゝろの友となにを聞かまし

水風晩涼

夕風のさそはざりせば池水のこゝろに友をわするべしやは

近水凉生

蓮葉の露ばかりふく夕風もなぎさの宿は先づぞすゞしき

納　涼

風さやぐ葉廣がしはの下すゞみ露ちる袖はぬれぬともよし

樹陰納涼

すゞしさを待ちとる袖に露ちりて苔のむしろを拂ふ松風

百首歌の中におなじ題を

涼しさのいづこはあれど夏はたゞ夕風そよぐならの下かげ

松下追涼

山松のひゞきぞ波にまがふなるあつさをあらふ心地のみして

すみだ河に舟をうかべて

夕川のすゞしさとめてこぐ舟は水の心のゆくにまかせむ

○岩垣しみづ　岩石でとり圍んだ中から流れ出る淸水。

○なぎさ　渚。みぎは。なぎは風の緣語。

○風さやぐ　風がさや〳〵と音する。風そよぐ。

○ぬれぬともよし　濡れてもよい濡れてしまつてもよい。

○苔のむしろ　苔が筵のやうに一面に生えてゐるところ。

○いづこはあれど　何處もかしこも涼しく快くあるけれどこゝに。

○風そよぐならの下かげ　風がそよそよ吹く楢の樹かげ。新勅撰集「風そよぐならの小川の夕暮はみそぎぞ夏のしるしなりける」

○とめて　尋ね求めて。

○みづえ　瑞々しい若い枝。

○夏神樂　六月祓の時に奏する神樂。川邊に榊を立て篠竹で棚を作り神供を列ねて祭る。

○荒和祓　六月祓。

○眞袖　兩袖。

瀬倉の君の深川のみたちにて

風すぐる楓がしはの下露にぬるゝたもとは夏なかりけり

樹陰夏風

衣手もぬるゝばかりにおほゆるやみづえ吹きおろす木々の下風

夏神樂

なつかぐらあなおもしろし椎柴の下ゆく水に月もやどれり

荒和祓（あらにぎのはらへ）

御祓河瀬々にながるゝすがの葉のあなすが〱し水の白波

祓麻

つかさ人きよきなぎさにぬさ取るやゝがていつきの宮うつりとて

はらひすと眞袖に波をかけてけり瀬々にみだるゝぬさの追風

琴後集巻三

秋歌

山家立秋

松のあらし谷のかけひも今朝よりは秋たちぬとや音かはり行く

田家立秋

けさ見れば色づきそむる我が門のわさ田よりこそ秋はおぼゆれ

幽栖秋來

跡たえし庭のをざゝの露ばかり秋をつけ來て初風ぞ吹く

あれたるやどりに秋來る

おきそむる露をよすがに秋は今朝むぐらの門を先づぞ問ひける

森初秋

みたらしの岩うつ波も音かへつたゞすの森の秋の初風

秋來水邊

吹く風も聲うちそへて西河や秋に入江の波のすゞしさ

○かけひ　掛樋。筧。掛け渡して水を通す樋。音といふは掛樋を流れ落つる水の音。

○わさ田　わせだ。早稲の田。

○跡たえし庭　人の足跡も絶えた來る人のない庭。

○露をよすがに　露をよるべにして。

○むぐらの門　葎の茂つた荒れた家。

○みたらし　御手洗川。神社の近くに流れ、みそぎをしたり手水をつかふ川。

○たゞすの森　山城下鴨村賀茂川高野川の落ち合ふ所。

○西河　桂川をいふ。

○うちさやぎ　うちそよぎ。
○穂にあらはれて　人目につくやうに現はれて。
○風の音のみ云々　風の音だけは人目について現はれ出た。荻はまだ穂が出ない。
○ものがなしきを　物悲しくあるのに。
○憂きこと　憂き事を六月晦の祓に祓ひ捨てたと思つたのは如何してそんな思ひ違へをした事か。
○瑞穂　瑞々しい若い稻の穂。
○信樂　近江甲賀郡。
○あさけ　朝明け。夜明け方。
○露もみがてら　露を見ながら。露を見もしかたがた。
○月のみふね　月を天の川を漕ぎゆく舟に譬へた。
○よそひ　舟よそひ。艤裝。
○星の逢ふ夜　七月七日の夕に牽牛織女の二星が天の川で相會するといふ傳說からいふ。

初秋風

今朝ははや軒のした荻うちさやぎ穂にあらはれて秋風ぞ吹く

初秋木

散りそむる桐の一葉に秋來ぬとつぐるや風の心なるらむ

早秋

秋たつやまだうらわかき荻原は風の音のみ穂に出でにけり

秋たてばものがなしきを憂きことはみそぎにすつと何思ひけむ

早秋風

けさよりは瑞穂の秋のはじめとや稻葉より先づ風そよぐらむ

早涼

信樂(しがらき)の外山のあさけすゞしきは夜の間の雨や秋をさそへる

夕かげに露ふきむすぶをざゝ原よは秋なれや風のすゞしき

山家秋

月すまばまたも問ひ來む山里の稻葉にやどる露もみがてら

兼待七夕

天の河月のみふねもよそひせよ星の逢ふ夜はちかづきにけり

いは牀のちりを拂はぬ夜はもなし天の河とに秋立ちしより

久待七夕

いつしかとさく七草の花かずをよみてや星のあふ夜しのばむ

七夕

あまの川やそ瀬の月はくまもなしはや漕ぎ出でよ妻むかへ船

なぬかの夜

棚機にこよひやかさむ七くさをみながらうつせ花ずりの袖

二星適逢

うらもなく逢ふとはすれど棚機の雲の衣よなど間遠なる

星河秋久

天の河とほき神代のむかしより秋をせにこそ名はながれけれ

七夕濱

あまの子が刈りしみるめの濱づとも今宵や星に先づ手向くらむ

七夕橋

今宵あけばもみぢの橋もいたづらにかけはなれてや戀ひ渡らまし

七夕馬

○いは牀　岩の平らな處。
○天の河と　天の川の川水の落ち合ふ所。

○よみて　數へて。

○やそ瀬　多くの瀬。
○妻むかへ船　妻を迎へる舟。萬葉集「彦星の妻迎舟漕ぎづらし天の河原に霧の立てるは」
○みながら　悉く。
○花ずりの袖　萩や露草などの花で色を摺り出した衣の袖。

○うらもなく　心隔てなく。うらは衣の緣語。
○など間遠なる　どうして一年一度といふ間が隔たるのか。
○秋をせに云々　秋を二星が逢ふ機會の時として名が後代まで傳はつた。せは機會、折などの意。河、瀬、流れけれは緣語。

○濱づと　濱から家へのみやげ。
○もみぢの橋　古今集「天の川紅葉を橋に渡せばや棚機つめの秋をしも待つ」
○かけはなれ　遠く隔たり離れて　かけは橋の緣語。
○戀ひ渡らまし　戀ひしつゞけるだらう。わたるは橋の緣語。

こよひしも雲居にかける駒もがなふね待ちかぬる天の河とに

七夕管絃

絲竹のつまおもふてふしらべさへ星の逢ふ夜はおはれそへけり

海邊七夕

星合の濱の海士人うちつけにみるめや今宵先づ手向くらむ

七夕薄

こひ／＼てあふよの星にならへばや尾花の袖も露けかるらむ

七夕櫛

たなばたの今宵とりみむさし櫛のさしもたがはじ絶えぬ契りは

織女雲爲衣

雨となる袖のわかれに棚機の雲の衣もうしとやは見ぬ

乞巧奠

棚機の秋くるからによりあはむ心とりてぞ絲は手向くる

七夕七首

七日女郎花をうゑよとて人のおこせたれば

をりにあふ名もなつかしき女郎花たなばたつめにたぐへてを見む

○絲竹　管絃。音樂。
○つまおもふ　想夫戀。
○星合の濱　伊勢一志郡星合。今は鵲村。雲津川の河口一帶の海濱
○うちつけに　ぶしつけに。
○ならへばや　倣ふからであらうか。
○さし櫛の　さしもといふ爲の序
○さしも　さも。げにも。よくも。さし櫛をさすにかけた。
○袖のわかれ　男女纏ひかはした袖を解きはなして別れること。
○うしと云々　つらい悲しいものと見ないだらうか、悲しいものと思ふだらう。
○乞巧奠　きこうでん。七夕に女子が織女星に物を供へ手藝の巧みになることを祈る祭。
○秋くるからに　秋來るによつて繰るにかけて絲の緣。
○よりあはむ　二星がより合ふ。縒りあふにかけて絲の緣。
○たなばたつめ　織女星。機織る女の義。
○たぐへてを見む　よそへて見よう。

七日けふの空のけしきいかゞ見るといひければ

天の河ゆふゐる雲もうちつけにたなばたつめの袖かとぞ見る

たなばた祭したる所に籬のもとに男たてり

たなばたに今宵手向くるから絲のよりあふ末や誰むすぶらむ

なぬかの夜琴ひく女あり

棚機の心をくみてひく琴やつま思ふてふしらべなるらむ

七日のゆふべをとこあまたゐて天の河をみたり

もろともにゆきて見ましを天の河うきぎのかよふ道したえずば

七日女ども空を見る

たなばたのあふ夜はれ行く空の月よそに見るさへおもなかりけり

七日の夜曉を惜しむ

曉の空かきくもれあまの川あさ瀬たどらば君かへらめや

七首

七日の夜秋の七くさをよめる

たなばたに今宵やかさむ秋萩の花ずり衣いろあせぬ間に

天の河かはべの尾花かたよりに靡くも星の心をやとる

○うちつけに　いきなり。ちよつと見て。
○よりあふ　絲の縒り合ふに男女のよりあふをかけた。
○むすぶらむ　絲を結ぶと男女のなかを結ぶとをかけた。
○つま思ふ　想夫戀。但し本來は相府蓮の音通から轉じたといふ。
○うきぎ　舟又は筏をいふ。
○おもなかりけり　きまりがわるい恥かしい。
○空かきくもれ　空が曇つて暗くなれよ。
○あさ瀬たどらば　淺瀬を尋ね求めて行つたならば。
○君　牽牛星。
○花ずり衣　萩や露草で色を摺り出した衣。
○心をやとる　心をとるのか。

たなばたの袂おぼえて秋風のふきうらがへす庭のくずはら

たなばたの袖のにしきもかくこそと見るめもあやに匂ふなでしこ

今宵しもたなばたの手にあえよとて誰たちぬへる藤ばかまぞも

棚機のおもかげ見せて澤水にすがたをうつす女郎花かな

ほし合のなごりをそれとしのべとや露にしをれし朝がほの花

なぬかの夜あかつきによめる

天の川ふけゆく夜はを見つゝゐて曉露に袖ぬらしけり

七夕戀

あふことのまれなる中よいとせめて天つ妹背にたぐはましかば

七夕別

別れてはこともかよはぬ天の川ふみ月の名ぞそらだのめなる

わかれ惜しむおきその風に霧たたばせめてやすらへ天の河船

ふみ月八日

棚機のわかれよなどか年に待つ心長さにならはざるらむ

閏月七夕

いたづらに袖ぬらせとや棚機のあふ夜の名のみ立ちかさぬらむ

○袂おぼえて　袂を聯想されて。
○秋風の云々　秋風が吹いて葛の葉の裏をかへす。
○見るめもあやに　目もまごつくばかりに美しく。
○たなばたの云々　棚機つめの手ぎはに似よ。
○ほし合のなごり　七夕の二星が逢つた後朝の別れ。
○いとせめて　甚だ切に。
○天つ妹背　天の夫婦。牽牛織女
○ふみ月云々　ふみ月は七月。言語もかよはぬからふみ(手紙)月といふ名もあてにならぬ。空だのめは頼みに思はしておきながらかひのないこと。
○おきその風　神の風。
○霧たたば　萬葉集「おほぬ山霧たちわたるわが歎くおきその風に霧たちわたる」によつた。
○やすらへ　ためらへよ。
○年に待つ　一年がゝりで待つ。

荻

山里はいこそねられね松の聲をやむとすればをぎの上風

袖のうへに今朝めづらしき秋風のなど荻の葉にならし顔なる

よひ／＼になれていをねぬつまなれや秋風やどるのきの下荻

荻風

契りおく人しもならへ秋といへばぬる夜もおちぬをぎの上風

秋風荻の葉をふく

あはれとも憂しとも人の心より荻ふく風の身にやしむらむ

萩

宮人の袖のなごりやとゞむらむ今もにほへりまのの萩はら

閑庭萩

山里やとはれぬ庭のま萩原せめてをじかの跡だにもがな

さをしかも訪ひきぬべくぞなりにける荒るゝもうれし庭の萩原

雨にぬれて萩の花を見る

よしさらば衣にほはせ眞萩はら分けゆく袖は雨にぬるとも

千蔭の家に歌よみける時、萩露を

○いこそねられね　いねられず。寢られない。
○をやむ　止む。
○ならし顔　物なれた樣子。
○いをねぬ　いねぬ。寢ない。いをねぬつまは寢られない種。つまは端の意をかけて軒の緣語。

○ぬる夜もおちぬ　寢る夜も缺かさぬ每夜。

○人の心より　心がもとで身にしむのであらう。

○宮人の袖云々　金葉集「白菅の眞野の萩原露ながら折りつる袖ぞ人な咎めそ」によるか。
○まの　眞野は攝津武庫郡。また近江にもある。萬葉集「白菅の眞野の榛原心ゆも思はず君が衣にすりぬ」白菅の野で遠江にもいふ。

○衣にほはせ　萩の色を衣にしませよ。

秋はぎの名におふ園の夕露に袖にほはせてけふは遊ばむ

萩の露おもし

故郷のよもぎがもとの小はぎ原はらはぬ露を哀れとぞ見る

をみなへし

人ごとのさが野にたてる女郎花風さそふともなびきだにすな

薄

旅まくらかりねのなごり跡見えている野のすゝき結ぼほれつゝ

をばなさへ心ありげに見ゆるかな秋としいへば袖の露けき

庭薄

かくながら月をもやどせ庭のおもの尾花が袖に露おもるなり

朝顔

露の間にうつろふ花よさもあらばあれ松も薪となる世なりけり

朝がほを見て

朝がほのうつろひやすき花にしもはかなかる世をたぐへてぞ見る

草花色々

いろ／＼にかさぬる袖かをとめ子がすがたの野邊の花のちぐさは

○はぎの名におふ園　加藤千蔭は芳宜園（はぎぞの）と號した。

○人ごとのさが野　人の言葉のさがない。人の口のわるくうるさい。嵯峨野をかけた。

○いる野　山城乙訓郡。萬葉集「さを鹿の入野の薄初尾花いつしか妹が手枕をせむ」

○露の間　朝露のある間暫しの間露の間にうつろふ花は和漢朗詠集「松樹千年終是朽。槿花一日自爲レ榮。」によつた。

○さもあらばあれ　それならそうしておけ、まゝよ。

○松も薪　文選古詩に「古墓犂爲レ田。松柏摧爲レ薪。」

栽秋花

うつし植ゑて野邊のちぐさの花かずを思ひ殘さぬやどの秋かな

蟲の音も小はぎが花も夕露を待ちえがほなるませのうちかな

月照草花

すむ月をあらはなりとやをみなへし尾花が袖に面がくしせる

野花留客

秋の野にとまるこゝろはさをしかにわれおとらめや萩が花妻

をみなへしなまめく野べにあくがれて誰もこゝろを花になすらむ

人々秋の野に遊ぶ

からにしきたたまくをしみ秋の野の萩のあそびにこの日くらしつ

おもふどち秋野の花にたちまじりくれなば蟲の音をも尋ねむ

小鷹狩

眞萩ちり尾花みだれて狩人の袖ふきかへす秋の夕風

いなづまのいそがしきを見て

稻妻のひかりにも見よやどるまはたゞ暫しなる露の此の世を

露

○ませ　ませがき。籬。目のあらい低い竹木の垣。

○あらはなりとや　餘り露骨に月が照らしてきまり惡いといふのか

○面がくし　恥ぢて面をかくす。

○萩が花妻　萩の花。常に鹿が萩に親しんでゐる故に妻に見立てた

○からにしき　立つの枕詞。唐錦を裁つにかけた。

○たたまく云々　唐錦をたゝむが惜しいに、唐錦のやうに草花の咲いた野を立つのが惜しいので。古今集「思ふどちまとゐせる夜は唐錦たたまく惜しきものにぞありける」

○小鷹狩　秋の鷹狩。小鳥を狩るので冬の大鷹狩に對していふ。

花ににほひ月をやどして秋の野の哀れそへよとおける白露

風をまつ草葉の露よいつまでか我が身のよそに思ひおくべき

蜘のいに露のかゝれるを

いとすゝきなびくと見しはさゝがにのすがきに露のおもるなりけり

蟲聲

ほのかなる末野の月になく蟲はいづこに草のまくらをかとふ

蟲の音いとしげし

露おもるむぐらよもぎの夕かげにところせきまで蟲の音ぞする

寺靜かにして蟲をきく

とはれぬを心とすめる室(むろ)のとに人まつ蟲やたれにならへる

雨中蟲

よもすがら窓うつ雨にこたへつゝしめやかに鳴くきりぎりすかな

牀蛬

おきそはる霜の夜牀になく聲もむすぼほれゆくきりぎりすかな

松蟲

あはれさのいづれはあれど故鄕に人まつ蟲の月になく聲

○花ににほひ　花の色つやをうつし出し。
○我が身のよそ云々　自分に關係のないことと思つて打ちすておくべきであらうか、我が身もやはり草葉の露である。
○さゝがにのすがき　蜘蛛のかけた網。すがきはかけた網(す)。

○ほのかなる末野　遠くかすかな野のはて。
○草のまくら　旅寢。

○とはれぬ云々　人に訪問されないのを本來の望みとして住んでゐる室の外に。
○人まつ蟲　人を待つと松蟲とかけた。

○むすぼほれゆく　心がふさいでゆく、聲が結ぼつてすら〱しなくなる意をかけた。
○あはれさ云々　どれもこれも哀れ・はあるが中にもあはれ深く感じられるのは。

鹿

夕風に眞萩ちる野のかり枕しかの音きけばいこそねられね

野鹿交萩

眞萩はら花ちる頃はさを鹿の鳴く音さそはぬ夕風もなし

鹿聲近

わがやどのものと聞くこそあはれなれ枕の山になく鹿の聲

秋田

心とくかりし早田のひつぢさへ穗に出でぬべく見ゆる秋かな

山田もる賤のかりほにおくかびの煙とともに立ちあかすらむ

穗に出でぬをだの穭やうしと見むおろかおひなる身のたぐひとて

田家興

月きよきあら田の原のふせ庵にしかの音聞きて今宵あかさむ

田家秋晩

人かへる夕をおのが時とてや落穗たづぬる田のかしどり

稻舟を

みなと田に朝夕かよふいなぶねはたゞかりしほにまかせてぞ漕ぐ

○眞萩　まは美稱。
○かり枕　假寢。旅寢。
○枕の山　枕邊に近い山。
○心とく　氣はやく。
○ひつぢ　稻株の刈つたあとから生える芽。
○かりほ　假廬。假初に作つた小屋。
○かび　鹿火。山里で猪や鹿など追ふために假小家に居て焚く火。一說、蚊火。田の番人が焚く蚊遣火とも。萬葉集「足引の山田守るをぢが置く蚊火の下こがれのみわが戀ひ居らく」
○穗に出でぬ　心に思ふばかりで表に現はれて出ない。稻が穗になつて實のらないのをかけた。
○おろかおひ　穭(ひつぢ)の別名愚生ひをかけた。
○ふせ庵　低い假小屋。
○落穗　刈つたあとに落ちた穗。
○稻舟　稻を積んで運ぶ舟。
○みなと田　港にある田。
○かりしほ　稻を刈るべき頃あひ汐にまかせて漕ぐとかけた。

秋眺望

たかまどの野邊のうき霧とだえして尾花につゞく松の村立

旅宿秋曉

夢さむるさゝの篠屋のかり枕あかつき露にぬれぬ夜もなし

みやこ人とはばかたらむ有明の月にふしみの里のかりねを

秋煙

かりすてし山田にのこるもくづ火の煙さびしき秋の夕暮

秋聲

あしの葉も聲うちそへて難波がた夕しほさわぐ浦の秋風

秋夕

くれぬ間はむしの音うとき淺茅生に月待つほどぞ秋は寂しき

秋夕風

吹く風はいつとなけれど荻の葉の夕ぞわきてこたへがほなる

秋夕思

大かたに秋をしらする夕露のなどわが袖をおき所なる

秋夜

○たかまど　大和添上郡高圓。

○さゝの篠屋　笹の葉で屋根を葺いた家。

○かり枕　假寢。旅寢。

○ふしみ　山城紀伊郡伏見に臥しに見る意をかけた。

○もくづ火　藻屑をたいた火。

○淺茅生　まばらに茅の生えた所

○いつとなけれど　何時と取りわけたことはなく絶えず風は吹いてゐるが。

○大かたに　廣く一般に亙って。

○などわが袖　どうして特別にわが袖ばかりを。

とりの音にまたおどろきつ秋の夜のいくむすびせし夢のなごりを

秋夢

村雨の音にねざむる秋の夜はいくたび夢をむすびかへけむ

秋雨

塵の世の人は知らじなばせを葉に雨の音きくあきの哀れを

月

世のうさも忘るゝ種となるものを老をば月になど歎くらむ

秋といへばかはらぬ友となれ顔にとひくる月を哀れとぞ見る

わきてしもあはれとぞみる山里に月も我が身もすみかへてより

やちまたに塵をなたてそ車のわれとは月の曇らぬものを

おのづから須磨も明石もおもかげにうかぶは月の夜頃なりけり

くもる夜の月

もれ出づる月やいづこといく雲にあからめもせぬ秋のそらかな

對水待月

いつしかと月待つほどの池水に先づすむものは心なりけり

見月

○いくむすび云々　幾回も結んだ夢。結ぶは夢みるをいふ。

○ばせを葉　芭蕉の葉。

○老をば月に云々　月を見る毎に老いると歎くのはどうした事か。古今集「大方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの」

○友となれ顔　友達として親しみ馴れたやうすで。

○わきてしも　とりわけて。特に。

○すみかへ　住みかへに月の澄むをかけた。

○やちまた　道が澤山にわかれてゐる辻。

○われとは　月が自分から進んでは。を車の輪を言ひかけた。

○あからめもせぬ　ぢつと見つめてわきめもせぬ。

○先づすむもの　池水の澄む上に月の澄むよりも我が心が先づすみわたる。

ながしとて秋をばたれのいとひけむ月にこゝろの慰むものを

思月

あはれとは月も知らなむしるべなき闇にいくよかたどり來し身を

あらし山の月

山の名のあらしにはるゝ月みればとなせの波に影ぞくだくる

月出山

牀の上にかたしく霜とかつ見れば枕の山に月ぞ出でぬる

初昇月

たちのぼる雲におくれて山のはにかつ見えそむる秋の夜の月

暮天月

木の間よりもるゝ夕の月見れば先づ心こそときめきにけれ

深夜月

更くる夜と知らで月をば見つれどもいつしか袖は露にぬれぬる

曉更月

傾ける影をあはれと見つるかな身のたぐひなる山のはの月

夜々見月

○ながしとて云々　古今集「蛬いたくな鳴きそ秋の夜の長き思ひはわれぞまされる」

○月も知らなむ　月も我を哀れと知つてくれよ。

○枕の山　枕頭近くの山。

○かつ見えそむる　少しづゝ見えだしてきた。

○見つれども　見て居たが。

○身のたぐひなる　わが身と同樣な。自分は老いて齡も傾いた月も山の端に傾いた。

照るをめで曇るを惜しみよひ／＼の月に心をつくす頃かな

舟をうかべて月を見る

はるゝ夜の波にうかぶる河ふねは月のゆくへにまかせたらなむ

河なみに月のゆくへをしたふ夜はつながぬ舟もうれしかりけり

すむ月にこぎゆくかいの雫をばかつらの花の散るかとぞ見る

山館見月

人とはぬ深山の庵の秋はたゞ月こそともと住みならひけれ

かくてのみ月をし友と住みなれむ麓のちりの世をのがれ來て

霧中月

深き夜のあはれは添へつうす霧に光をさまる山のはの月

きりの海を出で來る月や水底にしづめる玉の影と見ゆらむ

海邊月

あし火たく煙を空に吹き消ちて月を見せたるうらの秋風

難波のうらの月

月見つゝなにはの蘆をかりそめの海士となるまで浦馴れにけり

たちかへり難波のことを人とはば月のみみつの浦とこたへむ

○かつらの花　月の影。月の中に桂の木が生えてゐるといふ傳説による。

○月こそともと　月こそ友達であると。

○住み　澄みをかけて月の緣語。

○きりの海　霧がたちこめて廣々として海のやうに見えるのをいふ。

○あし火　葦をたいた火。

○かりそめの　永久でない、一時の蘆を刈るにかけた。

○みつの浦　攝津難波の御津に月のみ見つとかけた。

江月

波にあらふ光を霜と見つるかな太刀つくり江の秋の夜の月

名所月

飛鳥河あすも来てみむ秋の月七瀬のよどにかげやどる頃

播磨がたゑじまが崎にすむ月は影を波間にうつしてぞ見る

舟とめて今宵はこゝにあかしがた名だたるうみの月をこそ見め

さくら河の月

みし春のおもかげかへて櫻川あきはかつらの花ぞながるゝ

橋月

すむ月のよどの繼橋もゝよつぎかくても見ばや波にてる影

舟の路の有明の月

ゆく舟はきり立ちこむる波の上にほの〴〵のこる有明の月

夜やふかき流れやはやき有明の月もおち行くよどの河舟

やんごとなき殿の月の宴に侍りて

玉だれの小簾のひまもる月影も所せきまで照らす夜半かな

月あかき夜人の家のいづみを見て

○波にあらふ光　波に洗ふ月の光
○霜と見　劒を秋の霜といふので太刀造るにかけた。
○太刀つくり江　攝津にあると。後拾遺集「萬世を君が守りと祈りつゝ大刀造江のしるしとを見よ」
○飛鳥河　大和高市郡。萬葉集「飛鳥川七瀬の淀にすむ鳥も心あれこそ波立てざらめ」七瀬の淀は多くの瀬が淀んだ所。
○播磨がた云々　播磨の海から見ると海のかなた淡路島の東北繪島崎が見える。
○うつし　影を水に映すを寫すにかけて繪の緣語。
○あかしがた　播磨明石郡明石浦夜を明かすにかけた。
○名だたる　名立たる。名に立つてある。音に聞えた。
○櫻川　常陸。
○かつらの花　月影。
○繼橋　橋柱を立てて板を繼ぎ渡した橋。よどの繼橋は水の淀んだ所に架けた繼橋。
○よどの河舟　淀河を下る川舟。

すむ人のこゝろ清さもくまれけり月をやどせる庭の池水

幽栖秋月

おもふ友なしとないひそむぐらにも障らず月の影はとひけり

故鄕月

故鄕は板井のしみづ埋もれてしのぶが露に月やどりけり

山家月

かくて世をあきのすさみと人やみむ月ゆゑ山に住みなれにけり

山里にて月の夜都をおもふ

昔みし都のともも月にこそ我がすむ山のあきをしのばめ

都月

玉すだれかゝぐる宿と松の戸とあはれやいづれ秋の夜の月

貴賤憐月

やちまたにすみゆく月の玉すだれ今宵かゝげぬ高殿もなし

緇素見月

ちまたにも夜よしとうたふ聲すなり雲居に月をめづるのみかは

のがるゝものがれえぬ身も塵の世をわすれてむかふ秋の夜の月

○くまれけり　心を酌む、推量される。池水を汲むにかけた。
○むぐら云々　新勅撰集「訪ふ人もなき宿なれどくる春は八重葎にもさはらざりけり」
○板井　板で圍んだ井。
○あき　世を厭きに秋をかけた。
○玉すだれ云々　玉の簾をかけた富貴の家。
○松の戸　貧賤の家。
○夜よし　古今集「月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たずしもあらず」
○緇素　緇は黑衣で僧侶、素は白衣で俗人。
○のがるゝ　塵の世を遁れた人卽ち僧侶。

秋月勝春花

秋といへばいく夜もともと見る月をあだなる花に何たぐへまし

十五夜月

世のことはあかぬならひの埴生にもみちたらはせる秋の夜の月

年毎のくもるならひも忘られし今宵の月よ入るまでは見む

かげやどすいつはの松のいつはあれど秋をなかばにすめる夜の月

わがごとく今宵の月にあくがれていく里人かいを寢ざるらむ

心なきうらわの海士も山がつも今宵の月をたれか見ざらむ

白河少將君のめしける時よみて奉れる十五首の中

こよひとも知らで今宵の月見れば驚かるべきかげにやはあらぬ

限りなきちゞの秋にもあかれじと一夜を分きて月のすむらむ

よしや月かくるならひはあらずともいつを今宵にたぐへては見む

疾しといひおそしと待たむ秋もなし月の桂の花のさかりは

くまもなく思ひこそやれから人もこよひの月をかくや賞づると

なれがほに見るものながら老が身も今宵の月はめづらしきかな

賤がやも光ことなるあきの月玉のうてなやいかにさやけき

○あだなる云々　散り易い心の移り易い花とどうして比べられよう

○埴生　貧人のむさくるしい家。

○あかぬならひ　不滿足ばかり。

○いつはの松　五葉の松。いつはあれどの序。

○いつはあれど　何時も面白くあるけれど特によいのは。

○いを寢ざるらむ　寢ないだらう

○白河少將　松平定信。

○こよひ　八月十五夜の今宵。

○よしや云々　たとひ月が虧けるといふことはないにしても。

○疾しといひ云々　中秋の月は早く來たと云つたり遲いと云つて待遠しく思ふことはない。

○玉のうてな　玉樓。玉で飾つた宏麗なたかどの。白河樂翁公の御殿をさして言つた。

いかばかり言葉の玉をみがくらむこよひくまなき月の光に

年ごとに八月もちの夜半はあやにくに雲のたゝずまひのこゝろねたきを今宵はちりばかりのくまもあらずさるはまづ芳宜園のけはひいかにとてあさぢがもとの露ふみわくればはやく延年千古など來あひてうそぶきあへるにあるじの翁は澄みのぼる影をわがものがほにてうちまもれるも折をかしき夜のさまなり家とじをはじめてふみ子ちえ子などのさやかなる空にあくがれ出でて伊豫簾かゝげながらはし居のあらはなるも今宵は罪なうこそおぼゆれ夜更けゆけば閑中大德の玉もしかずとうたひながらゆくりなうまうで來ぬるも世の外の光そへたる心地してこゝろゆくまとゐになむ

とこしへにかくてぞみまし橘のかげふむ庭にすめる月影

十五首

十五夜月

月夜よし夜よしといひしふる言はかかる夜半にやうたひ初めけむ

月前風

おのづから月の光となりにけり雲ふきはらふ夜半の秋風

○八月もちの夜　八月十五夜。
○たゝずまひ　樣子。
○こゝろねたき　にくらしい。
○芳宜園云々　加藤千蔭の樣子。
○うそぶき　詩歌を詠み吟ずる。
○折をかしき　丁度その折節につけて面白い。
○家とじ　その家の妻を尊んでいふ語。
○はし居のあらはなるも　端の方へ出て女らしく隠れないのも。
○玉もしかず　和漢朗詠集「瑤池便是尋常遊。此夜清明玉不レ如。」
○ゆくりなく　思ひがけなく。
○世の外の光　世間並以外の光、俗世間を脱れた高僧の光。
○橘のかげふむ庭　橘の木の影を踏み歩く庭。芳宜園の主加藤千蔭は橘氏であるから云つた。
○月夜よし　古今集「月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たずしもあらず」

月前露

今宵しも月やどれとや萱の軒草のまがきも露おもるらむ

山月

塵ひぢのなれる山より出でてなどかばかり月の影は澄むらむ

野月

よの常のたぐひとは見じ名にしおふ玉の横野にすめる夜の月

浦月

あしの葉に夕しほこゆる難波がたうらわのたづも月に鳴くなり

花洛月

月にとひ月にとはれてことゝひしもすさみおほかる都人かな

寄月逢戀

おもなさも思ひわすれてあふことを月にとはなど契りおきけむ

寄月恨戀

はれやらぬ空なうらみそ我からの涙に月はくもる習ひを

寄月別戀

いかにしていひなぐさめむ今宵とて月にひかふる袖のわかれは

○塵ひぢ云々　塵あくたから成りたつた山。古今集序「高き山も麓の塵泥よりなりて」

○玉の横野　尾張國中島郡玉野と横野。

○たづ　鶴。

○おもなさ云々　月があかるいので逢ふときまりが惡いことも忘れて。

○月にとは云々　月のある夜に逢はうとは如何して契つたことだらう。

○空なうらみそ　空を恨みるな。

○我からの涙　他人でない自分から事が起つて泣いた涙。古今集「蜑の刈る藻にすむ蟲のわれからと音をこそ泣かめ世をば恨みじ」

○ひかふる　引き留める。

○袖のわかれ　男女纏ひかはした袖を解きはなして別れること。

月下旅泊

袖のうへに苫もる月をかたしきていくよあかしの磯枕せし

月下眺望

六田川きしねの柳散りそめて七瀬のよどに月もへだてず

月下述懐

ともすれば袂の露をそへてけりかたぶく老を月にたぐへて

月下懐舊

月をおもふ友こそ稀になりにけれむかしの秋を誰とかたらむ

月下交友　以上

隔てじとともにまとゐをすが筵くまなき月を心にはして

月前紅葉

もみぢばに今一しほをそへよとや月さへかげを霜になすらむ

月前萩

月みにと訪ふ人あれや夕庭に露もみだれて萩が花散る

月下葛

葉がくれににほふ眞葛の花も見むうら吹きかへせ月のした風

○苫もる月　苫のすき間から漏れて來る月の光。
○いくよあかし　幾夜を明かしたに播磨國明石の地名をかけた。
○磯枕　磯邊にやどり寢ること。
○六田川　大和吉野郡吉野村の北六田の渡で吉野川をいふ。
○きしね　岸根。岸の水に近い所。
○七瀬のよど　多くの瀬が淀んだ所。六田の六に對して七と云つた。
○月にたぐへて　齡の傾いて老となるを月が傾くに比べて。
○すが筵　菅の筵。團欒の筵。すがとする意とをかけた。
○くまなき月　曇りなき月。くまなき(人の心に隱し隔てた所なき)ことを心として。
○一しほ　染汁に一度浸して染めること。
○月さへ云々　月までが影を白く霜として霜に紅葉を染め出させようとしてゐる。
○人あれや　人あればにや。

○なにか云々　何にまぎれるものであらう決してまぎれない。
○月にこそ云々　月を見ると昔の様子もあり／＼と思ひ出される。
○まゝの入江　下總東葛飾郡眞間の入江。
○あはれ云々　あはれ趣があると見ようかそれとも嬉はしいと見ようか。
○花のとぢめ　花のしまひ。頼政集「木枯の風の立つまで綻びぬ菊こそ花のとぢめなりけれ」
○久かたの　月の枕詞。
○月のかつら云々　月の中に生えてゐるといふ桂の木の花を見る。月が花と輝いてゐるのを見ること。古今集「久方の月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ」
○駒迎　古昔毎年八月駒引の馬を左馬寮の使が逢坂の關まで迎へること。
○せたの長橋　近江栗田郡。琵琶湖の流勢田川に架けた橋。
○駒引　古昔毎年八月十五日諸國から馬を貢進すること。
○みまき　御牧。御料の牧場。
○引きわけの使　駒引の馬を院東宮其の他に分け賜はるに與る使者
○みちのく云々　陸奥の荒れた野荒は下のなつきに對照した。

月前遠鐘

はるかなる鐘もなにゝか紛れまし月も心もすみわたる夜は

月前遠情

月にこそおもかげうかべ昔みしまゝの入江の秋のうら波

月前幽情

あはれとやうしとや見ましあばらやのしのぶが露にやどる月影

十三夜月

一とせの花のとぢめと咲く菊にこよひの月をたぐへてぞ見る

久かたの月のかつらの花みればうつろふ秋にならはざりけり

九月十三夜月をもてあそぶといふことを

おもふどちまがきの菊を折りかざし月みる夜半は更けずもあらなむ

駒迎

ふみならすせたの長橋きりはれて波の上ゆく望月の駒

駒引

雲のうへにみまきの駒をむかへ來てけふ引きわけの使たつらし

みちのくのあら野の駒もなつき來てみよのためしにあふ坂の關

鴈

山風のさそふ木の葉とみるばかり麓の小田に落つるかりがね

薄暮初鴈

秋風のわきて身にしむゆふべかなはつ鴈がねの聲聞きしより

ゆふぎりのたえまもり來る初鴈のはつかなる音もめづらしきかな

月前鴈來

塵ばかり雲もかゝらぬ山のはに落ち來る鴈ぞ月のくまなる

すみわたる月のみ舟におくれじと聲をほに上げて鴈は來にけり

霧

ゆく舟はほのかに見えて朝河のあけぬや霧のまよひなるらむ

秋といへば神のいぶきの名もしるく先づたちそめつ峯のうき霧

いかにして身のうき秋を忘れまし霧のまがきは世を隔つとも

霧底筏

あすか河ふち瀬も見えず立つ霧にくだす筏やいかにたどれる

野分

野分せしみすゞ高かや影ふして下葉にまじる秋はぎの花

○わきて　とりわけ。

○はつか　僅か。かすか。

○月のみ舟　月を空の海を漕ぐ舟にたとへた。

○聲をほに云々　聲を高くあげてほ(秀)にあげるは顯はれて聲をあげる意に舟の帆をかけた。古今集「秋風に聲をほにあげて來る舟は天のと渡る鴈にぞありける」

○朝河のあけぬや　朝の川がまだ夜が明けないのは霧が迷つてゐるのであらう。

○神のいぶき云々　神の息吹が霧と立つといふ膽吹山といふ名も明白にわかるやうに峯に霧が浮いてゐる。膽吹山は近江坂田郡。西南の麓に伊夫岐神社がある。

○あすか河　大和高市郡。

○ふち瀬云々　古今集「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵はけふは瀨となる」

○みすゞ　すゞ竹。

○高かや　しのすゝきをいふと。又かるかやの異名と。

擣衣

世をうぢの河風さむく更くる夜に衣うつなりまきのしま人

名所擣衣

さよ更けて聞けばさびしないめ人のふしみの田居に衣うつ聲

更くる夜のとほよる波に聲添へて衣うつなり須磨の浦人

月の夜に衣うつを聞く

さよぎぬたひゞきは空にかよへばや月にあはれのうちそはるらむ

鶉

うらがれし秋のすゑ野ぞ哀れなるしもをうづらのなく音のみかは

鴫

旅まくら夢もむすばであかさましものこひしぎの聲を聞きつゝ

重陽宴

さかづきはくむともあかじ今日をしも待ちえし菊の花のむしろに

宮人のかざしの菊の花の色もかよひてにほふ袖のむらさき

菊花待開

下露もかをるばかりに咲きなばと心を菊のうへにこそおけ

○世をうぢ　世を憂を宇治へかけた。
○まきのしま　槇の島。山城久世郡宇治。宇治川と巨椋池との間。
○いめ人　ふしの枕詞。萬葉集「おほくらの入江とよむなり射目人の伏見が田ゐに雁わたるらし」
○ふしみの田居　山城紀伊郡伏見の田。

○うちそはる　添はる。うちは接頭語。砧の縁語。

○しもをうづら　霜を憂く思ふ意を鶉にかけた。

○ものこひしぎ　物戀しきに鴫をかけた。
○重陽宴　陰暦九月九日の觀菊の宴。

○宮人　宮仕の人。宮中に奉仕する人。

○あえぬべし　あやかりなさい。
○なづさへば　馴れまつはると。
○わかゆ　若くなる。
○きくの花　聞くに菊をかけた。
○移ろはむ　花の色かはつて萎む
○しら菊　白菊に知らずをかけた
○つもりては淵云々　拾遺集「わが宿の菊の白露けふごとにいくよ積りて淵となるらむ」
○霜にうつろふ　霜のために花が萎む。
○菊のきせわた　菊の花に綿をかぶせて霜よけにし、長壽のためとして其の露と香を移し取つて身を撫でたもの。
○世をいとふ人のたぐひ　俗世間を厭ひ離れた人と同類だと聞く菊の花。周惇頤の愛蓮說に「菊、花之隱逸者也。」

菊

千世ふれど老をも知らぬしら菊の花のおもてに君あえぬべし

なづさへば老もわかゆときくの花いざこゝろみに折りてかざさむ

折菊

移ろはむためしもさらにしら菊は折るとも香さへあせずやあらまし

人のもとより「君とわが語らむことのつもりては淵となるべき菊の上の露」とあるかへし

下露をふちとたのまば菊の花霜にうつろふことな習ひそ

閑庭菊

おのづからしづけき宿の手ずさみにつくろひ添へつ菊のきせわた

菊閑中友

世をいとふ人のたぐひときくの花うゑて心の友としも見む

この宿に千世をもちぎれ世のうさはいざしら菊の花に馴れつゝ

月の夜きくを見て

見れどあかぬにほひなりけり長月の光そへたるしら菊のはな

月照菊花

さま〴〵の色ににほへる村菊はよるさへみよと月やてらせる
照る月の光はしもと見えながら老いせずにほふ白ぎくの花

菊契多秋

山人の住むてふ宿の菊のはな千秋も色はかはらざらまし

東海寺の山ぶみに菊もみぢさかりなる頃山里をとふといふことを

いざといはば又も來て見むもみぢばも菊もえならぬ秋の山里

蔦

染めわたす梢のつたの村もみぢ秋はまつさへ色になりつゝ

紅葉

しぐれするみふねの山はもみぢ葉の色こき秋にまづこがれけり
かさとりの山のもみぢば色ぞこきいつかしぐれの雨はもらせし
しぐれする雲にくもれる鏡山下照るいろはもみぢなりけり

紅葉淺

一枝はまづこそたをれ薄もみぢ青きをおきてかへる山路に
そめのこす千入のをかの薄もみぢ秋もおくある心地こそすれ

紅葉淺深

○村菊　叢がり生えた菊。
○しもと見え云々　老いれば頭の白髮で霜置くが、月の光はその霜と見えてそれで老いない。
○山人　仙人。南陽の酈縣の山中に菊花の水を飮んで長壽を得たといふ故事。新古今集「山人の折る袖匂ふ菊の露うち拂ふにも千世は經ぬべし」
○東海寺　品川東海寺。
○山ぶみ　山あるき。
○えならぬ　言ふにいはれぬ。
○まつさへ　紅葉した蔦が纏うて松までも紅になつてゐる。
○みふねの山　大和吉野郡御船山
○かさとりの山　山城と近江の國境にある笠取山。
○いつか云々　いつ時雨の雨を笠が漏らしたか、時雨で笠取山は紅葉してゐる。古今集「雨降れど露ももらじを笠取の山はいかでかもみぢそめけむ」
○鏡山　近江蒲生郡。三上山と相ならんでゐる。

一むらの高嶺のもみぢ先づそめて麓ぞ秋におくれがほなる

林葉漸紅

紅ににほふ林も下かげはみどりをのこす秋のこのごろ

黄　葉

露をだにもらさぬ松の下もみぢうすきながらに秋を見せけり

紅葉深

檜原さへにほふばかりになりにけりもみぢ色こきをはつせの山

山皆紅葉

峯も尾ももみぢ照りそふかゞみ山くまなく見ゆる秋のいろかな

紅葉勝花

花よりもあはれは深しみ山木のおのがいろ〳〵紅葉する頃

紅葉留客

もみぢ葉のちらぬかぎりは山里に秋はつまじきこゝちこそすれ

家路をも誰かおもはむもみぢ葉に心をそめぬ人しなければ

山里にまくらからずばむらもみぢ昨日にまさる色を見ましや

松間紅葉

○露をだに云々　松が茂つて霜も時雨は勿論露さへ漏らさぬ松、其の下にある紅葉。

○檜原　檜の生え茂つた原。

○をはつせの山　大和磯城郡初瀬山。をは接頭語。

○くまなく見ゆる　鏡の縁語。

○秋はつまじき　飽き果つまじきに秋が終らぬ意をかけた。

○山里にまくらからずば　山里に假寢をしなかつたら。

○これは[illegible]云々　松に時雨の音だけが聞える。
○松の嵐云々　松を吹いて來る嵐が氣懸りであるから紅葉の散らぬ間に折らう。
○あさかの森　伊勢一志郡阿坂。秋色の淺いにかけた。
○あれにける云々　荒廢した舊都の志賀の都。近江滋賀大津の宮は天智天皇弘文天皇の舊都。
○山わけごろも　山路をふみわける時の衣服。
○そは　岨。山のけはしい所。
○あととめて　事蹟を後に殘し留めてに古跡を尋ね求めて紅葉をわけるとかけた。
○千世の古道　山城葛野郡朝原山千代原山といひ、光孝天皇行幸より千代の古道と歌枕になつた。後撰集「嵯峨の山御幸絶えにし芹川の千代の古道あとはありけり」
○はゝそ云々　柞の紅葉につゞいて櫨の紅葉がむらがり立つてゐる
○下照る　赤い色が地に輝く。

染めわたす色を紅葉にゆづりてや松は聲のみなほしぐるらむ

散らぬ間を折りてかざさむむらもみぢ松の嵐のうしろめたさに

森紅葉

秋のいろはあさかの森のむらもみぢしぐれの後ぞ又も來て見む

林紅葉

そめわたすかた山ばやし茂けれど露ももらさぬ秋のいろかな

故郷紅葉

あれにける志賀の都のむら紅葉にしきだにはれ昔しのばむ

箱根紅葉

箱根路はもみぢしにけり旅人の山わけごろも袖にほふまで

行路紅葉

散りしけるそばのもみぢに跡つけて霜の上ゆくみねの柴人

みゆきせしむかしの秋のあととめて紅葉を分くる千世の古道

木々の色も山路もふかくなりにけりはゝそにつゞくはじの村立

家路をも何かいそがむもみぢ葉の下照るかげは暮れぬともよし

江紅葉

大堰河入江ににほふもみぢばのこがるゝかたに舟はとゞめむ

社邊紅葉

露しものいかにもりてか神のますみかさの山はもみぢしぬらむ

朝熊やかゞみのみやのむら紅葉下照るかげぞ世にはことなる

神のやしろのあたりをまかりけるにいがきのうちのもみぢを見て

行く秋をひきとゞめたるしめのうちに匂ふ紅葉はあかずもあるかな

月前紅葉

梢よりもり來るかげの霜なれば月も紅葉をそむるとぞ見る

瀧紅葉

布引のたきのしら絲それをだに村濃に染めて散る紅葉かな

長月なかば島このみ給ふ家にあそびて

ふねよせて誰も見よとや中島のもみぢも波にこがれ出づらむ

關路秋風

ゆく秋の梢をさそふ山風にもみぢ吹きこす足柄の關

秋霜

おく霜にうらがれわたる草の原かくていくよの秋かすぐせし

○大堰河　桂河を嵯峨松尾邊でいふ。
○こがるゝ　焦る。色濃くなるに舟の漕がるゝをかけた。
○もりてか　笠からどう漏れて紅葉したのか。三笠と緣語。
○みかさの山　大和添上郡春日の三笠山。春日山の下に春日神社があるので神のますと云ふ。
○朝熊やかゞみの宮　伊勢度會郡朝熊神社の朝熊川對岸にある。
○いがき　齋垣。神社の垣。瑞垣。
○しめ　注連。標繩。
○かげの霜なれば　月影が白い霜であるから。
○布引のたき　攝津武庫郡。
○村濃　同じ染色を所々斑に濃くしたもの。
○長月なかば　陰暦九月中旬。
○島　泉水築山などのある庭。
○こがれ　色の濃くなるに舟の漕がるをかけた。

朝じもの光や月にそへて見む秋もなごりの有明のころ

くれの秋

しぐるとも露も散らすなもみぢ葉にけふゆく秋をかけてとゞめむ

さをしかも聲なをしみそ花づまに別れむ秋は今日にやはあらぬ

眞はぎ原鹿の音うとくなりにけりなが花妻を秋はてぬとか

暮秋朝

のこりなく染むる梢の朝じもに更け行く秋のほどをこそ知れ

暮秋興

厭くよなき山路の菊の花も見つもみぢをつとに折れるのみかは

晩秋鹿

眞萩散りもみだ亂るゝ山ざとに秋ををしかの音にたてて鳴く

長月つごもり山里をとひて

山里は秋のなごりぞあはれなる落葉まじりに尾花散る頃

○朝じもの光や　朝霜の光を月の光に加へて見よう。
○くれの秋　暮秋。秋の終り。
○しぐるとも云々　たとひ時雨が降つても決して紅葉を散らすな。露もは露ほども少しもの意。
○聲なをしみそ　聲を惜しむな。聲を惜しまず啼けよ。
○花づま　萩の花を鹿の妻と見立てていふ。
○別れむ秋云々　秋に別れるのは今日ではないか。
○秋はてぬ　秋が果てたに花妻に飽きはてたとかけた。
○つとに　家へのみやげとして。
○をしか　秋を惜しむに牡鹿をかけた。

琴後集巻四

冬歌

十月ついたち秋のなごりなき心を

木々はみな色なきのみか今日よりはあらぬ朽葉を袖にかさねむ

もみぢ散り鹿の音たゆる山里は秋をきのふとおもはざりけり

神無月ばかり山里にやどりて

木の葉ふるかた山かげのかり枕こゝろすむにぞいを寝かねつる

冬の衣がへ

きならしし露分衣ぬぎかへてけふよりしもの白重ねせむ

うらもなく月をば又もやどさまし時雨にぬるゝ袖のくち葉に

深草の里を冬によせて

とふ人もあらしにいとゞ門さしつ野となる里の冬枯の頃

時雨

雲過ぐるみねは夕日のかげ見えて麓のさとに時雨ふるなり

○あらぬ朽葉　全くちがつた朽葉のかさね。朽葉は襲ねの色目で表は經は紅緯は黄、裏は黄のもの。

○木の葉ふる　木の葉が散り落ちる。

○かり枕　假寢。旅寢。

○いを寢かねつる　寢られなかつた。

○露分衣　露の路を踏みわけて行くに著る衣服。卽ちこゝでは秋の衣服。

○白重ね　襲ねの色目。表裏共に白。四月及び十月の衣更への時に著用する。

○うらもなく　心に隔てもなく。うらは袖の縁語。

○深草　山城紀伊郡。

○あらしに　訪ふ人もあらずに嵐をかけた。

○野となる里　古今集「年を經て住みにし里を出でていなばいとゞ深草野となりなむ」

○縣居の翁　賀茂眞淵。
○みまかり給へる日　十月三十日
○少林院　品川東海寺の中。
○きてを見む　衣を著て見むに來て見むをかけたるは詠歎辭。
○ならの葉　楢の葉。時雨が降つて楢の葉の音たてたやうに眞淵の時雨で奈良朝の萬葉ぶりの古歌が世に廣まつた。
○ほさできむ　乾かさないできよう。
○かげとめて　かげを留め殘して
○今一しほ　今一度染汁に浸して一きは色濃くしよう。

神無月ばかり縣居の翁のみまかり給へる日にみはかにまうでて少林院にて人々と歌よみけるにしぐれといふことを題にて

としごとに山分衣きてを見む時雨の雲にいざなはれつゝ

ふることは世にあらはれつならの葉にさしも時雨の音たてしより

夕風のなごりしぐるゝ峯の松たかきしらべをうたふとぞ聞く

かへるさにしぐるゝ袖はほさできむ山のしづくをかたみと思へば

初冬時雨

むら紅葉なほ散りのこるかげとめて今一しほと時雨れきにけり

朝風のさそふもみぢにあらそひて梢にさわぐ初時雨かな

山路時雨

もみぢ葉を袖につゝまぬ人もなし時雨と共に山めぐりして

樵路時雨

袖ぬれてかへる木こりにこととへば高嶺の雲はしぐれなりけり

山中時雨

箱根路は時雨れ來にけり富士の嶺を雲立ちはなれ行くとみしまに

山家時雨

山かげやならの葉ならで音もなしかやの軒ばにしぐれふる頃
木の葉ふる音を軒ばに先だてゝやがて時雨をさそふ山風

閑居時雨

世をよそにふる身をだにももらさじとさゝの篠屋をとふ時雨かな

閨時雨

なか〳〵に友と聞くこそ哀れなれねざめがちなる夜半の時雨を

行路時雨

おくるゝもおなじ木陰を尋ね來て野路の時雨にあひやどりせり

里時雨

一しきりはるゝ跡よりしぐれ來てまたさしかざす衣手の里

時雨陰晴

はるゝかと見ればしぐるゝ空の月雲のやどりやさだめかねらむ

逃子の君の御もとよりもみぢにつけて「神無月しぐれに染みしもみぢば
の散りうせぬ閒を君にとぞおもふ」とのたまふかへし

もみぢ葉も君にひかれてわが爲にきのふの秋のいろやとゞめし

かみな月五日人々と共に少林院にまうでけるに芳宜園の翁いまはのきは

○なら葉の云々　楢の葉の音でなくては外に音もない。
○世を云々　俗世間の外に超然と經る身。經るを降るにかけて時雨の緣語。
○さゝの篠屋　篠葺きの小屋。
○なか〳〵に　誰も訪ひ來る友もないのでなまなか時雨を友だと思つてその音を聞くのが却つて。
○おくるゝも　後れて來た旅人も
○衣手の里　山城葛野郡。さしかざす衣手とつゞけた。
○君にとぞ　君に贈らんと。
○少林院　品川東海寺のうち、賀茂眞淵の墓所がある。
○芳宜園の翁　加藤千蔭。

までもけふの山ぶみの事いひつゞけられしを思ひ出でて殘る紅葉を

誰が爲にのこるもみぢぞ契りおきし人は秋だに見はてざりしを

殘るもみぢを尋ぬ

道かへてまたや尋ねむきのふ見し端山は秋の色ものこらず

殘菊

散りのこる菊も我が身にたぐへ見むいたゞく霜やいづれまさると

殘菊ねやにかをる

なごりぞとかをる枕もあはれなり伏屋の菊の秋におくれて

山家殘菊

のがれすむ身のたぐひとて世の秋におくるゝ菊も哀れとぞ見る

神無月ばかりにうつろひたる菊に霜おけり

みながらはうつろひはてぬしら菊に猶まがへてや霜の置くらむ

霜

朝まだき門田の鳥やあさりけむ霜に跡あるまへの棚はし

霜夜聞鐘

置きそはる軒ばの霜の深き夜に聞きもまどはぬ鐘の音かな

○秋だに云々　秋でさへも秋の終りまでを見ないで亡くなられた。文化五年九月二日歿で九月の終りまで見とゞけなかつた。

○いたゞく霜　菊の上の霜と自分の頭の白髪とどちらが優るかと。

○伏屋　低いむさくるしい家。

○みながら云々　すつかり全部は凋んでしまはぬ白菊。

○門田　門のあたりにある田。

○あさりけむ　餌をさがしあるいたらしい。

○棚はし　板で棚のやうに架けわたした橋。

○露結爲霜　周興嗣千字文の句。
○日影うときかたへ　日影の絶えた片一方。
○苔路に云々　苔の生えた路に他處から吹き散つて來た紅葉を見る
○大比叡云々　大比叡おろし小比叡おろし。大比叡は比叡山の四明峯の東に並んだ大嶽、小比叡は其の西南の峯、波母山ともいふ。
○志賀の辛崎　近江滋賀郡辛崎。
○貴船河　山城愛宕郡貴布禰神社の御手洗川。運ぶ船とかけた。
○落ちたぎち　わきかへつて流れ落ちて。
○下すだれ　牛車の前後の簾の内側にかけて簾の下まで外へ垂れる絹の帷。
○さりげなく　そのやうな様子もなく。晴れゆく様子もなく。
○散りまがふ　散り亂れて入りまがる。
○すさまじげなる影　殺風景な月影。枕草子すさまじきものに「師走の月」源氏物語總角の卷に「世の人のすさまじきことにいふなる師走の月夜云々」

露結爲霜

日影うときかたへは霜となりにけり夕風さゆる岡の露はら

落葉

木枯のたえず音する山里は苔路によそのもみぢをぞ見る

大比叡や小比叡おろしの音さえて木の葉ふきまく志賀の辛崎

落葉浮水

もみぢ葉を波もてはこぶ貴船河きのふの秋やこゝによどめる

河水にもみぢ流る

落ちたぎち水泡さかまく谷河にもみぢみだるゝ夕あらしかな

庭落葉

かき拂ふことを惜しとて日をふれば道さへ絶えつ庭のもみぢば

車中落葉

もみぢ葉を風のさそへる小車はさらに錦の下すだれせり

月の夜木の葉の散るを見て

月かげのはれ行く空にさりげなくしぐるゝものは木の葉なりけり

散りまがふ紅葉に月もくもる夜はすさまじげなる影としもなし

冬朝

日影さす淺茅が原の朝じめり夜の間の霜のなごりなるらむ

山家冬朝

山がつのさゝのしのやに朝餉たくけぶりや夜半の落葉なるらむ

寒草

たゞしばし冬田にのこるそば麥の霜にまがへる色もめづらし

冬の野のをばなは霜に枯れふしてまねかぬ袖を拂ふ夕風

あはれにも殘るか春をおもひ草しもの尾花にまじるみどりは

野徑寒草

行く人もすさめぬ野路に枯れ立ちてつれなく見ゆる女郎花かな

岡寒草

霜のうへの路さへ絶えて冬はたゞかるゝゆききの岡のかや原

庭寒草

吹く風にみだれし庭の絲すゝき今朝は霜にぞむすぼほれ行く

枯野を行くとて

霜やたびふるのの千草枯れふして花に分け來し面影もなし

○さゝのしのや　篠葺の小屋。

○そば麥　そば(蕎麥)。霜にまがへる色は蕎麥の花の白いのをいふ

○おもひ草　諸說あつていろ〳〵の草の異名としてゐる。女郎花、紫苑、龍膽、篠草など。春を思ひにかけた。

○すさめぬ　心にとめてなぐさむこともない。

○かるゝゆきき　往來の人の絕えた。萱原の枯れるをかけた。

○むすぼほれ　結ぼれ。絲の緣語。

○霜やたび　霜が幾度も〳〵降る

○ふるの　大和山邊郡布留野。霜の降るにかけた。

枯れたる荻につけて人につかはしける

冬されば音づれ絶ゆるをぎの葉に君ならはむと思ひかけきや

寒　菊

霜の後に咲くてふ菊の花ながら下葉は秋の色やのこせる

池寒蘆

朝氷むすぶや波の音絶えて霜にしづまる池の村蘆

濱邊蘆

よる波も蘆のかれ葉に音そへて夕風さわぐ大よどの濱

冬嶺秀孤松

もみぢ葉は風にまかせぬ木々もなしひとり尾上の松をのこして

椎　柴

冬ごもる峯のしひ柴しひてだに寒さわすれむよすがにぞ刈る

冬はまた朽葉まじりの落椎を紅葉の後の山づとにせむ

曉殘鴈

霜けぶる有明の月に空はれてまれなる鴈の數ぞ知らるゝ

冰

○冬されば　冬になると。

○霜の後云々　新撰朗詠集「百卉惹零。殘菊猶開ニ於繁霜之後ニ。」

○寒蘆　かれあし。

○村蘆　叢り生えた蘆。

○大よど　伊勢多氣郡大淀。

○冬嶺秀孤松　陶淵明四時詩の一句。

○椎柴　椎の木の叢り生えてゐるのをいふ。

○しひてだに　强ひてでも。むりにも。

○寒さわすれむ云々　寒さを忘れるてだてとして、柴を焚いて寒さを忘れようとするのである。

○落椎　椎の實の落ちたのをいふ

○山づと　山から家へのみやげ。

○霜けぶる　霜が降つて煙のやうにかすんで見える。

くみすてし跡よりやがてこほるなり片山本のいさらゐの水

冰始結

たきの絲はよどみも見えぬ山河にあさ瀬の冰先づぞむすべる

冰留水聲

冰ゐて落葉にとづるいさら水けさは聲さへ埋もれにけり

夜の間にや冰り果つらむ更け行けば軒のかけひの音絶えにけり

湖冰

つくばねの雪になり行くあしたより冰りそめたる鳥羽の海づら

しがの浦や蘆間の冰むすぶ日は鳰の浮巣も流れざりけり

冰駐舟

みぞれ降る比良の大わたさえ暮れて冰によどむ志賀のうら舟

冬月

冬の夜は霜にくもれる月よりも嵐に更けし影の寒けさ

閑庭冬月

淺茅生のしもには跡もなかりけり月のみひとり訪ひならしつゝ

世の人に見せましものを霜むすぶ淺茅がもとの冬の夜の月

○片山本　片側の山の麓。
○いさらゐ　水の少ない井。

○冰ゐて　氷が張つてゐて。
○いさら水　僅かな水。
○聲さへ云々　水の流れも止まり水の聲までも埋まつた。
○かけひ　掛けた樋。

○つくはね　筑波の嶺。
○鳥羽の海　常陸筑波郡にあつた大きな沼澤。萬葉集「新治の鳥羽の淡海」
○鳰　かいつぶりといふ水鳥。
○浮巣　鳰が蘆の莖や葉で水上に浮べ作つた巣。
○比良の大わた　琵琶湖。比良は近江滋賀郡。
○さえ暮れ　寒く凍えて日が暮れ

寒閨月

敷妙のそでの氷となりにけり閨のひまもる冬の夜の月

故郷冬月

里は荒れてくまぬ古井の氷る夜は月さへかげをとゞめざりけり

破林霜後月

いつしかと霜を落葉にふりかへて梢くまなき冬の夜の月

冬月水にうかべり

下折れの枯葉は波にうづもれて月にさはらぬ池の村蘆

寒流帶月

霜氷るあしの枯葉に風さえて月すさまじき淀の川なみ

浦千鳥

よる波にみだるとすれど浦なれてまた立ちかへるむら千鳥かな

曉天千鳥

沖つ風雲居に吹きて有明の月にみだるゝ村千鳥かな

よるの千鳥

舟とむる磯山かげのむら千鳥なみのよるこそ哀れ添へけれ

○敷妙の　袖の枕詞。
○ひまもる　すきまから漏れてさす。
○下折れの枯葉　折れて垂れ伏した枯葉。
○月にさはらぬ　池にうつる月の障りとならぬ。
○淀の川なみ　淀川の波。
○むら千鳥　羣る千鳥。
○沖つ風　沖を吹く風。
○なみのよるこそ　波の寄るに夜をかけた。

波の音にうきねの枕夢さめて心すむ夜をとふ千鳥かな

月前千鳥

うきものと何おもはまし磯まくら夕なみちどり月に鳴く頃

すむかげのくもると見ればかつはれて月に横ぎるむら千鳥かな

河千鳥

河鳥によるかとすれば立ち歸るちどりや波と思ふどちなる

水鳥

水鳥のところさだめぬ宿りをもうき身の上にたぐへてぞ見る

水鳥知主

巣だちせし池のかりの子年をへてぬしわくばかりなるが哀れさ

澤水鳥

こすげかる人もやかよふ澤水にところ定めぬかものむら鳥

河瀨にをし啼く

夜を寒みつがはぬ鴛鴦の聲すなり岩ねの水や氷りそめけむ

あじろ

波のうへの網代のかゞりしらむ夜に猶こがるゝは紅葉なりけり

○うきね　船の中に寢ること。

○うきもの云々　磯邊に旅寢するのを憂きものとはどうして思はう決していやなものでない。

○夕なみちどり　夕なみに立ちさわぐ千鳥。萬葉集「淡海のうみ夕浪千鳥ながなけば心もしぬに古思ほゆ」

○波と思ふどち　波と千鳥と親しいどうしであらう。

○うき身　憂き身。うきを浮きにかけて水鳥の縁語。

○たぐへてぞ見る　同じなかまと思つて見る。

○巣だち　鳥の子が成長して巣を離れること。

○かりの子　鴨の卵、家鴨の卵。巣立せしかりのこは孵化して巣を離れた鳥。

○ぬしわく　主人を見わける。

○こすげかる　小さな菅を刈る。

○人もやかよふ　人がゆき來するのであらうか。

○夜を寒み　夜寒いので。

○つがはぬ　つがひにならぬ。雌雄別々になつてゐる。

○網代　竹木を編み簀をあてゝ川瀨で魚を捕るもの。

あられ

かきくらし降るやあられの玉笹にたまると見ればかつくだけつゝ

山家霙

雪になる高嶺ははやくましろにて麓のさとにみぞれ降るなり

雪

み山木といひなくたしそ花ならぬ陰やはいづれ今朝のしら雪

老が身のかからましかばふる雪にくち木も花のさくをこそ見れ

もゝしきや玉の砌にあとつけてけふ初雪をいはふ諸人

初雪

色ながら木の葉散りしく苔の上に見そむる雪のめづらしきかな

けふよりやみやこの人も待ちてみむ初雪降れり宇治の山里

初雪降りける日

はつ雪はうれしかりけりいさゝめに降るも友待つよすがと思へば

水路新雪

とまり舟苫のしづくの音絶えて夜半のしぐれぞ雪になりゆく

淺雪

○かきくらし　暗くなつて。

○み山木　み山に生えてゐる木。詞花集「み山木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり」

○いひなくたしそ　言ひくさすなよ。

○花ならぬ云々　白雪でどの木も皆花が咲いてゐるではないか。

○かからましかば　此の通りであつたらよからうに。

○もゝしき　枕詞から轉じて大宮宮城をいふ。

○砌　軒下の石を敷いた所。

○いさゝめに　ほんの僅か。

○友待つよすが　友を待つたより

○さやけり　さや〳〵と鳴つてゐる。ざわめいてゐる。

○ふりはへて　わざ〳〵。ふりに降りをかけて雪の緣語。
○友まつがえ　松が枝に友を待つとかけた。
○いろもなく見はてし　情愛も趣もないと見限つてしまつた。枯木をいふ。
○ふりすて　振り捨てに降りをかけて雪の緣語。

○あしがらの關　駒の足とかけた

庭の面の苔路ばかりはうづもれて枯生のすゝき雪にさやけり

竹　雪

色かへぬたけの緣もうづもれて千世をこめたる園の雪かな

松竹に雪つもれり

消ゆる世はあらじとぞおもふ松竹にちとせをかけてふれる白雪

松に雪の降りかゝりたるを

ふりはへて雪おもしろき宿とへば友まつがえの陰ぞたがはぬ

雪の木に降りかゝれるを

いろもなく見はてし風の梢をもふりすてがたき今朝の雪かな

散りかゝる梢の雪の花なるは今日よりはるの心知れとか

足柄山雪

旅ごろも衣手さむしあしがらの關吹きこゆる雪のあさ風

足柄關雪

たび衣雪にきほひて出でたつやむちうつ駒のあしがらの關

田家雪

朽ちのこる門田の鳴子音さへもうづもれはてし今朝の雪かな

山家雪

山里に雪みる日こそ世の外にふるかひありと思ひ知らるれ

山里に雪降れり

來む人は思ひもかけぬ山ざとに友まつ雪や誰にならへる

遠山見雪

かひがねの今朝より白く見ゆめるは夜半のしぐれや雪となりけむ

すみのえの浦わの波にまがふまで雪かすかなる淡路しま山

志賀山越に雪の降りたりければ

御佛の法にあふ身をたのみつゝ雪の山ゆく今日にやはあらぬ

杜雪

風吹けばゆるぎの森に散る雪をねぐらの鷺のたつかとぞ見る

杣雪

おしなべて梢の雪となるときは朽木の杣も花咲きにけり

島雪

眞楫とるたもとに雪をはらひつゝさして漕ぎよる笠縫の島

閑居雪

○世の外云々　俗世間の外に遁れて住み日を經るかひがある。經るに降るをかけて雪の緣語。

○來む人云々　人が來るといふ事は思ひもよらぬ山里。

○かひがね　甲斐國の山。

○すみのえ　攝津東成郡住吉。

○波にまがふまで　波とまぎれるほど。

○志賀山越　山城愛宕郡白川村から近江滋賀郡滋賀に通ずる山路。

○雪の山　釋尊が菩薩の道を修め苦行した雪山(せつせん)をかけた。

○ゆるぎの森　近江高崎郡萬木(よろぎ)。

○ねぐらの鷺　六帖「高島やゆるぎの森の鷺すらも獨りは寢じと爭ふものを」

○朽木の杣　材木に伐り出した朽ちた木。夫木抄「まきもくの檜原にまじる薄紅葉これや朽木の杣木なるらむ」

○眞楫　かぢ。眞は美稱。

○さして　目指して。さすは笠の緣語。

○笠縫の島　攝津。

訪ひ來べき人しなければ庭の雪にこゝろおかれぬ草の庵かな

たま〳〵に人もや訪ふとおもりゆく松の雪をも拂はでぞ見る

世にそむく宿とや雪も隔つらむ今朝はとなりも道見えぬまで

やんごとなき殿に雪の山つくらせ給ひけるを見よとてめしたりければ賛子に侍りけるに簾のうちより硯のこゝろをこめて歌よめとおほせごと有りければ

此の殿につくれる雪の山にこそ千世をつむべきためしをも見れ

千蔭がもとにやどりけるあした雪の降りたりければ

かきこもる小笹がもとにやどらずばよにおもしろき雪を見ましや

市中雪

ゆきかよふ里の市女(いちめ)が笠のはにはらひもあへず積る雪かな

河雪

とね河や消えせで波にながれゆく雪にも今朝はうはにごりせり

名所雪

宮姫のむかしおほえて大原のふりにし里に雪ぞつもれる

あしがらやあしの海づら氷る日ぞ神のみさかに雪は降りける

○こゝろおかれぬ草の庵　遠慮も懸念もいらぬ草の庵。
○人もや訪ふと　人が訪ひ來ることもあらうかと。
○おもりゆく　だん〳〵に重くなつてゆく。

○賛子　縁側。

○雪の山　雪を積んで作つた小山

○市女が笠　市に物を商ふ女のかぶる笠。古く市女が多くかぶつた漆塗の笠を市女笠といふ。
○消えせで　消えないで。
○うはにごり　上の方が濁つてゐること。
○大原のふりにし里　大原は大和飛鳥の西北。ふりにし里は古里。雪の降るにかけた。萬葉集「わが里に大雪ふれり大原のふりにし里にふらまくは後」の歌による。
○あしの海づら　蘆の湖の水面。
○神のみさか　足柄峠。足柄明神の社があるのでいふ。

社頭雪

御手洗の岩うつ波もうづもれて雪しづかなる賀茂のみやしろ

禁中雪

もゝしきや雪うち拂ふ朝風に御階の櫻散るかとぞ見る

曙雪

雲はるゝをのへは雪にあらはれてまだ明けはてぬ山もとの里

雪中眺望

見わたせばやその湊もくまぞなき雪に明けゆく鳰の海づら

雪中遊興

雪山の消えむ消えじをいつしかとおぼつかなくもふる日數かな

雪の中におもひをのぶ

花さかむ春にあふよや待ちて見む年ふる雪のうづもれし身も

鷹狩

狩人の朝たつ袖のしのぶずりみだるゝ雪にきほひてぞ行く

大鷹狩

のる駒のあがきをはやみ大雪のみだれていづる御狩野の原

○御手洗　御手洗川。神社の傍を流れてその水でみそぎし手水をつかふ川。
○賀茂のみやしろ　山城愛宕郡下鴨村に下鴨神社。同上賀茂村に上賀茂神社がある。
○もゝしき　枕詞から轉じて宮城をいふ。
○御階の櫻　紫宸殿の南面御階の下にある左近の櫻。
○をのへ　山の峯。
○山もとの里　山の麓の里。
○やその湊　多くの湊。
○くまぞなき　隱れて見えぬ處がない、すつかり見える。
○鳰の海づら　琵琶湖の水面。
○雪山の云々　枕草子にある雪の山が何時まで消えないとか消えるとか言ひ爭つた話による。
○花さかむ春　世に出て時めく意をかけた。
○年ふる雪　經る降るの掛言葉。
○うづもれし身　失意で隱退の身
○しのぶずり　忍草で模樣を摺りつけた布。模樣がもぢれるので亂るの序とする。
○あがき云々　馬が足で地を掻くのが早いので。
○大鷹狩　大きな鷹で鶴鴈雉などの大きな鳥を狩る冬の鷹狩。鶉などの小鳥を狩る秋の小鷹狩の對。

みかり野は朝風寒し雪つもる遠山ずりの袖こほるまで

獵場風

御狩野のかぜをはげしみますらをが空とる鷹やあはせわぶらむ

遠近炭竈

いかばかり炭やくとてか遠近のみねに樵りつむ眞柴ならしば

人のもとに炭やるとて

みやこ人わが山ずみをいかにぞと思ひおこさばうれしからまし

大原の賤が手わざをせめて君夜ぶかき冬の友とだに見よ

雪霜の寒さもたへて草の庵にすみならすべきよすがにはせよ

老人さむさをいとふ

おもほえず寐ざめの袖ぞこほるなる昔はかくはならはざりしを

埋火

灰がちの色をも霜と見つるかな更くる夜寒きねやの埋火

時しあらばまたかきおこせ埋火の灰となりゆく老のこゝろも

爐邊閑談

もろともにむかふ火とりのいり炭の思ひいりてや昔かたらむ

○遠山ずり　衣に遠山の模樣を摺り染めたもの。雪積る遠山とかけた。

○かぜをはげしみ　風が烈しいので。

○空とる　空中で鳥を捕る。

○あはせわぶ　立ちあはさせるになやむ。相鬪せしめかねる。

○樵りつむ　木を伐り集める。

○眞柴ならしば　柴楢柴とくり返した。眞は美稱。

○山ずみ　山住に山炭をかけた。

○思ひおこさば　思ひ起すに火をおこすをかけた。

○大原　山城愛宕郡八瀨村以北。

○賤が手わざ　賤の人が作つた物

○すみならす　住み馴らすに炭をかけた。

○灰となりゆく　年老いて冷たい灰のやうに情も消えてゆく。

○いり炭　火にあぶつて濕氣を去つた火の起り易い炭。

○思ひいりて　深く思ひ込めて。熬り炭の熬りてをかけた。

爐邊懷舊

うづみ火のうづもれし身よいかにして昔を今にかきおこさまし

豐明節會

をとめ子が衣にかくるあかひものあかねは舞のすがたなりけり

五節

みこゝろをよしのの宮のためしとや袖かへすらむ今日の舞姫

臨時祭

夕さればみはしの雪に跡つけてかへりだちする雲のうへ人

荷前使

みてぐらを君が御門にはこぶなり今ぞ荷前(のさき)の使たつらし

神樂

はふり子が手にとり持ちてあそぶなりわがにはあらぬ神の御杖を

ゆふだすきかたにとりかけとる杖もあなたふとしや神の宮人

から神のかみのみまへによもすがら大和の琴の音もすみにけり

朝倉やあづまの琴の音もそひて霜にすむ夜のおもしろきかな

榊とり鉾とる袖もしら〴〵と霜うち拂ふ神のみやつこ

○うづもれし身　失意で隱れ忍んでゐる身。
○豐明節會　新嘗祭の翌日十一月中の辰の日天皇新穀を聞食し羣臣に賜はる饗宴。
○あかひも　舞姫の小忌衣の左の肩につける紐。あかねの序。
○よしのの宮云々　天武天皇吉野の瀧の宮におはしました時琴を彈き給ふと神女があらはれて舞を舞つたといふ故事。
○臨時祭　陰曆十一月下の酉の日山城賀茂神社の祭。
○かへりだち　祭日社頭で舞樂を奏して後内裏に還つて再び舞樂を演奏する儀式。
○荷前使　毎年陰曆十二月中旬諸國の貢物の初物を特定の十陵八墓に奉られる奉幣使。
○わがにはあらぬ　わが杖ではない。神樂歌「幣帛はわがにはあらず」
○神の御杖　神樂歌、杖「此の杖はいづこの杖ぞ天にます豐をか姫の宮の杖なり神の杖なり」
○ゆふだすき云々　祭祀の時榊につけるゆふを襷にして肩にかけ。
○から神　韓神。大年神の御子。やまとの琴と對照。神樂歌「韓神」
○朝倉　神樂歌「朝倉」。朝倉は筑前。あづまの琴と對照。
○榊、鉾　神樂歌採物「榊」「鉾」
○神のみやつこ　神官。

佛名

身につもる罪をつくしのわたなればけふ法の師にかづけ初めけむ

佛名の導師にかづけものする

ためしとてかづくるわたにとり添へて醉をすゝむる栢梨（かへなし）の酒

佛名のあしたわかるゝ僧に

白雪のふりすててけふわかるとも山たち出でばまたもとへ君

冬日

世のさがも知らで春待つすみかには暮れやすき日も長閑なりけり

冬至の日に

咲きそむる梅の色香に知られけり春に先だつはるの心は

依花待春

身にそはることも思はで來む春を花ゆゑいそぐ年の暮かな

としのくれに

ふりにける身にも春こそいそがるれ老かくるてふ花を待つとて

歳暮松

山人の市路にはこぶ松の葉のかはらぬ春を明日やむかへむ

○佛名　陰暦十二月十九日より三日間禁中及び諸寺で佛名經を讀み名號を唱へる罪障懺悔の佛事。
○つくしのわた　罪を盡しなくする意を筑紫の綿にかけた。佛名會の時僧に賜はるかづけ綿。綿は筑紫の産が有名。
○栢梨の酒　攝津國栢梨の莊から來る甘酒。

○ふりすて　振り捨てに白雪の降りをかけた。
○わかるとも云々　別れて寺即ち雪の山に歸つても若し山を出たらば再び我を訪へよ。
○世のさがも知らで　世のならはし。年の暮だ節季だといふ世間の風習も全く沒交渉で。

○身にそはること　いよ〳〵年の數が加はること。

○老かくるてふ花　梅をいふ。古今集「鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老隱るやと」

閑中歳暮

ゆく年もかくはをしまじ世の事に思ひまぎるゝ昔なりせば

海邊歳暮

こりはこぶ鹽木と共につむとしやいづれかからき浦の海士人

ま帆かけてなだ越す舟とゆく年といづれかはやき浦のあま人

老少送年

我もまた花のためにぞ春またむ老をなげかぬ人にならひて

學者惜年

たのみこし三つのあまりも何ならずけふ一年のくれぬと思へば

うかれめ年を惜しむ

ながれゆく年にまかせてあだ波をいつまで袖にかけむとすらむ

雪與年深

暮れて行くとしの日數をふる雪は我が身につもるものとやは見ぬ

年のはての雪

跡をしもとゞめだにせでゆく年のつもるや雪になどならふらむ

年のくれに雪の降りければ

○かくは云々　これ程までには惜しまなかつただらうに。
○こりはこぶ　木を伐つて運ぶ。
○鹽木　鹽燒く竈の薪。
○ま帆　正面全體に風を受けるやうにかけた帆。
○老少　老いたるも若きも。
○三つのあまり　三餘。學問するに三の餘、冬、夜、雨の時の三で十分だと言つた董遇の故事。魏畧「冬者歳之餘。夜者日之餘。陰雨者時之餘。」
○うかれめ　遊女。
○ながれゆく年　月日の早く過ぎて留らぬを水流に譬へ、遊女のあだな生涯にかけた。
○あだ波云々　遊女の移りかはる契りを譬へた。
○日數をふる雪　經るに降るをかけた。
○つもる　年の積ると雪の積るをかけた。

降る雪はとしの關ともなりななむひまゆく駒も立ちとまるべく

　こゝちそこなひてわづらひける年のくれに

行く年はとゞめまほしく思ふかなかへらむ春をまつ身なれども

　世のさかえもとむべき身にしもあらずむなしき名を人に知られむのすさみもなければわがおきふしこそいと心やすけれやう〳〵かたぶき行くよはひの今はむそぢにもあまりぬれどもとよりあめつちのことわりを知ればいまさらに年の暮るゝもおどろかれず

のどかにも過ぐる月日をこゝろからとしとは人の何名づけけむ

　追儺

雲の上になやらふ時や來にけらし四つの御門につどふ宮人

　なやらふ雪ふる

伴のをがためしとて射る蘆の矢は御門の雪にみだれあひにけり

○としの關云々　年の行き過ぎるのを留める關となつてほしい。
○ひまゆく駒　時が停ることなく過ぎ行くを馬にたとへた。
○こゝちそこなひ　病氣に罹つて
○かへらむ春　回春。病氣の全快年の暮で來るべき新年をかけた。
○世のさかえ　世俗の榮達。

○むそぢ　六十。

○とし　疾し。月日の進みがはやいこと、年にかけた。

○なやらふ　追儺の式をする。古昔禁中で十二月晦日夜、疫病の鬼に扮裝したものを追ひやる式。
○四つの御門　宣陽門承明門溫明門玄暉門。追儺に鬼が四つの御門を經めぐつて瀧口の戸を出て逃げ去る。
○蘆の矢　追儺の時殿上人が桃弓蘆の矢で鬼を射て追ふ。

琴後集巻五

戀歌

戀

やよいかにますらたけをの心すら戀にはあへぬならひなるらむ

むさしうたとて相聞の心を

玉河にしづくしら玉みえずとも取らではやまじしづく白玉

水鳥のをさきの池のあつ冰つひには解くるをりもあらまし

さき玉の津にすむ鳥の馴れるつゝ人になるべき妹ならなくに

初戀

戀ひそむる心ばかりは嬉しとも憂しともえこそ思ひさだめね

わけ初むるみをの杣山おくまではおもひも入らでこふる頃かな

不言戀

木がくれて人に知られぬ口なしの花にうき身をたぐへてや見む

身を觀じていひ出でぬ戀

○あへぬ　敢へぬ。堪へられない、かなはぬ。

○むさしうた　萬葉集古今集などの東人の詠んだ東歌に擬した武藏國人の詠んだ地方うた。

○玉河　多摩川。武藏國。

○しづく　水中に沈んですき映つて見える。

○水鳥の　尾にかけて小埼池の序

○をさきの池　武藏國北埼玉郡小崎沼。

○さき玉の津　武藏國南埼玉郡利根川の渡津。萬葉集「埼玉の津にをる舟の風をいたみ綱は絶ゆともことな絶えそね」

○みをの杣山　三尾山。近江高島郡三尾。拾遺集「高島や三尾の中山杣たててつくり重ねよ千代のなみくら」

○口なし　梔子に口の無いのをかけた。

はまの名のうち出でむことも思はめやかひなき海と身を歎きつゝ

身のほどを思ひ知らずば厭ふとも慕ふと人につげましものを

思不言戀

思へどもえぞいはしろのむすび松とけぬ心をいかにしてまし

いはでおもふ

言に出でていひも盡さむものならば人に心をもらさざらめや

色に出でむ時しなければ木がくれて人に知られぬ口なしの花

たき河の音にたてではいはずとも下にむせぶと知られてしがな

言始戀

人はよしいなさ細江のみをつくし盡す心をいはでやまめや

いひはじむ

つま琴の音にたてそめて洩らすともひかれざりせばいかにしてまし

有るまじき人を思ひかけて

いひ出でむ身のたぐひかは思ふぞと知られむだにもやさしきものを

童より見ける人を心かけて

はねかづらなつかしと見し面影をかけてや今に戀ひわたらまし

○うち出でむ　口に出していふを近江國滋賀郡打出濱にかけた。
○かひなき　口に出した効果もない。貝をかけた。
○身のほど　身ぶん。
○厭ふとも　よしや假に嫌つてゐても。
○えぞいはしろ　えいはずを岩代にかけた。岩代は紀伊日高郡。
○むすび松　岩代にある松の名。萬葉集「玉きはる命は知らず松が枝を結ぶこゝろは長くとぞ思ふ」
○下にむせぶ　表は現はれず咽びつかへるやうに流れる。心の中でむせび泣いてゐるをかけた。
○いなさ細江　遠江濱名湖の一支灣引佐細江。否をかけてわが戀ふ人はよしや否と云はうが。
○みをつくし　澪標。身を盡しをかけた。
○やさしき　恥かしい。
○童より　子どもの時から。
○はねかづら　花鬘。女子の髮飾の一種。

さかぬ間も心にかけしはつ櫻あだになときそ花の下ひも

しらぬ人

散りてこそよそにもしのべことの葉は我に見よとのすさみならねど

五節の夜人に

ためしあれば天津をとめも見るものを世にあひがたき人や何なり

忍戀

くるしとて言にな出でそねぬ縄のうきにしづみて年はへぬとも

もらさじとしのぶ涙のいつよりか我が心にはそむき初めけむ

互忍戀

うきふしはおのがさまざまありといへどしのぶ心はかはらざりけり

聞戀

音にのみきくの濱邊にひろふてふかひなく人を戀ひやわたらむ

見戀

今ぞ知る見ざりし程にしたひしは數にもあらぬ思ひなりけり

稀見戀

ほの見つるをりわすれめや花ざくら霞のよそに身をへだてつゝ

○あだにな云々　移り氣にむやみと下紐を解けさせるな。女が戀されると下紐が解けるといふ。
○五節　大嘗會又は新嘗會に行はれる女樂。
○天津をとめ　五節の舞姫。
○ねぬ縄　根蓴菜・水草で浮沈の緣。うきに沈むは憂きに沈む。
○我が心にそむき　漏らさじとする我が心にそむいて涙がもれ流れた。
○うきふし　つらいかど／＼は。
○きくの濱　豐前企救郡聞濱。小倉市附近。音に聞くをかけた。
○かひなく　戀ひわたるかひもなくに貝をかけて濱の緣語。
○數にもあらぬ思ひ　物の數でもない悶え。思ふといふ中に數へられぬ物思ひ。

われにとけなむ

よそに君うとくなるをぞたのままし我にとけなむをりも有りやと

白地戀（あからさまのこひ）

あふも又なげきかさねむふし柴のしばしばかりの中のちぎりは

梓弓おきふしになどしのぶらむとるてばかりの契りなりしを

通書戀

逢ふことは世にうど濱のはま千鳥かよふ跡こそ今はたのまめ

見書戀

とだえせし久米の岩橋いたづらにふみ見てのみも思ふころかな

被返書戀

玉章はよし返すとも結びめのかはらばせめて見つと思はむ

度々返事せぬ女に

いくしほと染めしやいづらなれ衣たゞ口なしの色ふかくして

ふみかよはして久しくなりぬれどつれなき人に

いたづらに心はそらに月日經ぬ雲のうはがきかきも絕えなで

新經年戀

○われにとけなむ　古今集「春立ては消ゆる氷の殘りなく君が心はわれにとけなむ」

○よそに云々　君が他の方に疎くなるのを頼みに思つて待たう。

○ふし柴　柴におなじ。しばしの序。

○とるてばかり　手に持つただけのおりそめな。

○うど濱　駿河國安倍郡有度濱。逢ふことの疎しとかけた。

○千鳥かよふ跡　鳥の跡卽ち筆蹟の通ふをかけた。

○久米の岩橋　葛城山から金峯山へ岩橋を架けるに一言主神が夜之を作られたが遂げないうちに夜が明けたといふ傳說から歌に物の遂げぬにかけていふ。

○ふみ見て　書を見て。踏み見て。

○見つと　書を見たのだと。

○いくしほと　幾度も染汁に浸して。

○口なし　梔子。口無しにかけた。梔子色は赤みがゝつた黃色。

○心はそら　心も心ならず物も手につかず。そらは雲と緣語。

○うはがき　信書の上書。雲の上とかけた。

○かきも絕え　かきは接頭語。上書をかくにかけた。

祈ることいつかかひあるみしめ縄たえぬ思ひに年をかさねて

契久戀

こがるべき程やしのばむ貴船川ながれてすゑの世をたのみつゝ

逢ひみての後せの山のみねの松かはらぬ色をちぎりともがな

年月をへだてて契りながらさもあらぬ人に

うらもなくたのみて年をふる衣いろかはらむと思ひかけきや

馴戀

おもひ出でてかたるも悔しなれぬ間の心くらべに過ぎし昔を

馴れ顔に人に見えじと思ふより隔てなきにも心こそおけ

馴不逢戀

思ふとはさすがにいはぬ中なれば馴るゝにつけてつゝましきかな

憑媒戀

よそながら我がしめゆひし園の梅なりぬと聞くも嬉しかりけり

人にうたがはるゝ女にかはりて

一すぢにおもひかけひのいさら水よそにはわけぬ心とを知れ

不逢戀

○みしめ縄　注連縄。神に祈る意を含めた。縄の長く續いてゐるのが絕えぬこと〻つゞけた。

○こがる　戀ひ焦るに、貴船川の船の漕がるをかけた。

○貴船川　山城愛宕郡。

○後せの山　後せは後の逢ふ折。後瀨山は若狹小濱の南にある。

○うらもなく　心隔てなく。うら衣の緣語。

○ふる衣　古衣。年を經るとかけた。

○心くらべに過ぎし昔　心くらべをして月日を過した昔。

○見えじ　見られまい。

○隔てなきにも　隔てない中でも

○つゝましき　氣が置かれる。遠慮される。

○しめゆひし　標縄を張り渡した自分のものとしるしをつけた。

○なりぬ　梅の實がなつた。事が成就した意をかけた。

○おもひかけひ　思ひかけると懸樋の言ひ掛け。

○いさら水　僅かな水。

○わけぬ　心を他に分けない。水を分けない。

あふまでとたのむ命をともすればたえねと思ふをりも有りけり

神垣にかくる小鈴のしめ朽ちてならぬ戀にも年をふるかな

いとせめて逢ふにしかへばと思ふ身も只いたづらに消えむとやよる

詞和不逢戀

つらからぬことばぞつらき中々におもひこりよといひもはなたで

不逢歸戀

いたづらに歸るこゝろのうす衣うらなくきたるかひだにもなし

雨ふるとて來ぬ人の降らぬにも見えねば

はるゝ夜の空だのめなる月もうし昨日の雨を袖にやどして

待使戀

逢ふことはかたしの濱のはま千鳥かよふ跡さへおぼめかれつゝ

逢戀

とけぬ間のうさをうつゝに馴れし身は逢ふ夜も夢と猶たどりつゝ

初逢戀

つれもなくながらふる身と思ひしも思ひわすれし今宵なりけり

戀ひ〳〵て同じ心にいれひもの結びそめつる今日ぞうれしき

○たのむ命を　賴みにしてゐる命であるのに。
○たえねと　命が絕えてしまへと。
○小鈴のしめ　鈴につけた注連繩。
○ならぬ云々　戀が成功しないで年經る。鳴らぬ、振るにかけて鈴の緣語。
○いとせめて　甚しく心に迫つて痛切に。
○逢ふにしかへば　戀人に逢ふのと命を取りかへたらば。古今集「命やは何ぞは露のあだものを逢ふにしかへば惜しからなくに」
○只いたづらに　逢ふこともなく
○中々に云々　思ひ懲りよとなまなか言ひ切りもしないで。
○うらなく云々　心隔てなく來た裏なく著たると衣にかけた。
○空だのめ　賴みに思はせて實行しないこと。あてにならぬ賴み。
○かたしの濱　所不詳。難しにかけた。
○つれもなく云々　死んでしまへと思ふのに命は無情にも長らへると思つたことも忘れた。
○いれひも　直衣や狩衣などの雄紐と雌紐、互にさし入れて結ぶ。結ぶの緣語。

嬉しさをつゝまむものを昨日までほさぬ袂と何かこちけむ

はじめてあへる

あふまでの心はちゞにくだき來ぬ一夜の夢と見はてずもがな

逢増戀

露ばかりかはす枕のほどなさに中々袖ぞひぢまさりける

あはぬ間の心なりせばおもかげの身にそふばかり思はましやは

新逢戀

なか〳〵に逢ひみてこそは惜しまるれ命にかへていのりこし身も

年頃あはぬ人に逢ひて後つかはしける

いたづらに經にける年のくやしさも逢ひみてこそは思ひ知らるれ

曉別戀

曉の露をもともにしほれとや袖のわかれにふる涙かな

兼惜別戀

宵の間のかねにもうさは先だちぬこやあかつきを告ぐるてふもの

月あかき夜人の歸りて又のあしたおとづれければ

かたぶくをうしと見つゝもあかしにき待つ夜の月のたぐひならねど

○何かこちけむ　どうして歎いたことか。

○一夜の夢と　けふ始めて逢つたことを一夜の夢と。

○ひぢまさり　濡れまさり。

○なか〳〵云々　なまなか逢つたので却つて命が惜しくなつた。○命にかへて　逢ふことを命にかへて祈つた。新古今集「昨日まで逢ふにしかへはと思ひしをけふは命の惜しくもあるかな」

○袖のわかれ　男女纏ひかはした袖を解きはなして別れること。

○こやあかつき云々　これ（宵の鐘）が別れるべき曉を告げるといふものか。こやはこれや。

○月あかき夜　月の明るい夜。

○かたぶく云々　月の傾くのをつらいことだと思つて見ながら夜を明かした。

後朝戀

またも來む程やちぎらむ別れ路にあしたおもなみ立ちかくるとも

一夜へだてたる

人心かはるならひのありといへばうしろめたしや逢はぬ一夜も

打ちなびきいこそ寐られねなよ竹の一夜もかれしならひなければ

二夜へだてたる

ふた夜をばやみのうつゝに過してき待たずば夢にあはましものを

遇不逢戀

今はたゞ塵のみつもる菅ごもの七ふも三ふもたれか敷へむ

契りおく事を命にながらへつまたもあふべき此の身ならねど

中絶えし身はなか〳〵にいとひつるうき名をだにも思出にせむ

鳥のねをなどさばかりは厭ひけむ今はかぎりの別れなりしを

與君後會知何日

あふせをばいつと契らむうかれめのつながぬ舟を身のたぐひにて

なき名

種をだにまかぬなき名のいかなればかくまで人のつみはやすらむ

○あしたおもなみ　顏は恥かしくきまり惡くあるので隱れるだらうが。
○うしろめたしや　見えないで氣がゝりであるよ。
○打ちなびき云々　身をなよらかに臥して寢られぬ。
○なよ竹　細くしなやかな竹。打ちなびきの縁語。又よ(節)の枕詞。
○一夜　一節に一夜をかけた。
○かれし　離れたに竹の枯れたをかけた。
○待たずは　待たないで眠つたら夢に逢つただらうにかひなき現に過してしまつた。
○七ふ　敷物の編目七筋編んだもの。袖中抄「陸奥のとふの菅菰七ふには君をしなして三編にわれ寢む」陸前宮城郡十符に菅菰を産出する。
○契りおく事を命に　契りおく事を命として生き長らへた。
○あふせ　逢ふべき折。
○なき名　跡方もない評判。ぬれぎぬ。
○人のつみはやす　人が摘みたてることだらうか。名に立ててはやすのであらうか。

なき名たてたる人に

君ゆゑにいひさわがるゝ人言もなき名ならずば嬉しからまし

ぬれぎぬ

さらぬだにうき身にきするぬれ衣はしぼる袂をまたくたせとや

名ををしむ

あひ思ふ中とな人にいはし水つひにはもれむうき名なりとも

悔戀

諸ともにとくるにつけて悔しきはつれなく過ぎし昔なりけり

身をすてて何もとめけむとりえてもつひにこやすのかひしなければ

占戀

あふことはかたやく鹿のこがれつゝ占問ふたびに音にやたてまし

舊戀

なつかしとみし世をのみやしのぶらむうかりし節は思ひ忘れて

ふるくものいひ侍りける人に

わすれめや過ぎゆく年の後背山わけまよはじと契りおきしを

草ふかき野中の清水とだえしてもとの心にまどひけるかな

○なき名ならずは　跡方ないぬれぎぬでなく評判の通り事實であるならば。

○くたせとや　また其の上に朽ちさせよといふのか。

○中とな云々　相思ふ仲と人に言ふな。岩清水にかけた。

○とくるにつけて　戀仲が打ちとけて親しくなるにつけて。

○つれなく過ぎし　戀が成らず冷淡に過して來た昔。

○身をすてて云々　何故に身を捨ててまでこの戀を求めただらうか

○こやすの云々　取り得てもかひがないに竹取物語の燕の子安貝の話をかけた。

○かたやく鹿　古、ふとまにと云つて鹿の肩の骨を燒いて裂ける模樣によつて吉凶を占つだをいふ。

○占問ふ　占ふ。

○うかりし節　つらく苦しかつたかど〳〵。節を竹の節にかけ、世を竹のよにかけて緣語とした。

○後背山　若狹小濱の南、後瀨山年の後とかけた。

○野中の清水　古今集「古の野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞ汲む」

年經ていふ

おもひ出でよたなばたつめの逢瀬だにうらやまれつゝいく秋か經し

あひ思ふ

花もみぢはかなきふしのすさみにも思ひかはせし色は見えけり

われも見つ人にも見えつ春の夢あひ思はずばかからましやは

思三人戀

山吹にまたも心やひかれなむ梅もさくらも飽かぬものから

おもひやす

人を思ふこゝろはいかでよわるべき影となるまで身はやせぬとも

ものおもふ身はとやごもる鷹なれやたゞやせ／＼になりまさりぬる

忘戀

我ばかりねになけとてやみよし野のかりにも人の音づれもせぬ

恨身戀

ゆるされぬ中のつらさも我からとみどりの袖のうらめしきかな

恨久戀

つれなさにたへても年をふる衣うらむとだにも知られてしがな

○たなはたつめ云々　棚機つ女即ち織女星が一年一度の逢ふ折さへも羨ましく思はれて。
○はかなきふし　取りとめもない詰らぬかど／＼。
○われも云々　自分も戀人を夢に見た、戀人にも自分が夢に見られた。

○おもひやす　物思ひの餘りに瘦せた。

○とやごもる鷹　羽毛をかへる間とやに籠つてゐる鷹。
○やせ／＼に　ひどく瘦せたさま

○かりにも　吉野の狩にも、假初にもをかけた。
○ゆるされぬ　戀中の許されないのを六位の人が昇殿をゆるされぬにかけて恨めしと云つた。
○みどりの袖　六位の人の袍は綠色。綠の袖は六位をいふ。
○年をふる衣　年を經るとふる衣とをかけた。うらむを裏にかけて衣の縁語とした。

秋恨戀

葛の葉にあらぬ心のいかなればあきてふからに先づさわぐらむ

さらぬだに露そふ袖の月かげをいかに見よとか人のつれなき

絶戀

絶えはつる人の心はつらからで思ひそめしぞ今はくやしき

絶不逢戀

僞りのことの葉ながらとり出でて絶えにし人をまたやしのばむ

人のつらくなる頃

一夜だにあかしかねしをいつよりか待たじと君をかこち馴れけむ

人ごゝろかはるならひを頼むかな又うとからぬ折もありやと

思ひかけず絶えたる人の來りければ

うきものとおもひ知りぬる玉の緒のつれなかりしぞ今はうれしき

ふたゝび絶えたる戀

水まさる谷の棚橋またさらに渡すとせしもたゞしばしなり

くり返しものは思はじかた絲の絶えしながらのうき身なりせば

○葛の葉　葛の葉は風に飜るもの故心のかはり易いにたとへた。
○あきてふから　秋といふので。秋に厭きをかけた。
○さらぬだに　さうでなくてさへ見限られたといふ恨めしい事がなくてさへ露そふ袖。
○人の心はつらからで　捨てて行つた人の心は憎くくやしくはなくて。
○あかしかねし　君に逢はないでは一夜も明かすことはできなかつたのに。
○待たじと　どうせ來ないから待ちはせぬと。
○かはるならひ云々　心が變るのを頼みに思ふ。今冷淡なのが變れば、又疎遠でなくなる折があるかと。
○玉の緒の云々　玉の緒は命。玉の緒のつれなかりしは命が當時の自分の惱みの心に無情冷淡でながらへたのをいふ。
○かた絲　縒り合はさない絲。絶えしの序。繰り返しの緣語。

ともすればかはるを常の人の世に我のみやなどかくたのみけむ

人ごゝろかはりにければ

おもふてふことの葉だにもかれはててかはる心のおくも見えけり

色かはる袖はあやしな紫のふかかれとこそ思ひそめしか

おどろく

しのぶれば我によそなる人ごともうき身のうへと驚かれつゝ

艷女遇他人戀

咲きしよりめかれぬ花よあだ人に折られむものと思ひかけきや

竝面戀

おもかげを共にうつせばつゝ井づゝゐづゝの水もむつまじきかな

山家戀

世をよそに住みなす山のかひしあらば人めいとはで逢ふよしもがな

戀　里

うつり來てなれぬ大井の里住に君まつ風を聞くぞわびしき

水郷戀

消えかへりおもふ心をいかにせむ小島が崎のゆきのなごりに

○かはるを常の人の世　かはるのが通例である世の中。
○などかく云々　どうしてこんなに頼みにして居たか。

○色かはる云々　紫のゆかりの色が深く濃くあれと思つた袖の色の變るのはどうも奇態である。

○我によそなる人ごと　自分に無關係な他人のこと。

○めかれぬ花　目を離さずに居た花。
○あだ人　他人。
○思ひかけきや　思ひもよらなかつた。
○つゝ井づゝゐづゝ　筒の如くに丸く掘つた井の地上に出たゐごがは。伊勢物語の「つゝ井筒ゐづゝにかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざる間に」によつた。
○山のかひしあらば　山に住みなすかひがあるならば。かひに峽(かひ)をかけた。

○小島が崎　山城久世郡宇治。宇治橋の西にある橋の小島が崎。

めぐりあふ我ぞやさしき難波江のあしかるわざに年をかさねて

關戀

名のみたゞあふさか山のかひもなしゆるさぬ關を中にへだてて

舟路戀

かぢ枕みやこにかよふ夢しあらば妹をみぬめに舟はとゞめじ

旅戀

たちかへりいつわぎも子にあふくまの松ときくにもぬるゝ袖かな

ある曹司のまへを通りけるに「よるは螢の」などいひ出しければ

飛ぶほたるおもひは誰もあるものを身よりあまるといはば頼まむ

枕塵

ふたり寢てうちも拂はば木まくらのちりとたつ名もいとはざらまし

寄月戀

秋の夜のながき思ひのはてもなしこゝろを月の空になしつゝ

うき事を思ひつゞけて月みればいつしか袖に影のやどれる

恨みわびなみだに月はくもれどもなほ面影の立ちそはりつゝ

寄塵戀

〇やさしき　恥かしい。
〇難波江のあしかる　難波江の蘆とつゞけ、蘆刈るを惡しかるにかけた。
〇名のみ云々　名だけは只逢ふといふ逢坂でそのかひもない。峡(かひ)をかけた。
〇かぢ枕　舟の中に旅寢すること
〇みぬめ　攝津武庫郡敏馬浦。見ぬ目をかけた。
〇あふくまの松　阿武隈の松。逢ふをかけた。金葉集「陸奥の思ひ忍ぶにありながら心にかゝる逢ふの松原」の逢ふの松原(岩代伊達郡箱崎)をいふか。
〇曹司　禁中などの部屋。つぼね。
〇よるは螢　古今集「明けたてば蟬のをりはへなき暮し夜は螢のもえこそわたれ」
〇おもひ　思ひに火をかけ螢の縁語。
〇身よりあまる　後撰集「包めども隱れぬものは夏蟲の身より餘れる思ひなりけり」
〇こゝろを云々　心を空にして。心も心ならず落ちつかず。
〇袖に影　袖が涙にぬれて月影が映つてゐる。

いつよりか空になき名の立ちぬらむちりもつかじと思ひける身を

戀の山のぼるにしなははなきものを何ちりの身とおもひやむべき

寄河戀

染むれども薄花いろの紙屋河すくてふ名のみたつぞあだなる

寄瀧戀

思ひあまる心は瀧の絲なれや結ぼほれつゝせくよしもなし

寄野戀

はてもなくおもふ心にくらぶれば猶むさしのもかぎり有りけり

寄關戀

ゆるされぬへだてよ不破の關ならばもりすてむ世も有りとたのまむ

寄海松戀

みるめかるわざもかひなしいたづらにあひねの濱をこと浦にして

寄鳥戀

いたづらにまだあらはれぬすもり子のかひなく人を戀ひやわたらむ

寄鷹戀

をぶさとり手なれぬものをあら鷹のすゞろに人の戀しきやなぞ

○しなはなき　身分の高下の區別はない。
○何ちりの身云々　塵のやうに賤しい身だといつてどうして斷念するものか。
○紙屋河　山城國鷹峯村から出て南流し京都市を通つて桂川に入る。附近で昔紙を漉いた。
○すくてふ名　紙を漉くといふ名、好色といふ評判。
○結ぼほれつゝ云々　心が結ぼれて閊えが解けないで、心勞をせきとめやうもない。結ぼほるは絲の縁、せくは瀧の縁語。
○はてもなく云々　新古今集「武藏野や行けども秋の果てぞなきいかなる風の末に吹くらむ」
○もりすてむ　不破の關ならば人住まぬ關屋は荒れて、關の守りも打捨てる時もあらうと賴みにする
○みるめ　海松に見る目をかけた
○あひねの濱　所不詳。古事記傳に契沖も眞淵の說として伊豫國と相寢をかけた。肥前佐世保の相浦か。
○こと浦　攝津武庫郡琴浦。異にしてをかけた。
○をぶさ　鷹の尾につけるふさ。一說、尾のある部分の名と。
○すゞろ　そゞろ。鷹につける鈴を言ひ掛けた。堀川百首「降る雪に行方も見えずはし鷹のをぶさの鈴の音ばかりして」

寄貝戀

いたづらに拾ふ人なきやれ貝をふるされし身のたぐひとぞ見る

寄燈戀

いかにせむ秋のなが夜のともし火はかゝげつくせど盡きぬ思を

寄金戀

たゝらたて吹くやみ山の岩こがねうちとけてぬる巾としもがも

寄鼓恨戀

かくしつゝ袖になみだのふりつゞみ音にのみなくも恨めしの身や

寄鼎變戀

人はなど有りしにも似ずなりぬらむ鼎のあしのたつ名ばかりに

寄秋戀

身の秋に絶えぬつらさは數そへどつれなき露のいのち何なり

寄秋露戀

いかなりし契りなるらむ秋ごとにうき身を露のおきどころとは

○ふるされし身　厭ひすてられた身。
○たゝら　踏鞴。大ふいがう。
○岩こがね　岩石から出る黄金。岩こがねまで上の句はとけての序詞。
○ふりつゞみ　柄を振つて鳴らす鼓。涙が降るとつゞけ、音の序。
○音に云々　聲に出て泣く。
○有りし云々　昔とは全く打つて變つた。
○鼎のあしの　立つの序。

琴後集巻六

雑歌

天

動きなき日嗣の位たかしるや天の御かげを世々につたへて

月のあゆみ星のやどりも行きめぐる天の道こそときをたがへね

雑地儀

盡きもせず動きもやらぬ君が代は山と川とを例にぞ見る

風

やま松にしらぶる琴の聲たててたちまふ雲の袖かへすなり

花もみぢ心づからも散るものをとがをば風になどおほすらむ

古寺嵐

かねの音を峯のあらしのさそはずば世にふる寺もありと知らめや

雲

ゆくへなきものとや雲をわきていはむありはつまじき人の此の世に

○たかしる　統治し給ふ。たかは貴みていふ言。
○星のやどり　星塵。星宿。
○雑地儀　地儀を詠んだ雑の歌。地儀は山河海陸など地上の形象。
○花もみぢ云々　花も紅葉の自分の心から勝手に散るのに。
○とが　花紅葉を散らしたといふ罪を。
○世にふる寺　世の中に經る古い寺。
○ゆくへなき云々　雲だけを特別に何處へ行くかわからぬものと言はれようか雲ばかりではない。
○ありはつまじき　存在し極まる卽ち究極までありおほせられぬ人世。

夕ぐれに雲のたゞよふを見て

さだめなき世のすがたぞと見る雲もゆふべはわきて悲しかりけり

泊り船むやひわするな沖つ洲にたゞよふ雲は風はやみかも

雲埋山路

はるかなるうまやの鈴をしるべにて雲の中ゆくあしがらの山

深山雨

たちのぼる谷のうき雲みね越えて檜原がおくに村雨ぞ降る

雨中待友

つれ〴〵のながめよいかに暮さまし笠やどりにも人はとはなむ

夕やみ

夕やみに淺茅がもとはたどるとも月待ちがてらとふ人もがな

山

山としもならばこの身をかくさなむうき世の塵よよしつもれかし

やまとのみつもるを何のかひとてか詞のちりの數そはるらむ

名所山

旅人のぬさとも手向くるゆふの山たが越えそめて名にはおひけむ

○ゆふべはわきて　雲のさまは夕暮にはとりわけ悲しい。

○むやひわするな　舟を繋ぎ合はせるのを忘れるな。忘れずに繋いでおけよ。

○風はやみかも　風が早いからよ風の早いによつて。

○うまやの鈴　驛鈴。古官使が諸國に赴く時驛馬を徴發するために其の證として賜はつた鈴。こゝでは驛馬の鈴の音。

○笠やどりにも　暫くの雨やどりにでも。雨の止むのを待つて立ち寄るにしても。

○夕やみ　宵のあひだ月がなく暗いのをいふ。

○たどる　路を尋ねさぐつて歩く

○山としも云々　塵積りて山となるの諺によつた。

○詞のちり　歌屑。

○ぬさ　幣。

○ゆふの山　豐後速見郡由布嶽＝木綿山。神に獻る榊などにつける木綿(ゆふ)をかけた。

○たが越え云々　誰が始めてこの山を越えてゆくといふ名がついたのであらう。

天香山

日の經(たて)にふりさけみれば大君の御門おほゆる天のかぐやま

富士の山に雲のはるゝを見て

心あてに見ししら雲は麓にておもはぬ空にはるゝ富士のね

山彦

あしがらの山のやまびことよむなりいづれの峯に舟木きるらむ

山畑

たま〳〵にはたうつ人のあるをこそ知らぬ山路のよすがともみれ

なづな咲く花のにほひにくれかねて霞にのこる春のやま畑

晴後遠水

水上や雨のなごりの山見えてゆふ日に浮ぶうぢの河ふね

名所瀧

大君の御代の名にしもおひくるや老もわかえし瀧のまし水

淵

浪風のさがしき世には住むとてもさわがぬ淵をこゝろともがな

瀨

○日の經に云々　東西に通ずる方に。萬葉集「やまとの青香具山は日の經の大御門に春山としみさびたてり」御門おほゆるは宮城の城門とも思はれる。
○心あてに云々　峯を推量して見てゐた白雲が晴れて見ると富士の麓であつた。
○とよむ　鳴りひゞく。
○舟木　舟を造る材木。萬葉集「鳥總立て足柄山に舟木伐り木に伐りゆきつあたら舟木を」古昔足柄山から舟木を多く伐り出したらしい。
○霞にのこる　霞の中に暮れ殘つてあかるい。
○大君云々　元正天皇の年號養老に瀧の名を負うて來た。
○老もわかえし　老も若返つた。續日本紀元正天皇の詔に美濃國當耆郡多度山の醴泉に幸されて之れを飲み又浴する者白髮も黑くなりぬけた齒もまた生え老眼も明らかになるなど若がへることが述べられてある傳說。

世の中はおきつ汐瀬をゆく舟のからくや誰もうみわたるらむ

海路朝

いさり火のかげは島わに殘りつゝ波にしらめる沖つ百ふね

みやこ

移りゆく世のすがたをも見るものは都の人の手ぶりなりけり

古郷

ふる畑に苔むすかはらいく世經て野となる里のむかし見すらむ

にはたづみ

ありはてぬ世にぞたぐへむにはたづみ唯しばしなる雨の名殘を

うたかた

うたかたを何はかなしと分きていはむ消えをあらそふ人のこの世に

ほりかねの井

汲みそめし人はたが世の爲にとてなほほりかねの井をばのこせし

仙家

とこしへに散らぬ花ある宿なれや霞のいろもくれなゐにして

閑居

○おきつ汐瀬　海の沖の潮が流れる所。
○うみわたる　倦みて世をわたる海を渡るにかけた。
○島わ　島のまはりの海。

○手ぶり　風俗習慣。

○にはたづみ　行潦。雨降つて地上にたまつた水。
○ありはてぬ世　永久に存在し究まることのできない世。

○うたかた　水の泡。
○何はかなし云々　水の泡だけを取りわけてはないものだとはどうして言はれようぞ。
○消えをあらそふ　水の泡と人の命と消えることを競ふ。
○ほりかねの井　武藏國入間郡堀兼村にあつたといふ歌名所。

身をかくすたぐひとな見そ草の庵にことなくて世を過すばかりぞ
とはれぬを何かなげかむ彈く琴もむかふ硯も友なるものを
世のことは思ひわすれつ今日もまた筆のすさみに日をくらすとて

閑居燈

よのことはそむき果てたる窗のうちになど燈火の花を見すらむ

鏡山のふもとに世をのがれたる法師のもとへ

くまもなき心の月のかゞみ山うき世の塵を拂ひてやすむ

林下幽閑

むら松のおのづからなる琴の音に苔のむしろの塵はらふなり

鄰

子をおもふ心知れとやならはしの移りやすさにうつす鄰は
宿かさでかへせるものをみやびをの鄰しめつとなどたのみけむ

窗

風きよき南のまどのうたゝねにあがりたる世の心をぞ知る

きさらぎばかり柏木如亭の都にのぼるをおくる

花散らばとく歸り來てわが爲にみやこの春のことかたらなむ

○身をかくすたぐひ　隱遁者のなかま。
○鏡山　近江蒲生郡。
○うき世の塵云々　憂世の塵を拂ひのけて住むか。法師に住む、月に澄むといふをかけた。
○むら松　叢り生えた松。
○ならはし云々　習慣によつて性質が變り易いので。
○うつす鄰　轉居して近鄰の家をかへること。孟母三遷の意を含めた。
○宿かさで云々　萬葉集「みやびをと吾は聞けるを宿かさず吾をかへせりおそのみやびを」
○南のまど云々　陶淵明歸去來辭「倚二南窗一以寄レ傲。審二容レ膝之易一レ安。」
○あがりたる世　上世の名利を離れた脫俗の心持がわかる。

大堀正輔が彦根へかへるをおくる

ちぎりおきてまたばや牀の山ざくら散りなばまたも思ひたつ日を

清原雄風が香取へ歸るをおくりて

もろともにゆかましものをかとり潟鹿島が崎の花も見がてら

豐後國にかへる人のうまのはなむけしける時

みな人のこと葉のはなもそへて見よゆふ山ざくら折りてかざさば

卯月はじめつかた上柳孝思が木曾路より都へのぼるにわかるとて

今もなほ木曾山ざくら散らずあらばはなの香うつせ旅の衣に

う月ばかり土田延年がふたら山にのぼるをおくりて

なつ山にひらくみのりの花にこそさかりなる世のためしをば見め

八月の末つかた長尾景隆が都にのぼりける時よみておくりける歌

いとまあらば月に先づとへ秋の夜のいづこはあれど廣澤の池

もみぢ葉にむかししのばばさがの山みゆきのあとも尋ねてを見よ

心してとひ見よ賤がしわざにも都はふるき手ぶり有りけり

ことの葉の色もまさましおのづから都の人に立ちまじりなば

しはすの二十日あまり七日の日勘解由判官正邦が都にかへり行くを送る

○牀の山　近江犬上郡鳥籠の山。彦根附近。
○思ひたつ　又江戸へ來ることを思ひたつその日を契つて待たう。
○かとり潟　下總香取郡香取浦をいふのであらう。
○鹿島が崎　常陸鹿島郡。
○うまのはなむけ　餞別。
○ゆふ山　豐後速見郡由布嶽。一名木綿山(ゆふやま)。
○木曾山　信濃西筑摩郡木曾川沿の山谷の總稱。
○ふたら山　二荒山。下野日光山
○なつ山　夏草木の茂つた山。
○いづこはあれど　何處も秋の夜はよい趣があるけれど。
○廣澤の池　山城葛野郡嵯峨村。
○さがの山　山城葛野郡嵯峨の小倉山をいふのであらう。みゆきの跡は拾遺集「小倉山峯のもみぢ葉心あらば今一たびのみゆき待たなむ」の貞信公の詠の延長四年十月十日宇多法皇小倉に御幸、つゞいて十月十九日醍醐天皇並に法皇の行幸御幸があつたのをいふ。大鏡裏書參照。
○ことの葉云々　詠歌も上達するであらうの意。

ゆき氷みなぎりおつる富士河のはや瀬わたらば君こゝろせよ

ことのまゝのやしろを過ぎば我が爲にまたも逢ひみむねぎごとはせよ

　山口至言が母とじをともなひて身延山にまうづるに元政上人のふるきためしも思ひ出でられてなむいひやりける

世をへてもかげや澄むらむ法の月むかしの跡をてらしても見よ

　小澤なにがしが香取にかへるをおくりて

いざさらばとねの河ふね行きかへりまたとひ來ませ波のよるべを

　賀茂季鷹が父のこゝちわづらふと聞きてとく都へのぼるにわかるとてあふぎに添へて

ゆき〳〵てはやくあふぎの風しあれば身のあつしさも君や忘れむ

　つくしへ下らむとする人に鹿毛なる馬をおくるといふことを題にて

つくしがた月のゆくへは遠けれど心をかげにたぐへてぞやる

　ものへまかる人に扇やるとて

君にまたあふぎてふ名をたのむ間は風のたよりをわすれずもがな

手ならさばおもひも出でよかはほりのこがるばかりにそへし匂ひを

　かたらふ人の遠き國へまかるに鏡をとらすとて

○ことのまゝのやしろ　遠江小笠郡日坂の八幡宮。事任神社。
○ねぎごと　祈り願ふこと。
○身延山　甲斐南巨摩郡。日蓮納骨の久遠寺がある。
○元政上人　年十三彦根侯に仕へ二十六歳出家し深草に居を占めた高僧。父母に仕へて至孝、老母を奉じて身延山に詣つた。寛文八年寂、年四十六。
○はやくあふぎ　早く逢ふに扇をかけた。
○あつしさ　暑さに病の重く苦しい意をかけた。
○かげ　鹿毛に影をかけた。
○ものへまかる人　何處かへ行く人。
○あふぎてふ名　再び逢ふといふ名を頼みにして安心してゐる間。
○かはほり　蝙蝠。扇の異名。
○こがる云々　焦げて色が變るほどまで香をたき添へたのを。焦るに戀ひ焦れる意をかけた。
○鏡をとらす　鏡を與へる。

いのちあらばさらにも君ともろかゞみ向はむまでのかたみには見よ

難波へゆき侍らむとしける時よみて友だちのもとへおくりける

おしてるや難波ほり江のあき風にすむらむ月をひとりかも見む

旅宿夢

ぬるがうちはわすれむものを海山のうきをまた見る夢ぞわりなき

山家

をさまれる世とて岩ほの中にだになほ人ざとの數そはりゆく

此の里にかくれそめしはいつの世と花にぞとはむ桃のみなもと

山家雲

見るがうちに庭の木だちもうづもれて谷よりのぼる峯のしら雲

山家夕烟

みねの庵に焚くやま柴の夕けぶり心ぼそさを空にしらせて

山家夢

をり〳〵にかよふ夢こそあはれなれ憂しとそむきし都なれども

山家待人

我が山のもみぢ色こき秋はたゞ世にほこらしきをりも有りけり

○もろかゞみ　もろ共に同じ鏡に姿をうつす。
○おしてるや　難波の枕詞。
○ぬるがうち　寢てゐる間は。
○わすれむものを　海山の旅の憂きつらさを忘れようと思ふのに。
○花にぞとはむ　史記李將軍傳「桃李不レ言下自成レ蹊。」によつた。
○桃のみなもと　陶淵明の桃花源記にある武陵の漁人が逢つた桃源
○かよふ夢　都に通ふ夢。
○憂しと云々　都は憂しと言つて捨てた都であるが。
○ほこらしき折　誇りたく思ふ得意なをり。

○世のさが　世のならはし。
○年のあまり　冬を歳の餘りといふ。董遇の故事。魏略「冬者歳之餘。夜者日之餘、陰雨者時之餘。」による。
○をりかくる云々　田に竹の折懸垣をつくる。折懸垣は竹を折り曲げて作つた垣。
○みくまの　三熊野。みは美稱。
○はまゆふ　濱木綿。はまおもとの白い花が木綿四手のやう幾重にも重なつて咲くのでもゝへと云つた。
○ゆききの岡　絶間なく人が往來する意に岡の名をかけた。夫木抄には大和とす。夫木抄「夏と秋とゆききの岡のをざゝ原明けむ一夜の風を待つかな」
○はふり子　神官。神職。
○玉串　榊の枝に木綿（ゆふ）をつけて神前に供へるもの。

山家送年

花になれもみぢにあきて山里に世のさが知らで年を經しかな

田家

いとまある年のあまりと賤のをがまたをりかくるをだの竹がき

濱ゆふ

みくまのの浦のはまゆふ咲くときはもゝへの波のよるかとぞ見る

岡篠

とだえなくゆききの岡のをざゝ原玉もなしあへず露ぞ亂るゝ

江松老

すみの江の松や神代のたねならむ老いぬてふ名も千年へにけり

大井河入江のまつはそのかみに昔をとひし陰にやはあらぬ

榊

はふり子がゆふとりかくる玉串に神代のあとは今ものこれり

ゆづる葉

ゆづる葉のゆづる常磐の色に見む立ちさかゆべき宿のためしは

しきみ

明けくれのつとめたゆまぬ法の身につみのこさめや罪のしきみを

鶴立洲

あしたづの立てるなりけり澄む月のあかしのと波よると見えしは

曉鷄

曉のうきをつげしはむかしにて寐ざめなぐさむとりの聲かな

牛

引くうしのたぐひならずや小車のわれとうき世につながるゝ身は

猿

谷ふかみ霜に色そふ木の葉ざる秋はにしきをかづかぬもなし

瑠璃貝

青海のいろにまがへるいさら貝波かきわけてたれか拾ひし

書

天地のとほきはじめも見てぞ知る神代の書を今につたへて

よしやその千世のふる道ふりぬともふみ見て遠き跡は尋ねむ

引くうしの汗あゆるまでつみ添へてふりぬるふみの數ぞ知られぬ

披書知昔

○法の身　法體となつた身。出家の身。
○つみ　摘みに罪をかけた。
○あしたづ　鶴。
○あかしのと波　明石の瀬戸に立つ波。月のあかしをかけた。明石のとは播磨明石浦と淡路の松帆浦繪島磯との閒里餘の海。
○曉のうき云々　若い時に曉のうき別れを告げた。
○小車のわれと　小車の輪に吾ととつゞけた。
○木の葉ざる　からだの小さく動作輕快な猿。
○かづかぬ　著ない。
○まがへる　似通ひまぎれる。
○いさら貝　小貝。
○千世のふる道　山代葛野郡朝原山。後撰集「嵯峨の山御ゆき絶えにし芹川の千世の古道あとはありけり」
○ふみ見て　書を見てに道を踏んで見てをかけた。
○汗あゆる　汗が流れ出る。牛が汗をかくは藏書の多い意。柳宗元の陸文通墓表「其爲レ書處則充レ棟出則汗二牛馬一」

くだち行く此の世のさがも知らざらむふみ見て遠き跡をとはずば

神代山陵考を見てよめる

ふみ見ずばいかで知らまし神の代にいはと立ちけむその跡どころ

文

しるしおく文はあやしな見ればかつ昔の人に逢ふこゝちして

石王寺の石もて作れる硯をうすらひと名づけてその硯のうらにほりつけたる　石に白くうすらひの文あり

世をわたる人もかくこそうすらひをふむはかしこき心わするな

越の君の北の方のおほせごとにてうもれ木の硯のふたに

うもれ木も今より世にぞさかゆべきこと葉の花の春に逢ひなば

弓

をさまれる御世の守りの梓弓引きなゆるべそもののふの道

やしま國今もむかしの跡とめてゆはずの貢たゆる世もなし

笠

うちむれて賤がかりとるあし間より見えがくれする難波菅かさ

やよひばかり自寛の家火にあひてよろづのもの燒けうせぬと聞きて硯筆

○くだち行く　世が末になり衰へて行く。
○神代山陵考　邇々杵尊以來日本紀の神々の山陵に關する考證の書。宣長門人鹿兒島藩士白尾國柱著。
○いはと云々　岩戸の立つた舊跡。いはとは岩鉢に通じて葬所の意に用ゐた。
○石王寺　しやくわうじ。丹波國石王寺山から產出する石。
○うすらひの文（ふ）　薄氷のやうな斑文。
○うすらひをふむ　極めて危きこと。詩經小雅「戰々競々如レ臨二深淵一如レ履二薄氷一。」
○梓弓　引くの枕詞。
○ゆはずの貢　男の貢物。弓矢で獵つた獲物の貢物。

など調じておくる包紙に

散らしけむこと葉の花を木のもとにまたかきつめよ見む人のため

筆

おのづから心の見ゆるわざなれば筆とることのはづかしきかな

櫛

さし櫛やさしも久しきためしとていつきの宮にけふたまふなり

もとゆひ

もとゆひの霜はあやしなこむらさき結びそめつる時も有りしを

すだれ

かりそめにすきまおほかるいよすだれ月もれとてや作り初めけむ

かは衣

なか〳〵にとりも出でずばかは衣やくる思ひはそへざらましを

袋

きなせらるとのゐの衣の袋こそあくる人めをつゝむなりけれ

帶

紫もみどりもにほふみや姫のゆはたの帶ぞ世にたぐひなき

○こと葉の花　詞花言葉。和歌。
○かきつめよ　書き集めよに葉を搔き集めよとかけた。
○おのづから　物を書けば書いたもので自然に心が現はれる。
○いつきの宮　齋宮齋院。天皇の御代毎に、伊勢神宮と賀茂社に奉仕される皇女又は女王。其の任に赴かれる時大極殿で天皇親ら挿櫛を挿し與へ給ふ。
○いよすだれ　伊豫簾。伊豫國浮穴郡露峯の山中から產する篠で編んだ簾。
○やくる思ひ　竹取物語の火鼠の皮衣の話によつた。
○とのゐ　宮中に宿直すること。とのゐの衣の袋は宿直の時著る衣服などを入れる袋、とのゐ袋。
○ゆはた　絞り染。

あや

雲鳥のあやをさながらあらはすやこはたが機におればなるらむ

車

行きめぐる千里のはても小車の跡はかはらぬ君が御代かな

帆

風先に鳴戸すぎ行く沖つ舟つくる帆なはやいく手なるらむ

たく繩

海士の子が千ひろたく繩ながく世をくるしとのみやうみわたるらむ

火とり

つれ〴〵の友と慰むたきものにひとりとのみは思はざりけり

つと

あかしがた波間の月の玉ならば拾ひてこよひ濱づとにせむ

かたみ

みほとけにたつる朝なのかたみにもつみおかさじと頼みつるかな

梁

梓弓いるよりはやく見ゆるかなやな瀬におつる水のしら波

○雲鳥のあや　雲に飛んでゐる鳥の模樣、特に雲に鶴の模樣をもいふ。大和物語「雲鳥のあやの色をもおもほへず人をあひ見で年のへぬれば」さながらは全く眞に迫つて。
○こはたが云々　之れは誰が機に織つたのでかう眞に迫るのか。
○小車の跡　車の通つた轍の痕。ねたち。
○風先　風の吹く方。風下。
○鳴戸　鳴門海峽。淡路阿波間の海峽。
○いく手　幾すぢ。
○たく繩　栲布の繩。
○うみ　倦みに海をかけた。
○火とり　香をたきしめるに用ゐる香爐の類。獨りをかけた。
○あかしがた　播磨國明石郡明石浦。
○濱づと　海濱から家へのみやげ。
○かたみ　花や菜などを摘み入れる籠。
○たつる　奉る。捧げる。
○朝な　朝の食用にするもの。
○つみおかさじ　摘み置かさじに罪犯さじをかけた。
○梓弓　射るの枕詞。
○やな瀬　梁を設けた瀬。

魚梁

梁うちし昔がたりやつみのえのながれて世々にしのび出でまし

古壁苔　以下三十二首詩題

雨もるゝ軒のひはだのつま朽ちて苔むすかはらいくよ經ぬらむ

垂洞藤

世にそむくかた山ほらの青つゞらすむ人あれどくる人はなし

嶺上雲

心ありてたつとも見えぬみねの雲なに朝ゆふに行きかへるらむ

幽徑石

むかしたれ島このむとて路のべに千引の石はひき殘しけむ

臨軒桂

風きよきあきを軒ばに待ちとりて月のかつらの花もにほへり

林中翠

雨はるゝ楓がしはの夏木立風もみどりになびくとぞ見る

棲烟鳥

青柳のゆふかげけぶる枝ごとにねぐらさだむるむら鳥かな

○梁うちし云々　萬葉集「古に梁打つ人のなかりせばこゝにもあらまし柘の枝はも」などの柘枝傳說によつた。
○ながれて　昔語が後代まで傳はつて。柘枝が流れ來るをかけた。
○ひはだ　檜皮。檜の皮、細かく割いて屋根葺くなどに用ゐる。
○つま　端。
○青つゞら　青葛。蔓莖があつてたぐることができるのでくるの枕詞。
○くる人　來る人に青つゞらを繰るとかけた。
○島このむ　築山泉水などある庭の數寄をこらす。
○千引の石　千人もして引くやうな重い大石。
○ゆふかげけぶる　夕暮の樹の影が煙のやうにかすんで見える。

○さながらに　其のまゝで。
○むなしき心　竹の節の間のうつろなのを人の虚心にたとへた。
○孀人怨服散　夫に先だたれた美人が、不老の薬をのむことを嫌つたこといふ故事。樂府詩集に出てゐることいふ。
○愛妾換馬　樂府解題に出てゐるこいふ。
○銅雀伎　魏の曹操が歡樂を極めた銅雀臺の歌姫舞妓。唐詩選七絶「銅雀宮觀委二灰塵一、魏主園陵漳水濱、即今西望猶堪レ思、況復當時歌舞人。」
○宮人斜　宮人即ち宮中に仕へて居る女を葬つた墓地。長安城外にあつた。三體詩雍裕之「幾多紅粉委二黄泥一、野鳥如レ歌又似レ啼、應レ有下春魂化爲レ燕、年々飛入二未央一棲上。」
○孟門行　支那吉州に孟門山といふがあつて嶮岨登り難きに世渡りを比しての詩。行は漢詩の一體の名。

寒溪草

溪ふかき雪のした草さながらに春にもあはで年をつむらむ

陰崖竹

世にうときかた山ぎしに生ふる竹さしもむなしき心をぞ見る

孀人怨服散

ひとり身を千世もとなどかねがふらむ誰が爲にとて惜しむ命ぞ

愛妾換馬

植ゑおきし花をばをらでよそ人の手がひの駒になど心ひく

銅雀伎

かたみぞといふもわりなしかくしつゝ立ちまふ袖を君みましやは

宮人斜

秋風の露ふきむすぶ草のはら今もかざしの玉をこそ見れ

孟門行

なげきこる世のへがたさにくらぶれば岩根ふむてふ山はものかは

閨怨

春の夜の夢のまさかやたのむらむ塵となる身のゆくへ知らずて

舊宮人

むかしへや今もわすれぬ宮姫のなほふりがたき花のかざしは

短歌行

ながしてふ春も一時さく花に心をやらでいつを待たまし

小遊仙

三千とせになるてふ桃をくひもてる翅やほしのつかひなるらむ

花も咲きもみぢもそめて春秋を常にとゞむるわたつみの宮

雲のうへに袖をつらぬるあまをとめ月のみやこに住むやいつまで

たに水の淵となる世を誰かしるいはもと菊の露はらふまに

時の間に波穂ふみわけいく千里蓬がしまにかへる山人

このゆふべ雲のうてなにのぼりたち霞をすきてつどへるや誰

水の江が心おぞさやわらふらむ常世にすめる島のしま守

すぎ來つる世の名をだにもいく千とせ霞にこめし桃のみなもと

雲の上は花にあくべき里もあれや世のもゝとせを一春にして

鑷白

おく霜をはらふもはかな翁草みどりにかへる春を待つとて

○舊宮人　老宮女。三體詩劉得仁の句「白髮宮娃不レ解レ悲。滿頭猶自挿ニ花枝一。」白髮の老宮女君恩に時めいた昔を恃んで老の悲しみを知らぬのが哀れだといふ意を詠んだ。

○むかしへ　昔。昔時。

○短歌行　漢詩の一體の名。文選魏武帝の短歌行から後樂府などこれに擬した作がある。

○三千とせ云々　拾遺集「三千年になるてふ桃の今年より花咲く春に逢ひにけるかな」西王母が漢武帝に桃を進めてこの桃は三千年一度實ると云つたと列仙全傳に見える。

○くひもてる　くはへ持つてゐる

○わたつみの宮　海神宮。龍宮。

○月のみやこ　月中にある宮殿。

○いはもと菊　岩根に生えた菊。

○波穗　波の高く立つた頂。

○蓬がしま　仙人の住む蓬萊島。

○すきて　食うて。呑んで。

○水の江　水の江の浦島子。

○桃のみなもと　陶潛桃花源記による想像の仙境。（前出）

○鑷白　白髮をぬく。

○おく霜云々　白髮を拔くのもかひがない

○翁草　松の異名。老翁の意をかけた。綠の緣語。

○みどり云々　みどりの黑髮に回る春。

玉樹後庭花

常にかくありとや花にうたひけむ世は露の間に移ろふものを

陵園妾

松の門さしもいく世か經にけらしもろき木の葉を身のたぐひにて

上陽人

花にとぢ紅葉にうづむ宮のうちにいく春秋をあはれとは見し

王昭君

まそかゞみ向ふもうしとしのぶらむ筆のすさみのさがにくき世に

いかにして心はやらむ四つの緒の引きとゞむべきたびぢならぬを

浦島子

たちかへり誰にとひけむ故郷は見しにもあらずなりはてし世を

法師

雲水をおのが心とおもへばや木のもとにだに跡をとゞめぬ

海人

宿をだにさだめぬ蜑が釣の絲のこゝろぼそくや世を渡るらむ

樵夫

○後庭花　陳の後主の作つた樂府の曲の名。杜牧の詩「商女不レ知亡國恨。隔レ江猶唱後庭花。」

○陵園妾　晉の武帝の宮女、罪によつて陵園(天子の陵)の墓守に貶されて幽居した。白樂天陵園妾の詩がある。

○松の門云々　白樂天陵園妾の詩句「松門到レ曉月徘徊。栢城盡日風蕭瑟。松門栢城幽閉深。」

○上陽人　唐玄宗の時楊妃寵を得後宮の佳人上陽宮に幽せられて一生を空房に暮れて白髮となつた故事。

○王昭君　漢元帝の宮人。匈奴の請ひにより詔をうけて匈奴に嫁し悲慘に終つた美妃。

○心はやらむ　如何にしてこの思ひを晴らさう。

○四つの緒　琵琶。引きの序。

○見しにもあらず云々　昔自分が見た時とは全く變りはてた世。

○雲水　行方定めぬ雲や流れてやまぬ水。雲と水に譬へて諸國を遍歷する僧を雲水といふ。

○宿を云々　新古今集「白波のよする渚に身を盡す蜑の子なれば宿も定めず」

○釣の絲　細くの序。

山がつといひなくたしぞ世にふれば誰もなげきをこる身なりけり

心

うしといひ哀れと思ふ種なくば世に言の葉もしげらざらまし

思

よしあしをいにしへ今とたどるにはいはぬ思ひもある世なりけり

天橋立

神の世に神のかよひし跡なれや雲居につゞく天のはし立

千世古道

ふみ見なば千世の古道たどらめや心のさがによしまよふとも

日本紀竟宴に天武天皇を

いかづちのひゞきも絶えて天地にうけひしことぞまさしかりける

本居宣長が古事記傳書きはてて竟宴のうたとひけるに神直日神を

まがつびのあらびあらせじと神直日（かんなほび）神のみたまやあれましにけむ

ぬひ子が家にて人々枕草紙よみはてつる日近くて遠きものといふ事を

年たてばきのふを去年と思ふより心づからや遙けかるらむ

萬葉集の武藏歌になずらへてよめる

○いひなくたしぞ　言ひくさすなど。
○なげきをこる　歎きと木とをかけて樵るとつゞけた。
○哀れと思ふ種　哀れと思ふ原因
○天橋立　丹後與謝郡宮津灣（與謝海）の西側の沙洲。
○雲居　宮の居る處。大空。
○千世の古道　山城葛野郡朝原山永劫傳はるべき神ながらの古道と言ひ掛けた。
○たどらめや　尋ね迷ひ歩かうか決して道に迷はぬ。
○心のさが　心のならひ。千世の古道のある嵯峨の地名をかけた。
○日本紀竟宴　日本書紀の講が終って宴を開き書中の事を題にして歌よむこと。
○いかづち云々　壬中の亂の鎭まったことをいふ。
○うけひしこと　祈誓したこと。天武天皇が皇后草壁大津高市河島忍壁志基の諸皇子互に扶けて異心なく天勅に忤はぬ事を盟はしめられたのをいふ。
○神直日神　伊邪那岐命が日向橘小門の檍原で禊をなさつた時生まれ給うた禍を直す神。
○まがつび　八十禍津日神大禍津日神。伊邪那岐命穢き國に到り給うた時の汚れから生まれられた禍の神。
○近くて云々　枕草子にいくつも擧げた中に「十二月の晦日正月一日の程。」

ちゝの實の秩父の山の春がすみはる立ちしよりあさな〳〵たつ

いざさらば朝菜つましむさし野のをぐきが雪も打ちとけにけり

時つ風沖吹くらしもむさしの海もゝ舟人ぞふなよそひする

むさし野はしもと萱はらしげければさやにも見えぬ玉の横やま

春草はまだうらわかしむさし野のをけら花さく秋まちて見む

いりまぢの廣瀨の森にぬさたてゝ大屋原(おほやはら)に御祓しに行く

　人のから歌つくりてと求むるに久しうさるわざもせでおぼつかなければ

かぢをたえ年經ぬる身はからごとに舟こぎよせむよしも知られず

　やんごとなきおまへより歌かかむ料にとてうるはしき紙どもあまた賜ひけれぱ

今よりは波にあらさじもしほ草あさなゆふなにかきあつめつゝ

　大窪天民のもとに土瓶をおくるとて

冬ごもるまどのすさみに雪を煮てきよきこゝろの友とせよ君

　遠き國の人のもとにふみやるとて

遠つ人かりしかよはば山河もおもふこゝろを隔てましやは

　大學のかうのとのの谷中の莊を見侍りて

○ちゝの實の　ちゝの枕詞。
○秩父の山　武藏國秩父郡の山。
○朝菜　朝の食料。萬葉集「いざ兒ども香椎の瀉に白妙の袖さへ濡れて朝なつみてむ」
○をぐき　岫。山の洞のある處。萬葉集「武藏野の小岫が雉子立ち別れいにし宵よりせろに逢はなふよ」
○ふなよそひする　舟を乘り出す用意す。艤す。
○しもと萱はら　枝の茂くある若替した萱の生えた原。
○さや　さやか。はつきりと。
○玉の横やま　武藏國多摩川の南の丘陵。
○をけら　うけら。蒼朮。
○いりまぢ、廣瀨、大屋原　武藏入間郡。萬葉集「伊利麻治のおほやが原のいはゐづら引かばぬらぬらぬわにな絶えそね」
○から歌　漢詩。
○もしほ草　鹽を採るため潮水を注ぎしました海藻。書き集めの緣語。
○雪を煮て　茶をたてる。
○かりしかよはば　雁が通つたら蘇武の故事から雁は書信の義。
○大學のかうのとの　大學頭殿。

おのづからふみのはやしの陰なれば霜のにしきの色ぞことなる

述懐

月花に身をまかせてぞ過すべき世のことわざはさもあらばあれ

おなじ世に同じすさみの友もがなふるごとしのぶ心かたらむ

述懐非一

さま〲におもひぞいづる憂しといひ嬉しといひて過ぎし昔を

獨述懐

ともすればとはずがたりぞせられける心ひとしき人しなければ

ことの葉の道はかた〲わかるともたゞ我のみや昔しのばむ

いざといひてともにそむかむ人もなし世はうきものと思ひ知れども

海邊述懐

なげかめや磯のしら玉みがくれて人に知られぬたぐひある世に

ものおもふ頃ひとりごとに

うきをだにあひかたらはむ人しあらばかくまで物は思はざらまし

懷舊

ともすればふりぬる世とてしたふ身を老のさがとな思ひくたしそ

○ふみのはやし　書物の澤山ある林に大學頭の林氏をかけた。
○世のことわざ云々　世間のしごとはまゝよ如何やうともなれ。
○ことの葉の道　歌の道。
○かた〲　方々。諸方へ。
○そむかむ　世を遁れ避ける。
○磯のしら玉　海岸の眞珠。
○みがくれて　水の中に隱れて。
○人に知られぬ云々　人に知られぬといふ自分と同じ類がある。
○ものおもふ　煩悶する。思ひ煩ふ。
○老のさが　老人のならひ。年寄のくせ。
○くたし　けなす。おとす。

秋懷舊

むかしへをこふる涙と露しぐれいづれか秋にふりまさるらむ

月前懷舊

おもかげも見し世に似たる秋なれば月の鏡もむつまじきかな

いつとてもかはらでむかふ秋の月見し世の人もかからましかば

有りし世をしのぶが露にかげやどす月もむかしや忘れざりけむ

寄夢懷舊

人の世は夢にもがもな夢ならばさめて昔に立ち歸らまし

いかでわが身をといふ句をおきて懷舊の心を

年ふればたゞ夢とのみたどる世にいかでわが身をうつゝとも見む

夢

數知らず宵々ごとに見る夢をむつのしなとは誰かさだめし

往事如夢

しげりあふ夏野の蝶もしのぶらむ花にむつれし春を夢とは

月前無常

おもふどち月見るたびのくりごとにあらましかばといふが悲しさ

○見し世　自分が經過した昔。
○月の鏡　晴れわたつた月。鏡とおもかげと緣語。
○しのぶが露　忍草の上におく露　世を忍ぶとかけた。
○夢にもがもな　夢であつてくれ
○昔に立ち歸らまし　昔に立ち返らうものを。
○夢とのみたどる　人生を夢だとばかり思つて迷ひ歩く世。
○わが身云々　どうしてわが身だけが夢でない現だと思はれるものか。
○むつのしな　六種。周禮春官占夢「以二日月星辰一占二六夢之吉凶一」とあつて正夢、噩夢(愕夢)思夢寤夢喜夢懼夢をあげた。
○あらましかばといふ　何某が世に生きて居たならばと亡き人を慕ひいふ。後拾遺集「世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くもなりにけるかな」

蒼生子が身まかりて後七とせになりける頃ぬひ子がもとにて春雨ふる日むかしをしのぶといふことを

春雨はさびしかりけりつれ〴〵を訪ひ訪はれつる人しなければ

標照が十三年の忌に夏懷舊

かくしつゝこゝらの年をふるものは五月の雨となみだなりけり

貞樹がみまかりける又の年の五月に有りし世を思ひ出でて

有りし世をしのびぞ出づる郭公なほふる聲をきく心地して

みす子が一めぐりに吉澤寧卿がもとめにて橘のもとに去年をしのぶといふことを

誰が袖に今はよそへむ橘のこずゑはもとの香ににほふとも

枝直のみまかりぬる時千蔭がもとへよみておくりける

世をへてもとこはなるてふ橘のあきにあへじとおもはましやは

おなじ人の十三年の忌に月似古といふことを

秋をへて人はふりにし宿ながら月はむかしを忘れてぞすむ

紅葉を見てむかしをしのぶ

手向とてをる袖しほるもみぢ葉にあまたしぐれの秋はへにけり

○蒼生子　荷田蒼生子。春滿の女在滿の妹。天明六年歿。
○ぬひ子　菱田縫子。蒼生子の門人。
○こゝらの年　數多の年。
○ふる　年を經ると五月雨の降るとかけた。
○ふる聲　昔のまゝの聲。古今集「五月待つ山時鳥うちはぶき今も鳴かなむ去年の古聲」
○一めぐり　一周忌。
○誰が袖　古今集「さ月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」「色よりも香こそ哀れと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」
○よそへむ　寄せ比べようか。
○枝直　千蔭の父加藤枝直。姓は橘氏。
○とこは云々　萬葉集「橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいや常葉の樹」
○あきにあへじ　秋に堪へられまいとは。
○をる袖しほる　紅葉を手向けるために折つて時雨に袖ぬれて。

長月すゑつかたむすめのきく子みまかりて七日にあたりける日そのはか
　にまうでて菊の花など折りて手向くとて
はなつむもわりなきわざぞ先だちて我こそかくはとはるべき身に
　その頃ちえ子がもとより「物思ふ袂のひづやいかならむなべての世さへ
　時雨降る頃」とある返し
なべて世の露もしぐれもこの頃はたもとのものと侘びつゝぞふる
　また千蔭がもとより神無月になりて殘れる菊にそへて「秋くれてのこれ
　る菊も有るものをわすれがたみもなどやとゞめぬ」とある返し
秋くれしきのふの菊のそれならば花は散るとも香や殘らまし
　きく子は子をうみてうせけるがその子も生せずなりにければかくなむ
　千蔭みまかりて七日にあたりける日菊花一枝おくるとて
おもひきや山路のきくを手折りもて袖に涙のふちなさむとは
　冬に成りて人々とともに芳宜園につどひて歌よみける時閑庭霜といふこ
　とを
おもひきやかれ生（ふ）の霜をふみわけてはぎのあそびの跡とはむとは
　去年の秋芳宜園に梅をうつし植ゑたりけるにその秋翁みまかりにけり春

○わりなきわざ　道理もないめちやくちやなこと。
○我こそ云々　自分こそ此の通り花摘み手向けて弔はるべき。
○ひづやいかならむ　如何に濡れることだらう。
○たもとのもとの云々　自分の袂に降るものと涙に袂ぬらして歎きながら世を經る。經るに時雨の降るをかけた。
○生せず　育て上げず。
○涙のふち云々　涙が袖に淵と湛へようとは思ひも寄らなかつた。
○芳宜園　加藤千蔭の邸。
○かれ生　草の枯れた地。

○ふる江云々　萩を古枝草といふ芳宜園の名によつて心隔てなく情をかけよ。
○あせぬとも　水はたとひ涸れてしまつても。千蔭はなくなつても
○石濱　淺草の今戸橋場附近一帶の地。
○つみはやす人　咲いた菫の花を摘んで賞めはやす人は何處に行つたか。
○それか云々　亡き人かと見たか
○うきせとは　うきせとは思ひ知るらむ。うきせは憂き瀨、つらい厭はしい處。川水の緣語。

になりてその梅の咲きそめたるをもせ子の許より見よとて一枝をりておこせたるによみておくりける

花さかばつげむといひし園の梅かたみに見むと思ひかけきや

千蔭なくなりて後ちえ子のもとより歌ども書きつらねて見せにおこせたる草子のはしつかたに「水かれしふる江にたてる草の名にうらなく露のなさけかけてよ」とあるかへし

もろともにもとの心をくみて見むふる江の水はよしあせぬとも

おなじ頃ちえ子が石濱の莊にてよめる歌を見てその心にこたへたる歌

つみはやす人やもいづこ誰が爲に垣根のすみれ春をわすれぬ

なき人をこふるなぎさにかげうつす花のおもてもそれかとや見し

いとゞ君おもひしるらむ川水の行きてかへらぬ世をうきせとは

千蔭が一めぐりの忌に紅葉送秋といふことを

もみぢばの過ぐるならひをなげきつゝことしも秋に又や別れむ

また題をさぐりて暮秋懷舊といふことを

とゞまらぬ秋はあはれといひ／＼て昔やいとゞ遠ざかりなむ

おなじ人の三とせの忌に月添秋思といふことを

春秋のすさみはあまたあるが中に月をあはれといひし君はも

神祇

神代より神のたからととる弓をまもりとなせる國ぞこの國

天地の神やかためし萬代にたててうごかぬ國のみはしら

手くさとり瓮（みか）ほりすゑてたか玉のしゞに神代の例をぞ見る

寄榊神祇

百千々の世にもうごかじ天地の神のかためし大和島根は

かぐ山やみねのまさかきいく代經てしみさびけらし神の御前に

住吉

たぐひなき光にもあるか住の江の磯たちならす波の上の月

揖取神社

かとりがた百舟人のぬさたつる神のみやゐはいく世へにけむ

社頭榊

とこしへにみむろのさかき榮ゆくは神代の種やいはひとゞめし

社頭水

ゆく河の淸きなぎさと萬代にいはひ初めけむみくまりの神

〇神のたからとる弓　神の寶として執る弓。神樂歌採物、弓「四方山の守りに賴む梓弓神の寶に今しつるかな」
〇手くさとり　手に持つて歌ひ舞ふものを手に執つて。
〇瓮ほりすゑ　古昔酒を釀す酒瓮を土を掘つてすゑ置いて酒を釀したまゝ神に奉つたのでいふ。
〇たか玉のしゞ　玉に緒を通して竹につけた竹玉がしゞさ數多く。しゞには繁くの意。萬葉集「いはひべをいはひ掘り据ゑ竹玉をしゞにぬきたり」
〇かぐ山　大和磯城郡天の香具山
〇しみさびけらし　繁つて古く神神しくあるのは幾代經たのか。萬葉集「大和の青香具山は日の經の大御門に春山としみさびたてり」
〇かとりがた　下總香取郡香取浦揖取の字もあてる。
〇みむろ　神を安置し奉る室即ち神社。
〇いはひ　祀り。
〇みくまりの神　山から流れる水のわかれる處即ち分水嶺にましますす神。

人の賀によもぎが島をつくりたる洲濱に添へて

とこしへによもぎがしまの島山をありかよひつゝ君こそは見め

宗什が四十の賀に

かくしつゝ千世もへなまし松風の聲をともなる宿のあるじは

こは茶を好む人なるによりてかくなむ

原澄法師の四十の賀に

山まつのかげをしめたる宿なれば苔の袂ぞ千世のどかなる

白川少將君の五十賀に

をす國のしづめなれとて民ぐさも千世もと君をいのらぬはなし

濱田の君の五十の賀に

咲く花もさかゆく色を見するかな君が千とせの春を待つとて

佐賀の君の六十の賀に、寄鶴祝

海原や千里の波にとぶ鶴のはるかなる世は君ぞ知るらむ

寛齋市河翁の六十の賀に六種のものを題にてよめる歌

硯

君にこそたぐへては見め常磐なる硯のいしの命ながさを

○よもぎが島　蓬萊の島。
○ありかよひ　馴れ通って。
○松風の聲　茶の湯の釜に湯の沸く音をたとふ。
○苔の袂　僧衣。
○白川少將君　松平定信。
○をす國　天皇の治め給ふ國。しづめ云々は鎭め護るものであると言うて。松平定信が老中の上席將軍の輔佐となつてゐたのでいふ。但し定信五十歳は文化四年で致仕後十數年になる。
○民ぐさ　人民。
○海原や云々　千里も遠い廣い海の波の上を飛ぶ鶴。
○寛齋市河翁　上野の人。儒者。昌平黌の學長となり後寛政五年富山藩に聘せられた。文政三年歿。長子米庵書家として有名である。
○常磐なる　永久變らぬ。

筆

世に遠くかをらざらめや筆の上に生ひ出づる花はいろことにして

墨

おのづから老いせぬ宿のすさみとて千世も匂はせ松のけぶりを

紙

市にうる紙もまれにやなりぬらむ君が言葉を世に傳へなば

琴

つま琴の玉のひゞきは聞きなれつ聲しる人のたぐひならねど

杯

もろ人の君にすゝむるさかづきを我もくみてぞ千世は契らむ

千蔭が六十の賀に磯山にさくらの花咲きたるかたを洲濱につくりて波にはなのうつれるかたを杯のまきゑにかきてその櫻のもとにおけり

わたつみのとこよの波にかげうつす磯山ざくらあかずもあるかな

同じ人の七十の賀に栗櫪(くりかや)の實鳥の子をもりたるらいしに結びつけたる歌

くりかへし千世はよばなむ思ふどちかひある春をいはふまとゐに

人の七十の賀に鶴を

○松のけぶり　墨は松の煙を固めて作つたものだからいふ。

○市にうる云々　晉書文苑傳の左思が成都賦三都賦を作つた時華壯麗で世人が競うて傳寫して「洛陽爲レ之紙貴」と云はれた故事。

○聲しる人　知音。列子「伯牙善鼓レ琴鍾子期善聽(中略)子期死。伯牙斷レ絃。以レ無二知レ音者一。」

○わたつみ云々　海中にある不老不死といふ樂土の濱。

○栗櫪　くりのみかやのみ。

○鳥の子　鶏卵。

○らいし　擂子。菓子などを盛る高坏に似た器。

○くりかへし　繰返しに栗と櫪をかけた。

○かひ　千世を呼び萬歳を叫ぶかひがある。かひとかひ(卵の古語)とをかけた。

○千世もすめ君　千代まで住み給へよ君よ。
○高き門　前漢書列傳「定國父于公。其門閭壞、父老方共治レ之。于公謂曰。少高二大門閭一令レ容二駟馬高蓋車一（中略）子孫必有二興者一。」の故事。
○みどり　綠は六位の袍の色。
○あけ　緋は五位の袍の色。紅葉して紅に染る秋を待たずして緋の袍を著るやうになられよ。
○しき波　繁く重なり寄せる波。

天とぶや鶴の毛ごろも袖たれてきつゝならさむ千世も八千世も

年のくれに人の七十の賀に

あたらしき春待ちつけむ宿なれば若返りつゝ千世もすめ君

人の八十の賀に

すゑ遠き千とせの坂にくらぶれば八十路は老のふもとなりけり

神原ぬしのあらたに司賜ひたるをよろこびて

馬車引き入れつべく今よりはいとなみつくれ高き門をも

しはすばかり大久保忠陽ぬしのつかさえ給へるを歡びて

袖のいろのみどりは春に先だてつあけにも染めよ秋またずして

人のむことりしたるをいはふとて浦鶴といふことを

しき波に千世のよはひやちぎるらむ浦わの鶴の翅ならべて

祝

天地の神も知らじなかばかりに治まりにける御代のためしは

春祝

朝日さす高嶺の松に千々の世をたちかさねたる春霞かな

夏祝

○あやめ草　菖蒲草は根が長いこと賞美するので長い譬へに引く。新勅撰「深き江にけふあらはるゝ菖蒲草年のを長き例にぞ引く」
○あがた人　田舍の人。
○年ある秋　穀物特に稻のよくみのつた秋。豐年。
○秋ごとに賜ふつかさ　古、毎年八月十一日に定考（かうぢやうとよむ）と言つて六位以下の人の才能功績を考へ定めて官爵を賜はつた。
○足穗　垂穗。實が熟して垂れた穗。
○あせぬ　色がさめない。
○ほしのやどり　星宿。星座。
○とはに　永劫に。
○世こそ安けれ　世は太平安穩である。

限りなきいのちつぐてふあやめ草君が爲にぞけふはひかまし

秋　祝

あがた人つどふ市路にことゝへば年ある秋と答へぬはなし

秋ごとに賜ふつかさの數そふもをさまる御代のためしとぞ見る

秋祝言

宿ごとに千五百の稻をかりつみて足穗（たりほ）の秋をいはふ里かな

冬　祝

霜ゆきにあせぬとこはの深みどり千世まつがえの操をぞ見る

寄星祝

君が代はほしのやどりをいく千度行きめぐりても盡きせざるらむ

寄巖祝

きみが代は下つ岩根のかたければとはにうごかぬ宮ばしらかな

雲かゝる松さへおふる岩ほこそ動きなき世のたぐひにはせむ

寄弓祝

梓弓引きこゝろみてよも山の守りわすれぬ世こそ安けれ

寄龜祝

おのが身にいたゞく島の名もしるく龜のよはひや常世ならまし

寄松祝

しら雲に枝さしかはす峯の松としの高さもかかれとぞ思ふ

花有喜色

いづる日のひかりににほふ朝露をまちよろこべる花の色かな

竹遐年友

明暮にかはらぬ友と君し見ば竹のこゝろも千代になびかむ

竹不改色

君がすむ宿のうゑ竹千世ふともあせぬみどりの色をこそ見め

多

きみが代のたひらの宮のやちまたに行きかふ人ぞ數も知られぬ

舊

日かげ草かづらにすなる手ぶりこそ神代のまゝの例なりけれ

玉梓はとるもあやなし紫のはひおくれたる色と見しより

低

品ひくき身はつるばみの布衣袖のあさぎも思ひかけめや

○おのが身云々　蓬萊山を龜山こいふ。拾遺集「龜山にいく藥のみありければこゞむる方もなき別れかな」
○常世　永久不變なこゝに蓬萊山を常世の國卽ち不老不死の樂土こ言ひかけた。
○かかれ　かくあれ。

○竹遐年友　竹は永遠の友である

○うゑ竹　植ゑた竹。
○たひらの宮　平安宮。
○やちまた　澤山わかれてゐる道の辻。
○日かげ草　日陰の蔓。
○手ぶり　風習。
○玉梓は云々　手紙は手にとりあげるかひもない。
○紫の云々　紫のゆかりの色もさめたと思ふので手に取るかひもない。はひおくれたるは、紫色を染めるに椿の灰を加へるその灰がなくなつた意で紫の色さめるのをいふ。
○品ひくき　身分の低い賤しい。
○つるばみ　橡の實の皮で染めた色。

後

われとわが身をしよそへど石の帶のうはてさすをば見るよしぞなき

釋教

世の塵につゆもけがすなこゝろもて心をあらふ法のもろ人

勸持品

たぐひなき薫を世々に傳へよと御法のはなやひらけ初めけむ

如是相

水の上にうつろふ月のおもかげはありと見ゆるも何かつねなる

自寛が家のうちの一間に觀音大士を安置して供養しける日水晶の數珠をおくりけるにその箱のふたに書きつけける

曇りなき思ひの玉を手ならさばたのむ誓ひやたがはざるらむ

おなじ時人々と共に題をさぐりて發大清淨願といふことを

人はみなひろき誓ひの海をへてにごらぬ法のこゝろともがな

ひじりの御代の

いにしへのひじりの御代のためしにも思ひくらべむ時ぞこのとき

かひやなからむ

〇よそへど　裝ふけれど。
〇石の帶　せきたい。束帶の時袍の腰をしめる帶。
〇うはて　上手。石帶の一部分。石帶の腰をしめる部分の下手に一端をとりつけ他端を着用の時下手にはさむ。
〇勸持品　法華經卷五、第十三品。
〇御法のはな　法華。
〇如是相　法華經所說十如是相の一。法の如く外に顯はれる種々差別の相貌。
〇何かつねなる　何が常住であらう。皆水に映つた月影の如く世相はすべて實體のない空である。
〇觀音大士　觀世音菩薩。
〇手ならさは　つかひならしたならは。
〇たのむ誓ひ　賴みにする佛の衆生を救はうといふ誓願。
〇ひろき誓ひの海　法華經普門品「弘誓深如レ海」弘誓は佛菩薩の衆生を救はうとされる廣大無邊の誓願。

したふともかひやなからむ今日わかれあすは野山を行き隔てなば

みやこの手ぶり

もろ人の昔をしのぶことばこそならの都の手ぶりなりけれ

かよふこゝろの

君にけさともなひつれて行く鴈をかよふ心のしるべにはせむ

物名

うし

ひるの間のたへぬあつさにならひてや月のかげをもうしと見るらむ

こづみ

瀬をはやみそこつみくづもなかりけり岩間をあらふ瀧のしら波

うつせみ

堰杙(ゐぐひ)うつせみの小河の清き瀬にゆふとりかけて夏はくらさむ

住所をばみ山にうつせみやこ人からきうきよのさが厭ひなば

かにひのはな

一重きるきぬもうきまでいかにひのはなはだしくも照り増るらむ

○かよふ心の　古今集「雲居にも通ふ心のおくれねば別るゝ人に見ゆばかりなり」

○あつさにならひてや　暑さに馴れてくせになつてか。

○月のかげ云々　月影をつらいと見る。憂しに牛をかけた。世說「呉牛見レ月而喘。」

○こづみ　木積。木の屑。

○そこつみくづ　底の水屑。

○堰杙うつ　堰に竝べて杙を打つ

○せみの小河　瀬見小川。山城下鴨村の東を流れて賀茂川に注ぐ。

○み山に云々　み山に移せ都人。

○かにひ　剪夏羅。がんぴ。

○いかに云々　いかに日の甚しくも。

やよひの末つ方人の家にゆきけるに園にれんげ草といふくさの花あまた咲きたりけるを歌よめとありければ

春ふかきそのふにたれもあくがれんげさうぐひすの聲老いぬとも

りうたん

苔むせるいさめのつゞみ誰が世よりうたんうたじもとはで過ぎけむ

あじろ人波におりたちさわぐなりうたんとやする瀬々の堰杙を

折句。

こまむかへ

こぎまよふまのの浦舟むやひしてかぢふりたてよへなみ高しも

あはのくに

あかずみむはるもさかりののづかさにくもかとばかりにほふ櫻は

旋頭歌。

千蔭が家にて萬葉集竟宴しける時題をわかちて慊びうたといふことを

かくしつゝゑひみ笑ひみ思ふ人どち橘のかげふむ庭は千世にならさむ

○あくがれん云々 誰もかれも心空にうかれ出るだらう、今朝鶯の聲はもう老鶯になつても。
○りうたん 龍膽。りんだう。
○苔むせる云々 和漢朗詠集江相公「刑鞭蒲朽螢空去。諫鼓苔深鳥不レ驚。」古昔臣下君を諫める時鼓を打つたそれも君德高く諫鼓を用ゐる事なく苔むして鼓を打たうかどうかと問はないで。
○あじろ人 網代守。
○堰杙を 堰に杙を打たうと。
○こまむかへ 駒迎。古八月十五日諸國牧場から貢進する駒牽の駒を馬寮の使が逢坂の關に迎へること。
○まのの浦 近江滋賀郡眞野。
○むやひ 舟と舟と繫ぎ合はして
○へなみ 海邊の波。
○のづかさ 野原の小高い丘。
○萬葉集竟宴 萬葉集の講義終つて宴を開き集中の事物を題とし歌よむこと。
○慊びうた よろこびうた。
○かくしつゝ 此のやうにして醉つたり笑つたりして。
○橘の云々 千蔭の姓は橘氏であるから云うた。萬葉集「橘の陰ふむ道の八衢に」
○千世にならさむ いつまでも鳴り續かさう。

琴後集卷七

題畫歌

井に朝日うつれりくむ人あり

朝日かげにほへる春のわか水に千世のさかえやくみて知らまし

山里にすむ女子日する所

花かづらかけてや千世も契らましわが住む山のまつの二葉に

わか菜摘むところ

千世かけてちぎる小松のすり衣きてこそつまめ野べのわか菜は

霞を分けて山寺にいる人あり

ゆくまゝに霞む山路ぞあはれなる跡をしも世に隔つと思へば

梅のゑに

鶯もさそはれぬべし梅の花いろ香おぼゆる筆のにほひに

梅の花かけるあふぎに

おのづから風まつうめの香をそへて袂にやどせ春の夜の月

○わか水　立春の日(後には元日)の早朝汲む水。

○子日　正月初子の日野外に出て小松を引いて祝ふ行事。

○小松のすり衣　小松の模樣を青摺りにした衣服。

○跡をしも云々　一寺に入つて跡は俗世間と隔たり離れると思ふので。

○いろ香おぼゆる　本物の梅の花の色も香もあるやうに思はれる。筆のにほひは筆力の風韻。

籬の梅さきたり見る人あり

たちとまる袖さへ香にぞにほふなるかきねの梅のはなの夕風

客人あまた來りける庭にうめの花咲きたる所

つくしがた梅さく宿にまとゐせし昔おぼゆる今日にやはあらぬ

人々あそびしたる所の庭に梅のはな咲けり

梅のはな咲く木のもとにふく笛は聲もかをれる心地こそすれ

梅の花さけるに鷹をすゑて人ゆく

夕風に雪とみだれて散る梅をたもとにはらふ春の狩人

をとこすいがいのもとに笛ふく梅の花散れり

庭もせに梅散るやどは笛竹のふきよる風も香にぞにほへる

うめ散らす風にきほひて吹く笛のよにおもしろき宿の春かな

梅の花あり水鳥あそぶ

霜はらふをしの羽かぜにさそはれて汀の梅の花ぞかをれる

紅梅に鶯

くれなゐの濃染(こぞめ)の梅に一しほのにほひをそへて鶯ぞなく

紅梅の稍の水に入りたるかたを

○つくしがた　天平二年正月十三日太宰帥大伴旅人の邸に集まり梅花宴を開いた時の梅花歌數十首とその序が萬葉集卷五に見える。

○あそび　管絃の遊び。音樂。

○すいがい　透垣。

○庭もせに　庭も狹しと一面に。

○ふきよる　笛竹を吹くと風の吹き寄るとかけた。

○風にきほひて　風に競うて。

○霜はらふ　枕草子「水鳥は鴛鴦いと哀れなり。かたみに居かはりて羽の上の霜を拂ふらむなどいとをかし。」六帖「羽のうへの霜うち拂ふ友をなみをしの獨寢するぞさびしさ」

下水にあらふ錦と見ゆるかなこずゑ波こす梅のくれなゐ

初午いなりまうで男女おほく行きかふ

いなり坂霞のうちに匂ふなりかざしの杉も花のたもとも

わらびをる女かたみひさげなどしてあり

とる手ぞと見ゆるすがたの初わらびかたみに摘むも心こそゆけ

わらびすみれの爲に

春の野をゆくてのすみれ下蕨つみてぞけふの家づとにせむ

つくづくしの繪に

つくづくし春野の筆といふめればかすみも添へて家づとにせむ

女柳の枝をひかへて立てり

袖はへてとる手ぞまがふ青柳のおなじ緑をかさねきつれば

柳おほかる家に人來れり

とふ人の花のたもとぞたゞならぬ柳にこもる宿の夕ぐれ

人の家にやなぎ櫻あり

にしきもてかこふ垣ねと見えつるは柳櫻のかげにぞ有りける

人々花のもとにあそぶ

○初午　二月の第一の午の日。稲荷社の祭。
○かざしの杉　山城紀伊郡稲荷山稲荷神社に詣る人稲荷山の杉葉を折りかざして家に歸る。しるしの杉といふ。新撰六帖(夫木抄にも)「如月やけふ初午のしるしとて稲荷の杉はもとつ葉もなし」
○ひさげ　提子。鍋の形した鐵瓶のやうなもの。液體を入れて提げゆき又酒を入れるもの。
○とる手云々　蕨の芽が握つた手の形なのをいふ。
○かたみ　筐。花や菜をつみ入れる籠。互にの意をかけた。
○春野の筆　つくづくしは土筆と書くのでいふ。
○かすみ　霞。春野の筆に對して墨をかけた。
○袖はへて　袖を延ばして。
○手ぞまがふ　袖の緑と青柳の枝の緑とまぎれる。

櫻ばなあすとだにやは頼むべきあかぬ心に今日はまかせむ

道ゆく人櫻のもとにとまれる

岩ねふむ道ならなくに春の野を行きなづみたる花のかげかな

かへるさもかくて見るべき花ならば誰か櫻に心おかまし

往來たもとゞむる花のにほひこそ春の旅路のほだしなりけれ

道ゆく人櫻の花を見て馬をとゞむ

駒とめてあくまでは見む山櫻たゞに過ぐべき花のかげかは

人々花のもとにねたる所

おもふどち心へだてぬ花のもとに紐ときさけて一夜あかさむ

山里の花咲きたり見る人あり

たち歸りかくとはつげむ山里の花のたよりを人もこそ待て

山里に櫻の花の咲けるに道行く人のいひいるゝ所

山守の心やいづら木の本ははなこそ人を先つとゞめけれ

一枝はわれにまかせよ山ざくら都のつとに折りてかざさむ

櫻の木のもとに弓射る所

さくら散るかげに眞弓を引きつれて肩ぬぐ袖も香にぞ匂へる

○岩ねふむ云々　岩根を踏む險しい道ではないに、春の野は花が咲いてゐるのではか〲しく進まず行きなやむ。

○旅路のほだし　旅路を進む足を繫ぎとめるもの。

○たゞに　徒らに。

○おもふどち　思ひあつた親しいどうし。

○紐ときさけて　下紐を解き放つて。氣をゆるして。

○都のつと　都へのみやげ。

○肩ぬぐ　袒。はだぬぐ。

鳥籠山花ある所

散ることも知らじなとこの山櫻とこしへにのみ春をしめつゝ

大原女の黒木おひたるが花の枝をり添へたるかた

春はまたやつるゝ袖も折る花ににほはすや誰が妻木なるらむ

苗代水に櫻の散りうかびたる所

散る花はせきもとめなで苗代の水の心にまかせつるかな

櫻の枝とつくづくしを籠に入れたるかた

一枝の花にまじへて山づとのあはれを見するつくづくしかな

富士の畫に

咲きつゞく花のはやしを麓にて雲居ににほふ不二のしら雪

蝶のかたかける繪に

咲きさそふ風ものどかに散る花のすがたおぼえて飛ぶ胡蝶かな

山田うつ所にかへる鴈などある所

すきかへす山田の原に引くしめの引きやはとむる春の鴈がね

道ゆく人歸鴈を見たる所

鴈がねの行くかた遠きたかねこそわれも越ゆべき山路なりけれ

○鳥籠山　近江犬上郡。
○とこの山櫻　山の名にとこしなへの意をかけ、下句とこしへにとつゞけた。
○大原女　山城愛宕郡大原村附近の村々から薪などを頭にのせて賣りあるく女。
○黒木　生木を竈で蒸しくすぶらした木。薪にするもの。
○やつるゝ袖　黒木賣のみすぼらしい衣裳。
○妻木　爪木に妻をかけた。
○とめなで　とめてしまはないで
○山づと　山から家へのみやげ。
○花の云々　花の林を麓にして。
○すがたおぼえて　姿にも似て。
○引くしめ云々　木を立て引きわたした縄でも歸つてゆく鴈は引き止められぬ。
○たかね　高嶺。

雲雀のおりゐたる繪に

あがるとも見えぬ春野の夕ひばりすみれの床やわすれかぬらむ

人々春の野にあそぶ

おもふどちすみれ摘みつゝむらさきの根はふ横野に今日はくらさむ

花をめで鳥をあはれむ春の野はこゝろ〳〵のすさみなりけり

曲水宴かきたる繪に

散りうかぶ波間の花のさかづきにふるき例やくみて知らまし

花のもとにより來る波の杯はながれて遠きためしなりけり

もゝの花を女どもの折る所

紅のこぞめの袖と見ゆるかなとる手ににほふ桃の初花

海棠を

春の色を見よとかいたう匂ふらむ錦をはれる花の梢は

山吹咲きたる家に人來て見る

ゆく春をこゝにとゞめよ山吹の花の籬をへだてにはして

よき女藤のはなをもてあそぶ

紫のいろににほへる藤のはなかさぬる袖にいざくらべ見む

○すみれの床　菫の咲く野の雲雀の巢。

○むらさき云々　紫草の根がはえ、ひろがる横野。横野は河内國中河内郡。萬葉集「紫の根はふ横野の春野には君をかけつゝ鶯鳴くも」

○曲水宴　古三月上巳の日水の流れに杯を浮べ酒を酌み詩などを作る行事。

○ながれて遠き云々　古い時代から續いて來た吉例である。曲水の縁で流れてと云つた。

○こぞめ　濃染。濃く染めた。

○見よとかいたう云々　見よとかいたく匂ふ。春色を見よといふのでひどく(いたう)色つやうるはしく匂ふのか。かいたう(海棠)をよみ入れた。

○かさぬる袖　藤襲ねの衣の袖。藤がさねは表は薄紫、裏青。

白牡丹の繪に

月雪のきよきこゝろを一花のにほひにこむるふかみ草かな

神まつる所

神のます杜のまさかき夏たてばゆふしでかけぬ下つ枝もなし

卯の花さけり月あかし

うのはなのにほへる宿はおのづから月の光も世に似ざりけり

卯の花さけるやどをとふ人あり

たちかへり人にもつげむ卯の花のにほひよろしき玉河の里

うのはな咲ける家に郭公を待つ

卯の花ははや咲きにけりほとゝぎす初音もらさばわが宿に鳴け

杉たてるかたに郭公なく所

ほとゝぎす鳴くや杉生の梢より三つのやしろに聲のおちくる

郭公なく山路を女ぐるま行く

郭公聲するかたにひかれなばならはぬ山のおくも分けまし

淀のわたりに舟ありほとゝぎす鳴く

舟よばふ聲にこたへて郭公淀のわたりにをちかへり鳴く

○一花　花一輪。月と雪との二つに對して一つと云うた。
○ふかみ草　牡丹の異名。
○ゆふしで　木綿即ち楮の木から取つた緒を榊などにつけるもの。ゆふを垂れかけたものをゆふしでといふ。
○卯の花　うつぎの花。
○玉河の里　卯の花の名所としての玉河は所在地不明。夫木抄に山城或は陸奥とある。後拾遺集「見渡せば浪のしがらみかけてけり卯の花さける玉河の里」
○杉たてるかた　杉の木立の繪。
○杉生　杉の生えてゐる所。
○三つのやしろ　稻荷山の三箇峯にある三所三座の稻荷神社。
○舟よばふ聲　舟を呼ぶ聲。
○淀のわたり　淀の渡津。山城久世郡。拾遺集「何方に鳴きて行くらむ郭公淀のわたりはまだ夜深きに」
○をちかへり鳴く　元にかへりくりかへしなく。

あやめふく家に時鳥なく

あやめ草下露かをる曙の鳴くやのきばの山ほとゝぎす

雨ふる日人おほく早苗とる

早苗とるかたやいくしろ五月雨にみだれて出づる田子のすが笠

さうぶとる所またかざせるもあり

ふりはへてかざすよどののあやめ草引きおくれたる人もありけり

かざす手もとる手もにほふあやめ草千世をやちぎる心々に

五月五日馬引き出でて見る所

あか駒にしづくらおきてよそへるやま手のつがひを急ぐなるらむ

五月五日駒くらべする所

袖の香も駒の足並(あなみ)もかた分けて神の御前にきそひ出でにけり

たちばなの咲きたる所懸の心を

袖の香に花たちばなをよそへつゝいたづらぶしもあはれそふ頃

蘭の繪に

草も木もこれにしく花なければや匂ひの親と人のいふらむ

たかうな折る所

○あやめふく　五月五日屋根軒端に菖蒲を葺きさす。

○早苗とる云々　苗を取つて田植してゐる處は幾代か廣々さ。代は昔の田地の廣さをはかる單位。

○田子　農夫。

○ふりはへて　菖蒲をかざし連れ合つて。わざ〳〵の意をかけた。

○よどの　淀野。山城久世郡淀川の附近。

○千世をやちぎる　菖蒲の根の長いにつけて萬歳を契るだらう。

○しづくら　下鞍。鞍の下馬の脇に當る草製の毫布團やうのもの。萬葉集「あか駒にしづくらうちおきはひのりて」

○ま手のつがひ　五月三日より四日、時に左右近衛の馬場で騎射があつてその五日即ち第三日は左近衛の眞手結(まてつがひ)騎射の眞の勝負

○かた分けて　雙方にわかれて。

○袖の香云々　古今集「さ月待つ花橘の香をかげは昔の人の袖の香ぞする」

○いたづらぶし　空しく獨りねること。

○たかうな　たかんな。筍。

夏くれば先つこそたをれなよ竹のこは生ひたたぬ程を時とて

すゞみする所

おばしまの下行く水はたれも皆おりゐてむすべ夏なかりけり

河のほとりにすゞみする所

むすぶ手に波間の月をやどしつゝ夏をわするゝ河づらの宿

雨はるゝゆふべ高殿にすゞみする人あり

村雨のなごりすゞしき高殿に千里をかけてゆふ風ぞ吹く

いづみに月の影うつりたるを女ども見るほどに大路を笛吹きて行く人あり

水のおもに月だにやどる宿をおきていづくに笛の音をすますらむ

女のあふぎもたるかたを

なつかしき風のやどりと手ならすや誰にあふぎの名を頼むらむ

桐の葉の散りたるかた

もろく散るならひも嬉しかからずば桐の廣葉や月にうからむ

白萩の繪

夕月の影かと見しはしらはぎの露ににほへる下枝なりけり

○なよ竹　細くしなやかな竹。

○おばしま　勾欄。

○夏なかりけり　拾遺集「松陰の岩井の水を掬びあげて夏なき年と思ひけるかな」

○宿をおきて　家があるのにそれをさしおいて。

○あふぎもたるかた　扇を持った繪。

○手ならす　手に持ち馴らす。

○あふぎ　逢ふと扇をかけた。

○かからずは　かくあらずは。桐の葉がもろく散らないならば。

○月にうからむ　月見る邪魔になって心苦しく思はれるだらう。

七くさの花をかける繪に

からにしきひもとく花の七くさに秋のあはれをあつめてぞ見る

女郎花の繪に

いく秋も色しあせずばをみなへしなに一時の花とやは見む

馬にのりたる人秋の野を行く

かり衣秋野の露にぬれにけりをばなあしげのこまにまかせて

野の花さかりにひらけて人々あつまりて見る又かりとる所もあり

おりたちて見るもたをるもやちぐさの花に心をひかれぬはなし

秋の花どもうゑたる所

いろ〳〵の蟲の音ながら移しきて花野の秋をしめし宿かな

秋海棠の繪に

いかなれば秋野の露の下草に春のにほひを猶とゞむらむ

野の宮のかたかける繪に

夕露をよすがに月もとひてけり秋野の宮の花にほふころ

琴のねもすみやまさらむ秋の野の小柴がもとに月やどる頃

家に女月を見る

○花の七くさ　七草の花。花の七さほり。
○秋のあはれ　秋の興趣。
○色しあせずは　色がさめないならば。しは强め辭。
○なに　どうして。
○一時の花　古今集「秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花もひと時」
○をばなあしげ　尾花葦毛。馬の毛色の名。尾花葦毛にかけた。堀川百首「關のこに尾花葦毛の見ゆるは菝御牧の駒を引くにかあるらむ」
○やちぐさ　多くの草。
○蟲の音ながら　蟲の聲もそつくり其の儘。
○春のにほひ　秋海棠を秋の海棠と見て春咲く海棠の色香と云うた。
○野の宮　内親王又は女王が齋宮又は齋院に定まつて齋戒のため御籠りになる宮殿。
○夕露をよすがに　夕暮の露をたよりとして。

ふるされしうき身のともと見る月はよもぎがもとの心しりきや

月夜に女の家にをとこゐよりて居たり

うちつけに人まつ蟲もなくものを月をのみやは君やどすべき

女車をたてて月を見出したる

玉すだれかげあらはなる小車におもなきまでぞ月はすみける

秋の月おもしろきに池ある家

すむ人のこゝろをさへにくみて見む月おもしろき宿の池水

は月ばかり鴈の聲まつかた

かつしかのわさ田かる男にこと問はむ初鴈がねの聲は聞きつや

駒迎見る女車あり

月をさへ隔つる松のしたすだれおぼつかなしやきり原の駒

人の賀の屏風に海のほとりに人々月見たる所

わたつみのかざしの花と見ゆるかな月ににほへる沖つしら浪

鹿のひとり立てるかたを

たちあかす夜をやわぶらむ野べの鹿ゆめかたらはむ妻しなければ

大[illegible]何がしの七十の賀に菊の花の咲きたるかげに水のながれたるかたか

○ふるされし　厭ひ捨てられた。
○よもぎがもと　蓬の生ひ茂つて荒れた下。荒れた家の侘しい身。
○うちつけに　卒爾。だしぬけに。
○人まつ蟲　待つと松蟲とかけた
○車をたて　車を停め榻に立て。
○おもなきまで　恥かしくてきまりがわるいまでに。
○すむ人　住む人。池水の澄むをかけた。
○は月ばかり　陰暦八月ごろ。
○かつしか　武藏隅田川の東一帶の地。今東京本所區に屬する一部を含んで葛飾郡と云うた。
○駒迎　毎年八月諸國牧場から貢に奉る駒牽の駒を左馬寮の使が逢坂關に迎へる年中行事。
○したすだれ　牛車の簾の内側に懸ける帷、簾の下まで外へ垂れる。
○きり原　信濃東筑摩郡桐原。古昔牧場があつたらしい。霧をかけた。
○わたつみ　海の神。
○ゆめかたらはむ　攝津風土記によると雄伴郡夢野＝刀我野に牝牡の鹿が居て牡鹿が背に霜の降つた夢を見牝鹿が凶夢で淡路島へゆくなと告げた、牡鹿は島戀しくて渡つてゆくと殺されたといふ傳説。

ける綸をおくるとて淺田ぬしがこれの歌よめと有りければ

かげさへもにほへる菊の下水に千とせの秋をうつしてぞ見る

稲ほしたり

里ごとにたりほの稲をかけほしてかひある秋のほどぞ見えける

茱萸袋のかたかける綸に

山人のけふのためしのいく藥かけてやちよの秋をちぎらむ

紅葉の折枝をかける綸に

一枝にみ山の秋をしらするやたが家づとのすさみなるらむ

箱根山もみぢおほかる所

箱根路はもみぢしにけり旅人の山分衣袖にほふまで

山里にかりする人來れり

かりくらし一夜は寢なむ山里にのこるもみぢを明日も見がてら

綱代に紅葉のよせたる所

散るもみぢ瀬々のあじろにかゝらずば昨日の秋を波に見ましや

あられ降る野をゆく人あり

旅人のしばしたちよるしもと原うちしきるまでふる霰かな

○たりほ　垂穗。實熟して垂れた穗。
○かひある　勞苦のかひある。かひ(頴＝穗のまゝの稲)をかけた。
○茱萸袋　ぐみぶくろ。茱萸を入れた袋。昔九月九日邪氣を攘ふために掛けた。此の日茱萸を挿し丘に登つて菊花酒を飲むと邪を除き災を避けると支那の昔の風習。
○いく藥　不死の藥。
○山分衣　山路に分け入るに著る衣服。
○かりくらし　獵りをして一日を暮して。
○昨日の秋　綱代が構へられ紅葉が散つて冬となつたのでいふ。
○しもと原　葼原。枝の茂つた若い木立の原。

女すだれのもとに立ちて雪の木に降りかゝれるを見る

はなとのみ梢に雪は散るものをふりすててやはたゞに過ぐべき

あがたの家に翁雪を見るをさなきもあり

はしりでに大雪ふれりいざ子どもほだ焚きそへよ翁さびせむ

高殿に雪見る人あり

雪ふれば千里もちかしおばしまのもとよりつゞく不二の柴山

山里に住む人雪のふるを見る

雪つもる軒のむら竹うちふして道みぬ山もあらはれにけり

雪のあした鷹がりしたる所

みゆき降るあだの大野の朝狩にきほひて出づる雲の上人

雪ふる日山里をとふ人あり

おもしろく降るしら雪のふりはへてたが冬ごもる宿をとふらむ

雪の降りたるに人々舟に乗りて見る

ゆく河のいづくはあれど雪つもるこの松かげにむやひして見む

雪つもる入江のとまやきしの松みどころおほき舟路なりけり

屏風の繪にこしの白山のかたかけるを

○ふりすてて云々　振り捨てて眺めず空しく過すべきであらうか。ふりに雪の降りをかけた。
○あがたの家　田舍家。
○はしりで　家の門口。
○ほだ　榾。焚物の木。
○翁さび　年よりじみる。年よる。
○おばしま　勾欄。
○柴山　小さな雑木の生えた山。
○あだの大野　大和宇智郡阿陀。
○ふりはへて　わざ／＼。雪の降るをかけた。
○いづくはあれど　何處もみな面白くはあるけれど。
○むやひ　舟を繋ぎあはす。
○とまや　苫屋。苫葺の小屋。
○こしの白山　加賀の白山。

はなかなこしに有けてふしら山をゆき見て誰かかくはえてせし

月次の屏風の料　十二月小鹽山

大原や神のみやつこきよめすな玉しくばかり雪のつもれる

神樂せる所

わざをぎの昔おぼえて人長（ひとをさ）がたちまふ袖も神さびにけり

年くれて竹ある家

かねてより春の色なる竹垣は年のさかひもへだてざりけり

松に朝日の繪

すみの江の波もにほひて朝日子が影さしのぼる岸の松かさ

小倉の君の六十の賀に松の繪に書きつけける

もろ人の千世にまさへとうたふにぞ山松がえも聲あはせける

道行く人きしのほとりなる松のもとにやすみて波のよるを見るかた

波あらふみなぎは清しいざこゝに松がねまくらしばし結ばむ

松と竹と栽ゑたる所を女みる繪に

おもふことかはらぬ中もならはばや千世のどちなる松と竹とに

靈芝の繪に

た。

〇小鹽山　山城乙訓郡大原山の別名。麓大原野に大原野神社がある

〇神のみやつこ　神社に仕へる賤しい召使。

〇きよめ　掃除。

〇わざをぎ　滑稽な歌舞をして神や人を慰める演技。又其の人。

〇人長　にんぢやう。神樂の舞人の長。

〇神さびにけり　神々しい。

〇かねてより　前から。春にならぬ前から。

〇すみの江　攝津。

〇波もにほひて　波も色づくやううるはしく輝いて。

〇影さしのぼる　岸の松に影がさして朝日がのぼる。さしは笠の縁語。

〇もろ人云々　千世までませと諸人が歌ふ。

〇千世のどち　永久かはらぬ親しいどうし。

〇靈芝　萬年茸ともいふ。菌の一種。觀賞用。

たぐひなき種とこそ見れ石の上に千とせをかけておふる初草

岩の上に鶴たてり

岩のうへに羣れゐるたづも夕しほのさすにひかれて浦傳ひせり

鶏の繪に

明けぬとて先づ告げそむる初とりの聲にこたへて鳴くやこゑかな

きぬ〴〵にうきをかこたむ鳥の音を老はねざめの友とこそ聞け

龜の繪に

うきにすむものとないひそ河かめのにごりになるゝ身ぞやすけなる

壽星の繪に

千世つまむためしに見よと此の神のかしらの雪や高くかさねし

うさぎの繪に

くれそむるを花がもとの白うさぎ月の影かと見ぞまがへつる

桃花源の繪に

かくれがの春やいくよの名殘ぞと花ものいはば問はましものを

竹取の翁の繪に

あはれとて世にやつたへしなよ竹の此の一ふしの昔がたりは

○初草　若草。

○たづ　鶴。

○初とり　曉の一番鷄。
○やこゑ　曉に多くの鷄がくりかへし鳴く聲。

○うきにすむ　泥に棲む。

○壽星　人の壽命を司るといふ星南極老人星といふ。こゝは其の化身である壽老人をいふ。七福神の一。白髮で杖を持ち鹿を伴ふ像で表はしてある。
○千世つまむ　千世を積み重ねようとする。

○桃花源　晉の陶潛の桃花源記による武陵の漁人が遡った理想境。
○春やいくよ云々　和漢朗詠集「桃李不レ言春幾暮。煙霞無レ跡昔誰栖。」
○竹取の翁　竹取物語の人物。
○此の一ふし云々　この一段落の昔話。ふしはなよ竹の緣語。

楽うちゐる所

何ゆゑのすさみなればか諸共にあくごも知らでうちむかふらむ

白川少將殿にて人々なみゐたるさまを繪にかかせ給ひてこれに歌ひとつ

とあるにおのがかたもそのうちにあれば

をりにあふも嬉しかりけりうつしゑに姿とゞむる今日のまとゐは

女のつらづゑつきたる所

涙のみはらふおもてにつく杖のかひなの世とや思ひしるらむ

うかれめの舟に乗りたるかたを

さだめなきよるべを波にまかせつゝつながぬ舟ぞ身のたぐひなる

京の家に市女來り酒うる

もろともに醉をすゝめよ立ちまじりおのがあがたのこと語るとて

そほづの繪に

大かたも田子はうきにぞたちならす袂そほつはなればかりかは

茶具いるゝうつはの繪に歌かけと人のいひければ

雪をにるすさみもうれしかくれがの松のあらしに心すむ夜は

ゆふの山の繪に

○あくご　厭く期。ごに碁をかけた。

○白川少將　松平定信。

○うつしゑ　寫生畫。

○つらづゑ　頬杖。

○かひなの世　かひなき世。腕(かひな)をかけた。

○うかれめ　遊女。

○市女　市に來て物を賣る女。

○あがた　田舍。

○そほづ　案山子。

○田子云々　農夫は辛いことに馴れてゐる。

○袂そほつ云々　袂のぬれるのは汝案山子ばかりであらうか。そほつ(濡れる)をそほづ(案山子)にかけた。後撰集「明け暮らし守る田のみを刈らせつゝ袂そほづの身とぞなりぬる」

○雪をにる　雪を煮て茶を立てる

○松のあらし　茶の湯の釜の湯が沸く音を松風といふにかけた。

○ゆふの山　豐後速見郡由布嶽。木綿山。

萬代に神さびたてるゆふの山そら行く雲もふもとなりけり

あさま山の繪に

あさま山神のいぶきの霧はれて雲居にたてる夕けぶりかな

二神の繪に

千萬のよにも動かじふた神のゆきめぐらししあめの御柱

よもぎが島に玉のうてななどあるかた

これやこの家路わすれて浦島の妻どひしけむわたつみの宮

海のほとりに風ふき浪たつ

風をいたみ渚に舟ぞよせ來なる明石の門浪(となみ)音もとゞろに

瀧の繪に

誰がためにさらせる布ぞ春は花あきは紅葉の色に染みつゝ

たつた河の繪に

もみぢ葉の流れて常にうかべるは水の秋をやこゝにとゞめし

柴くだしの繪に

ながれ來る眞柴とるとや下つ瀬にあらそひ出づる宇治の河ふね

越の君の北の方の御屛風の繪に

○神さび　神々しく。
○あさま山　信濃佐久郡淺間山。
○神のいぶきの霧　霧を神が息吹かれたものとしていふ。
○夕けぶり　夕暮に立つ煙。淺間山の噴煙を詠んだ。
○二神　伊邪那岐伊邪那美二神。
○ゆきめぐらし　行き廻り給ひし。古事記「爾伊邪那岐命詔然者吾與汝行廻逢是天之御柱而爲美斗能麻具波比」
○よもぎが島　蓬萊の島。
○これやこの　これはかの。
○家路　家へ歸る途。
○妻どひ　男女のかたらひ。
○わたつみの宮　龍宮。
○風をいたみ　風が烈しいので。
○門浪　瀬戸にたつ浪。
○とゞろ　轟き響いて。
○たつた河　大和生駒郡龍田附近でいふ。上流は生駒川、下流は大和川。

正月　子の日する家

引き植うる子の日の松のかげごとに千世をこめても見ゆる宿かな

二月　いなりまうで

けふごとに杉の葉かざすいなり山みねとよむまで人ぞつどへる

三月　馬車に乗りて人の花見たる所

櫻ばな咲く木のもとは春霞たちやすらはぬ人しもぞなき

四月　卯の花ある家に郭公過ぐ

郭公鳴く音ぞ絶えぬ卯の花のにほふかきねを過ぎがてにして

五月　あやめ引くところ

澤水に根ながくおふるあやめ草まづこそ千世のためしには引け

六月　はらへする所

秋風を袖にやどして歸らまし夏をばすてつ今日のみそぎに

七月　たなばたまつるところ

たなばたにかしつる琴のいとせめて飽かぬわかれを引きもとゞめよ

八月　つりどのに月を見る

ながむれば手にとるばかりおばしまの下ゆく水にやどる月影

○子の日　正月子の日野外に出て小松を引いて千代を祝ふこと。
○いなりまうで　二月初午の日稻荷神社に參拜すること。
○杉の葉　山城稻荷神社に參拜した人は山の杉葉を折りかざして歸る。
○みねとよむ　峯が鳴り響く。
○馬車云々　馬に乘り車に乘って
○鳴く音ぞ絶えぬ　引ききりなし鳴いてゐる。
○過ぎがてにして　行き過ぎ難いとして。
○はらへ　六月祓。名越の祓。六月晦日罪穢を祓ひ淸める神事。
○夏をばすてつ　六月祓の六月晦日で夏が終つてそれから秋になるからいふ。
○たなばた　七月七日織女星を祭る。
○いとせめて　甚だしく痛切に。琴の絃を言掛けた。
○つりどの　寢殿造りの南池に臨んだ所に構へた建物。
○おばしま　勾欄。

九月　人々菊を見る

老をしもかげとゞむとしきくなれば共にぞぬれむ花のしづくに

十月　女ども紅葉ひろふ所

いざさらばひろふ紅葉を袖の色に匂ひかはして今日はくらさむ

十一月　かぐらするところ

つま琴も笛もしらべをかへてけり朝倉うたふ聲を待ちえて

十二月　松竹に雪つもれり

降るがうへにいやふる雪やまつ竹にこゝらの千世をこめて見すらむ

○老をしも云々　老をも引き留めると聞く。聞くに菊をかけた。

○かぐら　神樂。

○朝倉　神樂歌に朝倉といふがある。「朝倉や木の丸殿にわがをれば名乘をしつゝ行くは誰が子ぞ」

○いやふる　いよ〳〵降る。

○こゝら　數多。

琴後集巻八

百二十首

春たつ日

朝風に氷流るゝ瀧のうへのみふねの山に春は來にけり

子日

いつとてもはつ子はあかず小松原こゝらの春にひかれ來ぬれど

わかな

都人ゆきかき分けて春もまだあさ澤ゑぐを摘むやたがため

白馬

あを馬の毛色もはえて見ゆるかな今日引きわたす紫の庭

のこりの雪

霞たつすゑの松山はる越えて消えのこる雪や波と見ゆらむ

霞

のどけさのきのふにかはる空見れば年のへだては霞なりけり

○瀧の上のみふねの山　大和吉野郡宮瀧のほとりの三船山。宮瀧は吉野川が急湍となつた勝景の地。
○はつ子　初子の日の小松引き。
○こゝら　多く。
○あさ澤ゑぐ　淺い澤に生えたゑぐ。春の淺いをかけた。ゑぐはくろぐわゐといふ草。塊莖は食用にする。
○白馬　正月七日左右馬寮から青馬を庭上に牽き天覽あつて後宴を賜ふ儀式。
○紫の庭　紫宸殿の南庭。
○すゑの松山　陸前宮城郡末松山八幡の沙丘。古今集「浦近くふり來る雪は白浪の末の松山越すかとぞ見る」
○はる越えて　波も越えなむと言ふ末松山を春が越えて來て。
○年のへだて　新年と舊年との隔てをなすもの。

かげろふ

かげろふのもゆるを絲といふめるは春のくる野にたてばなりけり

うぐひす

鶯の鳴く初聲を聞くときは老も忘るゝこゝちこそすれ

いなり詣で

神さぶるいなりの山のいはひ杉いくよの人かかざし折りけむ

春雨

春の海やこちふきたゆる夕なぎに霞むなごりぞ雨になり行く

紅梅

紅ににほへる梅やまづ春のいろをふかむる初めなるらむ

柳

光ありとうたふ朱雀の玉やなぎ露のかけたる名にこそ有りけれ

さくら

さかりなるみ山櫻を來て見れば花ゆゑ世をもそむくべきかな

三日の日

めづらしな今日しもぬさと散る花をみそぎにながす春の川水

○かげろふ　陽炎。
○絲といふ　陽炎をいとゆふ（遊絲）ともいふ。
○くる野　春の來る野に絲を繰るとかけた。
○神さぶる　神々しい。森嚴な。
○いはひ杉　齋杉。神社にある神木の杉。
○かざし折り　稻荷山の杉葉は參拜の人が折りかざして歸る。
○こち　東風。
○夕なぎ　夕方風が靜まつて海上の穩かなこと。
○霞むなごり　霞んだあと。
○春のいろ云々　春色はるけしきを深めてゆく。
○光あり　催馬樂、淺緑「淺緑や濃い縹、染めかけたりと、見るまでに、玉光る、下光る、新京、朱雀の、しだり柳、まだい田居となる、」前栽秋萩撫子、唐葵、しだり柳」
○三日の日　巳の日の祓。三月上の巳の日に人形を作り身の災厄をつけて河に流してする祓。

春の田

賤の男は散りしく花をすきかへし雪におりたつ春のを山田

かへる鴈

鴈のゆく尾上の花は雪なるを一夜は旅のやどりからなむ

春月

かくてこそあはれも添はれほの〴〵と霞みながらに有明の月

すみれ

春はまた草にやつるゝ故郷もすみれ摘みにと人ぞとひける

藤

池水ににほへる色の深ければふちとは花の名におほしけむ

春のはて

散り殘る花はなごりもあるものをつれなく暮るゝ春や何なり

衣がへ

ぬぎかふる夏のころもはうすくとも花の香をだに移さましかば

ほとゝぎす

明けそむる箱根の關のほとゝぎす二こゑ三聲まづなのるなり

○雪におりたつ　散った花を雪と見ていふ。

○花は雪なる　峯の花は雪である故まだ春でないから鴈は歸らないで一夜は宿れよ。

○ふぢ　藤と淵とをかけた。

○散り殘る云々　春が過ぎても花は散り殘るといふ名殘があるのに

○春や何なり　春が名殘ものこさず無情にも暮れるはどうしたことか。

○移さましかば　移したらはよからう、移したいと思ふ。

神まつり

あふひ草引くはたが子ぞみあれ山しげるかづらの夏かげにして

五日

軒に葺く今日のあやめのそれならで引きあらそふは眞弓なりけり

たちばな

たち花の花さく宿のいつはあれど雨のゆふべぞ世に似ざりける

あふぎ

風を手にならす扇の三重ながらひとへに夏はわすられにけり

なでしこ

からにしき色こき中にくれなゐのゆはたもまじるなでしこの花

あふち

入日さすかた山ばやしおく見えて散るやあふちの花の夕かげ

ほたる

草ふかき野中のしみづそれをだに有りと知らせて飛ぶ螢かな

鵜河

鵜飼舟さすや水棹に散る露もみだれて見ゆるかゞり火の影

○あふひ草引く　賀茂の葵祭の用に葵を引く。
○みあれ山　御蔭山。山城愛宕郡比叡山の麓。賀茂大神別雷天降の遺跡といふ。
○引きあらそふ云々　菖蒲を引くではなく、引き爭ふは弓である。五月五日左近の馬場の眞手結（まてつがひ）の騎射をさした。
○いつはあれど　いつもよいけれど。
○世に似ざりける　甚しく面白くて似るものがない。
○三重　三重襲ねの扇。檜扇の板が幅狹く開いて板が三重なるをいふ。
○ひとへに　ひたすら。全く。三重に對して言つた。
○ゆはた　しぼり染。
○あふち　樗。
○鵜河　鵜飼。鵜を使ひ馴らして魚を捕らせること。

蚊遣火

くれはてぬ宿に煙は先づたてつあるかなきかを厭ふばかりに

氷むろ

消えぬ間と都へいそぐ氷室守道ながさかのほどやわぶらむ

藥がり

生ひしげる夏野のはらのくすり狩りいづこに鹿の跡はとむらむ

夕だち

ゆふだちに川となり行くいさら水わたりやわびむ野路の旅人

なごしの祓

國つ罪今はのこらじ大王の御門のはらにはらへしつれば

初秋

をぎ原やまだ穂に出でぬ程ながらゆふべは秋と初風ぞ吹く

なぬかの夜

棚ばたのこゝろも空にくみて見むたらひの水にかげしうつらば

をぎ

風の音にくだけてものを思へとや露ふきむすぶ庭のをぎ原

○あるかなきか　居るか居ないか蚊をかけた。
○氷むろ　氷を夏まで貯へておく室。陰暦六月一日室中で氷室の節會があつた。
○ながさか　山城愛宕郡長坂。氷室のあつた地。道の長いにかけた。
○藥がり　古四五月頃山野に出て藥草などを採集したこと。始めは五月五日に藥用の鹿の若角を採つた。
○跡はとむらむ　跡を留めるだらう。
○いさら水　小さな流水。
○なごしの祓　夏越祓。名越祓。六月晦日罪穢をみそぎして清める事神。
○をぎ原　荻の生えた原。
○ゆふべは云々　夕方になればもはや秋だといふやうに秋の初風が吹く。
○たらひの水　七夕の夜星影を盥に映す。

はぎ

高まどやをのへの秋に宮人のむかしかざしし萩の花散る

をみなへし

口なしの色に咲けどもをみなへしとはで過ぐべき秋の野べかは

十五夜

めなるれば心おとりのする世にも今宵の月はあかずも有るかな

駒むかへ

あふさかの關のあらがきあらゝかに山ふみならす岩ぶちの駒

露

さまぐ\の花になれにし袂には乾かぬ露をあはれとぞ見る

霧

きりこむる峯のかけはし末消えて繪によく似たる夕ぐれの山

松むし

住み荒れしむぐらの門に聲たてて人まつ蟲ぞあるじがほなる

鈴蟲

夕されば露ちるをのの秋風にふり出でて鳴く鈴蟲の聲

○高まど　大和添上郡春日山の南高圓山。
○をのへ　峯。

○口なしの色に咲けども　梔子の色卽ち黃色に女郎花が咲くけれど口なしで物は言はねどの意。

○めなるれば云々　見馴れると惡く感じて來るのが習慣である世。
○駒むかへ　古八月十五日諸國から貢進する駒牽の駒を左馬寮の使が逢坂關に迎へること。
○あらがき　まばらに結うた垣。
○岩ぶちの駒　陸奥北郡尾駮の牧の駒をいふか。

○きりこむる　霧立ちこめる。
○かけはし　嶮岨な崖にかけ渡した橋。棧橋。
○人まつ蟲　松蟲に人を待つをかけた。
○夕されば　夕方になると。
○ふり出でて　鈴蟲が音に顯はれ出て鳴くを鈴といふ語の緣で振り出でてと言つた。

きり〴〵す

ねざめする霜夜の牀のきり〴〵すあるかなきかの音ぞあはれなる

鹿

山彦のかすかにつたふ鹿の音は幾重の峯のおくに鳴くらむ

秋山

秋山ぞわれはといひし昔へもあかぬもみぢやかくこそ有りけめ

野分

もゝくさの花はさらでもうつり行く秋のすゑ野に野分吹くなり

紅葉

はゝそ原かつ散りそめて露霜のこゝろ淺さや色に見すらむ

秋夜

とも し火はかゝげつくせど殘る夜にはてなき秋の思ひをぞ知る

衣うつ

よもすがら賤のさごろも手もすまにうつや袂をまきの島人

菊

一もともあはれとは見よむらさきのゆかりわすれぬ菊のにほひを

○あるかなきかの音　聞えかねる程のかすかな音。

○秋山ぞわれは　天智天皇が中臣連鎌足に詔し春秋の優劣を判別せしめられた時額田女王が歌を以て判ぜられた萬葉集卷一にある長歌に「秋山吾は」とある。
○さらでも　野分が吹かなくても

○はゝそ原　柞の木の生えた原。
○かつ散りそめて　ぼつ〳〵と散り初めて。

○すまに　休まずひまなく。
○まきの島　山城宇治の北。宇治川と巨椋池との間の地。袂をまくとかけた。

くれの秋

うきときは憂きをかこちて今日はまたとまらぬ秋を何うらむらむ

時雨

さがみ嶺のいづれはあれど冬たてば雨降の山ぞ先づしぐれける

氷

行きかよふすはのあふみの厚氷神のをしへし道はまよはず

霜

木がくれや塒の鳥も出でがてに吹く風さゆる庭の朝霜

あられ

やま風のにはかにさそふしもと原梢みだれてあられ降るなり

網代

もりあかす夜牀やわぶるあじろ人ともす篝のひをたのみつゝ

落葉

日に添へて落葉ぞふかくなりにけるなれし爪木の道たどるまで

水鳥

世をわたる人しもならへ水鳥のやすくぞ波にうきしづみする

○くれの秋　暮秋。秋の終り。
○さがみ嶺　相模國の山々。
○雨降の山　相模中郡大山の別名嶮岨で頂に雲霧多く、山中は寒さが早く來て冬雪の降るも早い。
○すはのあふみ　諏訪の淡海。信濃の諏訪湖。
○神のをしへし云々　諏訪湖氷結して四五日に上下諏訪の閒氷上に一夜に幅五尺餘の痕がつく之れを諏訪明神の御渡りとし其の後人馬が氷上を通るので神の敎へと言うた。
○出でがてに　出で難いまでに。
○しもと原　若木の茂つた木立の原。
○もりあかす　夜ごほし番をしてゐる。
○ひを　篝の火をと氷魚(ひを)とをかけた。
○爪木の道たどるまで　爪木を採るに通ふ道が見えなくつて道を捜し迷ふ程までに。爪木は手で折る小さな薪の木。
○人しも　人も。しは強め辭。

鷹狩

狩人の袖吹きかへす朝風にかれふのすゝき立つかげもなし

雪

すみぞめの夕の雲の絶間よりなほくれのこる峯のしら雪

炭がま

冬ごもる程やいつまですみがまのけぶりくゆらすをのの山人

埋火

おもふどちかたらひあかせ冬の夜を火桶の灰のしらみ行くまで

五節

みや人は豐のあかりのなごりとて肩ぬぐばかりゑひしれにけり

かぐら

やまとてふ玉琴の名に引きかへてからをぎせむとうたふ子やたれ

佛名

罪とがも佛の御名ものこさじと曉かけて花たてまつる

としのくれ

くりかへしおもへばとほし年波を十はたとのみ數へてしよは

○かれふ　草の枯れた地。
○すみぞめの夕の雲　夕暮の黒雲
○すみがま　炭竈。炭燒く竈。いつまで住むとかけた。
○をの　山城愛宕郡小野鄕の山々拾玉集「小野山も大原山も炭竈の煙は同じあはれなるらむ」
○しらみ行く　火鉢の火が灰と白くなりゆく。冬の夜がしらしらと明けかゝりゆくをかけた。
○五節　大嘗會又は新嘗會の女樂
○豐のあかり　大嘗會新嘗會の翌日天皇新穀を聞食し羣臣にも賜ふ饗宴。
○ゑひしれにけり　正體なく醉ひくづれる。
○やまとてふ玉琴　倭琴。あづま琴ともいふ。六絃。古代からの樂器。玉琴は琴の美稱。
○からをぎ　神樂の舞の名。淸暑堂の御神樂に人長が枯荻をかざして舞ふ。やまとに對してからとならべた。神樂歌、韓神、「三島木綿肩に取り掛けわれ韓神のからをぎせんや(下略)」
○佛名　陰暦十二月十九日から三日間禁中及び諸寺で佛の名號を唱へて罪障を消滅する佛事。
○年波云々　年次のあて字。年齢の順序とし、年齢を十、二十と數へた時代。若い時。

知らぬ人

いひはじむ

まだ知らぬ人をあやなく戀ふるには心のみこそしるべなりけれ

けふまでは思ひつゝみて口をぞへしいはでやむべき心ならねど

いはでおもふ

いたづらに袖やくちなむ思ふこと人にいはでの森のしづくに

はじめてあへる

あふことははつ花ずりの狩衣うつろふ色をみはてずもがな

あひおもふ

なか〳〵にうらむるふしも多かりき相思ふなかの心すさみに

相おもはぬ

うちとけぬ人に心をおくやまのそは〳〵しくもなりまさるかな

こと人をおもふ

末つひにかくてや我をわすれ水流れてよそにひかれそめなば

よるひとりをり

ともし火のもとの心やたどるらむこれぞかたみとみづぐきの跡

○あやなく　わけがわからず、むやみに。

○袖や云々　しづくに濡れて袖が朽ちるだらう。

○いはでの森　陸中國巖手郡岩手山の麓澁民村にある。言はでにかけた。

○花ずりの狩衣　萩や露草などで模様を摺り出した狩衣。

○うつろふ　色があせる。心の移りかはる意をかけた。

○心をおくやま　心をおく、心を隔てるに奥山とかけた。

○そは〳〵し　よそ〳〵しく親しまぬさま。山の峙つをかけた。

○わすれ水　野などに絶え〳〵に流れて人に知られぬ水。

○みづぐきの跡　筆跡。形見と見るをかけた。

ふたりをり

うらもなく語らふ時はもろともに千よを一夜と思ふばかりぞ

よひのま

世の人に寢よといかねをとゞめにておきわかれなむ我や何なり

口かたむ

相おもふ中とや人のとがむらむわが名なかけそ問はず語りに

一夜へだてたる

恨みわびぬ一夜ばかりの夜がれをも又かからばと思ふ心に

二夜へだてたる

きのふといひけふの細布むねせばみあはで今宵も明けむとやする

ものへだてたる

かつみても猶したはれつる車におもがくしせし袖のなごりは

名ををしむ

戀ひ死なむ命はさても有りぬべしせめてうき名の殘らずもがな

たのむる

君をのみたのむ心は深かりき世のいつはりに馴れし身なれど

○うらもなく　心に隔てなく。

○世の人云々　世の人にこれから寢よと告げる鐘を終りさして。

○おきわかれ　起きて別れる。

○わが名なかけそ　わが名を口にかけるな。

○一夜ばかり　一夜だけ。

○夜がれ　夜離れをること。

○けふの細布　昔陸奧國希婦の地から產出した幅の狹い白布。袖中抄「みちのくのけふの細布幅せばみ胸あひがたき戀もするかな」

○むねせばみ云々　細布の緣で襟のあはぬに男女の逢はぬをかけた。

○命はさても云々　命はそれでもよい。戀ひ死に死んでもよい。

よべどかへらぬ

とけがたき心くらべに負けじとやしばしといへど立ちもとまらぬ

ふみをみぬ

もしほ草かきやるかひもなかりけり拾ふみるめもあらぬ渚に

おもひやす

下紐のしたこがれつゝおもへばや三重むすぶまで身はやせにけむ

おもひいづ

見し世にはたゞなほざりの一言も思ひ出づればなつかしきかな

むかしあへる人

ことに出でてしばし引き見むあづさ弓もとの心を人やたどると

年經ていふ

いひよるもやさしな年をふる鏡みむわが影を君たどりなば

いやしきをいとふ

契りあれば霞ならでも立ちのぼるためしを人のなどか思はぬ

人づま

いかなれば塵もすゑじと思ふらむわが牀なつの花ならなくに

○心くらべ　打解けない心の根くらべ。

○もしほ草　藻鹽草、鹽をとるに用ゐる海藻。掻き集めるので書くにかけた。

○みるめ　海松。見る目にかけた藻鹽草の緣。

○下紐の　した焦るの序。三重結ぶにかゝる。

○見し世　戀仲であつた昔は。

○たゞなほざり云々　昔は只かりそめであつた一言も別れての今になつて。

○ことに出でて　言ひ出して。

○引き見む　心を引いて見よう。梓弓の緣。

○やさし　恥かしくきまりわるい。

○年をふる鏡　年經るに古鏡とかけた。

○立ちのぼるためし云々　立身出世する例のあることをどうして彼の人は思はないか。

○塵もすゑじ云々　古今集「塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわがぬるとこ夏の花」

かくれ妻

しのぶればうきみな底の玉がしはあらはれて逢ふよしのなければ

山里

山ざとはかけひにうくる谷水のこゝろぼそくも年をこそふれ

そま

君がためとるともつきじ萬代にいづみの杣のまきのつまでは

ふるさと

故郷はとへどこたへぬ飛鳥風をのへの松にいたづらに吹く

井

山ざとの昔しのばむをとめ子がおもかげうかべ御井のま清水

關

君が代は七つの道の國人も三つの關をややすく越ゆらむ

淵

しら玉はありとも誰かかづくべきこの岩淵のそこひなければ

瀬

かくて身をうしとな思ひはつせ河うれしき瀬をも待ちて見む世に

○うきみな底云々　つらい苦しい身である。水底に忍び隱れてゐる堅いいはほ。玉がしはは玉堅石で玉は美稱。
○かけひ　かけ渡した樋。
○いづみの杣　萬代に出づをかけた。いづみは山城相樂郡水泉鄕（いづみ）夫木抄「わがなげきやむときもなし積みおけどいつか泉の杣の筏し」
○つまで　杣人が木造りした材木萬葉集「泉の川にもちこもる眞木のつまでを」
○飛鳥風　大和國高市郡飛鳥を吹く風。萬葉集「たわやめの袖吹きかへす飛鳥風都を遠みいたづらに吹く」
○山ざとの昔云々　拾遺集に「しがの山越に少女の山の井に手洗ひ掬びてのむを見て」と詞書して古今集の「掬ぶ手の雫に濁る」の歌をあげたのをいふ。三井は近江滋賀郡。
○七つの道　東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道。
○三つの關　伊勢鈴鹿、美濃不破、越前愛發。又勢多、鈴鹿、不破又逢坂、鈴鹿、不破。
○思ひはつせ河　思ひ果つるに初瀬川をかけた。うれしき瀬は嬉しい折。瀬は河の緣語。

やな

せきとめてみなわさかまく六田河やなせの波は音もとゞろに

うたかた

一しきり降り來る雨に數そひて消えてはむすぶ波のうたかた

釣

かくて身はふる江にたるゝ釣の絲の世にひかれぬも心やすしや

翁

ともすれば若きが中にいとはれて翁さびたる身をいかにせむ

うなゐ

うなゐ子がはなりの髮をなづるかな老にあえよと思ふ心に

法師

むらさきの雲まつ身こそやすげなれ此の世ばかりにすみぞめの袖

車

數へつゝ見れば車もなきものを何よしあしの名はさだむべき

舟

ちりうかぶ波の木の葉と見るばかり沖になづさふしがの浦舟

○やな　簗。川瀨で木を打竝べて水を堰いて魚を取るもの。
○みなわ　水泡。
○六田河　大和吉野郡六田渡の邊で吉野川をいふ。
○うたかた　泡沫。
○翁さびたる　老人じみた。
○うなゐ　うなゐこ。幼童。
○はなりの髮　うなゐはなり。古代の幼童の髮。うなじ位の所までに切り垂れた髮。
○あえよ　あやかれよ。
○むらさきの雲まつ　三尊が紫の雲に乘つて出現されて極樂淨土へ迎へ導かれるのを待つ。
○すみぞめ　墨染にすみをかけた
○數へつゝ　老子第三十九章「致レ數レ輿無レ輿。」によつた。輿は轉じて車の義。車を輪だの輻だのそれそれに分離すれば車はなく、車は輪輻轂などの衆を集めた一の虛名だといふ意。
○なづさふ　水に浮いてゐる。

○いとせめて　ひどく強ひて無理をして求めて。
○玉の枝　竹取物語の車持皇子が苦心して作らせた蓬萊の山の銀の根黄金の幹白玉の實の木の枝。
○品はあれど　高麗錦から錦など種類は澤山あるけれど。
○われとは　自分自身には。
○うきこと　憂き事に琴をかけた
○弓といへば　弓と一口にいへば神樂歌、「弓「弓といへは品なきものを梓弓ま弓槻弓品こそあるらし」
○眞弓　檀の木で作った丸木の弓
○つき弓　槻の木で作った丸木の弓。
○玉まく弓　玉で飾った弓。
○ひつぎ　日嗣。天皇の御位。

使

〔原本缺〕

玉

いとせめてとりえし玉の枝さへもおもひくだくる種となりにき

錦

おりいづるこまもろこしの品はあれど倭錦にしくはたはなし

布

たがためにさらせる布ぞ賤のめがわれとはさらに身にもまとはで

琴

うきことを思ひつゞけて是れをだに語らひ人となすよしもがな

弓

弓といへば眞弓つきゆみ品はあれど玉まく弓に心こそひけ

たち

〔原本缺〕

鏡

神代より光くもらぬかゞみこそむべもひつぎのしるしなりけれ

もとゆひ

年ふりし我がもとゆひの濃紫いつより霜に結びかへけむ

こゝろざしをいふ

いけるまの心ひとつし樂しくばなからむ後の千名も何せむ

五十首　文化二年六月二日

春

山ざとを梅見がてらにとひしかばはつ鶯の音をぞ聞きつる

雨にそめ風にさらせる青柳のいとは日ごとにいろ添はりゆく

春はたゞ花の陰こそ慕はるれ胡蝶に身をもかへしばかりに

なつかしきすみれの牀をよそに見てあがる雲雀ぞ心そらなる

山吹の花のしがらみにほふなり春せきとむる井出の玉水

夏

心ありて夏山かげにさくら花あかでわかれし春を見よとか

むらさめの夕はあれどほとゝぎす有明の月になのる一聲

木のもとはかきな拂ひそ紫をむらごになしてあふち散るころ

○霜に結びかへけむ　老いて頭髪が白くかはつたのは何時からか。

○ひとつし　しは强め辭。

○千名　多くの名。心一つに對照した。

○梅見がてら　梅見ながら。

○とひしかば　訪ねた處が。

○青柳のいと　柳の青い枝を絲にたとへた。

○すみれの牀　菫咲く野の雲雀の巢。

○心そら　心も落著かず浮れ立つてゐる。天空をかけた。

○しがらみ　水の流れをせき止める爲に杙を打ち木をわたしたもの春せきとむるの緣。山吹が咲いて逝く春を遮り止める。

○井出の玉水　山城綴喜郡。山吹と蛙の名所。

○さくら花　櫻と咲くとをかけた遲櫻をよんだ。

○夕はあれど　夕も趣はあるが。

○かきな拂ひそ　かき掃ふな。

○あふち　樗の花。

咲きまじる野べは秋にも劣らめやさゆりなでしこあさゞゐの花

藻かり人その舟ちゞめ夏河にわれもうかびて夕すゞみせむ

秋

かくばかり殘る暑さにかはほりを秋とて誰かうとみしもせむ

野べ見にと思ふ友にしつけやらむ萩のあそびのをりは來にけり

月見つゝ今宵はこゝにうきねせむ秋のかつらの河瀨こぐ舟

青きをばおきてなげかむ陰もなしそむる千入の岡のもみぢ葉

たのみある秋をしめつと里人のかりつむ稻のほこらしきかな

冬

秋の野の花ずりごろもぬぎかへて冰を袖にけふやかさねむ

いこま山峯のこがらし音たてゝ霰ふるなり秋篠の里

鳥の音も松のあらしも埋もれて雪にしづまるみねの庵かな

もろともによせてはかへる村千鳥浦わの浪やおもふどちなる

ことなくてことばの苑に年くれぬまた來む春もかからましかば

草

名にしおへば哀れとぞ思ふみゝな草よのうき事も聞かずや有るらむ

○舟ちゞめ　舟を止める。催馬樂「櫻人その舟ちゞめ島つ田を十町つくれる見てかへり來む」
○かはほり　蝙蝠。扇をいふ。漢の班婕妤の秋扇の故事。
○萩のあそび　萩の花を賞して遊ぶこと。萬葉集「白露を取らば消ぬべしいざ子ども露にきほひて萩の遊びせむ」
○うきね　舟の中に泊り寢ること。
○青きをば云々　萬葉集卷一額田女王が春秋の優劣を判別された歌の「青きをばおきてぞ歎くそこし恨めし秋山われは」といふ句によつた。
○たのみ　田の實。稻の熟するをいふ。頼みにかけた。
○かりつむ　刈り集める。
○ほこらし　誇らし。穗をかけた。
○冰を袖　冰襲ねの袖。
○いこま山　大和河内の國境。
○秋篠　大和生駒郡。新古今集「秋篠の外山の里やしぐるらむ伊駒の岳に雲のかゝれる」
○もろとも　涙と千鳥ともろ共。
○みゝな草　草の名。耳無にかけた。

春はもえ秋ははな咲く忘れ草をり忘れぬぞ名に似ざりける

のがれ來て我がすむ宿の軒にこそ世にはしのぶの草も生ひけれ

花にさく名をしもたてぬ翁草いつかは人にすさめられたる

宮人のかづらにすなる日陰ぐさ遠つ神代もかけてしのばむ

木

かたやきて誰うらとはむ神の世にはゝかてふ木の生ひも出でずば

言のはにかけてぞ千世に聞ゆなるひとり名高きしがのうら松

下つえは波にくちぬる濱ひさぎかくて久しき世をや經にけむ

杣山に神さびたてるいはひ杉いつの宮木に引きはもらせし

村雨のしづくも漏らぬほゝがしはいざ下陰に笠やどりせむ

蟲

かぎりなき文の林にすむ蟲もあはれとや見む身のたぐひとて

葉隠れをおのがすみかと所えて絶ゆればかくるさゝがにの絲

なく蟲のたぐひならねば廣き野にありとも人に知られでぞ住む

われと身をこがすならひはあるものを何夏むしのうへとのみ見む

さゆる夜は壁の底なるきりぎりすあるかなきかに聲よわり行く

○をり忘れぬ　萌える折、咲く時と時節を忘れないのは忘草の名にも似ない。
○のがれ來て　世を。
○翁ぐさ　夏初に紅色の小花をつける菊科の草。
○すさめられたる　もてはやされたことがあるか。
○日陰ぐさ　日陰蔓。
○かたやきて云々　鹿の肩の骨を灼いて裂けた模樣で占ふ太占（ふとまに）によつて誰が占ふものか。
○はゝか　朱櫻。太占に鹿の肩骨を灼くに朱櫻の樹皮を焚く。
○しがのうら松　近江滋賀郡唐崎の一つ松。
○濱ひさぎ　濱邊に生えた楸。
○いはひ杉　穢を忌み淨めた杉。
○宮木　宮殿造營用の材木。
○ほゝがしは　ほゝのき。厚朴。
○笠やどり　雨やどり。
○文の林にすむ蟲　蠹魚。しみ。
○身のたぐひ　同じく書物を食ふ同類だと。
○さゝがに　蜘蛛。
○夏むし　夏出る蟲。特に蛾。

○おくるゝは　後れた鳥。
○汐ざゐ　潮のさし來る時に浪のさわぎたつこと。
○高からし　高くあるらし。
○あしべのたづ　葦の生えた邊の鶴。
○年をふるや　年を經る。古家をかけた。
○つらしと云々　つれない人だとかの人を思つて斷念しても。
○わりなき　ことわりなき。わけのわからぬ。
○遠き世の跡　古い昔の事跡。
○ふみみる　踏を踏みに、書見るをかけた。
○おくる　劣る。
○思ひあがらむ心　氣高からんとする心。向上心だけは人に劣らうか。
○なほざり云々　いい加減にしておろそかに書きすてるな。
○鳥の跡　筆跡。文字。

鳥

おくるゝは先だつ聲をしるべにて梢にかへるむらがらすかな

浪の音もなるればなれて汐ざゐに洲さきの鷺の立ちもさわがぬ

跡絶えてとはれぬ宿は山鳩のともよぶ聲もうらやまれつゝ

風あるゝ礒まの波や高からしあしべのたづの浦うつりする

人すまで年をふるやは荒れにけりあやしき鳥の聲のみはして

戀

絶えせじのことの葉のみをたのみにて逢ふことかたき我や何なり

これをだに君がかたみとしのぶかな起きわかれにし牀のうつり香

うき名のみなどか朽ちせぬ日をふれば袖もまくらもたへぬ涙に

涙のみ知らでや袖をぬらすらむつらしと人を思ひ絶えても

我が爲にわが身を更にをしまぬや戀はわりなきものにぞ有りける

雜

月花も思ひわすれつ遠き世の跡をふみみる窗のすさみに

いやしかる身とてか人におくるべき思ひあがらむ心ばかりは

なほざりにかきなすさみそ鳥の跡は人の心も見ゆといふなり

なかなかに色どる筆ぞけたれけるたゞ墨がきの心たかさに
おのがじゝ心をたねとなすわざをいにしへ今と何へだつべき

〇なかなか　なまなか。却つて。
〇けたれ　消され。壓倒され。
〇心をたね　古今集序「倭歌は人の心をたねとしてよろづの言の葉とぞなれりける」和歌の道をいふ。歌に新古と區別することはない誠の發露であるの意。

琴後集巻九

長歌

春たちけるあした硯を洗ひて筆を試むとて

おいが身は　世にしもうとし　わびすみは　人もとひ来ず　しかれども　よの
人なみに　あたらしき　年をかさぬと　ふせ庵の　塵かき拂ひ　きならせる
きぬぬぎかへて　朝日子の　かげまちとりて　春の来る　かたにむかへば　一
木たつ　はひりの梅も　いつしかと　ひもときはじめ　むら竹の　をりかけ垣
に　うぐひすも　はつ音もらして　おのづから　心のどけし　よしやさは　と
はれぬもよし　老いぬとて　何なげかまし　うれしくも　ゆくら／＼に　しづ
かなる　世にながらへて　むぐらにも　さはらぬ春を　またも迎へつ

かへし歌

うれしくも春はむかへつ今日よりぞはな鶯をわがやどのとも

正月のむゆかばかりよべの雪の名残見むとて隅田川に舟をうかべて

みをのぼる　すみだ河原の　河舟も　ゆくかた遠き　上つ瀬の　堤を見れば

○ふせ庵　低くみすぼらしい庵。
○きならせるきぬ　着馴れた衣服
○春の来るかた　東方。禮記、月令「孟春之月(中略)東風解凍。」
○はひり　入口。
○をりかけ垣　竹などを折り曲げて作つた垣。
○よしや云々　まゝよ、それでは訪はれなくてもよい。
○ゆくら／＼　ゆら／＼と。萬葉集には心の揺り動くさまに言つたのが、こゝでは、悠々と、ぶらぶらとの意。
○むぐらにも云々　新勅撰集「訪ふ人もなき宿なれど来る春は八重葎にもさはらざりけり」
○みをのぼる　水の深くて舟の往来する水脈を遡る。
○上つ瀬　上流。

白雪に　猶うづもれて　下草の　みどりもわかず　たちならぶ　木々の梢は　春の日を　はやく待ち得て　うら〳〵と　けぶりそめたり　下つ瀬を　かへりみすれば　冰ゐし　あしべの洲鳥　波の上に　友よびかはし　をちかたや　霞のまより　夕虹の　たつかとばかり　久かたの　雲居にたかく　かゝる長橋

かへしうた

消えせずば明日もとひ來むすみだ河かは遠白くふれる沫雪

子日遊

はつ春の　初子の野べに　みな人の　いざとしいへば　もろともに　我もゆき閒の　小松原　二葉に千世を　引きそへて　まとゐをしつゝ　さかづきに　くむや霞の　そなたなる　をかべの梅も　あたらしき　年のさかえを　見せがほに　花のひもとき　をちかたの　一むら竹に　うぐひすも　百よろこびを　けふよりと　聲たてそめつ　のどかなる　御世の春とて　老いぬるも　わかきも共に　かくしつゝ　心ゆく野を　とふがうれしさ

かへし歌

花鳥にまたも野守が宿とはむけふの子の日をはじめにはして

八月十五夜宴吉田氏家歌

○けぶりそめたり　霞が立ちはじめた。
○洲鳥　洲に居る鳥。
○遠白く　遠くまで際々とはつきりして。
○初子の野べに　正月初めての子の日野邊に。
○いざとし　いざゆかむと。しは強め辭。
○我もゆき閒　われも行きに雪をかけた。
○かくしつゝ　かやうにしつゝ。
○心ゆく野　滿足する野、心に叶つた野。
○花鳥に　花が咲き鳥が鳴く時に

○ひま[illegible]く駒 [illegible]早く過ぎることをいふ。莊子「人生二天地之間一若二白駒之過レ隙忽然而已。」
○心やらむ 心を慰めよう。
○こととひすれば おとづれると
○いつしかと いつ來るかと。
○うらもなく 心隔てなく。
○玉だれの 緒の枕詞。
○をがめ を瓶。瓶子。をは接頭語。
○ゑひみわらひみ 醉つたり笑つたりして。
○ことのはへ 詞を述べ。歌を作るなどいふ。
○夜たゞ 夜どほし。
○わすらえにけり 忘られた。
○うつせみの 世の枕詞。
○くちやらぬ 朽ちない言の葉。

年月は いる矢のごとく 人の世は ひまはく駒そ うきことは 常に添はれど ゑみさかえ わらふ日なしと いにしへの 人もいひけり いざさらば 時すぐさめや 思ふどち 心やらむと たぐひなき 秋のも中の 月影に あくがれ出でて 此の宿に とぶらひ來つゝ 垣ごしに こととひすれば いつしかと 待ち喜びて うれしくも 來ましにけりと 立ちはしり むかへ出できて かりそめの 竹のくみ戸を おしひらき を花かき分け 盛りなる 眞萩がもとの 苔むしろ 露うち拂ひ から衣 ひも解きかはし うらもなく まとゐをしつゝ 玉だれの をがめをすゑて 諸ともに ゑひみわらひみ ことのはへ を琴をあそび 澄む月に 夜たゞむかひて 世の事も わすらえにけり うき事も 何かそはらむ 人の世の たのしき道は かくこそと 思ひ知りにき 時へなば 思ひや出でむ 人きかば しのびやせまし 照る月は 世々のかたみと むかしより いひつぎぬれば うつせみの 今の世のみか 今もまた 昔とならば くちやらぬ けふのまとゐの ことの葉を 後みむ世にも しのび出づる 人こそあらめ いやとほき わがよの後の みやびをのとも

かへしうた

おもふどち心は月にあくがれつ老となるてふことも忘れて

八月もちの夜芳宜園にて月を見て

秋の夜の　いつはあれども　今宵こそ　たぐひなき夜と　昔より　人もいひつけ　照る月の　いづこはあれど　秋萩の　花ににほへる　しら露に　うつろふ影は　大かたの　世に似ぬ宿と　もろともに　手たつさはりて　月見にと　人もとひ來ぬ　花見にと　我もおりゐて　から衣　紐ときさけて　うらもなく　あそぶ此の夜は　明けずもあらなむ

かへし歌

此のそのに匂ふ眞萩のからにしきたつこともやすき月の夜半かは

九月九日詠菊花歌一首並短歌

ちはやぶる　神の御代にし　きこえたる　種にはあらで　やほによし　たひらの宮の　初めより　かぐはしき名を　傳へ來る　かはらよもぎは　から國の　まつるみつぎと　そのかみに　ねこじや來つる　君が世の　さかえむさがと　おのづから　なりや出でたる　うつろはむ　かぎりも知らず　年ごとに　秋をふかめて　咲きと咲く　花にしあれば　なが月の　けふをたり日と　久方の　雲居の庭に　大御酒を　みちたらはして　此の花に　あえてもがなと　神なが

○老となる云々　古今集「大かたは月をもめでじこれやこの積れば人の老となるもの」
○もちの夜　望の夜。十五夜。
○芳宜園　加藤千蔭の家。
○いつはあれど　何時も面白く趣はあるが。
○うつろふ影　白露に映る月影。
○大かたの云々　世間なみとは異なつた家だと言つて。
○うらもなく　心隔てなく。
○たつこと　立ち去ること。裁つをかけて唐錦の縁語。
○ちはやぶる　神の枕詞。
○神の御代云々　菊は神代からある固有のものでないこと。
○やほによし　きづきの枕詞。青丹吉に對して轉じて平にかけた。
○たひらの宮　平安宮。
○かはらよもぎ　菊の別名にしたもの。
○まつるみつぎ　獻ずる貢物。
○ねこじ　根から掘り取つて。
○咲きと咲く花　咲きに咲く花。
○なが月　陰暦九月。
○たり日　物事の滿ち足る日。
○久方の　雲居の枕詞。
○あえてもがな　あやかりたいものだと。

ら　おもほしめせは　さもらへる　もゝの司は　ことほがひ　酒ほがひして
この花の　咲きのをゝりに　から衣　たもとにほはし　折りかざし　老もわか
きも　もろともに　心をやりつ　たのしかる　わが君が世の　よろづ世の　た
めしとなれる　はなぞこの花

反歌

千世もたる花のゑまひにあえよとや大宮人に御酒たまふらむ

山寺の秋のくれ

かた山や　よをふる寺の　苔むしろ　おりゐて見れば　とゞめえぬ　秋はかぎ
りと　もみぢ葉も　風にきほひて　おく霜に　あらそひかねて　しら菊も　色
ぞうつろふ　空蟬の　世はかくこそと　瀧川の　はやく見しよを　くり返し
しのび出でつゝ　かへるべき　家路もとはず　ゆふしぐれ　袂ぬらせば　塵の
身の　夢さませとや　をかの上の　松にこたふる　入相のかね

かへし歌

かねの音に秋をとぢめて山寺の岩がき紅葉散りはてにけり

神無月のはじめ藤堂の君の染井の莊の紅葉を見て

なが月の　しぐれの秋を　こゝにのみ　なごりとゞむる　御園生を　けふとひ

○もゝの司　百官。
○ことほがひ　ことほぎ。祝賀しこと。
○酒ほがひ　酒をすゝめて祝ふこと。
○咲きのをゝりに　たわむ程にしげく咲いてゐるのに。
○千世もたる　千世を持つてゐる
○ゑまひ　ゑみ。
○あえよ　あやかれよ。
○よをふる寺　世を經る。古寺と言ひ掛けた。
○とゞめえぬ　過ぎ去るのを留められぬ。
○空蟬の　世の枕詞。
○瀧川の　はやくの序。
○はやく見しよ　昔見し世。
○松にこたふる入相　松風の音につれて響き來る入相の鐘。
○秋をとぢめて　秋の終りとして
○岩がき紅葉　岩石が垣のやうに圍み繞らした中の紅葉。
○藤堂の君　伊勢津の藤堂侯。
○染井　武藏北豐島郡染井。

來つゝ　山みれば　呉のてびとが　おる機の　にしきか張れる　いけ波の　來よるなぎさは　たをやめの　手染にくゝる　くれなゐの　ゆはたかさらす　おり立ちて　見るめもあやに　たもとほり　あく世も知らず　おもふどち　心をやりて　ことのばへ　あそぶこの日は　くれずもあらなむ

反歌

けふとはむ人のためとや御園生に木々のもみぢの秋をのこせる

山家雪

雪ふれば　岨のかけ道　ゆきかよふ　路こそたゆれ　をりかこふ　まがきの竹の　いつしかも　山となりては　鄰さへ　ことも通はず　よしや世は　隔てはつとも　とはるべき　友はなくとも　靜けさに　心やらむと　さゝの戸をひらきて見れば　かきはかぬ　はひりの庭も　おもほえず　玉しきわたし　枯れたてる　いちしば原も　春またで　花咲きにけり　これをしも　世に埋もるる　山住の　身のかよひとて　ほだの火に　獨りよりそひ　あつごえし　綿かづききて　かすゆ酒　くむ一坏ぞ　おもふ友なる

反歌

かくぞとは都の人につげやらむかた山里に降れるしら雪

○呉のてびと　呉の職人。呉の國の機織工。
○にしきか張れる　錦を張つたか
○くゝる　絞染にする。
○ゆはたかさらす　絞染の染物をさらすのか。
○たもとほり　徘徊して。
○心をやりて　心を慰め滿足して
○ことのはへ　言葉を述べ。歌を詠じなどして。
○秋をのこせる　秋を殘したのか　神無月で季節は冬であるのに紅葉のあるのは秋を殘したのか。
○岨のかけ道　嶮岨な山路。
○よしや云々　たとひ世間とは全く隔ててしまふにしても。
○さゝの戸　篠竹で作つた戸。
○はひりの庭　門から家までの庭
○おもほえず　意外にも。
○いちしば原　多く茂つた芝草原
○ほだ　榾。焚物にする木の切端。
○あつごえし　厚くふくらんだ。
○かすゆ酒　糟湯酒。酒の糟を湯に入れ溶いたもの。

むそぢになりける年のくれに

とし月は　いる矢のごとく　おいは身に　せめ来るものを　しれにたる　おぞの翁は　わかかりし　昔よりして　思ふこと　なきにしもあらず　なす事のある身ながらに　あすありと　けふはたゆたひ　又も来む　年やはなきと　ひととせを　思ひのどめて　いそしかる　心はもたず　ともすれば　人にはおくれ　かくすれば　時をもすぐし　徒らに　年はかさねつ　今さらに　悔いに悔ゆれど　老が身の　かひこそあらね　さればまた　心つとめて　今よりと　おもひおこせど　山の端に　落つる日影の　かたぶける　よをいかにせむ　あはれこの　おぞの翁が　ゆく年を　惜しむにつけて　かくばかり　歎くと人のきかませば　心とゞめて　おほろかに　思はずもがも　ますらをや　むなしかるべきと　いにしへの　人もぞいへる　心あらむ　世の人みなよ　忘れてもゆめなならひそ　おぞの翁に

かへし歌

世の人にいかゞこたへむ何をして老いにける身と問はれましかば

橘千蔭の家にて萬葉集竟宴に競憐春山萬花之艷秋山千葉之彩時以歌判之といふ歌の心を追和しける歌

○むそぢ　六十歳。
○しれにたる　愚かな。ぼけた。
○おぞの翁　癡鈍な翁。
○たゆたひ　ためらひ。
○來む年やはなき　來年が無からうか來年がある。
○思ひのどめて　のんきに考へて
○ともすれば、かくすればごうかすると。何やかと。
○かひこそあらね　悔いても悔いるかひがない。
○山の端云々　老いて齢傾いたのをいふ。
○おほろかに　一通りのことに。いい加減に。
○むなしかるべき　萬葉集「をのこやも空しかるべき萬世に語りつぐべき名は立たずして」
○ゆめなならひそ　決して我にならふな。愚かな翁にならふな。
○問はれましかば　問はれたたらうならば。
○萬葉集竟宴　萬葉集の講筵終つて宴を開き萬葉集についての歌よむこと。
○競憐春山云々　萬葉集卷一、額田女王の歌につけた詞。

百千鳥　さへづる春は　こち〳〵の　花のさかりと　にほへるを　折りてはかざし　散り來るを　袖にこきれて　あし引の　山ゆきくらし　おもふどち　心をやりつ　長月の　しぐれの秋は　もみぢ葉の　下照るときと　やつを越え　とほくも見さけ　木のもとに　おりゐ遊ばひ　家のごと　ひもときさけつ　春山は　しかもまぐはし　あき山は　かくぞたぬしき　いづれをか　わきてしぬばむ　春花の　散るはをしけど　時來なば　山郭公　いつしかも　つぎてなかむと　なつ山に　心ぞうつる　もみぢ葉の　時すぎゆかば　嵐のみ　いまきわたらむ　枯山を　何にすさめむ　そこをしも　あはれとぞ思ふ　秋やまを　うべもむかしゆ　しぬびけらしも

妙法院宮より橘千蔭が歌めしたまへるをよろこびてよめる歌並序

妙法院宮は當今の御いろせのみこにおはしますなるがいにしへのみやびごと深くこのませたまふあまりに橘千蔭が名たかかるをきこしめしたまひてことしやよひ大舍人岡本保孝が一條のおとどの御ともにまゐれるにおほせごとたまはりて千蔭のよめる歌のなかに山家閑居などの題なるをたてまつらせたまへりそも〳〵此の百年あまり江戸の大城にしてよろづの政まうし給ふまゝに今は天の

○こち〳〵　あちこち。
○こきれ　かき落し入れて。むしりいれて。
○あし引の　山の枕詞。
○やつを　八峯。多くの峯。
○見さけ　遠く見はなし。
○遊ばひ　遊び。
○家のごと云々　自分の家に居るやうに帶も解き放し。
○しかもまぐはし　それ程までにうつくしい。
○いづれをか云々　どちらを物にとりわけて戀しく思はうか。
○をしけど　惜しいけれど。
○いまきわたらむ　卷きわたるだらう。吹き卷いて來るだらう。
○枯山云々　枯山を何として面白いと賞美されよう。
○そこをしも　それを。
○むかしゆ　昔から。
○妙法院　閑院宮典仁親王の御子眞仁法親王。
○當今　今上天皇。光格天皇を申す。
○御いろせ　御兄弟。
○岡本保孝　江戸幕府の士。清水濱臣及び狩谷棭齋の門人。明治十一年歿、年八十二。著書五百八十種。

下のにぎははしさをたどこゝにしもつどへたれけおのづからみち
みちのかしこき人々もおほく出で來て言の葉に名高かるともがら
もこれかれきこゆめれどかかるかしこきおほせごとをかうぶりて
世におもておこしなることは更にためしなきわざになむ有りける
さるはその身のひとりたぐひなき譽れあるのみかはかくて縣居
翁がをしへのあらはれぬべき時いたれりとやいはむかれよろこば
しさにたへずしてすなはちうたへらく

常世もの　名におふおほは　言の葉の　ちよのふる道　ふみわけて　高き手ぶりを　眞心に　ふかくえしかば　しら玉は　われこそもたれ　光しる　人しもがもと　ほこらひて　年はへにけり　しかれども　千尋の淵の　そこひをば　くみてだに見ず　淺き瀨に　立ちてたゆたひ　高山は　よぢも登らで　麓べに　ゆきかゝづらふ　よのつねの　人し知らねば　よしゑやし　見ぬ世の後に　あらはれむ　時こそあらめと　もだしゐて　ありふるほどに　いかなりし　神の心に　みちびかし　給ひけらしも　かけまくも　いともゆゝしき　久方の　とほつ雲居の　そなたより　きこえあげよと　ことさらに　おほせたまへば　年久に　袖につゝめる　白玉を　ひろひあつめて　御使に　さゝげまつりぬ　い

○こゝ　江戸。
○言の葉に名高かるともがら　和歌に有名な人々。
○おもておこし　面目を施すこと名譽なこと。
○縣居翁　加藤千蔭の師賀茂眞淵
○かれ　故に。
○常世もの　橘をいふ。田道間守が常世の國から持ち來した故にいふ。常世の名におふは橘を名に負ふ橘千蔭をさす。
○高き手ぶり　高尙な風調。
○ほこらひて　誇りて。
○そこひ　底。
○たゆたひ　ためらひ。
○かゝづらふ　かゝりあふ。
○よのつね云々　淵の底を知らず山の麓にぐづついてゐる凡人は千蔭の高き手ぶりを知らないから。
○よしゑやし　よしや。まゝよ。
○もだしゐて　默止して。
○みちびかし給ひ　導き給ひ。
○久方の　雲の枕詞。
○雲居　雲の居る所、大空。禁中をたとへた。天皇の御弟におはしまし故に妙法院眞仁親王を申した

にしへの　ためしは知らず　後の世に　たぐひやはある　かくばかり　まれなるふしに　あふことを　今のうつゝに　見るがうれしさ

かへし歌

みなそこにかゞよふ玉のひかりこそ波かき分けてあらはれにけれ

おなじ宮の御まへにけふのほそ布にそへて奉れる歌

あづまぢの　道のおくなる　しづのめが　なれて手わざに　おるはたは　むかしもかくや　山河の　はやき世よりも　胸あはぬ　ものなりけりと　細布の　せばきためしを　言の葉に　いひつぎにけり　これぞこの　いやしき賤が　身にまとひ　みゆきふる日の　さむけさを　忘れむためと　おり出づる　布にしあれば　よき人は　たれもすさめず　しかれども　時にひかれて　物みなは　かはるならひを　すなほなる　賤がわざとて　移り行く　世にもうつらず　いにしへの　手ぶりを今に　傳へ來る　ことぞめでたき　そこをしも　あやにむかしみ　いはまくも　ゆゝしけれども　ふりにける　ことしのばす　おほ君の　みてにとらして　はるかなる　ひなの手わざに　とほき世を　見そなはせとて　細布を　さゝげもち來て　かしこきや　みはしのもとに　けふたてまつる

○たぐひやはある　後世に類があらうか決してあるまい。
○今のうつゝに　今めの前に。
○かゞよふ　輝く。
○けふのほそ布　陸奥希婦に産する細布といふ幅狭い布織物。
○山河の　はやしの枕詞。
○はやき世　上代。
○胸あはぬ　細布は幅狭く襟があはぬ。後拾遺集「錦木はたてながらこそ朽ちにけれけふの細布胸あはじとや」
○すさめず　心にとめて賞翫せず
○ならひを　習ひであるのに。
○すなほなる　素朴な。
○あやにむかしみ　理由もなくむやみに賞愛すべく思って。
○いはまく云々　言葉にいふも大さうな恐れ多いことだが、古い事を思ひ懐かしまれる大君。
○ひなの手わざ　鄙の人の手細工
○みはし　御階。
○けふ　今日。細布の産地の名希婦を含めた。

みちのくのけふの細布せばけれどふるき手ぶりは今ものこれり

擬送遣唐使歌竝短歌

天雲の　むかふす空は　朝はふる　風こそいぶけ　汐けのみ　かをれる海は
夕はふる　浪こそさわけ　よしゑやし　浪はたつとも　よしゑやし　風は吹く
とも　あきつ神　我が大君の　大みこと　いたゞきもちて　異國に　いゆきむ
かはば　あらしほの　汐の八百重に　ありたたし　うしはきいます　秋津姫
神のみことの　ともへをば　まもらひ給ひ　四つの船　もなくぞあらむ　倭文(しづ)
機(はた)い　ぬさとりしでて　わた中に　手向(たむけ)よくせよ　玉がきの　うちつみ國の
ますらをのとも

反歌

大王のみことかしこみあら潮のうづまく海に旅ねすらしも

丈夫は名をし立つべしこと國のふびとがともも記しつぐべく

擬送留學生歌竝短歌

日の本の　大和しまねは　天地の　かためし國と　むかしより　いひつぎ來れ
ど　吾が大王　神のみことの　たり御世を　ましたらはして　いや廣に　こと
しらさむと　異國の　大きひじりの　言たてし　道のことごと　まつぶさに

○天雲のむかふす　天の雲が向うの方に遠く低く伏したやうに見える。
○はふる　はたゝく。風や浪の烈しいのを鳥の羽たゝくに比した。
○いぶけ　吹く。
○よしゑやし　よしや。
○あきつ神　現神。天皇の尊稱。
○ありたたし　立ち給ひて。
○うしはき　統治し給ふ。
○ともへ　艫舳。舟の前部と後部
○まもらひ給ひ　守り給ひ。
○四つの船　遣唐使の一行は四艘の船に分乘して行くが例であつた
○もなく　まがごとなく。災もなく。恙なく。
○倭文機　穀麻などで縞を織り出した布。
○ぬさ云々　倭文織の幣を取り垂れて。
○わた中　海中。
○ふびとがとも　史官等。書記官
○たり御世　滿ち整うた御世。
○いや廣　いよ／＼廣く。
○大きひじり　大聖人。
○まつぶさに　つぶさに。

見したまはむと　神ながら　おもほしめして　それをしも　今のをつゝに　問ひさけて　學ばひ來よと　ものゝふの　八十伴のをの　生れつける　わく子がともを　とり選び　よさし給へば　はしきやし　若子がともは　新代の　み使たたす　大船に　いざなはれつゝ　かしこきや　父をもおきて　たふときや　母が手はなれ　わたとなる　國のそきへに　いやとほく　別れも行くか　なほざりの　旅にしあらめや　おほろかに　年なかさねそ　心せよゆめ

かへしうた

ことさへぐ國に七年としふともことはつたへよ父母がため

觀琉球來聘使作歌

下野や　ふたらの山に　みや柱　ふとしきいます　大神の　とほの御門に　大御世を　しらしし時ゆ　天皇の　まけのまに〳〵　天の下　守らひますと　いやひろに　國をなごすと　隼人の　さつまの國の　みやつこに　みことおほせて　ことさへぐ　南のしまの　こきしらを　ことむけましせ　をす國の　うちつみやけと　ことよさし　さだめ給ひぬ　しかれこそ　いやつぎ〳〵に　新代の　はじめの時と　國ほがひ　ことほがひすと　海原は　まかぢしゞぬき　あら山は　岩根ふみさくみ　はる〳〵に　今もまゐ來る　遠つ島人

○今のをつゝに　今のうつゝに。今現在に。
○問ひさけて　問ひやつて。
○八十伴のを　多くの伴のを。多くの部屬の長。
○わく子　若い男兒をほめていふ
○よさし給へば　委任し給へば。
○はしきやし　愛らし。
○新代云々　天子の御代のかはり給へるを告げる使の出發される。
○わたとなる　海外なる。
○そきへ　遠く離れた方。
○おほろか　迂闊に
○ことさへぐ國　言語の喧しく聞きわけ難い外國。
○ふたらの山　二荒山。日光山。
○みや柱云々　宮柱を太く嚴しくして宮さしろしめす大神。こゝは日光廟の德川家康をさす。
○とほの御門　京師から遠く隔たる地にある官府。こゝは江戸幕府。
○まけのまに〳〵　天皇の御委任のまゝに。御委任に隨つて。
○なごす　和す。平和ならしむ。
○こきし　韃吉支。三韓王。こゝは琉球王。
○ことむけまし　征服し給ひて。
○うちつみやけ　總督府。
○國ほがひ　國を祝賀する。
○まかぢ云々　楫を繁くいそがはしく使つて。
○ふみさくみ　踏み分けて。

○あらましき　荒々しい。暴い。
○きしかた　過去。こしかた。
○しづたまき　いやしの枕詞。
○かずまへられ　數へられ。
○をす云々　簾の内にかしづかれ
○ますかゞみ　明らかに澄んだ鏡
○ゑまひ　笑み。
○うつし繪　寫生畫。漢元帝匈奴にゆくべき宮女を畫像によつて定めた、王昭君は賂を贈らず爲にその畫像によつて匈奴に嫁することに定まつた。
○せむすべをなみ　せん方なさに
○かきなす　かき鳴らす。
○四つの緒　琵琶。
○恨みを云々　恨みをはらす世。
○ちりもうせなで　散り失せてもしまはずして。
○あら山　荒れた山。
○岩がき云々　岩が垣のやうに繞らしこめた中のいぶせき低い小屋
○こともかよはぬ　言語も通じない。
○つまとむつび　夫として親しみ
○袖さしかへ　袖をさしかはして
○もろね云々　もろ共に寝ようとは思ひも寄らなかつた。

詠王昭君歌

雪まじり　あられみだれて　夜もすがら　北吹く風の　あらましき　夜牀の上に　つく〴〵と　枕そばだて　きしかたを　思ひいづれば　人の世は　ゆめなりけりな　しづたまき　いやしき我も　宮姫と　かずまへられて　をすのうちに　いつかれし世は　あや錦　袖にかさねて　白玉を　かづらにしつゝ　ますかゞみ　見るおもかげの　かぐはしき　花のゑまひを　我ながら　われとたのみて　大王の　惠みの露し　あまねくば　漏れじとこそは　思ひつゝ　有りけるものを　さがなきや　筆にまかする　うつし繪の　あらぬすさみの　いつはりを　正しもあへぬ　うきふしは　せむすべをなみ　いひしらぬ　國の界に　はる〴〵と　出でたつ道に　おきそはる　袂の露の　きえかへり　引きとゞめたる　駒の上に　暫しかきなす　四つの緒の　絶えぬ恨みを　はるけなむ　世こそ知られね　をしからぬ　命と思へど　塵の身の　ちりもうせなで　春たてど　花もにほはず　秋來ても　紅葉も見えぬ　あら山の　岩がきこもる　ふせ庵に　われにもあらで　いたづらに　年はかさねつ　おもひきや　こともかよはぬ　國人を　つまとむつびて　たをやめの　まとひも馴れぬ　かは衣　袖さしかへて　もろねせむとは

反歌

春の日の光もうときふる塚に草のみどりやいかに殘せる

こだくみのつかさ紀朝臣をたゝへまつる長歌

八雲たつ　いづものくにに　ありたたし　妻とはしけむ　皇神の　神の御世より　言魂の　さきはふ國の　國ぶりを　世々に傳へて　あらたへの　藤原がうへに　をす國を　しらしける世は　山櫻　さきのをゝりに　色も香も　にほふが如く　眞盛りの　時にぞ有りける　かかれこそ　聖とすらも　たゝへ來な人も有りけれ　ならの葉の　名におふ宮の　中つ世と　きこゆるまでは　名ぐはしく　いひつぐ人も　おひすがひ　あれつぎにけり　かくしもぞ　めでたかりしを　いかさまに　おもほしけめか　玉しきの　たひらの宮の　新世を　みよつがしける　天皇の　神のみことの　神ながら　神さびせすと　唐にしきあやとるわざを　うむかしみ　おもほしめして　かしこきや　大御手づから織りも出で　つくりも出でて　めでたまひ　すさび給へば　うち日さす　宮のみや人　わが君の　なしのまゝにと　高機に　よぢものぼらひ　さなはたのまねきふみたてて　からはたに　みもまがふがに　とりまねび　きそひにしかば　大野らや　風にもろむく　はた薄　靡くが如く　月草の　初花ずりの　色

○こだくみ云々　木工頭紀貫之。
○八雲たつ　出雲の枕詞。
○ありたたし云々　立つておいでになつて妻戀ひ求め給うた。
○言魂云々　言語の靈妙なので幸福ある日本の國風の和歌。
○あらたへの　藤の枕詞。
○さきのをゝり　咲きたわみて。
○ならの葉云々　奈良の都の時代
○名ぐはし　名うるはし。
○おひすがひ　後から追ひ縋つて
○あれつぎ　繼いで生まれる。
○いかさま云々　如何やうに思ひ給ひけむか。
○たひらの宮云々　平安城に都された桓武天皇漢詩を奬勵されたことをいふ。
○あやとる　あやつる。
○うむかしみ云々　賞愛し給ひ。
○織りも出で　自らも漢詩を作られたことをいふ。
○うち日さす　宮の枕詞。
○まねき　織る機の足で蹈んであぜを上下させる部分。
○みもまがふがに　自身も唐織に紛れるばかりに。
○大野ら　大野。一般臣民をさす朝廷百官が漢詩に向つたので一般も之れに倣つたの意。

に出でて　きぬにつくなす　なべて世に　うつろひゆきて　皇神の　國つ手ぶりは　こもりぬの　下にかくれて　かた絲の　たえばたゆがに　とひ見べきものとも知らで　あまた年　へにぞ經にたる　しかれども　岩がき淵の　あへ冰　春を待ちえて　音たつる　ためしあればや　よろこびを　のぶと聞えし大御世に　萬のことら　いにしへの　跡しのばして　おほほしき　ことあらせじと　みこゝろに　思ほすなべに　神代より　有りくるわざを　よろづ代に傳へもゆけと　紀の朝臣に　みことのらして　あまの子が　磯まのかるも　かきつどへ　えらせ給へば　水底に　しづめる玉も　波の上に　光かゞよひ　浮雲を　いぶきはらひて　照る月の　影見るごとく　ことだまの　さきはふ手ぶりさら〱に　世にあらはれつ　ことに出でて　名づけも知らぬ　此の朝臣が　おほきいさをぞ　あやにたふとき

かへし歌

天つそらさやけき月をよろづ代にかけて仰がぬ人あらめやも

壽星のかたかける繪に

あめなるや　南の星の　くしみたま　いつの世よりか　此の世にし　あもりいまして　いひ知らぬ　神のすがたを　うつそみの　人に見ゆらむ　かしこしと

○こもりぬの　下の枕詞。
○たえばたゆがに　絕えるばかりに。
○へにぞ經にたる　經たりを强めていふ。かた絲の縁で綜るをかけた。
○よろこびをのぶ　延喜の御世。
○しのばし　忍び給うて。
○おほほしき　たしかならぬ。
○思ほすなべに　思ひ給ふにつれて。
○かるも　刈藻。
○えらせ　選ばせ。
○かゞよひ　輝き。
○いぶきはらひ　氣息吹き掃ひ。
○ことに出で云々　言語に表はして何と云つてよいかわからぬ功績
○壽星　人の壽命を司るといふ星南極老人星。その化身なる壽老人、七福神の一。白髮で鹿を伴ふ像。
○南の星　南極老人星。
○くしみたま　靈妙な德ある靈魂
○あもりいまし　天降りましまして。
○うつそみの　人の枕詞。

まさめに見れば　たなばたの　五百機たてて　織るきぬを　身にまつはして　玉の緒の　ながきかしらに　眞しらがの　霜かきたりて　千世ふべき　神の教へを　世の人に　傳へむためと　天つふみ　御手にとらせり　其のふみを　見むよしもがも　神ごとを　聞くよしもがも　こひのみて　たちゐをろがみ　あふげもろ人

舜叟法師がはりみぢへ歸るを送る長歌

言の葉の　道のひじりと　あふぎ來る　神の宮ゐを　はりみぢや　いちひが本の　山寺に　いはひ初めけむ　そのかみは　いつとしらねど　中つ世に　其の名聞えし　歌人の　言葉の露を　とゞめ置く　跡をし見れば　はやき世の　ことにぞあるらし　其の寺の　いまのあるじは　墨染の　身にしもあれど　しきしまの　大和手ぶりを　ま心に　ふかくしたひて　この神に　仕ふることを　おのが身の　さきはひありと　よろこばひ　思ひわたれば　春秋に　花折り手向け　朝夕に　いがきがもとを　かきはらひ　清むとすれど　年深み　ふりし宮ゐの　みやばしら　朽ち行くまゝに　おのづから　こけのみむして　かたそぎの　ゆきあひのまより　をりをりに　漏り來る雨は　さゝふべき　よしも知られず　かくながら　ありへむことは　かしこしと　神の御爲に　安からず

○まさめに　まのあたり。
○五百機　澤山の織る機。
○玉の緒の　長しの枕詞。
○霜かきたり　霜の白髪を櫛で梳り垂らして。
○天つふみ　天書。天の卷物。
○神ごと　神の御言葉。
○こひのみて　祈願して。
○たちゐをろがみ　起つても坐つても拜んで。

○言の葉云々　歌道の聖人と仰ぐ神即ち柿本人丸。神の宮ゐは播磨明石郡大藏谷の人丸社。
○はりみぢ　播磨。
○いはひ初め　齋き祀りはじめた

○墨染の身　僧侶たる身。

○さきはひ　幸。
○よろこばひ　喜び。
○いがき　齋垣。神社の垣。
○こけのみ云々　苔ばかり生えて
○かたそぎ　神社の屋根にある千木の片面を削いだもの。
○ゆきあひのま　くひちがひのすきま。
○かくながら云々　此のまゝで永く經過することは。

思ひ惑ひて　里人に　あひ語らへど　里人も　せむすべ知らず　とほ里に　こととひすれど　誰しかも　いかにかせまし　よしやさは　我が身をちゞに　くだきてと　思ひおこして　廣前に　ねぎごとまうし　ほとけにも　ちかごとたてて　都べに　ひとり出で來て　かくこそと　人に告ぐれば　聞く人の　いひつぎ行きて　まことある　あかき心の　いそしさを　誰もめでつゝ　ぬさまつる　人こそおほく　ありけらし　しかはあれども　かくのみに　やみなましかば　にひ宮を　造らむために　なほあかぬ　わざぞと思ひて　ひたみちに　心ふりおこし　山も越え　海も渡りて　遙々と　千里の遠の　江戸の城に　さらにまゐ來て　やちまたに　か行きかく行き　日をかさね　月を重ねて　こゝにしも　かつやすらへり　むかしへや　東の鄙と　世の人の　いひしあら野も　今はまた　いともかしこき　おほとのの　ふとしきませば　やしまぐにも　もゝ國人も　まゐり來て　つかへまつりて　道々に　心さかしく　みやびたる　人こそさはに　つどひけれ　それが中にも　ことの葉の　道ふむ人は　いやしきも　たかきもなべて　多かれば　思ひ歎きて　御柱は　我こそたてめ　檜皮をば　我ふかましと　とりどりに　あひ爭へば　思ふこと　あかぬ事なく　ぬさしろも　山とつもりぬ　いざさらば　とく立ち歸り　新宮を　雲居に高く　造

○よしやさは　さゝよそれでは。

○廣前　神前。
○ねぎごと　祈誓。
○ちかごと　誓言。

○いそしさ　忠實に勤めること。

○ひたみちに　一途に。

○まゐ來て　參り來て。
○やちまた　四方八方の街。
○か行きかく行き　彼方に行き此方に行き。
○かつやすらへり　暫く滯在した。
○あら野　荒野。武藏の荒野。
○いともかしこき云々　德川將軍が宮殿の柱を太く嚴しくし領し治めておいでになるから。
○やしまぐにもゝ國人　日本中の諸國の人々。
○さはに　數多く。
○ことの葉云々　歌道に携はる人
○いやしきもたかきも　貴賤。
○御柱　人丸社の新社殿のをいふ
○檜皮　檜の樹皮を細く裂いたもの、屋根を葺くに用ゐる。
○ぬさしろ　幣代。幣帛料。

れ法の師

かへし歌

時を得てかゝぐる法のともし火にふたゝび照らせあけの玉垣

雨岡のふたら山に詣づるを送る長歌みじか歌

神さぶる　ふたらの山は　朝日子の　たゞさす高嶺　しきませる　國のまほらぞ　常宮を　こゝとさだめて　天の下　まもらひませと　皇神の　よさしのままに　あらみ魂　しづまりいまし　萬代に　うしはきませば　もゝ敷の　大宮人は　天皇の　またす使と　年のはに　ちさとを越えて　つばさなす　ありがよひつゝ　靫かくる　八十件のをは　岩がねを　ふみ平らげて　とこしへに　いがきが本に　しゝじもの　いはひさもらひ　月にけに　八洲の國ゆ　まゐり來る　人し絶えねば　山ごもる　檜原が奥も　馬車　いゆきかへらひ　雲まよふ　千尋の谷も　家むらは　みちて有りけり　しかれこそ　神のみ山は　天皇の　御代のしづめと　世の人の　いひつぎきぬれ　倭文はたの　ぬさとりむけて　ふと前に　うなねつきぬき　ゆふづゝの　かゆきかくゆき　とりよろふ　山の八百くま　隈もおちず　見て歸り來よ　かしこかれども

かへし歌

○法のともし火　燈火が闇を照らすに譬へて佛法をいふ。
○あけの玉垣　朱塗の神社の垣。弄叟法師の力で人丸社が再建され佛法の力で和歌が照り輝けよの意。
○ふたら山　二荒山。日光山。
○まほら　丘山で圍まれた處。
○常宮　永久不變の宮。
○よさし　任されたこと。勅命。
○あらみ魂　勇武な御魂。
○うしはき　土地を領し治め。
○もゝ敷の　大宮の枕詞。
○またす使　遣はし奉られる使。
○年のはに　年毎に。
○つばさなす　通ふの枕詞。
○靫かくる云々　武を以て仕へてゐる諸部屬の長。大名や武士。
○いがき　齋垣。
○しゝじもの　いはひの枕詞。
○月にけに　毎月。
○いゆきかへらひ　往復し。
○しかれこそ　それでこそ。
○うなねつきぬき　頸を地について。
○ゆふづゝの　かゆきかくゆきの枕詞。
○とりよろふ　具はり整つた。

朝日子のとよさかのぼる二荒山たゞさす影をあふげとぞ思ふ

海量法師のはじめてとひ來けるによみておくれる

春の日の　のどなる時に　ふせいほの　かなどをひらき　かすゆ酒　のみつゝをれば　はしりでに　くつの音きこゆ　いましはし　たれか來ぬると　たちむかひ　姿を見れば　霜やたび　おくと見るまで　眞しらがを　うなねに生し　みるのごと　わゝけしひげを　むなさかに　長くしたれて　ぬの衣　ま袖もゆたに　たつか杖　こしにたがねつ　いづくより　來ますととへば　年ひさに　しが名を聞きて　いはばしの　あふみの國ゆ　はろ〴〵と　われは訪ひ來と　ねもごろに　君ぞのらせる　しかれども　おぞの我はも　なぞへなき　世のしれ人　ひがみたる　國のすて人　わが目らは　四つしもあらず　わが口は　ふたつもなきを　いかさまの　人ときかして　めづらしみ　われを訪はせる　いともいとも　あやしきかもよ　ましらがのおぢ

よしのの宮の跡を見てよめる

橿原の　日知の御世ゆ　百たらず　世つぎましける　天皇の　神のみことは　いはまくも　かしこけれども　天つ日の　くもりあらせず　天の下　照らし給ふと　食國(をすくに)を　さだめたまふと　神おもひ　おもほしめして　神はかり　はか

○ふせいほ　低くみすぼらしい庵。
○かなど　金物を多く打つた戸。
○かすゆ酒　糟酒を溶かした湯。
○はしりで　門口。
○いましはし　今。
○うなね　首の根。頸。
○みるのごと　海松の如く。
○むなさか　胸先。
○たつか杖　手に握り持つ杖。
○しが名　汝の名。汝の評判。
○いはばしの　あふみの枕詞。
○おぞの我　愚鈍な我。
○なぞへなき　比類のない。
○きかして　お聞きになつて。
○ましらがのおぢ　眞白髮の老翁。
○橿原の云々　神武天皇の御代から。
○百たらず　八十の枕詞。こゝでは百に足らぬの意。百たらず云々は九十六代後醍醐天皇を申す。
○食國　天皇の統治し給ふ國。

りましけり　うべしこそ　天のます人　いやさはに　人はあれども　さかしとか　聞しめしけめ　うましとか　おぼしけめやも　橘の　ますらたけをに　御軍を　まけたまへれば　丈夫も　みことかしこみ　むらぎもの　心ふり起し　大王に　つかへまつると　ぬば玉の　夜はすがらに　つるぎたち　腰にとりはき　あかねさす　ひるはしみらに　梓弓　手にとり持ちて　軍人　あともひつれて　まつろはぬ　國もなびかへ　ちはやぶる　人もなごしぬ　とこしへに　かくしもあらば　木綿花の　さかえましけむ　いにしへの　まさかりの世と　今の世も　さちはひまさむと　大船の　おもひたのみて　よの人は　有りけるものを　うき雲の　また立ちまよひ　ありそなみ　たちのさわぎに　かりごもの　みだれあひつゝ　思ふそら　やすからなくに　なげくそら　やすからなくに　いはむすべ　せむすべしらに　ますらをの　たけき心も　朝霜の　消なばけぬべく　ゆふ露の　ちりてうせぬれ　神ながら　神のみことの　み心の　ゆたにまさでや　たむだきて　いましかねてや　やほによし　たひらの宮を　朝鳥の　出で立ちまして　み雪ふる　芳野の嶽の　しら雲を　八重かき分けて　たゝなはる　青垣山の　岩がきを　みかきとなして　岩ばしる　瀧つ河内は　外のへなる　みかはの水と　みし給ひ　なぞらへまして　いでましの　とつ宮

○うべしこそ　うべなるかな。
○天のます人　人民。
○橘のますらたけを　楠正成。楠氏は橘氏の子孫。
○まけ　任せ。
○むらぎもの　心の枕詞。
○ぬば玉の　夜の枕詞。
○あかねさす　ひるの枕詞。
○しみらに　繁くひまなく。
○あともひつれ　率ゐつれて。
○まつろはぬ云々　服從しない國を靡かし。
○ちはやぶる　人の枕詞。但しこゝはいちはやぶる勢ひ强悍な意。
○なごし　和げ。
○木綿花の　榮ゆの枕詞。
○大船の　たのむの枕詞。
○ありそなみ　荒磯波。
○かりごもの　亂るの枕詞。
○思ふそら　思ふすら。
○やすからなくに　安からぬに。
○朝霜の　消(け)の枕詞。
○ゆたに　ゆたかに。靜かに。
○たなだきて　手を拱いて。
○朝鳥の　立つの枕詞。
○たゝなはる　幾重にも疊み重なる。
○青垣山　垣のやうに圍んだ青山
○岩ばしる　瀧の枕詞。
○いでましのとつ宮　離宮。

ならで　大宮を　こゝとさだめて　雲の上に　ふとしきましぬ　しかれども
いく世もあらで　山河の　神もつかへず　あまさかる　鄙となりきと　かたり
つぎ　いひつぎにけり　大宮の　その跡どころ　見ればかなしも

かへし歌

ふりにける跡とひ來れば宮人のたもとわすれず花さきにけり
いにしへを汝もしのぶかよぶこ鳥うらなきをれり大宮所
しら雲の八重たつ山に大宮をいく世までとて造り初めけむ
たちばなは根さへかれてもとこしへにかぐはしき名ぞ今ものこれる
天地のかためし國といはめどもうつろひ來ぬる世にこそ有りけれ

賀茂のうしと共に我がはらからなどかいつらねて大和國へいきける時に
よしのの大瀧を見てよめる

神ろぎの　遠き御世より　かたりつぎ　いひつぐことを　ゆかしみと　思ひ立ちぬる　草枕　たびのながぢの　山川の　いづこはあれど　名ぐはしき　よしのの山の　雲きりを　八重かき分けて　大瀧の　川瀨を見れば　上つ瀨は　ゆつ岩村に　落ちたぎち　水沫くだけて　大雪の　散りかふがごと　下つ瀨は　八十のくまわに　よる波の　うづなみまきて　天雲の　たゞよふなせり　神が

○ふとしき　宮殿の柱嚴しく治め給ふ。
○あまさかる　鄙の枕詞。
○よぶこ鳥　倚鳥の異名ともいふ
○うらなき　心に悲しみないて。
○たちばな云々　橘氏は一族全滅しても芳名千載に殘る。かぐはしきは橘の緣語。
○うつろひ來ぬる世　移りかはり衰へた世であつた。
○賀茂のうし　賀茂眞淵大人。
○かいつらね　連立つて。
○神ろぎ　かみろぎ。かむろぎ。皇祖天神の男神。
○草枕　旅の枕詞。
○ながぢ　長路。長途。
○名ぐはし　名高い。名のうるはしい。
○大瀧　大和吉野郡吉野川の上流の川上村大瀧。吉野川の激流。
○ゆつ岩村　多くの岩の羣。
○落ちたぎち　湧きかへり流れ落ち。
○八十のくまわ　多くの入りこみ廻らした所。
○うづなみ　渦波。
○たゞよふなせり　漂ふが如くである。
○神がらか　神の故であらうか。

らか　しかぞあやしき　國がらか　かくぞさやけき　やほ萬代にありがよひ
つねに見るとも　あきたらめやも

かへし歌

落ちたぎつゆつ岩むらに波ふりて山もとゞろにひゞきあひにけり

木曾のみたけを見さけてよめる

野つもちの　神の御世より　玉ぐしに　とらし來にける　みすゞかる　信濃の
國に　たてる檜の　眞木のつまでを　もゝたらず　筏につくり　波のむた　う
かべながせる　木曾川の　かはのをちこち　高山は　さはにあれども　むらや
まの　つかさの山と　こちごちの　山のみなかゆ　雲居に　たかく聳き　おは
木曾の　木曾の御嶽は　かしこくも　たたせる山ぞ　あやしくも　いませる神
の　神ながら　神さびせすと　みこゝろの　あらぶるときは　朝はふる　風こ
そいぶけ　夕はふる　風こそさわけ　そのかげに　いぶき拂はれ　たつ雲も
いゆきはゞかり　其の風の　さゆと泣ゆれば　六月の　つちさへさけて　照る
日にも　雪ぞふりける　いはまくも　ゆゝしきかもや　木曾の神高嶺

かへしうた

雲居なるみたけ神さび風たちて木曾のむら山なりぞとよむる

○山もとゞろに　山も鳴動くばかりに。
○木曾のみたけ　御嶽。信濃西筑摩郡。飛驒に跨る。
○野つもちの神云々　日本書紀「野槌者探二五百箇野薦八十玉籤一」とあるによつた。
○みすゞかる　信濃の枕詞。（冠辭考による）
○眞木　杉檜などをいふ。
○つまで　仙人が木作りした材木
○もゝたらず　いの枕詞。
○波のむた　浪と共に。
○むらやまのつかさの山　群山の中最も高い山。
○こちごち　あちこち。遠近。
○みなかゆ　眞中から。
○たたせる山　聳え立つておはす山。
○神さびせす　森嚴に尊くおはす
○はふる　羽振る。風の烈しく吹くをたとへた。
○さゆと泣ゆれば　泣ゆれは。
○いはまくも　言はむも。
○なりぞとよむる　鳴り響く。

○こもりくの　初瀨の枕詞。
○泊瀨を國　泊瀨の鄕。
○朝倉　雄略天皇の皇居は大和の泊瀨朝倉宮。
○栖輕　小子部蜾蠃。
○石文　石碑。
○しかこそありけれ　さうつであた。
○いそしかる　勤めて居られた。
○ゑりもてがも　彫りつけたい。
○うづなひ　うべなひ。うけがひ。
○伊豆の高嶺　伊豆國田方郡伊豆山か。いで湯わく(溫泉)ともあるから。
○ゆつ岩むら　多くむらがる石。
○やさか　八尺。たけ長くの意。
○諸手船　數多の水夫の乘つた船。
○荏原の海　武藏荏原郡荏原鄕の海。品川の海。
○百たらず　八十の枕詞。
○ひこづらひ　引張つて。
○ふみさくみ　强く踏んで行き。
○鏡なす　鏡の如く。
○鳥の跡　文字。筆跡。
○おくつき　御墓。
○をつゝ　現在。
○讀みてをしぬべ　讀みて思ひ慕へよ。をは强め辭。

賀茂大人の御墓のもとに石文を立てける時に

こもりくの　泊瀨(はつせ)を國の　朝倉に　宮づくりして　天の下　しろしめしける天皇の　其の大御世に　栖輕ちふ　ますらたけをを　をゝしとて　たゝはしき名を　石文の　柱に載せて　なべて世に　稱へにけりと　記しつぎ　いひつぎにけり　いにしへも　しかこそありけれ　それをしも　例に引きて　さしむしろ　賀茂の翁が　ふる言の　學の道に　いそしかる　其のゆゑよしを　岩の上に　ゑりてもがもと　翁をし　しぬぶ人どち　あひはかり　相語らへば　諸人は　誰もうづなひ　いで湯わく　伊豆の高嶺に　なみたてる　ゆつ岩むらの岩垣を　やさかにきりて　諸手船(もろてふね)　もろ手に載せて　荏原の海　濱の磯間ゆ百たらず　八十綱はへて　ひこづらひ　山ふみさくみ　さゝげ來て　其の岩角を　鏡なす　たひらにみがき　常世麻呂　筆とりもちて　わが大人の　ありへつる世を　つばらかに　ことにのばへて　鳥の跡を　深くとゞめて　おくつきの　御前にたてつ　百世にも　千々の年にも　かくながら　いやとこしへに傳へゆかば　今のをつゝを　遠つ世と　見む世の人も　たちむかひ　讀みてをしぬべ　これのいしぶみ　常世麻呂は千蔭が字なり

反歌

○少林院　品川にある。眞淵の墓所がある。
○わたつみ　海。
○あたひなき玉　價に見積ることの出來ぬ貴い玉。
○ありこへ　ありこいふ。
○かづく云々　水を潜るけれど。
○得がてに云々　得難しとして。
○おくか　深い奥の處。
○おほほし　おぼつかなく。朦朧と。
○沖つ鳥　鴨にかけて賀茂の序。
○たづき云々　たよりも知らず。
○肝向ふ　心の枕詞。
○あせあゆる　汗がにじみ出る。
○うまい　熟睡。
○辿りゆく　迷ひさがし行く。
○かくろひし　隱れた。
○ほこらひて　誇りて。

君が名を千名のいほ名にひゞけとて山もとゞろに石にゑりつく

賀茂大人みまかり給ひてより三十あまり三とせになりけるとし少林院にまうでてふるきをおもふといふことを人々と共によめる

わたつみの　千ひろの底に　あたひなき　玉こそありとへ　高山の　五百重が奥に　世に知らぬ　花こそ咲くとへ　波開わけ　かづくとすれど　その玉は　拾ひもかねつ　岩ねふみ　のぼるとすれど　其の花は　をりもとられず　拾ひ得ぬ　其の玉のごと　たをり得ぬ　その花のごと　皆人の　得がてにしつゝ　むかしより　思ひまどひて　古言の　ふかきおくかを　おほほしく　いひつぎ來しを　沖つ鳥　賀茂の翁の　此の世にし　あらはれまして　人はよし　たづきをしらに　思へりし　ことには有りとも　言魂の　助けもこそと　肝向ふ　心ふりおこし　あさ衣　あせあゆる日も　やすらへる　時の間もなく　皮ぎぬに　霜さゆる夜も　おきゐつゝ　うまいはなさず　月かさね　年もへにつゝ　眞心に　求めてしより　くもり夜に　分くる山路を　松の火に　照らすがごとく　辿りゆく　限もあらはれ　谷陰に　ふりおける雪の　春來れば　消ぬるがごとく　かくろひし　名殘なければ　世に知らぬ　花は我見つ　あたひなき　玉は得にきと　ほこらひて　有りしあひだに　おのづから　知らぬ國にも　世

○かたりつがひて　語り繼ぎて。
○いはまく云々　口に云ふも憚りある大殿。德川將軍家をさす。
○名きかして　名を聞き給うて。
○みことからさず　御言葉を絶やさないで。
○うつくしみ　愛し。
○めで給ひてゆ　めで給ひてより
○かしこきろかも　ありがたいことであるよ。
○いやとしさかる　いよ〳〵甚しく年が隔たる。歿後年月がたつ。
○よしやさは　萬一にもその通りに。
○朝戸出　朝戸外に出ること。

の人の　かたりつがひて　をちこちの　人もとひさけ　いはまくも　あやにゆゆしき　大殿に　其の名きかして　殿のうちに　つかへまつらせ　朝夕に　みことからさず　上つ代の　こと問はしつゝ　ねもごろに　思ほしめして　汝がごとき　人はあらじと　うつくしみ　めで給ひてゆ　かぐはしき　名をし傳へて　なべて世に　人ぞしぬべる　むかしへに　かもの翁が　有りし世を　思ひいづれば　かしこきろかも

反歌

しら玉の光はとほく照らせどもとり得し人はいやとしさかる

かぐはしき君がこと葉のにほひこそ千世にもあはぬ花には有りけれ

棚倉のかうの殿の北の方うせ給ひての又の年の春花のもとに去年をしのぶといふことを人々によませ給ひける時によみて奉れる歌

年月は　ながるとすれど　立ちかへり　春こそ來ぬれ　咲く花は　散りぬと見しも　春くれば　またもにほへり　世のことは　かくこそ有りけれ　よしやさは　いにけむ人も　さらにあふ　時もやあると　すみれ咲く　御園の芝生　かき分けて　露ふみならし　朝戸出に　君はこふれど　八重霞　たちや隔つる　春鳥の　來なく梢を　をりかざし　陰におりゐて　ゆふ庭に　君は待てども

入日さす　かげやをぐらき　面影に　たつとはすれど　まさかには　あひも見
ましや　うつせみの　人のこの世は　はかなかる　習ひといへど　花よりも
あだなるものと　おもひきや君

かへし歌

咲くはなに人しもあえむものならば散りても春にあはましものを

ぬひ子が三年の忌に

過ぎにける　年のみとせは　昨日かと　ゆめごゝちして　しのびつゝ　いにし
その子が　手ずさみは　かくやありしと　まねび出でて　あやめのくさの　な
がきねを　袂にかけて　かぐはしき　花たちばなを　玉にぬき　うらぶれをれ
ば　さみだれの　ふるやの軒に　音づれて　山ほとゝぎす　あやなくも　なく
ね添へけり　たもとくたしに

反歌

わすれめや花たちばなを玉にぬき袖匂はせし人のむかしを

眞乘院雪岡禪師をかなしめる歌　禪師の江戸にありける時は金地院の松月庵に住めり

人の世は　夢ともゆめと　はかなかる　ものにしありけり　墨染の　袂ふりは
へ　都より　こゝにいまして　やま松の　梢の月を　室の名に　かけて住みに

○まさか　まのあたり。
○うつせみの　人の枕詞。
○あだなるもの　はかないもの。
○あえむ　あやかる。似る。
○手ずさみ　手でする慰み。
○まねび　眞似をし。
○玉にぬき　玉に貫き。
○うらぶれ　心憂く思ひ煩うて。
○ふるや　古家に五月雨の降るをかけた。
○あやなくも　わけがわからず。
○たもとくたし　涙を催させて袂を朽ちさせるやうに。
○夢ともゆめと　夢とを强めいふ
○袂ふりはへ　袂を振り連れて。
○室の名　松月庵。

し　法の師の　ことをし思へば　さら〳〵に　涙ぞおつる　うつし身と　ありし其の世は　薪こり　水汲むわざの　いとまある　をり〳〵毎に　月すめば　ともにひもとき　花さけば　手たづさはりて　露ばかり　こゝろもおかず　ことの葉の　友とむつびて　むら鳥の　ゆきかひしつゝ　うるはしみ　有りけるものを　たちかへり　もとつ御法の　庭草を　しばしふみわけ　さらにまた　行きても來まし　はやからば　ふたとせ三とせ　おそからば　六年いつとせ　七とせと　すぐしはせじと　契りおきて　別れにしかば　いつしかと　待ちし間に　都べの　人のかたらく　君がまつ　その法の師は　さきの世の　いかなる罪か　今の世に　むくい來にけむ　何ぞもの　故としらねど　おさかべのつかさにめして　さつまがた　沖の小島の　しまもりに　行きてをすめと　おほせごと　賜ひしまゝに　いにし月　なにはの浦の　うら傳び　舟開きして　波風に　身をまかせぬと　つばらかに　われに語りつ　しかれども　千里の外に　海山を　へだててをれば　まがごとか　人のいひつる　およづれか　人の傳へし　たゞかなる　便りもがもと　月に日に　待ちつゝをれば　難波なる　わが友がきの　ことさらに　おもひおこして　天つ鴈　翅にかくる　玉章の　たよりうれしと　ことの葉を　ひらきて見れば　さつまがた　沖の小島に　ゆ

○うつし身　現在の人間の身。
○薪こり水汲むわざ　佛道修行をいふ。釋迦成道前の苦行に譬へた。
○ひもとき　帶紐も解いて心を許し。
○むら鳥の　枕詞。
○うるはしみ　親愛して。
○もとつ御法の庭　もとの寺。
○おそからば云々　遲ければ五六年でまた江戸へ出て來よう七年とは過すまい。
○かたらく　語るの延。
○おさかべのつかさ　刑部省（うたへたゞすつかさ）をよませた。刑部は大和忍坂（おさか）の人その職にあつたので刑部をおさかべと訓むか。但しこゝでは同心をいふ。
○しまもり云々　島流しを命ぜられたのをいふ。
○行きてをすめ　行きて住め。
○舟開き　出帆。
○つばらかに　具に。詳かに。
○まがごと　禍事のわるい言葉。妖言。
○およづれ　およづれ言。妖言。人を惑はすいつはり言。
○たゞかなる　直接ほんたうの。

く舟の　ゆきもはてなで　法の師は　八重の汐ぢの　うたかたに　身をたぐへつと　さだかにぞ　われに告げつる　常もなき　世はかくこそと　一度は立ちておどろき　一度は　ふしてもこよひ　いきつぎて　なげきぞわがする　せむすべをなみ

反歌

かのきしに到らむことしたがはずばなにくるしみの海となげかむ

○うたかた云々　水中に身を投げ死んだと。
○常もなき世　無常の世。
○もこよひ　腹這ひ歩いて。
○せむすべをなみ　せん方なさに
○かのきし　彼岸。生死の苦界を脱して證果を得た涅槃の境界。
○くるしみの海　苦界、苦海。海に投身したのをかけた。

○本意たがへぬ云々　父の思ひ立った希望通りには如何して出來よう。
○おもひあへねば　思案にあまるので。
○務廉　春海門人福田務廉。
○濱臣　春海門人淸水濱臣。

此の琴じりの集は、父の思ひたち給ひし事なるが、ともかくもさだめ給はぬ程に、みまかり給ひしは、あかずかなしきを、その本意たがへぬさまにはいかにかしなさまし、かくさま〲に、しげき言の葉どもを、はかなきさまにはちらさずもがなと、朝なゆふなに、かき集むとすれど、力なきをみなごゝろに、おもひあへねば、しどけなくのみもてなしつゝ、ほど經しを、務廉ぬしの、せちにこゝろくるしがりあつかはるゝにたすけられ、かつは濱臣ぬしにもかたらひあはせなどして、やう〱かのみだれたりしくさ〲を、つゞりわけついでて、かく板にもゑりぬるは、うれしきわざになむ。しかはあれど、今これをなき人の見給ふものならましかば、御こゝろにかなはぬも有りぬべく、またおもひ入れ給へるふしおはしたらむも、おほくもれたるべければ、いかばかりかひなき事にかのたまはむと、たゞこれのみぞあかずおもはるゝ。

文化の十とせしもつき

むら田のたせ子

○うつせみの　世の枕詞。

○おもわなす心々　面の如く各自の思ひ〳〵。顏の違ふ通り心もさまざま異なので。

○にしごりの大人　錦織齋村田春海大人。うしは師の敬稱。

○こゝじりなる厨子　琴の末の方に置いてある厨子。

○ながき云々　長歌短歌を始めとして。

○こうでて　取り出して。

かずしらず竝みたてる柚山の木も、たけ高く、もとだちすなほにして、はしらともなり、うつばりともなるべきは、いとまれなり。ことばの林にいりて、其の陰をえらばむことも、またかくの如くなるべし。うつせみの世に、ふみのそのに立ちまじり、言葉のかげにあそぶ人々、夏野の草のかずおほかめれど、おもわなす心々なれば、こゝにあまりあるも、かしこにたらはずして、山の井のこゝろあさきおのれらが、かしこきかげとたのむべきは、すくなくなむ有りける。こゝにわがにしごりの大人の、としごろ思ひをよせ、心をこめて、よみおきたまへることのはの、世をへては、あらぬことに寫しひがめもて行かむことの、いとほいなきわざなればとて、こたび板にゑりなむといふ人のあるに、かのことじりなる厨子に、としごろこめおきたまひぬることのはの、秋野の花のいろ〳〵につみわけたまひぬるを、ながきみじかきよりはじめて、くさ〴〵のふみをさへにとうでて、かきあつめたまふこと有りけり。まことにわがうしのことのはぞ、おのれらがたちなれてたのむべきかげには有りける。この大人のことばのそのにこそ、はしらともきり、うつばりともけづりて、いにしへに

〇はしだて　梯子。梯子をたてること。
〇立ちならし　立ち馴れ。
〇ことあげ　言葉にあげいひ立てる。
〇片岡芳香　春海門人。

のぼりゆかむはしだてとなすべき木は有りぬべけれ。かくばかりことのはしげき大木のかげに、ひるはひねもす立ちならし、よるはよすがら居りあかしてこそ、みやびかなることのはをも拾ふべきことには有りけれ。かくて今よりは、ちとせの後も朽ちせざらむことのうれしきあまりに、いさゝかことあげすることかくなむ。

文化むとせ長月

片岡芳香

月雪はな、ほとゝぎすは更なり、うきふしも、うれしきをりも、あはれなるも、かなしきも、をりにふれ、ことにあたりて、年ごろよみ出でられし歌どもの、厨子のうちにのみ埋もれなば、おのづから散りうせなむこともあらましなど、ある人々にそゝのかされて、この近きとしより、かきもあつめ、梓にものほせてむなど思ひたちたまひて、おのれに清書のことまでをもあつらへられしが、ほどなく病の牀にかゝらせ給ひて、目くるめくことを、ひたすらにうれへさせ給ひぬれば、何事もしさして、つひに身まかりたまひぬるは、いとほいなく、思ひ出づるも、今更なみだにくれてなむ。さるをこたび大人のみこゝろざした繼ぎて、たせ子のものせられしがうれしくて、おのれもちぎりしまゝに筆とりぬれど、拙さはなか〳〵人わろく、つめくはるゝわざになむ。さてなき御あとに、うしの歌のうへを論ぜむは、おふけなく、ふかきむねはわがどちのしるべきにもあらねど、たゞおもひあがれるこゝろ高さと、いうなるおもむきとは、きはことに、世の歌人たちとおなじ日にかたるべきにはあらず。またかの秀歌一首もつはうたよみなり、二首は上手なり、三首はありがたしと、長房卿

○厨子　扉つきの調度書畫などを載せる棚。
○梓に云々　出板しようと。
○目くるめく　目がまはる。目がくらむ。
○なみだにくれて　涙にくらみて
○たせ子　村田多勢子。春海の女。
○人わろく　人の見るもきまりわるく。
○つめくはゝるわざ　恥ぢてもぢもぢされること。
○おふけなく　身に不相應で。
○きはことになきはだつて他にすぐれ。

の宜ししにあらば、此の集のゐしなどをば、いかばかりめでぬべきものにか。

文化の十とせかみな月望の後の一日

平務廉識

琴後集歌之部終

稲葉集

本居大平

稲葉集のはしがき

此の二卷は、藤垣内翁の歌にて、野べの若草いと若かりし程より、鈴屋大人の教へを守り、いにしへ學のかたは更にもいはず、歌よむ事をもまめやかに心いれて、やがてその大人のよみたたしおかれたる姿にならひて、雅の心ばへも言葉のとゝのへも、一つ流れはいとしるくなむありける。それが中には自らに汀の蘆の一節をよみ出でられたるもありて、よに珍らしく、紀の川水のいたり深き心の底さへなむみえわたりける。さるはこゝらの年ごろにいたづきて、年ある秋の千町田廣く、わせおくてとうちまじりてしなひ榮えたるを、稲葉集とみづから名づけおかれたるを、はやく二十年あまりあなた稲掛氏と名のられし程より、こひもとめ寫しつたへて、伊勢人のひがこと多きわがともがらの歌學びするには、清き渚の玉ともていつき來りつるを、こたび更に摺卷にとすゝむる人あり。よりて思ふに、吉野の瀧のはやくより、鈴屋集後鈴屋集などは世にもひろくつたはりたるを、此の集のみそのまゝうつし卷にておくべきにあらね

○藤垣内翁　本居宣長の養子大平
○野べの若草　わかかりの序詞。
○よみたたし　詠み立ちの敬語。詠みはじめ給ひ。
○言葉のとゝのへ　歌の調。
○汀の蘆の　ふしの序詞。
○一節　一特色。
○こゝら　多く。
○いたづきて　骨折りつとめて。
○年ある　稲のよく實る。
○わせおくて　早稲晩稲。
○しなひ　稲が熟して穂が垂れて
○稲掛氏　大平の生家の氏。
○伊勢人云々　伊勢人は僻言するといふ古い諺によつた。
○もていつき　大切にし秘藏し。
○摺卷　版に摺つた書物。
○吉野の瀧　早くの序。
○うつし卷　寫本。

ば、紫の名高の浦の名もいや高く、吹上の濱のしら菊千代遠くつたへばやと、そのよしこひ申して、ちかき年ごろよみ出でられたるをもあつめくはへて、かくはものしつるなり。かくいふは、今の鈴屋のをしへ子にて、この翁にものとひまなぶゆゑよしあればなりけり。

文政七年甲申正月

三井高匡

○紫の名高の浦　紀伊海草郡名高。萬葉集「紫の名高の浦のまなご地に袖のみふれて寢ずかなりなむ」
○吹上の濱　紀伊海草郡。古今集「秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか」
○今の鈴屋　本居宣長の長男春庭
○三井高匡　伊勢松坂の人三井進藏。春庭の門人。

稻葉集

本居大平詠

春歌

○あら玉の　年の枕詞。

○こと〴〵ならず云々　異事なく春はかりせきたてて來て。

○ともかくも云々　彼やこれと尋ね迷ふこともなくて。

年の始によめる歌ども

あら玉のたつ年毎に君が代をちよにと祝ふことぞ嬉しき

君が世をいはふ言葉もうれしさの色にいでたる春のはつ草

はつ春の物のはじめの言の葉はまづ千代かけて祝ふ君が代

昨日までこと〴〵ならずいそぎ來てさらにおどろくけさの初春

物ごとにめでたしとのみおぼゆるはたつ初はるの人のま心

ともかくもたどらでたゞに嬉しきは春くるけさの心なりけり

朝日影ゑみ榮えつゝとりもちてかゞみに向ふ千代の初春

あらたまの初春ごとにもろ人のいはふ千とせもわが君の爲

元日

朝霞たちゐる袖もいろ〳〵にはる來て見ゆる九重のには
朝ゆふに君が千とせをかくなむと今日おきふして祈る初春

四方拜

となへます星の手向のともし火に夜深く春の光をぞ見る

供屠蘇白散

君が爲千年をこめて藥子のまづなめそむる今日のさかづき

小朝拜

春來ぬとたもとゆたかに引きつらねうれしさ見ゆる雲の上人

腹赤御贄

仕へます臣の心も似べしとやはらかの魚はさてまつるらむ

國栖奏

はる來ぬとことぶくくずの歌笛は明（あかり）の宮の例とぞきく

都立春

いづるより霞もそひてうち日さすみやこの空に春は來にけり

早春霞

きのふけふ雪げの雲も名草山かすみにかはる春ののどけさ

○朝霞云々　元日宮城に拜賀する人の束帶の袍の色々なのをいふ。
○たちゐる　霞の立つに立つ人坐る人とかけた。たつ(裁つ)、袖、張る(春をかけた)は緣語。
○かくなむ　今日の元日の此の通りにあれよ。
○おきふし　朝に起き夕に臥して
○となへます云々　元日寅の刻天子が屬星の名を唱へて天地四方を拜し祈り申されるのをいふ。
○藥子　くすりこ。古昔宮中で供御の屠蘇を嘗め試みる童女。
○小朝拜　元日辰の刻親王以下六位以上が束帶で淸涼殿の東庭で拜賀する儀式。
○腹赤御贄　はらかのみにへ。古昔元日の供御として筑紫宇土郡長濱から奉る腹赤(鱒の異名)。
○似べし　心が腹赤の赤きに似よといふので。似べに贄をかけた。
○國栖奏　くずのそう。古諸節會の時大和吉野郡國栖の人が贄を獻じ歌笛を奏すること。
○明の宮　應神天皇。輕島豐明宮に皇居があつた。日本書紀應神天皇十九年に吉野に幸し國栖人が土産を獻じ歌舞したことが見える。
○うち日さす　都の枕詞。
○雪げ　雪模樣。雪降るらしい。
○名草山　紀伊。紀三井寺附近。雲もなくにかけた。

早春山

ほの〴〵とたつは心の霞かと山の端たどる初春のそら

早春野

日影さすあしたの原のむらぎえに春見えそむる雪のした草

早春海

紀の海や波路かすみてけさよりは春たちそむる浦の初島

うちけぶり春たつゑみのまゆひきも波間に霞む阿波の遠山

早春祝

たてわたす松にぞしるき民の戸も君が千とせをいはふ初春

天の下ことなき御代を萬代とはつ春ごとにいはふ嬉しさ

早春待花

うちつけにわが心さへあら玉の春としいへば花ぞまたるゝ

霞たつみやまの雪の色みても松にぞかゝるはなの面影

子日興

子の日とて袖ひきつれて姫小松こゝろをのべにあそぶはつ春

あかなくにかくて千代もと思ふどち松ひき遊ぶ野べの初春

○あしたの原　大和北葛城郡葦田日影さす朝とかけた。

○浦の初島　紀伊那賀郡椒村の海上の地島沖島をいふ。

○まゆひき　阿波徳島の西の眉山を笑みの眉を引くとかけた。

○うちつけに　率爾に。突然。

○あら玉の　春の枕詞。心さへ改まるを言ひ掛けた。

○松にぞかゝる　松に雪がかゝる松に花を待つを言ひ掛けた。

○子日　正月初子の日に野外に出て小松を引いて千代を祝ふ行事。

○袖ひきつれ　袖を引くと姫小松を引くとかけた。

○こゝろをのべ　心を延べに野邊をかけた。

○あかなくに云々　厭かずに此の通りにして千代まで遊びたいと思ふ。

○思ふどち　思ひ合ふ親しいどうし。

野子日

いつろより齢をのべの景色かな子の日の小松引きもひかずも

子日祝

都人子の日する野を見わたせば霞に千代の春ぞこもれる

また

ねのひする二葉の小松ひき植ゑて千とせすむべき陰と頼まむ

千年つむ齢を野べの子の日とて松も若菜もためしにぞ引く

若　菜

ふりはへて若菜つみにと行く野べの袂ゆたかに見ゆる春かな

七草のそれかあらぬか同じ名と春野のうはぎけふや摘ましし

雪きえてあをむ波間のせり川につみつゝ祝ふ千代の古道

つめど猶つきぬ若菜としばの野にしば〳〵出でてあさるくず人

雪中若菜

降りつまぬ程にとてこそ急ぐらめみ雪かつちる野べの若菜は

白雪はものうき程にふる野邊もつむやといそぐ初若菜かな

人の賀に若菜といふ題にて

○齢をのべ　延べに野邊をかけた

○ふりはへて　わざ〳〵行く野邊に、袂をふり連れ立つてをかけた。

○七草云々　秋の七草のうちに萩があるそれであらうか又は違ふだらうか。

○うはぎ　よめなの異名。

○あをむ　青くなる。

○せり川、千代の古道　山城葛野郡後撰集「嵯峨の山みゆき絶えにし芹川の千代の古道あとはありけり」

○くず人　大和吉野郡國栖の人。

○かつちる　ちら〳〵と散る。少し散りはじめる。

○つむやと　雪の積むに若菜を摘むをかけた。

○ことぶきぐさ　祝賀する種と。祝ふ料のもの。

○霧ふかみ云々　霧が深いに因つて妻を搜し求め侘んで鳴くのか。

○朝妻の片山　大和南葛城郡朝妻の片側山。妻をかけた。

○谷の戸　谷の口。

○竹ちかみ　竹が閨に近いので。

○聲近み　聲が近いに因つて。

○うらめづらしき　心珍らしい。うらに末の意をかけて若草のうらとつゞけた。

○笹の庵　笹の葉で葺いた假屋。

○夜をこめて　夜からかけて、明けぬうちから。

○いでたたむ都　これから行かうとする都。

老人をことぶきぐさと若がへる春野の若菜うべもつみけり

鶯告春

あひにあひて春とつげつゝ鶯の鳴く聲さへにのどけかりけり

朝鶯

霧ふかみもとめわびてや朝妻の片山さらずうぐひすの鳴く

谷の戸はねぐら夜ふかき朝霧にまどひてや鳴くはるの鶯

竹ちかみわれも夜牀にふしながらあさな／＼きく鶯のこゑ

鶯の竹のねぐらの聲近みわがあさ牀にきくものどけし

野鶯

鶯のなくや初音も野べに出でてまつとはなしに今日ぞ聞きつる

あさな／＼きけども野べのはつ草のうらめづらしき鶯の聲

野亭鶯

ふしながらきけとや野べの笹の庵にまだ夜をこめて來鳴く鶯

谷鶯

いでたたむ都の野べの初こゑをまづ口ならす谷のうぐひす

山家鶯

世はなれて人來ともなき谷の戸に誰いとふらむ鶯のこゑ

山里の軒のたるひもしたとけて涙あらそふうぐひすの聲

故郷鶯

春くれば花やは咲かぬ故里にいたくなわびそ庭のうぐひす

梅

梅の花あかぬ色香と見るにはた折らまくも欲し折らまくも惜し

梅薫風

色よりもたが袖の香と思ふにぞあはれ身にしむ梅の下風

色見えぬ風のゆくへも梅が香のあはれは深くしる人や知る

見る人のあはれをそへて春風のまたが袖にさそふ梅が香

めに見えぬ梅の匂ひを吹く風のいかに知りてかさそひ初めけむ

心ありてよそにさそはぬ風なれや木の本深くにほふ梅が香

めにも見えず音にもたてぬ春風をありとしらする庭の梅が香

水邊梅

咲き匂ふ下ゆく水に袖ぬれて折られぬ梅の香をやしめまし

さく梅の香さへやふかく移るらむ雫おちそふはなの鏡は

〇人來ともなき　人が來るといふこともない。
〇谷の戸に云々　谷の戸の中に誰を厭うて鳴くのか「誰も來ないに。
〇たるひ　垂氷。軒端に凍つて垂れたつらゝ。
〇涙あらそふ　續後拾遺集「雨過る森の梢の夕露に涙爭ふ時鳥かな」
〇春くれば云々　春が來れば花が咲かないことがあるものか。
〇故里云々　荒れた昔の都だというてひどくくよ〳〵するな。
〇折らまく云々　折らむの延。折りたくもあり折るのも惜しい。
〇色よりも云々　古今集「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」
〇しる人や云々　古今集「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞしる」
〇雫おちそふ　梅の花から雫が滴りおちる。
〇はなの鏡　花の影が映つてゐる水。

影見えてしづく落ちそふ池水はそこにも梅の香や匂ふらむ

鄰梅

をしみつる鄰の花もあるものを中垣こえてさける梅かな

紅梅

色も香もあはれをほかにやらじとや紅ふかく匂ふ梅が枝

はつ春の初花染のくれなゐに色さへ深くにほふ梅が香

おく深き色香をこめてきのふけふほころび初むる花の梅壺

軒高くつまくれなゐにさく梅のいろ香を誰かあふぎ見ざらむ

柳風

のどかなる風のゆききは青柳の絲によりてぞ知るべかりける

水邊柳

たちならぶ花の鏡の池水にほそき眉根もうつる青柳

川柳

ゆく河のきしの柳の玉かづらかげに見えつゝなびくはる風

薄ごほりとけぬるせゞに枝たれて玉ぬき川の青柳のいと

行路柳

○紅ふかく匂ふ　紅の色深く香もふかく匂うて、色の哀れも香の哀れも他へはやるまい。

○初花染云々　古今集「くれなゐの初花染の色深く思ひし心われ忘れめや」

○梅壺　宮中五舍の一。凝花舍。その中庭の坪に梅を植ゑてある。

○つまくれなゐ　梅の花瓣の端が紅なのをいふ。軒のつま(端)をかけた。

○絲によりて　絲によつて知られる。絲に縒るをかけた。

○花の鏡　池水に花が映つたのをいふ。

○眉根　眉のもと。柳の枝に芽の出たのを眉に見立て、美人の眉を柳眉といふので、花の鏡に映つた花の顏に對した。

○かげに　水に映つた影に。

○玉ぬき川　露の玉を緒で貫き通す青柳の絲。美濃國本巢郡の貫川(一名貫河)をかけた。催馬樂人綾には三河と。

さかぬまのみどりも花の都かなゆきき春めく青柳のかげ

門柳

青柳のいとのみどりもあたらしく朱雀の大路春めきにけり

春といへば柳の眉ぞひらきぬるくる人しげき門ならねども

心ひく妹が門とてゆくさ來さ眺めやらるゝ青柳のいと

泉暖草色綠

春風に野澤のこほりうち解けてあゆぐみどりや浪のした草

野霞

もる人も立ちいでつゝや詠むらむ霞春めくとぶ火野のはら

水鄕霞

心からわきてみなせの春かとも問はばや人にかすむ山もと

海上霞

花と見るたが家づとぞいせの海や霞のそでにつゝむ浦なみ

江霞

なには人我がすむかたや辿るらむ霞む入江をこぎ返りつゝ

海霞

○さかぬ　櫻の花咲かぬ。

○朱雀の大路　平安京城の南朱雀門から京の南のはて羅城門までの大路。廣さ二十八丈。

○眉ぞひらきぬる　愁へ苦しみが去つて嬉しさが面にあらはれるのをいふ。

○ゆくさ來さ　往く時來る時。

○あゆぐ　ゆるぐ。動く。

○とぶ火野　大和添上郡春日山の麓春日野に昔時烽火臺が設けられた、その邊を飛火野といふ。

○みなせ　攝津三島郡水無瀨。淀川を隔てて男山に姿す。わきて見るをかけた。新古今集「見渡せば山もと霞む水無瀨川夕は秋となに思ひけむ」

○家づと　家へ持ち歸るみやげ。

○我がすむかた云々　我が住居の方を搜し迷ふであらう。

見てもしれかゝる霞ぞ津の國の春のけしきのなにには立ちける
みぬほどはなにはの浦と思ひこし春もくやしく霞む海原

關霞

逢坂やこえし關路のほどよりもへだてて見ゆるはる霞かな

霞といふ題にて

春がすみ何かうらみむ花の枝にかゝるは同じ心と思へば
うらやまし四方の山べの花の枝をたちもはなれぬ春の霞は
野も山も霞のとなみはるの來てのどけさもれぬもゝ鳥の聲

餘寒

くらべてはさしも嵐の冬よりも身にしみまさる春のあさ戸出
きても猶はるの光のぬきをうすみ霞の袖にさゆる山風

春望

かくばかり霞む難波のかたはしもいかで語らむいへばえにして
いへばえになか／＼なれど難波がたおしこめがたく霞む春かな
難波がたいはねどあすも立ち歸りこやとばかりに霞む春かな
來て見れば霞む海べに住の江の蜑も春をぞほこらしげなる

○春のけしき云々　春景色が名に立つ。有名になつた。名にはに難波をかけた。
○なにほ云々　見ぬうちは春も何程かと侮り思つた。難波にかけた。
○思ひこし春云々　春を思ひ來たのが後悔される。
○ほどよりも　實際に歩いて越えて來た道程よりも。
○霞のとなみ　霞の鳥網を張つて春が來た。張るに春をかけた。
○のどけさ云々　百鳥の聲も春の長閑けさに漏れぬ。鳥網に鳥がもれぬとかけた。
○さしも嵐　あらじをかけた。
○あさ戸出　朝戸外に出ること。
○ぬきをうすみ　織物の横絲がうすいので。古今集「春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ亂るべらなれ」
○難波の云々　難波潟のよい景色のかたはし(僅かの一部分)でも。
○いへばえにして　言はうとすれば言へないで。
○こやとばかり　來よといふやうに。來いといふやうに。來やに昆陽(攝津河邊郡)をかけた。
○住の江　攝津住吉。住むをかけた。
○ほこらしげ　得意さう。

春ふかみ蜑のとまやに刈りてほすめもはる〴〵と霞む海原
磯ちかくわかめ刈りほすあまの子の宿もしられず霞む春かな
久方の蜑の子どもも長き日にみだれて遊ぶ浦のいとゆふ
浦の蜑のめかり鹽やくいとなみも霞隔てて見ればのどけし
霞む日はすむ浦人に立ちまじりみるめからばや春のうなばら
あま人の目なるゝ網に引きかへて霞かけほす春の海づら

同じ心を古風にてよめる歌

春霞たなびくなべに漕ぎいでて海原みればあやにゆたけし
難波潟堀江こぎわたり霞たつながき春日に見らくしよしも
なにはとをこぎ出でて見れば玉はやすむこ山遠く霞さらへり

春曙

見なれつる松のたちどもたえ〴〵にあけぼの遠く霞む山もと
河遠く霞のをちに見えそめて山はをぐらの春のあけぼの
春にのみありてゆかなむ水無瀬川山本かけて霞むあけぼの
あかめやは霞める花の横雲も峯に別るゝ春のあけぼの
朝日山にほふ櫻の見えすきてかすみも何かうぢのあけぼの

○春ふかみ　春深く酣なので。
○めもはる〴〵　見渡す限り遙々刈り干すめ(和布…海草)にかけた
○あまの子の宿も云々　新古今集「白波の寄する渚に世を盡す蜑の子なれば宿もさだめず」
○久方の　あまの枕詞。
○いとゆふ　遊絲。陽炎。亂れてと絲と縁語。
○めかり云々　和布を刈り鹽を燒く營みも。いとなみに暇無をかけた。萬葉集「しかの蜑はめ刈り鹽燒きいとまなみ櫛匣の小櫛とりも見なくに」
○網に云々　網を懸け乾さないで霞をかけ乾す。
○たなびくなべに　たなびくと共に。
○見らく云々　見るのがよい。見るのが面白い。
○なにはと　難波の港。
○玉はやす　むこの枕詞。
○むこ山　攝津武庫郡六甲山。
○山もと　山麓。
○霞のをち　霞の彼方遠くに。
○をぐら　山城葛野郡小倉山。を闇をかけた。
○水無瀨川　新古今集「見渡せば山本霞む水なせ川」(前出)による。
○峯に別るゝ　新古今集「春の夜の夢の浮橋とだえして峯にわかるる横雲の空」
○うぢのあけぼの　何か憂を宇治にかけた。朝日山は宇治。

若草

消えそめし雪まばかりと見し色もひとつにあをむ野べの若草

春雨

春雨の音もせでふるこのごろよ人はましての庭の寂しさ

春月

のどけしな月の桂もうちけぶり木のめや春の朧夜の空

天の原みゆるまゝなる影ならばのどかにわたれ春のよの月

くれふかき花の木のまに見えそめて光もにほふ春のよの月

歸雁

散る花を羽風のとがになさじとや盛りすぐさぬ雁の行くらむ

雁がねの歸る雲路の春がすみ立つといふ事はたれや敎へし

さきぬとて軒端に來鳴く鳥もあるを花にわかれて歸る雁かな

春霞野にも山にもたつまゝに雁も田のもにゐるそらやなき

百千鳥花にさへづる春しもあれ今はとかへる雁や何なり

野遊

思ふどち心を野べに長き日のくるゝもしらず遊ぶ春かな

○月の桂　月の中に生えてゐると想像されてゐる桂樹。
○木のめや春　木の芽が張る（芽が出る）春になり。春をかけた。
○くれふかき　深く茂つて暗い。
○盛りすぐさず　花の盛りの過ぎないうちに雁が歸つて行くだらう
○たれや敎へし　誰が敎へたか。
○さきぬとて　咲いたと言つて。
○たつまゝに云々　霞が何處にも此處にも立つので雁が田の面に居る宿（場所）もないか、霞を北へ歸るは。立つに對して居る（立つの反對坐る）と言つた。
○春しもあれ　時も時、晩春であるに。
○心を野べ　野邊に心を延べとかけた。

みやこ人袖を霞にこきまぜて野べのにしきも飽かぬ春かな

立ちまじる少女が袖のいろ／＼も霞になびく野べの春風

呼子鳥

春さむみまだ花咲かぬ山の奥に何を見よとのよぶこ鳥ぞも

野菫

同じ野の菫つみにとこし人はしるも知らぬも睦まじきかな

あくがるゝ心のはてもしらぬ野にかくて菫の花やつまゝし

庭菫

うつし植ゑて庭に朝夕みる／＼も猶なつかしきつぼすみれかな

花

外にまたならぶ色なき花なれば櫻ぞ花のみやこなりける

咲きにほふ花の一よにあかず見るいくその人の戀かこもれる

春ごとにあかぬ木陰に立ちなれていくしほそめつ花の衣手

あかず見る心の色も春毎に深くなりゆく花のこのもと

かくばかり心にふかくしむ花のはてなき色を春にとはばや

見る人の心の花は春をへて色こそまされ移ろひやする

○袖を霞云々　古今集「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」を野邊の錦に轉じた。

○春さむみ　春になつて餘寒がまだ寒いので。

○何を見よ云々　何を見よといふので喚び鳴く鳥であるか。喚子鳥は筒鳥の異名ともいふ。

○あくがるゝ　我を忘れて思ひ憧れゆく。

○櫻ぞ花の云々　花は櫻だけが花である。

○いくその人　どの位か多くの人

○戀かこもれる　花に對して戀しいと思ふ心が籠つてゐるか。

○いくしほ云々　幾度染汁に浸し染めたか。

○移ろひやする　色がさめ衰へはするものか、決して色さめない。

百鳥のさへづりかはす聲々もこゝちよげなる春の花園

あくるまを梅うぐひすにいそがめやしづ心なき花の朝戸出

とぶ蝶のぬるまばかりを我が身にてあくれば花になるゝ春かな

春をへて色香かはらぬ花みれば雪とふりぬる身のみ恥かし

まちえては花も命もあだならで今年の春も盛りをぞ見る

命だにをしむにとまる世なりせば花は咲きちる色もなげかじ

春毎の命さへこそをしまるれ咲きちる花のあかぬいろ香に

めできつゝかしらの雪も年深くつもるを花よあはれとは見よ

待花

うぐひすの鳴く音うれしく聞けばまた木づたふ枝の花ぞ待たるゝ

待つほどの心づくしを花もしれ塵だにすゑぬ庭の木のもと

みどりそふ柳が枝の春雨にならぶさくらの花ぞ待たるゝ

花もさは散りてなか〳〵つらからむ物いそぎする老のならひと

初花

雪をのみ見つゝうらみし山の端にさけば櫻も咲きそめにけり

限りあればまちし日數も明けくれて花さく春になりにけるかな

○梅うぐひす云々梅や鶯には夜明を待ちかねて急ぐやうなことは決してない。然るに櫻の花の時節には落著いた靜かな心持では居られない花に憧れて忙しい。
○ぬるまばかり　眠る間だけ。
○雪とふりぬる　頭に雪を戴いて古くなつた身。舊りと降りと言ひ掛け。
○あだならで　はかないものではなく。
○をしむに云々　惜しむことによつて死なずして留まるものなら。
○木づたふ　木の枝から枝へ移りゆく。
○待つほど云々　花を待つ間のわが心勞を知れよ。
○塵だにすゑぬ　塵さへ置かぬ。
○花もさは云々　さう待たれては却つて嘸つらい事であらう。
○老のならひと　自分がかく花を待つてゐるのを老人の氣ぜはしなきだと思つて。

うれしさぞせばき垣ねにあまりぬる花待ちいでし庭の木の本

まちえつる心の色のうれしさも一木にほふ庭の初はな

咲きそむる花もしらなむ外にまたうつさぬ人の春のこゝろを

立田山けふより浪のいろみせてそのへに匂ふ初ざくらかな

白雲のたつたの山にけさよりはにほひ加はる初ざくら花

盛花

たぐひなき色香にいとゞ色も香も咲き加はれる花ざかりかな

けふは又いづれの山をたづねむとわけぬにまよふ花盛りかな

たが里をまづはとはむの心さへひと方ならぬ花盛りかな

見れば又われもさかりに歸るかと老わすらるゝ花の色かな

花下會友

さく花を思ふ友どちあひ見つる契りもうれし春の木の本

たつことは誰かおもはむ思ふどちなみゐて遊ぶはなの下かげ

心さへよそにちらさで花ざかりあかぬ木陰にあそぶ友がき

千世までも散らずばちらで共に見むあかぬ閑居の花の木の本

折花

○花待ちいでし　待つてゐて花の咲くのを見るやうになつた。

○花もしらなむ　花も春のわが心を知つてくれよ。

○白雲のたつたの山　龍田山は大和生駒郡白雲のたつをかけた。

○わけぬにまよふ　山路を踏み分ければ踏み迷ふこともあるに、踏み分けもしないのに迷つてゐる。

○ひと方ならぬ　一通りでない。訪はんとする里が諸方である意をかけた。

○友どちあひ見つる　思ふ友達が相會してさく花を見た。

○たつこと　立ち寄ること。

○友がき　友だち。

さくら花をらで歸らば何ゆゑにくれし山路と人やとがめむ

しづのをが眞柴にそふる山づともをりしる春の花ざかりかな

朝花

起き出でてまづ見る庭のはなの枝に朝日のかげもにほふしら露

おきて見るあしたの袖は寒からで色香身にしむ花の白雪

雪と見る花にやよひの朝さむも袖にうれしくかをる春かぜ

夕花

まさるらむ空の色とも見えなくに花にあやしき春の夕ばえ

長き日の夕ぐれまさる花見れば猶ぞ夜のまの色もゆかしき

月前花

よるは又月のみ舟の光さへ飽かずさしそふ花のしら濱

花にあかぬ今日の今宵と木の間より月さへ見えて似る時もなし

にる時もしく物もなし月に見るけふのこよひの花の下かげ

霞中花

ぬきうすき霞の袖のたえまより散らでこぼるゝ山ざくら花

こゝかしこ花や咲くらむ見わたせば色のちぐさに霞む山の端

○眞柴　眞は美稱。
○山づと　山からのみやげ。
○をりしる　折節を知る。山づとの花を折るをかけた。
○朝日の云々　花の枝の白露に朝日の影が映つて色艶美しく輝く。
○まさるらむ云々　空の色が增してくるのとも見えないのに。
○夕ぐれまさる　夕方だん／＼暮れて暗くなつて來る。
○月のみ舟　月の空の海をゆく舟に見立てていふ。
○にる時も云々　月下の花に似る時もなく月下の花に及ぶものもない。
○ぬきうすき　織物の横絲がうすい。古今集「春のきる霞の衣ぬきを薄み山風にこそ亂るべらなれ」
○色のちぐさ　色の千種。色のさまざま。千草をかけた。

霞めどもたれか恨みむ花の陰ちぐさながらに匂ふ山の端

雨後花

ふる程はしをれやせむと見し花もはれて色そふにはの春雨

雨はれて色香もいかに添ひぬるとたちやぬれまし花の下露

山花

よしの山雲となかけそ分けいりて花と見るだにあかぬ櫻を

みよし野や花の雪まを見渡せば緑はつかにまじる山松

御舟山かぜぞたよりのしるべにて花の香たどるみねの白雲

谷花

咲きいづる花の色香は谷かけもみやこの春におとりやはする

森花

風ふけど散らぬさかりの白妙はさながらおほふ衣手の森

湖花

花ならじと思ふ心のうらかぜも比良の嶺遠くにほふしら雲

海邊花

しかの蜑は花の見るめをかりそへて春の心やいかにいとなき

○ちぐさながらに　千草も其の儘一しよに。
○ふる程云々　春雨の降る間は雨のために花が萎れはしないかと。
○たちやぬれまし　花の下に立つて露に濡れもしよう。
○雲となかけそ　雲とかけ隔てるな。
○はつか　僅か。聊か。
○御舟山　大和吉野郡國樔村。
○衣手の森　衣手の森は夫木抄に山城とある。
○比良の嶺　近江滋賀郡比良山。
○しか　筑前粕屋郡志賀島（鹿島）萬葉集「しかのあまの磯に刈り干すなのりその名はのりこしをいかで逢ひがたき」
○見るめ　花を見るめに海松をかけた。
○いとなき　忙しくて暇がない。

池花

きし近き花の錦をおり添へてあやにえならぬ春の池水

山家花

世はなれてのどけき山の陰にこそまさる櫻の色も見えけれ

閑居花

さけばかく花はさかりの色見てもとはれぬ宿の春ぞ寂しき

故郷花

まちつけて花はさきぬる故郷も人め見えてや散らむとすらむ

田家花

さくら咲く庵は背面(そとも)の荒小田をかへすがへすも花や見るらむ

都花

咲きしより野山の春にあけ暮れて花にいとなきみやこ人かな

まじるかな大宮人も山がつも花にへだてぬ春の木のもと

咲く花のみやこは四方の梢までにしきにたゝむ春の山の端

名所花

雪と見てこまやなづまむ白妙ににほふ眞土の山ざくらばな

○錦を云々　錦を織りそて目もへ驚くばかり言はうやうもない。

○花はさかり云々　花が咲けば此の通り盛りの色を見せてゐる、その盛りの花を見て訪ふこともされない宿は春寂しい。

○背面　北。こゝでは後方の意。
○かへす　田を鋤きかへすに返す返すをかけた。

○花にいとなき　花見るに忙しくて暇のない。

○雪と見て云々　花を雪かと見ちがへて駒が行きなやむであらう。萬葉集「白たへに匂ふまつちの山川にわが馬なづむ家戀ふらしも」
○眞土の山　大和紀伊の國境。

吉野山しるも知らぬも疎からず花に分けいる春の旅人
さかりとて色もにほひも空にみつ花や倭のみよし野の花

寄夢花

夜もすがら散ると見るまの花よりも覺むるぞをしき夢の手枕
もろこしの吉野の山も程ちかく花にわけいる春のよのゆめ

花時鞍馬多

もの見ると馬も車も行きちがふ花の都はいまさかりなり

依花客來

君こずば恨みてのみや散らさまし年に稀なる花の盛りを
待ちえずば待ちえざらましくる人も年に稀なる花のさかりを

絲櫻

いと櫻梅が香そはばいかばかり柳くるしきしなひならまし

曉庭落花

ちる程のうきめを人に見えじとていそぐか花の明けぐれの庭

朝落花

やどりせし山櫻戸の朝ぼらけきのふの花も春の夜のゆめ

○空にみつ　そらみつ（大和の枕詞）にかけた。
○もろこしの吉野の山　日本の吉野の山を見て花に憧がれて寢ると唐土の吉野山を夢見て唐土も程近くわけ入る。
○年に稀なる花の盛り　一年のうちでもたまさかにしかない花盛り古今集「あだなりと名にこそ立てれ櫻花年に稀なる人も待ちけり」
○待ちえずば云々　年に稀なる花の盛りを待ちえずば年に稀なる人をも待ちえないだらう。
○人に見えじとて　人に見られまいといふので。
○明けぐれ　夜明のうす暗いこと
○山櫻戸　櫻の多くある山家。新勅撰集「名もしるし峯の嵐も雪と降る山櫻戸の曙のそら」

やどりして春の山べに見し夜半の夢もまさしきあさ嵐かな
さくら花散るまをだにも春のよの見はてぬ夢とさそふ山風
命かは見はてぬ夢もをしからず櫻ちりしく朝戸出の庭

夕落花

しばし猶ちるまをだにと入りかたの日かげも花もをしき夕ぐれ
くるゝ日とちり行く花と二かたに惜しむ心のいとなかりけり
花とちる今日の夕はあとならで暮れゆく色ををしむ雲かな
花と見る今日の夕は跡ならで散り行く雲を惜しむ木のもと
雲と見むあすよりもまづ色きえてくるゝを惜しむ花の夕かぜ

夜思落花

櫻花ちりのまがひの面かげも心にさわぐ夜はの山かぜ

山落花

いかにせむおほふ霞の袖をうすみ花もみだるゝ春の山かぜ
風ふけば水なき空にたつ田山ちりかふ峯の花のしらなみ

野落花

うぐひすの羽風もつらし櫻花なく野べ毎にちりぬと思へば

○夢もまさしき　夢は本當の通りであつた。
○命かは　命もものかは。命かは惜しからんや。
○ちるまをだに　せめて花の散る間だけでも照らせよと。
○いとなかりけり　心の暇がない。
○あとならで　花の散つてゆく行方を惜しむのではなくて。
○ちりのまがひ　散つて紛れ亂れること。古今集「この里に旅寢しぬべし櫻花散りのまがひに家路わすれて」
○霞の袖をうすみ　花を覆ふ霞の袖がうすいので。玉葉集「咲く花を覆ふ霞の袖なれど風をはえこそ隔てざりけれ」
○空にたつ田山　龍田山は大和生駒郡。空に花の白波立つとかけた。
○うぐひす云々　續千載集「鶯の羽風に花ぞ散りぬらむ春くれ方の聲になくなり」

川落花

又さらに惜しまざらめや櫻色にちりてながるゝ春のやま川

池落花

かはづさへわれ鶯におとらじとちりしく池の花に鳴くなり

庭落花

雪ならばをしむ心のそはましや櫻ふりしく庭の木の本

ちりぬやと人のとひこば花の雪庭のいづこに跡ゆるさまし

落花散衣

ちりくるを拂ひだにせじ櫻花おほふばかりの袖ならずとも

春駒

人にこひ人に飼はれずわがまゝに草はみ遊ぶ野べの春駒

口にそへて綠そひゆく若草にわか駒なるゝ森の下かげ

梨花

しら露に袖はぬるとも一枝はをりてを見ばや山なしのはな

桃花

山里の垣ねつゞきのもゝの花梅よりのちの色香なりけり

○ちりぬやと　花は散つたかと言うて。

○おほふばかりの袖　後撰集「大空におほふばかりの袖もがな春さく花を風にまかせじ」

○人にこひ　人になつかしみ寄ることもせず。

○草はみ　草を食ひ。

○袖はぬるとも　千載集「露しげきあしたの原の女郎花一枝折らむ袖はぬるとも」

○をりてを　折りて。をは強辭。

桃の花かきねつゞきに咲きぬらしうすくれなゐに霞むやま本

曲水宴

から人のあそびし船の面かげも川瀬にうかぶ春の杯

言の葉を思ひめぐらす程もなく川せにくだる春のさかづき

杯にかげをうかべてのむ人も下照るもゝの色ににほへり

遲日

朝日山いでしやいつとたどるまでへだてて遠く霞むなゞくれ

蹴鞠

岩のうへにさけるつゝじの紅は撫づる少女の袖かとぞ見る

山吹

妹に似る姿をやがてつまごめに咲く山吹の花の八重垣

ほどせばみしづが垣ねに色も香もあまりてにほふ山吹の花

行く春も越えじとしばしとまらなむ八重山吹のさける垣ねは

藤

みどりそふ松の梢にむらさきの色さへかゝる春の藤なみ

櫻いろにそめし心も此のごろは又世になびく藤のしたかげ

○曲水宴　古三月上巳の日流れに臨み杯を浮べ詩を作る宴、晉の王羲之會稽山の蘭亭に會したのが起原だといふ。一説周公の時とも。
○うかぶ　面影の浮ぶと杯の浮ぶとかけた。
○言の葉を云々　曲水は流れ來る杯がわが前を過ぎない前に詩を作つてその杯を取つて酒を飮むのである。
○下照る　赤い色が地まで照り輝く。
○朝日山　山城宇治。朝日が山を出るにかけた。
○つまごめ　夫婦ともに籠りすむこと。書紀「八雲たつ出雲八重垣つまごめに八重垣つくるその八重垣を」
○ほどせばみ　場所が狹いので。
○行く春云々　暮れて行く春もこの垣根は越えないでおかうと暫く停まつてくれよ。
○藤なみ　藤の花の風に靡き咲くのをいふ。

ふぢ波のかゝるも春の花とみむ色は櫻のゆかりならねど

年ふりし老木の松もふぢなみの若むらさきにかへる春かな

さく藤を見しのばるべき形見とやちらぬ日數に春のゆくらむ

うちはへて春の日數に咲き餘るしなひもながし松のふぢ波

暮春

くれてゆく春をおもはゞ八重霞野にも山にも立ちやへだてぬ

なれ〳〵し花のゆかりにあかず思ふ春さへ今は暮れてゆくらむ

夏歌

更衣

花染の袖のわかれのかなしさもねにやなかましせみの羽衣

はなの陰なれしも夢か空蟬の羽衣うすく夏はきにけり

さくら色にしめし衣をかへまくはあなうの花の袖の白妙

ふる衣花にきならの里人はぬぎかふるをやあたらしといふ

衣がへしづ山がつもさくら麻の袖にきのふの春やこふらむ

花見つゝ野原篠はら分けなれしころも更へまくをしき今日かな

○うちはへて　長々と絶間なく引きつゞいて。
○しなひ　しなやかに垂れてゐること。
○八重霞云々　幾重にも重なつた霞が野山に春の行くのを立ち隔てないか、春が行くと思つたなら。
○花染の袖　櫻のやうな色に染めた衣。
○空蟬　蟬のぬけがら。蟬。
○さくら色云々　櫻に愛着して櫻色に染めた衣をかへるのは。
○あなうの花　あな憂を卯の花につゞけた。
○花にきならの里　花に衣を著馴らしを奈良にかけた。
○あたらし　惜し。新しをかけた。
○さくら麻　あさ(大麻)の異名。麻の衣がさくら麻といふ名であるからさくらの春を戀ふだらう。
○分けなれし　路踏みわけて著なれた。
○更へまく　かへむの延。

○花がたみ　花籠。花など摘み入れる籠。花の記念をかけた。
○めならぶ　見比べる。
○夏もまたよそなる谷　夏でない谷、夏をしらぬ谷。
○さすがに　その枝と指すをかけた。
○しるき　明白な。
○さくら色云々　櫻の花の色の衣ではなくて。
○ひとへ　卯の花の一重に單衣をかけた。
○草ふかみ　草が深く茂つてゐるので。
○雪の山ざと　卯の花の白いのを雪と見立てた。
○神山　山城愛宕郡上賀茂神社の東にある丘。
○あひにあふひ　逢ひに逢ふ日に葵をかけ二葉さへつゞけた。

春後思花

かぎりあれば春の日数は過ぎぬれど思ふこゝろに匂ふ花かな

餘花

夏かけてのこるさくらの花がたみめならぶ色もなき櫻かな

心にはのこる色香をしるべにて夏山ふかくたどる花かな

さきて咲くちらぬ櫻は夏もまたよそなる谷にたづねてやみむ

新樹

しげりあふ同じ緑もその枝とさすがにしるき木々のいろ／＼

山ざくら青葉のかげもにくからぬ名に立ちよらむ露のぬれ衣

卯花

さくら色のそれにはあらで夏衣ひとへに白く咲ける卯の花

此の里の垣ねばかりのうの花はいづこの雲のくだけなるらむ

草ふかみまたとふ人も絶えにけりうの花さける雪の山ざと

過ぎにける春のとなりの垣ねにはまた雪かともまがふ卯の花

葵

神山やあひにあふひのふた葉さへ松にたぐひて萬代やへむ

露ながらかざしてぞしる玉かづらけふにあふひの神の惠みを

待郭公

あふぎつゝ松の梢にほとゝぎす初聲高くもらせとぞ思ふ

わびつゝも寢なまし雨をふれば又またるゝことのやま時鳥

春くればまづなく鳥もあるものをまつに程ふる時鳥かな

人傳郭公

人づてもまづぞ嬉しき時鳥この里ちかくなきぬと思へば

尋時鳥

たづねばや忍ぶの岡の時鳥さつきまつまの音をやもらすと

とぶ鳥の聲するほどを限りにてたづねや入らむ山郭公

聞郭公

あたらしきこゝちこそすれ時鳥ひとりのみ聞くよはの初聲

わがものとわれのみぞきく時鳥たれと待ちける初音ならねば

人もまた聞きつときけば郭公ぬし定まらぬけさの初こゑ

初郭公

時鳥世にふりいでてなかぬ間やからくれなゐの聲の初しほ

○けふにあふひ　逢ふ日、葵。賀茂の祭に葵のかづらを懸けるのであふひの神というて賀茂の神の意にした。

○わびつゝ云々　雨をつらく思つて困りながら寢ように、その雨が降れば又時鳥が鳴いて來るかと待たれる。

○まつに程ふる　時鳥を待つて時が經つ。

○人づて云々　人が時鳥を聞いたといふ話で聞くのも先づ嬉しい。拾遺集「小夜更けて寐覺めざりせば時鳥人づてにこそ聞くべかりけれ」

○忍ぶの岡　歌枕では河内國ともみちのくともいふ。

○たれと　誰と共に。

○ふりいでて　聲を高く張りあげて。物を染める時に振り動かして染めつけるので初しほの縁語。

○からくれなゐ云々　古今集「思ひいづるときはの山の時鳥唐紅のふりいでてぞなく」によつた。

世に忍ぶ初音ときけば時鳥ほのかなるしも嬉しかりけり

雨中郭公

時鳥つらく忍ぶのころもへてさみだれそめし空になくなり

夜郭公

ほとゝぎす夢かうつゝか定むべき今一聲もこよひ過すな

山郭公

白雪の親の古巣や思ふらむ卯の花山になくほとゝぎす

たれをさは思ひいるらむ筑波山しげき梢になくほとゝぎす

旅郭公

音羽山こえゆく今朝のわかれぢに聲はをしまぬ時鳥かな

山路郭公

時鳥なれもやまどふいるかたくらき宇都のやま路に

故郷郭公

松杉も木高きあらぬ故郷にもの忘れせぬほとゝぎすかな

とふ宿の松も軒端もとしふりて空におぼめく山ほとゝぎす

社頭郭公

○ほのかなるしも　かすかなのもしは嬉しい。

○夢か云々　一聲時鳥を聞いたのは夢に聞いたのか現に聞いたのか決定したい。

○卯の花山　卯の花の咲いてゐる山。萬葉集「かくばかり雨の降らくに時鳥卯の花山になほか鳴くらむ」

○たれを云々　誰をそんなにまで思ひこんだか。新古今集「筑波山はやま繁山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり」に據つた。

○音羽山　山城宇治郡。近江と國境をなして逢坂山につゞく。

○なれもやまどふ　汝も途に迷ふか。

○いるかたくらき宇都の山　伊勢物語「宇都の山にいたりて、我がいらむとする道は、いと暗う細きに、蔦かづらは茂りて」宇津山は駿河國。

○空におぼめく　空を飛んで訪ふべき宿がはつきりしないで覺束なく思ふ。

まもりますその神山の時鳥たひらは千代と今もなくなり

古寺郭公

郭公こゑのむかしをたちばなの寺の長屋にたれかきくらむ

五月郭公

さつき山峯も尾上も時鳥なく聲しげき時はきにけり

待つよひも待たぬあしたも待ちえつる五月を時ときく時鳥

棟

さばかりも立ちおくれずば藤波に又もあふちの花と見てまし

時鳥をりにあふちの花なれば聲のゆかりにあはれとぞ見る

早苗

五月雨のはれ間もけふを初苗と待ちとりがほにいそぐ小山田

ふる雨に袖いかならむ早苗とる賤が田歌の聲はしをれず

袖ぬるゝうきは思はで年あらむ秋をたのむにとる早苗かな

うきひぢに手なひぢ〳〵て植うるなへなべて早苗に青む千町田

見渡せばひとつみどりに千町田の田の面おしなべ植ゑ渡しけり

墨の江やうたふ植女の田歌にも神のこゝろをとる早苗かな

○その神山　あの神山。神山は神の鎮まります山特に上賀茂神社の後の丘をいふ。拾遺集「聞かばやなその神山のほとゝぎすありし昔のおなじ聲かと」

○たひらは千代　太平は千代まで

○たちばなの寺云々　橘寺は大和高市郡高市村。萬葉集「橘の寺の長屋に吾がいねしうなゐはなりは髪上げつらむか」月清集「名にし負はゞ暫しやすらへ子規橘寺の夏の夕ぐれ」

○さつき山　攝津豊能郡。萬葉集「五月山花橘に時鳥かくあふさきはあへる君かも」

○あふち　楝に逢ふをかけた。

○初苗　初めて取り植ゑる苗。

○待ちとる　今日を待ちつける。

○田歌　田植歌。

○しをれず　衰へ弱らない。苗の萎れないのをかけた。

○年あらむ秋　五穀のよく實り収穫のある秋。

○たのむ　頼むに田の面をかけた

○うきひぢ云々　浮泥即ち泥に手肱(たなひぢ)をぬらして(ひぢて)

○千町田　廣々した田。

○墨の江　攝津住吉。

○植女　田植する女。

端午

かりそめの言の葉草もけふといへば引きてあやめにかくる諸人

ためしとて六つの司のあやめ草御階のもとに今日ぞひくなる

生ひ出でしうきをも今日は引きかへてたまの臺にふくあやめかな

時鳥それならぬ根も雲の上に今日もてはやすあやめ草かな

いつかとも誰かあやめはわかさらむけふ諸人のかくるかづらに

をちこちに蓬あやめぞ薫りける風も軒端に吹くとしられて

菖蒲

何ならぬ里の賤屋の軒端にも今日のならひと葺くあやめかな

賤が屋もあやめ刈りきてふき渡す今日の例ぞ雅びたりける

昔より人にひかるゝ菖蒲草根ざしに深きゆゑかあるらし

おのづから高き軒にもふかるらむ引く人の手になびく菖蒲は

昔より沼のあやめの長きねに絶えぬためしを引きてしるかな

五月雨

さみだるゝ心のはてもいつまでと知らで日をふる空のいぶせさ

世にふればかゝるや人の心ともながめて知りぬ五月雨の空

○かりそめ云々　つい一寸した言ひぐさも菖蒲にかける、端午の節句の事だから。

○六つの司　六衛府。端午の節供には三日に六衛府から菖蒲艾を奉り四日に之れを殿舍に葺き五日に節會を行はれた。公事根源五月三日「六府あやめの輿を南殿の階の東西にたつ。」

○それならぬ根　時鳥の音（ね）は雲の上に囀えるが時鳥でない菖蒲の根が雲の上宮城にもてはやす。

○あやめは云々　誰がわけがわからぬものかあやめは明白にわかる

○軒端に吹く　軒端に風の吹くと菖蒲を葺くとを言ひ掛け。

○何ならぬ　物の數にも足らぬ。

○根ざし　菖蒲の根に五月五日の菖蒲の根源について深い由緒があるらしい。

○引く人　菖蒲を引き摘る人。低人（高き軒に對して）をかけた。

○長きね云々　菖蒲の根が長く絶えない。長く絶えぬ吉例。

○さみだるゝ　五月雨の降るに亂るゝ心をかけた。

○世にふれば　經ればに降ればをかけた。

○ながめて　うつとり見つめて。長雨をかけた。

はれま待つ人の心もはて〳〵はさみだれぬべきそらの雨雲
外よりもはらふ嵐の山見えてまづはれ初むるさみだれのくも

新竹

ことし生ひのみどりも色は若竹のたわむをそれとおける露かな

照射

ともしてまつ山かげにしかぞ思ふ戀する人の心づくしも

蚊遣火

涼しさを待ちとるほどの夕風にいぶせくくゆる里の蚊遣火

螢

やどる夜はなれも涼しき影そへて螢とびかふ飛鳥井の水
音羽川わたるとなしに往きかへりせゞに見なれてとぶ螢かな
夕づゝのそれかと見えて暮るゝよりかゆきかくゆき飛ぶ螢かな
思はぬを思ふ思ひか行く水にかず〳〵うつる夏蟲のかげ

蟬

いつまでかいくたのもりと秋風のちかき梢に蟬のなくらむ

夏草

○はらふ嵐云々　雲を拂ふ嵐。山の名嵐山にかけた。
○さみだれのくも　五月雨の雲に亂雲をかけた。
○ともし　鹿が火に近づき來るのを射殺すために篝をたき又は火串の松明をともすこと。
○しかぞ　然ぞ。鹿ぞをかけた。
○いぶせくくゆる　鬱はしくうるさくいぶる。
○飛鳥井　大和高市郡飛鳥の飛鳥神社の境内にある井。
○夕づゝ　宵の明星。夕づゝのはかゆきかくゆきの枕詞。
○かゆきかくゆき　あちらへ行きこちらへ行き。
○思はぬ云々　自分を思つてくれない人を戀ひ思ふその思ひ（火を言ひ掛け）か。古今集「行く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」
○いつまで云々　何時まで生きるか。生田の森（攝津武庫郡）をかけた。

露をこそとき〴〵風の拂へども刈りもはらはぬ庭の夏草
なつ草のしげみが下に秋風のかくろひかねてなびく涼しさ

夕立

雲遠くゆふだつをちの山風にすゞしくきほふ軒のまつが枝
風はやみ露も草葉も一かたに玉のよこ野をすぐる夕立
ふきいるゝ露のみだれも玉だれの内外すゞしき夕立の風
かきくれて空も野山も墨染のゆふだちわたる雲のいろかな
かきくれてふるの川水時のまにゆふだち渡る浪のおとかな
とりあへずぬるゝも涼しかきくらしふるや三笠の野べの夕立

夏月

さしてこし岡邊の松の下すゞみ夏をもしらぬ月の影かな
榎の葉井にもる涼しさは夏としもしら玉しづくよはの月影
氷室山しげき木の間をもる月の光もさむき雪のむら消え
飛鳥川ひるの暑さを淵と瀬にかへて涼しき夏の夜の月
おりてきば涼しからまし淸瀧や絲にかけそふ月のころもは

蓮

○かくろひかね　隱れかねて。
○ゆふだつをち　雲が夕方遠くに立つて夕立の雨降る遠くの風。
○風はやみ　風が早いので。
○玉のよこ野　一方にたまるに玉のをかけた。露と玉と緣語。玉の横野は武藏多摩野横山か又は仙臺郊外の玉田横野か。
○玉だれ　玉で作つた簾。玉は露の緣語。
○ふるの川水　暗くなつて降るに大和布留川(古川)をかけた。
○夏としもしら玉　しら玉に知らずをかけた。
○しづく　水中に沈んで透いて見える。
○氷室山　氷室のある山。氷室は冬の氷を夏まで貯へおく室。
○飛鳥川　大和。古今集「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞけふは瀬になる」
○おりてきば　衣に織つて著たならば。
○淸瀧　山城淸瀧川。瀧の緣語として絲と言うた。

面かげもよそへし池のはちす葉に置く白露や玉のかんざし

夏川

涼しさはこのくれとてや漕ぎつれて夕川くだるせゞのいかだし

氷室

夏深き木立へだててよそに照るひむろの山のかげぞ涼しき

納涼

なに故にこし松陰のまとゐぞと忘れてたどる風の涼しさ

入りはてゝのこる光の暑ささへ涼しくかはる夕やみのそら

消ゆばかりひるまはありし露の身も夕はかゝる風の涼しさ

水邊納涼

端居して月待つ宵の松かげにそゝぐも涼し庭のましみづ

日をさふる山松がねの岩間よりもりくる水の音のすゞしさ

さと遠き板井の清水むすぶより夏もよそなる袖の涼しさ

袖ひぢてむすぶ泉のあたりには秋やとくると思ふすゞしさ

竹亭納涼

よる〳〵は夏をよそなる竹がきに秋風めぐるいほの涼しさ

○このくれ　木の榑。木の榑は木材。此の夕暮の意をかけた。
○せゞ　瀬々。
○いかだし　筏を漕ぐ人。
○氷室　冬の氷を夏まで貯へおく室。

○なに故云々　何のために來た。
○まとゐ　圓居。

○日をさふる　日を遮る。
○もりくる　さふるの緣語。
○板井　板で圍つた井。
○むすぶ　水を手ですくひあげる
○袖ひぢて　袖を濡らして。
○秋やとくる　秋が溶けてゐるかと。むすぶに對して解けると言うた。

風ならで露のかゝるも竹近みすゞしき庵のふしにしつべし

下くらき軒端の竹のよひ／＼に月ふきわくる風の涼しさ

松下納涼

すみの江の浪よる岸の夕すゞみ松をあき風ふくかとぞきく

船中納涼

濱傳ひ吹上ちかく漕ぐふねは秋かあらぬか風のすゞしき

すみの江の松かげ近くこぎよせて夏わすれ草つみてかへらむ

名所納涼

かつら川月の夜ごろは影ちかく汀に出でてすゞむ里人

すゞしさは外にもとめじ水の上にすむ水鳥のかもの川づら

扇

草の露ひるまのみかは朝夕もおかれぬ物はなつのかはほり

盛夏不消雪

こは扇によみてかけるなり

あふぎつゝ富士の高嶺にくらべ見よ夏の盛りに消えぬしら雪

六月祓

○竹近みすゞしき　竹が近いによって涼しい。
○ふしにしつ　庵の涼しい一かごにしてもよい。
○すみの江　攝津東成郡住吉。
○松を　松風の音を。
○吹上　紀伊海草郡和歌浦の北。古今集「秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか」
○秋かあらぬか　秋であらうか或はさうでないか。
○夏わすれ草　住の江の岸に忘草が生えてゐるといふが夏を忘れる忘草を摘んで歸らう。古今集「道知らば摘みにも行かむ住のえの岸におふてふ戀わすれ草」
○かつら川　山城。桂と月と緣語
○里人　桂村の人。
○水鳥の　鴨の枕詞。
○かもの川　山城賀茂川。
○ひるま　露の干る間。晝間をかけた。
○かはほり　蝙蝠。扇の異名。

あらびてしさばへ螢の神もみな今日はなごしに祓ふ川づら

住の江の濱松かげにみそぎしてのぶる齡や千代のとし波

衣手にすゞしくかはる川風は祓ふみそぎのしるしなるらむ

秋歌

初秋曉

みそぎして曉かへるころも手にすゞしくかはる秋のはつ風

初秋風

夏衣きのふながらの朝戸出に秋たちかはる風のすゞしさ

吹くかぜもけさより秋のはつ尾花穗にいでゝ袖に通ふ涼しさ

玉すだれひまもとめつゝ吹くまゝにわが身にぞしむ秋の初風

驚けば年のなかばも過ぎにけり昔見ぬまどの荻の上かぜ

早秋露

秋の來て日數のほどは淺ぢふに深くもおける庭の露かな

七夕霧

彦星のいまや來ますと天の川きりのとばりをかけて待つらむ

○あらびてし　荒れてゐた。
○さばへ　五月頃の蠅。荒びさわぐことにいふ。螢はさ蠅に對してつけたまで。さばへ云々は荒ぶる神。
○なごし　名越祓。六月祓。荒ぶるに對してなごす(和)と言うた。拾遺集「さばへなす荒ぶる神もおしなべて今日はなごしの祓なりけり」
○みそぎして　六月晦日夕暮河原で身を祓ひ清めて曉歸る。七月一日にはもう秋で稍涼しい秋風が吹く。
○きのふながら　昨日の夏の儘。
○秋たちかはる　秋が立ちかはるに秋立つをかけた。
○穗にいでて　高く表はれ出て尾花が穗に表はれ出てをかけた。
○袖　尾花が風に靡くを衣の袖に見立てていふのをかけた。
○ひまもとめ　隙間を求めて。
○淺ぢふ　まばらに茅の生えた所日數の淺いにかけた。
○深くも　淺茅生の淺に對す。
○彦星　七夕に天の川で織女星に逢ふといふ牽牛星。
○とばり　帳。室内に垂れ下げて隔てる布帛。

○かき數へ　數へて。萬葉集「秋の野に咲きたる花をおよび折りかきかぞふれば七くさの花」

○さゝまくら　旅寢の枕。

○もみぢを渡す　古今集「天の川紅葉を橋に渡せばや棚機つめの秋をしも待つ」

○まだきより　早くから。前の古今集の歌による。

○逢ふことゝ云々　棚機の逢ふのが一年一度の遠い契りを憂く思ふ。浮き橋にかけた。

○わたりせ　川の瀬の渡るべき所天の川を渡つて逢ふ折が一年一度と遠いことにかけた。

○心淺さ　考への淺い事。淺瀬。淺さは渡り瀬の縁語。

○とわたる　瀬戸をわたる。古今集「わが上に露ぞおくなる天の川とわたる舟のかいの雫か」

○こがれ　焦れに漕がれをかけた。

○なれも云々　お前も。蜘蛛に向つていふ。人は七夕の乞巧奠で織女星に五色の絲を手向ける、蜘蛛よ汝も絲を手向けるか。

七夕草

かき數へ今宵たむけむ初秋の野べにひもとく七草の花

一夜あふあまの川原のこひぐさにわが七車つみてくらべむ

七夕露

一夜あふ天の川原のさゝまくら嬉しきふしも露ぞこぼるゝ

七夕橋

一とせを思ひこがれし色見えてもみぢを渡す天の川はし

まだきよりかけてまつらむ棚機の秋の手染のもみぢ葉の橋

逢ふことの遠きちぎりをうき橋の名にさへかけてなげく大空

七夕川

天の河わたりせ遠く契りけむ心淺さをたれにかこたむ

七夕舟

いつしかとはつ秋風をまちいでて今宵とわたる天の川舟

こよひとてとわたる天の川舟はいく夕浪かこがれきつらむ

七夕蟲

今宵とはかねて知るらむ棚機になれもたむくるさゝがにの絲

なれもさは秋さりごろもいそぐらし天の川原にすだく機織

七夕萩

織女(たなばた)のあふ初秋と高麗にしき紐ときわたす萩のはなづま

七夕岡

こがれきて秋をあふせの舟岡にこよひなまめく女郎花かな

七夕門

神世より老いせぬ門により立てこよひかはらず我をまつ妹

烏鵲成橋

かさゝぎの羽根をためしによな〳〵もならべて渡せ天の川橋

七夕言志

星合のそらごととはず此のゆふべ遊ぶみやびぞ雲の上人

空言とはずといふは眞僞りを不論といふ事なり七月七日夜牽牛織女の二星相會ふといふ諺は漢國にてもたしかならぬ事をこゝにはた神代にもなき事なるを七夕つめ彥星などいふ事のあるに思ひよせて奈良の御代の人々の歌に面白くよめる歌萬葉集に數十首ありて跡もなき空言なれども一つのみやびぐさになりて後には乞巧奠などいふ事もありてい

○なれもさは　お前もそんなに。
○秋さりごろも　秋になつて著る衣服。
○機織　はたおり蟲きり〴〵す。
○秋をあふせ云々　二星が秋を逢ふ折(せ)として天の川瀨を渡る舟舟岡にかけた。舟岡は山城愛宕郡。
○なまめく云々　古今集「秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花も一時」
○老いせぬ門　不老門は宮城の門である。こゝは神世の昔から年を經ても老の來ることのない織女星がいつもかはらぬ天の川門に彥星を待つの意。
○かさゝぎの云々　七夕に鵲が翼を竝べて天の川に橋を渡して牽牛織女二星が逢ふといふのを例にして七夕の一夜でなく每夜々々羽根をならべて渡せ。
○星合のそら　七夕に牽牛織女の逢ふ夜の空。そらごと(僞言)につづけ更に言問ふとつゞけた。
○雲の上人　宮中の人々の總稱。雲の上は星の緣語。
○こゝに　我が國では。
○七夕つめ　棚機つ女。
○乞巧奠　きこうでん。七夕の夜織女星に物を供へて女の手藝の巧みになるのを祈る祭。

よいよもてはやして雲の上人の遊びわざになりぬる事をかしのみやびわざやと思ひてかくよめるなりけり歌によむ故事諺はかかる類ぞ多かるかし

同じ題の歌

ならひとて昔も今も言の葉をよみてたむくる星合のそら

ぬば玉の一夜の戀をからやまとちゞによみなす言のはの友

七夕枕

久方のあまの川原の七ふ菅あきのこよひの枕にぞかる

七相菅といふものは萬葉集三ノ巻(四十六枚)天なるさゝらの小野の七ふ菅手にとり持ちて久方の天の川原に出でたちて云々とありいかなるをいふといふ事いまだつまびらかならぬ事なれど菅枕といふこともあるに思ひよせたるなり

二星適逢

契りありて露のたま〳〵あふ夜半もふけておどろく天の川風

朗詠に小野良材朝臣の詩に二星適逢未敍別緒依々之恨五夜將明頻驚涼風颯々之聲とあるによれり

○ぬば玉の　夜の枕詞。
○ちゞ　千々。澤山。一夜に對す。
○七ふ菅　編目を七筋編んだ敷物を作るに用ゐる菅。
○菅枕　菅を束ねて作つた枕。
○露のたま〳〵　露の玉にたまさかの意をかけた。
○朗詠　和漢朗詠集。
○小野良材　小野美材。參議篁の孫。延喜二年卒。
○二星云々　代牛女惜殘更詩序の句で本朝文粹卷八に出てゐる
○別緒依々之恨　別離の心緒、離れ難き恨み。
○五夜　五更の夜。

星河秋久

はた物の石をためしにたつぬれば天のかはらぬ秋ぞ久しき

前漢張騫が故事に支機石あり萬葉にはた物の云々といへる事あるに思ひよせたるなり

七夕別

漕ぎかへる舟路夜ふかき朝ぎりにいそぐもつらし天の川長

あまの川こよひ明けゆく朝ぎりや又一年のへだてなるらむ

野分

花ざかりうたてあれぬる野分かな惜しむ心もうちしをれつゝ

をしと思ふ花も心もをちこちにいりもみさせてふく野分かな

山家秋夕

時しらぬいはほの中にのがれても袖にゆるさぬ秋の夕露

行路草花

露ながら移るを袖にしめ野ゆきむらさき野ゆき分くる秋萩

野草花

女郎花いろめく野べをさをしかの通ふやねたき萩の花妻

○天のかはらぬ　天の河かはらぬ秋とかけた。
○支機石　前漢の張騫が槎に乗つて天の河に行つて石を得て歸り、人に聞くとその石は織女の支機石だと云うたといふ故事。
○萬葉にはた物云々　萬葉集「はた物のふみ木もちゆきて天の川うち橋わたす君が來むため」
○漕ぎかへる舟路　七夕の夜ふけて二星が別れ歸る舟路。
○天の川長　天の川の船頭。
○又一年云々　朝霧の隔てるのが一年一度會ふ二星を又一年間隔てになる。
○うたてあれぬる　秋野の花盛りがいま〳〵しくも荒れた。
○いりもみ　激しく揉むこと。野分が花をむやみに揉むに人の心を揉む氣を揉ませるのをかけた。
○のがれても　世を遁れ隱れても
○袖にゆるさぬ　袖に露置くことはのがれさせぬ。のがれると許さぬと相對した。
○露ながら云々　萩の花が露も一しよに袖に移るのを袖に染ませ。
○しめ野云々　萬葉集「茜さす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖ふる」標野は天子の御獵の禁野紫野は紫草の生えてゐる野。

かすが野は秋さく花の七草も袖ふりはへて見にやゆかまし

庭草花

百草に庭を花野とうゑなしてわが宿ながら心をぞやる

草花映月

咲きにほふ花野の秋をたづねずばいづこに見まし月の盛りを

七草に今一くさの數そへてひかりを花とまじる月かげ

朝瞿麥

ぬれてそふ露の色さへ散らぬまと朝いせられぬ牀なつの花

朝顔

月草のおなじ花田に咲きそめて飽かずうつろふ庭の朝がほ

秋來ても閨の戸いそぐ明方にみどりすゞしくさける朝顔

萩

あきたちて涼しき風をおのれしも招きがほなる庭の萩原

伊勢の海やさやけき秋のをりしきて月に嬉しきよはの濱萩

萩露

打ちしめり音こそたてね風みえてなびく朝けのきりの下をぎ

○袖ふりはへて　袖振り連れ立って。古今集「春日野の若菜摘みにや白妙の袖振りはへて人のゆくなり」

○心をぞやる　心を慰める。

○今一くさ　今一種。七草と言ふので一草をかけた。

○朝い　朝寝。

○牀なつ　朝寝の牀に常夏をかけた。

○月草の云々　月草の縹色と同じ縹色。花田は月草の花で染めた縹色。

○をりしきて　濱萩が折り重ねて繁く立って。

○なびく　萩が風に。

○朝け　朝明け。

眞萩原たまぬく枝の露ながら折りてかざさむ袖はぬるとも

萩のうへに鴈の涙の露おちてとこ世の玉の枝とこそ見れ

おきわたす露をば露とたれか見む玉の横野のあきの萩が枝

庭萩

中垣の露の隔てもおかめやは軒端にちかき萩の花づま

をじかふす野べをやなれも忍ぶらむ庭に露けき萩のはな妻

野萩

秋の野の霧のたえまにから錦はつれて見ゆる萩の花妻

こゝかしこ花見てたてる小車の錦が野べの萩のさかりは

霧中萩

秋萩のにしきえならぬ宮城野に夕の霧のたたまくもをし

萩似錦

秋の野の花はちぐさに匂へども萩の錦にしく色ぞなき

女郎花

咲く花はおほかる野邊のめうつしも姿ことなる女郎花かな

朝女郎花

○たまぬく　萩の枝で露の玉を貫く。
○露ながら云々　露のついたまゝそつくり枝を折らう。
○鴈の涙の云々　齋宮女御集「白露の消えにし人の秋待つと常世の鴈も鳴きてとひけり」
○玉の横野　武藏多摩野横山をいふか。仙臺郊外宮城野の萩の名所玉田横野か。
○露の隔て云々　露ばかりも隔てを置かうか。中垣におく露をかけた。
○萩の花づま　萩の花をいふ。妻に隔てをおかぬ意にかけた。
○はつれて　ほつれて。解け離れて。
○たてる小車　停めてある車。
○にしきえならぬ　萩の錦が言ふに言はれぬ麗はしい。
○宮城野　陸前。仙臺の東郊。萩の名所。
○たたまく　たたむの延。霧の立つに裁つをかけて錦の緣語。
○おほかる野邊　古今集「女郎花多かる野邊に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ」
○めうつし　目を移し見ること。多くある花に目を移し見ること。

女郎花霧もはれ行く名張野にいとゞあしたの面なかるらむ

月前女郎花

女郎花かゞやかしげにたてる野をおもひぐまなく照らす月かな

雨中女郎花

をらずとも雨のふる野の女郎花濡衣をだにきつゝたはれむ

初雁

少女らがゆきあひのわせをかりがねも今朝珍らしく鳴きてきにけり

雁

雲外雁

鳴く音さへそことさやかに聞ゆなり月に横ぎる雁の一つら

夜雁

物おもふとながむる空の白雲にはね打ちかはしかりも鳴くなり

關路雁

あくがれて寐られぬよはの月影に雁もとこ世や出でてきつらむ

關こえてふく秋風に須磨の浦や己が名つけて雁もきにけり

田家雁

○名張野　隱野（なはりの）伊賀名賀郡。なはるは隱れる意。
○面なかる　恥かしくきまりわるい。隱れてゐたのに霧がはれて朝は恥かしい。
○かゝやかしげ　恥かしげ。
○をらずとも　古今集「名にめでて折れるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな」
○濡衣をだに　せめて濡衣だけでも。根もない浮名だけでも。
○少女らが　行合の序。
○ゆきあひのわせ　夏秋の季節に跨つた頃實る早稻。萬葉集「をとめらが行きあひの早稻を刈る時になりにけらしも萩の花咲く」
○かりがね　雁に刈りをかけた。
○白雲に云々　古今集「白雲に羽根うちかはし飛ぶ雁のかずさへ見ゆる秋のよの月」
○雁もとこ世云々　雁も遠い〳〵異境を出て來ただらう。寐られぬ夜半の牀を出たに常世をかけた。
○關こえて云々　新古今集「秋風の關吹き越ゆるたびごとに聲うち添ふる須磨の浦波」

わかれては程をへだてし鴈がねの庵近くなくあきの小山田

雁成文字

月のうちの桂ならねどそれと見て手には取られぬ鴈の玉章

野　鹿

秋さむく眞萩ちる野の夕風につゆわけ濡れてをじか鳴くなり

萩の花ちる野の露にわけぬれて妻とふ鹿やよはに鳴くらむ

あけゆけば鳴く音にそへてさを鹿のいる野の薄露ぞこぼるゝ

田家鹿

妻ごひも今は穗にいでゝ小山田の庵のそともに鹿ぞ鳴くなる

もりわぶる秋の山田のいねがてに長き夜すがら鹿も鳴くなり

山家鹿

たつきりの籬のもとに惑ひきて柴の戸近く鹿ぞなくなる

風前鹿

吹きまよふ嵐のかぜに聞くつまもをちこちたどるさを鹿の聲

朝　鹿

小萩原ねての朝けのから錦たたまくさぞなをじか鳴くらむ

○月のうちの桂　月の中に生えてゐるといふ傳說の桂樹。新千載集「哀れなど月の桂のよそにのみ手にも取られぬ影を戀ふらむ」
○それと見て　玉章と見ながら。
○雁の玉章　蘇武の故事からたより、書信、手紙をいふ。
○露わけぬれて　新後撰集「風すさむ小野の篠原妻こめて露わけぬるゝさを鹿の聲」
○いる野　山城乙訓郡入野。萬葉集「さを鹿の入野の薄初尾花いつしか妹が手枕をせむ」
○そとも　背面。うしろ。
○いねがてに　寢ね難くて。
○もりわぶる　山田の番をしわづらふ。
○たつきりの籬　立ちこめてゐる霧といふ籬。
○かぜに聞くつまも　牡鹿の聲を風によつて聞くつまの鹿の方でも遠近かなた此方と迷ひ歩く。
○朝け　朝明け。夜明け。
○たたまく云々　立たむの延。立つのがさぞ惜しいだらう。惜しを男鹿とかけつゝけた。立つは裁つにかけてから錦の緣語とした。

から錦萩さく野べにふす鹿のあしたたちうき音をや鳴くらむ

暁鹿

とりの音に驚かされて暁の別れをなれもをしかなくらし

夕鹿

夕霧につまどはして宮木野の鹿も風まつねをや鳴くらむ

霧中鹿

きり深き戀の山路にさを鹿のいとゞまどへるねをや鳴くらむ

庭蟲

蟲のねもいろのちぐさに亂るめり籬の花の露にきほひて

野亭蟲

野邊ひろき四面の草葉の蟲のねを集めてひとり聞くいほりかな

草の庵は壁の内外も一つにてまくらにすだくきりぐ\すかな

野蟲

秋萩の花のにしきを織る野べに手玉もゆらぐ鈴むしの聲

やちぐさの錦を野べにきて見よと人まつ蟲もねやつくすらむ

故郷蟲

○なれもをじか　汝も惜しいか。牡鹿に惜しかをかけた。

○宮木野　仙臺の東郊。萩の名所

○いろのちぐさ云々　蟲の音が千種の色さまぐ\に亂れてゐるやうに見える。

○手玉　手の飾りにつける玉。
○鈴むし　ゆらぐ(搖ぐ)鈴をかけた。
○人まつ蟲　人を待つ。松蟲にかけた。

すむ人はあるかなきかの古里に蟲のねしげし庭のあさぢふ

月前蟲

すみのぼるかげにきほひて蟲の音も月もてはやす庭の草むら

霧中蟲

きり〳〵すおのが歎きのそれなれやたなびく野べに音をもたつらむ

尋蟲

宿とへば又ことかたに聞えつゝ松蟲の音にまどふ秋の野

すがたさへ見ゆやと近く立ちよればなく音も忍ぶ野べの松蟲

名所蟲

宮城野の小萩が露をなみだにて風まつむしぞ聲うらむなる

秋雨

こほろぎの鳴く音やいかに村雨にしをれてなびく秋の庭草

月

ながめきて月やあらぬとかすむまで老となる身の秋ぞ悲しき

つもりては秋も昔の春の月我が身ひとつにかすむ老かな

ながめこしあはれは知るや秋の月秋の夜しらぬ老となるまで

○あさぢふ　淺茅生。まばらに淺く茅の生えた處。

○きり〳〵すおのが云々　おのが名のそれ卽ち霧なれや。歎きに名を言ひ掛けた。たなびくは霧たなびく。

○音をも　おのが歎きの音をも。

○松蟲　待つ蟲を言ひ掛けた。

○月やあらぬ云々　月は昔見た月ではないか知らぬとはつきり見えない位まで老いた。古今集「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」の句を意をかへて取つた。

○昔の春の月　老いては秋の澄んだ月も霞んで昔の春の朧月のやうだ。

○我が身ひとつ　わが身ひとり。

秋をへてかはらぬ月の増鏡老となりゆく影もはづかし

見る月の秋もむかしの秋ならで我が身ひとつにかすむ老かな

初秋月

涼しさもひかりもそひて夕月夜さすがにしろき初秋のそら

上弦月

宵のまにいる弓張の月かげは惜しめどえこそ引きもとゞめね

八月十五夜

そらにみつ秋津島根の月のかげもろこし人もこよひめづらむ

さやけさの千夜に一夜の秋の月一夜に千夜の影やこもれる

光かは夜にさへみてる望の夜の月をぞ月の鏡とは見む

八月十五夜の會に都の月といふことを

時も又秋つ島ねの最中にてこよひぞ月のみやこなりける

同じ夜山月

名に高きこよひの月も望（もち）の夜に降りそふ雪とみがくふじのね

望月

あかしがたこよひぞ波のかへりてはひるもは月の望月の影

○増鏡　眞澄の鏡。澄んで明らかな鏡。秋の月をたとへた。
○老となりゆく影　影は自分の姿をます鏡につけていふ。
○夕月夜　夕方の月。
○さすが　夕月のさすをかけた。
○いる　月の入るに弓の射るをかけた。
○弓張の月　弦月。
○えこそ云々　引きとめることができない。引きは弓の縁語。
○そらにみつ　大和の枕詞。秋津島根にかけた。
○千夜に一夜云々　幾多の夜のうちで一夜しかない秋の夜の月。伊勢物語「秋の夜の千夜を一夜になずらへて八千夜しねばや飽く時のあらむ」
○望の夜　もちは滿ちで滿月の意
○時も又云々　時も秋の最中、所も日本國の眞中。
○月のみやこ　帝都の美しいのを譬へていふ。
○望の夜に降りそふ云々　萬葉集「富士のねに降りおける雪は六月の望に消ぬればその夜ふりけり」

あらたなる言葉の花もこよひさく月の桂の光とぞ見る

見る人の千里の外のあはれまでうつすかゞみや秋の夜の月

かぞへつゝ日ごろまたれし今宵とてくるれば出づる望月の影

とことはに晝より晝につゞくかと月影しらぬ望のよの空

くるゝよりまたも朝日のさし出でて夜こそなけれもち月のそら

九月十三夜

咲く菊の露にやどして一とせにふたゝび月をめづるなが月

ゆたかなる水穗の國にめで初めし千五百のあきの長月のつき

見る夜半も長きが中の長月とめでそめし世をあふぐ空かな

めでそめし昔も遠き長づきの月に契らむゆくすゑの秋

長き夜を君にかけつゝ明らけき月もてあそぶ雲のうへ人

同じ夜の會に、月前菊

さく菊のほしの林によるくは月の御舟ぞひかりさしける

二十日月

さしもまた光細くもあらなくに誰かはつかの月といふらむ

曉月

○くるれば　日が暮れると。
○とことはに云々　月光が晝を欺くばかりで永久夜が無く晝から晝へつゞくかと。
○くるゝより　日が暮れるとまた朝日が出て。朝日のやうな月が出たのをいふ。
○水穗の國　瑞穗の國。瑞々しい穗の豐かな日本の國。九月十三夜の月を賞するのは日本で始めたことである。菅家後草秋夜の詩が十三夜の作といふのを起原とすともいふ。
○ほしの林云々。萬葉集「天の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎ隱る見ゆ」咲く菊の花を星と見立てた。古今集「久方の雲の上にて見る菊はあまつ星とぞあやまたれける」
○あらなくに　あらぬにの延音。
○はつかの月　ほのかな月かすかな月と誰がいふか。二十日をかけた。

影清み千里の遠のさとびともねてあかさめや秋の夜の月

山月

をしみけむ山のあなたの心をもいでてさやけき月にみるかな

野月

出づるよりいるをかぎりて秋の夜の月にわけ行く武蔵野の原

森月

下草の下葉のつゆも見ゆるまで影さやかなる月よみのもり

河月

月のうちの同じ名におふ川のせに又影やどす浪のさやけさ

石川や神もこゝろをうつすらむ清き流れにやどる月かげ

月の舟かつらの川にかつら梶かけてうかべる秋のよな／＼

池月

月にうつす人の心を心とややどしそめけむ廣澤の池

海月

寝であかす人もなにはの月影に誰さそふらむ海人のよび聲

旅宿月

○影清み　月影が清らかなので。

○をしみけむ云々　山の彼方では山に入るのを惜しんだだらうと思はれる心が想像される。

○出づるより云々　武蔵野は限りがない、月の出る所から入る所までがはてだと思つて、わけゆく。

○月よみのもり　伊勢度會郡、神宮の北三里。月讀宮がある。

○月のうちの同じ名におふ川　桂川。月の中に桂が生えてあるといふから詠んだ。

○石川　石川の瀬見の小川。下賀茂を流れ賀茂川に注ぐ細流。石川は底に石のある川。神も云々は下賀茂神社の神をいふ。

○かつら梶　楚辭「桂櫂兮蘭枻」などあるをいふ。桂は香木の名。

○廣澤の池　山城葛野郡嵯峨。

○寝であかす　寝ないで明かす。

○人もなには　人も無し、難波をかけた。

思ひいづる都のことは大我野（おほがの）にあはれをそへて月も宿れり

玉つしま清き渚の月見つゝさいがの野べに宿る旅びと

宮人のかりねの露の跡とめてさいがの野べにやどる月かげ

名所月

水無瀨川あはれは今もありてゆく月にしるらむ秋のさと人

引きはへてたがさらしなの布なれば山の端しろき秋のよの月

雨後月

雨はれてよそなる空をゆく雲もあらしの末にみゆる月かげ

故鄕月

深き夜の露にをれ伏すよもぎふの月うち拂ひとふ人もがな

月前露

鳴き渡る鴈のなみだとおく露のかずさへ見ゆる月のさやけさ

月前管絃

ひく琴もふく笛の音も大空の月に通ひてすめる夜はかな

絲竹のしらべは空にこゑすみて雪とふりしく月のさやけさ

絲たけのしらべも月の雲居まですみこそのぼれ秋のよの空

○大我野　紀伊伊都郡。都のことは多いにかけた。

○玉つしま、さいが　紀伊海草郡玉津島雜賀。

○宮人のかりね　主上を始め奉り宮中奉仕の百官女房を宮人といふ玉津島へ行幸諸臣供奉したことは續日本紀以下屢見ゆ。聖武天皇神龜元年、稱德天皇天平神護元年、桓武天皇延曆二十三年など。

○水無瀨川　攝津三島郡水無瀨で淀河に注ぐ河。文德天皇の皇子惟喬親王の宮水無瀨殿があつた。

○引きはへて云々　引き延べて誰が曝した布。更級（信濃國更級郡月の名所）をかけた。

○山の端しろき　山の端がはつきりとして。しろき　しるき。

○よもぎふ　蓬生。蓬の生ひ茂つた荒れた處。

○鳴き渡る云々　古今集「鳴きわたる鴈のなみだや落ちつらむものおもふ宿の萩の上の露」「白雲にはねうちかはし飛ぶ鴈の數さへ見ゆる秋のよの月」

○月の雲居まで云々　金葉集「琴の音は月の影にも通へばや空に調べのすみのぼるらむ」

會友見月

思ふどち語らふ月のまとゐには心のくまも誰かのこさむ

閑居して見る夜の月も秋つしまくもりなきよの光なりけり

秋田

賤の男がうきにぬれける衣手もうれしき色にいづる小山田

擣衣

うつ人のあはれもいかにまさるらむ更けて身にしむよはのさ衣

遠擣衣

よそながら打ちきく音も身にしむやいかなる色の衣なるらむ

里擣衣

さほかぜの夜寒しられてふる衣きならの里にいまぞ打つなる

月前擣衣

月きよみ千里のをちの秋風を身にしめつゝや衣うつらむ

月前菊

おく露のちとせの數もよむばかり菊さく庭にすめる月かげ

籬菊

○心のくま　心に隔てをおくこと。月影の隈にかけた。

○うきにぬれ云々　辛苦して袖を汗や涙に濡らした勞も報いられて

○うれしき色云々　稲のよく熟し實つたのをいふ。

○身にしむ　聞くわが身にしむ。

○さほかぜ　大和添上郡佐保を吹く風。

○ふる衣　著ふれた衣。きふるした衣。きならの序。衣打つこと續く。

○きならの里　奈良をいふ。古衣を著馴るとかけてつゞけた。

○月きよみ　月が澄んでゐるので

○おく露のちとせの數　置く露の澤山の數。南陽酈縣の甘谷に菊の露の滴つた川があつて其の池の人が之れを飲んでを長壽であつたといふ傳説(風俗通)などを故として菊の露は齢を延べるものとした歌が古來多い。

菊の花にほふかぎりは秋冬のへだても知らぬまがきなりけり
わがやどの籬の島にさく菊を波かとだにもよりて見ななむ

名所菊

吹上の濱のまさごのありかずに千世やくらぶる菊のしら露
松かげにさかり久しき色そへてきくの花さく住吉のはま
さく菊の花ある里と秋はまたかりもきつゝや住よしのはま
よせかへる浪もひとつに匂ふかなきく咲きわたる吹上のはま

重陽宴

さく菊も星かとまがふ雲のうへに光さしあふけふの杯
千世いはふかざしの菊のつゆのまに老わかえぬるけふの杯

紅葉

秋山によせし心のみやびをもとりてぞ忍ぶもみぢ葉のいろ

庭紅葉

外よりは色もあはれも我がものと見るにぞふかき庭のもみぢ葉

夕紅葉

かきくらし時雨にくるゝ秋山の色は朝日にまがふもみぢ葉

○籬の島に咲く　籬の下に咲く菊陸前鹽竈沖の一島籬が島にかけた
○見ななむ　見てほしい。
○吹上の濱　紀伊海草郡吹上。和歌山市から雜賀村までの海濱。
○ありかず　物のある數。古今集「わたつ海の濱の眞砂を數へつゝ君が千年のありかずにせむ」
○かりも來つゝ云々　鴈も來つゝ住むであらうか住吉の濱。
○きく咲きわたる　菊が咲いて向うまで行きわたつてゐる。浪もひとつと言ふので白菊である。
○星かとまがふ　古今集「久方の雲の上にて見る菊は天つ星とぞあやまたれける」
○菊のつゆ云々　古今集「ぬれてほす山路の菊の露の間にいつか千年をわれは經にけむ」
○秋山に云々　天智天皇春山秋山の優劣を比べられた時額田女王が判せられた萬葉集長歌による。
○ふかき　色も哀れも深き。
○かきくらし　暗くなつて。

霧中紅葉

秋ぎりの絶間に見ゆる朝妻のかた山もみぢ色ぞゆかしき

岸紅葉

舟ながら手をるばかりに見し岸もよすれば高き紅葉ばの陰

山紅葉

朝日かげむかふ立田の神山に照妙(てるたへ)まつる秋のもみぢ葉

峯紅葉

手向山神の手向のにしきとて千代へて絶えぬ秋のもみぢ葉

こがれこしわが心をもさればよと峯のもみぢの色に見るかな

秋木

山本のあかきの梢見わたせば葉のみか實さへ色づきにけり

秋鳥

秋の田をかりもいつしか鳴きて來む稲負鳥はけさぞこゑする

暮秋

長月とたのめられける秋もはやつごもり頃となりにけるかな

つひに又紅葉も菊もと思へばうつろふ秋の惜しくもあるかな

○朝妻　大和南葛城郡、

○舟ながら手をるばかり　舟に乗つたまゝで手折ることが出來るほどに低く見えた。

○照妙まつる　光澤のうるはしい白布を神に幣として捧げ奉る。紅葉を照妙と見立てて幣に奉る。

○手向山　越えて行く坂路の頂上峠。旅人が幣を手向け祈る道祖神が祀つてある。

○神の手向云々　古今集「このたびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまに〳〵」

○山本　山の麓。

○あかき　樫の異名。櫧木の異名

○稲負鳥　秋田のほとりで鳴く鳥であらう。古今集「わが門にいなおほせ鳥の鳴くなべに今朝吹く風に雁は來にけり」によつて、稲負鳥が鳴いたから雁はいつ來るかもう來さうだというた。

○長月と云々　陰暦九月は長月として長いと滿喫をさせられた秋。

○つごもり　晦日、長月の月がこもる時の晦日となつた。

きく紅葉まだ昨日けふめで初めてあきはてぬまにはつる秋かな

暮秋蟲

うきながらなれこし秋の別れ路とをしみて蟲のねをや鳴くらむ

暮秋雲

ゆく秋の空のかたみと眺むればたゞよふ雲ぞ袖にしぐるゝ

冬歌

時雨

一しぐれかわく日影もかき暮れてまた音づるゝ庭のもみぢ葉

そこかしこ落葉がうへに音づれて雲もまばらにふる時雨かな

雨雲はおよばぬ里もふき迷ふ風にたぐひてふる時雨かな

音たてて降るかときけばさむるまの夢よりはやくゆく時雨かな

吹きまよふあらしの雲もうすくこく紅葉の山を行く時雨かな

高砂の松にいくたび下葉だにもみぢよとてか時雨ふるらむ

たかさごの松もしぐれの音はして外山にかゝる風の浮雲

山家時雨

○あきはてぬ　秋と飽きとをかけた。

○うきながら　つらいと想ひながら。

○また音づるゝ　また時雨が訪れて来る。

○雨雲は云々　雨雲が行き届いてゐない彼方の里までも。

○うすくこく　雲が或はうすくなり或は濃くなつて、紅葉の濃淡いろいろなのにもかけた。

○下葉だに云々　せめて下葉だけでも紅葉せよとて。

○外山　端の山。麓の山。

なりしもあれ柴の煙に立ちそひて軒端しぐるゝみねのうき雲

跡もなき落葉の庭をとひがほにしぐれ來にけりみ山べの里

旅宿時雨

さゝまくら夢路の末もかき暮れてしぐるゝ野べの片しきの袖

落葉

もみぢつゝ散るを思へばそめ〳〵し露も時雨も恨めしきかな

はかなくて露の染めける紅葉とてさこそは風にもろく散るらめ

木がらしにのこる梢もあるものを惜しむ紅葉のたへず散るらむ

山路落葉

ふかくのみ麓の道にたどるかな峯やあらはにもみぢ散るらむ

川落葉

川浪はしぐれもそひて流るらし濡れて色そふせゞのもみぢ葉

山家落葉

そめ〳〵し峯のもみぢの色々を嵐の庭に見する冬かな

峯の庵はたゆむ嵐の程ばかりよそにさそはぬ落葉をぞ見る

とひがほにしかぞ籬のもと近く分け來てそよぐ庭のもみぢ葉

○柴の煙　柴をたく煙。

○さゝまくら　草枕。旅寝。

○片しき　衣の片袖を下に敷いて獨寝をすること。

○もみぢつゝ散る　露や時雨で紅葉しながら散る。

○そめ〳〵し　露や時雨で紅葉を染めた。

○木がらし云々　木枯が吹いてもあとに殘る梢もあるのに。

○たへず　木梢に堪へられないで

○峯やあらはに　峯も露骨に顯はれて見えるやうに。

○せゞ　多くの瀬。

○たゆむ嵐の程ばかり　嵐の勢ひがゆるんだ時だけは。

すむ庵のやつれにたのむ陰ばかりはらはで殘せみねの木枯

庭落葉

いとゞしく誰かとひ來む冬のきて木の葉に深くうづむ我が宿

庵落葉

もて隱す庵のやつれのかたかげも思ひぐまなく散る木の葉かな

旅宿落葉

嵐吹く木の下陰にかりねして夢もまばらにちる紅葉かな

殘菊

秋をおきて菊は時ある色香かな人目かれぬる霜のまがきに

夏かけて咲きしためしか冬はまたふぢの色そふにはのしら菊

咲きそめしやどはかはらぬ白菊も冬にうつろふ色ぞまされる

長月の日數にも猶さきあまるまがきの菊の色ぞひさしき

夏山にひとり櫻の花ならで菊はあまたにそふあはれかな

朝霜

さす日にもきえせで結ぶ朝霜のひかりぞ寒き野べの玉ざゝ

夕霜

○庵のやつれに　庵の見すぼらしい様子につけても。○たのむ陰　立ち寄つて頼みにしてゐる木陰。古今集「わび人のわきて立ち寄る木のもとは頼むかげなく紅葉散りけり」○いとゞしく　冬が來て木の葉に埋むのでいよ〳〵ます〳〵。○思ひぐまなく　思ひやりなく。かたかげも隈なくと言ひ掛けた。

○秋をおきて云々　菊は秋の盛りの時はさしおいて其の後また盛りのある花である。古今集「秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされば」○目かれぬる　人の見るも遠ざかつた。籬の枯れをかけた。○冬にうつらふ　咲きそめた秋から冬に移る。冬になつて花の色あせ萎む色が見えるとかけた。○長月の日數云々　名も長月とい ふ長い間の日數に冬になつて咲いてゐる籬の菊。○夏山に云々　夏山にひとり咲き殘る花は哀れであるが、冬咲き殘る菊は多くの花の最後として多くに増して哀れである。

宿遠み猪名野さゝ原わけゆけば衣手さむくさやぐ夕霜

樵路霜

さえくれしきのふの眞柴こりずまに今朝しも深くいそぐ山人

枯野

見し秋の人目も草も霜がるゝうき世のさがの野べの寂しさ

木枯

夜もすがらきく木枯のはげしさは殘る楢もあらじとぞ思ふ

寒草

さびしさをおのが盛りのいろかにて霜の花さく野べの冬くさ

寒蘆

ほどちかき春とも見えず枯葉のみそよぐ難波のさとの蘆垣

冬山

冬くれば霞もきりも隔たらでいとゞ目にたつ峯の松がえ

冬庭

人目かは朝夕ならすあるじさへ疎くなりゆく冬枯の庭

冬鳥

○宿遠み　家が遠いので。
○猪名野　攝津河邊豐能兩郡。
○さやぐ　さや／＼音がする。そよぐ。
○さえくれし　寒くひえて日が暮れた。
○こりずま　懲りないで。柴を樵るにかけた。
○人目も草も云々　人目もかれ草も霜がれる。
○うき世のさが　うき世のならひ　地名嵯峨をかけた。
○殘る楢　木枯の吹き殘した楢、吹き漏らした楢に葉が散らずに殘つた楢をかけた。
○ほどちかき春　間もなく春になるのをいふ。垣の緣語。
○人目かは云々　うとくなりゆくのは人目ばかりだらうか他人ばかりではない。
○朝夕云々　朝夕馴れてゐる主人
○冬枯、人目のかれるにかけた。

朝霜のとくる垣根におりゐつゝしとゞなくなり冬の山ざと

冬　月

秋は猶もみぢするかと見し月の雪にまがひてさゆる冬かな

霜夜月冱

おく霜かいづれ身にしむ色ならむさゆるも同じ月の白妙

月前千鳥

月かげも清き川原の川風に妻こひまさる千鳥なくなり

川千鳥

あすか風寒きゆふべの川千鳥なれもみやこや戀ひてなくらむ

浦千鳥

いもが島あふ夜かたみの浦づたひ行きかへりつゝなく千鳥かな

湖千鳥

しがの浦やさゞ波遠く氷りゐてしば鳴く千鳥聲さわぐなり

島千鳥

浪路までしづけき國を祝島いはひて千世と鳴く千鳥かな

水　鳥

○しとゞ　鵐。小鳥の名。頬白の類の總稱。しめやかに濡れるさまのしとゞ〳〵を言ひ掛けた。

○いづれ　霜か月かいづれか。○月の白妙　月の白いこと、月の白い色。

○あすか風　飛鳥の邊を吹く風。萬葉集「たわやめの袖吹きかへす飛鳥風都を遠みいたづらに吹く」○なれも　汝も。千鳥に呼びかけていふ。○いもが島云々　妹島は紀伊海草郡加太の海濱形見浦の海にある。新勅撰集「風寒み夜の更けゆけば妹が島形見の浦に千鳥鳴くなり」○しがの浦云々　新古今集「滋賀の浦や遠ざかりゆく浪間より氷りていづる有明の月」○しば鳴く　頻りになく。○祝島　周防上の關の海上にある

行きかへり下にいとなきあしがもも長閑に見ゆる池の面かな

みなれてもあかぬ姿の池水に妻こふをしのさこそすむらめ

もろともにかはす心の深さをもかづきてや知る池の水鳥

おのがどちこゝろ〴〵のよる方にむれゐて遊ぶ池の水とり

炭竈

春をさはすみやくわざか面影にけぶりかすむる大原のやま

埋火

ふくるまで書見る窓に今ひとりうれしき友は夜はの埋火

ふくるまで打ち語らひて思ふどちよるこそよけれ埋火のもと

埋火のもとの寒さは忘れても又おどろかす竹の雪をれ

鷹狩

ふりかゝる雪の芝草ふみしだき鳥立(とだち)ゆるさずすゝむかり人

降りかゝる袖もはらはずあらたかのゆく方たどる雪の夕ぐれ

神楽

琴笛のしらべ妙なる神あそび神世にあそぶこゝちこそすれ

み山には霰ふる夜も雲のうへの庭火のあたり寒からなくに

○下にいとなき　水の下には足を動かして忙しく暇なき。
○あしがも　葦鴨。鴨の一名。
○みなれて　水に馴れるに見馴れをかけた。
○妻こふをし　妻をかたらひよる鴛鴦。

○すみやく　炭焼くに住みをかけた。
○大原　山城愛宕郡。

○今ひとり　友とする書の外に今一人。
○よる　思ふどちの寄るに夜をかけた。
○寒さは忘れて　埋火の暖かなので寒さは忘れても。

○鳥立　狩場で鳥が驚き飛び立つこと。
○あらたか　荒鷹。まだ人に馴れない鷹。
○神あそび　神楽。
○み山には云々　神楽歌、庭燎「み山には霰ふるらし外山なる眞拆の葛色づきにけり」(古今集)
○庭火　宮中御神楽の時に庭上にたく篝火。

よもすがら遊ぶ東(あづま)の琴の上にひかれてよらぬ神はあらじな

曉神樂

天の戸の明けがたちかくなるまゝにあか星歌ふ聲のさやけさ

たきそへてうたふ庭火のあたりには曉さむき霜もおかじな

日かげまつその山人の山かづらあかつきかけて遊ぶ御神樂

豐明節會

御酒給ふとよのあかりに冬のよものどかに遊ぶ雲の上人

少女子が舞のすがたもあかなくに豐のあかりにあくるふゆの夜

ゆたかなる御代の榮えもながき夜の豐のあかりの光にぞしる

霰

雲はらふ風に亂れて玉あられ月のひかりも降るかとぞ見る

初雪

まちえてはあはで日をふる人よりも雪めづらしき冬枯の庭

めづらしと誰か見ざらむふるまゝにやがて盛りのゆきの初花

朝雪

さえわびし夜のまのうさも思はめや雪にめ覺むる朝戸出の庭

○遊ぶ東の琴　彈奏する東琴。東琴は倭琴ともいひ神樂に用ゐる。舞樂の東遊をかけた。

○天の戸云々　天の岩屋戸の神樂の故事をかけて夜明けを天の戸の明けがたと言うた。

○あか星　神樂歌の明星（あかぼし）をいふ。「きゝり、千歳榮、白衆等聽説晨朝淸淨偈や明星はくはこなりやなにしかも今宵の月のたゞこゝにますや」

○うたふ庭火　神樂歌の庭燎を言ひ掛けた。

○豐明節會　新嘗祭の翌日天皇新穀を聞召し羣臣に賜はる饗宴。

○とよのあかり　酒を聞召して顏のあからむ義をかけた。

○少女子　五節の舞姫をいふ。

○あかなくに　飽かぬに。

○玉あられ　霰の美稱。

○まちえては　初雪を待ち得て降るに逢つては。

○日をふる　日を經るに降るをかけて雪の緣語。

ふりつみし夜のまの雪も下とけて朝日にそよぐ庭のむら竹

夕　雪

風たえて夕ぐれふかく降るまゝにまがきも山とうづむ雪かな

雪中會友

團居してめづるまに〳〵いや深く積りがほなる庭の白雪

思ふどちつどへるけふの庭の雪いやふりかくせ歸るさの道

言の葉もこと〴〵まぜず思ふどち面しろとのみめづる白雪

庭　雪

とはれては庭より外にをしむかな人の歸らむあとの白ゆき

山　雪

少女子が袖にかさねてふる山の寒けさいかに雪の白妙

海邊雪

みくま野の遠山しろくふる雪や浪に重なるうらの濱ゆふ

わたつみのこれやかざしの玉ならむ雪もてみがく淡路島山

馬上雪

花と見てなれもや雪にすゝむらむなづまぬ駒の足がらの關

○いやふり　いよ〳〵降つて。

○ごと〴〵　別の事。異事。面白さいふより外の言葉。

○みくま野　紀伊西牟婁郡熊野。

○浪に重なる　雪が白浪に重なつて濱木綿の花の白く重なつたやうだ。濱木綿は熊野浦に自生してゐる濱萬年青ともいふ植物。白い花瓣が重なり垂れて木綿四手のやうである。

○わたつみ　海神。古今集「わたつみのかざしにさせる白妙の浪もてゆへる淡路島山」

○なれも　汝も。駒にいふ。

○なづまぬ駒　踏み入り滯ることなく進む駒。足柄關を駒の足とつづけた。

ちる袖におもらぬ春の花ならば駒なづまめや雪の山みち

雪中鳥

おのがどちつもるみの毛を掃ひつゝ雪の洲崎に立てる白鷺

雪中待春

白雪のふりゆく身にも心だに若がへらばと春ぞまたるゝ

梅告春近

をり知れと昨日にけふは咲きそひて來る春近くにほふ梅が枝

花とちる雪ならねども中垣に春のとなりとつぐる梅が香

歳暮

おろかなる身は怠りを知りがほに暮れゆく年も何か惜しまむ

年といへば何惜しむらむ明けくるゝ月日思はで過しこし身の

花もみぢあかぬなげきに年くれて今日の今宵になりにけるかな

ひまわたる駒のはゆまの驛路に水かふ川もしらぬとしなみ

しはすとはうべもいひけりすぐらくの走るが如く思はゆる月

こぎよせて年の湊にはつる船あけなば春に朝びらきせむ

いせのあまた數そふ老をいかにせむ波は常世によせて歸れど

○駒なづまめや　雪だから駒が行きなやむが、花ならば駒が進みなやむことはあるまい。
○おのがどち　お互どうし。
○みの毛　鷺の頸に亂れ垂れた羽毛。
○白雪の云々　雪の降るに古りゆくをかけ頭の白髮を白雪に含めた。
○春のとなり　冬の終り方で春に接近してゐること。中垣と鄰と緣語。
○過しこし　過して來た。
○ひまわたる駒　時のたつのが早いのを駒に譬へた。
○はゆま　驛馬の通る宿場の路。
○水かふ　馬に水のませる。
○しはす　陰暦十二月歳はつの義といふ。馳す走すに通はせた。
○すぐらく　過ぐるの延音。
○はつる　船が碇泊する。
○朝びらき　船が朝漕ぎ出ること。
○いせのあまた　伊勢の蜑に數多をかけた。
○波は常世に云々　伊勢の海に波は永久不變に寄せて歸るけれども老の年なみの數がまさる。

○心にしるく　心にはつきりと。
○日なみ月なみ　日次月次。波にかけて早瀬川の縁語。
○月日こそ云々　月日ははかないものと思つた。其の上に年まで停まらずはかなく暮れた。
○跡もとめ　白鳥の飛んで行つた跡を求め、年の過ぎて行つた跡を求め。
○白鳥の關　紀伊海草郡。墓はむ方もしらじとかけた。
○わかの浦　紀伊海草郡。所の名和歌浦を若にかけた。
○來經　年月のる經過すること。
○鈍き　おそき。おぞき。にぶい。
○老隱すてふ花　老いてゐるのを見えなくする花、梅をいふ。古今集「鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるやと」

老の浪めにたつばかりこえぬ身も心にしるくよする年かな
老いぬればおろかさも添ふならひとて止らぬ年を猶をしむかな
早瀬川日なみ月なみおちあひてひとつにくるゝ年のくれかな
月日こそはかなき物と思ひしか年さへ遂にとまらざりけり
跡もとめ墓はむかたも白鳥の關路かひなき年の暮かな
わかの浦や身にそふ老のとし波は所の名にもよらぬなりけり
とゞまらぬ年の來經(きへ)のみなげくかなすわざ鈍(おそ)きわが心から
重ねこしわがおこたりも年月も歸らぬ物の數へられつゝ
年ふりていたゞく雪ぞいかゞせむ老隱すてふ花は咲けども
昨日けふあした夕と明けくれてつもれば經ぬる年の一とせ

歲暮祝

諸共にめぐると思へば行く年を惜しむなげきぞ嬉しかりける
成せる事なきはなげけど事なくてありふる年を祝はざらめや

除夜

年くれてこよひねぬよの現にも猶ぞおどろく春秋のゆめ

年内立春

春たてばまだふる年の内ながら外山隔てゝかすみ初めけり

ふるとしの日數も雪ものこれれど春たち初めてかすむ山の端

戀歌

初戀

さを鹿の音にこそ立てね初尾花いる野の袖に露ぞこぼるゝ

忍戀

いはでのみ忍ぶもくるし山吹の下葉にしげき露のみだれを

通書戀

よそにまた散りもぞするとゆくへさへ心にかゝる露の玉づさ

よそに又ふみやたがふとゆききにも心づかひのそふ戀路かな

苦しさもいつかは共に語らましふみのみかよふ戀の山道

祈戀

神だにもあはれとは見よ貴船川人のうきせにしづむ此の身を

祈久戀

祈りつゝ思ふあたりに住の江の神のしるしをまつぞ久しき

○のこれれど　殘つてゐるけれど

○いる野　山城乙訓郡入野。鹿が入る野をかけた。

○袖に露　尾花の風に飜るを袖にたとへた。

○いはでのみ　口に言はないではかり居て。

○散りもぞする　露の玉が散りもするか。玉章が他所に散り漏れもするかと。かゝるは露の緣語。

○ふみやたがふ　路を踏み違ふかと。手紙が他所へ違ひ行くかと。

○ふみのみかよふ　踏み通ふはかりに文ばかり通ふとかけた。

○貴船川　山城愛宕郡鞍馬村。貴船神社がある。

○うきせ　浮も瀬も川の緣語。憂き瀬、つらい苦しい折。

○住の江　攝津。住吉神社がある。住むことを祈る意にかけた。

祈りても神のい垣のいかなれば逢はでつれなく年のへぬらむ

少女子が袖のちぎりぞいつしかと祈るも久しふるの神がき

疑戀

淺からずいひよる人の筆の跡もすみつくまではいかゞ賴まむ

大船の思ひ賴めといひはいへど伊勢をの海人のうけがたの世や

待戀

吹く風はまつ宵すぎて萩がえに露おもりゆくみやぎ野の原

つゆおもる小萩が枝はつれなくていづこの野べに風の吹くらむ

深夜待戀

それをだにまつともいはでまつ山の心の奥にふくる月かげ

逢戀

須磨の海人の潮なれ衣まれにきて逢ひ見るよはも袖は濡れつゝ

別戀

大ぞらは又あふまでの何なれや別れがたみに詠めらるらむ

後朝戀

逢ひ見しは夢かうつゝかうつり香の袖にあやしき明けぐれの空

○い垣　忌垣。神社の垣。いかなれはの序。
○ふるの神　大和山邊郡山邊村布留に石上神社。袖振るとかけた緣語。
○すみつく　筆跡の墨がつくに住みつくをかけた。住みつくは夫婦の關係が定まり落付くをいふ。
○大船の　賴みの枕詞。
○伊勢をの海人　をは感歎の助詞一說魚の義から轉じて伊勢の海の漁をいふ。
○うけがたの　伊勢人は僞言すといふ諺から信認しがたいと言うた。
○露おもりゆく　萩を待つ身に譬へて涙の露が深くなりゆく。
○小萩が枝はつれなくて　小萩が枝は風を待つてゐるが、萩の枝には風が無情冷淡で。
○潮なれ衣　潮じみた衣。
○まれにきて　稀に來てに衣を著るをかけた。
○明けぐれ　夜明のうす暗いこと

逢不逢戀

逢ひ見しにかへぬ命のおこたりをせめては歎く中となりにき

かへもせで殘る命の悲しきは見はてぬ夢をしたふ年つき

をしからぬ命よ何にながらへて又も逢ひ見ぬ世をなげくらむ

被厭戀

厭はれておなじうき世に行きめぐる命さへこそつれなかりけれ

隔遠路戀

心さへいかゞとぞ思ふ山遠くへだてゝこふる中の契りは

互恨戀

眞葛原おなじうらみを打ちかへしこなたかなたにさわぐ秋風

うさは猶われやは君にまくず葉とうらみ爭ふ野べの秋かぜ

恨みては恨みざらめや我がせこが裾ふく風も野べのまくず葉

吹きむすぶ眞葛が原のあき風につらさおとらぬ露ぞみだるゝ

欲絶戀

枯れはてぬ露のちぎりも眞葛原下葉にかはる色ぞ見えゆく

寄月戀

逢ひ見しに云々　逢ひさへすれば死んでもと命を差出すまでしなかつた過失。古今集「命やは何ぞは露のあだ物を逢ふにしかへば惜しからなくに」
○何にながらへて　何のために命長らへて。
○命さへこそ云々　厭かれたら一層のこと死ねばよいに死なれず命までが情愛なくそ知らぬ顏である
○心さへ云々　身は山遠く隔ててゐるから心までも隔たるか知らぬと疑はれる。
○うらみ　恨み。葛葉の裏見なかけた。
○打ちかへし　くり返し。風に緣るをかけて葛葉の緣語。
○われやは云々　吾は君にまけようか決してまけぬ。君に負くをかけた。うらみは葛葉の緣語。
○吹きむすぶ　吹いて露を結ぶ秋風。
○枯れはてぬ　まだすつかり枯れてしまはぬ露。まだ全く絕えはてぬ契り。

枕だにしらぬ涙をたづねきてよな〳〵袖にやどる月影

いつのまに山の端いでて秋の月きみまつ袖にかげ宿るらむ

うらむべき人は雲居のよそにして更けゆく月をかこつ山の端

寄風戀

定まらぬ人のこゝろのうき草にいづこのさそふ風か吹くらむ

寄霞戀

かすめてもいつかは人にしらせまし春野の草のもゆる思ひを

寄雲戀

よそにだにあはれとも見よ晴間なき我かつらぎの峯の白雲

夕ぐれの空ぞ形見のながめさへたえ〴〵になる中のうき雲

天つ空はてなき雲をかたみにてまた逢ふこともながめわびつゝ

寄露戀

蓮葉に玉ゐる露のともすれば涙こぼるゝ戀もするかな

宮城野の木の下露も分けなくにひとりぬる夜の袖のあやしさ

寄雨戀

戀草も萌えこそまされつれ〴〵と身をしる庭の春のながめに

○枕だにしらぬ涙　古今集「わが戀は人知るらめや敷妙の枕のみこそ知らば知るらめ」

○もゆる　草の萌ゆるに思ひの燃ゆるをかけた。

○よそにだに云々　新古今集「よそにのみ見てややみなむ葛城や高間の山のみねの白雲」

○ながめ　眺めに逢ふ事も無しをかけた。

○露のともすれば云々　ともすると露がこぼれ落ちるやうに涙が落ちる。

○宮城野の云々　古今集「みさぶらひ御笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」

○身をしる云々　身の程を知る春の長雨（ながめ―眺めをかけた）。古今集「かず〳〵に思ひ思はずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる」

徒らに世にふる袖を春雨にひぢぬやとだに人のとへかし

來ぬ人のかごとばかりのよひの雨にかご解がましき我が涙かな

寄雪戀

積りけるうさもつらさも雪もよにとはばぞ解けむ中の通ひ路

とけやらぬ人の心を雪もよにわけきてまどふ中の通ひぢ

寄煙戀

身ひとつにくゆりぞわたる夕煙そらにたつ名も下の思ひも

寄山戀

つくば山わけみて後もさはりおほみ此面彼面に猶まどふかな

寄野戀

尋ねてもねも見ぬ草のゆかりとて袖にはてなき武藏野の露

寄沼戀

かつみても契り淺香の沼水に袖こそぬるれあはぬこひぢに

寄川戀

ありとのみ聞きてはるけき陸奥のあふくま川をいつか渡らむ

寄浦戀

○世にふる袖　經るに振るをかけ降るを含めて春雨の緣語。
○ひぢぬやと云々　せめて春雨に濡れたのかとでも尋ねてくれよ。
○かごとばかり　かこつけごとだけの一寸ばかりの春雨。
○かごとがましき　雨にかこつけたやうな愚痴らしい涙。
○雪もよ　雪。一說雪の夜、また雪を催ほすこと。
○くゆりぞわたる云々　ふすぼりつゞける。たつ名のたつは煙の緣語。思ひに火を言ひ掛け煙の緣語。
○さはりおほみ　障りが多いので
○此面彼面　古今集「筑波根のこのもかのもに陰はあれど君がみかげにますかげはなし」
○ねも見ぬ　根も見えない。寢ても見ない。
○草のゆかり　古今集「紫の一本故に武藏野の草は皆がら哀れとぞ見る」によつていふ。拾遺集「紫の色には咲くな武藏野の草のゆかりと人もこそ知れ」
○かつみても　つい一寸見ても。かつ〳〵に一寸逢つても。安積沼のかつみ(眞菰の類)をかけた。古今集「陸奥の安積の沼の花かつみかつ見る人に戀ひやわたらむ」
○契り淺香　契りの淺いをかけた
○こひぢ　戀路に泥(こひぢ)を言ひ掛けた。
○あふくま川　阿武隈川。逢ふをかけた。

○蘆わかの浦　紀伊和歌浦。浦に恨みをかけた。
○うきふし　憂きかど。浮き節で蘆の縁語。
○うど濱　駿河國有度濱。疎を言ひ掛けた。
○忘るゝかひ　忘れる詮に忘貝をかけた。

○阿波の島　逢はぬをかけた。阿波島淡島粟島など諸國に多くある何處と限らず。

○かすが野　大和添上郡。
○はつかに　ほのかた。かすかに。
○あだの大野　大和宇智郡阿陀。露のはかないあだと戀のうはきなあだことをかけた。
○花のえ　花の枝。
○かざしの草の名　賀茂の葵祭にかざす葵を逢ふ日に言ひ掛けた。

○いはで　岩出(紀伊)磐出(攝津)岩手(陸中)など多くある地名。言はないでの意をかけた。新勅撰集「見ぬ人にいかゞ語らむくちなしのいはでの里の山吹の花」

蘆わかのうらみも果てぬうきふしに波のみ袖を越ゆる年月

寄濱戀

われをかく忘るゝかひはうど濱にいでてや人の拾ひ初めけむ

寄島戀

逢ひ見ても阿波の島山かけてのみ同じ浪路をこひわたるかな

寄草戀

忘草繁りやするとをりをりはつみても人をおどろかさばや
かすが野の雪間はつかに見てしより我が戀草のもえまさりつゝ
おきそめてあだの大野の花のえに思ひみだるゝ秋草のつゆ

寄葵戀

もろ人のけふのかざしの草の名をかけてぞ祈る賀茂の神垣

寄山吹戀

袖ぬるゝ下のなげきをかくとしもいはでぞこふる山吹の露

寄梅戀

影見てもをられぬ水に袖ぬれてよそにや戀ひむ春の梅が枝

寄瞿麥戀

はらふべき風のたよりも吹きたえて起き臥しなげくとこなつの露

寄鳥戀

うらやまし榎の實もりはむ千鳥さへ妹があたりの梢と思へば

寄鶯戀

頼まれぬ人の心の花の枝に身をうぐひすの音こそなかるれ

寄鴈戀

たが誠又よるかたもなく〳〵ぞうきをたのむの秋の鴈がね

寄鴉戀

露こそは鴉の牀もしげからめ塵さへつもる歎きやはせむ

寄水鳥戀

あだ浪はたつとも何かをし鳥のたぐひよるべき山川もがな

寄獸戀

逢坂もしらぬ戀路になづむかな目のみ涙にきり原の駒

寄蟲戀

もえあかしなきくらさるゝ戀すれば螢も蟬もうとからぬかな

ひるよなき袖の契りも蜑のかる藻にすむ蟲の名にやかこたむ

○とこなつ　起臥の牀を常夏にかけた。

○身をうぐひす　うぐひすに憂をかけた。

○なく〳〵云々　よる方の無くに泣く〳〵頼むとかけた。たのむは頼むに田の面をかけた。

○鴉の牀　鴉の臥す處。

○塵さへつもる　牀に塵が積ることは男女の間の遠ざかり打解けて寝ることのないのにいふ。

○何かをし鳥　何か惜しからんと鴛鴦とかけた。

○目のみ云々　目ばかりは涙に遮られるを桐原たかけた。桐原は信濃東筑摩郡。拾遺集「逢坂の關の岩角ふみならし山たちいづる桐原の駒」

○もえあかし云々　悶えに心が燃え泣いて明かし暮す。

○螢も蟬云々　螢の燃えるも蟬の鳴くも他人ならぬ氣持がする。

○藻にすむ蟲　古今集「蜑の刈る藻にすむ蟲のわれからと音をこそなかめ世をば恨みじ」

いたづらに思ひなき世に夏蟲も我がごと惜しき身をや捨つべき

寄蝶戀

色かはる人のこゝろの花園をなにゝこてふのむつれ初めけむ

寄螢戀

あけたてばもゆる螢もきゆてふを夜ひるとなき我が思ひかな
うきふしをいはでこがるゝ我やさは蘆間に繁く燃ゆる夏蟲

寄松蟲戀

大かたも秋づく露の庭草に君まつむしの聲ぞかなしき
こぬ人をうらむる露の淺ぢふにみだれてきほふ松むしの聲

寄傀儡戀

むすびても夜毎にかはる草枕ちぎりはかなき青墓のさと
かさねては來もせぬ旅の衣手を一夜のつまと賴むはかたさ
契りとて見るもはかなしかゞみ山やどかる人のこゝろ〳〵を

寄涙戀

涙川ながれをくみて物思ふ我がみなかみをとふ人もがな
月日へて契りあせぬる袖のうへになみだの色ぞ深くなりゆく

○我がごと　我の如くに。

○あけたては　明けてしまふと。
○螢も云々　螢の火も消えるといふのに夜晝といふ區別ない思ひ。思ひに火を言ひ掛けた。
○我やさは云々　我はそれでは螢であらうか。

○秋づく　秋の時候になる。
○君まつむし　君を待つと松蟲とを言ひ掛けた。

○傀儡　くゞつ。うかれめ。古昔海道の宿驛に居こ人形舞はしをし歌舞をした遊女。
○むすびても　草枕を結ぶに契りを結ぶをかけた。
○青墓　美濃國不破郡。古代の宿驛で遊女が居た處。
○一夜のつま　一夜の夫。つまは衣の褄にかけて衣手と緣語。
○かゞみ山　近江蒲生郡鏡山。麓に古昔鏡の宿があつた。

○契りあせぬる　契りがうすらいだ。

寄鏡戀

かねてよりうつりうつらずますます鏡人の心を見るよしもがな

見ればまづ涙にくもるます鏡かげとなる身をかげも恥かし

寄枕戀

袖のうへに涙せきあへぬ悲しさも枕は知るや曉のとこ

一夜ねしまゝの小菅のすが枕かはさで長き音をのみぞなく

寄牀戀

今更に荒れにし牀のうらなみは身さへ流るゝかひやなからむ

寄衣戀

いろ〳〵に思ひみだれてときぎぬのきもせぬ人を戀ふる頃かな

來ても猶夜深く急ぐ秋風にかへるころものうらみられつゝ

みるめのみかるとはすれどあま衣逢ふことなみに袖ぞ濡れける

寄絲戀

何にかく賤が手引のいとはれてくるしき戀にかゝり初めけむ

寄舟戀

世をうみの沖にたゆたふ大船もはつるとまりはありてふものを

○ますず鏡　眞澄鏡。澄みわたつた明鏡。

○まゝの小菅のすが枕　まゝは相模足柄郡地下。萬葉集「あしがりのまゝの小菅のすが枕あせかまかさむころせたまくら」

○ときぎぬ　解きほごした衣。

○きもせぬ人　來もせぬ人。來を著にかけて衣の縁語。

○ころものうらみ　恨みに裏見をかけた。

○みるめのみかる　海松をはかり刈るとするけれど。見るめをかけた。

○逢ふことなみに　逢ふことのないによつて。なみに波に袖ぬれるをかけた。

○手引のいとはれて　手で引き出して繰つた絲。厭はれにかけた。

○かゝり　絲の縁語。

○世をうみ　世を憂み。世が憂くつらくあるに、海をかけた。

○たゆたふ　搖ぎ漂ふ。

○はつるとまり　碇泊する港。

○ありてふものを　あるといふのに。

○かすめても　霞ませても。ほのめかしても。
○しらせてしがな　知らせたいものである。
○みなつきぬべき　皆盡きぬべき水無月をかけた。
○瀨絶え　流れる瀨の水が絶えること。
○果ても浪　涙に無しをかけた。
○草のね　草の根のに音を泣くをかけた。
○あを雲　空の青いのを雲と見て蒼空をいふ。

蜑小舟はつる泊りをいつとしも知らで世をのみうみ渡るらむ

春戀

かすめてもしらせてしがな曇り日の影とは人にそふもかひなし

夏戀

川も池もみなつきぬべき夏の日に乾かぬ袖やつらき誰が故

秋戀

色ことになりやしなむと思ふより靡く淺ぢの露ぞこぼるゝ

冬戀

おのづからとゞこほり行く冬川の下の瀨絶えをいかゞとぞ思ふ

題しらず

我が戀はゆくへも果ても浪の上にうきたる草のねをのみぞなく

雜歌

天

いつよりかたなびきそめし色ならむかはる世知らぬ空のあを雲

日

日の光てらさざらめや天地のありのかぎりの有らむ限りは

月

月たちて來經る日數もみちかけの空にしらるゝよな／＼の影

星

天とあふぐわが大王の御齡によみとらまくも星のありかず

雨　春

淺みどり雨ふるごとに色ぞそふ春の野山にもゆる木くさも

雲　夏

立ちまさるものこそなけれふらばとて涼しさねがふ峯の雨雲

風　秋

かぎりあればうすき袂に吹きよりて秋たち初むる風ぞうれしき

雪　冬

冬がれの梢花さくしら雪はふりぬるもののめづらしきかな

風　雜

海山のなみと雲とのたちも居も空ふく風のこゝろなりけり

山

○みちかけ　月が滿ちたり缺けたりすること。

○よみとらまくも星　數へ取りたい。まくはむの延音。星に欲しをかけた。

○ありかず　物のある數。世にながらへる齡の數。

○ふりぬる　舊りぬるに降りぬるをかけた。

○海山の云々　海の波と山の雲とが立つたり低くなつたりするのも

○宮人　宮仕人。

○過所　くわしよ。くわそ。關所通行の手形。

○えや行かざらむ　行くことが出來ないだらう。

○足曳の　山の枕詞。

○眞木の大木　杉檜などの大木。

○杣川　山で樵り出した材木を流し運ぶ川。

○いけしあれば　池があると。しは强め辭。

○まかする　水を引く。心に任する意をかけた。

○すみやすげ　水がたやすく澄みさうな。住みやすい意をかけた。

神の代にまきし木種の御いさをも高く貴くあふぐたかやま

野

鷹はなち犬はしらせて宮人もかりにぞいづる野への草むら

關

過所(くわそ)なしにこゆる人なき關路こそ道ある御代の守りなりけれ

橋

渡り瀬に橋てふ物の懸らずばかはとのみ見てえや行かざらむ

道

足曳の山の奥にも分けいれば猶ゆきかよふ道はありけり

川

奥山の眞木の大木も杣川にうかべて安くくだすいかだし

池

いけしあれば水は心のひく方にまかする小田の頼もしきかな

井

濁りてもすみやすげなる山の井に汲む人さへぞ羨まれける

海

花紅葉をりこそしらね海原もしほひ潮みち時はありけり

湖

君が代にあふみの海を見渡せば八十の湊に船ぞいでいる

磯

一筋によき道しらぬ磯のへちいはほに波のよるも恐ろし

海村

あし火たく星の林をしるべにてわが住むかたとこぎ歸る舟

漁舟

わたの原つゞく雲居にこぎ出づるこや久かたのあまのつり舟

わたの原浪の花さくうら風に木の葉もうかぶあまの釣舟

秋田

しづの男がうきにぬれける衣手も嬉しき色にいづる秋の田

秋ふかく露にぬれける袖も今かひありがほの小田の賤のを

山家

木がくれて山下水のありとしも知られぬ宿ぞ住みよかるべき

おもしろき水のながれを軒端にてすむ人いかに心ゆくらむ

○あふみの海　淡海の湖。近江の湖。琵琶湖。
○八十の湊　多くの湊。萬葉集「磯のさき漕ぎたみゆけば近江の海八十の湊にたづさはになく」
○磯のへち　磯邊。磯のほとり。
○よき道　他によける道。避路。
○あし火たく云々　葦を焚いてゐる火が星の羣つてゐるやうに見えるのを案内として。
○わたの原　海原。
○こや云々　これは天の釣舟であらうか。雲居に漕ぐから天の釣舟とかけた。あまは海人に天をかけた。久方は天の枕詞。
○うきにぬれける　うきは泥。泥に濡れて憂き思ひをしたが。
○木がくれ　木の陰にかくれて。
○山下水　山の下に流れる水。古今集「足引の山下水の木がくれてたぎつ心をせきぞかねつる」山下水のはありとも知られぬの序。
○軒端にて　軒端にして。流れを軒端に流して。
○すむ人　住む人。澄むは水の緣語。

すみなれてくむ山の井も淺からぬ契りとやしる庵のあけくれ

古宅

軒ちかき楢の鳥のからころも物おそろしく荒るゝやどかな

都

彌照の神の御代より千世をへて光そひゆく玉しきの宮

禁中

御簾にふく風のゆききもこま犬のまもりかしこき九重の内

松

花もさき紅葉もせねど松がえの綠はとはに珍らしきかな

庭松

ふかみどり植ゑそめしより幾しほの春かへぬらむ庭の松がえ

栽松爲友

島このみつくれる庭に松を植ゑて心にかなふともとこそ見れ

尾津崎松

劔太刀かけてぞ千代に聞えける尾津のさきある松の言の葉

綠竹年久

○からころ　からびた聲。

○玉しきの宮　玉を敷いた如きうつくしい宮殿。

○こま犬　清涼殿玉座の御帳の前に獅子と相對して威儀の飾りをかねて魔障を退ける爲におかれた獸像。

○とはに　永久に。

○幾しほ　色に浸して染めたことの度數か。伊勢集「浪にのみひたれる松の深綠幾入とかは知るべかるらむ」

○島このみ　築山泉水などのある庭を好んで。

○劔太刀云々　日本武尊が伊勢尾津崎で詠み給うたといふ日本書紀にある「尾張にたゞに向へる尾津の前なる一つ松あせを」の御歌による。

かげひろくなびく綠の吳竹にこもれる千世の末ぞはるけき

里竹

うきふしも嬉しき節もまじりけりこや世のさがの里の竹村

絡石

岩がねに千世をかけたる蔦かづらくる春每に若がへりつゝ

弓

梓弓ひきもひかずも物部のみちのもとする忘れざらなむ

はじ弓の神代のためし今の代に引きてゆるべぬ國ぞかしこき

劍

太刀の緖は解きおくとてもますらをの心は常に弛べざらなむ

たけき身にたけき守りとはきそへて太刀のをゝしく見ゆる物部

琴

ひく琴の聲はだみても聞えぬを誰かあづまと名づけ初めけむ

松風入琴

端居してかきなす軒のつま琴に通ふもちかき庭のまつ風

琴の歌想夫戀のこゝろにて

○こや世の云々　これは世のならひであるか。さが(ならひ)に地名の嵯峨(山城葛野郡)をかけた。

○梓弓　梓の木で作つた丸木弓。

○物部云々　武士道の本末。物部は上古大伴氏が統率した部屬、ものゝふ。本末は弓の緣語。

○はじ弓　櫨の木で作つた弓。

○神代のためし　天照大神の御使として葦原中つ國に來た雉の名鳴女を天若日子が天の波士弓天の加久矢で射て神罰で天若日子が其の矢で死んだといふ雉の頓使の神話

○太刀のをゝしく　太刀の緖をかけた。

○だみて云々　音聲が濁り訛つて聞えるわけでもないのにどうして東琴と名をつけたか、東は邊鄙な田舍で東訛がある筈だが。

○かきなす　かきならす。

○つま琴　妻琴。爪琴。琴の一名。軒のつまと言ひ掛けた。

思ひいでて戀しき時は婦人(たをやめ)のわがつま琴をかきやひくらむ

鶏尾

ひくこゑもみそらに高く聞ゆべし神のたからの鶏の尾の琴

琵琶

月ごとの調べもひきぞしるらむ四つの時しる四つの緒の琴

琵琶の袋によみてかける歌

四つの緒のしらべさやかに現はれて隠るゝ月も光そふらし

笛

横笛はことゞゝしくも見えずして澄みのぼる音ぞ高く妙なる

澄みのぼる笛の調べの妙なるにこともののねもやめて聞かばや

笙

桐にすむ鳥の名におふ笛の音は琴のねにこそよく通ふらめ

玉

美はしき物のたとひに玉といへば玉にはまたも何をたとへむ

鏡

くもりなき鏡のうらにすむ鶴や君が千年をかねて見るらむ

〇わがつま琴　わがつま（夫）を妻琴に言ひ掛けた。
〇鶏尾　とびのを琴。和琴の一種。其の頭が上りへ曲り出て鳥の尾の形をした琴。
〇月ごと　毎月。琵琶には月がある。
〇四つの時　月ごとに對して四季
〇四つの緒の琴　琵琶。
〇隠るゝ月　琵琶の表に二つ半月があるのでいふ。
〇桐にすむ鳥の名におふ笛　鳳笛古代支那に蕭史といふ人が簫を吹いて鳳凰の鳴聲をなしたといふので簫を鳳笛といふのであらう。一説に鳳笛は横笛。
〇琴の音云々　琴は桐材で作るから云つた。
〇鏡のうらに云々　鏡の浦は肥前松浦郡であらう。安房にもある。昔の鏡の裏に鶴龜などを彫つてある故に鏡浦をかけた。
〇あふぎ　逢ふに扇をかけた。

扇

四方の海浪も木末ものどかなる御世にあふぎの風ぞ涼しき

神國は紙もよろしとから人のやまとあふぎに傳へてやしる

杖

杖のみぞつき〴〵しくはなりにける本くだち行く老のさか道

燈

ともしびの影にむかふもまばゆしな書見ても猶くらき心は

書

漢(から)やまとかしこき百の道々もふみ見てぞ知る跡のまに〳〵

遠つ國しらぬさかひの言の葉もふみ見る道に行きかよひけり

筆

とる人のちからぞ筆にあらはるゝふみかく道のこれや玉鉾

ふみでには狸兎もゆふといへどかせぎの毛にはえしも勝らじ

わが毛らは筆のはやしと古の歌にも鹿のしかいひきてふ

硯

すゞりの海墨の色こそ深けれどわがかく筆の色淺くして

○紙もよろし　紙を神に通はせた
○やまとあふぎ　日本の扇。扇に仰ぎをかけた。

○つき〴〵しく　似つかはしく。杖をつくにかけた。
○本くだちゆく　年老いて次第に衰へゆく。くだつは傾く。
○老のさか道　老の坂と坂道とをかけた。老の坂は老いて年の積み上るにいふが、くだつ坂とかけた。
○まばゆしな　恥かしくて目をそはめられることだよ。
○くらき　燈の明るいになほ暗愚な。

○玉鉾　玉で飾った鉾。

○ふみで　筆。
○狸兎　狸兎の毛を筆にする。
○かせぎ　鹿。
○しかいひきてふ　さう言つたといふ。

ふづくゑの寶とぞ見る朝夕にならす硯の石もかはらも
浪たたぬ御代のめぐみも文學ぶすゞりの海に夜ひるぞ知る
墨筆のかみにそめおく跡までもくちぬ硯のいさをとぞ思ふ

鷹

手にすゑてたかき人にもめでらるゝくちをしからぬ鳥は此の鳥

百舌鳥

神無月はじのもみぢ葉散り果ててあらはになりぬもずの草ぐき
冬ごもる蟲のすみかや尋ぬらむあさる枯野のもずの草ぐき

虎

なづけなばあたみ荒ぶることもあらじとらへて宿に飼ひ見てしがな

鼠

さきはひを導くものととめる家にぎはふ方にたづねすみけり

鯉

底ひなき淵にいこひてすむ鯉も岩ばしるせば走るとぞ聞く

逢友述志

ゆたかなる御代の榮えにあふ友も語らふことは同じうれしさ

〇ふづくゑ　文机。
〇硯の石もかはらも　石の硯も瓦の硯も。
〇たかき人　貴い人。鷹を言ひ掛けた。
〇もずの草ぐき　百舌鳥が草の間にもぐりこむこと。
〇あさる　餌など捜し求める。
〇あたみ荒ぶる　敵對し荒ぶる。
〇とらへて　捕へに虎をかけた。
〇さきはひ　幸。
〇たづねすみ　尋ね住みにねずみをかけた。
〇底ひなき　極まる所ない。限りない。極めて深い。
〇岩ばしる　瀧の枕詞。こゝは原の意の岩の上に瀧などの走り落ちるをいふ。

思ふどち思ふこゝろを述べいでて玉の緒さへもゆるぶけふかな

述懐

世の中をかこつなみだも果てはまた我が身のうきにおつる袖かな

ちりひぢのつもる思ひよ天雲のたなびく山といづれ高けむ

懐旧

いろ深くうつす昔の世がたりを見れば我が身にしむあはれかな

寐覺して夜深きまどに書見ればむかしの人も身を歎きけり

夢

思ふこと見るはうべなりあやしくも思はぬ事もみゆる夢かな

はかなくて覺めざらましを夜半の夢現に通ふたゞぢなりせば

曉更寐覺

わかがへる夢路ばかりは昔にて寐覺かなしきあかつきの牀

むかしへに見えし夢路も曉のねざめは老にかへる手枕

秋旅

なげくらむ故郷びとのおもかげも霧にたちそふ秋の海づら

朝たちて分け行く袖もほしあへずすがるなく野の秋萩のつゆ

○玉の緒云々　命までもゆるやかになる。

○ちりひぢ　塵泥。ちりあくた。取るに足らぬつまらぬものの意をかけた。古今集「高き山も麓のちりひぢよりなりて」

○天雲のたなびく山云々　塵ひぢが積つて高い山になるが、自分の塵ひぢの思ひと高い山とどちらが高いか。

○思ふこと云々　思ふ事を夢に見るのは當然である。思はない事を見るのはいかにも奇妙不思議だ。

○覺めざらましを　覺めないで居てほしいものだに。

○たゞぢ　直路。まつすぐな路。

○夢路ばかりは昔にて　夢だけは昔の若い時の事を夢に見るけれど

○むかしへ云々　昔の若い時の事と見られた夢。

○なげくらむ故郷人　故郷の人が歎いて心配して居るだらうその面影。

○すがるなく野云々　すがるは鹿の異名。古今集「すがる鳴く秋の萩原朝立ちて旅ゆく人をいつとか待たむ」

冬旅

分けなづむ木の葉もふかくなりにけりいる足がらの關の八重山

ゆくへかはわくる野山の姿さへしらぬ旅路にまどふ雪かな

旅泊

ふるさとの夢はくだけて梶まくらうきねにかへる波の音かな

いそなれてまどろむ夢もあはれなり重なるよはの浪の枕に

神祇

五十鈴川八百萬代の君が世をいやとほながに守るみづがき

玉垣の宮の御代よりすみそめて濁りまじらぬいすゞ川水

八雲たつ出雲の素我（すが）の宮ばしら神代ながらに朽ちぬよろづ代

石（いそ）の上（かみ）布留のやしろに千年ふるその神垣ぞ神さびにける

天の下たひらの宮をよろづ代にまもるもひさし賀茂の瑞垣

水（み）くまりの神の惠みのいちじるく御調にぎはふ豐あきつしま

稲荷山詣づる民のねぎごとをさぞうけもちの神はしるらむ

國かゝす神の守りと國しらす君の御いつもいやかゞやかむ

大御神もとめ來まして御心をなぐさの濱の宮居たふとし

○ゆくへかは　旅路に迷ふのは前途はかりであらうか、旅路の雪に迷ふ。
○梶まくら　船の旅。船の中に寢ること。
○うきね　浮寢。船の中に寢ること。夢から覺めて現の憂さにかへる意をかけた。かへるは波の縁語。
○五十鈴川　御裳濯川。伊勢神宮の南を流る。
○玉垣の宮　纏向珠城宮、古事記に玉垣と書く。垂仁天皇の皇居。
○八雲たつ　出雲の枕詞。
○素我の宮　出雲大原郡須我山。須佐之男命出雲に御出でになつて御心地すが〳〵しと仰せられ、宮を造營し給ひ八雲たつ出雲八重垣の歌を詠じ給うた處。
○石の上　布留の枕詞。布留は大和山邊郡山邊村布留にある石上神宮。
○たひらの宮　平安宮。天下太平の意をかけた。
○賀茂の瑞垣　賀茂神社の瑞垣。
○水くまりの神　山から流れ出る水の分れる所の神。水配りの神。
○うけもちの神　保食神。穀物を掌る神。
○ねぎごと　祈願。
○なぐさの濱の宮居　紀伊海草郡名草濱宮は崇神天皇の時天照大神を齋き奉られた所。

言葉道といふ題をまうけて

八雲たつ出雲の神のわけそめて今もさかゆく言のはのみち

八重垣の神代人の世へだてなくいや榮えゆく言のはの道

ちりうせぬ言葉の道のしるしとて神のうゑけむ住のえの松

言の葉の道しも神の道なればみがけとまもる玉津しまやま

言の葉の榮えを御代の光とは玉津島ねの神やしるらむ

玉鉾の中とる神にいのりなばみがく言葉のみちも守らむ

神世より直きこゝろを種として今もかはらぬ言の葉のみち

しらぬ世の人の心も見るまゝに思ひやらるゝ言の葉のみち

寄道祝

民草も心ゆきてぞなびくらむかへりみふかき君が代のみち

末遠くなほふみわけよきしかたの跡をたづぬるふるの中道

秋祝

四方の海にあまる惠みも年ありてなびく田の面の穗浪にぞしる

寄田祝

伊勢の海や穗波もよせて千世の秋御調にぎはふ阿濃の湊川

○言葉道　和歌の道。

○みがけとまもる　言の葉の道歌道をみがけよとて玉津島の神が守られる。玉津島は紀伊海草郡。

○こゝろを種云々　古今集序「やまと歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」

○きしかたの跡　過ぎ去つた跡。

○ふるの中道　大和山邊郡石上布留の中を通ずる道。

○年ありて　五穀特に稲がよく實つて。

○穗浪　穗が出てあらはれること波と海と縁語。

○阿濃　伊勢阿濃津、今の津市。

萬民祝

安御代と野山の末の民草もつゆみだれなき風ののどけさ

寄巖祝

さゞれ石のなれる巖の苔のうへに松さへ生ひて花のさくまで

寄松祝

みどりかは千年の霜の後にさく花もまち見よ春の松が枝

伴松榮久

千代遠く松をしるべと伴ひて老の坂ゆく道はたどらじ

竹契齡

吳竹のさえだの露も末遠き千代のかずとやちぎりおくらむ

多年翫梅

春毎にをりてをかざせ千代までも老かくるべき梅の花笠

鶴遐年友

ともとみる人も千年や重ねましみぎりに馴るゝつるの毛衣

寄龜祝

そこひなき淵に隱れてすむ龜の長き齡ぞ限りしられぬ

○さゞれ石　細石。小石。

○をりてをかざせ　折りてかざせ　をとは感歎の意。

○老かくる云々　老が隱れるべき梅の花笠。古今集「鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるやと」

○そこひなき淵　限りない深い淵

寄鯉祝

淵のうちにいやとし深く住む鯉の底ひもしらぬ齢とぞ思ふ

寄藤祝

まつにさく千年の春の花なれやさかり久しきやどの藤なみ

菊契千秋

手をりきて君が千年のかざしにと契る心は菊ぞしるらむ

春松契齢

ちよをへてしる人やしる松の花さく十かへりの春の色香も

專修寺宮五十御賀寄竹祝

御園生の竹はたが杖君が杖よろづ代つかむきみが御杖ぞ

村田橋彦母九十賀寄竹祝

雪のうちの竹の子の道跡とめて願ふ八千代は空しからめや

七里長行五十賀に庭に小松五百本うゑたるに

五百本の松を砌にうつし植ゑて庵のあるじも五百代經まさむ

藤堂南陽軒翁七十賀に羣鶴亭といふ名によせて

かさねきて千年々々や宿の名にむれつゝゆづる鶴の毛衣

○藤なみ　藤の花が風に靡いてゐるのを云ふ。

○松の花云々　本朝文粹、後江相公「德是北辰。椿葉之影再改。尊獨南面。松花之色十廻。」

○專修寺　眞宗高田派の本山、伊勢河藝郡一身田にある。

○村田橋彦　伊勢の人。鈴屋門人。

○雪のうち云々　二十四孝の一人孟宗が雪中に筍を得た故事。三國志呉志「左臺御史孟宗有二孝道一。母性嗜レ筍。及二母亡一冬節宗入レ林哀泣。而筍生。得三以供二祭祀一。」

田中大秀が父七十賀に位山によせて

みな人のこれぞうらやむ位山いやすゝみゆけ高き齡に

同じ人父は七十母は六十なるよしいひてこへるに

父母の玉の緒琴を七つ緒のやつ緒のながきためしにはひけ

松平康定君の五十賀に春祝といふ題にて

春ふかく君をたのむにたつ民もかへす〴〵や千代祝ふらむ

加藤千蔭翁七十賀武藏國石濱の名によせて

としなみはよせかへるとも石濱の常磐かきはに君は老いせじ

藤波の里堀田氏六十賀

いく千度かはらぬ春に立ちかへり盛り見すらむ藤波の花

或人の賀に山田原の郭公によせてとこへるに

千代ふべき山田の原の杉むらに聲はふりせぬほとゝぎすかな

又ある人高倉山によせてとこへるに

秋ごとに水穗の稻をつむとしの限りもあらじ高倉のやま

伊豆國菊地袖子が祖父八十賀に、田方森

たがはじな田方の森の松の枝ともに千年をいはふこと葉は

○田中大秀　本居宣長の門人。飛驒の人。弘化四年歿、年七十二。○位山　飛驒。宮峠の西、川上嶽の東に聳えてゐる。

○玉の緒琴　玉の緒は命をいふ。玉の小琴とかけた。

○七つ緒　七つの緒、數多の緒。

○やつ緒　七つ緒につゞけて數多の緒の意に古代の八つ緒の琴即ち八絃の琴をかけた。東遊歌「七つをのやつをの琴を調べたる」七つをのやつをのは長きの序とした。

○たのむ　田の面。賴むにかけた。田の面にたつ民は農民。

○石濱　江戶淺草寺の北今戶橋場一帶の地。

○としなみ　年次に波を言ひ掛けた。

○常磐かきは　常磐堅磐。永久不變。

○山田の原　伊勢度會郡外宮の附近新古今集「きかずともこゝをせにせむ郭公山田の原の杉の村立」

○高倉山　高坐山。伊勢外宮の東南。

○水穗　瑞穗。瑞々しい穗。

○田方森　所在不詳、田方郡は伊豆。伊豆の歌枕としての森は田方郡こゞひの森がある。田方の森はこれをいふか。

安永五年春大平が祖父善敎翁八十賀に

八十をも猶や若菜と祝はまし千年つむべき君がよはひは

安永二年山路孝正が父七十賀に

千代遠くにほふ山路のさくら花くる春ごとに君ぞみるべき

渡邊中庸が五十賀、竹遐年友

さす竹のたけき心の友として千代たわみなく君につかへよ

森光保父七十賀、寄竹祝

うちはへて色もかはらぬ吳竹にちひろと契れ老の玉の緒

鈴谷末壽主の母刀自七十賀、寄鶴祝

子を思ふ鶴のよはひを例にてなほいく千代もさはに年へよ

或人の賀の屛風の繪磯山の巖に千鳥ある所

山陰やいその岩根にうちそへて夕浪千鳥千代よばふなり

又或人の賀に雲雀のとびたる所ある繪に

雲雀あがる春のみ空の長閑けくて經なむ齡もいや高くこそ

堺の赤尾氏六十賀、寄菊祝

見る人の千とせをかけて住の江に咲く白菊や老わすれ草

○千年つむべき　千年を積み重ねるべき。若菜を摘むにかけた。

○さす竹の　君の枕詞。また芽ざし出る竹の意を言ひ掛けた。

○うちはへて　長々と限りもなく

○夕浪千鳥　夕方たつ波のあたりに居る千鳥。

○よばふ　呼ぶの延。

○長閑けくて　平穩に經る齡に空の長閑なのをかけた。

○いや高く　雲雀の高くあがるに齡の高いのをかけた。

○老わすれ草　住の江に忘草が生えるといふが、咲いてゐる白菊は老を忘れ草であらう。古今集「道知らば摘みにもゆかむ住の江の岸におふてふ戀忘れぐさ」

田丸城代久野何がし八十賀、松契千秋

千代の秋さかえぞゆかむ末遠き湯田野の原の松をためしに

藤堂何がし殿賀に、鶴全千年壽

いせの海清きなぎさにすむ鶴の千代のよはひは君ぞ數へむ

植村何がし殿六十賀

君にこそかけていははめ敷島や青垣山にこむる千年は

羽倉翁 従四位下荷田信美宿禰 七十賀、歡遊不限年

限りなく世にあらむこそ限りなき身のよろこびと君はしるらめ

小田郁子祖母 大内山秋の宮びと亀井の君といふ人 八十賀

小松にも又も小松の生ひそひてさかゆくいははは幾八千代ぞも

度會宮の神樂人田中重主が九十賀

こゝのそぢ齢重ねてもゝ年はちかく手中(たなか)にとるも頼もし

水澤村の高林通圭といふ人の母の百年の齢をことぶきて

世にこえて百の齢も高ばやし千とせのかげを猶あふがなむ

吹上里平井氏母六十賀、菊契齢

老の波よるとも見えじ吹上の菊に千とせをちぎる齢は

〇田丸　伊勢度會郡。山田の西一里。
〇湯田野　伊勢度會郡。田丸の東北につゞく。

〇青垣山　垣の如く周圍を取りまいた青く茂つた山。
〇秋の宮びと　皇后の宮に仕へ奉る人。

〇さかゆく　榮えゆく。

〇こゝのそぢ　九十。

〇吹上の菊　吹上は紀伊和歌山の西南から雜賀までの海濱。古今集「秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか」によつて吹上に白菊を詠んだ。

本多越後守常義翁七十賀、屏風の繪に四月の所藤の花

夏かけてさく藤波ぞ限りなくながきよはひの例なりける

鹽田光成七十賀

時々のさく花見つゝ花の屋にすむわがおぢは千世ぞ榮えむ

高村政常七十賀、寄松祝

家の風よはひも高く榮えよと松やあるじの千代よばふらむ

三上清里母七十賀、菊契千年

秋をおきて盛り久しき菊の露むすぶちぎりの千世ぞはるけき

井口三樂八十賀、花契萬春

見れどあかぬ花にちぎりて榮えゆく齡もしるし萬代のはる

或人の四十の賀に

今年より老の初めのはつ若菜つむらむ千代の春やいく春

石金晉主六十賀、陸奥の名所にて

石ぶみの常磐堅磐に老の坂いくちさととも限りあらじな

鈴屋母刀自七十賀、寄鳥祝

へだて來て雲居にこふる蘆たづの齡はいとゞ高くとぞ思ふ

○わがおぢ　わが親愛する翁。

○松や云々　松が主人の萬歳を唱へ呼ぶであらう。

○菊の露むすぶ　菊の露の雫を掬ひ飲んで長壽であつた南陽酈縣の故事。結ぶ契りと言ひ掛け。

○老の初め　四十歳を初老といふ

○石ぶみ　石碑。陸奥の名所の石碑は陸前多賀城村字市川にある多賀城碑俗に壺碑、と誤りいふものをさしたのだらう。

○常磐堅磐　ここいはかたいはの義、永久不變。

○いくちさと　幾千里。

○蘆たづ　葦邊に居る鶴。單に鶴をもいふ。

文政三年庚辰同じ刀自の八十賀、寄鏡祝

かげたのむ人の子の爲ます鏡いのる千年のしるし見せなむ

村田橋彦が母の曾孫なる人正月朔日男子うみたる七夜にあたれる日しも子日なりければその子の名をとみ松とつけたるよしにてその歌見せにおこせければ

ひこひゝ子やしはこ松の生ひ立ちてしげる岩ねの千代や幾千代

あなめでた子の子の子だに稀なるに子の子の子の子得たる大おば

或家の初幟の祝事に

五十日百日ゆく末遠く千世かけて祝ふ五月の玉のをのこ子

袴著

ますらをの武き姿もけふよりはそれとわく子のよそふ袴著

よろこびを千代に重ぬる始めとて今日よりよそふうひの袴ぎ

初もとゆひ

末遠く千年をこめてけふよりはそのもと堅く結ぶもとゆひ

引きむすぶ初元結のゆるびなく千代まめやかに君につかへよ

八十八の賀に

○人の子の爲　伊勢物語「世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人の子のため」○ます鏡　眞澄鏡。澄みわたつた明鏡。

○ひこひゝ子やしはこ　孫曾孫玄孫。

○それとわく子　武士として他に區別されるやうに裝ふ。わく子に若子をかけた。○うひの袴ぎ　男兒の初めて袴をはく儀式。○初もとゆひ　初めて元服すること。

○ゆるびなく　元結が弛むことなく心の油斷することなくの意をかけた。

桝にもる米てふもじのことしより末の齡ぞはかりしられぬ

湯淺の濱屋幸章年六十七にて近きころあらたに齒の生ひぬることをよろこびて「年もいまむそぢ七つの老の身にかはり齒はゆることぞたのしき」「齒のもじはよはひとかよふ心あれば今ひこばえも千代の種かも」とよめるを見て細田喜建が「ながらへむためしもしるく生ひ出づるはがためいはふ千代の初春」同じ人の妻きの女「若がへり生ひいづといふ齒がためのもちひもをりにあふいはひかな」などよめるを見て大平もよみて遣はしける

年高く老となる身に葉も生ひてことばの花もさくぞたのしき

土屋安足今年六十にたらひて世の人の賀とていはひごととして歌よみ詩つくらせてとかくするをさるさまの事は好まぬ心ばへ見せてことしも年の末つかた十一月二十六日家に人々つどへてこの頃よみ出でたる歌なりとて老の懷を述ぶといふ心の數々の歌どもを見せてこのいへる事にこたへたる心にて年の數いたづらに積りたる人はいとくるしと思ふらむなどいふ心をけふのまとゐのよみくさによみて給へとこへるによりてことさらにことほぐとはなしによめる歌どもはじめはその日の儲

○米てふもじ　八十八の字を合はせて米の字。

○齒のもじ云々　齒は人の年齡によつて生え脱ける故元來年齡の意に轉じ使はれた。齡は漢以後の文字だといふ。

○ひこばえ　草木の切つた根から芽の出るのをいふ。こゝは齒についていふ。

○はがため　古正月一日に供へた食物。齒を固める意にかけた。

○葉も生ひて　齒の生えるに葉をかけて花も咲くとつゞけた。言葉の花咲くは人々の歌詠んだのをいふ。

○人々つどへて　人々を集めて。

○このいへる事　老後述懷といふ歌に詠んだこと。

○年の數云々　年齡の數ばかりむやみに積つた人。

○よみくさ　歌を詠む種。歌の材料。

○儲題　豫定した題。兼題。

題千鳥なりければ

友千鳥共にむれゐてよそながら祝ふ八千代は君しらずとも

花もみぢ咲きちる色を文に見て常磐の山にすむ人やきみ

鶴龜とことにはいはじ世の中にありとある書讀みつくすまで

ゆく齡限りなき世にまかせつゝ六十を物のかずとしもせじ

松がねのあらはれてこそいはねども下の心に千代ぞ籠れる

生ひいでしめぐみ思へば今よりの末のよはひも神ぞしるらむ

服部敏夏がこへる題樂未央

今いくかありての後の若菜より雪間にあさる程ぞたのしき

桃さくらいろ〳〵つぎて見む春のはつ花うれし庭の梅がえ

よしの山分け見ぬ奥のいろ香をもふもとの花にまづぞおどろく

眞萩さく秋はあれどもつぼ菫さくやさが野の色もめづらし

木の間もるついたち頃の夕月夜まとかならねど秋はさやけし

立田山みねのもみぢをまつほどにすそ野に萩の錦をぞ見る

荒木田經雅神主四座にすゝみて三位の宣旨からぶり給へることをよろこびて

○常磐　ときはの義、永久變らぬこと。

○樂未央　樂未だなかばならず歡びが盡きない。和漢朗詠集「嘉辰令月歡無レ極。萬歲千秋樂未レ央。」

○今いくか云々　古今集「春日野のとぶ火の野守いでて見よ今幾日ありて若菜摘みてむ」

○秋はあれども　嵯峨野の秋は面白いが。

○夕月夜　夕方ばかり月ある夜の頃の月。

○まとかならねど　圓くはないけれど。

いろ深きみつのくらゐにいすゞ川すゝむも神の恵みとぞしる

長崎諏訪神社大宮司藤原永章主よろこびせられけるに

久かたの都路遠くのぼりきてのぼるかひある位山かな

雲蓋院僧正權より正にすゝまれけるよろこびに

かしこしな法の司のみねづたひ高嶺にちかくのぼる位は

物の名の歌

門松しめ繩

いつしかとまつ野の若菜雪の内に人のしめなば何を摘まし

芹

都人わかなつむ野は春めきてみねのしら雪かすみかくせり

薺

垣ごしに喰ひもこそすれ麥畑のあたりにちかく馬なつなぎそ

御形

なには人春日うらゝに船こぎやうかれ行くらむ霞む入江を

蘩蔞

○よろこびせられ　官位昇進の御禮を申し上げられた。
○いつしかとまつ　何時かと待つ門松を含めた。
○人のしめなば　人が占めたらば。しめなはを含めた。
○馬なつなぎそ　馬を繋ぐな。なづなを含めた。
○御形　ごぎやう。七種の菜の一。
○船こぎや云々　船漕ぎや浮かれ行くらむ。ごぎやうを含めた。
○蘩蔞　はこべ、はこべら。春の七草の一。

あかなくに一枝とこそ花はこへらうぜきに梅折りややつさむ

佛座

霞たつ春野の駒のはしるほど毛のさまよくも見わかれぬかな

菁

浪かゝる袖もいとはずすなどりに爭ひ出づるあまの釣舟

須々之呂

はしたかのしるしの小鈴白けれど雪の中にも聞きはまがはず

又二種づゝこめて　せり　なづな

ふけばかく櫻ちらせり風なくばうれしからまし夏ならぬまは

ゆするせりわが黒髪のかわくまでしばしはなづな濡れて露けし

ごぎやう　はこべら

ちるもみぢこきやうすきやかきよせて持ちはこべらば取り分きて見む

こぎやうき船のわらは子紬ら纜ら綱ときはなち帆懸けてゆかむ

ほとけのざ　これは言長ければ一くさなり　うたもひとうたなり

はこぶとてゆひつかねたる稲穂とけ野澤の水に濡れたるほさむ

すゞな　すゞしろ

○あかなくに　あかぬに。
○花はこへらうぜきに　花は乞へ狼藉に。はこべらを含めた。
○梅折云々　狼藉に亂暴に梅を折つて見すぼらしくはしない。
○佛座　ほとけのざ。春七草の一
○菁　すゞな。春七草の一。菘(たうな)の異名。
○須々之呂　すゞしろ。春の七草の一。だいこんの異名。
○はしたか　鷂。鷹狩に用ひる鷹の一種。
○ゆするせり　頭髪を洗ひ梳つた
○なづな　撫でるな。薺(なづな)をかけた。
○持ちはこべらは　持ち運んであるならは。
○こぎやうき　船を漕ぎ憂きであらうか。
○紬ら纜ら　舟のへさきも。らは語の末に添へる意味のない語。
○はこぶとて云々　運ぶというて結ひ束ねた稲の穂を解け。

すゝならでたく火の上にたつ灰を媒白しとは誰か見るべき

うちすてずすなはち身には著ならさむ君よりすゞし袪に賜へり

源氏物語巻の名

桐つぼ

杣山に眞木の柱の木はきりつほめていはひて殿づくりせむ

御(おほん)ぶみ見侍れどもめはきりつほどへていとゞまさる歎きに

はゝきゞ

玉あられひろはば聞きし音ばかり堅くもあらで露ときえなむ

琴の音も菊もといはばききはやす心としりて又もかいひけ

空蟬

明けぬとていそぐか駒に鞭うつせ見おくる妹をかへり見ずして

かくばかりのがるゝ物と思はさばいかゞはせむにうつせみ心

夕がほ

常夏のなつかしきぞよ人のすむ野にしめゆふがほいならねども

かた時も御もとはなれぬ惟光の大夫がほかにありしこよひか

わか紫

○著ならさむ　著馴らさう。

○杣山　材木を伐り出す山。

○御ぶみ云々　桐壺帝が桐壺更衣のなきあとに更衣の母北の方に賜はつた御文を悲歎にくれて讀み奉つたこと。

○めはきりつ　目は曇つてはつきり見えなかつた。

○聞きし音ばかり　聞いた音ほどには堅くなくて。

○琴の音云々　源氏物語帚木「琴の音も菊もえならぬ宿ながらつれなき人を引きやとめつる」

○かいひけ　琴をかき彈けよ。

○明けぬとて　夜が明けたというて。

○鞭うつせ　せは女から男を親愛していふ語。

○かくばかり云々　光源氏が言ひ寄られるのを斷程まで空蟬が遁れるを御了解になつたら、もはや如何とも仕方ないと御心を移しかへられよ。

○かた時云々　惟光は近衞將監で五位であつたので大夫といふ。常に光源氏の御供してゐた。

○ほかにありし云々　光源氏が夕顏の宿に通つて、夕顏の亡くなつた夜に惟光が他に行つて居たこと

はつ草の草のわかむら先がけてこむるおひさき千年とぞ思ふ
難波がた末ふみしだきあさるらし蘆のわか村鷺しろく見ゆ

末摘花

鳥の子ををしきの上にすゑつむはなり難き事しひてするなり

紅葉賀

月かげもみちのかぎりはまととなり木と末とは弓張となる

花宴

たちばなのえむかしよりぞ常葉なる霜はおけども冬がれもせず

あふひ

御車の所あらそひせいすべくありあふ人もゑひすぎやせし
並べあふ人給ひよりさらにさもおくにやるべき車ならぬを

さかき

ちはやぶる神の宮人みまほしさ垣をもこえてやどる野べかな

花散里

眉間より光をはなちるさとのみいふは片言るさなぶつなり

須磨

○鳥の子　鶏卵。
○をしき　へぎ製の角盆。食器をのせる具。
○すゑつむ　積み置く。
○みちのかぎり云々　月も滿ちた時は圓い的となり月の始めと終りは弓張月となる。
○橘のえ　橘の枝。萬葉集「橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいや常葉の樹」
○御車云々　賀茂の祭の歸りを見る物見車が葵の上のと六條御息所のとが一條大路で所爭ひがあつた。「皆醉ひすぎたち騒ぎたるほどのことはえしたゝめあへず。」
○人給ひ　副車。お供の女房等の自分の車持たぬものの乘る車。「遂に御車ども立て續けつれば人給ひの奥におしやられて物も見えず。」
○神の宮人　六條御息所の御女齋宮。見まほしは齋宮の御母御息所に逢ひたくて。野宮に源氏が訪れた。源氏、榊「忌垣をも越え侍りにけれ。」
○るさなぶつ　盧遮那佛。

蜑の家稀なりときく里にすまばかくはしたなき世を遁れなむ

明石

かずしらず物わびしくも歎くかな雨風やまずあかし暮して

みをつくし

からやまとふみをつくして學び得て此の物語かきし御もとか

いはねどもゆびもてわれは君をつく下の心をそれと知らなむ

よもぎふ

いく世々も來經る故郷きてみれば庭も籬も野べとあれたり

關屋

そこ清き清水に月も心よせ來やどるかげぞあひにあふさか

繪合

門のとは人のふむゆゑ栗背戸にほして鳥おふ里のわらはべ

藤袴

はひまとひ松がえからすいとねたし藤は鎌もてそこ彼處きれ

にほふみや

そこ彼處浮巣たづねて池の鳰ふみやゆくらむをれふす蘆を

○雨風やまず　源氏物語明石「猶雨風やまず神鳴り靜まらで云々。」

○御もと　女房の名の下につける敬稱。紫式部のおもと。

○いく世々云々　常陸の姫宮の姫君(末摘花)が亡き父親王の記念と思つて古い家を荒れるまゝにしておかれたこと。

○清水　逢坂の關の清水。

○あひにあふさか　夫と共に常陸に居た空蟬が夫の任滿ちて上京し逢坂關で、石山寺に詣る光源氏に出逢つたこと。

○門のと　門の外。

○浮巣　鳰(かいつぶり)が水上の蘆の間に作った巣。匂兵部卿宮が冷泉院の女一の宮や按察大納言の女(眞木柱の腹)や宇治君などあさり歩いたのをいふ。

○われを君　われは浮舟の君。君は薫大將。
○思ひたゆめ　斷念しなさい。
○横ほれる云々　横はつてゐるといふ名に似た、富士を臥しといふに似たといふのである。
○いくむら　幾疋。むらは布帛などの卷いたのを數へる語。
○見せにおこせし　見せによこした。
○こと言葉　異なつた言葉。
○しひごと　むりなこじつけ。
○あらたにさくはこの　新たに咲くは此の言の葉にたにざく(短冊)箱をかけた。
○心をたね云々　和歌。古今集序「倭歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける。」

ゆめのうきはし

おひつきて羽ね打ちかはす鴛鴦と見ゆ雖のうき走る跡よりゆくは

われを君思ひたゆめのうき端としらでや聞きし人の中ごと

げゑんじの物語

うらめしく怨じの物かたりたらぬ詞みだりにかき贈るふみ

五十四帖

横ほれる名にや似たると見にごこしふじてふ山の立てる姿を

紫式部

綾にしきいくむらさきし著ふるさば又も縫ひかへ贈るたが爲

かくよめりしは或人のよみて見せたるをみて又ある人の四五人ばかりもおひつきてよみて見せにおこせしころそれには類せずこと言葉をまうけて五つ六つよみ見たれど中にはいとよみ得がたきがおほく猶思ひ見むにはいとまいりて中々學びのさまたげともなり又しひごともいでくべければかくて思ひやみたるなり

或人短冊箱のふたにとこひたるに

代々をへて色香あらたにさくはこの心をたねの言のはの花

短籍掛といふ物に人の歌こひたるに

ことかたに咲くかげとめて行かむより言ばの花を居ながらにして

紙雛の繪の上にかける歌

春ふかみ日長きころのすさみにやつくり初めけむ妹と背の形

をる桃の花の雫の香をふかみひなむのちさへ袖やにほはむ

神路山の杉もてつくれる茶杓といふ物に歌よみてと人のあとらへければ

かみぢやますぎのちやさくといふことをこめて

春の野の草ふか道やまづはすぎのちや櫻のかげにあそばむ

七月七日によめる女郎花

なげきつゝ年と月日をみなへしは秋の一夜を待つ間なりけり

みをつくし

瑠璃君を筑紫の監にとられじと豐後の介こそ將てのぼりけれ

藤原仲文大夫の集に紀の國の郡どもをよめる「いとながき夜はなぐさまずあまりありたえず火たかむ室にすまばや」此の同じ物の名を

いとゞながが鳴くさと數多ありたらひたがすむ室に行く郭公

住吉神供の中の餢飳と糫餅との形を摸してこれが歌をと北村清風がこへ

○こめて　尋ね求めて。
○春ふかみ日長　春が深く日長なので。かみびなを含めた。
○妹と背の形　夫婦の姿。
○雫の香云々　香が深いので雫が乾(ひ)てしまふ後まで。かみひなを含めた。
○神路山　伊勢宇治内宮の神苑に沿うた山。
○茶杓　抹茶をすくふ匙。
○あとらへ　誂へ。たのんだ。
○月日を云々　月日を皆經しは、月日を悉く歎きつゝ經たのは秋七月七日の一夜を待つた間である。
○瑠璃君　源氏物語の玉鬘をいふ
○筑紫の監云々　源氏物語夕顏の乳母がその夫と共に夕顏の遺子、玉鬘を保護して筑紫に居たが、肥後大夫監が玉鬘を手に入れようとした。乳母は其の子豐後介と共に玉鬘をつれて九州から逃げて京に來た事が玉鬘卷に見える。
○藤原仲文　五位、上野介。陸奥守公葛の子。
○いとながき云々　紀伊の郡名。伊都、那賀、名草、海部(アマリ)有田、日高、牟婁。
○ながが鳴くさと云々　古今集「時鳥ながが鳴く里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから」
○餢飳と糫餅　共に油であげた餅の類。

るに

神垣の内にはこぶと墨の江のきし田の稲やいまかりにゆく

ふかみぐさはつかぐさを句の上下におきて

ふかみとは香に名づけつゝ見る花かくる人多く咲ける嬉しさ

ふることふみ　やまとふみ

ちる花は雲のふるごとふみゆけど離は山とふみもこえじな

古事記　日本紀

女郎花ふさたをりにと來し君は妹が門田に穗むき見がてら

律令格式

曇りつと見ゆるは梅のちりやうく池ちかく吹く風ぞわびしき

西宮記　北山抄

とひきませいきうき道かかたへこそ巖草なせうらの苫屋は

延喜式

いざさらば波におりたち拾ひえむきしぎは近く玉よらめやは

まんえふしふ

繰り返しかむがへ讀まむえふしく　わきまへられぬならの世の歌

○ふかみぐさ　深見草。牡丹。

○はつかぐさ　二十日草。牡丹の異名。白氏文集「花開花落二十日」

○ふることぶみ　古事記。

○やまとぶみ　日本書紀。

○女郎花ふさたをり云々　萬葉集「秋の田の穗むき見がてり吾がせこもふさた折りける女郎花かも」ふさは澤山。

○穗むき云々　穗が風に靡き向ふを見ながら。

○ちりやうく　散りも浮くのか。

○いきうき道か　歩きづらい道であるか。

○えふしく云々　處々節々ようわきまへられぬ奈良朝の歌。

古今歌しふ

えんぎの世かしこき昔古きをも今のもえらび集めたる歌

後撰拾遺

せきわけておこせむ水に袖すゝげ水しぶゐる田にさ苗とる子ら

人の要(もと)めによりてよめる歌ども

土佐國何がしの家に紀貫之主の筆の跡とて月といふ一もじを額にてもたるありいと珍らしき物なれば是れが歌よみて給へとその國人の許より物のたよりしていひおこせければよみて遣はしける

水ぐきにのこれるかげよ是れも又世に二つなき月のひともじ

辛崎の松の木をゑりて作りたる香合によみてそへける

しほやかぬしがの濱松うちけぶり幾代の春か霞みきぬらむ

飛驒國吉城郡高原郷舟津村の藤橋を

是れも又心たくみの組みはへてわたしそめけむ飛驒のふぢはし

舟津より舟もかよはぬ高原の岩きしたかくわたすふぢはし

同じ國同じ郡同じ郷中山村より越中國蟹寺村にこゆる所の神通川といふ

○えんぎ　延喜。醍醐天皇の御代

○せきわけて云々　堰き分けてよこす水。

○水しぶゐる田　水の上に赤黒い水あかが浮いてゐる田。

○水ぐき　筆。筆跡。

○ゑりて　彫刻して。

○香合　かうがふ。香を入れる容器。

○しほやかぬ云々　志賀の濱とはいふが湖のことで鹽を焼かない濱の松が煙つて。うち煙りは香の縁語。

○心たくみ　心の中で工夫すること。飛驒匠(ひだたくみ)をかけた飛驒匠は古昔飛驒國から交番に京都に來て公役に仕へた大工。

○組みはへて　長く組んで。

に綱引きはへて籠にて引きわたすをかごのわたりといふとぞ

神の代の目なしかたまの小舟すら水なき空を渡りやはせし

見るだにもあやふき物をのるかごのめもくるめかず渡る里人

　大坂岡野則衡が家の寳ともたる刀の歌

　藤鞘卷といふは鹿苑院將軍より給はり傳はれるよしにて九條左大臣經教公の歌そへり「藤まるのさやかにうつる小刀のやきはに浪のたつかとぞ見る」又鳩丸といふ刀には細川兵部大輔藤孝朝臣の歌そへり國綱が作りし短刀のいみじきを見て「是れぞこのかまくら山のうち刀世にたぐひなき腰燒刃かな」

花見ても身のめでたさや知らるらむいはむ方なくよそふ藤丸

男山さかりのひとも杖ならでこのはと丸をこしにつくらむ

　龜二つを蒔繪にしたる香箱の蓋によみてそへける

ゐる龜の千代萬代をふたながら身に取りそへて主やたもたむ

　むしろ田といふ所の土をとりてつくらせたる杯にうたよみてかけと人のこひければ

さかづきの光も千代を幾めぐりいつぬき川の瀬々に住むらむ

○目なしかたまの小舟　まなし堅間。細かに編んで透目のない籠の舟。籠に獸皮を張つて舟にしたもの火遠理命の海佐知を得ず釣針を失はれた時に鹽椎神が無間勝間の小船に火遠理命を載せたことが古事記に見える。
○目もくるめかず　目もくらまないで。
○鹿苑院將軍　足利義滿。

○さやかに　鮮明に。鞘をかけた。
○細川兵部大輔藤孝　細川幽齋。
○國綱　刀鍛冶の國綱と稱するもの數十人ある。

○かまくら山のうち刀　鎌倉時代に鍛へた刀。

○杖ならで　鳩の杖は老人の用ゐる杖であるが此の鳩丸は杖でなくて若い盛りの男が腰に帶びる。
○ふたながら　蓋も一緒に身（蓋に對して容れ箱）に添へて。龜二つをかけた。
○むしろ田　美濃本巣郡。莚田。
○いつぬき川　美濃本巣郡。絲貫川。根尾川ともいふ。

伊賀の上野の何がしかの國の戀の森戀の湊をよみてとこひければ

戀の森

つゝみあまる袖の雫の繁ければ名も世に戀のもりやしぬらむ

國府の湊　あべの郡なり

あへぎつゝ漕ぎよるべくもなき國にいかでか舟をこふの湊ぞ

近江高島郡萬木村中江千別がこへる萬木社青柳里

住みなれてゆるぎの森にゐる鷺は風は吹けども驚きもせず

吹くまゝに鷺のねぐらやいかならむ梢ゆるぎの森のゆふかぜ

かなふやと堅きねがひも祈り見むゆるぎの森を神の心に

ふく風に杜のこずゑはゆるぐとも神の宮居は動きやはする

梢さへゆるぎの森の下かげはふく風いかにすゞしかるらむ

絲により春くることや知られまし染めてかけたる青柳のさと

花さけば春のにしきとこきまぜて都おぼゆるあをやぎの里

いにしへの朱雀の大路おぼゆやといざ行きて見む青柳のさと

門垣根うぐひすきなくはひりにも植ゑて春まつあをやぎの里

花も今さかりなりやと大路よりゆきて見てしが青柳の里

○戀の森　夫木抄にこひのもり伊賀又山城とす。

○國府の湊　伊賀阿山郡(阿拜郡)府中村。柘植川の北岸で國府の址があるのでこふの湊といふ。

○萬木　よるぎ。よろぎ。萬木社は延喜式與呂伎神社。ゆるぎの森として歌枕。

○ゆるぎの森　搖ぐ森と言ひ掛けた。

○鷺は云々　六帖「高島やよる木の森の鷺すらも獨りはねじと爭ふものを」

○絲により云々　絲に縒つて繰る春の來ることをかけた。

○都おぼゆる　都に似通つて都が思ひ出される。古今集「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」

○朱雀の云々　平安京宮城の南門朱雀門から平安京南の極羅城門までの大路。催馬樂淺緑「淺緑や濃い縹染めかけたりと見るまでに玉光る下光る新京朱雀のしだり柳云云」

○はひり　門から家までの邸宅の入口。

或人矢野神山に紅葉をよみ合はせてとこへるに

はつ紅葉そめし衣のつまも見えてうすぎりこむる矢野の神山

出羽國人月山神社の歌こへるに

いにしへの御代の書にもまさやかにいではの國の月山の神

四疋田の里三谷氏清潸亭といふ屋に額におして懸けおかむ料にとて歌こひければ

底清きいさゝ小川のさゞら波こゝろをよせぬ人はあらじな

丹生の三井健次がもたる柿本の神像におのづからなれる石に歌よみてそへよとこふに

そのかみのかくれましける國の名を現はれ給ふ石に見るかな

森川滄波がもとにて濱木綿を見て

百重山へだてゝこゝにみ熊野のうらめづらしき浦の濱ゆふ

春のころ詩つくる人々龍泉寺につどひて韻どもわかちてその日のこゝろつくりけるにおのれも物して魚といふもじを得て

うすごほり心とけたる諸人は龍のいづみにむれあそぶうを

長崎の青木永章主の書見る屋を秋の屋といひてそのうしろに谷川をまか

○矢野神山　伊勢度會郡矢野。萬葉集「妻こもる矢野の神山露霜ににほひそめたり散らまく惜しも」

○月山神社　羽前東田川郡月山頂上にある。

○まさやか云々　はつきり出てゐる。いでこ出羽國こかけた。

○いさゝ小川　水が僅か流れた川

○さゞら波　細い波。さゞなみ。

○よせぬ　波の緣語。

○かくれましける國の名　柿本人麿は石見國で歿した。

○濱木綿　はまおもと。紀伊熊野邊に自生しゐるこいふ。

○百重山云々　幾重にも山を隔てて。百重は濱木綿の緣語。

○こゝにみ熊野　こゝで見るをかけた。

○うらめづらし　何となしに心珍らしく感ぜられる。

○谷川を云々　谷川の水を引いて

○岩間もる　岩の間を漏れて流れ出る。
○難波津云々　古今集序註「難波津に咲くや此の花冬ごもり今を春べとさくやこの花」
○難波津の　何の序をかねた。難波津については何を言ふものか。
○庭のをしへ云々　家庭の教訓も格別で他と異なつてゐる愛撫する子と言ひ掛けて、詞の意の撫子を詠んだものである。
○香合　かふがふ。香を入れる器。
○玉匣　たまくしげ。ふたの枕詞。玉匣を浦の名に負ふとは二見の浦をいふ。
○蓋身　容器の蓋と身、二見をかけた。
○郭公の落し文　郭公の鳴く頃枯葉で形が古の結び文に似たのが落ち散るものをいふ。葉捲象蟲といふ蟲の幼蟲が巣くうて葉を卷きつけ成蟲となつて出たあとのもの。

せて名を時雨の清水とつけてその歌こへるに
岩間もる時雨の清水とことはにやむ時もなく人ぞとひこむ
和田正主がよみて問へる歌「難波津に今は春べとさくやこの花といひしは梅か櫻か」此の返し
難波津の何をかいはむ木の花はさくやさくらの花にぞ有りける
或人の庭にことにいつき生ふしたる撫子を見に物したるに歌をとこひたるに
朝夕の庭のをしへのことなれや世に似ぬ色のなでしこの花
二見の浦の貝もてつくれる香合に名もつけてうたをもといふに二見と名づけて
玉匣名におふうらのかひありて千世もはなれぬ蓋身なりたり
京のやんごとなきわたりよりつたへ給はりたるよしにて郭公の落し文といふ物なりとておのづから細くまがれる木の葉を見せにおこせて此のめづらしき物見侍りつるよしの歌おのれもよみて奉るなりそこにも思ひよられたることあらばともにと思ふなりと井口敬秩がすゝめおこせたるに催されていさゝかいひつゞけ侍りける

雁がねの玉づさならで郭公世にめづらしき落しぶみかな

言の葉になさけをこめし落し文ほど時過ぎて見るもめづらし

鳥の跡思ふ心を書きつけてたれに見せむの落し文ぞも

まきながらかへしやせまし木のまより取り落したる文と思へば

賀島正根若子あらたに作らせたる尾花空穂といふ箙にやおてしるしおかむ料によみてとこひおこせたるに

放つ矢に得物のかずもしげき野の尾花のほまれ世に現はれむ

同じちかき族何がしも作らせたりとてこへるに

いる人も尾花のかげにまじりつゝ野べの百鳥狩りくらすらし

土佐國本山の里長瀬村次といふ人家にいつきもたる富士の山のかたしたる石によみてそへよと或人のたよりしてこひおこせたるに

不盡の嶺は國の御寶此の石は家のたからと代々に傳へよ

鴨の形したる石に人の歌こへるに

やがて又水のうへゆく面影もうかみてみゆる石のかもどり

大坂人何がし蝙蝠によせて祝の心をとこへるに

世の中に又何をかはほりすべき命まさきく富みたらむ人

○ほど時過ぎて　ほとゝぎすを含めた。
○鳥の跡　筆跡。郭公の落し文といふので鳥の跡というた。
○まきながら云々　巻いた儘で返してもやらうか。
○尾花のほまれ　尾花の穂と誉れとをかけた。
○ちかき族　ちかきぞう。近い親族の人。
○いる人　射る人。
○いつきもたる　秘蔵し持つた。
○何をかはほりすべき　何をか欲すべき何も欲するものはない。かはほり（蝙蝠）をかけた。

伊勢の朝熊山の野開政壽が家所より見わたしの歌よみてとこひたれば

ゐみさかえ豊さかのぼる天つ日を浪間にあふぐ朝くまの山

日の本の國のたからときく富士を朝夕に見る朝くまのやま

繊松寺の庭の池はちすば一本より二莖にわかれて花咲きたりこは三十とせばかりあなたにも咲きてそのをりのめでたき例にさへあればその歌よみてとこひおこせたればよみてつかはしける

ありし世の例かはらず二またに又もさきぬる花はちすかな

伊豆國人石井みち春相摸國大磯の濱邊に生ひたる草にて此の三年ばかりより人の見いでて筆くさとてもてはやすよしふみでにいとよく似たるのみならずおきからしたる筆のさきに墨さしぬらして書きこゝろむるに文字も書かれなどするいと〳〵珍らしきをおくれるかへりごとに

こゆるぎの磯菜ならねど珍らしく手に取りて見るふみで草かな

こゆるぎの磯に生ふてふふみで草硯の海のこがめにぞさす

さくら貝の歌をと人のこへるに

よしの川流れの末もわかのうらにかゝる櫻の貝もよるらむ

言の葉もかけて見よとやさくら貝打ちよせぬらむわかの浦波

○朝熊山　伊勢度會郡。內宮の東

○豐さかのぼる　朝日がうるはしくも照りはえて昇る。

○はちすは　蓮葉。蓮をいふ。

○三十とせ云々　三十年ばかり以前。

○筆くさ　こうぼふむぎといふ海邊に自生する草。

○こゆるぎ　相模中郡小餘綾。酒匂から大磯までの海岸。

○磯菜　磯邊に生えてゐて食用になる草。古今集「こよろぎの磯立ちならし磯菜つむめざし濡らすな沖にをれ浪」

○ふみで　筆。

○かゝる櫻の貝　和歌の浦にかゝるさかくの如き櫻貝とかけた。

わたつみのかざしの花の櫻貝ちりてやわかの浦によるらむ

わかの浦やうす花染の櫻貝見るかひありとまづや拾はむ

わかの浦に心をよするみやびをの拾ふかひある櫻なるらむ

善立法師藜してつくれる杖の歌こへるに

いつはらず命ながくとねがふこそ心あかざの杖にはありけれ

ことに早咲のにはあらでよのつねの梅の十月十五日ごろ咲きたるが珍らしとて菊の花をもそへて花がめにさしてこれを題にて歌よまばやと人のすゝめたれば人々と共によめる

秋の菊うつろはぬまに咲きつぎて冬がれ見せぬ梅のはつはな

春秋の菊と梅とのさくやどは花に冬なきかんなづきかな

冬ごもり梅もさきけり菊の花さかりのどかに匂ふ小はると

春も秋も時をへだてぬ垣ねかな菊にさきつぐ梅のはつ花

定めなく梅も垣ねに咲きにけりしぐるゝころの菊のさかりに

秋と冬と冬と春との菊とうめ年にふたゝびさかり見せけり

待つ人の袖の色香とさく菊の同じまがきに匂ふうめが枝

ほのかなるいろ香あらそふ籬かな菊は有明うめは二日づき

○わたつみ　海神。古今集「わたつみのかざしにさせる白妙の波もてゆへる淡路島山」

○うす花染　薄い縹色に染めた。

○見るかひ、拾ふかひ　貝をかけた。

○心あかざの杖　心をあかした。藜をかけた。藜の杖を用ゐると中風にかゝらぬとの俗説。漢書「有二老人一黄衣植二青藜杖一。」史記「黄石公鬚眉皆白。杖二丹藜一履二赤舄一。」

○かんなづき　神無月。陰暦十月冬季である。

○冬ごもり　冬の間閉ぢ籠つてゐること。又春の枕詞。

○小はる　陰暦十月。

○菊の同じまがき　菊と同じ籬。

昔よりうつくしときくおと子にもなに劣らめや梅の初花

菊と梅左みぎにやかざさましいたゞく霜のおいかくるがに

竹の花いけといふ物に歌かきてと人のこへるにそのかた橋杭といふ形なりければ

木にもあらず草にもあらぬ橋杭のたけの筒にも花は咲きけり

高橋主馬が筧てふ名ある竹の花いけを殿より賜はりいたゞきてよろこべるに

春を經て花さく竹の筧にはかけつゝ仰げきみが八千代を

三河國刈屋の中島希駿かの國の八橋の跡より取り出でたる古杭のはしなりとて小さき朽木を紙につゝみて其の包紙に「朽ち残る此の八橋の古木もて君にむつびのたよりとやせむ」とあるに

八橋のはし柱とて木のはしも昔をしのぶ端となりけり

しをりに書ける

けふわけし花の下道しをりして明日もふみみむみ吉野の奥

よしの山分けこしかたにしをりして猶奥深くふみやたづねむ

つくば山は山しげやましをりして猶ふみ見ばや峯の木の本

○うつくしときくおと子　愛らしくかはゆいと聞いてゐる末子。きくを菊にかけ菊が年中最も遅れて咲く花である故にいふ。
○おいかくるがに　老が隠れるために。頭の霜なる白髪の老を隠さうために。

○筧　懸樋。地上にかけ渡して水を通ずる樋。

○八橋　三河國碧海郡池鯉鮒（知立）の附近に伊勢物語に「水ゆく川の蜘手なれは橋を八つ渡せる」といふ三河國八橋の址。

○木のはし　木の切れ端。

○けふわけし　今日踏みわけて入つた。
○分けこしかた云々　新古今集「よし野山去年の栞のみちかへてまだ見ぬ方の花をたづねむ」
○つくば山　新古今集「筑波山は山しげ山多けれど思ひ入るにはさはらざりけり」

雲居にものぼる心をしをりにてふみ見ざらめや峯の通ひ路

しをりしてけふはこゝより歸る山かへる〴〵も又やふみ見む

きのふみし山路のしをり分け過ぎて猶峯高くふみやのぼらむ

しをりして休らひゆかば吉野山岩のかけ道ふみもたどらじ

濱名橋の跡より掘り出でたる橋杭の古き松を板になしてしをりのさまにしたるに歌をとこひたるに

千代をへてのこる濱名のはし柱朽ちせぬふみのしるべにはせむ

神路山の杉のしをり

ちとせふる御山の杉をしをりにて深き神世の道もふみ見よ

玉つしまの松のしをり

しをりして世々の言葉の光をもなほたづね見よ玉津島まつ

和歌の浦の松のしをり

世の業の暇しあらばふみはみよ蘆邊の田鶴の跡をたづねて

又

わかの浦の松をしをりに蘆たづの跡もとめつゝふみ學ばなむ

天橋立の松のしをりに歌をと人のこへるに

○歸る山　越前南條郡歸山。歌枕であるが、こゝは單に歸る意とかへるがへるの序とをかけたまで。

○岩のかけ道　けはしい石の山道古今集「世にふれはうさこそまされみ吉野の岩のかけ道踏みならしてむ」

○濱名橋　遠江濱名湖の水が白須賀の東で海に入る所に架けてあつたといふ。

○神路山　伊勢度會郡宇治内宮の御苑から聳がつてゐる山。

○道もふみ見よ　踏みと書とをかけた。

○世々の云々　世々のすぐれた和歌を尋ねて見よ。玉の緣で光といふた。玉津島の神は俗說衣通姬として和歌三神の一。

○蘆邊の云々　萬葉集「わかの浦に潮みち來ればかたをなみ蘆邊をさしてたづ鳴きわたる」

○ふみはみよ　ふみ學はなむふみ見よ、書に踏をかけた。

○高き神代　高きは橋立の縁語。
○みだれ世　亂世。
○故翁　本居宣長。
○此のしきしま云々　寛政二年宣長六十一歳のとき自ら像をうつし書きて題した歌「しきしまの倭心を人とはゞ朝日に匂ふ山櫻花」による。
○雲の下ゆく云々　上句は「九重の花の盛りを見渡せば」題は禁中花。
○曙梅の歌　鈴屋集「にほひ来る梅のありかも見えそめて春風しらむあけぼのの空」
○しきて　たび重なつて幾度も。
○むしろ田　美濃本巣郡席田。新勅撰集「席田に群れ居る田鶴の千世も皆君が齢にしかじとぞ思ふ」

はしだての松の梢をしをりにて高き神代のみちもふみ見よ
　ゑばうしの箱のふたに歌かきてと人のこへるに
みだれ世に兜きかためたゝかひし遠つ御祖の御かげ忘るな
　故翁の像のかけ物の箱の蓋に大平が筆そへよと常雄がこへるに
千代までもかけて忘るなをしへおく此のしきしまのやまと心を
　故翁の雲の下ゆく雲の上人といふ歌書かれたるかけ物の箱のふたに歌よみてと人のこひたるに
咲きにほふ言葉の花も筆の跡も雲にまがはぬくものうへかな
　故翁の曙梅の歌書かれたるによみてそへよと人のこふに
言の葉の花の色香もしる人に見せばや春のあけぼのの梅
　また杜郭公とうづらの歌と書かれたるに或人のこへるに
森の木の間尾花がもともとり／＼に哀れは深くこむる言の葉
　又若竹のゑに歌書かれたる掛物の對にせむにとて喜建がこへるに
わか竹のなびく姿も千代かけてかはらぬ色をうつす墨がき
　又「あすもまたしきて聞かばやむしろ田になくなる鶴のおもしろき聲」と書かれたる紙のおくに大平が歌書きそへよと中里常賴がこへるに

むしろ田のこの言の葉もすむ鶴の千年萬代かけてつたへよ

周防國吉敷郡大道村上田氏の庭の松は早くやんごとなき人植ゑおき給ひて延齢松と名づけ給へるよしにてこれが歌をと木村豊平がこへるに

よき人の根こじて植ゑし松なれば見る人さへに千年へぬべし

神路山の杉もてつくれる硯箱によみてかける

神路山ちとせすぎにし杉の板すゞりとともによろづ代までに

年の始をいはふとてうからやから打ちつどひて酒たうべ物くひよろこべる所といふを題にて歌よみてと伴信友がこへるに

年あらむ御世のさかえを家ごとに酒ほがひしていはふ初春

白子里久住氏紀の國の浦の初島の石を殿より給はりて庭の築山におもしろく置きならべたる頃その歌をと人々にこへるによみて贈りける

かろからぬ君のめぐみぞしられける千代の榮えのはつ島の石

稲　葉　集　終

○根こじて　根から掘つて。

○うからやから　親族。みより。
○酒たうべ　酒を飲み。

○年あらむ　稲のよく實る豊作。
○酒ほがひ　酒をすゝめて祝ふこと。
○浦の初島　紀伊海草郡椒村の海上にある地島沖島の二島。紫色の石を産し賞石庭石に用ゐる。

後鈴屋集

本居春庭

○我が翁　本居宣長の長子春庭。

○おほぢ翁　本居宣長。

○をちこちのをしへ子たち　遠近の門人等。

○ほかにもとむる　名稱を他から求める。

○本居建正　本居宣長の養子大平の長子。

後鈴屋集序

此の集を後の鈴のや集と名づけたる事は、我が翁年頃よみいでられし歌、すべておほぢ翁のよみたたしおかれたるすがたしらべに異ならず、詞のとゝのへざまこゝろばへのめづらしきなどは、猶まさりざまなるかたに見聞きめでて、をちこちのをしへ子たちの、常に後の鈴屋翁といひはやさるゝに従ひて、又ほかにもとむることもなく、たゞあひにつけたるなりけり。かくいふは翁の家つける

本居建正

文化十三年十一月

後鈴屋集

本居春庭 詠

春歌

年の始によめる

日の本のけさのひかりや天地のうら／＼かすむ四方の初春

けさはまだめにこそたたね長閑けしと見ゆるや霞む初春の空

うれしさの餘りある代のはつ春と袂ゆたかにたつ霞かな

君が代の千年のかげにすむ民のはつ春いはふかどのまつ竹

家ごとに松の千年をしめはへて行末ながくいはふ初春

立春

春やまづ人の心にたちぬらむ霞まぬほどの空ものどけし

長閑けしなたゞ春たつといふばかり霞みそめたる空のけしきも

をしまれし心さわぎのなごりなく今朝はのどけき初春の空

○四方の初春　天下四海一樣にめでたい新年。

○袂ゆたかに　嬉しさが袂にあまるほど袂もゆたかに。古今集「嬉しきを何に包まむ唐衣袂ゆたかにたてといはましを」

○しめはへて　標繩を引きわたして。松の千年ををさめ取つての意をかけた。

○をしまれし云々　暮れてゆく年が惜しかつた焦慮の名殘もなく。

○のどけき　心さわぎに對して心の平穩な意。初春の空の靜かな穩かな意をかけた。

立春山霞

雲の色もあくれば春のよそならでかすみてかゝる葛城の山

立春浦霞

ゆく年を隔てて春になる空のかたえ霞めるをふの浦なし

羇中立春

つたかづらくる春にしもあはむとは思ひやかけしうつの山越え

年内立春

けさははや春きにけりとふる年の日數をこめてたつ霞かな

春きても猶たちのごる年波はかすみの袖にせきやとめつる

初春

春きぬと思ふ心ののどけさも立ちそふけさの朝がすみかな

よもの海霞ぞたてる波風もしづかなる代の初春のそら

初春霞

春きぬといふより早くめにたちてのどけさ見する朝霞かな

よし野山おくある春の色見えてかすみ初めたるふる里の空

初春山

○春のよそならで　春以外のものではなくて。
○かすみてかゝる　雲に。
○葛城の山　大和。
○かたえ　空のかたえ（一部分）に浦梨の片枝（かたえ）をかけた。
○をふの浦なし　麻生の浦の梨樹。新古今集「片枝さすをふの浦梨初秋になりもならずも風ぞ身にしむ」麻生の浦は伊勢。古今集顕昭注に「志摩の國にあり梨を獻ずる云々」
○つたかづら　繰るにかけてくる（來）の序。この歌伊勢物語による。
○うつの山越え　駿河安倍郡。宇津谷さ岡部との間の峠。
○年波　年次。
○心の云々　のんびりした心持がたち添ふ、朝霞も立ちそふ。
○波風もしづか　波も風も靜か。天下の太平な意をかけた。
○ふる里　吉野の宮瀧に離宮があつて雄畧、齊明、天武、持統等諸帝が行幸があつたのでふる里といふ。

年ははや暮れていなばの山の端に春たちかへる朝がすみかな

初春河

とくるより咲きこそいづれ谷山のこほりや波の花のしたひも

早春水

うち解けて岩井の氷わか水に結びかへたる今朝ののどけさ

氷のみ猶こそむすべ風さえてまだ春あさき山の井の水

早春山

春たてば山のはながら跡もなく霞にきゆるこぞのしら雪

早春河

よし野川かすむ高嶺の春の色にたちもおくれぬ浪のはつ花

音羽川こほりもけさはうちとけて跡なきなみに春風ぞふく

立ちかへり春は来にけり岩波の音なし川も氷ながれて

湖早春

遠ざかる波もみぎはにたちかへり春こそきぬれしがの唐崎

名所早春

ゆく末の春のゆた野の面影もくさのはつかにかすみ初めつゝ

○暮れていなばの山　暮れていぬ(往)に稲葉山をかけた。稲葉山は因幡國にも美濃國にもある。

○とくるより云々　谷川の氷が解けるさ、花が咲き出た。解けて花咲くから氷は花の下紐か。

○結びかへたる　氷が結んだが若水となつて掬びかへた。

○むすべ　氷の結ぶに山の井の水を掬ぶにかけた。

○春あさき　山井の淺きに言ひ掛けた。

○山のはながら　山の端も共々一しよに消える。

○音羽川　近江逢坂山の南音羽山に發し四宮川に合す。

○音なし川　紀伊。熊野。

○遠ざかる波　新古今集「滋賀の浦や遠ざかりゆく波間より氷りていづる有明の月」

○たちかへり　波が立ち返るに春がたちかへつて來るをかけた。

○しがの唐崎　近江滋賀郡唐崎。

○ゆた野　伊勢度會郡湯田。ゆたかにのどかな意をかけた。

○はつか　僅か、かすか。草の葉にかけた。

つくばねの雪もたえ〴〵解けそめて雫のたゐに春はきにけり

山家早春

たえ〴〵の軒の雫に春しるもあはれは深き雪のやまざと

春きぬと雪のしづくも松の戸にたえ〴〵かゝる朝がすみかな

子日

おひつゞく子の日の野べの小松原盡きせぬ御代の例にぞひく

いつか又けふの子の日の姫小松千代のためしにひかむとすらむ

ひき植ゑてねの日の小松年高くわれもさかえむ千代の春まで

子の日してけふより千代をわがものと宿にぞうつす野べの姫松

雪中子日

降る雪に今より千代の色見えて子の日の小松花ぞさきける

若菜

春さむみ若菜つみにとくる人も雪間もまれの春日野のはら

たゆみなく摘むとはすれどたまらぬは雪間すくなき若菜なりけり

此のごろはおふる若菜のほどよりもつむ人しげき春日野の原

摘若菜

○雫　常陸新治郡志筑。雪解けの雫をかけた。
○たゐ　田居。ゐなか。
○松の戸　松の枝を集め結びつゞけた門の戸。新古今集「山深み春とも知らぬ松の戸にたえ〴〵かゝる雪の玉水」
○おひつゞく　續いて生えてゐる。
○年高く　年老いるまで。高齢。高くは松の縁語。
○子の日の小松花ぞ云々　風雅集「雪降れば花咲きにけり姫小松二葉ながらや千世を經ぬらむ」
○春さむみ　春まだ寒いので。
○摘むとはすれど　摘むを積むにかけて雪の縁語。
○おふる若菜　生える若菜。

くる人の稀なるほどは稀ならでなか〳〵おほくつむ若菜かな

雪中若菜

人もまだしら雪深き野べにきていとゞ稀なる若菜をぞつむ

さらでだに稀なる野べの初若菜たゞ白雪のふり隠すらむ

名所若菜

春寒み雪まの若菜つむ人もたえ〴〵にのみみよし野のさと

若菜祝

春毎にわれも若菜の若がへり多くの年をつまむとぞ思ふ

若草

庭の面にながめふりぬる雪きえて色珍らしくもゆる若草

若草の一つみどりも薄く濃くおのがさま〴〵色に見えけり

もえそめし色のはつかに今は又雪こそ見ゆれ野べのわか草

おひゆかむ末野の春ののどけさもかつ見え初めてもゆる若草

庭若草

雪きえてほどなき庭のまがきにもみどり色こくもゆる若草

野若草

○しら雪　知らぬをかけた。

○たえ〴〵云々　たえ〴〵にのみ見ゆるを三吉野にかけた。

○年をつまむ　年を積まむ。若菜を摘むにかけた。

○ながめふりぬる雪　眺め舊りぬる雪。見ふるした雪。降りぬる雪

○一つみどり云々　一様な緑色も或は淡く或は濃くいろ〳〵に。新古今集「うすく濃き野邊の緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消え」

○はつかに　ほのかに。かすかに。

若草のみどりぞふかき白雪のきえて程ふるかすがのの原

春くれば空もひとつに淺みどりわか草つゞくむさし野の原

春池

春は又池の心ものどかにてみぎはに波のたちもさわがず

山家春

山里の垣ねの小草もえいでぬかれし人めもいつか見えこむ

殘雪

とく消えし梢の雪にひきかへてつれなくのこる松の下陰

たえ〴〵になりてなか〳〵木のもとは消えぬ日數の積る白雪

春の日をへだてやすらむ消えやらで垣根ばかりにのこる白雪

野殘雪

春ふかき柳さくらの色をまづみやこの野べの雪のむらぎえ

谷殘雪

春きても積りしまゝにきえやらで猶谷ふかくのこるしら雪

谷ふかみよそなる春もいちじるく猶さえのこる雪の色かな

鶯

○むさし野　大和添上郡春日野をいふ。

○かれし人め　疎くなり絶えた人の往來。

○つれなくのこる　何の縋りもなく平氣で殘る。

○消えぬ云々　白雪が消えないで日數が積る。積るは雪の縁語。

○へだてやすらむ　垣根が春を隔てもするだらうか。

○よそなる春云々　谷でない所に來てゐる春もきはだつてはつきり

○青柳の絲に玉ぬく　青柳の枝の絲で涙の玉を貫き通す。新古今集「青柳の絲に玉ぬく白露の知らずいく世の春か經ぬらむ」
○手折りつる云々　袖に梅の香が匂ふのを梅の枝を手折つたと鶯が思つたか。

○かた枝のみ　一方の枝ばかりに

○咲かぬ間云々　梅の花の咲かない間は鶯の鳴くのもたいぎさうに見えたが、花が綻びひも解いたら鶯の音も打解けた。
○なきぬやと　鶯が鳴いたかと。
○かた野　河内國北河内郡交野。
○朝けもしるき　夜のあけ方もはつきりと。
○よそにして　谷の戸をよそにして。

消えあへぬ雪も花かと見るばかり鳴く音のどけき枝のうぐひす

音になきておのが涙を青柳の絲に玉ぬく春のうぐひす

雪ふかき谷の戸いでし鶯のかへるふるすに花ぞふりしく

手折りつるものとやこゝにうぐひすの鳴きて恨むる袖の梅が香

朝　鶯

春寒みうつる日かげのかた枝のみ木傳ひてなく今朝の鶯

雪　中　鶯

降る雪におのがなく音の春ばかり埋もれのこる今朝の鶯

ふりうづむ雪をうしとや花の枝に鳴きて木傳ふうぐひすの聲

ふりまがふ木ごとの花に鶯のたどらで來なくゆきの梅が枝

花　間　鶯

咲かぬ間はものうかりつる鶯のなく音もとくる花の下ひも

野　鶯

なきぬやとかすむかた野にたちいでし朝けもしるき鶯の聲

谷　鶯

おのが音も春のひかりとよそにして移ろひいづる谷の鶯

春寒み猶いでやらで谷の戸に日數ふる巣のうぐひすの聲

花の香のたよりまつまの谷の戸にしばしやすらふ鶯のこゑ

山家鶯

鶯の聲うちとくる涙かとみやまの庵のゆきのたま水

山里は古巣ながらのはつ聲も軒端にちかき谷のうぐひす

今しばし此の山里にくちなれてみやこにいでよ谷のうぐひす

なれもまだうちとけぬまはなく聲のやまざとびたる谷の鶯

梅

たちよれば袖に薫りて見る花のあはれをそふる梅の下風

いづこぞとよそにや人のしのぶらむ軒端の梅に春風ぞふく

さく宿に人はさそはでおのれのみ空にうかるゝ風の梅が香

雪中梅

うづもれぬにほひをうしと梅がえに降りこそまされ庭の白雪

梅風

咲きぬとはつげぬ梢もふく風のたよりにとはむ宿の梅が香

色も見ぬよその匂ひを身にしめてたよりの風にしのぶ梅が枝

○日數ふる巢　日數經ること古巢と言ひ掛け。

○鶯の聲うちとくる云々　新古今集「鶯の涙のつらゝうちとけて古巢ながらや春を知るらむ」

○ゆきのたま水　雪が解けかゝつてこぼれ落ちる水。

○古巢ながら　古巢に居るまゝの初聲。

○くちなれて　口が馴れてから。

○なれ　汝。鶯にいふ。

○いづこぞと云々　春風に匂ふ梅を他所では何處で梅が匂ふのかと人が想つてゐるだらう。

○うづもれぬ云々　梅の匂ひが雪の中に埋もれないのを雪が心苦しく思つて。

○咲きぬとは　咲いたと。

さく宿をうはの空にもしのぶかな梅が香送る風のたよりに

咲きたりとつげくる人に吹く風のたよりおくれぬよその梅が香

梅薫風

さそひこぬ梢の色もふく風におもかげ匂ふよその梅が香

くれてゆく色のあはれも梅の花をしからぬまで匂ふゆふ風

梅薫袖

誘ひくる風にもうつる花の香はをる袖さぞなよその梅が枝

さそひきておのれ過ぎゆく袖の上ににほひぞとまる梅の下風

梅薫枕

さくと見し夢もまさしく手枕に薫るねざめの夜半の梅が香

夕梅

梅の花色はくれゆく軒端より香こそあはれと通ふゆふ風

夕風のあかぬ木かげにたちくれて月もうつろふ袖の梅が香

夜梅

梅の花さそふ匂ひに面影のたち枝ゆかしきよはの春風

あけて見むあすの梢の面影もよふかきほどににほふ梅が香

○うはの空に　心が浮きたつて落ちつかず。

○くれてゆく云々　夕暮の梅の色の運が見えなくなるのも惜しくない位まで。

○誘ひくる云々　梅が香を誘つて来る風にも香が移つて来るから梅の枝を手折つたら嘸かし袖が匂ふことだらう。

○さくと見し夢云々　梅が咲いたと夢見たのも正夢であつて。

○木かげにたちくれて　木陰に立つてゐるうちに日が暮れて。月の暮れるのに立つてゐて。

○面影のたち枝　面かげが立つに立枝をかけた。立枝は高く生えてゐる枝。

夜風告梅

梅咲きてにほふと見しは夢ならで手枕すぐる夜半のはるかぜ

月前梅

咲きそめて月のたち枝の梅が香も袖にほのめく夕ぐれのそら

風たえてかすむとはなき梅が香もうつるはうすき袖の月影

はし居して月に見るよは咲く花の梢もうつる袖のうめが香

さく花のおなじ色なる月影もうつりてにほふ袖の梅が香

梅が香もおなじ昔のかたみにておもかげにほふ春の夜の月

行路梅

ゆき過ぎてあかぬ梢をかへり見る袖にうれしくかよふ梅が香

すぎ來つるうさ慰めて吹きおくる情もふかき風の梅が香

水邊梅

なほあかぬ色香なりけり梅の花をられぬ水にうつる木ずゑも

梅移水

花の香も影こそ見えね春風にうつりてにほふ梅のした水

よそにのみあはれとや見む梅の花をられぬ水に匂ふ色香は

○月のたち枝　月がたつを立枝にかけた。月たつといふのは月がのぼるをいふ。

○梅が香もおなじ云々　春の夜の月も梅が香もおなじやうに昔の形見で。新古今集「梅が香に昔をとへは春の月こたへぬ影ぞ袖にうつれる」

○ゆき過ぎてあかぬ梢　通り過ぎて梅の梢を眺め飽かぬ。

○をられぬ水　折らうと思つても折ることのできない枝の映つた水古今集「春毎に流るゝ川を花と見て折られぬ水に袖やぬれなむ」

○梅移水　梅が水に映る意。

○よそにのみ云々　古今集「よそにのみ哀れとや見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり」

簷梅

よそにのみさそふ風にもあまりありてなほ軒深く匂ふ梅が香

里梅

吹きさそふ花のにほひも絶間なくつゞく梅津の里のはる風

咲きつゞく梅津の里ははなれてもにほひ絶えせぬはる風ぞふく

故郷梅

さきぬとてとふ人もなき故郷にたれをこてふの梅のはる風

とへばまづ袖ににほひて故郷のあるじがほなる軒の梅がえ

柳

春くれば道ゆく人も我がかどのはひりの柳はひいりてぞ見る

ふく風ものどけき春の色見えてたえ〴〵靡く青やぎのいと

我がかたに吹きよる風とうちとけてたのむかなびく青柳のいと

春風のふかぬ絶間もかたよりしなごりになびく青やぎの絲

柳露

風ふけばみだるゝ絲を玉のをに結ぶもはかな青やぎの露

さほ姫のねみだれがみの朝露にしをれてなびく青やぎの絲

○梅津　山城葛野郡梅津。
○故郷　古く以前に居た土地。
○たれをこてふ　誰に來いといふ　古今集一「月夜よし夜よしと人に告げやらばこてふに似たり待たずしもあらず」
○あるじがほ　拾遺集「こち吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」金葉集一「昔見しあるじがほにも梅がえの花だにわれに物がたりせよ」
○かどのはひり　門から家までの入口。
○うちとけてたのむ　我が方へ寄りついて吹くと思つて心打解けて頼みするか。解けるは絲の緣語。
○かたより　片一方に寄つた。片絲に縒つたと言ひ掛け。
○玉のを　いのち。絲を命として結ぶはかない露。亂る、絲、玉の緒、結ぶは緣語。
○結ぶもはかな　結ぶもはかない
○さほ姫　春の女神。

柳風

のどけしな霞む末野に吹く風もほのかに見えてなびく青柳

打ちなびく春の霞のたえまよりふく風見ゆる青柳のいと

打ちなびく色もかすみて吹く風ののどけさ見ゆるはるの青柳

春風もなびくにつけてたえずのみ吹きやよるらむ青柳の絲

柳靡風

大方は吹くとも見えぬ春風になびく柳のいとまなきまで

行路柳

のどけさの絶間も見えずはるゞゝと行く手につゞく青柳の絲

水郷柳

水無瀬川なびく柳の絲にのみありてゆくせの風ものどけし

水邊柳

みなせ川山もと遠くふく風もたえゞゝ見えてなびくあを柳

水底になびく玉藻の數そひて川ぞひやなぎ春風ぞふく

水邊古柳

ふちは瀬にかはるあすかの川の邊にいく春へぬる青柳の絲

○末野　野原のはての方。

○水無瀬川　攝津三島郡水無瀬(今の廣瀬)で淀川に注ぐ。

○柳の絲にのみ云々　流れゆく瀬は柳の絲にはかりあつて。

○ゆくせ　水の流れゆく瀬。

○山もと云々　山もとは山の麓の方。水無瀬からは天王山をいふ。新古今集「見渡せば山もとかすむ水無瀬川夕は秋と何おもひけむ」

○ふちは瀬云々　古今集「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞけふは瀬になる」

河邊柳

のどけしな岸の柳のいとばかり風になみよる春のかはみづ

岸柳

うちなびく絲うつりて水底に吹く風見ゆる岸の青やぎ

岸ちかき柳のいとは川風のふきくる每になみぞよりける

霞

朝な〳〵かすみ立ちそふほど見えて遠ざかりゆく春の山の端

よもの山隔たるをちのほど〳〵もよそに知られて立つ霞かな

山霞

うすくこき霞の色にをちこちのほども知らるゝ春の山のは

空たかく霞は立ちもはゞからで煙ながらにこむる富士のね

いつとなくふる白雪も立ちこめてかすみ時しるふじのしば山

時わかぬ雪も春日は色きえてかすみに埋むふじのしば山

吹上の濱風たえてうら〳〵とかすみのころもきぢのとほ山

霞隔遠樹

へだてても面かげはなほ峯の松見なれしまゝにたつ霞かな

○柳のいと云々　柳の枝だけが風に靡きよる。なみよるの靡き寄る靡き縒るに波の寄るをかけた。絲ばかり僅かに波が寄る。

○なみぞよりける　靡き寄る、縒る、波寄るの言ひ掛け。

○をち　遠方。

○うすくこき霞　淡いやら濃いやら霞の濃淡で。

○立ちもはゞからで云々　遠慮しないで霞が立つて頂上から噴き出る煙も一しよに立ち籠める。

○時わかぬ雪　富士の嶺に四季時の區別なく積つてゐる雪。

○吹上の濱風　吹上の濱を吹く風。吹上の濱は紀伊海草郡。和歌山から雜賀村に至る海濱。

○きぢ　紀路。紀伊國。紀路に著じをかけた。

野霞

もえそむる草のみどりの色ばかり空もはつかに霞む野べかな

野外霞

朝霞草のはつかにたちそめて空も緑をいそぐ野邊かな

かすが野やうづみし雪はきえて又かすみにこもる春の若草

うぐひすももゆる若菜もたちこめて春をしめ野の朝霞かな

野徑霞

吹きわくるかすみの袖もたえ〴〵にゆく人見ゆる野路の春風

水郷霞

水無瀬川ありてゆくせも見えぬまで春をふかめてたつ霞かな

さし出づる朝日の山の峯かけてかすみ渡れるうぢの川はし

江上霞

なにはがたもゆる入江のあしかびに空もけぶりてたつ霞かな

海邊霞

見るがうちにこぎゆく舟も白波のあとなくかすむ春の海原

見わたせば霞みだれて白波の花すりごろも浦風ぞふく

○もえそむる云々　芽が萌えそめるかすかな緑色ほど空もかすかに霞む。はつかはかすか、ほのかの意。

○うづみし雪　野を埋めてゐた雪

○かすみにこもる　霞の中に籠る　古今集「春日野はけふはな焼きそ若草の妻もこもれり我も籠れり」

○春をしめ野　春を占めるに禁野（貴人の占めて人を禁じた野）をかけた。

○水無瀬川　攝津三島郡。（前出）

○ありてゆくせ云々　川はあつても水の流れてゆく瀬も見えぬ程。

○朝日の山　山城宇治郡。菟道稚郎子の御墓がある。

○もゆる　芽が萌える。けぶるの縁語。

○あしかび　蘆の芽。

○こぎゆく舟云々　拾遺集「世の中を何にたとへむ朝ぼらけ漕ぎゆく舟のあとの白波」

○白波の云々　波の泡を花に見立てていふ白波の花から花すり衣につゞけた。月草の花で摺り染めた衣に浦風が吹く。

○あはと云々　阿波門即ち阿波の瀬戸(鳴門)が遙かに。淡(あは)とをかけた。新古今集「淡路にてあはと遙かに見し月の近き今宵は所がらかも」
○あやなくも　わけが分らずむやみに。
○おとはするが　音はするに駿河をかけた。田子浦は駿河庵原郡。
○若菜つむ袖云々　古今集「春日野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ」
○うち出でし波　古今集「谷風にとくる氷のひまごとにうち出づる波や春の初花」新古今集「谷河のうち出づる波も聲たてつ鶯さそへ春の山風」
○つれもなく　つれなくも。
○雪げ　雪の降りさうな空模様。
○春やむかし　水無瀬川の春よ、思ひ出される昔在原業平が水無瀬宮に惟喬親王をお訪ねした昔の深い感まで添ふ水無瀬の里。

春は又あはとはるかにあはぢ島ふかき霞のなかにたちけり

浦霞

あやなくもへだつる春の霞かなおとはするがの田子の浦波

餘寒

若菜つむ袖にはあらで春日野やなほしろたへに雪ぞふりくる

うち出でし波もこほりにたちかへり又さえわたるはるの山川

餘寒風

まちわたる花のしるべのそれならで雪ふきさそふ春の山風

つれもなく花まつ空になほさえて雪ふきちらす春のやまかぜ

餘寒月

さむけしな同じおぼろも霞にはあらぬ雪げの春のよの月

春曙

花鳥も一夜へだててあさ霞またあづらしきあけぼのの空

水郷春望

みなせ川春やむかしのあはれまで立ちそふさとの夕霞かな

春月

春の夜はかすまぬほども雪げにてくもるおぼろの月の影かな

くれふかき春のかすみに山のはもおぼろに見えて出づる月影

立ちこめて深きあはれはおぼろげにあらぬおぼろの春のよの月

程もなくふけゆく影ものどかにて人だのめなる春の夜の月

花鳥のあかぬあはれもくるゝ夜は月にこゝろのうつる春かな

霞中月

山の端はそこととも見えず春ふかくかすむ空よりいづる月影

てりもせず曇りもはてずなか空に光ぞ霞むはるの夜の月

春の夜のかすみも老の涙かといくたび月にめをしぼるらむ

かすみては心づくしも一しほの松の木のまの春のよの月

雲はれてなほも霞のかゝるとは知らでやなぎし月の夕風

春曉月

立ちこめて深きかすみのなか〳〵にひかりさやけき有明の月

きぬ〴〵の涙にくもるさほ姫のかゞみやかすむ有明の月

河春月

清瀧やかすむおぼろの影見えて川の名知らぬ春のよの月

○かすまぬほど云々　霞まない時も雪が降りさうなので曇るから朧月で面白い。
○おぼろげにあらぬ　一通りでない。
○人だのめ　人に頼みに思はせ期待させておいて、實はさもないこと。新古今集「大あら木の森の木の間をもりかねて人頼めなる秋の夜の月」
○てりもせず云々　新古今集「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしく物ぞなき」
○なか空　どちらつかずなこと。空の中程、半天の言ひ掛け。
○心づくし　氣をもむこと。古今集「木の間よりもり來る月の影見れば心づくしの秋は來にけり」
○雲はれて云々　月のむら雲を夕風が吹き拂つた。雲ははれたがまだ霞のかゝつてゐるのを知らないで夕風が靜まつたのであらう。
○さほ姫　春の神。
○清瀧　山城葛野郡。嵯峨山の西北。清瀧川は大井川に入る。
○おぼろの影見えて　おぼろにかすむ月が見えて。
○川の名知らぬ　川の名の清といふことを知らず霞に曇る春夜の月

水郷春月

春のよは月のかつらの里人も風をやたのむ霞むひかりに

面影も昔にかすむみたせがは月も心やありてゆくらむ

歸雁

なごりあれや又こむ秋もはるかなるとこよに歸る雁の別れ路

はるかなるとこよに歸る雁なれば長き春日に思ひたつらむ

色になる花のうきよと見捨てても昔にやはなかぬ春の雁がね

花の色に心うつさでゆく雁もかへるあだ名やそらに立つらむ

見すてても猶やとまりて花ざかり心はゆかじ春のかりがね

櫻さく峯とびこえてゆく空やなく／＼歸る春の雁がね

花にだにしばしめかれてゆくかたの眺められぬる雁の別れ路

名のみたつ空の霞の關こえてかけだにとめぬ春のかりがね

遠歸雁

見るまゝにあまた連ねてゆく雁も雲居にきえて數ぞ少なき

こしあきの霧の夕の面影もかすみに見えてかへる雁がね

霞中歸雁

○月のかつら　月に生えてゐるといふ傳説の桂。山城葛野郡桂村にかけた。

○風をやたのむ　月にかゝる霞を吹き拂ふ風を賴みにするか。

○色になる花　あだな色にそまる花。花がうつろふ色になるをうつろふ色戀にかけた。拾遺集「染川を渡らむ人のいかでかは色になるてふことのなからむ」

○かへるあだ名　雁は北へ歸るから戀を中途で歸るといふ浮氣だとの評判が高く立つだらう。

○猶やとまりて　心はなほ留まつて行かないだらう。

○名のみたつ　言葉だけでは霞立つといふ霞の關は雁を留めないで

○こしあき　去年雁が來た時の秋

そことなく霞む行方も春の鴈聲するほどはながめられつゝ
霞まずは遠ざかるとも今しばしゆくへや見えむ鴈の一つら
立ちまよふ霞のうちも故郷にかへる心や春のかりがね
なく聲は霞のそこときこえてもゆくかげ見えぬ春の鴈がね

曉歸鴈

見すてくる越路の秋もかへるかりあはれはかくや有明の空

夜歸鴈

ゆくまだに見るべきものを月またで歸るか鴈の夕やみの空
月花の別れをうしと夕やみのそらにや歸る春のかりがね
人しれぬよのまとならばたつ空に鳴く音もしのべ春の鴈がね

月前歸鴈

かへる鴈峯とびこえてゆくかげもほのかに見ゆる夕月の空
かすむ夜は月に横ぎるほどばかりゆく影見ゆる春の鴈がね

海邊歸鴈

待ちこひむ秋もはるかに大伴のみつのはま邊をかへる鴈がね
住よしと思ひもしらで故郷にかへるか鴈の春のうみべを

○そこゝなく　何處となく一體に

○見すてくる云々　秋越路を見捨ててこちらへ來た時の越路の人の心持も。
○かくや有明　かくやありけむの意をかけた。
○ゆくまだに　せめて飛んでゆく間だけでも。
○月またで　月の昇るのも待たないで。
○月花の別れ云々　月や花と別れるのがつらいといふのでか。
○よのまとならば云々　人に知れないやうに夜の間に歸らうといふのならば鳴く音も立てず隱れて行けよ。

○待ちこひむ云々　萬葉集「いざ子どもはやも日本へ大伴の御津の濱松待ちこひぬらむ」
○住よし云々　住みよい所（攝津住吉をかけた）と心に思ひ知ることもなくて歸るか。

燕

見わかねど軒の古巣を尋ねきてすめるやこぞの燕なるらむ

春雨

くれふかき霞がくれにふり出でておともしのぶの軒の春さめ

音たてぬかすみの空のはる雨もふるとはしるき軒の玉水

ながき日とふるもはるゝものどかにて空に急がぬ春の雨かな

音たててふるとはなしに板びさし久しくなりぬ春雨の空

さほ姫の春のながめの袖ぬれて空にしをるゝ夕がすみかな

夕春雨

雲ふかみくれぬと見えて猶しばしゆふべほどふる春雨の空

春雨もくらしわぶべき長き日とさすが夕をいそぐ空かな

閑中春雨

春雨のふるも心にかなふかな世のおとづれを厭ふすみかは

早蕨

花をまつ山の櫻の木の本にをりもたがへず萌ゆるさわらび

山ふかき軒のつま木の下蕨けさをりそへてをりを知るかな

○見わかねど　去年の鳥か今年の鳥か見ても見わけがつかぬけれど。
○おともしのぶ　音もひつそりとしのぶに軒の忍草をかけた。
○ふるとはしるき　軒の落ちる滴で春雨が降るとはつきりわかる。
○ふるとはなしに　日を經るに春雨の降るをかけた。
○さほ姫　春の神。佐保は奈良の都の東にあつて東は春を掌るのでいふ。
○春のながめ　春の眺めに長雨をかけた。
○ゆふべほどふる　夕暮に時を經る。經るに春雨降るをかけた。
○くらしわぶ　暮しあぐむ。日長で暮すになやむ。
○をりもたがへず　折も違へず。時節も違へず。折は蕨の縁語。
○軒のつま木　軒の端(つま)に爪木(薪にする折枝)をかけた。
○下蕨　物の陰に生えた蕨。

野遊

絲ゆふの長き日ぐらしみやこ人心もそらにあそぶ野邊かな

遲日

立ちいでしけさも昨日の心地して山わけごろも春ぞ日ながき

こえて又けさ見しばかり峯遠くへだてきにけり長き春日は

遊絲

春くれば心もそらにうちとけて長き日ぐらしあそぶ絲ゆふ

絶え〳〵になびくを見れば吹く風もあるかなきかの空の絲ゆふ

さゝがにのそれにはあらで長き日のしるしとかゝる空の絲ゆふ

呼子鳥

聲たえず人よぶこ鳥なくなるはなれもみ山の奥やさびしき

おくふかみ人もこずゑに聲たてて山のかひなく呼子鳥かな

雲雀

霞よりおちくるほども夕ひばり空にしられて聲ぞちかづく

暮れゆくをなれも惜しとや思ふらむ心も空にひばりなくなり

なか〳〵におちくるまゝに鳴く聲は高くなりゆく夕雲雀かな

○絲ゆふの云々　陽炎のたつ長い日を終日。絲と長きを緣語。
○心もそらにあそぶ　我を忘れて夢中になつて遊ぶ。
○昨日の心地　昨日のやうな氣がして。
○山わけごろも　山路をふみ分け入るに著る衣。

○春くれば　春が來ると。來るを繰るにかけて絲の緣語。
○あるかなきか　後撰集「哀れともうしともいはじ陽炎のあるかなきかにけぬる世なれば」
○さゝがにのそれ　蜘蛛の絲。

○人よぶこ鳥　人に來いと呼ぶ鳥呼子鳥は筒鳥、くわくこうの異名ともいふ。
○人もこずゑ　人も來ずに梢をかけた。
○山のかひなく　呼ぶかひなくに山の峽(かひ)をかけた。

○なか〳〵に云々　雲雀は下りて來ると却つて鳴聲は聲高に響く。

空高きほどもしられて鳴く音さへたえ〴〵霞む夕ひばりかな

待　花

うら〳〵とのどかなる日は中々にしづ心なく花ぞまたるゝ

さく花を朝夕見まくほり植ゑてまつもえならぬ庭ざくらかな

さくら花面影ばかりたちなれてまつにつれなき庭の木の本

待ちわぶる心の花にいそがれて咲かぬ野山をわけくらしつゝ

春の日ののどけき花の心とて咲くをいそがぬ山櫻かな

待ちわびて猶ぞ恨むるかぎりあれば咲かぬも花の心ならねど

限りありて咲かぬをしひて待つ人の心ぞおそき山櫻ばな

程なさを思へば待つにつれなきもなか〳〵花の情なるらむ

はかなしやまつにとくさくならひともきかぬ櫻に盡す心は

惜しむにはよしやとまらでつらくとも待つにとくさけ山櫻花

待山花

けふも猶さきこそやらね面影はたちていくかのみ吉野の花

今いくかありてゆくせに色深き影をみなせの山ざくらばな

雨中待花

○しづ心なく　落著いた心もなくそは〳〵と忙しく。
○見まくほり植ゑて　見むと欲しと掘り植ゑて。ほりに欲りと掘りとをかけた。
○まつもえならぬ　待つも云ふにいはれぬ。待つに松をかけた。
○まつにつれなき　待つてゐる人に花は思ひやりなく咲かない。花の面影ばかり馴れて松には冷淡である意をかけた。
○のどけき花の心　花ののんきな心。
○心ぞおそき　心が鈍い。氣がきかない。咲くが遲き山櫻とかけた。
○はかなしや　かひのない事よ。
○まつにとくさく　待つてゐる人のために早く咲く。
○惜しむには云々　花の散るのを惜しむ人のためにはたとひ留まらず散つても。
○ゆくせ云々　水無瀬川の流れゆく瀬に花の影を見せる。影を見せると水無瀨と言ひ掛け。

さびしさも花まつかたに忘られてさくやとたのむ春雨の空

尋花

櫻花さきぬと見えてたづねいる山ぐちしるくにほふ春風

たづねずばいかでかみわの山ざくら霞がくれににほふ初花

尋遠山花

咲きそむるけふ尋ねきて人はまだわけ見ぬ花をみよしのの山

尋ね見むさきてと待たばゆくまにも遠山櫻ちりもこそすれ

初花

めづらしき思ひもそひてさくら花咲きそむるよりあかぬ色かな

咲きそめてまつにつくしし世の人の心をはるのやまざくら花

庭さくら今さきそむる色見ればわが朝戸出を花もまちけり

花の歌ども

咲きそむる花も雲かとみよしのやあやまたれつる心ならひに

さほ姫は櫻ばかりと見しほどに人の心の花もそめつゝ

山櫻まつにかこちし長き日も花見るけふぞうれしかりける

まつほどの心づくしも山櫻さきてかひある花のいろかな

○花まつかた云々　花を待つといふ方のことで春雨の寂しさも忘れられて。

○山ぐちしるく　山の分け入る口もそれとはつきり。

○いかでか云々　どうして見ることができよう。いかでか見むを三輪にかけた。三輪山は大和磯城郡。古今集「三輪山をしかも隠すか春霞人に知られぬ花やさくらむ」

○尋ね見む云々　花がまだ咲かなくても尋ねて見よう。咲いてからと言つて待つてゐたなら。

○花も雲かと云々　花を雲かしらぬと見ちがへた。三吉野を見るにかけた。

○あやまたれ云々　古今集「み吉野の山べに咲ける櫻花雪かとのみぞあやまたれける」

○櫻ばかり云々　櫻ばかりを染めると思つたが、人の心の花も染めて浮きたたせる。

○まつにかこちし　櫻を待つに日の長いのを歎いたその長い日。

○かひある　心づくしのかひある

我ながらあやしきまでに山ざくら思ふか花を春のこのごろ

山ざくら濃くも薄くも見る人の心ににほふ花の色かな

さほ姫も櫻の花はわれながら染めてかひある色と見るらむ

めづらしき花とはなしにたぐひなく色香めでたき山櫻かな

かくばかり花の姿のよに似ぬも契りことなる櫻なるらむ

ほどなきものどけき春の日數にてさすがうれしき花盛りかな

うきものとさのみいとはじ春霞へだつる花も風ぞ見せける

立ちかくす霞ぞつらき山ざくら見らくすくなき花のさかりを

ふかくのみ心を人のそむるより花やうき世の色を見すらむ

まがはずば何にさきつる花の色をかけてしのばむ峯の白雲

きえがての雪とは猶も櫻花こずゑながらに見るよしもがな

見る夢も猶外ならで花にのみたゞあけ暮す春のこのごろ

さくら花ちるてふことは夢にだに思はで見ばやさよの手枕

峯の雲ふもとの雪と咲きちるも世にたぐひなき山ざくらかな

さきてとく散るこそあかね山櫻おもふことなき花の色かな

咲きなばと契りし宿の數多あればわすれぬ花もとはでちりなむ

○めづらしき云々　珍奇な花といふわけでなくてそれで色香の愛すべき山櫻。めづといふ動詞から成立したあづらしとめでたしと相對した。

○うきもの云々　風を花のためいやなものだとむやみに厭ひはしない。花を隔てる春霞を風が吹き拂つて花を見せてくれる。

○まがはずば　花と白雲と紛れなかつたならば。

○何に云々　花の色を何にかけて忍ばむ。

○きえがての雪　消え難き雪。櫻花を梢にあるまゝで消えない雪と見たい。

○峯の雲云々　峯の雲と咲き麓の雪と散る。

○さきてとく云々　咲いて早く散るのが慊らぬが。

○とはでちりなむ　自分が訪ねないに花は散つてしまふだらう。

咲けばちる花のさが野をきて見ればあらしの山の麓なりけり

さそはるゝ心なりせば吹く風を厭ふも花はつらしとや見む

朝花

咲きそめてよのまの夢のまさしくもにほふ朝けの庭ざくらかな

日影さすかたへはわきて花の色もまさるあさけの庭櫻かな

櫻花しばし見ざりしよのほどの思ひもそひて飽かぬけさかな

夕花

吹く風のくれぬにほひに面影もさながら殘る山ざくらかな

日數なきおのがさかりとさすが又ゆふべいそがぬ花の色かな

長き日に猶夕ぐれをのこしても飽かぬ櫻の花の色かな

ちりぬらむよのまもしらで山ざくらあすをぞ賴む花の夕暮

夢見花

尋ね見むあすの野山にさきだちてにほふ夢路の花の面かげ

さけばかつうつろふ花を思ひねに見るも程なき春のよの夢

月前花

さくら花月に見る夜は大ぞらをおほふ霞の袖も恨めし

○花のさが野　咲けば散るといふ花の習性(さが)嵯峨野にかけた。○あらしの山　嵯峨野につゞく嵐山。花を散らす嵐にかけた。○つらしと云々　風を厭ふのも風に對して無情冷酷なしうちだと花は思ふであらう。○朝け　朝明け。夜明け。

○吹く風云々　日は暮れても吹く風に送られる花の香は消えくらまないので花の面影も全く殘る。

○長き日に云々　新古今集「櫻さく遠山鳥のしだりをのなが〳〵し日もあかぬ色かな」

○思ひね　思ひながら寢ること。

○山鳥の　をの枕詞。
○をのへの花　峯の花。

○はるゝながめ　見はらされる眺望。霽れる長雨。

○いま一しほ云々　松の深緑ももう一段色が増る。古今集「ときはなる松の緑も春くれば今一しほの色まさりけり」

○待ちをしむ　咲くのを待つ心散るのを惜しむ心を忘れて。
○まち惜しむ心づくし　花の咲くのを待ち、散るのを惜しんで色々氣をもんだのち。

霞中花

吹く風のなぎたるけさは色よりもなか／＼薄く霞む花の香

山鳥のをのへの花の夕がすみ隔てもはてずにほふはる風

みわの山かすみがくれに咲く花の心もしらず匂ふはるかぜ

雨後花

さらでだにはるゝながめのうれしきににほふ雲間の初櫻花

花交松

深みどり木の間にさける花の色もいま一しほのはるの松が枝

盛花

待ちをしむ心わすれてさく花を見るや櫻のさかりなるらむ

まち惜しむ心づくしも山ざくらしばしわするゝ花ざかりかな

花滿山

よし野山さかり知られてふもとまでおりゐる峯の花の白雲

花滿山川

雲とさき波とうつりてよしの山峯も川せも花ぞひまなき

よし野山雪には見えし川せまで咲きうづみたる花のしろ妙

花似雲

分けこえし高嶺の花もかへり見て又雲かとぞおやまたれける

花雪

咲きおもる梢たわみて山ざくらした折れぬべきはなのしら雪

花似雪

ふりつみし雪の朝けの面影もにほふ木ごとの花ざかりかな

翫花

見てだにも老をわするゝ櫻花かざさば千代の春もへぬべし

山櫻ゆめにもさきて此のごろはよるひるとなく花をこそみれ

思花

櫻花おもふ心のゆくばかりゆきても見ばや野にも山にも

折花

をしと思ふ心もあかぬ色香にはまけてぞたをる花の一枝

山ざくらあかぬ心のすさびとや花もゆるさむ手折る一えだ

手折るとも何かやつれむ一枝はゆるせ千もとの花の山もり

ひと枝にやつるばかりの花ならば何かはをらむ飽かぬ櫻を

○分けこえし高嶺　踏みわけて越えて來た高い峯。

○した折れぬべき　今にも折れて垂れさうな。

○朝け　朝明け。曙。

○木ごとの花　古今集「雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし」

○おもふ心のゆくばかり　花を思ふ心が滿足するほど。氣のすむほど存分に。

○をしと思ふ心　手折るのは惜しいと思ふ心。

○あかぬ心云々　いくら花を眺めても擴らぬ心の進むあまりの事として。

歸るさのうさ慰めて見ぬ人のためのみならぬ花の家づと

花下忘老

春毎にかくわすれつゝ花を見ば千年も猶ぞ老いせざるべき

依花客來

あひにあひて珍らしきかなまれにとふ人まちえたる庭の初花

花下送日

かり衣たちもかへらでよしの山日數かさぬる花の木のもと

隣家花

色も香も隔てずながらわがものといはぬはねたき花の中垣

水邊花

むすぶ手にあかぬのみかは見る花の影さへにごる山の井の水

われながらえならぬ色とうつろひて花も心やり水のかけ

咲きかゝるさくらが枝に木がくれて色香もふかくたぎつ山水

櫻花そこには影のうつるとも水のあわとは浮ばずもがな

行路花

山櫻しるも知らぬも立ちよりて道のゆくての花の木のもと

○歸るさのうさ云々　歸途のいやな思ひを慰めて。

○かくわすれつゝ　かやうに老を忘れて。

○あひにあひて　よくもうち逢つて。

○かり衣　たちの枕詞。萬葉集「かりおたちうき花のかげに來て行末暮す春の旅人」

○いはぬはねたき　云はれないのは口惜しい。

○むすぶ手云々　古今集「むすぶ手の雫に濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな」

○うつろひて　水に映つて。

○花も心や云々　花も氣に入つて滿足してゐるだらう。心をやるさ遣水さをかけた。

○たぎつ山水　瀧のやうに湧きかへり流れる山水。

○しるも知らぬも　知る人も知らぬ人も。

立ちよればいそぐゆくへも山櫻見るに忘るゝ花の木のもと

なか〳〵にさかりぞをしきよそに見て過ぎ行く道の山櫻花

山　花

いかならむふもとの花もよしの山猶おく深くにほふ色香は

さかぬまぞそれかとも見しよし野山花はまがはぬ峯の白雲

吉野山なぎたる空にいちじるく朝ゐる雲や櫻なるらむ

みよしのや分けいるまゝに山ざくら花になりゆく峯のしら雲

ふもとよりまづ咲きそめてよしの山たかねにうつる花の白雲

芳野山いくよの春をかさねきてやへたつ雲と花の見ゆらむ

花ざかり心も空にわけくれて雲にやどかるみよし野の山

あすまたで見ばや夢路によしの山けふわけのこす花の行末

ちるまでは歸らで見ばや吉野山いくかもあらぬはなの盛りを

匂ひのみ風にたぐひてかづらきやよそにうつらぬ花の白くも

はつせ山木の間の櫻見えそめてかすむ檜ばらにはる風ぞふく

立ちまよふ雲もかをりていこま山花の林にはる風ぞふく

深みどり見らくすくなく波こえて花咲き匂ふ末の松山

○いそぐゆくへ云々　櫻を見るので急いで行くべき方も忘れる。

○なか〳〵に云々　なまなか花盛りであるので却つて惜しい。

○花もよしの山　花もよしを言ひ掛けた。

○朝ゐる雲云々　新後撰集「葛城や高間の山の峯つゞき朝ゐる雲やさくらなるらむ」

○心も空にわけくれて　夢中になつて山路を踏みわけてゐるうち日が暮れて。

○かづらき云々　新古今集「よそにのみ見てややみなむ葛城や高間の山の峯の白雲」

○はつせ山　大和磯城郡泊瀬山。

○檜はら　檜の木の生え茂つた原　萬葉集「みもろづくみわ山見ればこもりくの泊瀬の檜原おもほゆるかも」

○いこま山　大和河内の境生駒山

○深みどり云々　松の深緑を見るのが少なくて末の松山に白波が越えて來たかのやうに白波の如き花が咲き匂ふ。古今集「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなむ」末の松山は陸前宮城郡多賀城村。

わけきつるふもとの雲のおひ風も袖にかさなる峯の花の香

暮山花

くれふかく風もにほひてよしの山峯にゆふゐる花のしら雲

かへり見る峯に夕ゐるしら雲やあかでわかれし花の一むら

山ざくら又白雲とみねとほくよそに隔てかへる夕ぐれ

かへるさはまだ見ぬかたの心地してゆふべさきそふ花の山道

夕ばえの花を見すてて歸るさは心もくるゝ春の山みち

名所花

花ざかりよそめのみかは分けきても猶雲ふかきみ吉野の山

白雲の中にぞおつるよしの川峯のさくらの影うつるころ

よし野川高嶺のさくら影見えて雲の波ちをくだすいかだ士

關花

咲きしよりゆききとゞめて逢坂やとざさぬ關も花ぞゆるさぬ

關路花

こえがてにゆききとゞめて咲きにほふ花ぞ關もる逢坂の山

のる駒も猶や心のとまるらむ花にすゝまぬ足柄のせき

○峯にゆふゐる　峯に夕方居る。

○まだ見ぬかた　新古今集「吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬかたの花を尋ねむ」

○心もくるゝ　日も暮れ心もくるる。心もくらむ。

○高嶺のさくら　高い嶺の櫻。

○とざさぬ關云々　關の戸を鎖さぬ逢坂の關でも花が人を通さぬ。

○こえがてに　越え難く。

○花ぞ關もる　花が關所の番をして人を停める。

海邊花

うちよする磯山ざくら吹くからになみの花さへ匂ふうら風

閑居花

こぬ宿は花に人まつくるしさも知らでのどかに見る櫻かな

ふりにける身のかくれがに咲きにほふ色あたらしき山櫻かな

はかなしやおなじ色香も人とはぬ宿に櫻のはなの契りは

山家花

花にのみ山さくら戸を明けくれて寂しさしらぬ春のこのごろ

見せばやと花のさかりはさびしさにあらで人まつ山陰の庵

旅宿花

さけば又人めまたれて花ゆゑの思ひぞたえぬ春の山ざと

たびまくらしのぶ都の夢ならで見つゝなぐさむ花の下ぶし

花下旅宿

とくおそく匂ふひかりに明けくれていとゞ短き花の下ぶし

花主

うゑて見る花のあるじの心までよそめゆかしき庭ざくらかな

○うちよする　波がうちよする。
○磯山ざくら吹くからに　磯山に咲く櫻を吹くによつて。

○こぬ宿　人が來ない家。

○山さくら戸　櫻の木で作つた戸
○明けくれて　花にのみ夜が明け日が暮れて。戸を明けるにかけた
○さびしさにあらで　寂しさに人を待つのでなく見せたいと思ふので人を待つ。
○さけば又云々　花が咲くと人が見るのが待たれて。

○とくおそく云々　花が照り輝く光に夜も早く明け日も暮れて。

○よそめゆかしき　他から見てもゆかしい。

庭櫻たゞ一枝もなか〱に花のあるじはえこそたをらね

花　衣

かさねこし日數ばかりは咲く花の山わけ衣いろぞ移らぬ

こぬ人の羨むばかり色そめて花ずり衣たちかへらばや

花　鏡

かくて猶花の下ゆく水かゞみ日數をうつせちりもかゝらで

水の面ににほふ日數のうつるより花の鏡やちりかゝるらむ

ちりかゝる花の鏡のみづからもさかり過ぎぬる影やかなしき

ちりかゝる水の鏡は影たえてあらしにうつる花のいろかな

花　夢

おもひねにわけ見る花も跡たえてさそふ嵐の夢の通ひ路

志賀山越

花さそふつらさもけふは忘られて風おもしろき志賀の山越え

落花の歌ども

さく花をあかぬ心に木傳ひておのれと散らす枝のうぐひす

ちる花をぬきてとめよとこきまぜて植ゑしかひなき青柳の絲

○日數をうつせ　幾日も長く日數を移して長く散らずつゞかせよ。鏡に花の影を映せをかけた。

○花の鏡　池に花の影の映るを鏡と見ていふ語。

○花さそふ云々　風が吹いて花を誘ひ散らす風の無情なことも忘れて。

○志賀の山越え　近江滋賀郡志賀山を越えて山城愛宕郡白川に通ずる山越え。

○木傳ひて　木の枝から枝へ傳ひ移つて。

○ぬきてとめよと　緒に貫いてとめておけよと。

○こきまぜて植ゑし　かきまぜて植ゑた。古今集「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ花の錦なりける」

○嵐のやま　山城葛野郡大非川の南。花ヽ誘ふ嵐をかけた。
○まつにのみ　花咲くのを待つことにばかり。
○かさねて　衣と緣語。
○故郷　吉野は古昔離宮があつて屢々行幸のあつた舊蹟であるから故郷といふ。
○さても猶　それ程までにしてもなほ。そんなに花を誘ひ散らしてもなほ物思ひがあるかと。
○色香にあらで　色香の類ないのではなくて。
○ちることのときは　散ることの早いのは。
○命にかへて云々　古今集「命にもまさりて惜しくあるものは見はてぬ夢のさむるなりけり」
○まつに云々　待つときに早く咲かないばかりでなく。
○うす花ざくら　櫻花の色のうすいのをいふ。

さそはれむ契りありてや櫻花嵐のやまに匂ひそめけむ
類なきいろ香ぞやがて櫻花ちりゆく今日のつらさなりける
あかでこそうつろひにけれ山櫻おもふ心を花やしりけむ
まつにのみ日數かさねて花ごろもなるゝまもなくちる櫻かな
雲と見しきのふの花やよしの山けふ故鄕のゆきげなりけむ
さても猶ものや思ふと花さそふ風の心になりみてしがな
櫻花ちらずば千代と思ふにも年のわかれにまさる今日かな
さくら花色香にあらでちることのときは類のなきぞ悲しき
山櫻命にかへてをしめとや見はてぬ夢と花のちるらむ
いとゞ世のうきめを見せて人心さそひがほにもちる櫻かな
まつにとく咲かぬのみかは惜しむにもとまらでつらき山櫻かな
ちる花のわすれがたみの面影にくもふく峯の風もうらめし
見し花の面かげのこる梢にもなほいとはしき春のやま風
日にそへてのこる梢の面影もうす花ざくら色ぞきえゆく
散る花の忘れがたみとなりにけりそれかとも見し峯の白雲
跡もなく峯のあらしにさそはれて花もきのふの空のうき雲

いつまでか思ひたえなで峯の雲跡なき花をかけてこふらむ

惜落花

櫻花ちりかひくもる別れ路にをしむ心ぞゆくかたもなき

曉落花

をしみてもとまらぬ色の深くのみ身にしみかへる花の別れ路

朝落花

てりそひて有明の影もきえがてに夜ふかくつもる花の白雪

夕落花

覺めやらぬ夢かとばかり庭ざくら散りぬる花にたどる朝戸出

夜落花

花さそふ嵐の色もくれはてて降りしくさくら雪とだに見ず

夜思落花

山ざくら見はてぬ夢のこゝちしてよのまの風に花ぞ跡なき

月前落花

よるもなほ心みだれてちる花のおも影見ゆる夢の手枕

花さそふ高嶺を出づる影見ればあらしに曇るはるの夜の月

〇ちりかひくもる　散り交つて晴く曇る。古今集「櫻花散りかひくもれ老いらくの來むといふなる路まがふがに」

〇覺めやらぬ夢云々　覺めきらない夢だとしか思はれぬほど。

〇心みだれて　みだれては心が亂れるのと花が亂れて散るのとかけた。

風さそふ花の梢にうつろひて月の光も散るさくらかな

月影も梢あらはにうつろひて花のいろそふ庭のおもかな

風前落花

風はやみおほふ霞の袖ながら空にみだれて散るさくらかな

落花隨風

雪とだに積らばちるもよしの山嵐にたぐふ花ぞつれなき

ひたぶるにまかする花の心とて散りゆくさへも風のまに〱

をしみえぬ心もそらに消えかへりあらしにまよふ花の浮雲

雨中落花

うづもるゝ苔のみどりをちる花の梢にいそぐ庭の春さめ

落花如雪

よし野山花まちどほに雪さえし面影見えて散るさくらかな

咲きつゞく枝にあらしの跡見えて雪ちりかゝる花の木のもと

おもしろく雪とふるにも山ざくら思ひふかむる花の色かな

ちりぬれどさすがうれしく消えがてに長き日をふる花の白雪

庭落花

○花の梢にうつろひて　月の光が散る花に映つて月の光も散る。

○風はやみ　風が早いので。

○霞の袖ながら　霞の袖で覆うたまゝで。

○雪とだに云々　雪と積りさへすれば散つてもよい。散るもよしから吉野山につゞけた。

○嵐にたぐふ　嵐と一しよになる

○ひたぶる云々　一途にすべて他に任する花の心だと言つて。

○花まちどほ云々　花の咲くのも待遠しく雪が寒くあつた當時の面影が見えて。

○消えがてに　消え難く。

○日をふる　日を經る。降るにかけて雪の縁語。

君もやとまち見し花はきのふにて跡なきけふの庭のしら雪

雪とだに見せばや庭の花盛りあすより後も人のとゝかし

花ちれば心ながらにうつろひてまたれし人もいとふ庭かな

櫻ばなちりしく庭に鶯も跡いとへばや人くとはなく

ちりつもる庭にあらしの跡つけて又さそひゆく花のしら雪

庭上落花

ひと盛りありての後も庭の面にながめふりせぬ花の白雪

よそに又ふきやさそふと散りはてし花にもいとふ庭の春風

水上落花

水のあわと波に浮びて櫻花いとゞあだ名のたちやそふらむ

行路落花

立ちよればなか／＼袖にはらひあへず雪とふる野の花の下陰

山落花

吹きまよふ嵐や花をさそふらむしらくもさわぐみよしのの山

ふきすさぶ峯の嵐のほど見えてふもとにふかき花のしら雪

ちると見てかへる山路の衣手につもるもうれし花のしら雪

○君もやこ　古今集「ひとめ見し君もや來ると櫻花けふは待ちみて散らは散らなむ」

○雪とだに　古今集「けふ來ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」新古今集「今日だにも庭を盛りと移る花きえずはありとも雪かとも見よ」

○心ながら云々　花のうつろふにつれて心も一しよに移りかはつて

○人くとはなく　人が來ると鶯が鳴く。大和物語「蓬生ひて荒れたる宿を鶯の人來と鳴くや誰とか待たむ」

○ひと盛り　古今集「いざ櫻われも散りなむひと盛りありなは人にうきめ見えなむ」

○雪とふる野　雪と降る野。大和山邊郡布留附近の野を言ひ掛け。

○日數も云々　日數も早く移り經過して。うつろふは花の色あせしぼむを言ひ掛けた。

○消えずはあれども　古今集「けふ來ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」
○あすか訪ひきて云々　古今集「けふ來ずは明日は雪と」の歌によつた。
○雪とふる里　花が雪と降る里。飛鳥のふるさとをかけた。飛鳥は大和高市郡。推古天皇から持統天皇までの舊都で故里といふ。
○なか〳〵に　なまなか散り殘つてゐるので却つて。
○たがふる郷　誰が昔住みまたは通ひなれた跡の土地。
○昔すみれ　昔住んだ人。菫に住みをかけた。

河落花

やま川や高ねの花の雪げにもたちこそまされ水のしらなみ

よし野川日數もはやくうつろひてよどまぬ水に花ぞ流るゝ

山家落花

のがれえぬ花のうき世は都にも猶ちりまさるみよし野の奥

住みわびぬこゝもうきよと散る花の行方ゆかしきみ吉野の奥

唐土に咲かぬよしのもありときく散る花のよを行きて逃れむ

故鄉落花

故鄉は人めながらと思ふにも心ほそしや花のわかれぢ

けふも猶消えずはあれども花の雪ふりにし里はとふ人もなし

待つ人はあすか訪ひきていかに見むけふだに雪とふる里の花

花殘枝

なか〳〵に寂しかりけりおのづから散り殘りたる花の梢は

菫

花見ればたがふる鄉のかきねぞと昔すみれの人もなつかし

苗代

せきいるゝ民の心もゆく川の水ゆたかなる小田のなは代

思ふ事なはしろ小田に行く水を心のまゝにせきぞ入れつる

しめはふる今より水もゆたかにて末たのみある小田の苗代

躑躅

花も又今一しほと色そふるゆふ日をまつの下つゝじかな

山吹

山吹の花の影見る川水やうつろふ春のかたみなるらむ

夕山吹

越えゆかでしばしまがきの山吹に夕ぐれのこる春の色かな

籬山吹

夕暮の色ににほひてゆく春をとむるまがきのやまぶきの花

里山吹

行く春のをしさもしらじ山吹のはな見てくらす井手の里人

花ちりし春のゆくへを尋ぬれば里のかきねにのこる山ぶき

故郷山吹

とふ人もなき故郷のかきねとてこたへぬ色にさける山ぶき

○心ゅゆく川　心ゆく（滿足する）と流れゆく川と言け掛ひ。
○思ふ事なはしろ　思ふ事なしと苗代をかけた。
○しめはふる　苗代に注連繩を張りわたした。
○たのみ　賴み。田の實卽ち稻の實るをかけた。
○ゆふ日をまつ　待つに松をかけた。
○うつろふ春　時移り過ぎる春。川水に影の映るをかけた。
○越えゆかで　夕日がまだ籬の山を越えて行かないで。
○井手　山城綴喜郡。蛙と山吹の名所。千載集「山吹の花さきにけり蛙なく井手の里人いまや訪はまし」
○こたへぬ色　答へもしない顏つきで。訪ふ人を問ふ人に通はしいふ。

杜若

かきつばた水の綠に紫のいろこきまぜて隔てやはする

池杜若

池水の波の花さへむらさきの色にさきだつかきつばたかな

藤

立ち返り見てだにあかぬ藤波になどゆく春はとまらざるらむ

をしめどもとまらぬ春を色に出でてうらむらさきの藤浪の花

松上藤

十かへりの花のためしの千代かけて匂へときはの松の藤なみ

咲きかゝる花のけしきもこと木よりたちまさりたる松の藤波

深みどり見らくすくなく藤波の花にかくるゝいその松がえ

暮春

待ちをしむ心づくしの花の色に春の日數もうつろひにけり

暮春霞

おのれさへたちもとまらで絶え／＼にくれゆく春の夕がすみかな

立ちこめて春のわかれの夕霞くるゝをいそぐ空もうらめし

○いろこきまぜて　綠の色に紫の色をかきまぜて。　紫の色濃きをかけた。

○藤波　藤の花の垂れ靡いてゐるのをいふ。

○色に出でて云々　顔に顯はして恨む。恨むとうら紫とかけた。うら紫は紫に同じ。詞花集「さはぬまをうら紫に咲く藤の何とて松にかゝりそめけむ」

○十かへりの花　本朝文粹「律獨南面。松花之色十廻。」

○深みどり云々　松の葉の深綠は見ること少なく。見らくは見るの延音。

○待ちをしむ云々　花の咲くを待ち散るを惜しみいろ／＼氣をもみ心配した。

○おのれさへ　夕霞自分までも。

○春のわかれ　春が暮れてゆくこと。

さほ姫の春のわかれの夕霞そでふる山の色ぞくれゆく

暮春月

ゆく春の霞の袖のわかれぢにのこるも薄きありあけの影

はかなしや殘る光もたえ〴〵になりゆく春のありあけの月

暮春鳥

たかくのみしたふ雲雀の聲すなり空にや春の暮れてゆくらむ

暮春鶯

鳴きとめぬ花にもこりず行く春の別れをしたふうぐひすの聲

三月盡

いつしかと晴間待つまにけふは早暮れゆく春のながめをぞする

徒然の春のながめもけふのみと思へばはるゝ空もまたれず

けふのみと思はぬだにも晴れやらで猶袖ぬらす春のながめを

夏歌

首夏

けさ見れば跡こそなけれ春霞きゆるや夏のへだてなるらむ

○そでふる山　大和吉野郡吉野袖振山。

○ゆく春の云々　新勅撰集「ゆく春の霞の袖を引きとめてしをるばかりや恨みかけまし」

○殘る光もたえ〴〵　春が暮れて春の日數も殘りなくなつたのに、有明月の光の微かなるをかけた。

○春のながめ　眺めに長雨をかけた。眺めは物思ひにうつとりと見つめるをいふ。

○はるゝ空　長雨の晴れる空。つくづく打眺める物思ひの晴れる。

○跡こそなけれ　春霞のあとも影もない。

○春霞きゆる云々　春霞の消えることが夏と春との隔てであるだらう。

○夏かけて　春から夏にわたつて
○たちおくれ　たちは波の縁語。
○藤波たちかへり　藤波は藤の花の靡き垂れたのをいふ。たちかへりは波の縁語。
○春のものとて　夏になつても藤波を春の時節の物といふことで。
○夏衣たつや　夏立つ衣をいひ裁つをかけて縁語。
○惜しさ　夏衣をぬぐが惜しい。
○うらなく　何心なく。思慮なく。夏衣の裏無くをかけた。
○いとひこし云々　拾遺集「花散るといとひしものを夏衣たつや遅きと風を待つかな」
○おきうし　朝起きるのがつらい
○色も香もおくれてさかば　時節に遅れて咲く遅櫻も色も香も劣つて咲いたならば。
○名にしおはば　遅櫻といふ名に背かないならば。

首夏藤

夏かけて猶ぞ咲きそふゆく春にたちおくれたるふぢ波のはな

なつかけて匂ふ藤波たちかへり春のものとて猶しのばまし

更衣

夏衣たつやならひをたがへじと惜しさも捨ててぬぎぞかへつる

花染のあかぬたもとの夏衣うらなくたれかかへはじめけむ

いとひこし風もまたれて心さへうつればかはる花染のそで

朝更衣

立ちかへむけさもおきうし花衣きつゝなれぬる袖のわかれに

羇旅更衣

都思ふ心はけふもうつろはで袖のみうすき夏ごろもかな

餘花

色も香もおくれてさかば遅櫻一木をかくはあはれとも見じ

名にしおはば散るてふこともおそ櫻盛り久しき色にさかなむ

色はえてしげる青葉のなか〳〵に心そめます遅ざくらかな

尋餘花

○山路にのこる面影　山路に残つてゐる春の時節の櫻の面影。
○みわの山云々　古今集「三輪山をしかもかくすか春霞人に知られぬ花や咲くらむ」
○立ちそひて云々　立ちそひてまた見るをかけた。
○みよし野云々　吉野の奥をおくれてと言ひ掛けた。
○それかと見えて　花かと見えて
○猶しのべ云々　青葉にもなほ花を思ひ出せといふのでか。
○猶たちなるゝ　花が散つてもなほ花の頃と同じく木の下に立ち馴れる。

尋ねゆく山路にのこる面影やおくるゝ花のしるべなるらむ

みわの山霞がくれや尋ねまし風にしられぬ花もありやと

山餘花

咲きのこる一木の花に立ちそひて又みよし野のはるのおもかげ

遲櫻

ちりしける雪ふみ分けてみよし野のおくれて匂ふ花を見るかな

新樹

花の雲あとなく消えて夏木立みどりにはるゝ今朝のやまの端

咲きまじるそれかと見えて夏木立青葉にのこるはなの面影

昨日こそ花は散りしか庭ざくらにはかに深くしげりぬるかな

しげれるも櫻が枝と思はずばいかにいぶせき青葉ならまし

新樹風

青葉にも猶しのべとやちる花の面影見するつゆの朝かぜ

いとひこし風もなつかし庭櫻はなのこずゑもかはる青葉に

庭新樹

夏きてもしげる青葉に風まつと猶たちなるゝ庭の木のもと

花ゆゑの人めはかれて青葉のみしげくなりゆく夏の庭かな

あかず見し花の枝とも夏木だちうとましきまでしげる庭かな

山新樹

わかれずよかすみ晴れても夏木立空のみどりにつゞく山のは

雨中新樹

さらでだに雨のふるやのいぶせきにおひそふ軒の夏木立かな

卯花

咲きしよりやみも月夜も隔てなく光さやけきかきのうの花

照る月はもらぬ青葉の木がくれに影をうつしてさける卯の花

くもるともふるともなくて庭の面に積れる雪やさける卯の花

籬卯花

卯の花のさける籬も時しらず雪ふりつもる山とこそみれ

閑居卯花

とはれじとのがれて誰か住みぬらむ世をうの花にかこふ庵は

里卯花

夏きぬとほすや衣の白たへに色さきまがふ里のうの花

○花ゆゑの人め云々、花があつたので人が尋ねて來たその人めも絕えて。
○花の枝とも夏木立　花の枝とも無いを夏木立にかけた。
○かすみ晴れても云々　花の山の端と霞とつゞいてゐた霞が晴れても夏木立の綠と空の綠と別れずつづく。
○雨のふるや　雨の降ると古家とかけた。
○いぶせきに　晴々しないに。
○やみも月夜も云々　闇の夜も月の夜も區別なく。へだては垣の緣語。
○とはれじと云々　人に訪はれない樣にとこの庵に誰が住んだか。
○世をうの花　世が憂しといふので。卯の花に憂をかけた。
○夏きぬ云々　萬葉集「春過ぎて夏來るらし白妙の衣はしたり天の香來山」

海邊卯花

見はたせばまがきの島の卯の花に咲きつゞきたるおきつ白波

卯花如月

さきしよりよひ曉のやみもなしうの花月夜きよきかきねは

木の間よりもりくる月のおもかげをうつすゆふべの庭の卯の花

葵

千代かけて絶えぬかざしと葵草そのかみ山におひはじめけむ

待郭公

時鳥いかにしのびてかくばかり思ふにまけぬ初音なるらむ

一聲もきかでいく夜か時鳥まつをならひに明くるしのゝめ

かくばかり思ふ初音を心なくしのぶいは木の山ほとゝぎす

なれも又そらにしのびて時鳥たゆむ心の程やまつらむ

村雨もそらだのめなる習ひとはいつよりなりしやま時鳥

郭公山のかひなくたちぬれて待つもいく夜のあかつきの露

時鳥くものまぎれの賴みだにつれなきよその村雨の空

まつよりや思ひあがりて時鳥雲のよそなるひとこゑもせぬ

○まがきの島　陸前宮城郡。鹽釜の海上十餘町にある島。

○よひ曉のやみ　宵闇曉闇。

○うの花月夜　卯の花が白く咲いたのを月に見立てていふ。

○そのかみ山　其の神山。神の鎭まります山。こゝは山城上賀茂神社の東の山。そのかみに昔の意をかけた。新古今集「いかなれはそのかみ山の葵草年はふれども二葉なるらむ」

○まつをならひに　聞かないで待つのをくせにして。

○かくばかり云々　これ程まで待ち思つてゐる熱心さに根氣負けもしないで初音を聞かせぬことよ。

○心なく　無情に。

○いは木　石や木、無情のもの。磐城山をかけた。磐城山は駿河庵原山をいふ。夫木抄には磐城駿河伊豆とす。

○そらだのめ　頼みに思はせておいてそのかひのないこと。

○かひなく　待つかひなく。山のかひ(峽)をかけた。

○まつよりや　人が待つので增長して一聲も鳴かぬのか。

○ともにやと　有明の月の出ると共に郭公が鳴くだらうかと。新古今集「有明のつれなく見えし月は出でぬ山時鳥待つ夜ながらに」
○こてふに似たる　古今集「月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たずしもあらず」

○空にのこりて　恨みが殘ると月が夜が明けても空に殘るをかけた

○かたらずば云々　人が郭公を聞いたと語らなかつたならばまだ時節が早いのだと思つてそれなりにすむだらうに。やま時鳥は思ひてもやまむをかけた。
○尋ぬるかひ云々　尋ぬるかひもなかりを鳴かぬとつゞけた。かひに峽(かひ)をかけた。
○ふりいでて　聲を高く張り上げて。降り出でてにかけてむら雨の縁語。
○一こゑは　一聲だけはつきりともらせよ。

月前待郭公

ともにやと待つにつれなく有明の月のみ出づる山ほとゝぎす

影すみて月もこてふに似たる夜はいとゞまたるゝ山時鳥

對月待郭公

あはれそふならひも知らで時鳥月のためとや猶しのぶらむ

時鳥まつ夜つれなきうらみさへ空にのこりて月ぞあけゆく

與女待郭公

時鳥なく一聲をもろともに待つもはかなきねやの手枕

人傳郭公

われも又いつかかたらむ時鳥人づてにのみ聞きわたりつゝ

かたらずばまだしきほどと思ひてもやま時鳥人づてもうし

尋郭公

時鳥日數かさなるやま越えて尋ぬるかひもなかぬつれなさ

郭公

契りあらばおのが初音も時鳥ふりいでてなけむら雨の空

一こゑはしのぶならひを忘れても定かにもらせ山時鳥

さよふけてもらすにぞしる郭公またでは聞かぬ初音なりとは

さよふかく待たずばきかじ鳴く聲も月のはつかの山時鳥

郭公それかあらぬか村雨の雲のまよひの夕暮のこゑ

時鳥きかで明けぬるなつの夜をなく一聲とたれうらむらむ

ひとこゑは夢かうつゝか待ちわびてたゆむまくらのやま時鳥

時鳥たゞひと聲と思ひしはまだ聞かぬまの心なりけり

遠ざかる今一聲ぞなか〳〵にそれと聞きつる山ほとゝぎす

おどろかす夢のゆくへも一聲に跡なきよはの山ほとゝぎす

待ちわびてぬる夜のゆめを時鳥かこちがほにもおどろかすかな

村雨のたのみは過ぎてほとゝぎす思ひたえぬる空になくなり

郭公やどりしてなけわが袖のなみだもかさむ軒のたち花

たち花にやどるとならばとことはに鳴けやさ月のやま時鳥

有明の月もかくれて時鳥なきつるかたはむら雨の空

をしめとておどろかす音もさやかなる月のいるさの山時鳥

きく人の袖のなみだも紅にふりいでて鳴くほとゝぎすかな

ねもやらずまたれし聲も此のごろはゆめおどろかすやま時鳥

○月のはつか　二十日の月。聲のはつか(かすか)をかけた。
○それかあらぬか　古今集「去年の夏なきふるしてし郭公それかあらぬか聲のかはらぬ」
○雲のまよひ　雲のまぎれ。新古今集「一聲は思ひぞあへぬ時鳥たそがれ時の雲のまよひに」
○なく一聲　古今集「夏の夜のふすかとすれば時鳥なく一聲にあくるしのゝめ」
○まくらのやま時鳥　枕邊に聞える山時鳥。枕の山(枕邊に近い山)をかけた。
○たゞひと聲　たつた一聲だけ聞きたいと思つたのは。
○おどろかす夢　時鳥がさまさせたわが夢。
○かこちがほ云々　夢をさまさせたのは待つてゐるからだとかこつけがましくも夢をさまさす。
○思ひたえぬる　斷念した。
○たち花云々　萬葉集「五月山花橘に時鳥かくろふ時にあへる君かも」
○有明の月云々　千載集「時鳥鳴きつる方をながむればたゞ有明の月ぞのこれる」
○月のいるさの　入佐山は但馬。千載集「夕月夜いるさの山の木隱れにほのかに名のる時鳥かな」

曉郭公

あり明の月にしのばば時鳥おなじつらさの名をやのこさむ

有明の月を殘しておのれまづいるもつれなき山ほとゝぎす

時鳥くものいづくの一聲とながむるそらに月ぞあけゆく

つらからぬこゝろはなか／＼有明のそらにのこらぬやま郭公

朝郭公

きほひあへず今一聲は明けはてて月におくるゝ山ほとゝぎす

夜郭公

さむる夜のうつゝをかけて時鳥なきこそわたれ夢のうき橋

くるゝより曉かけていく聲となくやさ月のやまほとゝぎす

月前郭公

まさりゆく光にならへ三日月のこよひほのかに鳴く時鳥

郭公まだ里なれぬはつ聲をうき世のほかの月になくなり

いでいるもおのがさ月の影とてやなきてともなふやま時鳥

もろともにいでて鳴く音のさやけさも月におくれぬ山時鳥

時鳥なみだに影やくもるらむ月に鳴く音のかこちがほなる

○あり明の云々　つれないと云はれる有明の月が出たのに郭公がなほ忍び隱れてゐるならば。新古今集「有明のつれなく見えし月は出でぬ山郭公待つ夜ながらに」

○きほひあへず　月と競うて爭ひかねて。

○うつゝを云々　現から夢へかけて鳴きつゞけてゐる。夢のうき橋は夢たいふ。かけるとわたるとは橋と緣語。

○まだ里なれぬ　金葉集「深山出でてまだ里なれぬ郭公うはの空なる音をやなくらむ」

○月におくれぬ　月に遲れぬと月に劣らぬとを言ひ掛けた。

○かこちがほなる　月にかこつけたやうに見える。千載集「歎けとて月やはものを思はするかこちがほなるわが淚かな」

いづるよりいるまできけど時鳥なほあかつきの山の端の月
影さらずよすがら月の白玉になく音あへぬくほとゝぎすかな
夏木立つきの桂のかげにきて鳴く音もしげき山ほとゝぎす

雨中郭公

一聲のなみだそゝぎて村雨も過ぎゆくよひの時鳥かな
いぶせさをなれもわびてや五月雨の晴れぬ雲居に鳴く時鳥

遠郭公

山の端を猶いでやらでほとゝぎす待遠にのみ聲ぞきこゆる
里なれむほども雲居の心地してなほこゑ遠き山ほとゝぎす
此の里はなかでや過ぎしほとゝぎす今一こゑもをちかたのそら

山郭公

いとゞしくまたれこそすれ初聲を聞きしのちせの山時鳥
なく聲もよるこそまされつまごひの心のさがの山時鳥

杜郭公

なきぬべきけしきの杜の木がくれにやがてほのめく時鳥かな

河郭公

○なほあかつき　曉にあかぬをかけた。
○影さらず　必ず附き添うて姿を離さず。新古今集「卯の花の垣根ならねど郭公月の桂の陰になくなり」
○よすがら　終夜。
○あへぬく　合はせ貫く。萬葉集「わがせこは玉にもがもな時鳥聲にあへぬき手にまきてゆかむ」
○いぶせさ云々　五月雨の鬱陶しさを時鳥よ汝もつらく厭うてか。
○なかでや過ぎし　鳴かないで通り過ぎたか。
○いとゞしく　いよ／＼ひどく。
○のちせの山　後瀬山。若狹小濱の南にある小山。聞きし後とかけた。
○つまごひ云々　妻を戀ふ心のならひとして。さが(性)と嵯峨とをかけた。
○けしきの杜　大隅始良郡小川村氣色森。鳴きさうな氣色をかけた。
○ほのめく　ほのかに様子にあらはれる。

よし野川岩波たかく鳴く聲はうちもまぎれぬ山ほとゝぎす

里郭公

時鳥まつくるしさも今はなし里をばかれずなき渡るころ

聞郭公

時鳥まつに心のたゆまねばほのかなる音も聞きぞたがへぬ

郭公遍

聞きもらす人もやあると里ごとにをちかへりなく時鳥かな

旅宿郭公

時鳥みやこの夢にかへて待つ旅寢としるやよはの一こゑ

みやこ思ふよはの涙をおのが音にかりねとふらむやま時鳥

郭公歸山

おそく出でしつらさのみかは惜しむにもとまらで歸る山時鳥

早苗

長き日をたのむのさ苗忘らばとりやははてむ千町八千町

夕早苗

ほどもなき家路もしるく暮るゝまでさ苗とるなり里の垣つ田

○よし野川云々　古今集「よし野川岩波たかくゆく水の早くぞ人を思ひそめてし」

○里をばかれず　里を遠ざからずかれずに絶えずの意をかけた。

○ほのかなる音　かすかな鳴聲。

○をちかへりなく　くり返し〳〵鳴く。拾遺集「郭公をちかへり鳴けうなゐごが打垂髮の五月雨のころ」

○夢にかへて待つ　見るべき都の夢を見ないで起きて待つ。

○おそく出でし云々　郭公が遲く出て來た冷淡さ無情さばかりではない。

○たのむ　田の面。

○とりやははてむ　取り終へることができやうか出來ない。

○ほどもなき云々　家へ歸る途がどれ程もなく近いのもわかつて。

○垣つ田　垣のうちにある田。

くれゆけば葉末の露も小山田に月をまちとる夕早苗かな

菖蒲

あやめ草猶ふるさとや忍ぶらむ玉のうてなにふくも露けし

深き江におひてあやめの草の露玉のうてなにかゝるけふかな

けふも猶軒のあやめの影見えてひきつともなき庭の池水

簷菖蒲

あやめ草かりふくけふは賤がやもさ月の玉のうてななりけり

かりふきて玉の臺も賤がやもあやめわかれぬけふの軒かな

今日も猶あやめわかれぬ軒端にてふくもはかなき草の庵かな

旅宿菖蒲

かり寝するあやめの草の枕にはふる里忍ぶねさへかけつゝ

盧橘

心あらばとこ世に匂へいにしへを忍ぶにあまる軒の立花

見し夢の昔のひとの袖の香にかをるねざめの軒のたちばな

夜盧橘

ふりしよを忍ぶ枕の夢よりもさだかににほふ軒のたちばな

○月をまちとる　月を待ちつける月の出るまで早苗とる。待ちとるに早苗取るをかけた。

○玉のうてな　玉で飾った高樓。うてなは屋根のない高どの。

○ふくも露けし　菖蒲をさしてあるのが露けくあるのは菖蒲もその故郷を思うて涙を流したのか。

○ひきつともなき　菖蒲を引きぬいたが葺いた菖蒲の影が水に映つて引きぬいた跡とも見えない。

○あやめわかれぬ　區別がつかない。菖蒲を言ひ掛けた。

○とこ世　永久變らず。垂仁紀にある田道間守が非時の香菓の橘を求め來たといふ常世國をかけた。

○昔のひと云々　古今集「さ月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」

匂ひ來てさめしゆめぢのさよ衣むかしにかへす軒のたち花

盧橘驚夢

匂ひ來る風に昔の夢さめてしのぶも遠しのきのたち花

簷盧橘

よゝをへて忍ぶ昔をほど近くにほふもうれし軒のたち花

古宅橘

くちもせず昔ながらの匂ひにてふるさとしらぬ軒のたちばな

五月雨

晴間まつ思ひも絶えてけふは又ふりこそまされさみだれの空

をやみだにながめいぶせく明けくれて晴れぬ日數をふる五月かな

五月雨雲

さみだれの雲の衣は夏ながらたちかさねても見ゆる空かな

古宅五月雨

五月雨のふるやの軒の板びさし久しくなりぬ朽ちや果てなむ

庭五月雨

けふいくか庭はさながらやり水のながれて晴れぬ五月雨の空

○匂ひ來て　夢が自分を昔の有様に返したのが橘の香で覺めた。
○さよ衣　夜著や寢卷。裏返して寢ると思ふ人を夢に見ると。古今集「いとせめて戀しき時はうば玉の夜の衣をかへしてぞぬる」
○昔ながらの　昔のまゝの。
○ふるさと　嘗て古く居た土地。ふるさとと知らぬは昔と少しもかはらずふるさとと思はれない。
○ふりこそまされ　降り增る。
○をやみ云々　少しの間止むことさへもない長雨に眺めも鬱陶しくながめにをやみの無と長雨と眺をかけた。
○日數をふる　經ると降るとをかけた。
○雲の衣　雲を衣に見立てていふ。
○たちかさね　夏ならば衣を重ねる筈はないが雲の衣は夏ではあるが重なつて見える。
○ふるや　古家に五月雨の降るをかけた。

日をふれば池のみかさのまさごぢに波よせかくる梅雨の庭

池五月雨

池水のますみの鏡くもるにぞふる程見ゆる五月雨の空

五月雨にまさりのみして流れ出でぬ池のみかさは限りしられず

江五月雨

ふしのまもをやみなくふる五月雨に入江のあしも波の下草

河五月雨

ころも河日數重なるさみだれにみかさも高く波ぞたちける

日をへつゝふるの川はし波こえてみかさぞ高き五月雨の頃

螢

夏の夜ももゆる螢の心にはながしとのみやこがれわぶらむ

夕風のつゆふき拂ふ草むらに殘る光やほたるなるらむ

野螢

とぶ螢ならぬ思ひのたぐひとやふじの裾野にもえ渡るらむ

原螢

草深くのこる思ひや通ひきて野となる里に螢とぶらむ

○みかさ　水嵩。水量。
○まさごぢ　眞砂を敷いた路。水嵩の増るをかけた。
○池のみかさ　池の水嵩。水量。
○ふしのま　節と節との間。暫くの間。蘆の縁語。
○ころも河　陸中膽澤郡衣川村に發し北上川に合す。重なるは衣の縁語。
○ふるの川はし　大和山邊郡石上布留神社の前の橋。
○ながしとのみ　夏の短夜も長いとばかり思つて心亂れて思ひ慕ふことであらう。
○ならぬ思ひ云々　古今集「富士のねのならぬ思ひにもえばもえ神だに消たぬ空し煙を」

草のはらたが行末を尋ねきて思ひこがるゝほたるなるらむ

岡螢

とぶ螢音にはたてずとも岡にさゝのよすがら燃えあかすかな

澤螢

夏の夜は野澤の水もぬるむらむ數多ほたるのもゆる思ひに

水上螢

ほどせばみうつるとすれど山の井に見る影あかず行く螢かな

河螢

とぶほたるいはぬ思ひの影見えて花の跡とふ井手の玉川

よる／＼は思ひこがれてあまを舟はつ瀨の川にとぶ螢かな

はるゝ夜の星かと見えて久方の天の川原にとぶ螢かな

天の川かよふ螢はたなばたの思ひこがるゝたまかとぞ見る

なみだ川たえぬ思ひのゆかりとて流るゝ瀨々にとぶ螢かな

なみだ川深き思ひにもえわたるせゞの螢やみづの水上

池螢

いひ出でぬ同じこゝろと池水になみだ散らさず飛ぶほたるかな

○さゝ岡　山城乙訓郡鞆岡。枕草子「鞆岡は篠の生ひたるがをかしきなり。」
○さゝのよすがら　篠のよ（節の間）を夜にかけた。夜すがらは終夜。神樂歌「此の篠はいづこの篠ぞ舍人らが腰にさがれる鞆岡の篠」
○花の跡とふ　新古今集「散りにけりあはれ恨みの誰なれば花のあと訪ふ春の山風」
○井手の玉川　山城綴喜郡。
○あまを舟云々　蜑小舟。泊つ（碇泊する意）にかけて初瀨の序。瀨は淸にかけて舟の緣語。
○たま　魂。
○なみだ川　夫木抄には伊勢とあるが涙の流れを川と見ていふ。
○いひ出でぬ　いひ出さない。
○同じこゝろ　池の心（池の底）にかけた。
○なみだ散らさず　池に波立てない意をかけた。

○夜ひかる云々　夜光の藻と本當は藻に縋る螢である。
○思ひありそ　思ひありとありそ(荒磯)をかけた。
○よる〳〵　波の寄るに夜々をかけた。
○ねをのみ云々　何のために音を(聲にだして泣くのを)忍ぶのか。蘆の根に音を言ひかけた。
○玉江　長門國萩の西南阿武川の河口。無名抄には越前と。夜の玉とかけた。新勅撰集「白露の玉江の蘆のよひ〳〵に秋風近く行く螢かな」
○あしのよもすがら　蘆の節と夜とをかけた。
○うかひ舟　鵜を飼ひ馴らして魚を捕へる舟。
○さしくだすま　舟に棹さして川を下る暫くの間。
○あけぬとならば　夜が明けてしまふといふならば。

池水の底さへてりて夜ひかる玉藻はすがる螢なりけり

海邊螢

とぶほたる思ひありその岩がねに波のよる〳〵玉ぞ碎くる

江螢

とぶ螢もゆる思ひの深き江にあしのねをのみ何しのぶらむ
あしの葉に光みだれて露くらきよるの玉江はほたるなりけり
ゆきかへり難波のあしのよもすがら同じ堀江にとぶ螢かな

瞿麥

宿りして朝露ふかき色も見む暮るゝ籬のやまとなでしこ

鵜河

よしの川早瀬ならずばうかひ舟さしくだすまや夏のよの空

待夏月

程もなくあけぬとならば山の端を出づるもいそげ夏のよの月
早くのみあくる習ひを夏の月などか待つまの久しかるらむ

夏月

しづがやの軒端みじかき夏のよは月の光のもるほどもなし

見る影のふけゆくまゝに涼しさもまさりてをしき短夜の月

みじか夜を空にしれとや夏の月雲間ながらに影しらむらむ

月も亦みじかき夜をや惜しむらむ明けゆく空に影ぞのこれる

夏曉月

ほどなさをいかにかこたむ夏のよの更け行く空に出づる月影

名殘あれやうつろふ影の涼しさも袖にきえ行く有明の月

夏月涼

影すめば雲ふく風もよそならで袖にすゞしき夏のよのつき

久かたの月のかつらの夏木立すゞしき影になるゝよな／＼

庭夏月

影見えて空ゆく月の涼しさもまがきにこもる庭の夕露

夏草

ふみわけし人めはかれて跡もなくしげりぞまさる庭の夏草

道もなく庭の夏草しげりあひて涼しき風も通はざりけり

野夕夏草

里人のゆきき絶えぬる夕暮はつゆこそむすべ野路のなつ草

○雲間ながら云々　雲間にある儘で月影が白くなり夜が明ける。

○ほどなさ云々　夜の更けるに短く間もないのを如何云つて歎かう

○久かたの　月の枕詞。
○月のかつら　月の中に生えてゐるといふ傳說の桂。

○ふみわけし云々　草を踏みわけて來た人の往來は絕えて踏みわけた跡もなく茂る。

杜夏草

しばしとて立ちよる影も夏ふかく生ひしげりたるもりの下草

蚊遣火

暮れゆけばきそひがほにも宿毎にたつる蚊遣の夕けぶりかな

蚊遣たくしづが伏屋のいぶせさも空にしられて立つ煙かな

なびきくる煙の末もいぶせきをたく宿さぞな賤が蚊遣火

夕立雲

それとたゞ山のはつかに見ゆるより景色ことなる夕立の雲

見る袖も涼しかりけり夕立の雲の衣のかゝるやまのは

待ちこひていく里人かあふぐらむ夕だつ峯の雲のひとむら

遠夕立

吹く風も見わたす雲の程ばかりほのかに通ふをちの夕立

野夕立

ふる程はをじかの角のつかのまもなつ野過ぎゆく夕立の雲

水鶏

猶いかにはやくあけよと短夜の天の戸たゝく水鶏なるらむ

○夏ふかく云々　拾遺集「大あらきの森の下草茂りあひて深くも夏のなりにけるかな」

○いぶせさ　煩たさ。むさくるしく鬱はしい意をかけた。
○煙の末云々　煙の末も煙たく鬱陶しいのに。むさくるしい意をかけた。
○たく宿さぞな云々　蚊遣たく家はさぞ賤しいみすぼらしいだらう
○それとたゞ云々　夕立だとたゞかすかに山の端に見える雲。山の端からはつかとかけた。
○雲の衣　雲を衣に見立てていふ袖と衣と縁語。
○夕だつ　夕立雨ふる。夕立つ峯と言ひ掛けた。

○をち　遠方。

○をじかの角の　つかの間の序。萬葉集「夏野ゆくをじかの角のつかの間も妹が心を忘れてもへや」

夕顔

かくばかりえならぬ花の賤が家に咲くもあやしき軒の夕顔

咲きかゝる花をもやがてゆふ顔のまがきえならぬ夏の山さと

垣夕顔

しら露のかゝる垣ねをたよりにて咲くもはかなき宿の夕顔

蓮

大かたの露のひるまもしら玉の亂れてたえぬ池のはちす葉

ふきちらす風の跡より波こえて又も玉ゐるはちす葉の露

夕風のみだれぬばかりふき過ぎてしら玉ゆらぐはちす葉の露

玉ならで風に亂るゝ涼しさも秋とあざむくはちす葉のつゆ

蓮葉にやがてつゝまば散りもせじとりても見まし露の白玉

池蓮

底きよき池の心をにごりにもしまぬはちすの色に見せけり

はちす葉の露をば玉とあざむくもみのりの池の心なるらむ

池水のにごる此の世と思ふよりこゝろやかくるはちす葉の露

夏夜

○賤が家に云々　源氏物語夕顔卷によつた。
○やがて云々　すぐその儘垣根に結ふ。夕顔を結ふにかけた。

○咲くもはかなき宿　咲くのも脆く危い。はかなき宿に心細い貧家の意をかけた。

○大かたの露　池でない一般の露が乾く晝間でも。

○秋とあざむく　秋かと人に思ひちがひをさせる。
○やがてつゝまば　すぐその儘蓮葉で露を包んだなら露の玉は散りもしないだらう。

○にごりにしまぬ　古今集「蓮葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」
○みのりの池の心　佛法の心。池の底にかけた。

夏の夜はなく一聲をほとゝぎす待つとせし間にあくる東雲

夏風

袂には吹かぬ軒端の夕風も見るめ涼しくなびく松が枝

夏河

岩ばしるたぎつ川瀬は見るめにもこえて涼しき波の音かな

秋はまだ遠きわたりをいづみ川いつとて波のかくは涼しき

扇

夏くればまづ手にならす扇かなかならず風をたのむならねど

いかばかりいかに宿して程もなき扇の風のつきせざるらむ

氷室

夏も猶霜とや影のこほるらむ氷室の山のありあけの月

蟬

しげりあひて日影へだつる梢よりもりくる蟬の聲ぞ涼しき

納涼

吹きそよぐ音こそあらぬ秋風もしのびてかよへ軒のしたをぎ

夕さればまだほにいでぬ秋風のかよふも涼しのきのした荻

○なく一聲　古今集「夏の夜の臥すかとすれば時鳥鳴く一聲にあくる東雲」

○岩ばしる　たぎの枕詞。

○たぎつ川瀬　山川などの涌き反り流れる早瀬。

○見るめ云々　見た涼しさよりまさつて音が涼しい。こえては波の縁語。

○いづみ川　山城相樂郡。いつの序。いつとて云々は秋は遠い事だのに今はさても何の季節だといふのでかう涼しいか。

○氷室　冬の雪氷を夏まで貯へおく室。

○まだほにいでぬ秋風　まだ人の目につくやうに表はれ出ない秋風。荻の縁語。新古今集「たそがれの軒端の荻にともすればほに出でぬ秋ぞ下にこととふ」

○明けぐれ　朝夕。
○ほかにもとめぬ　庭の松陰より外に涼しさを求めない。
○過ぎがてに　通り過ぎ難く。
○それとはしるき　秋風が通ふのだとはつきりわかる。
○ゆふされば　夕方になると。
○ならの下かげ　續千載集「秋來ぬといはぬばかりぞ夏衣すそ野の原の楢の下風」
○しのびては云々　秋の涼しい風が夏に隱れ忍んで吹くかと待つて松に待つをかけた。
○ならしのをか　大和生駒郡奈良志岡(平石岡)。馴らすをかけた。
○山水をむすぶ　山水を掬ふ。
○忘草　住の江の岸に生えてゐるといふ忘草。暑さも忘るとかけた。古今集「道しらば摘みにもゆかむ住の江の岸におふてふ戀わすれぐさ」。

明けぐれに立ちいでなれて涼しさをほかにもとめぬ庭の松かげ
涼しさは風もかよひて過ぎがてに袖ふきかへす松のしたみち

夕納涼

秋風の夕ぐれふかく忍びきてそよぐも涼し軒のしたをぎ
たそがれに忍びてかよふ秋風もそれとはしるき袖の涼しさ
ゆふされば鄰まぢかき秋風の通ひて涼し庭のあしがき

樹陰納涼

しのびきて夕涼しき秋風のおと吹きならすならの下かげ

松下納涼

しのびては吹くやと松の夕陰にいでしもしるく通ふ秋風
すゞしさにゆきかふ人も立ちよりてならしのをかの松の下陰

水邊納涼

山水をむすぶしづくや秋の露そでにみだるゝ風のすゞしさ

海邊納涼

すみの江やひるのあつさも忘草つむ袖すゞしうらのゆふ風

賀茂河納涼

秋も亦かよふかそこに水鳥のかもの川せの波のすゞしさ

庭納涼

来む秋もほどなき草のまがきとてすゞしく通ふ露のゆふ風

松下水

吹く風になびく梢の涼しさもくむ手にうつる松のした水

六月祓

立ちかへる袖ぞすゞしきみそぎ川秋にかゝれる波のしらゆふ

みそぎ川今より罪もあら汐の汐のやほあひに流し捨つれば

秋歌

秋の始に

西こそとむかふ岸より涼しくも袖にふきおろす秋のはつ風

初秋

涼しさのあかれこそせね吹くもまた物うきけさの秋の初風

結び置きし露のちぎりや深草のさとにまづ吹くあきのはつ風

色かへぬ常磐の山もふく風の身にしみそめて秋は来にけり

○水鳥の　かもの枕詞。

○六月祓　陰暦六月晦日水邊に出て水を灑いで身の罪穢を淨め祓ふ神事。名越祓。

○みそぎ川　罪穢を淨め祓ふ神事をする川。

○秋にかゝれる　六月祓はまだ夏の季であるが秋の川波が寄せる。波のしらゆふは白波をしろい木綿(ゆふ)と見立てた。新古今集「住吉の濱松が枝に風吹けば波の白ゆふかけぬまぞなき」

○あら汐　罪もあらじに荒海の潮をかけた。祝詞、六月祓「今日よりはじめて罪といふ罪はあらじと」

○汐のやほあひ　潮水が諸方から多く来りあふ所。祝詞、六月祓「荒鹽の鹽の八百道の八鹽道の鹽の八百會に座す速開都比咩といふ神持ちかゝ呑みてむ」

○西こそ　古今集「同じえをわきて木の葉のうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ」

○露のちぎり　新古今集「深草の露のよすがを契りにて里をばかれず秋は来にけり」

○常磐の山　古今集「もみぢせぬときはの山は吹く風の音にや秋を聞きわたるらむ」

○うつろふ　移る。かはる。
○はつしほ　初めて染物を染汁に浸し染めること。初染。草木の葉の初めて色づくことをかけた。
○しみそむる　初しほの縁語。
○淺茅生　露の淺いことをかけた

○そよとばかりに　そよとかすかに吹いただけであるに。
○あひにあひたる　よくも打ちあつた。ひつたりあつた。
○あらし　嵐にあらじを言ひ掛けた。

初秋風

秋來ぬとつぐる軒端の夕風にやがてこたふる庭のをぎ原
をりふしもうつろふ色に吹きかへてけさは身にしむ秋の初風
露深き秋のあはれのはつしほと身にしみそむる袖の朝かぜ

初秋露

秋來ぬとさすが昨日にまされどもまだ淺茅生のけさの白露
おきそめし秋の日數のほどよりも深きよもぎの庭の朝つゆ

初秋月

いりたちてまだ三日月の影ながらさすがに秋の色ぞほのめく
ほのかなる影もさすがに秋見えて夕涼しき三日月のそら
秋ふかき有明の空のあはれさもほのめきそむる三日月の影

早秋露

吹く風のそよとばかりにかつ散るもあひにあひたる初秋の露

故郷早秋

ふる郷は秋よりほかにくる人もあらし吹きそふ淺ぢふの宿

野亭早秋

○しのの　しつとり濡れて。篠の小笹にかけた。
○涼しさならで云々　涼しさのために秋風を待つではなく袖をかさね逢ふために秋風を待つ。
○流れて早き月日　古今集「昨日といひ今日とくらして飛鳥川流れて早き月日なりけり」
○渡らぬさき　古今集「今はとて別るゝ時は天の川渡らぬさきに袖ぞひぢぬる」の別れ歸る時渡るのを逢ふために渡る時のことに意をかへて語句を取つた。
○渡らぬまに云々　前の古今集「今はとて」の歌の意。
○たちこめて云々　古今集「こひこひて逢ふ夜は今宵天の川霧立ちわたりあけずもあらなむ」の霧を早く立ちこめて日の暮れるを急げとかへた。

秋風のそよと吹くよりちる露もしのの小笹の野べのかり庵

待七夕

たなばたは涼しさならでかさぬべき袖にまつらむ秋の初風
天の川流れて早き月日をもまれの逢瀬に待ちやわぶらむ

七夕

まちこひておるたなばたの白妙や涙にふかき色をそむらむ
水上のふかき契りも天の川流れてたえぬあふせにぞ知る
天の川絶えぬちぎりになぐさめて稀のあふせも猶たのむらむ

七夕別

立ち別れかへるあしたは天の川渡らぬさきや戀しかるらむ

七夕後朝

かへるさは渡らぬまにも袖ぬれて涙さきだつ天の川波

七夕月

いくめぐりよそにへだてて棚機は空ゆく月を共に見るらむ

七夕霧

年にまつ逢瀬はこよひたちこめてくるゝをいそげ天の川霧

七夕河

天の川淵瀨はしらぬたなばたも遠きわたりに袖ぬらすらむ

七夕橋

かけてまつ思ひの色とあまの川紅葉の橋やわたしそめけむ

待ちわたる袖のなみだや天のがは紅葉のはしの色をそむらむ

七夕船

心こそまづあこがるれ天の川としのわたりの舟出まつ夜は

いつしかと思ひこがれし初秋のあふせによする天の川舟

霧こめて見えぬ舟出も音たかくむせぶにしるし天の川なみ

七夕衣

なでつくす岩ほの後もたなばたの契りは絶えじ天の羽衣

あふ夜にはあらで恨みをたなばたはかさねやすらむ天の羽衣

秋風にあまのはごろも吹きかへしうらみ重なるきぬぎぬの空

七夕絲

棚機にたむくる絲や秋をへて絶えず逢ひ見るしるしなるらむ

七夕枕

○遠きわたり　わたりは渡るべき所と渡ることとをかけ、年一度といふ渡ることとの間遠なのに袖濡らす。

○かけてまつ　望みをかけて待つかけては橋の緣語。

○紅葉の橋　天の川に渡す橋。古今集「天の川紅葉を橋に渡せばや棚機つめの秋をしも待つ」

○としのわたり　一年一度天の川をわたること。萬葉集「玉かづら絕えぬものからさぬらくは年の渡りにたゞ一夜のみ」

○なでつくす云々　拾遺集「君が代は天の羽衣まれに來て撫づとも盡きぬいはほなるらむ」

○天の羽衣　新古今集「棚機の天の羽衣うちかさねぬる夜すゞしき秋風ぞ吹く」

○棚機にたむくる絲　七月七日乞巧奠に織女星に手向ける五色の絲を願ひの絲ともいふ。

秋ならでまくことかたき棚機のいはの枕は苔やむすらむ

七夕夢

織女も夢路ながらはあふことを年に一夜となげかざるらむ

閏月七夕

天の川のちの文月も逢ふせとはなどたなばたの契らざりけむ

荻

身にしみてそよとばかりの音づれもやがて秋なる荻の上風

秋くれば風のやどりとふく音も軒端にしげきにはのをぎ原

うき秋の風のやどりとことわりの涙みだるゝをぎのうは露

秋風やなれもかなしき聲たててなみだ露けき庭のをぎはら

夕荻

吹きはらふ風やうつしてきく袖にゆふぐれ深き露のをぎはら

荻風

よきてゆく風やなからむよもすがら吹く音たえぬ庭の荻原

所えておひたつまゝにふく音も軒端にたかきをぎの上風

思ひやる野山の秋のあはれまで軒端にかよふ荻のうはかぜ

○秋ならで　秋七月七日でなくては。
○まく　枕する。こもねする。
○いはの枕　岩を枕にすること。

○のちの文月云々　閏七月も、七日には逢ふ折こなぜ契らなかつたか。瀬は川の縁語。

○そよとばかり　新古今集一「世の常の秋風ならば荻の葉にそよとばかりの音はしてまし」
○風のやどり　新勅撰集「いく秋の風のやどりとなりぬらむあと絶えはつる庭の荻原」

○風やうつしてきく袖　新古今集一「秋の夜は宿かる月も露ながら袖にふきこす荻の上風」

○よきてゆく　荻をよけて吹き過ぎる風が無いだらうか。

吹きすぐる音だにつらき秋風をのきばにやどす庭のをぎはら

聞く袖に露はみだれてふく風のおとのみそよぐ庭の荻はら

荻の葉はおのがやどりと夕露をむすびもとめずはらふ秋風

閑居荻

宿からばそよと吹くより寂しさも猶秋ふかき荻のうは風

萩

花の色におくしら露もうつろひてゆふべ咲きそふ庭の秋はぎ

おもるとも吹く風またじ萩の露はらはば共に花もこそちれ

露ならでうつるこゝろも咲く花のむらさき深き庭の秋はぎ

萩露

白玉と風にみだれて花の色にうつりもはてぬ秋はぎのつゆ

おけばかつなびきこぼれて咲きたわむ花におもらぬ秋萩の露

心してをれぬばかりは花の枝にさすがおもらぬ秋はぎの露

夕萩

さしそふる入日の色をむらさきの花にまちとる秋はぎの露

庭萩

○猶秋ふかき　寂しさもなほ深いを秋深きにかけた。

○うつろひて　白露も花の色に映って。

○おけばかつなびき云々　露が置くとそのあとから枝がほつ〳〵と風に靡いて露がこぼれて。

あかずのみ思ふか花もひとり見る宿に露けき庭のあきはぎ

行路萩

袖の色もむらさき深く分け入りてうつしやせまし野路の秋萩

薄

秋風のたち野の原のしのすゝきまだ穂にいでぬ袖ぞ露けき

ふかぬ間の名にこそありけれ秋風にあとなき露の玉のを薄

吹きはらふ風をやまねく花すゝき夕つゆふかき草のたもとは

野外薄

行末は雲もひとつに花すゝきなみ立ちつゞくむさし野の原

吹く程もほのかに見えて花薄なびく末野の秋のゆふ風

行路薄

分けゆけば跡こそ見ゆれさきたてる野べのを花の波の通ひち

薄露

秋風に思ひみだれて袖のつゆ拂ひもあへぬ野邊のをすゝき

吹きはらふ風に袂をまかせても猶露しげき花すゝきかな

秋風の吹かぬ絶間もおく露に猶うちなびく野べのをすゝき

○むらさき深く　紫の色深く。野路を深く分け入るとかけた。

○たち野　大和生駒郡立野。秋風の立つをかけた。

○穂に出でぬ　表にあらはれ出ない。薄の穂にかけた。

○なみ立ち　雲も一つにつゞいて花薄の波が立つゞいて。なみに波を又ならびの意をかけた。

○思ひみだれて　亂れては薄が秋風に亂れるのをかけた。

○袖　薄の雅語。

○袂をまかせ　薄の穂が風に靡いてゐるのを人を招くと見て袖や袂といふ。

○玉のをすゝき　玉の緒とを薄とかけた。をは接頭語。結ぶと緒と緣語。
○袂におもる云々　薄の袂におく露に映つた月が重くなるを見ても
○ながめよ深き　眺め深きと夜深きとをかけた。

○露ばかり色も云々　少しも色もちがはず毎日同じ色に咲く。露が花と同じ色の意をかけた。
○あさな〳〵　毎朝。

○衣にはすらで　月草は摺衣にするが今は衣に摺らないで。

○秋のさが野　秋のならひ。嵯峨野をかけた。

月前薄

しら露の玉のをすゝきよるは又月もひかりを結びそへつゝ

花すゝき袂におもる月見てもながめよ深き露やしるらむ

女郎花

風ふけば思ひみだれて露にのみなびきもはてぬ女郎花かな

朝顔

露ばかり色もたがはぬ朝がほはあさな〳〵に咲きかへるらむ

月草

衣にはすらで心を花の色にうつしてぞ見る庭の月くさ

草花

見る人もおのがさま〳〵咲く花に心のいろや染めてめづらむ

なか〳〵に招くにつけて秋の野のを花が袖は露もとまらず

草花露

をみなへし秋のさが野の夕露を拂ひかねてや猶かこつらむ

庭草花

植ゑおきし庭の千草にこの秋は野べともいはで花をこそ見れ

野草花

秋萩の花の錦のなか絶えて一村しげる野べのをすゝき

秋萩の花すりごろも分けくれぬこゝろも野べの色に移りて

翫野花

いりまじり野べの千草の色々に折りみかざしみ花をこそ見れ

行路草花

わけ見れば花より花にこゝろさへ移りてぞ行く野路の百草

月前草花

秋の野の露にうつりていろ〳〵の花とひかりをちらす月かな

露しげき尾花の波にうつろひて月影さわぐ野邊のあきかぜ

雨後草花

程もなくはれ行く風に小萩原おもりもはてぬ村雨のつゆ

霧中草花

はれそむる朝けの風にほの見えてなびく尾花の袖の秋ぎり

野露

絶えずふく木の下風も秋ふかみ拂ひかねたる宮城野のつゆ

○花すりごろも　萩の花で色を摺り出した衣。
○分けくれぬ　花野の路を踏み分けるに途方にくれた。
○折りみかざしみ　折つたりかざしたり色々して。

○いろ〳〵の花と　色々の花となつて。
○尾花の波　尾花が風に吹かれ靡いてゐるのを波と見ていふ。

○朝け　朝明け。曙。
○宮城野のつゆ　古今集「みさぶらひ御笠と申せ宮城野の木の下つゆは雨にまされり」宮城野は陸前仙臺の郊外。

月前露

空の月雲なき夜半はなか〳〵に影見るつゆにいとふあき風

蟲

大ぞらの曇るをなれも嬉しとやくれまつ蟲のまだき鳴くらむ

よひのまの木陰をぐらき淺ぢふの月まつ蟲の聲ぞさやけき

秋風にくだけて物や思ふらむ玉ちる野べの松蟲のこゑ

さく花の色なる露をなみだにて蟲の音しげき野べの萩はら

霜深き淺ぢがもとのきり〴〵すいづれか先にかれむとすらむ

野蟲

くれゆけばおのがさま〴〵鳴きいでて千ぐさにかはる野べの蟲の音

野外蟲

秋の野のを花が袖の夕つゆや人まつむしの涙なるらむ

庭蟲

秋の野に露もおとらぬ宿なれば蟲の音しげきにはの淺茅生

梢ふくかぜにきほひてなく聲ものきばにたかき庭の松むし

さゝがにのすがく夕の淺ぢふになく音ときめく庭の松蟲

○なか〳〵に　なま〳〵風がないのがよいと秋風を厭ふ。

○まだき鳴く　まだ早くに鳴く。

○くだけて云々　色々と胸をいためて思ひ煩ふ。

○さく花の色なる露　咲いてゐる萩の花の色になつてゐる露。

○いづれか先に云々　淺茅が先に枯れるかきり〴〵すが先に聲が嗄れ絶えるかどちらが先か。

○千ぐさに　蟲の音がいろ〳〵である。日が暮れると野の千草に代つて蟲の聲が幾種も聞える。

○梢吹く云々　軒端に高い松の梢を吹く風に競うて松蟲のなく聲も高い。

○さゝがに　枕詞から轉じて蜘蛛をいふ。

○すがく　蜘蛛が網をかける。

籬蟲

夕ぐれのまがきの山に月ならで鳴き出づる蟲の聲ぞさやけき

ほどもなき草の籬にさま〴〵の哀れこもれる蟲の聲かな

夕蟲

淺ぢふやくれまつ蟲の名もしるくまづ鳴きいづる庭の夕かげ

きけば又ゆふべ身にしむ秋の色も今一しほのまつ蟲の聲

いつはとはわかねど秋は夕月夜さすやをかべの松むしの聲

夜蟲

いでて猶もらぬ木かげの淺ぢふの月松蟲の音をつくすらむ

ならはしの露の枕も夜や寒きなく音をつくす庭のまつ蟲

月前蟲

夜もすがらともに宿りて月影もあさぢが露にすめる蟲の音

ふけゆけば月の光も身にしみてむしの音すめる野べの秋風

秋の夜は月の光も蟲の音もひとつにすめる庭の淺ぢふ

月影はあさぢがもとに宿り來て蟲の音高くすめる夜半かな

露しげきあさぢが宿の月かげにたれをこてふの松むしの聲

○まがきの山　夫木抄に名所不審可勘之。まがきを山と見立ててそこへ月の出るを言うた。夫木抄「菊のうへの露ふく風はやすらひて籬の山をのぼる月影」

○色も今一しほ　色がもう一染め染めて濃い秋色。

○いつはとは云々．古今集「いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふことの限りなりける」

○夕月夜　夕月。

○いでて云々　月が出ても光が漏れない木かげにある淺茅生。

○月松蟲　月を待つ蟲をかけた。

○ならはしの露の枕　平生馴れてゐる露の枕。露に濡れた枕。新古今集「あだに散る露の枕にふしわびて鶉なくなり床の山風」

○ひとつにすめる　一樣に澄んでゐる。續千載「雲晴れて空も光も見えわかず一つに澄める秋の夜の月」

○すめる夜半　蟲の音の澄むに月が宿り來て澄(住)むをかけた。

○たれをこてふの　誰を來いといふことの。古今集「月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たずしもあらず」

秋風

きく袖はめに見る物のあはれより露けさまさる秋風のこゑ

秋夕

夕まぐれ思ふまゝにやながめましさらでもぬるゝ秋の袂を

ゆふまぐれ心なき身も露かゝるならひあやしき秋の袖かな

袖の露かゝるならひもうき身とておき所なき秋の夕ぐれ

うしとても誰かかからむ袖の露たぐひなき身の秋の夕暮

うちはらふ跡より袖におく露のあはれせめくる秋の夕ぐれ

秋夕雲

何となき雲のけしきもあはれにてながめにかゝる秋の夕暮

月

さやかなる月見む爲の秋とてや夜の間を長くさだめ置きけむ

有明の影よりも猶とゞまらで山の端いそぐ月ぞつれなき

風ふけばみだるゝ露を玉の緒とひかりを結ぶ月もはかなし

雲はらふよはのあらしに久方の月の桂の花ぞちりそふ

すむ月にうかるゝ果てや誘はれて我も山路に入らむとすらむ

○さらでも云々　眺めなくても袂が露に濡れるのに。眺めを長雨にかけて濡れるの緣語。
○心なき身　情もなくなり物を哀れとも思ふ心がない身。新古今「心なき身にも哀れは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮」

○せめくる　迫り來る。

○ながめにかゝる　新古今集「折こそあれながめにかゝる浮雲の袖も一つにうちしぐれつゝ」

○月の桂の花云々　新勅撰集「雲ゐより散り來る雪は久方の月の桂の花にやあるらむ」
○誘はれて　山の端に入る月に誘はれて。

物思ふ秋のならひも知らでたれなみだ曇らぬ月を見るらむ

秋の夜は何故おつるなみだぞと袂に宿る月にとはばや

ながめつゝぬらす袂に宿りきてなぐさめがほの月も恨めし

秋の月たがあくがれしならひより心もそらに人さそふらむ

秋の夜もなみだ曇らぬ月は見ずちゞにもの思ふ我が身一つは

さやかなる月も涙にやつれけり身のうき雲は風もはらはで

待月

山の端に雲の夕ゐる夕ぐれは月よりもまづ風ぞまたるゝ

深夜待月

いつしかと出でにし影を又さらにまつが枝さはる山の端の月

曉月

更けぬれどいでくる山のたかぐに猶まちわぶるよはの月影

雨後月

有明の影を殘してしらむ夜をつれなしとこそ月は見るらめ

むら時雨月のかつらも染めぬらしはるゝ雲間の影のひとしほ

見月

○何故云々　續古今集「かき曇る心いさふ夜半の月何故落つる秋の涙ぞ」…………

○ちゞに云々　古今集「月見ればちゞに物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど」

○身のうき雲　身の憂きを浮雲にかけた。

○雲の夕ゐる夕ぐれ　雲がある夕暮。新勅撰集「白雲の夕ゐる山ぞなかりける月を迎ふる四方の嵐に」

○いつしかと出でにし影　いつ出るかと待つて漸く出た月影。萬葉集「闇の夜は苦しきものをいつしかとわが待つ月も早も照らぬか」

○たかぐに　遙かに待つて仰ぎ望む樣。山の高いにかけた。萬葉集「白雲のたなびく山のたかぐにわが思ふ妹を見むよしもがな」

○月のかつら云々　時雨が月の中の桂を染めて紅葉させたらしい。

空にのみさやけき影と見し程に袖もさながら月になりつゝ
なか／＼にあかぬ心のから衣たもとにやつす秋の夜の月

會友見月

見る友もかけぬまとゐに空すみて思ふくまなき望月の影

翫　月

まちをしむ心づくしもなか空にすむ影あかぬ秋の夜のつき
物思ふならひのみかは見る影にうきもなぐさむ秋のよの月

終夜翫月

よもすがら月見る袖も露も又かげを宿しておきあかすらむ

依月客來

あすの夜もとふ人ながら待ちいでて共にこそ見め山の端の月

惜入月

をしみえぬ影と見るよりさきだちて心きえ入る山のはの月

八月十五夜

天の原心にかゝるうき雲もたえてなかばの秋の夜の月
名に高きこよひばかりは寢てあかす人やなかばの秋の月影

○なか／＼云々　なまなか月を詠めて見厭かぬ心で袂も霑れる位に心を碎き思ひ煩ふ。やつすは窶を窶れさせる意に思ひ惱む意をかけた。
○思ふくまなき　心に隱し隔てることなき。心にかゝる不滿のない意をかけて更に曇りなき月にかけた。
○なか空　月を待つ心月を惜しむ心と心がどちらつかず不定。空の中ほどを言ひかけた。
○おきあかす　寢ないで起きて夜を明かす。露置くにかけた。
○たえてなかばの　雲も絶えてなきを半ばの秋とかけた。なかばの秋は仲秋。
○人やなかばは　人は無からう。仲秋の意をかけた。

九月十三夜

又たのむこよひも近きなかばだに更くるはをしき月の光を

山月

鏡かと見えてさやけく山どりの尾上にすめる秋の夜の月

はしだてのくら橋山は秋の夜の月すみ登る名にこそ有りけれ

秋の夜も光を花とよし野やまさくらだ枝にちらす月かな

くもりなき鏡の山の秋の月これや名におふ光なるらむ

もる山やまだ染めあへぬ下葉までてるかげあかき秋のよの月

岡月

さやかなるかつらの影も秋の夜は松とならびの岡のべの月

野月

吹きちらす草葉の露に見る風もつきのひかりの秋の野べかな

かげながらうつる草葉の露わけて月にぬれ行く野邊の通ひ路

昔にもすみこそまされ秋をへて露深くさの野べの月かげ

露わけぬ袖にも影のやどるまで月のあはれのふか草の野べ

花とちるひかりを露にぬきとめて月をしめ野の絲すゝきかな

○鏡かと云々　萬葉集「山鳥のをろのはつをに鏡かけとなふべみこそなによそりけめ」によつて山鳥の尾を山の峯(を)にかけた。
○はしだての　くらの枕詞。
○くら橋山　大和磯城郡多武峯村
○すみ登る　月が澄み昇るを梯の縁で登ると言ひ掛けた。
○光を花云々　光を花と散らす。
○鏡の山　鏡山は近江蒲生郡また豐前田川郡。
○名におふ光　鏡といふ名に背かぬ光。
○もる山　近江野洲郡野洲川の岸にある古驛。古今集「白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず色づきにけり」
○かつらの影　月の桂の影を桂河にうつつた月影にかけた。
○ならびの岡　並ぶに雙の岡をかけた。雙丘は山城葛野郡花園村。
○深くさの野　山城紀伊郡。
○ぬきとめて　緒に貫きとめて。

まねきても猶やとまらぬ野べの月尾花が袖に影ふけにけり

大江山雲もかゝらぬ月影によるもいく野の秋のたび人

武藏野月

夕風にさわぐ尾花の波間よりひかりほにいづる武藏野の月

里月

里の名もそらに知られてもみぢする月の桂の影ぞてりそふ

秋をへて野となる里に月ばかりすみこしまゝの影ぞさびしき

河月

影うつる清瀧川のあきかぜに月もいはこす水のしらなみ

うき雲の波もかゝらで久かたの中なる川に月ぞさやけき

水の面に花とちればやかつら川ひかりよどまで月の流るゝ

はつせ川かけし玉とも鏡とも見えてさやけきせゞの月かな

瀧月

花とちる月の光をぬきとめておのれみだるゝ瀧の白絲

渡月

てる月にゆくへも知らずあこがれてゆらのと渡る秋の舟人

○大江山　丹後與謝郡。
○いく野　丹波天田郡生野。
○ほにいづる　外に表はれ出る。尾花の穗に出るをかけた。
○里の名　下句月の桂とあるによつて山城葛野郡桂といふ里の名。
○清瀧川　山城葛野郡大井川に注ぐ。
○久かたの中なる川　山城桂川をいふ。久方の月の中にある桂の川といふ意。
○ゆくへも知らず　新古今集「由良の門を渡る舟人楫を絕えゆくへも知らぬ戀のみちかな」
○ゆらのと　淡路と紀伊との間の海峽。

橋月

ふくる夜に霜と見るまで影白く月すみ渡るかさゝぎの橋

ながめつゝなれもいくよを秋の月すみ渡るらむうぢの橋守

海邊月

明石とも須磨ともいはで月は見むさやけき方に浦傳ひして

思ひやる月の都の面かげも袖にたちそふ須磨の浦波

月ならでとふ人もなしすまの浦やしほたれまさる秋の袂を

秋の夜はうらわのあまもかづきえぬしら玉うかぶ波の月影

波の上に光をしきて照る月の白玉はやすむこの浦風

浦月

あかずなほ田子の浦波よるかけて見よとやすめる秋の月影

影きよみ藻鹽はやかで月にのみ唯あこがるゝすまのうら人

さはりつるけぶりも絶えて鹽釜のうらみむかたも波の月かげ

江月

よもすがら波も玉江の名によせて月影すめるあきのうら風

影も又よすればよりて浦波のまゝのいり江の秋の夜の月

○かさゝぎの橋　七夕に鵲が翼で天の川に橋を架けるといふ故事から禁中を天上にたとへて禁中の御階をいふ。新古今集「鵲の渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞふけにける」

○なれも　汝も。

○すみ渡る　世を住みわたるに月の澄むをかけた。

○うぢの橋守　山城宇治川の宇治橋の番人。新古今集「千早振宇治の橋守なれをしぞ哀れとは思ふ年のへぬれば」

○月の都　月の中にある宮殿。

○しほたれ　潮水にぬれて雫が垂れる、涙にぬれるのを譬へる。古今集「わくらばにとふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ」

○白玉はやす云々　萬葉集「玉はやす武庫のわたりにあま傳ふ日の暮れゆけば家をしぞ思ふ」はやすは映ゆの延、むこは攝津武庫郡。

○よるかけて見よ　夜に亙つて見よ。浦波の寄るを言ひ掛け。

○あこがる　憧る。焦るを言ひ掛けて藻鹽はやかでの緣語。

○うらみむ云々　恨みむに鹽釜の浦を、波に無みを言ひ掛けた。

○玉江　玉江の浦は長門阿武郡。

湖月

さやかなる月のみるめにしがの蜑も袖しほたるゝ秋のよな〳〵

名所月

よど川や岸の柳のかげながらうつるいり江の月のさやけさ

秋ふかきをばすて山のよはの月あはれはいふも更科の影

さやけしなすまのうへ野の露かけて波ぢに宿る浦の月かげ

社頭月

へだてなくさやけき影も所からすむ月よみのもりの神がき

山家月

山里によのうき雲をはなれきて心もすめる月をこそ見れ

のがれきて我も憂世の外なればともにぞすめるみ山べの月

さそはれて思ひ入りぬる山もまたあくがれぬべき月の影かな

物をのみ思ひし月に今はまた心をすます山のおくかな

閑居月

かりそめの松の下庵もる影もかすかにすめる秋の夜のつき

故郷月

〇みるめ　海松に見る目をかけた
〇柳のかげながら　柳の影もその儘一しよに。
〇をばすて山　信濃更級郡姨捨山
〇すまのうへ野の露　新千載集「波かけぬ須磨の上野の露にだになほ袖垂るゝ旅衣かな」須磨の上野は摂津武庫郡。
〇所から　その場所の故で。
〇月よみ云々　伊勢度會郡河原田月讀森。月讀宮がある。月良みとかけた。
〇ともにぞすめる　月の澄むと共に我も心澄みて住める。
〇さそはれて云々　月に誘はれて深く心に思ひ込んで入つた山。
〇あくがれ云々　月のために心も空にうかれ出るべき。
〇物をのみ云々　曾ては月を見て物思ひ惱んだその月。
〇もる影　庵を守るに月影の漏るをかけた。

〇夜よし云々　古今集「月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たずしもあらず」

〇月草にすれる衣　露草で摺つて模樣を染め出した衣。

〇こけの衣　僧の衣。

〇まちをしむ云々　此方では月の山の端を出るを待ち、遠くの彼方では月が山の端に隱れるのを惜しむその此方彼方の心。

軒端もる露をあるじと尋ねきてよなく〳〵宿るふるさとの月

秋をへてすみもかはらぬ故郷の月や幾よのあるじなるらむ

故郷のむかし忍ぶの軒ばより月も露けきかげぞもりくる

きて見ればむかし忍ぶの露ながら袖にみだるゝ軒の月かげ

ありし世を忍ぶか月も故さとの軒の草葉の露をたづねて

松間月

ふきわくる木の間もり來て月影も軒端にさわぐ庭のまつかぜ

庭のまつ梢のかげもねや近しさしいる夜半の月のさやけき

月前友

夜よしとも今更たれにつげやらむ友待ちいでし山の端のつき

月前衣

月草にすれる衣のこゝちして光の花ぞそでにうつろふ

月影もうき世のほかの友とてやこけの衣のつゆになれぬる

月前遠情

思ひやるその面影のいづこかは今宵の月にうかばざるべき

まちをしむこなたかなたの心まで思ひやらるゝ山の端の月

月前木

さはりつる梢はなれて月の色もいま一しほのみねの松ばら

月前松

軒の松見る目およばぬ梢までさやかにうつす庭の月影

よるも猶月の光のみつしほにみるめ隠れぬいその松が枝

月前風

雲は皆はらひつくして照る月のひかりをちらす夜半の秋風

月前竹風

くれ竹のなびくのみかは吹く風もさやかに見ゆる秋の夜の月

秋風のさやぐみ山のさゝの葉におく霜ふかき夜半の月かげ

駒迎

ひきたつる影も今宵の名におひてたぐひなかばの望月の駒

霧

さびしさはそこのとも見えず立ちこめてたゞ秋霧の夕ぐれの空

野霧

花の色を隔てもはてずおのれさへ千種に見ゆる野べの薄霧

○さはりつる梢　月の出る時に障りになつた梢。

○みつしほ　潮の滿ちるを光の滿つると言ひ掛けた。

○みるめ　見る目。海松をかけて潮、磯の緣語。

○雲は皆云々　新古今集「雲は皆拂ひはてたる秋風を松に殘して月を見るかな」

○さやぐ　そよぐ。ざわ／＼と音がする。

○今宵の名　古八月十五日駒牽の駒を左馬寮の使が逢坂の關に迎へた駒迎といふ名。

○望月の駒　駒牽に信濃國望月の牧から貢進する駒。十五夜望月にかけた。たぐひなかばは云々は類無きと仲秋とかけた。

○さびしさ云々　我が心の寂しく悲しいのは何處の故とも見えず。何處をそことはつきり區別がつかず秋霧が立ちこめた。

風わたる野邊のを薄ほの見えてたえ〴〵なびく秋の夕ぎり

河霧

みなせ川秋をふかめてたつ霧もありてゆくせの音は隔てず

あすか川曇りみはれみ立つ霧のふちせもかはる秋の夕風

ながれにやまかせてくだす川霧に行方たどらぬせゞの筏士

浦霧

浦風もたちやへだつる夕霧のまがきの島の松も音せず

初雁

秋の田の稻葉をそよと吹く風に來なきあはする初雁のこゑ

きく袖に秋のあはれもそふ露をかけてまちける初雁の聲

暮天初雁

黄昏もわかぬ夕の空とてや名のりて來つる初かりの聲

雁

あかざりしとこ世別れて夜半の雁心も空に音をや鳴くらむ

なべてうき秋もしられて鳴く聲に寐覺慰むよはの雁がね

夕雁

○みなせ川　水無瀬川は攝津。

○ありてゆくせ　川があつて流れゆく瀬の音。古今集「水無瀬川ありてゆく水なくはこそ遂にわが身を絶えぬと思はめ」

○曇りみはれみ　曇つたり晴れたりして。

○ふちせもかはる　古今集「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞけふは瀬になる」

○ながれにや云々　流れに任せて筏を下すのであらうか。

○夕霧の云々　夕霧が立ち隔てるのを籬に譬へて、籬の島とつゞけた。籬島は陸前鹽釜浦にある。

○とこ世　絶遠の國。源氏物語須磨「常世出でて旅の空なる雁がねもつらに後れぬ程ぞ慰む」

來て見ればいづこも同じ夕ぐれと鳴きこそ渡れ秋のかりがね

夜雁

たが急ぐ玉章なれば雁がねの夜をさへかけて空に來ぬらむ

つらねくる面影見えて夕やみの空たちかづく初雁の聲

深夜雁

うき事を思ひ連ぬる友とてやねざめとふらむ夜半の雁がね

月前雁

すむ影やこしぢの空にまさるらむ月の都にきなく雁がね

つらね來る數もさだかによむばかり月すみ渡る雁の玉づさ

田上雁

鳴きて落つる雫のたゐやつくばねを越えくる雁の涙なるらむ

湖上雁

故郷のあはれやいづれしがの浦に鳴きて越路の秋の雁がね

羇旅雁

なれも又雲居はるかにたびごろも來つゝ鳴くらむ初かりの聲

旅宿雁

○いづこも同じ　後拾遺集「寂しさに宿を立ち出でて眺むればいづくもおなじ秋の夕暮」

○夜をさへかけて　晝は勿論夜にまでかけて。玉章を雁が身につけての意を言ひ掛けた。古今集「秋風に初雁がねぞ聞ゆなる誰が玉章をかけて來つらむ」

○つらね來る云々　雁が列を作つて來る數もはつきり數へられる程。古今集「白雲にはね打交し飛ぶ雁の數さへ見ゆる秋の夜の月」

○雫のたゐ　常陸新治郡志筑村の田家。萬葉集「筑波嶺に登りて見れば尾花散る雫の田居に雁がねも寒く來鳴きぬ」

○鳴きて越路　鳴きて來しを越路の雁につゞけた。

○來つゝ　旅衣を著るに言ひ掛けた。

ふる郷をしのぶ友とや草まくら鳴きてこと問ふよはの鴈がね

稻　妻

一むらの雲にやどりてはかなさは空にもしるき稻妻のかげ

鹿

聞べたる松のつれなき妻ごひにわさ田ほに出でて鹿鳴くなり

はげしさの程もしられてさそひくる鹿の音高き峯の松かぜ

たぐへ來る尾上の鹿のこゑながら軒端の松にさわぐ山かぜ

鳴く鹿の涙ながらやさそふらむきく袖ぬるゝ峯のまつ風

きく人の袖こそぬるれ松風にしぐるゝ峯のさを鹿のこゑ

鹿の音をおのれさそひて小山田のひたふきならす峯の松風

山　鹿

吉野山うき妻ごひに鳴く鹿も岩のかけぢやふみならすらむ

みわの山杉のたちども霧こめて妻とひわぶるさを鹿の聲

野　鹿

妻やうき野路のさゝ原わけぬれてよ深くそよぐさを鹿の聲

花づまの心いかにと聲たててさむき野風にをじかなくなり

○草まくら　旅の枕詞。こゝは旅の意にいふ。

○わさ田　早稻の田。

○ほに出でて云々　表に表はし出して牡鹿が妻戀ひ鳴く。穗に出るは早稻田の縁語。

○はげしさ　松風の烈しさ。

○さそひくる　松風が鹿の音を誘ひ來る。

○たぐへ來る云々　鹿の聲と伴ひつれて吹いて來る山風。新古今集「たぐへ來る松の嵐やたゆむらむ尾上に歸るさを鹿の聲」

○ひたふきならす　引板を風が吹いて鳴らす。ひたすらむやみに吹いて鳴子を鳴らす。

○岩のかけぢ　石ある嶮しい山路古今集「世にふれはうさこそまされみ吉野の岩のかけ道ふみならしてむ」

○杉のたちど　杉の立つてゐる所古今集「わが庵は三輪の山もと戀しくは訪らひ來ませ杉立てる門」

○花づま　萩を鹿の妻と見立てていふ。

田家鹿

軒ちかく來なく山田を守る賤のおのれ驚くさを鹿の聲

もる人も今は山田のいねぬとやかりいほ近く鹿のなくらむ

朝鹿

今はとてたち野のはらの朝霧に歸さやまどふさを鹿のこゑ

夕鹿

夕まぐれ月まつ宿にきこゆなりみ山をいづるさを鹿の聲

月待つと妻やたのめし夕まぐれ山より出づるさを鹿のこゑ

鹿の音もほのかに聞ゆ三日月のかげ見るをちの峯に鳴くらし

夜鹿

なれもうきつまやたのみて秋風の寒き夜每に鹿の鳴くらむ

さそひきて身はならはしの秋風も枕にさむきさを鹿の聲

月前鹿

てる月の桂の影に鳴く鹿は手にもとられぬ妻やこふらむ

明けぬまも月をしたひているさ山かたぶく峯にを鹿鳴くなり

霧中鹿

○もる人云々　山田を番してゐる人も今はもはや寢たといふのでか山田守する假廬近く鹿が鳴く。

○月待つと云々　月の出るのを待つて其の時にと妻の鹿が牡鹿に賴みに思はしあてにさせたか。

○三日月の云々　三日月の影もほのかに見える遠方の峯。

○なれも　汝も。鹿よ汝も。

○うきつま云々　打ち解けぬつれない妻をあてにして鹿が吹くのだらう。

○身はならはしの秋風　人の身は習はしであるこれに慣れよと吹く秋風。新古今集「里は荒れぬ空しき牀のあたりまで身は習はしの秋風ぞ吹く」

○いるさ山　但馬國にあるといふ月の入る方の山の意をかけた。

秋山のながめくれゆく夕霧にあはれたちそふさを鹿の聲
立つ霧をつまとふおのがなげきにて哀れも深くを鹿なくなり

秋　衣

中々に秋の日數をかさねては寒さぞまさる夜半のころも手
秋風の裾ふきかへすころもへて今は夜寒のうらみられつゝ

擣　衣

きけば又身はならはしの秋風もさらによさむの衣うつ聲
袖の露思ひみだれてよもすがら誰をしのぶの衣うつらむ
ふかきよの霜を重ねて白妙のころもで寒くころもうつなり
一人ある人のすさびにきく我も猶いねがてのさよぎぬたかな
聞きあかす物ともしらでうちもねぬ哀れをかこつ夜半のさ衣

聞擣衣

うちあかす人のあはれもきく袖に白露ふかきよはのさ衣

里擣衣

聞きてだによさむの衣うちあかす里人いかにそでの秋かぜ

夜擣衣

○立つ霧を云々　愁歎の深いことを霧の深いに比して歎きの霧といふ。こゝは霧に隔てられるのを歎きとしての意。
○中々に　衣は重ねれば暖かかるべきであるがなまなか秋の日數を重ねると却つて寒い。
○ころもへて　頃も經てに衣をかけた。裾、衣、裏と縁語。
○夜寒の云々　夜寒が恨みられて夜寒が恨めしく思はれて。恨みに衣の裏見をかけた。
○白妙の　衣の枕詞。
○ころもで　衣手。袖。
○うちあかす　夜どほし砧を打つて夜を明かす。
○きく袖　聞くわれの衣の袖。

なか〳〵にたゆめばたへぬ夜寒とやまなくうつらむ麻のさ衣
よもにうつ聲のあはれをさ夜衣かたしく牀に集めてぞ聞く

月前擣衣

やがてうつきぬたの音に月影の出づるを待ちし程ぞしらるゝ
さし登る月にきほひてさよ衣うち出づる聲も空にすみけり
めぐりあはむ契りまちてやさよ衣空行く月にうちあかすらむ

秋田

秋のきて刈りほすわざのいとなきもたのみあるよは心ゆくらし

菊

露のまもためし久しき菊の花咲きて移ろふ千代や幾千代
色かはる秋のならひも白菊の花のまがきは千代をこめつゝ
花の色もうつろはむとや初霜にむすびかへたる露のしら菊
けさ見ればうつろひそめておく霜にまがひも果てぬ庭の白菊
とり〳〵に色ぞえならぬ紅にうつろふ花もませのしら菊
うつろへば又紅のひとさかりありてえならぬ白菊の花

菊露

○なか〳〵云々　なまなかに打ちこだえると却つて夜寒に堪へられないといふので絶間なく打ちしきるのか。

○いとなきも　いそがしく休むひまのないのも。○たのみ　田の實。熟した稲の實を頼みにかけて米の収穫の希望あるをいふ。○露のま云々　古今集「濡れてほす山路の菊の露の間にいつか千年をわれは經にけむ」によつた。菊の露の間が千年といふ永い菊の花は咲いてから萎むまでの千代は幾千代であらうか。

○紅にうつろふ　紅に色かはる。白菊が霜のために紅に色かはるをいふ。○ませ　籬。竹木などの低くまばらな垣。

○よそならずきくの露　聞くに菊をかけた。
○折りかざす云々　古今集「露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋の久しかるべく」

○武藏野云々　古今集「紫の一本故に武藏野の草はみながら哀れとぞ見る」

○月の霜云々　月が白く霜と照らしてゐるのには白菊が色かはらないでいよ〳〵霜と區別し難い。新古今集「霜を待つ籬の菊の宵の間におきまがふ色は山の端の月」
○木々の梢のなか〳〵に　梢の中になか〳〵と言ひ掛けた。染め盡した濃い紅葉の中に却つて薄紅葉の色も珍らしい。
○かたえ　片枝。一方の枝。

千年さへ猶よそならずきくの露花の色香にうつるのみかは
千代かけて結ぶときくの露なれば折りかざすともちりは亂れじ
菊の上に千年をかけておく霜も猶はかなしと花や見るらむ

籬菊

やへさける花のまがきは白菊の千年かさなる山かとぞ見る
立ちぬれて千代をやまたむ菊の花匂ふまがきの山のしづくに

野菊

武藏野の草はみながらおく霜にかれても匂ふ菊の一もと

水邊菊

谷川のながれに千代の影見えて行末とほくにほふ白菊
山川や浪の花さへたちそひてやへさき匂ふ岸のしらぎく

月前菊

よをへても月の霜にはうつろはで猶色まがふしらぎくの花

紅葉

染めつくす木々の梢のなか〳〵にうすき紅葉の色もめづらし
殘りなく染めての後も色こきは秋のはじめのかたえなりけり

とりしのぶ紅葉ばかりに染めはててなげく色なき秋の山のは

たつ田姫人の心の秋にあふたもとの色か木々のもみぢ葉

朝紅葉

色ふかく染めつる夜半の露ながら日影に匂ふけさのもみぢば

夕紅葉

てりそひて一しほ色のこま錦日もいりかたの峯のもみぢ葉

月前紅葉

月影にまさる梢の色見れば霜おきまよふ夜半のもみぢば

雨後紅葉

かつ晴れてそむる程なき時雨にも猶一しほはまさるもみぢ葉

村時雨過ぎこしかたの色見ればゆくさきうすき山のもみぢば

庭紅葉

からにしき庭の一木に立ちなれて心もかけぬ四方のもみぢ葉

千しほまで心の色をつくしても猶そめあかぬ庭のもみぢば

山紅葉

高間山まなく時なくしぐれして千しほを急ぐ峯のもみぢ葉

○人の心の秋　新古今集「色かはる萩の下葉を見てもまづ人の心の秋ぞ知らるゝ」

○夜半の露ながら　夜半に置いた露もそのまゝ一しよに。

○色のこま錦　色の一しほな高麗錦。色の濃いのをかけた。

○日もいりかた　日も入り方に日も入り難をかけた。

○かつ晴れて云々　かつ〴〵に時雨が晴れたり降つたりして染める間もないその時雨にも。

○ゆくさきうすき　村時雨の行く先の紅葉の色がうすい。

○立ちなれて　庭の木の紅葉に馴れて。立ちを裁ちに通はして唐錦の縁語。

○高間山　大和葛城山の峯。

○まなく時なく　時雨の降らぬ間なく何時といふ事なく常に。古今集「しもと結ふ葛城山に降る雪のまなく時なく思ほゆるかな」

下葉まで殘らぬ色に山の名のもるほどしるし露もしぐれも

瀧紅葉

さし出づる梢にたきの白絲をなかばそめたる岸のもみぢ葉

うすくこく瀧の白絲染めかけてにしき織りなす岸のもみぢば

杜紅葉

千入まで染むる日數をながめても飽かぬけしきの杜のもみぢ葉

たがあきの涙の露に色そめてくれなゐ深きころもでのもり

露霜の秋にみどりも色かへて染めますあけの衣手の杜

名所紅葉

いかならむまなく時雨の雲かゝるかづらき山の峯のもみぢ葉

笠とりの山も時雨のもる山も染むるもみぢの色はかはらず

秋ふかき露をなげきの涙にて色かはりゆくころもでの杜

故郷紅葉

たが忍ぶ涙のしぐれふる鄕にあきは色こきにはのもみぢ葉

故鄕の軒ばの紅葉いつのよにきて歸りつる錦なるらむ

羇中紅葉

○山の名云々　近江守山をさす。古今集「白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず色づきにけり」

○たきの白絲　瀧を白絲の數多垂れたのに見立てていふ。

○くれなゐ深き云々　紅の色深き衣から衣手の森とつゞけた。衣手の森は夫木抄に山城とし。衣手は袖で涙の露と緣。

○いかならむ云々　絕間なく時雨の雲がかゝつてゐる葛城山の紅葉は如何樣であらうさぞ色濃く美しいことだらう。かゝると葛と緣語。

○笠とりの山　近江山城の境にある。笠をとる意にかけた。古今集「雨ふれど露ももらじを笠取の山はいかでかもみぢそめけむ」

○もる山　近江野洲郡守山。時雨が漏るにかけた。

○しぐれふる鄕　時雨の降るを故さとにかけた。

○きて歸りつる　來て歸るを錦を著て歸るにかけた。

かげあかくつたも楓も紅葉して道くらからぬうつの山ごえ

柞

日を經ても同じはゝそのうす紅葉いつを限りの色とかは見む

秋の歌の中に

秋ふかくしぐるゝ枝はつれなくて雫にそむる松のしたくさ

秋山

立田山紅葉のにしき色はえて一むらかゝる峯のしらくも

露しぐれそめぬみどりも色そひて紅葉にまじる秋のやま松

山路秋行

おく深く匂ふ紅葉の秋の色にそむる心もゆく山路かな

秋の色も深くなりゆく山路とて身にしみかへる袖のゆふ露

暮秋

暮れて行く秋のかたみにおきそへてなしむも深き袖のゆふ露

慕ひえぬ秋の別れにきえかへり袖におくるゝ露もはかなし

くずかづらかへらぬ秋の別れ路にうらみかけける野べの夕露

暮秋雲

〇うつの山　駿河宇津谷と岡部との間。伊勢物語に「宇都の山にいたれば蔦楓は茂りて道いと細うくらきに。」とあるによつた。
〇はゝそのうす紅葉　古今集「佐保山の柞の色はうすけれど秋は深くもなりにけるかた」
〇しぐるゝ枝云々　時雨降る松枝は何の變りもなくて。
〇露しぐれ云々　玉葉集「秋山の緑の色ぞめづらしき紅葉にまじる松のひともと」
〇心もゆく山路　滿足し氣が晴れる山路。歩いて行く山路をかけた
〇くずかづら　葛の異名。かへる、裏の枕詞にも用ゐる。
〇秋の別れ路　秋の暮れゆく事。

入日影のこる名殘の秋の色もゆふぐれうすき山の端の雲
時雨とやあすはなりなむ行く秋の夕日をさふる山のはの雲

九月盡

今日のみとをしむ涙に目もきらひ心もくるゝ秋のそらかな
霜結ぶあすをも知らで殘しおくかたみはかなき秋の夕露

冬歌

初冬

神無月空も秋をやしのぶらむ涙しぐるゝ雲のころもで
秋の色はつゆもとまらで冬來ぬと落葉が上に霜ぞむすべる
冬來ぬときのふの露の玉ざゝも霜にぞさやぐけさの朝あけ

初冬霜

秋暮れし露の玉ざゝけさ見れば霜こそ結べ一夜ばかりに
冬くれば露は昨日をかぎりにて霜こそむすべむさしの原

初冬時雨

かきくらす麓の里のはつ時雨やまの端よりや冬はきぬらむ

○名殘の秋　わかれの最後の秋。入日影が殘る名殘とつゞけた。
○時雨とや云々　暮秋の夕日を隣へこめる山の端の雲は明日はもはや冬の時雨と降るだらう。
○九月盡　陰暦七八九月を秋とするので九月晦日秋が盡き秋に別れるのを惜しむ意。
○目もきらひ　目も曇り霞んで。きらふはきる(霧る)の延。
○心もくるゝ　心もくらむ。分別がつかなくなる。暮るゝ秋とつゞけた。
○つゆもとまらで　少しも留まらないで。つゆも露とかけた。
○露の玉ざゝ　玉ざゝは篠の美稱露の玉と言ひ掛けてつゞけた。
○さやぐ　さや／＼音がする。
○一夜ばかりに　一夜だけなのに

初冬曉時雨

神無月秋にわかれしよこ雲のやがてしぐるゝ山の端のそら

時　雨

しぐれ行くたゞ一むらのうき雲にいく里人かそでぬらすらむ
夢かよふ道のゆくへもかきくれて時雨にたどるさよの手枕
ほどもなくすぎの板やの村時雨聞きしは夢かさ夜の手枕
色にこそふるほど見えぬ神無月松ぞしぐれの音はたてける

朝時雨

明けぬとて別れし峯のよこ雲もしぐれて歸るけさの山風
明けわたる峯もしぐれにかき暮れてけさはわかれぬ横雲の空

夕時雨

山のはは晴れゆく空の夕日影さすやをかべは猶しぐれつゝ

夜時雨

おのれさへさそふ夢路の跡もなく杉の板屋のさよしぐれかな
さそはれて見はてぬ夢の手枕にをしむ涙もうちしぐれつゝ
明けやらぬひまも夜深くかきくらし物思ひ添ふる村時雨かな

○秋にわかれしよこ雲　秋に別れて冬になつた横雲。横雲が山の端を離れゆく時即ち夜の明け離れたをかけた。新古今集「春の夜の夢の浮橋とだえして峯に別るゝ橫雲の空」
○すぎの板や　杉に過ぎをかけた新續古今集「秋は早杉の板屋の初時雨音聞くしもぞ冬は寂びしき」
○色にこそ云々　時雨の降る程あひは松の色にこそは見えないが、
○明けぬとて云々　夜が明けたといふので峯を離れて行つた横雲。
○さそはれて　時雨に誘はれて。
○見はてぬ夢　古今集「命にもまさり惜しくあるものは見はてぬ夢のさむるなりけり」

跡もなく夢の行方をかきくらしおのれ晴れぬるさよ時雨かな
杉の庵やしぐれはよそに移ろひて晴れ行く月のかげぞもりくる
うき雲のかたへは晴れて月影も板間もりくるむらしぐれかな
もりかはる月の光もさだめなきねやの板間のさよしぐれかな

時雨驚夢

はやすぎて驚かしつる時雨さへ跡なき夢のさよの手枕
おどろかす夜半の時雨のそれならで夢の名殘にぬるゝ袖かな
おどろけば閨の板間に月さえて夢も跡なきさよしぐれかな

行路時雨

時雨れゆく雲の末野のたび人もわがごと今やそでぬらすらむ

海邊時雨

沖遠くかきくらすより音たてゝまだきしぐるゝいその松風

山家時雨

ふりめぐる山を軒端の柴の戸はしば〳〵たゝく村時雨かな

故郷時雨

故郷とあれし宿にもめぐりきて猶ふりすてぬむらしぐれかな

○かたへ　一部分。
○もりかはる　屋根の葺板のすき間を月の光と時雨とかはりあつて漏れて來る。
○はやすぎて云々　夢をさました時雨は早くも過ぎて跡なく、夢もさめて跡方もない。
○おどろけば　目がさめると。
○時雨れゆく云々　雲がしぐれて行く遠い野のはてを辿りゆく旅人も私と同じやうに時雨に袖を濡らしてゐることだらう。
○沖遠く云々　遠くの沖を暗く曇らすよりは早く松風の音をたてて磯にしぐれる。
○ふりめぐる云々　時雨の降り巡る山を軒端にしてゐる柴の戸の古い家は。
○ふりすてぬ　振り捨てない。ふりに降りをかけた。

木枯

さそはれぬ梢のいろと知りながら吹くもつれなき松の木枯

杜木枯

はげしさの程もしられて散り残る色こそみえね木がらしの杜

ちりはてしよその梢は音たえてときはの森にのこる木枯

聲きけばちりてほどふる梢にも残るなげきの杜の木がらし

落葉

ゆきかへり染めし千入の果ては又おのれしぐれとふる木の葉かな

やがてちる物ともしらでいつしかと千入を待ちし庭のもみぢ葉

さそひくる嵐しぐれて松が枝もつもる木の葉に色づきにけり

もみぢ葉のこれも許さぬひの色を風は心になどまかすらむ

風前落葉

はては又おのれ嵐の色染めて空にしぐるゝ峯のもみぢ葉

吹きたゆむ程もしられて紅葉ちる嵐のいろぞうすくなりぬる

いく木ともしらぬ錦のもみぢ葉をたゞ一むらにさそふ山風

もみぢ葉の錦吹きしく木の本やちらすあらしの宿りなるらむ

○さそはれぬ云々　木枯には吹き誘はれない松の梢とは知りつゝも木枯が吹くのに色もかはらぬ松の冷淡なことよ。

○木がらしの杜　木枯の吹いた森　夫木抄には木枯の森を駿河又山城とす。夫木「人知れぬ思ひ駿河の國にこそ身を木枯の森はありけれ」

○ときはの森　常緑樹の森。夫木抄常磐の森を山城とす。

○なげきの杜　夫木抄に國未勘之と。歎きにかけた。

○ゆきかへり云々　時雨が往きに還りに木の葉を千入と染めた。

○いつしかと云々　何時千入の色になるか早くなれかしと待つた。

○つもる木の葉　松が枝の上に散り積つた紅葉。

○許さぬひの色　高貴の御料に紛れぬやうに臣下の袍に禁ぜられた色即ち緋色の一の深緋色。

○吹きしく　吹きしきる。頻りに吹く。はげしく吹く。

落葉隨風

見渡せばあらし色づく立田山峯の木の葉やまなくちるらむ

さそはるゝ程もしられて吹きまよふ嵐色こきみねのもみぢ葉

うへもなき錦と空にさそはれて心たかしや風のもみぢ葉

月前落葉

さそはるゝつらさのみかは見る月の光をさゝふる風のもみぢば

さはりつる梢もはれて庭の面にもみぢ葉あかくうつる月影

雨後落葉

そめ〳〵て今は千入の村しぐれはるゝ嵐にちる紅葉かな

おのれ又ふりそめにけり雨はれて今ぞ千入と賴むもみぢ葉

むら時雨はれゆく風にふりそめてまた袖ぬらす庭のもみぢ葉

落葉霜

しばしこそ風にまかすれ果ては又染めつる霜にくたすもみぢ葉

落葉有聲

さばかりはふかぬ嵐の音高くさわぐやきはふ木の葉なるらむ

庭落葉

○さそはるゝ云々　風に紅葉が誘はれるのが情なく堪へ難いばかりであらうか月の光を支へとめるのがつらく堪へられぬ。

○あかく　紅葉の赤いに月影の明るいのをかけた。

○おのれ又云々　降つてゐた雨が晴れると紅葉が自分とまた降りはじめた。

○染めつる霜云々　美しく紅葉させた霜のために腐らせる。

梢より庭のおち葉の色ぞこき千入ばかりやまづちりにけむ

のこりなく紅葉散りしく此のごろや庭の眞砂の千しほなるらむ

さそひつる梢の音もうつろひて落葉にさわぐ庭の木がらし

路落葉

ちりうづむ道こそまよへ落葉には行きかふ人の跡し見えねば

山落葉

ちる程ぞなか〳〵松も見えわかで山はさながら紅葉なりける

木枯に爭ひかねて色づきぬ紅葉しぐれとふるの山まつ

杜落葉

同じ色も散りしく影に詠めては變るけしきの杜のもみぢ葉

河落葉

山風に木の葉しぐれとふる郷の佐保の川水もみぢしにけり

よしさらばさそひ行くせも淀むまで紅葉ちりしけ山川の水

風はやみ空をながれて川水にちりもかゝらぬ峯のもみぢ葉

橋落葉

橋のうへに散りかゝりつゝさにぬりの色染め渡す岸のもみぢ葉

○ちる程ぞ云々　紅葉の散る間は青い松は見わけがつかないで山はすつかり紅葉である。
○木枯に云々　松が木枯に抵抗しきれないで紅葉した、それは紅葉が時雨となつて降る布留の山の松布留の山は大和山邊郡。

○木の葉しぐれと云々　ふる郷に降るをかけた。續古今集「槇の屋に木の葉時雨と降り果てて袖にとまるは涙なりけり」
○佐保の川　大和添上郡。
○よしさらば云々　まゝよ仕方がない散るならば紅葉を誘うて流れゆく瀬も淀むほどまで散り敷け。
○さにぬり　丹塗。
○染め渡す　橋を赤く染めて架け渡す。

○幾かふるや　幾日經るを古屋にかけた。

○今はあらし　嵐にあらじをかけた。

○これも　松もつれなく下紅葉もつれなく殘る。つれなくは他の紅葉は散つても之れだけは前さかはりなく平氣で殘るをいふ。

○かれぬのみかは　霜のために枯れることのないばかりでなく霜で却つて菊の色がまさつた。

ちりしける紅葉の色もとことはに朽ちせでかゝれ谷の岩橋

古宅落葉

くちし木橋ちりかゝりたるもみぢ葉のたえ〴〵殘る色もはかなし

故郷落葉

色も又軒端に朽ちぬちりしきて幾かふるやの庭のもみぢ葉

紅葉殘枝

おのれさへ今はあらしの庭とてやよそに散り行く軒のもみぢ葉

庭霜

木枯をへだつる松の下もみぢこれもつれなくのこる一枝

野霜

冬くれば露も跡なくうつろひて霜のみ深きにはのあさぢふ

しげかりし草は跡なく冬がれて霜ふみまよふ野邊の通ひ路

殘菊

見れば又秋の千ぐさの面影も殘りてにほふ菊のいろ〳〵

おく霜にかれぬのみかは菊の花なか〳〵色ぞ染めまさりける

菊の花いかに契りをむすび置きて霜にもかれず咲きのこるらむ

○置きかはる云々　露が霜となつて置きかはる。
○つゆだにもなし　少しもない。露だけもないと言ひ掛け。
○冬深み　冬が深いので。冬ともう謂であるによつて。
○踏み分けし云々　踏みわけて尋ね來た人の來るのも一しよにめがれて、淺茅生と一しよに人めも冬がれて。
○あとだにもなき　人の踏みわけた跡もなくなつた。
○人めあとなき　人の往來のあともなき。
○なごりもなゝ草　名殘もなくなつた野邊。無しを七草とかけた。
○あしたの原　大和北葛城郡葦田霜の朝（あした）にかけた。
○立野　播磨揖保郡龍野か。色朽ちて立つ野の薄とつゞけた。

にほへなほ秋の形見とのこし置く霜のまがきの白ぎくの花

寒草

置きあまる野べの尾花の袖の霜はらひかねてや冬がれぬらむ

袖くちて色こそなけれ見し秋のおもかげまねく野邊のを薄

置きかはる霜に千草も枯れはてて秋の名殘はつゆだにもなし

冬深みやどりし風も音かれて霜のみさやぐ庭のをぎはら

庭寒草

踏み分けし人めながらに冬がれてあとだにもなき庭の淺ぢふ

宿りこし風もそよけに吹きさえて霜にぞくたす庭の荻原

野寒草

まねきつる草の袂も冬がれて人めあとなき野邊のをすゝき

かぞへ見し尾花くず花霜がれて秋のなごりもなゝ草の野邊

見し秋の千くさは枯れて置く霜のあしたの原ぞひとつ色なる

色くちて立野のすゝき見る人の袖さへたへぬ霜の朝かぜ

枯野

うらみても秋はかへらで置く霜におのれ枯れゆく野邊の葛原

○あしの浦風　蘆吹く浦風。

○冬ふかみ云々　冬が深いので山川の淵と瀬の區別もつかず氷が張つてゐて山川はすつかり水が淀む

○ちりならで云々　鏡は塵が居れば曇るが、池の鏡は塵でない氷が張つてゐるのでも曇る。古今集「年を經て花の鏡となる水はちりかゝるをや曇るといふらむ」のちりを塵の意のみに解して本歌に取つた。

○えぞ打ち出でぬ　波も打ち出ることが出來ない。古今集「谷風にとくる氷のひまごとに打ち出づる波や春の初花」によつた。

ひとつ色に霜のみさえて冬くれば露ものこらぬ野邊の百草

寒蘆

色もなく枯れてなか〳〵ふく音はさわぎぞまさるあしの浦風

をれふして跡なき霜に吹く音も枯れて騒がぬあしのうら風

寒松

はては又ちらぬ常磐の松が枝につれなく殘る峯の木がらし

氷始結

けさ見れば淀む岩間のほどばかり氷りそめたる山川の水

氷

とぢはてぬ氷の下にきこゆなり猶いはくゞるたに水のおと

岩ばしる音もすくなく行く水のたえ〴〵こほる冬の山川

冬ふかみ淵瀬もわかずこほりゐてさながらよどむ山川の水

池氷

池水の氷る鏡によもすがらさえし嵐のほども見えけり

冬ふかき池の鏡はちりならでこほりゐるにも影ぞくもれる

冬深くとづるこほりにさゞ波もえぞ打ち出でぬ池のみなくち

河　氷

おのれのみ猶音たてていは波のこほる川瀬にふくあらしかな

ひろせ川名のみ流れてゆく水のなぎさも遠くこほる頃かな

山家氷

人こそあれ氷むすびて谷川の水もおとせぬ冬の山ざと

冬　月

木枯に月のかつらのもみぢ葉もちりてや影の冬はさびしき

こがらしに月の桂のかげばかりなほ照りそひてのこる山の端

白妙に影こそさゆれ久かたの月のかつらも霜やおくらむ

山冬月

さえくれし程もしられて山の端の雪よりいづる夜半の月影

野冬月

み し秋の面かげ遠くふゆがれて月のみ残る眞野のかや原

湖冬月

遠ざかるゆくへも月の影さえて氷はてなきしがの浦波

千　鳥

○ひろせ川云々　廣瀬川の瀨が廣いといふのは名ばかり世間に流布して。廣瀨川は大和葛城川。

○月の桂云々　古今集「久方の月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ」

○眞野のかや原　萬葉集「みちのくの眞野のかや原遠けども面影にして見ゆといふものを」磐城相馬郡眞野。

○遠ざかる云々　新古今集「志賀の浦や遠ざかりゆく波間よりこほりて出づる有明の月」

立ちさわぎみちくるしほの夕波に聲あはせつゝなく千鳥かな

あしの葉は跡もなにはの浦風にむれたつ千鳥聲さわぐなり

うちよする波のひまにも聲たてゝさわぐ磯べのむら千鳥かな

夜千鳥

梓弓いそべの千鳥なく聲も夜こそまされ妻やこふらむ

浦千鳥

あゆちがた夕波千鳥みつしほに遠くなるみのうらづたふ聲

湊千鳥

猶しばし行方しられてさよ千鳥ゆらのみなとに聲ぞ聞ゆる

磯千鳥

汐みてばかくるゝ磯の松がねにあらはれて鳴くさよ千鳥かな

湖千鳥

しがの浦やこほる渚に聲たてゝ波のあとゝふさよ千鳥かな

旅泊千鳥

うきねする袖のみなとによもすがら波かけそへて鳴く千鳥かな

うきねしてきけば涙もちる玉のをののみなとに千鳥鳴く聲

○みちくるしほ云々　風雅集「遙かなる沖の干潟の小夜千鳥滿ちくる潮に聲ぞ近づく」

○跡もなにはには　路も無しに難波をかけた。

○梓弓　いの枕詞。磯にかけた。

○夜こそまされ　古今集「梓弓ひけば本末わが方によるこそまされ戀の心は」

○あゆちがた　年魚市潟。尾張熱田港附近にあつた干潟。萬葉集「櫻田邊たづ鳴き渡るあゆち潟汐干にけらし田鶴鳴きわたる」

○遠くなるみ　遠くなるに鳴海をかけた。

○うきね　浮寢。船の中に旅寢することゝ。

○袖のみなと　筑前博多附近の海濱にあつた。

○波かけそへて　袖に涙をかけそへて。

○をののみなと　伊勢多氣郡大淀附近が小野湊の址だといふ。玉の緒からをのとつゞけた。

水鳥

あしがものうは毛の霜は拂ひても下やすからず氷る池水

冬がれしあしは色なくをれふして青羽めにたつ池の水とり

さえわびてさぞなうきねときく袖の涙もこほるよはの水鳥

池水鳥

こほりゐる鏡の池のほど見えてよそにうつろふ水鳥の聲

水鳥馴舟

みなれ棹なれも小舟のゆきかへり同じ堀江にあそぶ水鳥

屋上霰

よもすがらまきの板やに音たてて夢もたまらぬ玉あられかな

冬朝

猶ふかく埋もれふして霜さゆる朝けおきうきねやのを衾

冬夜

重ねても猶寒けきはふすまにもまさりていくへ深き夜の霜

衾

霜こほり重ぬるをしの名にはおへどさゆる夜しらぬ閨の小衾

○あしがも　葦鴨。鴨をいふ。
○下やすからず　拾遺集「水鳥の下安からぬ思ひにはあたりの水も氷らざりけり」
○さえわびて　夜の寒さが身にしみて堪へられずして。新古今集「さえわびてさむる枕に影見れば霜ふかき夜の有明の月」
○さぞな云々　水鳥の水に浮きながら寢るのが如何ばかり落著かず安眠できぬかと聞く袖。
○こほりゐる云々　池に氷が何の邊まで張つてゐるかの程が見える、水鳥が氷の張られぬ餘所へ移つてゆくので。うつろふは移るに鏡に映る意をかけた。
○みなれ棹　水に浸り馴れた棹。
○なれ　汝。水鳥に呼びかけた。
○朝け　朝明け。夜明け。
○重ねても云々　衾を幾重重ねてもなほ寒いのは衾以上に幾重にも深い夜の霜。
○霜こほり云々　新古今集「霜迷心も解けぬ冬の池に夜ふけてぞ鳴く鴛鴦の一聲」
○をしの名云々　鴛鴦の衾といふ名に負うてゐるけれど。をしのふすまは鴛鴦の模樣ある衾。

埋火

ともなへば寒さのみかは寂しさも忘るゝよはの埋火のもと

閨埋火

よもすがらおきゐる床のさむしろにしく物もなき閨の埋火

鷹狩

たつ鳥もしらふのたかの同じ色に雪散りかゝる御狩野のはら

雪中鷹狩

ふりまがふしらふの鷹もをちかへる袖をや雪に猶たどるらむ

炭竈

山のはの雪げの雲にたちそひてけぶりもさゆる炭がまの里

ふるまゝにをのの炭竈たきそへてけぶりも深き雪の山里

神樂

たきまさるあたりは霜の色消えて火かげぞしろき百敷のには

待雪

雪は又冬の日數のつもるをば空にまちてやおそく降るらむ

初雪

○さむしろ 狭い筵。さを接頭語として筵の義にもいふ。
○しく物云々 閨の埋火に比べるべき物もない。筵に敷く物もないと言ひ掛けた。
○しらふ 白斑。白いまだら。

○をちかへる 本へかへる。

○山のはの雲云々 炭焼く煙が峯横様の雲と一しよになつて。
○をの 山城愛宕郡小野。拾玉集「小野山も大原山も炭竈の煙はおなじ哀れなるらむ」
○神樂 毎年十二月吉日を選んで行はれる内侍所の御神樂。
○たきまさる 御神樂の時官人がたく庭燎をいふ。
○火かげ云々 庭燎の火が禁中の御庭にはつきりしてゐる。著(しろき)に霜の白きをかけた。

跡ならではれゆく空をゝしむかなつもらぬ今朝のにはの初雪

見なれこし落葉の庭にふりかはる色珍らしき今朝の初ゆき

庭初雪

珍らしく庭にぞつもる昨日まで雲居のよそにみねの白雪

けふこずば明日は眺めもふりぬべしとへかし人の庭の初雪

雪

凩はらふ木々には咲かで庭にのみ散りしく花と積る白ゆき

おそかりし程もしられてふりそむる今日より深く積る白雪

ふりそめて庭のまがきの程なきに山とも高くつもる雪かな

積雪

日をふれば庭の籬もうづもれて限り知られずつもる白雪

よしの山ふりしく雪の幾重ともいはのかけ道跡たえにけり

松雪

ふりそむるけさは中々色はえてみどりぞ深き雪の松が枝

時雨にはのこりし松ぞこと木よりまづふる雪の色は見せける

ふりつもる色になびきてつれなさも雪にはたへぬ松の白妙

○ふりかはる　接頭語のふりを降りにかけた。落葉が降つて庭が紅であつたのに全く一變して雪が降つて白いのが珍らしい。

○みね　よそに見るを峯とかけた

○けふこずば　古今集「今日來ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」

○程なきに　雪の降りそめてからまだ時のいく程もないに。籬が間近な意をかけた。

○限り知られず　はても知られず遠くまで一面に。

○いはのかけ道　岩石の嶮しい山道。幾重ともいはずを言ひ掛け。

○時雨にはのこりし松　他の木は時雨に紅葉したが紅葉しないで時雨に濡れた松。古今集「白露も時雨もいたくもる山の下葉のこらず色づきにけり」

○かつはれし云々　雪がかつ〳〵晴れた濱の雪の庭。

○とはぬつらさ云々　訪ひ來てくれぬつれない程もはつきりわかるやうに。

○積るもよしや　雪が積つてもまよ積もるなら積れ。

○とめて分くらむ　跡を尋ね求めて雪を踏み分けて來るだらう。

○けしきの杜　大隅姶良郡氣色森千載集「秋の來るけしきの森の下風にたち添ふ物は哀れなりけり」

○年ふりし云々。これが年經た老いた頭の白髮の色であらう。ふりは舊りで降りにかけて雪の縁語。

月前雪

かつはれしはだれの庭も色そひて月に夜深き雪の白たへ

庭雪

つげやらむ今朝めづらしく降りそめて雪も友まつ庭の景色を

待つ人のとはぬつらさもいちじるく跡なき庭につもる白雪

山とのみ積るもよしや庭の雪立ちよる人もあらぬ籬は

行路雪

ふみまよふ跡ともしらでこむ人やとめて分くらむ野路の白雪

山雪

見し春の花の木毎にふりつもる雪もよしのの山のあけぼの

野雪

ふじのねにけさはつゞきてふり積る雪もはてなき武藏野の原

杜雪

花紅葉うつればかはるをりふしのけしきの杜の木々の白雪

年ふりしこれやかしらの色ならむおいその杜につもる白雪

關路雪

ふる雪にゆくも歸るも跡たえて名も埋もるゝ逢坂のせき

ふみなやむうさも忘れて面白き雪にこえゆく足柄の關

遠村雪

けぶりのみ麗くは見えて降る雪に埋もれはてし里の竹村

故鄕雪

くちのこる軒端うもれて又さらに見しにもあらぬ雪の故鄕

田家雪

こむ年の秋のたのみもいちじるくかど田の面につもる白雪

羇中雪

雪ふかくつもる旅路はふる鄕を思ふこゝろも行く方ぞなき

旅宿雪

わけくれて賴むかりねの山松もわびしや雪の下をれの陰

雪中眺望

うづもれて中々物のいちじるくあやめわかるゝ雪のあさ明け

雪中待人

とへかしな跡は思はでひとりのみ見ること惜しむ庭のしら雪

〇ゆくも歸るも　後撰集「これやこの行くも歸るも別れつゝ知るも知らぬも逢坂の關」
〇名も埋もるゝ　逢坂の關も埋もれ逢ふこいふ名も埋もれて跡たえて逢はず。
〇ふみなやむ云々　雪途踏みなやむ足の難儀な苦しさも忘れて。
〇足柄の關　駿河足柄關。越えゆく足こかけた。
〇けぶりのみ云々　風雅集「山もこの竹はむら〳〵埋もれて煙も寒き雪のあさあけ」
〇見しにもあらぬ　かつて見たこ全く異なつた故鄕の雪景色。
〇こむ年　來年。
〇秋のたのみ　秋の田の實。秋季田に熟する米。收穫ある賴み望みにかけた。
〇わけくれて云々　雪の山路を踏み分けて日が暮れて、その下に假寢しようこ賴みにした山松。
〇中々物の云々　却つて何やかやはつきりこ。
〇こへかしな　訪問して下さいな
〇跡は思はで　尋ね來るに雪に跡つけることは考へないで只管ひこりで眺めるのが惜しい。

○年のこなた　まだ年の改まらぬ年の暮。後撰集「祝ふ事ありとなるべし今日なれど年のこなたに春も来にけり」

○心ぞまづ云々　心が先づくらんで分別がつかなくなつた。心のくらむを年の暮れると言ひ掛けた。

○心もとしの云々　年の暮に心もくらみ惑ふ。暮に分別に迷ふ意を言ひ掛けた。

○猶いかに云々　此の以上にまだどの位年の暮れるのが惜しまれるだらう。

○春のいそぎ　春の用意。

○心いとなく　心いそがしく。心にひまなく。

早梅

くる春をさそふしるべかまづ咲きて年のこなたに匂ふ梅が香

くる春やとなりま近くなりぬらむ花咲きにほふ中垣の梅

春既卜鄰

花もやゝあなたの枝は咲きそめてはるもまぢかき梅のなか垣

歳暮

あはれ又身にそふ年と思ふにもをしむ心ぞまづくれにける

したひても行方しられぬ別れ路に心もとしのくれまどひつゝ

くれてこそ年の行方もしられけれあはれ我が身にとまる物とは

いたづらに過ぎし月日のおこたりも我が身につもる年のくれかな

けふのみに老いまさり行く心地してなみだもつくる年の暮かな

さても猶日かげやはやき年の暮春まちいそぐ人にとはばや

惜歳暮

猶いかにくれゆく年の惜しまれむ春のいそぎにまぎれざりせば

老後歳暮

のどかにもくる春またで行く年を心いとなく何をしむらむ

身につもる齢のみかは年の暮惜しさも老は數まさりつゝ

歳暮雲

かづらきやあすは霞のよそに見む年くれかゝるみねの白雲

羇中歳暮

都いでし月日かさねてたび衣またをしまるゝ年の別れぢ

はかなくも年のわかれを慕ふかなわが行方だにしらぬ旅路に

歳暮述懐

くれてゆく年は雪ともふらなくにつもる頭の白くなるらむ

黑髪にしら雪ふりておいせずばつもらむ年のくれも歎かじ

いたづらに老いせし年の暮ばかり月日を常にをしまましかば

戀歌

初戀

春の野の草のはつかに見てしよりまづもえそむる我が思ひかな

ゆくかたもしらぬ戀路に何と又おもひたちける心なるらむ

きのふけふ思ひそめけるはつしほに袂色こきこひごろもかな

○かづらきや云々　新古今集「よそにのみ見てややみなむ葛城や高間の山の峯の白雲」

○かさねて　衣の縁語。

○雪とも云々　雪となつて降りもせぬに。

○つもる頭　年の積るに雪の積るをかけた。

○おいせずば　老いないものであるならば。

○年の暮云々　年の暮に惜しむほど平常に月日を惜しんで居たらうなら今のやうな悔はあるまいに。

○草のはつかに云々　草のやうにほのかに。はつかは僅か、かすか。古今集「春日野の雪間をわけて生ひ出づる草のはつかに見えし君はも」

○思ひそめける云々　戀しく思ひそめた最初。初入は染物を染汁に初めて浸すこと。

口なしにそめて露けき戀衣これやおもひの色のはつしほ

忍戀

いかにせむしのぶの衣かぎりありて包むにも猶あまる涙を

年もへぬいつを忍ぶるかぎりとて猶いひいでぬ思ひなるらむ

かくとだにいはで忍ぶのすり衣みだるゝ露に袖やくちなむ

ふるとても忍ぶ身をしる雨なれば袖の外にはもらじとぞ思ふ

ほにいでぬ思ひは草のたもとだに露けきものをしのゝを薄

ほに出でぬ思ひもかくとしのすゝきしのに露ちる袖を見せばや

しられじと人に忍ぶの浦の蜑のいつかみるめをからむとすらむ

露しぐれ深く人めをもる山のした葉の色ぞ染めてかひなき

忍涙戀

心にもあらぬ涙はつゝめども袂にえこそ任せざりけれ

いかにせむつゝむ心の深きにもまさりておつるそでの涙を

樂忍戀

もらさじとつゝむ心もおのづからあひ思ふ中は通ひぬるかな

いそぐとてなにうらむらむわれも猶曉深くしのぶわかれを

〇口なし　梔子色。山吹色。口無しをかけ初戀の心のたけを云ひ表はし得ぬをいふ。

〇しのぶの衣云々　忍ぶ力も限りあつて戀心を包みかねる。包むは衣の袖につゝむをかけた。新古今集「春日野の若葉の摺衣忍ぶの亂れ限り知られず」

〇いつを云々　何時までを限りとして云ひ出さないといふのか。

〇いはで忍ぶ　云ひ出さないので心にはかり思つて居る。地名の岩手と信夫にかけた。

〇すり衣　染草で模樣を摺りつけた衣。亂るの序とした。信夫の名產。新古今集「陸奥のいはで忍ぶはえぞ知らぬかきつくしてよ壺の碑」

〇ほに出でぬ　穗に表はれ出ない外にとは言つて表はれ出ない。

〇しのに露ちる　新古今集「あふ事はかた野の里の笹の庵しのに露ちる夜半の床かな」

〇みるめ　海松。見る目をかけた

〇人めをもる山　人目を漏れるを近江の守山にかけた。古今集「白露も時雨もいたく守山は下葉殘らず色づきにけり」

聞戀

吹く風の音に聞きつゝいつまでかうはの空なる物思ふらむ

見戀

いつか見てそれとも知らむよそにのみ聞きて忍ぶる人の面影

あふ事も波ぢはるかに淡路島あはとのみ見てこひや渡らむ

祈戀

かけてのみいのる契りをうけひかぬ神もうき田の杜のしめ縄

あふことは猶かた岡の杜の露かけて祈りし神さへぞうき

はつせ川しらゆふ波にさく花の秋なき色をかけていのらむ

戀せじのみそぎを神のうけぬにも逢瀬ありやと猶いのるかな

葛かづらうらみながらも年月をかけてぞ祈る神のいがきに

ふみならし猶やいのらむ逢坂の關の岩かどかたき契りも

しるしだに見えぬ鏡の神かけてなに祈るらむ心づくしに

厭戀

あふこともなぎたる朝のいとはれて心も空にきゆるうき雲

つれなさを猶こそかこて厭はるゝ世の理（ことわり）もしらぬうき身は

○うはの空云々　新勅撰集「月影さす少女の姿見てしよりうはの空なる物こそ思へ」

○あはと　阿波門即ち阿波鳴門。彼はこのまにかけ、○新古今集「淡路にてあはと遥かに見し月の近き今宵は所がらかも」

○うき田の杜　山城乙訓郡にある。續古今集「かくしつゝさてやみぬべき大荒木の浮田の森のしめならなくに」

○しらゆふ波　白い木綿（ゆふ）の如き波。

○秋なき色　秋紅葉して色變ることない。○古今集「草も木も色變れどもわたつ海の波の花にぞ秋なかりける」

○戀せじと　古今集「戀せじと御手洗川にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも」

○ふみならし云々　拾遺集「逢坂の關の岩かど踏みならし山立ち出づるきり原の駒」

○鏡の神　肥前松浦宮一名鏡宮。源氏玉鬘「君にしも心違はば松浦なる鏡の神をかけて誓はむ」

不逢戀

あふことのなみだばかりを包み來て嬉しさしらぬ我が袂かな

流れてもうき中川の水のおもに袖のみぬれてなほぞ數かく

岩代のをかのかや原むすぼほれとけぬ思ひによをもふるかな

たぐひなくつらき契りと思ふにもさきのよかけて露ぞこぼるゝ

消えもせであらばあふよの言の葉にかゝるもはかな露の玉の緒

ゆくへなき空の煙を限りにて逢ふ事しらぬ吾がおもひかな

逢ふ事もなくてつひにと思ふにもながめにかゝる空の浮雲

つれもなき人の心はさておきてこひしなぬ身の歎くころかな

つれなさに今はたゆとも玉のをの長きうらみは猶や殘らむ

戀ひ死なでつらきも逢ふにかへぬべき爲とや殘る命なるらむ

戀の歌

しるべとはならで中々ゆくへなく思ひに迷ふわがこひぢかな

つれなきに我が心さへならひてや思ふにも猶まかせざるらむ

しのぶるもおなじ心の苦しさを忘れむとのみ何思ふらむ

涙せく袖もいつしかくちなしの色のやしほにしたこがれつゝ

○數かく　古今集「ゆく水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」
○岩代　紀伊日高郡岩代。新古今集「行末は今幾夜とか岩代の岡のかや根に枕結ばむ」
○ながめにかゝる　新古今集「折こそあれ詠めにかゝる浮雲の袖も一つに打ちしぐれつゝ」
○逢ふにかへぬべき　古今集「命やは何ぞは露のあだ物を逢ふにしかへは惜しからなくに」
○しのぶるも云々　忘れるのも忘れずに心に思うてゐるのも心の苦しさは同じのにどうして忘れようとはかり思ふのか。
○くちなし　袖の朽ちるを梔子にかけ更に口無を含めた。

見せばやと何歎くらむ袖の色に移るばかりのつらさならぬを

深からぬ思ひの露もかゝるかと問はばや色に移るたもとを

待戀

暮ふかく頼めば苦しなほざりに我も人をや今はまたまし

くれをまつ心もいとゞ夕日影くもらぬ空にこがれわびつゝ

こぬ人をまつの梢のゆふしぐれかひなき色に袖ぬらしつゝ

思ひやれよその契りのさはるにも頼めしくれの雨のつらさを

まつといひし我がいつはりはさて置きてこぬ人かこつ山の端の月

ちぎりおきてまつ夜ながらの袖にとは思ひやかけし曉の露

さゝがにの絲のたのみもたえ〴〵にこぬよふけゆく軒の松風

僞りのならひ知らずばこぬまでも猶やたのみのありあけのそら

契りおきてこぬよばかりを戀衣かさねむ物と思ひかけきや

毎夕待戀

こぬ暮の重なるまゝにさりともといとゞ頼みて人ぞ待たるゝ

忍待戀

立ちぬれてまづ袖くるししのぶ山こがくれふかき露の夕ぐれ

○暮ふかく云々　暮れて來ると契つた人を深く頼みにしあてにすると來ぬのが苦しい。今はもういい加減に待たう。

○まつの梢　松に待つをかけた。

○かひなき色　時雨が紅葉させようとしても時雨に染らぬ青い松の色。

○まつ夜云々　約束があるので戀人を待つたまゝで空しく夜が明け曉の露が袖にかゝらうと思ひ掛けなかつた。新古今集「歸るさの物とや人の眺むらむ待つ夜ながらの有明の月」

○さゝがにの絲云々　古今集「わがせこが來べき宵なりさゝがにの蜘蛛の振舞かねてしるしも」

○さりともと　來ぬ暮が重なつたがそれでも來るだらうと愈頼みにして待つ。

初逢戀

こひ／＼てむすぶ契りのはつ尾花ゆく末かれず手まくらにせむ

逢戀

絕えやらでつれなかりつる玉の緖も長くと契る夜半ぞ嬉しき

よりかけてあふよありける玉の緖を絕えねとのみは何思ひけむ

年月を思ひへだてしつらさにもこえてうれしきあふ坂の關

命だにあらばあふよと待たれしもかゝる契りのしるしなりけむ

わかれなば心のやみのゆかりとて夢とやならむさよの手枕

こひ／＼てまれにあふ夜のうれしさを包むほどなき袖の別れ路

逢後增戀

又さらにまさる思ひやあふ事にかへぬ命のむくいなるらむ

夢逢戀

よひ／＼にあひ見る夢の契りにもくれゆく空ぞ猶またれける

梓弓つらきうつゝにひきかへて見るもはかなき思ひねの夢

ゆきかよふ夢路ばかりは中々にゆるすもつらきあふ坂の關

あふ坂やかよふ夢路の別れまでゆるさぬ鳥のあかつきのこゑ

○ゆく末かれず　末來永く離れずに。尾花の枯れずにをかけた。
○絕えやらで云々　寧ろ命が絕えてほしいと思つたに命は自分に同情なくも絕えなかつたのに。
○よりかけて　古今集「片絲を此方彼方によりかけて逢はずは何を玉の緖にせむ」
○絕えね　絕えよ。
○つらさに云々　心苦しさにも優つて嬉しき。越えては關の緣語。
○命だに云々　落窪「命だにあらばと賴む逢ふ事を絕えぬといふぞいと心うき」
○梓弓　ひきの枕詞。
○夢路ばかり　なまなか夢に通ふ路だけ關を通してくれるので却つて現に逢へぬのがつらい。
○ゆるさぬ鳥　後拾遺集「夜をこめて鷄のそら音ははかるともよに逢坂の關はゆるさじ」

別戀

おどろかす鳥の八聲にまさりけり別れをいそぐ人のつらさは

おき別れ袖に涙をかけろとやあかつきつげて鳥のなくらむ

あけぬとていそぐ心もなく聲もとり〴〵つらき別れ路のそら

別れ路のそらにきえなば契りおきし此の夕露もかひやなからむ

明けぬれど猶もよふかきこゝちして涙に暗きわかれぢの空

うれしさを包みもあへずおき出でてなみだ玉ちるそでの別れ路

有明の月のゆくへもかきくれて歸るさまよふそでの別れ路

涙さへとまらぬ袖のわかれぢに殘りてやどる月もうらめし

後朝戀

有明のかたみの月は影たえて袖にのこれる露もはかなし

露はなほおきこそまされ月影もきえてわかれしけさの袂に

うちとけぬ心強さのなごりまでつらき又寐のゆめの手枕

きえわびぬ又寐の夢のきぬ〴〵にうきをかさぬる袖の朝露

露はなほ又寐の牀のおきうさもしらで袂にまさるけさかな

くれまどふけさの別れに消えかへりひるまもしらぬ袖の露かな

○かけろ　鷄の鳴聲。涙を懸けをいひかけた。

○とり〴〵　心と聲とどれもこれも。鷄を言ひ掛けた。

○うれしさ云々　逢うて契り語らふ嬉しさを袖に包みあへぬに早くも夜が明けて。

○そでの別れ路　男女纒ひかはした袖を離して別れる後朝の別れ。

○有明けのかたみの月　語らうた夜もすがらを照らした月が有明月と殘って語らうた夜の形見になって。

○又寐　一度覺めてまた寐ること。

○消えかへり云々　別れの悲しさに死ぬ思ひがするのをいふ。朝に露が消えて晝間も知らずと露の干る間とかけた。新古今集「朝ぼらけ置きつる霜の消えかへり暮待つほどの袖を見せばや」

顯戀

あらはれむ物ともしらで松が根に心ぞよせしおきつしら波

名立戀

數ならぬ塵の身とてやこふるよりまだき浮名の空に立つらむ

うき人もそらになき名の立ちぬるをなげくや同じ心なるらむ

戀衣へだつる中にうき名さへとり重ねても歎くころかな

立無名戀

立ちさわぐなみの浦にはみるめかるあまの袖だにぬるゝ習ひを

尋戀

さしてゆく思ひを門のしるしにて杉ともいはず尋ねてぞとふ

尋ねてはつらき心も杉の門さすがにあはでいかゞかへさむ

尋ねこししるしにはあらでつれもなき心の色をみわの杉村

尋ぬれどあはで月日は杉のかどさしもしるしのなき契りかな

疑戀

しりそめて中々人のまことをも僞りかとぞ疑はれける

いかにして人の心をみなせ川したにうきせも有りてゆくやと

○まだき浮名云々　戀するとすぐ早くもうき名が高く上つた。空と浮と立つと緣語。古今集「知るといへば枕だにせで寢しものを塵ならぬ名の空に立つらむ」

○うき人　わが憂く思ふ人。つれない打ちとけてくれぬ人。

○戀衣云々　戀が隔てられるその上に浮名が立つことまでを歎く。かさねまと衣の緣語。

○立ちさやぐなみ　立ち騷ぐ波に騷がしく立つうき名をかけた。

○思ひを門のしるし　我が心を尋ねる門の目標として。

○杉とも云々　古今集「わが庵は三輪の山もと戀しくはとぶらひ來ませ杉たてる門」

○杉の門　杉に過ぎをかけた。

○心の色をみわ　心の色を見るにかけた。

○しるしのなき　杉の目じるしにしるし(かひ)をかけた。

○中々　かの人の心を知らぬうちは疑ひはなかつたが知り出したので却つて。

○みなせ川　水無瀨川に人の心を見るとかけた。下に云々は水無瀨の見えぬうきせ憂き折もあらうかの意。

疑行末戀

今こそあれ末の松山いかならむ波こさじとは契る心も

語戀

言の葉の殘りてあくる秋のよに長き思ひのほどはしらなむ

契戀

袖にのみかけし契りを末とはくむすぶもうれしなか川のみづ

露ふかく契りおくにもまことゝは賴まれがたき人の言の葉

さのみやは行末とてもかはるべき契るまゝにや猶賴ましまし

契りおくその行末にいつなりてかはらぬ人の心をも見む

馴戀

馴れぬればなか〳〵袖の露のまも見ねばぬれそふこひ衣かな

變戀

まだしらぬ人の心の秋の色をたもとに見せて露ぞうつろふ

水垣の久しくあはでありしより心やよそに隔てそめけむ

なげきわびうつろふ袖の色もうしつゆだにかへれ秋の昔に

恨戀

○末の松山　古今集「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波もこえなむ」

○殘りて云々　秋の長い夜語つても盡きないぞ。

○さのみやは云々　將來もさうむやみに心のかはる事はあるまいまあかの人の契る通りにあてにしよう。

○馴れぬれば　深く馴れないうちはさ程にもなかつたに親しみ馴るゝと却つて。

○人の心の秋　新古今集「色かはる萩の下葉を見てもまづ人の心の秋ぞ知らるゝ」

○水垣の　久しの枕詞。見ずをきかしてある。垣はへだつの緣語。

○つゆだに　ちつとでも。露をかけた。

ふきかはる人の心の秋風にころもの裾のうらみられつゝ
たが秋にあらぬ眞葛のうら風もうき人は猶よそに聞くらむ
うらみじと思ふたもとも露ちりて吹く風さわぐ秋のくず原
くるしさに思ひあまりてちる露も袖に玉まく葛のうら風
猶まさるつらさはあらじ今はたゞ思ふまゝにや人を恨みむ
つれなさはよしや恨みてまさるとも押しこめてやはさのみ置くべき

逢不逢戀

思ひきやをざゝが原のかり枕一夜ばかりにかれぬべしとは
あひ見しは一夜の夢の契りにて又さゝわくるなかの通ひぢ
しるといへば寐てかさめてか事とはむ定めもあへぬ夢の手枕
はかなしやよるの衣をかへしても見えぬうつゝの夢の契りは
さよ衣かへすがへすも又と見ぬうつゝの夢をなげく頃かな
あひ見しははかなき夢の昔にてつらきぞ今のうつゝなりける
夢よりも見しははかなき契りにてたどるかたなきさよの手枕

被忘戀

われぞまづつままし物を忘草うき人にしもおくれぬるかな

○うらみ 恨みを裏にかけて衣の縁語。
○うらみじ 恨みじ、葛の葉の裏見にかけた。
○葛のうら風 葛の葉の裏を飜して吹く風。
○押しこめて 強ひて心を抑へて口に云ひ出さず。新古今集「うき身には山田の晩稻押込めて世をひたすらに恨みわびたる」
○つれなさ云々 云ひ出した爲に人の無情さがひどくなつても。
○一夜云々 ほんの一夜だけで。夜に節(よ)をかけ篠の縁語。
○かれ 枯れ。中の絶える意をかけた。
○よるの衣 古今集「いとせめて戀しきときはうば玉の夜の衣をかへしてぞぬる」
○はかなき夢 新古今集「逢ひ見てもかひなかりけりうば玉のはかなき夢におとるうつゝは」

言の葉は露も跡なき契りかな忘るゝ草のしげりのみして
いつまでか忘るゝ草の露かけてとはれぬ宿に袖ぬらすらむ
拾ふらむ物とはさらに忘貝よせくるなみの思ひかけきや
忘れじと頼めし人の言のはぞかへりて今はかたみなりける

絶戀

絶えはてむ中ともしらで悔しきはあふにかへざる命なりけり
言の葉はかれし契りにむすぼほれ殘るもはかな露の玉の緒
行末も絶えじとこそはむすびしかかげだに見えぬなか川の水
涙川たゆるあふせにせきあへぬ衣手ながらくちもはてなむ
くずかづら恨みかくべきたよりだにかれて跡なき霜の下くさ

絶久戀

あひきとも見つともいはで忍びにしなにはの事も昔なりけり

稀戀

はかなしやたえぬ契りも待ちわたるあふせはまれの中川のみづ

久戀

さりともとつらき心もたのまれて經ぬるもうれし中の年月

○拾ふらむ云々　忘草を拾ふものとは。かの人が我を忘れるものとは思ひかけなかつた。よせくる波のはかけきの序。忘貝を岸によせ來る波とつゞけた。
○頼めし人　頼みに思はした人。
○あふにかへざる命　逢へれば死んでもと逢ふことに命を換へなかつたのが悔しい。古今集「命やは何ぞは露のあだ物を逢ふにしかへば惜しからなくに」
○衣手ながら　涙をせきあへぬ袖もわが身と一しよに朽ち果てよ。
○恨みかく云々　恨みかけるべき便宜は絶えて。恨み枯れは葛の縁語。
○見つ　見つに難波の御津をかけた。
○なにはの事　何やかやの事。難波をかけた。新古今集「津の國のなにはの春は夢なれなあしの枯葉に風わたるなり」
○さりともと　久しく絶えて居るがそれでも忘れないだらうとつれない戀人の心ぉ頼みにせられて。

過ぎ來つる年を戀ぢのしるべにてしらぬ行方も猶やたどらむ

しら波の濱松が枝のいく代までつれなき色をかけてこふらむ

經年戀

つらさこそなほ移ろはね年をへて袖の涙も色かはるよに

何にかはあはぬ思ひをなぐさめてうき年月をすぐしきぬらむ

曉戀

さゝわけてかへる袂に見るもうし同じつらさの有明の月

夕戀

來ぬ人をまつ吹く風もなみだせく袖にしぐるゝ夕暮のそら

夢戀

秋のよもねざめを人の別れにて見るほどもなき夢の手枕

よひ〳〵にかよひなれたる契りとて夢路たどらぬ閨の手まくら

しるといへばいかに定めてねしよぞと問はばや物を夢の手枕

近戀

いかにせむま近きかひもなか垣にかこつ心のつらき隔ては

遠戀

○しら波の云々　新古今集「白波の濱松が枝の手向草いく代までにか年の經ぬらむ」

○なほ移ろはね　なほ衰へない。

○あはぬ思ひ　戀人に逢はない悶え。新古今集「いつとなく藻鹽やく蜑の苫廂久しくなりぬ逢はぬ思ひに」

○さゝわけて　笹原を踏みわけて

○來ぬ人云々　松に待つをかけ、涙に無みをかけた。

○ま近き云々　なか垣に無しをかけた。續古今集「籬垣のま近きかひもなかりけり心通はぬ中の隔ては」

白雲のかゝる山路をへだてずばよな〳〵月の出でてきなまし

旅戀

さらでだに隔つる人を旅衣かけて雲居のよそにこひつゝ

草枕たのものかりの契りだになくねかひなきみよし野のさと

たび衣こひぢの露もかゝれとてたちやおくれぬ人の面かげ

春戀

戀すればまたれし春の花鳥も思ひをそふるつまとなりつゝ

夏戀

人心鵜川のかゞりながれても知らぬあふせに燃えわたるかな

秋戀

さらでだにぬるゝながめにうき人の秋をかさぬる袖の夕露

獨寝のこのあくるまもたがよその逢ふ人からの秋の夜ならむ

人ふるすうき名としらで秋かけし契りまつまの宿はあれにき

冬戀

涙川うきねの枕こほりゐてながれぬよはも夢はむすばず

忍通書戀

○かゝる山路　雲がかゝるにこのやうな山路と言ひ掛けた。金葉集「白雲のかゝる山路を踏み見てぞいとゞ心は空になりけり」

○雲居のよそ　雲の居る天の外。遠い〳〵所。

○かりの契り　假をかけて草枕に響かし、鴈をかけて鳴く音とつゞけた。鳴くに人の泣くをかけた。

○かゝれとて　かくあれとて。露のかゝるを言ひ掛け。

○鵜川　鵜を使つて魚を捕ること鵜飼。人心の變しとかけた。

○あふせ云々　相逢ふ時。瀨、わたるは川の緣語。もえわたるは篝火が彼方まで燃えつゞいてゐるのをいふ。

○うき人云々　つれなく我に憂き人が我に厭き〳〵て。秋きと厭きとを言ひ掛け。かさぬるは袖の緣語。

○獨寝のこのあくるま　此の獨寝の夜の明ける間。

○逢ふ人から　古今集「長しとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば」

○人ふるすうき名　秋といふ名は人を厭ひ忘れる厭きといふいやな名であるとも知らないで。古今集「人ふるす里を厭ひて來しかども奈良の都もうき名なりけり」

心してしのぶるなかの言の葉はつたふる風も吹きなちらしそ

見書增戀

みるにそふ思ひもしらで袖の露かけてぞまちし人の言の葉

見るまゝに涙ながれて淀川やつねより戀のまさる水ぐき

物語戀

はかなくも猶ぞたちよる玉すだれかけ離れてはいはぬ詞に

玉すだれかけてぞかこつ吹く風のいり通へどもいはぬ心を

玉だれのかゝる隔てもなからましいふ言の葉のまことなりせば

等思兩人

中々に二かたながらあひも見ずいづれ夜かれぬ心ならねば

二かたにわくる思ひもふたかたの思ひに猶や思ひまさらむ

戀ひ死なむけぶりの末も二かたに思ひ亂れてたちやまよはむ

戀東西人

たつた山こえ行くよはの松風に思ひぞいづるつまごとの聲

不言在所戀

そことだに杉たつ門を敎へなむ心のまつはよしかたくとも

○見るまゝ　水莖(筆跡)を見るとともに。
○淀川　涙の流れて淀むを河の名にかけた。
○たちよる玉すだれ　簾に近寄つて簾の內に居る女に戀心を語る。
○かけ離れ　かけは簾の緣語。
○かけてぞ　心にかけていつも。掛けは簾の緣語。
○いり通へども　風は簾の內に通ひ入るけれど。
○玉だれ　玉簾。
○かゝる隔て云々　このやうな隔てはあるまいに。
○いづれ云々　二方の何れの方に夜の通ひ路の絕えようとする心でない故に。
○たつた山云々　古今集「風吹けば沖つ白波立田山夜半にや君がひとり越ゆらむ。或人この歌(中略)夜ふくるまで琴をかきならしつゝ云々」
○杉たつ門　古今集「わが庵は三輪の山もと戀しくはとぶらひ來ませ杉たてる門」

不開門戀

明けやらでさしもつれなき心にはなどをしへけむ杉たてる門

戀夢

見る夢をいつかうゝつの契りにはむすびもかへむさよの手枕

思ひ寐に見るもはかなき契りにて同じうつゝの夢の手枕

さやかなる夢の契りもむかしにて見ゆとは見えぬ人の面かげ

ほの見てし闇の現の名殘とてたえ〴〵のこる夢もはかなし

あふと見てつらきうつゝにかへるさの名殘露けき夢の別れ路

戀面影

人心さしもへだつるうき中になど面かげの身にはそふらむ

見しよはの夢の契りのそればかりはかなくのこる人の面かげ

うきながら面影だにも殘らずば見しよの夢を何にしのばむ

戀命

つれもなき人の心にならひてやなほこひ死なぬ命なるらむ

戀ひしなぬ命につけておのづからあらば逢ふよを待つもはかなし

いかにせむあらばあふよの命だに心にかなふ此の世ならねば

○思ひ寐　物を思ひながら寢ること。後撰集「思ひ寐の夜な〳〵夢にあふことを只片時の現ともがな」
○見ゆとは見えぬ　戀しい人の面影が見えるとは夢に見られない。古今集「夢にだに見ゆとは見えじ朝な〳〵わが面影に恥づる身なれば」
○闇の現　闇の暗い時に逢つた現の事。古今集「ぬば玉の闇の現はさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」
○あふと見て　戀人に逢ふと夢で見て。
○うつゝにかへる　戀人に逢つて別れ歸るを夢から現にかへるにかけた。
○なほこひ死なぬ命　戀ひ死にもしないでつれなく生きてゐる命。
○あらばあふよ　新古今集「あす知らぬ命をぞ思ふおのづからあらば逢ふよを待つにつけても」
○命だに云々　古今集「命だに心にかなふものならば何か別れの戀しからまし」

戀天象

心あれやしのぶの里の夕月夜ひかりをさふる空のうき雲

寄月戀

うきながら其の面影に通ふやとながむる月もかきくらしつゝ

出でなばとたのめし月のそらごとを我さへいひて待つもはかなし

よしさらば春や昔のなごりなく曇りもはてね月のおもかげ

めぐりきてほどは雲居の月ばかりはるや昔の袖にことゝふ

月をだにわすれ形見とながめずば面影ながら絶えやはてなむ

たれ故になる身の影ぞさそひても人には見せよ秋のよの月

寄風戀

夕まぐれまつに通ひてこぬ人のつらさ身にしむ風の音かな

此のくれも音せぬ風はたが方のまつに通ひてつれなかるらむ

言の葉は吹きも傳へず音にのみ聞くをたよりの風もはかなし

言の葉のたよりも今は吹きかはる嵐につけて袖ぞしぐるゝ

寄木枯戀

露しぐれかゝる思ひの袖の色をふきもつたへよ庭の木枯

○うきながら　つれない人の面影に通つて見えるのはつらくはあるが、月見ると其の俤に通ふかと。
○出でなばと　月が出たらば逢はうと契つて頼みに思はした。
○我さへ　彼の言つた虚言を自分までも口にしながら待つて。
○ほどは雲居　隔たりは雲居の空と遠くなつて。禁中の月だけは昔のまゝである。伊勢物語、古今集「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」
○月をだに　せめて月だけでも。
○面影ながら　俤も一しよに。
○まつに通ひて　風が松を吹いて通ひ來て。
○かゝる思ひ云々　斯程に思つてゐる涙の露のかゝる袖の色をかの人に吹き傳へもせよ。

寄雲戀

へだてなく見ゆる心におのづから頼みもかゝる山の端の雲

峯の雲はては絶えなむ契りとも知らであらしになびくはかなさ

かけてのみしのぶの山のかひもなくよそに移ろふ峯の白雲

人心あらしに消えてものぞ思ふかゝるかたなき空のうきぐも

ゆきあはむ契りもいつとしら雲の中ぞらにして消えやはてなむ

こひ死なむ身の行末と思ふにも消えてかなしき空のうき雲

いつまでかかけてこふらむ峯の雲あとなき中におもひ消えなで

寄煙戀

おなじくはつらき心もなびくまで思ひの煙めにもたたなむ

うき人を思ひたくもの夕けぶり靡くもよその浦風

きえねたゞ思ひの煙いつまでか靡かぬ中にくゆりわぶべき

行方なき空の煙と身をなさばなびかぬ人もあはれとや見む

行く方もなくてや空にまよはましあふにかへたる煙ならねば

寄雨戀

雨になる物ともしらで曇りゆく空を嬉しとまちぞくらしし

○はては絶えなむ　最後には雲が絶えてしまふやうに契りも絶えてしまふとも知らないで。
○かけてのみ　只管心にかけて。
○中ぞら云々　當てにならず心も落著かずして消えてしまふだらう雲が空の中程で消えるだらう。
○身の行末云々　身の行末はあの雲のやうだと思ふにつけても。
○かけてこふらむ　心にかけていつも戀ふことだらう。
○つらき心云々　あの人のつれない心もわが眞心に靡くくらゐに。
○思ひたくも云々　つれない人を思ひ焦れて思ひの火と海藻を焚く夕暮の煙。
○靡くも云々　自分が焚く火の煙も他所に靡く、彼は他し人に靡く。
○きえねたゞ　いつその事思ひ死に死んでしまへ。煙にかけて消えねと云つた。
○空の煙と云々　思ひ死に死んでしまつたなら。
○あふにかへたる煙　逢へれば死んでもと逢ふことに交換した命。

さはるらむと思ふ心もかきくらし袖にふりそふよひの村雨

さはらじとたのめしくれもふる雨の心にかゝる軒のたま水

程もなく晴れぬる宵の村雨をやがてかごとにとはぬつれなさ

さはりつる契りも今はむかしにて我が身ふりぬる雨のゆふぐれ

寄時雨戀

人心あらしの風にかきくれてながむる袖もうちしぐれつゝ

寄霞戀

空にたつうき名もしらで春ふかく霞のころも思ひそめてき

寄霧戀

人心きりのまがきの隔つれば晴れぬ思ひぞ行く方もなき

寄露戀

うき中に猶もきえなで袖の露いつまでかゝるもの思ふらむ

小ざゝ原あはでこしよの袖しらでたれかこつらむ別れ路の露

わかれこし心のやみにかきくれて袖のひるまもしらぬ露かな

物思ふ袖はひるまも名のみして猶ほしあへぬ露のぬれぎぬ

寄雪戀

○宵の村雨云々　宵に一寸降つた村雨をすぐ口實にして。

○空にたつ云々　高く浮名が立つのも知らないで。たつは衣の縁語霞の頃もに霞の衣をかけた。

○きりのまがき　霧を籬に擬していふ。新古今集「山里に霧の籬の隔てずば遠方人の袖も見てまし」

○きえなで　消えてしまはないで。なは完了の助詞ぬの未然形。ではずての約。

○小ざゝ原　小笹の生ひ茂つた原

○あはでこしよ云々　逢はずして歸つて來た夜は涙に袖が濡れるのを知らないで袖の露は誰と別れた故だとかこつけることであらう。

○袖のひるま　袖の乾る間。闇に對して晝間を言ひ掛けた。

たづね見よまつに口數のつもりても猶雪をれぬふかき心を
別れ路をいそがす雪のひかりかなたゆるばかりはふりも積らで
いかばかり惜しむとかしる跡つけて出でゆくけさの庭のしら雪

寄水戀

あふ坂の關の清水やこえかねて流るゝ袖のなみだなるらむ

寄山戀

夢にだにあはぬためしのうつの山現にしもとなに思ふらむ
あふ事は山をへだてて遠くともおりゐる雲の絶えじとぞ思ふ
いこま山立ちまふ雲のやまずのみ心にのりて人ぞこひしき
塵ひぢの數ならぬ身は山とのみ積るかひなき歎きをぞこる

寄野戀

野となりし人の心をかけてのみしのぶもはかな深草の露

寄原戀

今はまた思ふもとほき面影に涙みだるゝ眞野のかや原

寄里戀

あれはてしうづらの牀よ今さらにとはれむものか深草の里

○雪をれぬ　松の枝が雪に折れぬ心折れない靡かぬ心。
○たゆるばかり云々　雪で道の往來も絶えるほどまでは降り積らないで。二人の中が絶えてよい程までは古く積りもしないで。
○あふ坂云々　古今集「逢坂の關の清水に影見えて今やひくらむ望月の駒」いかに堰きとめても流るる袖の涙であらう。
○夢にだに云々　新古今集「駿河なる宇都の山邊の現にも夢にも人にあはぬなりけり」
○なに思ふらむ　現にも逢はうとなどうして思ふことだらう。
○いこま山云々　大和河内の境生駒山に立ち舞ふ雲が浮動してやまず。初二句はやまずの序。
○心にのりて　心について離れないで。後撰集「秋霧の立野の駒を引く時は心にのりて君ぞ戀しき」
○歎きをぞこる　悲歎をする。歎きを木にかけて樵るとつゞけた。
○野となりし　古今集「年をへて住みこし里の出でていなばいとゞ深草野となりなむ」
○とはれむもの云々　新古今集「秋を經て哀れも露も深草の里とふものは鶉なりけり」

○關のこなた云々　戀をせかれて之れを越えかねてゐるをいふ。
○ふみだに　逢ふことはできないにしても手紙だけでも通へ。
○不破の關　三關の一、美濃にあつた。新古今集「人住まぬ不破の關屋の板廂荒れにし後は唯秋の風」
○文字の關　豐前企救郡門司。昔時關があつた。
○中川　會染川ともいふ。京都。後拾遺集「行末を流れて何か頼みけむ絶えけるものを中川の水」
○あすか川　古今集「世の中は何か常なるあすか川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」
○水の沫云々　水の泡の消える如くはかなく死ねよとどうして思つた事だらう。思川は筑前。思染川。染川。
○うきせ　憂いつらい折ばかり。浮瀬にかけた。
○いづみ川　山城相樂郡。いつの序。
○杣川　杣木を流し出す川。

寄關戀

さらに又關のこなたにたどるかな越えしは夢かあふさかの山
逢坂はよしやへだててかたくともふみだに通へ關の岩かど
いかにせむかげもとゞめず不破の關あれのみまさる人の心を
ふみだにも通はさじとや文字の關すゑて許さぬ戀路なるらむ

寄川戀

はかなしやしらぬ逢瀬におりたちて袖のみぬらす中川の水
こひ渡る思ひの淵よあすか川などか逢瀬にかはらざるらむ
水の沫のきえねど何に思ひ川流れてかゝる逢瀬あるよに
此のまゝに猶ながれての行末もうきせな見えそなか川のみづ
物思ふ我がみなかみの深ければなみだの川のひるときもなし
うきせのみありて流るゝみなせ川したにや變る心なるらむ
たえ〴〵になりし音羽の川みづにかはる心の見えもするかな
いづみ川いつ見しまゝと思ふにも遠きわたりは袖ぬらしけり

寄杣川戀

杣川やなげきこりつむ年も經ぬいつのくれかは流れよるべき

たが方に流れよりてか杣川や又このくれもひきたがふらむ

寄淵戀

身をなげて今はしねとや思ひ川逢ふせなみだの淵となるらむ

寄瀧戀

音なしの瀧のしら絲しられじとせくに心も結ぼほれつゝ

たれ故とおつる白玉いはずとも見せばやしらむ袖の瀧つせ

寄橋戀

こぬ人をよひ〱ごとにかけてまつ心やいかに宇治の橋姫

よそにだにあはれはかけよ忘られて我が身ふりぬるうぢの橋守

あふ事も絶えてながらの橋ばしらなに面かげの立ち殘るらむ

橋ばしら立つ名ながらはくちもせで絶えにし中に何殘るらむ

寄舟戀

忘られて身をうら船のよる方も跡なき波にこがれわびつゝ

寄浦戀

こぬ人を猶こりずまのうらみても夕の煙たちぞまたるゝ

假初のみるめも波にほしあへぬ蜑の袖師の浦みられつゝ

○このくれ　木の榑(木材)とこの暮とかけた。

○逢ふせなみだ　逢ふ機會のない涙と無しと言ひ掛け。

○音なしの瀧　夫木抄に陸奥山城或は紀伊といふ。初二句知られじの序。むすぼほれは絲の緣語。

○宇治の橋姫　山城宇治郡宇治橋を守る神。一説愛(は)しき姫。古今集「狹筵に衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」

○我が身ふりぬる云々　古今集「千早振宇治の橋守なれをしぞ哀れとは思ふ年の經ぬれば」

○ながらの橋　攝津長柄の里淀川の支流長柄川に架けた橋。長らへるをかけた。

○身をうら船　身を恨むを浦漕ぐ舟にかけた。

○こがれ　漕がれと焦れと言ひ掛け。

○こりずま　懲りずを須磨の浦と言ひつゞけた。浦から怨みてとかけた。來ぬ人を懲りもせず怨みて。

○袖師の浦　出雲八束郡。

○みるめ　海松に見るめをかけた

寄木戀

いかにせむあはれとだにも岩代の結びかねたる松のつれなさ

たづね見よしるしの杉に立ちそひて心のまつもおひ繁る門

いつまでかつれなかるらむ年へても猶よそにのみみねの松がえ

いかにせむすぐるひ原にこりまして歎きつむ身の末もあはすば

末遠くたれか契りてあはれともよにいはしろの松はつれなき

我がためはつれなく見ゆる常磐木をかはらぬ色と誰ちぎるらむ

寄花戀

みわの山霞がくれの花の香も風のたよりはありてふものを

はかなしや年にまれなる契りだにむすびかねたる花の下ひも

空にたつうき名も知らで山櫻おもひかけける花の白雲

寄紅葉戀

うつり行く人のなげきの露かけて秋の色こき衣手の森

色かはる梢を見ても思ひやれあきにはあへぬ袖の千しほを

寄落葉戀

我が袖に色を殘してうつりゆく人の心のあきのもみぢ葉

○岩代　紀伊日高郡岩代。萬葉集「磐代の濱松が枝を引き結びまさきくあらばまたかへり見む」

○しるしの杉　古今集「わが庵は三輪の山もと戀ひしくはとぶらひ來ませ杉たてる門」

○よそにのみ云々　餘所事とばかり見るを峯の松とかけつゞけた。

○すぐるひ原云々　過ぎゆく日々にましてを檜原にかけ、歎きの木を積り増して積むとかけた。

○よにいはしろ　決して云はぬを岩代にかけた。岩代の松は前出。

○我がため云々　自分に取つては少しも感じてくれず冷やかに色もかへぬ常磐木であるのに。

○みわの山　古今集「三輪山をしかも隱すか春霞人に知られぬ花や咲くらむ」

○年にまれなる　古今集「あだなりと名にこそ立てれ櫻花年に稀なる人も待ちけり」

○衣手の森　夫木抄に山城とす。

○あきにはあへぬ　秋には堪へられない。古今集「千早振神の齋垣にはふ葛も秋にはあへず移ろひにけり」

寄草戀

淺ぢふの深きを人の心にてかれせず分くる契りともがな

草の名のいつまでつらくかべにのみ見えてへだつる現なるらむ

跡たえてとはれぬ宿のかきねにも植ゑばやいかで戀わすれ草

淺ぢふは忘るゝ草の何なればとはれぬ宿に繁りそふらむ

ふみわけし昔をかけて露ふかく跡しのばるゝ庭のあさぢふ

寄忘草戀

言の葉のゆききもかれて忘草おひのみしげる中のかよひ路

寄山吹戀

いはぬ色にさきて露けき山吹はわが下ぞめの思ひなりけり

寄菖蒲戀

うきになほ心ひかれてあやめ草袂に長きねをぞかけける

寄夏草戀

夏草のなびかぬ人をふかくのみ思ひいる野の末もはかなし

夏草の深き思ひもゆくばかりかりそめならで人のとへかし

かりにのみとひくる中は夏草のふかき契りもむすびかねつゝ

○草の名云々　堀河百首「壁に生ふるいつまで草のいつまでもかれずとふべきしの原の里」

○淺ぢふ云々　まばらに茅の生えた所は何とした忘草であるので自分は忘れられて訪はれぬのか。

○言の葉云々　言葉の往來も絶えて。かれて葉の枯れるをかけた。

○いはぬ色　山吹の黄色を梔子色と云つて口無しの云はぬ色。新古今集「九重にあらで八重さく山吹のいはぬ色をば知る人もなし」

○思ひいる野　野に思ひ入るを山城乙訓郡入野にかけた。

○かりそめ云々　假初を刈りにかけて夏草の緣語。新古今集「夏草の假初にとて來しかども難波の浦に秋ぞくれぬる」

○夏草の　ふかきの序とした。

寄薄戀

それぞとはほにこそ出でねしのすゝきしのに露ちる我が袂かな

いかにせむ秋のさかりとなる袖も猶つゆふかきしののを薄

寄月草戀

たがかたに移りそめてか色かはるつらき心のつき草の花

寄竹戀

うきふしに何を思ひてくれ竹のよそに心をへだてそめけむ

なよ竹の心よわさのなごりまで涙のつゆにふしなびきつゝ

寄篠戀

ゆめ路にもあはぬためしの篠わけて袖ぬれかへる曉の露

寄蘆戀

難波がた何をか人のうきふしに入江の蘆のよがれそめけむ

寄鳥戀

鳥の音も別れをいそぐ心にはおそしとのみや猶かこつらむ

又とだに契りおかずば猶いかに恨みをかけのあかつきのこゑ

玉づさのまれのたよりもかき絶えて今は雲居のよその鴈がね

○ほにこそ出でね　表にあらはれては出さないが。薄の穂に出るを言ひ掛け。

○つき草　露草。月草の花は色が物に移り染るから移るの縁語。

○くれ竹の　よの枕詞。よそに隔らした。うきふしの縁語。

○なよ竹　細くしなやかな竹。

○ゆめ路云々　夢の中でも逢つたためしがなく篠が涙にぬれて歸る曉。古今集「秋の野に篠分けし朝の袖よりも逢はでこし夜ぞひぢまさりける」

○うきふし　つらいかど。我につれないしうち。蘆の縁語。

○入江の蘆　よの序とした、夜に節(よ)をかけた。よがれは夜通ひ來るのが絶えること。

○恨みをかけ　雞の聲にどんなにか恨みをかけることだらう。かけは鷄。

○玉づさ　鴈と玉章とは前漢蘇武の故事から出てゐる。

○雲居のよそ　空遠く／＼隔たつたこと。

音をぞ鳴くたのむの雁の跡絶えてよる方もなきみよし野の里

寄雁戀

よそにのみかけはなれたる玉章の雲居の雁の音こそなかるれ

寄獸戀

忘草かりてや飼ひしのる駒にまかせてだにも人のとひこぬ

寄蟲戀

聞きてだに思ひも出でよ契り置きしこのゆふぐれの松むしの聲

こぬ人を尾花の波のよる〳〵は音にあらはれて松蟲ぞなく

手枕になきてつげしも身の秋としらで聞きけるきり〴〵すかな

うき人の心のあきにふるされし身は鈴蟲の音をのみぞなく

はかなしや稀のみるめもわれからとおもひぬ藻にすむ蟲の契りは

とぶ螢思ひみだれて秋近き身はうつせみの音をのみぞなく

寄蜘蛛戀

かけそへて今宵ばかりとまつくれの頼みうれしきさゝがにの絲

さゝがにの絲の頼みも昔にておもひ絶えぬる宿のゆふぐれ

寄螢戀

○かけはなれ　懸絕した。玉章を雁がかけると言ひ掛けた。古今集「秋風に初雁がねぞ聞ゆなる誰が玉章をかけて來つらむ」

○忘草云々　忘草を刈つて秣として馬を飼養したか。

○手枕に云々　手枕の許に蟲が來て鳴いて秋を告げたのも其の時はわが身の人に厭かれる秋とも知らないで聞いた。

○稀のみるめ云々　逢ふことの稀になつたのも我から起つたことと自ら責めを引きうけた。見るめと海松とかけ、われからを蟲の名にかけた。古今集「蜑の刈る藻に住む蟲のわれからとねをこそ泣かめ世をは恨みじ」

○うつせみの　身の枕詞。蟬にかけて音を鳴くと言ひ掛けた。

○頼みうれしき云々　蜘蛛の絲を人の來る前兆とする。古今集「わがせこが來べき宵なりさゝがにの蜘蛛の振舞かねてしるしも」

○絕えぬる　絲の緣語。頼みの絕えると思ひ絕えるとをかけた。

こぬ人のそなたの空に行く螢思ひこがれてまつとつげこせ

寄蟬戀

ねになきてもえ渡るにも螢よりまさる思ひの程は知らなむ

秋ちかき人の心をうらなくも鳴きてぞこふる蟬の羽衣

寄衣戀

あはれてふことだにかけよ夏衣さこそはうすき心なりとも

さよ衣つらき現になれきてやかへす夢路もかひなかるらむ

あふ事のかたしく牀にさよ衣かさぬるものはうらみなりけり

戀衣なるゝまでこそかたからめよそに隔てぬ心ともがな

こひ衣あはぬ月日を重ぬとも心ながらはなにか隔てむ

寄絲戀

一筋に思ひよらずば片絲のあはぬつらさもかゝらましやは

寄枕戀

さだめても涙の川のうき枕流るゝよひはいふかひもなし

さだむべきかたこそなけれ枕だにしらぬ一夜のゆめの契りは

涙川夢のあふせもよどむまで枕ながるゝ波のよるよる

○うらなくも　思慮淺くも。

○あはれてふ　せめてかはいさうにといふ言葉だけでもかけよ。

○なれきて　馴れ來てを小夜衣を馴れ着てと言ひ掛け。

○かへす夢路　折角夜の衣をかへして彼を夢に見ても現の彼のつれなさに馴れては夢でもつれないだらう夢のかひもなからう。古今集「いとせめて戀しき時はぬば玉の夜の衣をかへしてぞきる」

○かたしく　難しと片敷くと言ひ掛け。

○心ながらは　心も一しよには。

○思ひよらずは　寄るに縒るをかけた。片絲の逢はぬの序。

○涙の川　涙の流れるのを川に譬へていふ。うき枕は憂きを浮きにかけて川の縁語。

○枕流るゝ　古今集「涙川枕流るゝうきねには夢にさだかに見えずぞありける」

かひなしやかはすとなしに夢ばかり見るを契りのさよの手枕

はかなしやいかにねし夜の賴みだに知らぬ夢路をたどる枕は

寄莚戀

しきしのぶ袖の淚をぬく玉の緖となりはつる閨のさむしろ

寄弓戀

おきふしにとるとはすれど梓弓つよき心は弱るともなし

心ひくかたやあら木のしらま弓よるとはすれどならぬ契りは

寄鏡戀

ますかゞみ曇る淚にしられけりうつる心のかげは見えねど

うつりゆく人のなげきにますす鏡見る我が影もかはるころかな

ます鏡我が身も影となりにけりうつればかはる人のつらさに

うつろひし人の形見と見るかひも淚にくもるます鏡かな

寄玉戀

つゝみあへぬ袖の淚もしら玉とみだれて物を思ふかずく

寄琴戀

かき絕えてわれをばとはぬつま琴のたがまつ風に吹き通ふらむ

○いかにねし夜の賴み　如何な寢やうをして夢に見たか夢に見るべきあてども知らぬ。古今集「宵々に枕定めむ方もなしいかに寢し夜か夢に見えけむ」

○しきしのぶ　しきりに忍ぶ。重ね重ね忍ぶ。

○弱るともなし　冷たい彼の心はわが情の爲に弱りさうにもない。

○あら木云々　心引く方やあらむをかけた。新しい白木の眞弓。しらま弓は枕詞。

○うつる心　鏡にうつる影をうつろひ變る心とかけた。

○うつりゆく云々　心かはりゆく人を歎くによつて愈まして來て。眞澄鏡に增すをかけた。

○うつればかはる　變るといへば眞に變る。變れば變るものだ。

○つま琴　爪琴。琴をいふ。妻又は夫(つま)に言ひ掛け。

○まつ風云々　新古今集「琴の音に峯の松風通ふらしいづれのをよりしらべそめけむ」

琴の緒をたつや浮名の歎きさへ加はる中はねこそたえせね

なぐさめむことこそなけれかき絶えてとはれぬ中の心ほそさは

寄籬戀

こえがたき山とぞ見ゆるうき人の心へだつる宿のまがきは

寄夢戀

さよ衣かへす契りもいたづらにゆきてはきぬる夢の通ひぢ

さやかなる夢にいくらの契りとてやみの現もつれなかるらむ

寄涙戀

戀ごろも思ひみだるゝかず／＼に涙もまなく散るたもとかな

つれもなき人を思ひの涙とて我が心にもまかせざりけり

袖の色もかからましやはこひ衣うきをかさねぬ涙なりせば

つれなさは猶もかはらで涙のみ年月ふかく色ぞうつろふ

寄源氏物語戀

きえぬべき契りもしらで深くのみ結びおきけるつゆの夕がほ

ほどもなき契りをかけてしのぶかな草の籬の夕がほの露

ゆかりまで身にしむ色のかゝるにも藤波ならぬ契りをぞ思ふ

○琴の緒をたつ　鍾子期伯牙の故事から心の道を知る人を失ふにいふ。琴の緒を斷つを浮名の立つにかけた。
○なぐさめむこと　慰める言葉。琴にかけた。かき絶え、琴をかき鳴らすが絶えてをかけた。
○さよ衣云々　夢の契り。古今集「いとせめて戀しき時はぬば玉の夜の衣をかへしてぞきる」
○ゆきてはきぬる　徒らに空しく行つて歸る。衣を著るにかけた。
○やみの現　古今集「うば玉の闇の現は定かなる夢にいくらもまさらざりけり」
○まなく　ひまなく。間斷なく。
○かからましやは　このやうであらうか決してかうはなるまい。袖に涙のかゝるを言ひ掛けた。
○きえぬべき云々　夕顔の上が間もなく死んではかなく絶えるべき契りであるのも知らずして源氏が深く契りを結んだのに託した歌。消え、結ぶ、おくは露の緣語。
○ゆかり云々　若紫卷によつた。光源氏が藤壺女御を慕ふ餘りに女御の姪といふ由緣の色である紫の上を得て並ならぬ契りを結んだのをいふ。

雜歌

年のうちに春立ちける正月朔日に

春といへば年のうちよりかすみしも又改まるあけぼのの空

十二月二十日ばかり春たちけるに

春きぬと日數ものこる有明の月のはつかに空ぞかすめる

正月末つかた前なる齒のぬけしに

もえ出づる春しもおちしこのはかな老の朽木の程も知られて

かへでの若芽のいとあかきを見て

おしなべて緑にはるの木の芽のみひとりかへても匂ふ色かな

櫻をうつし植ゑて花まつ人の心をよめとあるに

さかぬよりまだき心を移し植ゑて立ちならすらむ庭の木のもと

しをりに人の歌こひけるに

わけのこす花のしるしと吉野山ふみ見る道にしをりをぞする

花を折りて人のもとに遣はすとて

君がためをらぬ櫻の枝ならばをしかりぬべき花のいろかな

○春といへは　春といふから舊年の暮のうちから霞は立つたが。
○日數ものこる　春立つたのに年が暮れないで殘る。
○はつか　僅か、かすか。それに二十日をかけた。
○おちしこのは　脫け落ちた此の齒。落ちた木の葉をかけた。
○はるの木の芽　木の芽の生えるはるを春にかけた。
○ひとりかへて　只ひとりかはつて。
○わけのこす花　書物を讀み終へないで殘すのをたとへた。ふみ見るに山を踏むと書物を云ひ掛けた。
○君がため云々　君のためでなく折つたのならば。他人のために折つた枝ならば。

日頃とはむと思ふ人のもとに花の頃いひ遣はしける

此のほどは花のたよりになりぬべし盛りすぐして殊さらにこそ

黑部村阿彌陀寺のためみにて古寺花壇かまの浦の霞をよめる

咲き匂ふ花にひかれて詣でくる人ゐもしげき阿彌陀寺の庭

春ふかみ浦のもしほは燒かぬ日もかすみに煙る夕なぎの空

或人のもとよりいと面白き八重櫻を折りておこせけるに

一枝にあかぬ色香は八重櫻とへといはねど行きてこそ見め

彌生の二十日頃花見にある人の家に人々まかりて歌詠みけるに庭の池にをし鳥の數多むれ居けるに

立ちいでむ別れをかねてをし鳥のともにむれゐる花の木のもと

三月二十日ごろ名古屋にものしける時白子の萩が屋にて

宿の名のをりにはあらぬ春なれば君が言葉の花をこそ見め

古歌の句を題にて、落花

さくら花匂ふ日數の少なくもたれかは散るををしと思はむ

北村菜のすみれ草といふふみをつくりて贈りけるに

紫の色にもしるしすみれ草つみあらはせる深きこゝろは

○此のほど云々　此の頃訪ね行くなら花見るついでに來たと云はれようから花盛りが過ぎてからわざわざ訪問しませう。
○人ゐも云々　日のしげき（細かく多い）網をかけた。
○春ふかみ　春深いから霞なので。

○とへといはねど　訪へと云はねどに八重に對して十重をかけた。

○古歌の句を題　古今集「春雨の降るは涙か櫻花散るを惜しまぬ人しなければ」の句を題とした。
○北村菜云々　備中松山藩士北村久備の著書すみれ草は源氏物語の系圖年立。

植松有信の物いはれぬ病をわづらひてこもりける頃人のもとに山吹をおくるとて「いはぬ色にならふとしらで軒近くうゑてくやしき山吹の花」とあるを見て

いはぬ色に匂ふとすれどみならねば遂にさてやは山吹の花

大淀の長樂寺の藤は昔の種なるよし聞きて

なごりだにかゝる色香を名にたてる昔やいかにふち波の花

京に在りけるに卯月の末つ方去年の此の頃故郷を立ちいでし事を思ひて

立ち出でし去年の月日と思ふにもふるさと遠くしのぶけふかな

五月二十日山田世義寺にて、夜郭公

なけや鳴けおのがさ月も時鳥はつかになりぬ有明のそら

山田よりかへらむとしける時夏別といふ題にてよみける人々の歌を見て

見わたせば山田のさ苗とり〴〵に玉をみがける露の言の葉

和泉國堺の菜のそのあたりの八景を題にて人々に歌こひけるに蘆屋里螢

いさりせぬ夜半も蘆屋の里ちかくいそ邊にもえてゆく螢かな

大矢重門の螢の歌あまた見せけるを見て

つゆふかき言葉の玉のかず〳〵に光もそひてとぶ螢かな

○植松有信　本居春庭門人。名古屋の人。

○いはぬ色　山吹の黄を梔子の色口無しにかけて物いはぬ色と云つた。新古今集「八重ながら色も變らぬ山吹のなど九重にさかずなりにし」

○みならねば　山吹に實がならぬから。身ならねばを言ひ掛けた。

○さてやは山吹　其のまゝでは止まうかやむまい必ずなほるだらう

○なごりだに　昔咲いた名殘でさへこれ程の色香であるのに有名だつた昔はどんなであつたらう。

○なけや鳴け　拾遺集「なけや鳴け高間の山の時鳥この五月雨に聲なをしみそ」

○はつか　五月も二十日になつたと云ひかけた。二十日の月も有明となつてかすかになつた時鳥よ鳴けよ。

○とり〴〵に　どれもこれもそれぞれに。さ苗取るをかけた。

○蘆屋　攝津武庫郡。新古今集「いさり火の昔の光ほの見えて蘆屋の里に飛ぶ螢かな」

加藤有滿の住みはじめたる家の庭に萩を植ゑて其の宿の名を萩園とつけて歌こひけるに

吹く風もいくよの秋を契るらむをぎの園生にやどり定めて

萩の花を折りて人に遣はすとて

をる袖にとまりぬるかな露ながら見せましものを秋萩の花

京に在りけるころ八月十五夜雨のふりければ故郷によみておこせける

かきくらし都はあめのふる里もなほかげ見ずやもちの月の空

八月十五夜雨ふりける九月十三夜月のさやかなりければよめる

あま雲のなかばの影やそひぬらむ今宵の月のいとゞさやけき

長月の始めつかた伊豆國人竹村茂雄人々に歌こひて書かせむとて物しけるさうしのはじめにまづこひけるに書くべき歌もふと思ひいでねばよみて書きつけける

かかる色も染めはじめたる山口と見てやゆるさむ淺き言の葉

桂の紅葉をすりて月のかつらと名づけたるたにざくに人の歌こひけるに

手にとりてたれうつしけむ久方の月の桂のあきのもみぢ葉

遠江國の人々の九十番歌合の判しけるに暮秋紅葉といふ題に「秋の行方

○をる袖云々　萩を折つたら袖に露が殘つたことよ。露も一しよに其の儘見せようと思つたものを。

○ふる里　故郷に雨の降るをかけた。

○あま雲　天の雲に雨の雲をかけた。雲の中の月影に仲秋の月影をかけた。

○書かせむとて云々　歌を書かせようとして作つた冊子。

○かかる色云々　此のやうな淺い色も始めて色染めた山の入口と見許されるだらう。此の拙な歌も物の初めて手を著けたものとして見のがされるだらう。

○たにざく　短冊。

○久方の　月の枕詞。

の葉はれて」とよめるをほめて

梢にもまさる心のいろそめてくれゆく秋をしたふことの葉

同羇中嵐に「心なきいはきの山」とよめるに

心なきいは木の山ぞなかなかにふかき言葉の色はそめける

年のうちに春たちけるくれに

春きても殘る日數はみな人の惜しむにとまる年にやあるらむ

ゆきかよふ袖もかすみて市人に春たちまじる年のくれかな

伊賀國に戀杜戀湊といふ所ありとて其の國人の歌こひけるに

うき中に年ふる戀の杜なれやいとゞなげきの生ひしげるらむ

わびはつる戀の湊のとまり舟さぞな思ひに身もこがるらむ

思ふといふことをあまたある歌

思はぬをおもふ思ひはおもふ人おもふ思ひに思ひまされり

父のめし出されける御よろこびに若山に物せられける折御前にて講説などつからまつりしに有り難き仰言どもありければ歸りて後君恩如海とい

ふ題にて人々に歌よませられけるに

おきつ波たちても居てもきの海の深き惠みを忘れやはする

○梢にもまさる　梢の紅葉にもまさる優美な詩心で。
○羇中嵐　旅行中の嵐。
○心なきいは木の山　情なき岩や木を磐城山とつゞけた。いはき山は夫木抄に駿河又伊豆と。

○いとゞなげき　いよいよ戀の歎きの木が生え茂るだらう。歎きを木にかけた。
○わびはつる　戀に惱みはてる。果つるは舟の泊る義にかけた。
○身もこがる　漕がる、焦るの言ひ掛け。

○父のめし出されける云々　本居宣長紀伊侯に聘せられて寛政六年十月和歌山に行つて侯に古今集など講じたこと。

古事記傳書き竟られける時其の書の中なる神の御名人の御名を題にて人人に歌よませられけるに、倭武命

とびかけり又も行方のしら千鳥いづこをはかと跡忍ばまし

父翁の扇に「故郷のはるけさいかに」といふ歌を書かれたるに人の歌こひければ

あふぎ見しその面影もみね遠くへだてきにける旅ごろもかな

かくよめるは三十年ばかりさきに書かれたればなり

見竝某の父翁の書かれける色紙短冊などもたるに歌よみてとこひければ

淺くのみ書きながしたる水ぐきもよに濁りなき跡とこそ見れ

京に在りける頃父翁のもとより四月の頃入齒といふ物をしたるに又物よくかまるゝよし喜びおこせて「思ひきや老のくち木に春過ぎてかゝる若ばの又おひむとは」とあるかへし

とことはに千代も榮えむしるしとて生ふる老木の若ばなるらむ

京に在りける頃火うちや老人鐵石軒年百十歳なるが歌こひけるに

めづらしな百年あまり十年へて猶家わざをうちもたゆまず

同じ頃ある人の兄なる人のもとにかの鐵石軒老人のうちたる火打を贈る

○しら千鳥云々　古事記に倭建命おかくれになつて八尋白智鳥になつて天に翔り濱に向つて飛んで行かれたことがある。いづこをはかとは行方の知らずを白にかけた。何處をめあてにしての意。
○面影もみね遠く　面影も見ず遠く峯を隔て。
○とことはに　永久に。
○若ば　葉に齒を言ひ掛けた。
○家わざ　家業。

○齢にあえて　年にあやかつて。あゆは肖(に)るをいふ。
○はやくすみけり　以前に住んでゐた。
○歸るぞつらき　伊勢に歸るを波の寄せて返るにかけた。
○殿村常久　伊勢松坂の人、本居宣長門人。宇津保物語年立、千草の根ざしなどの著がある。
○梓弓　枕詞。古今集の「梓弓おして春雨けふ降りぬ」の歌から誤つておすにつゞけたのである。古今集のは春雨のはるにつゞけた。一説弓は押して張る故におしにかけること。
○おしてもいはじ　押しきつて言ふまい。
○よしあし　よしあしの判別のつけやうもない。
○いひもはなたで　言ひ放たないで。放つは梓弓の緣語。

にそへてやるべき祝の歌こひけるに

長きこの齢にあえて手にならせうちいづる火のつきぬ限りは

同じ所にありけるころ藤何がし我が故郷ちかき名殘村といふ處にはやくすみけりとて尋ねきたりける後よみて遣はしける

あひ見しも故人の心地してひと日の名殘こひしかりけり

同じ所に在りけるころ大平のもとへ思ふ心を

伊勢の海戀しからずはあらねども歸るぞつらきおきつ白波

殿村常久みづから春秋の歌よみて合はせたるを判じ遣はしけるに面白きこれかれ有りければ奥に

花紅葉ふかき梢のまじらずばなか〳〵あさき色やなからむ

直道より高蔭のもとに弓の歌を數多よみてことわりをこひに遣はしたりけるに「梓弓おしてもいはじよしあしを力なき身はわく方もなし」といふ歌よみておこせける由聞きて

よしあしをいひもはなたで梓弓おしこめてける心よわさよ

或人の鞠の御職とかいふになりたるよし聞きてよみて遣はしける

紫の深きめぐみもろ人にこゆなるまりのしるしなりけり

善立法師のあかざといふ物の面白き枝ざしなるを杖につくりて歌こひけるに

千年までつくとも猶やあかざらむよにめづらしき君が此の杖

消息ぶみなどいれて通はすべき料につくりたる袋に書きつくべきうた人のこひけるに

うち見ればほどこそなけれ千萬のことをもこめて通ふ文袋

或人の蟹の歌よめといひけるに

すむかにも波靜かなる蘆原にうきふし知らぬよをすぐすらむ

平田篤胤の年頃道に志深くて吾が故翁の著はされたる書どもを明けくれ見つゝ深く信じていかで對面せばやと思ひ渡りつるを道のほど遠くかつは心にまかせぬ身にて遂に其のことなくてやみぬる事とつねに口惜しう思ひためるに去年の三月の末つ方夢に人の來て鈴屋の翁のこゝに物せられてありつるが今なむ歸られしとつげけるに驚きてとる物も取りあへずからうじて品川といふあたりに追ひしきてまづ思ふ心の片はし打語らひなどして教子の數にさへなむくはゝりぬると見たりつるはかつ〴〵も年頃願ひつる本意かなふ心地していと嬉しう思ひけるまゝに猶行末長く忍

○あかざ　藜といふ草。散木集「いかでかは此の世の闇も照らさまし光あかざの杖なかりせば」

○あかざらむ　飽かざらむと藜をかけた。

○蘆原　日本國を蘆原の國といふ。蘆原蟹といふのがあるをかけた。

○うきふし　憂いかど。蘆の縁語。

○よ　世を節(よ)にかけて蘆の縁語。

○吾が故翁　本居宣長。

○道のほど云々　平田篤胤は江戸に居て伊勢と遠く隔たつてゐた。篤胤は後秋田侯に仕へた。

○口惜しう思ひためる　口惜しく思つてゐたやうであつたが。

○追ひしきて　追ひ著いて。

ぶたよりにもとやがて其のありつるさまをうつさせてこれに歌よみて書き加へてよとあるに

わたつ海の深き心のかよひてやそこには見えし人の面かげ

夢にてもかかるみるめをかづきつる契りは深き春のうみづら

或夜夢に人の白髪の翁の瀧見たるかたかきたる繪をもちきて此の歌よめとありければよめりと見たりつるを忘れにければつとめてよめるさて其の瀧はふるの瀧ぞと聞きし

見る人も年をやふるの瀧ならむみなかみ黒き筋なかりけり

百人一首の歌もて富士の山の形をかきなせるを見て

言の葉をかのこまだらに積みあげて雪をあやなす山は富士のね

播磨國林田の神社に白井の水といふ有る由にて神主の歌こひけるに

あする世もぬるむ世もあらじ林田の神の白井の此の眞清水は

あねはの松と緒絶橋とを一首によみてと其の國人のこひけるに

かきならす緒絶の橋のつま琴にかよふあねはのまつ風の聲

後藤親明の家なる松の歌こひけるによみて遣はしける

いつとなきながめのみかは樂しさは千代を伴ふ宿の松が枝

○みるめ　海松。見るめとかけた

○ふるの瀧　年を經るを布留にかけた。布留の瀧は大和山邊郡石上の東一里にある。俗に桃尾の瀧といふと和州舊事幽考に見える。

○みなかみ　水上に皆髪とかけた

○かのこまだら　鹿の毛色にある斑點。百人一首の歌を書いた文字と地の白とで積みあげ描いたのをいふ。新古今集「時しらぬ山は富士のねいつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ」

○林田の神　播磨揖保郡林田祝田神社。

○あする世云々　水が淺くなり涸れるときも水のぬるむときもない

○あねはの松　陸前栗原郡澤邊村姉齒にあつた松。歌枕。

○緒絶橋　陸前志田郡古川町にあつた。歌枕。

○かきならす云々　かき鳴らす緒とつゞけ、橋のつま（端）から爪琴とつゞけた。

○いつとなき　何時といふ區別のない。

軒端に松うゑたる人の歌こひければ

年高くむかしはるかにあふぎ見て植ゑし世しのべ軒の松がえ

川原木造村の長樂寺といふ寺の庭に松を植ゑて法庭植小松といふ題にて人々に歌請ひけるに

寺の名のながくたのしき友とてや植ゑてみのりのにはの若松

廻文

ながむらむかどをとひなば草に木に咲く花人をとがむらむかな

星

てりわたる光のみかは晴るゝよの空には數もまさる星かな

風

吹く風はむなしき空を通へばや高くきこえて色なかるらむ

浪

青海原深きみどりに色はえていとゞめにたつ波の白たへ

ちれば又跡よりさきてわたつみの波の花こそ常磐なりけれ

いちじるくめに立つのみか聞く音も耳にさやけき沖つ白波

海眺望

〔植ゑてみのりには　植ゑて見るを御法(佛法)の庭につゞけた。

〇廻文　廻文歌。一つ歌を順に讀んでも逆に讀んでも同一である歌

〔光のみかは　光ばかりがまさるではない。

〇波の白たへ　波が白く立つてるるのが白色の栲の布を一面に敷いたやうである。

〇わたつみ　海。

〇波の花云々　古今集「草も木も色かはれどもわたつ海の波の花にぞ秋なかりける」

浦遠くこぎ行くまゝにおのれさへ跡なき浪のあまのつり舟

名所

いもせ山心へだつるうき中にながるゝ川や涙なるらむ

關

今も猶心とゞめてふはのせき跡なきあとをしのぶ旅人

瀧

よりかけし山のかひなくちる玉をぬきもとゞめぬ瀧の白絲

よに高く音もきこえて雲居よりながれおちくる山の瀧つせ

松

松がえのかはるながめや千代をへて花咲き匂ふ十かへりの春

浦松

うら波のよするときはの松が枝に秋なき花ぞ咲きかゝりける

大淀の松をよめる

木のもとによせくる波も音たかく名にこそたてれ大淀の松

嵯峨山松

さがの山松もみゆきの古をさぞなときはに思ひいづらむ

○おのれさへ云々　涙も跡なく漕ぎゆく蜑の自身までも跡なく見えなくなる。拾遺集「世の中を何に譬へむ朝ぼらけ漕ぎゆく舟のあとの白波」

○いもせ山　紀伊那賀郡にある妹山背山をいふ、その閒に吉野川卽ち紀の川が流れてゐる。

○心とゞめて　關が旅人を止めるが關がなくなつても旅人が心を留めて。

○かひなく　絲を縒りをかけたかひもなく。かひを山の峽にかけた。

○十かへりの春　本朝文粹「德是北辰。椿葉之影再改。尊獨南面。松花之色十廻こ」

○大淀の松　伊勢多氣郡大淀に業平松といふのがあつたといふ。拾遺集「大淀の御禊いく世になりぬらむ神さびわたる磯のひめ松」

○よせくる波云々　新古今集「大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる波かな」

○嵯峨　山城葛野郡。

竹

うき節のしげきにつけてさき竹のそむき初めける此のよなるらむ

江蘆

難波がた潮みちくらし見るまゝになみに入江の蘆のむら立

風ふけばよせくる波に音そへてさわぐ入江のあしのむら立

苔

川上のゆつ岩むらの苔ごろも流れて幾代かさねきぬらむ

硯

硯こそ心にかなへすみの色のこくも薄くもするにまかせて

もの書かでさしもしたしきすみ筆も硯にうとくなれる此の頃

笛

ふけゆけば近くなりぬる心地して聲すみまさるよはの笛竹

遠くすみ近くきこゆる笛の音は空にあらしの吹けばなりけり

きく人の一ふしありといふばかりいかで吹きえむ笛竹の聲

弓

とるまゝにたけき心もおのづからふりおこさるゝ梓弓かな

○さき竹の　そがひの枕詞。こゝはそむきにかけた。節、竹、よは緣語。

○なみに入江　波の中に入るを入江とかけた。

○川上の云々　ゆつ岩むらは五百箇磐石。萬葉集「川上のゆつ岩むらに草むさず常にもがもな常少女にて」

○もの書かで云々　先頃まであんなに親しかつた筆硯の間柄も物を書かないで筆が硯に疎遠になつた

○一ふしありと　一かど優れた所があること。ふしは竹の緣語。

とる人の心をさへにひきたてて弓ぞ御國のたけきつはもの

ともの音きこえぬ國とあづさ弓心ゆるぶなますらをのとも

杖

つく杖に助けられずば年高き老の坂路をいかでこえまし

船

おきつ波よるひるとなくこぎ出でて棹かぢほさぬあまの釣舟

朽ちてだにすつべからぬを思ふにもこれぞ上なきうき寶なる

夢

わかかりし昔の夢ぞなかく／＼に老の寐覺の思ひなりける

曉燈

ともし火の影もほのかに閨の戸のひましらみゆく明方の空

閑中燈

たえ／＼にふけゆく影の寂しさもすむ宿からの夜半の燈火

さ夜ふけて寂しき影も宿からは友とぞ頼む閨のともし火

山家の歌ども

さびしさに猶もの思ふすまひとも知らで結びし山陰のいほ

○ひきたてて　心を引立てて。引くは弓の緣語。

○つはもの　戰爭に用ゐる武器。いくさ人の意を言ひ掛けた。

○ともの音云々　鞆は弓を射るとき左臂につけて弦が臂にさはるのを防ぎ音を立てて敵を威すもの。鞆の音聞えぬ國は戰亂のない太平な國。

○よるひる　夜に波の寄るをかけ晝に潮の乾るをかけた。

○うき寶　舟をいふ。

○寂しさも云々　寂しくあるのも住む家に因つて。住む家のせいで寂しい。

○猶もの思ふ　山家に入れば物思ひはあるまいと思つたが入つて見ると寂しさに由つて一層思ひ惱む

すめば又そむきし方ぞ忍ばるゝこれもうき世のさがの山里

山にてもすまぬ心をみやこ人いかにと問はばいかに答へむ

いとひても猶厭はしきよしの山心の奥ははてやなからむ

のがれいる山の奥にもすみうきは猶よにふかき契りなるらむ

世をいとふ深き心のたぐひより吉野の奥にのがれ初めけむ

寂しさの憂世にまさる山べかなさればぞたえてすむ人のなき

聞きしにもまさる嵐にすみよさもかくやと頼むみ山べの里

山深くながめてしりぬうきながら猶思出の有る世なりとは

よのうさに思ひこりつゝ訪ふ人を軒のつま木のまつもはかなし

すみよしと告げだにやらじとふ人をまつにぞ似たる山陰の庵

よのうきにかへてすまずば寂しさのしのばれぬべき山の奥かは

思ひこし心ばかりはあらねどもすみはてぬべきみ吉野の奥

山深くうらやむばかりすみなして故郷人にとはれてしがな

まつ人のとはぬばかりぞすみなれし此の山里の思ひなりける

とふ人に此の山里のすみよさをかたらばやがて出でがてにせむ

山深きちぎりありてや白雲のかゝるさびしき宿もすみよき

○すめば云々　山家に住むと背き捨てて來た都が懷かしく思はれる。これもうき世の習ひである。嵯峨は浮世のさがを地名嵯峨にかけた。
○すまぬ心　澄まぬ心。
○いとひても云々　「厭ひてもなほ厭はしき世なりけり吉野の奥の秋のゆふぐれ」
○うきながら云々　世は憂いものではあるが憂きと共に懷かしく思ひ出されると始めて知つた。
○思ひこり　思ひ懲り。樵りにかけ爪木の縁語。軒の端(つま)を爪木にかけ松を待つにかけた。
○よのうき云々　世の憂きを遁れるために住むのでなければ山里は寂しくて住めるものでない。
○思ひこし云々　想像して來ただけはないけれども先づ心に叶つて終りまで住まうと思ふ吉野山の奥。
○とはれてしがな　訪はれたいものだ。
○此の山里の思ひ　此の山里でのねがひである。
○出でがてにせむ　此の山里を再び出られない所と思ふだらう。
○山深き　山の深いを深き契りとかけた。
○白雲のかゝる　白雲が山にかゝるを斯かる寂しきとかけた。

光かはよの憂き事もよそなれば谷のいほりは物思ひもなし

なれぬればみ山の奥の寂しさも深きあはれとなるすまひかな

いつしかと岩のかけぢも思ひいる心にならすみ吉野の奥

さそはれぬ心づよさをわれながら思ふにくる〻山のはの月

ほど近きわがよもかくとながむれば涙ぞおつる山のはの月

思ひしれ山よりいづる月見ても猶すみがたき此の世なりとは

よの中に猶もつれなくすみはてて山には入らじ有明の月

山家風

厭ひつるよの憂き事もかくばかり聞きやはわびし峯の松風

聞きなれぬ音はの山のさびしさに人まつ風もふかぬ日はなし

たへてきくものとや人の思ふらむ心をすます峯のまつ風

さびしさも思ひかへしてすみ染の袖になれゆくみねの松風

山家松風

つれなくて猶聞きいれぬ心とも知らではげしき峯のまつ風

はげしきもたへてすむ身のつれなさによわるかなる〻峯の松風

よのうきはのがれてきかぬ山里も猶かしがまし峯のまつ風

○ほど近き云々　限りも間近くなつたわが一生もこの山の端に落ちる月の通りだと眺めると涙がおちる。おつる月とかけた。

○すみがたき　月の澄み難きを世に住み難きとかけた。

○つれなくすみ云々　氣強く平氣で世の中に住みはてて。

○かくばかり云々　自分が厭ひ捨てた憂きこともわが現在程まで辛くわびしく思つて聞いただらうかこれ程には峯の松は風を聞くまい

○はげしきも云々　松風の烈しいのにも堪へて住む身が平氣で氣強いので風も弱るか。

山家嵐

さりともと思ふ心ぞ弱りぬるなれても同じ峯のあらしに

夢にさへうき世のがるゝすまひかなたえぬ枕の山のあらしに

山家雲

みやこのみ雲のたちるにしのばれて心も晴れぬみ山邊の庵

すむ人の心はいさやしら雲のおくゆかしくもみゆる山ざと

よのうきを隔つる雲の奥山も晴れぬながめに住みぞわびぬる

山家月

山里によのうき雲をのがれずば心もすめる月は見ましや

山家水

はづかしなすまぬ心にくむ影のうつるもきよき山の井の水

猶すまでふりまさりゆく影見れば涙ぐまるゝやまの井の水

隱れすむ谷の軒端の埋れ水ありともいかで人にしられじ

すむ人をさそひがほにも音づれてうき世にいづる軒の谷水

よの中のうきにかはりて心さへすみて聞きよき谷水のおと

むすぶ手ににごるばかりぞ住みなれし心にあかぬ山の井の水

○さりともと云々　峯の嵐は寂しいがそれでも馴れたらばと思つたけれどいくら馴れても前と同様にやはり寂しいのでそれでもと思つてつないだ希望も弱くなつた。○枕の山　枕邊に近い山。

○心はいさや云々　山里に住む人の心はゆかしいかどうかわからぬが。しら雲を知らずにかけ、雲の奥からおくゆかしとつゞけた。

○月は見ましや　月を見るだらうか見られはしなかつたらうに。

○すまぬ心云々　濁つた心で汲んだ水に映つたわが身の影も澄んで清いのは恥かしい。

○埋れ水　草などに隱れて顯はれ見えぬ水。

○むすぶ手云々　水を掬ふと濁るといふこと、だけが住みなれた心に不滿に思はれる。古今集「掬ぶ手の雫に濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな」

○心もゆく〳〵と　見渡す心も氣も晴れるほど。滿足するほど。ゆくゆくは稻の立ち榮えるさまのすらさした意。

○とはれじ云々　人に訪問されないやうにといふ用意も深く。

○心をやり水　心を遣ると遣水とかけた。心を遣るは滿足し氣を晴らす。

山家木

かげ高き軒端の松ぞ年ふりしわが山ずみのしるしなりける

山家松

月をまつゆかりに人やながむらむわがすむ山の軒の松がえ

田家

明けくれに見やる心もゆく〳〵と門田のいねの立ちさかえつゝ

故郷松

ふりし世にかはらぬ色を尋ねきて誰かしのぶの軒の松が枝

故郷竹

おのれ猶とはに榮えて故郷のうきふししらぬ軒のくれ竹の

閑居

こもりすむ人の心もおく深くやへ垣めぐるそののくれたけ

とはれじの心がまへもよに深き竹の園生のおくのかくれが

閑居水

朝夕にくみて心をやり水の音よりほかにとふ人もなし

古宅

しのぶ草茂らざりせば猶いかに古屋の軒端あらはならまし

仙家

老いらくもよそなる谷の陰しめて千代とことばにすめる山人

山人のときはの陰としめて住む軒端の松の千代やいく千代

樵夫

こりつみてかへる夕や遠からむ同じ山路も重きつま木に

菅公

なか／＼に心つくしのうき雲もひかりをそふる有明の月

小野篁

今もなほ波路はるかに八十島の昔をかけてしのぶうらふね

小浦朝道の二月のころ若山にかへるによみて遣はしける

北へ行く鴈の別れはよそに見て紀のぢにかへる君をこそ思へ

肥後國の人々二月中頃國にかへるに

秋とだに契らばかりの別れ路と歸るつらさも慰めましを

二月末つかた大友の直枝の出羽國に歸るに

そら事も秋と契らばなぐさめてかりの別れとかくはなげかじ

〇老いらく　老い行くこと。老いは老ゆの轉。らくはるの延音。
〇ときは　永久不變。
〇山人　仙人。
〇ときは　常磐。永久不變。

〇こりつみて　爪木を樵り積んで

〇なか／＼に　却つて。ありの月が却つて光を添へる。
〇心つくし　心盡しを筑紫にかけ菅公太宰府の九月十三夜の詩を含めた。
〇八十島の昔云々　古今集の小野篁隱岐に流された時の詠「わたの原八十島かけて漕ぎいでぬと人には告げよあまの釣舟」によつた。

〇秋とだに云々　秋になれば再び歸り來るとだけ契るならば今一時假の別れのつらさも慰む。假の別れを春鴈が別れて北に歸るをかけた。

岡山正興森光保の江戸に下りけるによみておくる

春の日に思ふどちゆくこのたびは旅ともあらじ東路の空

三井高匡の四月二十日頃江戸に木曾路をくだりけるによみて遣はしける

たび衣木曾のやま路のほとゝぎすまちえて袖の涙かるらむ

五月の始めつかた山田より歸るとて人々に別れを惜しみて

かりそめの別れと思へどあやめ草うきに袂のぬるゝけふかな

わかれゆく袂に今日はあやめ草五月の玉とちるなみだかな

歸りなむとしけるに雨降りければ留まりて歌よみけるに人々の歌を見て

ふる雨のさはるつらさも露ばかりかけて思はぬ玉のかず〳〵

千家清主の伊勢國に久しくありて出雲國に歸る時わが京のやどりに立ちよりけるに

あふことをいづもの國と思ふにもいとゞ別れのをしきけふかな

秋ぎりのたちわかれこし故鄕に霞を見てもまちやわぶらむ

十月ばかり山際貫弘の江戸に下りけるによみて遣はしける

しぐれゆく嵐の雲のほどもなく立ちかへりこねあづまぢの空

三浦箏溪又の春こむとてしはすの始めつかた若山に歸る時

〇思ふどち云々　親しい同士一しよに行く此の度のこの旅は親しい道連れで故鄕のやうで旅らしくもない。
〇江戸に木曾路云々　江戸に行くといふので木曾路を下る。

〇露ばかり　露ほども。少しも。
〇かけて　心にかけて露の緣語。心にかけて少しもつらさを思はぬ

〇いづもの國　何時逢ふことと思ふにつけても。何時を出雲に言ひ掛けた。
〇秋ぎり云々　秋霧の立つを立ち別れこしつゞけた。
〇霞を見ても　春になつて立つ霞を見て。
〇立ちかへりこね　立ち歸つて來なさいよ。

たび衣雪をかすみに分けかへて立ちかへりこね春のやまぢを

遠江國鈴木青繡山下方朗此の里に久しく在りて歸る時よみて遣はしける

故郷にかへる別れも旅衣なれてはさすがたちうかるらむ

尾張國大館高門が家にやどりて歸る時別れを惜しみて

なか／＼に一夜やどりて旅衣あかぬわかれをたち重ねつゝ

父の身まかりけるとぶらひに植松有信のきたりてしばし此の里にありて歸りけるに

行末もきつゝなれにしをり／＼のたびね忘るないせの濱荻

京に上りけるにむく本にて雨ふりければむくもとといふことを隱して

鈴鹿山いづこなるらむくもとぢてそことも見えぬ雨の夕暮

龜山の樋口垂水の家にやどりて歸る時

宿からにたびね忘れて故郷の夢ともいはず夜ごろ經にけり

旅

たち出でしその曉も日かず經て思へば遠しふる里のそら

故郷のゆめの別れにいでしよのあかつきかけて露ぞこぼるゝ

風さわぐをざゝが露のかり枕みやこの夢もむすびかねつゝ

○植松有信　尾張名古屋の人。本居宣長の門人。

○きつゝなれにし　伊勢物語「唐衣きつゝなれにし妻しあれば遙々來ぬる旅をしぞ思ふ」伊勢物語の歌を引いて更に伊勢の濱荻をかけた。

○むく本　伊勢。椋本に通じてゐる路。こぢてに通はした。

○宿からに　宿の故で旅寢であるのも忘れて我が家のやうな氣がして。

○あかつきかけて　夜から曉につておく露。

旅行

海山のかはるながめに故郷をしのぶ心もゆくたびぢかな

春旅

故鄕をいとゞへだてゝのどかにもあらぬ旅路のはる霞かな

さくらあさのをふの下草ひき結び花にやどかる春のたび人

月に見てよるも心はゆく旅のかりねうれしき花の木のもと

朧なる月に見る夜はふる鄕の夢ともいはぬ花の下ぶし

秋旅

いとゞしく心づくしの旅ねかな月のかげもる松がねのとこ

月前旅

影すめる月をかりねのあるじにて露のやどとふ野邊の夕暮

草まくら結ぶかりねの夜ごろへて袖になれゆく露の月影

旅月

ふる里を雲居のよそと思ふにも月こそ旅の友となりけれ

羇旅月

みかさ山ふるさと人も月を見て思ひや出づるもろこしの空

○のどかにもあらぬ旅路　ゆつたりと心靜かでもない旅路。
○さくらあさの　をふの枕詞。
○をふの下草　麻の下に生えた草　新古今集「櫻麻のを生の下草茂れたゞあかで別れし花の名なれば」
○月に見て　月影に花を見て。
○ゆく旅　月下の花を見て心ゆくを行く旅とかけた。
○心づくし　氣をもむこと、心配すること。
○松がねのとこ　松の根もとの牀
○あるじにて　宿の主として。
○草まくら　旅の枕詞。轉じて旅枕を結ぶとつゞけた。
○雲居のよそ　天の外。遙かに遠いことをいふ。
○みかさ山ふるさと人も月を見て　古今集「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」

旅宿

なか〳〵に心はゆかで草まくらなごり露そふ夢のかよひぢ

草枕おもひいでてやみやこ人ちぎりし月に浮ぶ面かげ

旅宿朝

わけてだにぬるゝためしのさゝの葉にやどかる袖の曉の露

故郷を見はてぬ夢のかり枕なごり身にしむ野邊の朝風

旅宿露

おきいづる朝けの野邊のさゝ枕しのにみだるゝ袖の露かな

よもすがら夢は結ばでさゝ枕露おきあかす野邊のかりふし

旅橋

かけてのみ思ひわたれど故郷のふみもかよはぬ天のはし立

羇中關

たび衣いつかはわれも歸りきてこえ行く人にあふ坂の關

みやこにて音に聞きこし秋風も今ぞたもとにしら川のせき

旅泊

うら風にかよふみやこの夢路まで跡なき波のうきまくらかな

〇なか〳〵に　故郷に通ふ夢で氣が晴れないで却つて夢の名殘に淚の露がこぼれる。

〇見はてぬ夢　故郷のさまをまださくさ見はてないうちに覺めた夢

〇朝け　朝あけ。夜あけ。

〇さゝ枕　旅寢。草枕。

〇しのに　頻りに。篠にかけて笹枕の緣語。新古今集「逢ふことは交野の里の笹の庵しのに露散る夜半の床かな」

〇かけて云々　ひたすら心にかけて思ひつゞけてゐるけれど。わたるは橋の緣語。

〇ふみも云々　踏みを文にかけた

〇歸りきて　今は關を越えて行くのであるが何時歸つて來て。來てを著てにかけて旅衣の緣語。

〇みやこにて云々　後拾遺集「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關」袂にしら川は袂に知られる意をかけた。音に聞くは名の聞えた意を秋風の音とかけた

述懐

憂きながらさすがにえしも遁れぬや世に住む人の心なるらむ

かくばかり多くの年は積れども猶數ならぬ我が身なりけり

花さかでしげる歎きの末終にいかに我が身のならむとすらむ

夜述懐

おろかなる心のやみをなげくかなすみ渡る夜の月を見るにも

寄竹述懐

うき節の繁きものから呉竹のとはに此の世をかれせずもがな

懐舊

ありし世をしのぶることの數々になみだ亂るゝ袖のうへかな

父の七年九月二十五日夜影前會兼題に、懐舊

七年の秋のしぐれをかさねても猶ことの葉の色はまさらず

秋ふかくしのぶ心の色ばかりそめばやいかで今日の言の葉

中里常岳追慕會兼題、寄花懐舊

春毎に見るもしばしの花の色を長き形見としのぶはかなさ

九月二十五日夜影前會兼題に、花

○憂きながら　この世は憂い厭はしいものではあるがそれでもさすがにこの世を遁れ捨てることが出來ないのがこの世に住む人の心。

○しげる歎き　茂る、重なり生える歎き。歎きを木に言ひ掛け。

○我が身のならむ　我が身がどうなるだらう。實のなるを言ひ掛けた。

○心のやみ　思ひ亂れて判別のつかぬこと。すみ渡る月に對して闇と云つた。

○繁きものから　繁くはあるものの。繁くあるけれど。

○此の世云々　世を節（よ）にかけかれ（離）を枯にかけて呉竹の縁語。

○心の色ばかり云々　父を懐ふ心の色の深い程度まで今日詠む歌を染め出したい。

言の葉にうつして今日や手向けまし折るを惜しみし花の色香は

寄山吹懷舊

山吹の花にむかしのこと問へばこたへぬ色も露ぞこぼるゝ

三月二十日植松有信追慕會に、暮春懷舊

めでし世を忍ばぬだにも花鳥の色音はをしき春のわかれを

或人の七年のとぶらひに、殘暑

きえしよのかたみの露はおきやらで猶もあつさの殘る秋かな

父の身まかりけるはてに人々集まりて歌よみけるに、紅葉を

ちり過ぎし人の世悲しこぞの色に歸る紅葉を見るにつけても

父の身まかりける又の年の九月二十九日山室の墓にまうでて

ふぢ衣かふる月日はきてしも猶なみだはてなき我が袂かな

父の十三年の九月二十五日夜影前會兼題に、秋懷舊

をりふしに忍ぶながめも露きえし秋こそ殊に袖はぬれけれ

植ゑし世をしのぶ心も秋ふかくそめて色こきにはのもみぢ葉

かへりこぬ昔をしのぶ秋の夜にたれまつ人か衣うつらむ

冬懷舊

○言の葉にうつして　歌に詠んで花の色香を歌に移して。

○こたへぬ色　梔子の色即ち黄色をいふ。口なしを答へぬと洒落たのである。

○父の身まかりけるはてに　父の歿して一周忌。

○山室　宣長の墓所のある伊勢松坂の山室山。

○ふぢ衣　葛布で作つた喪服。ふぢ衣をかふるは一年の喪があけて喪服をぬぎかへるのをいふ。

○をりふし云々　時折機會があつた時に思ひ出して詠歎するのも。

神無月しぐれぬ空もかきくれてふりしよ忍ぶ袖ぞぬれける

山田西山政年の周忌のはてに神無月二十日ばかり人々集まりて歌詠みけるに詠みて遣はしける

時雨にはあらぬ月日もめぐりきてしのぶ袂をぬらす今日かな

賀茂大人の十三年の十月晦日にしのびてよめる

十年あまりふりし時雨の音にのみ聞きても袖のぬるゝけふかな

父の三年の九月二十五日夜影前會兼題に、雪

下をれしそのよを忍ぶなげきさへたへぬながめの宿の白雪

稲掛實人追善に、寄風懷舊

めにこそはよし見えずともなき人の音だにかよへ庭の松風

なき人をしのぶの露もかけそへて袖ふきしをる軒のまつ風

寄水懷舊

さらに又むかしにかへる涙川なき人こふる袂ばかりは

中里常秋の追慕の會に、海

わたの原風のたよりもしら波の跡なき人をこひわたるかな

或人の一周忌をとぶらひけるによみて遣はしける

○しぐれぬ空云々　時雨れない空もかき曇つて心も判別がつかずくらんで。

○時雨には云々　時雨ではない月日。あらぬ月日はこの世に居ない死歿月日をかけた。死歿月日がめぐり來て時雨ではないが袂をぬらす。

○めにこそ云々　亡き人の姿は目にこそ見えなくても、松風は目にこそ見えなくてもをかけた。

○わたの原　海。

○風のたより云々　風の音づれも知らぬ。白波は跡が消えてないその亡き人を戀ふ。

わかれつる心の闇にめぐりこし月も夢かと猶たどるらむ

琴を好みたりつる人の跡とふに歌よみてと人のこひけるに

かきひけば松風ならでことがみによすがらかよふ人の面影

琴笛の師なる人をしのぶあそびすとてある人の寄管絃懷舊の歌こひけるに

よにたえず聞えくるにも絲竹の類なかりし音こそ知らるれ

殿村道應冬身まかりける又の年の春、寄雪無常

春またできえにし人を思ふかなのこれる雪を見るにつけても

正月十日ばかりいもうとの身まかりけるに

人のよの短き夢を思ひねに見るもはかなき春の手まくら

正月二十日ばかり長谷川常雄の伜にみまかりけるに中里常岳のもとによみて遣はす

さぞな君さましかぬらむよそにても驚かれぬる春のよの夢

或人のみまかりけるに、寄花無常

散る花に思ひよそへてありしよを胡蝶の夢と見るもはかなし

富山定豪花の頃身まかりけるに

○かきひけば云々　琴を彈いて掻き鳴らせば音に松風が通ふのであるが松風が通はないで死んだ人の面影が通ふ。琴がみは琴の頭の方一端琴のうへ。上代琴の頭の方に神依板を立てて琴を彈くとその音につれてその琴板に神の影により來て神託があるといふ。武烈紀「琴頭に來居るかげ媛玉ならばあがほる玉のあはび白玉」
○あそび　音樂會。
○絲竹　管絃、音樂をいふ。
○散る花云々　死ぬ人のはかないのを散る花に思ひなぞらへて、その死んだ人の生存してゐた時を蝶の夢と見るのもはかないことだ。

君はなどいそぎゆきけむ櫻花さくともきかぬ死出の山路に

或人の身まかりける頃その宿にさきたる花を見て

はかなしと眺めきにけむ庭櫻花こそ今はかたみなりけれ

三月中ごろ中里常岳の身まかりけるに

まどひつゝ立ちやかへると櫻花ちりかひくもれ死出の山路に

かねてより思ひし花はよそに見て君が別れをなげく今日かな

三月ばかり長井直延の身まかりけるを悲しみて雨のふる日よめる

來む年もあひ見む花の名殘だになげきおひそふ春のながめを

竹口直彦の月の夜女の花を扇にすゑてもちたるかたかける繪に歌よみてとこひけるによみて遣はしける程に身まかりければ

あたら夜の月と花とをよそに見てなどか闇路にちり別れけむ

佐藤美逍三月中ごろ身まかりけるに

藤かづら別れし君にまつはれてなどかは花のとゞめざりけむ

四月朔日芝原春房のみまかりけるを悲しみて

花染のけさのわかれに悲しさをたちかさねたる袖の露けさ

樋口垂水の男夏のころ身まかりけるによみて遣はす

○まどひつゝ云々　死出の山路の櫻花が散り交して曇ると死出の途に迷つて立ち歸るかも知れぬから櫻花よ散り交して道を曇らせよ。古今集「櫻花散りかひ曇れ老いらくの來むといふなるみちまがふがに」

○名殘だになげき　歎きを名殘だになきと言ひ掛けた。

○あたら夜の云々　惜しむべきことにも闇路死出の途に散つたのはどうした事であるか。後撰集「あたら夜の月と花とを同じくは心しれらむ人に見せばや」

○花染云々　節が夏になり袷著てゐた花染の衣に別れて夏衣になるのが悲しいに人の死んで更に悲しみを重ねた。花染は月草の花で染めること又櫻色に薄く染める事。

夏深きこずゑを見ても枯れにける歎きやいとゞ繁りそふらむ

四月末つかた大久保松正院尼身まかりけるによみて遣はしける

しでの山君やあひしと時鳥ことゝふわれも音ぞなかれける

水無月二十日ばかり植松有信のみまかりけるを悲しみてよめる

空蟬の世のはかなきも更に又思ひしられて音こそなかるれ

八月の頃林廣海の身まかりけるを聞きてよめる

かなしさに秋やは人の昔まで思ひかけける袖の露けさ

高橋義方の八月末つかた身まかりけるよし聞きて悲しみてよめる

別れゆく心ぞつらき秋やはといひしも知らぬ君ならなくに

出羽國大友久馨物まなびにきたりて此の里にてみまかりけるに人々集まりてかなしみの歌よみけるに、時雨を

かきくらし涙しぐれて見し人のさだめなきよを忍ぶ袖かな

神無月二十日ごろ中里常岳の父のみまかりけるによみて遣はしける

神無月空のはれ間もなき人をしのぶ袂や猶しぐるらむ

神無月ばかり堀口光重の父のおもひにこもりけるによみて遣はしける

頼むかげかれしなげきのこの本は涙も袖にさぞしぐるらむ

○歎き云々　歎きを木にかけた

○しでの山云々　死後辿りゆく山路で死出の田長といはれる時鳥に君が逢つたかと。

○音ぞなかれける　聲をあげて哭かずに居られない。時鳥が音を鳴くにかけた。

○秋やは人の　時もあらうに寂しい秋に別れなければならぬだらうかと秋の別れを悲しんだ昔の人まで思ひ出される。古今集「時しもあれや秋やは人の別るべきあるを見るだに戀しきものを」

○君ならなくに　君ならぬに。古今集の秋やは人の別るべきと詠んだのも知らない君でもないに時もあらうに秋に死ぬとは。

○おもひにこもりける　喪に服し家に籠り居る。

父の身まかりける頃人々集まりてよみける歌を見て

みな人の忍ぶる今日の言の葉をかき集めてぞ我はかなしき

同じ頃山室の墓にまうでて

あはれ此のこけの下にと思ふにもきては露そふ藤ごろもかな

橋本定之の身まかりける頃常に好めりしいにしへ物語を題にて人々かなしみの歌よみけるに、住吉物語にて

隱れてもよにすみよしの里ならば又逢ふ事もあらましものを

同じ折當座、池

いひ出でぬ池の心も見なれこし人の影をや猶しのぶらむ

或人の賀に、寄若菜祝

年毎に野邊の若菜のわかがへり老いせぬ千代の春をつまなむ

寄霞祝

あら玉の春くるごとに立ちかへり霞のころも千とせかさねよ

寄梅祝

立ちなれてあかぬ色香を年ふかく袖にもしめよ宿の梅が枝

或人の賀に、寄柳祝

○言の葉云々　かき集めは何やかを取り寄せての意。葉を集めるとかけた。言の葉は歌。

○こけの下　墓の下。

○きては　來ては。藤衣を著るにかけた。藤衣は葛布の衣、喪服。

○よにすみよし　隱れて居てもこの世に住んでゐるならば。

○見なれこし　心を知り見馴れて來た人の映る影姿。池を鏡に見て影と云つた。池の心を人の心にかけ、水馴れを見馴れとかけた。

○春をつまなむ　摘まうと積まうとをかけた。

○あら玉の　春の枕詞。

○よりかけて　絲を縒りかけて。かけては千年にかけての意を言ひ掛け。
○たまの緒　玉を貫き通す緒。魂の緒といひかけて命、壽命。
○わさ田　早稻の田。
○八束穗　幾束もある長い穗。
○しめゆひて　千秋萬世を占め持って。しめ繩を引きわたして。籬を結ひて植ゑしとつゞけた。
○露かけて云々　南陽酈縣甘谷の人が流れの菊水を飲んで長壽であつた故事から菊の露は壽命を延はすものといはれてゐる。
○十かへり　本朝文粹「貞獨南面、松花之色十廻。」
○春まつがえ　春待つを松が枝とかけた。

すゑながく柳の絲をよりかけて君が千年のたまの緒にせよ

春　祝

天の下もれぬめぐみに野も山もこめてあまねき春の色かな

花契多春

春ごとに千代もかざさむ櫻ばなあかぬ心を契りにはして

或人の賀に

のどかにぞ猶いはふべき萬代の春をかさねむ君がよはひは

齋祐道足六十賀の屏風の繪にわさ田の稻かきたるところ

八束穗にしなひさかえむ面影もなびくわさ田の秋のはつ風

或人の賀に、契菊千秋

咲きにけり千年の秋をしめゆひて植ゑしまがきのしらぎくの花

或人の賀に菊を折りて人のもとに遣はさむとしたるかたかける繪に

君がため手折る袖にも露かけて千代をかさねむ白菊のはな

人の賀の屏風に松に雪のふりかゝりたるに

十かへりの春まつがえに咲く花のおもかげ見えて積る白雪

寄松祝

○年高き　高齢なのを松が枝の高き影とつゞけた。

○千年ながら　千年もそつくり其のまゝ。

○おひそはる竹　生え加はる竹。繁りふえてゆく竹。新古今集「年ごとに生ひそふ竹のよゝを經てかはらぬ色を誰とかは見む」

○なほき云々　書讀む窗の眞直な呉竹。直き學びとつゞけた。

春ごとに色そふ松の一しほや千代十かへりの花のしたぞめ

松不改色

千代へても同じ常磐の松の色はいかにそめたる緑なるらむ

人の賀に、檐松有嘉色

千代ふべき宿の軒端におひたてる契りもふかき松のいろかな

或人の賀に、契松齢

萬代にきみもさかえて年高きかげをならべよ軒の松がえ

人の庭に松を植ゑていはひの歌こひけるに

移し植ゑて千年ながらに我がものとみどりさかゆく宿の松が枝

人の賀に松の枝につけて遣はしける

契りおく松にならべて千代も見よ此の言の葉も色はかはらじ

寄竹祝

おひそはる竹の林の陰ひろみ末もゆたかに千代ぞすむべき

渡邊中庸五十賀に、竹遐年友

心さへあひたる千代の友なれやなほき學びのまどの呉竹

母の七十賀に寄、鳥祝

ちよ〳〵と頼みつゝ鳴く鳥の子のかひある君が齢ともがな

君がよはとこ世にあらなむ鶴がねの千度八千度行きかへるまで

或人の賀に、寄鶴祝

年高く千代をかさねむ友なれや雲居になるゝ鶴のけごろも

或人の賀に鶴合千年壽といふ題にて

君もへて千代のためしに仰がれよ雲居の鶴(たづ)のたかき齢を

鶴還年友

門ちかくなるゝや千代を重ぬべき友とたのむのつるの毛衣

或人の賀に松に鶴の子のあまた居たるかたかける繪に

ちよ〳〵と千代を重ねて鶴の子の松の梢にむれつゝぞ鳴く

祝

鶴龜もなほや羨む萬代も千代もかぎらぬ君がよはひは

寄日祝

きみが代のながき光は春の日ののどかに霞む空に見えけり

竹口直兒母の六十賀に、二見浦貝

二見がた限りもなみによるかひを盡きぬよはひの數に拾はむ

○鳥の子　卵をいふ。但しこゝでは鳴く雛を自ら譬へていうた。
○かひ　卵。かひあるは千代と頼む頼みがひあるとかけた。拾遺集「鳥の子はまだ雛ながらたちていぬかひの見ゆるは巣守なりけり」
○鶴のけごろも　鶴の羽毛。衣とかさねと緣語。續拾遺集「澤にのみいく年月をかさねらむ雲居隔つる鶴のけ衣」

○友とたのむの　友と頼むを田の面にかけた。たのむはたのもの轉。

○限りもなみ　限りもなしを波にかけた。

或人の七十賀に關のかたをかきたる繪に

七十にあふ坂こえて行末のよはひはるけきあづまぢの空

加藤千蔭の七十賀に武藏國の名所を題にてよめるに、芝浦

かぎりなき千年の數と芝のうらにしば／＼よする沖つ白浪

みちのく本宮小沼幸彦七十賀に

七十にあふくま川の行末もながれて遠きよはひならまし

人の賀によみて遣はしける

ちぎり置く千年の如くけふを又今ぞはるかに思ひいづらむ

長井直延五十賀に

年高く五十を五十かさねあげて千代の坂をも麓にを見よ

織戸爲貞の六十一賀によみて遣はしける

若がへり幾度も經よ今よりは六十を老の限りにはして

又加藤侑方六十一に

ゆきかへり猶いく度も六十經て同じ今年に廻りあはなむ

七里政要かしらおろしけるによみて遣はしける

千代ふとも老とは見えじ黑髮に積るかしらの雪しふらねば

○あふ坂　七十歳に逢ふを逢坂關にかけた。こえて行くを行末にかけた。

○芝のうら　地名をかけてしばしばの序とした。

○あふくま川　阿武隈川。七十に逢ふを言ひ掛け。

○若がへり　六十で干支が一廻りしてかへるのを若くなりかへるとかよはした。

○同じ今年　今年と干支の同じ年に幾度もめぐり逢ひたい。

○かしらおろしける　剃髪した。

○かしらの雪云々　頭髮の白髮にならぬから。

萬歳といふものかける繪に

萬とせいはふと聞けばうちつけに鼓の聲ものどけかりけり

籠に若菜ある繪に人の歌こひけるに

萬代の春もくちせぬこの若菜いかにもとめて人のつみけむ

柳に燕かける繪に

春風のふくにまかせて青柳のいとのどかにも飛ぶつばめかな

柳に小鳥多くかける繪に

風ふけばともにみだれてむら鳥のなく音もまよふ青柳の絲

御階のさくらの花の咲きたる所かける繪に

吹く風ののどけき御代とさく花の色も常磐のこゝのへの春

吉野山の花ざかりに朝日ある繪に

うつしても猶こそあかね朝日影にほふよし野の山ざくら花

月夜に女の櫻の花を扇にすゑてもちまゐるかたかける繪に

おなじくはともにめでよと月の夜に手折りやきつる花の一枝

八重櫻の繪に

此の花は八重の一重もうつろはで代々ゐさへにぞ咲き重ねける

○うちつけた　さしあててすぐに鼓を打つにかけた。

○いとのどか　甚だ長閑。青柳の絲をかけた。

○ともに亂れて　青柳の絲も羣鳥のなく音もともに入り亂れて。

○御階　紫宸殿の御階。

○おなじくは　後撰集「あたら夜の月と花とを同じくは心しられむ人に見せばや」

○ともにめでよと　月と花とを共にめでよと。

○八重の一重　八重に咲く中の一重もしぼまないで。

聯といふ物にかきたる堇の繪に人の歌こひけるに

紫のにほへる妹とすみれぐさかけのよろしき花さきにけり

春の野に草花いろ〳〵ある繪に

春も猶花のさま〴〵色見えて一つ綠の野邊としもなし

青葉の櫻かきたる實もなれり

山櫻はな咲く春もあるものを誰がこのみたる青葉なるらむ

宇治の橋守の月見たるかたかける繪に

こととはむ幾夜の秋の月を見ておいとはなりぬ宇治の橋守

水の面に鴈のうつりたるかたかけるに

行く水に鴈の數さへゑがけるはいかなる筆のたくみなるらむ

つがれたる稻に雀のむれゐたるかたかける繪に

村雀はむにまかする此の秋はなれもたのみや豐かなるらむ

菊の繪に

とことはにかはらぬ千代の色見えて秋なき時もしら菊の花

女のはし近く居て人待つさまかける繪に

山の端の空をながめて月まつといはぬばかりの宿の夕暮

○聯　柱掛けの細長い板、書畫を書き又は彫刻したもの。

○紫の云々　紫の如くに色つやゝかに麗はしい愛らしい女として。萬葉集「紫のにほへる妹を憎くあらば人妻故にわれ戀ひめやも」

○かけのよろしき　言葉にかけて云ふのもよい。聯を柱に掛ける意を言ひかけた。

○このみたる　好みたるに木の實を言ひ掛けた。

○幾夜の秋　幾代にかけた。新古今集「年へたる宇治の橋守こと問はむ幾代になりぬ水のみなかみ」

○行く水云々　古今集「ゆく水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」

○はむにまかする　食ふに任す。

○たのみ　田の實、稻。頼みにかけた。

○かはらぬ千代の色　古今集「草も木も色變れどもわたつみの波の花には秋なかりける」

○秋なき時　古今集「植ゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへかれめや」

○山の端云々　新古今集「山の端を出でがてにする月待つと寢ぬ夜のいたく更けにけるかな」

いでゆく人を山里に女の見居たるかたかけるに

思ひいでよよその梢にうつるともなきてふるすの谷の鶯

あれたる宿に夕ぐれ女のながめ居たるかたかけるに

かれはてしちぎりしられて松蟲の聲もきこえぬ淺ぢふの宿

鶴の庖丁して狩衣にて鶴をものするかたかける繪に人の歌こひけるに

おのが經む齡を君にゆづるとや千年を人の手にまかすらむ

薪をいたゞきたる女の牛ひきたるかたに

おふうしの薪にあかで我も猶いたゞき出づるやせの里人

宇治川を柴船のくだるかたかける繪に

さす棹の世渡るわざはおひくだる山路といづれ宇治の柴船

富士の山かける扇に人の歌こひけるに

うへもなく風ぞ涼しきあふぎ見よ雪ふり積る富士の高嶺を

鶴の酒のめるかたかけるに

のむ酒やいかにたのしき萬代にかはらぬおのが影をうかめて

池の邊に松たてる繪に

ちりかゝる時しなければ松かげの池の鏡は千代もくもらじ

○なきてふるす　ひごく鳴いて珍らしくなくなつた。古巣をかけた

○かれはてし　閒の絕えてしまつた契り。松蟲の聲の聞えたのをかけた。

○鶴の庖丁云々　昔禁中で正月十九日に行はれた儀式。鶴の庖丁こ云うて狩衣を著て鶴を料理する繪に人が歌を求めたので。

○おふうし云々　薪を載せて牛を追うて足れりとせず身自らも薪を戴いて出る八瀨の人。八瀨は山城愛宕郡。

○いづれ宇治　どちらが憂きか宇治の柴船よ。

○うへもなく　涼しさが此の上なく。富士の高いのにかけた。

○あふぎ　扇ぎに仰ぎをかけた。

後鈴屋集終

昭和十二年十二月十五日印刷
昭和十二年十二月二十日發行

（非賣品）

校註國歌大系
第十六卷

編輯者　中山泰昌
東京市神田區錦町一丁目五番地
發行者　小川菊松
東京市本所區厩橋一丁目二十七番地
印刷者　西尾眞八
東京市本所區厩橋一丁目二十七番地
印刷所　凸版印刷株式會社本所工場

東京市神田區錦町一丁目五番地
發行所　株式會社 誠文堂新光社
電話神田 自二一二六番 至二一二九番
振替東京四五三四〇番

昭和四年二月十五日印刷・昭和四年二月十八日發行

60

7